

## 黄土高原だより

### はじめに

緑の地球ネットワークが中国山西省大同市で緑化協力をはじめたのは1992年1月です。2022年が創立30年の節目の年であり、日中国交正常化50年の記念すべき年でもあります。平坦ではなかった30年の活動を振り返る作業を早めに計画していましたが、コロナ禍のために中国へのツアー派遣その他が制約されたために、さらに前倒しすることにし、残っている資料の整理からはじめることにしました。

この黄土高原だよりは第1号を1999年4月、第550号を2011年1月に、メールマガジンのかたちで発行しました。緑の地球ネットワークの事務所から発送するもののほかに、いくつものメーリングリストに配信されたり、転送されるものもあり、多くの読者に恵まれました。発行するたびに感想などを記した返信をいただき、そのおかげで11年近くにわたって発行することができました。

200号まで書いた時点で、それをとりまとめたものが『ぼくらの村にアンズが実った』（日本経済新聞社、2003年）として刊行され、さらに中国語版『雁棲塞北』、韓国語版も発行され、多くの読者をえたことはとくにうれしかったことです。

### もくじ

## 【1999年】大旱魃と深刻な水不足

この前年の1998年夏、霊丘県の南山区でいくつかの自然林が見つかりました。もちろん原生林ではなく、何度かの破壊のあとに自然に再生してきた二次林です。ナラ、シナノキ、カバノキなどの落葉広葉樹を中心とする森林で、この地方における緑化のイメージを大きく変えるできごとであり、以前から計画していた「植物園」の意義をいっそう大きくするものでした。

そしてこの年、建国以来最悪といわれる大旱魃で、黄土丘陵の村を中心に食糧不足に見舞われる村も続出しました。それらの実情を伝えようと、黄土高原だよりはスタートしました。

### NO.1 水が涸れる！ 1999.4.26

黄土高原を理解するためのキーワードが「水」であることは、92年の秋、1人で農村を回ったときから痛感していました。しかし、最近、黄土高原の農村で起こっていることは、それとはまた次元の異なることのような気がします。とにかく飲み水にすら困る村が広範囲に広がっているのです。

広霊県苑西庄村では、これまでに20余りの井戸を掘ってきましたが、つぎつぎに涸れてしまい、ついには4つしか水がでなくなっていました。なかの1つは1日にバケツ2杯だけ。4つの合計でバケツ100杯。それだけの水で150人の村人と家畜が暮らしていました。

— 去年の夏、テレビ朝日のクルーと、何日かいっしょに農家に泊まり込みました。朝、洗面器の底にわずかな水をもらい、4人が交代で顔を洗い、あとの水を庭に撒こうとして、その家の



主に止められました。止められなくても、わかりましたよ。私が洗面器をもってでてきたのを見て、その家で飼っているヒツジやニワトリが走り寄ってきました。

農協中央会や郵政省国際ボランティア貯金の助成をえて、その村に井戸を掘りました。

水に苦しんでいた広霊県苑西庄村で掘った井戸の通水式（1998年）

176mのところまで水脈に

あたり、1時間あたり15tの水量があります。この県でいちばん深い井戸です。この春にしてみると、各家にパイプで水が送られています。村の老人たちは、「こんなにきれいで甘い水は、飲んだことはもちろん、みたこともない」といって喜んでくれます。

霊丘県史庄郷石瓮村で2番目の井戸に挑戦しています。この村には清の光緒6年(1880年)に掘られた深さ40m近い井戸があったのですが、10年ほど前から水が減り、2年前には完全に涸れてしまいました。村の人は4km離れた北水泉村にもらい水に通っています。ドラム缶を改造したタンクをロバの引く車に載せて運ぶのですが、往復に5時間もかかります。この春に訪ねた家は、180リットルほどの水を1週間もたせます。6人家族ですから、1人1日4.3リットル平均になります。とりあえず家畜は除外して計算しました。この村では「油を借りて返さないことがあっても、水を借りたら必ず返さないといけない」というのだそうです。

北水泉村は山裾の湧き水に頼っています。湧き口を石垣で囲い、そこから鉄パイプを突き出させて、水をだしているのです。3年前まではバケツ1杯汲むのに1分ですんだそうですが、いまでは8分かかります。湧水量が8分の1に減ったということでしょう。

そこからさらに下った浦里村も山裾の湧き水を使っていますが、それをみて恐怖を感じまし

た。去年の夏にいったとき、村の老人から「30年ほど前までは畑の灌漑に使うくらい湧いていた。いまでは飲み水にも事欠くありさまだ」とききました。それでも直径1mほどの泉からは、水があふれ出し、小さな流れをつくっていたのです。それがこの春は浅い水たまりになって、流れはどこにもみられません。村の人は、「なくなるのも時間の問題だ」といっています。話にきくのと、自分の目でみるのとでは、受ける印象がまるでちがいます。

石瓮村では3月末までに82mまでボーリングしていました。計画は180mですが、水ができれば、6か村、1000人飲み水の問題を解決できます。井戸掘りチームのリーダーが話してくれました。「水のない村の生活の苦しさはよく知っているから、お金にならなくても掘りたい。いまそのような村がたくさんでているが、そんな村は素寒貧で井戸を掘るお金なんてない。注文がこなくて、自分たちも賃金が遅れるくらいだから、どうにもならない」。回らなくなるというのは、こんなことかもしれません。

渾源県の三嶺村は、ワーキングツアーで大同を訪れた人たちからは「のろし台の村」として親しまれています。その周辺でも水が涸れています。隣の二嶺村は1km離れた谷底の井戸から水を運んでいました。ところがその水が減っています。あわてて近くに井戸を掘りましたが、それでも足りません。足りない分は、下の下韓村などからドラム缶のタンク1杯あたり5元で買ってきています。水を買って運ぶのを専門にする家までつくりました。このあたりを撮影して回ったカメラマンの橋本さんによると、ほかにもそのような村がたくさん出ているそうです。

水が涸れる原因はよくわかりません。中国第2の大河・黄河の水が減っています。流れが途絶えて、河口まで水が届かない現象(断流)は1972年に最初に発生し、それから毎年のようにつづいています。97年にはなんと断流が226日もあり、最長704kmも干上がってしまったのです。その原因として、中上流域の降水量が減ったこと、流域の都市化や農業灌漑による取水過剰が指摘されています。おそらくそうなのでしょう。しかし、もっと深刻な、ほかの原因が潜んでいるかもしれません。

世界人口の22%を世界の耕地の7%で養っているのが中国です。食糧生産の大きな伸びの背景に灌漑の充実がありました。しかし、いまその水がなくなっています。二嶺村の井戸水が急減したのは、下韓村あたりで地下水を灌漑に使ったからかもしれません。そうだとすれば、下の下韓村が上の二嶺村に補償をするのがスズでしょうが、実際には二嶺村が下韓村にお金を払っています。井戸を掘ることは緊急避難としては必要ですが、長期的・本質的な解決にはなりません。こんな問題はいくらでもありますし、なにも中国にかぎりません。

『大同晩報』のある日のトップにこんな記事が載っていました。大同の地下水の水位は毎年2~3mのペースで下がっており、2008年ごろには完全に枯渇する恐れがある、と。大同は北京の上流にあり、北京の水源でもあります。大同の水が涸れるとき、北京が無事だとはいえまいでしょう。緑化協力をつづけるなかで、私たちはさまざまな深刻な問題にぶつか

ります。中国といえば、去年は長江や松花江の大水害が大きな問題になりました。しかし、中緯度地域では、このような異常渇水がつづいているのです。

## NO. 2 みつかった自然林 1999. 5. 6

NHK・BS2「地球に好奇心」シリーズの「黄土高原～失われた森の文化を求めて」（5月2日放映、9日に再放送）をみて、連絡をくださった方があります。「遠田先生（緑の地球ネットワーク顧問、元東北大学理学部附属植物園長）の案内でカメラがたどりついた自然林をみて、あれが私も訪れた黄土高原にあるとはとても信じられませんでした。たくさんの落ち葉が積もり、下のほうには腐葉土ができているということにびっくり。人が出ていって、村がなくなったあとに、あのような森林が成立したという解説に、人と自然との関係を改めて考えさせられました」。



霊丘県に自然植物園をつくることになり、周囲の植生調査を依頼したところ、現地の技術者たちはあのような自然林をみつけてきました。98年の8月に、立花吉茂代表（花園大学教授・咲くやこの花館技術顧問）、遠田顧問などといっしょに、合計4つの自然林をみてまわったのですが、放映された狼牙谷郷の自然林はそのなかで最大のものです。立花代表によれば、「ザーッと

### 河北省との境界に近い碣寺山山頂付近の自然林と立花先生

みて喬木20種・灌木40種・草100種はあるだろう」とのことですし、遠田顧問は「日本の東北の山によく似ている。樹木の種類はむしろ多いかもしれない」といっていました。

中国の大学の先生から「あの一带は、パイオニアとなる樹木はカバノキ・ヤマナラシなど、極相林はカラマツ・トウヒなどの針葉樹」ときいたことがありますし、これまでこの地方でみた自然林はカラマツ・トウヒなどの針葉樹に、カバノキ・ヤマナラシなどがわずかに混じっているだけでした。しかし、霊丘県でみつかった自然林は、クヌギ（遼東櫟など）・カバノキ・カエデ・シナノキ・トネリコ・クルミなどの喬木と、ハシバミ・シャクナゲ・シモツケなどの灌木からなっていました。

水土の保持は、この地方の緑化の大きな目的です。あの自然林に生えていた落葉広葉樹は、

そのような目的にピッタリなのに、これまでの緑化にはまったく利用されていません。地元の技術者は、「そのような樹種は役に立たない」といいますが、クヌギなどが育てば、キノコの栽培もできますし、木炭に焼くこともできます。スコップやクワなどの農具に使うことだってできます。ポプラの枝にくらべてはるかにじょうぶで、作業効率だって向上するにちがいありません。ただし、これらの樹木の育苗は、経験のないこの地方ではむずかしいところがあるのかもしれない。

霊丘県南庄村に建設している自然植物園は、1)この地方の植物遷移の過程を観察し緑化の筋道を探す、2)他地方からも有用植物を導入し試験栽培と馴化をすすめる、3)多種類の植物の栽培を通じて技術の向上と人材の育成をすすめる、4)多様性のある森づくりをアピールする、といった目的をもっています。前記のような自然林が見つかったので、当初計画より規模を拡大し、86haの土地の100年間の使用権を(カウンターパートの名義で)購入しました。すでにアクセス道路が完成し、自然林からの種子採取とそれによる育苗などがはじまっています。

ところで、このような自然林は、大同市のなかでもっとも自然条件のいい霊丘県の太行山脈の部分だけで成立しているものと、私は考えていました。ところが、NHKの番組取材につきあうなかで、驚くべき事実がまたわかりました。

渾源県の三嶺村といえば、ワーキングツアーで訪れた人たちのなかで、「のろし台の村」として親しまれているところです。あの村のいちばん下で、いま関帝廟(関羽を祀った廟)の再建がすすめられています。そこに71歳になる道士さんがいます。彼がいうことには、「こどものころには前の山にも後ろの山にもたくさん木が生えていて、水もいまよりはずいぶんと多かった。ところがその後、村の人たちが木を伐って家を建てたりしたため、森はなくなってしまった」というのです。彼は、「こんな木がたくさん生えていた」といって、一抱えのジェスチャーをしました。まあ、こどもの目線でえた記憶は、実際より大きくなるのがふつうでしょう。しかし、その道士さんは、「カエデ、カバノキ……」というように具体的な樹木の名前まであげましたから、かなりの部分で信用できるでしょう。

もう1つ注意する必要があります。いまの三嶺村は大同と渾源をむすぶ幹線道路のすぐ横にあり、石炭トラックをはじめ、ひっきりなしに車が行き交っていますが、あの道路は70年代になって建設されました。以前の道路はあそこから西へ10数キロいったところを走っており、村はいまとはまったく異なる寂れた環境にあったようです。住居も崖に横穴を掘ったヤオトン(窑洞)が分散していたのを、政府が1か所に集まるように指示し、費用の補助もしたそうです。その事情はなんとなくわかります。

私は、この地方の森林がなくなったのは、もっと以前のことだと考えていました。ところがその道士の話では、せいぜい数十年前のことのようにです。50年前の中華人民共和国の建国以後、人口が急増したことを考えると、なるほどその可能性は高いでしょう。その道士さんが、「森林

があった」といって指さすところの大部分は、いま段々畑に変わっています。それをもう一度、森林に返すのはむずかしいことでしょう。黄土高原の緑化にとって、いちばん困難なのは、このような問題です。

### NO. 3 菌根菌のすごい働き 1999. 5. 14

中国大同市の黄土高原における緑化協力のために、緑の地球ネットワークは数か所の苗圃を確保しています。

地球環境林センター(大同市南郊区平旺)	6. 2ha
〃 霊丘支部(霊丘県上寨鎮)	0. 7ha
霊丘自然植物園(霊丘県上寨鎮)	現在整備中
針葉樹育苗基地(大同県国営苗圃内)	1. 5ha

大同県国営苗圃の一角を借りている針葉樹育苗基地を4月に訪ねると、責任者がちょっと興奮ぎみに私たちに話してくれました。「自分はここの苗圃で20年以上働いているけど、こんないい苗はこれまでつくったことがない」「ここの苗圃はマツの育苗で知られていて、先日は新栄区から視察があった。従来の技術で自分たちがつくっている苗をみせると、『1本0.2元(1元=15円)で買いたい』という。そのあと、日本側の技術で栽培した苗をみせると、『0.3元だしてもいいから、こっちの苗がほしい』という。でもこの苗はみなさんの苗だから売ることができなかった。今年からは全部の苗を日本の技術で栽培しますよ」というのです。

私たちがみても、その差は歴然としています。第1に、私たちのマツ苗はよく生えそろっています。同じように種を蒔いたのだから、発芽してから枯れたものがなかったということでしょう。感覚だけに頼っていてもダメですから、掘り起こして比べてみることにしました。横に並べて比べてみると、地上部もかなり差がついていますが、顕著にちがうのは根の発育です(写真をみてもらえないのが残念)。それから私たちの苗は、掘りあげるとき、ちょっとぐらい振っても、根から土がなかなか離れないのです。

4つのグループに分けて、20本ずつの重量をはかり、1本あたりの平均をだしたものが以下の数字です。

A モンゴリマツ(樟子松)	0. 20g
B モンゴリマツ	0. 30g
C アブラマツ(油松)	0. 50g
D アブラマツ	0. 70g

ここらで、種明かしをしましょう。Aのモンゴリマツは、中国の在来の方法でふつうに栽培したものです。Bのモンゴリマツには、培土のなかに木炭のクズをまぜました。それだけで1本あたりの重量が1.5倍になったのですが、1年後の生存率のちがいを考慮すれば、その効果はもっと大きいでしょう。CとDのアブラマツにも木炭クズが加えてあり、Dにはそれに加えて、

松林の林床の表土を少しだけ加えました。直接の比較対照を準備しなかったのですが、この結果をみると、木炭クズと山土の両方を加えたものは、ふつうのものに比べ、2倍以上に生育していることをわかってもらえるでしょう。

こういうちがいを生み出したのが、菌根菌の働きです。キンコンキンといっても、わかっていただける方は少ないかもしれません。私も2年前までは知りませんでした。簡単にいうと、菌根菌というのは植物の根に共生する微生物で、キノコやカビのなかまです。植物の根の細胞のなか、あるいは細胞と細胞の隙間に菌糸をはいりこませ、栄養は糖のかたちで植物からもらいます。そのかわりに、菌糸を土のなかにも伸ばして、根と土とを密接に結びつけ、植物の根が水やミネラルを効率的に吸収するのを助けます。そのために、植物の生育がよくなり、また根が菌糸に護られることで、寒さや病虫害にも強くなるのです。



マツの小苗に菌根菌を接種する実験を指導する小川眞先生

わけです。同じ成功といっても、数百本の実験と2百万本の本格育苗とでは、インパクトがまるでちがいます。

小川さんにそのことを報告すると、とても喜んでもらえました。そして、「菌根菌の効果がでるのは、ふつうはもっとあとですよ。山に植えたあとで効果が現れる、というくらいに考えたほうがいい。1~2年めでそんなにはっきりちがいがでるのは、現地の環境がよほど厳しいからですよ」といわれるのです。

小川さんの言葉でもわかるように、この技術は、大きな苗を育てる、というところに意味があるわけではありません。山に植えたときに、活着率がよく、乾燥や寒さ、そして病虫害に強い、そんな苗を育てる技術なのです。そして条件の悪いところほど、その効果ははっきり現れるようです。ですから、ほんとうの効果がでるのはもっとあとのことですが、いまからワクワクしています。

97年の春、菌根菌研究の草分けである小川眞さん(関西総合環境センター生物環境研究所所長・インドネシアにおけるフタバガキの森林再生の功績で日経新聞の98年度地球環境技術賞を受賞)に大同で現地指導してもらいました。そのときは数百本のポット苗で実験したのですが、3か月後にはおよそ2倍に生育しており、効果を確認できました。そこで、ことしの春から、前述の針葉樹育苗基地で実用化に乗り出したわ

長くなりすぎてもいけませんから、具体的な方法はここには書きません。関心のある方は問い合わせただければ、資料をお送りいたします。でも、材料も方法もとても簡単です。菌根菌の孢子とその接触を助ける木炭のクズ、軽石といったものがあればいいのです。マツの育苗なら、キノコの生えるようになった松林の表土のなかに孢子がたくさんはいつているはずで、木炭クズは、私たちはシリコン精製工場で最終工程の還元剤につかっている木炭のクズを無料でもらってきています。

あっ、そうそう。昨年春、この技術を現場の人たちに伝えたとき、彼らは半信半疑でした。簡単に入手できる木炭は 1.5ha の苗圃全体にいられたのですが、松林の表土は集めるのがたいへんですから、一部分にしかいられていません。木炭クズだけをいられたところでも菌根菌が共生し、効果を生んでいるのは、ここの苗圃で長年、マツの育苗がつづけられており、量はそう多くないものの、菌根菌が存在していたからです。でも、この 1 年で効果を確信してくれたおかげで、彼らはもう木炭も松林の表土も、今年のぶんをすすんで準備していました。この技術がこの地方に定着し、さらに広がっていく可能性がでてきたのです。

#### NO. 4 水ができました！ 1999. 5. 31

この黄土高原だよりの NO. 1 は、水の問題をとりあげました。黄土高原を理解するためのキーワードが「水」であるうえに、ことしの 3 月から 4 月にかけて見聞した渇水問題は、ほんとうに深刻だったからです。そのなかで、大同市靈丘県史庄郷石瓮村で井戸掘りに協力していることを報告しました。この村の生活と水不足のようすは、5 月 2 日に放映された NHK・BS2「地球に好奇心」シリーズの「黄土高原～失われた森の文化を求めて」のなかでもとりあげられました。

私たちのカウンターパート・緑色地球ネットワーク大同事務所からの連絡によると、この井戸からちゃんと水が出たということです。深さ 182m は最初の計画とまったく同じ数字ですので、この地方のボーリング技術が低くないことを表しているでしょう。1 時間あたりの水量は 40 トンあるということで、こちらは当初の計画を上回りました。石瓮村は史庄郷のなかでも高いところにありますから、下の村へとパイプを通し、6 か村 1,000 人の水の問題を解決することができます。

おさらいというわけではありませんが、この村のこれまでの水不足の実情を紹介しておきましょう。この村の井戸は 10 年ほど前から水が減りはじめ、2 年前には完全に涸渇しました。しかたがないので、4km 下の北水泉村まで数時間もかけてもらい水に通います。北水泉村は、その名のとおり以前は湧き水に恵まれていたのですが、ここ数年、急速に水がなくなっていることは、NHK の前記の番組でも紹介されました。

石瓮村を3月末に訪れ、私が昼食をごちそうになった家は6人家族でしたが、ドラム缶を改造したタンク1本の水で1週間を過ごすといっていました。家畜のぶんも含めて1人1日あたり、4.2リットルということになります。生理的に最低限必要な量が3リットルだといわれますからまあ、ぎりぎりのところでしょう。

春のワーキングツアーに参加していた小谷さんは、TOTOショールーム勤務です。彼女にきくと、大をジャーッと流すと、最低で10リットルになるのだそうです。それだけで、あの家の2人の1日分です。同じころ読んだ新聞には、東京では1人1日400リットルを使うとありましたから、100倍ということになります。「湯水のように…」ということばが日本で成り立つ理由がわかります。



霊丘県史庄郷のいくつかの村がこの湧き水に頼っていた

石瓮村の中年の党書記は、軍から復員して以来、井戸掘りのために専念してきました。井戸を掘るには電気が必要だということで、電気を引くために奔走しましたし、村の人たちを強力にまとめあげてきました。この井戸掘りが成功したのは、そのような粘り強い努力があったからであり、私たちが協力することにしたのも、その努力に報いたかったからでした。彼らのよこびはどれほどのものでしょうか。

しかし、昨年、苑西庄村での成功を聞いたときは、今回よりずっとうれしかったと思うのです。あの村は150人、今度は1,000人ですから、もっともっとうれしくていいはずなのに、気持ちのうえに、なにかが影を落としています。

この一帯では農村でも都市でも、地下水が急激に失われており、「大同市では2008年には完全に涸渇する」と報道されていました。井戸を掘って、それで水がでたとしても、緊急避難にしかならない、ということです。地下にある水も有限であり、汲めば、やがてはなくなる。しかも、それはさほど遠くない将来かもしれないのです。

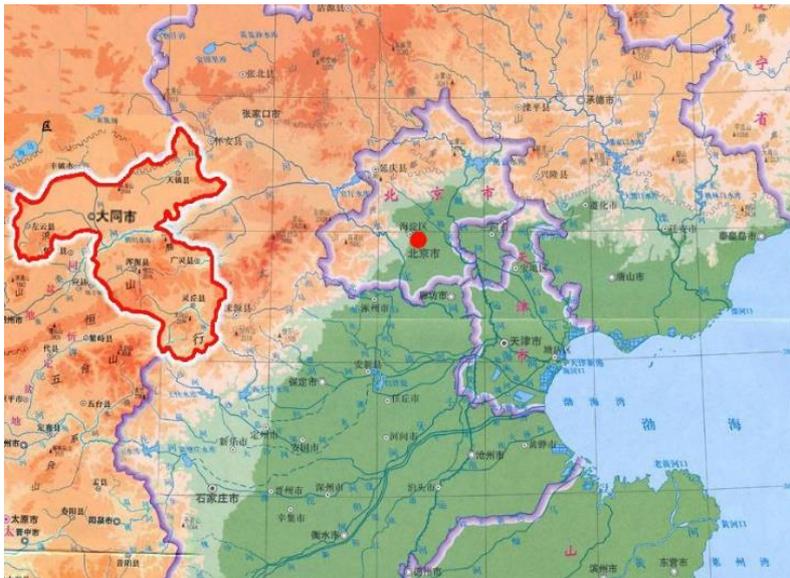
6月10日に日本を出発し、また大同を訪れます。旧い友人で、飲み友だちの柳田耕一さんから

どもちょっと遅れて大同にくることになっており、石瓮村では通水式に参加することになるでしょう。ちょっと冷めたことを書きましたが、昨年の苑西庄村では、村の老人「こんなにきれいで甘い水を、生きているあいだに飲めるとは思いもしなかった。村のもらい水の歴史に終符が打たれた」といって、シワ深い顔をクシャクシャにして泣きながら、手をとられて、もらい泣きしてしまっただすよ。

若いころはそんなことはなかったのに、黄土高原の農村とつきあうようになってから、すっかり涙もろくなってしまった私です。ひよっとすると、私の魂を涙が洗ってくれているのかもしれない。

## NO. 5 人の考え方って変わるものだ！ 1999. 7. 9

6月に10日ほど大同にいきましたが、中心になったのは靈丘県です。渾源から靈丘にかけて、車窓をみながら毎回、思い出すことがあります。最初にこの道を通ったのは93年5月でした。出発の直前、通訳がやってきて、「これから先は写真撮影が禁止されています。全員のカメラを預らせてください」と伝えました。「撮影禁止だ、というのはわからないでもない。しかし、



カメラを預かるとはなにごとだ。そこまで私たちを信用できないか」と私は食ってかかり、中国側の要求を撤回させました。

それから6年がたち、おたがいの関係はすっかり変わっています。改革開放の波が地方まで届いたということもありますが、私たちが日常の接触のなかで新しい関係をつくったともいえるでしょう。

大同是北京から真西に300kmほどのところにある

陽高県の外事公安とは、激しいケンカを3回もしてしまいました。きっかけをつくったのはカメラマンの橋本さんです。公安かなにかの制服の胸いっぱい毛沢東バッジをつけ、「革命を継続しよう」と演説して回っている初老の男を、彼はレンズにとらえました。文革のなかで精神を傷ついた人のようです。

そのあと外事公安が私のところにやってきて、「見ていた人から通報があった。その部分のフィルムを提出してほしい」と伝えました。私は「リバーサルフィルムの現像はここではできな

い。その要求に応えるのは技術的にもムリだ。それに、日本の政府は歴史教育をちゃんとやっていないと、いつも中国政府から抗議されるくらいで、日本の国民は日中戦争のことも記憶にないくらいなのに、中国の文化大革命なんて誰も知っちゃあいないよ」などと突っぱねてしまいました。

しばらくしてつぎのツアーがこの県を訪れたとき、その公安は、私がいなくに参加者を集め、「招待所のなかを除いて撮影禁止」と言い渡していました。たまたまその場に行き会った私は、「そんなことまでするのなら、いますぐこの県を引き上げる。2度とこない」と激昂してしまいました。小心なくせに、ある線をこすと、身を投げ出して、なにも怖くなくなるという癖が私にはあります。

どう扱っていいか、その公安が困っているスキに、「なにか問題が起これば、自分が責任をとる」などといって、その場を納めてしまいました。よくよく考えると、外国人の私が責任をとれる余地って、そんなにあるわけないんだけど、私としては、口先だけでなく、自分の最善はつくそうと、思っているのです。「自分が責任をとる」の一言で解決できたのはこのときだけではありません。

ところがそのつぎ、テレビ朝日の取材クルーがこの県を単独で訪れたとき、「撮影したテープを次回まで預かる」とこの公安から宣告されたのだそうです。ここには日本の放送方式のベークラム再生装置なんてありっこないんで、あきらかにいやがらせです。

こんな関係を長くつづけていいことはないでしょう。つぎに会った機会に、「私も悪かった」といって先に謝り、いっしょに酒を飲みました。お互いに酔っぱらったあと、彼は自分の身の上話まではじめてしまったのです。それ以来、私たちはとてもいい関係になりました。

ワーキングツアーがこの県を訪れると、彼はいつも私たちに同行します。そしてあるときから、彼はスコップを手にし、先頭に立って苗木を植えるようになりました。それを目にした大同事務所運転手の小張が私のところに走ってきます。「おい、高見、あれをみてみろ。人の思想って変わるものだな〜」。彼は最初からの経過をよく知っているのです。入れ替わるようにして、大同事務所の武春珍所長がやってきます。「あの公安がスコップをもって木を植えてるよ。人間って変わるものだなあ」。

それに味をしめた私は、やはり険悪な関係がつづいている天鎮県の外事公安のそばによって、話しかけようと思いました。すると返ってきたのは、「私語はしない」の一言。取り付く島もありません。あ〜あ。

若いころの私は、世間の平均以上に政治的な人間だったと思います。そういう自分を含めて、政治のもつ生臭さがだんだんイヤになり、いまの活動に没入しました。NGO 活動にとって、政治と宗教は絶対のタブーだそうで、それも私にとって居心地のよさだと思っています。

ところで昨年(2011年)の11月、江沢民さんが来日したさいに、経団連は「日中植林協力フォーラム」を呼びかけました。政府機関や財界のリーダーにまじって、NGO の一員として私もその末席に座らせてもらいました。経団連の動きを、「思ったよりいいな」と受け止めたのは、実際の動きを支える人たちが、「NGO のように自分の手で植えていきたい」と考えておられたことです。NGO 関係者のなかには、経団連のそのような動きに批判的な人がいるのも事実です。「経団連がNGO のまねしたってしょうがない。お金を集めて、NGO のバックアップをしてくれるほうがよほどいい」というものです。私だって、そんな考え(欲かな?)がないわけではありませんが、でも、やっぱり実際のプロジェクトをもち、自分でも木を植え、その生長を見守ってほしいのです。

3か所ほどの講演が重なったので、先週、5日間ほど上京していました。せっかくの東京滞在中、それ以外の時間もあちこちの訪問でぎっしりと詰まっていきました。そんなところに、小渕首相が訪中するにあたって、中国での緑化協力基金を設立することになる、NGO の考えをききたいので懇談会に出席してほしい、という急な案内が届きました。予定を2日ほど延ばし、私も出席させてもらいました。

「いかにも泥縄だといわれるでしょうが、しかし、やらないよりはやったほうが良いと思いました」という小渕首相の発言を、私は好意的に受け止めました。ふしぎな人ですね。政治的にいえば、そこが危ない、ということになるのでしょうか。



中国の緑化に協力していた人たちが集められた

経団連を代表して民間側の2番手に発言された王子製紙・大國社長の意見がよかったですと私は思います。植林は植えることよりも、あとの管理が大事だから、お金をだすだけではだめだ、ちゃんと自分でも現場にいて、その人たちといっしょに汗を流さないといけない、というものでした。ああいう立場の人のこのような発言は意義が深いと思います。

私もいつも思っていることを話しました。緑化というのは割の悪いしごとで、たとえばことは早魃がひどくて、春に植えたものの活着がよくなかったというふうには、悪い結果はすぐにもでるけど、いい結果はなかなかでない。途中までよく育っていたものが、ネズミやウサギ、害虫や病気などで全滅することだってある。そこをもちこたえていくには、中国と日本の双方の国民のなかに共感を輪を広げていかないといけない。お金は必要だけど、使い方によっては、両方の国民の反感をかうことだってある、それだけは避けてほしい。中国でも現場から離れているお役人は、「規模は大きいほどいい。お金は多いほどいい」というだろうけど、現場の管理能力を超えたものは必ず失敗する、現場の人たちには迷惑になる、と思ったほうがいい。

きつい時間的制約のなかで、具体的なことを話す余裕はありませんでしたが、私としてはいうべきことはいったつもりです。何人かの同席者から、「よくぞ、あれだけのことを話してください」といっていただいたのは……、ちょっとてれますね。

ずっと尊敬していて、この活動を立ち上げるときにもずいぶんとその考え方に学ばせていただいた田村三郎さんと隣り合わせで、こそこそ内緒話をさせていただき、「いつでもおいでください」なんていっていただいたのは、ほんとにラッキー！

造林緑化といったことは、やっぱり現場第一に考えるべきだと思います。外から観察しているだけでは、実際の困難はわかりません。そして、渦のなかにいる人間は、局外者のように絶望しないんです。絶望してられないんです。この問題についてはまた書くことがあるでしょう。

## NO. 7 アンズがはじめて実った！ 1999. 7. 26

渾源県呉城郷にアンズをみにいきました。この郷の振興村(89年度の地震で全村が倒壊し、場所を移して再建されたとき、名前がこのように変わりました)の小学校付属果樹園にアンズを植えたのは94年春のことです。

私たちが協力した果樹園は5.3ha、4500本ほどですが、郷ではそれから数年かけて、300ha、25万本ものアンズ園をつくりました。この郷は土壌浸食が激しく、アワやキビ、ジャガイモなどを作付けしても、たいした収穫は望めません。5月初めにNHK・BS2「地球に好奇心」の番組で「三逃の大地」、つまり土が逃げ、肥料が逃げ、作物が逃げる畑として紹介されたとおりのところでした。

この時期、この地方では、アンズの栽培が大々的に始まりました。乾燥と寒さに強いアンズはこの地方に最適の果樹だ、と政府が奨励したからです。一時はあちこちに大面積の「仁用杏基地」ができましたが、いまその大部分は記念碑を残すだけになっています。私たちが協力したなかにも、そのようなプロジェクトがあります。

失敗の原因はいろいろあります。冬のあいだにノウサギの襲撃を受け、壊滅的な打撃をうけたところがあります。暖冬続きで発生したアブラムシの害をうけたところもあります。せっかく着いた苗が、芽接ぎに失敗し、台木の芽が伸びた「ニセ苗」だったために、農民に引き抜かれたものもあります。「幸福な家庭は一様に幸福だけど、不幸な家庭はそれぞれに不幸だ」とトルストイが書いたそうですが、失敗の原因はまさしくそれで、いまそのことをくわしく書くことはできません。

呉城郷のアンズは、そのようななかで、みごとに成功した例です。いま現場でみると、隣りあって植えられた樹の枝が重なり合うところまで成長し、きちんと剪定してあります。幹の



このアンズは果肉は薄い種が大きくたくさんなる

ところがアンズに換えたこの郷は、惨めな状態に陥りました。今年も収穫できなかつたとすれば、せっかくここまできたのに、どうなったかわかりません。そのことがずっと気がかりでした。

のほうに白いものが残っているのは、ノウサギの忌避剤です。そういう基本的なことを一つ一つやりとげて、ここまできたのですが、村の人たちは当たり前のような顔をしています。「成功の秘訣は？」と聞かれても答えに窮するでしょう。

本来なら最初の収穫は昨年になるはずでした。ところが、遅霜のために、幼果が落ちてしまったのです。この一帯の穀物は、昨年、かなりの豊作でした。と

話をきいて安心しました。ことしはアンズの大豊作で、この郷は全体で 100 万元以上の収入をえたそうです。面積の広い家は 1 万円にもなったそうですから、たいしたものです。販路を確保するために、市の林業局などの奔走もあったようです。

その一方、今年の大同は大旱魃です。数日前に合計 30mm ほどの雨が降りましたが、それまではカラカラでした。1m に満たないトウモロコシが穂をつけ、20cm ほどのジャガイモが花を咲かせているのを見ると悲しくなります。これでは収穫は望めないでしょう。そのうえ、イナゴやバッタが大発生し、農薬の空中散布がなされています。そのようななかでのアンズの豊作ですから、郷の人たちは去年とはまったく逆の気持ちを味わっていることでしょう。

残念だったのは、つい数日前に収穫が終わっていたことです。取り残しの実がところどころに残っているだけでした。写真は来年までおあずけです。

## NO. 8 早魃の暑い暑い夏 1999. 8. 10

8月8日に中国の大同から帰ってきました。日本の夏も暑いのですが、大同もことしは異様な暑さでした。歴史上の最高気温が37.7度なのに、35度、36度、37度といった日がつづきます。



そして日が落ちてはなかなか下がらず、夜中の11時を回っても30度以上あることが多かったのです。標高が1,000mを超える大同は、その昔、皇帝の避暑地になっていたこともあります。この協力活動をはじめからでも、たとえ日中は暑くても、日が落ちるとすぐに涼しくなり、しかも湿度が低いために、過ごしやすいことが多かったのです。

雨がなく枯れてしまったトウモロコシも多かった

そのために、この地方の建物は、零下20度以下になる冬の寒さへの対応が中心になり、夏の暑さは考慮されていません。1~2年前に建てられたホテルの窓が、空調もないのに、はめ殺しになっているほどです。こんなところにとっても住めません。

私たちのワーキングツアーは7月30日に大同に到着するはずになっていたのですが、その直前がものすごい暑さでした。カウンターパートの武春珍・緑色地球ネットワーク大同事務所長が、心配して、なんども私のところにやってきます。「こんなに暑いし、雨がなくてカラカラだ。木を植えても着かないし、炎天下に外にでたら、病気になる人もでてくるだろう。どうしたらいいだろうか?」。そのたびに私は答えていました。「ツアーといっしょにくる立花吉茂代表は自他ともに認める雨男だ。彼がくる以上、絶対に雨が降るから心配するな」と。

立花さんたちがくる前日から、雲が広がり、気温もすこし下がってきました。そして彼らが大同駅に到着してから、ポツリポツリと雨粒が落ちてきて、バスのフロントガラスをぬらすようになりましたが、たいした降りではありません。霊丘県に到着し、水利局の招待所に宿をとった夜、私は眠っていて気がつかないのですが、雷がはげしく鳴り、かなりの雨が降ったようです。翌日、上寨鎮の自然植物園にいくと、「12時を回ったころから40分間、雨が降った。ことし初めての本格的な雨だ。立花代表がくると雨が降ると高見がいていたけど、本当だった」と植物園の技術者たちが大喜びです。

武春珍所長も、「高見がいていたとおりに雨が降った。これからはなんでも高見のいうとおりにする」などといいます。私の株まで上がったものです。しかし、降らなかつたら、どうなったんでしょうね?

そのときの雨も、私たちがいった霊丘県の南部だけにかぎられたようです。それ以外のところでは、私たちが帰る8月7日までまったく降りませんでした。年初以来の雨の合計が50mm前後のところは大部分のようです。例年なら7月にいちばんよく降り、この時期までに最低でも300mmにはなっているはずですから、異例のことです。作物がしおれ、枯れはじめていました。乾燥にきわめて強い雑草まで、ことしは少なく、それも枯れ始めています。たいへん厳しい1年になりそうです。

## NO. 9 求む！ ノウサギ対策 1999. 8. 10

霊丘県の鍋帽山で94年春から植え始めたアブラマツ(油松)、モンゴリマツ(樟子松)が大きいものは1m以上に育ってきました。ところが、この春、その一部に葉が黄変して枯れるものがありました。時間をかけないで、ほぼ即死とっていい枯れ方です。

専門家に診断してもらおうと考えて、標本を掘り起こすことにしました。すると、専門家の判断を待つまでもなく、原因がわかりました。ノネズミがかじって、根が1本も残っていないのです。マツの根がおいしいとは思えませんが、冬から春にかけて、食べるものがなくなったときに、食い荒らしたのでしょう。

この春は、陽高県の張官屯郷で、ノウサギにアンズをやられました。ノウサギの害はこれまでも経験がありますから、カウンターパートの緑色地球ネットワーク事務所をつうじて、なんども注意を促してきました。ところがその村の人たちは「ノウサギなんてみたことがない。この村にいるとは思えない」といって、廃油を苗木に塗るといったひととおりのことをしただけで、積極的な対策をとらなかったのです。そのスキをやられました。かなりの数のアンズの苗が皮をかじられて、枯れるしかなくなってしまうました。もともとそこにいるノウサギだけでなく、あそこにいけばエサがあると思うのでしょうか、果樹の苗を植えるとほかからも集まってくるようです。



この協力活動は92年から始めたのですが、そのころから、「なにかいいノウサギ・ノネズミ対策が日本にないだ

ノウサギがかじったあと。グルリと剥がされると枯れるしかない

ろうか？」ときかれたものです。その深刻さを知らない私は、「ネズミのぶんも植えておこう、ウサギのぶんも植えておこう」などと、いまから考えると赤面もののバカなことをいっていました。せっかく育ってきたものが、ネズミやウサギによって潰滅させられるケースさえ少くないのです。

それにつけても心配なのは、霊丘県に建設中の自然植物園です。ここにはたくさんのノウサギがおり、園内中にフンが落ちています。下のほうの苗圃で、ことしの春から育苗をはじめており、それらが最初の冬を迎えます。それらの苗が、ノウサギの襲撃目標になることでしょう。苗圃だけはネットで囲おうと思っていますが、86haの園内に植えるものには、そういう方法とはれません。

なんとか対策をとれないものでしょうか。いい方法があれば教えてください。ハンバミなどは、発芽したてのものが、キジ・ヤマドリにやられる被害もでています。

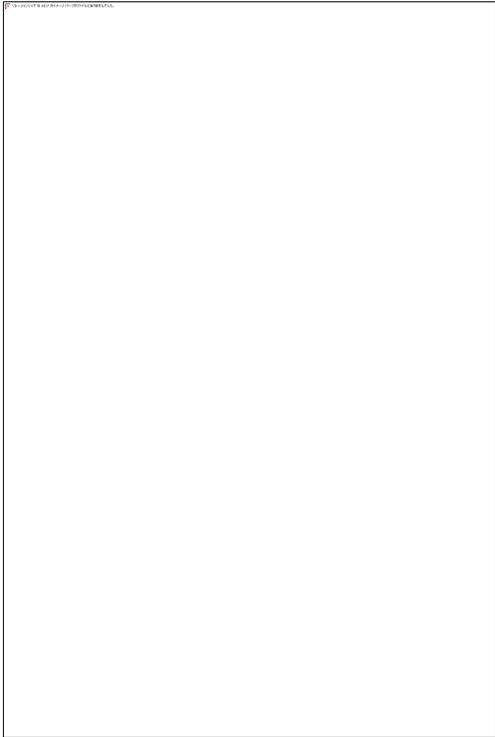
## NO. 10 ニワウルシ(別名シンジュ)の拡大作戦 1999. 8. 23

黄土高原だより(NO. 9)でノウサギ・ノネズミ対策がないものかとお尋ねしたところ、たくさんの回答をいただきました。ありがとうございます。まだお返事がつづいていますので、一段落したら、ご報告させていただきます。

大同の緑化で頭の痛いことのひとつが、植えている樹種の乏しいことです。いちばん多く植えられてきたのはポプラですが、水不足による伸び悩みのほかに、最近、カミキリムシ(中国語で天牛)の被害が深刻です。道路や水路のわきの並木でも、先端が枯れているものがたくさんあります。葉の裏が銀色の新疆ポプラだけは被害が少ないのですが、ほかのポプラがなくなるとこの木にも着くようですので、安心はできません。

大同市では、道路わきの並木に最近、マツ(樟子松と油松)を使いはじめました。ここの道路は石炭を満載した大型トレーラーが走りますから、「大気汚染のひどい道路わきにマツを植えてもだめじゃないの？」というところ、林業局の人たちは「冬でも青いものがほしいんだ」といいます。でもそれは技術者の本音ではなく、上から与えられた「任務」のようです。「北京の毛主席記念堂のマツはしょっちゅう植え替えている」といっていますから、彼らももちろん知っているのです。

くわしい経過は省きますが、ニワウルシ(別名シンジュ)の導入を考えました。霊丘県・広霊県など大同市の南部にはけっこう自生していますし、北部でも大きく育っているものがあります。生育が速いうえに、虫が着きにくく、葉に臭いがあって家畜も食べないようです。大阪・神戸など日本でも街路樹に使われ、葉が黒く汚れるようなところでも力強く伸びています。



木質も家具などの材料としては悪くないようです。北京や太原では並木としてたくさん植えられているのを見ています。「試しにつくってみよう」といったら、2か所の苗圃で去年の春から、なんと15,000本以上の育苗がはじまりました。

ところが農民はこの木を歓迎しません。「花の咲く木は家を建てるのに使ってはいけない」という言い伝えがあるようです。立花代表に紹介された『果樹園芸学』（菊池秋雄著・養賢堂刊・1953年刊）には、中国のこの地方の果樹などが紹介されており、そのなかに、「古来、槐（エンジュ）は慶祝の意義を有する樹木として栽植されてきたが……それとは反対に、伝統的に中国人に嫌悪され、低能の標徴の如く思われているものにシンジュがある」と書かれているところを見ると、かなり根深いものようです。

シンジュの成長はよく、樹形も悪くないのだが…

大同市林業局で長年働き、いまは私たちのカウンターパート・緑色地球ネットワーク大同事務所の顧問をしている侯喜さんによると、「農民たちは不吉な木だといっている」とのことです。

大同の山地にはきれいなオダマキの花があります。この夏、私が種子を採っていると、中年の男が「その花はよくない」と声をかけてきました。あとで聞いたところでは、オダマキのことを「鬼の灯籠」と呼ぶのだそうです。日本語に訳すと「幽霊花」といったところでしょうか。ヒガンバナはあんなに色鮮やかで、姿も華麗なのに、日本ではたいていの人々が敬遠します。たんぼのあぜ道で、無惨になぎ倒されたものを目にすることも珍しくありません。「幽霊花」「死人花」といった名前もあります。どこでも同じようなことがあるのです。大同に球根を持ち込んで花を咲かせたところ、初めてみる人たちは「とてもきれいだ。花の日数が短いのが残念だ」といいます。ヒガンバナは中国原産ですが（石蒜といいます）、北方には自生しないのです。

ニワウルシの中国名は「臭椿」ですが、大同の農村ではそれが転じて「臭虫」などと呼ばれています。北京の王黎傑さんは、「名前がよくない。変えたらどうでしょう」といいます。日本名のシンジュは「神樹」ですが、中国からヨーロッパに渡ったとき「神の木」と呼ばれ、それが日本にきて神樹になったと、最近、本で読みました。「中国でも神樹がいい」と祁学峰さんがいいます。勝手に名前を変えるわけにはいきませんが、愛称をつけるのはかまわないでしょう。ドラセナが「幸福の木」として広まるには、その愛称が果たした役割も無視できないでしょう。

そんな話と同席された経団連自然保護基金の黒川喜市事務局長は、「材質がいいのなら、それで家具の見本をつくって、展示するのはどうでしょう」とのことです。そのアイデアもいただき！

## NO. 11 日中植林協力フォーラム(1) 1999. 9. 14

経団連の肝いりではじまった日中植林協力フォーラムの第1回シンポジウムが、9月6日、東京の経団連会館で開催されました。中国側関係者の参加も思ったより多く、全体では400人を上回る参加者がありました。私たちのカウンターパート、大同市青年連合会主席の祁学峰さんと私も、NGOの先輩たちに混じって、私たちの活動を報告させていただきました。その内容を2回に渡って、お送りいたします。なおこの「黄土高原だより」は、随時に発行しております。ご迷惑な場合は、お手数をかけて恐縮ですが、こちらまでメールでお知らせいただければリストからはずさせていただきます。

### 日中友好植林フォーラム第1回シンポジウムにおける発言

大同市青年連合会主席 祁学峰

尊敬する今井敬会長：

尊敬する来賓のみなさん、友人のみなさん：

私は黄土高原の東部、山西省大同市からやってきました。このたび日本経済団体連合会のお招きにより、この席でみなさんに、大同市青年連合会と日本の民間団体＝緑の地球ネットワークが協力して進めている「黄土高原緑化活動」をご紹介できることは、私にとってとてもうれしく、かつ光栄なことです。このようなえがたい学習と交流、そして友人と知り合う機会を提供してくださったみなさんに心から感謝いたします。

私自身は林業の研究や造林事業を専門にしていませんし、林業に関する知識が貧乏なうえに緑化問題に対する認識が浅く、このように高いところからこの問題を論じることは、非常に恥ずかしい思いを免れません。しかし私はこれから、黄土高原緑化活動のなかで私たち自身が体験してきたことを、誠実かつ真剣に述べたいと思います。もしそれによって、今後の緑化活動に対して多少なりとも役立つことがあるとすれば、たいへんうれしく思います。

黄土高原緑化協力活動は1992年初めから開始されました。そのとき最初に中国にやってきた日本人は5人だったのですが、いまでも残ってこの活動に従事しているのは高見邦雄さんだけです。高見さんは大同市の至るところを歩き回り、当地の農民と同じところに住んで同じものを食べ、いっしょに労働してきました。黄土高原の緑化のために毎年何回も日本と中国のあいだを往復し、気力を振り絞って資金を集め、緑化協力のボランティアを組織しています。彼はま

た中国の植林の現場に深く入って事情を理解し、当地の農民とよく交流しており、彼はいつも私たちに「必ず現場にいかないといけない。そうしないと官僚主義の過ちを犯す」と話します。

高見さんに連れられて、たくさんの緑化ボランティアがやってきますが、彼らは黄土高原に愛着を持ち、労働の汗を流し、当地の農民といっしょに荒れ山に木を植え、浸食谷で水を背負い、林にはいっては木の種子を集め、小学校にいったり子どもたちと交流し、満腔の熱情を黄土高原の奥深くの村まで届けています。

1995年春、前川宏さんという退職教員が緑化協力団に参加してきましたが、彼は足の骨を折ったばかりで、杖をついて山に登って木を植えました。その態度が非常に真剣であったために、その場にいた両国のボランティアに彼の行動が感染し、みな先を争って活動に取り組み、深い感動を覚えたものです。このできごとは、私を大いに啓発し、高見さんらといっしょに黄土高原緑化活動をやり抜こうと決意させてくれたのです。

それからの4年間、私と高見さんは朝から夜までともにあって、誠実に協力し、困難のなかで黄土高原緑化活動を一步一步と前進させてきました。去年の夏、前川さんがまた緑化協力団に加わって大同にきましたが、彼の足の傷はすでに治っていたので、私は彼に「あなたの足はよくなったけど、私の足はダメになってしまった。椎間板ヘルニアによる坐骨神経痛になってしまったんです。あなたがケガをして緑化活動に参加したので、私はそれに感動して緑化活動に参加しましたが、自分の不注意で病気になってしまった。私たちは黄土高原に緑を増やすためにそれぞれに献身したのです」と話しました。すると前川さんは、「それは申し訳なかった。迷惑をかけてしまった。しかし私は後悔はしていない。これからもひきつづき努力しましょう」といいました。

そうです。黄土高原緑化活動は、高見さんや前川さんのようなたくさんの熱心な参加者により、もっとも直接的な、もっとも深く入る方式の協力で、地元の大衆といっしょになって、大同地区 14, 127 平方 km の黄色い大地の 2, 560ha に樹木を植えてきたのです。

そのような努力を通じて、私ははっきり認識するようになりました。植樹造林は一朝一夕になるものではなく、さらにたくさんの有識者の長期の不断の努力を必要とするのだ、と。現在の状況をみると、緑化事業に熱心な人はまだ限られています。理解していない人もいれば、自分とは無関係だと思っている人もおり、参加したいと思いつつ躊躇している人もいます。

去年、東京のある大学で、黄土高原緑化の状況を私が紹介したところ、ある友人は私に1つの問題を提出しました。「私の父親の世代が過去に、中国で悪いことをしました。私はいまみなさんの緑化活動に参加したいと思いますが、その地の農民たちは私たちのことを本当に歓迎してくれるのでしょうか？」と彼はいうのです。私は彼に話しました。「私たちはみな、過去の歴史を忘れることはできません。しかしあなたがいまやるのはいいことをするためだから、その

地の農民も歓迎するでしょう」と。その迷いがなくなると、その人は気持ちよく緑化活動に参加してきました。このようなしごとは、私たちの今後の重点の一つになるでしょう。もっとも広範な社会各方面の力量の参加をうることによってはじめて、緑化活動は持久的な生命力をうることができるのですから。

私はこれまで3回日本に来ましたが、来るたびに、どこもかしこも緑に包まれているのが羨ましく、いつになったら私たちが生活しているあの地方が緑豊かに変わるのだろう、と思っています。そのような一種の憧憬の思いで、1994年の初めから、私は中国側の責任者としてこの黄土高原緑化活動に参加するようになったのですが、その第一歩で苦い失敗を味わおうとは思っていませんでした。

1994年の春、徐町郷というところで私たちは60haのアンズを植えました。そのとき私が考えたのは、この地方は土地は広いけれども、土壤がたいへん痩せているうえに水が乏しく、農



民の食糧生産高はとても低い、もしここにアンズを植えれば防風防砂に役立つし、農民にも収益をもたらすことができる、これこそ一石二鳥ではないか、というものでした。そしてそのようにしました。

結果は第2年めに早くもでて、たくさんのアンズがみな枯れてしまったのです。私はとても悩

#### 大同県徐町郷にたくさんのアンズを植えたあとの記念撮影

ました。でかけていって、地元の幹部に尋ねると、彼らは「面積が大きすぎて、管理ができなかった」といいました。地元の農民にきくと、彼らは「あなたたち都市の幹部は下のことを理解していない。私たちの耕地をそのように使ったら、農民はなにを食べればいいのか」といいました。

私はなににも答えることができず、帰ってから高見に話しました。「良好な願望から出発しているからといって、良好な結果がえられるとは限らない。私は小さいときから都市で育ち、農村や農民のことをまるでわかっていなかった。このことはみな私たちの過ちがつくりだしたものだ」と。

高見はそのとき、「失敗を恐れることはない。毛沢東は、失敗は成功の母だといったことがあ

る。たいせつなのは、失敗のなかから経験を総括することだ」といいました。そのとき以来、私と高見は、いつもいっしょに農村にいき、地元の幹部と大衆に教を請い、実際の状況を理解し、具体的な問題を解決するようになってきました。

いま私たちが緑化の計画を立てるとき、可能な限り農民の耕地を使わないようにし、大衆の基礎のいいところを選び、一度に造林する面積は大きすぎないようにし、まずはむずかしくないところから開始する、といった配慮をしていますが、これらはみな実際のなかの具体的な経験を総括したものであり、そのように実施してからずいぶんと結果もよくなりました。

今年の春、鍋帽山というところに行ってみると、95年に私たちが荒れ山に植えた22万本のアブラマツ(油松)のおよそ半分が枯れ始めているのが発見されました。抜いてみると、ノネズミが根をかじってしまっているのです。地元の人がいうには、「ここにはノウサギやノネズミが多く、とくに旱魃の年、樹木に対する破壊がひどい」ということです。

どうしてこの地方では樹木が育つのがこんなに困難なのでしょう、1本の苗木がちゃんと生長するのを見るのは容易ではありません。自然の条件や人為的な原因によって、枯れ死し、人の心を傷つけることが少なくないのです。

高見はいつも冗談をいいます。「最初にきたときは5人で、そのあと4人がいなくなったが、その人たちはかしくかったんだ。私が残ったのは、バカで、逃げ足が遅かったからだ」と。このように回想すると、私もその4人の最初の選択を理解できます。植樹というのは、とても長いゆっくりとした過程であって、その結果を誰もがみることができるとは限らず、昔の人たちはその道理を「前の世代の人が木を植え、後の世代の人が木陰で涼む」(前人栽樹、後人乘涼)といっているのです。

去年の冬、大阪でのシンポジウムで、私は一つの観点について話しました。緑化活動をするためには熱情がなければならないが、しかし情熱だけでは不十分で、かならず厳粛で真剣な科学的態度がなければならない、ということです。

なぜこんなことをいったのでしょうか。黄土高原における7年の緑化活動の実践からみて、最初の数年の成果は大きくなかったのですが、その主要な原因は、緑化を開始した人たちの動機はよかったけれども、深い認識はなく、経験はたりず、満腔の熱情は往々にして失敗の痛苦に換わった、ということでした。

1995年以降、立花吉茂先生、遠田宏先生をはじめとする日本の専門家が参加されるようになり、黄土高原緑化活動に新しい活力が注入されました。この人たちは、海外にでて仕事をすれば、たくさんのお金をうることもできるのに、自費で黄土高原にきて、自分たちの知識を惜しみなく当地の幹部、大衆、技術員に伝え、ときにはなにかの問題を解決するために寝食を忘れ

て中国の技術員と討論します。そういう厳粛で真剣な精神が、人びとを深く感動させているのです。

黄土高原では水不足が深刻で、この地方に適した樹種が少なく、造林技術が後れているといった3つの大問題に対して、専門家たちは、長い時間をかけて研究し、たくさんの具体的な措置をとりました。たとえば菌根菌を利用した苗づくり、混植の試験、植物を育てたり植えたりするときに砂や木炭を加える、といったことであり、これらはいま黄土高原緑化の主要な内容になっています。

遠田先生はいつも私たちに話します。「植物には生命があるのだから、いつもよく観察し、心から愛護し、不断に研究しなければならない。そのようにすれば、彼らも必ず応じてくれる」。そのような専門家の意見にもとづき、ここ数年、私たちは育苗基地や実験研修センターを建設し、いままた1つの自然植物園の建設を準備しており、黄土高原緑化活動は生気にみちた新しい発展段階へと前進しつつあります。

黄土高原緑化協力の7年間の発展の経過を顧みると、失敗の痛苦もあれば、成功の喜びもありました。そして私たちの実践は、環境問題は全人類共同の課題であり、すべての人びとの共同努力を必要とする、ということを示していると思います。

民間団体が展開するボランティア緑化活動は、政府の活動の重要な補完であり、それによってより広範な理解と支持をうることができます。緑化事業はこの一代の功績であるだけでなく、その効果は子孫に及ぶ長期的な性格をもった事業であり、堅固不拔の精神が必要です。

中日両国政府の重視と支持のもと、中日両国人民の共同の努力によって、黄土高原で荒れた大地が緑に覆われる夢がいつかは実現することを、私は信じています。

## NO. 12 日中植林協力フォーラム(2) 1999. 9. 14

### シンポジウムにおける高見の報告

いま祁学峰さんが紹介したように、私たちは大同市の黄土高原の農村で8年近く協力活動をつづけてきました。私も私なりの理解をお話ししたいと思います。きのうの夜、大同から帰ってきたばかりですが、むこうはいま大旱魃です。昨年8月からの1年間、大同市の降水量は130mmにとどまり、7月10日から8月17日までのほぼ40日間、作物がいちばん水を必要とする時期に雨はまったく降りませんでした。大同市の平均降水量は400mmですから、その3分の1しか降らなかったことになります。

そのうえ、この夏はものすごい暑さでした。歴史上の最高記録 37.7 度を塗り変え、37 度、36 度、35 度といった日がつづきました。猛暑つづきで雨が降りませんから、たいへんです。その時期になるとトウモロコシは穂をだし、ヒマワリは花を咲かせますが、背丈は 1m もありません。ヒザまでのトウモロコシなんて想像できますか？ 20cm に足りないジャガイモが花をつけました。アワ、キビなどは葉がしおれ、やがて枯れてしまったものが少なくありません。実はまったくはいていません。

灌漑が可能な盆地の畑のトウモロコシやヒマワリは 2m 以上にもなっており、それと比較すれば、旱魃の被害がどんなに深刻なものか一目でわかります。大同市全体の耕地面積は 35 万 ha ですが、その 57%にあたる 20 万 ha は壊滅状態です。ふつうの年でも 1 人あたりの年間所得が 500 元(日本円 7,000 円)を切る貧困層がたくさんいるんですから、これからどうなるか、痛ましいことです。



穂が出る時期になってもトウモロコシはこの大きさ

ですよ。

旱魃のことはすでに話しましたが、10年に1年の大水とはなんでしょう？ 年間降水量400mmの3分の2は7~8月に集中しますが、それがとくにひどい年があります。たとえば95年。春は厳しい旱魃だったのに、7月末から雨が降りつづいて、短期間の雨量が640mmにもなってしまった。農村には土作りの住居、ヤオトン(窑洞)が多いんですが、屋根に雨がしみ込んで、倒壊する家があいついだ。大同市全体で6万世帯24万人が住居を失ったんです。

そんな被害が10年に1度もあったらたまりませんが、畑の土が流されるのはしょっちゅうです。中国では水土流失といいます。畑の土ぐらい、と思われるかもしれませんが、大同市の中央を流れる桑干河の水には、1立方mあたり44kgの土が含まれるんですよ。いつもまっ黄色です。

地元の民謡にこんな1節があります。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は日照りで、一年は大水……」(靠着山呀, 没柴烧, 十個年头, 九年旱, 一年涝)。私はこの8年、毎年90日から120日、黄土高原の農村に滞在していますが、これはまさに実感です。山にはまったく木がありません。そして山腹や丘陵の急斜面まで畑になっています。「耕して天に至る」というのは誇張ではないん

ついでにいうと、黄河に流れ込む土は年間 16 億 t だそうです。その 8 割以上は黄土高原のもので、以前はそれが海に流れ込んでいましたが、いまは黄河は水がなくなって、河口まで届かない。途中で涸れてしまいます。97 年は、じつに 226 日もそういう状態がつづき、ひどいときは河口から 704km も干上がりました。

南の長江や北の松花江などでは、毎年のように洪水が起こります。その陰に隠れていますが、中国の中緯度地方、黄河流域などでは、渇水が深刻です。大同では毎年 2~3m も地下水位が低下しており、2008 年には完全に枯渇すると、地元の新聞が報道しました。農村人口 150 万人のうち 30 万人が飲み水に困る状態です。

大同は北京の水源にあたり、大同の水が涸れるということは、首都北京にとっても大問題なのですが、きょうは時間がありませんので、話をもとに戻します。黄河に流れ込む 16 億 t の土と見当がつきませんが、その土で幅 1m 高さ 1m の堤防を築くと、長さは赤道を 27 周もすることになります。これに比べたら、万里の長城なんてたいしたことはいらないですね。その土の大部分は耕された畑からのものです。腐植を含んだ表土が流されますから、土壌がしだいに劣化し、作物が育たなくなります。それが沙漠化です。皮肉なことですが、黄土高原では、雨によって沙漠化が加速されるんです。

私たちが木を植えて、グリーンベルトをつくろうとするのは、それによって土壌侵食を防ぎ、沙漠化を防ごうとするためです。木を植えれば、それで沙漠でなくなったり、沙漠化が止まるというわけではないんですよ。

じゃあ、黄土高原に樹木がなく、沙漠化がすすむのは、そういう自然条件のせいかという、もちろんそれもあります。しかし、それだけではないんです。山西省の森林被覆率は 2,200 年ほど前の秦の始皇帝の時代には 50% だったと、りっぱな本に書かれています。それが唐宋代に 40%、遼元代に 30%、清代には 10% 未満、50 年前に中華人民共和国ができたときには 2.4% に低下していたんだそうです。

その数字が正しいかどうか、私にはたしかめることができません。森林といっても、日本の私たちが思うような密なものではないでしょう。でも、大同の近くの応県には、高さ 67m の世界有数の木塔が残っています。また北京の紫禁城、故宫ですね、あれを建てるのに、大同よりさらに西の呂梁山脈の木を運んだという記録があるそうです。かなり豊かな森林があったのはたしかでしょう。

では、なぜその森林がなくなったのか。さきほどの本は、人為説をとっています。山を開いて畑にしたり、煮炊きの燃料に使ったり、都市の建築に使ったり、戦争を繰り返したりしているうちに、森林がなくなったということです。黄河の流域、黄土高原は、中国でも早くから文

明が発展したところです。大同はそのはずれですが、4世紀末には北魏の都が置かれました。遼代は副都だったんです。はしょった言い方をすれば「文明の前には森林があり、文明の後には沙漠が残った」ということでしょう。

でも、黄土高原は広大で、日本の国土の1.5倍以上もあります。それだけの面積を人間が沙漠化させたというんですが、でも、人間、しかも工業化以前の人間に、それだけの力があつたのか？ 私は心の底で疑っていました。

ところが昨年夏、立花吉茂代表の提唱で、大同市最南部の靈丘県に1つの植物園をつくる計画を立て、現地の技術者に調査してもらったところ、自然林がいくつか見つかりました。驚きましたね。ナラ・クヌギ・カバノキ・シナノキ・カエデ・クルミ・シャクナゲ・シモツケなどが茂り、大きなものは一抱え以上あります。そして林床には、腐葉土が厚く積もり、黒い森林土壌ができています。

私たちの顧問で、もとは東北大学附属植物園の園長だった遠田宏さんは、「日本の東北の山とそっくりですね。樹種も豊富です」といって、びっくりしていました。そういう自然林を、去年の夏、4つみましました。それらはもちろん原生林ではありません。長いあいだ、人間によって利用され、破壊されてきた山です。そこに自然に森林が復活してきた。森林が成立する自然の条件はあるということです。

ところがそれらの自然林は、いずれも小面積で、おたがいに孤立し、生えている樹種もまちまちです。そしてその他の大部分の土地はハゲ山だったり、畑や村になっていたり、近年植えられたもの以外には木がありません。

なぜ、そういうことが起こるのか？ 大同市は中国一の石炭産地で、農村にもたくさんの零炭鉱があり、石炭は安価ですから、煮炊きや暖をとるのに使われています。しかし山村にいくと柴ですね。かなり遠くまで行って、60kgもの柴を担いできます。

それから、ヒツジ、ヤギ、ウシなどの放牧をします。たとえ樹木の種があり、小さな芽生えができて、食べられてしまいます。自然環境が厳しいから、条件のよくないところまで、森林を切り開き、畑を拡大してきた。畑だけでは食べられないから、山に家畜を放す。生きるためには燃料も必要です。

そうすると、環境が破壊され、条件はさらに悪くなり、貧困がつのる。そこに「貧乏の子たくさん」ですね。さらに環境が破壊されます。環境破壊、貧困、人口増加の悪循環がつづいているわけです。



放牧のヤギはどんな急な斜面でも平気で昇り降りする

私たちがみた 4 つの自然林に共通しているのは、村から離れ、道がなく、往復に 1 日かかる、ということです。いちばん大きな自然林は、近くにあった村がなくなったあとに復活したんだそうです。暮らしがなりたたなくなって、人間がいなくなったあと、自然に森林が復活した。

そういうことからいうと、ここに森林がない根本の原因は、大地と水のキャパシティを超えた人間が住んでいる、ということです。すると、森林の再生も、たんに木を植えればいい、ということではなくなります。

中国の植林に協力するというと、たいていの人は、お金をだしたり、日本の先進的な林業技術を伝えていくことだ、とお考えでしょう。私もそう考えて、この活動をはじめましたし、そういうことももちろん重要です。しかし、いざじっさいに活動を開始すると、そこでどういうことがおこるか、どういうことをしないとイケなかったか。それは先ほど祁学峰さんが話したとおりです。

彼とは、もう兄弟のようなものなんですよ。つい最近まで、24 時間べったりいっしょに活動していました。なにかの問題がつかねにおきますから、現場に足を運んでいつも相談していると、考え方まで似てきます。2 人が同時に口を開いて、あいだにいる通訳が「2 人ともおなじことをいってます」なんてことがしょっちゅうです。「おお、ラクな通訳だな」なんて笑うんですけどね。

年齢からいって、当然、私が兄貴で、彼が弟です。くやしいのは、たいていの家庭で、弟のほうが兄貴より賢いことです。カウンターパートに恵まれたことは、私たちにとっていちばんの幸いでした。

私たち緑の地球ネットワークは、会員数 600 人たらずの、小さな、貧乏な、NGO です。小さいこと、貧乏なこと、民間であるといったことは、悪いことばかりではないんですね。中国の人たちは、私たちが苦勞しながらこの協力をつづけていることを、驚いてくれます。たくさんの方々が、専門家がいっぱい現地にいて、プロジェクトを組み立てたり、技術者の教育をしてくれたりするんですが、みんな手弁当です。そういう雰囲気を感じ取って、地元の人たちも本気になってくれるんです。

ですから、お金があればいいということではありません。組織が大きくなって、決定や運営が官僚的になれば、官僚主義ということでは中国は日本の先生ですから、おたがいの関係がぎくしゃくして、いまのよさが失われるかもしれない。

なんてことを、小さいながらも1つの組織の事務局長が口にしてはいけません。NGOの先輩が、「事務局長のしごとの7割までは金集めの苦労だ」と忠告してくれましたが、私もそのとおりだと思います。ところが実際には、最低でも年間の4分の1は現地にいて、酒を飲んでブラブラしている。そのうえ、さっきのように「金がすべてじゃないよ」なんてことを口にしてしまう。じつのところ、資金の問題ではずいぶん苦労しています。景気がよくなって、思うように寄附が集まらない。助成や補助がなかなか決まらなかったり、見送られたりする。そのとき、こんなふうにいわれるんですね。

「経団連が乗り出すんでしょ。小渕基金ができるんでしょ。だから、私たちのところは……」と。それが本当だとすると、来年度以降はお金の苦労がちょっとは軽くなるのかもしれませんが。でも、来年度になる前に、私たちのような零細NGOはつぶれないともかぎらない。そういう実情にあることも知っていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

\*黄土高原での緑化協力活動について、最近ではあちこちで報告することが多いのですが、いつもは簡単なメモ程度で、こういう原稿を書いたのははじめてのことです。前日まで大同にいて、祁学峰が原稿で苦しんでいるのにつきあって、私も書いたのです。

ところがそれがよくなかったのです。本番ではなかなか調子がでず、もたもたしているあいだに時間をオーバーし、コーディネーターの吉川賢さんからイエローカードにつづいてレッドカードまでもらってしまいました。申し訳ないことです。ですから、当日はこのとおりを話したわけではありませんが、だいたい9分どおりは話せたと思います。

## NO. 13 立花吉茂さんと植物園 1999. 9. 27

スタートしたころの緑の地球ネットワークは、素人だけの集まりでした。植物のことも、黄土高原のことも、ちゃんとわかっている人はいなかったのです。私たちの最初のツアーの報告会(92年5月)に飛び入りで出席された遠山正瑛さんが、「素人は勇敢だな。自分ももともと黄土高原に誘われたけど、あそこの難しさがわかっていたから、さらに奥の砂漠に行った。もし君たちが成功するようだったら、君たちがいちばんだよ。だけど黄土高原は困難だよ」といわれました。でも遠山さんは、そのときからずっと私たちの会員です。先日の「日中植林協力フォーラム」で、私たちのあとに発言された遠山さんが、あのときと同じ内容の話をされたので、そのころのことを懐かしく思い出しました。

「しろうとの勇敢さ」でスタートした私たちのプロジェクトは、最初、失敗つづきでした。地元にも技術者がいるし、経験もある、と思っていたのですが、結果は思わしくありません。つぎつぎとでてくる問題を解決してくれる専門家の参加がほしいと切実に思いました。

最初からの世話人、川島和義さんにつれられて、立花吉茂さんを大阪市立咲くやこの花館に訪ねたのは 94 年春のことです。最初の一言は厳しいものでした。「NGO とかいっても、経験も知識もないから、バカなことばかりやってる。水をほしがるポプラを乾燥地に植えるなんてことをやってないでしょう？」。



#### 霊丘県で建設することになった自然植物園の起工式

有用植物をそこに集め、いろいろ研究して栽培方法を確立し、それを植民地経営の基礎にした。しかし、そのときといまとは時代がちがう。いまは地球環境が問題になるときだ。そういう沙漠化地域に植物園を建設し、可能性のある植物を世界中から集めて、試験栽培と馴化をすすめる、有望なものを広めていくといったことが必要なのではないか。本気でそれをやる気があるなら、自分も参加しよう」。

すごい人ですよ。それからずつつきあってきて、そう思います。彼個人もすごいけど、それだけでなく、何代も何代もその領域の知識と技術が受け継がれているわけです。それを誰かに伝えるのを義務として背負いながら、その対象がこの時世の日本ではなかなかみつからない、そんな人です。

そのころの大同の実情からいえば、植物園はすぐには実現できません。でも、目標ができたということは、すごいことです。私も受け身を脱することができました。ちょうど同じ時期に、中国側では祁学峰がこの協力事業を担当するようになり、私は彼を逃がさないために専門の組織を提案し(緑色地球ネットワーク大同事務所として結実)、最初の所長として確保しました。

祁学峰が「ここまで広がったプロジェクトをまとめるためには、絶対に中心が必要だ」といざいだしたことが、立花さんの「パイロットファームが必要だ」と合致し、大同市南郊区の「地球環境林センター」として結実しました。現地のプロジェクトが生命をもち、それじしんのダ

「先生を訪ねたのはバカなことをできるだけ避けるためです」といって、私は率直に実情を話しました。

そのあとにつづいた立花さんのことばが、耳の奥にずっと残っています。「植民地主義の時代、たとえばイギリスはインドのあちこちに植物園を建設した。インド中の

イナミズムで動き出したのは、いま考えると、そのころからです。

あいだを省略します。私たちの植物園計画にとってもっとも条件のあるのは大同市最南部の靈丘県でした。ここに植物園を建設することを決め、地元の技術者たちに周辺の植生調査を頼んだら、これまでになんだか紹介した自然林が見つかったのです。ナラ・クヌギ、カバノキ、カエデ、シナノキ、トネリコ、クルミなどの喬木と、ハギ、シモツケ、シャクナゲ、ハシバミなどの灌木がまじり、そうとうに豊かなものです。大きなものは一抱え以上あり、林床にはヒザまで埋まる腐葉土と落ち葉がありました。

構成する樹種や面積はまちまちですが、私たちは98年の夏、そういう自然林を4か所でみました。それがどのような条件のもとに成立しているかは、前号に書いたとおりです。この協力事業にとって、そういう発展を引き出したのは、立花さんの執念というしかありません。

#### NO. 14 歴史を克服するにも過程が必要 1999. 10. 8

全ジャスコ労働組合から、創立30周年記念事業として、中国で小学校建設に協力したいというお話があったので、植物園を建設中の靈丘県南庄村に決めました。ことしの春、組合のツアーが訪れた機会に起工式をもち、子どもや村の人たちといっしょにレンガ積みをしました。

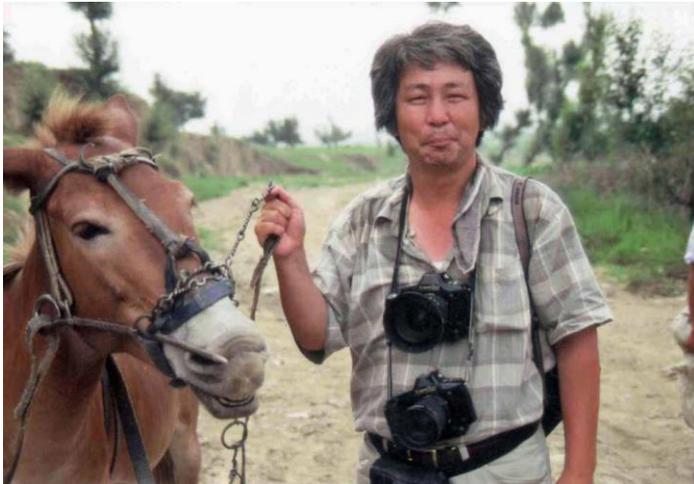
緑の地球ネットワークが派遣するツアーが7月末に訪れたとき、建物は完成し、内装作業のさなかでした。私はみななかったのですが、教室の黒板に「熱烈歓迎日本友人！」と書かれたその下に、小さく「打倒日本帝国主義」と書かれていたのだそうです。中国語をかじった人ならおわかりでしょう、音の似た当て字が使われていますが、「打倒日本帝国主義」です。村のこどもが書いたものでした。

その夜、招待所のいくつかの部屋で、そのことが話題になったようです。「悲しかった」「協力の意味がちゃんと伝わっているのか?」「建設する場所をまちがっていないか」などと深刻に受け止めた人もいたようです。私のまじった中年男性グループは、変わり者の集まりだったのでしょうか、「歴史からいってありうることだし、それぐらいの骨がなかったら困るよな」などといっていました。

山西省は、日中戦争にさいしてもっとも被害の重かったところの1つです。92年と93年秋、私が通訳なしで一带の村を回ったとき、「日本軍いらいの外国人だ」とか「日本の鬼(亡霊)」などといわれて辛い思いをしましたが、歴史を考えれば当然のことでしょう。大同で協力活動をはじめたことじたいが「場所をまちがっていた」のかもしれませんが。

カメラマンの橋本紘二さんが何年前、ツアーの一員として天鎮県を訪れたとき、副県長の

黄さんが案内してくれていました。橋本さんが黄さんに「日中戦争のとき、この県でどういうことがあったか、話してほしい」と頼んだのだそうで、副県長が私に「そういう要請があるが、ほんとうに話してもいいのか？」と聞いてきました。私は「お願いします」と答えましたが、副県長は言葉少なに、「日本軍の侵入後、県城は短時間で血の海、無人の野に化しました」と話ただけでした。



橋本さんは四季を通じて大同の農村に通いつづけた

昼休みに橋本さんは県城の町を歩いていた。肩からかけた何台ものカメラで日本人とわかったのでしょう。1人の老人が呼び止め、指をつきつけながら、激しく罵ってきたのだそうです。橋本さんは中国語がわかりませんが、口のまわりをアワだらけにし、老人が怒りをぶつけるのにあわせて、取り囲んできた数十人もの中国人がしだいに興奮するのを見て、むしろそちらに恐怖を感じたそうです。

人ばかりしているのを見て、同行していた通訳の張さんが、なにかがあったと感じたようです。覗いてみると、輪の中心に橋本さんがいました。老人は、「自分が3歳のときに、親兄弟も親戚も日本軍に皆殺しにされた。自分は孤児になり、苦労苦労の連続で生きてきた。そういう事実があるのをおまえは知っているか！」とつめよっていたのです。橋本さんは、すなおに謝りました。

通訳の張さんが、「ここ数年、日本人が緑化の協力にきているのを知っているか。この人はその一員だ」といったところ、その老人は「それは悪いことをした」といって、橋本さんのカメラマンベストのポケットというポケットに、売り物のヒマワリの種を詰め込みました。私もお相伴にあずかりながら、いままでの話をききました。

橋本さんは、そのあと天鎮県にいくたびに、その老人が元気にしているかどうか探しにいきます。老人も、日本人がきているときくと、橋本さんが混じっていないか、探しにきます。昨年はその老人を橋本さんが夕食の席につれてきたので、ツアーのメンバー全員で乾杯しました。どこかで知らされないと、私たちは歴史に気づくことができません。そしてそれを克服するには、やはり過程が必要だと私は思っています。

【追伸】橋本紘二さんが黄土高原に5年間通いつめ、自然と生活を撮影した作品が『アサヒグラフ』（10月29日号、10月20日発売）に13ページにわたって掲載されます。写真もいいのですが、私は彼の文章のほうが好きです（なんていうと、橋本さんは怒ります）。ぜひごらんに

なってください。(10月14日)

## NO. 15 カウンターパート・祁学峰との出会い(1) 1999. 10. 21

どのような分野のものであれ、国際協力活動がうまくいくかどうかは、いいカウンターパートをえられるかどうかで決まるでしょう。私たちの活動も最初のころ、この問題でたいへん苦労しました。92年にこの活動をスタートさせたのは、大同の周囲をドーナツ状にとりかこむ農村地帯で、当時は「雁北地区」と呼ばれ、その下に10の県がありました。ところが93年7月、そのうちの7つの県が、以前からの大同市と併合し、いまの大「大同市」が成立したのです。私たちのカウンターパートも雁北地区青年連合会から大同市青年連合会へ移行しました。

その間、青年連合会の人事は激しく変動し、数か月おきにいくたびに担当者が変わっており、引き継ぎもなされていない状態でした。

そんななかで94年春から専門に担当することになったのが、大同市青年連合会の副主席、祁学峰でした。都市育ちで、農村のことを知らない彼といっしょに、いくつかの県を回り農家に泊まり込んだりしました。

私が彼を評価したのはこういうことがあったからです。広霊県平城郷にいったとき、郷の北部の村は環境が厳しく、たいへん貧乏だと小耳にはさんだのです。その村をぜひみたいと思いました。ところが郷の幹部たちは、外国人にみせたくないと考えて、いろんな理由をつけては、ジャマをしたのです。祁学峰は、自分でもみたいと考えたのでしょう、郷の幹部たちを説得して、その村へ私をつれていきました。



小雪の舞う夕暮れでした。村の農家はあばら屋ばかりです。寒い冬をなんとか乗り切ったばかりで、ヒツジの瘦せこけているのが毛のうえからでもわかりました。1軒の農家をのぞくと、老夫婦と孫1人が夕食をはじめようとしていました。オンドルに直においた洗面器の底に、トロトロのアワ粥がちょっとだ

けあり、ほかにはトウガラシ味噌のビンがあるだけでした。その家で収穫した穀物はすでになくなり、麻袋2つの救済食糧でつぎの収穫までもたせないといけない、ということでした。

私がおのうすをビデオとカメラで撮影しようとしたところ、地元の幹部が、「こんな貧乏な村を外国人にみせ、写真撮影までさせていいのか？」と祁学峰にいいました。祁学峰は間髪をいれずに「もし問題になれば、自分が責任をとる」と答えたのです。その場の幹部たちは、「あなたがそういうのなら、自分も責任をとる」と応じ、私の写真撮影は認められました。

それまでの2年余り、大同でもたくさんの幹部にであいましたが、こういうタイプは珍しいと、そのとき私は思いました。この男をなんとか協力活動に縛りつけようと考えて、青年連合会のなかに、この活動を専門的にあつかう事務所をつくることを提案し、彼が所長になるよう求めたのです。つづきは次回にしましょう。

そのとき訪れた村は、広霊県平城郷苑西庄村です。97年、テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」で取り上げられ、その後、井戸を掘ることになったあの村です。つい最近、祁学峰にそのときの思い出を話すと、彼は「あこのころの自分はなにも知らなかったから、怖いと思わなかった」といい、「生まれたばかりの子牛は虎を恐れない」ということわざを引きました。そういうシャイなところもあるのです。

## NO. 16 カウンターパート・祁学峰との出会い(2) 1999. 10. 22

92年5月の協力団に団長として参加した石原忠一さん(現顧問)は、「この協力活動は最低20年西庄村で最初に訪れた家の老夫婦は継続したい」と何度となく発言しました。その意味を私はつぎのように考えています。小さなマツの苗を植えても、植えてから20年たてば、この地方では間伐材が垂木として売れるようになります。それまでは持ち出し一方なのに、ここではじめて収入が期待でき、経済的にも回転するようになるのです。

またマツは植えてから20年くらいたてば松かさをつけ、種を飛ばすようになります。周囲に自生の苗が育ち、天然更新がはじまります。

その2つの面から考えて、20年たてば、この協力活動の初歩的な成果をたしかめることができると思うのです。

私は祁学峰に、「私たちも20年はつづける決意だから、あなたも20年はこの活動を担当してくれ」と迫りました。長期間継続するという覚悟をおたがいに固めないと、対応が無責任になると考えたからです。

私のみるところ、青年連合会(その中心の共産主義青年団)は、出世のための登竜門です。大同市青年連合会の主席、副主席クラスは、30歳代半ばでそこを卒業すると、各県の副県長もしくはそれ以上のポストにつきます(県は市の下の行政単位であることに注意)。祁学峰のような

優秀な人材を、長期にわたってカウンターパートとしてつなぎとめるのは、実際には困難なことです。

私はつぎのような話をして、彼を口説きました。靈丘県に平型関というところがあります。多少でも歴史に関心をもつ中国人で知らない人はいないでしょう(たいていの中国人は歴史がすきです)。

蘆溝橋事件のあと、日本軍は「山西作戦」を展開し、大同を通過して南へ攻め下りましたが、林彪の率いる八路軍の一団がこの平型関で待ち伏せし、板垣師団を殲滅したのです。日中戦争がはじまってから、中国軍がはじめておさめた勝利でした。日中戦争の期間に大同が深刻な被害を受けた背景に、日本側がこの平型関の復讐をはかったことがあるのですが、いまはこれ以上ふれません。

60年代の初め、林彪の地位の上昇にともなって、平型関にはりっぱな記念館が建設されました。ところが93年にそこを訪れてみると、陳列物はすべて取り払われ、窓ガラスもほとんど破



れて、廃墟になっていました。写真の撮影はもとより、そこでみたことを日本で発表しないよう注意されたくらいです。林彪の失脚にともなって、破壊されてしまったのです。(95年の戦勝50周年にさいして修復されたのですが、私はまだみていません)。

#### 万里の長城の内城の関所・平型関

ところが、この記念館の建設にあわせて、遠望できる範囲の山々に、マツが植えられていた

のです。すでに30年はたっていましたから、記念館からみえる山々はすっかり緑になり、またそれらのマツのこどもが自然に育ちつつありました。

「あなただったら、政治にしろ、行政にしろ、どのような方向にすすんでも、きっとえらくなるだろう。だけど、あの記念館が廃墟になってしまっているのに、周囲に植えられたマツはそういう変動にかかわりなく、緑を広げている。緑化のような地味なしごとは、将来のある若い人はあまり喜ばないだろうけど、とても重要なしごとであることはわかってほしい」と私は祁学峰にいったのです。

それが彼の印象に残ったのはたしかでしょう。それから何年かたって、べつの青年をこの活

動に引き込まうとしたとき、祁学峰は、「またあの平型関の話をするのか？」とって笑ったのです。

しかし、ドジョウは2匹はいませんでした。祁学峰によると、「おしょうを呼ぶには、寺が小さすぎる」そうです。くやしかったんですね。でも、そのときの彼女は、いまでも私たちの活動のもっとも深い理解者の1人です。祁学峰とのことは、機会を改めてまた書くことにします。

## NO. 17 混植を実現するまでの足取り 1999. 10. 25

この緑化協力活動を準備する段階で(1991年)、中国国家林業部の報告書のなかに、「中国の国土は広大なのに、南は闊葉杉＝コウヨウザン、北はポプラというたった2種類の樹木で緑化をすすめてきた」という反省が目につきました。北のポプラにはカミキリムシの害が広がっている、という指摘もありました。

出発にあたって相談にうかがった龍谷大学の中村尚司さんからは、「そのような活動にとって、循環性、多様性、関係性という3つがキーワードですよ」というアドバイスをうけてもいました。ですから、植える樹種に多様性をもたすこと、混植を実現することは、私たちにとって最初からの課題でした。でも、言うは易し、行うは難しです。

第1の困難は、適当な樹種が少ないことです。大同は1月の最低気温が零下20度以下ですが、実際に木を植える山地ではさらに低くなります。その反面で、夏の最高気温は35度を超え(ことしの夏は35度以上の日が連続しました)、けっこう暑いのです。

ですから、温度を必要とする樹木は冬の寒さで枯れてしまいます。北のほうの低温に耐える樹木は、小さいうちはいいようにみえても、夏の暑さでだんだん弱り、病虫害などにやられる危険性があります。

そのうえ、大同の農村はたいへん貧しく、余裕がありませんから、植える樹木がなんらかの



経済性を備えないと、農民の植樹の動機、積極性を引き出すことができません。こうした条件を備えた樹木はかんたんにはみつかりません。

第2の困難は、関係者が混植の必要性を認識していないことです。私たちが混植を主張したとき、「複数の樹種を植えると、おたがいに太陽光線を奪いあい、水を奪いあい、肥料分を奪いあうことに

**マツの育苗。植樹面積は大きく、たくさんの苗が必要になる**

なるから、よほど注意しないといけない」と応えた技術者もいました。自然の森林を目にしたことがなく、しかも自然条件の厳しさをいやというほど味わっていると、このような考えに陥るのかもしれませんが。農家の玄関に「戦天闘地」（天と戦い地と闘う）と書かれていたのも、根底において同じような考え方でしょう。

それから……、先日の建国 50 周年の天安門パレードを思い起こしてください。縦からみても、横からみても、斜めからみても、分列行進のように列がきちんとそろい、毎年伸びる高さがああ歩幅のようにそろっている、そういう植林が好きなようなんです。でも、それがいかに危険なんでしょうね。

転機となったのは、97年に、大同県の遇駕山はじめ、三北防護林＝緑の長城計画のモデル林で、モンゴリマツに枯れ死するものがでてきたことです。あわてて私たちは、数グループの日本の専門家を送り込みました。地元の技術者も含めて、林のなかを詳細に観察していると、このようなことがわかりました。

アブラマツにはマツノハマキガが発生しているが、モンゴリマツにはでていない。モンゴリマツにはハダニが発生しているが、アブラマツにはいない。そしてモンゴリマツとアブラマツが混じっているところは、どちらの虫も発生が少なく、さらに、あいだにポプラや沙棘（グミ科の灌木）が混じっているところは虫害の発生が少なく、マツの育ちもいい、というものです。

その効果があまりに劇的であることに、私たちもびっくりしました。もともとの植生が少ないために、ほかの樹木が混じると、混植の効果がきめんにでるようです。

地元の技術者も、そのことを自分たちの目で確認するなかで、混植の必要性を認識するようになってくれました。私たちの協力プロジェクトでは、98年春から、最大6種類の樹木を混植

するようになりました。

でも、活用できる樹種の数はその多くありません。霊丘自然植物園の構想が現地に受け入れられるようになったのは、そういう事情からです。なんらかの飛躍がもたらされるのは、問題が起こったときです。悪いことはいいことに変わる～そのことをわかってもらえるでしょうか。

## NO. 18 カウンターパートの訪日研修を終えて 1999. 11. 15

カウンターパートの緑色地球ネットワーク(中国語で「緑の地球ネットワーク」はこう表現します)大同事務所と環境林センターから、武春珍所長以下5名のメンバーを呼んで、10月28日から半月の予定で、技術研修をしていました。11月11日に彼らは離日しましたが、翌朝の電話によると、無事に大同に帰り着いたそうです。お世話になったみなさん、ありがとうございました。

黄土高原における私たちの緑化協力はまもなくまる8年になります。たんに木を植えるだけでなく、育苗や栽植の技術改善、人材の育成とネットワーク化などソフト面の協力を強く意識しだしてからでも5年になり、訪日団を迎えるのも3回目ですが、現場の技術者を呼んだのは今回が初めてです。

いくつかの近畿の山と植物園を訪ねたのですが、その専門家・技術者たちから、これまでとは明らかに異なる歓迎を受けました。たとえば、神戸市立森林植物園を訪れたときのこと。苗圃に案内されたとき、霊丘自然植物園の技術者・李向東はすぐに苗圃に指をつっこんで、土の状態を確かめました。それを目にした植物園の福本市好さんは、「さすがは現場の技術者ですね」と感心していました。しばらく前、立花吉茂代表からあずかったポット苗をこの植物園に届けたとき、福本さんがまったく同じようにしたのを、私は思い出しました。また李向東が「落



若い技術者・郭有権を指導する遠田先生

葉の時期の早い樹木は、寒い霊丘でも育つ可能性が高い」といって、それらの樹木の種子をほしがったとき、福本さんは「この人はとてもいいカンをしますよ」とほめました。

植物を育てるのがうまい人は、私たちの立花代表が典型ですが、仕事としてそれをしているというより、好きで好きでたまらない、といった人

が多いようです。そういう人たちの共感と連帯を今回は強く感じました。

環境林センターの技術者、郭有権は、かなり強いショックを受けたようです。日本滞在が残り少なくなるにつれて、「わからないことが、どんどん多くなる」といっていました。彼は環境林センターで花卉を担当していて、花や観葉植物が大好きです。栽培について、自信ももっていました。ところが立花さんの目からみると、大同で彼が栽培している花や観葉植物は、死んではいないまでも、とても健康とは言えないものだったようです。大同を訪れるたびに立花さんが、土の作り方、植え方などを細かく指導したので、小郭の栽培する植物も少しずつはよくなっていったのですが、彼には立花さんのいうことが根本のところまで理解できていなかったようです。心の底で彼は、「自分の栽培しているものもレベルにたっしているじゃないか。これよりいいものは大同中を探してもみつからない」くらいに思っていたらと思うのです。大同にかぎらず、北京あたりでも、中国の花卉には、なんとなくくすんだものが多いのも事実です。

今回、小郭は、植物園や園芸農家などの参観をつうじて、観葉植物の葉が本来どんな色艶をしているのか、花の輝きがどのようなものであるかを実感し、立花さんが要求していたことの意味を覚り、道の遠さを実感したようです。

そういうことからいうと、技術者たちをもっと早く呼んだほうがよかったような気もするのですが、その一方、たとえば2年前に同じような研修を実現したとして、今回ほどの収穫があったかどうか、おおいに疑問です。なぜなら、2年前に、中国側技術者と私たちとはこんな関係にあったのですから……。それは次回に書きます。



#### NO. 19 植え替えられた鉢 1999. 11. 17

「山林苗や果樹苗だけをつくっていたのでは、結果がでるまでに時間がかかって、なかなか技術が向上しない。花卉や観葉植物を栽培すれば勝負が速くなる」といって、環境林センターの原形を提案したのは立花吉茂代表でした。温室やビニールハウスもつくって、花や観葉植物の栽培がはじまりました。センターの花卉部の責任者が、先日、来日していた郭有権(ふだんは「小郭」と呼んでいます)です。

「あの土ではだめですよ。粒子が小さすぎて、根が窒息している。砂や軽石を加えて通気性をよくしないと、根が発達できない。植物の生長にとって、水や肥料が必要なことは誰でも知っているが、酸素

を必要としていることをつい忘れてしまうのです」と立花さんがなんども忠告しました。私はそのことを大同の技術者たちに繰り返し伝えたのですが、彼らは実行しようとしません。水不足に悩む現地では、砂や軽石を入れたりしたら、いよいよ乾燥して、すぐにでも枯れてしまうのではないかと、と恐れていたのです。

2年前の夏、立花さんが大同を訪れた機会に、私たちは実力行使にでました。彼らが温室で育てている観葉植物や花を、立花さんが配合した土で植え替えてもらうことにしたのです。彼らが自分たちの技術で栽培しているものと、立花さんが植え替えたものと、生長ぶりを比べてみれば、わかってもらえると思ったからです。そのとき小郭が、自分が大事に育てている植物を隠そうとしました。それを目にした私は、彼が隠したのをわざわざ引っ張り出してきて、立花さんに植え替えてもらいました。あとになって考えると、これが私の大失敗でした。

それから1か月半ほどたって、また大同に行きました。温室にはいってみると、せっかく立花さんが植え替えたものを、小郭はまたもとの土に植え替えていたのです。私はカンカンになって怒りましたが、怒ったからといってどうなるものでもありません。

当時のセンターの経理が、あとで私に話しました。「小郭は悪気があってそうしたんじゃない。彼がとても大切にしているものだったから、あんなに砂をいれて植えたら枯れてしまわないかと不安で不安でしかたがなかった。どんな教科書を調べても、そんなに砂を植えるように書いてあるものはなかった。どうしたらいいか、ほんとうに悩んでいたんだ」と。私のイタズラっけが問題を複雑にしてしまったのです。立花さんにも申しわけないことでした。

この土の問題は、植林の現場でも常に問題になります。地元の人たちは、穴を掘って苗を植えたあと、土をかぶせて水をかけ、足で固く踏み固めます。そうすることで保水性を高め、活着率を高くするといっています。もう少しくわしく書くと、彼らのやり方はこうです。穴は直径も深さもできるだけ大きく掘ります。果樹だったら直径×深さが70cm以上になります。固い土ですから、ほんとうにたいへんです。そのとき、腐植を含んだ表土と深いところの心土とが混じらないように注意します。また表面の乾いた土とその下の湿った土とも分けておきます。苗を植えるとき、直接根にあたる土は、腐植を含んで、しかも湿ったものを使うようにするのです。私たちの感覚からいったら、かなり深植えになるのですが、乾燥地ではそうすることが必要だと彼らはいいます。

ある程度、埋め戻したら、水をやり、その水が土中に浸透するのを待って、さらに少し土を  
かけます。水が浸透するのを待たずに土をかけたら、  
**自分で配合した土で、鉢植えの植物の植え** 水は上に吸い上げられ、蒸発して無駄になるという  
**替えを指導する立花先生** からです。そしてかけた土を固く踏み固めます。十分に踏んでおかないと、根と湿った土とを密着させることができないし、保水性もよくないというのです。そのうえに、パラパラッと粗い土をかけ、これは踏まないようにします。そうする

ことで毛細管現象を絶ち、水の蒸発を抑えるというのです。

どうです？ なかなかいねいなものでしょ。「日本とやり方はちがうけど、乾燥地ではこのようにするのがいいのかな」となにもわからなかったころの私は受け止めました。

まだ現地に行ったことのなかった立花さんに、植えているところのビデオをみせたら、それは「日干しレンガに木を植えるようなもので、根が窒息して枯れてしまう」といわれました。しかも、そのような植え方は、一般的な習慣としてあるだけでなく、技術マニュアルとして決められているようで、根は深いのです。

2年前の地元の技術者たちは、このような状態でしたから、たとえあの段階で日本に呼んだとしても、今回ほどの収穫はなかったことでしょう。この問題を解決する過程は、ちょっとしたドラマでした。それはまた次の機会に。

## NO. 20 災害は貧乏を狙い撃ちする 1999. 12. 2

私たちのカウンターパート、大同市青年連合会の祁学峰主席から先日、ファクスが届きました。読んでいて、ため息のするような内容でした。昨年の8月からの1年間の降水量が130mm



にとどまり、大同市の耕地35万haの57%にあたる20万haの畑で収穫はゼロだという見通しを、以前の通信にも書きました。ところがその後、事態はさらに悪い方向にいったようです。

これまでの経験からいっても、早魃の年は害虫の被害も発生しやすいので心配していたのですが、その予測が不幸にもあたって、イナゴが大発生しました。さらに早

### 早魃で実の入りの悪いトウモロコシ

霜や凍害もでて、7つある農業県の減産はじつに82%にも達したそうです。厳寒の冬に突入しているのですが、収穫がまったくなかった農民たちはどのようにしてしのいでいくのでしょうか。また来年の種子をどうするか、心配なことです。

そのうえ、11月1日には大同県と陽高県の県境で、マグニチュード5.6の地震が発生し、大同県冊田郷、陽高県友宰鎮を中心に、大きな被害をだしました。死者は十数人とどまったようですが、1万室以上の家屋が倒壊し、3.6万人が住居を失ったそうです。この地域は、89年と

91年にも地震があり、大きな被害をだしました。世界銀行の借款で再建がすすめられたのですが、今回の地震で、みな倒壊してしまいました。地震の規模は前2回より小さかったのに、受けた被害は大きかったようです。

95年9月の長雨のときも、ここは被害をだしました。地震で倒壊し、その後に新築した家は被害がなかったのですが、地震で亀裂のはいていた窯洞はひとたまりもなかったのです。

ことしの大旱魃も、今回の地震も、大きくは報道されなかったようです。救援活動も、地元を中心に、狭い範囲で取り組まれているだけのようです。北京の人たちも、私の話をきいてびっくりするくらいで、あまり知っていないようです。

昨年1月、河北省張家口市の張北県・尚義県で地震があったときは、北京が揺れたこともあって、大きく素早く報道されました。発生の翌日、被災地を見舞って帰る途中、反対車線は救援物資を積んだトラックが連なっていました。同行していた祁学峰はじめ大同事務所のメンバーが嘆いたことばを思い出します。「どうしてこの地震には、こんなにたくさんの救援があるんだ。大同の地震も同じくらいの規模だったのに、外からの救援はまったくといっていいほどなかった」。同じ嘆きを繰り返させてはいけないと思うのですが……。

でも、大同市青年連合会も、祁学峰主席も、嘆いているヒマもないほど忙しいようです。「ひとりの凍死者、餓死者も出さな」ということで、大同県の東閣老山村や渾源県の落子娃村に小麦粉、セメント、衣服、石炭などをつぎつぎと送り込んでいるそうです。「ものすごく忙しくて、身体は疲れているけど、精神状態はとてもいい。被災地区の農民が喜んでくれるのが力の源泉だ。役に立てることがとてもうれしい」と書いてきています。その気持ちはよくわかります。

#### 農村の子どもたちとアンズ苗を植える

私も12月16日から1週間ほど大同にいき、被災地を見舞うことにしています。なにが私たちにできるか、そのあとで考えたいと思っていますが、義援金を託してくださる方があれば、ありがたいです。

郵便振替 00940-2-128465 緑の地球ネットワーク

銀行口座 三和銀行阪急梅田北支店普通預金 5284852 緑の地球ネットワーク

よろしく願いいたします。

#### NO. 21 サクラの小苗が起こした「革命」 1999. 12. 03

土壌改良をめぐる問題のつづきです。私たちの協力拠点「地球環境林センター」の技術者たちが、「サクラの種子がほしい」といいだしたのは、1996年秋のことです。「無理をしてサクラなんていれなくていいよ。アンズの花とそう変わらない」といって、いったんは断ったのです

が、彼らは「中国っていうと、日本人はパンダを思うだろう。中国人にとって日本っていえばサクラなんだ」というのです。そうまでいわれると、断れません。秋田の干場憲三さんや北海道の嶋田光雄さんに頼んで、チシマザクラやオオヤマザクラの種子を集めてもらいました。その種を97年夏、センターで鉢の植え替えをしたとき、立花吉茂代表が蒔いておいたのです。

翌年の春、大同にいてみると、そのサクラがびっしりと発芽し、ザーッと数えて500本はありました。小さなポリポットに植え替えることにしました。芽生えたばかりのサクラは地上部が10cmほど、根の長さもそれくらいでした。センターの技術者たちは、根がとてもよく伸びていることに驚いたようです。私はべつのにびっくりしました。根が木炭クズや軽石をしっかりとつかんでいて、放そうとしないことです。技術者全員を集めて、私は「ほらみてみる、根は空気が好きだから、こうやって木炭や軽石にからんでいくのだ」といいました。

じつはその直前に、弱り切った観葉植物がほかの苗圃から持ち込まれてきていました。「根が腐ってしまってるよ」といって、鉢をひっくり返すと、満足に生きている根は1本もありません。そして、根が下に伸びないで、鉢の表面のところに浮いてきているのです。「あんたたちは植物に足がないことに感謝することだな。こういう通気性の悪い土だと、空気は表面にしかないから、苦しまぎれに根を上を伸ばしたんだ。もし足があったら、とっくの昔に逃げ出してるよ」などと、罵ったものです。

この2つのできごとをつうじて、技術者たちの自覚もずいぶん高まったようです。ドイツの政府開発援助(ODA)でつくられた研究所を訪ねたときのことで、たいいていの設備はドイツ製のりっぱなもので、遠田宏顧問などは「うわー、ツァイスの顕微鏡がある。現役時代にほしくてほしくてしかたがなかったけど、大学の予算では買えなかった」といっていました。

温室もビニールハウスもドイツから運ばれたものです。ところが私たちの技術者は、温室にはいるなり、鉢の土に手を伸ばして「セメントみたいな土だな。軽石や砂を加えないとだめだ



農村の子供たちとアンズの苗を植える

よ」といいました。ついこのあいだまでそれを理解せず、立花さんが換えた土を元に戻した技術者たちが、そういうのです。うれしくもあり、おかしくもあって、私は笑いをこらえるのに苦労しました。

立花さんは97年の夏、もう一つの実験を仕込みました。渾源县照壁村でアンズの苗木を植えたときのことで、そばに石炭ガラ

が捨ててあるのを目ざとくみつけて、スコップ 1 杯ずつ、植え穴の一角に加えさせたのです。全体の半分はそのようにし、半分は現地のやり方で植えました。

翌春、同じ場所にいったとき、バスが停まるなり、私は駆け出しました。これほどの結果がでるとは、私も予想していませんでした。石炭の燃えカスをたったスコップ 1 杯加えただけで、活着率は 90 パーセントを超えています。もう一方は 60 パーセントくらいしか着かず、生育にも大きな差があります。

そのことの意味をわかってもらうために、同行していた技術者を呼び集め、それぞれのグループから 1 本ずつ掘りあげて、根の状態を比較してみました。石炭ガラを加えたほうは太い根が石炭ガラまでまっすぐに伸びており、そうでないものに比べ、全体の根の発育もいいのがわかります。

カウンターパート・緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長は、そのようすをみるなり興奮して、「これまで何度も話としてはきいていたが、今日はその意味がわかった。これからは全部のプロジェクトでこのような植え方を採用する」といいだしました。ずいぶんと苦労しましたが、事態は前にむかってすすみだしたのです。

## NO. 22 ケンカのコツはケンカ上手が知る？ 1999. 12. 10

この黄土高原だよりを NGO 情報センター (<http://www.ngo.or.jp/ngostaff@ngo.or.jp>) が会員に転送してくださっていますが、そのメーリングリストに未知の方の発言がありました。この「黄土高原だより」を楽しみにされているようで、その理由の 1 つが私の「ほのぼのとした人柄の滲み出た文章が素敵……」とありました。えーっ！未知の方だからこのように書いてくださったのでしょうか、私を知っておられる方は、これを読んで、あきれ顔でしょう。

このあいだ、国際緑化推進センターの集まりのあとで、私が「NGO の人材養成をいわれるんだったら、だいじなのはケンカのやり方を教えることじゃないですか」なんてよけいなことを言ったら、みなさんの積極的な賛同があったのはいいのですが、「講師まで同時に決まりましたね～」なんて指さされる始末です。

でも、国際協力活動のなかでは、なかよくすることより、上手にケンカすることのほうが大切だというのが、私の実感なんです。人を罵ることは、とてもエネルギーを要しますし、傷つくのは自分です。なかよくしているほうが、居心地もいいし、ラクなんです。だけど、植林なら植林を成功させようと思えば、どうしてもケンカせざるをえない場面がでてきます。そのとき私は、やめるんだったら黙ってやめたらいい、でもこの協力事業をつづけるんだたら言うしかない、と自分の気持ちを励ましてきました。

この活動をはじめて2年めのころ、私の四半世紀以上の友人で、大同まできて通訳してくれていた王黎傑が、「もう半年以上もまえに高見が自分のことを人間じゃないと非難したとあって、劉懷光(祁学峰の前のカウンターパートの責任者)がこだわってますよ。高見とはつきあいが長いけど、そんなことをいうはずがないと私は答えたけど…」と私に伝えました。

私もまったく覚えがありませんでした。わかったことは、なにかうまくいかなかったとき、私がつい、「チクショー」と小声でいったのを、通訳が劉懷光に「人間でないといってる」と伝



えたようなのです。たしかに「畜生」は「人間じゃない」ですね。信頼関係ができるまでのあいだは、ちょっとしたことで変なふうに発展してしまうのです。

そんなこともあって、最初の4年間、私は徹底してしんぼうしました。悪い面はみないで、いいところだけみようと努力しました。自分の思いを率直にいいだしたのは5年目の春からです。そのき

**仲良くしてばかりいられないときも出てきます**

っかけを私はいまでも鮮明に覚えていますし、祁学峰も「あのときから高見は変わった」といって懐かしそうに話します。

歴史も文化もちがうところでは、言葉にして言っても通じないことがあります。それなのに、口にしないで、通じることができるでしょうか。私が率直に自分の思うところを口にしないで、むこうの対応も、より率直なものになったと思います。ある段階から、そのような転換が必要だったと思います。

若いころの私は、ケンカや論争になると、勝とう、勝とうとしていました。でも、理想的に言えば、負けた、負けたと頭をかきながら、目的だけはちゃんと果たすというのがいいケンカでしょうね。私なんかはその域にたつるのは、いったん死んで生まれ変わってからのことでしょうが……。

こんなことを私がいっていると、大同の連中は、「なにもわからなかった高見を、自分たちが引き込んで、あそこまでにしてやったんだ」といっていることでしょう。それでいいんでしょう。関係をもつということは、おたがいが変わっていくってことでしょうから。

## NO. 23 酒のしくじり 1999. 12. 15

ちょうど8年前、私たちの協力地が山西省大同市に決まりそうだとわかったとき、中国研究が専門の友人たちが心配して連絡してきました。「短期間の地域研究だって山西省は敬遠されてるよ。あそこにしばらくいたら、まちがいなく肝臓をやられてしまう」というのです。92年1月、最初に大同、太原に回って、その意味がわかりました。当時は54度ほどあった白酒(パイチュー=コーリャンなどからつくった蒸留酒)の「ガンベ〜イ!(乾杯)」をえんえんと繰り返すのです。

中国の習慣(都会では急激に変わりつつあります)では、「酒とタバコは分かちあうもの」で、食卓で自分だけが杯を傾けるのは、座にたいして失礼なことです。自分が呑みたくになったら、周囲の人に乾杯を呼びかけ、道づれをつくるのです。「ガンベ〜イ!」といってクイツと杯をあけ、杯の底を相手にみせれば、なんの問題もありません。でも、多少でも残っていれば、「半信半疑だ!」といって、詰め寄られます。「誠心誠意」であることを、まずは「ガンベ〜イ!」によって証明しないとイケないのです。

初期のワーキングツアーに参加した何名かのメンバーは、それによって、「半死半生」の状態に陥りました。名前をあげたら悪いかな? ある女子大学生はちょっと酒を飲めただけに集中攻撃を受け、帰りのバスに乗ったとたん意識を失い、崩れ落ちてしまいました。雲崗の石窟の見学をパスし、夕食をパスし、夜11時すぎの列車に乗るときも意識がありませんでした。同窓のKくんがおそろおそろ担ぎ上げて、寝台車に運びあげたのです。

でも近年は、そういうことはほとんどなくなりました。その功績は私こと高見にあります。なんて、自慢してもいいのかな? 94年春のことです。小学校果樹園づくりの相談で、渾源县照壁村を訪れました。私は中国語を話せないのに、このときも通訳はいませんでした。引退したばかりの党書記の家に入るとき、恐ろしい勢いで吠えかかる猛犬をあるじが抱きしめ、その背中の狭い隙間をとおって、私はオンドルに上がりました。

ことばが通じないときの頼りになる通訳が酒です。「ガンベ〜イ!」にあわせて杯を空にすると、同席している農民たちもいい顔で笑ってくれます。ついつい、「ガンベ〜イ!」の回数が増えるわけですよ。

立ち上がったときの私はすっかりできあがっていました。で、帰るとき、あの番犬に近づくと、近よるだけでなく抱き上げて、振り回してしまったのです。そして「犬はおれの老朋友だ!」

などと叫んだのですね。そこにいた人たちは、私がいつ噛みつかれるか、肝をつぶしました。(犬を手なづける方法を私は勉強しています。泥棒のためじゃないんですよ!)でも、抱き上げたのが犬でよかった。若い娘だったりしたら、たいへんだったでしょう。



ところで、この照壁村のプロジェクトは、その家のあるじがしっかり管理してくれたおかげで、アンズがりっぱに育てて最初の成功例になりました。テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」シリーズの「黄色い大地に生きる～緑の長城計画 7000 キロ」のラストの場面で、子どもたちや私といっしょに手をつないでいるの

抱いたのはこの犬ではありませんけど…

が彼です。あの取材のとき、私は感きわまって、泣き出してしまいました。

この「犬事件」以来、私が酒を飲みだすと、大同のカウンターパートは、「だいじょうぶか? 気をつけろ」といって全体をセーブします。それがワーキングツアーに及んで、以前のようなリスクがなくなってきたんですね。それを寂しいと思われるかたは、こっそりと私に申し出てください。特別の配慮をいたします。明日からまた中国です。

## NO. 24 災害は貧乏を狙い撃ちする(2) 1999. 12. 20

3 日前から中国山西省大同市の農村にきています。北緯 40 度で秋田、岩手とほぼ同じ緯度、海拔が 1,000m 以上ありますから、なかなかの寒さです。今回の目的の 1 つは、11 月 1 日の地震の被災地を見舞うことでした。陽高県友宰鎮西団堡村と大同県の冊田郷を昨日、訪れたのですが、最低気温がマイナス 24 度、最高気温がマイナス 12 度でした。乾燥しているので、太陽が出ていて風がなければ、そんなに寒くは感じないはずの温度ですが、昨日は北西の風が強く、ビデオカメラをもつ手がたちまちかじかんできました。充電したばかりのバッテリーが、低温のために急速に減っていくのには驚きます。

2 つの村とも、予想していたよりは外観の被害は軽微です。何号かまえの「黄土高原だより」に「死者が十数名」と書きましたが、あれはまちがいでした。記事の大部分は大同市青年連合会主席、祁学峰からのファクスによったのですが、「死者がでた」ということは通訳の王萍に電話で聞いたのです。それは彼女の勘がいで、不幸中の幸いで、死者はありませんでした。

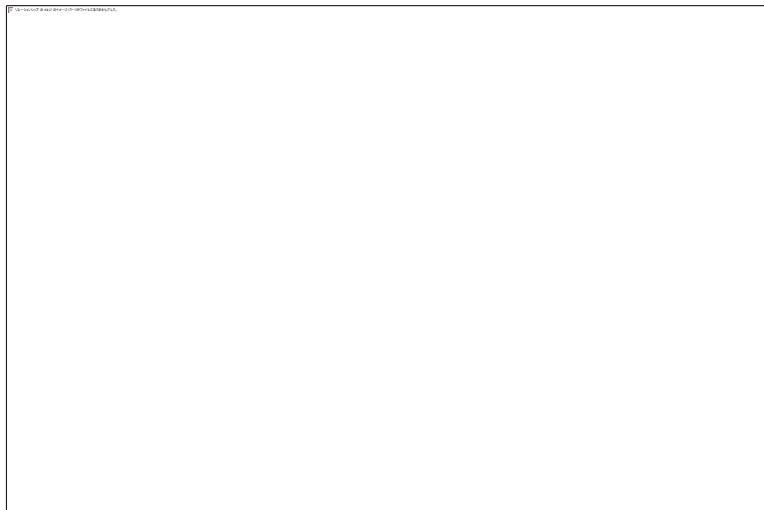
完全に倒壊したのは、ごく一部に残っている古い土づくりのヤオトン(窑洞)だけで、大部分の住居は、屋根のカワラがずり落ちたりしているくらいで、ふつうと大きな変わりはありません

ん。だからといって、被害が軽かった、というわけではないのです。なかにはいってみると、レンガ建ての住居の四隅に亀裂がはいって、危なくて住めない状態です。日本の木造建築とちがって、こういう状態になったら、修復は不可能なようです。ほとんど全部が9年ほどまえに、いっせいに新築された規格の住宅です。

今回とまったく同じところを震源として89年10月にマグニチュード6.2の地震(大陽地震)があり、それまでの住居は大部分が倒壊し、死者もでました。91年にも同じ範囲でマグニチュード5.8の地震があり、また被害をだしました。

いまの住居は、世界銀行の借款を、農家がまた借りして建てたものです。1軒あたり5,000~7,000元くらいかけ、借款の条件にしたがって、在来のものよりは頑健に建てられました。ところが今回の地震によって、13年間の返済を終えないうちに、壊れてしまったのです。以前のような土の窯洞なら、かなりの数の死者がでたかもしれません。新築のレンガ建てであったために、人命の被害はありませんでした。繰り返しますが、不幸中の幸いでした。しかし、経済的な被害は、以前の何倍にも膨らんでいます。

農家を訪れると、急ごしらえの避難小屋が前庭に建てられています。黄土を練って、レンガを積み上げたもので、人がやっと立って入れる高さです。中にはせまいながらもオンドルがつくられ、古新聞や美人女優のカレンダーが壁に貼られています。小屋の横には、テントが張ら



れています。地震の直後移りました。本震のあと1,000回の余震がつづいており、揺れの激しいときはテントに戻るそうです。

95年の阪神大震災で、私の家は半壊で、そのあとかなりの期間、救援活動に参加しました。その体験から考えても、中国のこの地方の農民は強健で、災害慣れしているといっていでしょう。誤解を恐れずにいえば、

#### 被災地に配布されたテントと食糧

「ふだん低いところで生きている人は、転げ落ちて痛みが軽い」のです。日本なら精神的後遺傷害が問題になる状況で、子どもたちがニコニコと笑っています。

ところが今回、村を回るあいだ、「前回の世界銀行の借款を返せそうにない。どうなるのだろうか?」と、何人も、何人もの人から聞かれました。今回のタイトルを「災害は貧困を狙い撃ちする」の続編としました。震源地のたいていの村は、この10年間に8回の自然災害に見舞わ

れ、食べるものに困る状態です。というふうにも書いても、私たちいまの日本人には想像もつかないでしょう。次回で、その状況をもう少し具体的に書きます。

驚くのは、その状態にある人びとが「借金を返せそうにない、どうしたらいいんだろうか？」と不安に思っていることです。世界でも有数の豊かな国の日本で、借金を苦しんで自殺する人が多いことの意味を、いまさらながらに考えさせられてしまいます。

## NO. 25 災害は貧乏を狙い撃ちする(3) 1999. 12. 21

自然災害は恐ろしいのですが、もっと恐ろしいのは、自然災害が連続することです。この地方の農民は、いい年にめぐりあい、収穫が多くても、その年に食べ尽くすようなことはしません。凶作に備えて、食糧の貯蔵を怠らないのです。ですから、ひどい自然災害にあっても、それが1年だけなら、なんとか持ちこたえることができます。2年、3年とつづくと、事態は深刻になります。

私は92年からここを訪れるようになりましたが、全体の印象では、92年、93年は軽い旱魃、94年は比較的恵まれ、95年は最悪、96年が豊作で、97年はひどい旱魃、98年は豊作、ことし99年は最悪の年、というふうに思っていました。幸いなことに、災害が連続していないのです。

ところが、今回、地震の震源になったところは、98年も雨が降らず、そのうえイナゴの被害がありました。自然災害が3年つづいたわけです。農家を回って残っている食糧を見せてもらいました。ジャガイモは麻袋の底にわずかに残っているだけです。1個1個が極端に小さく、手のひらに10個以上も並んでしまいます。アワ、キビはまったく収穫できなかった家が大部分でした。

多少でも残っているのはトウモロコシですが、これもよくありません。実の丈が10~15cmと

小さいうえに、粒が欠けているものが多いのです。その家の人に頼んで、大きさがわかるように手にもってもらってビデオと写真を撮影したのですが、いちばんいいものを選ぼうとするところに、農民の気持ちを思いました。西団堡村の1人あたりの年間収入は150元(約2,000円)だそうです。

軒下に直径10cmほどの灰黒色の

ジャガイモからデンプンを搾ったあとの団子

タドンのようなものが干してあります。私は、燃料にするのだらうと思いました。聞いてみると、ジャガイモからデンプンをとったあとのカスで、ふつうなら捨てるのだけど、春節(旧正月)を越したあたりから、トウモロコシの粉に混ぜて食べるのだそうです。この地方のお年寄りから、ニガナやウマゴヤシの根、木の皮まで食べて、飢饉を生き延びた経験をきいたことがあります。そのころに比べれば、ずっとラクなのでしょうが、ラクだなんて、私が口にするのではないでしょう。

政府からは救済食糧が配られていました。1人あたり15kgのトウモロコシで、1日500gが標準になっているそうです。自分の家で収穫したものよりずっと品質がいい、と村の人たちは話しています。

被害を受けた農家の土塀に、「地震無情人有情」と石灰で大書してありました。「一方に災害あれば八方に助けあり」とも書かれています。緑色地球ネットワーク大同事務所のメンバーは、98年1月の河北省張家口市での地震の翌日、私と一しょに被災地を見舞いました。帰りの道路の反対車線は救援物資を積んだトラックで渋滞していたのを、もちろん覚えています。

今回、救援はもちろんあったけど多くはなかった、と彼らはいいます。大同は石炭の街です。中国の経済が停滞に向かい、それと同時に石炭から石油、天然ガスへのエネルギーの転換がすすんでいるために、街全体が深刻な不況に襲われています。そのようななかで、外部からの救援はほとんどなかったのです。省内を除いて報道されなかったのですから、当然でしょう。地震の規模が比較的小さかったこと、死者がなかったことも影響しているでしょう。

前回、ここは10年間に8つの自然災害に襲われたと書きました。地震が3回、ひどい旱魃が3回、水害が1回、イナゴの害が1回です。とくにこの3年、自然災害が連続して、食べ物もないところに地震がきたのです。そして最高気温がマイナス12度といった寒さです。自然災害は貧乏なところを狙い撃ちする、というのが私の実感です。マカオ返還の晴れやかなセレモニーをテレビでみながら、その思いを深くしました。

## NO. 26 災害は貧乏を狙い撃ちする(4) 1999. 12. 24

昨日、北京を経由して大同から帰ってきました。大同の地震のことをもう1回書かせてください。

陽高県友宰鎮西団堡村で最後に行ったのは、村の中学校でした。レンガづくりをモルタルで仕上げた2階建てですが、この地方の農村で、こんなにっばな学校をみたのははじめてです。前の校舎が前回の地震で倒壊し、そのあと再建したのだそうです。たしかめはしませんでした。住居と同じように、世界銀行の借款のまた借りて建てられたのかもしれない。

ところが、この学校が使用不能におちいつています。1階から2階に上がる階段の踊り場にかけられた「雷鋒に学ぼう！」という毛沢東の書の額が斜めに傾き、その後ろの壁に亀裂がはいっています。2階のいくつかの教室をのぞいたのですが、南北の壁の四隅が砕け、そこからX字型に亀裂がはいっています。壊れ方は、阪神大震災で半壊になった私の自宅とよく似ています。

被災地を回った12月20日はマカオ返還の日で、土曜日です。本来なら休日のはずですが、被災で後れたぶんを取り戻そうと、この中学校はきょうも授業があります。校舎の奥の空き地



に、テント村ができていました。濃いブルーのキルティング地の大きめのテントを横に3つつなげて、教室として使っていました。中国でも都会の中学生は子どもっぽいのですが、農村の中学生は、からだの大きさはともかく、表情に大人びたところがあります。いまは変わったかもしれませんが、中国の都市では6歳で小学校に入学し、農村では数年

#### 農村の子供たち（被災地とは別の村です）

年の8歳で入学したのだと思います。たった1~2歳で、大きく変わるはずがありませんが、団塊の世代の私たちが、中学校の3年ごろにはけっこう大人びていて、同級生や先生と議論をたたくかわしていたことを思い出します。

話は前後しますが、最初に鎮政府を訪れたとき、みなさんから預かってきた義援金、日本円28万円を関係者に手渡し、感謝の気持ちを表した中国式の赤旗と領収証を受け取ってきました（大阪の事務所には壁に余裕がないので、カウンターパートの新しい事務所においてきました）。1クラスの中学生のまえで、そのことが紹介されました。生徒たちはさかんに拍手しながら、まっ正面から私を直視します。こわいのはこの眼です……。私はたちまちつかまってしまいます。

「ひとことあいさつしてもいいですか？」と断ってから、私は話しはじめました。「1995年1月、私の家の付近で大きな地震があり、私の家も半壊になり、近所でもたくさんの方が亡くなりました。その直後から、生き埋めになった近所の人たちの救出作業に参加し、そのあとみなさんと同じような年齢の中学生、高校生、大学生とチームを組んで、激震地での救援活動にとりくみました……」。芦屋市学生青年救援隊の人たちとの懐かしい思い出です。

私はクールな人間だと自分で思っています。度胸だって多少はあるのです。エライ人たちに

食ってかかることもありますし、人前で話すことだってやろうと思えばできます。ところがこのとき、たちまち私は腰がぐちゃぐちゃになりました。声が湿り、目がかすんで学生の顔も曇ってきたのです。これではいけません。「みなさんもいまはつらいでしょうが、この経験は将来かならず生きるにちがいありません。がんばってください」といって締めくくることがやっとでした。

みつからないようにソーッと目の周りを拭いて、ビデオカメラによる撮影に切り替えたのですが、ファインダーの画像がかすんで、教室のようすがとらえられません。涙目でファインダーがくもっているだけではないのです。寒い屋外からテントにはいり、レンズが結露してしまいました。ペーパーで拭いても、落ちません。外気でカメラが冷やされていたために、レンズについた露がすぐに凍ってしまったのです。

大同県と陽高県の県境で、かなりの学校が、同じようにつぶれています。この通信になんどもなく登場した大同市青年連合会の祁学峰主席(共青团大同市委員会書記、大同市人民代表大会委員を兼務)によると、被災地に比較的大きな規模の学校2つを40万元(1元=13円)で再建できるのだそうです。

帰りの北京で私は日本大使館の杉本信行公使を訪ねました。撮影してきたばかりのビデオをみてもらい、10年のうちに8度の自然災害に直面した村のようすを話しました。杉本公使は(この人がまた、50歳なんですね)、草の根無償資金の関係で今年の春以降、中国の貧困地域の現場を歩いてきたそうで、中国の貧富の差に憤りを感じています。そのような話題はずいぶんとはずみませんでした。

被災地の学校再建に草の根無償資金の応援をえられないものか、頼んでみました。杉本さんの返事は積極的なものでした。大同市青年連合会の名義で祁学峰のほうから申請してもらおうと思います。

私としては、このような協力も、お金を生かすこともできるし、死んだ使い方になることもあると思っています。要はタイミングです。来年の春節(旧正月)は節目でしょう。年の初めにいいことがあれば、被災地の人たちも気持ちを明るくし、孤立感を払拭することができます。制度上、400万円(日本円)までなら、大使館の裁量で速やかに決定できるそうです。不足分の120万円ほどを早急に集めて、その決定を待ちたいと思います。協力いただける方はよろしくお願ひいたします。

郵便振替 00940-2-128465 緑の地球ネットワーク  
銀行口座 三和銀行阪急梅田北支店普通預金 5284852 緑の地球ネットワーク  
よろしくお願ひいたします。

## 【2000年】協力拠点の建設と運営がすすむ

大同における緑化協力の特徴のひとつに技術改善と人材の育成などソフト面の協力がありました。そのための拠点として、環境林センター（1995年、南郊区平旺村）、霊丘自然植物園（1999年、霊丘県上寨鎮）、実験林場カササギの森（2001年、大同県聚楽郷）などを建設しました。2000年には当初、3.3haでスタートした環境林センターを思いもかけぬ事情で20haにまで拡大することになったのです。

### NO. 27 悪いこともいいことに変わる(変えうる) 2000.01.13

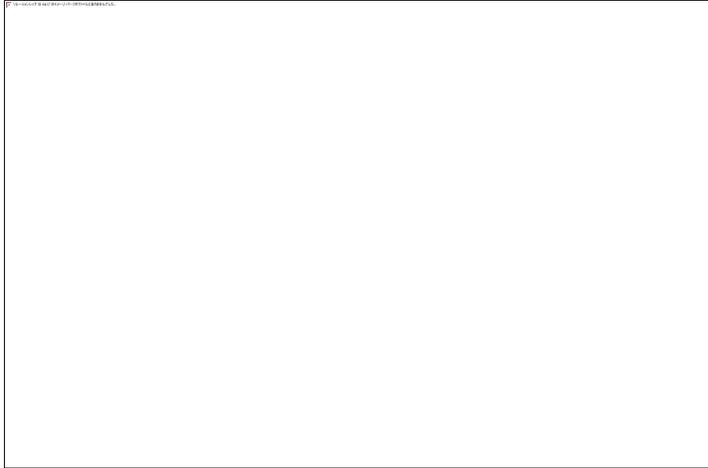
この通信のNO. 27用にべつ原稿を用意していたのですが、急に差し替えることにしました。大同の地震被災地を昨年末に回ったあと、なにかできることはないかと考えつづけていました。

ふと思い出したことがあります。私は98年1月に河北省張家口市で地震があったとき、震源から80kmの大同市天鎮県にいたので、翌朝さっそく張家口市張北県を訪れ、市長本人の特別許可をもらって、激震地を訪ねました。祁学峰、武春珍以下、カウンターパートの主だったメンバーが同行していました。

肩すかしのようで申しわけないのですが、そういう記憶の回路をたどって、私は張家口を訪れる2日前にいった、渾源県温庄郷のある村のことを思い出したのです。いつものように、その村の統計資料をみせてもらいながら、私はいろんなことをしつこく聞いていました。そのなかで気づいたのは、前年のジャガイモの収穫高が飛躍的に伸びていることです。理由をきくと、その前の年、この一帯は自然災害でジャガイモがまったく収穫できず、種イモもなくなったため、省の農業試験所から改良種を導入したところ、何倍にも収穫が増えたということでした。

一帯の貧しい農村では、ジャガイモにしろ、その他の穀物にしろ、自家採取の種をつかうのがふつうです。種子は買えばけっこう高いし、新しいものを導入して失敗することを農民は恐れるからです。自然条件に恵まれないこの地方では、旧来のやり方で失敗したら「しかたがない」ということになり、新しいことで失敗したら「あんなことをしたからだ」ということになります。農村育ちの私には、そのあたりの事情が感覚的にわかります。

ところが、そうやって何代、何十代にもわたって自家採種してきたジャガイモや穀物は、品種が劣化しているばあいが多いのです。しろうとの私の目でみても、ジャガイモのなかにはウイルス病をもったものがあります。先にあげた渾源县温庄郷の例は、それまで栽培されていた種が劣化していたところに、改良種がもちこまれて、驚くような結果がでたのでしょうか。悪いこともいいこと变为るのです。変えることができるのです。



そういう事情は、私たちの立花吉茂代表も、遠田宏顧問も先刻ご承知です。私が「被災地の救援のためにジャガイモその他の改良種の種子を配ったらどうかと思っているのですが……」とお伺いをたてたら、即座に「大賛成ですよ。やるべきです」という返事があり、たくさんのアドバイスが同時に返ってきました。

豊作のアワ（文章と直接の関係はありません）

私たちの提案をファクスで大同に送ったら、大同市青年連合会の祁学峰主席、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長から「自分たちも望んでいた提案です。種子は高寒作物研究所に適当なものがあります。費用の面に制約があれば、大同県国営苗圃でジャガイモの育種をし、来年、農村に種イモを配るという手段もあります」といって、具体的で詳細な計画が返ってきました。

98年1月に渾源县温庄郷の調査をしたとき、祁学峰、武春珍の2人もいっしょでした。チラッと書いただけで、すべてを了解し、あちこちの研究所と交渉し、乏しい資金をどのようににかせるかを、検討してくれたのでしょうか。いや、そうじゃなくて、彼らがいろいろ検討しているところに、私たちが飛び込んだのかもしれない。反応の速さからいえば、その可能性があります。

みんなの気持ちが、ピッタリ重なっているとき、このプロジェクトはきっと成功するだろうと思います。みなさんのご参加、ご協力をおねがいたします。

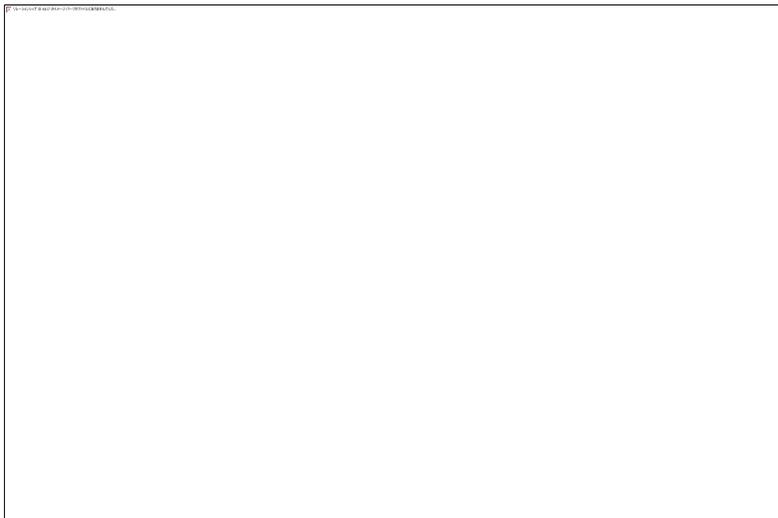
## NO. 28 「水を分母にした生産指数」 2000. 01. 14

2000年だからというだけじゃないんでしょうけど、お正月のテレビ・ラジオ・新聞に、環境モノが多かったですね。とくにめだったのが、水問題だったと思います。それも地球規模の水不足の問題です。NHK ラジオ第1放送は三が日連続で2時間ずつやったようです。ちゃんとは

聞けませんでした。テレビも同様でした。黄河断流の場面は印象的だったようで、私のところにメールをくださったかたもあります。

活躍していたのが、ワールドウォッチ研究所のレスター・R・ブラウン所長です。私はかなり以前から、彼のファンで、ずいぶん本も読んでいます。

97年の12月、京都での温暖化防止国際会議の直前に、彼の講演会が神戸で開催されました。事務局の全員に加えて、世話人の方たちも誘って出席しました。カッコいいですね、長身をスキッとスーツで覆って、しかも足下はスニーカーでした。



話の中心になったのは、中国の環境問題でした。中国には、世界の環境問題が凝縮されているのです。彼の著書『誰が中国を養うのか?』の要約のような話でした。あの本は、中国で激しい反発を招きましたが、同時に農業や環境の問題を考える種を蒔いたのだと私は思っています。

地下水によって灌漑をすれば収穫は飛躍的にふえるが…

ブラウン氏の講演のあと、質問の時間があつたのを幸い、私は手を挙げて、「中国の中緯度地方の農業の制約要因は、土地よりは水です。世界的にもそのようにいえる地方は少なくありません。水を分母においた生産の指標が必要だと思うのですが、いかがでしょうか?」といった質問をしました。前段として、私たちが黄土高原ですすめている緑化協力も紹介したのです。

ブラウンさんは、「とてもだいじな問題です。しかしいまわかっているのは、1トンの穀物を生産するのに平均1,000トンの水が必要だということだけです。いま、私は、日本のNGOが中国の内陸部の農村で緑化に協力していることを知り、とても感動しました」といって、中国における緑化の意味を、彼の言葉で話してくれました。それはうれしかったけれども、水問題への解答に不満が残ったのも事実です。

この号の通信を書くことにしたのは、今朝の朝日新聞(1月14日、大阪版)に「水が世界を脅かす」という記事が載り、その冒頭にブラウンさんの話が載っていたからです。「ワシントン=辻篤子」として、「ブラウン所長は、『水の生産性』という新しい概念で農業から工業、生活までを見直すことを提案する」とありました。その前段には、「穀物1トンを生産するために水は1000トン必要とされる」とも書かれています。うれしいですね。そういう壮大な試みが動き出すのは。

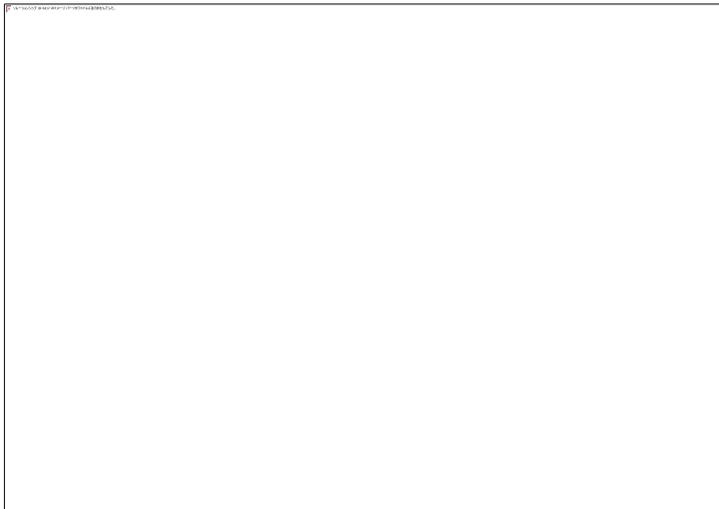
しばらく以前に「日本の常識は世界の非常識、世界の常識は日本の非常識」なんてことばが流行ったことがあります(一部だけかな?)、水問題こそ、その最たるものだと思います。日本のジャーナリズムにも、たんなる一過性の問題としてでなく、ずっと追いかけてもらいたいものです。水の塊である穀物を、水に恵まれた日本が輸入することの意味も、そのなかではつきりすると思います。

## NO. 29 得ることと失うことと 2000. 01. 18

ワーキングツアーに参加する若い人たちが、黄土高原の貧しい農村を訪れたあと、私に話しかけてきました。「貧しいとか、豊かだとかって、どういうことなんですかね。貧しいって村の人たちが、いちばん笑顔がすてきで、表情も豊かなんですよ。人間らしいっていうか……。県城あたりに帰ってきて、商売とかやってるところにくると、表情が濁ってくる。大同とか、北京とか、かなりトゲトゲしい感じがするんですよ。その先に大阪が待っていると思うと、帰るのがイヤになりますけどね……」

初期のころからなんども大同に通った看護婦のNさんは、話していました。「いまの職場で休暇をまとめてとるのって、むずかしいんですよ。残業をしたり、ほかの人の日曜出勤を替わったりしておいて、ツアーのときにまとめて休みをもらうんですよ。でも、ここの人たちに出会ったのがいちばんのストレス解消なんですよ。だから楽しみにして、自分のためになるんです。でも、日本であくせく働いて、ここに1週間ほどくるのを楽しみにしている私と、一年中、ここで生活している人たちと、どっちが幸せだろう、なんて思うこともあるんですよ。」

旅行者として通り過ぎるだけでは、村の人たちの苦労や悩みがわかるわけではないのですが、



村のなかでの人と人とのつながりは深い

それでも、その人たちが感じたことには、根拠があるだろうと思います。物質的にはここまで豊かになった日本の私たちは、その過程でなにかを失ったのではないかと。得ることは失うことではないかと。私は長いあいだ、そのことを考えつづけています。

中京大学教授・河宮信郎さんから、10年以上も前にきいた話がいまも私の頭に残っています。(記憶がまちがっていたらごめんなさい)。現代の都市文明を構成している要素

の大部分はバイオマスである。化石燃料がそうであるのはいうまでもない。セメントの原料となる石灰岩は、ある種の生物が殻や骨格を残したものだ。水溶性の鉄を不溶性に変えたのはバクテリアであり、そうでなかったら人類は鉄を利用できなかった。

現代都市を構成する代表的な物質、鉄、セメント、化石燃料は何億年もかけて生物がつくりだしたものである。人類がそれを利用しているのは、生産ではなく消費であり、効率がよくてあたりまえだが、やがてそれはなくなる。核の利用は、原理的にまったく異なった技術であり、放射能を閉じこめるのは基本的に無理である。というものでした。

京都精華大学教授の植田勲さんからは、こんな話を聞きました。このあいだまでは、子どもが熱をだせば、親が抱きかかえて温め、自然に回復するのを待つしかなかった。いまは抗生物質や解熱剤を飲ませれば、そういう問題は解決する。しかし、そのことによって、以前のような親子の絆は失われたのではないか。というのです。

私のいちばん早い記憶は、父親にだかれて医者のもとに何キロか走るときのものです(このころの「走る」とは、足で走ることです)。「くんちゃん(私の呼び名です)、しっかりな！」と、呪文のように父親はくりかえしていたようです。一年先に生まれた兄が、生まれてまもなく死んだために、3男の私もそのような扱いを受けました。そのぶん、私が親孝行になったかどうかは別問題です。

なにかをうるということは、なにかを失っているということです。うるものはすぐにわかりますが、失っていることは、たいていはすべてなくなるまで自覚されません。すべて失ってしまうころには、存在していたことすら、忘れられているのがふつうなのです。

人間というのは、悲しい生き物だと、つくづく思います。大同の農村の例でみてきたように、井戸を掘って灌漑することで、旱魃の害を逃れ、食糧生産を確保できるとすれば、井戸を掘るのがふつうでしょう。その陰で、目にみえない深いところの地下水がなくなっていることに、思いをいたすことはないのです。環境問題というのは、たぶん、ここから発生しているでしょう。うることと失うことは同時に進行しているのに、うることはすぐにわかり、失っていることはなかなかわからないのです。

もともと私は、環境問題は産業革命以後の工業化の所産だと思っていました。ところが大同に通うようになり、4世紀末、ここに北魏の都がおかれ、5世紀には早くも100万都市となり(平城京)、その1500年後の姿が、大同とその周囲の農村であることを知りました。文明をもったとたん人類は、地球の生態系にとってのガン細胞に変わったのだ、と思うようになったのです。それにたいし、「ガン細胞にだって生きる権利がある」と大学の同級生に反論されたことがあります。そのとおりです。しかし、宿主である地球の生態系を超えて、私たち人類は生きていくことはできないのです。

## NO. 30 黄土高原だよりの舞台裏 2000. 01. 27

ああっ、忙しい、忙しい、忙しい！ なにが忙しいか、ですって？ この時期、私たちは来年度の資金を集めるために、フル回転をしないとイケません。このころに集中するいろいろな助成金を申請するために、ちょっと早いのですが、今年度の事業報告書や収支決算の「見込み」をつくらないとイケません。あわせて、来年度の事業計画、収支予算の「案」もつくる必要があります。ことし、とくにプレッシャーになっているのは、「中国黄土高原における緑化の可能性調査」という委託事業をうけ、その報告書づくりが最終段階だからです。

とにかく私たちのネットワークの運営は、ずっと綱渡りなのです。中国の環境問題が注目を浴びようになり、さまざまな動きがはじまりましたが、アドバルーンが先にあがり、実際の動きが遅れたために、99年度の資金調達はズタズタになってしまいました。「〇〇が乗り出さんでしょ、▽▽が始まるんでしょ、おたくなんか、そちらの支援があるでしょうから、私たちをあてにしないでください」なんて、あちこちでいわれてしまいました。で、私は、小淵首相の秘書官の北村さんに、「ほんとに困ってますよ」って電話をかけたくらいです。



高見が最初に植えたマツ。この場所にはべつの施設ができた。

安定したところで働いている人は、零細 NGO の苦勞なんて、わからないでしょうね。人件費はタダ、場所はタダ、という感覚なのですが、私たちはその確保にいちばん苦勞します。いまいる4人の専従の人件費(雇用者負担の保険料などすべて含めて)が1,000万に足りないんです。それでも日本の環境 NGO のなかでは、恵まれているほうでしょう。

その貧乏さが役立っていることはあるんですよ。昨年10月から11月にかけて、大同のカウンターパートの技術者たちを研修のために日本に呼びました。国際緑化推進センターの助成で可能になりました。通訳以外は、国外は初めてです。ついこのあいだまで北京にもでたことのない人がいます。ファミレスのエビフライを食べながら、「エビを食べたのは初めてだ」と言いました。そのメンバーが私たちの事務所にきて、びっくりしたんです。「大同でみると、緑の地球ネットワークは大きくみえる。でも、こんな狭い、汚い(よけいなことだ!)事務所ですごとをしているの

か」というのです。通訳の王萍は「事務局長の高見のイスに座ってみたい」なんていったのですが、私に定まったイスがなく、あいているパソコンの前を移動してると知って、とまどっていました。

「こういう状態で協力してくれているのだから、1元たりともムダにはできない」と彼らはいいます。最初に大同にいったころ私は、「公費できているのか、私費できているのか？」とまっ先にきかれたものです。

劇作家の山崎正和さんが、新聞のコラムに書いていたのを、忘れることができません。「日本の演劇活動は、10のうちの7までが資金集めの苦勞で、2が内部のゴタゴタ治め、残る1が芸術活動だ」という意味のことです。最後の「芸術活動」を「国際協力」に置き換えると、私たちの実態でしょう。

「そんなおまえが、どうしてのんびりと『黄土高原だより』なんか書いているんだ？」といわれそうです。でも、これは息抜きなんです。しごとを終えて、夜おそく帰ってきて、一杯やりながら(パソコンラックを加工して、コップを載せる小さな台をつくり、そこにショウチュウを置いています)、平均30分でこの通信を書きます。でも、疲れているときは、(今回のように)グチが多くなるので、翌朝、簡単にチェックして送り出しています。今晚は酔っぱらいすぎたかな。

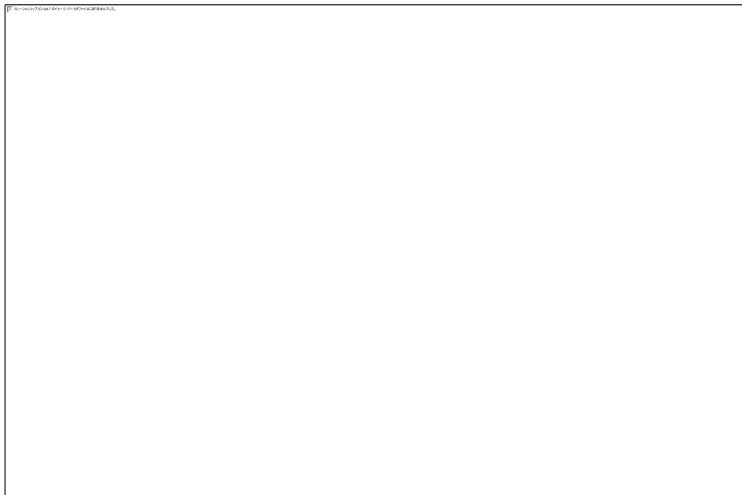
## NO. 31 小老樹のこと(1) 2000. 02. 16

このかん、この「黄土高原だより」にいろいろ感想を寄せていただき、ありがとうございます。一方的に、勝手に送りつけているものとはいえ、やっぱり反応があるとうれしいです。大同で緑化協力をはじめたまもないころ、私はつぎのような文章を書いたことがあります。友人の李建華さんに翻訳してもらったものが関係者の目にとまり、大同の新聞にも掲載されました。「小老樹」と題するもので、以下の内容です。

大同県から懷仁県にかけて車で走ると、道路の両側に大面積の林があります。小さいものは人間の背の高さくらいで、株もとからたくさんのヒコバエが生え、灌木状になっています。大きなものでも3~4mで、途中からぐにゃぐにゃにねじ曲がっています。最初の数回、私はこの林をみても、なんの注意も払いませんでした。私たち日本人にとって樹木のある風景はふつうであって、黄土高原のように木のない風景こそ印象的だったからです。私はそれらの樹木を自然に生えたものだと思っていました。

ところがそうではなかったのです。それらは、1950年代の初頭から、地元の人びとが1本1本、手をかけて植えたポプラ(小葉楊)だったのです。中華人民共和国の建国初期、祖国の建設

に燃える人びとの熱意が緑化にも向けられていたことがわかります。



### 小老樹の林。管理の不備をついてお墓をつくられてしまう

残念なことに、これらの樹木はスクスクとは生長しませんでした。水不足のために伸び悩み、あのような姿になったので、地元の人たちは「小老樹」と呼んでいます。中国人は「小」にも「老」にも親しみを込めますから、私たちが文字から受け取る「小さな老いぼれの樹」とはニュアンスが違いかもかもしれません。でも、これらの樹木が植えた人たちの期待を裏切ったことはたしかでしょう。

私は暗澹とした気持ちで林にはいり、まもなく、足の裏の感触にびっくりしました。柔らかくて弾力性があるのです。スコップを取り出して、株もとの土を掘ってみました。かなりの深さまで、豊かな黒い土に変わっています。このような土は黄土高原ではみられません。40年間、そこに樹木が育ち、林があったということは、たいへんなことです。これらの木は、自分は大きく育ちませんでした。毎年、枯れ葉や枯れ枝を落として、土を肥やしたのです。当然そこには、微生物の小さな宇宙もできあがっているでしょう。

この小老樹をみながら、私の気持ちはしだいに落ち着いてきました。この緑化協力活動が、改良種の並木のポプラのようにスクスク育てば、それにこしたことはないでしょう。しかし、小老樹のようになって、つぎの世代のために、多少でも土を肥やすことができれば、それでいいのではないかと、思えたのです。長い歴史のなかで破壊されてきた自然を再生させることは、そのような過程の繰り返しなのかもしれません。

そんなことを話したり書いたりしているうちに、大同のカウンターパートたちは私のことを「小老樹主義」などというようになりました。私が「こんなところで死にたくはないけど、もし死んだら、そこらに穴を掘って埋め、小さな石を拾ってきて、『小老樹、土に還る』とだけ書いてくれ」というと、「バカ、高見、そんな縁起の悪いことをいうな！」と彼らは慌てて止めます。

私は最初、調査レポートのつもりで小老樹のことを書いたのですが、な～に、いつのまにか、私にとっての「信仰告白」のようになっていたようです。でも、その後、私の考え方には変化もできました。それについてはまたつぎの機会に。

## NO. 32 小老樹のこと(2) 2000. 02. 23

中華人民共和国の建国直後から桑干河の流域で大面積の緑化がおこなわれたのは、ここが首都北京の水源であり、風砂の吹き出し口でもあったからです。前はただ「大面積に」と書きましたが、流域のほとんどで、県の面積の25~35%にもたっています(それぞれ300~600平方km)。育苗がまにあわず、現場に浅い穴を掘り、そこに小葉楊の若枝を弓なりに曲げておき、土をかけて萌芽を待ったようです。中国おとくいの人海戦術ですが、それにしてもたいへんな作業だったでしょう。

はじめのうちはよく育ったようです。60年代には、「南の湛江、北の雁北」と呼ばれて全国モデルになりました。雁北というのは、長城の内城にある雁門関の北の意味で、大同周辺をさします。湛江というのは、東シナ海に面した広東省最南部の県です。

緑化というのは割の悪い事業で、悪い結果はすぐにでもでるのに、いい結果がでて安心できるのは、ずいぶん先のことです。この小老樹も典型的な例です。小さい苗のあいだは、水の必要量も少なく、順調に生育しました。大きくなると水の要求が増え、隣の木と根が重なって、互いに水を奪い合うようになります。その状態のところには旱魃がくると、水が不足して幹の先端が枯れてしまいます。でも下部は生きていて、枝の1本が新しい幹になり、成長をつづけます。それをなんとか繰り返すうちに、グニャグニャにねじ曲がってしまうのです。そうやって弱っているところにカミキリムシが発生し、満身創痍になりました。

最初に木を植えた人たちは、いちばん若かった人でももう初老です。いつもお世話になる運転手の馬さんは、10歳ちょっとのころ、父親といっしょに参加しました。小老樹の林で、彼が紹介してくれました。「最初のうちはよく育って、とてもうれしかった。ピークのときはいまより高く、いまより太かった。それがだんだん縮んで、いまようになってしまった」と。

私たちの顧問の遠田宏さん(元東北大学理学部附属植物園長)は、毎年、70~80日も現地に滞在し、この協力活動のために献身されています。といっても彼は、植えるよりはるかに多くの木を切り、根を掘っています。それがたいせつなんですね。小老樹も何本も伐って、その年輪を解析されました。

それによると、最初の十数年はとてもよく伸びたのに、その後、止まってしまったのだそうです。老馬の証言と一致します。でも、わずかずつでも直径は太っていて、縮んではいませんが、植えた人には、そのように感じられるのでしょう。

私が小老樹主義(?)であったころ、渾源師範の学生との交歓会がありました。順番がきたとき、無芸な私は、前回の内容の小老樹の話をしました。ああいう話がわかるには、人生経験が必要なようです。高校生の年齢の若者にしたのは、私のミスでした。

翌朝、大同青年旅行社の日本語通訳、小劉がやってきて、「高見さん、昨夜の話をきいて眠れませんでしたよ。小老樹のことを評価されたのはあなただけです」といって、日本式に頭を下げます。きくと、彼女の父親とつれあいが林業局の人だということです。小老樹をめぐって、肩身の狭い思いをしていたのかもしれない。

「つぎのステップに役立つなら、小老樹になったっていいじゃないか」と私がいうのは勝手です。でも地元の当事者は、失意に陥ったり、傷ついたりするのです。やる以上は、やっぱり成功をめざさないといけないのです。こういう活動は、日本では「たいへんな苦勞をなさって……」といっって評価されますし、成功の例は多少の尾鰭をつけ、失敗は苦勞話にするという業界の暗黙の了解でなんとなく通ってしまいます。

でも現地のスタッフは、「あの日本からまで支援を受けながら、なにひとつうまくいっていないではないか」と非難されるでしょう。私は少しずつ自分の甘さを反省するようになりました。

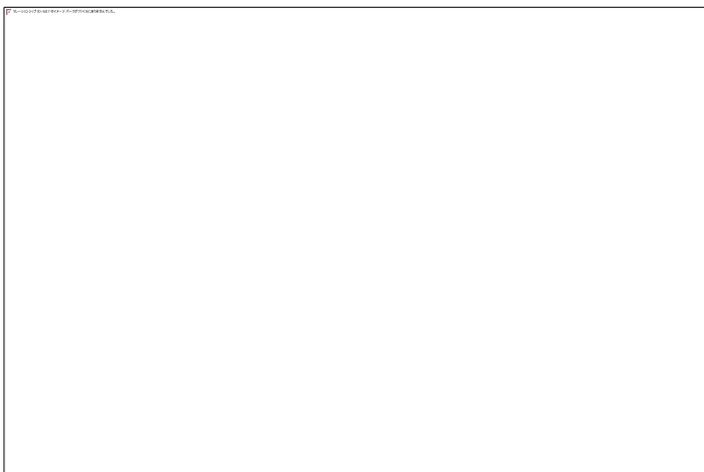
### NO. 33 「学校にいきたい！」 2000. 03. 09

93年の秋に靈丘県を訪れたときのことです。同行していた共青团大同市委員会副書記の劉懷光が、「きょうはべつの用事で別行動をとりたい。高見は県城で休んでいてもいいし、植林の場所をみにいってもいい」と告げました。「あんたはなにををするの？」ときいて、会議だという答えがあれば、私はべつのところにいくつもりでした。

その昔、「共産党の会議、国民党の税」という言葉があったくらい、共産党は会議が多いのです。ところが彼は、「希望工程の関係で、貧困な村の小学校を視察に行く」といいました。そんな機会を私が見逃すはずがありません。

着いたのは上寨鎮下寨北村というところでした。100世帯、400人弱の中くらいの村です。このあたりは太行山脈のなかに入り込んでいて、前の川に水があるかわりに、耕地がとても少ないのです。1人あたりの年間所得が250～300元だと聞きました。

小学校を訪れてびっくりしました。ほんとにあばら屋です。垂木がダメになっているのでしよう、屋根が波打っています。カワラもだいぶ落ちています。冬は零下 20 度以下になるのに、窓は障子で、あちこちに大きな穴があいています。



教室にはいると、梁から裸電球が 1 個、つり下げられているだけで、薄暗いのです。壁の一面が墨で黒く塗ってあり、そこが黒板です。1 年生から 3 年生まで、40 人ほどの子どもが 1 つの教室で学んでいます。先生は 1 人です。となりには小部屋があって、ここでは 10 人あまりの「学前班」(幼稚園)の子どもが小さなイスに座っていました。

#### 霊丘県下寨北村の古い小学校。零下 20 度以下に障子張り

私はその前年からこの地方に通い始めており、92 年秋には 2 か月あまりも滞在し、渾源県の温増玉林業局長に案内され、森林消防の赤いジープであちこちの村を回りました。そのなかにはずいぶん貧しい村もありましたが、これほどのところはみたことがありません。

そのころの私はナイーブだったと思います。なにか悪いことをするような気がして、教室の子どもたちにレンズを向けることができませんでした。隠れるようにして、教室の外景の写真をたった 2 枚撮っただけです。えらそうなことをいいながらも、貧乏を恥ずかしいと思う気持ちがそういうかたちであらわれたのでしょう。

村のなかを歩いていると、学校のある時間なのに、子どもが歩いています。妹を背中に背負い、弟の手を引いている女が子もいます。「どうして学校にいかないんだ。行きたくないのか？」ときくと、だまってうつむいて、ポロポロと涙を流します。「行きたい」とだけ答えて、走って逃げる子もいます。聞かなくても理由はわかっているのに、意地の悪いことをしたものです。

低学年の通う小学校は、たいていの村にあります。でも高学年を受け入れる学校は、大きな村にしかないばあが多いのです。低学年なら、中学校(日本の高校)を卒業したばかりの先生でも教えられますが(そのようなケースが実際に少なくありません)、高学年ともなるとそうはいかず、先生を確保できないというのが大きな理由です。

通える範囲ならまだいいのですが、距離があると、寄宿しないといけません。衣服も村にいるときとはちがうものがいりますし、食糧も運ばねばならず、年間 60 元ほどの経費の負担もばかになりません。日本では 25 歳をすぎても親が子を養っているのが珍しくありませんが、ここ

では10歳にもなれば労働力であり、「学校なんていかになくていい」ということになってしまいます。

そして学校に行かなくなる子は、女兒が多いのです。村の土塀などに「文盲は娶るな！」といったスローガンが書いてあるのが、その事実を裏付けています。それが農村女性の自立の機会を奪い、ひいては子だくさんの原因になります。

毎晩、いっしょに酒を飲んでいた劉懷光が、その夜は、「高見、悪いけど、きょうは酒を飲みたくない。その気になれない」と私にいいました。私もその晩は酒を口にしませんでした。そして考えたのが、小学校に付属果樹園をつくり、その将来の収益で、就学保障をしたり、教育条件の改善をはかってもらおう、というものでした。

#### NO. 34 小学校果樹園をつくる 2000. 03. 15

緑の地球ネットワークの設立メンバーは、こんなことをいうと叱られるでしょうが、「頭でっかち」が多かったのです。21世紀に人類が直面する最大の課題は、地球環境問題と南北問題だが、地球環境の問題は形を変えた南北問題であり、この2つは同時的にしか解決できない、といった、当然といえば当然のことを掲げていました。私もその1人です。

にもかかわらず、下寨北村で圧倒的な貧困と向かいあったとき、私は、シャッターすら切れないでいたらくでした。私たちの設立趣旨は、環境の改善、森林の再生だけれども、目にしたような問題にたいして、なんらかのアクションを起こせないだろうか。その晩、県の招待所の冷たいベッドのなかで考えたのです。

思いついたのが、小学校に付属果樹園をつくり、将来の収益を就学保障や教育条件の改善に生かしてもらおうというものでした。そのことを翌朝、劉懷光と靈丘県の青年団の人たちに伝えると、みんなびっくりしました。「どうしてそんないい考えを自分たちで思いつかなかったのだろう」というのです。緑化は緑化、教育は教育といった縦割りが、行政機構だけでなく、考え方のなかにも入り込んでいたようです。私はなんとかこの計画を実現したいと思いました。

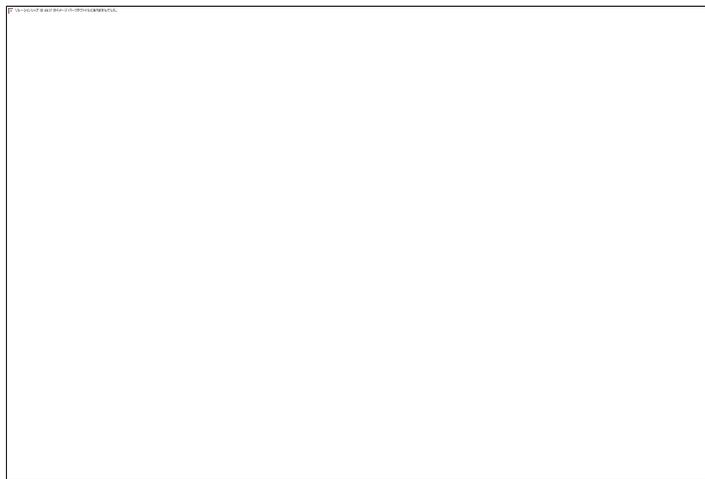
しかしこのころ、私たちの財政は火の車でした。最初の年はなんとかクリアできたのに、2年めの93年にはいって、思うように資金が集まらなくなったのです。はじめるのは簡単でも、継続するのはむずかしい、ということをつくづく思い知らされました。

はじまったばかりの環境事業団地球環境基金に助成を申請したところ、「果樹園をつくってアズミを植えるのがどうして環境保全なのか？」という質問が返ってきました。私は92年、93年の現地調査の結果をまとめ、「この地域の問題は、環境破壊と貧困の悪循環であり、農村の自立

なくして環境改善もありえない」という返事をだしました。この質問のおかげで、黄土高原の問題を掘り下げて考えることができたのです。

それからまもなく、地球環境基金部長だった加藤久和さんが、霊丘県で実現したこのプロジェクトを現地調査されました。ある席で加藤さんを見つけて、「アンズを植えるのがどうして環境保全だときかれまして」と話しかけると、「いや、あのときの調査で、その問題は卒業させてもらいました」といっていただきました。ありがたかったですね。

大同の現地でも問題が発生していました。「外国人の高見をどうしてあんな貧しい村に案内したんだ、といって劉懷光副主席が批判された」というウワサが私の耳にも届きました。また市や県の青年団はこのプランをととても積極的に受けとめてくれたのに、村にいくと、長老たちから反発が返ってきたそうです。「いくら貧乏だといっても、どうして日本人の施しを受けないといけないのか」というのです。日本軍によってたいへんな犠牲をうけたその世代の人にとって、



日本にたいする恨みと、それを追い払った誇りこそ、生きてきたことの証だったといっているでしょう。私の提案は無邪気すぎたのです。

94年春、私たちのツアーが大同に到着したとき、「霊丘県下寨北村の小学校果樹園起工式にツアーのみなさんもぜひ参加してほしい」と告げられたとき、信じられない思いでした。喜ばしいスケジュール変更でしたが、おかげでこのツアーは、大同滞在中

#### 小学校付属果樹園で最初の作業。子供たちが水を運ぶ

の1週間余り、1度も風呂に入らないまま北京に帰ることになりました。

そのときの作業のようすを私はいまでもありありと思い起こせます。村中の人々が参加しました。太鼓と銅鑼の楽隊のなかに、学生だった中井さんが交じって、大笑いをしながら太鼓をたたきます。なにごとにもまじめな嶋田くんは、植え穴にはいった石コロを取り除こうと無意識に手を伸ばします。富沢きょうだいがいます。知り合ったばかりの竹中さんが、はじめての中国であるにもかかわらず、あちこちに目配りをしています。

村の子どもたちが、大まじめに苗を配り、植えたあとの苗に水をかけて回ります。大きな子はバケツや洗面器で水を運び、よちよち歩きの幼い子まで、小さなコップに水をくんで、それでかけるのです。北京から通訳にきてくれた王黎傑さんが、天秤棒で水を担ぎながら、「幹部学校で経験がある」といって自慢します。ヒゲの伸びたお年寄りたちが、周囲に座り込み、談笑しながら見守っています。いいですね～。

青年たちががんばってくれたのです。2週間も泊まり込んで、村の人たちを説得してくれたそ

#### 建て替えられた下寨北村の小学校

うです。「時代は変わった。平和と友好のシンボルとしてこの果樹園を受け入れよう」というのが結論だったといいます。しかも、「そのお金を飲み食いに使ったらそれで終わりだ。将来に役立つように使おう」といって、私たちが準備した労賃をプールし、あの小学校校舎を立て替えてくれたのです。9月に、竹中さんといっしょにみにいったら、タイル貼りの瀟洒な校舎がすでに完成していました。速かったですね。子どもたちは、もう寒い思いをしなくてすみます。

このプロジェクトをつうじて、私たちの協力活動の原形ができたのでした。

## NO. 35 冬を越した植物 2000. 03. 22

「三寒四温」という言葉は、やはり中国からきたのでしょうか。北京をへて3月17日から大同にきていますが、20度近くにまでなったかと思えば、その翌日、急に気温が下がって、雪が降ったりします。きょうも朝から雪です。積もるほどはありませんが、「去年はカラカラだったのに、今年は2度も雪が降る。きっといい年になるだろう」といって、みんな喜んでいます。こういう変化を繰り返しながら、しだいに春めくのが、実感としてわかります。夜間はまだ氷点下で、20cm から下の土はまだ凍結していますが、それが溶けたら、いよいよ植樹の時期です。

うれしいニュースです。大同市最南部の靈丘県に植物園を建設中ですが、そこで栽培する樹木の育苗を昨年からはじめています。植物園の近くでみつかった自然林から、クヌギ、カエデ、カバノキ、シナノキ、トネリコなどの種子を集めて、地元の技術者にとっては手さぐりの育苗がはじまりました。そのほかに他地方の可能性のある樹種を導入し、日本からもいろいろな種類を試験的に持ち込みました。

大きな種子のものは発芽しましたが、小さなものは失敗しました。灌水を繰り返すうちに、粒子の小さな土が表面に集まって膜ができ、芽がそれを破れないようです。発芽はしたものの枯れたものもあります。土の通気性が不十分なために根が弱り、病気が発生しました。アルカリ性の土にあわない日本の樹種もあります。それらの問題をクリアして、秋まで育ったものが50種類はありました。それらが越冬したかどうか、期待と不安をもって大同にきました。

技術者たちは3種類の方法を試みていました。第1の方法は、なにもしないことです。クヌギ、トネリコ、クルミ、ハシバミ、ハギ、コノテガシワなどは生き残りましたが、イチョウ、モクゲンジの地上部は枯れました。



第2の方法は土伏せで、苗をすっぽりと土で覆います。イチョウ、トチノキ、シナサワグルミ、ヒマラヤスギ、数種類のカエデなども、そうすることで生き残りました。冬の最低気温は零下30度近くですが、苗木は、この低温よりも、乾燥した風によって水分を失うことでダメージを受けるようです。土を被せることで、それを防ぐことができます。

#### 自然林から集めた種子などをつかって苗を育てる

第3の方法は苗を掘り起こして、土のなかに埋めたり、地下室に保存することです。掘り出すのはちょっと先で、まだ結果をみていませんが、大部分は第2の方法までで越冬できました。

これらが、この地方の樹種を増やし、多様性を実現するための努力であることはわかっているだけでしょう。でも、そんなめんどろなことをする必要があるのでしょうか。これまでの導入樹種の代表例はモンゴリマツ(樟子松)で、緯度で約10度北から移されてきました。条件のいいところでは順調に生育しており、可能性は十分あります。ただ、一般的に言えば、より寒い地方のものを移してくると、小さいあいだはよく育っても、あるていど大きくなってからしだいに弱り、病気や虫で枯れることがあるようです。

その逆に、暖かい地方のものをもってくると、幼苗期の越冬はむずかしくても、育つにしたがって耐寒性のつくものがあります。その2世、3世ができればしめたものです。気象の面でいうと、この地方でも温暖化が急速です。この30年で、年間平均気温が1度上昇しました。最高気温はあまり変わらないで、最低気温が上がっています。

「南部の霊丘あたりでは育つけど、北部では寒くてむりだ」といったことが、大同の林業関係者のあいだでよく話題になります。霊丘ではかなりの樹種が自生するのに、北部にほとんどありません。でも霊丘と北部との気温の差は1度もありません。先ほどあげた樹種は霊丘だけでなく、私たちの北部の拠点＝地球環境林センターでも同じように越冬しました。新しい可能性が広がってきたようです。

## NO. 36 「国民参加の森林づくり」シンポジウム 2000.04.07

「海外緑化とボランティア活動」をサブテーマとする標題のシンポジウムが、国土緑化推進機構、森林文化協会、朝日新聞社の主催で、4月4日、東京で開催されました。私もパネリストとして発言の機会を与えられましたので、出席しました。

基調報告の要旨を以下のようにまとめていたのですが、今回もそうとうの早口で話したにもかかわらず、制限時間のなかにはおさまりませんでした。そのあと討論の時間がしっかりあったので、たいいていのことはお話しすることができました。きょうこれからまた中国にむかって出発します。

### 基調報告(要旨)

緑の地球ネットワークの高見と申します。私たちは会員数600人の小さなNGOで、中国山西省大同市の黄土高原で緑化活動をつづけております。幸いなことにカウンターパートに恵まれ、これまでの9年間に、およそ970万本の苗木を、3,100haの大地に、地元の人といっしょに植えつづけてきました。黄土丘陵や山の荒れ地に木を植えることから出発したんですけど、その後、貧しい村の教育支援のために小学校付属果樹園をつくったり、井戸掘りをしたり、学校校舎を建てたりといったふうにしだいに拡大し、いまでは、育苗と栽植の技術改善、人材の育成とネットワーク化、植物園の建設など、ソフト面の協力を力を入れているところです。

私たちが協力している農村にこんな民謡があります。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は日照りで一年は大水……」。自然も厳しいし、生活も厳しいんです。山にはまったく樹木がなく、手の届く範囲は段々畑になっています。

毎年のように早魃なんですね。たとえば、一昨年8月から去年8月までの1年間の降水量は、わずか130mmでした。平年は400mmですから、その3分の1です。秋と冬に現地にいってびっくりしました。トウモロコシは膝こぞうほどしか背丈がないのに、穂をだしています。でも、雄花に花粉ができていませんから、実がはいりません。ジャガイモは20cmほどで花をつけ、着いたイモはビー玉の大きさで、手のひらに10個以上もならびます。81歳の老人が、「こんな年はしらない」といっていました。そんなわけで、去年は大同市の耕地30万ヘクタールの3分

の2の畑で収穫ゼロ、全市の農業生産高は平年の18%にとどまりました。そんな年がつづいたらたまりませんが、「10年のうち9年は早魃」というのは、そう大げさな話ではありません。

では、「10年に1年の大水」はなにかというと、たとえば95年です。春から初夏にかけては厳しい早魃だったのに、8月末から半月ほど雨がつづいたんです。一帯の農村の住居はたいてい土づくりの窯洞でしたから、屋根に雨がしみこみ、バタバタと倒壊しました。大同市では6万世帯24万人が住居を失ったそうです。

これほどの年は珍しいとしても、たいてい雨は7~8月に集中します。年間降水量400mmの3分の2がこの時期に集中するんです。そして畑の土を流します。腐植を含んだ表土が流され、土壌が劣化して、作物や植物がしだいに育たなくなります。それが沙漠化なんですね。沙漠化というと、みなさんは雨が降らないことだと思われるでしょうし、それもまちがいでありませんが、黄土高原のばあいは、夏に集中する雨が沙漠化を加速するという、皮肉な現象がおこっています。



浸食谷の底にも作物が植えられる。土と水に恵まれむしろ育ちがいい

では、昔からそういう環境だったかということ、そうではないようです。黄土高原は、中国のなかでも早くから文明が発展した地域です。私たちの協力地の大同も、4世紀の末には北魏の都がおかれ、まもなく100万都市になったといえます。当時は平城京といい、中国最大の都市ですが、ひょっとすると世界最大だったかもしれません。日本は飛鳥時代にその影響を強く受けていて、仏教も北魏様式と呼ばれますし、奈良の都が「平城京」といわれたのも、そこに因んでいるそうです。

いまのように沙漠化した地域に、これほどの文明が成立するのは不可能でしょう。中国は歴史の国で、古い記録がたくさん残っているんですけど、その時代の大同は、山は緑で水の清らかなところだったといえます。いまの大同からはイメージしにくいんですけど、雲崗の石窟をはじめとするその時代の遺産をみていると、そうだったのかも想像できないな、と思えてきます。

それを沙漠に変えたのは人類の文明だったんですね。詳しい事情は省きますが、人類の文明が地表をはぎとるようにして緑をなくし、沙漠化した大地を残した。「文明の前には森林があり、文明のあとには沙漠が残る」といわれますが、ここもその1つなのでしょう。

農村の生活は厳しいんです。食べ物にもことかくありさまで、中国政府の定める貧困ラインにたっしない層が農村人口の3分の1にもなります。日本円にしたら、1人あたり年収が7千円もないということです。

環境が悪化して農業生産があがらないから、条件の悪いところまで畑にしないといけない。そうすると土壌浸食がさらに激化して、沙漠化がすすむ。環境破壊と貧困の悪循環ですね。貧乏だと、なぜかこどもの数が増えて、人口圧力が強くなり、それがまた環境破壊を招く。

この悪循環を絶つために必要なのが緑化なんです。丘陵や山にグリーンベルトをつくることで、土壌浸食と沙漠化を押さえる。植えた木がお金になれば、農村の経済的自立に役立つ。沙漠に木を植えれば、それだけで沙漠が沙漠でなくなったり、沙漠化が止まるといったものではないと思うんです。

では、そのような緑化協力活動が順調に進んだかという、そうではありません。渡辺桂さんのような大先輩の前でこんなことをいうと叱られそうですが、緑化というのは割の悪い仕事だと思います。悪い結果はすぐでるのに、いい結果がでるには時間がかかります。昨年のような大旱魃だと、春に植えて、夏にいつてみると、枯れているものが多いんです。悪い結果はすぐにでる。

その逆にいい結果はなかなかでません。地図をみていただくといいんですけど、大同は北京の水源地域です。また春の季節には西風が強くて、北京に風砂が押し寄せるんですけど、大同はその風砂の吹き出し口です。いまから50年前に中華人民共和国が成立し、首都が北京に定まると、この一帯で緑化の大運動が展開されました。県の面積の4分の1とか3分の1とかの大面積にポプラが植えられところが少なくありません。

最初の15年くらいはそれがよく育ったんです。60年代には、全国に2つしかないモデルの1つになりました。ところがそれがダメになった。小さな苗のうちには必要とする水の量も少ないけど、育つにしたがって大きくなります。そのころには根が重なり合って、たがいに水を奪い合うようになる。そんなところに旱魃の年がくると、先端が枯れてしまう。でも、ポプラですから、根本のほうは生きていて、枝の1本が幹に代わって、成長をはじめ。そこにまた旱魃がきて、先端が枯れる。そんなことを繰り返すうちに、植えてから50年近くたっても高さは3~4mで、幹が盆栽のようにグニャグニャに曲がってしまった。地元の人たちは「小老樹」、小さな老いぼれの木と呼んでいます。

総合的にみて、これが失敗であったことはいうまでもないでしょう。植えた農民の落胆はどれほどだったかと思うんですよ。協力活動をはじめてまもないころ、沈痛な思いでその林にはいつて、私はびっくりしました。足の裏の感触が柔らかいんです。あれっと思って、スコップ

で掘ってみると、かなりの深さまで、黒い土に変わっています。

小老樹は、自分は大きく育たなかったけど、毎年、枯れ葉や枯れ枝を落として、土を肥やしてきたんです。いまの日本をみても、中国をみても、おじいちゃんが孫のクレジットカードで無駄遣いしているようなことがやたらと目立つでしょ。そのおかげで環境もどんどん悪くなる。ところが小老樹は、自分は育たなかったけれども、土を肥やした。

ああ、なるほどなあ、自然を回復するっていうのは、こういうことの繰り返しかもしれないな、私たちの協力活動も、スクスクと育てば申し分ないけど、たとえ小老樹になっても、つぎの世代が発展するための条件を整えることができればいいんじゃないかと、私はそのとき考えたんです。

でもね、私たちの活動は、人びとの善意の協力でなりたっているんです。それでお終いにしていんでしょうか。いま植えているものが、将来また小老樹になっても、私たちは日本に帰っているかもしれない。成功談は多少の尾鰭をつけ、失敗談は苦労話に変えれば通るってことだって、この業界にはあるでしょ。緑化はロマンだ、なんていう人もいる。でも、それにつきあって木を植える地元の農民はどうなるんですか。日本から資金を提供され、それでプロジェクトをつくってるカウンターパートはどういう思いをするんですか。なんとしても成功させていけないと思ったんですよ。

で、いっしょうけんめい専門家の人を捜したんですけど、かなりたくさんの人たちがこの活動に参加してくれたんです。みんな手弁当でした。4年も5年も現地に通い、なかには毎年100日近くも現地に滞在してくださる人が、いま私たちの代表や顧問なんですね。東北大学理学部附属植物園の元園長の遠田宏さんはいまでも大同の農村に滞在中です。

地元の技術者や農民は、「ことしは早魃だったから、活着が悪くてあたりまえだ」なんて見過ごすことが多いけど、日本の専門家たちは、「乾燥で枯れているものは少なく、根が窒息して枯れたものがほとんどですよ」というんですね。

黄土高原の土は粒子が平均0.01mmと、とても小さいんです。「この土に水をかけて、足で踏み固めたら、日干しレンガのなかに苗を植えるようなもんです。それじゃあ、植物は生きていきません。踏んだらだめです。逆に砂や軽石、石炭ガラなどを植え穴に加えたほうがいい」と、いまは私たちの代表の立花吉茂さんがいうんだけど、水不足が頭にこびりついている地元の技術者は、そんな意見を受け入れません。

あちこちの現場で、対照実験を繰り返しました。立花さんがいうようにしたほうが、活着率もいいし、初期生育もいいんです。素人目でも、結果ははっきりしている。地元の農民は、つぎの年には、砂や石炭ガラを準備して待っています。車の運転手や通訳は、いつもいっしょに

いて、見てますから、私たちの主張を理解してくれる。でも大学卒の技術者や幹部が納得しない。

「もういい。あなたたちは勝手にやってくれ！ 運転手と門番と通訳と、それから地元の農民とで最初からやりなおす！」なんて、夜、酒を飲みながらケンカをするんですよ。でも現場では、「思い切り踏んでくれ。だけど、苗の根本から 50cm 以上離れたところを踏んでくれ！」なんていう。みんな大笑いですよ。どんなにガンコでも、その技術者を無視して、私たちはだれに依拠して、協力をつづけられるんですか。自分たちの考えはちゃんと伝えないといけないけど、必要以上に相手を傷つけてはいけないんです。そういうことは日本からやってくる若い研究者や学生もいっしょなんです。理論に通じているかもしれないけど、現場で生かせる知恵はまだ少ない。

そんなことを繰り返しながら、いま述べたような、植え穴に砂、軽石、木炭クズ、石炭ガラなどを加える方法を広げてきましたし、マツの育苗に菌根菌を活用する方法も実用化してきました。この地方では、単一樹種の一斉造林が一般的だったんですけど、複数の樹種を混植することを実現してきたんです。

私のほうからいうと、これまでの話は相手のほうを変えた話なんですけど、大同のカウンターパートは「最初はなにもわからなかった高見たちをあそこまでしてやったのは自分たちだ」ということでしょう。それでいいと思うんです。関係するということは、お互いに変わりあうことだと思うのです。

それには時間がかかります。それだけのことをやるのに 4~5 年もかかった。対象は植物ですから、1 回の結果がでるのに、最低 1~2 年はかかるんですね。いま困惑しているのは、国際的な緑化協力活動で、短時間で結果を求められることです。私たちのように、同じ地域で長い時間をかけるのが悪いことのようにいわれることさえあります。「それだけの時間をかけて、その地域がなぜ自立できないか、その理由はなんですか？」なんて言われるんですね。時間がないので触れませんが、そんなにかんたんに自立できるなら、国外から手を出す必要はもともとないんです。

中国にたいする緑化協力を支援する小淵基金ができることなどから、これまで助成をえていたその他の政府機関や民間財団の助成がえられなくなりました。私たちはいま、資金的にたいへんなピンチに直面しています。

もともと私の順番は最後だと思って、後半の苦労話や失敗談をもっと詳しくするつもりだったんですけど、なぜかトップバッターになっていたのも、時間の半分を現地の事情紹介に割きました。

## NO. 37 環境林センターの拡大 2000. 04. 21

大同で緑化をはじめて3年目の94年、カウンターパートの責任者に決まった祁学峰が、「各県にプロジェクトをつくるのはいいが、バラバラのままでは管理できない。全体を統合し、牽引するプロジェクトが必要だ」と提案してきました。立花吉茂さんもおなじような考え方をもっていました。「あの環境で緑化をすすめるには、パイロットファームが必要だ」というものです。

中国側のもとの計画よりも規模も大きく、内容も充実したものをめざすことにし、95年春に着工しました。それが南郊区平旺村の環境林センターです。苗圃、実験施設、温室、宿泊室などをしだいに拡大し、日本の専門家もしょっちゅう訪れて、育苗と栽植技術の改善、人材の育成などソフト面の協力拠点にしてきました。

今年の3月18日朝、遠田顧問などといっしょにセンターに到着すると、衝撃的なニュースが待ちかまえていました。周囲の土地に買収工作があり、ヨークス工場建設の予定で、この日の午前中に契約の運びだということです。それが現実になれば、この協力活動の象徴ともなっているセンターは致命的な打撃を受け、5年間の積み上げも水泡に帰します。

周辺は野菜生産を主とする近郊農業地域なので、ヨークス工場が建設されれば悪影響は必至ですが、最初、環境保全施設をつくるとういうふれこみで話がすすんだということです。

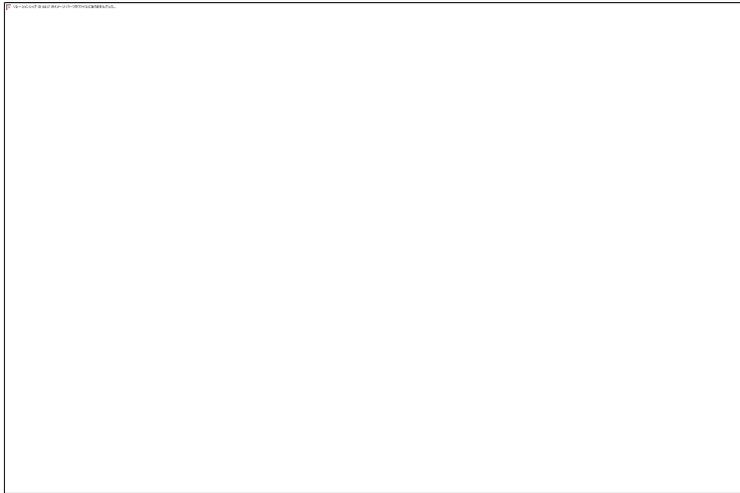
「最大限に安くするから、代わりに土地の使用権を買ってくれないか」というのが村の責任者の提案でした。炭鉱区で消費する野菜その他を生産し、経済的に余裕のあった平旺村も、石炭の不振にともなって経済的に逼迫してきており、彼らの窮状も理解できます。

遠田顧問と相談し、立花代表とも電話で相談して、その場で買収を決めました。最初は3.5haの土地を無償で村から借りて、このセンターを建設しました。その後、手狭になったので、昨年から6.6haに増やしてもらっています。今回でさらに3倍の20haに拡大することになります。

20年間の使用権の買収価格は26.5万元(約330万円)で、時価の10分の1です。分割払いが可能なので、それ自体の負担はさほどでもないのですが、20haの土地をどのように活用し、運営していくかは大きな問題です。

昨年からは中国は緑化のブームで、苗木の需給が逼迫し、価格も高騰しています。私たちのセンターでも、針葉樹育苗基地でも、協力プロジェクトに必要な苗木を除いて、全量を売り切りました。センターの技術者たちも、規模を拡大すれば、経済的自立にむかう基礎ができると乗

り気です。迫られた拡大ですが、きちんと対応すれば、あらたな飛躍の契機とすることもできるでしょう。



この数日、センターの苗圃では、職員全員と20人あまりの季節工が新しい拡張区域を耕して、大忙しで働いています。昨年の秋に新疆ポプラ(ギンドロ)の挿し穂を準備してあったのですが、時期を逃がさないように6万本の挿し木をしないとイケないのです。アンズその他の育苗も同じ問題をかかえています。急に決まった拡大ですが、可能なかぎり、この春から

環境林センターのスタッフたち。いい仕事をしてくれました  
ら対応したいのです。

こういう事態に直面すると、この協力活動が独自の生命をもち、それ自身の内的ダイナミズムにしたがって、勝手に動いていくように思えてなりません。前にたちふさがって止めるよりは、動きを見守ってやりたいと思うのです。その結果、負担がふえるのは目にみえていますが、なんとかするしかないでしょう。

## NO. 38 大地の上を砂が舞う 2000. 04. 26

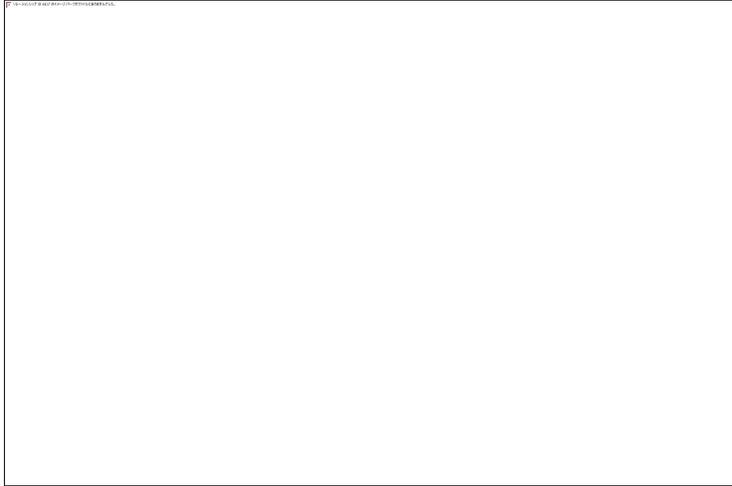
ここ数日、毎日のように激しい風砂です。4月にはいつから、3日に1日は吹いたような気がします。これほどの風砂にお目にかかったのは、92年から9回の春、大同に通っているなかでも初めてです。突風が吹いてきて、砂を舞い上がらせるのがみえると、それに背を向け、目をつぶります。でも、そのレベルのものはかわいいものです。ひどくなると、どっちをむいても砂だらけで、なにも見えなくなり、その場にしゃがみこむしかありません。その状態が2分、3分とつづきます。

先日は車で移動中、視界がまったくなくなりました。10mほど離れた先行車が見えなくなったのです。フロントガラスに吹きつける砂が不気味な音をたてます。運転手はあわてて急ブレーキを踏みました。

風砂といっても大きく2つに分けられるようです。1つはいままで書いたように、地表を激しく吹き抜け、土を巻き上げるものです。もう1つはかなり高いところを吹いているもので、晴れているはずなのに、空は黄土色に染まって、ときおり白い太陽が顔をのぞかせ、またみえ

なくなります。それなのに、地表近くの風はそれほどでもなく、外での活動も可能です。

3月中旬に大同にきてから、小雪天外のちらつくことが2度ほどあったのですが、その後も雨らしい雨はありません。1週間ほど前、パラパラッと降ったのですが、アスファルトの路面に白いところが残っていました。おそらく0.1mmにもたっしないでしょう。驚いたのはその雨が泥水だったことです。車の屋根やフロントガラスに黄土色の斑点ができました。



その一方、春の訪れが遅れています。平年に比べて2週間以上、遅いようです。西北の風が吹くと、温度が下がって、厚手のブルゾンの下にセーターを着て、フードを被ってもまだ寒いのです。

渾源县呉城郷はアンズの栽培に成功し、600haも植えています。50万本はあるでしょう。94年から植えはじめたもので、去年は初めて

春先の風砂。100m先もみえなくなる。

収穫しました。枝も広がって、成長のいいところは隣りどおしで枝が接触するまでになり、びっしりと花芽をつけています。一昨日は東大大学院の鈴木和夫教授などを案内したのですが、満開を期待していたのに、いちばん日当たりのいいところで、ちらほら咲きでした。

これまでに何度も書いたように、去年は春にまったく降水がなく、歴史的な大旱魃でした。3月に小雪がちらついたときは、「去年はひどかったが、ことしはきっといい年になるだろう」と地元の人はいいいあっていました。ところがここ数日、「なにか異変がおこるのではないか。どうもおかしい」という声を耳にします。「こんなひどい風砂は十年以上もなかったんじゃないか。前回はたしか88年だったな」なんていいながら、「そうだ、ことしは龍年だ」に落ちつくのです。

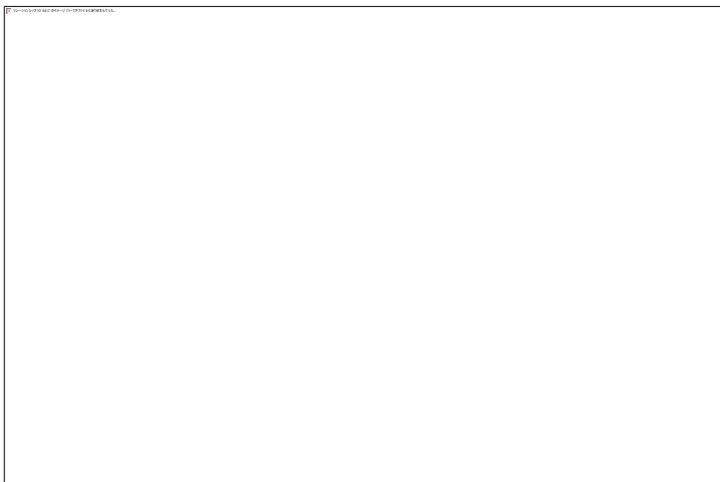
中国では龍年になにかが起ると信じる人が多いのです。88年は政治と社会の混乱がピークにたっして翌年の天安門事件につながりました。その前の76年は毛沢東、周恩来、朱徳といった人たちが亡くなって、大きな政治変動があり、唐山の大地震もこの年でした。「そんなことは迷信だよ」という人もいますが、それでも多少は気にしているようです。でも、こんな話はもうやめましょう。悪いことを口にすると、悪いことが起るのですから。

NO. 39 連なる命 2000. 05. 10

ワーキングツアーの人たちとバスで農村を走っているとき、窓の外を眺めていた人が叫びます。「あれっ、お祭りをやってる！」事情を知らない日本人がみたら、たしかにお祭りと思われないでしょう。花火があがり、爆竹が響きます。トラックの荷台を舞台に仕立てて、芝居をやっている人がいたり、仮装の人がいたり、マイクをもって大音量でうたう人がいたりします。

ところがなんと、これはお葬式なのです。子育てが終わって亡くなった人のお葬式は、まるでお祭り、お祝いなのです。結婚式が赤いお祝いで、お葬式は白いお祝いです。

以前は、盲目の芸人を呼んで歌をうたってもらったりしたようですが(映画「老井=古井戸」のなかにエッチな歌を迫ったりする場面があったと記憶します。あの舞台も山西省で



す)、最近はその県が県の文芸工作隊などになって、より健康的(?)になりました。ここしばらく中断していますが、私たちのツアーが天鎮県を訪れると、ひと晩は交歓会が設けられ、県の文工隊の美女美男が踊りと歌を披露してくれました。まだ若かった私は、そのようすを収めるのにずいぶんとビデオテープを無駄遣いしたものです。

#### 街中をすすむ葬列

その一方で、「こんな小さな県で、専門のダンサーや歌手をおいて、よくやっていけるものだ」などと思っていたのですが、あるとき彼女たちがトラックの荷台の舞台上で歌っているのをみて、納得がきました。

人が死んで、悲しくないわけではないんです。若くして亡くなった人のお葬式は特別に悲しいものです。カメラをむけて、村の人に怒鳴られたことがあります。でも、子育ての終わった人のお葬式をお祝いだというのは……、人の死をそのように受けれるのは……、文化だと思います。歴史に裏付けられた奥の深い文化だと思うのです。日本でも、そう遠くない過去には、同じように死を受け入れていたのではないのでしょうか。田舎育ちの私は、それに近いかたちで肉親を見送りました。

ところがいまはちがいます。80歳であろうと、90歳であろうと、死は忌むべきものです。病院で死を迎えたら、表口から帰してもらえず、裏口からこっそり送り出されるしかありません。家庭で死ぬのもめんどろです。私もお世話になった Y. T. さんは、京都の自宅で亡くなったために、不審死扱いされ、おつれあいが取り調べを受けました。

死がただ憎み嫌う対象になったとき、死を1日でも先延ばしすることが意味をもちます。「かけがえのない命」といいます。命はもちろんたいせつです。個々の命がたいせつにされなかった歴史が長いなかで、「かけがえのない命」が強調されるのは意義のあることです。

でも、お尋ねいたします。ほんとうに命はかけがえがないのでしょうか？連なる命、子から孫へと伝えられる命、命のつながりのなかで生きつづける命……。そのほうがほんとうだと私は思います。それは、大同の農村の「白いお祝い」から学んだことでもあります。

4月の末、中宮寺門跡の日野西光尊さん、薬師寺副住職夫人の安田順恵さんなどを大同で迎え、いくつかの協力プロジェクトを案内しました。おふたりともこの協力活動のスタート時からの会員で、困難な時期を支えてくださった親しい人たちです。つい調子に乗って、これまで書いたようなことを、バスのマイクで私は話しました。降り口で日野西さんが、「とてもいい話をありがとうございました」といって頭を下げられました。一瞬、私はフリーズしてしまいました。おお、はずかし。

#### NO. 40 伸びはじめたマツ 2000. 05. 17

この「黄土高原だより」も今回が40号。ご祝儀として(?)、うれしい話を書きます。大同市の北部の大同県、陽高県に、95年春からアブラマツとモンゴリマツの植林プロジェクトをつくってきました。資金の集まったときは100ha以上、足りないときは30ha、といったように大きさはまちまちでしたが、それでも6年間つづけると、両県で300ha規模のものが3つになりました。その後、新栄区や左雲県、南部の渾源県、靈丘県でも同じようなプロジェクトをつくっています。

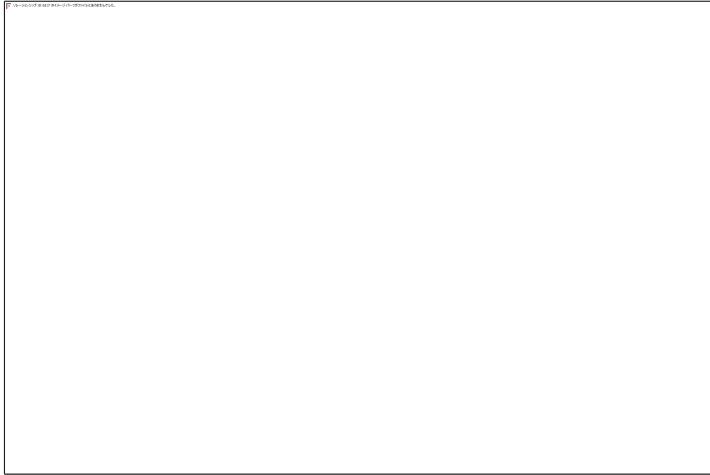
植えるときは2年生、3年生の苗で、地上部はせいぜい10~15cm、まるで頼りなく、草のようです。でも小さいほうが活着率は高いし、値段も安く、植えるのもかんたんですから、山や丘陵の植林では、小苗を使うのがふつうです。

たいていは等高線に沿って幅50cm、深さ20cmほどの溝を長く掘り、掘った土を溝に沿って積み上げて幅50cm、高さ20cmほどの土手をつくります。すると、溝と土手とで40cmの高さの土の壁ができます。マツの小苗はこの土の壁に沿わせて植えるのです。ことばでの説明はむずかしいのですが、わかってもらえますか？土の粒子の小さな黄土丘陵に植えるばあいは、植え穴に砂を加えるようにしてきました。

植えた直後に水をかけます。あとでもう1回、水をやれば申し分ないのですが、できるとはかぎりません。たとえば99年はたいへんな旱魃でした。トウモロコシが膝こぞうの高さで穂をつけ、ジャガイモは20cmほどで花を咲かせました。芽を出さなかったり、枯れてしまった作

物も少なくありません。飲み水に困り、畑の作物が枯れるのに手をこまねいているとき、「山のマツに水をかけてくれ」とはいえないのです。

早魃の年には、どういうわけかイナゴやバッタが大発生します。1 平方 m あたり 200 匹以上



もいて、マツだろうがサージだろうが、食べ尽くしてしまいます。農薬の空中散布をやっていますが、追いつきません。ノネズミやノウサギの食害も大きな悩みです。

植えたその年は、冬の入口で、マツの苗を土でおおってしまいます。冬は乾いた冷たい北西の風が強く、露出していると、マツ苗は水分を失って枯れてしまうからです。翌年の春、陽射しが和らぐころに、土を取り

**伸び始めた采涼山プロジェクトのマツ、武春珍と王萍**

除きます。出してすぐは白っぽくなっていて心配ですが、10 日もたつと緑が回復しています。冬のあいだはほとんど休眠していて、光線は必要ないのかもしれませんが。それにしても 1ha あたりマツだけで 3,300 本、100ha では 33 万本ですから、気の遠くなるような作業です。

そんなにてまをかけ、たくさんの障害を乗り越えないといけないのですが、マツの初期生育は速くありません。大同事務所の武春珍所長が私に訴えます。「部分的でいいから、もうちょっと大きな苗を植えよう。こんなにゆっくりとしか伸びないのなら、ツアーの人がきてもみることができない。写真にも撮れない」と。でも私は、「そんなのは本末転倒だ。時間がたてば大きくなるよ。せつかく植えたものを枯らさないよう、管理をしっかりやればいい」といって、とりあいません。

東大大学院の鈴木和夫教授、林野庁 OB の相馬昭男さんなどを案内して、4 月末に大同県金山寺の植林地にいきました。95 年春に植えたマツが、40cm あまりに生長しています。まだたいしたことはありませんが、となりの遇駕山での調査によると、モンゴリマツは 6 年目以降は毎年 20~30cm も伸びるようになります。枝も横に伸びますから、見た目には 1 年ごとに倍々に緑が広がるといいでしょう。

鈴木さんが、「マツはここまできたら安心でしょう。これからあとが楽しみですね」といってくれたのに、私は「いや、まだまだ安心はできません。ネズミに根をかじられて枯れることだってありますからね」と答えていました。よっぽど根性がひねくれているんだと、自分でも思います。でも、やっぱりうれしかったんですよ、鈴木さんにそうしてもらって。

## NO. 41 芽接ぎによるポプラの育苗 2000. 05. 29

できることならポプラは植えたくないと、最近まで思っていました。

1991年夏にこの活動を思い立ち、中国林業部(当時)の報告書を調べたら、「中国はこの広大な国土の緑化を、北はポプラ、南はコウヨウザン(闊葉杉)というたった2種類の樹種ですすめてきた」という反省が述べられていました。92年以降、大同に通っていると、「寧夏、陝西省のポプラにカミキリムシが大発生しているが、どうも黄河を越えて山西省にもきたようだ」というニュースを耳にしました。

95年、いまは朔州市に併合された懷仁県で、街路樹のポプラの梢が1年のあいだにほぼ100%枯れているのを見て、「ああ、ほんとうだったんだな」と思いました。べつのこだわりもあつたかもしれません。中国の緑化に、私たちより早くとりくんだ先輩たちがおられます。私たちがこの活動にとりかかったのも、その人たちの影響があつたからです。でも、多少の違和感も感じていました。樹木を植えれば、沙漠が沙漠でなくなったり、沙漠化が止まるかのような議論はナイーブすぎます。植えられている樹木はたいてい、生育の速いポプラでした。

沙漠化には、原因があります。黄土高原のばあい、根本には、土と水のキャパシティを超えた人口の存在があるでしょう。立花吉茂さんに最初に会ったとき、立花さんは、「水の必要量の大きなポプラを、沙漠化地域に植えるようなバカなことはしてないでしょうね?」と聞かれました。

黄土高原の緑化の主力にポプラがなるとは思いません。でも、最近になって、条件しだいで



### 雨のなかの村の子

ポプラをつかうのもいいんじゃないかな、と思いはじめました。浸食谷の底には水があります。速成樹種は、緑化への農民の意欲を励まし、短時間で収入をもたらすことでしょう。道路の並木にポプラが適することもあります。

数ある品種のなかで、新疆ポプラ (*Populus alba* L. var. *pyramidalis* Bge.) は、乾燥に強く、生育がよく、カミキリムシの被害も比較的軽いようです。他のポプラがなくなると、新疆ポプラにもムシがはいるようで、安心はできませんが、とりあえずは新疆ポプラでしょう。2年ほど前から環境林センターで、挿し木による育苗をすすめています。他のポプラにくらべ発根力は弱いようで、活着しないものもいくつかあります。

協力関係にある大同県国営苗圃で、昨年秋、おもしろいものをみました。発根力のつよい群衆ポプラ(cv.'Popularis' 1958年、中国林業科学院林業科学研究所)に、新疆ポプラを芽接ぎするのです。群衆ポプラの若枝を15cmくらいの長さに切り、春先、直に畑に挿すとまもなく発根・発芽し、7月末には1.5mほどに育ちます。それを台木にし、形成層にナイフで切れ目を入れて皮を剥ぎ、新疆ポプラの芽を差し込んで、ポリテープで固定します。

翌年の春、台木の群衆ポプラをカットすると、接がれた新疆ポプラの芽がどんどん伸びて、秋には2m以上に育ちます。新疆ポプラはもともと生育が速いのですが、根のじょうぶな群衆ポプラに接ぐと、生育がさらによくなるのです。そのぶん、カミキリムシの被害も減少するようです。苗圃の人たちは、「新疆ポプラを挿し木で育てると出荷までに5年かかるが、この方法だと3年ですむ」と話しています。

それに習って、私たちもその苗圃の一角1.3haを借りて、ポプラの育苗をはじめました。それと同時に環境林センターでは、もっともいい組み合わせがないかどうか、たくさんの種類のポプラで試みることにしました。ドイツのODAが懷仁県に残した研究所からは、40種あまりのポプラの改良種を昨年、導入してきました。なかには、挿したその年に3m以上も伸び、可能性の片鱗をみせているものもあります。台木と接ぎ芽、その組み合わせのなかから、生育がよく、旱魃や虫害につよいポプラの苗木をつくりだしたいと思っています。

## NO. 42 お金をだして面倒を買った(?) 2000. 05. 30

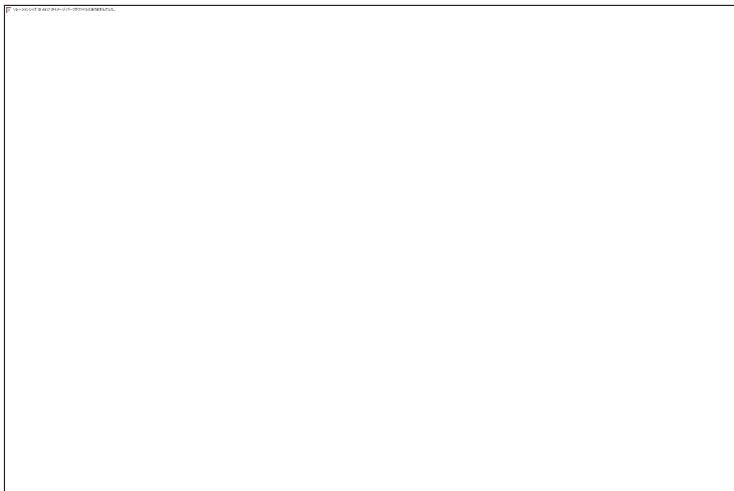
「環境林センター」が20haまで拡張され、20年間の使用権を購入することが決まったあと(黄土高原だよりNO. 37)、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長はおかんむり。「お金をだして面倒を買ったようなものだ!」というのです。

環境林センターの敷地は、伸び悩みのポプラの林(小老樹)だったところが、いまから13年ほど前に切り開かれ、リンゴナシの果樹園になっていました。その西側の隣接地は、さらに旧くからアンズ園でした。実生苗の育ったもので、花はきれいですが、実は小さくて苦く、経済価値はありません。管理がおろそかになるうちに、いつのまにかお墓をつくられてしまいました。

センターの拡張が決まってから、境界をたしかめるために、そこにいきました。驚いたことに、去年の春以降、新しい墓が100以上も増えています。センターの職員にきくと、「3日に1つは葬列があるし、1日に3つも通ることがある」といいます。お墓は敷地外ですが、アクセスはセンターの敷地を通るのが最短です。日に3つも葬列があつたりすると、ちょっとしんどいですね。

「村の人が亡くなって、あした埋葬される」という知らせをうけ、現場に行ってきました。ええっ、びっくり！ 墳墓はこれまで何度となく目にしているけど、そう深くないところに棺を埋め、う上に土を盛っていると思っていたのです。目の前のお墓は、まったくちがいます。幅 2m 長さ 3m で、深さは 3~4m。そこから横に部屋が掘り広げられ、男の主人が埋葬される場所の横に、夫人の眠る側室も掘られています。規模ははるかに小さいものの、明の十三陵の地下宮殿と構造はいっしょなんです。

敷地のはずれに数人の人影がみえます。いってみると、やはりお墓を掘っていました。しかもまとめて 8 つです。村の風水先生が、「あそこは風水がいい」といっているらしいのです。周囲は畑で、アンズも花を咲かすのですから、たしかに環境は最高でしょう。このままいくと、墓だらけになります。武春珍所長は、「お墓になって面倒だから、村の幹部は私たちに押しつけたんだ」なんて、いいだすしまつです。そんなことはないでしょう。



「葬式では花火や爆竹を使うし、清明節などの行事のたびに紙銭が燃され、火事の心配がある」と彼女はいいます。清明節のころはとても乾燥しており、全国で山火事があいつぎますから、たしかに心配です。

歴史を考えると、日本人の私たちは、こんな場面でのトラブルは避けたいのです。人の死に直面し

#### 清明節（4月5日前後）のお墓参り

て、みんな感情的になっているはずですよ。「センターの苗畑とお墓を土堀でくぐるのはいいとして、墓へのアクセス道路をかならず残してくれ」と私は頼みました。武春珍所長は「どうして自分たちで道までつくる必要があるんだ。道路も土堀も 300m 以上になるから、ずいぶんの出費になる」と不満顔。それでも村の幹部たちとの相談にでかけました。

帰ってきてからの彼女の報告です。「道をつくるのはかんべんしてほしい、といわれた。政策で土葬は禁止されているのに、道をつくられたら公認のお墓になって、村の立場がない。村の責任でお墓の周囲を囲い、出入り口をつくって、墓参りは入れるけど、新しい埋葬は禁止するというので合意した」というのです。こちらの立場を主張しないで、思い切りゆずったところ、落ち着くところに落ち着いたようです。

戦争中、日本の経営する炭鉱で犠牲になった数万人の労働者が、センターからそう遠くない廃坑のなかでミイラになって眠っています。万人坑です。少人数の日本人で 4 月末に訪れたところ、なかで中国人のグループといっしょになりました。彼女たちは、そこに眠る人びとのよ

うすを話しながら、「チッチッチ」と舌打ちをします。もちろん日本人への憤りです。

土まんじゅうの下がミニ地下宮殿であるのをこの目で見、中国の庶民が死後の世界をどれほど大切にしているかを知ったいま、万人坑の意味は私のなかでずっと重くなってきました。

#### NO. 43 祁学峰の市議会での発言 2000. 06. 05

4月末から7月10日ごろまで、私は日本です。表題の「黄土高原だより」のせいもあるのですが、「いまどこですか？」なんて聞かれますので、ひとこと。

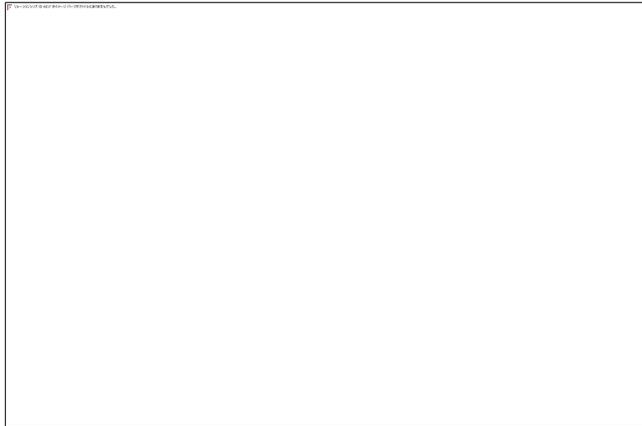
大同を発って北京にむかう4月27日の夜、遠田先生と私などを見送るために祁学峰(大同市青年連合会主席)が夕食をともにしました。副主席のころの彼は、ずっと私と行動をともにしていたのに、主席になってからは会議に追われて(?)それができません。青年団関係でも会議は多いのに、大同市人民代表大会常務委員などを兼務しているのでなおさらです。大同市人民代表大会って、日本の市議会みたいなもんです。

夕食の席で彼が、「ちょっと前的大同市人民代表大会で緑化が議題になったとき、自分も発言した。まちがってはいないだろうか？」と前置きして、話しはじめました。その内容に遠田先生も私もびっくり(というか、大喜び)したのですが、すでに酒がはいっていましたので、私は「その内容をあとでファクスしてよ」と頼みました。約束のファクスがはいったので、大同で聞いたこととミックスして、私なりにまとめてみましょう。したがって、内容についての責任は私にあります(もちろん順不同)。

1) 荒れ山の緑化をするばあい、草を先にはやし、あとで樹木を植えるべきである。灌木と喬木を結合すべきで、なかでも灌木を優先すべきである。

2) 雲崗の石窟の周囲の緑化にいま全市をあげてとりくんでいる。観光を考えれば意義があっても、あそこは条件が悪すぎる。岩山に穴をあけ、土を運んで、そこに大苗を植える。それが妥当かどうか検討する必要がある。私たちは木を植えるのであって、政治運動をやっているのではないから、意気込みだけでなく客観法則を重んじなければならない。

3) 呉城郷のアンズが成功したあと(この「たより」の NO. 07 参照)、「1 万畝(およそ 670ha)のアンズ畑」のスローガンで果樹熱が高まっているが、成功のかけにたくさんの失敗例がある。



苗木の品質と農民の自覚が重要である。それらの問題を解決しないでとりくんだら、また失敗することになる。最初は小さく出発して、農民に経験を積んでもらい、意欲と自信をつよめてから拡大するのがよい。

4) 小老樹(この「たより」の NO. 30~31 参照)の改造は必要だが、あとに植える樹木の生育が遅いなら、環境にとって不経済である。小老樹が風砂の防止効果をも

雲崗石窟。大同は北魏王朝の輝ける都だった

つことを忘れてはならない。

5) 極貧の村については、国の経費で移住を考えるべきである。自然林の近くの村は、村ごと移転するほうがいい。人的な圧力を軽減すれば、植えなくても、自然に森林が復活する可能性が高い。

6) 大同に技術者養成の場をつくるべきである。資金が必要だが、植林に投入している大量の労力と人命・負傷の危険、費用に比べれば、はるかに少なくてすみ、効果は高いだろう。

7) 「植樹 3 分、管理 7 分」といって、みんなが植えたあとの管理の大事さを強調する。実際に、多くの問題は植えたあとにあり、しかも人とからんで発生している。植樹緑化の大切さを教育し、管理の大切さを教育することは、緑化に従事する人の大きな任務である。なんどもなんども木を植えるけれども、育った木をみることがない、といった現象をなくすには、それをしっかりやらないといけない。

8) 大同市の森林被覆率は 18%だと発表されているが、あちこちをみて感じるのは、8%でもまだ水分が多いと思う。

現地に行ったことのある人ならすぐにナットクしていただけるでしょうが、そうでなかったらわかりにくい話でもうしわけありません。重要な問題ばかりですから、そのうちに解説をいたします。

北京に帰って、青年団中央の親しい幹部にそのことを紹介したら、「エーッ。そんなことを発言したんですか。出世に障りませんか？ でも彼のことから、それなりの覚悟があるんでしょう」なんていっていました。彼が問題にしたプロジェクトは、たいてい市の最高幹部が責

任をもつものばかりです。多少は大同の事情のわかる私は、だからこそ、彼の勇気に感心したのでした。

祁学峰がその話をしたとき私は、「で、反響はどうだった？」とききました。祁学峰の返事は、「現場を知っている人たちはすぐ同意してくれた。林業局長は、『あんたはいつ林業のことを勉強したんだ』とってびっくりしていた。でもたいていの人は無関心だったし、聞いてもわからなかっただろう」というものでした。

立花吉茂代表と6月1日の夜、このことについて話しました。ファクスで祁学峰の発言要旨を読んでいた立花さんは、「うれしいですね。これだけのことを彼がわかってくれるようになったということは、通っているかいがあったということですよ」ということでした。こうやってカウンターパートをほめられるのは、自分がほめられるより、はるかにうれしいんですね。

#### NO. 44 ガオジェンの中国語(1) 2000. 06. 10

大同で私は「ガオジェン」と呼ばれます。呼び捨てです(ですからこちらも中国人は呼び捨てです)。「高見」と呼ばれているのだと思っていました。ところが村を訪れると、色チョークを使ってその黒板に、「熱烈歓迎！高健先生」などと書かれています。「高」という姓はこの地方にかなりあります。姓が「高」で、名が「健」だと、私は思われているのです。「見」と「健」は同じ発音です。

それだけではありません。95年の春いらい通訳をしてくれている王萍から、知り合って何年もたって、「タカミさんは『高見』って書くんですか？」なんていわれて、愕然としたものです。大同日報の記事にも「高健」とあり、筆者はなんと大同事務所の楊元勝でした。中国で人気のある日本人の筆頭に高倉健さんがいます。でも彼は、中国では「高倉・健」ではなく、「高・倉健」なのでしょう。だとすると、私と一家ですね、なんていうと畏れ多いかな。

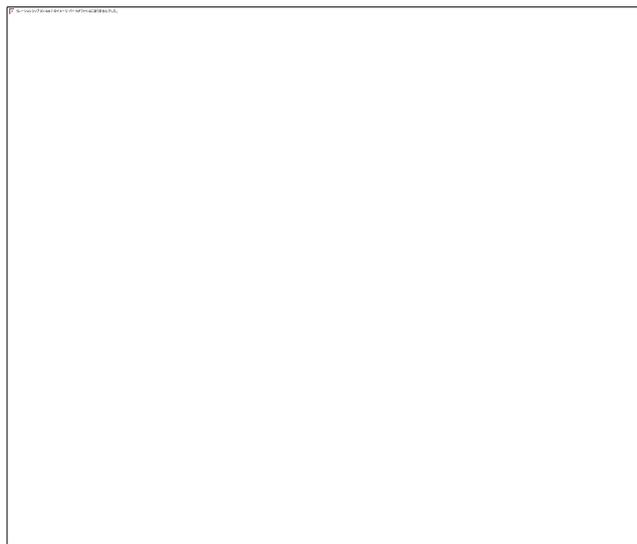
ところで、ガオジェンこと私の中国語です。もう30年もまえに、週に1回ずつ3か月ほど習ったことがあり、あいさつことばは覚えました。でも学習意欲はたちまち萎えました。私は反絶対音感で、中国語の四声、音の上がり下がりが聞き分けられないのです。舌を捲いて発音する捲舌音もまるでダメです。要するに、入口でつまづいたわけです。それから何度も中国を訪れましたが、中国語はまったくできません。通訳に恵まれすぎて、自分で話す必要がなかったことも影響しているでしょう。

この協力活動がはじまってまもなくの92年9月から、私は1人で70日ほど大同の農村に滞在しました。通訳はいません。お金がなかったこともあります。1日いくらで暮らせたか、記録をとっていたくらいです。

そのときの私のレベルは「ニイハオ」「シェシェ」「ツアイジェン」に「ツースオザイナーリ？」(トイレはどこですか?)くらいのもので、これがよかったんですね。言葉がわかりませんが、とにかく現場にいて、自分の目で理解しようと努めました。だって、説明をきいてもわかりませんから、自分の目でみるしかないわけです。

もっといいことは、言葉がわからないと、言葉でだまされないですむことです。いっしょに現場をみてから、人の話をきくと、その人がどれくらい信頼できる人かもわかるようになります。ああ、この人は話半分できけばいいんだな、なんてね。それが習慣化し、いまでもまずは現場に行く、というふうになったのは、とてもありがたいことです。

言葉がわからないと、ほかの感覚が鋭敏になります。郷の幹部と歩いていて、村人とすれちがったとします。そのときの農民の一瞬の表情で、「ああ、この幹部は村では嫌われているな」なんてことがわかるようになります。そのような瞬時の判断が、いちばん正確なんですね。なんてことをならべて、中国語ができないことを自慢のようにしているわけですから、進歩するはずがありません。



それでも1人で中国にいて、360度どこからも中国語以外きこえてこない環境にいと、しだいにわかってくるからふしぎですね。あのときからわかるようになった、と自分でも自覚している場面があります。93年秋に50日ほど滞在していて、大同からさらに西の寧武県の芦芽山の自然林を訪れたときのことです。地元の老人から話しかけられ、その言葉の大部分がわかるのです。私もそれに中国語で答えていました。

北京青年報にこんな記事がなぜか載りました

すると大同から同行した青年団の連中がいぶかしがります。「ガオジェン、おれたちだってわかりにくいロートルのことばを、どうしておまえがわかるんだ？」私にもわけがわかりません。相手の話すことばが、頭のなかでイメージを結び、答えも自然にでてくるのです。

そのころの大同市青年連合会主席は鄧向華です。いまは砒区の区長です。大同は石炭の街ですが、その行政の長で、えらいんですよ。いまでも年に数回は顔をあわせますが(というか、いっしょに酒を飲みますが)、なにか私に話しかけてくるたびに、私が目で通訳の王萍をさがすのを見とがめて、「ガオジェン、おれの話聞け！ 大同弁を話せ！ おまえの中国語はどんどん

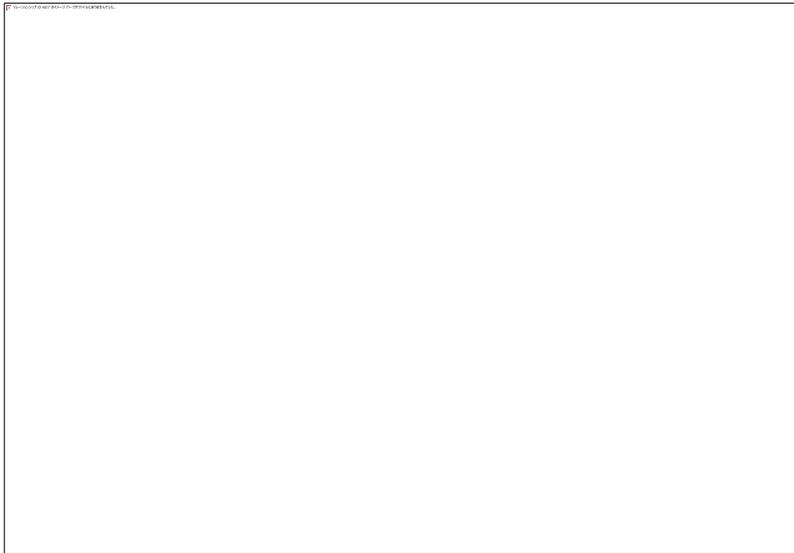
退歩する」といっていただけます。

ガオジェンの中国語レベルは、93年秋をピークに、急激に低下しているようです。それがなぜかは、次回に。

## NO. 45 ガオジェンの中国語(2) 2000. 06. 12

日常生活にけっこう役立ちはじめた中国語を、私は捨てることになります。いくつも理由がありますが、ひらたくいえば、大同での協力事業が急速に大きくなり、中途半端な中国語で必要性を満たせるはずもなかったからです。

それに気づいたのはこんなことからです。どんなに業績を残した人でも、年にとって健康を害



すると、入院したり、施設にはいたりします。するとそこで若い看護婦さんや医者から、「おぢいちゃ〜ん、どおしましたあ？」なんて、赤ん坊をあやすような対応をされることがあるでしょ。そうすると、受け答えもしたくなくなる。悪循環です。尊敬する私のお師匠が、そのように扱われるのをみて、まだ若かった私は憎しみすら感じたものです。

呉城村の小学校の子供たちと

話せるといっても、私の中国語は小学校の低学年レベルを超えることはなかったでしょう。発音はもっとひどかったはずです。年輩の中国人は、それでも、私の意図するところがなにか、理解しようと努力してくれます。外国人だから、言葉ができないのは当然で、それでもこの農村にきているのはなんのためだ、という扱いです。

不幸なことに、私たちのカウンターパートは青年団でした。利口な人たちだけど、経験と想像力が乏しいんです。私がたどたどしい中国語で話すと、いつのまにか、こども扱いしだします。なんとかこちらの意図を伝えようと、貧しい語彙をならべると、かえってバカにするんですね。あっ、これではだめだと思いました。こんな状態をつづけたら、ちゃんとした関係は築けないし、それよりなにより自分自身が暴発してしまう、と思ったのです。

94年の春、京大に留学していた馮艶にいっしょに大同にってもらい、そのあと、すでに20年をこすつきあいのあった王黎傑に、北京から大同にきてもらいました。ラクなんですね。とくに王黎傑はつきあいが長くて、気心が知れてますから、なんの遠慮もいりません。通訳だけじゃないんですね。中国事情については、私の先生です。どうしたらいいか、その場その場で相談できるんですよ。

この協力活動にとって、その時期が大きな転機になりました。以前にも書きましたが、大同市青年連合会副主席の祁学峰が、このとき初めて、この協力活動を担当するようになったんです。私は彼が気に入って、王黎傑に「どう思う？」と相談しました。彼女は、「青年団の幹部たちは祁学峰のことを恐れているようです」というのです。青年団のちゃらんぼらんな対応に困っていた私は、なおさら祁学峰をこの活動につなぎとめたいと考えました。そちらの話にすすむと、今回のテーマを離れますので、べつの機会に回します。

青年団の連中から私が子ども扱いされていることを話すと、「高見さん、そんなことで苦労しているですか」といって、王黎傑は、「必要なときはいつでも大同にきますよ」と約束してくれました。老朋友というのはありがたいものです。大同の連中も、「王老师、王老师」と呼んで、彼女を頼りにしました。

それから何年かあとのことです。小川房人さんは海外での活動経験が豊富な方です。吉良竜夫グループの切り込み隊長だったとも聞いたことがあります。なんどか大同にきていただき、緑の地球ネットワークの顧問を引き受けていただいているのですが、その小川さんが、「外国語ってというのは、できないか、対等にケンカのできるレベルまでいくか、どっちかしか役にたたないですよ」なんていわれます。う〜ん、さすが。

そうですね、ペラペラペラーって英語で話しかけられると、思わず笑って「Yah!」って答える日本人が多かったじゃないですか。いまはそうでもないんでしょうけど……。小川さんは、行った先の政府に交渉にあって、「だめです!」っていわれると、「そうですか、今日はだめですか。じゃあ明日またきます」とすっとぼけ、「いや、明日はだめだ」っていわれると、「だったら明後日ですね」といって、つけいるんだそうです。「どんな問題でも、平均8回通えば、たいていは解決しますよ」なんて、小川さんはいうんですね。私なんか完全に脱帽です。この話題をもう1回つづけるか、少しあとに回すか、ちょっと考えます。

## NO. 46 ガオジェンの中国語(3) 2000. 06. 15

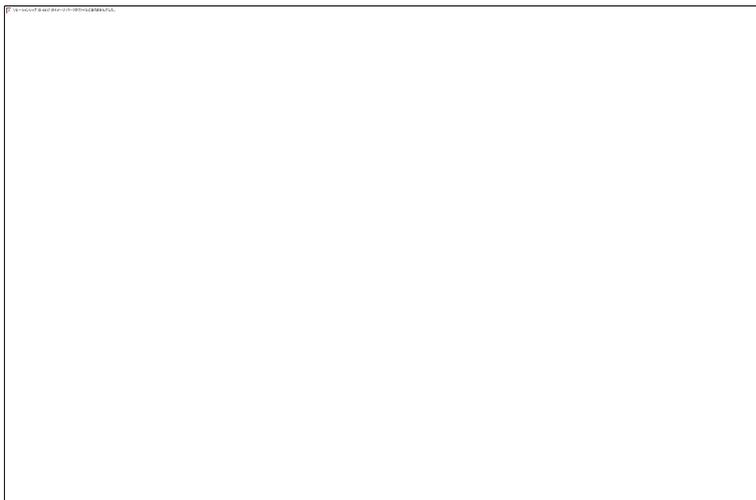
ちょっとつなぎのつもりで、「ガオジェンの中国語」をいれたら、これまででいちばん反響があり、意外です。しかたがないので、もう1回つづけます。

95年の春、大同に着くと、祁学峰が1人の通訳候補を連れてきました。地元に通訳がいれば便利なので、それまでも探していたのですが、じっくりくる人がいません。私がわがままなだけでなく、都市の人は農村にいきたがらない、という問題もあるんですよ。

新しくきた人は女性で、4~5年前、日本で1年間、看護婦の研修をしたことがあるということです。日本語はほとんど忘れていて、「なんとかなるの？」というのが、私の第一印象でした。初対面のときはこわばっていましたが、あとはいつもニコニコニコで、丸顔がいつそう丸くみえます。なにをみても、なにをきいても、コロコロコロコ笑い転げる、性格のいい人です。そういう人を私は大キライなはずなのに、彼女は例外です。

農村に行くのが私のしごとですから、彼女もいっしょに農村にいきました。村のこどもたちに話しかけていたかと思うと、彼女は私にきくんですよ。「タカミさん、驚きましたよ。年齢はうちの娘より上なのに、からだはずっと小さいんです。農村と都市とでは2~3歳はちがうと思います。なにが原因ですか？」。

天鎮県李二烟村の自慢は「どんな旱魃の年にも涸れたことがない」という湧き水です。その



雑巾のしぼり汁のような色を見て、「えっ、こんな水が飲めるんですか？」って。

そのたびに私は、「そんなことをオレにきくな！ あんたの仕事はなんなんだ」。それが王萍（ワンピン）です。本職は伝染病病院の看護婦さんです。

余談ですが、彼女が農村の見聞を同僚の看護婦さんや医者に話しても、だれも信じてくれない

**ワンピンさんがめずらしく難しい顔！**

いそうです。大同の市街から10数kmも離れたら、そんな農村が広がっているんですよ。でも、そんな状態です。都市と農村の距離を、わかってもらえるでしょう。

96年の夏、大同県徐町郷にいてガクゼンとしました。前年の夏までとてもよく育っていた80ha、6万本のアンズが壊滅状態になっているのに、郷の幹部たちは平然としています。活着率がまだ60%、70%はある、などとデタラメをいうのです。私はイスを蹴って、「こんなバカな話をいくらしてもムダだ。帰る」といったのです。（このことはまたの機会に書きます）。

そのときの通訳は王萍だったのですが、コロコロ笑いながら、それを通訳するのは。「あんな通訳だとかちらの意志が伝わらない」と怒りをむけると、「でも、タカミさんの話したことは

ぜんぶ訳しましたよ」。「こっちが怒っているのに、笑いながら通訳しやがって…」というところ、「怒っているタカミさんの顔がおかしかったんですよ。あんな顔ははじめてみました」なんて答えます。これじゃあ、ケンカになりません。

それがよかったのかもしれませんが。王萍の通訳だと、私がなにをいっても、決定的なケンカにはなりそうにないのです。そんなことを繰り返しながら、王萍の通訳は上達しました。彼女はとてものがんばりやなのです。

立花さん、遠田さんが現地に通うようになってからは、専門家たちと行動をともにしていますから、植物関係の通訳もうまくなりました。

王萍の日本語と逆比例して退歩するのが、ガオジェンの中国語です。中国語を話そうとする意欲がくじけてしまったようです。通訳がいるときは頼りっきりですし、いないときは話さないですませるオウチャクぶりです。

例外は、酒を飲みながら、祁学峰と話しあうときです。このときは通訳はいりません。ずいぶん深い内容をおたがいに交流することができます。祁学峰も、「ガオジェンとは、酒を飲んでいるときは通訳がいらない。たいていのことを通じあえる」といって不思議がります。私は、話すほうは退歩していますが、ヒアリングはまだ右肩上がりです。彼の話す中国語をかなり理解できます。

私が2つ3つの単語をならべると、彼はそこから私の考えていることをつかむのです。うーん。こうやって文章にすると、どうみても祁学峰のほうが賢そうに思えますね。

## NO. 47 徐町郷でみた夢 2000. 06. 20

大同県徐町郷には、緑の地球ネットワークの創立時のメンバーの大部分が引きつけられました。第1の魅力は、地形の条件です。この郷は北向きの傾斜地に位置し、12の村があります。背後は東西に延びる龍首山で、南の渾源県との県境になっています。北側の境界は、桑干河をせき止める冊田ダムです。ダムに接する東西の長さは12kmと長いのですが、龍首山と冊田ダムとのあいだは2~3kmでしょうか。

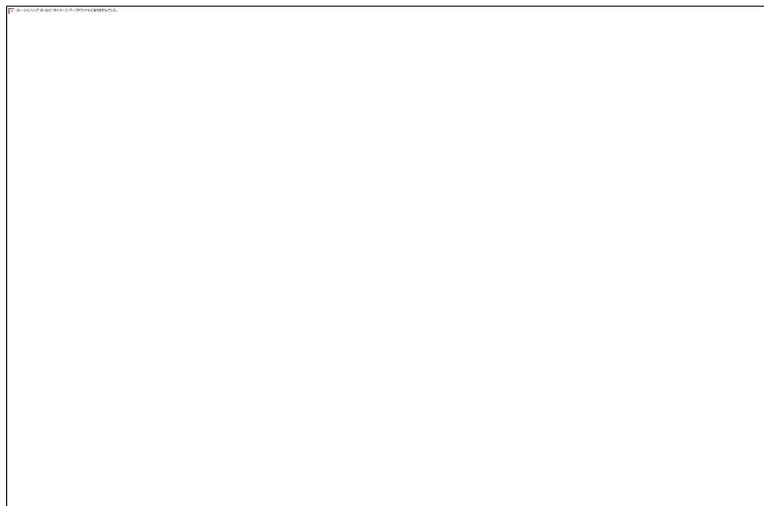
土壌浸食がきわめて深刻です。雨が降るたびに、龍首山からの土石流が冊田ダムへ流れ込み

ます。完成後3年間で、貯水量が計画の半分になったそうです。流れ込んだ土で埋まってしまったんです。桑干河の水には、年間平均で1立方mあたり44kgの土が含まれるそうですから、当然といえば当然でしょう。

背後の山に登って、冊田ダムを見下ろすと、両手の10本の指を重ね合わせたように、縦横無尽に浸食谷が刻まれています。この地方で溝(ゴウ)といえば浸食谷のことです。大きなものだけで、48もの溝があります。

桑干河はさらに東に流れ、河北省にはいって、官庁ダムに注ぎます。ダムから下は名が変わって、永定河です。永定河は北京の西郊外に至りますが、そこにかかっている有名な橋が蘆溝橋です。マルコポーロが世界一美しい橋と讃えたそうですが、日中戦争全面化の発端にもなりました。その後、海河に合流し、天津のそばで渤海に注ぎます。だから桑干河は、北京・天津などの水源なんです。これだけでも、この郷の緑化の意味がわかるでしょう。日本からくるワーキングツアーも、活動の意義を十分に理解してくれるはずで

第2の魅力はこの郷の幹部でした。ナンバーワンである党書記は李子明といい、明朗闊達で有能な男でした。89年と91年にこの一帯で地震があり(大同県と陽高県にかかったので「大陽地震」と呼ばれます。昨年11月にまた揺れました)、郷内の土



づくりの窯洞がすべて倒壊しました。余震がつづくなかで、村の再建にあたるため、李子明が選ばれ、派遣されていたのです。

私は92年と93年の秋、半月くらいずつ、この郷に滞在しました。その他の季節にも訪れており、これほど通った村はありません。その期間、ほとんど毎日、李子明と顔をあわせますから、細かく観察したのはいうまでもありません。

私のカンに触ったのは、彼が有能すぎることです。このような幹部は農村でみたことがありません。このテンポでしごとをして、農民たちとあうかな、という不安がよぎりました。自宅は大同市内にあり、ここに単身赴任し、郷政府で寝泊まりしているのですが、カン(オンドル)になじめず、上にベッドを乗せて寝ているのも気になったことです。

その不安は、まもなく解消しました。村がどんどん変わったからです。最初に感じた変化は、

村が清潔で明るくなったことです。郷政府のトイレなんて、ウンコのでんこ盛り(思い出だけでウェーッ!)がふつうですが、この郷はそんなことはなくなりました。あちこちの村がきちんと整理されるのが、感覚としてわかります。

李子明をみる村人の表情も和やかになりました。彼といっしょに村を歩いていて、招待される機会が増えました。「明日の昼は犬をつぶすから、かならずきてくれ！」なんて声をかけられて、ノコノコ出かけていくと、「そうだったな、忘れてた。これでも食べて、明日またきてくれ」なんていわれて、たき火に突っ込んだ、枝豆ふうの大豆をフーフー食べたのもこのころです。

この郷を私たちの協力の典型にしようと考えました。大同市青年連合会の幹部たちも同じ考えでした。私たちの乏しい資金のかなりの部分をこの郷に投じることにしたのです。この郷はこじんまりしていて人口は5,000人ほどです。それが第3の理由だったのでしょうか。いまは貧しいのですが、効率的に資金を運用すれば、規模が小さいぶん、短期間に効果があらわれると考えたのです。

94年の春、たくさんのアンズを植えました。80ha、6万本です。私たちのツアーもその活動に参加しました。先頭に立ったのは、李子明です。彼の晴れがましい笑顔をいまでも覚えています。大きすぎるくらいの穴を掘り、堆肥をいれ、苗木を植えて、たっぷりと水をやりました。

地表から1mくらいを残して苗木の先端は切るのですが、切断面には防腐剤を塗りました。薄いポリフィルムですが、乾燥防止のマルチのためにかかけました。これほどでいねいに植えたのは、その後もずっとありませんでした。それは確実に成果につながったのです。

#### NO. 48 砕け散った夢 2000. 06. 27

1994年はまれにみる恵まれた年でした。春から雨が降り、作物がよくできました。大同県徐町郷で植えたアンズも良好で、80%以上が活着しました。アンズの列のあいだには、アワ、キビなどが植えられていましたが、それに負けないうらい、アンズも新しい枝を伸ばしていきま。95年の春、またアンズを植え広げ、前年に植えて枯死したものは補植しました。

95年夏に訪れると、予想以上に育っていました。背丈を超えたものも多いのです。党書記の李子明は、特徴のある笑い声を混ぜながら、「春に花をつけたものもあった。あまり早く実をならせると木がいじけるけど、楽しみのために、来年はちょっとだけ実をつけさせたい。そうすることで、農民の積極性を引き出すことができる」というのです。私も賛成しました。徐町郷にはたくさんの知り合いができ、知り合いの農家でつぎつぎとおよばれしていました。

95年春から、南郊区平旺郷で、私たちの拠点「環境林センター」の建設がはじまりました。96年春には人員がそろい、育苗がはじまったため、私は大部分の時間をそこですごしていました。96年夏、久しぶりに徐町郷にでかけました。遠田宏顧問とカメラマンの橋本紘二さんがいっしょで、通訳の王萍、運転手の張徳もいました。たいていは同一行動をとっていた祁学峰が、このときはいません。

郷のはずれで幹部の出迎えを受け、郷政府にむかう途中で異常に気づきました。車を停めてもらい、アンズ畑をみて、愕然としました。壊滅的といっていい状態です。遠田さん、橋本さんが、「これはひどい。残っているのはほとんどない。原因を調査する必要があります」といいます。橋本さんは前年夏はじめて大同にきて、この郷を訪れ、よく育っている状態をみていたのでショックが大きいのです。

郷政府で幹部の話をきいて、さらに驚きました。「この郷のアンズは成績がいいので、来年度も拡大したい」と、新任の党書記がいうのです。遠田さん、橋本さんの私をみる目が厳しくなっているように感じました。「お前はなにをやってきたのだ」と非難されているようです。これまでは極力、中国側とのトラブルを避けてきました。でも、ここは意を決するときでしょう。

「アンズの活着率がどれだけあると、あなたたちはみているのか？」と私がきくと、党書記は「自然条件がよくないので問題はあるが、70%は保存されている」といいます。ナンバーツーの郷長は、最近まで共青团大同県委員会の書記だった男で、この県の協力の責任者だったのですが、私たちの厳しい顔をみながら、「最低でも60%はある」といいました。



女の子の遊び（文章と関係はありません）

その言葉が終わらないうちに、私はイスを蹴り、「こんなバカな話をしてもしかたがない。帰る」といったのです。立腹したのはじじつですが、ここでしっかり対応しないと、遠田さん、橋本さんに見捨てられる、という思いのほうが強かったと思います。でも、イスを蹴ったはいいとして、落とすどころをどこにするか、考えはなかったのです。そのとき王萍が、コロコロ笑いながら、拍子抜けの通訳をしたことは数号前に書きました。

郷の幹部たちは、私の剣幕より、王萍の通訳に安心したのでしょう。「そこまでいうなら、もう1度、畑で調査しよう」と、郷長がいいました。自信ありそうなようすに、私はまた驚きました。彼らがいうように60~70%も活着していて、私のみたのがまちがいなら、どんなにうれ

しいことでしょう。

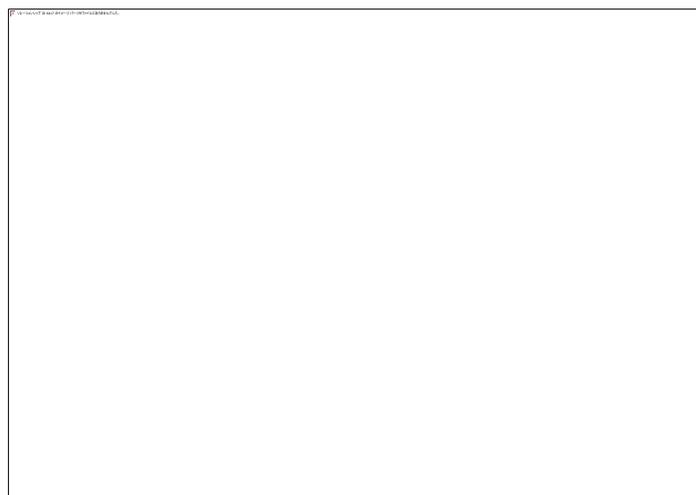
いちばんよさそうなところをチェックしました。生きているものと、枯れたものとを、1本1本、数えます。「これはだめだ」と私がいっても、彼らは「青い葉がついているから、生きている」といいます。割ってはいった遠田さんに、「葉は残っているけど、来春に伸びる芽が形成されていない」といわれると、彼らも納得せざるをえません。ちゃんと活着しているのは10%に満たなかったのです。

ちゃんと地面を踏んでいる気がしません。フワフワしています。郷の幹部たちのいいわけが、ずいぶんと遠くで話されているように感じられます。数年の努力が無に帰したのです。夢は破れました。みるべきでない夢だったかもしれません。「生き残っているものを1か所にまとめ、その他の畑は農民に返してほしい」と告げるのが、私にはやっとなりました。

#### NO. 49 ノウサギよりヒトが怖い 2000. 06. 29

順調に育っていた大同県徐町郷の大面積のアンズが、わずか数か月で潰滅したのはショックでした。ここをモデルにしたいと考え、力を集中していたので、なおさらでした。前号のたよりをリアルタイムの話のようにうけとめ、慰めのメールをくださった方もあります。結末を早めにお伝えすることにいたします。いったい原因はなんだったでしょう？

直接的にはノウサギの食害です。冬から春にかけて、苗木の皮をかじったのです。草が芽生える直前の、早春の被害がもっとも深刻です。グルッとひとまわり形成層をやられると、枯れる



ネズミにかじられたマツの根を示す李子明

しかありません。日本では直径1cmまでは被害をうけても、それより太くなるとだいじょうぶのようですが、ここでは5~6cmのものもやられます。1cm以下のものはスパッと切られます。ザーッとみて半分以上がノウサギの害を受けていました。

私が最初に徐町郷を訪れた92年に、当時の党書記・李子明から、「ノウサギ、ノネズミの被害が深刻だ。なにか対策がないだろうか？」と相談を受けたことがあります。1m近く育ったマツ

が、ネズミに根をかじられて枯れているのもみました。この郷は北京の水源の冊田ダムに面しています。ヒツジの放牧もあります。毒物をつかうわけにはいきませんし、ワナのたぐいは限

度があります。

日本でも探しましたが、効果的な策はみつきりませんでした。「ウサギのぶんも、ネズミのぶんも植えといたらいい」などと答えていました。被害がどれほど深刻かを知らない、無責任な答えだったのです。

夏になってアブラムシが発生しました。これが第2の原因です。暖冬と早魃がつづいて、アブラムシ、イナゴなどの発生がこのところひどいのです。大きなアブラムシがびっしり着いて、翌年の芽の形成さえ妨げていました。郷の幹部は「農薬を散布したが、効果がなかった」といいます。私は半信半疑でしたが、ほんとうかもしれません。散布しても効果のない農薬を自分で体験し、「農薬自殺をはかった主婦が無事だった」という新聞記事もみましました。ニセ農薬です。

さらに大きかったのは人間の要素です。熱心だった党書記の李子明がほかの郷に異動し、新しい書記が就任しました。李子明だったらノウサギへの備えをしたでしょうが(前年にはしていました)、新しい書記はしませんでした。順調に育っていたら、彼も前向きだったでしょうが、ノウサギの食害を受けたあと、投げ出してしまったのでしょう。そこにアブラムシが発生したのです。

問題を深刻にしたのは、ニセ苗がまじっていたことです。苗畑では、アンズの種を蒔いて台木を育て、優良品種の芽を接いで、接ぎ苗を育てます。ところが、芽接ぎの成功率はよくて70%。失敗し、台木の芽の伸びたものを、こっそり売るばあいがあるのです。「ニセ苗」と呼んでいますが、経験のない農民には最初は見分けが付きません。それが育っても、実は小さく、苦くて、価値はありません。農民が見捨てるのも無理はないのです。

アンズを植えることは、そのようなリスクをとまいません。農民にとっては、命の綱の穀物生産を減らすことでもあります。抜群のリーダーシップをもつ李子明がいるあいだは、計画を引っぱられても、後任に引き継ぐ力はなかったのです。べつの村では、せっかく育ったアンズが、農民によって抜かれることもありました。

責任は、このような計画にのった私と大同事務所にあるでしょう。祁学峰にしても都市育ちで、農村の事情は理解していなかったのです。人の要素はとても大切なのですが、郷の主要幹部は、2~3年の任期で異動をくりかえします。

樹木を育てるには時間がかかのに、責任をもつべき幹部は結果を待たずに異動してしまいます。「官僚主義と緑化は、木に竹を接ぐようなものだ」と私がいうと、「短期間での異動は日本の公務員制度から学んだものだ」という答えが返ってきます。

99年の秋、「日中植林協力フォーラム」にゲストスピーカーとして招かれた祁学峰は、私の家

に泊まったとき、「そのまま李子明が徐町郷にいたら、この協力活動はどうなっていたらろうか？」ともりました。彼もずっと気にかけていたのです。徐町郷のアンズはおそらく育っていたでしょう。すぐ南どなりの渾源県呉城郷でアンズが大成功しましたが、それ以上に徐町郷は条件がそろっていました。

徐町郷のプロジェクトが成功していたら、私たちの協力はもっと、アッ軽い！ものになっていたでしょう。そのぶん、教訓も浅かっただろうと思います。徐町郷のあの苦い経験に、私たちは感謝すべきでしょう。～いまだから、いえることですが。

## NO. 50 失敗があとに残すもの…… 2000. 07. 01

私たちは、初期のさまざまな失敗から、いろんなことを学んできました。たとえば、こんなことです。現地の農民の管理能力を超えたプロジェクトはかならず失敗します。最初は余裕のある小さめの計画を実施し、集中的に管理して、現場の人たちが経験を積み、自信をつけてからじょじょに拡大するのがいいのです。

また、果樹を植えるばあいでも、農民が食糧生産を依拠している畑はできるだけ使わないようにします。放棄された畑、荒れ山や浸食谷の底など、利用されていない荒地地をつかうようにするのです。それだと、ダメでもともと、成功すればプラスアルファになるので、農民も余裕をもって、より積極的になってくれます。

NO. 43「市議会における祁学峰の発言」で紹介した提案の多くも、失敗と成功の経験のなかから祁学峰が導き出したものです。カウンターパートと私たちと、それらを共通の体験として蓄えてきたことが、私たちの最大の財産だと思っています。

話を大同県徐町郷にもどします。昨年春、NHK・BS2の「地球に好奇心」シリーズ「黄土高原～失われた森の文化を求めて」の取材クルーが大同にきたとき、ディレクターの柴田昌平さんが、緑の地球ネットワークの活動の失敗の経験も取材したい、といいました。「ええ、いいですよ」と答えたあと、「そうなるよ、大同県徐町郷しかないな」と私は腹を決めました。あの一別いらい、私は徐町郷にいません。

徐町郷に車が近づくと、私の心はおだやかではありません。郷政府に到着して、「ああ、やっぱりくるべきでなかった」と私はひどく後悔しました。自分のい場所がないんですよ。車を降りることもできません。村を歩けば、顔見知りにならうでしょう。その人たちに、どういう顔をして、どういう話をすればいいんですか。

郷の幹部たちと決別したとき、彼らは「この協力関係をぜひ継続したい。これまで失敗した

ところを、自分たちの資金できちんと修復するから…」といました。そんな言葉を信用できるはずがありません。そんなことは不可能です。それができるくらいなら、あそこまでひどくはしなかったでしょう。転げ落ちはじめたのを押し戻すには、何倍ものエネルギーが必要です。落胆している農民の積極性を呼び戻すには時間も必要でしょう。このまま継続しても、傷口を広げるばかりだと、私は判断しました。



でも、それは、郷の幹部と私たちとのあいだのことで、農民はまたべつです。なんの説明もしないまま、あのとき、私は徐町郷からいなくなりました。きょうここにきて、その説明の準備が私にはありません。

失敗の経験を現場の畑で、カメラにむかって話しました。管理されず、すっかり伸び悩んだアーンズがわずかに残っている

#### 村の人たちといっしょに苗を植える

のが、かえって悲しいのです。話しているうちに、悔しさと悲しさがよみがえってきて、私は大泣きしてしまいました。カメラマンの一之瀬正史さんは、無情にも、その私の泣き顔をしつこく追ってきます。ほんとにしつこいんです。私なんか、あそこまでのことは絶対にしません。

「日中友好のために…」などといって、植樹にとりくむ人がいます。それはそれでいいのですが、私はもう、絶対にそんなことをしたくありません。いい動機で出発したとしても、結果が悪ければ、あれほど親しんできた村の人たちと、顔をあわすことさえできないんですよ。

日本は世界のなかで特殊で、とにかく雨が多いんです。温度だって、植物が育つのにとてもいい環境です。大同にかぎらず、中国のなかで、日本ほど環境のいいところを見つけるのは容易ではありません。もし気象や土壌条件がいいとすれば、たくさんの人が住んでいて、木を植える場所に困るでしょう。植えれば木は育つ。そういう日本の常識を捨ててかからないといけないのです。

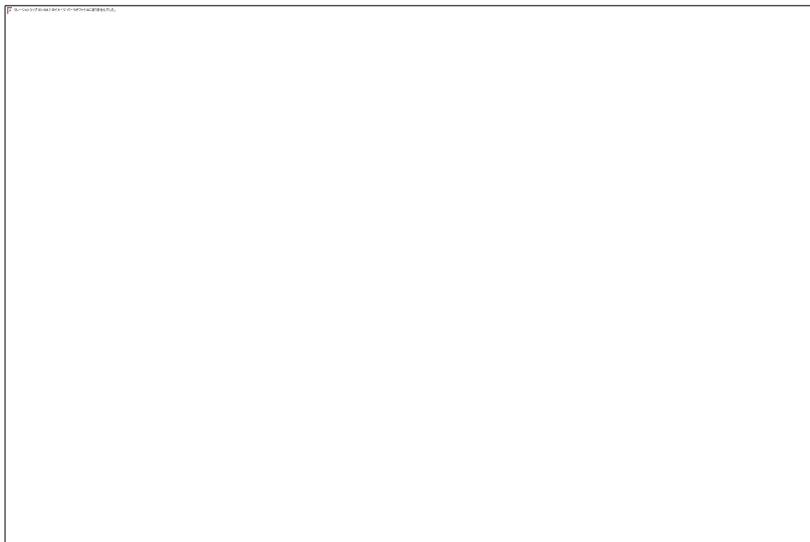
徐町郷での失敗の経験を書き終えて、ホッとしています。いつかは書かなければ、と思いつながら、ずっと延びていました。

黄土高原に足を運んだことのない人や、春しかいったことのない人には、想像もつかないでしょうが、ここにはたくさんの草花があり、しかもすごくきれいです。仏教の聖地・五台山は、高山植物の宝庫として、戦前・戦中の植物学者のあこがれだったそうですが、大同市の最南部・靈丘県あたりは五台山から遠くなく、環境もよく似ています。

草花のことを書いてみたいな、と思いつづけていたのですが、名前もわからないのでは無理でした。ところが今年の春、北京の書店で『中国野生花卉原色図鑑(北方巻)』(東北林業大学出版社、99年8月)をみつけ、衝動買いしてきたのですが、大同で印象的な草花はたいてい載っているんですよ。私のような素人にはイラストではわかりにくいのですが、これは写真です。印刷も以前にくらべれば、よくなっています。この本をたよりに、いくつかの草花を紹介しましょう。

春、真っ先に咲くのは掌葉白頭翁 *Pulsatilla patens* Mill. です。靈丘自然植物園とその周囲にたくさん生えており、3月末から開花しはじめます。紫の花弁のなかに黄色い雄しべ、そのコントラストがきれいです。オキナグサのなかまですが、上向きに咲きます。

それからちょっと後れて、細葉鳶尾 *Iris tenuifolia* Pall. が、乾燥のきびしい黄土丘陵で、紫の花を咲かせます。アヤメといえば湿地のものかもしれませんが、こんな常識はずれもいるんです。葉はイグサのように細く、根がとても深く、環境林センターまで持ち帰って、栽培を試みるのですが、2度3度やっても失敗です。



黄土高原の花といえば、なんといっても夏です。7月から8月にかけての短い期間に、いっせいに美しさを競いあいます。畑のあぜなどで、透明感のある紫色の花をつけるのが、翠雀 *Delphinium grandiflorum* L. です。飛燕草が中国名だろうと思っていましたが、燕でなく雀でした。山道に咲いているのをジープが踏

#### 花束のように見える1本のツリガネニンジン

みつぶすと、立花代表が悲鳴をあげました。日本でも、園芸種のデルフィニウムがでていますが、色の鮮やかさと花の形では、ここの野生のものにかないません。

華北縷斗菜 *Aquilegia yabeana* Kitag. はミヤマオダマキのなかまですが、日本のものより赤みが強いんです。種子を集めていると、通りがかりの中国人が、「縁起の悪い花だからやめな

さい」と忠告してくれました。標高 1,500m 以上でみることができます。

華北藍盆花 *Scabiosa tschiliensis* Grunning. マツムシソウもいたるところで咲いています。日本のものよりは、背丈も花の大きさもずっと大きく、色が鮮やかです。

草烏 *Aconitum kusnezoffii* Reich. は紫の花、高烏頭 *Aconitum sinomontanum* Nakai. は黄花で、トリカブトです。谷筋の水分のあるところで咲きます。有毒植物の代表のはずで、ヒツジは残していますが、地元の農民のなかには、「この葉は食べられる」なんて人もいます。そういわれても、自分で食べる気にはなれませんが……。

山肌の一部が赤くみえ、なんだろうと思って近づくと、柳蘭・ヤナギランの群落でした。ランについてもラン科ではなく、アカバナ科です。 *Chamaenerion angustifolium* (L.) Scop. Onagraceae

大きな黄色い花を咲かせているのは、金蓮花 *Trollius chinensis* Bunge. です。ボタンキンバイのなかまですが、日本のものは直径 4~5cm なのに、ここのものは 7~8cm もあります。ゴージャス！

長柱金糸桃 *Hypericum ascyron* L. はトモエソウですが、花の大きさは日本のものの 2 倍あります。去年の春、自宅の庭に種を蒔いたら、3 本育って、直径 8cm の花をつぎつぎと咲かせています。オトギリソウ科で、流行のビョウヤナギに花は似ています。

鉄線蓮 *Clematis* クレマチスは、ツルのものと同木のものとは何種類かあります。花は黄と白で、地味です。これを台木にして、園芸種のクレマチスを接げないか、試そうとしているところです。

細葉百合 *Lilium pumilum* DC. は山丹丹とも呼ばれるヤマユリです。花は濃い朱色で花びらが反り返っていて、小さいのに遠くまで目立ちます。この地方の代表的な花の 1 つでしょう。

おまけにもう 1 つ、藍刺頭 *Echinops latifolius* Tausch.。ヒゴタイで、球形のアザミといったらいいでしょうか、色は深いブルーで、大きなものは直径 5cm 以上もあります。

日本の高山植物にくらべ、全体として、花が大きく、色が鮮やかで透明感の強いのが特徴です。この地方の野山は、この季節、日中はかなりの高温になり、夜間は冷え込みます。その温度差があつての発色のもつとようです。

もう 1 つの特徴は、キンポウゲ科を中心に、毒のある植物の割合がそうとうに高いことです。その原因は、わかっていただけるでしょう。きれいなものに毒があるのか、毒があるからきれ

いに感じるのか、私としては後者をとりたいですね。

## NO. 52 中国人のみたガオジェン(高見) 2000. 07. 06

この春、私たちが大同にいったとき、1人の女性の記者が同行し、そのときのことが『世界知識』(2000年第10号)に掲載されました。自分がこんなふうにかかれるのは、とてもてれくさいのですが、何人かの友人にみせたら、「とてもよく書けてるんじゃない」といいますし、大同の人たちも、気に入っているようです。あえて送らせていただきます。長いので(いつものことでスママセン)、とくに関心のある人だけ読んでいただければと思います。

『世界知識』(2000年第10号)

緑の使者・高見邦雄

～黄土高原で木を植える日本の友人

「世界知識」記者・葛 軍

この春、華北、東北地区では連続十数回の強烈な風砂が吹き荒れ、私たちは環境保全の緊急性を肌身に迫って感じさせられた。ちょうどそのころ、日本の「緑の地球ネットワーク」の高見邦雄事務局長が、4月9日から28日までのあいだ、山西省大同市を視察するとき、私は中華全国青年連合会国際連絡部の協力のもと、同行取材をおこなった。

【「私が中日友好のために木を植えているとか、大同といった土地が好きだからだという人がいるが、それはそうじゃない。私は少しもここがいいとは思わないし、ここの土地柄、貧乏さ、ひどい天候、どれをとってもすきじゃない】

北京駅大ホールの人の流れのなかで、全国青年連合会の万学軍が私に高見邦雄を紹介してくれた。私はなんとない違和感と失望のなかで彼と握手し、そのあと彼から1枚の名刺を受け取った。この人はほんとに日本人だろうか。あの清潔で、型にはまり、慎ましやかな日本人らしいところがまるでなく、くだけて、自由気ままで、小さなことに無頓着なのだ。髪はボサボサ、ジャンパーの前をはだけ、ウエストポーチの黒いベルトをだらしなくたらし、歩く姿もどこもといった特徴がない。

列車が動き出すとすぐに、彼は背負っていたバッグのなかから1本のスコッチウイスキーと紙コップを取り出し、周囲にすすめたあと、酒を飲んで話し、話してはまた飲みだした。「私が中日友好のために木を植えているとか、大同といった土地が好きだからだという人がいるが、それはそうじゃない。私は少しもここがいいとは思わないし、ここの土地柄、貧乏さ、ひどい天候、どれをとってもすきじゃない」。

いきなりびっくりするような前置きをいわれると、いつもの決まり文句の質問をしなくてよかったですと思わざるをえない。彼は私の困惑をみてとり、つづけていった。「私は自分でこようと思ってここにきたんじゃない。彼らが(彼は同行している全国青年連合会の幹部を指さした)だまして私をつれてきたんだ」。

全国青年連合会副秘書長の湯本淵が紹介してくれた。緑の地球ネットワーク(GEN)は、日本から始まった国際性を備えた非営利の民間組織で、日本人会員が大部分だけれども、少数の韓国、アメリカ、イギリスなどの会員もいる。会員のなかには、労働者、農民、教員、学生、家庭の主婦などがおり、科学技術の専門家や経済人もいる。その組織のモットーは「環境に国境はない」ということで、国境を越えた民衆の協力を実現し、共同で地球環境を守ることを目標にしている。いまのところ500人余りの会員がおり、本部は大阪にある。

冗談は冗談で、しかしその実、日本側が黄土高原を選択したことに、科学的な論証がなかったかということ、そうではない。90年代にはじまって、日本の中西部地区はしばしば「泥雨」の襲撃を受け、風砂の天候も日増しに頻繁になってきた。そのような気候変動の原因について、日本の国内世論は、国内の生態環境悪化のほかに、大気の大気循環によってもたらされる中国の黄土高原の沙漠化の影響も無視できないととらえはじめたのである。

大同は黄土高原の東部、内外の長城のあいだにあり、平均海拔は900～1500mで、年間降水量は380～460mm、無霜期は90～130日、旱魃・風砂などの災害が多く、「1年に1度風が吹く。春に吹き始めて冬まで吹く」といった言い方がある。大同地区はまた、有名な「三北防護林～緑の万里の長城」の一部である。

1992年以来、中華全国青年連合会と山西省青年連合会の委託をうけ、大同市青年連合会は「緑の地球ネットワーク」と協力し、日本側が資金を提供し、中国側が実施するという方式で、「黄土高原地球環境林」「桑干河青年林プロジェクト」の活動をつづけてきた。1999年5月までに日本側から提供された資金は1,000万円を超え、共同による造林は2,560haに達し、接待した日本の黄土高原緑化協力団メンバーは700人余りになった。1995年8月に日本側が投資し、青年団大同市委員会が管理する「緑色地球ネットワーク大同事務所」が成立した。

【「中国には万事は始めるのが困難だ、という言い方があるが、私が思うところ、そうじゃない。始めるのはいとも簡単だが、過程はかなり難しく、結果を出すのはもっとも難しい、ということだ。植樹についていえばこれが道理だ。植えるのは容易だが、ちゃんと成功させるのは簡単なことじゃない。成功させるためには3つの要素がたいせつだ。第1は自然条件、生態環境で、第2は社会関係、それには政府の関係と個人の交際能力が含まれる、第3は人的な要素だ】

緑の地球ネットワークの発起人の一人、高見邦雄は、中国とのあいだに一種の不可解な縁を

もっている。彼はずっと以前、早稲田大学を卒業し(ホントは東大中退)、現在 52 歳である。1971 年に初めて中国にきて、大寨を参観した。

そのときなにを感じたかと私が質問すると、彼は答えた。「中国の農民は偉大だと思った。でもあとになって、大寨の農民があのような段々畑をつくったのは自然の破壊ではないか、と考えるようになった」。彼が「緑の地球ネットワーク」をつくろうと思った発端にはこのような認識があったかもしれない。

1991 年年末にこの活動を開始してから、高見邦雄は毎年、だいたい 3 分の 1 の時間を大同で過ごし、この地方の農民や技術者といっしょに、植物の試験や育種、普及と、関連する仕事に従事している。彼は大同の農村という農村を歩き回り、この地方の自然環境と社会・人情を了解し、この地方に適合したさまざまな緑化の方策を定めてきた。なるほど田舎の農民たちが彼のことを親しげに「高見」「老高」などと呼ぶのも不思議はない。

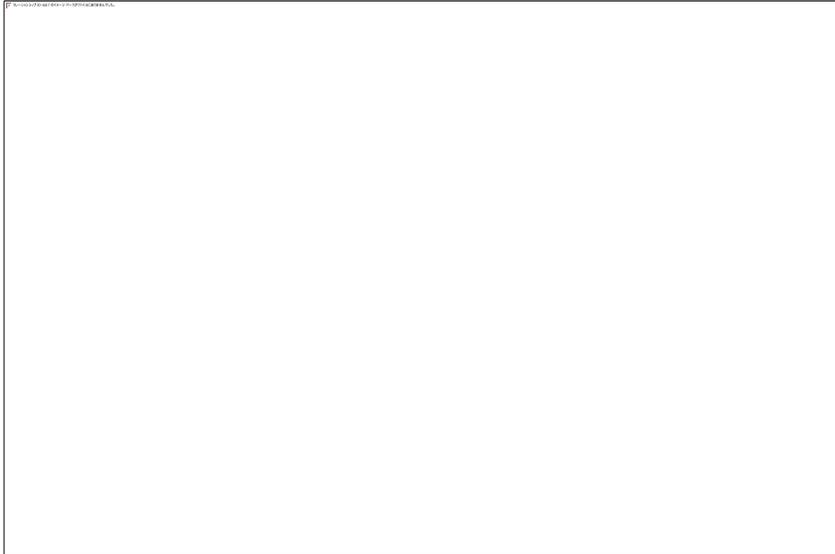
さらに驚くのは、北京人が聞きわけるのが難しい大同の農民言葉を高見は聞くことができ、さらに「知不道」とか「マ」とか、といった方言をいくつか話すことさえできることである。彼自身も自分のことを「4 分の 1 大同人」などと呼んでいる。

ここでの植林の経過と感想を話し出すと、彼はとたんに感慨深げになる。「中国には万事は始めるのが難しい、ということわざがある。しかし、私の思うところ、そうじゃない。始めるのはいとも簡単で、過程がかなり難しく、いちばんたいへんなのは結果をだすことだ。植樹についていえばこれが道理だ」。

高見が自分で話したところによると、中国で最初に植樹をしたとき、彼はたくさんの木を植え、喜び勇んで 2 年目にきてみたところ、たちまち失望に変わった。死ぬものは死に、枯れるものは枯れ、生きているものはほとんどなかった。さらに彼の理解を超え、憤りを深めたのは、地元の農民が切ってしまったものもあったことだ。木が土地を占めれば、農民が生計を維持するための農地が減るというのだ。

実際のところ、まずは貧困の問題を解決しなければならない。貧困の問題を解決できないのに、どうして農民が環境保全の問題を理解できるようになるのだ? 「自分は官僚主義を犯していた」。彼は笑いながら、私にそのように話した。こんなに中国的な表現をよくもびったりと用いるものだ。のちに高見は、彼の「環境保全戦略」を調整し、環境と経済発展、農民生活の向上と農民の素質を高めることとの結節点を探りあてた。

第 1 は、農民の生存の条件を改変することである。1998 年、彼は日本でおよそ 20 万元あまりの資金を募って、渾源县苑西庄村で最初の井戸を掘り、全村 200 戸あまりの農家が 10 数 km の道のりを肩で水を担ぐ歴史に終止符を打った。



第2は経済林の建設である。1994年と95年にあわせて23万元余りを投資して、600haあまりにアンズ(仁用杏)を植えたが、去年、そこからの収入は50万元になり、ことしは100万元以上になるとみられる。このことがあげた最大の効果は、農民たちが「退耕還林」(耕作をやめて森林に戻す)の直

### 苑西庄村の井戸のそばで村の人たちと

接の経済効果を理解するようになったことと、彼らの植樹、愛樹の責任感と積極性を強めたことである。

第3は希望プロジェクトとの連携であり、山区の貧困な小学校に「希望果樹園」を建設したことである。なぜかといえば、彼は人材育成の重要性を認識し、貧困から脱するにも、植樹をするにも人材に頼るしかないことを理解したからである。

私たちの乗った自動車が黄砂を巻き上げながら苑西庄村の井戸に到着すると、私は石碑の上に「水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れてはならない」と刻まれているのをみた。周囲の土埃がおさまったとき、私は奇妙な発見をした。井戸の周囲を囲んでいる腰の高さのレンガ塀の外側に、20数名の農民が静かに寄ってきた。高見はそこに歩いていくと、塀をへだてて、おたがいに肩をたたきあい、手を握りあう。静かで、自然で、一切は「不言の中に尽くされる」だ。

その一双一双の手は、厳しい労働のなかでつくられた荒っぽい手であり、移り変わりの歳月も洗い落とせない泥の染み込んだ手である。乾ききってひび割れ、たくさんのシワが刻まれている。そのような手と高見の手がしっかりと握りあわされて、かなりの時間、そのまま握られている。

彼らは黄土高原でつくられたタバコをいっしょに吸い、いくらほらっても落ちそうにない黄土を平気で被っている。もし高見が磨きこまれたオートのニコンのカメラを掲げず、黄土でほこりまみれにはなっているものの色の濃いトレッキングシューズを履いていなかったら、彼が日本人だとはとても信じられないだろう。

別れにさいして、1人の農民がいった。「高見、家によって、水を飲んでちょっと休んでいっ

てくれ」。高見が答える。「この次にね。次はあんたの家に泊まるから、いっしょに酒を飲もう」。私はやっと悟った。彼らのあいだにはたくさんの言葉はいらないのだ、言葉はなくても、彼らの気持ちは通じ合うのだと。

【「私はほとんどいつも失敗してきたんだろうね。成功したなんていえることはほとんどない。しかし、私はずっと放棄していない。その原因は2つある。ある種類の人が放棄するのは、もっといいつとめ先があり、もっといい仕事があるからさ。でも私にはそれがなく、この事業をやるしかない。もうひとつの種類の人が失敗を認めて放棄するんだ。でも、私は自分が失敗したってことを最終的に認めることはないだろうね】

最初に「緑の地球ネットワーク」が中国の現地考察を行ったときメンバーは5人だったが、ほかの4人は大同の植樹が成功する可能性が低いのをみて、途中でやめてしまった。現在まで残っているのは、高見だけだ。私がなぜ？ときくと、高見はまた軽く「バカだからよ。いちばんバカだったから」と答えた。

そのじつ、バカは彼一人にとどまらない。きくところによると、高見の妻も「緑の地球ネットワーク」の大阪の本部で働いており、これまで大同に植樹にきたこともあるというのだが、彼女は、大同の痩せ山と悪水をみてどんな感想を持っただろうか。しかし、高見が今日まで続けてこれたのは、おそらく彼女の支持なくしてはありえないだろう。そしてこのような支持は、「憂いを除き難を解く」ことばかりで、「成功の享受」はないだろう。

高見は私に話した。「私たちを知っている人たちは、私の妻には3人の息子がいる、高見が長男だっていうんだね」。この冗談のような言葉のなかに、たくさんの思いが込められているだろう。日本から中国の僻地の山村にすれば、物質的な条件はもちろんのこと、精神生活においてもものすごく大きな隔りがある。彼はこのように劣悪な生活条件の挑戦を受け、精神生活の窮乏に耐え、言語を通じた交流の障害を克服し、そのうえに貧しい水土と枯れてしまった樹木の苗に向かいあう。それでも高見が最後まで堅持しうるとしたら、それは西洋のことわざがいうように、「成功した1人の男の背後にはみな1人の女性がいる」ということではないだろうか？

聞くとところによると、高見はたいていちょっとしか食わず、いくらかのビールと自分でもってきたウイスキーを飲み、わずかの青菜を食べるのだという。

高見は1人の平凡な人であり、自分の苦悩を語ることもある。「自然の条件の困難はこわくないね、苦しみに耐えるってこともできる。私が怖いのは人の要素でね。この県の共産党委員会の書記が私たちの活動を支持してくれて、木を植えるのを激励してくれる。そうすると私もがんばって木を植える。ところがそこに幹部の異動があって、後任の書記が植樹に不熱心だと、せっかく植えた木が枯れ死してしまう。官僚主義のやり方ってたくさんあるからね。万畝の造

林が提唱され、大々的に儀式がやられるんだけど、2年もたつと、熱はすっかり冷め、山は荒れ果て、ただ『万畝林』の記念碑だけが残っているんだよね」。

「いまもっとも悩ましいのは資金の問題だよ。『小渕基金』ができることになってるけど、まだ公募もはじまっていないし、はじまったとしてもどれだけになるかわからない。それなのにそのほかの助成金なんか、小渕基金ができるんだから、ということで、打ち切られるのもある」。

高見には堅実で実務的な態度が備わっており、勤勉な作風と、追求心もある。彼は言う。「私は樹木を植えるが、樹木には生命があり、生命があるものは希望がある。だから私は黄土高原で希望を植えているともいえる」。まさにそのとおりだろうか、「もう、やめたいと思っても、やめられないんだよね」と、彼は付け加えた。

日本のボランティアが自費で中国にきて、辺鄙な山村で木を植えるようになったのは、最初は環境問題に執着する高見に心を動かされてのことだったかもしれないが、しかし今日、そのボランティアたちは、地球環境問題に対して表わす責任感と深い憂慮によって、高見を激励しているのではなかろうか。日本のボランティアが中国にきて木を植えたあと、どのような感想を持つかを紹介して、私はこのルポを締めくくりにしよう。

「日本の1枚の使用済み電話カードで、中国では3本の苗木を買うことができる。コストは日本の3分の1しかない……」。「一円の重み、一滴の水の重み、一本の苗の重みを私は受け止めた。私たちは豊かな生活を追い求めるなかで、大切なものを失ってきたのだ。今回の活動で、私はたくさんの収穫をえた……」。

「発達した国家で生活するなかで、私たちはたくさんのエネルギーを使用し、たくさんの廃棄物をだしてきた、だから環境にたいして大きな責任がある」。「21世紀には環境問題と南北格差の問題を避けては通れない。中国の環境が改善されることで、日本の私たちも大きな利益をうける……」。

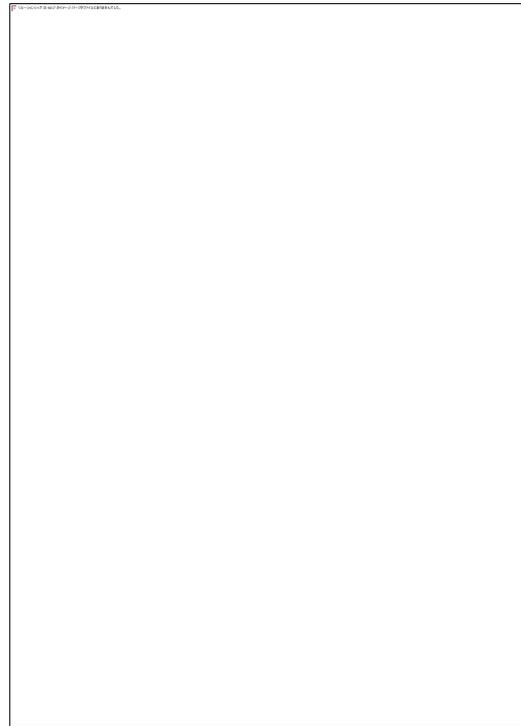
## NO. 53 5つの『あ』って、なに？ 2000. 07. 11

この協力活動をはじめた5年ほどまえのことです。『バナナと日本人』『ナマコの眼』など、フィールド中心の東南アジア研究をされていた鶴見良行さん(故人)とごいっしょしたことがあります。鶴見さんがビール1本をあけながら、その日の収穫をノートに整理されるのを、横の席で待っていて、そのあといっしょに飲みました。

アジアの時間と日本の時間とでは流れがちがう、アジアの時間はゆっくり流れる、というのが、鶴見さんの主張で、私はつよい感銘を受けました。

92年9月末から、私は調査のために1人で大同を訪れました。そのころの大同は、いまとくらべてずっとくすんだ街でした。大同賓館は大通りに面していますが、まだ馬車が通っており、明け方の光線で、私はビデオで撮影したものです。自動車の数は少なく、タクシーといえば、1、2のホテルの玄関先に数台停まっているだけで、流しなんてありませんでした。メーターはなく、運転手と交渉すると、市内は一律20円で割高でしたが、しかたありません。

そんなとき私は、時間の流れについての鶴見さんのお話を思い出したのです。私の感覚はちがっていました。ここでの時間は、ゆっくりではなく、速く流れるのです。ああ、ほとんどなにもしないうちに、きょうも1日が終わった、時間の流れのなんと速いことよ、と思う毎日だったのです。鶴見さんと私とは、おそらく時間の使い方がちがっていたのでしょう。



どこかの村の大きなポプラの木の下で

私がこの協力活動を思い立ったとき、中国人の旧友は私に、「日本人のあなたが、中国の、しかも農村でしごとをしようと思うなら、5つの『あ』を忘れてはいけません」といって、アドバイスしてくれました。「あせらず」「あわてず」「あてにせず」「あなどらず」「あきらめず」の5つです。

この「5つの『あ』」は、彼のオリジナルではなく、日本人を相手にしごとをしている中国人のあいだで流布していたもののようです。ミノルタの上海事務所長だった城野宜臣さんも、「聞いたことがある」といいました。中国中心に活動しているあるプロダクションは、「事務所の壁に書いて貼ってあります」ということです。

で、「城野さん、あなたはどれがいちばんたいせつだと思いますか？」ときくと、彼はちょっと考えて、「それは『あなどらず』でしょう」と答えます。私が「さすがミノルタ、恵まれた環境にあるんですね」と返しますと、城野さんは、「そんなこというなら、あなたはなんですか？」といいます。なんだと思います？

あちこちの報告会でこの話をして、「あなただったら、なんだと思いますか？」ときくと、若い人を中心に、多い答えが「あきらめず」です。で、私はいいいます。『あきらめず』なんて答えた人とはいっしょにしごとをしたくないですね。いちども自分でしごとをしたことのない人で

しょう」なんてね。その理由は自分で考えてください。

で、わたしの答え？……それは決まっていますよ、「あてにせず」です。92年の秋、最初に大同について、青年団の事務所に電話をすると、「すぐ行くからそこで待って！」というので、朝からずっと待つのですが、昼を回っても誰もきません。しかたないので、あの20元タクシーを拾って、彼らの事務所をこちらから訪ねると、「なんだ、きたのか。車がなくていけなかった」といって、平然としています。

べつの日、省都の太原の青年団に急用があって、1日ダイヤルを回しつづけても、呼び出し音は正常なのに、ついに通じませんでした。あとでわかったのは、この日1日、太原では電話回線の修理がおこなわれていたのです。ネッ、なにもしないうちに1日が終わるでしょ。

最近では、カウンターパートの体制が整い、トラブルつづきだった初期のことを忘れそうになっています。あのころはできなかったことが、いまはあたりまえにでき、去年はできなかったことが、今年はできます。今年はまだムリなことも、来年はできるでしょう。この協力活動の範囲でいえば、着実に前進してきているのです。

ところで、今回のテーマとも関連して、私は日本から大同にいて、そこに慣れるのになんの問題もありません。つらいのは、大同から日本に帰ってきたときです。大同の滞在期間が長ければ長いほど、日本社会に復帰するのに時間がかかります。私は1回の滞在期間が2か月を超えないようにする、という自分のルールをつくりました。13日から中国です。この通信もあいだがあくことになるでしょう。

## NO. 54 ああ、雨よ、雨。 2000. 07. 25

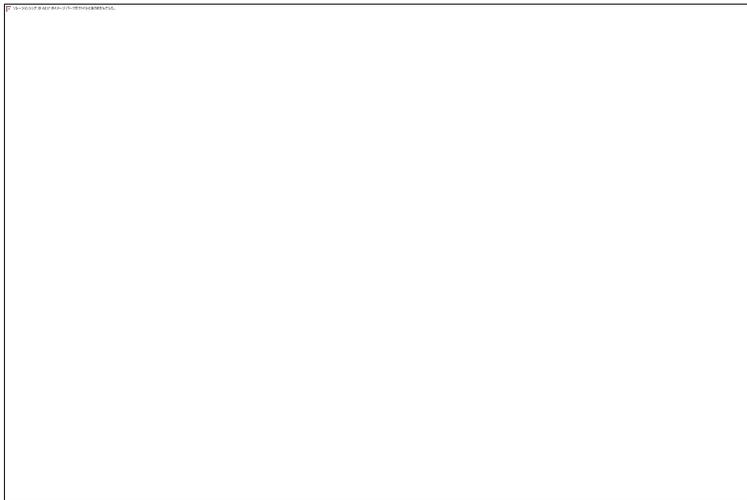
7月13日に日本をでて、北京経由で大同にきています。昨年につづいて、ことしも春からきびしい早魃でしたが、私たちが到着する1週間まえに、3日間連続して雨が降ったそうです。地域によってはそうとうの大雨だったようですが、時期的に遅すぎました。

環境庁の小島敏郎審議官、日本大使館の米谷仁書記官、朝日新聞中国総局の鈴木暁彦記者に同行して、15日から3日間、渾源县、広靈県、大同県を回りました。灌漑の可能な低いところの畑はまずまずのようですが、丘陵の畑の作物は、全滅した昨年ほどではないものの、収穫はあまり望めそうにありません。

アブラナの花が満開ですが、背丈が30cmにたっしないところがあります。葉っぱがなくなってスジだけのものもみかけました。早魃に虫害が重なることが多いのです。ジャガイモはふうなら畑の全面をおおっているはずですが、ヒョロヒョロしていて、畑の地肌がみえています。

アワやキビのできもよくありません。

鈴木記者が数人の農民にことしの作柄を尋ねました。返ってくる答えはいつも、「まずまずのできだ」というものです。



同じ体験を私もこれまで繰り返してきました。去年は最悪といっていい早魃で、大同市の耕地面積 35 万 ha の 57% にあたる 20 万 ha で収穫がゼロ、全市の農業生産高は平年の 82% 減でした。まったく実のはいっていないキビの畑にカカシを立てている老人に、同じ質問をしたら、「これから天候は回復するだろうから、きっと収穫できる」という答えが返ってきたものです。

どんな小さな平面も畑に変わっている

悪いことを口にすれば、それが現実になる～少なくとも農民は、そう思っているようです。ここは言魂の世界です。私なんかは、すぐに悪いほうへ考えをめぐらしたり、口にしたりするのですが、そういう人間は、このきびしい環境では生きていけないでしょう。

大同から渾源にむかう途中で渡る桑干河は、行くときは幅数 m の小さな流れがありましたが、帰りは完全に涸れていました。この河は北京の水源ですから、作物のできが悪いだけでなく、都市を含めた一帯の水不足も深刻でしょう。

ところで、あの雨です。霊丘県上寨鎮で建設中の植物園では、3 日間で 220mm にもたっしました。いちばん激しいときには 2 時間で 76mm も降ったそうです。アクセス道路が流されて通行不能になりました。修理のための費用がかさむのが頭の痛いところです。苗圃も一角が流されましたが、被害はそう大きくなく、昨年にくらべて苗づくりははるかにうまくいっています。

220mm といえば、年間降水量の平均のほぼ 60% です。雨の少ない年は 250mm 未満のことさえあるのです。それだけの量がたった 3 日間に集中しました。そしてそれ以降の半月以上、雨はまったく降りません。たとえ 400mm の雨でも、いい降りかたをしてくれればいいのですが、ここでは降れば降ったで問題を起こします。

NO. 55 山のむこうの自然林 2000. 07. 28

7月22日、ダイハツ自動車ハイキング部のツアーといっしょに、霊丘県の自然林まで歩いてきました。大同市最南部の霊丘県に建設中の自然植物園の技術者たちが、「この山のつづきに自然林があり、リュウトウクヌギなどがたくさん生えている」といっだしたのは98年夏のことです。

そのあと、遠田宏顧問(元東北大学附属植物園長)、立花吉茂代表(花園大学教授)などと、合計4つの自然林をみてきました。8月初めにそこの植生調査を実施する予定で、テント・シュラフなどキャンプ用品を北京で買い込んできています。足達者であろうハイキング部の人たちといっしょに、下見をしたかったのです。

植物園の技術者・李向東の話では、「きょうの目的地は標高1,450mの納士山で、ふもとの上寨鎮納士台村まで車がはいり、そこから5里(中国の1里は500m)ほど歩けばいい」とのことです。手元の高度計でふもとの村が1,000mなので、標高差は450mです。

李向東の距離感がデタラメなのは何度も体験済みで、最初は警戒していたのですが、「去年は5回、そこに種を採りにいった。最短距離だ」と自信たっぷりなので、それにしがいました。

村でマイクロバスをおり、弁当を各自に分けて、歩きはじめました。村を抜けて、谷筋を登っていきます。セキチク(石竹)やヒエンソウ(飛燕草)が咲き始めていますが、お花畑になるのはもうちょっと後です。そのうちに、急な傾斜の山肌を、ケモノ道をつたって登ることになりました。李向東が最初にいった5里はとっくにすぎたのに、彼はテレ笑いしながら、「あとこれくらいはある」といいます。また、これです。「あとこれくらい」もあてにならないでしょう。

ハイキング部の人たちのペースも速いのです。フルマラソンを3時間切る人が2人、タイムトライアルの常連もいるそうで、「ふだんはもっと速いんです」といって平然としています。そのかわり、周囲の草花や樹木にはあまり関心がありません。フーフーいいながらも、そこまではなんとか私もついていきました。

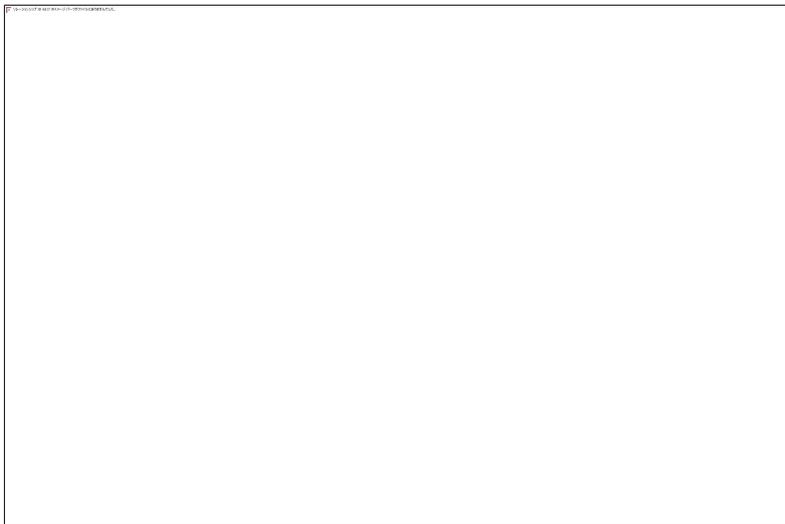
とどめを刺したのは、やはり李向東でした。「高見、この奥にみせたいものがあるので、自分と2人でいこう。あとの人たちは安全な道を歩いてもらおう」というのです。急な岩場を歩かせられ、最後はほとんど直登攀です。トゲだらけのハマナスの草むらだけは、「こんなところはイヤだ」といって、彼が「そこには道がない」というのを振り切って、ハシバミのブッシュをヤブこぎしました。

彼がみせたかったのは、50年代に植えられたアブラマツ(油松)とカラマツ(華北落葉松)で、「この種を採って蒔くと、育ちがとていい」とのことでした。

めざす山頂のすぐ下にレイジンソウ(トリカブトの仲間で黄花)の大群落がありました。花が咲いているのは1本だけで、ツボミのようすからすると開花までにあと2週間はかかりそうです。残念！山頂近くでほかの人たちと合流し、ふたたび山頂をめざしたとき、私の右足は激しく痙攣しはじめました。

山頂は1710mでした。数字はまちがっているかもしれませんが、標高差が700mあまりあるのは確実です。距離も最低でも6kmはあったでしょう。大部分が急な上り坂で、休憩を除いても3時間近くかかったでしょう。「李向東、まただましたな！」という、「自分たちの足だと1時間ほどだ」といって平然としています。ハイキング部の人たちも、「すごい人たちだな。上りも平坦な道も同じように歩くし、表情も変えない」といってびっくりしています。

山頂の向い側の急斜面に自然林が広がっています。ほかの山も、山の北斜面にはかなりの自然林があるようです。李向東によると、リュウトウクヌギをはじめ、「大同市の代表的な樹種が



そろっている」そうですが、斜面が急すぎてとても近寄れません。これほど苦勞してきたのですが、植生調査の対象にはむりです。李向東たちは「去年、200kg以上の種子を集めたのはここだ」といっています。どうやって採ったのでしょうか。人間がちがうのです。

帰路、ふたたび谷筋にもどる直前に、放牧のヤギにであいました。100頭近い群れを1

山の奥にあった自然林。一抱え以上の木もある

人の老人が追っていました。ヤギたちは急な崖も平気で駆け上がって、クヌギ・ハシバミ・ヤマナラシなどの葉や若枝を食いちぎっています。李向東は「これだけのヤギが1年1万本以上の木を食べ尽くす」といっています。村へとつづく谷底の川には、一見、きれいな流れがあるのですが、その周囲では家畜のフンの臭いが、ツーンと鼻をつきます。放牧の圧力の届かない山奥にだけ自然林が成立する事情がひと目でわかります。

ちょっと疲れぎみで、宿に残っていた遠田先生に今日の体験を話すと、「いや～、残っていてよかった。悪い予感がしたんですよ」といって笑います。私は「きょうは疲れたんじゃない、壊れたんですよ」と返しました。

4年ほど前のことです。その直前まで日本大使館の公使だった下荒地修二さんといっしょに、高松の講演会で話したことがあります。私は黄土高原の緑化について話しました。翌日、大阪に帰る電車の網棚に捨ててあった『山陽新聞』をみて、びっくりしました。私の講演を要約したなかに、「中国の黄土高原では20年前からネズミが大発生し、山が丸裸になってしまった」とあったのです。ていねいなことに、私のカラー写真まで掲載されています。恥ずかしくて瀬戸内には2度といけないな、などと思ってしまいました。

講演会で私が、「黄土高原で森林がなくなったのは、『頭の黒いネズミ』が大発生したためです」と話したのは事実です。でも話し終わったあとの質疑応答で、「頭の黒いネズミってなんですか？」という質問があり、こういう例えは死語になったのかと驚きながら、「それは人間のことです」と答えたのです。

同じ体験が大同でワーキングツアーを迎えたときにもありました。その夜、「頭の黒いネズミってなにネズミですか？」と質問にきた大学生がいたのです。べつの講演会では、「頭の黒いネズミって中国人のことですか？ 差別じゃないですか」と学校の先生に詰め寄られたこともあります。こういう表現は、いまの日本では通用しないようです。



以前にも書いたかもしれませんが、いま私が滞在している大同には、4世紀末、鮮卑族の王朝・北魏の都がおかれ(平城京)、5世紀には100万都市に発展したそうです。当時、中国最大の都市でした。ということは、おそらく世界最大の都市だったのでしょうか。

中国は歴史の国であり、文字の国です。その当時のようすを書いたものが伝わっていて、「草木が山野に茂り、水の清らかなところ」とあるのだそうです。いまの環境とくらべて信じられないことですが、そのような条件がなければ、大きな都は成立しえなかったでしょう。わずかに雲崗の石窟などが、その時代の輝きを伝えているわけです。

大同市の最南部の霊丘県で、自然植物園の建設にとりかかり、昨年春から86haの敷地内の放牧を禁止したところ、半年ほどのあいだに草や木がふえ、生えている種類も変わってきました。ことしの夏にいとってみると、全体の緑が昨年よりずっと濃くなっています。遠田宏顧問は「毎年、定点撮影する必要がありますね」と話しています。自然の回復力は、思った以上につよいようです。そのことか

大同には輝いた時代があった。雲崗石窟  
第5窟

ら逆に、放牧や柴刈りなど、頭の黒いネズミが植生に与えているストレスのつよさがわかります。

それだったら、放牧や柴刈りをやめればいいではないか。そのとおりです。貧しい山間の村では耕地が少ないため、生計のかなりの部分を家畜の放牧に頼らざるをえません。しかし、その人たちが放牧によってえる収入も、じつはわずかなものです。放牧に代わる収入源・産業を近くにつくりだし、柴刈りに代わる燃料を供給することができれば、条件のあるところでは、木を植えなくても、りっぱな森林が成立しうるのです。

そのコストはたいしたものではないでしょう。都市への投資のほんの一部をまわせばいいのです。それをやりうるのは政治しかありません。それができないのなら、頭の黒いネズミはいつまでたっても利口になれない、ということでしょう。中国だけがそうなのではありません。

## NO. 57 環境林センターのマスタープラン 2000. 08. 18

大同における私たちの緑化拠点・環境林センターは、ことしの春、20ha の土地の 20 年間の使用権を購入し、一挙に拡張しました。ことしの夏の課題の 1 つが、拡大されたセンターのマスタープランづくりでした。立花吉茂代表、遠田宏顧問などの専門家が連日、敷地内を調査し、有効な活用方法を探りました。

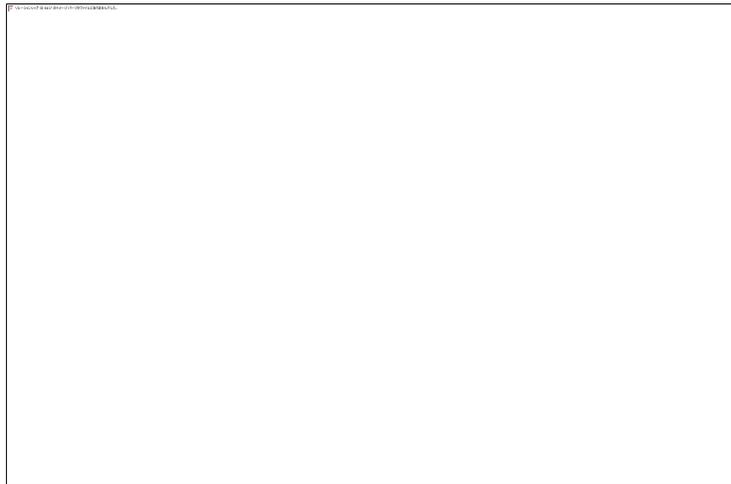
20ha というのは、なかなかの広さです。「ヘクタールといわれても実感がわからない」という人に、「20ha=20 町歩=6 万坪」なんて換算をしても、あまり意味はないようです。東西の間口は平均で 250m、長いところは 340m あります。南北の奥行きは 820m で、新装なった正門からポプラ並木を通してみると、端っこはかすんでいるほどです。ザーッと 1 回、敷地内をみてまわるだけでもかなりの時間がかかります。

もともこの土地は軽い塩害地だったようです。50～60 年代に、ポプラ(小葉楊)の造林がおこなわれ、やがてそれは小老樹になりました。小老樹のおかげで、いくらかでも土壤の改良がすすんだのをうけて、いまから 13 年ほどまえに、果樹園が造成されました。大部分はリンゴナシ(萍果梨)です。果樹園のなかの、あまり育ちのよくないところを借り受けて、私たちの環境林センターはスタートしました。育苗その他を開始したのは 96 年春からです。

場所によって土質にかなりのちがいががあります。遠田さんの表現を借りれば、「三毛猫の背中のような」ということになります。全体としては、アルカリが強く、土の粒子が小さく、砂分が少ない、という問題があります。去年の春から開墾した南西の一角は、砂の含有量が多く、苗圃として使うにはいいところですが、残念ながら水の便がよくありません。うまくいかないものです。

育苗に使うばあい、なにかの苗が圃場を占有しているのは長くても2~3年です。短いばあいは1年以内です。ですから、育苗にかんしては、長期的なプランをもたなくてもやっていけます。面積が広がったぶん、輪作などにも余裕をもてるでしょう。今回、急いだのは、長期に固定するものの場所を決めることでした。

大同から遠くない懷仁県金沙灘鎮に、ドイツのODAによるポプラの研究所が開設され、13年間活動を継続し、数年前に終了しました。きくところによると、そこでの成果があまり生かされて



環境林センターの正面入り口付近につくった見本園

れていないようです。お金と時間をかけて作り出された改良種のポプラも、利用されていないというのです。そのなかの42種類をゆずりうけて、センターの実験苗圃で育成しています。ほかからのポプラもそれにプラスして、やがては見本園をつくりたいと以前から思っていました。その場所だけは、いまから決めておく必要があります。2~3年後にまた植え替える、というわけにいかないからです。

現地の技術者には、「ポプラだけでなく、この地方に育つ樹木の見本園にしたい」という意見があります。でも、環境林センターの重要な任務が良質の苗木の提供にあることはいまでもないので、全体の面積をどのように使うかは、これから検討しないといけません。

敷地の東北の一角、つまり正門をはいってすぐの左側が見本園に決まりました。ここの土質はあまりよくありません。現状はリンゴナシが植わっていますが、生育はあまりよくありません。というのは遠慮した言い方で、経済的にはまったく無価値です。枯れてしまったものが多く、台木の杜梨の伸びたものも少なくありません。すぐにでも抜き去ることに、誰も異存はありません。土質の関係から苗圃としては使いにくいので、ここを見本園にすることは、すんなりと決まったのです。

見本園をつくりたいと思ったもう1つの理由があります。このところ環境林センターは見学者がひっきりなしです。私たちがいるあいだにも、大同市の各小学校の豆記者50人ほどがやってきて、技術者・郭有権の案内で見学していました。その翌日は理工大学の学生、20名弱がやってきました。大同市の幹部たちも入れ替わり立ち替わり見学にきます。大同事務所の武春珍所長によると、「いま日本の専門家が滞在していて忙しく、接待ができないといってことわりつけているのにこうだ」ということです。

そのような見学者に、環境問題をアピールする場をもつことは悪いことではありません。「見学ルートをつくり、解説板を設置したり、案内のパンフレットをつくったりする必要がありますね」と遠田顧問が話していたところでした。見本園はその重要な一角を占めることでしょう。

## NO. 58 環境林センターの水問題 2000. 08. 19

環境林センターの建設について、より重要な問題があります。それは水問題です。専門家の滞在中、かなりの時間を割いて、この問題を検討しました。

環境林センターは従来、3種類の水源に頼ってきました。1つは拡大された敷地の北東の角にある井戸の水です。深さ120mで、水量は豊富ですが、砒務局の所有で、水を使うにはかなりの使用料を払わないといけません。管理棟の生活用水と温室の水、そして実験苗圃の灌漑をこの井戸に頼ってきました。

2番目の水源は、この春、センターの敷地の使用権を購入したとき、70年代に村が掘った井戸がオマケについてきたものです。深さは79mで、ポンプは70mのところ設置されているそうです。電気の配線もなされており、小さな修理だけでポンプを動かすことができました。詳しい事情がわからなかったのと、資金の不足から、従来のコンクリートU字溝とポンプとを土管によるサイフォンでつないで、臨時的に利用してきました。

5月から使いはじめて、最初のうちは十分な水がでたそうです。その後、急速に水量が減り、全体の灌漑には足りないことがわかってきました。南郊区水利局の関係者によると、この一帯では地下水位が1年に3m前後も低下しており、このクラスの井戸はつぎつぎ涸れているそうです。「大同市の地下水位は毎年2~3mずつ低下しており、2008年には完全に枯渇する」と地元の新聞が書き立てるくらいですから、長期的にみて、この井戸にはあまり期待をもてません。

大同の水問題について、朝日新聞中国総局の鈴木暁彦記者が取材した記事が「乾く中国 水不足深刻～山西省大同を見る」と題して、8月2日、東京版に掲載されました。冒頭に登場する武春珍さん(37歳)は、ごぞんじ緑色地球ネットワーク大同事務所長ですし、その他の村も緑の地球ネットワークの活動に関係するところですので、とてもよくできた記事だと思いますので、みなさんのご一読をおすすめします。大阪版その他に掲載されたかどうか、ご存じのかたは教えてください。



話をもとに戻して、第3の水源地です。これは砒務局住宅の生活污水を引いたもので、付近の野菜畑の灌漑にもほとんど未処理のまま利用されています。「節水灌漑」のモデル処理施設もありますが、直径20m、深さ12mの沈殿槽が1つあるだけで、処理後の水質がそれほど向上しているとは思えませんでした。

**大同の農村は水不足が深刻。湧き水を求めて馬車が順番を待つ** この汚水には人糞尿も含まれており、BOD、CODともに高いのですが、「重金属などの有害物質は含まれず、灌漑に使っても差し支えない。有機質を含み、水温も高いので作物の育ちがいい」というのが、地元の関係者の説明です。検査データももらってきました。水路のそばをとおるとプーンと臭い、見た目にも相当の汚れですが、イトミミズ、カエルなどが繁殖しています。

水量としては十分です。汚水道の本流から一帯の野菜畑に引き込むための分水施設があり、バルブを調整して、必要量を引き込んでいます。以前に比べると流量が減ったそうですが、地下水資源保護のために、水道代が高く設定され、水の使用量が減ったためだということです。量的には、必要量の確保に問題なさそうです。

センターでも、他の苗圃でも、この汚水を灌漑に使ってきました。しかし、ポプラの挿し木苗圃や実験園に汚水は適しません。挿し穂が腐って全滅した苗圃も他にあるようです。挿し木など限定的な用途には、地下水を使う必要があります。大きくなった苗木の灌漑には、生活污水をつかっても、とりあえずの問題はなさそうです。

これからも、最低2つの水源地を併用する必要があるでしょう。1つは、あの汚水を、可能なかぎり浄化して利用することです。環境林センターがパイロットファーム的な要素を強めていることからすれば、できるだけ簡単な施設で、周囲に波及効果をもつようなものが望ましいのです。ということは、経費的にも安くすむということです。土地はあるので、処理施設の面積は広めにとることが可能です。

冬の最低気温は零下20度以下になりますが、灌漑が必要なのは春と夏なので、冬期に処理能力が低下してもかまいません。ことしのうちにも基本設計をおこなう必要があります。その方面にくわしい方がいらっしゃいましたら、ぜひご協力をお願いいたします。

第2に、地下水をつかう必要もやはりあります。79mの井戸が涸れるのは、周囲の事情を考

えると、おそらく時間の問題でしょう。中期的には、一帯のスタンダードになっている最低でも120mの井戸を掘る必要に迫られることでしょう。

それ以上に重要なのは、出口にどのような灌水方法を採用するか、という問題です。この地方の地下水にはカルシウムその他の含有量が多く、小さなノズルをつうじて灌水する方法(たとえばイスラエル方式)は、失敗の例があります。汚水のばあいは、もっとむずかしいでしょう。この問題については、あらためて書くことにします。

## NO. 59 農村の子たくさん 2000. 08. 21

ワーキングツアーの人たちが農村を回っていて、びっくりします。最近の日本の農村を知っている人の驚きが、とくに大きいようです。農村にたくさんの子どもがいるんです。私たちの訪問予定が決まっている村はもちろん、臨時的に車を停めただけの村でも、すぐにたくさんの子ども(と大人)が集まって、好奇心たっぷりの目をむけてきます。

それが日本人たちにはうれしいようです。年配の人はおたがいに話しあいます。「自分たちがこどものころはこうでしたね。眼が輝いています。日本ではこういう光景はなくなっていました」と。そして中国について多少の知識のある人がいます。「こんなにこどもがいるってことは、農村には1人っ子政策ってないんですか?」。産児制限のことを中国では計画生育といい、もちろん農村にもあります。道路の両側、公共の建物や農家の土塀、あら

ゆるところにこの計画生育のスローガンが書かれています。

大雑把に言えば、農村では2人っ子政策です。でも実際は、3人、4人はめずらしくありません。まれではあっても5人、6人の家庭もあります。私が出会ったなかで、いちばん多いケースは8人です。

天鎮県のある村でのことです。外で遊んでいた10人ほど

### 子供たちと手をつないで農村を歩く

の女の子のグループと手をつないで村のなかを回っていました。通訳の王萍がまじっていたので、彼女たちも警戒心がなかったのですが、私と手をつなぐくらいですから、女の子といっても小学校の低学年です。

そのうち数人の顔がそっくりです。「あんたたちは姉妹？」ときくと、「そう」といいます。「じゃあ、あなたたちは何人きょうだい？」ときくと、帰ってきた答えは、「6人きょうだい。末っ子が男だったから、おとうさんも、おかあさんも、もういいっていつてる」。「でもね、あの子の家はね、女の子ばかり8人だったから、そのうち2人を里子にだして、9番目をまだがんばってるよ」。これが小学校低学年の女の子の会話ですからね。こどもの頭でどこまで理解しているかは別として、計画生育が農村の重要課題であることは、そこからでもわかります。

後継ぎ、といえば、男の子なんですよ。女の子は子孫のうちに数えられないんです。そのぶん、女の子には移動の自由があって、どこにでもいけます(必ずしも自分の意志ではありませんが……)。だから、男のほうがいい、と単純にいえるものではありません。

貧しく閉鎖的な農村では、子孫を残して先祖をまつことが、人間として生きることの意味、畜生でなく人間であることの意味、だと考えられているようです。結婚できなかつたり、男の子を残せないのは、自分も不幸ですが、先祖にたいして不孝なのです。「男の子ができたから、しっかり働く気持ちが出てきた」という農民もいました。

もちろん、それだけではありません。この一帯の農村は、土地の生産性が低いぶん、農家1戸あたりの面積は広くなります(相対的なものですが)。条件の悪い村では、その広い畑を人力で耕さなければなりません。機械はもちろん、畜力すら利用できないばあいが少なくないのです。

さらに苦労なのが水汲みです。井戸から遠い家は、重たい水をついで、3時間もかかって往復するのです。そういう仕事は、たいてい男が中心になります。そのあたりの事情は南の国とはちがいます。

そのようなところで、男がいなかったら、一家はなりたちません。公的な社会保障が期待できないなかで、家庭を成り立たせ、自分たちの老後をまかなうためにも、最低、1人の男の子を残す必要があるのです。男の子ができるまで生みつづけるのにも、理由がないわけではありません。

スローガンが現実になり、計画生育が徹底するには、まずその社会的な環境を整える必要があるでしょう。しかし、水と土地のキャパシティを超えるたくさんの人口を抱えた農村が、自分の力でその環境をつくりだすのは困難でしょう。そして、これ以上、人口が増えれば、生きていくことすら困難になるかもしれません。

## NO. 60 自然林へのアクセス(1) 2000. 08. 24

私たちの緑化協力地・山西省大同市の最南部・靈丘県に、何か所かの自然林が存在すること

を98年夏に確認してから、植生調査の実施が大きな課題でした。そういうと、「グズグズしないで、さっさとやったらいいじゃないか」といわれそうです。そのとおりです。でも、それがそう簡単ではないのです。

私たちのアクセスにもう少しつきあってください。自然林があるのは、村から遠く、道がなく、往復にまる1日かかるところばかりです。調査のためには最低1~2泊のキャンプが必要なので、今回は北京でテント、シュラフ、その他を買いそろえました。

日本人のメンバーは7人、中国側で必要なスタッフを加えても、せいぜいその倍ですむはずですが、市の外事弁公室、県の公安などを加えるうちに、30人近くに膨張してしまいます。ほんとうに現地にとどりつけるのは、かなり減ると思われるのに、食事・宿泊の準備も、表向きは全員のぶんをしておかないといけないのです。

7月にきたダイハツ・ハイキングクラブのコースは、今回の調査の下見をかねるはずだったのですが、ルートがきつすぎ、テントを張る場所がないので、つかえません。調査グループの全員が8月7日朝、大同にそろおうのですが、私は1日早く霊丘に向かい、下見をやりなおすことにしました。

霊丘の県城でおちあった地元の李向東(霊丘植物園の責任者)にいいました。「あんたたちの情報が信用できないから、自分でたしかめにきたんだ。あんたのいう1kmは3~4kmのことだってあるし、方位だってデタラメだ」。かなりイヤミったらしく、言葉にトゲがあったにちがいありません。李向東が答えました。「高局長(李向東は私のことをこう呼びます)、もうしわけない。自分は農村の生まれ育ちで、多くのことを勉強する機会がなかった」と。

責任は彼らにはないのです。そのことは私にもわかっているのに、あんなことをいってしまいました。この県にも、等高線のはいった、かなり詳細な地図があります。私はみたことがあります。しかし、そんなものをふつうの人、ましてや農民が目にする機会なんて、まずありません。地図をみたことのない人の方位や距離の感覚に、不十分なところがあるのは無理ないでしょう。たいていの人の土地勘は、面ではなく線をもとにしています。「あそこを左に回って、つぎを右に回って……」。そのあいだに大きな分かれ道があったとしても、自分に用のない道は省かれてしまうのです。

それにしても、いま地図を秘密にすることの意味ってどこにあるのでしょうか。軍事大国は、人工衛星その他をつうじて、たいていのことはつかんでいるでしょう。そこに住んでいる人たちが、自分たちのことを理解できないのです。こういうことを愚民政策というのでしょうか。なんて日本人の私がいうと、はねっ返りがくるはずですが。中国がかたくなになったのは、侵略されつづけた民族の歴史に根ざしたものだ、と。

その翌日、私たちは、いちばん近づきやすいと思われるルートをたどりました。目標になったのは、日中戦争のさいに、靈丘県の県城が日本軍に制圧されるなか、県政府が山深く逃げ込んでいたところです。カナダ人の医師、ノーマン・ベチューンも滞在したことがあるそうです。そのように尋ねると、村々のお年寄りも事情を知っていて、私たちを的確に案内してくれました。



靈丘県の農民技術者・李向東

途中の行程の厳しさなどはいっさい省きます。県政府がおかれていたところには、ネズミのひたいほどの小さな畑(だったところ)がありました。石垣を積み上げ、なかに土を運び込んであります。とれる作物なんてタカがしれているでしょうが、それでも必要だったのでしよう。私たちの4人用テントも、畑1枚に1張ははれますから、ここをベースキャンプにすることができます。

その奥に現れた自然林は、信じられない存在です。こんなものが、この地方に存在しているのは、奇跡としかいいようがありません。午後になってシトシト降りだした雨に濡れ、重くなったからだで、私は自然林のなかを登ったり下ったりして、そのようすを観察しました。

くる途中の村で、情報をしれました。「行政的には山西省だけれども、じっさいには河北省のほうが近い」と。運転手の小郭も、「帰りは河北省経由で帰ってみましょう。それが近いようなら、明日はそっちのルートをとりましょう」といいます。自然林にいちばん近い二嶺寺村までは、どちらのコースも車で3時間ですが、河北省回りのほうが、深い谷底に落ち込む危険が少ないぶん、安全度は高いようです。

## NO. 61 自然林へのアクセス(2) 2000. 08. 30

下見から帰った8月7日の夜、1日遅れで靈丘に到着した調査グループのメンバーと合流しました。立花吉茂代表もまじっています。心配なのは天候です。立花代表は自他ともに許す「雨男」です。この地方の農民にとって、いい天気とは雨の降ることです。ことしも早魃で、先日訪れた大同県の村でも、「マメはだめになった。あと1週間、雨が降らなかつたら、アワとキビが全滅する」といっていました。そうだとすると、こちらでも2年ごしで準備をし、テントその

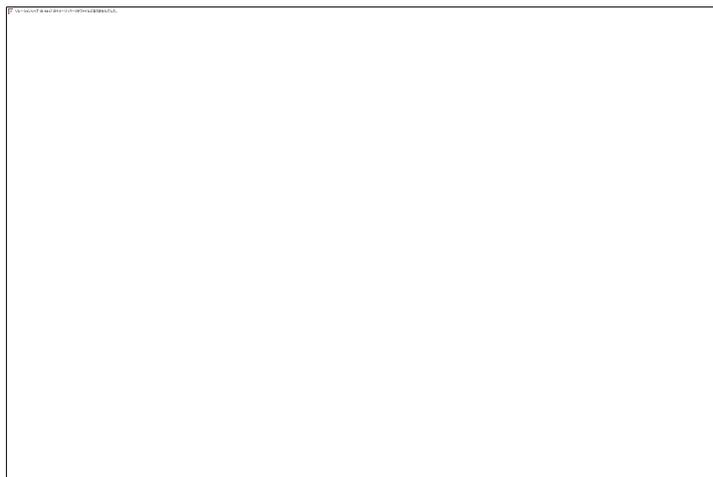
他を買い込んできたのに、雨がつづいたのでは調査になりません。せっぱつまと、人間、自分のつごう優先で考えてしまいます。

翌日は朝から雨でした。黄土の地道に雨が降れば、ぬかるんで車は通れません。ただでさえ、危険なところのある道です。キャンプはもちろん、現場に近づくこともできそうにありません。そうそうに予定を変えて、县城近くの太白山で、草花を観察することにしました。植物が豊富なことで有名な太白山は、となりの陝西省ですが、靈丘県の太白山も草花が豊富です。

県の気象局に問い合わせてもらおうと、翌日は天候も回復しそうです。気をとりなおして準備をはじめました。ところが、夕食の席に悪い知らせがきました。狼牙溝郷まわりの道は、きょうの雨で路肩が崩れて、通行不能になったそうです。つづいて入ったのは、河北省ルートも、川が増水して通れないというニュースです。「没法子」(メイファーズ=どうしようもない)というところでしょうが、私たちにはもう1つ道がありました。

7月下旬にダイハツ・ハイキングクラブとたどった、あのルートです。車での移動距離が短く、途中の道路も舗装がしてあり、雨による被害はないでしょう。車でいけるのは納士台村まで、あそこまでなら县城から1時間半でつきます。問題は、歩きの距離の長いこと、登りがきついことです。ダイハツ・ハイキング部は3時間半で片道を歩きましたが、植生調査の実施には、さらに歩かないといけません。つい先日は、「なんてコースにつれてきたんだ」といって、呪いのことばを李向東にむけたのに、なにが幸いするか、わからないものです。

思い起こすと、この協力活動は、そういうことの連続だったような気がします。手ひどい失敗をし、立ち上がれないくらいダメージを受けるのに、つぎに追いつめられたとき、前回の「失敗」が、いつのまにかエースに変身しているのです。「失敗は成功の母」なんて、かんたんなことばでは言い表せません。



李向東が見つけ出してきた男・周金

立花吉茂代表、遠田宏顧問には、靈丘自然植物園に残って、育苗その他の指導をしてもらうことにしました。そうするとチームの最高齢は大阪市立大学植物園長の岡田博さんで、私と同郷・同世代のうえに無類の酒好きです。なんとかなるでしょう。立花代表をはずしたのは、自他ともに許す雨男に、おとなしくしてほしかったからです。

でも、ほんとにきつかった～！！山の入口に急な登りがあり、早くもその段階で私は「ハー

「ハー、ハーハー」。このところずっと忙しく、しかも3日つづいて山歩きなので、そのせいかな、と思ったのですが、同一行動をつづけてきた高校同期の池本和夫さんが平気な顔をしていて、「毎晩おそくまで酒びたりになってるからですよ」なんてイヤミをいいます。

納土山の山頂は1710mほどですから、歩きはじめからの高低差は700mほどです。植生調査の現場は、頂上からちょっと下がったところで、頂上まで上がってしまうと、アクセスができません。「ここからいくんだ」という霊丘植物園の職員・周金のことばが信じられませんでした。ほとんど垂直と思える岩壁に、よくみると、幅20~30cmほどの踏み分け道がついています。そこを伝わるのです。

なんとか無事にたどりつき、最低限の調査を実施して、また無事に帰りました。調査内容については、専門家のまとめがでてからのほうがいいでしょう。すこしあとにまわします。

私なんか、口も開きたくないほど疲れきっているのに、街歩きのクツで同行した大同事務所の武春珍所長は、帰りの車でもしゃべりっぱなしです。「こどものように元気だな」と私がいうと、北大演習林の浪花彰彦さんが「いくつなんですか?」「37歳ですよ」と私が答えると、「えーっ、とてもそうはみえませんね」と彼もびっくりします。ほんとに彼女はいつも元気です。

【注】この山を地元の人々は「納土山」と呼んでいますが、地図で確かめると「碓寺山」とありました。

## NO. 62 花の命は短くて… 2000. 09. 01

ワーキングツアーのメンバーが、数グループに分かれて、農家に泊まったり、昼食をごちそうになったりします。通訳の数がたりないので、片言レベルの私なんかもかりだされます。そんなときの話が、「あんたはいくつだ?」「いくつにみえる?」といったたあいのないもの。それをくりかえすうちに、法則性のようなものをみつけました。

多くの人が体験しているように、中国の農村では、日本人は実際の年齢より若くみられます。気持ちをくすぐられた人もいます。ところが、中学生、高校生、そして大学生の一部くらいまでの人は、実際の年齢より上にみられるのです。その境目は20歳をちょっとすぎたあたりにあります。

日本人(もしくは都会の中国人)が中国の農村の人をみるときは、それをひっくり返した関係になります。農村の子どもや若い人は、実際の年齢より幼くみえるのです。はじめて農村にいった大同事務所の通訳の王萍が、子どもの年齢をきいては、「高見さん、この子たちは都会の子にくらべてずっと小さいですよ」と驚いていたことを、以前の通信に書きました。

92年の秋、1人で渾源に滞在していたときの事です。恒山飯店のサービス員にかわいい娘がいました。中学生くらいかな、と思っていたのですが、年齢をきくと18歳でした。「そのうちに、あなたの喜糖(シータン)を食べたいな」なんて、からかうつもりでいうと、「じゃあ来年、またきてください」とま顔で答えるのです。喜糖というのは、結婚式のときに見物客に配られるアメの事です。「えーっ、もう来年、結婚しちゃうの!」。あまりに幼く、痛々しく感じられます。



美女の写真を探したのですが、みつかりません。  
さんになっていることでしょう。

つぎの年の秋にいくと、彼女は職場を変っていて、すぐ近くの中国人相手の旅社で働いていました。お腹がつきだしているのが、小柄なために目立ちます。でも、どっしりしてきて、前年の痛々しい感じは、どこにもありません。子どもの1人、2人を生んだら、しっかりしたオバ

さんになっていることでしょう。

やはり92年の秋、いまは朔州市に所属する懷仁県で活動したときの事です。青年団のトップ・田東は有能かつまじめな男で、私はすっかり信頼していました。ここを協力の拠点にしたいと考え、新家園郷に苗畑を計画しました。その整地作業に加わっている農民のなかに、私の父親そっくりの男がいたのです。何枚も写真を撮り、いっしょに記念撮影をしました。あとで年齢をきくと、なんと、私より若いのです。

こどもの成長が遅いのは、動物性タンパクはじめ栄養量が最大の原因でしょう。私も庭先で家庭菜園をやっているのですが、化学肥料をやらないで、ダイコンやハクサイを育てると、最初の伸びがおそいのです。でも、ダイコンもハクサイも、最終的には市販のものと同じ大きさになります。だけでなく、スのいりが遅かったりで、いいのです。大同の農村の人たちも、子どもの成長が遅くても、大人の背丈は小さくはありません。それだけ充実している、といっいいでしょう。

その逆に、ある年を超えて急に老けるのは、栄養のせいもあるでしょうし、労働のきつさもあるでしょうし、紫外線の強さも影響するでしょう。それが基準になりますから、日本からきたある年齢から上の人たちが、年若くみられるのはあたりまえです。

これまで書いてきたことをまとめれば、「花の命は短くて…」です。とくに女性たちは、20歳前くらいまでは、ゆっくりと育ちます。ところが、結婚し、子どもを産んだとたんに、転げ落

ちるように急激に老け込んでいきます。魅力的な中年はいない、ということになります。

93年の秋、渾源県の温増玉林業局長に誘われて、彼の愛用の森林消防のジープに乗り込みました。となりの席に座っていたのが、これまで会ったことのない、すてきな中年女性だったのです。しごとを尋ねると、渾源テレビのアナウンサーでした。なるほど。ちゃんとした通訳はないので、むこうも手持ちぶさたで、こちらの年齢をきいてきました。そのときは45歳でした。そう答えると、「信じられない、ずっと若く見える」という答えが返ってきました。

しめしめ。こちらも遠慮なく、彼女の年齢をききました。「いくつに見えるか？」ときき返ってきます。同じくらいかな、と思ったのですが、外交辞令というものもありますから、「40歳くらいでしょう」といいました。すると「不对(ちがう)」という答えが返ってきました。なんと、先方はそのとき32歳だったのです。発展の可能性を、一言でつぶしてしまいました。なんていっても、もともといくじなしなのですが……。

## NO. 63 旗・看板・道・根 2000. 09. 08

雲崗賓館といえば、大同でいちばん格式の高いホテルとして通ってきました。ところが最近では経営不振で、かなりの額の赤字をだしています。新しいホテルがつぎつぎに建ち、設備もよく、宿泊費も相対的に安いので、客が流れます。もちろん、原因はそれだけではありません。雲崗賓館は国営で運営が硬直的で不経済、サービスもよくないからです。

政府の招待所として出発した大同賓館、雁北賓館にはそうした傾向がより深刻でした。新しい建物を建て、内装・外装を全面的にやり換えたのに、客はふえず、赤字は増すばかりです。たまりかねた政府は、これらのホテルを手放しました。売却価格は大同賓館のばあい6,000万元(1元=13.5円)で、買ったのは若い民間の経営者。建築や不動産でのし上がってきた人です。

雲崗賓館も売却の話がもちあがりましたが、いまのところ本体は国営のままです。そのかわりに、1階と2階のレストランは1年30万元で民間に売られました。買ったのは市内でレストラン・チェーンを経営している若手です。

経営者が交替したとたんに、大きな変化がおこりました。内装が全面的にやりかえられ、明るくスマートになりました。料理の品ぞろえが、豊富になり、味も一変しました。新しいホテルが建つまえ、雲崗賓館は、設備は大同一だけれども、食事がまずいとって敬遠されたのです。従業員のサービスもよくなりました。経営が替わったとたんに、従業員の大半は入れ換えられたのです。当然のことに、客の数もふえています。

もともと石炭に頼りきっていた大同は、石炭から石油・天然ガスへのエネルギー転換で、深

刻な経済不振におちいりました。脱却の道として語られるのが、「石炭から観光へ」です。雲崗の石窟をはじめとする文化遺産をいかして、生き残り策を探しているのです。

それは必ずしも順調ではありません。若手の幹部たちは、自嘲げみに語ります。「大同人は石炭にたよりすぎていた。掘りさえすれば売れたから、それ以上のことをする必要がなかった。そのように暮らすあいだに、頭を使って考える習慣がなくなった。石炭のたどる道はわかっていたのだから、もっと早くほかの道を探さないといけなかったのに、頭をぶつけるまで、それをしなかった。いまになって構造改革といっても、大手術に耐える体力がなくなっている」。

いろんな見方ができるでしょうが、とりあえずは「石炭から観光へ」の波に乗って、たくさんホテルとレストランができました。もうけ仕事にめざとい南方の資本も進出しています。



大同市内の中心部にある鼓楼

日本では景気が落ち込んで最初にダメになる産業が、大同では盛んになっているのは、私には理解しにくいことです。ひよっとすると、「花見酒」なのかもしれません。

それらの多くは私的な資本や、個人の請け負いによるものです。従業員は「親方日の丸」ならぬ「親方五星紅旗」から、市場経済に投げ入れられます。経済法則というより、もっと直

接的な金銭関係のなかにはいっていくわけです。

日本の新聞にも載りましたが、いまの中国社会を風刺することばに、「旗は共産主義、看板は社会主義、道は資本主義、根は封建主義」というのがあります。酒の席でそれを話題にすると、「まさにそのとおりだ」という答えが返ってきます。

先日、北京であった年配の知識人は、「社会主義のよさはなくなったし、資本主義のいいところはいまもない」といって嘆きました。社会の腐敗はひろがっています。中国はこれからどこにいくのでしょうか。

政治と宗教にかかわらない、というのが NGO の鉄則だそうです。まして、外国の政治について発言したり、かかわったりするのは、避けるべきなのでしょう。くわばら、くわばら。

## NO. 64 「カササギの森」プラン 2000. 09. 10

緑の地球ネットワークの中国山西省大同市における緑化協力は、92年1月から始まり、地元の人たちとの共同による植林は、970万本、3,100haまで広がってきました。94年から日本の専門家の積極的な参加と協力があり、技術の改善や人材の育成といった面でも前進しました。緑化や国際協力の専門家たちの評価も高まっています。

その一方で、活動の内容がだんだん複雑になり、場所も7県4区に広がっているために、一般の人にはわかりにくい面もでてきました。自分の活動として実感できるものがほしい、という要求が、ワーキングツアー参加者などからでてきます。

中国側でじっさいに活動をすすめている緑色地球ネットワーク大同事務所のほうでも、自分たちで直接管理し、さまざまなやり方を自由に試せる自前の林場を建設したいという希望があります。そのような力もついてきました。この2つの望みをドッキングすることにしました。

管理が便利で、短時間のツアーも実施可能なところとして、大同県で数か所の候補地を検討した結果、98年から協力関係のある聚楽郷采涼山の植林地の隣接地にとってもいい場所がありました。麻地溝という幅70~100m、奥行15kmの谷があり、その底には四季を通じてきれいな水が流れています。砂地の下には伏流水があり、ポプラやシンジュなどを植えれば、すぐに大きく育ちそうです。

グミのなかまのサージ(沙棘)やヤナギが自生し、人の背丈を越えて育っています。「ポプラを植えれば」とさっき書きましたが、わざわざ苗を植えなくても、ポプラなら枝を切ってきて、直接地面にさしても、容易に活着するでしょう。これまでマツ中心に植えてきて、育ちの遅いのが悩みでしたので、ときにはすぐに緑になるものを植えるのも悪くありません。

この谷の両側には、水土流失の深刻な黄土丘陵の荒地が広がっています。9月8日、地図を囲んで聚楽郷のトップの張春書記と相談しましたが、2km×4kmの土地(植林が可能なのは60~70%)の50年間の使用権を無償で提供してくれるそうです。

丘陵にはアブラマツ(油松)、モンゴリマツ(樟子松)をはじめ、いろんな樹種を試すことができます。先に草を茂らせ土壌改良してから木を植える、喬木と灌木を結合し灌木を重視する、といった以前からの課題も、自前の林場なら気がねなしに実行できます。樹木の所有権は大同事務所に属しますので、将来への励みになります。年数をかけて、少しずつ緑化していけばいいでしょう。

聚楽郷は1万haからの土地があるのに、人口は4,500人ほどです。敷地のなかの村は、以前は400人の住民がいたのに、若い人が外にでて、いまは老人が20~30人残っているだけで、農

耕にも不自由しているようです。大同県は面積に比して人口の少ないのがふしぎですが、ここはその典型です。

「荒れ地の緑化は自分たちの任務だから、それを手伝ってもらえるのはありがたい」と、党書記は語ります。彼は、以前から緑化に熱心で、かつ有能な人です。緑化の全国模範として表彰された経歴もっています。

大同から陽高にむかう道路の修理中ですが、完成すれば、市内から 30 分もかかりません。麻地溝の奥に花崗岩の採石場があることから、谷底にも車の入れる道があります。

中国側では「青年林場」という名称を準備していますが、私たちは日本で愛称を募集し、「カササギの森」に決めました。この愛称には中国側も大賛成です。

カササギ(中国名=喜鵲、学名=Picapica)はカラスのなかまですが、胴と羽の一部が白く、白と黒のコントラストがあざやかです。白い部分以外は黒だと思っていたのですが、近くで見ると、ルリ色や緑に羽が輝き、かわいい鳥です。中国北部と朝鮮半島にはたくさんいますが、日本では佐賀県の一部にまとまって生息するだけで、ほかにはほとんどいません。

七夕の夜、牽牛と織姫がランデブーするとき、カササギが銀河にかけの橋を渡るという寓話があります。そこからきたのでしょうか。中国では男女を結びつける鳥としてだいにしています。「喜鵲がくるといいことがある」ともいいます。日本の私たちがツバメをたいせつにするようなものです。そのためでしょう。人を恐れず、そばまで寄ってきますし、家のそばのポプラに小枝を材料に大きな巣をつくります。

そんな話のなかで、大同事務所のメンバーは、「そうだ。自分たちの林場なんだから、青年団でボランティアをつのろう。結婚や子どもの生まれた記念に木を植えるのもいい。緑化と環境のたいせつさを知る体験学習になる」といってはりきっています。「カササギの森」は、中国側の活動にとっても、飛躍の契機になるかもしれません。

日本では 1ha あたり 5 万円(管理費を含む)の協力資金で、たくさんの人(グループ)の参加を呼びかけることを、世話人会で決めています。マツと、サージもしくはネイジョウ(樺条=マメ科の灌木)を 1ha あたりそれぞれ 3,300 本植えます。ポプラやシンジュだとおおよそ 800 本です。このプランに参加した人の名前を掲示し、ときどきの育成状況を報告します。これから育つポプラにカササギが巣をつくり、谷底の水場に集う日を実現したいものです(新しい恋が芽生えるかな?)。リスもいます。みなさんの積極的な参加をお願いします。隣接地に広大な荒れ地がありますので、企業その他の名称を冠した造林も歓迎です。

## NO. 65 環境林センターの土づくり 2000.09.19

植物を育てるのは、結局のところ、土づくりです。大同市南郊外で建設中の環境林センターの主たるしごとは育苗ですから、土づくりはとりわけ重要です。でも、センターの職員は、あまり積極的になってくれませんでした。堆肥づくりの重要性を訴えると、そのときはつくるものの、量も少ないし、目を離すと立ち消えになります。

転機になったのは、この春、従来の苗畑も含めて、20haの土地の20年間の使用権を購入したことです。それだけの土地が自分たちのものになり、そこに頼って生きていくことになったことが、大きく影響したようです。いまセンターの土づくりは、3つの分野ですすんでいます。

最初に、堆肥づくりが春からはじまりました。センターの敷地の南の端に、3つの山ができています。1つは、近くの乳牛の飼育場から運んだ牛糞を積んでいます。幅7m×長さ11m×高さ1mで、いちばん大きな山です。2つめは人糞尿を中心に積んであります。3つめは草や落ち葉を中心に積みました。

合計で110立方mあり、材料はセンターの3t積みトラックで50台ぶんです。夏のあいだに切り返しをしましたが、すべて人力ですから、なかなかたいへんです。この3種類を適当にまぜあわせて、来年から使っていきます。その一部は温室のそばに積み上げ、さらに数年かけて腐熟させ、花や観葉植物を植えるための肥土としてつかいます。ことしの秋にも堆肥を積み込むため、新たにあちこちの草を集めています。

センターの敷地はもともと塩害地でした。その影響もあるのでしょうか。ポプラの苗やリンゴナシの一部の葉が黄色くなっています。原因は微量要素欠乏のようで、試みに数本のサンプルにハイポネックス(液肥)を与えたと、短時間でよくなりました。有機質を十分に与えることで、これらの問題も改善される可能性があります。

2番めは、腐葉土集めです。霊丘県狼牙溝郷の自然林にいくと、ナラ、カエデ、カバノキなど落葉広葉樹の落ち葉が林床にぶ厚くたまっており、その下にまっ黒の腐葉土があります。それを運び出せれば理想的ですが、以前にも書いたように、アクセスすら困難なところ。地元の農民に頼むにしても、量的な限界があります。

大同市北部の采涼山に、長城林場と呼ばれる造林地があります。57年からカラマツを植えており、林床に腐葉土がたまっていると、大同事務所の侯喜技術顧問から聞いていました。一般に針葉樹の腐葉土は腐るのが遅く、あまりよくないのですが、カラマツは例外で、問題なくつかえるそうです。しかし、海拔が1800m近いところで、凍結期間が長く、途中の道路事情が悪くて、これまでいく機会をつくれませんでした。

9月5日の午前、時間をやりくりして、でかけてきました。40年以上たった造林地で、カラマツは胸高直径が25cm以上に育っています。地形的に凸状のところはそれほどでもありませんが、凹状のところには20cm以上も腐葉土がたまっています。上のほうは去年の落ち葉ですが、それをかき分けると、葉の形もなくなった黒い土がでてきます。大同事務所の武春珍所長をはじめ、みんな夢中になって集め、6袋をサンプルとして持ち帰りました。

ここだとセンターからトラックで2時間半で、現場のすぐ近くまではいれます。帰ってからサンプルをみせると、花卉部の責任者の郭有権も目を輝かせました。pHをはかると、6.4です。観葉植物のなかには、アルカリの強いこの地方の土に植えると、障害のでもものがありました。水もアルカリです。硫酸第2鉄、氷酢酸などを試してみましたが、うまくいきません。この腐葉土を使用することで、改善される可能性があります。

武春珍所長は、ポットによる育苗だけでなく、育苗試験地にもこの腐葉土をいれようとはりきっています。私が滞在しているあいだに、彼らは2度、朝早くからでかけ、トラックで運んできました。1台で肥料袋160袋ぶんです。1袋には40リットル以上は入りますから、かなりの量です。道路が凍結するまでに、10台は運ぶといっています。山荒らしはいいことではありませんが、まあ、育苗のためなら許されるでしょう。

3番めの土づくりは、川砂です。センターの苗圃の土は粒子が小さすぎ、通気性の悪いのが悩みです。せっかく芽をだしても、樹種によっては、立ち枯れするものがあります。試験的に川砂や軽石、木炭などを加えたところでは、ずいぶん改善されました。それを大面積に広げようというわけです。

苗圃の南東の角で、これまでのリンゴナシを整理し、来年から育苗に使うことにしました。土壌改良のためにこの春からダイズを植え、そのまま土にすきこみました。面積は1.5haです。そこに集中的に川砂をいれることにしました。センターのトラックは小さすぎるので、16t積みのトラックを借り、20台ぶんをまずいれてみます。10aあたり21tになり、トラックの借り賃が1台あたり日本円で3000円ほど。けっこうな出費ですが、効果が持続することを考えると、むだではないでしょう。

1台ぶんの砂を畑に撒き広げる作業に、サントリー労組のツアーがとりくみました。センターの職員も加えると20数人いたのですが、2時間近くかかりました。これだけの砂を撒くのに、あれだけの労力がかかるとなると、砂・堆肥など全体ではそうとうな労働量です。でも、それによって、育苗の状態は大きく改善されるでしょうし、将来につながることです。20年間の使用権を購入した最大の効果は、こうやって長期的な視点をもつようになったことでしょう。

99年11月1日、私たちの緑化協力地・大同市の大同県・陽高県の県境付近で地震が発生し、人命に影響はなかったものの、たくさんの農家が居住不能になり、深刻な経済被害をもたらしました。私はその事情をこの『黄土高原だより』のNO. 20, 24, 25, 26に、「災害は貧困を狙い撃ちする」という題で書きつづってきました。

昨年12月、被災地を見舞った帰りに、北京の日本大使館を訪れ、杉本信幸公使はじめ館員のみなさんに事情を説明し、支援を要請しました。こころよい返事をもらったので、2つの村の小学校再建のために、外務省草の根無償資金協力の申請を、大同市青年連合会にしてもらいました。それでも不足するぶんの資金は、緑の地球ネットワークで寄付を募ることにしたのです。関係者の努力で、迅速に支援が決定され、4月には杉本公使が自分で大同にでかけて調印式がもたれました。そのさいに、被災地や私たちの緑化プロジェクトをみてもらいました。

7月末からは、いくつかのワーキングツアーが被災地を訪れたさいに、起工式が催され、さっそく工事がはじまりました。サントリー労働組合のツアーといっしょに、9月11日、陽高県友宰鎮西団堡村を訪れましたこの春も夏も、いくつものツアーが見舞ったのに、私はべつの県にいて、この村を訪れたのは昨年12月くらいです。学校にいきましたが、すぐには事情がわかりませんでした。2階建ての中学校があったはずの場所に、平屋の校舎があります。大きく亀裂がはいった2階を取り壊し、レンガの古材をつかって、横に平屋の教室がつくられていました。比較的被害の軽かった小学校は、鉄筋や鉄骨をつかって補強し、いまもついています。

話を聞いて、事情がわかりました。この村は10年間に3度の地震があり、そのたびに大きな被害をだしてきました。どうも断層のま上にあるようです。今後も地震が発生しうることから、政府は村ごと移転させることを決めました。しかし世帯数1,320戸、人口4,300人の大きな村であるため、1度に引っ越すことはできません。まずはことしの10月末までに300世帯を移し、その後5年くらいかけて、全体が移動する計画のようです。そのあいだ、村は2つに分かれ、子どもは両方の村にいることとなりますから、日本の支援による小学校は新しい村に建て、古い村は被災した学校を修理してつかうのです。

被災した農家を訪ねました。89年の地震のあと、世界銀行の借款をつかって建てられたレンガ建ての建物に亀裂がはいっていて、危なくて住めません。庭にレンガで小さな避難小屋が建てられていますが、家族の半分がいまでもここに住んでいます。残りの半分は、県城に家を借りて仮住まいしているそうです。この家は第1陣として新村に移ることが決まっていると話していました。住宅再建費用は6,000～7,000円で、政府が3分の2を補助し、自己負担は3分の1だそうです。

新しく村ができるところに回りました。西団堡村は陽高県の南の端ですが、移るところは張官屯郷で、直線距離で40kmは離れています。村の名前は西団堡新村になるようです。規格のレ

ンガ建て住宅を突貫工事で建設中でした。日本の建て売り住宅の工事現場そっくりです。そのいちばん北のはずれに、小学校が建っていました。いまははずれですが、村が大きくなると中央部分になるようです。壁はすでにできあがり、コンクリートパネルの屋根がすでに載っています。最後の仕上げのために、20人ほどの労働者が忙しげに働いていました。

「大同でいちばんいい設計事務所に耐震設計を頼んだし、工事も安心できるところに発注したから、こんどはだいじょうぶだ。外国からの支援でたつ校舎でぶざまなことはできない」と、大同事務所の武春珍所長が力をいれます。

大同県許堡郷肖家窩頭村の小学校は、もうちょっと早くすすんでいます。8月30日、日本政府の派遣する ODA 民間モニターの一行が、この村を視察しました。そのあと、私たちの緑化プロジェクトをいくつかみて、たいへん高い評価を残したそうです。

9月からの新学期にまにあわせなかったのですが、ふつうなら1か月で完成するはずの工事が、2倍以上かかっています。水がないのです。村のなかの井戸では工事用の水をまかなうことができません。タンクを積んだ小型トラックで、1km以上離れたところから水を運び、ビニールシートを張ってつくった貯水槽にためています。水不足は、こんなところにも影を落としています。

## NO. 67 果樹の苗木が抜かれた!? 2000. 10. 03

ことしの7月末、緑の地球ネットワークが派遣したツアーといっしょに、陽高県張官屯郷薫庄村を訪れました。村からほど近い小学校付属果樹園を訪れると、村の子どもたちが果樹園の入口に整列して、ドラとタイコの伴奏にあわせて、「ホワンイン！ホワンイン！ルーリエホワンイン！」（歓迎！歓迎！熱烈歓迎！）と叫びます。こういうのは私は苦手で、いつも列からはずれてしまいます。

この日の作業は、この春に植えたアンズ、スモモなどの補植です。苗が活着していないところに、穴を掘りなおし、通気性改善のための砂をいれ、苗をおき、土をかけ、水をやって、さらに土をかけるのです。大同にきて数日がたっているので、ツアーのメンバーの動きもスムーズです。

作業のあいまに、村の党書記がそばによってきて、「ちゃんと着いていた苗を抜かれてしまった」とくやしそうにいいました。私はギクッとしました。そして過去の苦い記憶が瞬時によみがえりました。あってはならないはずのことです。

主として95年におこったことです。小学校果樹園の建設を私たちが提案したことから、緑色

地球ネットワーク大同事務所長に就任したばかりの祁学峰(現大同市青年連合会主席)がはりきって、果樹園建設をかなりの面積に押し広げました。最初のあいだはよく活着していたのに、1年くらいたってみると、ダメになっている村が多かったのです。

渾源県下韓郷の果樹園は、大同一渾源の幹線道路のそばにあり、「地球環境林」というコンクリートづくりの記念碑も建てられました。車を停めてみると、よく育っていたはずのアンズが、葉が黄色くなって枯れています。そのまえに大同県徐町郷で、ノウサギの食害でひどい目にあったので、株もとを調べたのですが、その痕跡はありません。虫害のようすもみられません。わかったことは、アンズを植えることによって、穀物栽培の面積が減ることを恐れた農民が、わざと抜いたのです。抜いたままにするとすぐ発覚するので、抜いたあとまた押し戻して、わからないようにしていたのです。

さらにあとになってわかったことですが、もう1つ理由がありました。植えた苗が、接ぎ木に失敗し、台木の芽の伸びたものだったことです。地元ではそれを「ニセ苗」と呼んでいます。育っても経済価値がないので、農民は抜いてしまったのです。

そのような一連の事件のあとでは、農民の積極的賛成がないばあい、食糧生産の畑に果樹を植えることは絶対に避けてきました。効率は悪くても、放棄された痩せた畑や、荒れ地を新しく開墾して、果樹園にすることにしたのです。この薫庄村のばあいは、もともと果樹園だったのに、品種が古くなり、経済性がなくなったところに、新しく小学校果樹園をつくったわけで、そのような問題はなかったはずで。

また、あのニセ苗に懲りて、環境林センターをスタートさせて自前の苗をつくるようにしたわけで、ここの苗木もセンターで育てたものをつかっています。あんな問題が再発するとすれば、基本の枠組みを考え直す必要があります。

私の固い表情に驚いたのでしょう。村の党書記があわてていいました。「農民たちはこの果樹園を歓迎しています。土堀で囲われた、もとの果樹園の更新はほとんど終わったけれども、さらに拡大したいといっています。ことしの春に植えたスモモが少しだけ実をつけ、とてもおいしかったので、もっとふやしたいのです」と。

なぜ、その苗が抜かれてしまったのでしょうか？ 党書記の説明がつづきます。「付近の村にも果樹を植えたい人が多いのです。果樹園をつくるほどでなくても、自分の家の庭に果樹を植えたいんです。ここの果樹園にはいい苗があるというウワサがたって、苗を盗みにくる人がいるんです」。私たちが協力していることで、特別いいものがあると思われるようなんですね。

せっかく活着した苗木が抜かれたのは残念なことです。くやしいことです。泥棒だっていい

ことであるはずがありません。でも、私たちの環境林センターでいい苗がつくられているという評判が広まったのは、悪いことではありません。

苗は1本2元(27円)で、高いものではありません。その値段で売ってもいいし、無償で配ってもいいのです。これまでは整地や植栽の労賃を支払って、植えてきたのですから…。この地方に樹木が増えるのはいいことなんです。きらわれて抜かれたのと、ほしい人がいて抜かれたのでは、ちがいがあります。

## NO. 68 武春珍所長のこと(1) 2000. 10. 05

中国にかぎらずどこの国でも、国際協力のカギはカウンターパートにあります。私たちの協力が比較的順調にすすみだしたのは、カウンターパートに恵まれたからだと思います。日本人がいけばなんとかなるとか、いないとだめだとか、それは日本人の思い上がりなんですね。

カウンターパートがやっていることを、私が代わるなんて、できっこないですよ。人間関係のつくり方、政治的な対処……。中国でなにかをするには絶対的に必要なことですが、彼らに比べれば、私なんか小学生なみです。

私たちのカウンターパート＝緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長をみていても、そう感じるのはです。…なんて書くと調子がくるうので、いつもどおり「小武」と呼びます。彼女と最初に活動したのは、98年1月のことです。当時の所長で、いまは大同市青年連合会主席の祁学峰もいっしょでした。この季節、大同は昼間も氷点下で、外でのしごとではできませんが、相手がヒマなときに農村調査をやりたいと思ったのです。青年団の研究室主任だった小武を、祁学峰が副所長に引き抜いてきたのです。

思いがけぬことがそのとき発生しました。天鎮県の招待所に到着したとたん地震があったんです。遠くないな、と思いました。夜のテレビで、河北省張家口市の張北県・尚義県の県境が震源だとわかりました。地図でたしかめると、現在地から80kmしか離れていません。被災地を見舞うことを即断し、それを伝えると、「高見のしたいようにしたらいい」という返事です。こういうのって、うれしいですね。

翌早朝、彼らは張家口市政府に電話をかけていました。外国人を連れていってもいいかという問い合わせです。「折り返し返事をするから、その場で待て」という回答だったようです。私はあせりました。電話でOKがとれるはずがありません。ダメだという回答があつてからでは、動きがつかなくなります。とにかくせき立てて、被災地にむかって車を走らせました。

張北県の入口で軍の検問がありました。同行の1人が「高見、話をするな!」といいます。

抱えていたビデオカメラを私は足下に隠しました。車を停めるなり、小武は外に走り出て、検問の責任者に「共青团大同市委員会だ」といって、交渉をはじめました。外にでたのは、車のなかに注意を向けさせないためでしょう。なんなく通り抜けましたが、外交官もジャーナリストも、ほかの外国人はここで追い返されたのです。

張北県政府に到着すると、小武がまた交渉にでかけました。なかなか帰ってきません。どうして祁学峰が自分でいかないのか、私はふしぎでした。祁学峰は、「こういうことでは彼女にかなわない」といって平然としています。私は、95年1月、阪神大震災で家が半壊になり、そのあと救援活動に走り回ったことを思い出し、手持ちのお金を数えていました。

小武がやっと帰ってきました。「最初に県の弁公室主任(日本でいえば総務部長)にあつて、事情を伝えたけど、彼は判断できなかった。外国人がくることを想定していないのだ。つぎに県長に話したけれども、彼も決められなかった。副市長の秘書をみつけたが、彼も決定できない。最後に張家口市の市長本人に会い、事情を話して、やっと許可をえた。ビデオと写真の撮影をしないのが条件だ」というのが彼女の報告でした(中国では市の下に県があることに注意)。

「外国人が現場に近づくのは許されていないということだった。でも、高見はもう6年も大同に通い、農村をよく知っている。高見はまた、日本の阪神大震災の被災者でありながら、救援活動をつづけた。地震を知って、駆けつけないわけにはいかなかったのだ。そのような事情を考慮すべきだ、と市長に話した。市長も高見の精神に感動して、特別に許可をくれたのだ」と、彼女はいうのです。

いっしょに見て回った被災地のことは、今回のテーマを離れるので省きます。ただ、このときの救援活動が、軍を中心にたいへん速やかで、鮮やかだったことを書いておきましょう。

県政府に帰って、私は手持ちのなかから出せるギリギリの6万円を義援金として県長に渡しました。そのあいだに、小武は新華社の記者をみつけ、インタビューを設定していました。「人民日報の記者がみつからなかった。しかたがない」というのですが、新華社のほうがよかったです。

「日本人が被災地を見舞い、救援資金を贈った。最初の外国人だ」という記事が、その日のうちに世界に配信されました。高見がNGOのメンバーで、「被害はそう深刻でない。救援活動はスムーズに組織されている」と語ったことも報道され、それをみて待機状態を解除したヨーロッパの国もあったそうです。NGOの情報ってなかなか重みがあるんだな、その自覚をもたないといけない、と思いました。

安心もしました。最終的に市長の許可をえたとはいえ、そのまえに軍の検問をすりぬけています。外国人の私はともかく、彼たちにおとがめがあるかもしれません。新華社は地方では権

威ですから、新華社が認めた行動を、地方政府がとがめることはないでしょう。

大同への帰り道で、小武が話しかけてきました。「きょう会った人たちは、枯葉が落ちてきて、頭にあたって、頭が壊れないかと心配している人ばかりですよ」。日本の表現だと、「ことなかれ主義」ということでしょうか。おもしろい人間がきたな、と私はほくそえみました。

彼女は彼女で、「あのときの高見の決断の速さには驚いた」といいますから、おたがいにいい出会いだったのでしょう。その1日の私の日記を読んで、「映画にでもなりそうだな」といった友人がいます。そういう場面を乗り切ると、相互の理解と信頼が、平時の何倍も深まります。小武については、このあともつづけます。

## NO. 69 武春珍所長のこと(2) 2000. 10. 10

私たちのカウンターパート・緑色地球ネットワーク大同事務所のいまは所長・武春珍とのつきあいは、98年1月の張家口地震のときからはじまりました。前回に書いたように、彼女のネゴシエーターとしての能力はたいへんなものです。とにかく自分の主張をつらぬきます。その反面、自分につごうの悪い相手の言い分は聞こうとしません(こうまでいったら、書きすぎかな?)。そしてタフで、疲れというものを知らないで、話しつづけます。だから、たいていの交渉相手は、彼女の言いなりにならざるをえません。これが男だったら、かなりの反発をくらうのですが、最後にニコッと笑って、「シェシェ!(ありがとう)」なんて、そのときだけは甘えた声をだすと、それで通ってしまうんですね。

そういった事情がわかるようになってから、「なあ、あのとき張家口市の市長が私たちの被災地訪問を許可したのは、高見の精神に感動したなんてことじゃなくて、ホントのところは、救援活動の陣頭指揮で緊張している市長に、あなたが食らいついて放さないから『くそっ、この小娘、なんだと思ってんだ。え〜い、もうお前のいうとおりでいいから、早く帰ってくれ!』ということだったんだろう」なんていうと、「そんなことは絶対にない。ホントに高見の精神に感動したんです」なんて小武は答えるんですけど、私の推察が事実に近いでしょう。

こういう人って、上の人間にぶついたり、なにかの障害を突破するときには最高のタマなんですね。でも、農村で農民を相手にしたり、下の人に対するときにはこれでは、いろいろ困った問題が起きます。

たとえば98年4月、日本からのワーキングツアーが、渾源県の呉城郷を訪れました。いくつものグループに分かれて、昼食を農家でごちそうになったんですね。それが盛り上がったんでしょう。集合時間になっても、いくつものグループが帰ってこないんです。そのとき、彼女がカンカンに怒ったんです。私たちにぶつかってくるんだっいたらいいんですけど、村の幹部たち

を罵ったんです、「時間の観念がまるでない」といって。

「あんたは農村のことを知らないんだ。農村と都市とでは時間の流れがちがう。都市の感覚をいきなり農村にもちこむのはよくない」と私がいうと、「問題は都市か農村かではない。正しいか正しくないかだ。正しくないことを高見が弁護するのは、ぜったいによくない。高見は中国の農村のことを知ってるような顔をしているけど、私は中国人だし、農村のことだって知ってる」といって、矛先を私にむけてくるしまつです。

彼女の上に祁学峰がいるあいだは、それでもよかったですよ。小武のことを彼がよく理解して、彼女の持ち味をいかして働かせていたんです。祁学峰が私に、「どうだ？ 武春珍は使えそうに思うか？」ときくので、小武を前において、「いや、まだだ。小武はまだ自分のことばを話せない。紋切り型のことばかりいっている」と答えます。すると祁学峰が、「それはそのとおりだろう。小武にはまだ自分の経験というものがない」なんていうのに、小武はそれに反論もしないで殊勝にしています。

それまで大同市青年連合会の副主席で、緑色地球ネットワーク大同事務所の所長だった祁学峰が、98年の夏、主席になることになりました。副主席のあいだは、彼はこの協力活動に専念することができました。主席になると責任の範囲がずっと広がるので、この協力活動の責任者であることは変わらないまでも、日常のことは他に任せざるをえません。副所長だった武春珍が、大同事務所の所長に就任することになりました。正直いって、私は不安でした。私だけじゃないんです。

この協力活動に関係している中国側のメンバーのなかに、「武春珍が所長になるのなら、もうこのしごとをしたくない」といっている人までいたようですね、それも複数。そういうことを、直接、私のところに来てくるんじゃないんですよ。あちこちを経由して、私の耳にはいるんです。私は中国語はまったくしゃべれませんが、聞くほうは、大同方言でもかなりのところまでわかります。高見にはわからないと思って、彼らどうして話していることが、私には聞き取れることがあるのです。

同じこの時期に、環境林センターを立ち上げ、そのあと3年間、管理してきてくれた邢雁俐経理(この人も女性)が雲崗賓館の副経理に栄転(くやしいけど、こう書くしかありません)することになりました。何年もかかって築き上げてきた体制が、崩れてしまいました。それを取り戻すのに、また何年かかるのか、私たちは不安な状態に追い込まれてしまったのです。

## NO. 70 武春珍所長のこと(3) 2000. 10. 16

この夏、いっしょに大同に滞在している遠田宏顧問と、毎晩のようにウィスキーを飲みなが

ら、同じことをなんども私は口にしたようです。「拾いものでしたね、彼女は。これほど伸びるとは思っていませんでしたよ」。カウンターパートである緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長（小武と呼んでいます）の事です。それには遠田さんも異論がないようでした。小武が所長に就任した2年余り前、私たちにとって不安いっぱいだったことを、前回、書きました。なにが変わったのでしょうか？

98年1月、河北省張家口市張北県の地震被災地を視察したあと、私は日本に帰って、救援活動を呼びかけました。会員の栄永頼子さんから、まとまった義援金が届いたのに刺激されて、倒壊した小学校1校の再建を目標にしました。ラジオや新聞でも取り上げられ、短期間でその資金が集まりました。このときの地震は世界に報道されたために、日本でも関心が高かったのです。

現地との連絡を小武が中継しました。最終的にりっぱな小学校が建設されたものの、その過程で彼女は不満たらたらです。「マーファン(麻煩!)」(わずらわしい)の連発です。張北県の反応がニブイというのです。私は、「あのなあ、この活動をはじめたころの大同はそれどころじゃなかったんだよ。『これから先は撮影禁止だから、全員のカメラを預かる』なんて一方的に通告されたことだってあるんだし……」。そういうと、小武はちょっと考えます。

でも、小武のようになんでも口にしてくれるのは、ありがたいことです。こちらも自分の思いをぶつけることができ、おたがいの理解が深まります。小武がそんなふうには不満をもつのは、しごとにたいする責任感があるからなんです。それは貴重だと思います。上べは調子がよくて、そのくせ、しごとなんてまったくしない人が多いじゃないですか。

武春珍を中心にした体制づくりをバックアップしようと、私もハラを決めました。実行に移すまえは、なんでも360度、どの方向にも無限の可能性がります。でも、実際に行動することは、1つの方向をえらぶことであり、その他の可能性を切り捨てることです。無限だったはずの可能性を、現実的なものに切り詰めることでもあります。

大同での活動にとっていちばん大事なのは、カウンターパートがしっかりしていることです。全体が回転していくには、芯が定まっていることが必要です。私はいま、コマをイメージしながら、このことを書いています。その芯は、とりあえず武春珍しかいません。そこをフラフラさせてはいけません。

道を開いたのは、武春珍の努力です。なにごとにも積極的で、前へ前へとでていくのがいいのです。あの性格ですから、かならずなにかにぶつかります。ぶつかるから、問題に気づくことができるんです。自分の能力のうちわ、うちわでしごとをする人だったら、変わることも伸びることもなかったでしょう。

農村なんて、みたこともなかった彼女を、ずいぶんと私は引き回しました。貧しい農家にも泊まりましたし、山にも登りました。ふつうだったら、弱音を吐くでしょうよ。げんに、途中で脱落する彼女より若い青年団の幹部が少なくありません。むずかしい問題をかかえた村のプロジェクトを、小武に背負わせました。祁学峰が頭を抱えたところです。ブツブツいいながらも彼女は逃げようとしません。

周囲の中国人メンバーの小武をみる目も変わってきました。彼女が所長に就任したときは、「新参もののくせに…」という見方があったのです。いまは一目も二目もおかれています。それは彼女がどんどん忙しくなっていることでわかります。中国の変化は急激ですが、大同あたりは後れ気味です。しごとのやり方も、システムとして完成していません。個人の動きに頼るところが多いのです。できる人にはしごとが集中し、その人はさらに伸びます。そうでない人は、しごとを待っているだけで、終わってしまいます。

私の20歳代のときの師匠がいつも「全責任が自分にかかっていると自覚したとき、人は成長するものだ」といっていましたが、小武のこのかんの変化をみていて、なるほどそうだな、と思ったものです。彼女じしんのことばで話す内容も増えてきました。

この夏、共産党大同市委員会の副書記に会ったとき、「どうですか、彼らのしごとぶりは？」ときかれたので、「クーイー(可以)」「(まずまず)」と答えたら、横から小武が口をはさみます。「これだけいっしょうけんめいやっているのに、『可以』だけか。指導者のまえでちょっとはほめてくれないと困る」というのです。

「だったら、ハオジーラ(好極了!)」(すばらしい)というと、また小武が「えっ? 好極了! 高見がそこまでいうと、あまりにウソっぽい」と答えたので、みんなで大笑いになりました。

## NO. 71 「日本鬼子!」と罵られて 2000. 10. 23

この協力活動が92年1月にはじまって半年あまりの9月末のことです。当時の代表、佐野茂樹さんの発案で、私は大同の農村を2か月あまり調査することになりました。会員も少なく、経済的にもまったく基礎がないなかで、自分ではとても思いつかない冒険でした。

神戸発のフェリー・燕京号に乗り、台風の影響で1日遅れで天津に着き、北京を經由して、大同に到着しました。船上で知り合った東京の山室賢太郎さんが、それからずっと会員をつづけてくださっているのは、ほんとにありがたいことです。

私の中国語なんて、あいさつ言葉をいくつか話せるだけでした。通訳を同行する経済的な余裕なんてありません。1日を何元(それも1ケタ)で過ごせるか、記録づくりに挑戦していたく

らいです。中国人の旧友に頼めば、同行してくれる人がなくなかったでしょうが、新しい事業にとりくむにあたって、自分の力で挑戦してみたかったのです。

プロジェクトを最初にスタートさせた渾源县西留郷にたどりつき、郷の林業ステーションの責任者・劉天文の家に泊めてもらうことになりました。いまは北榆林郷の党書記になっている王有全(当時は共青团渾源县委員会副書記)が、最初のあいだはつきそっていました。畑でトウモロコシやヒマワリの収穫を手伝ったり、ヒツジの屠殺・解体作業をビデオで撮ったり、結婚式をのぞいたりといったふうに、のんびりとやっていました。欠かせないしごとをこなすだけでも忙しい、現在の状況とはだいぶちがいます。

そんなときです。昼下がりの西留村を1人で歩いていたら、「リーベンクイズ！」という叫びが聞こえてきました。漢字で表せば「日本鬼子！」です。「鬼」というのは、日本人のイメージする恐ろしく、かつ勇ましい鬼ではなく、ひたすらあさましい「亡者」といったところでしょう。声の方向に目をやると、パイチュー(白酒)をやっていたのでしょ、赤い顔をした農民が数人、土塀によりかかって、座り込んでいました。ニヤニヤしている連中はともかく、そのうちの1人の顔つきには厳しいものがあります。

聞こえなかったふりをして逃げようかな、とも考えました。危ないことに、首を突っ込むことはないのです。りこうな人なら、そうするに決まっています。その一方、しょっぱなから逃げたら自分に逃げクセがつくな、そうなったら、ここでのしごとではできなくなるかな、なんて一瞬のうちに考えました。この渾源县は、日中戦争にさいし、中国側の戦略拠点となり、多くの村で深刻な犠牲をだしたのです。

思い切ってそばに寄り、タバコを取り出し、彼らの目の前に突き出しました。「リーベンクイズ！」と呼びかけたであろう中心の1人も手を伸ばしてきたのです。使い捨てライターで火をつけながら、私はホッとしました。彼らの横に座り込み、しばらく沈黙したあと、「この村の緑化に協力しようと思っているけど、あなたたちは反対か？」とききました。

「そうか、あの話の人間か。さっきはあんなことをいって悪かった。あんたは鬼子じゃない、日本人だ」といったあと、「自分の家にくるか？」と誘うのです。もういちど勇気を奮いおこして、彼のあとについていきました。土塀の門をくぐって、ボロボロの窑洞(ヤオトン)の家にはいり、カン(オンドル)に上がりました。1歳ちょっとくらいの子どもを抱いた、顔色の悪いかみさんが、白酒と粗末な食事を、カンにじかにおいでくれました。ひょっとすると、きのうの食い残しでしょう。遠慮なく、私は飲ませてもらいました。相手の男も飲みます。

そしていうのです。「この村の幹部はみんな腐っている。ものすごい腐敗だ!」。その話につきあったあと、私は聞きました。「きょうは劉天文の家に泊まることになっているんだけど、彼はどうなんだ?」。「劉天文! 彼はいい男だ。自分の大の親友だ」。言葉の通じない、しかも酔

っばらいどうしの会話なんて、その繰り返しです。

宵闇が迫るころ、私はまた1人で、フラフラの足で劉天文の家をめざしました。彼の家のそばに人だかりがしています。そのなかから劉天文が飛び出してきた、「どこにいったんだ？」と叫びます。昼食のあと、私がかってに消えてしまったので、みんなで心配していたようです。

彼の家に着いてから、「イヤー、あんたの親友の家で酒を飲んで、酔っばらってしまったあ…」。「えっ、誰のことだ？」というので、「彼だよ、あそこの家だよ」と答えると、温厚を絵に描いたような劉天文の表情がかげりました。「親友」なんて私がいったのが、彼の気持ちを損ねたようです。そうかもしれませんね。いくら憎い日本人であっても、面とむかって「日本鬼子！」なんて呼びかけるのは変わり者なんでしょう。はじめて会った外国人に、「この村の幹部はみんな腐っている！」なんていうのも、ふつうではないです。

でも、あの男は(ちゃんと名前も覚えていないのですが…)、私にとって、大の先生です。あの「試験」にチャレンジしなかったら、いまの私はないでしょう。おかげで私は、大同の農村にいたときも、怖いものが少なくなりました。度胸がついたんです。

そして、人の話を受け止めることのむずかしさ、といったことも学びました。それは聞き取りや調査をどう実施するか、といったことに通じるものです。だれの話がどのくらい信用できるか、といった検証ぬきに、聞き取りなんか成り立たないということです。

## NO. 72 黄土高原のナウシカたち 2000. 10. 25

なにを思い立ったか、事務局の東川さんが、この9年間にたまった写真を整理しはじめました。ちょっとだけ私もつきあって、最初のころ、現地で撮影した写真の選別をしました。92年ごろに撮ったもののなかには、子どもの写真が多いんです。なかに、「両手に花」の私の写真がありました。だれが撮ってくれたんでしょう。1歳くらいの子どもの両手に1人ずつ抱いてご満悦です。私のつれあいがすっかり気に入って、自宅に持ち帰り、小さな額にいれました。そのような写真をみながら、涙ぐんだりします。なつかしいですね。もうずいぶん大きくなっているでしょう。

そのころはカウンターパートもしっかりしていませんでした。はじめての村に中国語のわからない私が、どうすれば自然に受け入れられるのでしょうか？92年秋にはじめて通訳なしで村にはいったときは、その実験場のようなものでした。自分でくふうするしかないんです。自分でくふうができるんです。

私のとった作戦は、子どもとなかよしになることでした。「作戦」なんて、ことばが悪いです

ね。なかよくなることです。結果はあとでついてくるものです。

大事なことは、相手の目線と同じか、下から話しかけることです。上から見おろしたらダメなんです。相手が大人だろうと子どもだろうと、それは同じです。相手を驚かせてもダメです。子どもたちが遊んでいるそばで、あまり接近しないで、小1時間はジッとしゃがんでいました。子どもたちの視野にはいつてるけど、ジャマをしないとといった距離がたいせつなのです。なじんでくれたところに、ちょっと接近します。

そこであせると、農村の子どもは慣れるまではシャイなので、パーッと散ってしまいます。チラッと小道具を使うのも許されるでしょう。でも、ポラロイドの写真を配るなんてのは、明らかに行き過ぎです。モノを介した関係を最初につくってしまうと、それより奥にはいれなくなります。

こちらが経験を積んでからは、まず村の小学校に行くことにしました。先生を訪ねて、自分の紹介をします。握手をしたり、抱き合っって背中をたたいたり、多少はおおげさなほうがいいのです。先生と自分がどんなに親しいか、子どものまえでアピールしておくのです。そうしておくで、子どもの横でしゃがんでいる時間を短縮できます。

子どもたちが手をつないでくれるようになると、しめたものです。村じゅう、どこにでもいけます。「ここが小学校だよ」。「この家にはこわい犬がいるから近寄っちゃいけない」。「このうちのおじいちゃんは、とてもがんだよ」。「ご飯、食べたの？ まだだったらうちにおいでよ」。子どもが親しそうに手をつないできた外来者を、親たちもむげには扱わないものです。そのようにして私はごちそうになり、ヒツジを1頭つぶしてもらったことさえあります。

貧乏な農村の、あわれな子どもの写真ってずいぶん出回っているでしょ。そういう現実ももちろんあります。否定するわけではありません。だけど、ちょっとちがうな、という気が私はしています。撮るアングルによって、印象が変わってしまうんですね。上から見下ろして撮った写真って、ものほしそうで、惨めにみえます。そのように意図的に撮ることだってできるんです。

子どもを相手にするとき、私が腰をかがめたり、座り込んだりするのは、子どもたちのいい表情をみたいからでもあるんですよ。貧乏な農村の貧乏な百姓の次男坊として育った私にとって、それは自分自身をみつめなおすことでもあります。

『現代農業』の表紙とグラビアを撮りつづけているカメラマンの橋本紘二さんが、6年間、大同の農村に通いつづけて、その写真集がまもなく刊行されます。そこに登場する子どもたちは、私のイメージどおりです。みんな遊びの天才で、好奇心いっぱい。ものがないぶん、輝いているところがあるんですよ。それは橋本さんのアングルであり、子どもたちを橋本さんがど

のように見ているかの反映です。私が橋本さんを好きになったのは、そのためです。撮れるだけのものを撮ってもらおうと決めました。

そして、ここの農村の子どもたちは、日本の(あるいは中国の都市の)同年齢の子どもにくらべ、身体は小さいし、表情は子どもっぽいの、ずいぶんとおとなでもあります。だってそうでしょ。10歳にもなれば、りっぱな労働力です。小さな村だと、小学校の高学年を受け入れる学校がないのはめずらしくありませんから、それを超えると、もう専門の農民です。結婚の費用をつくるために、男たちは出稼ぎにだってでるんです。50年代60年代の日本の集団就職のイメージでしょうかね。農村は早婚がふつうで、女性だったら20歳未満で結婚することが少なくないんです。

えっ、なんで今回のタイトルに「ナウシカ」なんてつけたか、ですって。この活動をはじめた初期に、深尾葉子さんとか、上田信さんとかが、黄土高原は「風の谷のナウシカ」の世界とそっくりだって、よく話していたんですね。文明が栄えて、その文明が環境を破壊して、千年後の世界がナウシカの世界だったんですよ。黄土高原もそうなんです。大同は北魏の都が栄えてから1500年後の世界です。

## NO. 73 スタートは簡単でも、継続は難しい 2000. 11. 02

つづけて初期のことを書きます。92年1月からはじめたこの緑化協力活動ですが、スタートのときは勢いがある、まだよかったですよ。会員も増えていきました。2年めの93年4月に、設立記念のシンポジウムと第1回会員総会を開きました。このあたりが最初のピークといっているでしょう。でも、内部ではすでに亀裂が生じていました。だれが悪いというわけでもありません。

しばらくまえに書いたばかりで、同じことを繰り返すのは気がひけますが、実感なので、かんべんしてください。はじめのまえは360度、どの方向にも無限の可能性が広がります。なにか1つのことをはじめると、その他の可能性を切り捨てることになります。無限だったはずの可能性を現実にあわせて切り詰めることでもあります。それはしかたのないことでしょう。

それぞれにやりたいことのあるメンバーが集まっており、しかも共通の体験も乏しいので、「そんなはずではなかった」ということが当然、おきてきます。最初のころはとくに多いんです。議論をつづけても、なかなか結論をえられません。しんどい作業でした。

そのうちにこの協力活動も2年めにはいりました。緑化なんて活動は、1年でさしたる成果なんてあがないません。最初はその珍しさに参加しても(表現は悪いですが、そのような広がりをもたないと活動にならないのは事実です)、2年、3年はつづきません。資金集めもしだ

いにジリ貧になります。こういう活動は、はじめるのは簡単でも、継続するのは困難なんです。そのことをつくづく痛感させられました。

現地を訪れるツアー参加者も、最初のころは募集がたいへんでした。中国を知っているはずの人からも、「コンクリートジャングル、アスファルト沙漠の大阪から、どうして緑ゆたかな中国に木を植えにいくんだ？」なんてバカにされたものです。沙漠化のすすむ内陸の農村なんて、たいていの日本人には縁がなかったんですね。

92年4月末からの最初のツアーに参加したのは、石原忠一団長(現顧問)はじめ8名でした。大部分が中年以上の男性で、女性は山田孝子さん1人でした。「サクラとウメの区別もつかない私をなぜ誘うんだ」といって副団長を引き受けた西山五郎さんは、その後ずっと副代表です。

93年春のツアーの団長は清田祐一郎さんで、メンバーはやっぱり10人ほど。渾源から霊丘にむかうとき、「これから先は撮影禁止です。全員のカメラをあずかります」と中国側から一方的に通告されました。私もムキになって、くってかかったのを覚えています。

前年の秋、懐仁県新家園郷にこの協力活動の拠点となる苗圃をつくることを約束して、経費も渡していたのに、このとき行ってみると、予定地が果樹園になっていました。ところが、地元の人たちは、そこが苗圃だと言い張るんです。ひと目みればわかることなのに、言い張るんですよ。ツアー参加者のまえで、私は大ゲンカをはじめてしまい、清田団長から「ちょっと冷静になれ！」なんて制止されたくらいです。

中国側にしても、理由がなかったわけではありません。こちらにたいする信頼感なんてほとんどなかったでしょうし、いまのようにファクスですぐ連絡できる環境なんてありませんでした。お金と手間のかかる苗圃をちゃんと維持できるか、不安だったと思うんですよ。

もっとやっかいな問題もありました。93年7月に行政区画の大変動があり、それ以前は4区(城区、砒区、南郊区、新栄区)からなる大同市と、周辺の10県(右玉県、左雲県、懐仁県、応県、渾源県、大同県、陽高県、天鎮県、広霊県、霊丘県)からなる雁北地区だったものが、広域の大同市(前述の4つの区に、雁北地区の7つの県をプラス)になったんです。そして、右玉県、応県、懐仁県は、となりの朔州市にいてしまいました。当初、懐仁県を拠点にしようと思っていたもくろみは崩れたんです。

このころの体験のなかには思い出したくもないことがたくさんあります。まだ書けないな、ということもあります。中国でも、日本でも、です。私は弱虫ですが、辛いとき、悲しいときに泣くことはありません。そんなことが連続しているときに、ちょっといいことがあったり、感激したりすると、すぐくようになってしまいました。そうなると、涙ってしょっぱくなくて、甘く感じられるようになるんですね。

やっかいな問題がつづく、胃が痛くなります。それがつづく、慣れっこになっちゃうんですね。この活動をおもしろく感じるようになったのは、ずいぶんあとのことで、涙が甘くなり、胃痛が快感(?)になったころ、からです。感性が変わり、神経も太くなってきたんでしょうね。

清田さんが現地で、「高見くん、こういう厳しいところでの活動なんて、なんどもなんども波がくるよ。技術的にも必ず壁に当たるから、日本でいい専門家を探しておいたほうがいいよ。きみが懸命に口説けば、協力してくれる人もきっといるよ…」といったときには、「やめてよ、清田さん。そんな問題までおきたら、完全にパンクしてしまうよ」といって、私は悲鳴をあげました。

でも、その予言どおりに問題は起こりました。93年の秋にプロジェクトにしてみると、活着している苗はほとんどなかったんです。頼りになる専門家を必死にさがす必要がでてきました。

## NO. 74 3つの条件 2000. 11. 06

日本では、無責任にしごとを放棄する例えとして、「あとは野となれ、山となれ」なんていいますね。手入れをしないと、田畑もすぐに草に埋もれて野になり、やがて樹木が茂って山になる、そうなるかまわないという、やけっぱちの気持ちを表しているんでしょう。

ところが、私たちの協力地、黄土高原の大部分では、ほっておいたら、野にも山にもなかなかありません。草もまばらな荒地のままです。「蒔かぬ種は生えぬ」といいますが、日本では種を蒔かなくても、いろんな植物が茂ってきます。ところが黄土高原では、種を蒔いても生えない、苗を植えても育たないといったことが、しょっちゅうです。

それには、自然の条件が大きく影響しています。最大の要素は、日本は雨に恵まれ、年に1000mmをはるかに超える降水量があることでしょう。

それにたいして黄土高原の大同では、平均が400mmで、ときには250mmくらいになることがあります。温度の問題もあります。大同では最低気温がマイナス20度以下になり、最高気温は38度にもなります。このような温度変化に耐える植物って多くはなさそうです。さらに、土壌の問題があります。粒子が小さいうえに、有機質の含有量が少なく、団粒構造になりにくくて、作物や植物が育ちにくいのです。アルカリがきついのも、困るときがあります。

たくさんプロジェクトにとりくんできて、そのなかに成功したものと失敗したものとがあ

ります。それらを比較検討してえたことですが、成功するためには、3つの条件が必要なんですね。

第1は自然の条件です。水、温度、土壌、そういう自然の条件を無視したプロジェクトは成功しません。黄土高原のおおざっぱな自然条件だけでなく、その場所、場所を細かくみて、どこになにを、どのように植えるか、科学的な検討も必要です。

第2は社会的な関係です。中国は政府の存在が大きいので、そのプロジェクトに関係する各級政府の支持をえられるかどうか、といったことが影響します。そして、関係者10人のうち9人が賛成したとしても、大声で反対する1人がいれば、いろんな問題がおきます。できるだけ全員の支持をうるような構造を考え、それが不可能でも、反対者の声が大きくなるようにくふうする必要があります。

第3は、人的な要素です。プロジェクトを建設する村に、しっかりしたリーダーが存在するかどうか、その人が村の人たちをまとめることができるかどうか、といったことが重要です。

ところが、この3つの条件のそろっている村は、自分たちでちゃんとやっていますから、わざわざ外国から私たちが出しゃばる必要はないんですね。協力の対象になる村は、3つの条件のうち、1つか2つか、あるいは3つとも欠けている村なんです。

でもこの3つの条件は、たがいに独立していないんです。自然条件の悪い村、たとえば水のない村。社会条件の悪い村、たとえば交通が不便で、経済的に貧しい村。そのような村では、有能な人材がいなくなってしまうんですね。それはそうでしょう。そういう村では嫁を迎えるのも、容易ではありません。条件の悪い村には嫁のきてがありませんし、貧乏な村ほど結納金が高くなります。運よく嫁を迎えて、子どもが生まれても、そういう村には教育をつける学校がありません。

そのような村からは、才覚が働き、腕力・体力に恵まれ、度胸のある人、つまり、本来なら村のリーダーになるはずの人から先に、外に出ていってしまうんです。向上心のある人ほど、そういう村には残りたくないんです。以前の中国では、人の移動に厳しい制限がありましたが、改革開放・市場経済化にともなって、それがゆるんできました。その結果として、3つの条件が3つとも欠ける村もでてきます。

最初のうちは私も勇ましかったので、そのような村で協力活動を計画しました。すると、ほかの村の人が、「やめとけ、やめとけ、あの村に残っているのはクズばかりだ」なんていいます。中国人は率直というか、むき出しというか、そういうところがあります。老人だけ、老人と女性と子どもだけが残された村だってあります。そんな村では、たいていの計画が失敗します。それが連続すると、カウンターパートが疲れきってしまいます。そのことはわかってくだ

さい。

では、この3つの条件のうち、いちばん重要なのはなんでしょう。私のえた結論は、人の要素です。その他の条件に欠けるところがあっても、しっかりしたリーダーがいて、村の人を引っ張ってくれれば、たいていの不足は補うことができます。そういうケースをいくつも体験しました。

逆に、他の条件はそろっていても、中心の人物がグラグラしたり、村人の信頼を受けていないばあいには、どうしようもありません。いま抱えている頭の痛い問題も、原因はそこにあります。

そのような経験をたくさん積んで、私は思い至りました。「地の利は天の時に如かず、天の時は人の和に如かず」といったのは孟子だそうです。自然条件は地の利でしょう。社会関係というのは天の時です。人的要素といったのは、いうまでもなく人の和です。昔の人の教えにたどりつくまでに、私は長い年月、回り道をしていたことになります。

## NO. 75 農村における格差の構造(1) 2000. 11. 13

黄土高原という名称からいっても、ここが高いところにあることはおわかりでしょう。しかし、一様な広がりではありません。大きなお皿のうえに中ぐらいのお皿をならべ、そのなかにさらに小さなお皿を並べる、そういう光景をイメージしてください。大同市という14,000平方kmの大きなお皿の底が大同盆地で、歴史的にも、そこが経済、政治、文化の中心になってきました。

大同市という大きなお皿の、中心からちょっとはずれたところに、中ぐらいのお皿を7つならべてください。それが7つの県です。そのお皿の底は盆地で、県内に降った雨はだいたいそこに集まり、地下水もそこに多く、水位が浅いのです。雨で流されてきた土も、そこに集まり、土壌もいちばん肥沃です。そして、ここに集まった水は、1つか2つの河川になり、山脈のあいだを抜けて、東の河北省へと流れ去ります。

農村県では、水と土のありようが、人間活動のキャパシティを決めます。お皿の底である盆地は水と土に恵まれているため、人が集まり、経済が大きくなり、政治と文化も引き寄せられます。そういうところが県城、つまりは県政府の所在地になるんです。

県のなかに、もう1つお皿構造があります。郷・鎮と呼ばれる行政単位が1つの県のなかに、15~25くらいありますが、その1つ1つがお皿になっています。一般的に言えば、農業だけのところが郷です。人の密集度が高く、多少なりとも工業のあるところが鎮と思えばいいでし

よう。鎮は、お皿の底にあると思ってまちがいありません。

お皿の底にあたるどころが恵まれているとすれば、フチにあたるどころ、具体的な地形では山や丘陵は条件が悪いんですね。降った雨もすぐに流れてしまい、土も浸食されます。そういうところが郷と郷との境、県と県との境になっています。

お皿のフチの高いところに立つと、郷の全体を一望することができます。郷の広さはそれくらいだと思ってください。だいたいそこに10~25ほどの村が点在しています。いちばん低い盆地の部分の海拔は1000m、丘陵の高いところは1500m、山があればいちばん高いところが2000m余りです。冬や春だと、黄土いろ一色の世界ですが、夏だと緑におおわれます。しかし、その緑は一様ではなく、グラデーションがかかっています。

お皿の底の低いところは、トウモロコシやコーリャンなど背丈が高く、収量の多い作物が植えられます。地下水による灌漑も可能で、2~3mも伸びています。緑が濃いんです。郷政府が所在する村は、たいていここにありま。それより上、1,200mくらいまではトウモロコシ、コーリャンも植えられますが、灌漑は困難で、背丈はずっと低くなります。作物の中心になるのは、アワ、キビ、ジャガイモ、マメなどで、背丈が低く、遠目の緑は薄くなります。

1,400~1,500mになると、作物の種類は、アワ、キビ、ジャガイモ、マメですが、できはよくありません。緑がずっと薄く、近くで見ると、畑の表面の土がすけてみえるくらいです。春先に雨が降らないと、耕作をあきらめて、放置されることもしばしばです。最近では、井戸や湧き水が涸れ、飲み水に困る村が少なくありません。

海拔が1500mを超える山地の畑では、無霜期が100日を切るの、作物の種類もエンバク＝カラスムギとソラマメになります。以前のことを書いた書物によると、この一帯ではずっとエンバクを主食にしていたようですが、最近ではそれほどでもなく、面積あたりの収量が少ないので、ほかの作物ができるころには、エンバクは植えません。植えられている作物の種類から、その土と水、気象の条件を推しはかることもできます。

大同市天鎮県孫家店郷の93年の統計では、灌漑率が100%に近い3つの村では、10a(1反=300坪)あたりの穀物収穫量が281~365kg(ジャガイモは5kgを穀物1kgに換算)、1人あたり375~528kgでした。成人1人が生存のために必要な穀物は年間最低200kgといわれますから、これらの村はそれをクリアし、多少の余裕があります。この郷の11の村の2,086世帯8,137人のうち、1,090世帯(52.3%)、4,395人(54.0%)がこの3つの村に属しています。

ところが、丘陵の上のほうにある灌漑率が10%未満の5つの村では、10aあたりの収穫量が18~24kgまで落ち込んでしまいます。蒔いた種も収穫できなかったということでしょう。1人あたりは、39~79kgにすぎません。これらの村では、生存に必要な1人あたり200kgとの差を、

放牧その他の副業と出稼ぎ、ばあいによっては政府の救済食糧で補っていることになります。この5つの村で438世帯(21.0%)、1,691人(20.8%)になります。

中間の3つの村には558世帯(26.7%)、2,051人(25.2%)がいますが、10aあたりの収穫量が57~108kg、1人あたりは133~293kgです。

全郷の平均は、10aあたり146kg、1人あたり296kgということになります。全体としてみれば、生存に必要な食糧は生産できていることにはなりますが、内部をみれば、これほどの格差があります。もちろん、郷によっては、全体が平均して豊かなところ(あくまで相対的にですが)、全体が貧しいところ(こちらは絶対的にです)と、いろいろです。

外部の人は、こういうことをきいて、上の村の人を下の村に移せばいいと、単純に考えます。最初は私もそうでした。ところが、ことはそうかんたんじゃないんですね。灌漑率の高い3つの村の農家1戸あたりの耕地面積は、それぞれ、0.87、0.73、0.47ヘクタールです。あれだけ気象条件のわるいところで、1町歩もないんですよ。

灌漑のできない5つの村の1戸あたり耕地面積は1.13~1.79ha。中間の3つの村は0.97~1.25ha。この数字を見比べているうちに、どの状態の村も人が飽和状態にあるのではないかと思えてきます。

## NO. 76 農村における格差の構造(2) 2000. 11. 15

黄土高原の農村における格差の構造を、前回は作物と収穫高の面からみてきました。しかし、それは一面で、ほかにもいろいろな問題があります。たとえば、お皿の底の比較的豊かな村は、ロバ、ウマ、ラバ、ウシなどの大家畜を飼っています。農耕や運搬につかうことができるんですね。

ついでに触れると、この地方では、かなり豊かな農村でも、農業機械はまったく使われていません。農機具といえば、スコップと数種類のクワ、レーキ、そして牛馬の引くスキのようなものだけです。日本の農村では、たいていの農家にかならずある手押しの一輪車も、この地方の農村でみたことがありません。

何年前か前、環境林センターに日本から5台ほど持ち込み、「この便利さがわかったら、周囲に広がるにちがいない」と思ったのですが、まったく思惑ちがいでした。付近の農家からきている臨時工の人たちにも大人気なのに、広がりません。200元もかければ、鍛冶屋でつくれるはずですが、それが高いというのです。ものを運ぶばあいは、袋や背負い籠を担ぐか、ロバなどが引く車だけでしょう。あっ、そうそう。豊かな家では、バイクを買って、収穫した野菜や果物

を、自由市場に売りにいくこともあります。

話をもとに戻すと、お皿のフチにあたる、うえのほうの貧しい農村には大家畜はいません。家畜といえば、1戸あたり数羽のニワトリと、せいぜい3~5頭のヒツジかヤギといったところでしょうか。ブタもあまりみかけません。黄土丘陵の貧しい村には、大家畜を飼うだけの資力も、草もないということです。(もっとも、耕地の少ない霊丘県の山間の村では、ウシを山に放して、それで生活を立ててい村もありますが……)。

すると、農作業は基本的に人力だけでやることになります。ところが、前回みたように、お皿のフチの村は、農家1戸あたりの面積が、お皿の底の条件に恵まれた村に比べて広いんですね。生産性が低いので、広くないとやっていけないのです。天鎮県孫家店郷では、お皿の底の灌漑率の高い3つの村が0.47~0.87haであるのにたいし、灌漑率10%未満の5つの村は1.13~1.79haありました。広い畑を、粗末な農器具をつかって、人力で耕すのはたいへんなことです。

それから、お皿のフチの村は飲み水にも不自由します。昨年の春のツアーだったでしょうか。私の学生寮らしいの友人、干場革治くんが霊丘県石瓮村を訪れました。農家で昼食をごちそうになったとき、生まれてまもない子ヤギが彼にすりよって、抱かれるんですね。ヤギの子の人なつつこいのはもともとですが、そのようすはちょっと異常でした。エサが乏しく、水さえ飲めない母ヤギに、乳を求めて拒否された子ヤギが、干場くんに抱かれたんですよ。

彼は、秋田県の実の生まれ育ちです。郵便局長で町の名士の父親が、農村の生活改善のためにヤギを導入し、彼もその面倒をみていたんだそうです。その彼がいました。「日本では水呑み百姓といったけど、ここでは水も飲めないんだなあ」と。

黄土丘陵の村で、水をくむには、谷底の井戸や湧き水から、天秤棒でかつぐことになります。遠い家は、重い水をついで急な坂を上り下りし、往復に3時間もかけるんです。雨の日は坂道がぬかるみ、すべって、危ないんですね。けが人がたくさんでるそうです。冬の日もたいへんなんです。零下20度以下になって、バケツからこぼれた水が凍って、すべるんです。命がけとっていいくらいなんですよ。

そのような村では、農耕にしる、水くみにしる、男手がないとやっていけません。農民がなんとしても男の子をほしがるのは、「子孫を残して先祖をまつのが人間としての務め。それができないのは不幸でもあり、不孝でもある」という伝統的な考え方にしばられているだけでなく、そういう現実から出発してもいるのです。

お皿の底の水のある村では、季節の野菜を栽培することも可能です。ところがお皿のフチの村では、それもできません。ハクサイやキャベツのような葉菜にしる、トマトやナスのような

果菜にしる、行商が売りにくるのを買うか、アワやキビと物々交換するしかないのです。

先ほどの霊丘県石瓮村と広霊県苑西庄村という2つの村で、私たちも協力して井戸を掘り、どちらも水ができました。苑西庄村では、地下176mのところまで1時間20tの水脈にあたりました。ことしの夏に訪れてみると、村にとっての最大の変化は、この水をつかって、どの家にも家庭菜園ができたことです。わずかな面積ですが、家の庭先に、トマト、ナス、キュウリ、ハクサイ、キャベツ、セロリなどの野菜をつくっているのです。それができるか、できないかだけでも、農村の生活には大きな差があります。

## NO. 77 農村における格差の構造(3) 2000. 11. 20

93年の秋、大同の農村を45日ほど回って帰ってきた私は、「自分は経済なんてわからない人間だけど、重要な法則を1つ発見した。お金ってのは、寂しがりやだってことだ。友だちの多いところには集まるけど、友だちのいないところは素通りする」なんてジマンしていました。それが実感だったんですね。

これまで2回にわたって見てきた農村の格差は、いわば自然の条件が生み出すもので、しかたのない面もあります。このような格差が、社会的には是正されるといいんですけど、現実には社会的な関係によって大されることのほうが多いんですよ。

大同県から渾源县へ車で向かい、県境の峠をぬけて最初にでてくるノロシ台の村が三嶺村で、とても印象的な村です。そのつぎの道路わきの村が北榆林郷二嶺村で、今年の春、NHK・BS2の「黄土高原～失われた森の文化を求めて」の番組のカバーにつかわれました。

この村の水源は、村から1kmほど離れた浸食谷の底にあります。最初に掘った井戸は30mほどの深さで、電動ポンプがついています。ところが水量が減ってきて、村の必要量をまかなうことができません。少し離れた谷底に新しく井戸を掘ったのですが、それでも足りません。しかたがないので、坂の下の下韓村まで水を買いに通っています。

そのあたりの事情を取材した朝日新聞中国総局の鈴木暁彦記者の記事から引用させていただきます(00年8月2日朝刊、ただし大阪版は未掲載)。「郝有生さん(24)は『村の井戸では足りない。二日に一度、四キロ離れた隣村に水を買に行く』と話す。ドラム缶一個に百リットルほど入れて二元(約二十六円)する。村民約四百人のうち、約三百人は隣村の水に頼る生活だ」。

下韓村は海拔1100mくらいのところにあって、二嶺村がお皿のフチだとすれば、ここはお皿の底です。井戸を掘って地下水をくみあげ、灌漑につかっています。二嶺村の人たちは、その井戸水を買にくるのです。大部分の畑ではトウモロコシを栽培しています。トウモロコシは

食味はあまり好まれないのですが、面積あたりの収量が多いので、この地方ではトウモロコシの可能な畑では、優先して栽培します。

下韓村の人がお金をとって水を売るのには、もちろん言い分があります。井戸を掘るのに元手がかかっていますし、ポンプアップには電気代も必要です。でも、お皿の底で大量の地下水を汲み上げることと、お皿のフチの村で井戸や湧き水が涸れることには、因果関係があると思います。本来なら、下の村が上の村に補償すべき話だと思うのですが、地面の下のことは容易には立証できません。100 リットルの水が2元というのは、1人あたり年収が数百元という村にとってはいいお値段ですよ。お金は、お金のない貧しい村を避けて、友だちの多いお皿の底の村へと集まっているわけです。

こういう問題もあります。子孫を残して先祖をまつる、というばあいに、子孫といえば男子です。どんなに条件の厳しい村であっても、最低1人の男は村に残って、先祖のお墓を守らないといけません。最近是一家まるごと離村するケースもありますが、従来はよっぽどのことだったようです。

それにたいして女の子は、子孫に数えられないかわりに、どこにでもいけます。貧しい村に育った娘は、そこでの生活の厳しさを知っていますから、そんな村に嫁ぎたくありません。親たちも、もっと下の豊かな村に嫁がせることを望みます。農村では、実の息子以上に、娘婿をたいせつにし、頼りにするんですね。婿どのが条件のいい村に住み、財力があれば、いざというときにも安心です。

それらの結果として、若い娘は、水の流れと同じで、高いところから低いところへしか動きません。お皿のフチの貧しい村では、嫁日照りが深刻なんです。男女比が、120対100くらいになっている村もあります。40歳をすぎた独身者「光頭棍」がたくさんいるんですね。

水を下から上へあげるには、エネルギーをつかって、ポンプを動かします。娘を下から上へあげるエネルギーが、結納金です。貧しい村ほど、結納金の相場が高いんです。1万元くらいなら、まずまずの村でしょう。3万元となると、そうとうに貧しい村です。結納金の相場をきけば、どれくらいの水準にある村かがわかります。渾源県南山区の村で、いつものように結納金の相場をきいたら、「わからない」といわれました。もう10年以上も嫁がきていないというのです。

さらに、家を建てましたり、電化製品や自転車を買ったりする必要があります。最近「三金一冒煙」が最低条件だという人もいます。首飾り、腕輪、指輪の3つの金と、モーターバイクのことです。

それだけのお金を、農業収入で貯め込むのは不可能です。若い男たちは、結婚資金を貯める

ために、出稼ぎにでます。大同は炭鉱の街ですから、坑夫のしごとがすぐみつかりました。石炭の景気が悪くなってからは、道路建設などの土木作業員か、建築のしごとが大部分です。適齢期をすぎると条件は悪くなりますから、親戚や友人に借金をしてでも、なんとか結婚にこぎつけようとするのです。この問題でも、寂しがり屋のお金が友だちのいない村を素通りするようすがわかります。

最近、水のない、交通の不便な、貧しい村で、雲南省、四川省など南方からきたお嫁さんを見るが多くなりました。「近くの娘だと、結納金のほかに家を建て替えたりで、最低でも3万円はかかるけど、南方の娘なら1万円ですむ」などと紹介されたこともあります。

この一帯の人とは容貌がちがっていて、丸顔の人が多いんですね。もう5年もこの地方の農村に通っているカメラマンの橋本紘二さんは、「カメラをむけると、村の人たちもいっしょになって隠そうとするんだよ」といっています。

同じような問題は、日本の農村もかかえています。ひとつではないのです。批判はかんたんですけど、農村の問題がそれで解決するわけではありません。

## NO. 78 对中国援助見直しをめぐる報道 2000. 11. 24

北海道在住の世話人・嶋田光雄さんから、「毎日新聞(11月12日朝刊)1面のコラム『余録』に緑の地球ネットワークのことがでていますよ」と知らせてもらい、探してみました。東京国際映画祭の閉幕招待作品「初恋のきた道」(張芸謀監督、12月公開)のあらすじが前半で紹介され、そのつづきにつぎのように書かれています。

「▲日本のNGO『緑の地球ネットワーク』が、土壌が流失し草も木も生えない黄土高原の緑化運動に取り組んでいる。メンバーが、山西省の許堡(きょほ)郷という貧しい山村で3年前に地震で倒壊したままの小学校を見つけ、日本大使館に支援を要請した▲北京から片道7時間の夜汽車に揺られ、車に乗り換え、公使が現地を見に行った。校舎はビニールテント。寒いので先生も生徒も立ったまま足踏みで暖を取りながら授業をしていた。3月、日本の『草の根無償資金協力』でレンガ造りの校舎建設が始まった。もうじき小学校ができあがる。この冬はもうこごえないだろう▲『草の根無償資金』を使った学校は、中国だけでも100校を超えたという。日本の援助が感謝されないなら援助など減らしてしまえという意見が自民党から出てきた。少し早計ではないか。思いがけない援助に純朴な村人たちは心から日本に感謝しているそうだ。そう聞くとやはりうれしい。」引用しなかった前半からとおして読めば、より感動的な文章だと思います。

そのしばらくまえに、事務局の東川さんが、「NHK テレビの番組でとりあげられていました」

と教えてくれたのですが、私は見逃していました。ほかでも何回か告げられ、気になったので、関係方面の友人にたのんで、ビデオテープを送ってもらいました。NHK の番組「あすを読む」で、11月1日に「対中国援助見直し」が放映されたのです。

対中国援助にたいして、自民党などに根づよい反対があるそうですが、世間の感覚に共通しているところがないとはいえません。反対論の根拠を、番組ではつぎの4つに集約していました。1)中国はすでに貧困から脱し、発展している。2)援助を受けながらも、中国は他の国・地域にたいして援助を実施している。3)日本の援助にたいする感謝がない。4)軍事力を増強している。

山田伸二解説委員はそれにたいして、説得力のある意見を述べていました。中国が繁栄したといっても、最高水準の上海でも1人あたりGDPは36万円であり、最低の貴州省はその10分の1である、といったぐあいです。北京の表通りでは、東京あたりと差のない近代的な建築が並んでいるけれども、裏通りにはトイレがなく公衆トイレに頼る住宅がたくさんある、といった実情も紹介されました。感謝がない、という批判にたいしては、毎日新聞のコラム同様に、山西省における小学校建設が村ぐるみで歓迎され、感謝されているようすを紹介しました。

番組の終わりに近いところでは、つぎのように解説されました。「それでは、これからの中国に対する援助はどう考えたらいいのでしょうか。1994年、当時の細川総理大臣が中国を訪れたおりに、日本の援助は、貧しい内陸部への援助、それから環境問題、さらには農業対策にしばるという方針を示しています。中国が経済力をつけたいま、これまでの公共事業タイプの援助を脱皮して、私はこの路線を押し進めるのが妥当だと思います。中国はこれまで沿海部を牽引車として経済成長をめざす路線をとってきましたが、しかし環境ですとかエネルギー問題から、こうした路線は行き詰まってきています。北京の郊外、このあたりまで砂漠が迫ってきています。そして中国全体で、砂漠化が進み、水不足がたいへん深刻な状態です。そしてこちらにありますのは、山西省の様子なのですが、ここは地下水が70mも下がってしまって、砂漠化していました。そこに日本のNGOが植林した結果、ご覧のように、わずかですが緑がみられるようになりました【大同県金山寺の私たちの造林地の写真がでました】。こちらはそのために使う苗木です【といって、環境林センターの温室の観葉植物の写真がでたのにはビックリ!】。こうしてみますと、内陸部の支援は、円借款から技術協力などの援助に重点を移していく必要があります。こうした仕事は、巨額な資金がいらぬ代わりに、人手と時間がかかります。しかし、人と人とが直接触れ合う援助こそ、お互いの理解を深めますし、援助の原点です。こうした地道な努力の積み重ねで、ギクシャクした日中関係も変わって行くでしょう」。

「環境・内陸・農業」の3本柱といわれれば、日本人の多くも違和感はないでしょう。私ももちろん賛成です。緑の地球ネットワークのプロジェクトは、その3つの交点にある、といてもいいでしょう。でも、日本のODAは、基本的には相手国の要請にもとづくことになっています。これまで、そのような項目が少なかったのは、中国政府の要請の上位にはいらな

ったからのようです。ところが、中国がわでも、「西部大開発」が重点政策になり、環境や農業もクローズアップされるようになりました。その意味では新しい条件ができた、とっていいでしょう。

ことしの4月、毎日新聞のコラムにあるように、北京の日本大使館の杉本信行公使が大同の農村を回ってくれました。8月には、政府の派遣するODA民間モニターの一行が、私たちのプロジェクトを視察しました。今回の2つの報道は、それにもとづいているのでしょう。電話での問い合わせでもあれば、より正確な内容になったのに、残念です。

## NO. 79 豊かかってなんだろう？(1) 2000. 11. 30

この協力活動の初期のころ、渾源県の温増玉林業局長に連れられて、森林消防の赤いジープであちこちの村を回りました。その味を覚えてからは、1人で村を訪れるようにもなりました。林業が産業になるような村は、たいてい山地や丘陵の貧しい村です。

農家を訪れても、お茶というものがありません。寒い地方なので、常緑のチャの木は育ちません。金をだして茶の葉を買うなんてぜいたくはできません。ずっとなかったからでしょう、「茶」ということばも存在しません。「喝水！」(水を飲み)とって、白湯をすすめられます。北京語ならカナで書くと「ホーシュイ」でしょうが、ここでは「ハシュイ」、酒なら、「ハジュウ(喝酒！)」です。県城にできれば、お茶がありますが、そのばあいでも「水」です。

歓迎の気持ちがつよいと、白湯に砂糖をいれてくれます。砂糖は、料理にはつかわないのですね。カギのかかる長持ちにしまいこんであったりします。袋を差し出して、「もっと入れろ！」とすすめてくれると、取り囲んでいる子どもたちが小さく喉を鳴らします。フィルターをついたタバコが長持ちのなかからでできます。お客専用のもので、ひよっとすると数年前に封を切ったものかもしれません。

家のなかはきちんと片づいています。片づいているものにも、モノがないんです。きちんとたたんだ寝具がオンドルの隅に寄せられ、風呂敷のような布がかけてあります。食事をするためのちゃぶ台がありますが、ない家ではオンドルにじかにドンブリをおきます。先ほどの長持ちがあるのはいいほうです。水ガメがあり、調味料(ミソ、ショウユ、ス)のカメがあり、穀物のはいった麻袋が積んであります。オンドルの横に焚き口があり、大きな鉄の鍋がかかっています。たいてい鍋は1つです。テレビのある家も多くなりましたが、映るとは限らないのがおもしろい。

農家の庭にも、村のなかにも、ゴミがありません。貧しい村ほど、ゴミになるものがないのです。町から運ばれてきたスイカを切ってくれました。タネを吐き出すと、ニワトリが走り寄

ってついばみます。皮を投げると、それに群がって、青い部分を紙1枚にしてしまいます。

トイレは縦横2m、深さ1.5mくらいの穴があるだけ。踏み板也没有。大は、コーナーにしゃがんで、穴にお尻を突き出します。ここにだけは落ちたくないな、と思うと、吸い込まれるような気がしてきます。わきで練習して、だいじょうぶなことをたしかめてから、本番に臨みます。家の人はどうやって処理しているんですかね？ 紙なんて落ちてないですよ。覗くわけにもいきませんから、ナゾのままです。自分の捨てた白いティッシュをみると、なんだか恥ずかしくなります。

年間の農作業について聞き取りしたことがあります。春節(旧正月)があけて最初にとりくむのは、道路に落ちている家畜の糞ひろいだといいます。朝早く、家畜の糞をカゴに集めている姿は、その他の季節でもみかけます。自分の家の堆肥によそのニワトリがはいると、石を投げて追っ払うんですよ。

ここしばらくの黄土高原だよりで、自然と生活環境の厳しさ、貧しさについて書きました。今回もその延長だと思われたかもしれません。環境の厳しさ、貧しさはそのとおりなんですけど、そのなかで、農民が肩をすぼめ、うつむいて、惨めに生きているかということ、そうではないんですね。

日本の、とくに都会の人たちにくらべると、人間関係がものすごく濃密です。ときとして、それはうっとうしいでしょうよ。私が農村を捨てて都会にでて、2度と農村の生活に戻れないな、と思う根っこには、あの地縁血縁の濃密さがたまらない、ということがあります。でも、黄土高原のあの環境では、それがなかったら、生きていけないでしょう。

ワーキングツアーで訪れた日本の若い人たちが話すんですね。「飲み水にも困るような貧しい村ほど、笑顔がいいですね。表情が豊かで、人間らしいですよ。」

商売なんかもある県城まででてくると、そういうよさがなくなりますね。大同や北京はずっと豊かだけど、人の表情がトゲトゲしくなります。その先に大阪が待っているかと思うと、帰るのがイヤになりますよ」なんて。私もそのように思うことがあります。

看護婦だった(いまもそうかな?)中野さんが話したことがあります。「これだけまとめて休暇をとるのはたいへんですよ。同僚の休日出勤なんかを代わって出て、それをためるんです。ここにきて、農村の人の笑顔をみるのが楽しみなんです。ふだんはストレスがたまりますから、1年分のストレスをここで発散しているんでしょう。1週間ほどくるのを楽しみにする私と、1年をここで送る農村の人と、どっちが幸福なんだろうねえ?」。

「あなた独身なんだから、ここで結婚したら……」なんていったんですけど、でも1週間お

客でくると、ずーっと暮らすこととはべつですからね。その後、彼女は日本で結婚しました。

人間の幸福感なんて、荒っぽくいえば、欲望を分母に、達成を分子に指数化ことだって可能なんじゃないですか。いくら達成があっても、それ以上に欲望がふくらめば、ヒリヒリするような飢餓感を逃れられないんです。日本の私たちなんか、埋もれそうにモノに囲まれながら、なお、欲望を刺激されるわけでしょ。それでも国民がモノを買わないと、景気回復のためとかで、国が代わりに無駄づかいしてくれたりもします。

逆に、分母をおさえることで、幸福感を保つ行き方だって、原理的にないわけじゃないでしょう。中国の老荘思想には、そういう色合いが濃いと思います。私は中国の気功などに興味をもっていますが、その根底にあるものも、それですね。たいていの宗教の根底に共通するものかもしれません。毛沢東の社会主義論にそういう傾向が強かったのは、伝統思想の影響でしょうか？

## NO. 80 環境林センターの新しい動き 2000. 12. 7

12月3日に日本を出発し、中国に向かいました。不覚なことに、その朝、扁桃腺がはれていて、イヤな予感がしました。4日は北京で、北京林業大学教学実験林場、日本大使館など予定していた5カ所を訪問し、11時24分の夜行列車に乗りました。前日の夜も、この夜も、酒を飲む気になれません。酒飲みが酒を飲ま(め)ないのはいいことではありません。

列車の窓を通して寒気が伝わってきて、寝ているあいだに首筋から肩にかけて強張っていました。5日の午前中は私たちの拠点の環境林センターの新しい変化を見て回りました。午後になって、からだのだるく、悪寒がします。通訳の王萍の義妹が働いている医院で診てもらうことにしました。39度でした。ツアーの参加者が発熱し、点滴を受けて、翌朝にはケロッとしていることを何度も体験しています。荒療治でしょうが、私も挑戦することにしました。

驚いたことに、2時間かけて2本目が終わるころにはずいぶんと汗が出て、身体が温もり、悪寒は消えていました。翌朝には平熱になっており、大同市青年連合会の祁学峰主席をはじめ、カウンターパートとの打ち合わせを支障なくこなすことができました。

しばらく行く機会をつくれなかった天鎮県へ行く計画でしたが、大事をとり、近場だけの活動に変更しました。7日の午後は、大同事務所の女性2人を相手に、表計算ソフトExcelをつかって、プロジェクトの積算表づくりを講習しました。けっこう呑み込みがいいのです。大同事務所の事務能力が飛躍的に向上しますし、ファイルでもらえば、日本での作業もずっとラクになります。

環境林センターにも大きな変化がありました。今春からいっきよに 20ha に拡張したのですが、その全体に灌漑が行き届くよう、水路の建設が終わっています。塩害を軽減するための排水溝の準備もなされています。まにあわせには従来の井戸と炭鉱区からの生活污水で灌漑が可能ですが、夏までには深井戸を 1 本掘り、汚水の処理施設をつくる必要があります。

ドイツの ODA で建設されたポプラ研究所から 40 数種類のポプラを導入して育苗してきましたが、日本の王子製紙からも 39 種を提供してもらいました。センターの一角にポプラの見本園をつくります。

霊丘県の自然林でみつかった樹種をはじめ、大同に適したそれ以外の樹木を集めて、小さな見本園もつくることにしています。ことしになって、内外の見学者がたくさん訪れるようになりましたので、ゆくゆくは見学コースの目玉になるでしょう。そのための整地作業がすすんでいます。

センターのシャワーを拡張し、男女それぞれ 4 人が一度に浴びれるようになりました。脱衣場もついています。毎回のツアーは最終日にセンターを訪れることにしていますが、これからは全員がセンターに一泊する事が可能になります。

こういうふうにハード面が整ってくると、全体の技術水準の低さが目立ってきます。日本の専門家からはつぎつぎに改善の提案がなされ、要求も高くなりますが、それとのギャップができてきます。それにたいして大同事務所は、すそ野をひろげることで対処しようとしています。今春敷地を拡大したとき、レンガづくりの建物が付属してきました。古ぼけていましたが、構造はしっかりしています。表面にタイルを張り、一部を改装したところ、センターの管理棟本体よりも見栄えのするものになりました。

ここを科技林業学校にするというのです。1 年間かけて、50 人を育成する計画で、それだけの人数のはいれる教室もできました。いくつかの大学に講師を派遣してもらった計画もすすんでいます。センターの苗圃をつかって、じっくり実習することになります。そのなかで、センターや各地のプロジェクトの技術者を新たに獲得することもできるでしょう。そういう計画が地元からでてきたのはうれしいことです。建物の改修費用は、苗木を売った費用で、彼らがまかないました。

そうそう、大同は今年も暖冬です。最近気温は-12 ないし 13℃まで下がりますが、日中は+3、4℃まで上がっています。人間の生活にとっては悪いことではありませんが、暖冬のあとは害虫の大発生が懸念されます。気象の急激な変化は、ただでさえ貧しいこの地方の生態系に大打撃をあたえかねません。

まだまだ書きたいことはありますが、今回はこのくらいにしておきます。

## NO. 81 北京のすぐとなりで起こっていること 2000. 12. 16

大同からの帰りに 12 月 13 日、「北京環境ボランティアネットワーク」のみなさんのお世話で、「中日友好環境保護センター」でお話をする機会を与えていただきました。キラクにでかけたのですが、日本大使館の杉本信行公使をはじめ政府関係の人たちと、北京滞在の元気印女性と留学生、そして環境問題にとりくむ中国の著名な人たちなど、50 名もの人がいて、びっくりしました。すごいですね。そのパワーは。

大同滞在中に高熱をだし、ひよっとするとウラゴトをいうのではないかと心配をして、私としてはそれなりのレジュメを準備しました。当日はいつもどおりの大脱線だったのですが、とりあえず、まじめふうのレジュメをそのまま載せます。長いのでごめんなさい。

### 北京のすぐとなりで起こっていること

～9 年間の緑化協力活動のなかで考えたこと

はじめに

私たちの緑化協力地は、山西省大同市の農山村で、黄土高原の東北端、一部は太行山にかかっています。92 年 1 月から開始しました。大同は北京の隣りの隣の市で、建設中の高速道路が完成すれば 290km、3 時間半で結ばれることになります。

大同市の緑化は、北京・天津などの都市と華北の穀倉地帯にとって、水源の保持と風砂の防止という 2 つの面で、重要な意味をもっています。中華人民共和国が成立し、北京が首都に定まってすぐから、大規模な緑化がスタートしました。いまでも、大同市北部は中国の国家プロジェクト・三北防護林に属し、南部は同じく太行山緑化工程に属しています。

カウンターパートは大同市青年連合会で、この協力活動のために「緑色地球ネットワーク大同事務所」が組織されています。市の党・政府もさまざまな角度で協力してくれています。協力内容は主として 3 つの方面に分かれています。丘陵や山の荒廃地にマツその他の樹種を植えます。水土流失と風砂の防止が主な目的で、将来的には用材としての期待もかかっています。

貧しい村の小学校に付属果樹園を建設し、アンズ、ナシ、スモモ、リンゴなどを植えました。そこからの収入で失学児童の就学保障、教育条件の改善がねらいです。40 余りの小学校に建設しました。初期に植えたものは 99 年から結実するようになりました。

最近では、育苗・栽植技術の改善、人材の育成とネットワーク化など、ソフト面の協力に力を入れています。最初は素人だけの集団でしたが、94 年から日本の専門家の熱心な参加と協力

があり、それが可能になりました。

2000年春までに、地元の人と協力して植えた苗木は970万本、面積は3,100haになりました。いまでは、ソフト面の協力が力点が移っており、そのような数字では内容を表せなくなりました。

## 1. はじめるのは簡単で、持続するのは困難。

このような活動は、はじめるのは簡単です。ついフラフラ～とはじめました(私はいつもそうです)。最初は賛同者もふえました。そのようなところで、活動するには「5つの『あ』がたいせつ」だと、中国人の旧友にアドバイスされました。「あせらず、あわてず、あてにせず、あなどらず、あきらめず」です。

緑化というのはワリの悪いしごとで、悪い結果はすぐでるのに、いい結果はなかなかでません。資金も思うように集まらなくなりました。最初にいっしょにはじめた人が、賢い順番にいなくなり、いちばんバカで、逃げ足の遅い人間が残りました。順調に生長していたものが、何年かたって、暗転することもあります。

▼全国モデルの雁北のポプラが「小老樹」になっています。いま植えている樹種もまだ安心できません。

▼まもなく結実するところまで生長したアンズが壊滅したことがあります。

友好は恋愛関係のようなもので、相手にたいする無知によってむしろ盛り上がります。私のすてきな彼女は、オナラなんてしないし、トイレになんていかない、と思っているうちがハナなのです。

木を植えて育てるのは長い結婚生活を維持しながら子育てをするようなもので、相手をよく理解し、たがいに補いあわないとうまくいきません。

なんでも言うことにしました。相手の批判をすれば自分が傷つきますし、ケンカにはエネルギーが必要です。歴史と文化のちがうところで、言っても通じるとは限らないのに、言わないで通じることはまずありません。こちらが感情をむきだしにして、先方もはじめて心を開くことがあります。そのようにして理解がすすみましたが、なんでもいえるようになるまでに5年かかりました。薄志弱行の私なんか、やめたい、やめたい、と思うことがしょっちゅうです。でも、やめるのは、つづけるのより困難で、エネルギーが必要です。だからつづけている、という面がないわけではありません。

## 2. 自然条件はより困難になりつつある。

大同の地元の民謡に「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば九年は日照りで一年は大水……」とあります。「春の雨は油より貴重だ」ともいいます。95年、97年、99年はひどい旱魃でした。95年は8月末からの雨で窯洞(土づくり住居)が倒壊し、20万人以上が住居を失いました。

最近の傾向として、農民の待ち焦がれる3~6月の雨が半減しています。かわりに8月末から10月の雨が増えています。年間降水量に変化はなくても、降水パターンの微妙な変化が農業や植物の生育に致命的な影響を与えかねません。

30年間で年平均気温が1度上昇しています。生態系にとってその影響ははかりしれません。最高気温の変化よりも、最低気温が上がっているのは世界的な傾向といっしょです。農村のアンケート調査でもまったく同じ結果がでました。暖冬がつづく、虫害の恐れが大きくなります。早魃の年に害虫が大発生するのも因果関係があります。

地下水が涸れています。大同の地下水は毎年2~3mずつ低下し、2008年には完全に涸渇すると、地元の新聞が書きました。農村人口150万人のうち30万人近くが飲み水に困る状態だとも言われています。飲み水に困る2つの村で、私たちは井戸を掘るのに協力しました。176mと183mの深井戸です。水がでて、村の人たちからはたいへん喜ばれました。しかし、それでよかったのでしょうか？そのぶんだけ地下水はなくなります。

### 3. あれこれと考えていること。

いまあげた現象のかなりの部分は、地球温暖化の影響が考えられます。温暖化によって、従来雨の多かった地方(たとえばバングラデッシュ)はより雨が多くなり、雨の少なかった地方(たとえば黄河流域)はいっそう乾燥すると予測されています。

中国の1人あたり耕地面積は、この50年間で半分以下になったのに、食糧生産は飛躍的に伸びました。肥料・農薬、品種改良も寄与しましたが、最大の要素は灌漑でしょう。コムギなど1トンの生産には平均1,000トン、コメ1トンには4,000トンの水が必要だといわれます。食糧は水のかたまりなのです。灌漑のかなりの部分に地下水が使われていますが、いまの状態がつづけば、地下水はやがてはなくなるものです。

中国では水は西から東に流れます。沿海部と内陸部の格差はこれ以上拡大すべきではありませんし、中国政府の「西部大開発」の理念には賛成できる場所もあります。しかしそれは、たくさん問題を顕在化させるでしょう。水争いはすでにはじまっています。

あえて順位をつけるなら、水→土→緑、です。沙漠に木を植えれば、沙漠が沙漠でなくなったり、沙漠化が止まったりするわけではありません。木を植えれば保水性が高まるのは、雨の多い日本での常識で、どこでも通用するわけではありません。地下水をくみ上げて森林を育てるといったことは、少なくとも乾燥地における水収支の結論をだすまではすべきでないと思います。

どのような社会も経済も、環境の制約を超えて永続することはできません。10年余りまえ、

万里さんが北京は遷都するしかないかもしれない、といったそうです。ことし6月、朱鎔基総理が、北京は放棄する以外ないかもしれない、と発言したと報道されました。ほんとうでしょうか？

にもかかわらず、北京はどんどん拡大しています。私には、中国人は楽観的遺伝子だけが選抜されてきているように思えてなりません。毛沢東の人口政策のツケがそのあと長く中国を苦しめました。いま同じことがすすんでいないか、とても心配です。

目先の問題と、長期的な課題が対立するかたちで現れたとき、目先の課題を優先しがちです。それは日本も同様です。環境の問題は長期的な課題の最たるもので、その重要性を認識はしても、つい後回しにされがちなのです。この問題で日本の私たちはえらそうなことはいえませんが、

#### 4. これからの望み

私たちのプロジェクトをたくさんの方が視察にきます。北京、太原、大同の幹部たちがきますし、日本の政府関係者や専門家もきます。私たちのプロジェクトで、中華全国青年連合会が環境保全国際ボランティアキャンプを開いたので、イギリス、フランス、ドイツ、その他の国の青年もやってきました。

おおむね評判がいいようです。どちらかというと、くろうと好みのプロジェクトになっています。土壌の通気性の改善、菌根菌の活用、さまざまな樹種の混植など、いろいろと工夫もして、効果をあげつつあります。「NGOのボランティア緑化なんてママゴトだと思ってましたよ。これほどのことがやられているのを見て、すっかり認識を改めました」といってくれる人もいます。私たちの拠点になっている環境林センターは、苗圃が中心ですが、ことしの春から20haに拡張しましたから、ママゴトの規模は超えているでしょう。

それらのことを現場でみごとにやってのけているのは、現地のカウンターパートです。複雑な人間関係の処理、農村における農民の組織、政府関係との折衝……、中国でなにかをすすめるにはどれも不可欠ですが、彼たちに比べれば、それらの能力は私なんか小学生なみです。彼らがいなければ、彼らの急速な進歩がなかったら、なにひとつ進捗しなかったでしょうし、私たちの認識もいまほど深まることはなかったでしょう。

私としては、今後、小さくてもいいからホンモノでありたいと思っています。「ホンモノ」には2つの意味があります。1つは、先駆性をもっていることです。いま中国の北方の植林はごく少数の樹種(マツやポプラ)ですすすめられています。気候は大きく変化しており、病虫害の大発生でもあれば、壊滅の危険をまぬがれません。つぎの世代の樹種、とくにこの地方の森林の主人公となる樹木(潜在植生をみきわめる必要があります)を見だし、育苗と栽植の方法を確立する必要があります。98年に大同市最南部の靈丘県で自然林が見つかったので、その近くに植物園を建設し、さらにそれらの樹種の北上作戦をとっています。

もうひとつは普遍性です。ごぞんじのように中国では、98年の長江・松花江などの大水害を機に、植林熱が高まっています。特別の方法をこうじたり、たくさんの費用を投じなくても、そのなかで実現できる方法で緑化をすすめたいのです。日本人が小さなコロニーをつくって、そのなかで見栄えのいいことをする、そういうことを、私たちとしてはしたくありません。

もっとたくさんの日本人に、中国の環境に関心をもってほしいと思います。中国の環境がこれ以上悪化すれば、日本列島も大きな打撃をうけます。すでに安全保障の問題だと語る日本の識者もいます。そのとおりだと私も思います。

中国にたいする経済援助を「環境・内陸・農業」という3本柱にシフトするという方向が、かなり以前から語られてきました。日本の国民の同意をえられることだと思います。私たちも賛成です。日本にとって、経験も知識も乏しい領域であり、またここでは日本の常識は通用しません。多少の失敗は許されるべきであり、そのなかで経験と教訓を積むべきです。

そう多くない日本のNGOがそのような環境で苦闘してきました。ODAとNGOの共同が語られますが、私たちのプロジェクトを視察した日本政府の関係者は「次元の異なるものだ」と評価しました。私はそのような評価に感謝しています。別個にすすんで、ともに達成するのが理想です。たがいに利用しあい、そのなかで信頼関係を醸成すべきだと思うのです。私たちとしても、ただ利用させてもらうよりは、多少なりとも利用してもらえらるほうがうれしいのです。

私たちは創立以来9年になります。資金問題ではずっと苦闘してきました。いつつぶれてもおかしくない状態がつづいてきました。必要な資金はそう大きなものではありませんが、大部分の苦闘は資金の調達にむけています。いくらかでもそれが軽減されれば、力量をほかに回すことが可能になります。非営利団体への寄附金にたいする免税措置など、ある意味では当然のことを早く実現してほしいと思います。

## NO. 82 遠田宏先生のこと(1) 2000. 12. 25

黄土高原だより NO. 73 の最後に、93年5月にツアーの団長として現地を訪れた清田祐一郎さんが、「高見くん、こういう厳しいところでの活動なんて、なんどもなんども波がくるよ。技術的にも必ず壁に当たるから、日本でいい専門家を探しておいたほうがいいよ。きみが懸命に口説けば、協力してくれる人もきっといるよ…」と話したことを書きました。そんな波があったらパンクしちゃうよ、と私は思いましたが、彼の警告はきびしく受けとめました。

その年の秋、ふたたび長く大同に滞在した私は、北岳恒山の北面で「恒山国家森林公园」の計画が持ち上がり、そのなかに「引種園」があることを知りました。その目的は、新しい植物

をここに導入することです。この森林公園の実務責任者でもある渾源县林業局長の温増玉さんに、「日本の専門家あてに協力を求める手紙を書いてほしい」と頼みました。

渾源に滞在しているとき、私は毎朝のように彼の家に行き、アワとジャガイモの朝食をごちそうになり、行動をともにしていたのです。計画そのものに意味があると思いましたが、日本の専門家の協力がえられるようになればいいな、と思ったのです。

日本に帰ってから、日本語の訳文と、私が知っているかぎりの自然条件を記して、「可能性のある種子や苗木を提供していただきたい」という趣旨の手紙を書き、植物園協会加盟の園長あてに送ることにしました。それ以外の目的には使用しないという条件で、協会から名簿を提供していただいたのです。

かなりの数を送ったなかで、反応のあったのは3人でした。現代表の立花吉茂さんには、世話人の川島和義さんにつれられて、立花さんが技術顧問をされている大阪市立咲くやこの花館を訪ねました。そのときのことは以前の通信に書きました。

もうおひとかたは、東北大学理学部附属植物園園長の遠田宏さんでした。植物園にあるヤナギの挿し穂を提供できる、という返事がありました。私を有頂天にさせる親切な手紙がっていました。もうおひとり、環境庁新宿御苑管理事務所の所長さんで、そのあと、イチヨウ、ヒマラヤスギなどの種子をたくさん送っていただいたのですが、それ以上の関係をもてませんでした。残念なことです。

それだけのことを頼りに、94年夏に専門家の訪中団を派遣することにしました。専門的な目で現場をみてもらわないことには、どうしようもないと思ったのです。縁というのはこういうことかもしれませんね。立花さんと遠田さんは、植物園協会の団でいっしょに中国の雲南を訪れ、同室になったことがあるとのことでした。

「立花さんの実務能力に敬服しています」といわれる遠田さんに、「団長はたぶん立花先生です」なんて、かつてに私は話しました。「まじめな方ですよ」と遠田さんを評価する立花さんには、「遠田先生もおそらく参加してくださいます」なんて、いったんです。それで終わりだったら、私はりっぱなサギ師ですが、おふたりとも参加して下さったんですね。

出発直前になって、名城大学に移られたばかりの前中久行さんも、学生3人をつれて参加されることになりました。立花さん、遠田さんは乾燥地ははじめてだったのに、前中さんは数年まえから中国の内モンゴルで緑化の研究をされていたのです。神戸西農協の本野一郎さん、ず〜っと私の知恵袋の橋爪新太さんなども参加してくれました。

この調査団にどこをみてもらうか、私には悩みでした。92年からはじめた協力地のなかにも、

まったくダメなところと、比較的うまくいっているところとがあります。いいところをみてもらうのがいいか、悪いところをみてもらうのがいいか？いちばんダメな渾源県西留郷と恒山南面の植林地をみてもらうことにしました。むずかしいところをみて、それで残ってくれる人しか、役にはたたないだろうな、なんて不遜なことを考えたのです。

移動の過程で、ずいぶん多くのことを私は教えてもらいました。団長の立花さんは、私が回しつづけたビデオの画面に登場しないんです。車が停まったとたんに集団から離れて、植物を観察したり、写真を撮ったりしています。「プラントハンターの鉄則は、最初にみたときに写真を撮り、採集しておくことです。帰り道で、なんて思って、なんと失敗したかわかりません」なんて話もききました。

農村に行く途中で、マイクロバスのタイヤが2つ同時にパンクし、立ち往生しました。ふつうだったら、ブーイングでしょう。ところがこの先生たちは、サーッと散らばって、活動をはじめたんです。前中さんは、道路ぎわの畑が崩れおちたところで、畑の表土の厚さを測り、塩害の層がどこにあるかをたしかめながら、「すれすれの深さまで耕しているんですね。これより深く耕したら、かえって問題が起きますよ」などと解説しつつ、土の標本を採取します。

山西農業大学から男女1人ずつの教授が同行していたのですが、日本の専門家たちと対照的でした。2人ともとても太っていて、動きが緩慢なんですね。日本の専門家の大部分が初めての体験であるのにたいし、2人はホームグラウンドですから、珍しいことがないのは当然でしょう。でも、そのときの違和感はずっと残っています。

ところで、今回のタイトルの遠田先生があまり登場していません。どこにいても土を採取し、水を加え、それをかきまぜてというふうで、なにかをしているのですが、ほとんど話をされないんですね。「私はこんなことを考えていたんですけどね……」なんてきたのは、ずっとあとのことです。「なにが問題なのだろう、作物だってちゃんと育てているじゃないか、そう思ってましたよ。あのとき、植林が失敗したところに行かなかつたら、つぎにくることはなかったでしょうね」。

この調査団がきた94年夏は、私が大同に通ったなかでも最高の年だったと思うんです。前中さんも、「畑をみると、内モンゴルにくらべてはるかに豊かですよ。ところが县城あたりのようすは内モンゴルのほうがいい。農村のようすもあちらのほうがいい。農家をのぞきこむと、その差はもう歴然です。けっきょくは人口問題なんでしょうね」といっておられました。

話は変わりますが、私たち夫婦はきょう(23日)森井正人さんの葬儀に出席しました。私よりも若い51歳で亡くなったのです。お父さんと彼と息子さんと、親子3代と大同へごいっしょしました。正人さんのおつれあいの白形光江さんは、転勤で職場が遠くなるまで、このネットワークの世話人でした。大恩人です。

それなのに私は、亡くなる 2 日前に、やっと見舞っただけです。日常の忙しさに私がかまけているあいだ、私のつれあいは「毎日、そのことを考えてつづけていた」といいます。あれだけお世話になっていながら、ご一家のたいへんな時期に少しも報いることがなかったのです。古い友人を失ったのと、自分の情けなさで、涙が止まりません。

## NO. 83 遠田宏先生のこと(2) 2000. 12. 31

東北大学植物園長だった遠田宏さんは、96 年春に定年を迎え、そのあと夏、春、夏、春……、と毎年 70~80 日も大同に滞在してくれることになりました。でも、彼のやっていることは、最初、私にはわかりませんでした。

硬度計で土の硬さを測ります。春先、ワーキングツアーがやってきて、果樹を植えるための穴を掘ると、そのなかに入り込んで表面から深さ 10cm 刻みぐらいで、土に計測器を押しつけ、硬度を測ります。植物の根が土のなかに分け入っていくことができるかどうかをみるのだそうです。なんどもなんども測ったあげく、「いやー、あまり意味はなかったようです。この土は水を含んだときと、そうでないときとで、極端に硬度がちがいますね」なんて、照れくさそうに話されるんです。

いまはセンターの苗畑になった小老樹の林で、ポプラ 1 本の根を掘ったことがあります。幹に近いところから、根が伸びている方向に、根を切らないように注意しながら、ずっと掘っていくんですね。表面から 20cm くらいは腐植を含んだ黒い土が混じっていて、草の根も伸びているんですけど、それから下は黄土の心土で、腐植もなければ、草の根もほとんど伸びていません。

小老樹の根は、その表土と心土との境い目に沿って、なかには 10m 以上も横に横にと伸びています。もちろん、となりのポプラと根が重なりあっています。そしてわずかに 1~2 本だけ、下へ下へと深く伸びている直根があります。残念ながら、その深さを測ることはできません。倒れないように地上部を支えている根と、水分や肥料分を吸収している根が、役割分担しているような感じです。遠田さんは、センターの技術者や私なんかを指揮しながら、しっかりメモをとっていきます。

大同県で小老樹を何本か切ったときなんか、おもしろかったですね。勝手に木を伐っちゃあいけないことに決められているんです。私たちが伐っていると、村の男がみとがめて、「なにをしているんだ！」と、厳しい目を向けてきます。40 年以上も大同市林業局の技術者だった侯喜が、大同事務所の技術顧問に就任したばかりだったんですね、そのときは。村の男に老侯は、「おまえ、なんて名前だ？　じゃあ、おまえの親父は〇〇で、おまえのお袋は△△の村か

ら嫁にきているだろ」なんてやりだすんですね。

遠田さんは年輪を観察しながら、「最初の15年くらいはよく生長してますね。そしてそのあと、ほら、まったく伸びない年がでてくるでしょ。この年が早魃だったんですよ。もともとの主幹はこれだったのに、ここで枯れてしまって、代わりにこの枝が幹になって、またここで枯れてしまって……」というふうに解説してくれるんですね。「村の人の話と合致しますよ。『最初のあいだ、このポプラはとてよく伸びて、いまよりずっと高く、ずっと太くなっていたのに、しだいに縮んでしまった』って。あれは、そういう事情をさしているんですよ」。

遠田さんは、中国の現場でそうやって調査しているだけじゃないんです。日本に帰ってから、そのデータをきちんと整理し、疑問に思ったところは、いろいろ自分で調べて、事務所に連絡してくれるんですね。自然科学者って、こういう人なんだな、と私は思いました。遠田さんのいうことの意味は理解できなかったんです、最初のうち私は。でも、その雰囲気はとてもすきでした。

たいていの人は信じてくれないんですけど、私は科学少年だったんです。そして、原子力をやりたいと思って大学にはいったんですが、学生運動に深入りして、すぐに授業にでなくなりました。進学したかったのに工業高校で終えて土木技術者になった兄が、「一生ものだから……」とあって、ドイツ製のりっぱな製図セットを買ってくれたのに、図学実習の時間に、カラスグチを「∞」形に回しながら研ぐことだけ習って、墨をいれることもなく、行方不明にってしまったんですね。

遠田さんが現場でやっていることをみたり、話をきいているうちに、頭の働き方が変わってくるのが、自分で感じられるんです。夜は県の招待所かなんかの同じ部屋に泊まって、ウイスキーを傾けながら、いろいろ話をききます。いまもそれが最高にうれしく、ぜいたくだと思える時間です。へたをすると、2人でボトル半分以上があいちゃうんですね。「ひどい乾燥ですね。フタはしてあったのに蒸発してしまった」なんていいながら。酔いが回ってくると私は、「先生、ボクってけっこういい学生でしょ！」なんてからみます。先生がしかたなしに、「そうですよ」と応えると、いあわせた通訳の玉萍が、「自分で自分のことをいい学生だなんていってる」と、ケラケラ笑います。

私が「先生、先生」といってまとわりついているうちに、大同事務所や環境林センターの人たちも「センセイ」と呼びはじめました。立花さんはいまもこわいところのある「リーホワラオシ」（立花老師）で、「センセイ」といえば、遠田さんのことです。それでも遠田さんは、中国側にたいしても、ツアーの人たちに向かっても、自分の意見を積極的にいおうとはしなかったんですね、長いあいだ。

大きく遠田さんが変わったのは、98年春からだったでしょうか。日本からのツアーを迎えて、

バスのマイクを握ると、いろんなことを話しはじめたんですね。「なんでも積極的に質問してください。わからないことは、わからないといいますから……」と前置きしながら、遠田さんの説明は、自然科学の分野にとどまらないのです。そして中国側にも自分の意見をいうようになりました。

その変化に、カウンターパートの責任者の祁学峰がすぐ気づきました。おそらく通訳の王萍から、日本のツアーに遠田さんが説明していることの内容もきいたのでしょう。私のところにやってきて、「遠田老師はいったいどうしたんだ？ 急に積極的になっただけでなく、話の内容も植物学者じゃなくて、社会活動家のそれじゃあないか……」。

遠田さんについて書くのは、まだ熟成がたりなかった気がします。このつづきはずっと先になるでしょう。

## 【2001年】百年に一度と呼ばれる大旱魃

西暦の奇数年にいい年はない、と繰り返し書いていますけど、この2001年はとんでもない大旱魃でした。春から雨がなく、耕作を最初からあきらめて、出稼ぎにでる人が多かったのです。あとで村を回って調べると、年間の収入は平年より多いケースが多かったのです。農業で収入を得るのよりも出稼ぎのほうが割がいいというおかしな現象がおこっていたのです。霊丘の自然植物園が軌道に乗り、大同県聚楽郷で実験林場カササギの森がスタートしました。

黄土高原だよりも3年目を迎え、読者も増えてきました。そして、そのなかからこれをまとめて出版したらどうだ、と提案してくださるかたもでてきたのです。そのことを私も意識するようになり、活動初期のことを思いだして書いています。

### NO. 84 豊かさってなんだろう？ (2) 2001. 01. 09

同じ表題でNO. 79に、「粗っぽくいえば、人の幸福感ってのは達成を分子、欲望を分母に表せるんじゃないだろうか」なんて書きました。この問題は、若いころからずっと考えていることなんですけど、結論なんてえられそうにありません。

1999年の年末、緑化の問題を中心に、大同の農村でアンケート調査を実施してもらいました。質問項目は、たたき台を私がつくり、ネットワークの世話人、大同事務所のメンバーとで練り上げました。大同事務所の人たちも、「とてもおもしろい」といって興味をもち、こちらの希望よりはるかに多い7県21の村で実施してくれました。「最初に思っていたより、ずっとたいへんだった」というのが、事務所の人たちの感想です。

それはそうでしょう。質問の大項目だけで 26 もあり、それから枝の質問があり、突っ込んだことをきいています。配布 950 枚、回収 900 枚、有効回答 884 といえば、ちょっとしたものでしょう。今回の通信にこのことを書くのは、いま改めてその集計を見直しているからです。

木を植える「目的」をつぎのような選択肢で質問しています。

- A. お金になる。
- B. 自分の家で使ったり、食べたりするため。
- C. 防風防砂、水土流失などの防止のため。
- D. 美観・環境をよくする。
- E. 善行を積みばいいことがある。
- F. 目的はないけど、しかたないから植える。
- G. その他

全体と、それぞれに特徴のある典型的な 5 つの村の回答を、パーセンテージで示すとつぎのとおりです。

	全 体	遇 駕 山	随 士 宮	李 二 烟	呉 城	上 北 泉
A	30.8	23.3	19.6	0.0	71.4	80.0
B	39.8	10.0	39.1	16.0	16.3	84.0
C	74.6	56.7	54.3	88.0	42.9	72.0
D	67.6	33.3	52.2	80.0	40.8	84.0
E	25.1	6.7	23.9	0.0	6.1	62.0
F	2.0	0.0	0.0	2.0	2.0	0.0
G	1.0	3.3	0.0	0.0	2.0	0.0

この地方の緑化が、風砂と水土流失の防止をいかに重視しているかわかりますし、それが農民に浸透していることも理解していただけるでしょう。植林に参加したこれまでの日数を尋ねると、500 日以上と答えた人が全体の 37.7%にもなり、100 日以上となると 66.0%です。頭のなかだけじゃなく、からだを動かしているんですよ。

ところで、AとBは狭い意味での実利性なんですが、村によってずいぶんちがいます。この 2 つの合計が、上北泉村では 164%になるのにたいし、李二烟村はわずかに 16%、しかも「お金になる」という答えはゼロです。逆にCとDをたした数字は、李二烟村が 168%で、最高なんですね。

これをどうみられますか？李二烟村は目的が純粋でいい。数年前までの私だったら、そう考えたんです。

少しだけ説明すると、上北泉村と呉城村は果樹を植えています。そのほかはマツが中心です。

上北泉村はすでに 15 年の歴史があり、急斜面の狭い畑を果樹園に変えて、県内有数の豊かな村に生まれ変わりました。呉城村は 94 年からアンズを植えはじめ、これまでに 600ha、50 万本（これは郷の数字で村はその一部です）まで広げ、99 年にはじめて収穫し、多い家は 1 万元近い収入をえたそうです。「退耕還林」（耕作をやめ森林に返す）のモデルとして、広く紹介されるようになりました。

それにたいして李二烟村は、大同市のなかでももっとも環境の厳しいところにあり、1 人あたり年収 100～200 元（1 元＝13.5 円）という、悲しいくらい貧乏な村です。浸食谷の急斜面に、壊れかかった窯洞がへばりついています。95 年から 97 年まで私たちも緑化の協力をつづけたんですけど、うまくいったことがないんですね。

農民の責任というより、県の林業局なんかの指導がデタラメなんです。カメラマンの橋本さんといっしょに現場をみてきた通訳の王萍が、帰るなり私に「高見さん、あれでは活着しません」といったんですね。彼女の本職は看護婦さんですけど、日本の専門家の通訳として現場を回るうちに、そのレベルになったんです。マツと樺条（マメ科の灌木）を植えて、その年の活着率はわずか 18%でした。

そういうことからいうと、せまい意味での実利性も無視できないんですね。というより、それが重要なんです。最初からそれを期待しないプロジェクトは、うまくいかないようです。

ところで、別項の植林の問題点についての質問にたいし、「労力その他を使っても報いが無い」と答えた人の割合はつぎのとおりです。

全 体	遇 駕 山	随 士 营	李 二 烟	呉 城	上 北 泉
5. 7	0. 0	0. 0	0. 0	6. 1	2 4. 0

いちばん大きな成果をえているはずの上北泉村で 4 人に 1 人が不満をもち、最初の年とはいえ収穫の時期を迎えた呉城村で不満に思う人が多少なりともいる。そして、その他の村でゼロなんですね。

欲望なり希望なりがそれなりになかったら、なにごともうまくいかない。そして、なにかをうると、そのぶん欲望もふくらんでいく。人間ってそういう存在なのかもしれません。最後になってやっと標題の「豊かさってなんだろう」に多少なりともつながったのでしょうか？しんどい問題です。

## NO. 85 自然林再生のシナリオ 2001. 01. 18

昨年 8 月初めに、大同市の最南部・靈丘県狼牙溝郷の納士山で、自然林の植生調査を実施し

ました。夏の雨にたたられ、近場での調査で1日をつぶしたうえ、道路がくずれてルートを変えざるをえなくなった結果、700mの垂直距離の往復と現場の調査を1日でこなさざるをえなくなりました。強行軍の連続で、私なんか、調査の現場に到着したとたんに、足がケイレンしたくらいです。そのときの苦勞は、NO. 60~61に書きました。

大同にこんなところがあるなんて、ちょっと信じられないくらいの森林です。うっそうと、とまではいえませんが、下草も生えないくらいに、樹間はふさがっています。林床には腐葉土が厚くたまり、その下も黒い土です。森林土壌というのでしょうか。この林の主役になっているのは、リョウトウナラ(遼東櫟、*Quercus liaodongensis*)のようです。主な脇役としては、マンシュウボダイジュ(椴樹、*Tilia mandschurica*)、ヤエガワカンバ(紅樺、*Betula dahurica*)、カエデ(元宝槭、*Acer truncatum*)などの喬木と、ハシバミ、ウツギ、シモツケなどの灌木が控えていました。

プロットを2つとり、ポリテープで周囲を区切って、そのなかに生えている樹木の種類、胸高周囲、樹高などを1本ずつ測って記録しました。方形区毎木調査というのだそうです。途中のアクセスもつらかったのですが、この林も傾斜角40度の急斜面です。私なんか、なんどか転げ落ちそうになりました。

そのあと、この樹林の成り立ちを調べるために、とりあえず3本の木を切り倒し、年輪の標本をとることにしました。私のようにひねくれた木なら、切り倒すのに躊躇はありません。でも、それではサンプルにならないんですね。惜しいんですけど、スラートと伸びた、胸高直径25cmほどのナラを1本切りました。メジャーで樹高をたしかめると、8.1mでした。この林で、背の高い木は、これくらいの高さにそろっています。

というふうを書くのは簡単ですけど、この木はとても堅いんです。ノコギリをひきながら、ウシのように力の強い霊丘植物園の技術者が、たちまち汗だくになりました。北海道大学天塩演習林の浪速彰彦さんが、ときどき代わったのですが、私はそのようすを撮影するだけで、ノコギリをもとともしませんでした。軟弱な私には相手ができそうになかったからです。

その切り口から厚さ2~3cmの年輪サンプルを採集しました。2枚はほしいところですが、あまりに堅いので、1枚で諦めました。半分くらいの直径のナラをもう1本。それから20cmくらいのマンシュウボダイジュを1本、伐倒して、円盤を採集しました。それらの年輪を観察すると、いろんな事情がわかってくるんですね。

大きいナラは、樹齢39年です。直径3cmほどになるのに、17年もかかっています。それも、あとになるほど年輪幅がつまってくるんですね。おそらく周囲の木が茂って、日陰になって、生育が困難になったのでしょうか。

ところが、いまから 22 年ほど前を境に、このナラはふたたび太りはじめます。そして最近になって、ふたたび年輪幅が横這い、もしくは下降ぎみです。もう 1 本のナラと、マンシュウボダイジュは、そのころに発芽したようで、その後、ほとんど直線的に生長してきました。おそらく、22 年ほどまえに、人間による最後の破壊があったのでしょう。周囲の樹木が切られたのに、直径 3cm ほどだったあのナラは難を逃れた。その状況を想像させる切り株も残っていました。

そして、周囲が明るくなったおかげで、太陽の光を十分にあび、また生長をはじめたんでしょう。マンシュウボダイジュと、もう 1 本の小さなナラとは、そうやって明るくなったときに発芽したようです。苦労しらずで伸びてきたのかもしれない。

ふもとの納土台村の人は、そのころまでは、タキギを取りにここまできていたんでしょう。すごいものです。途中には、ほとんど垂直に思えるような岩壁があり、幅 30~50cm のテラスを伝うところもあったんですよ。中国登山家協会働く趙さんでさえ、尻込みしちゃったんです、ここでは。

ところがそのときを最後に、村の人たちはタキギを取りにこなくなった。そのヒミツはくる途中にありました。毛沢東時代の 60 年代に、この山のふもとにかなりの面積、アブラマツを植えたんですね。十数年たつと、マツの下枝が燃料に使えるようになります。村の近くでまかなえれば、こんな山奥までタキギを取りにくる必要がありません。

以前の道だったところの両側には、ハシバミ・シモツケなどの灌木がぎっしりと茂っていて私たちはそのトンネルをくぐってここまできました。いまこの道を、タキギを担いで下るのは不可能なことです。これらの灌木も、以前はみな切られて、燃料に使われていたにちがいありません。マツを植えたことが、回りまわって、落葉広葉樹の自然林の再生を実現したのです。

こういうシナリオを描いてみると、木を植えるのだけが緑化ではない、という思いが強まります。私たちの活動の内容も、初期のころとはどんどん変わっていかざるをえません。

## NO. 86 暖冬っていいことかな？ 2001. 01. 24

昨年末に大同に行く途中、北京林業大学の教学実験林場に立ち寄りました。日本ふうにいえば大学演習林です。一昨年いらい、何度か訪れているのですが、ちょっと驚かされることが今回はありました。コノテガシワに虫がはいり、枯れているものがたくさんあるんです。中国名は「側柏」で、漢文でござんじの松柏の「柏」、ヒノキ科の針葉樹です。すぐに伐倒されたものもあれば、まだ立っていて、小さな穴から木くずやフンがでているものもあります。技術者によると、犯人(虫)はカミキリムシで、旱魃の年には多く発生するとのことでした。

北京で、マツの枯れているのは、これまでになんどもみたことがあります。毛主席記念堂の周囲のマツは、何回も植え替えられている、という話をきいたこともあります。冬でも青いものがほしいというので、そのようにしているそうです。でも、コノテガシワはもともとこの地方に多かった樹木ですし、天壇公園、中山公園をはじめ、北京には古木・巨木がたくさん残っています。私の不注意なのでしょうが、コノテガシワがこのように枯れているようすはこれまでみたことがなかったのです。今回は、青壮年とっていい直径 15~30cm ものが枯れているのをみました。困ったことです。

大同で、気象データをチラッとみると、年平均気温がこの 30 年で 1 度上昇しているようです。いちばん暑い 7 月の月平均気温は、上昇みではあるものの、変化はゆるやかです。それに比べて、1 月の月平均気温は、2 度近くも上がっています。最低気温のほうが上がっているのは、世界の平均的な傾向と一致しています。

99 年末に大同の農村で実施したアンケート調査でも、「夏が暑くなった」という回答が 51.6% であるのにたいし、「冬に寒い日がなくなった」という回答が 77.8% です。暖冬がつづいている、ということでしょう。1~2 度くらいなんだ、と思いがちなのですが、1~2 度といった気温の変化を、人間もこのくらい敏感にとらえているんですね。ということは、ほかの動植物はもっと敏感だと考えて、まちがいないでしょう。

大同の冬は、1 月の月平均気温が -11.3 度、月平均最低温度が -17.0 度にもなりますから、生活環境からいえば、冬の気温が上がることはマイナスではないと思われるでしょう。しかし、暖冬がつづく、虫がふえます。冬の寒さで死ぬことがないんですね。そのうえ、以前の通信で書いたように、春の雨が減り、秋の雨が増えています。北京でも同じような傾向にあるそうです。

虫たちはたいてい、すごい数のタマゴを生みます。タマゴは湿気に弱く、カビがはえたり、腐ったりで、死んでしまうんだそうです。逆に乾燥には強く、乾燥状態では 2~3 年たっても孵化能力がある、とききました。2000 年も、イナゴやバッタが大発生し、ところによっては、1 平方 m あたり 6,000 匹にもなったそうです。信じられますか？ 1 平方 m あたり 600 匹といわれる現場を歩き、足もとがザワザワって動くような経験をしたことはあります。黄土高原の最近の気候に、虫たちはゴキゲンなのかもしれません。

中国の東北地方やシベリアなど、緯度が高く気温の低いところでは、それなりの降雨・降雪に恵まれ、蒸発量も少ないので、りっぱに森林が成立します。そのかわり、樹種は少なく、主なものは数種類といったところのようです。低温のところは、虫も病気も少ないので、そのような森林でもやっていけるのでしょう。

暖かい地方ほど、虫も病気もふえます。これ以上、日本の気温が上がったら、マラリアをはじめ、克服されたはずの病気が戻ってくると心配されているようですね。熱帯産の毒グモが関西で越冬している現実もあります。病気や虫が多いことにたいして、植物は、多様性をもつことで対応しているようにみえます。あまりに擬人化した見方かもしれませんが……。私はみたことがありませんが、熱帯雨林では、1ha のなかに同じ種類の木が何本もない、それくらい多様だと、小川房人顧問や立花吉茂代表からきかされています。

大同あたりで、植生が貧しいまま、気温が上がったらどうなるのでしょうか？いまでもたくさんポプラにカミキリムシが発生し、新疆ポプラ以外はすべて被害を受けている、といい状況です。霊丘自然植物園の李向東からは、「植物園の近くで、松毛虫によってアブラマツが枯れている。なにか対策はないだろうか？ 日本の専門家にぜひきてほしい」という要請がありました。

ことし、日本は15年ぶりとかの寒い冬です。ときどき、朝のテレビの天気図をみていますが、画面の左上にかろうじてひっかかる大同のあたりは、いつも高気圧のマークがありますね。日本では雪が多いのですが、大同はどうなんでしょうか。きょうの北京からのメールには、雪が降って、交通には不便だけど、農村のためにはいいでしょう、とありました。気温はどうなっているのでしょうか。きのうも大同事務所から電話があったのに、事務的な連絡をただで、かんじんなことを聞き忘れてしまいました。前号から今号、そして次号へは、内容的には話題がつづいています。

## NO. 87 「しごと」と「あそび」 2001. 02. 06

再生した自然林のことを前々回に書き、前号で病虫害の発生を書いて、次号までは関連して、なんて書いたら、たいていの人が今回のテーマを予想していたはずです。そのとおりにしたら、ひねくれものの私としてはおもしろくない。話題を変えます。

1月11日に東大農学部でお話しする機会をもらったんですね、国際協力がテーマの学生主催の集まりでした。私のつごうで、暮れも押し迫って日程を決めたのに、たくさん集まって、びっくりしました。熱心にきいてもらって、気持ちのいい集まりでした。出席者の半数以上があとの懇親会に残ってくれ、ノンベの私にご満悦です。

こういう集まりで、ODA と NGO の関係についての質問って、定番なんですね。「2つをたして、ODANGO がいい」なんて人もいます。本当かな、と私は思います。ODA は、「国益」や政治関係から離れることができません。そうでしょ？NGO のばあいは、協力現地の人たちと共通の目標をみつけ、共通の努力をするなかで信頼関係をつくる、それしかないと思うんですよ。

そういう2つがなかよくお手手をつないで、ということになると、いいことだけではないはず。私たちのような足腰の弱いNGOは、足がもつれて転んでしまいます、きっと。肌合いも、ちがいます。いろんな機会に私も痛感しています。べつべつにすすんで、結果としてオールジャパン、という関係が理想だと私は思います。そういう思いをこめて、「ODAの方たちはしごとでしようけど、私たちはあそびなんです」って、そのときは話したんですね。

そしたら、昨年夏に大同でいっしょに酒を飲んだ東大大学院の梶幹男教授が、いちばんうしろの席で大笑いしているのがみえました。やばい！ 彼にはもちろんつうじてますよ。だから不安になったんです。私はよく冗談、じゃなかった、冗談にまぎらわして、自分の思いを話すことが多いんですけど、この通信にも書いた「頭の黒いネズミ」のように、若い人たちに通じないことがあるんですね。いいわけじみたことはしたくないから、「たいていの人が、しごとよりはあそびのほうに身をいれるでしょう」なんて、フォローしたつもりだったんです。

あの集まりをセットした小松雅史さんが、数日前に、出席した学生なんかの感想を送ってきてくれました。赤面ものです。「感銘を受けました」なんてのがズラーッとつづくんですから。ホントにそうなら、コースをはずれる人がでてしまうでしょう。

そのなかにひとつ、こういうのがありました。「最後の『こっちは遊びでやっている』という言葉が印象に残る予定。手段であるにして利益ベースが目的でないことが継続的に可能である非常に非経済学的な点で」。後半は文章にはなっていないけど、気持ちはすごく伝わってくるんですね。この人はかしこいのかな？ 私と同じバカなのかな？ どっちでも私はうれしい。

ずっと大同でごいっしょする遠田宏先生に電話をかけ、電話口にてられたおつれあい、「たいへんお世話になります」とあいさつすると、「い～え、あそばせていただいて…」なんて返事がくるんですね。1月10日は仙台のお家におじゃまして、今年の調査のとりまとめについてレクチャーしてもらい、泊めていただいたので、とっさにあんな言葉がでちゃったんでしょうね。

こういう活動って、「あそび」と思うからやってられるんですよ、きっと。しごとだったら、こんなワリの悪いしごとはないです。こんなにあそばせてもらって、そのうえ食べさせてもらえて、こんなおもしろいことはない、ってことになるんですね。

じつのところ私は、今回の「しごととあそび」をまったくちがう書き出しで書きはじめていたんです。ところがそこに、小松さんのメールがはいり、さっきの彼の感想文があったから、構成をひっくり返すことになりました。

最初の書き出しはこうでした。いまから35年もまえ、大学の寮にはいってまもなくのころ、いつもは古ぼけた卓球台が並んでいるボロいホールで講演会がありました。講師は吉本隆明さんです。出演交渉にでかけた先輩の寮委員から、「気さくな人だったよ」と聞かされました。

高村光太郎がテーマだったと思うのですが、私の記憶にあるのは断片だけです。1 つはプロとアマチュアということです。「お金になるのがプロで、そうでないのがアマチュアかといえば、お金にならないプロもいれば、収入のあるアマチュアもいる、それは基準にならない。もの書きでいえば、書きたいことがあるときだけ書くのがアマチュアで、頭のなかが空っぽで、なにも書くことがないときでも、原稿用紙を机におき、ペンをもてば、しごととして、ますめを埋めていくのがプロだ」というものでした。

しごとをするっていうのは、1 日の 24 時以降にする、というのもあったんです。人と同じだけのことをしていてもダメなんだ、人以上の努力をしないといけない、その部分が意味をもつのだ、というふうに、ずっと私は考えてきました。

鳥取の農村からポツと東京にでた、当時 18 歳の私が 35 年もたって書くことですから、正確であるはずはありません。でも、吉本さんの話の断片が、私の頭に残って影響を与えつづけたんですからね。おそろしいことです。

そんなことを書いているところに、『こっちは遊びでやっている』という言葉が印象に残る予定」なんてのがきちゃったら、流れを変えざるをえないじゃないですか。あまりのタイミングに、私は驚いたんですね。でも、書くことがなくても原稿用紙を埋めるようなプロのしごとよりは、「おもしろいな」と自分を納得させられる、あそびのほうがずっといいと、いまの私は思います。もちろんそれは、吉本さんの発言とは無関係のことです。

## NO. 88 落葉広葉樹の北上作戦 2001. 02. 13

中国での緑化協力を思い立ったのは 1991 年 8 月のことでした。可能性はあるのか、どういうことに気をつけたらいいのか、この人ならと思う人を訪ねて、意見をうかがいました。龍谷大学の中村尚司先生もそのなかの一人でした。注意すべきは、循環性、多様性、関係性の 3 つだ、というアドバイスを新鮮にうけとめました。

ですから、多様性が重視だという考えは、いちおう最初からもっていました。そのころ読んで中国の林業部(当時)の資料に、「中国はこの広大な国土を、南はコウヨウザン(闊葉杉)、北はポプラというたった 2 種類の樹木で緑化してきた」といった自己批判があったので、その思いをなおさら強くしました。

大同にきてみると、案の定、植林に使われる樹種はきわめて乏しいのです。山や丘陵の植林につかわれているのは、アブラマツ(油松、*Pinus tabulaeformis* Carr.)、モンゴリマツ(樟子松、*P. sylvestris* Linn. var. *mongolica* Litv.)、カホクカラマツ(華北落葉松、*Larix principis-*

rupprechitii Mayr.) くらいのもので、以前、大量に植えたポプラが小老樹になったため、山や丘陵では使われていません。混植もまったくとっていいほどなされていません。

なんとか樹種を増やしたいのですが、適した樹木は容易にみつかりません。大同は大陸性気候で、いちばん寒い1月の月平均気温は $-11.3^{\circ}\text{C}$ (平均最低気温は $-17.0^{\circ}\text{C}$ )、もっとも暑い7月の月平均気温は $21.8^{\circ}\text{C}$ (平均最高気温は $28.1^{\circ}\text{C}$ )と年較差が大きいんです。冬はあんなに寒いのに、夏は暑いんですよ。

モンゴリマツは緯度で10度北から、30年ほど前に試験的に導入されたもので、いままでのところ、育ちは悪くありません。でも、専門家によると、寒い地方のものを暖かいところに移すと、小さいときは育っても、大きくなると疲れてきて、虫や病気で枯れることがあるそうです。大阪市立大学附属植物園のカラマツは、そうやって枯れていくので、「カラマツじゃなくて、カレマツだと職員がいうんですよ」と立花吉茂代表からきかされました。

東どなりは河北省で、大同に比べれば樹種は多いのですが、標高が高いぶん大同は気温が低く、河北省から導入した苗が冬の寒さで枯れるというんです。専門家の意見では、大きくなるにしたがって耐寒性はつくそうですから、小さいとき保護して育苗すれば、可能性のあるものがでてくるかもしれません。

気温だけが問題ではありません。年間降水量は平均で400mmですが、少ない年は220mmくらいまで落ち込みます。土は粒子が小さく、pHが8を超えることがあり、つよいアルカリ性です。そういう条件に耐えて育つことが必要ですが、それだけではだめです。経済的な意味でも、なんらかの見返りを期待できないと、農民の意欲を引き出すことができません。

霊丘県に植物園を建設し、さまざまな樹種の試験栽培や馴化にとりくむのは、こうした問題を解決するためです。ここは大同市のいちばん南で、自生の樹種も多く、ほかから導入したものをしばらく馴らして、広げる拠点としては最適だと考えました。発案者はもちろん立花代表です。

植物園建設の条件をなんとか整えて、地元の技術者に植生調査を依頼したところ、いくつかの自然林をみつめてきたんです。建設が具体化するまえに、こうやって成果を引き出したのは、植物園にかける立花さんの執念だといっていいでしょう。

自然林といっても、もちろん原生林ではありません。人の手でなんども破壊されたあと、自然に再生した二次林です。昨年8月、その1つの納土山で植生調査を実施し、その再生過程を推定することができました。黄土高原だより(N0.85)にそのことを書きました。

すると、その調査で大活躍した北大演習林の浪花彰彦さんが、返事をくれました。ふもとの

マツの林に、リョウトウナラ(遼東櫟、*Quercus liaotungensis* Koidz.)、マンシュウボダイジュ(糠椴、*Tilia mandschurica*)などの若木が生えていたけれども、あれに注目する必要がある、なにかの自然の力で上の二次林から種子が運ばれたものだろう、人手で植えるのは緑化としては下策で、自然に増えるようにするのがいちばんいい、ということでした。

そのとおりだと思います。霊丘自然植物園の上部には、リョウトウナラ、カエデ、トネリコなどが自生しており、人的な破壊から保護すれば、これから緑が濃くなると思います。大同市南部については、最初は思いもよらなかった緑化のストーリーがみえてきました。

では、北部はどうでしょう。山西省の北部では、年間平均気温がこの30年でおおよそ1℃上昇しています。そして、7月の平均気温にはあまり変化がありません。それにたいして、1月の月平均気温は、2℃近くも上昇しているのです。1999年12月の農村アンケート調査で、「夏が暑くなった」と答えた人が51.6%であるのに、「冬に寒い日がなくなった」という人は77.8%にたっしました。

数年前、大同市林業局でシンジュ=ニワウルシを話題にしたとき、技術者たちは「霊丘、広霊など南部では可能だが、北部ではむりだ」といっていました。ところが最近、陽高県などの万里の長城ぞいで、シンジュの自生がみられます。現在の大同市最北部の最低気温は、30年前の霊丘県の最低気温より高いとみてまちがいないでしょう。温度だけでいえば、霊丘県の自然林の樹木が、大同市北部で育つ可能性はあります。温暖化が今後もつづくなら、北の樹木を導入するより、南のものを増やすほうが安心だということになります。

大同県の采涼山、陽高県の大泉山村などで、小規模ながら、それらの樹木を植えてきました。今春からとりくむ大同県の「カササギの森」では、もう少し規模を大きくして実施します。日本の鎮守の森のように、本来の森のモデルとなり、種子の供給源となることを願っています。

## NO. 89 あらためて、中国の水問題。 2001. 02. 21

2月12日の夜、NHKテレビが「水の世紀が始まった」という番組を放送しました。黄河断流は、いまや地球環境問題の定番です。でも、干上がった黄河の映像がでたのは、これまでそんなになかったように思います。水のたいせつき、地球的な規模での水問題の深刻さを、多くの人が知るのはいいことだと思います。

でも、ちょっとだけ、どうかなと思ったのは、文字どおり雲上の宇宙の人、毛利さんの解説だったことです。地上の問題の深刻さが十分に伝わったのか、疑念をもったのが私だけの偏見だったらいいですけども……。「そうだよ、ボクは前から知ってるよ」ってなことで、へんな不感症人間が増えていくことが、テレビ報道につきまとう功罪の罪のほうなんだと思います。

黄河の下流、山東省の農村がとりあげられたんですけど、ナレーションのなかに、「黄河の断流がはじまって、下流の農村で水に困る村が増えている」とありました。畑が乾ききり、洗濯も3日に1回しかできないようすをみて、たいへんなことが起きているんだな、と思われた人も多かったはず。それはもちろん事実ですけど、だけど、より決定的に困っているのは、上中流のほうです。そんなことは、ちょっと考えればわかりそうなことです。

私の手元のカードは大同しかありません。99年秋に大同の地元紙は、「29.7万人が飲み水に困る状態だ」と書きましたし、その年の4月には「毎年2~3mずつ地下水位が低下している。2008年には完全に涸渇する」と報道しました。2008年といえば、残されているのはあと数年です。私たちの拠点の環境林センターの深さ79mの井戸も水がでなくなり、地元の水利局関係者は120mクラスでないとダメだといっていますので、地下水が広範囲に涸渇しているのは事実です。

ところで、99年末に大同の農村で、緑化にかんするアンケート調査を実施しました。7つの県の21の村、およそ900人を対象にしたんですけど、水についての質問への回答は意外なものでした。

- A. 水には不自由していない。灌漑もできる……42.6%。
- B. 生活用水には困らないが、灌漑はできない……47.4%
- C. 飲み水には困らないが、節約してやっと足りる……18.3%
- D. 飲み水にも困り、他の村へもらい水に通っている……3.6%

これをみて、たいていの人は、なんだ、困っているのは3.6%か、たいしたことないじゃないか、と思うでしょう。そして、中国の報道って、おおげさで信用できないな、と思われるかもしれません。

こういうこともあるだろうと考えて、1世帯で1日につかう水の量と、家族数をきいておいたんですね。水の量は、「〇担水」を単位にききました。日本の「水一荷」に相当し、大同の農村では1担はふつう45リットルくらいだそうです。ただし、村によって異なる可能性も否定できません。全体の平均と、以前にもとりあげた5つの典型的な村の、1人1日あたりの水使用量の平均は以下のとおりです。単位はリットルに換算しました。

全体	遇駕山村	随士営村	李二烟村	呉城村	上北泉村
23.8	15.6	24.5	31.0	16.6	21.4

たったこれだけです！水洗トイレで大をザーッと流すと、最低でも1回10リットルなんだそうです。たいていの村で、1人1日、水洗トイレ2回分の水で生活していることになります。そしてこのなかには、家畜の飲み水が含まれていることが多いんです。4人家族の1か月の使

用量は3立方mにもたっしないですね。

さらに、最近、水が増えてきたか、減ってきたかという質問にはつぎのような回答がありました。（数字は%）

	全体	遇駕山村	随士営村	李二烟村	呉城村	上北泉村
増えてきた	15.4	3.3	6.5	12.0	2.0	18.0
減ってきた	61.5	70.0	21.7	84.0	85.7	44.0
変わらない	22.4	16.7	32.6	0.0	0.0	48.0

3分の2近い人が、減ってきた、と答えています。そして大同市の全域にまんべんなく広がっています。増えてきた、と答える人は特定の村に集中していて、なにか個別的な原因があったようです。5つの村のなかでは、遇駕山村、李二烟村、呉城村が丘陵の上のほうにあって、もともと水が乏しいのですが、そこでは大半の人が水が減ってきたと答えています。危機的な状況が進行しているといっていいいでしょう。さらに条件の悪い村で、隣村まで水を買いかよ、といったことがはじまっていることを以前の通信に書きました。

私は最近、「中国では杞の国の子孫はとっくに死に絶えたようだ。いまは楽観的遺伝子しか残っていない」なんて、よくいいます。杞人というのは、天が落ちてこないかと憂いて、「杞憂」の語源を残した人たちですね。

『世界』（岩波書店）の3月号が「中国」を特集しており、そのなかに「生態環境破壊の抑止こそ急務」という文章が掲載されています。筆者の胡鞍鋼さんは1953年生まれの経済学者で、西部大開発をはじめ中国の経済政策に影響力をもつ人だそうです。朝日新聞にもこの人の紹介が掲載されていました。

『世界』の論文では、ただでさえ深刻な東部沿海地方と内陸部との経済格差が、より急速に拡大しつつある現状が報告されています。そして生態環境悪化の実例として、つぎの項目があげられています。標題をそのまま引用します。

- 1) 水土流失の激化
- 2) 世界で最も深刻な砂漠化
- 3) 森林の保有量の急激な減少
- 4) 草原の砂漠化、アルカリ化
- 5) 深刻化する自然災害
- 6) 悪化する大気汚染
- 7) 水質汚染と水資源不足の深刻化

そこにあげられている内容は、私なんかワワー騒いでいるのより、何倍も何十倍も大きくて、深刻なんですね。ところが、なぜか、その深刻さが伝わってこない。そして、最後のー

段落はつぎのようなものです。こういう人でないと、大きなしごととはできないのでしょうか。

「99年1月、国務院は「全国生態環境建設規則」を制定、21世紀の中頃までに中国の生態建設を初期(現在-2010年)、中期(2010-2030年)、そして後期(2031-2050年)の3段階に分けて努力するという目標を掲げた。およそ50年の時間をかけ、現存する天然林や野生の動植物等の保護を強化するというものだ。全力をあげて植林や緑地化を進め、土砂の流失を押さえ、砂漠化を防ぎ、生態農業(自然の力を借りる農業生産で、土地の生産性よりも持続性を重視する農法)の確立をめざす。そうすれば21世紀半ばには全国の水土流失地域の整備が終わり、適宜に緑化された土地には植林なども進み、「三化」(機械化、自動化、設備の専門化)された草原はほとんど回復、生態環境の予防と生態環境保護が目に見えて改善されていることだろう」

## NO. 90 やっと出る橋本紘二さんの写真集 2001. 02. 26

1994年秋のある日、お茶の水女子大学講師の小松光一さんが、私たちの事務所を訪ねてこられました。さる助成金の現地監査で大同にいきたい、とのことでした。長く時間をとって、みられるだけのところをみてきてください、と私は頼みました。途中からとなりの居酒屋に場所を移し、おそくまで話し込んだんです。

小松さんは、「よくみてくださいといわれて、ホッとしましたよ。なにしにいくんだって目でみられることが多いもので……」とのことでした。あいだの話をはしよります。大同から帰った小松さんは、「お役所の下請けで監査にいて、それっきりっていうのはもうしわけない。自分で団を組織するから、受け入れてもらいたい」といわれるのです。

小松さんが組織した95年夏の団は、メンバーがユニークでした。橋本紘二さんもその1人です。『現代農業』(農文協発行)という月刊誌の表紙とグラビアページを撮りつづけてきたプロのカメラマンです。でも、そのとき彼は、「こんなに移動が速かったら、写真なんか撮れっこないよ」とこぼすばかりでした。

翌年の春、橋本さんがまた大同にきました。夏もきました。秋にもまたくる、とのことでした。彼は中国語を話せないんですけど、それがよかったんですね。口の悪さではあたしと勝負なんですけど、ニカッと笑って、身振り手振りで農民とコミュニケーションしてるかぎりは、それが問題になりません。あの笑顔は特級なんです、あたしとちがって。そして、どんなに口が悪くても、王萍のニコニコ通訳を通すと、きっちりフィルターがかかります。

カメラマンってのはワガママなんです。ワガママでないとつとまらないんです。たった1コマの写真を最良の角度で撮るために、浸食谷のむこうに大回りして渡っていきます。コントラストのある絵を撮るために、太陽が傾くのをジーンと待ちます。対照物がほしいといっ

て、1台の馬車が通りかかるのを、1時間も待ったりします。重たいカメラを何台も担いで、ほんとに肉体労働です。それはそうでしょ。ずっと高級なカメラをアマチュアがもってて、アマチュアに撮れない写真を撮らないといけないんですから。

農村が輝くのは朝夕ですし、光線のぐあいも朝夕ですから、朝暗いうちにでかけて、夜は遅くしか帰ってきません。当然、食事は不規則になります。本人はいいんですよ。でも、運転手や案内役からは不満がでます。大同の農村は大部分が対外未開放地域だったんですけど、その理由は、あまりに貧乏なところは外国人には見せたくない、ってことでしょう。そこで写真を撮ることの意味は、一般的なところとはちがいます。

たちまちついたあだ名が「自由分子」です。で、私は彼らにいいます。「自由分子ってのは中国では悪口だけど、日本ではほめことばなんだぞ。自由社会だってイバツテルくらいだ。あんたたちがそうやってほめるから、彼はますます調子に乗るんだ。帰ってこい、帰ってこいっていうと、激励されてると思って、帰ってこなくなる。だまっても、フィルムがなくなったら帰ってくるから、心配いらないよ」なんてね。

大同のカウンターパートを納得させたのは、彼の写真の力だったんです。自分が撮影した写真の一部を、橋本さんは大同にもって行って、関係者にみせました。大同市青年連合会の前任の主席、鄧向華なんか、写真がすきで自分でも撮ってるくらいだから、「黄土高原のこんな風景なんてみたことがない！」と行って、すっかりファンになったんですね。運転手の小張も、ここは橋本が撮りたいと思うだろうなってところにくると、車のスピードを落とすようになります。彼の正直さも、みんなに信頼されたんでしょうね。駆け引きなんかまるでできなくて、まるハダカで歩いているようなものです。夕方、自動車を降りてくる姿をみたら、気に入った写真が撮れたかどうか、一目でわかります。撮れたときは、どんなに疲れてても、うれしそうですし、撮れなかったときはしょげかえています。ウソをつくだけの能(脳)がないといっていくらいです。あはははは。

農村の写真なんだから、写真集をだすにしても、ひとまずは4シーズンが区切りだろうと、私は考えました。97年の年末には、京都でCOP3が開催されることになってましたから、「97年後半には写真集を出そうよ。地球環境問題への関心も高まることだし……」と私が提案し、橋本さんも同意しました。

そこで私は、最後のサービスのつもりで、大同のなかでも環境のきびしい天鎮県の李二烟村につれてったんですよ。ふだんだったら、いくら呼んでも帰ってこないのに、村に着いたとたんに「高見さん、もう帰ろう！」というんです。体調が悪いのかと思ったくらいです。

その夜になって、「ああいう村に突然、つれていかれても、カメラなんて向けられないよ。貧しいなら貧しいで、その事情を自分で理解できなかつたら、写真なんて撮れるものじゃない。

これまでだって、高見さんたちがいっしょだから撮影してきたんで、自分ひとりだったらとても撮れてない」といいだすんですね。

そういうものかな、と思いながら、私も霊丘県の下寨北村で、いまにも崩れそうな小学校を最初にみたとき、その写真が撮れなかったことを思い出しました。村の人にかくれるようにして、やっと2〜3枚、外景の写真を撮っただけです。橋本さんにたいする私の親近感は、それでいっそう深まりました。

そして彼は、「あの村をみる前は、写真集をだしてもいいかなと思ったけど、みた以上は、いまはとても出せない」といいだしたのです。これは長いつきあいになるな、と思ったんですけど、5年以上になるとまでは思いませんでした。

でも、時間をかけてよかったんでしょう。いよいよ作品集が発刊されることになって、彼が自分で選んだ写真を見ると、ここ1〜2年で撮影した作品が多いんです。現地の農村への理解の深まりと、自分の思いとを表現できる写真が、時間とともに撮れるようになったんだと思います。

橋本さんはまた、カメラマンとしてかかわっただけじゃないんですね。あちこちの農村を回っては、いろいろと貴重な情報をもたらしてくれました。農村における水の涸渇がどれほど深刻か、彼がいなかったら、ここまでの理解はなかったでしょう。「そんなこと知りたくもないよ！おれたちにそんな力も金もないんだから、これ以上、プレッシャーをかけないでよ！」なんて悲鳴をあげながらも、私はたくさんのかんことを教えてもらいました。

菌根菌を活用したマツの育苗に、木炭のクズが必要ですが、それをみつめてきたのも橋本さんなんですね。ほとんど樹木のないところに大量の木炭があるなんて信じられなかったんですけど、シリコン精製の最終工程で還元剤として木炭がつかわれていたんですね。取材のついでに、それを彼がみつめてきたんです。よほど関心がなかったら、その有用性なんてわからないでしょう。

写真集がでたら、橋本さんが大同でくることはなくなるのかな、なんて考えると、とてつもなく淋しく、悲しくなるんですね。そういうと橋本さんは、「またくるよ」っていうし、遠田さんも「第2集というのもありますよ」といつてくれるんですけどね。

橋本さんの写真報告『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』は、まもなく東方出版から発行されます。発売中の『現代農業』(3月号、農文協刊)に、橋本紘二さんによる黄土高原の写真が特集されています。4月1日(日)〜8日(日)には、京都駅ビル南北自由通路・インフォメーションプラザで同じタイトルの写真展を開催することになっています。京都駅ビル開発株式会社と緑の地球ネットワークの主催です。ぜひ、ごらんになってください。

## NO. 91 女性の幹部たち 2001. 03. 01

私はまもなく 53 歳になるんですけど、振り返ってみると、女性といっしょにしごとをしている期間が長いんですね。そしてその女性たちは、有能で、すてきな人が多かったんです。女性にたいして偏見をもつことがなかったのは、幸せなことだと思います。

中国でのしごともそうなんです。いまの中国を風刺して、「旗は共産主義、看板は社会主義、道は資本主義、根は封建主義」といわれていると、しばらく前に書きました。たしかに封建的なものの根深さを痛感することは少なくないんです。でも、こと女性の社会進出は、日本よりすすんでいると思うことがしばしばです。

しかし、それはあくまで都会のこと、農村にいくと事情がちがいます。女性の幹部は、ひじょうに少ない。ほんとに少ないんです。郷・鎮のレベルの党書記や行政の長になっている人も、いないわけではないけど、数えられるくらいです。青年団の県委員会あたりでも、幹部のなかに女性は少なかったんです。

1992 年 1 月からこの活動をはじめて、最初のあいだはわからないことだらけですけど、2~3 年もすると多少は事情がわかってきます。青年団の幹部のなかに、まったくしごとのできない人間がいるんですよ。機会あるごとに存在をアピールして、「あれは自分がやった、これも自分がやった」というんですけど、それがどうもおかしい。「日本あてのファクスは自分が送っている」というから、彼が書いているのかと思うと、ただ郵電局に原稿を運んでるだけだったりするんですね（いまのような独自事務所も、ファクスもなかったんです）。

熱心なのは人間関係学（コネづくり）だけで、なにかを身につけるとか、勉強するとかとは無縁の日を送っているんですね。そういう生き方もあっていいと、私は思います。だけど、そういう人が幹部だとなると困るでしょ。日本でもそうですけど。そういう人には、七光り組が多いんですね。親が幹部なんです。幹部の息子が幹部になってもいいんでしょうけど、能力のない人がそうなるのは、本人も不幸だし、農村でいえばなによりも農民が不幸です。

ところが、女性の幹部は、数は少ないかわりに、安心してられるんですよ。幹部の娘が多いんでしょうけど、女性が人の上に立つことには、風当たりが強いんですね。だから、女性の幹部は、たいていしごとができるんです。表現は悪いかもしれないけど、あたりはずれがない。

94 年の夏のことです。各県の青年団の幹部に集まってもらって、渾源県で緑化協力についての会議を開催しました。私も発言しました。

全体のことに軽く触れたあと、私は本題(?)にはいりました。「環境問題については、世界中どこでも女性のほうが熱心だ。この協力活動も女性の参加がなかったら、うまくいかないと思う。ところが大同では、青年団にも女性の幹部がひじょうに少ない。これでうまくいくはずがない。そこで私は、2年間の猶予期間をおいて、女性の幹部のいない県とは、協力関係を打ちきりたいと思う。そんなことをいっても、私は内政干渉しているわけではありません。私にも友だちを選ぶ権利はあるはずですよ。どうでしょうか?」

といたら、7つの県と4つの区のなかで、たった1人、女性の青年団書記(トップです)だった徐尚紅が、会場の中央あたりで「トニー(同意)!」と叫んだんですね。示し合わせたわけでもなんでもありません(その徐尚紅は、いまでは城区の副区長さまです)。そこで私は、「積極的な賛同があったので、この会議の決定ということにさせていただきます」なんて、シャーシャーと集約しました。

ほとんどの県の青年団に、それから1年以内に女性の幹部ができたんですね。もちろん、あたしのせいじゃないでしょう。そういう時期にさしかかっていたんでしょうね。でも、おもしろい。

うまくいかなかったのが渾源县です。渾源县は、この協力活動を最初に立ち上げた県です。92年秋に、私が農村を泊まり歩いたとき、同行していた王有全が青年団のトップです。彼はほんとに人がいいんですね。いつもニコニコしていて、邪心というものがまるでない。私の注文にはいつも「没問題!(ノープロブレム!)」というんですけど、それがなかなか実現しない。つぎに顔をあわすと、たいてい「高見、このつぎだ」というんですね。

「いちばん古い友人とサヨナラするのは悲しいから、なんとかしろよ」と私が王有全にいうと、たいていの問題には「没問題!」と即答する彼が、そのときは深刻な顔をして「人材がない」というんですね。「いいんだよ。あんたが家で子どもの面倒をみて、かみさんを青年団の書記にしたら、ずっとうまくいくよ!」なんて私はいうんですけどね。「渾源县の青年団に女性の幹部ができた」と王有全がうれしそうに話したのは、2年以上たってからのことでした。

96年のことです。拠点として体裁が整ってきた南郊区平旺の環境林センターの会議室で、各県の青年団代表の会議を開きました。前回の会議に味を占めた私は、「今後は、青年団の副書記以上に女性がいない県とは協力を打ちきりたい」といったんですね。

すると青年団大同市委員会の書記の郜向華が、「高見がそういう要求をしたが、大同市委員会の副書記には女性がいない。祁学峰副書記を解任して、女性の副書記をみつけないか?」といったんですね。このころには、祁学峰を抜きにしてこの協力活動はなりたたないくらいになっていましたから、私はつぎのことばをつなげなかったんですよ。やられた!といったところですよ。

環境林センターを立ち上げてくれた邢雁俐経理、いまの大同事務所長の武春珍、看護婦で通訳の王萍、北京からなんどとなく大同に通い道を開いてくれた最大の功労者の王黎傑（男ふうのなまえですけど、女性です）……。中国には「天の半分を支える」なんてことばがありますが、この活動についていえば、半分なんてものじゃないんですね。ほんとにありがとうございました。ん……。札をいうのはまだ早すぎるかな。

## NO. 92 ビデオを回す 2001. 03. 15

92年の1月、緑の地球ネットワーク準備会がはじめて大同の農村に調査団を派遣することになり、私もそのメンバーでした。その直前に支持者から寄付を受け、ビデオカメラを購入しました。値段のわりには画質のいいもの、という角度から私は頭をしぼりました。

92年の秋、1人で農村を回ったとき、そのビデオカメラが私の相棒になりました。以前にも書きましたが、中国語が話せず、通訳もない私が、農村で活動するには、ビデオを回して時間をつぶす、というのはとても大事なことでした（なんてね）。日本に帰ってからも、何度も私はそのビデオを見直して、現地にたいする理解を深めたのです。

農村にはいるとき、子どもとなかよくなるのは、とても重要なファクターです。モノクロの小さなファインダーであっても、撮影したばかりの場面を子どもにみせるのは強力な武器でした。それだけで、たくさんの子どもの心が引き寄せられてくるのです。

それからず〜っと、とりあえず撮影してはいたのです。簡単に編集して、ワーキングツアーの参加者に記念にお渡しするなんてこともしました。書くのはかんたんですが、けっこうたいへんな作業なんです。ツアーの動きを画面でおさえようと思えば、被写体の何倍も動かないといけません。あのころはそれだけの体力があったということでしょう。帰国してから、それを編集するのにけっこう時間をとられました。いまの忙しさでは、ユメのようなことです。

それまでの映像をもとに、95年に1本の作品をつくりました。映像作家の板坂靖彦さんがディレクターを引き受けてくれました。いっしょにスタジオにこもって、本格的な編集作業にはじめてタッチしました。作品の題名は「黄土高原に緑を！」です。

いまから思うとひどい内容です。責任はもちろん私にあります。必要な絵がないんですよ。映像が展開するには、全体状況を説明するワイドの絵、つなぎの中景の絵、そして物語を展開するアップの絵、といったものが最低でも必要です。左右にパンをするにも、上下にティルトをするにも、物語の構成に必要な理由づけがあるべきです。そういう蓄積がないと作品になりません。そのことを教えられたのです。

スタイルの写真だったら、いい場면을撮ったら、その1枚が意味をもつでしょう。ムービーのばあい、1イベント（シーン）では意味がないんです。イベントを重ねて、小さくても、1つの物語を構成する必要があります。サイズとアングルを変えた、さまざまな絵が必要です。

私が撮影したシーンの大部分は中景で、それをつづけられたら、みてる人は眠っちゃいますよ。要するに、まんぜんとカメラを回していた、ということです。ビデオだけの問題ではなく、ものごと全体への取り組み方の問題なんでしょう。かなりショックでした。

それ以降、意識的にビデオの撮影に臨みました。ワイド、中景、アップという、3本のレンズをとおして（現実にはズームの1本ですけど）、いまやっていることを他人の目で観察するわけです。アップをとくに意識することで、そのときの中心の課題はなにか、いつも考える習慣がついたと思います。さまざまなアングルの絵をイメージし、そのときどきの問題をいろんな角度からみて、物語としてとらえる習慣がついてきたように思います。

中田真一さんに編集してもらった第2作「森よ、よみがえれ！」（96年）は多少はましな作品になったと思います（読賣テレビ・読賣新聞社主催の手作りビデオコンテストで金賞をもらいました）。

ビデオカメラを回すということは、思考の回路をつくりなおすことだったのかもしれませんが。私にとって、新鮮な体験、厳しい強制でした。私の書く文章も、ビデオ撮影をつうじて、それ以前とはずいぶんちがうものになりました。理系出身の私は、文章を書くとき、論文か報告書ふうに章一節一……、起承転結といった構成をそうとうに意識していたんですよ。この黄土高原だよりのような、ダラダラした文章って、だいいキライだったんですね。

ところが、ビデオの映像をつなぐときって、しりとりゲームのようにして、違和感がありません。夏の激しい雨→深い浸食谷→浸食谷の急斜面を歩むヒツジの群→ヒツジのシャブシャブ→ヒツジの歩く貧しい農村なんてふうに、けっこうつなげるわけですよ。そして同じような内容をつづけるのではなく、けっこう速いテンポで場面を転換させる必要があるわけです。

私はずっと、ものごとは内容がすべてで、外形や方法はどうでもいい、なんて不遜なことを考えてきました。でも、ビデオカメラを回す、ということをつうじて、自分の思考の中身もずいぶん変わってきたと思います。方法や外形が内容を規定することがたしかにあるのです。

きょうこれから、北京経由で大同にむかいます。春は滞在期間が長くて、帰国は4月末です。それだけの期間をあけるためには、出発ぎりぎりまで、たくさんのしごとを片づけておく必要があります。年々、仕事量が増えているような気がします。そんなわけで、今回の黄土高原よりは、ずっと以前に書きかけて、パソコンに眠っていたお古を引っ張り出しました。

## NO. 93 河北省の苗木の郷 2001. 03. 23

中国にきてからも忙しい毎日です。3月19日の朝から、河北省定州市に苗木の買い付けにでかけました。私たちの拠点＝環境林センターを昨春から20ヘクタールに拡大したので、せっかくの機会に苗木の種類をふやしたいというのが大同事務所の武春珍所長の考えです。先週末、彼女は苗木の郷として有名な河北省定州市を見学してきました。そこには300種類の苗木があり、値段も安いというのです。

地図でみると、霊丘からそんなに遠くありません。植物園をみるついでに、遠田宏先生といっしょに小郭の運転する車で出かけることにしました。小武はべつの用事で忙しいので、副所長の魏生学が同行しました。それにしても中国は、広い、広い。大同から河北省に行くには、どこかで太行山脈を越える必要があります。最短の道は途中で一か所、工事中のところがあるというので、応県経由の道をとりました。途中にすごい景観があらわれたのですが、それについて書くと、目的地に着けそうにないので省略します。

はじめのうちは道路もよく100km近いスピードで飛ばしていたのですが、そのうちに、とんでもない悪路になります。一度は舗装したようですが、石炭を満載した大型トレーラーの重みで破壊され、いまは黄土と炭塵が混じって、たいへんなことになっています。雨でも降ったら、車は通れそうにありません。両側の村のたたずまいはいかにも貧しそうです。「金の切れ目が道の切れ目ですね」というと、「そのとおりですね」と遠田さんが苦笑しています。

出発地点の海拔は1000mちょっと、太行山脈のなかでは1600mを超えたのですが、河北省にはいってからどんどん高度が下がります。目的地の定州市はなんと120mでした。ここは華北平野のど真ん中です。朝の8時すぎに大同を出発して、到着したのは夕方の6時。3軒めの招待所でやっと部屋をみつけて、その日は寝るだけでした。山に登っても、こんなに疲れることはありません。後部座席に3人かけでジッとしていましたから、エコノミークラス症候群でしょう。

20日の朝早くから、大辛庄鎮に向かいました。360度、どっちを向いても地平線です。日本ではもちろん、黄土高原でもみられない光景です。10cmほどに伸びたコムギが青々としてきています。ポプラはすでに花が終わっていました。ヤナギは新芽が伸びています。大同に比べて春の訪れが1か月は早いようです。日中の気温は20度を超えています。

苗木の郷は人と車で、戦場のようにごったがえしていました。道路の両側に各種の苗木が山のように積んであります。案内してくれたのは小さな有限会社の経理（社長）で、2階建てのりっぱな自宅が事務所です。話しているあいだも、事務所の電話と携帯電話が鳴りつづけていま

す。価格表もメモもみないで、「〇〇の△mの苗は××元で、それが最低価格だ。あんたのいうのは冬の価格で、春になって上がった。不満ならほかをあたってくれ」といって、強気の商売をしています。地元の河北省だけでなく、遼寧省、内蒙古、寧夏回族自治区、山西省、陝西省、山東省、北京市、天津市などから、買い付けにくるそうです。遠方のナンバーをつけたトラックもけっこうみられました。

この鎮は8000世帯、3万人ほどのほぼ全体が苗木の生産にとりこんでいます。合計すると何千ヘクタールでしょう。もとは果樹栽培をしていたのが、30年ほど前から苗木生産をはじめ、いまは育苗専門になっています。苗木を栽培しているのは各農家です。村のなかにいくつもできた小さな会社が、注文をうけては、農家から買い集めて出荷しているのです。最近の緑化ブームに乗って、急成長しているようです。

主な種類は、道路の両側などに植えるポプラ・ヤナギなどと、公園などに植える観賞樹と花木で、山林樹種はほとんどありません。環境林センターに新しくつくる樹木見本園のための苗を30種ほど注文しました。大同から石炭を運んでくる空荷のトラックをみつけて、安価で運んでくれるそうです。電話1本でそういうことのできるシステムができあがっているのをみても、この鎮の生産量がなみたいでないことがわかります。

苗木の扱いの乱暴さは、日本人がみたら仰天することでしょう。ていねいに扱われているものもなくはないのですが、大部分は掘りあげたまま山積みされて、陽光と風にさらされています。なかには何日もそうされているものもあるでしょう。

ここはもう日中の気温は20度を超えて、芽も動き出しているのに、たとえば大同の北部はまだ土が凍結していて、植林のシーズンは半月ほどあとです。寒い地方で育苗した苗木を暖かいところに植えるのはかんたんですが、その逆は容易ならざる問題があるのです。この協力活動を開始したころ、アンズなどの苗は地元にはなく、河北省から買ってくるしかありませんでした。大同のあちこちで建設された果樹園の活着率が悪く、その原因として「河北省から買ってきた苗で、鮮度がよくなかった」といわれたものですが、その実態はこういうことだったのです。

小武は、「これからの緑化は西部が中心になる。河北省よりは大同のほうが環境が近いから有利な条件になる。面積が拡大したのだから、自分たちの苗木に使った残りを売るようにすれば、環境林センターの経済的な自立のために役立つ」といっていますが、そのねらいに根拠がないわけではありません。

壘丘植物園を経由して、大同に帰ってくると、ものすごい風砂で視界がきかないほどです。気温もずっと下がりました。3日間の走行距離は1200kmにもなっていました。

## NO. 94 子どもを進学させた貧しい農民 2001. 03. 26

天鎮県李二烟村は、私たちが関係しているなかで、もっとも貧しい村の1つです。たいていの村には出稼ぎの金で建てたレンガ建ての住宅があるものですが、この村には1軒もありません。黄土丘陵の浸食谷の急斜面に、つぶれかけた土のヤオトン（窯洞）がへばりついているだけです。95年夏の水害で、土壁に亀裂がはいり、ポプラの丸太でつかい棒をしている家も少なくありません。

今回の話は、水害の直前、95年春のことです。前年の秋から雨がなく、カラカラに乾いた土を、強い西風が巻き上げていました。芽吹きまえでいちばんエサのない時期で、すっかりやせこけたヒツジは風で飛びそうです。北京の友人・王黎傑といっしょに、農家を回っては話をききました。たいていは生活の苦勞の話です。

「上の娘はいま小学6年生で、まもなく卒業だけど、妹も弟もいます。男の子は中学校にやりたいけど、女の子は小学校で終わりです」とお母さんが話してくれました。ちょうどそこに娘2人が学校から帰ってきたのです。上の娘の顔がまっ赤に染まり、みるみるうちに目が涙でふくらんで、すすり泣きに変わりました。低学年の妹はまだその意味がわからないのでしょう。突然泣き出した姉を不思議そうにみえています。その光景がいま私の記憶に焼き付いています。

話のつづきで、4人の子ども全員に高等教育を受けさせた家がある、という話題になりました。王黎傑が「ぜひ訪ねて話をききたい」といいました。「いやだよ、聞かなくてもわかるよ」と私はいったのですが、彼女は「都会の子は苦勞知らずで、環境には恵まれているのに勉強をしたがらない。農村の子がどんなに苦勞して勉強しているか、帰ってから話してやりたい」というのです。

その家もボロボロのヤオトンです。昼寝をしていたのでしょうか、風采のあがらないやせた親父さんが、ズボンを引っ張りあげながらでてきました。「大学まで進学させようと思うなんて、先祖に読書人がいたの？」と私がきくと、「そうじゃない、代々の貧農だ」と答えます。口の重い親父さんに代わって、母親が話しはじめました。

「とにかく勉強のすきな子で、学校から帰ってからも、時間さえあれば本を読んでいました。私たちの代までで苦勞は十分にしてきましたから、可能性があるのなら、子どもたちにはちがう生活をさせてやりたかったんです。飼っていたヒツジやヤギもぜんぶ売り、農具も売りました。アワやキビはお金に換えて、自分たちはジャガイモばかり食べていたのです。それでも足りないので、親類を回って借金をしました」。

「長男は太原の工業大学を卒業して、大同の電力会社に就職しました。自分ではお金をほと

んど使わないで、弟や妹の学費に送ってくれました。それでだいぶラクになったんです。次男も大学をでましたし、妹2人もいま太原の専門学校に通っています。いい大学をでて、大きな会社で働いているのですから、ふつうなら幹部の娘を嫁にもらえたんでしょうが、親がこんなに貧乏なので、労働者の娘としか結婚できませんでした」。

「そんなことはないよ。苦労知らずの幹部の娘だったら、あんたたちをまともには扱わないよ。労働者の娘でよかったんだよ」と私がいうと、「その通りだよ。嫁はとてもよくしてくれる」と親父さんが口をはさみました。「子どもがみんな外にでて、寂しくないの？」ときくと、「こんな村に帰ってきてても、勉強をいかせるしごとなんてありません。それは覚悟のうえです」と答えるのです。それはそうでしょう。

きかなくても、そんな話はわかっていたのです。ききたくなかったのです。私の親も貧乏な百姓で、「タニシのように田んぼをはいずりまわる暮らしは自分たちだけで十分だ。子どもにはなんとか別の道を歩ませたい」といつも話していました。家計を考えると大学にやれるのは1人だけだといって、進学願いの強かった兄にそれをあきらめさせ、次男坊の私を進学させることにしたのです。高卒で働きだした兄が、東京での私の生活費を送ってくれました。

それなのに、私は入学直後から学生運動に熱中するようになり、授業にでたのはその年の5月の連休前までで、やがて退学してしまいました。「中退というのは学歴詐称だな、ほんとは初退だよ」なんていってるしまつです。それでも、教室の勉強こそしませんでした。社会のことを知る機会をもち、早くから中国との関係をもつようになりました。成功した人生にはほど遠いでしょうが、いまこうして自分があるのは、両親や兄のおかげです。

私としては、自分の考えに忠実に生きてきたと思うだけで、後悔はありませんが、親や兄妹の期待を裏切ったのは事実です。親孝行のまねごとすらせず、父が死に、1人になった母親が、「たまには顔をみせてもバチはあたらぬよ」というのに、忙しさにかまけて、それさえしていないのです。

とんでもない方向に話がそれた、と思われるかもしれませんが。でも私は、自分自身の歩んできたことと、いまやっていることとのつながりを確認することで、安心することができます。というような話を以前、渾源県の招待所の部屋で酒を飲みながらしていると、立教大学の上田信さんが「高見さん、こういう活動はあなたの天職ですよ」といってくれました。

人からいわれると、自分でもそんな気になってきます。私がこれまでやってきたこと、たくさん先生の先生や先輩から教わってきたこと、そのなかには失敗やまちがいはあるでしょうが、それをぜんぶひっくるめて、いまやっていることの準備だったような気がしてきたのです。

そして、上田さんがそのようにいったのは、皮膚に包まれた形ある私のことではないのでし

よう。過去から現在への時間のつながり、人と人とのつながり、そこに広がる関係性こそが人間というものであり、私だということでしょう。そこに思いあたると、とても自然で静かで豊かな気持ちになれます。

環境林センターでの昼休みにこれを書いています。空の高いところを黄砂が飛んで、太陽が白〜く霞んでいます。まもなく日本にも届くのでしょう。

## NO. 95 カササギの森の起工式 2001. 04. 01

きょう 4 月 1 日から JR 京都駅で写真展「中国黄土高原〜砂漠化する大地と人びと」が開幕します。カメラマンの橋本紘二さんが大同に 5 年間通いつづけて撮影した作品です。同じ表題の写真集も 3 月末に東方出版から刊行されました。残念なことに、私は大同に滞在していて、どちらもみていません。事務局の太田もツアーに参加しており、帰国するのはきょうです。東川さんが 1 人で多忙な日を送っていることでしょう。たくさんの人にみてもらって、ぜひ成功してほしいと遠くから願うだけです。

大同では 3 月 29 日、「カササギの森」の起工式が挙行されました。春のワーキングツアーのメンバーは、この朝を靈丘県上北泉村で迎えました。前夜から農家にホームステイしていたのです。ツアーがくるまでは、日中の気温が 10 度を超え、例年より暖かかったのに、ツアーが到着した日から急に気温が下がり、恒山で予定していた記念植樹は中止せざるをえませんでした。

大同でいちばん南の靈丘県では、それでも予定どおり活動できたのですが、バスが渾源県にさしかかったころから、急に気温が下がり、小雪が舞ってきました。恒山山脈の峠に大きなタンクを積んだトラックが横転し、重油が路面を覆っており、バスのタイヤが滑って、足止めをくらうハプニングもありました。大同県にはいるころから、雪はだんだん激しくなり、横殴りの吹雪に変わっています。気温も氷点下に下がったようで、フロントガラスの水滴が柔らかい氷になります。カウンターパートのメンバーは、10 日ほど前から準備工作に奔走していたのに、流れてしまったら泣くにも泣けません。

10 分間で昼食をすませ、現場に急ぎました。基礎工事の途中の管理棟に舞台がつくられ、周囲にたくさんの方が集まっています。中国側と日本側の主だったメンバーが紹介されたあと、大同市の冀明德副市長のあいさつがありました。いま全市で大規模な人事異動がつづいており、多忙きわまりないのに、この活動にはぜひ参加したいとあって、ムリをして駆けつけてくれたのです。彼はまた、ツアーの歓送会にも出席してくれました。

ツアーを代表して、白形光江さんがあいさつしました。彼女は緑の地球ネットワーク創立時の、いちばん苦勞の多い時期をすごした仲間です。おつれあいの森井正人さん、そのお父さん、

息子の鉄兵さんとこれまで3人が大同にきてくれていました。これで親子3代4人です。昨年末に夫の森井さんを亡くしたばかりなのに、参加してくれたのです。大同の農村に通うようになって急に涙もろくなった私は、またグスグスやっていました。

花火と爆竹が轟くなか、みんなで礎石を埋めました。そのあとは仮面をつけた村の子どもと、伝統衣装で着飾った若い女性たちの、素朴な踊りをみせてもらいました。ツアーのメンバーも、つぎつぎとその輪に加わっていきます。参加者は400人近くになっていました。

起工式のあと、アブラマツの苗を植えました。去年の秋に整地してあるので、本来なら簡単に穴を掘れるはずなのに、土がまだ凍結していて容易ではありません。起工式のあいだはやんでいた雪が、また激しくなったので、作業は短時間で打ち切らざるをえませんでした。それもこの地方の環境の厳しさを実感してもらうために、プラスの面がなかったわけではないでしょう。

くわしいことは以前の通信に書きましたが、カササギの森の面積は600ha。技術の面でも、運営の面でも、これまでの経験と教訓を十分にいかして、新しい次元を切りひらくものになることでしょう。中国側と日本側との希望と期待が交差した起工式でした。

これからちょっとわたくしごとです。今回はじめて、ノートパソコンを持ってきました。私はなんでも少数派のようで、パソコンはMacintoshです。そのうえ、キーボードは富士通の親指シフトでなければ使えないという、いまでは少数派中の少数派です。そのかわり、入力のスピードには自信があります。

2月中旬、キーボードのメーカーから届いたのが最終受注の案内でした。これで最後となると、何台か注文しないと不安ですが、1台が4万円以上もしますから、一大決心が必要です。つれあいに相談すると、「買いなさいよ。それが壊れたら、こういう活動の切れ目にしなさい。区切りになっていいでしょう」なんていいます。

それもいいかなと思ったのですが、富士通で働いている大学時代の友人に問い合わせたら、親指シフトのをせたパソコンが発売されているというのです。もちろんWindowsです。どうしたらいいか悩んでいるところに、世話人の巽良生さんが、親指シフトのノートパソコンの中古が売りにでていると知らせてくれたのです。なんというタイミングでしょう。迷わずに買いました。

それを大同に持ってきて、インターネットとの接続を試みたのですが、これがたいへん。MacintoshとWindowsでは中学校と高校くらいのちがひがあります。むずかしいんです。巽さんが、「Windowsを使っていた人がMacintoshに移行するのはかんたんだけど、その逆はむずかしいようです」と言っていたのを実感中です。

接続も苦勞の連続でした。最初、いくらやっても接続できなかったのですが、日曜日は混雑して接続しにくくなるのが原因だと、あとになってわかりました。こちらの設定ミスだと考えて、半日も悪戦苦闘していたのです。その後も、接続できるときと、できないときがあって、なかなか安定しません。ここでは「あきらめない」ことも大事なのです。

## NO. 96 せき止められた黄河 2001. 04. 05

3月16日に大同に到着してから、小雪がちらつくことは1、2回あったものの、雨はまったく降りませんでした。地元の人たちは数日前から「清明節には雨が降る」とっていたのですが、きょうはその清明節。なるほど朝からしとしとと小雨が降りつづけ、昼からみぞれになりました。清明節には家族がそろって先祖のお墓参りをし、3代前までのお墓の土盛りを修復します。「春の雨は油より貴重だ」という村の人たちにとって、清明節にほんとうに雨が降ると、先祖への思いがなおさら強まることでしょう。

ことしの春は合計5つのワーキングツアーがやってくるのですが、そのあいまを利用して、遠田宏さん、相馬昭男さん、現地のスタッフたちといっしょに、大同からさらに西の芦芽山と黄河まで足を伸ばしてきました。前回、カササギの森の起工式が吹雪のなかでおこなわれたことを書きましたが、あの一行が帰ったとたんに、また暖かくなり、日中の気温は20度を超えていました。この気象は、とくに春先はめまぐるしく変わりますし、年によっても大きくちがいます。短期間でわかったような気になると、大やけどです。芦芽山の自然林についてはまたの機会にゆずって、今回は黄河のことです。

私たちが訪れたのは偏関県万家寨鎮で、山西省、陝西省、内蒙古自治区が接するところであり、対岸は内蒙古です。黄河の断流が問題になりはじめてから、いつかは黄河をみたいとずっと思いつづけていました。黄河には観光名所がほかにあり、運転手の小張は「どうせ黄河をみるのなら壺口にすべきだ」といいました。「そこには滝があり、黄色い水が奔流になっている」というのです。それでも万家寨を選んだのには理由があります。

道路は山のあいだをぬって大きく湾曲しながら、黄河へとつづいていました。車が最後のカーブしおったとたん、車窓から最初にみえた黄河は、ダムによってせき止められていました。しかもそのダムは、そう大きなものにはみえません。じつをいうと、私は四半世紀も前に1回だけ黄河をみたことがあります。河南省鄭州市付近でのことで、黄色い濁流が渦を巻いて流れ、対岸は遠くかすんでいました。そのときの光景を思い浮かべながら、「ええっ、これが同じ黄河か」と思いました。でも、バカにしてはいけません。周囲の光景が大きすぎるために小さくみえるのです。ダムの上にかかる吊り橋のワイヤーの間隔と数を数えて計算すると、河幅は500m近くあります。大河であることはまちがいありません。

もう1つ違和感があったのは、水が澄んでいることです。ずっと上流をみたことのある相馬さんが「むこうは茶色い水でしたよ」といいますから、流れてくるのはそういう水でしょう。ダムでせき止められているうちに、黄土が沈殿して、水が澄んでくるのでしょうか。ということは、ダムの底にはどろどろ土がたまるといことです。もちろん工夫はあるのですが、私のようなしろとは、これからどうなるか、心配せざるをえません。

このダムには大きく2つの目的があります。1つは発電。これはもう稼働しています。もう1つの目的は、全国的にみてももっとも深刻な渇水状態にある山西省に水を供給することです。最初に省都の太原に、つづいて省内第2の都市である大同に水が送られることになっています。当初計画では太原は完成しているはずですが、実際の工事は遅れているようです。

費用は世界銀行の借款があてられていますが、国内でも債券が募られました。同行していた中国のメンバーも、職場ごとに200元から500元、それに応じたそうです。暗黙の強制はあったのですが、それだけの期待があったのでしょうか。

ダムでせき止められていますから、上流からどれだけの流量があるかはわかりません。常識的には、オーバーフローした下流の水量と同じだと考えていいでしょう。それが情けないほど少ないのです。川底の石が頭をだしているところがあります。「これじゃあ、大同に水がくることはあきらめたほうがいいな」と私がいうと、運転手の小張だけは「いや、だいじょうぶだ。水の管理をしっかりとやるようになったから、去年は断流がなくなった」といいましたが、ほかのメンバーは「きっとそうだろう」と私に同意しました。

いま中国では、「西部大開発」が強調されています。これが成功しなければ、東部沿海地方と西部内陸部との格差が異常なまでに拡大し、国としての統一も失われかねません。逆に大成功すれば、上流の水使用量はまちがいなく増えるでしょう。それが上流と下流との水争いに発展しないともかぎりません。危ない綱渡りであることはまちがいありません。日本にとっても、対岸の火事視できない大問題でしょう。

遠くにいるぶん気がかりだった京都駅での橋本紘二さんの写真展は、たくさんの方が訪れて、大成功だそうです。きょうの朝方は、訪日中の国家環境保護総局の解振華局長（日本の環境大臣に相当）もみてくれたそうです。どういう印象をもっていただいたのでしょうか。8日（日）まで開催中ですので、ぜひみていただきたいと思います。できることなら、冬には、北京と大同で開催したいと考えています。

今回はちょっと大きな問題について書きます。大阪の事務所から、日経新聞4月11日付けの記事が送られてきました。日本に飛来する黄砂の被害が年を追うごとに深刻化しているのに、日本と中国が協力して、最新の技術で黄砂の発生源を突き止め、対策を練ることになった、というものです。また日中韓3国政府の環境協力の大きなテーマとして「黄砂現象」をとりあげることになった、ということもききました。

東北アジアは、環境問題からいえば一体のもので、その解決のために共通の努力が必要であることはいうまでもありません。ところで、その入り口として「黄砂現象」が適切な課題でしょうか？

昨春は、ここ大同でも猛烈な風砂が発生しました。晴れているはずなのに、上空を舞う黄砂のために日中でも薄暗く、ときおり太陽がうっすらと白く霞んでみえるだけの日が多かったのです。ほんの十数m離れた先行車が風砂で見えなくなり、運転手があわてて急ブレーキを踏み場面にも遭遇しました。北京空港が閉鎖された日もあったそうです。日本で観測された黄砂の回数も記録を更新したそうです。

日経新聞の記事によると、日本への黄砂の飛来量は年間約300万t、西日本を中心に平方kmあたり2~3tと推定されるそうです。数字だけをみると、膨大なものに思えます。しかし、黄土高原に長く滞在する私たちからみると、違和感があります。黄土高原というのは、新生代の第4紀（およそ200万年前から現代まで）に、西方の沙漠地帯の土、すなわち黄土が、偏西風に巻き上げられ、降下して積もったところだというのが通説です。いわゆる風成土です。

面積は52万平方kmで、日本の国土の1.4倍もあります。黄土の厚さは浅いところで数十m、深いところは200mもあります。200mといっても、200万年で割れば、年間の堆積は1mmにすぎません。先日、河北省定州市にいつてきましたが、華北平原のどまんなかのあそこの土も黄土でした。華北の大部分も黄土地帯なのです。それからすれば、年間300万トンといった数字は微々たるものにすぎません。

黄土高原は、人類文明の最古の1つをはぐくみました。日本列島も朝鮮半島も、その直接の影響のもとに歴史を刻んできたのです。そして、黄河が運び出す黄土によってつくられた華北平原は、いまでも世界最多の人口を養っています。まさに母なる黄色い大地です。もし黄砂、黄土がなかったら、それらはなかったか、まったくべつの道筋をたどったことでしょうか。

くりかえしますが、東北アジアの国々が一体となって環境問題にとりくむのは、きわめて重要なことです。動き出した日中韓3国の環境協力も、政府、民間を問わず、強力で推進すべきことです。その入り口として、「黄砂現象」を取り上げるのも、感覚的には理解できないわけではありません。だれにとってもわかりやすいからです。その来源やルートを共同調査することで、東北アジアの共通の運命に、共通の認識をもつことができるかもしれません。

しかし、日経新聞の記事にもあるように、黄砂は「自然現象」です。日本でも早くから記録されてきた春霞は、「黄砂現象」のことです。地球規模の自然の現象に、人間の力で挑むことが、環境保護でしょうか。そんなことがはたして可能でしょうか。記事には、「発生源がわかればそこで集中的に緑化を進めることで被害を緩和できる」とありました。むりなく緑化が可能などころ、緑が存在できる自然であれば、そもそも黄砂が舞い上がることもなかったでしょう。黄砂は地球の歴史であり、人類はずっとあとに生まれて、それを所与の条件として生きてきたのです。そればかりでなく、黄砂の恩恵をも受けてきたことは、先ほど書いたとおりです。

さっきまでこれらの問題を遠田宏さん、相馬昭男さんと議論していました。遠田さんが話しました。「台風がもたらす被害は、黄砂の比ではありませんよ。それでも台風の発生を止めようなんてことは、だれも考えないでしょう。いつのころか、水爆をつかって台風の進路を変えようといった話がありましたが、いまとなっちはいかにも荒唐無稽です。あれと同じにならないといいんですがね」。

私は最近、「沙漠に木を植えたら沙漠が沙漠でなくなるんですか、それで沙漠化が止まるんですか」なんてことを口にします。「沙漠緑化なんていうのは、ボタンのかけちがいですよ」ともいいます。環境問題とは、人間がつくりだす環境破壊を止めることであり、人類が破壊した環境を修復することだと思ふからです。乾燥地・半乾燥地でたいせつなのは、あえて順序をつければ、水、土、緑の順であって、地下水を汲み上げてポプラを育てるといったことそれ自体には、意味がないと考えるようになったからです。すなおい「沙漠化防止」といったほうが、問題をより総合的に、広い視野でとらえることができると思ふのです。

黄砂防止のためにその飛来源を集中的に緑化する、といったことも、ボタンのかけちがえにならないでしょうか？調査研究まではいいのです。問題をより根元的なところでとらえようとする努力はたいせつです。でも、結論が先にあり、それに沿っておこなわれる調査研究が有益なものだとは考えにくいのです。それがミスリードにつながることを恐れます。この問題については、もう1回つづけることにします。

## NO. 98 黄砂は悪者か？ (2) 2001. 04. 17

94年の11月ですから、私たちがこの活動を開始してまもないころです。日経新聞の鹿児島昌樹記者が、私たちの活動を現地取材することになりました。日中韓3国の環境問題をシリーズで扱うためです。そのころはまだ中韓の国交がなかったので、大同で取材したあと、彼は北京から成田まで戻り、その足でソウルにいきました。日本に帰ってから、私に話してくれたことがあります。

「ソウルで環境担当の高官に会ったとき、中国でみなさんの活動取材していたことを話すと、関心をもってくれました。韓国も日本の協力がほしいけど、それより先に中国に協力すべきだということです。ソウルでは黄砂のために洗濯物を外に干せないほどだけど、それに SOx や NOx、その他の有害物質が混じるようになると、人が住めなくなってしまう、とっていました」。緑の地球ネットワークの設立のとき、私たちは「環境に国境はない」というスローガンをかかげました。そのことの現実性を、そのことでも確信できたのです。

いま「黄砂現象」にとりわけ熱心なのは韓国だそうです。政府だけでなく、民間世論の盛り上がりもあるようです。黄砂の発生源に日本より近く、被害も重いわけですから、ある意味では当然でしょう。しかし私は、かならずしもそれだけではないと思います。先ほどの高官の発言の後半部分の重みが大きいと思うのです。爆発的といっている中国の経済発展、工業化にともなって、各種の有害物質が飛来することへの警戒です。しかし、それを中国に直接いうことには問題があるのかもしれない。自分たちも同じ道をたどり、公害をだしながら、工業化を実現してきたからです。日本はその道の先輩です。それらのことを含みながら、とりあえずは自然の現象からはじめましょう、ということなのかもしれません。

話題が飛びます。ある年、大同で降ってくる雨の pH を、遠田さんが調べたことがあります。ごぞんじのように、大同は石炭の街です。大中小の工場で石炭が燃料になっているだけでなく、家庭の煮炊き、暖房でもたくさんの石炭が生炊きされています。冬なんか、逆転層の下に煙がこもって、まるで煙突のなか、オンドルのなかみたいです。ですから降る雨は当然、強い酸性です。

というのは、まったくのウソで、何回測定しなおしても、かなり強いアルカリ性なのです。原因として考えられるのが黄砂です。黄土にはカルシウム、ナトリウム、カリウム、マグネシウムなどの炭酸塩が多く含まれ、強いアルカリ性です。この地方の土をはかると、たいてい pH8 以上です。9 を超すことさえあります。空中に浮遊する土の粒子が雨の核になったり、空中で雨を中和し、pH をあげていると考えられるのです。

中国の南方では酸性雨が深刻で、「空中鬼」とまで呼ばれているのに、よほどたくさん石炭を燃やす北方で、酸性雨はあまり問題になりません。それと同じ作用は、おそらく日本や韓国でも働いていることでしょう。日本でも酸性雨がますます深刻化していますが、それには国外起源のものが多そうです。風は西から東に吹きますから、中国や朝鮮半島から飛んでくるということでしょう。そして、雨の多い日本では、酸性雨が問題になる以前から、田畑の土は酸性に傾きがちでした。そうした問題を、あの黄砂が緩和してくれているはずです。

その問題について、前出の鹿児島記者が書いたのをみたことがあります。黄土高原の黄土と日本に飛んできた黄砂とでは pH がちがうということです。日本まで飛来し、地上に舞い降りるまでに、SOx や NOx によって、中和されていると考えられます。黄土高原の土は測りましたが、怠

慢なことに私は、日本にきた黄砂は測定したことがないので、これ以上の発言権はありません。

以上のことから、黄砂は悪者だ、とはいいきれないのです。歴史的にも人類は大きな恩恵を受けてきましたし、いまも受けつづけている可能性が高いのです。だからといって、黄砂を止めるのは環境破壊だ、といって目くじら立てるつもりはありません。そんなことは、どうせできっこないのです。「黄砂現象」は地球の歴史であり、地球規模の自然現象だといっていいでしょう。被害があるとすれば、それぞれの社会で、それを軽減したり、補償したりする制度をつくらばいいことです。台風だって同じでしょう。

くりかえしますが、環境保護というのは、人間がつくりだす環境破壊を止めることであり、人類が破壊した環境を修復することだと、私は思います。将来性のある環境協力を実現するには、もう少し正面から広く問題を考えたほうがいいと思うのです。

## NO. 99 農村を回って話を聞く 2001. 04. 20

はじめての村を車で訪ねることになったとします。山西省あたりではちゃんとした地図はありませんから、道路わきの畑で働いている農民に道を尋ねることになります。返ってくる答えはたいてい3つです。

「プーユエン」(不遠=遠くない)、「ハオゾウ」(好走=いい道だ)、「アーリ」(二里=1km)。う～ん、とっくに1kmはすぎたな、と思って、また道を聞くと、返ってくるのは、「プーユエン」「ハオゾウ」「アーリ」の3つです。目的地につくまでに、それを何回かくりかえすこととなります。都市出身の運転手のなかには、「農村の1里は『大里』で、少なくとも何倍かはある」なんてわり切っている人もいるくらいです。

それはまだいいほうです。3つの答えに従って走っていくと、道幅がせまくなって、車は通れなくなります。地図を目にすることがなく、車とも縁遠い農民は、自分の足で歩く感覚で「ハオゾウ」といってしまうんですね。

同じような問題は、ほかにもたくさんあります。94年の夏、はじめて天鎮県の李二烟村を訪れたとき、村の人たちが「この村にはすばらしい泉がある。どんな旱魃の年にも涸れたことがない」といって自慢しました。そのときのツアーは、2グループに分かれて、農家で昼食をごちそうになったのですが、さっそく私はグループの人を誘って、その泉をみにいきました。

急な坂道を下って、浸食谷の底でみたのは、2m×4mくらいを石で囲んだ、私の感覚では水たまりでした。水がまたすごいのです。青みがかかった灰色に濁って、まるでゾウキンの絞り汁です。べつの機会に、それをみた通訳の王萍が「こんな水を飲んでだいじょうぶですか？」と尋

ねるので、「オレにきくな！ あんたのしごとはなんなんだ！」と私が答えたことは、以前に書きました。彼女の本職は伝染病病院の看護婦さんです。遠田宏さんは、「だいじょうぶですよ。ボーフラが生きてますから」なんていうんですね。それをみなかったもう1つのグループの人は、村の人の話だけきいてどんなイメージを抱いたことでしょうか。

ふつうに考えると、村のことは村の人がいちばん理解しているはずですが、実際は、そうともかぎらないんですね。なんどもなんどもそのような体験をくりかえしたあと、村で聞き取りをするときには、出稼ぎでもなんでもいいから、とにかく村をでて、ほかのところの体験を多少でももっている人を捜すようにしました。そういう体験をもってはじめて、自分の村のことを相対的、客観的にみることができるとですね。村のなかだけで生きている人は、自分の村のこと、あるいは自分のことさえ、十分には理解できないということでしょう。

こんな体験をしたこともあります。大同県東閣老山村は、89年の地震で、大部分の窯洞（土づくりの住居）が倒壊しました。およそ3分の2の人たちは、世界銀行の借款で、村から1kmほど離れたところに、レンガ建ての新しい村を再建しました。残りの3分の1は、亀裂のはいったボロボロの住居で暮らしていたのですが、95年秋の長雨で重ねて被害を受け、その後も長いあいだ、自分で建てた小さな避難小屋か、かろうじて残った1室で家族全員が暮らしていました。人の住んでいるところとはとても思えませんでした。新村のレンガ建て住居は、雨の被害なんて、まるでなかったのです。

取り残された旧村の農民に話をきくと、彼らは「お金を返せそうにない農民は貸してもらえなかった」といいます。郷の幹部たちは、「農民は借金がこわいので、借りようとしらない人もいた」といいます。借金がこわいというのは、借金のカタに畑をとられた、といった歴史が長くつづいてきたということです。

そういう話をきくと、たいていの人はどちらかがウソをいっていると思われることでしょう。でもこの2つは、同一のことなんですね。私は日本の貧しい農村で生まれ育ちました。なにごとかを村で決めるとき、寄り合いが開かれます。重要な問題だったら、何度も何度も開かれます。だれも自分の意見をはっきりといわないのですが、寄り合いをくりかえすうちに、村としての意志が形成されます。

あの村でも同じように、はっきりだれかがいうわけでないのに、「返すあてのない人は借金をすべきでない。連帯責任をもたされるようだと困る」といった暗黙の意志が生まれたようです。それが、みる角度によって、まったく異なる2つの話になってしまいます。

事実を知りたいと思ったら、まったく話をきかないか、たくさんの人から話をきくか、どちらかしかありません。わずかな数の人から話をきいて、それが事実だと思うと、とんでもない誤解につながります。またたいていの人はサービス精神旺盛で(?)、相手の耳に快い話はして

も、その逆の話はしようとしません。時間をかけて、自分の目でたしかめるということが絶対に必要です。それをくりかえすうちに、だれの話が正しいか、しだいにわかるようになりますし、適切な質問ができるようになります。

避けにくいまちがいは、みえるちがいはすぐわかるのに、みえないところは日本と同じだと思ってしまうことです。あとになって、ドキッとさせられることがしばしばです。そういうときも、なんとないわずかな違和感があるものです。ご飯を食べているときに、小さな砂が混じていたときのような感覚です。それを、なんでもないと思って通り過ぎるか、こだわって探求していくか、そこらあたりが分かれ道になる気がします。

私にとって幸いだったのは、立花吉茂さん、遠田宏さんをはじめ、さまざまな分野の専門家がいっしょに農村を回ってくれたことです。なにかをふと感じたとき、そのことの意味を尋ねます。夜、部屋でいっしょに酒を飲みながら、その日にあったことを議論します。そのことを通じて、ずいぶん理解を深めることができたと思うのです。ほんとにぜいたくですね。

## NO. 100 苑西庄村の果樹園づくり 2001. 04. 28

ついフラフラ〜とはじめたこの「黄土高原だより」が、2年間で100号になりました。思いがけぬ読者に恵まれ、ここまでつづいてきました。ほんとうにありがとうございます。100号記念で、きょうはうれしい話題です。

広霊県の苑西庄村は、なにかと思いの多い村の1つです。94年の春、当時は大同市青年連合会の副主席で、この協力活動を専門的に担当することになった祁学峰といっしょに、はじめてこの村を訪れました。街育ちの彼が農村にいったのは、このときがはじめてでした。そのときの彼の毅然とした行動に私はほれこみ、急遽、大同事務所をつくることを思い立ち、初代の所長になってもらったのです。そのことがなかったら、いまのような発展はなかったかもしれません。

たいへん貧しい村です。私たちが最初にのぞいた家では、老人夫婦と孫が夕食をとっていました。若夫婦は出稼ぎにでているのです。洗面器の底にトロトロのアワのカユが少しと、トウガラシミソのビンがあるだけでした。1日2食だということです。早魃が3年つづいて、食糧の蓄えもなくなり、政府からの救済食糧にたよっているということです。

帰りの道で、同行者の1人にいわれました。「高見の性格だったら、なにか協力したいと思うだろうけど、すぐにはむりだ。お金を渡しても、食べ物になるだけで、あとになにも残らない。そんなことは中国で長いあいだやってきたことだ。なにも外国からまで、そんなことをする必要はない。輸血は緊急のときだけすることで、そうでないときは体力をつける方法を考えるし

かない」。

それから毎年1回は、この村を訪れていました。小学校の机と椅子がボロボロで、数も足りなかったので、それを贈ったこともあります。この村は水が決定的に不足していました。バケツ100杯ほどの水を150人の住民と家畜が分けあっていたのです。畑はカラカラに乾いていて、村の後背地にかつて植えられたアンズは全滅していました。農家の庭などにアンズが植えられているので、可能性はあるにしても、最初のスタートがおぼつかないでしょう。水問題を最初に解決するしかないでしょうが、それには費用がかかります。

97年の夏、テレビ朝日のクルーが取材にくることになりました。ほかの村を予定していたのですが、その県は未開放県で、北京からストップがかかりました。急遽、この村に変えることにしました。だとすると、井戸掘りしかありません。でも、そのことは祁学峰にも内緒にしていました。あとで彼は、「高見が苑西庄村を指名したことで、なにを計画したか、すぐにわかった」といいました。

ぶっつけ本番で開いた村民集会で、井戸を掘ることを決めました。その場面は「すてきな宇宙船地球号」の番組で放映されました。資金のメドもなにもなかったのです。テレビで紹介されることで、資金が集まることを期待し、それに賭けたのです。幸い、郵政省国際ボランティア貯金と農協全国中央会の支援がえられ、この村と霊丘県のべつの村で、井戸を掘ることができました。

98年の夏、ツアーといっしょに訪れた通水式の日、村の老人が私の手を握って泣きました。「こんなきれいな水は飲んだことはもちろん、みたこともない。もらい水に通う村の歴史に終止符が打たれた。生きているうちに、こんないいことに出会えるとは思ってもいなかった」というのです。

1本の井戸で村の生活は劇的に変わっています。どの家にも小さな家庭菜園ができました。トマト、ナス、キュウリ、ハクサイ、ホウレンソウなどが、思い思いに植えられています。お金のかかる野菜は、これまで食べることもできなかったのです。家畜の数も増えてきました。そして昨年になって、「木を植えたい。こんどは水があるからだいじょうぶだ」という声が村人のなかからでてきたのです。

この4月、ディズニーランドの労組がきたとき、この村で小学校果樹園の建設をはじめました。村の小学校の先生は以前、私の前で泣いたことがあります。「95年の水害で家が倒壊し、借金が3000元もできました。夫は結核で寝ているのに、栄養のあるものを食べさせることもできません」というのです。「65元だった賃金が10元上がった」とよろこんでいたこともあります。収穫できるようになれば、彼女の待遇を多少なりとも改善することができるでしょう。「すぐにはむりだよ」といわれてから、7年もかかったのです。この木にアンズがなるのをみたら、私は

大泣きすることでしょう。いつもは冷静な祁学峰も、そのときはきっと、私につきあうにちがひありません。

これから列車で北京にでて、2日間でいくつかの用事をすませ、連休中の日本に帰ります。今回はちょっと疲れしました。

## NO. 101 温増玉さん夫婦のこと 2001. 05. 08

この協力活動の初期にであった人で、忘れることのできない人が何人かいます。温増玉さんはその1人です。当時、彼は渾源県の林業局長でした。92年1月、最初の調査団のメンバーの1人が「日本の私たちになにをしてほしいか？」といったとき、彼は「中日友好を堅持してほしい」とだけいい、緑化については「これは自分たちのしごとだ」と答えました。「日本人になにができるか！」といった気持ちがその背後に感じられたものです。

太原から通訳にきた人たちが、彼のことをすぐ好きになるんですね。彼らは交渉の舞台裏をみていて、そして私に教えてくれました。「緑化のことをまじめに考えているのは彼だけですよ」。「ああいう人を中国では人民幹部といいます。いまではほんとに少なくなりました」。温さんと私が親しくなったのは、92年秋、私が1人で渾源県に長く滞在することになったときからです。

最初のあいだは県の青年団の幹部がずっと私に付き添っていました。ところが若い人はすぐに退屈してしまいます。以前にも書いたように、私は中国語を話せません。農村にいても、植林地や村のようすを観察したり、ビデオやカメラで撮影して1日の大半をすごします。そんな中年男につきあっていて、おもしろいわけがありません。村に着くなり、どこかの家に上がり込んで、マージャンやトランプをはじめ、私のことはほっぽりだしです。そのうちに、いっしょに村に行くこともなくなりました。

温増玉局長の自宅が、私の泊まった招待所のすぐそばだったんですよ。私は毎朝、彼の家に通いました。県クラスの局長でも、専用車をもったり、りっぱな家に住んでいる人はいます。ところが彼の家は、ごくふつうの民家で、生活もきわめて質素でした。朝食は、アワとジャガイモのカユに塩漬けのハクサイがあるくらいで、毎日、毎日、そのくりかえしです。連続で押しかけるのは私だけですが、お客は毎朝ありました。いろんな相談事をもって、朝早くから訪ねてくるんですね。信頼のある人なんだな、と私は考えました。

「老温、きょうの予定はどうなっているの？」と私は尋ねます。「会議だ」といわれると、私はそのまま引き返して、招待所の自転車を借りて近くの村までいくか、それとも……というふうに、独自の計画を立てます。この「会議」が多いんですね。その昔、中国の農民にとって恐ろしいものが2つあったそうです。国民党の税と、共産党の会議だったといいます。それくら

い共産党は会議が多いんですね。いまでもそうです。

彼の予定が会議でないときは、私はいつも同行させてもらいました。車はまっ赤な車体に「森林消防」と白字で書いた軍用ジープです。その車が村にはいると、たくさんの人が寄ってきて、親しげに彼に笑いかけます。笑顔のお相伴にあずかれるのが、私にとってうれしいことでした。老温は若いころ銀行の会計員だったそうですが、その後、3 つほどの人民公社(郷)の党書記をつとめ、そのあと県の林業局長になりました。農村のたたき上げで、そのぶん農民に親しまれたのでしょう。

渾源県には28の郷・鎮があったのですが、温さんにつれていってもらった郷は半分ではききません。あちこちの森林や果樹園をみせてもらい(その大部分は新しく植えられた若木です)、樹木の名前を中国語で覚えめました。1回でも自分でいった村は印象が強いので、渾源県については大まかな地図を、私はいまでも記憶だけで描くことができます。そして日本軍と徹底抗戦し、多大な犠牲をだした村が山間に多いことを知りました。県城は日本軍が平定しましたが、山岳の貧しい村を拠点にして、八路軍と民兵が激しい抗戦をつづけたからです。そのようにして場を踏むことで、1人で農村にいてもなんとかなる、という度胸をつけることもできたのです。

温さんも私も酒好きですが、温さんの運転手はそれに輪をかけた呑んべです。昼食のとき、コーリャン酒のビン(1斤=500g)を買います。1本2元です。ガラスのコップに、温さんが3等分します。「多すぎるよ」と私がいうと、彼は「そうか」といって、私のコップから運転手のコップに少し移します。午後からも平気な顔で、あの悪路を運転するんですね。「車はガソリンで、運転手はアルコールで走っている」なんて、たどたどしい中国語で私が話すと、3人で大笑いです。

秋が深まると、山村では雪がチラチラしだして、私のヒザの上にも舞い降りてきました。もちろん車のドアは閉まっているんですよ。ジープのドアの建て付けが悪いんです。いつもガタガタと音を立てています。

帰りが遅くなった日は、林業局に寄らず、温さんの家に直帰です。温さんは、コーリャン酒とタバコをもちだして、運転手にふるまいます。温さんのカミサン(郭玉香、中国はずっと夫婦別姓です)は、道路に面した入り口の部屋に、酒やタバコ、調味料をならべて小商売をやっていました。私のみるところ、そこで売れるものより、温さんが勝手に持ち出して友人にふるまうもののほうが多かったと思うんですよ。

郭オバサンも肝っ玉です。昼間から若い男を集めて、賭けマージャンをやったりしてました。そういうタイプでなかったら、私なんかをあんなふうに入れ入れてくれたはずがありません。温さんのことばもナマリが強くてわかりにくいんですけど、郭オバサンのことばはさらに難解

で、私が大同のことばに慣れてからでも、ほとんどわかりませんでした。

この4月22日夜、2年ぶりで温さんと会いました。「オバサンの顔もみたいから、こちらから行きますよ」と私がいったのに、「病人がいるので自分の方から出向く」ということでした。郭オバサンが脳溢血で先月倒れ、半身不随になったというのです。3月21日の夕方、霊丘から渾源経由で大同に帰るとき、私は温さんに電話をしたのです。そのとき郭オバサンは元気でした。なんということでしょう。

うれしいことに、温さんはまだまだファイト満々でした。林業局を定年になったときに夫妻で撮った記念写真を私にくれたのですが、会ってからの話題は、後向きのことではなく、きわめて現代的な問題でした。次回の話題は、それとも多少、関連しています。

## NO. 102 「大きな苗を、たくさん植える」 2001. 05. 14

いま中国で、幹部たちは学習づけです。その中心は「三個代表」です。中国社会が大きく変容するなかで、中国共産党のアイデンティティを模索するものでしょう。内容に関心のある人は、自分で調べてください。

学習に参加していたメンバーから、朱鎔基総理が緑化活動に触れ、「大きな苗を、たくさん植える」という趣旨の発言をしたという報せがありました。真偽のほどはわかりません。しかし、人びとの信頼が厚く、影響力の大きい人であるだけに、そんな話が広がることじたい、現場サイドでは問題がおきます。だいいち、大きな苗が育つには年数がかかります。そんな苗をどこから調達するのでしょうか？

4月22日の夕方、渾源県の恒山森林公園をみました。遠田宏顧問がここを訪れるのは、94年夏の専門家調査団いらいのことです。恒山の北側の山麓には、樹齢数百年というマオウ(麻黄、*Ephedra intermedia* Schrenk)の大株があり、ほかにもめずらしいようすがみられました。恒山の頂上は2,017mですが、平地は1,000m前後。山の北側は1,000mの断層崖が、ほぼ垂直に切り立っています。下のほうの岩盤は、20億年以上まえのものだそうです。地球の年齢の半分をへているわけで、世界でも数か所しかみられないそうです。

マイクロバスが停まったとたんに、目的の場所に急ぎました。私は私で、94年春からここに植えてきた樹木がどうなっているか、たしかめたい気持ちがありました。ところがガクゼン！

あのマオウは人の近寄れない崖面に生えていたのに、崖ごとなくなっていました。近代兵器のブルドーザーにはかなわないのです。心土がむきだしになったところに、ありきたりのマツや花木の大苗が植えられていました。以前に私たちが植えたところも、樹木は抜かれ、ブルで

ひっくり返されて、地形が変わっていました。

あとを追ってきた大同事務所の武春珍所長と渾源県の青年団書記に、私はあたりちらしました。「自然破壊プロジェクトだ！ いったいなにがあったんだ！」。小武が私をなだめようと、「そうかもしれないけど、観光資源の開発は必要だ」といいます。

「あのマオウがどれだけの年数を生きてきたかわかるか？地球上に数か所しかない古生代の岩盤を削るのが、観光資源の破壊でなくてなんなんだ！緑化、緑化っていったって、そのあとに植えてるのは、なんでもない樹木ばかりだろ。バカバカしい。なにを考えてんだ！ なにも考えてないんだ！」。私の悪罵はエスカレートするばかりです。

小武が渾源県の青年団書記に話しました。「この現場を最初にみたとき、きれいだ、見栄えがすると自分も思った。でも、遠田先生や高見のいうことには道理がある。あなたはどう思うか？」。渾源県の青年団書記もそれに同意しました。

その夜、渾源県の以前の林業局長、温増玉さんが私の部屋にきました。その事情は前号に書きました。彼は恒山森林公園の建設がはじまったときの実際の責任者でした。「水土保持プロジェクトの名がついているけど、草も灌木もブルドーザーで剥がしてしまった。あれでは水土流失はあっというまになる。有機質を含んだ表土を削ったら、10年は樹木も育たないだろう」と彼はいうのです。何年もかけて自分たちが植えてきた樹木を抜かれてしまった悔しさも、そこにはあるでしょう。

事情を聞いてきた小武が、私たちにいいました。「水土流失防止の会議が大同で開かれることになっています。そのさいに渾源県の呉城郷、陽高県の生態保護プロジェクトとならんで、あの恒山森林公園もモデルとして、各地の代表が見学します。あなたたちが感じた問題点を、北京で話してください」。

その1週間ほどまえ、天鎮県のあるプロジェクトにいきました。観光開発をねらって、ここでも人の背丈以上のマツの大苗をそうとうな数、昨年春に植えていました。遠田さんに指摘されたのですが、葉の青いものも新芽が枯れていて、生き残れそうなものは10本に1本もありません。それに水をかける作業がツアーに準備されたので、私はそれを拒否しました。要するに、その場しのぎの形式主義です。

帰りの北京で、中華全国青年連合会の幹部に、その事情をぶちまけました。「朱鎔基総理がそんなことをいうなんて信じられない。ほんとうだとしたら、官僚に乗せられたのでしょうか」というのが、彼らの答えです。そのあと逆襲がはじまりました。「高見さんはそんなふうにはいいませんが、大きな苗を植えるのは、日本のボランティアや、いろんな団体の要求です。私たちが苗を準備しても、どうしてこんなに小さいんだ、もっと大きな苗をとって、いつも要求され

ます」。

成果、成果って思いが強すぎるんじゃないでしょうか。せいぜい3年、長くて5年くらいしか考えてないんでしょう。大きな苗でなかったら、写真も撮れないし、報告もできないってことでしょうか。私たちは10年目にはいっていますが、助成金の担当者から「どうして10年もつづけているのですか！」なんていわれることがあるんですね。ついつい話が横道にそれました。

私がいいたいのはこういうことです。現場には現場の、技術的な条件があります。本来なら技術者たちが責任をもち、それを貫くことがたいせつでしょう。でも、上から「任務」といわれると、官僚も研究者も技術者も、それにあわせて答えを書いてしまうんですね。それは日本も同じでしょう。そうしたことが現場を混乱させないか、私には心配です。NO. 97～98 で書いた「黄砂は悪者か？」の実際上の問題はそういうところにあると私は思っています。

## NO. 103 記憶のなかの阪神大震災(1) 2001. 05. 21

私の住んでいるのは、阪神大震災の震度7の地域の東のはずれです。揺れのおさまるのを待って、家のなかをみると、タンス、本棚、冷蔵庫、次男が飼っていた熱帯魚の水槽……、倒れるものはすべて倒れ、割れるものはすべて割れていました。タンスの引き出しの1つは、私たち夫婦のフトンを飛び越えて、部屋の反対がわに転がっていました。

家は半壊でした。半分壊れるのが「半壊」かと思ったら、そうじゃないんです。半分壊れたら「全壊」で、修繕すればなんとか住める程度が半壊なんです。それでも、家の四隅をはじめ、ズレたり壊れたりしたところがいまでも残っています。

かしいでしまって開かなくなった玄関のドアを、となりの人に助けてもらい、体当たりで開けました。気になったのは1kmほど離れたところに住んでいる知人のことです。ブロック塀、電柱、家などが道路に倒れていて、回り道を重ねないといけませんでした。

知人の無事を確認した帰り道のことです。もともと2階建てだったある企業の女子寮が、1階建てになっていました。門の前で10人ほどの女性が泣いています。まだ5人がなかに閉じこめられている、というのです。

ためらわずに飛び込むほど、私は勇敢でも、りっぱでもありません。余震のたびに建物とその残骸が揺れていました。朝方のあの恐怖がよみがえってくるんです。しばらく迷った末に、2階の窓から、その建物にはいりました。自分ってものが、こういうときにこそ試されるんじゃないか、なんて自分を鼓舞しました。近所の人たち数人と、ありあわせの道具で2階の廊下の床板をはがしました。驚いたことに、1階の床から2階の床までが50～60cmほどに圧縮されて

いました。そうやってからだを動かしていると、すぐに夢中になって、先ほどまでの恐怖を忘れてしまいます。

最初に救いだした女性は、腰の骨を折っていましたが、意識があり、「まだ友だちがいます」と教えてくれました。手探りで2人目をみつけましたが、もう冷たくなっていました。それでも早く外にだしたいという気持ちで、みんなまとまっていた。即死の状態だったようです。まだ19歳でした。痛ましいことです。ひと段落して自宅に戻ると、近所の人が空き地に集まって、炊き出しをはじめていました。町内で13人が亡くなったということです。

そんなふうに最初に動くと、やめられなくなってしまいます。翌々日、電車が動きだしたところまで数駅を歩き、大阪の事務所にでました。被災地に住んでいる会員や友人たちの安否を、電話で確認したかったのです。通じない家が多いんです。自分の家に何度かけても、通じませんでした。あとになって、携帯と携帯とが通じやすいこと、公衆電話からのほうがかかりやすいことを知りました。

尼崎の清田祐一郎さんとは電話が通じ、「学習塾の生徒といっしょに芦屋で救援活動をはじめから、すぐにきてほしい」といわれました。彼は芦屋と尼崎で学習塾をやっていたんです。途中の交通事情を尋ねると、「電車は動いてない。なんとか工夫してちょうだい。それができない人は、きてもらっても役にたたないよ」なんていうんですね。そんなふうにいわれると、意地でもいかざるをえないじゃないですか。

最終的に私は、彼の指示で、尼崎で車を借り、救援物資を積み込んで、芦屋に向こうことにしました。途中の武庫川の橋で検問があり、一般車両は通れないということです。尼崎市職の徳田幸博委員長の紹介で、尼崎市議会の事務局長と面談しました。「通行証を発行していただけますか。事情を書いてハンコを押してもらったらいいんです」といったら、「公印を押すのは、そんな簡単なことではありません」といわれました。「あなたの名刺の裏にでも、救援のための車両だと書いて、私印でけっこうですから押してください」と頼んだら、それくらいならOKということになりました。それが役立ったんですね。拡大コピーして、車のフロントガラスに張ったら、救援のための車両ということで、あとになって通してもらえたんです。

翌日からスタートする「芦屋市民学生救援隊」の会議に参加しました。高校生の塾生とOBの大学生がいたんですけど、緊張した集まりでした。途中で「えっちゃんが救出され、中学校に収容された」というニュースがはいると、「自分の家に引き取ります」といって、2人が飛び出していきました。えっちゃんの家は母子家庭なのに、ちょっと前にお母さんの死亡が確認されていたんです。最終的に私は、緑の地球ネットワークの事務所をベースに、救援隊の活動をバックアップすることに決めました。どこまでやるかは、その後の状況を見ながら、自分で決めるつもりでした。

いくらなんでも、この日は帰らないわけにはいきません。自宅がその後どうなっているか、電話が通じなくてわからないんです。その事情を話すと、会議に参加していた青年が、「バイクで送みましょう」といってくれました。阪急電車が動いている西宮北口まで送ってもらいました。

ここまでのことを書いてきたのは、じつは、別れぎわに彼が話したことを、書き残しておきたかったからなんです。彼については、名前も覚えていません。でも、大きな影響を私に残したんです。

「父親が亡くなりました。斎場が休止していて、最低でも1週間は火葬できないようです。棺もドライアイスも手に入りません。毛布にくるんで部屋に寝かせてますが、もう臭いはじめました。家にいたら、気持ちがめいるだけです。活動がはじまって、ほかの人の役にたてるとしたら、自分にとっても救いなんです」。

私は慰めも口にできなかったんですね。なんといいかわからなかったんです。ただ、これは手を抜くわけにはいけないと、自分でも腹を決めました。

## NO. 104 記憶のなかの阪神大震災(2) 2001. 05. 30

唐突に阪神大震災のなかでの経験を書きはじめたのですが、なんとなく、つづき書きにくくなってしまったんですね。読んでいただいた人からの反響はけっこうあったんですよ。困ったなあ、と思っていたら、パソコンのハードディスクの底のほうで、地震から半年ほどあと、芦屋市民学生救援隊の求めで書いた原稿がみつかりました。ちょっと長いし(毎度のことです)、前回と重なるところもあるのですが、当時の雰囲気はでていると思いますので、そのまま流させていただきます。

### 【芦屋市民学生救援隊の活動から学んだこと】

芦屋市民学生救援隊の初動体制について書け、という依頼を受けました。私はほんの一時期、しかも救援隊と離れた場所で、多少のバックアップをさせていただいただけですから、もっと適切な人が書くべきだと思います。しかし、その後ずっと不義理を重ねてきた身としては、断ることもできませんので、自分なりに振り返ってみたいと思います。

芦屋市民学生救援隊の発足にたまたま立ち会った私は、翌日から、つぎのような内容のファックスをあちこちに送りはじめました。「各方面の友人のみなさん！ 阪神大震災の惨状をみて、すぐにでもなにかをしたいとお考えのかたが、たくさんおられると思います。私は1月19日、中心的な被災地のひとつ芦屋市に、救援物資の輸送を依頼されてでかけ、感動的な光景にであ

いました。10 数名の若者が集まり、翌日からの救援活動の相談をしているのです。その青年たちの多くも被災者です。なかには家族を亡くし、その遺体を家に置きながら、この場に参加している人もいました。そのとき、母 1 人子 1 人の女子学生の母親が亡くなったという報せがはいり、2 人の若者が自分の家に引き取るといって、飛びだしました。

彼らは「芦屋市民学生救援隊」を結成し、20 日の朝から、被災者が集まっている付近の公園や小学校などを巡回し、その人たちがなにを必要としているかを聞いて集約し、届ける活動を始めました。高校生・大学生などが続々とつめかけ、たちまち 100 名を越え、きわめて精力的に活動しています。ほんとに短いあいだに自分をきたえ、顔つきまでしっかりしてきているのには驚かされます。

家族を亡くした青年と話をしましたが、彼は、家にいたら滅入るだけだが、こうやってほかの人のために活動することで、自分自身も救われる、と語っています。

彼らは芦屋市と神戸市東灘区の青年たちで、通行可能な道路などをよく知っており、被災者の集団には同級生や知りあいがいます。彼らの働きで、もっとも必要などころにもっとも必要なものを、すみやかに届けることができます。また地元の若者たちがこうやって動きだすことが、被災者たちになによりの励ましになります。

私も宝塚で被災しましたが、彼らの活動ぶりをみて励まされ、よし、自分にできることをやろう、と気持ちを引き締めることができました。

この活動を京都の「あをぞら救援隊本部」、尼崎の「尼崎市民救援隊」が最初からバックアップし、さらに神戸市東灘区の「上山小児科医院」での救護活動とタイアップしてすすめられています。

お電話やファックスで、緑の地球ネットワークまで義援金を約束していただければ、その分を先に立て替えて、必要な物資を購入して届けますので、可能なご協力をお願いいたします。後日、会計報告をいたします。またこの活動に加わっていただけるかたは、ぜひ、現地にかけてください。」

その何日かあとには、つぎのように書き加えて、緑の地球ネットワークの会報「緑の地球」に救援要請のアピールを掲載しました。「以上の内容のファックスを 20 日から各方面に送ったところ、さまざまの物資をもって、すぐ現地にかけてつけられたかた、義援金を送ってくださったかた、ファックスを知りあいに転送してくださったかたなどがびっくりするほどたくさんおられます。24 日には中宮寺門跡・日野西光尊さんなどが義援金と物資を携えて現地で活動してください、また村蒔義正さんは豚汁 1,000 食など大量の物資を何回も、薬師寺の宮大工・池田建設さんは大量のブルーシート、ロープなどを届けられました。これはほんの一例にすぎませ

ん。

各所でいろんなNGOの活動がめざましいこと、緑の地球ネットワークの会員がいたるところで活躍しておられるのを知り、私はまた感動しました。被災地は依然として厳しい条件下にあり、余震や病気の問題などが心配です。このような活動はかなり長期に必要とされます。多くのかたのご協力をお願いいたします。」

1月17日の地震を、私は宝塚市山本の自宅で体験しました。倒れるものはすべて倒れ、割れるものはすべて割れ、家は半壊ということになりました。やっと明るくなりだした外をみると、たくさんの家が倒れ、阪急電車の山本駅までの道路もあちこちで寸断されています。のちになってわかったことですが、うちのあたりは、震度7のいちばん東のはずれだったのです。

そう遠くないところに住んでいる友人の無事を確認、帰ろうとしたところ、ある企業の2階建ての女子寮が完全につぶれ、その前で若い女性たちが泣き崩れていました。5人が閉じこめられているというのです。

2階の窓から入り込み、周囲から集まってきた人たちといっしょに救出活動をはじめました。ここだろうと見当をつけ、2階の床を破り、声をかけながら探すのですが、なかなかみつかりません。余震がつづくなか、2次遭難を気遣いながらの搜索でした。最初の娘さんは、腰の骨を折っていましたが、意識もちゃんとしており、「友だちがまだいます、助けてください」といっていました。しかし、さまざまな障害を取り除いて、やっと2人目をみつけたときには、その人はもう冷たくなっていました。まだ19歳ということで、ほんとに痛ましいことです。おなじようにして、町内では13人が犠牲になりました。

宝塚では電話も通じませんので、19日から大阪の事務所にでて、知り合いの安否確認をはじめました。尼崎の清田祐一郎さんに電話をしたら、「無事だ、芦屋で救援活動をはじめたい、尼崎から救援物資をつんだ車を運転してきてほしい」というのです。そこでであったのが、ファックスのなかに書いた光景です。京都の永原さんからも何度も電話でハッパをかけられました。

自分のおかれた条件では、私は後方でバックアップするのがいちばんいいだろうと思いました。そこで会員の名簿を広げ、とにかく番号のわかる人をみつけては、ファックスを打ちつけました。その直後から、問い合わせの電話が鳴りつづけ、私たちの事務所のメンバーはみな被災してすぐは事務所にもでてくれませんでしたので、1人でてんでこまいです。救援隊の事務所から、いちばん必要な物資のリストが届くと、その買い出しと運搬を引き受けてくれる人を捜さないといけません。

50音順の名簿をみてファックスを打ったため、終わりのほうにある村蒔さんや薬師寺の安田さんなどへの連絡はかなり遅くなり、「なぜ、こんなに遅いんだ」と叱られてしまいました。み

んなほんとうにいっしょうけんめいだったのです。

1月19日の夜、最初に救援隊に集まったメンバーたちをみたとき、あそこまでみんなががんばるとは思っていませんでした。ふつうの高校生や中学生が中心だったのですから、あたりまえです。でも、そのあとの成長ぶりはすごかったと思います。私は救援隊の事務所にいくことはあまりなく、電話で応対するくらいだったのですが、それでもみんなが1日ごとにしっかりしていくのがわかります。

たとえば、河内長野の村蒔さんは最初、豚汁1,000食を届け、2回めはカレー1,000食の炊き出しをされました。私はその連絡の中継をして、救援隊に電話をいれました。電話口にでた伊藤さんが、「高見さん、まとまったカレーの炊き出しはとてもありがたいんですけど、プロパンガスは用意されているんですか？ 紙皿は？ スプーンは？」。そこまでちゃんと確認していなかった私が「あっ、スプーンのことは考えてなかった」というと、伊藤さんが「カレーを手で食べるんですか」。あわてて近所のスーパーに走りましたが、1,000食分のプラスチックスプーンをそろえることはできず、割り箸でしんぼうしてもらうことになりました。彼女は電話の瞬間にそこまで気を回してくれたのです。

中宮寺門跡の日野西光尊さん一行が西宮から徒歩でかけつけ、倒壊した施設の資料整理をしてくれました。その帰りのことです。「えっ、あなた、高校3年生！ 受験じゃない？」「ええ、でも試験は来年もありますから……」。「そうよね、これがいちばんの勉強だわよね！」、そう答えながら、みなさんすごく感動しておられました。

救援隊の活動ぶりをビデオで残したいという要請があり、私は何人かのカメラマンを紹介しました。そのテープを半年以上もたってからみせてもらったら、知った顔が何人も登場します。えっ、あの人もいつか来ていたの！ そのときはまったく知らなかったのです。

私たちの事務所もいつのまにか中継所のようになり、いろんなところからの救援物資が積み上げられました。急ぐものから順番に、入れ替わり立ち替わり、いろんな人たちがやってきて、かついで現地に届けてくれます。

そういえば、こんな体験もしました。もう2月にはいっていたと思いますが、救援隊が神戸の長田区へルートを伸ばしたいというので、私は知り合いを紹介するために、中心メンバーと一っしょに車でかけ、帰りが深夜になったので、その夜は救援隊の事務所に泊まりました。そこに泊まっている人たちの話をなにげなく聞いていると、ひとりが北京で中国の伝統医学を勉強しているといいます。「北京にいるのなら、私たちの村にも足を伸ばしてよ」といって、緑の地球ネットワークが緑化協力をつづけている黄土高原の資料を渡しました。

それをみていた彼は、ゴソゴソとバッグのなかを探して、「高見さんって、この高見さんです

か？」とききます。彼が探し出した紙は、私が友人の城戸さんに打ったファックスが、さらに転送されたものです。「そうだけど、どうしてそれをあなたがもっているの？」「父親のところに来たんです。私は藤井といいますけど」。「えっ、ひょっとして、あの藤井さんの息子さん？」。

彼の父親は、もう30年もまえ、私が学生運動に参加しているころの先輩だったんですよ。留学先の北京から実家の静岡に帰っていて、そのファックスをみてやってきて、もう芦屋に4日も泊まっているというんです。四国の田中さんの高校生の息子も、シュラフをもって何日も救援にかけつけていました。

用事がかかえていた私は、翌朝、まだうすぐらいなかを、駅にむかいました。そして急に「ああ、もうジュニアの時代なんだな」なんていう思いがわいてきて、押さえても押さえても、涙がでてしかたがありませんでした。

被災地といっても、そこはいまの日本社会の縮図です。社会の矛盾が何倍にも凝縮されて、そこにはあります。被災者たちもいろいろです。最前線で活動された人たちは、困っている人に喜んでもらえる感動を味わういっぱい、イヤなことにも何度もであったらうと思います。

その意味では、私たちはいちばんおいしいところだけを味あわせてもらったのではないでしょう。私たちのところにくる人は、集まってくる物資は、そのすべてが善意のかたまりでした。そして私たちからそれを受け取ってくれる人たちも、あの救援隊本部に集まっている若者たちのように、すばらしい人たちばかりでした。まだたくさんの人たちが避難所や仮設住宅で苦しい生活を送っているなかで、不謹慎かもしれませんが、まもなく1年になるあの大地震も、私にとってはいい思い出だけを残してくれているように思えてならないのです。

本題はこれまでとして、緑の地球ネットワークが緑化のお手伝いをしている中国山西省大同市周辺の黄土高原も、ことしは大自然災害の年でした。昨年秋からほとんど雨が降らなくなり、6月20日ごろまでの降水量はわずか22mmにとどまりました。灌漑のできない丘陵には、種もまけない畑が広がっていますし、雨を待ってから植えつけたアワやジャガイモは7月末になってもまだほとんど伸びていません。乾燥につよい雑草もまばらに生えているだけです。これほどの大干ばつは中華人民共和国ができて50年近いなかでいちどもなかったことだといいます。

7月の半ばをすぎて、一転して雨がふりだしました。とくに8月末から9月中旬にかけては、ほとんどやみまなしに降りつづけ、降水量は635mmにたっしました。この地域の年間降水量は400mm前後ですから、年間降水量の1.6倍が2か月弱のあいだに集中したことになります。このあたりの農家は、黄土でつくった窯洞がほとんどです。雨が屋根にしみこんで、突如、倒壊しはじめました。現地からの連絡で見舞いにかけてみると、ひどいところでは、ほとんどの家がつぶれてしまうか、屋根を丸太で必死に支えていて、とても人が住める状態ではありません。いちばんひどい時期には24万人の人が住む家を失いました。

春と夏にこの地域にでかけたとき、私は、「阪神大震災では小中学校が避難所になったけど、ここで自然災害があったら、真っ先につぶれるのは村の小学校だな」などと冗談をいっていました。貧乏な村では、築後数百年もたった道教の廟などを校舎として使っています。「日本にあったら重要文化財だな」なんて笑ったこともあります。それがつぎつぎに倒壊してしまって、学校にいけない子が何万人もでました。あんな冗談を口にしてはいけないんだな、なんて思ったものです。

それで終わればまだよかったです。9月10日には早くも氷点下を記録し、早霜が襲いました。ジャガイモは腐り、アワやキビは枯れ死し、収穫は平年の4分の1から3分の1しかありません。この地方の冬はことのほか厳しく、たいがいのところ氷点下20~30度になり、山間などでは40度にもなります。家がなくなった人たちは、敷地の片隅に急ごしらえの小屋をつくり、なんとか冬をすごそうとしています。

もともとこの地域は、中国のなかでももっとも貧しいところのひとつです。1人あたりの年間所得が日本円で5,000円以下のところがたくさんあり、山間などには1,000円~2,000円の村もあります。大同市の7つの農村県のうち、4つが国家の重点援助対象県なのです。

あれだけの寒さのなか、小さな小屋で、食糧が不足することほどつらいことはないでしょう。大同市や県の政府は「1人の餓死者もだすな、1人の凍死者もだすな」と呼びかけていますが、なにせ、被災の程度が深刻で、範囲も広がっただけに、思うように救援がすすんでいないのが現状です。今回の大震災を機会に、自分たちのこれまでの生き方を反省すると同時に、世界のあちこちでより困難な状況におかれている人たちのことを思いやれるような、そんな人たちが増えてほしいものです。長くてもうしわけありませんでした。

## NO. 105 記憶のなかの阪神大震災(3) 2001. 06. 04

黄土高原だよりを読みつづけていただいた方はお気づきでしょうが、私という人間はかなり性格が偏っています。なにかにとりかかると、それに夢中になって、ほかのことに意識が回りません。そういう傾向はだれにでもありますし、「集中力がある」とほめられることもあるでしょう。

私のばあいは、どうも度を過ぎているようです。自分でそう思っているわけじゃないですよ。自覚があるなら軽症でしょう。私のつれあいが、いつもこぼすんです。そのために自分がいかに迷惑しているかって。

でも、阪神大震災のときのことは、自分でも認めないわけにはいきません。あのころは、緑の地球ネットワークにとって、たいへんな時期でした。大同での事業もあまりうまくいって

ませんでした。というより、失敗に終わったことが多かったんです。それについては以前に書きました。国内でも、このころがいちばんたいへんでした。悪夢のようです。それまで代表だった人が辞めたんですね。

だれが悪いとか、そういう問題ではないと思います。はじめるまではなんでも、360度、どの方向にも無限の可能性がります。なにか1つをはじめるってことは、他の可能性を切り捨てることですし、無限のはずの可能性を有限に切り詰めることでもあります。現実のしごとってというのはそういうことでしょう。すると、「こんなはずじゃなかった」と思う人がでるのは当然です。

切羽つまって、大同にいていただいたばかりの立花吉茂先生を訪ね、代表就任を頼みこみました。くわしい事情もきかずに、引き受けていただいたんですね。責任者に見捨てられた組織なんて、世間的に言えば、死に体じゃないですか。それまで助成を受けていた財団からも、そのようにみられました。そんな事情のわからない立花先生ではないのに、それでも引き受けてくださったんです。うれしくて、私は泣きながら帰りました。

1995年2月18日に第2回会員総会を決めていました。年が明けてしばらくして、会員全員に招請状を送ったんです。会員総会を成功させ、新しい代表のもとで活動を軌道に乗せるのが、最大の関心事でした。

1月17日の朝、私は早起きしました。朝日新聞の五孝隆実記者が私たちの活動取材し、この日の朝刊で紹介してくれることになっていたんです。新聞の配達を待って、ふとんのなかでソワソワしていました。そこに、あの地震です。すぐには地震だとわからないくらいの衝撃でした。長かったですよ。だんだん揺れが激しくなって、もうダメじゃないかと思いました。あとになってその紙面をみたんですけど、カラー写真が2枚はあって、ほぼ1ページです。でも、反響はまったくなかった。そりゃ、そうでしょう。

それまで抱えていた課題が頭から吹っ飛んだのは、倒壊した近所の女子寮で救出作業をはじめたときです。そこまではいいのです。当然です。そのあとも、突っ走りつづけたんですね。周囲の人たちは、これでいいんだろうかと、気をもんだことでしょう。でも、そういうときの私に注意するのはむずかしかったでしょうね。

地震発生から2週間くらいあとのこと。中国の大同からファクスがはいりました。「みんな無事ですか？協力関係のある村から、問い合わせがたくさんきています。『必要なものがあれば送る』とってきてますから、連絡してほしい」というものでした。うれしかったですね。

私は、「だいじょうぶだ。水道もガスも途絶してるけど、そちらに比べたら余裕があるから、心配するな。村の人たちに、そのように伝えてほしい」と返事をしました。

そして、そうだ、その現場もあったんだと、やっと思いだしたんです。気がついてみると、会員総会まで日がありません。延期も検討しましたが、やっぱり計画どおりの開催が決まりました。なんとかみんなで乗りきったんです。そのなかで、あの救援活動をいっしょに担った人間の連帯は強いな、と痛感しました。

95年春には、2つの緑化協力ツアーを計画していました。中止か削減がふつうでしょうけど、思い切って、そのまま実施しました。関西の人は減りましたが、その他の地方の人が加わって、これも実現したんです。有元幹明副代表を団長とするツアーは、このとき環境林センターの起工式に臨みました。

振り返ってみると、あの厳しい環境のもとで、あとに残るいいしごとをしたんですね、このときは。世話人をはじめ、たくさんの会員が被災地の救援に走り回り、信頼を固めたのは、その最たるものでしょう。失敗や困難に直面し、懸命に働いているときほど蓄積を残します。逆に、順調にいつていると思うときは、空洞化しがちです。私自身もその過程で化けたんですけど、そのことについてはまた別の機会に……。

いまでも残念に思うのは、大同から連絡があったとき、先方の申し出をことわったことです。アワでもキビでも、なんでもよかったんです。送ってもらえばよかった。そうしておけば、ずっとあとまで私たちの関係を「おたがいさまですよ」というところにおくことができたのに……。

ぶちまけついでに、次元のちがう話をもう1つ。17日の夜、今晚だけは酒を飲まずに寝ようと思ったんです。大きな余震もありましたからね。ところがフトンにはいると、両腕がうずいて寝つけないんですよ。昼間の救出作業で、ふだん使わない筋肉を使ったからでしょうね。ところが酒のビンはずんぶん割れてしまっていました。紙パックの料理酒があったのを思いだし、懐中電灯でさがしたら、食用油がまみれついて、どうしようもないんですね。でも、ないよりはいい。1パイだけにしようと、思ったんですよ。飲む前は、だめなんですね。1滴でもアルコールがはいると、けっきょく、残っていたのを飲みほしてしまいました。あ～あ。

## NO. 106 変わりはじめた村 2001. 06. 13

6月8日に東京で開催した緑の地球ネットワークシンポジウムには、200人もの参加者がありました。ありがとうございました。16日には大阪で開催します。ご参加ください。

渾源县呉城郷のアンズが成功したことは以前に書きました。この郷がアンズを植えるはじめたのは1994年です。小学校付属果樹園のかたちで私たちが協力したのはほんの一部ですが、地元

の人たちはその後もアンズを植え広げ、600ha、約 50 万本にたっしました。いまも、まだ増やしています。

最初に収穫できたのは 99 年の 7 月です。本来なら、その前年に初の収穫ができたはずですが、4 月末の霜のために小さな実が落ちてしまったのです。2 年目の 2000 年もアンズは豊作でした。10a(1 反)あたり 82 本が標準ですが、そこから 160kg の杏仁がとれたのです。1kg が 10 元(1 元=15 元)ですので、1,600 元です。

このアンズは果肉を食べるアンズではなく、杏仁(きょうじん・あんにん)を目的にしています。アンズの種を割ると、なかに柔らかい部分(仁)がありますが、あれを薬材・食材として利用するわけです。鎮咳・去痰をはじめ、さまざまな用途の漢方薬に使われますし、ジュースや点心に加工されています。日本でなじみぶかいのは、中華料理のデザートのアニントウフでしょうか。

アンズを植えるまでは、アワ・キビ・ジャガイモを栽培していました。これらの食糧は、1kg が 2 元ほどです。ジャガイモは 5kg を 1kg に換算します。10a あたりの収穫高は 150~200kg でした。お金にすると、300~400 元です。ですから、4~5 倍にふえたことになります。まだこのアンズは若木なので、あと 3 年もすれば、最低でも 2~3 倍に増えることでしょう。

呉城郷は渾源県北部の黄土丘陵にあります。水土流失が深刻なところで、99 年に放映された NHK・BS2 の「地球に好奇心」シリーズ、「黄土高原~失われた森の文化を求めて」のロケ地になりました。急傾斜地の畑は、夏の雨によって土・肥料・作物が流されるので、「三逃田」と呼ばれます。「田」は畑です。「畑」は日本でつくられた国字で、中国にはありません。

アンズ栽培に変えると、耕す必要がありませんから、手間も減りますし、土壌流失も軽減します。農業と生活環境の改善に役立ち、経済的にも潤います。一石二鳥、三鳥の作用をするわけです。このあとどうなるか、楽しみです。

広霊県楊窰村の変化はもっと速いです。この村の小学校果樹園づくりも、1995 年からはじまりました。ここでもアンズを植えていますが、成績は、呉城郷にくらべると、よくありません。土地がやせているのは呉城郷といっしょですが、呉城郷ではアンズにかけて、肥料なども集中したのにたいし、ここはそれほどでもありません。植えている畑は、村からずっと離れたところにあります。そのぶん、農民は肥料も運びませんから、土がやせているのです。管理も呉城郷に比べると、かなり劣ります。

ここは 1998 年から収穫がはじまりましたが、最初は苗を植えた木ではなく、もともと植えられていた土杏(実生の木で実は小さくて苦く経済価値はありません)に、仁用杏を接ぎ木したもののからです。植えた木も実りだしていますが、収穫量はわずかなものです。

それなのに、村の変化が速いというのはどういうわけでしょう？私たちが協力をはじめたとき、「外国からまで支援があるのに、いつまでも貧乏では面子が立たない」といって、県政府が扶貧工程をこの村にもって来たんですね。具体的にはレンガ工場と養豚場です。

村のすぐ北にできたレンガ工場では、20元(1元=15円)の日当を払います。農村の余剰労働力を吸収し、生かしているわけです。それぞれの家庭では、食糧はなんとか農業で自給自足ができます。冬は土も水も凍結しますから、レンガ工場も通年は操業できませんが、それでも相当の現金収入を保障するわけです。

お金がたまると、農家が最初にとりくむのは、自宅の新築です。万国共通なんじゃないかな。それまでの土のヤオトン(窑洞)が取り壊されて、レンガ建てに換わっていきました。従来の村のなかだけでは土地が足りなくなり、村の西のほうへも新しい家が繁殖しつつあります。家のなかにも、カラーテレビその他がみられるようになりました。

レンガ工場の労働時間はけっこう長く、男たちは朝早くから出かけ、帰ってくるのは夜遅くなってからです。そのぶん家庭の主婦も畑で働く機会がふえました。子どもたちも、よく手伝いをするようになったようです。こうした変化がプラスかマイナスか、時間をかけてみる必要があるでしょう。

村の人たちが私に話しかけてきます。「これもみんな、あなたたちのおかげだ」と。

でも、私たちが協力したのは、アンズを植えることにたいしてであって、村の生活を直接に変えたレンガ工場ではありません。そういうと、「いや、あなたたちがこなかったら、あのレンガ工場もこなかった」なんていうんですよ。なるほど、多少は呼び水の作用をはたしたのかも知れませんが、でもくすぐったい。

自活できる産業ができると、村は大きく変わっていきます。出稼ぎの必要もなくなります。そこからの収入をもとに、放牧に頼らなくてもすむようになれば、森林の再生にもつながっていくでしょう。こういう変化を目の当たりにすると、植えるだけが緑化でない、と考えざるをえません。

## NO. 107 初めて訪れた大同の現地(1) 2001. 06. 22

「どういう理由で大同を選んだんですか？」とよく聞かれます。自分で選んだんじゃないんです。選んだのは中国側です。1991年11月、私は北京の中華全国青年連合会を訪れて、「中国の緑化に協力したいので適当なところを紹介してほしい」と頼みました。

しばらくして返答のあったのが、当時は山西省雁北地区、いまは山西省大同市に属する渾源県でした。どういうところか、調べようとしたんですけど、山西省の情報って、日本ではほとんどえられなかったですね。中国五岳の1つ北岳恒山のあること、大同の近くであること、などがわかりました。ここが黄土高原に位置することも知らないで、現地に行くことになったんです。

92年1月、現地調査に臨んだメンバーは5名でした。中華全国青年連合会を訪ねて、青年農民部長から話をききました。渾源県は、彼が2年間ほど駐在していたところだということです。「緑化にはたいへん熱心です。そのうえ、美人の産地として歴史的に有名ですし、いい酒もあります」ということでした。後半に目がくらんだと思われそうですね。

11時すぎの夜行列車に乗って、翌朝7時前に大同駅に着きました。市内のホテルで朝食をとって、そのあと車で渾源に向かいました。現在のワーキングツアーの日程と大差ありません。でも、そのときは年間でいちばん寒い1月です。ブルブル〜ッ。北京の日本大使館の近くの自由市場で、私は分厚いダウンジャケット(ドイツ向け輸出品の流れ)と毛糸のズボン下を買ってきました。それでも寒いんですね。夜間は零下20度以下ですし、日中でも0度は越えない。

渾源に着いて思ったのは、「なんというところにきてしまったんだ!」ということです。寒さもそうですが、目をあけていられないんですよ。ショボショボする。臭いもたいへんです。あとになってわかったことですが、冬の時期は逆転層ができるんですね。地表の気温が上空より低いため、石炭を燃やした煙が拡散しないで、地表近くにたまるんですよ。まるで煙突のなか、オンドルのなかです。

そして空は晴れているのに、色がありません。大地は黄土色、土づくりの家も黄土色、どこをみても黄土色です。せめて雪の白でもあればいいんですけど、雪はほとんど降らない。外を歩いている人たちも、カーキ色かモスグリーンの、ひと時代まえの人民服が多かったんです。でも、それを一皮めくれば、赤、青、黄色といった原色の鮮やかなセーターを着ている人が多かったんですけどね、若い人は。

町で売られている食品は、すべて冷凍食品です。天然の。タマゴが直径・深さ70cmはあるカゴに山盛りになっています。地飼いでカラがじょうぶだといっても、ふつうにはムリです。中味まで凍っていて、それでもっているんでしょう。二枚におろしたブタをリヤカーなんかで運んでいるんですけど、内蔵がこぼれません。これも凍りついているんです。

私たちが泊まった招待所のそばにバスの停留所があって、その前が広場です。いろんな屋台がでているんですけど、店番たちは、50%以上ある白酒を昼間からチビリチビリ。それが唯一の暖房なんですね。屋台のなかにフトンをして、夜もここに寝泊まりしています。まだ小さな子どもがいたりするんで、驚かされました。

当時は車がほとんど通らなかったんですよ。县城の表通りを、ジープがやってくるんですね。地面は凍結してますし、タイヤはツルツルですから、ゆっくり走ります。道路わきでコマ回しをしていた男の子が飛び出して、ジープの後ろにぶら下がって、凍結した路面を滑るんですね。つぎの男の子が、前の子の胴を抱えてぶらさがります。そして、つぎの子も……。

サルが橋ってところですかね。そういうようすを、私はビデオで撮影していました。

外での活動には不自由な条件でしたが、植林の現場を3か所、考察しました。「考察」というのは、団長の佐野茂樹さんのすきな言葉でした。最初にいったのは、西留郷の龍首山プロジェクトです。黄土丘陵の、ついこないだまで畑だったところに、マツとアンズを植えていました。といっても、なにもみえないんですよ。同行した林業局長が、土を取りのけると、小さなマツの苗が顔をだしました。冬の寒風害から守るために、土で埋めているんですね。

そのあと、郷政府で座談会をもったんですけど、集まった人たちがごっつい人ばかりでした。みんなアゴが大きくて、ガンコそうにみえるんですね。郷政府の会議室で、石炭ストーブを囲んだんですけど、ものすごい表情でにらみつけてくるんです。それでも、「村の近くの畑の生産性があがってきたので、環境に目をむける余裕がでてきた。これから家を新築するためには木材が必要だから、木を植えたいと思う」なんて話してくれました。その話には私はすっかり感動しました。甘ちゃんだったんです。

2つめは、北岳恒山の南面です。道教の聖山で、国内はもとより、あちこちの華僑・華人が年間数十万人もお参りにくるところです。その参道付近に大きめのマツを植えています。「山の北面より南面はむずかしいが、ここは観光客が多いから、緑化しないといけない」との説明がありました。

3つめは、县城から南に下った銀屯梁という山でした。発音は同じで、ちがう文字をあてることもあります。地方名でしょう。ここは89年からカラマツを植えていて、3年で1mくらいに育っていました。そのどれもが魅力的に思えたんですね。けっきょく、前2者に協力することにしたんですけど、皮肉なことに、その2つが完全に失敗し、見送った最後のカラマツだけが、その後も順調に育っているんです。

## NO. 108 初めて訪れた大同の現地(2) 2001. 06. 26

92年1月に初めて渾源県を訪ねたんですけど、緑の地球ネットワーク準備会なるものは、出発の直前に成立したばかりです。中国の環境問題研究の草分けの1人、大阪外国語大学の深尾葉子さんが「これからはネットワークの時代です」といいました。代表格の佐野茂樹さんが、「堅苦しい名前は避けましょう」といって、「たとえば緑の地球……」といったんですね。その

2つがくっついて、「緑の地球ネットワーク」に決まったんです。

でははじめましょう、といったって、予算があるわけじゃないし、組織があるわけでもない。環境問題はだいじだ、緑化でいこう。そういう熱意はみんなもっていたんです。でも、緑化や植物について専門知識のある人はいなかった。私なんて、まったく中途半端で、取り柄なんてなかったんです。

渾源県で3つのプロジェクトを考察し、それなりに活着し、育っているのをみて、「だいじょうぶだろう」とそのときは思ったんです。考えてみれば、失敗しているところを、中国側だってみせるわけがない。日本からいったメンバーは、ここではじめようか、と思いました。でも、どんな内容で、どれくらいの規模ではじめたらいいか、見当もつかなかったんですね。

そのころ、柳田耕一さんが、緑の地球防衛基金の事務局長をしていました。かなり以前からの友人です。正確にいうと、飲み友だちです。緑の地球防衛基金はしばらく前から、陝西省韓城市で緑化協力をはじめており、年間10万円で10年間の約束だということです。当時は1元＝26円でした。「こういう活動は中国では歓迎されますよ」と彼が話したことも、この活動をスタートさせるヒントになっていました。

急ごしらえのチームでしたから、日本側の5人のあいだでも、事前の合意はなかったんです。私は柳田さんの話を紹介して、いちおうの目安として10万円を提案しました。当時のレートでは260万円です。それくらいなら、本気になればなんとかかなると思いましたが。でもそれを10年つづける自信はありませんから、1年のこととしました。いちばん単純な方式として、西留郷の龍首山プロジェクトと恒山南面のプロジェクトに苗木代を協力することにしました。

渾源での最終日の夜、恒山飯店の1室で、中国側との協議をおこないました。私たちも緊張していたんですよ。急ごしらえで、基礎のないぶん、最初でつまづいたんでは、あとがないという思いがありました。実際に、ここでつまづいていたら、分解していたでしょう。

中国側も緊張していました。中国側の結論を伝えたのは、共青团渾源県委員会の李啓軍書記でしたが、緊張のあまりでしょう、唇を舌でなめまわしていたんです。ちょうどそのとき、停電になって、会議室が真っ暗になりました。ローソクが運び込まれて、その光で協議は続行されました。「日本側からの協力に感謝します」と、李啓軍が用意された文書を読み上げたとき、ほんとにホッとしたんです。

そのあと省都の太原にいて、林業庁、緑化委員会、外事弁公室など関係する役所を回りました。そういうなかで、山西省青年連合会とのあいだで、ひともんちゃく起きたんです。渾源県で合意した内容の一部に、青年連合会のクレームがついたんですね。でも、それを伝えにきた幹部は、渾源での全行動をともにしていたんです。「そのときはなにもいわないで、いまにな

っていってもだめだ」と日本側がいうと、「あのとき自分は意見を求められなかった」なんていうんですね。

現場で発言しなかったのは、彼女にとって負い目ですから、それ以上は主張しないで帰っていきます。でも、またやってきて、同じ問題を蒸し返します。2度3度と。「ここで合意しなおせば、下部のことはどうにでもなる」なんてシャーシャーというんです。私たちにとっていちばんカチンとくることです。これは個人の問題ではなく、上の方針がそうなんだな、と思いました。

現場には迷惑がかからないよう、こちらの負担で多少の妥協をして、その問題は解決しました。そのあと、協議書の作成にかかりました。最初で最後とっていいでしょう。計画を示す文書はもちろんありますが、契約書の類は、大同のカウンターパートとのあいだでは作成していません。文書をつくると、たいていはこちらが一方的にしばられることになります。それだったら、ないほうがいい。

渾源でもそうでしたが、日本側は、日本人スタッフの長期滞在を主張しました。佐野団長はとくにこのことにこだわりました。でも、色よい返事はありませんでした。

初期の段階では、お互いの信頼関係なんて、ゼロに等しかったんですね。そのなかで、自分たちの考えをお互いに主張しあったのは悪いことだとは思いませんが、あとの結果は好ましいものではありませんでした。

山西省青年連合会(太原)はその後、現地の農村に入るまえに、かならず太原を訪れるよう、こちらに求めてきました。自分たちがコントロールできないところで決められたら困る、ということだったのでしょう。こちらはこちらで、日本の私たちは現地のことを知らない、太原の人たちも現地の農村のことを知らない、知らないどうして議論したところで前向きの結論の得るはずがない、という思いを深めることになったのです。

石原忠一現顧問を団長とする第1次の緑化協力団が、92年のゴールデンウィークに現地を訪れましたが、この団は太原→五台山→大同のルートを通らざるをえませんでした。同行した山西省青年連合会の幹部は、石原団長にたいして「黄河流域の緑化が最重要」という観点で、ずいぶん働きかけました。山西省青年連合会の重点は、黄河流域の緑化だったんです。でも、私たちが協力を決めた渾源县は、黄河からは離れています。

92年9月から、私は数十日、渾源の農村に行くことになりました。本来なら、青年連合会から招請状をもらうべきなのにそれを避け、神戸から天津にむかうフェリー「燕京号」に乗って、船中でビザを求めることにしたんです。それだったら招請状が必要ありません。省と雁北地区の青年団へは、到着の日だけを連絡したのです。

渾源県が未開放地区であったため、私の活動には外国人旅行証が必要だったのですが、山西省青年連合会は1週間しか準備していませんでした。イヤがらせのようなものです。あとになって、「農村に長く滞在したがるなんて、なにかべつの目的があるのではないかと疑われたんですよ」と関係者が教えてくれました。スパイにしては、あまりにトンマだったでしょうね、私なんか。

最初のあいだは、両方で神経質にならざるをえなかったんです。すれちがいも多かった。その10年以上も前から、中国では「改革開放」政策がとられていたんですけど、内陸の山西省あたりでは、その進行はノンビリしてたんです。外国人と接する機会も少なかったでしょう。10年後のいまから考えると、笑い話のようなことがたくさんあったのです。

## NO. 109 旱魃、ああ厳しい旱魃！ 2001. 06. 29

数回つづけてのんびりと昔話をしているあいだに、現地ではたいへんな状況が発生しているようです。私たちのカウンターパート、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長からつぎのファクスが届きました。日本でもしばしば報道されている華北の旱魃についての問い合わせにたいする返事です。

「ことしの旱魃状況についていえば、早くから私はあなたに話そうかどうか考えていましたが、あなたに心配をかけることを恐れて、これまで黙っていたのです。ことしは中国の華北全域が深刻な旱魃で、すでに100日以上も雨らしい雨がありません。大同は春から6月中旬まで、雨はほとんど降りませんでした。

ここ数日、雷雲がかかり、雨が降りましたが、わずかなもので、土の表面が湿っただけです。旱魃の期間は、1990年以降、ことしが最長であり、被害の範囲も最大です。あのひどかった1999年に比べても、ことしのほうがより深刻です。99年は「後旱」で、夏になって旱魃になったのですが、ことしは「前旱」に加えて「後旱」で、ずっと雨が降らないのです。そのうえ高温がつづいて、風砂も頻発しました。100年に1度あるかないかの悪天候でしょう。

ことしの春、大同市の県と区で、大部分の畑は種を蒔くことができませんでした。旱魃の深刻なところでは、農民は土地を耕そうとしません。そういうところでは、雨がないうえに風が強くて、畑は乾ききっています。もし耕して肥料をやったりすれば、もとの土壌水分まで、風に吹き飛ばされてしまいます。それを恐れて、大面積の畑が耕されもしませんでした。作物が植えられていないのはいうまでもありません。

関係方面の推定では、大同市で旱魃の被害のある耕地は23.3万haに及び、うち10.8万ha

は種を蒔くこともできませんでした。(大同市の全耕地面積は 35 万 ha＝訳注) 旱魃は、虫害の大発生と直結しますし、生活用水の不足を激化させます。

趙家窩ダムは大同の市区に生活用水を送る水源ですが、全容量は 8,563 万立方 m で、ふだんは 700 万～1,000 万立方 m の水があるのに、いまあるのはわずか 10 万立方 m です。ダムの底のわずかな水で、灌漑と都市の水をまかなおうとするのは、アラビアンナイトの夢物語です。この旱魃は 10 数万の人間と 3 万頭以上の家畜の飲用水に深刻な問題を引き起こしています。村によっては、人と家畜の飲み水の源が涸れ、村人たちは 5km 以上も離れたところまで水を求めて通っています。

山もまた、深刻な旱魃とイナゴ・バッタの害にさらされています。私たちの植樹の活着率も、ことしは多くを期待できません。この数日、技術部の老侯が点検に回っていますので、結果がでしだいにお知らせします。

今朝、郜向華書記と私は、市の水資源弁公室を訪ねて、環境林センターの井戸掘りについて相談しました。市の水資源弁公室は、原則的には私たちの井戸掘りに同意し、あわせて水資源管理費を減免してくれるということです。しかし、まだ、市長の批准をえないといけません。明日は、市長を訪ねて、水資源管理費の全額免除を頼もうと思っています。あらゆる手をつくして、井戸掘りの問題はできるだけ早く解決したいのです」。

大同がどういう状況におかれているか、これでおわかりだと思いますが、新しい読者のために、すこし解説をつけましょう。1999 年の旱魃では、35 万 ha の耕地のうち 60% 近くにあたる 20 万 ha で収穫がゼロでした。全市の農業収入は、平年の 82% 減になったといえます。5 分の 1 もなかったということです。

あれほど悪かった年は、私もみたことがありませんでした。丘陵の上のほうの畑では、トウモロコシの丈が、遠田宏顧問のヒザの高さしかありませんでした。遠田さんは雄しべの状況をみながら、「花粉ができていませんから、実はなりませんよ」といっていました。キビも、穂はでも、皮としいなばかりでした。

ジャガイモは背丈が 20cm ほどしかないのに、それでも時期になると花をつけました。秋の収穫時期になっても、ついているイモはビー玉くらい、大きなものでもピンポン玉ほどで、てのひらに 10 個以上も並びました。その 99 年よりひどいというのは、ちょっと想像もつきません。

イナゴやバッタの大発生は、旱魃の年と重なるようです。97 年がそうでしたし、99 年もそうでした。イナゴやバッタはもともと大量のタマゴを生みます。そのタマゴは、雨が降って湿気が高いと、腐ったり、カビが生えたりして、孵化しなくなります。ところが乾燥にはめっぽう強いんだそうです。旱魃は、発生にとっての好条件なんですね。

早魃の年は、草など植物が少ないので、作物や植えた樹木に集中してくるんですね。アブラナなどが葉をかじられてスジだけになっていましたし、私たちの植えたヤナギハグミ(沙棘)やマツの苗まで、大きな被害をだしました。1平方mあたり600匹という現場をみたことがあります。草原に足を踏み入るとザワザワッと動くんですね。まだ小さな虫でしたが。

大同の市区には100万人の人がいます。趙家峯ダムの水に頼っている人も、少なくありません。いま残っている10万tを、仮に100万人で割ると、1人あたりわずか100リットル。ドラム缶の半分です。

7月12日から大同に行く予定になっているのですが、いったいどうなっているのか、怖くなります。武春珍所長は、高見の軟弱ぶりを知っていますから、こういうことを知らせたら、こなくなると思って、これまで内緒にしていたのかもしれない。たったそれだけしかないのに、中国人の何倍も水をつかう私たちがいてもいいものか、とも考えてしまいます。迷信だなんていわないで、私も雨乞いをしたい気持ちです。

## NO.110 買いもの袋で現金を運ぶ(?) 2001.07.03

緑の地球ネットワークの協力事業が、初期に急速に拡大した原因の1つに為替レートの変動があります。この活動を開始した92年ごろは、1元=26円前後でした。その後、急速な円高がすすんだんです。

ところで、中国の通貨単位が「元」であることをご存じの方は多いと思います。中国のピンイン(発音記号)で書けば、yuan(ユエン)ですね。「元」は新しくつくられた「簡体字」で、もとの繁体字は「圓」(yuan)です。日本の「円」のもとの字も「圓」です。

「圓」の字が、日本では「円」、中国では「元」になりました。中国には「円」の字はありません。たいていの中国人は「円」の字をみても、意味がわかりません。「元」のもとの字が「圓」だと知っている日本人も少ないでしょう。ですから、さっきの「1元=26円」を古い字体で書けば、「1圓=26圓」となって、おかしいことです。でも一般には、「円」の表示は日本円、「元」は中国の通貨単位、ということで通るようです。この通信でもそうしています。

さらに混乱させることになりませんが、90年代初期の中国貨幣には、外貨と兌換できる外匯兌換券と、一般の人民幣とがありました。一般の人民幣は外貨に兌換できませんから、事業や海外旅行などで外貨の必要な中国人は、外貨や外匯兌換券を手にいれたいわけでした。外匯兌換券だと、友誼商店その他で輸入品を購入できるというメリットもありました。

そこに闇の市場が成立します。大都市では、闇の両替屋が続出しました。外国人を追いかけでは「換錢！ Money Exchange!」と叫ぶわけです。高いときには外貨は正規レートの2倍にもなりました。外貨である日本円は、通常は1元=26円であるところを、1元=13円のレートで人民元に変えられる、ということです。

でも、闇の兌換は中国の法令で禁止されていますし、リスクを伴います。個人がお小遣いを換えるくらいならともかく、公のお金をそんな危険にさらすわけにはいきません。国民のふところから外貨を集めるためでしょうが、そのうちに、中国人だったら、特別のレートで外貨を人民元に兌換できるようになったんです。闇市場ではなく、銀行の窓口です。でも、大同ではそんなことはできない。

寄附などで集めた善意のお金ですから、なるべく生かして使いたいじゃないですか。農村で木を植えるのに、外匯兌換券である必要はないんです。中国人の友人に外貨(米ドルのトラベラーズチェック)を渡し、まずは米ドルのキャッシュに換え、さらに人民幣に換える、という手のこんだことをしてもらいました。それによって金額は2倍ちかくになったんですね。ストレスではあっても、違法とはいえないはずですよ。

100元札で買い物袋いっぱいになった人民幣を、どうやって大同まで運ぶかが問題です。日本大使館に電話で問い合わせたら、「銀行送金は手数料が高いし、トラブルが多いですよ。自分で運ぶリスクと、どちらをとるかということでしょうね」なんて返事です。よし、自分で運ぼう、と決めました。

その事情を話すと、いつも北京でお世話になっていた女性が、「それは危ないです。とくに軟臥のコンパートメント(1等寝台)が危険です。どうしてもというのなら、これをもっていきなさい」といって、少数民族地域でおみやげに買ってきたナイフをだしてくれたんですね。「いや、お金はともかく、命までなくしたくないんで……」といって、それは断りました。

そのときは結局、コネを使って、公安関係の学校の会計に頼んで、その経費で、大同の口座に送金してもらいました。少しお礼を渡して。

ちょっとした錬金術だったんですけど、その翌年には外匯兌換券そのものが廃止されました。そして一律に1元=13円ほどになったんです。2年ほどで、円の価値が2倍になったわけです。それから円高がつづき、1元=10円にまでなりました。1ドル=80円の時代だったのでしょうか。そういうときは、このしごとはラクだったですよ。

逆に円安にむかうときは、ほんとにつらいんです。なんとか必要な資金を集めたと思っても、人民幣に兌換したとたんに、大きく目減りしている。1年に30%も円安がすすむ、なんてときは、苦しかったですね。いまでも円安で、1元=15円になっています。

日本から大同への銀行送金も試みました。大同市青年連合会の銀行口座は、払い戻しが1日1,000元までに制限されているというので、私個人の口座を開き、日本から振り込んでもらいました。10日ほどたって中国銀行の支店にいくと、「お金は届いたけど、日本の銀行が暗証番号をまちがえたので、いまその確認をしている。数日間は現金化できない」というのです。

「じゃあ、その事情を書いて証明書をだしてちょうだい。おかげで私は損失を被ったから、帰国後、銀行に損害賠償を請求する」といったら、相手はあわてはじめ、やがて「いや、まちがえたのは中国の銀行だ」と言いだしました。それでもその日はお金を受け取れませんでした。

数日後にまた訪れると、こんどは、現金化にあたって手数料が必要だというのです。口座を開設するさいに、その点は確認しておいたのです。必要ない、ということでした。ところが、いざ、その場になると手数料がいる、という。同行していた青年連合会の常健民が「だめだ！」と、一喝したんです。体育大学の武術科をでた、体重が100kgを超えるゴツツイ男です。銀行の窓口は、一転して、不要だといいました。「オレのおかげでもうかった」と常健民はジマンするのですが、それでコロコロ変わる銀行は困ったものです。これはしばらく実用にならないな、と思いました。

それから数年、トラベラーズチェックのお世話になりました。日本円より米ドルを経由したほうが交換率がいいというので、そのようにしました。ときには1000万円近くになりますから、100ドルのチェックでも、銀行の窓口で何百枚もサインしないといけないんですね。まるまる半日はかかってしまいます。

いつからだったのでしょうか。銀行送金が安心できるようになりました。いまでは翌日に到着していることもあります。振り返ってみると、中国もずいぶんと変わったものです。初期のあのような苦労は、新しい人にはわかってもらえないでしょうね。

朝日新聞東京本社の鈴木暁彦記者からEメールがいまはいりました。橋本紘二さんの写真集「中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと」が刊行されたという記事が、きょうの朝日新聞夕刊(東京)に掲載され、アサヒコムにも載っている、とのこと。

\*\*\*\*\*

写真報告 『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』(橋本紘二著)

東方出版/A4判・208ページ/6000円+税/日本図書館協会選定図書

## NO.111 深刻な「水土流失」 2001.07.12

この活動をはじめた年、1992年の秋はずっと渾源県に滞在していました。しなくてはいけな

いこと、というのは、なかったんです。大同にいるときも、しごとに追いまくられているいまとは大ちがいです。人間関係はできてないし、言葉はわからないし、なにかをしようと思っても、できるはずがありません。農村をブラブラしながら、いろいろなものをみて、少しずつ理解を深めていたんです。いまから考えると、これが最高によかった。

たまに、公共汽車(バス)に乗って、大同の市街地まででかけます。電話は何時間か待てば渾源でも通じるんですけど、ファクスを出そうと思うと、大同の郵便局にいくしかありませんでした。片道 70km ほどで、料金は 2.7 元(当時は 1 元=26 円)です。両側の景色がすごいんですね。窓ガラスに顔を押しつけて、ずっと見ていました。たった 2.7 円で、こんな景色を見せてもらっていいんだろうか、と思ってたんです。そんな私を地元の人はふしぎそうにみえています。

途中に三嶺村があります。峠にある村で、村のちょっと上から周囲をみると、ものすごい光景が広がっているんですね。遠くにみえる山には樹木がありません。山腹も丘陵も、耕せるところはどこも畑になっています。段々畑の等高線が渦巻きのようにみえて、ほんとにきれいなんです。そして、夏の雨によって刻まれたガリ(浸食谷)があります。

村の住居は土の窯洞(ヤオトン)です。村のはずれに狼煙台があることから、その後、ワーキングツアーのメンバーは「のろし台の村」と名づけました。「まるで夢の国です。もうなくなっているかもしれません」なんて、NHK のラジオ番組で久保さんが話しましたが、そういう村はほかにもたくさんあります。

三嶺村と二嶺村とのあいだの浸食谷もすごいんです。「小型のグランドキャニオンですね」という人もいます。92 年の秋、私が惹きつけられたのも、この浸食谷でした。予備知識の乏しかった私には、原因が理解できなかったですね。

4 月にでた橋本紘二さんの写真集、『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』の、あのタイトルは妥協の産物で、橋本さんは『浸食大地』と名づけ、それにこだわっていました。あの光景をみたら、そう印象づけられるに決まっていますよ。深さ 100m 近い浸食谷がいたところにあるなんて、日本人は想像もできないでしょう。

なんて書いたんですけど、その浸食谷をよく知っている日本人がいるんです。当時は「地隙(ちげき)」と呼んだんですって。蘆溝橋事件で日中戦争が全面化したあと、すぐに展開されたのが「山西作戦」でした。中国では「三光作戦」、日本側では「儘滅作戦」と呼んだ激しい戦闘が、ここで展開されたんです。当然、中国側の犠牲も深刻だったんです。そして、日本軍が悩まされたのが、「地の隙間」から突然でてきて、追いかけると消えていくゲリラの攻撃だったそうです。従軍した日本人から、その話をききました。

戦争なんだから、どっちもこっちだ、という人がいます。国を守るために命をかけた人に感

謝するのは当然だ、という人もいます。人気の総理がでてから、そういう声が強まっているようです。でも、考えていただきたい。あの戦争がどこで戦われたか、という単純な事実をです。中国の農村で戦われ(もちろん都市もありますけど)、たくさんの被害を残したんです。日本が出ていくことがなかったら、そんなことはなかった。そここのところをはっきりさせておくことが、日本じしんの今後のために、とてもたいせつだと思います。

話を戻します。あの浸食谷をつくるのは、夏の雨なんです。雨が浸食するんです。年間降水量 400mm 前後のうちの 3 分の 2 は、7~8 月に集中します。そしてその降り方がひどい。狭い範囲で、どしゃぶりになるんです。霊丘植物館での観測でも、2 時間で 70mm 降った記録があります。でも、夏の雨は夜間が多くて、なかなかビデオや写真になりません。

中国の発表によると、黄河に流れ込む土の量は 1 年に 16 億 t だそうです。その 80% が黄土高原の土だといいます。16 億 t って見当がつきます？その土で、幅 1m×高さ 1m の土手をつくるとして、延長がどれくらいになるか、計算してみました。なんと、4 万 km ある赤道の周囲を、27 周もしてしまうんですよ。ワーキングツアアのバスのなかで、そういうクイズをだすと、正解者はほとんどありません。

それだけの土を、従来は黄河が海まで運び出していました。黄河に流れ込む土の量は、いまも変わっていないようです。ところが、黄河の勢いが衰えて、河口まで水が届かない。中国では「断流」と呼んでいます。

土は途中の河底にたまる、ということですね。毎年、毎年、堤防を高くしているんですけど、無限に高くすることはできません。もし、広い範囲で大雨が降ったら、どうなるのでしょうか。「断流」を嘆く中国が、黄河の大氾濫を警戒するのはそういう理由からです。

歴史的にみると、黄河はおよそ 100 年に 1 度、河道を大きく変えるような大氾濫をくりかえしてきたそうです。前回は 1855 年でした。その当時の状況にだんだん似てきている、というんですよ。

「森」という字は「木」が 3 つですけど、「木」の左下に「水」、右下に「土」と書かれる人がいるそうです。リコーの集まりで、そのことを教わりました。なるほどな、と感心しました。木は水と土のうえに成立しますし、木があることで水と土が守られるんですね。黄土高原は森林が失われたために、このように水と土が流失してしまいます。夏の雨が、砂漠化を加速しているんですね。

きょう、これから中国にむけて出発します。NO. 109 で書いたように、ことしは華北の広い範囲で、歴史的な大旱魃のようです。北京から華北平原のどまんなかを通過して、大同にはいるコースをはじめて設定してみました。どうなっているか、心配です。

## NO. 112 歴史的な大旱魃 2001. 07. 23

北京から河北省の保定地区をぬけて、7月13日、大同に到着しました。遠田宏さん、相馬昭男さんといった常連のほか、世話人の川島和義さんがいっしょでした。川島さんは準備期からの中心メンバーで、ずっと世話人です。93年夏にはワーキングツアーの団長として大同にきました。今回は、じつに8年ぶりです。そのかんの前進を直接にみてもらえるのは、とてもうれしいことです。

ことしの中国北部は、広い範囲で深刻な旱魃だと、日本でも報道されていました。華北平野の穀倉地帯がどうなっているかみたくて、いつもとはちがうコースを通ってきたのです。車窓からみるかぎり、たしかに作物の育ちはよくはありませんが、私にはそれほどのことと思えませんでした。

車はまもなく太行山脈にはいりました。山脈の東側は河北省、西側が山西省です。その境で風景は劇的に変わるんですよ。山脈の東側はまだ水気があり、作物や木も育っているのに、山脈の西側は乾ききっていて、樹木は少ないし、作物のできもはるかに悪いのです。遠田さんが、「たんに緑化を成功させるんだったら、東側でやるべきでしたよ」といって苦笑いしました。

大同では最初に靈丘県にはいり、そこで3日ほど活動したあと、北部の大同県、陽高県などを回っています。鳥肌のたつような、恐ろしい光景です。耕作をあきらめて放置された畑が広がっています。丘陵や山腹の斜面の畑はほとんどそうだといいでしょう。カウンターパートの武春珍所長の話では、大同の耕地面積の3分の1に達するとのこと。種はまいたものの、まばらにしか生えていない畑もたくさんあります。

夏のこの時期は、黄土高原がつかのま緑の衣をまとう時期です。高台に立って周囲をみれば、濃淡の差こそあれ、全体が緑に見えるはず。ところが今回は、ごく一部を除き、乾ききって白っぽい黄土色一色です。「春の光景といっしょですね」。だれもが同じ言葉を何度も口にしました。

トウモロコシやヒマワリは、本来ならこの時期、人の背丈を越えていないといけないのに、ヒザの高さまでもありません。葉がしおれてきており、なかには枯れて茶色になったものもあります。ジャガイモ畑でも、緑の割合はほとんどなくて、地面の色が大部分です。これでは収穫は期待できないでしょう。灌漑が可能な一部を除けば、全滅といっていいいでしょう。

大同にきてから、水の流れている河川をみていません。どこもカラカラに乾ききっています。北京の水源の桑干河にも、1滴の水もありません。文字通り1滴もないのです。建設中の「カサ

サギの森」の谷底の流れも、10日間ほど、断ち切れてしまいました。

大同県の1月から6月までの月別降水量(mm)はつぎのとおりです。

	2001年	歴年平均
1月	2.8	0.9
2月	2.9	4.4
3月	0.1	8.3
4月	9.7	18.9
5月	4.6	34.4
6月	26.5	66.9
合計	46.6	133.8

黄土高原ではもともと春の雨は多くありません。農民が「春の雨は油より貴重だ」といって待ちこがれるくらいです。年間降水量400mmの3分の2は7~8月に集中します。ところが7月になってもずっと雨がありませんでした。18日の夜から19日朝にかけてやっと44mmの雨が降りましたが、作物にとっては証文の出し遅れです。

旱魃の年の常として、イナゴやバッタが大発生しています。植林地を歩くと、足元からたくさん飛び立ちます。作物の葉がスジだけになっているのをあちこちでみました。市街地にもたくさん進出していると、新聞が報道しています。カウンターパートの事務所にもはいつてくるそうです。アパートの4階の窓まで飛び込んでくるので、電気をつけているあいだは、窓を開けられないそうです。

こんな状態ですから、植林の成績もよくありません。春に植えたものの活着率は、いいところで70%台、悪いところは30%ほどです。いま点検しなおせば、さらに下がっていることでしょう。

勇気づけられるのは、昨年までに植えた苗が、あまり影響を受けていないことです。大同県金山寺のマツは、ことしの春、またぐっと大きくなりました。ずっと小苗を植えてきたので、写真にも写らないくらいだったのに、遠目にも緑がみえるようになりました。渾源县呉城郷のアンズは、ことしもちゃんと収穫できました。春よりはずっと大きくなって、青々と葉を繁らせています。地中深く根を伸ばして、けんめいに生きているのでしょう。

環境林センターの苗畑は、7分のでき、といったところでしょうか。旱魃だけではなかったのです。3月後半に気温が急上昇し、芽が動きだしたところで、4月にまた氷点下に下がったため、凍害がでました。これまでずっと成功し、周囲の苗圃からも見学者がくるくらいだった新疆ポプラの挿し木苗5万本が全滅しました。

原因は気候だけではありません。これまで表面化していなかった技術なり体制なりの問題点が、条件が悪くなるなかで顕在化したのです。一昨日から現場の技術者と日本の専門家とで、そのあたりの問題を検討しています。いつもはなれあっている武春珍所長とも、センターの目的・役割といったところで、激しく衝突しました。

順調にいつているときは、こちらが口をだすことはあまりありません(ほんとかな?)。こうやって問題が発生したときこそ、深く、根本的に、技術体系や体制を改善していくチャンスなんです。ちゃんととりくめば、悪いことはいいことに変わります。そんなわけで、いま私は妙に張り切っています。

あっ、そうそう。華北平野の早魃がたいしたことないように最初に書きましたが、それは私の目が黄土高原に馴れてしまって、その物差しでみた、ということでしょう。あの穀倉地帯の早魃が中国の経済や食糧問題に与える影響は、黄土高原の早魃よりはるかに大きなものになるかもしれません。

#### NO. 113 異質なものとして混じる 2001. 07. 31

村起こし、地域起こしがさかんに論じられた、ひと昔まえのことです。よくいわれたのが、若ものと、バカものと、よそものの参加が大切だということでした。私もそれに共感しました。

国外で国際協力に携わるのも、同じような意味あいをもっています。残念なことに若ものの資格を私は失いましたが、バカものとよそものの資格はりっぱに維持しているわけです。国際協力に従事すると、現地の人との距離をどうとるかが問題になりますが、今回はそれについてです。

同化するのが理想だ、と考える人もなかにはいます。衣食住をはじめ生活の全般を現地の人に近づけようと努める人もいます。この協力活動をはじめたころ、かなりの程度に私もそのようでした。しかしそれは、そうとうにしんどいことです。

農村に泊まると、フロもシャワーもありません。ずぼらな私には、数日間は苦ではないんです。朝夕にちょっとずつ水をもらっても、顔は洗わない、ヒゲは剃らない、歯は磨かない、からだは拭かない、というふうにしていました。地元の人には、マグカップ 1 杯ほどの水で、ていねいにやっているんですよ。

限度は 1 週間ですね。昼間、活動しているときは平気です。夜になってフトンにはいり、オンドルの熱であっためられると、あちこちがかゆくなって、眠れなくなります。シャワーのある県城の招待所まで逃げ帰り、2~3 日ブラブラしていました。

貧しい農家で生まれ育ち、学生のころからむちゃをつづけていたはずなのに、その程度なんです。私なんか、その路線の、まあ、脱落者でしょう。でも、そういうやり方を試みたことは、いまでも役に立っています。ですから、長期間にわたって、農民と同じところに住み、同じものを食べ、同じ立場で話しあい、同じように考えることができる、という人を私は尊敬します。

でも、こういった活動はそれだけではないと思うのです。そこに自分が存在することの意味を見つけ、意味あるしごとをすることが必要なんです。すっかり同化して、地元の農民と同じ存在になっても意味がない。農村は嫁日照りですから、若いむすめだったら歓迎されるでしょうが、私のような中年のオッサンはそれもない。ただでさえ人口過剰の中国の農村で、さらに1人、中国人がふえたとしても意味がないんです。極端な話ですけど……。

ある時期から私は、異質なものとして混じる、ということを意識的に追求するようになりました。地元のことは、地元の人の方がよく知っているわけです。複雑な人間関係、社会関係は、ことばもわからない私なんかにはわかるはずがない。ずっと以前、祁学峰が「中国の農村の奥底のことが、高見なんかにはわかりっこない」といったことがありますけど、そのとおりのことです。また、そこまでわかりたくもない。

でも、地元の人たちは、よく知っているために、それ以上の疑問をもたないことだってあるんですね。さまざまな関係の内部にあるために、動きがつかなくなっていることだって、たくさんあります。そういうときには、事情を知らない、自分の欲をもたない、バカであることに意味があるんです。よそものとしての冷めた目で観察し、問題を発見することに意味があるんです。そして、ときにそれを主張する。

体験を1つ書いておきましょう。1997年になって、大同県遇駕山のモンゴリマツに枯れるものがでてきたんです。原因は不明でした。85年に地元の人たちが大面積に植えたもので、三北防護林＝緑の長城計画のモデルになっているものです。それを視察した小川眞さんから、「拡大する可能性があるから、ちょっと騒いでおいたほうがいいですよ」とアドバイスをうけました。小川さんは菌根菌の専門家で、現地指導にきてくれていたんです。

で、私は北京で林業部(現在は林業局)の副部長に会って、そのことを話しました。副部長は、日本風にいえば次官で、私なんかの会える人じゃないんですけど、北京の友人たちが手配してくれました。私が外国人であることも、プラスしたと思います。

その足で夜汽車に乗って、翌朝、大同に着くと、祁学峰が駅まで迎えにきていました。私の顔をみるなり、「北京でなにをやったんだ。市の林業局になんども呼び出されて叱られている。これからは自由に活動できなくなるかもしれない」というんですね。ホテルに着くと、林業局の幹部たちが待ちかまえていたんです。緊張した顔つきで。まずいことになったな、と私も思

いました。

北京で私が話したあと、国の林業部から山西省林業庁にお叱りの電話がいったんですね。「重要な問題が発生しているのに、どうして報告しないんだ」といって。山西省林業庁は大同市林業局に電話をかけ、同じように叱りつけたんです。大同市林業局では、そんなことをいきなり中央に連絡したのは誰だ、青年連合会が協力している日本人がそれらしい、ということになったんでしょう。

こうなると、あたって砕けるしかありません。私は市の林業局にでかけて、事情を説明しました。むこうは局長以下、幹部が勢ぞろいしているんです。そして省の林業庁の副庁長まで、わざわざ太原からでかけてきました。最初は緊張していたんですけど、そのうちに和気あいあいの雰囲気になりました。

市の林業局は、その後、モンゴリマツの原生地に人を派遣するなどして、原因調査にあたりました。それまで私たちは林業局と連絡がなかったのに、これを機に協力関係ができたんです。そして、林業局を退職したばかりの古参技術者・侯喜さんを、大同事務所の技術顧問に派遣してもらいました。そのことがその後の発展の1つの契機になったんです。

この一事にかぎらず、こういう活動のなかでは、異質なものとして混じる、ということがつねに求められていると、私は考えています。若さがたりないのが残念ですが……。

## NO. 114 農村の日暮れ時 2001. 08. 08

かなり以前のことでですけど、ツアーのメンバーが「中国の農村の人はいつ働いてるんですか？」なんて、真顔できいてくるんですね。ドキッとしました。考えてみると、無理もないんです。

農村が活動的なのは、朝早くと夕暮れ時でしょ。私たちのツアーが県城の招待所に泊まっているかぎりには、接することはできないんです。バスが村に着くころには、農民はひと仕事終えて休んでいます。バスに乗って帰ろうとするころ、彼らはまた野良に出るんです。とくに夏は、太陽の高いあいだは畑に出ません。私がこどものころ、日本の農村もいっしょでした。

1 晩でもいいから農村にホームステイできないものかというのが、私の念願でした。大同事務所の奔走で、数年前からそれが実現したんですけど、受け入れる側の負担はたいへんなものです。部屋に余裕のある農家なんて、ないんですね。1室をあけるために、家族の一部は親類や友人の家に泊まりにいきます。事故でもあったらたいへんだと、公安を含めて、何人もの幹部が寝ずの番をしてるんですよ。まあ、回を重ねるうちに慣れてきて、多少は緩和されつつあるんですけど。

8月3日の夜、富士ゼロックス端数倶楽部のツアーが、大同県中高庄村の農家にホームステイしました。夕食前のちょっとしたあいだ、自分1人で村はずれにしてみました。ちょうどいいころあいだったんです。あちこちの畑から、中耕のクワをかついで、帰ってくる人がいます。ロバの引く馬車に乗って帰る人もいます。「ニイハオ！」って声をかけると、不器用で素朴な笑いが返ってきます。

村外れに脱穀場があって、150坪ほどの土地が平らにならされています。こどもたちのかっこうの遊び場です。小学校低学年の男女が10人ほど、歌うように声をかけあいながら、なにかのゲームをしています。ずーっと観察していたんですけど、ルールはついにわかりませんでした。仲間入りもできません。

おばあさんが1人やってきて、「〇〇！ 〇〇！ ごはんだよ！」と叫びますが、当の男の子は「帰らない！」とひとこと。まだ遊び足りないのでしょうか。「食べさせないからね！」とおばあさんがいうと、男の子は「食べなくていい！」なんて答えます。目の前の現実なのか、私じしんの幼いときの記憶なのか、混乱してくるくらいです。それでもそのグループは、1人欠け、2人欠けして、最後は1人もいなくなりました。

つぎに現れたのは、中学生くらいの女の子をリーダーとする、これも10人ほどのグループです。年齢層がバラバラで、ちっちゃい子は3~4歳くらいでしょうか。まだ足元がちゃんとしていません。こんな光景が日本で消えたのは、いつごろなのでしょうね？

西のほうをみて、びっくりしました。並木のポプラのあいだを、真っ赤な、大きな太陽が、地平線に沈んでいくところでした。ほんとに真っ赤なんです。そして大きい。これほどの夕陽をみるのは、日本ではもちろん、中国でもはじめてです。あわててツアーの人たちを呼んでみると、まだ半円が残っていました。

「すごいですね。大感激ですよ！」とみんないいます。そのうちの1人が「あんなに雲があるのに、どうして夕陽がみえるんでしょう？」ときいてきました。「雲の下に太陽があるからですよ」って答えましたが、もちろんじょうだんです。ふしぎですね。それまで意識しなかったのに、突然、夕陽がでてきたのは、地平線に近づくまでは雲にかくれて見えなかったということでしょう。理由をご存じの方は教えてください。

翌朝も同じ現象があったんですよ。地平線を太陽が昇ってきたんです。そうだ、ビデオに撮ろうって思って、カメラをむいたら、雲にかくれて、もうみえないんです。

夕方の話に戻します。知らない人がきいたら、ギョッとするでしょうね。ロバの啼き声です。中国語の先生で、バードウォッチングが趣味の池本さんに擬音化を頼んだら、しばらく考えた

あとで、「でてこない！」とあって、洗面にいつてしまいました。もの悲しげで、聞いているだけで息苦しくなるような啼き声です。放牧に連れ出されていたヒツジが帰ってきました。放し飼いのニワトリも小屋にはいり、しばらくは羽音をたてていましたが、やっと静かになりました。

夕食のさいに、ホームステイ先のアルジに白酒(パイチュー)をすすめたんですけど、いやいや口をつけただけで、いくらすすめても、飲もうとしません。ビールも。たいていのばあいとは逆です。そして「受苦的人(プロレタリアート)はこんなものは口にしない」なんていうんですよ。のんびりしたことを書いてきましたけど、夕食のときに彼が話したことは、ものすごく深刻なことでした。たとえば、大早魃がもたらした村内の矛盾です。それを書くところがう話になってしまうので、べつの機会にしましょう。

翌朝、5時に目を覚まして、部屋をでると、カミサンが朝食のしたくをしていました。アルジは野良にでて、黄花菜のつぼみを採っているそうです。黄花菜というのは、ユリ科キスゲ属、エゾカンゾウと種が同じだそうです。ユウスゲにもよく似ています。花が咲く前のつぼみを食用にするんです。この県の特産で、輸出もされており、最近では日本でも「百合の花」としてスーパーに並ぶようになりました。一家総出で採取しているようすをビデオに撮りました。モデルがとてもよくて、いい絵になったんですけど、今年度中に制作するつमりの新しい作品にいれる余地があるかどうかはわかりません。

## NO. 115 大同側の10年の(仮)総括 2001. 08. 17

8月12日夜に中国から帰ってきました。以前から約束のあった原稿を1本書き、その延長でこの通信を書きました。

日本と中国との緑化協力が拡大しているようです。ODAによるものは、数はともかく、規模と金額において、民間とはケタちがいです。民間による協力も急増しています。日中緑化交流基金、いわゆる「小渕基金」の影響が大きいです。ただ、中国側にとっても、十分な準備があったんじゃないんです。受け入れ側として、期待と不安がいまでも入り交じっているようです。

大同における10年の経験は、中国側でも注目されているんですね。今年の4月、中日緑化協力をめぐる全国規模の会議が開催されたそうです。会議の正式メンバーではないのに、大同市青年連合会の祁学峰主席が、2度、発言を求められたそうです。「どんな話をしたんだ？」と私がきくと、「急にいわれて、思いつきを話したただけだ。メモも残っていない」といいながら、その要点を話してくれました。以下は、私の要約です。祁学峰の話は「～である調」、地の私の文章は「～です～ます調」で書くことにします。

「最初の場では、出席者の参考のために、自分たちの経験と基本状況を話した。結論として出したのはつぎの4点だ。1) 専門の組織を必ず作るべきだ。大同のばあいは緑色地球ネットワーク大同事務所である。そこで資金管理、技術指導、接待などの仕事を専門的に実行している。緑化事業は一時のセレモニーとはちがって、期間が長いし、内容も複雑である。青年団のばあいは人事異動が早いので、そのような組織がないと事業を継続できない。

2) 緑化のための基地をつくるべきである。それによって造林活動のためのモデルをつくることのできるし、現場の造林とそのためのもやしとを結合することができる。さまざまな試験をすることができるし、人材の育成、技術の向上にも欠かせない。

3) 造林プロジェクトは集中したほうがいい。大同では、最初の数年、プロジェクトの数が多すぎ、場所も分散しすぎていた。人手が足りなくて、管理がたいへんだった。規模についても最初から大きすぎるのはよくない。最初は小さめにスタートして、経験を積んでから拡大するのがいい。

4) 管理が重要である。「植林3分管理7分」というが、それは事実である。問題の多くは植えたあとの管理にからんで発生する。失敗の原因を探ると、技術上の問題と管理上の問題に分けられるが、多くの問題は管理にある。

2 回目の発言も突然、事前の予告なしに求められた。日本側とどのように協力していけばいいか、みなに関心がそこにあったので、それについて話した。

1) 誠実(真誠)につきあう。双方の関係は平等であるべきだし、自分の本当の気持ちでつき合わないといけない。形式的なつきあいをしているだけでは、いつまでたっても相互の理解が進まない。誠実につきあうということは、協力関係全体の基礎である。

2) バランスをとる。協力する双方の関係は、車の両輪の関係である。置かれている立場はちがうのだから、当然、自分の主張はすべきである。場合によっては激突、ケンカも必要になる。しかし最後には、相手の立場をも理解しあい、バランスをとる必要がある。いい関係をつくるカギは、バランスにあると思う。

3) まじめに仕事をする。仕事はまじめにしないといけない。馬馬虎虎(マーマーフーフー・いいかげん)ではいけない。これは態度の問題である。

4) 苦勞を厭わない。苦勞を厭わず、農村の現場に行く必要がある。事務所の机の上、紙の上だけで仕事をしてはいけない。これは精神の問題である。

この4つを実現できたら、合作は成功できると思う。」

きわめて簡単にまとめましたが、私も全面的に賛成です。というより、これは私じしんが心がけてきたことでもあります。もちろん、十全にやれたとは思っていません。でも、心がけてきたのは事実です。それにしても、よくぞ、これだけ簡明にまとめたものだと思うんですよ。思いつきだなんて彼はいいましたけど、あとの発言なんか、基礎、カギ、態度、精神というふうに、それぞれに段階までつけてあるんですね。

この10年間、私は毎年100日は大同に滞在しています。そのうちの4年半は、祁学峰が大同側の現場責任者で、私が大同滞在中、ほとんど24時間、いっしょに行動していました。毎日のように農村を歩き回り、じつの兄弟以上に親密にしてたんです。でも、周囲がびっくりするくらいの衝突を何度かはやったんです。それをやりきったから、深いところでお互いに理解しあえたと思うんですよ。環境林センターの初代の経理、邢雁俐が、「祁学峰とあわなかったら、高見はつづけてこれなかった」といいますが、おそらくそれは事実でしょう。

私もこんなことを話したものです。祁学峰と私とは兄弟みたいなものだけど、年齢からいっても当然、私が兄貴です。たいていの家庭では、弟のほうが兄より賢いことが多いでしょ。くやしいことに、私たちのばあいも、弟が兄貴より賢いんです。なんてね。祁学峰も、まもなく青年団を卒業するようです。つぎに大同に行ったら、彼はべつの部署に移っているかもしれません。

大同側の責任者として、この協力事業の10年の総括をしてくれるよう、彼に求めました。骨子はすでに彼の頭のなかにできていると思うんですよ。いつも繰り返し考えているから、とっさのばあいにも、ちゃんとまとまった話ができるんです。彼はそれを約束してくれました。私も私じしんで、この活動の中間総括をだす時期がきているようです。

## NO. 116 歴史的な大旱魃(2) 2001. 08. 22

大同に1か月滞在したあと、北京経由で帰国しました。大同ー北京の列車は、今回は日中のものを利用しました。記録的な大旱魃のようすを、車窓からだけでも広い範囲でみておきたかったからです。ひどいですね。今回、実地に見てまわった大同県、陽高県もひどいんですけど、その東の天鎮県が極端に悪かった。ほかの県では、山は多少なりとも緑っぽく見えてたんですけど、ここの山は春とまったく同じで、黄土色一色とっていいんです。

NO. 112で、大同県の月別降水量を乗せたんですけど、あの数字はあくまで大同県の県城で観測した数字だと、限定して理解してください。もっと少ないところも、もっと多いところもあります。当然のことですが。山ひとつ越えると、雨の降りようもまったく変わるのです。大同市南郊区の環境林センターでは、7月24日の日中、40分間で46.3mmの降雨がありました。ものすごいものでしたよ。私は雨具を着て、ビデオの撮影に飛び出しました。躍り上がって、喜

びたいところです。

雨がうれしいのはもちろんですが、大同に10年通ってきて、本格的な夏の雨を撮影したのはこれが初めてです。雨の降るのはたいてい夜で、たまに日中に降っても、街中にいたのでは使える絵は撮れません。96年夏、1度だけ天鎮県の浸食谷のそばで、激しい雨に見舞われたのですが、運転手がパニック状態になったため、車を停めて撮影することができませんでした。そのときはまだ、チャンスはいくらでもあると思っていたのですが、この日までなかったのです。

環境林センターではそれほどの雨だったのに、30kmほど離れた「カササギの森」では、この日、5mm弱しか降りませんでした。7月30日、ツアーの人たちと一っしょにカササギの森に行くと、西の空に雲がかかり、稲妻が光りました。その雲から下に、雨の降っているのが黒いカゲのようになって見えるんですよ。私たちのいるところは晴れているんですけどね。広靈県の水神堂の壁画に、龍神の部下がジョウロのようなものを持ち、雲に乗って、雨を降らしに行く場面が描かれています。ああいう絵が描かれる理由がよくわかりますよ。

問題をややこしくしているのが、人工降雨です。雲がかかって、雨の降る条件ができると、雨の核になる物質を打ち上げるんです。おそらく沃化銀あたりでしょうけど、環境林センターで雨が降ったとき、ポツリポツリときたと思ったら、ドーン、ドーンという音を何発もききました。あの日は北京、天津が大雨で、飛行機の到着が大幅に遅れたくらいですけど、そのさいも人工降雨をやったそうです。

話を車窓の光景に戻します。天鎮県をすぎて、河北省張家口市の農村部にはいると、一見したところ、旱魃はさらにひどくなります。人の背丈ほど伸びたトウモロコシが茶色くなって枯れています。大同市の天鎮県では、種を蒔くのも、耕すのも諦めたから、なにもないんですね。枯れている河北省のほうが、見た目にインパクトがある。でも本当は、種も蒔けなかったほうが、旱魃はひどいに決まってるんです。

張家口市も東部にくると、かなりちがいます。水田もあって、けっこうよく育っています。それから北京市に入ると、作物も樹木もよく育っているんです。どういうことなのでしょう？何度も何度も、遠田さんが疑問を口にしました。北京に着いてから話を聞くと、今年の北京はけっこう雨が多かったというんですよ。北京、天津で人工降雨による雨が降ったとき、「科学の勝利」という報道があったそうです。

大同では「雲が東から西へ動けば雨になる」といいます。「東の風が雨をつれてくる」ともいいます。西からの風は乾燥してるだけで、雨とは縁がないんでしょう。東からの風や雲が、海洋を起源とする雨をもたらすのかもしれませんが、それが大同にもたらすはずの雨も、北京や天津の人工降雨で降ってしまったんじゃないでしょうね。私は年に100日前後を大同に滞在し、4分の1大同市民を自称するくらいですから、こういう問題にひがみっぽくなっています。

けっこう小さな農村まで、人工降雨のための大砲が配置されているですよ。シートを被っているそれをみて、「ええっ、こんなところで戦争準備をしているんですか？」といったツアーのメンバーがいたくらいです。人工降雨はそれくらい普及しています。もし、それが本当に科学的で、効果のあるものだったら、雨まで、金と権力に応じて集まる、ということになりかねません。

## NO. 117 歴史的な大旱魃(3) 2001. 08. 25

7月下旬と8月初めに2度、大同県・陽高県・広霊県・渾源县という4つの県の境界にある自然林をみてきました。大同市最南部の霊丘県の自然林はこれまで何度もみてきましたが、北部では初めてです。低いところはシラカバが主体、上のほうはトウヒが混じって、さらに上にはナナカマドなんかも生えていました。樹種はけっこう多く、喬木だけでも20種はありそうです。標高は1,700~2,000mですが、自動車道路からちょっと入ったところに、これだけの自然林があるのは驚きです。

旱魃の影響がけっこう出ていたのはショックでした。7月下旬にいったときは、シラカバやカラマツが葉を落とし、枯れているようにみえました。8月に再訪すると、7月に雨が降ったためでしょう、かなりの部分は葉を2度吹きしていました。葉だけでなく、時期はずれの実を着けているシラカバやヤナギもあります。

ヤナギハグミ(沙棘)は乾燥に強いと思っていたのですが、葉を落としたものが多く、一部は葉を2度吹きし、枯れてしまったものもあります。樹木にしろ草にしろ、この地方にあるのは、乾燥に強いものばかりですが、それには2つのタイプがあるようです。1つは根を横に広く張って水を集めるタイプ。もう1つは根を深く伸ばすタイプ。ちょっとした旱魃の年には違いは目立ちませんが、100年に1度というような旱魃では、その差が明瞭になるようです。草でいえば禾本科(イネ科)のものは前者が多いようで、大部分がしおれるか、枯れるかしています。ヤナギハグミもおそらくそのタイプでしょう。

カラマツは、これまで海拔1,500m以上のところで問題なく生育していました。かなりの期待をかけていたのです。ところが今年は葉を落とし、もう1度、新しい葉を出したものが多いのです。それが来年春から新しく伸びる冬芽の形成に悪影響を与えないか心配です。

その一方で、これほどの旱魃にビクともしていないものがあります。その典型が、マメ科のムレスズメ(樺条)です。葉は青々と茂り、よく伸びています。たいていの草木は、実をつけたとしてもシイナが多いのに、これは充実した実を着けています。雨が降ったあと、小さな穴を掘って、ムレスズメの種を蒔いておけば、2~3日後にはりっぱに発芽します。

マメ科のムラサキモメンヅル(沙打旺)の種を、カササギの森で蒔いたところ、種と発芽を鳥とウサギに食べられてしまいました。ムレスズメはその害もないのです。どこでも多用されるようになりました。灌木に関心が向くのは悪いことではありませんが、いいとなると1種類に集中するのも困りものです。

北京の水源である桑干河がカラカラに乾いていることは、NO. 112 に書きました。冊田ダムも恒山ダムも、水が激減しています。大同市街地の生活用水をまかなってきた趙家窑ダムを8月9日にみてきました。計画貯水量は3,000万トンで、少ないときでも700万トンはないといけないそうですが、ことしは10万トンを切ったそうです。直前に降った雨のためでしょう。私たちがみたときは、多少は水が増えたようです。黄色く水が濁っていましたし、水没している青草もありました。

でも、7~8月はこの地方の雨期で、しっかり貯水しないといけない時期です。ところが水はほんのわずかで、しかも水際には巻き貝の死骸が浮き、ガスが発生しています。水量が減り、水の動きが停まったために、腐ってしまったのでしょうか。旱魃の影響はことしだけにとどまらず、来年にも悪影響を与える可能性が大です。

農業生産はガタ落ちです。99年の大旱魃のとき、大同市の農業生産は82%減だと地元の新聞が報道していましたが、それより今年はずっと悪いでしょう。旱魃の特徴は被害の範囲が広いことです。地元紙『大同日報』は、農民の出稼ぎを地元政府が奨励していることを紹介し、「自力自救」を呼びかけています。貧しい村ではもともと若い男の姿は少ないのですが、ことしはとくにそれを感じます。北京などの市民は、流動人口の増加と治安悪化を結びつけ、警戒していますが、地方の農村にはそれなりの事情があるのです。

村でも矛盾が深刻化しています。2つの村で泊まる機会がありましたが、2軒とも、水道の水が出ませんでした。水道があるくらいですから、水には恵まれているほうです。1つの村では、低いところにある家が水を使うと、上の家では水がでなくなるとのことでした。もう1つの村では、隣家が吸水ポンプを使って、水道の水を家庭菜園の灌水に使うため、もう2か月も水がでないといっています。

ある家では、人間の食糧は今年の冬はなんとかもつだろうけど、家畜に食べさせるエサがない、夏のこの時期さえ草が乏しいのに冬を越させられるだろうか、とあって心配していました。業突張りの家はロバまで業突張りだ、うちの畑のアワを食った、と文句をいっている人もいました。収穫の可能性があるとは思えないアワやジャガイモの畑にはいって、農民たちは中耕をしています。まだあきらめたくないのです。あきらめるわけにはいかないのです。よその家畜が食べたりしたら、ふだんの年以上に腹が立つのでしょうか。

それらの話がどこまで本当か、たしかめてはいません。仮に事情がよくわかったとしても、私たちが介入すべきではないと思っています。農村の人と人との問題は、理解の能力を超えています。外部の人間が介入することで、矛盾がさらに激化し、解決がむずかしくなることは避けたいのです。

日本に帰ったあとも、あのあと雨が降っているかどうか、ずっと気がかりでした。大同市南郊区の環境林センターのデータが送られてきましたので、それをみてみましょう。まずは1月から6月までの月別降水量はつぎのとおりでした。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
7.3	3.5	0.0	35.3	4.2	23.6(mm)

ここまでの合計は73.9mmしかありません。7月にはいって3日、18日、24日と3回に分けて、79.3mm降り、ここまでの合計は153.2mmでした。

8月も、私たちが帰る11日まで雨はほとんど降りませんでした。1990年ごろまでは、8月も後半になると降雨はほとんどありませんから、ひよっとすると、200mmを切るなんてことがあるのかもしれない、と懸念していました。そんなことになったら、観測史上初めての少雨です。

ところが8月後半になって、雨が降り出したようです。

16日	31.8mm、	19日	74mm、	22日	18mm
-----	---------	-----	-------	-----	------

その合計は123.8mmにたっします。すると、年初からの合計は277mmになりました。これだと、一般的な雨の少ない年ですし、これからもおそらく降るでしょうから、300mmを超すことでしょう。100年に1度といわれる大旱魃が、年間の降水量では、平年とさして変わらない、ということにもなりかねません。

1990年代にはいって、降水のパターンに顕著な変化がみられました。4~6月の雨が顕著に減り、8月後半から10月の雨が増えてきたのです。年間降水量には大きな変化はないのですが、雨の時期が2週間から1か月、後ろにずれることで、地元の農業は深刻な打撃を受けました。21世紀の最初の年は、このところの傾向がもっとも端的に現れてしまったようです。

## NO. 118 ガオジェン(高見)は中国が好き？

この10年間、年に100日前後も私が中国に、しかも黄土高原の貧しい農村に滞在していると聞いて、たいていの人々が「高見はよほど中国が好きなんだな」と誤解します。日本人だけじゃないんです。大同の青年団の連中だって、そうなんです。

話の流れで、「ガオジェン(高見)は中国が好きだから……」といわれて、私は嘔みつきました。「え〜っ、だれがそんなことを決めたんだよ？おれはね〜、日本の鳥取県ってとこの農村で生

まれ育ったんだ。海はすぐそばだし、大山って山もすぐ近く。海は青いし、山は緑なんだよ。想像できるかい？そんなところに生まれ育った人間が、こんな茶色一色の自然を好きになれると思うの？」。相手はとまどいます。

「それからさあ、この社会。セミばかりだろ。ジェ〜ニ、ジェニ(銭銭!)、カ〜ネ、カネ(金金!)って、うるさい、うるさい。いないのはミンミン(民民)ゼミだけだ」。こういう言い回しって、通訳不能でしょうね。王萍ががんばって、なんとか説明してくれています。

「それからこの政治……」なんていうと、あわてて、むこうが「それは絶対にない！」なんて答えます。私にそれ以上しゃべらせては危ない、と思うんでしょうね。

去年の春、『世界知識』という雑誌の、すてきな女性記者が、大同まで同行取材してくれました。外交部(日本でいえば外務省)関係の雑誌だそうです。そのときもまったく同じ話をしたんですよ。すると彼女は、記事のなかでつぎのようにまとめました。

「列車が動き出すとすぐに、彼は背負っていたバッグのなかから1本のスコッチウイスキーと紙コップを取り出し、周囲にすすめたあと、酒を飲んで話し、話してはまた飲みだした。『私が中日友好のために木を植えているとか、大同といった土地が好きだからだという人がいるが、それはそうじゃない。私は少しもここがいいとは思わないし、この土地柄、貧乏さ、ひどい天候、どれをとっても好きじゃない』。

いきなりびっくりするような前置きをいわれると、いつもの決まり文句の質問をしなくてよかったと思わざるをえない。彼は私の困惑をみてとり、つづけていった。『私は自分でこようと思ってここにきたんじゃない。彼らが(彼は同行している全国青年連合会の幹部を指さした)だまして私をつれてきたんだ』(「黄土高原だより」(NO.52)に全訳を掲載)。

意味内容はちがっているんですけど、でも、彼女はものすごく頭がいい。私のしゃべったことなんて(しかもアルコールがはいってからの)、中国でそのまま活字にするのは至難なんですよけど、それをクリアしながら、しかも雰囲気はちゃんと伝えているんですね。それを読んで、遠田さんや橋本さんが、すっかり感心したんです。私も舌を巻きました。自分で読むと、ちょっと恥ずかしいけど。

でも、どうしても中国を私が好きになれない理由を端的に言えば、格差がひどすぎるってことです。自然・社会・政治というさっきの3つにもからんでますけど。そして、上の位置を占めた人は、自分より上は(羨望の目で、あるいは批判的に)みるけど、下のことには関心を持とうとしない、ということです。どこの社会にも共通してるでしょうけど、いまの中国はそれが徹底しているように、私には思えます。

とくに農民は、関心の対象外ですね。都市の住民が「ノンミン！」（農民）っていうときの、あの蔑視まるだしは許しがたいと、私は思うんですよ。

そして、環境問題っていうのは、結局のところ、弱い立場の人にしわよせが集中する、それをどうするか、ということだと私は思うんです。中国の環境問題がしんどいと思うのは、問題をもっとも尖鋭に受けとめることのできる弱い立場の人が、発言権をもたないこと。そしてもう1つは、為政者をはじめ、解決能力をもつと思われる人が、弱い立場の人たちに、関心を寄せているとは思えないことです。

会話のあいだにそんなことを考えていると、青年団の若い人たちが私に問いかけます。「だったらなぜ、すきでもない中国に、おまえはなんでもなんでもやってくるんだ？」。う～ん。こまっちゃったな。なぜなんですかねえ？自分でもわからない。

きょう、これからまた、大同にむかいます。あの厳しい旱魃はどうなったのか。農民たちは、どうしているのか。早く知りたいような、見たくないような、複雑な心境です。

## NO. 119 ふたたびセンターの水問題 2001. 09. 10

2001年がたいへんな旱魃であったことは、これまでくりかえし書いてきました。私たちの拠点である大同市南郊区の環境林センターでは、じつはこの夏、それに輪をかけて深刻な問題が発生していたのです。

7月16日、少し遠回りをして私たちがセンターに到着したとき、センターの水道はストップしていました。拡大したセンターの敷地の北東の隅に、深さ120mほどの井戸があります。砒務局の住宅に生活用水を供給するためのものです。大同は炭鉱の街で、中心となる砒務局の住宅には15万人もの人が住んでいます。センターの水道は、その井戸の水を分けてもらっていました。

7月になって、砒務局の住宅で、基準の200倍を超える大腸菌が発見されたため、井戸の汲み上げをストップして、点検作業がはじまりました。私たちの敷地内の井戸で、本管のパッキンが割れていることがわかり、それを修理して給水が再開されました。ところが、それでもまだ大腸菌はなくなるのです。給水はふたたび止められました。

夏の暑い盛りに水が使えないのはたいへんなことです。センターの生活用水は、近くの平旺村からトラックにドラム缶を積んで運んできました。黄土丘陵の水のない村と同じことをするのは、思ってもいないことでした。センターに宿泊するツアーの予定もありましたが、あわてて市内のホテルに変更しました。

これまで水道水を使ってきた温室の灌水も、ドラム缶の水に頼らざるをえません。水やりの回数を減らし、枯らさないようにするのがやっとです。数分おきに自動的に霧を発生するミスト装置をつかって、挿し木をしていましたが、これも完全にお手あげです。

その後の調査で、事態ははるかに深刻なことがわかりました。センターの敷地内の井戸を含め、少なくとも7つの付近の井戸で、地下水が汚染されていたのです。

もともと大同では、地下水の過剰汲み上げによって、水位が急速に低下しています。北京に電力を供給する第2火力発電所や磁務局の付近はとくにひどくて、年に2~3mも低下しており、このままいけば2008年には完全に涸渇するとまでいわれています。

センターの付近は、その一方で、野菜の供給地でもあります。どうしても灌漑が必要ですが、地表水はまったくありませんし、地下水をつかえるわけがありません。ずっと以前から、磁務局の住宅の生活汚水を、ほとんど未処理のまま、灌漑につかいつづけてきたのです。私たちのセンターでも、同じようにしてきました。今回の地下水汚染の原因として、そのことが疑われていますが、はっきりはしていません。そうだとしたら、たいへんなことです。

昨年春、センターを20haまで拡大したとき、深さ79mの井戸が付属してきました。しかし、見た目にも黄色く濁っていて、飲用にはどうも使えません。水量もわずかしかなかく、1日に2時間くらいしか汲みあげることができません。

120~150mクラスの井戸がどうしても必要です。この一帯では新しく井戸を掘ることは全面禁止なのですが、国際協力の重要性を考慮して、市長が特別の許可をくれました。だからといって、貴重な地下水を、むやみにつかうわけにはいきません。センターに小さな浄化設備をつくり、そこで処理した水を灌漑につかう計画を立てました。大阪産業大学の菅原正孝教授がその設計を引き受け、現地に足を運んでくれました。

日本の外務省の草の根無償資金協力の、資金の申請をしたのは、ことしの5月のことです。なんということでしょう。その計画が動きはじめる前に、今回の地下水汚染が発覚したのです。汚水の処理は、私たちが考えていたのより、ずっと意味が大きく、緊急性のあることになりました。

昨日、渾源県の農村を回っているとき、北京の日本大使館から、うれしい連絡がありました。私たちの計画が、外務省で承認されたというのです。予想よりずっと早い決定でした。杉本信行公使をはじめ、大使館の人たちが、私たちの事業を理解し、努力してくださったおかげでしょう。大同側のメンバーも大よろこびしています。できるだけ早く手続きをすすめて、年内にも着工して、来春からの育苗にまにあわせたいと考えています。

## NO. 120 9人の味方と1人の敵対者と 2001.09.20

大同に滞在中に、アメリカの大事件がありました。テレビや新聞でも報道していましたが、市民のあいだでも話題になりましたが、日本のそれとくらべて、あまりの落差に驚いています。いったいどちらが正常なのでしょうか？たった2週間、ルスしているあいだに、私は今回も浦島太郎になったようです。

95年春、阪神大震災のあとで大同にでかけたら、その直後、日本ではオウムの事件が勃発し、雰囲気はすっかり変わっていました。0157のときもそうでした。この春は死に体の森内閣から大人気の小泉内閣に変わっていました。理解と対応がまにあいません。

アメリカが国内で本格的な攻撃を受けたのは、パールハーバー以来のことだそうです。60年ぶりですね。そのあいだ、アメリカは世界の戦争にずいぶん関与してきました。その戦争はすべて、アメリカの外で戦われました。朝鮮も、ベトナムも、中東も……。民間人、市民、そして子どもたち……。それらの戦争のなかで、ずいぶん犠牲になったことでしょう。

アメリカの大多数の人たちは、それをどういう気持ちで受けとめてきたのでしょうか？いま突然、戦争の被害者、犠牲者になったのでしょうか？犠牲者にはお気の毒ですが、「加害者→被害者」の関係が、いまあまりに一方向的に論じられていることに、私はどうしてもなじめません。それは、日本国内の反応にたいして感じる違和感でもあります。

一昨日の夜、中国から帰ったばかりの私は、まったくちがうテーマでこのたよりを書きました。ほぼ書き終えてから、小泉首相のインタビューをテレビでみて、はたと気づきました。みんなべつのことに関心を集中しているのに、いつもどおりのことを私が書いてもピント外れだということです。それまで書いてきたことは捨てて、話題を転換することにしたのです。

大同は、日中戦争のさいに、たいへんな犠牲を強いられました。それについては、この通信でも、なんとか書いてきました。「日本軍いらいの外国人だ」と呼ばれるのは、協力活動をはじめたころふつうでしたし、「日本鬼子」と呼ばれたことも1度や2度ではありません。私たちの共同事業のために中国側が建てた記念碑に、大きく「×」印をつけられ、「打倒日本！」と書きなぐられたこともあります。

渾源県南部の山地の村を訪れたときは、父親を日本軍に惨殺され、自らは17歳で中国共産党に入党し、日本軍と戦った英雄だという老人に、まっ正面から顔をみつめられました。「たしかに日本人は変わった。顔つきも、表情も変わっている」と言われ、そのあと、「日本も社会主義になったのか？」と問われて、答えに窮したものです。

同行していた大同市青年連合会の祁学峰主席は、「日本は以前の日本ではないけど、高見をふつうの日本人と思うべきではない」と即座に応えました。べつの機会に彼は、「高見を日本人とは思っていない。少なくとも純粋な日本人とは思っていない」と、私に話したことがあります。

人間は、動物的に生きるだけでなく、歴史という縦糸と、世界という広がりとの交わりで、自分の存在をたしかめながら生きているのだと思います。歴史というつながりを恣意的に切ることはできません。世界という広がりの中で、自分たちを切り離して、思うままに生きていくこともできません。それが人間だと思うのです。

私たちは1992年から、大同市の農村で、緑化協力活動を開始しました。いまから振り返って、最初のあいだは失敗が多かったのです。よかれと思ってはじめても、地元の農民の理解をえられないかぎり、絶対に成功はしません。

植えたアンズが最初はとてもよく育っていたのに、そこを管理していた農民自身によって、抜かれてしまったことがあります。自分の畑がせまくなったり、日陰ができるのをきらって、苗木を抜いたんですね。抜きっぱなしだと、すぐにばれて、上から叱られますから、そのあと苗木を植え戻していたために、原因がなかなかわからなかった。「日本憎し！」という人びとの感情がからんだら、問題はさらに複雑になります。

そういう繰り返しのなかで、自分なりに悟ったことは、このような活動は、たとえ9人の賛同をえたとしても、1人の強力な反対者をつくったら、それはトントンだということです。積極的な反対者が1人いたら、その事業はかならずどこかでつまづきます。

政治の世界では、そう言ってもおれないことがあるのでしょうけど、このあとアメリカがどう動くのか、日本がそれにどう影響されるのか、心配なことです。世界のだれもがアメリカに同情しているなんて考えたら、大まちがいでしょう。つくらなくてもいい敵を、アメリカはつくりすぎていると、私は思います。

## NO. 121 環境問題にたいする認識の変化 2001. 09. 25

中国にたいする緑化協力を思い立ったのは、1991年の夏でした。最初に私が中国を訪れたのは1971年で、その後1~2年に1度は通っていたのですが、はじめのうちは、中国の環境問題が深刻だなんて思いもしませんでした。「中国では『人民に奉仕する』原則が確立し、公害なんて存在しない」「廃棄物も有用な資源として活用されている」。そういう観念が私の頭にも浸透してましたし、環境問題を理解する能力は当時の私にはありませんでした。

しかもそのころ、中国は計画経済でした。計画経済の原則は「必要に応じて生産する」というものです。「必要に応じて生産する」ということは、つねに不足している、ということですね。そうでしょ。工業先進国の環境問題は、大量生産・大量消費・大量廃棄に起因します。そういうタイプの環境破壊は、当時の中国では少なかったとっていいでしょう。

よけいなことですが、つくる人、売る人が、買う人よりイバっている関係は、つねに不足している、というところから生まれたのでしょうか。その逆の関係は、生産過剰の社会で生まれるわけです。日本からの旅行者は、中国のサービスの悪さに不満をもつことが多いんですけど、そう考えると、納得のいくことも多いでしょう。

80年代以降の改革開放と市場経済化にともなって、中国の経済は急速に発展しました。環境問題もそれと同時に深刻化しました。その時期は、私が日本国内で環境問題にかかわりだし、環境から社会を見直すようになる過程と重なっていました。そういう角度で中国をみると、ホントにたいへんなんですね。

まずは、南の世界に共通の「環境破壊と貧困の悪循環」というタイプがあります。中国は文明の歴史が長いぶん、それが重層的になっています。私たちが大同で苦闘しているのがそれです。そして、工業の急発進にともなう激発型の公害があります。日本が高度成長期に、水俣病その他のかたちでしっかり体験してきたタイプです。使い捨て型の環境問題も急速に進んでいます。ペットボトルなどのワンウェイ容器も、アツというまに広がりました。地球環境型とっていい、酸性雨その他の問題は、もちろん世界中と共有しています。要するに、なんでもあります。

なんとかしないと、たいへんなことになる、と思いました。中国と日本は一衣帯水ですから、日本にも影響するでしょう。でも、水の問題、大気汚染の問題……、これらはたちまち政治問題になるんですね。はねっかえりの私なんか、中国でやれることだとは思えませんでした。そのてん緑化というのは、だれもが反対しにくい課題です。そこで実績を積み重ね、他の課題にも広げたいというのが私の願いでした。

協力を求めて、いろんな団体や個人を訪ねました。芳しい反応は少なかったんです。「コンクリートジャングル、アスファルト沙漠の大阪から、緑豊かな中国に木を植えにいくなんて、どうしてバカなことを考えるの？」なんていわれたこともあります。中国をよく知っているはずの人ほど、そういう反応が多かったんです。日本人がいくのは、たいていは東部沿海地方の大都市で、けっこう緑化がすすんでいるんですね。日本人の多くはそういうところしか知らなかった。

中国にでかけて、環境問題の重要性を説くと、返ってくるのは反発でした。「先に豊かになった日本人の勝手な議論だ。中国の最大の問題は、どうやって生きていくかであり、それには

経済発展が欠かせない。経済発展に環境破壊が付随するなら、それも甘んじて受け入れる。いまの中国は汚染すらほしいのだ」というのです。

中国の人たちの環境意識には、その後、劇的な変化がありました。先駆的な役割をはたした知識人や民間団体の役割を忘れることはできません。私にとって印象的なのは、何博伝です。いま手元にないのですが、日本語訳の題は「中国、未来への選択」(NHK 出版)だったと思います。緑の地球ネットワークの初期メンバーの最大公約数は、この本の読者だったということです。

国外からの影響もありました。典型的にはレスター・ブラウンの「誰が中国を養うのか？」だったと思います。中国国内で激しい反発を呼び起こしましたが、残した影響は評価すべきものだと、私は思っています。

それらを超える強烈な転機になったのが、1998年の長江、松花江などの大水害です。長江の洪水はそれまでも繰り返されてきたのですが、そのたびに「100年に1度の大雨」ですまされてきたように思います。しかしあの日、中国の活字メディアは「明らかに人災だ」と指摘していました。

「経済発展が実現したとしても、これ以上、環境の悪化がすすむなら、その成果は台無しになる。そればかりでなく、もっとひどい自然の報復を受けることになる」といった受け止め方を、あちこちで聞くようになったのは、このときからだとは感じています。そしてその直後から、生態環境を守るためのさまざまな施策を、中国政府も打ち出すようになりました。

日本でも、中国の環境問題への関心が高まってきたのがこのころからです。うれしいことです。……なんてつい書きましたけど、ホントは恐ろしいことなんですね。それだけ問題が深刻化してきているということです。

にもかかわらず、そのことの意味がちゃんと伝わっていかないもどかしさを感じます。私たちの緑化協力活動も、日本では「沙漠緑化」にくくられちゃいます。「夢とロマンの世界」です。私なんかこの活動に関しては、超現実主義ですからね。どこかのワークショップで、「中国からサウジまでの沙漠を緑化するのが私の夢です」なんて発言があったので、私はつい「夢は寝てるあいだにみてください。起きてるときに、人前で話すことでは

ありません」なんていってしまいました。ひどい八つ当たりです。

## NO. 122 農村の家庭生活(1) 2001. 10. 05

私たち緑の地球ネットワークが大同市の農村で緑化協力を開始してから、まもなく10年です。その区切りの意味でも、今年度中に新しいビデオを制作したいと考えています。農村の家庭生活を撮影したいと思いました。断片はずいぶん撮っていますが、一家の生活をずっと追ったことはありません。

この協力活動を開始した渾源県で撮影することとし、92年の秋、いっしょに農村を泊まり歩いた王有全(当時は青年団渾源県委員会副書記)がいまは党書記、つまりナンバーワンになっている南榆林郷に決めました。こういうところにも、10年の年輪を感じます。

どういう条件の村の、どの家を選ぶかで、結果が大きくちがってくるのは当然です。そのために周到な準備ができるとはかぎりません。このときも、撮影のための時間は最大で2日間でしたから、急いで選ぶ必要がありました。いくつかの村をみたあと、最終的に二嶺村を選びました。子どものいる家、小さな女の子のいる家を最優先しました。私の好みの問題です。小学校にあって、教室で探すことにしました。最初に3年生のクラスをみて、それから2年、4年、1年のクラスをみしました。

迷うんですね。渾源県は美人の産地で有名なんですよ。「皇帝に美女を献上した」という記録がくりかえしあるくらいです。迷ったときは最初に返れで、3年生の女の子、王琴(10歳)の家に決めました。教室の光景からまず撮影をはじめました。

担任の劉先生がすてきなんです。40歳くらいですけど、なかなか美人です(これが選択の基準だったわけではありません)。この村の出身で、大同市内の男性と結婚したんだけど、都市戸籍がえられず、市内では教職に就けないので、月曜日から木曜日までこの村に単身赴任し、金曜の夜から日曜日まで市内の自宅に戻るのだそうです。教室での言葉が、なんと普通語(日本でいう標準語)なんです。ハキハキとした授業が印象的でした。

日本の中国通は「学校教育を受けた子は、普通語を話せます」なんていいます。で私は、「先生が話せないのに、どうして子どもが話せるんです？」なんて反発したものです。通訳の王萍にいわせると、「まだナマリがあります」ということですが、そんなのは問題ではない。

そのあといきなり、その子の家に押しかけました。「なんといいかげんな……」と思われるかもしれませんが、それくらい作為(やらせ)がないということです。家には、その子のお母さん、曹占琴(30歳)がいました。事情を説明し、教室で撮影した場面を小さなモニターでみせ

て、こちらの意図を了解してもらいました。

彼女は張家口市張北県大河郷から、この村に嫁いできたそうです。98年1月の地震で震源になったところです。地震発生の翌日、被災地を見舞い、のちに1つの小学校を再建したことを伝えると、親しみをもってくれました。

さっそく、夫を探してきてくれたんですけど、この王徳国(32歳)がじつにシブい。もの静かなんですけど、存在感があるんです。そのわけは翌日になってわかりました。夫婦で畑に出てくれることになりました。最初にいったのは、ジャガイモ畑です。ずっと雨が降らず、カラカラだったんですけど、この日の午後から小雨が降りだしました。

素人カメラマンの撮影準備なんて、彼は待ってくれません。どんどんジャガイモを掘りはじめます。畑のなかでいちばんできのいい一角を掘るんですよ。そのなかでも、育ちのいいものを選んで掘ります。私の意図は凶作を伝えることだったんですけど、彼は無視しました。

それでも、イモは着いていません。最大のものでピンポン玉、たいていはピー玉の大きさです。1株にせいぜい2~3個。夫の掘ったイモを、妻がカゴに集めます。「だめだな。これじゃあ、食べるぶんもない」。夫がボソッといいます。「苦しい年になるね」と妻が静かに答えます。カメラを意識しない、自然な会話です。

早魃のひどさをとらえるために、ことしの夏、畑の農民をなんども撮影してきました。いかに雨が少なかったかを、ジマンのように話す人がいるんです。ときにはニコニコ笑いながら。ある人は演説のように。打たれ強いんだな、しぶといんだな、と感心はしましたが、ブラウン管を通してみる日本人に、その意味は伝わらないでしょう。きょうは最高の被写体に恵まれました。

収穫したイモをてのひらに並べてほしいと注文すると、少しでも大きなイモを選んで、妻がてのひらに乗せます。似たもの夫婦ということでしょう。それとも農民の誇り、意地なのでしょう。片方のてのひらに10個以上が並びました。

つぎにトウモロコシ畑で撮影しました。ここでも夫は、いちばん大きなものを探しては、その皮をはぎとります。まだ実は熟していませんから、私は申しわけない気持ちになります。すると彼は、「いいですよ。どうせ収穫はできません。まもなく霜がおりますからね。きょうは雨ですけど、あまりに遅すぎました。もう1か月前だとよかったんですけど。でも、これくらいの雨では、なんにもなりませんけどね」。

アワとキビは全滅で、すでに鋤きおこしたそうです。この話はもう1回つづきます。

ところで、9月末から10月1日まで北京に招待されました。国務院からの委託で、中国の国家外国専門家局が発行する「友誼奨」を受けることになったためです。ことしも50名の外国人専門家が、17の国から選ばれたそうです。中国の建国のお祝い・国慶節の記念行事に参加し、朱鎔基総理との会見もありました。人さまに誉められた経験のない私には、どうにも落ち着かない3日間でした。

## NO. 123 農村の家庭生活(2) 2001. 10. 09

NHK・BS2の「地球に好奇心」シリーズで、1999年に放映された「黄土高原～失われた森の文化を求めて」のタイトルバックになっていたのが渾源県二嶺村です。村の近くに特徴のあるヤナギの古木が2本生えています。風水樹、お墓の護り木です。

王徳国の家は西のはずれにあり、家の裏側は、深さ100mもの浸食谷がすぐそばまで迫っています。夫婦2人は、こぼれ種が生えて雑草のようになったキビをジャガイモ畑から抜いてきて、ロバに食べさせました。「家族の食糧はなんとかなるけど、どうやって家畜に冬を越させるか、悩みです」と話します。いちばんエサがあるはずのこの時期でさえ、草が少ないんです。アワやキビ、トウモロコシなどのワラも今年はちょっとしかありません。

小学3年生の娘の王琴が帰ってきました。母親が「きょうは早いんだね？」ときくと、「劉先生が大同に帰る日だから……」。「あっ、そうか。きょうは金曜日だ」。ひと足遅れて、小学1年生の長男、王健(8歳)も帰ってきました。

土間におかれたちゃぶ台に、2人ならんで、宿題をはじめました。姉は小さな腰かけに座ったんですけど、弟にはありません。しゃがんで、不安定な姿勢のまま、大きな声で教科書を読みます。姉もパッチリした大きな目が印象的で、それがこの子を選んだ理由なんですけど、弟はさらに目が大きいんです。顔の4分の1もあるんじゃないかと、思ったくらいです。

きょうだい勉強しているちゃぶ台の端にマナイタを置いて、母親が夕食の準備をはじめました。トマト、ナス、ピーマンを大きな包丁で切っていきます。オンドルにつながった大きな鍋で炒めるんですね。マントウをふかすのも、お湯を沸かすのも、この1つの鍋でやります。

この地方では、コムギは灌漑の可能な恵まれた畑で、ほんのわずかしき作りません。白麵(コムギ粉)を買ってきて、マントウをつくったのでしょう。野菜も、丘陵の水の乏しい村では作れませんから、行商から買ったのでしょう。現金の少ない村では、アワやキビ、ジャガイモと物々交換することもあります。村の水準からいえば、この家はかなり豊かといっていいでしょう。

親子4人におばあさんの袁心愛(65歳)の5人でちゃぶ台を囲みます。「きょう学校でどんなことがあったんだ？」とふだんは口の重そうな父親の王徳国が子どもたちにききます。ビデオを回している私にサービスしてくれたんでしょう。子どもたちは、学校のように手短かに話しました。そのあとの会話の中心はおばあちゃんに移っていきました。村のなかのウワサ話です。

この村は水が乏しいんですね。ここから1km余り離れた浸食谷の底に井戸があります。でも、それでは村に必要な水の3分の1もまかなえません。4kmほど下った下韓村まで、水を買いに通っているんです。この家は、最近水を買って暮らしているそうです。

井戸に水を汲みにくる人のようすを撮りたい、と私がいったら、1年生の王健が即座に「お父さんがいけばいい」といいました。それで決まりました。翌朝6時、私たちは浸食谷の底の井戸で待つことにしました。

この村はしょっちゅう通りかかります。井戸のこともわかっているつもりでした。ところが翌朝、現場に到着してみると、ようすがちがいます。新しいポンプ小屋ができ、村までパイプで水を送るようになっていたのです。浸食谷を突き詰めたところに、小さな炭鉱があり、そのあたりは地下水が多いので、その水を村まで送るようにしたのだそうです。ところが工事が完成したとたんに、水が涸れてしまって、役に立たないのです。大旱魃の影響による、ことだけのことだったらいいんですけれども……。

ロバの引く車でくると思っていたら、王徳国は天秤棒を担いでやってきました。谷底の井戸は直径1m、深さ25mほどで、ただ掘ってあるだけ。釣瓶もなにもありません。自分で持ってきたバケツにロープを結び、ゆっくり下ろして水を入れたあと、両腕の力だけで、たぐりあげていきます。それを2度、くりかえしました。私だったら途中で息が切れるでしょう。

天秤棒の前後にバケツをぶら下げて、彼は歩き始めました。家までの距離は1km余りですが、その大部分が急な上り坂です。途中で1回だけ小休止をし、前のバケツの吊り金を短くしました。傾斜の急な、近道にはいるためです。額には汗が浮かんできました。

運んできた水は、水ガメに移し、浮遊物を沈殿させてから使います。水ガメから洗面器に水を取り、娘が顔を洗いました。洗面器に水を入れ、タオルをぬらして、かたく絞り、それで顔を拭くのです。髪を拭き、クシで梳かし、鏡を覗き込んでいます。

きょうももう1回、畑のようすを撮影したいと頼んでいたのですが、「きょうは忙しくなって、畑にはでれないが、どうするか？」と王徳国がきいてきました。彼は村の衛生員と獣医を兼ねており、患者がでたというのです。

最初は隣家のブタの治療でした。生まれて1か月ほどの子ブタがなにも食べないのだそうです。金属のケースで補強された大きな注射器で、首根っこに薬剤を打ち込みました。

つぎは、風邪で発熱した3歳くらいの男の子に点滴をします。はじめてではないのでしよう。王徳国が近づくと、火がついたように泣き出しました。手や足にさわると、泣き声はさらに高くなります。母親が胸に抱き、シャツをたくしあげて、男の子の口に乳房を押しつけました。

最初は足の甲に針を刺しましたが、失敗しました。手も足もほんとに小さいし、泣きわめいで動くので、やりにくいのでしよう。手の甲に変えて、やりなおしました。小さい子なので、ゆっくりやらないといけないから、最低でも2時間はかかるといいます。そのあいだ、彼はつきっきりです。つぎにモーター修理をやる予定だったので、そのようすも撮影したかったのですが、それは諦めました。

彼は、医療について専門の勉強をしたことはないそうです。近くの村のお医者さんを手伝いながら、自分で覚えました。いっしょにいた通訳の王萍は、大同市第4病院の看護婦長です。彼女の目からみると、「器具の消毒も不完全だし、注射もじょうずではない。きちんと研修を受け直すべきです」とのことです。

都市の人には信じられない話でしょうが、資格があろうがなかろうが、村の人にとって彼はなくてはならない存在です。最初に、物静かだが存在感のある人だ、と書きましたが、こういうところからにじみ出るものだったのでしよう。

ビデオをみてもらえば、すぐにわかってもらえることを、言葉で表すのはしんどいことです。数日遅れてカメラマンの橋本紘二さんがやってきたので、私の撮影のようすを話すと、「ずるいよ！ 1人で抜け駆けをして！」とあって怒りました。くやしそうな彼の顔を見ることで、私の満足感はさらに深まったのです。

## NO. 124 育てた苗木は自分の子ども 2001. 10. 15

ことしの春、ワーキングツアーの人たちといっしょに霊丘自然植物園を訪れました。私たちのために、山の上のほうでの作業が準備してありました。高齢の人もいるので、登れるかどうか、心配しました。しかしその直前に作業道が整備され、階段が作ってあったので、全員が現場に上がることができました。作業の効率もずっとよくなります。

植えたのは野生のモモです。この地方では「山桃」と呼びます。実は小さくて苦く、食用にはなりません、春の花がとてもきれいです。ヤマモモと書くと、日本ではヤマモモ科ヤマモ

モ属のヤマモモ(Myrica rubra)になってしまいます。こちらは中国語では「楊梅」です。それからコノテガシワ(側柏)も植えました。ヒノキ科の針葉樹です。

ここはもう太行山のなかで、黄土丘陵とはちがって、石が多いんです。私がスコップで悪戦苦闘していると、植物園職員の周金が「みちゃおれない」といったふうに、私からスコップを奪い取ります。彼は40歳代半ばですが、まっ黒の顔をしていて、牛のように力が強いんですね。ガッ、ガッと踏み込むと、むりやりにスコップが潜っていきます。

そのうちに、ツアーのメンバーが植えたばかりのモモの苗を抜いては、穴を深く掘り直して、植え直しはじめました。なかには、ほとんど穴が掘れておらず、苗を寝かせて、そのうえに土をかけたものもあります。これではたしかに着かないでしょう。植樹活動ではなく、苗捨て活動ですね。みんなに注意して回っても、なかなか徹底しません。

すると周金は、「ガオジェン、心配するな！ みんなが帰ったあと、1本1本みんな点検して、ダメなものは植え直すから……」。ワーキングツアーといっても、都会育ちの人がほとんどで、スコップも持ったことがない人が多いんですから、労働力としてはあまり期待できません。

私たちが植えているそばに大きくなったモモの木があり、チラホラ咲きといったところでした。「この木の種から育てたの？」ときくと、周金は「いや、これは1本だけしかないから、ほとんど実が着かない。ずっと山の奥に10数本まとまって生えているので、そこから採ってきた」というのです。

大きな苗と、小さなものとは、差が大きいんですね。「こっちは2年生で、こっちは1年生かい？」ときくと、どっちも1年生だといいます。そして、「自分の家からヒツジの糞を運んできて、半分だけにやったら、そっちだけがこんなに大きくなった」というのです。自分たちでまる1日をかけて、種子を集めてきたのでしょうか。育てるときも、いろいろ工夫したようです。そうやって育てた苗を、いいかげんに扱われたら、たまらないと思ったんでしょう。

カササギの森の責任者は、大同事務所技術顧問の侯喜です。雁北林業局の時代を含め、大同市林業局で定年まで40年以上働いたベテラン技術者です。98年の夏、霊丘県の自然林でリュウトウナラなどに出会って、私たちが夢中になっていると、彼はただひとこと「そんなものは役に立たない」といいました。

ところがこの春、彼は、「カササギの森にリュウトウナラを植えていいか？」と私にきいてきました。「植えてもいいけど、霊丘植物園の苗はまだ小さいから、あと1年育ててからにしたほうがいい」と答えると、「いや、ちょっとだけでいいんだ。この地方ではこれまで誰も植えたことがないから、ぜひやってみたい」というんですね。うれしい変化です。ためしに200

本くらい植えてみることになりました。

しばらくして、現場にいったみて、驚きました。ナラの苗が、飛び抜けて小さいんですね。2年生になったばかりの苗です。霊丘植物園には、もう1歳大きな苗があるんですけど、活着するかどうかわからないカササギの森に渡すことを、植物園の責任者の李向東が惜しんだんでしょう。大きいものは自分のところにだけ植えているんです。

ことしの秋、サントリー労働組合の人たちと、陽高県致富山でマツを植えたんですけど、運ばれてきたポット苗が貧弱なものばかりです。いっしょにいた相馬昭男さんと、「残りもので、ロクな苗はなくなったんですね。いくら早魃だからといって、これではひどすぎる。来年はもっとたくさんポット苗を準備する必要がありますね」なんて話したんです。

ところがその翌々日、カササギの森にいったみると、りっぱなマツの苗がちゃんとあるじゃないですか。私が武春珍所長に、「やったな。自分のところにいい苗を残して、外のプロジェクトには悪い苗を渡した」というと。彼女は悪びれもしないで、「当然です」というんですね。あまりにアッケラカンと「当然です」と言われて、この私でも、つぎの言葉が出てこなかったんですよ。

若いころの私は、そういうのがとてもイヤで、「こういう連中といっしょに仕事はできない」くらいは考えたかもしれません。ひよっとすると、すぐ口にしたかもしれない。でもいまは、それが人間としてのふつうの姿で、それを目的のため、つまりは緑化をよりよくすすめるためにどう生かすか、というふうに考えるようになりました。

先日、立花吉茂代表を訪ねて、その話をしたら、日本でも同じなんですって。「自分で苦労して育てた苗はだいじにしますよ。自分で採ってきた種から育てた苗は、もっと大事にしますよ。だから、大阪市立大学の植物園をつくる時も、できるだけ職員といっしょに、自分たちで種を集めるようにしましたね」といわれるんです。

樹木というのは、生き物なんです。当たり前のことをなにを、と思われるかもしれませんが、愛情をもっていねいに対すれば、彼らも応えてくれるんです。まるで意思をもっているかのようです。あるいはもっているのかもしれませんが。苗を育てることと、現場で植えることとを、統一的に考える必要があるんですね。

## NO.125 「陰坡」と「陽坡」 2001.11.01

1992年秋のことです。渾源県に1人で滞在しているあいだに、やってみたいことがありました。北岳恒山のおもだったところを歩いてみることです。この山の標高は2,017mですが、

渾源盆地の標高が1,000mほどですから、感覚的には1,000mの山です。

パンや魚肉ソーセージなど、携帯食になりそうなものと、水を買って、バッグに詰め、朝早くからでかけました。いまはロープウェイができ、観光客をねらった馬もありますが、92年にはどちらもありませんでした。7合目あたりに道教の廟があり、そこまでは参拝客がいますが、廟から上の山では、めったに人に会いません。さほどの苦勞もなく、山頂に立ちました。

びっくりしました。山頂に立って、東に連なる稜線をみると、左側、つまり北側には、カラマツ、トウヒ、シラカンバなどの喬木と、名前も知らない灌木が生い茂っているのに、稜線の右側、南側には、まったく樹木がなく、草もまばらなのです。北側の樹木は一見して、人工的に植えられたものでなく、天然更新したものです。それにたいして南側は、水平階段状に整地をして、なんども植えた形跡があるのに、まったく活着していません。

私はその光景を撮影しました。その写真が、中京大学の河宮信郎さんの目に止まったんですね。そして、この写真が、ダイエーのエコカードのデザインに採用されたんです。ひょっとして、そのカードを使用された方が、この通信の読者のなかにもあるかもしれません。

稜線からかなり下ったところに、その整地に助けられたのでしょう、南面にもヤナギハグミが小さなブッシュをつくり、それからずっと下ったところに、トウヒの林ができています。このトウヒは、ずいぶんと年数のたったもので、人工のものか、天然のものか区別がつきません。

稜線の小さな踏み分け道をはさんで、極端に対照的な景観ができているのをみながら、私は既視感にとらわれました。自分でみたんじゃなく、本で読んだんです。92年4月に山西省にきたとき、旅の友として今西錦司編『大興安嶺探検』（朝日文庫版）を持ってきました。そのなかに、同じような光景が、生き生きと書かれていたのです。

いま本棚を探して、その本を見つけました。該当するところを探すうちに、のめり込んで、読みはじめてしまいそうです。引用はあきらめて、これを書きつづけることにしました。

そこまで極端に自然の植生が分かれるくらいですから、人工的に植えるさいも、技術者たちがいちばん注意するのがそのことです。「陰坡」（インポー）と「陽坡」（ヤンポー）で、日陰斜面、日向斜面の意味です。「陰坡」は木が育つけど、陽光にさらされる「陽坡」は、土が乾燥して、育ちにくいんです。

植えたものが、森林らしくなっているのは陰坡ですし、草が茂るのも陰坡です。活着率もずいぶんとちがいます。日本のばあいも、北斜面で育ったもののほうが、木材の価値は高いそう

ですけど、北斜面のほうが生育が遅いぶん、材が緻密だからだそうで、意味はまったくちがいます。

ところが、天鎮県の李二烟村でマツを植えたとき、全部、陽坡を選んで植えてあったんですね。陰坡もあって、そこは草の緑が濃いのに、整地もしてありません。信じられないことです。「誰がこんな設計をしたんだ？」というと、県の林業局の指導だそうで、現場にもやってきたそうです。一人ひとりの名前を私はメモしました。「なぜ、こんなところに植えたんだ？」ときくと、「マツは陽樹で、陽光を好むから」とのことでした。一知半解ほど困ることはありません。

たいていのプロジェクトでは、なんらかの事情で活着が悪くても、翌年の春、補植ができます。整地がしてあるぶん、手間もかからないし、費用も安くてすみます。でも、場所が根本的にまちがっていたら、お手上げです。李二烟村には私じしん、ずいぶんこだわっていたのですが、同じような失敗が何年もくりかえされたので、諦めざるをえませんでした。

そんなことを言いながらも、私たちが大きな期待をかけている「カササギの森」は、陽坡が主体です。なぜでしょう。大同では、大部分の山は、北側が切り立っていて狭く、南面はなだらかで広いんです。恒山はその典型で、この山の北側は、ほぼ垂直の断層崖です。ハングライダーで飛ぶには最高で、ヨーロッパ人が挑んだそうです。

何億年も前の造山運動の結果です。条件のいい北面の緑化はかなり進んできました。カササギの森の奥には采涼山(2,144.6m)がありますが、その北面には50年代に長城林場がつくられ、カラマツが25cmほどに育っています。面積の広い南面をなんとかする必要があります。水土流失防止の面からは、南斜面のほうが効果が大きいのです。

大同の緑化がむずかしい原因の1つに、このような問題があります。私たちの協力プロジェクトのかなりの部分は、そのような実験としての意味をもっています。

## NO. 126 窑洞(ヤオトン) 2001. 11. 12

黄土高原に特徴的な住居といえば、窑洞(ヤオトン)です。もともとは、黄土の崖に横穴を掘り、そこで暮らしました。という、なにか惨めたらしく聞こえますが、そうとは限りません。入口は狭くても、なかはけっこう広く、りっぱな家だと1部屋が6~8坪あり、それが横に4室ほど連なっています。

表側にはアーチ型の窓があります。以前は、窓は障子でした。日本のように四角に区切られているのではなく、いろんな形をしていました。白い紙を張るのはいっしょですが、その上

に、めでたい図柄の切り絵を張ります。いまではガラスをはめた家が増えましたが、障子の家も残っています。

部屋の3分の1くらいの窓側は、カン(オンドル)になっています。残りは土間です。料理をつくったり、お湯をわかしたりする大きな鍋が部屋のなかにあり、煮炊きの煙をオンドルに通して、床暖房をするのです。オンドルの床は、土で作られ、かなり分厚いんです。煙で暖められた土の床は、朝方まで、じんわりと温度を保ちます。食事をするのも、眠るのも、オンドルの上です。

ヤオトンの部屋の天井も、アーチ型になっています。大同の場合、人の胸くらいより下の壁は、緑色のペンキで塗られているのがふつうです。それから上は、漆喰で白く塗られています。部屋のなかには、余計なものはありません。きわめてシンプルです。そして、驚くほど清潔です。

大同のあたりは、冬の最低気温はマイナス20度以下になり、夏の最高気温は35度以上になります。このヤオトンは、冬は暖かく、夏は涼しいんです。

日本の私たちは、穴居というとジメーッとした印象をもちますが、雨の少ない黄土高原では、そんなことはありません。渡辺ミッチーさんが、「中国の山西省あたりでは、まだ穴暮らしをしている。政治が悪いからだ」という意味の発言をして、ヒンシュクをかっただけです。住居というのは、その風土に適したものが、いちばんなんです。

日本ではずっと木と紙の住居だったんですけど、それが風土にあっていませんでした。湿気が多くて蒸し暑い夏も、障子や唐紙を開け放って風を通せば、それで暮らせたんです。いまでは、壁の多い家やコンクリート建てになり、エアコンなしでは過ごせません。そのエアコンの廃熱が、町全体を熱くし、なおさらエアコンなしには暮らせなくなりました。悪循環です。

日本の木造住宅を黄土高原にもっていても、快適だとは思えません。逆に、窯洞を日本にもってきても、そんな家に私は住みたくない。自然の条件に適っているのが、いちばんいいんです。

黄土高原でも、南向きの崖面で、窯洞を掘れる場所なんて、かぎりがあります。時代が下るにしたがって、本来の窯洞はなくなりました。でも、住居は伝統的なものですから、そういう様式で暮らしたいのでしょう。たとえば、黄土高原の平たい台地を、かなりの広さで3~4m、四角く掘り下げます。そうすると、人工的な崖面ができますね。その崖面に横穴を掘って、窯洞をつくるんです。こういう窯洞は、山西省でも南部にはありますが、大同では見たことがありません。

大同で一般的なのは、日干しレンガを積み上げたり、版築で建てた窯洞です。横穴式の構造を、人工的に積み上げるわけですね。土窯(トーヤオ)といいます。版築というのは、両側を板で囲い、そのあいだに黄土を詰めて、上から木の棒で突き固めることです。大同の北側は万里の長城が連なっていますが、その大部分は版築でつくられました。土造りの窯洞でも、雨が少ないので、明の時代の数百年たったものさえ残っています。

なかには、石を積み上げたり、レンガを積み上げたりしたものもありますが、かなりの高級住宅です。前面だけに、石やレンガを積み上げたものもあります。黄土丘陵には石は多くなく、貴重なんです。

大同の南部は、太行山脈とその支脈に属し、花崗岩が多いんですけど、こちらには窯洞はほとんどありません。もともと石が多くて、横穴を掘るのもたいへんだったからでしょうか。山西省西部の黄河沿いでは、山間部に、石造りのりっぱな窯洞が並んでいるのをみたことがあります。

大同市北部の黄土丘陵では、以前は窯洞がほとんどだったのに、いまは多くありません。夏は涼しく、冬は暖かい窯洞ですが、採光がよくないこと、通気性が悪いことが欠点だと地元の人はいいます。それには改善の余地があるでしょう。

窯洞が消えた最大の原因は、この一帯で地震が繰り返されたことです。大同県と陽高県の県境で、89年、91年、99年と3回、かなりの規模の地震があり、89年のときは渾源县、広靈県の一部でも被害を受けました。かなりの数の窯洞が、倒壊したんです。95年には、8月末から9月下旬にかけて長雨が降り、数万世帯の窯洞が破壊されました。

それ以来、農村では、お金が貯まったら、レンガ建て住宅を建てるようになりました。被災地の復興住宅が、世界銀行の借款による規格ものだったことも大きいでしょう。4部屋もしくは3部屋が横にならんだ変哲のない住宅です。そうすると、土窯は貧乏の象徴になり、脱出を願う人が増えました。レンガ建ての窯洞だって選択肢ですけど、レンガがたくさんいり、高くつくんです。さびしいことです。

## NO. 127 にせもの 2001. 11. 19

大同市内の定宿は工商銀行培训中心です。「培训中心」は研修センターの意味ですが、外部にも開放されていて、事実上はホテルです。銀行ほどもうかるところはないと思うのに、なぜか多角経営してるんです。鼓楼や九龍壁の近くで、市の中心部とっていいでしょう。

寝るのには十分ですが、ビルの外壁がデコレーションとして利用されているため、窓が小さ

く、日中でも薄暗いんです。バスタブがなく、シャワーブースがあるだけです。シャワーを使うと、たいていは床がビショビショになり、ときには下の階まで漏れてしまいます。

3階にサウナがあります。といっても、サウナは休止してるか、温度が低すぎるかで、たいていは素通りです。でも湯槽のあるのがうれしい。アカすりまでいれて20元未満なので、ときどきお世話になります。100元札をだしたら、店員が蛍光灯にかざして、念入りにチェックするんですよ。よせばいいのに、私は「ニセ札だよ」なんてチャチャをいれました。いよいよ熱心になって、紫外線によるニセ札鑑定機にかけました。そして「本当のニセ札だ」というんです。受け取りを拒否され、「外国人が100元のニセ札をもっているのはおかしい」と、疑われました。

100元札は中国で最高額の紙幣です。おつりで返ってくることは絶対にない。銀行は厳しいチェックをしているから、外国人が両替したなかにニセ札が混じるはずがない。もっともな指摘です。人相をみると、なるほどニセ札グループの一員でもおかしくない、そう思ったのでしよう。

でも、幸い、公安に突き出されはしませんでした。ニセ札はいまも手元にあります。相手が銀行や公の機関だったら、没収されるそうです。みつからないようにいかに使うか、100元をかけたババ抜きのようなものなんでしょうね。

5年ほど前、ミノルタの上海事務所長だった城野さんが大同にきて、ニセの100元札をみせびらかしました。うらやましいような気がしたものです。やっど(?)、私の手にはいったのに、北京滞在5年の相馬昭男さんは、「ニセ札なんて珍しくないですよ」なんていうんですね。

城野さんがニセ札をみせたころ、大量のニセ札が台湾から運び込まれている、なんてニュースが日本の新聞にも載りました。対抗するために、ニセ札発見器が大流行だけれども、それにもニセモノがある、なんて落ちがついていました。できすぎてるな、と思ったんですけど、つい最近の新聞に、台湾ではニセ札が大量に流通しており、ニセ札グループは人民元も造っているとありましたから、本当だったかもしれません。

紙幣にかぎらず、なんだってニセモノは珍しくなかったんです。大同のデパートをひやかすと、SONY、PASONIC、SHITACHI、HODAKなんてのが、えらそうに並んでいました。TOSHIDAなんてのもあるんですけど、それがDOSHITAといたい。

極めつけがあります。ビデオ撮影のモニタ用イヤホンを忘れてきたので、北京の前門の百貨店に買いに行きました。中国産に混じって、日本製が並んでいます。高いんですけど、安心できます。

ガラス越しに指さしながら、「真的假的？」（ほんものかい？）って聞きました。習慣みたいなもんです。店員さんは、「国営の大きな店にニセモノなんかない」っていうんですね。手に取ってから私が「こいつはニセモノだよ」というと、「そんなことはありえない」と彼女は胸を張ります。私は自信たっぷりに、「まちがいなくニセモノだよ」。

パッケージの印刷もきれいですし、みたところ、品物だってしっかりしています。でも、表には「SONY」と印刷され、裏には「VICTOR」とあるんですね。それを指摘したんですけど、敵もさるもの、まったく動じません。「SONYとVICTORの合弁で作られたものだ」なんていうんですね。まいったなあ。

ある日本の複写機メーカーの人からきいたんですけど、輸入されていないそのメーカーのトナーが、中国で大量に出回ったというんですよ。「中国人スタッフは絶対に追及しようと息巻くんだけど、そんなことしたってモグラ叩きだよ、品質はそう悪くないから仕入れて売ったらいい、なんていったんだよ」。それはジョーダンでしょうけどね。

広島県でみたバイクのエンジンには「Mode in Japan」と刻まれていました。そういうと遠田さんだったかな、「日本にも昔はありましたよ。『Made in USA』となってるけど、『U.S.A.じゃない。あれはウサと読むんだ』なんてね」。

98年の春節には、ニセ酒事件が山西省で発生しました。メチルアルコールを酒ビンにつめて売ったんです。死者が100人以上でたそうで、直前の張家口地震より多かったです。日本でも報道されましたので、友人たちから「気をつけろよ」と忠告されました。

「だいじょうぶだよ。ニセ酒なんてのは高級酒でなきゃモトがとれないけど、おれが飲むのは安酒だから」なんて答えたんですけど、それは私の認識不足でした。1斤(500g)が10元以下で、犠牲になったのは農民なんですね。それがなおさら痛ましい。もうこれは、ニセ酒なんてもんじゃないで、毒酒ですよ。いや、単なる毒です。

おもしろおかしく書いてきましたけど、私たちの初期のプロジェクトで、果樹の苗木にニセものも多く、ひどいめにあったことを以前に書きました。当事者にとっては、たいへんな問題なんです。

## NO. 128 通信事情の変遷 2001. 11. 27

北京、上海など、沿海の都市ほどではないものの、大同の農村でも大きく変化しているものがあります。典型的なものが通信と交通事情でしょう。今回は通信についてです。

1992年ごろは、電話をかけるのに苦労しました。渾源のホテルや招待所に泊まっていて、国際電話をかけようと思えば、交換台に申し込んで、つながるのを待つしかありませんでした。通常は2〜3時間、かかりました。県からまず大同にいき、つぎに省都の太原につなぐれ、北京を経由して、日本につながるんだ、との説明でした。そのあいだ、遠くにいくわけにはいきません。部屋でチビリチビリやっているうちに、できあがるのに十分な時間です。

NHK北京支局が、私たちの活動をラジオ番組でとりあげてくれることになり、電話インタビューが計画されました。約束の時間に、広靈県城の郵電局から北京に電話をかけようとしてみました。何回試みても、これがつながらないんです。けっきょく諦めざるをえませんでした。

県城ではそういう状態ですけど、農村はもっとすごいです。懷仁県新家園郷で電話の交換台をのぞいたことがあります。農村の電話機は、私たちがこどものころの電話と一っしょでした。電話機の横についているハンドルをグルグルッと回すと、交換台のおねえさんがでてきます。あれですね。

交換台には、番号を記入したたくさんのジャックがならんでおり、両端にプラグのついたコードで、それをつなぐんですよ。感度もとても低くて、途中から聞こえなくなることもしょっちゅうでした。両側で大声で叫ぶんですね。

長距離電話や国際電話になると、よりたいへんでした。むこうの声小さいからといって、こちらが大声をだすと、相手の声はかき消されてしまいます。大きな声で話して、そのあとは静かにする。チョウのように舞い、ハチのように刺す、といったモハメド・アリなみの技術が必要だったんです。

原稿をファクスで送ろうとすると、県ではむりでした。大同市内まで帰って、郵電局にいかないといけません。久しぶりに都会がみれるので、楽しみでもあったんですけど。郵電局で、窓口で原稿を差し出します。そのあと大阪の事務所に電話をかけて確認するんですけど、読めないこともしょっちゅうです。器械も古いんですけど、それ以上に回線状態がよくない。そう伝えても、窓口のおねえさんは、「いや、器械にOKのサインがでてる」といって取り合ってくれません。もう1回送って、A4を2枚送るのに、250元もとられたりするんですね。「ドロボウ郵電局と名乗るべきだ」なんて捨てゼリフを吐いても、おねえさんは知らんぷりです。

たいていの県の招待所のサービス員は、幹部の娘が多くて、不親切です。なにか頼むと、露骨にイヤな顔をされたりするんですけど、大同県の招待所に、親切なかわいい子がいたんですね。彼女は、1階ロビーの横のサービス員室に住み込みで働いているんですよ。24時間勤務で、プライバシーなんてまるでない。それで賃金は150元です。その2倍近くも郵電局は一瞬で盗ったんです。

ところが3~4年前から、国際電話もきわめてクリアになりました。幹線道路のすぐそばに、光ケーブルが埋められたんです。ま上にコンクリートの標注が立てられました。「光ケーブルを守るのは光栄、壊すのは恥」なんて書いてあります。大同事務所にもファクスが入り、郵電局に通う必要はなくなりました。

そうこうするうちに、携帯電話(手機)が普及してきました。最初のあいだは、ステータスシンボルで、えらい人とお金持ちがこれみよがしに持ち歩いていました。その後、またたくうちに普及しはじめ、まずカウンターパートの祁学峰主席がもち、つづいて武春珍所長がもち、魏生学副所長がもち、というふうに、私の回りでもエライ順にもちはじめました。

最初のあいだ、つながるのは市内と県政府所在地の狭い範囲でした。農村ではまったく通じません。携帯電話は、圏外のほうが信号(中国語では情報といいます)を探すためにバッテリーを消耗するようで、みんな充電に苦労していました。

ところがこの1~2年のあいだに、少なくとも郷政府所在地の大きな村には、高さ10数mのアンテナが立ちました。通信会社の大きなものが2社ある関係でしょう。隣りあわせで2本、アンテナの立っている村もあります。広大な中国の農村で電話を普及するには、有線より無線のほうがコストが低いといったこともあるのでしょうか。

私は日本国内でも、「あんなものをもつと酒がまずくなる」といって携帯電話をもたなかったんですけど、中国ではもたざるをえなくなりました。ツアーがたくさんくるようになり、しかも中途合流なんかかふえて、連絡を密にする必要がでてきたんです。01年の春、プリペードカード式のものを買ってきてもらいました。こちらから用事があるとき、どこからでもかけられるのは、たしかに便利です。いったんもつと手放せないように思えます。

この7月末のことです。大同県・陽高県・渾源県・広霊県という4つの県の県境に自然林があることがわかりました。植生調査をしたいと考え、下見をしたんです。車道のすぐそばで、調査をするには条件がいいんです。標高は1,800~2,000メートルです。シラカンバが主ですが、そのほかに、トウヒ・カラマツなどの針葉樹、ヤマナラシ、リョウトウナラ、ナナカマド、ミズキなどの落葉広葉樹があり、樹種がけっこう豊富です。

来年の夏には綿密に調査をしましょう、なんて話しあっていたら、私の携帯が鳴るんですよ。でてみると、大阪からです。「原稿の依頼です。締め切りは8月12日で、字数は8,000字です」なんて連絡です。不便な時代になったものです。

11月末から大同にきています。きのうの最低気温は-17度、日中の最高気温は0度でしたが、それでも地元の人たちは、ことしは寒くなるのが遅い、また暖冬だろう、と話しています。日中のかなりの時間は氷点下なんですけど、それほど寒さを感じません。風もあまり吹かず、空も晴れわたって、陽光がさしているからです。空気が乾燥していることも影響しているでしょう。

というような呑気なことを12月4日の朝、書いていたら、通訳の王萍が朝食をさそいにきて、「昨夜から雪になって、だいが積もりましたよ。いまも降っています」といいます。カーテンをあけてみると、なるほど外は雪景色です。風はないものの、気温はずっと下がってきました。ここの天気は油断がなりません。

大同事務所の武春珍所長によると、数日前はものすごい煙が街中に充満し、郊外の環境林センターから市内の自宅に戻るあいだ、息苦しかったそうです。「大同はほんとに人の住めない街になるのではないか、と思いました。本当にそうなったら、大阪に引き取ってくれますか？」なんていいます。

大阪の事務所を移転し、ちょっと広くなると話したからです。事務所の片隅でも生活できる、なんていうのです。私は、「ああ、いいよ、歓迎するよ。そのときは土地をさげてきてちょうだい。小日本なんだから」なんていいかえしました。それは冗談ですけど、大同の環境がきわめてよくないことは、たしかです。

でも、昔からこうだったわけではありません。大同には4世紀末からほぼ1世紀にわたって、北魏の都が置かれました。平城京です。北方からやってきた鮮卑族のつくった王朝であり、多数民族である漢族をはじめ、たくさんの異民族を支配するために、強力な移民政策を取り、その数は100万人を超えたといえます。もとの人とあわせると、ピークは120万人だそうです。当時としては中国最大の都市で、世界最大でもあったでしょう。

南の宋に対抗して中国北部を支配しましたが、その勢力は長江のラインまで及びました。平城京を中心として畿内を城壁で囲いましたが、西は黄河に接する偏関、東は北京市の延慶まで延びていました。

にわかには信じられない話ですが、その最大の証拠が、大同の市街地から西へ20kmのところにある雲崗の石窟です。武周山の岩壁に、東西1kmにわたって、53の石窟があり、大は17mの釈迦座像から、小は2cmのものまで、51,000体もの彫像が残されています。西暦460年から64年の歳月をかけて建立されました。地元の研究者の話では、連日4万人が動員されたそうです。世界遺産への登録を申請中で、不安と期待をもって、決定を待っているところです。

岡倉天心は洛陽の竜門石窟を目にし、日本の飛鳥時代と奈良時代初期の仏像との酷似に驚いたそうです。「北魏様式」と名付けられたのは、そのあたりからでしょう。竜門石窟は、北魏が洛陽に遷都したあと、雲崗石窟をひきついで建立されました。奈良の都が平城京と呼ばれたのも、大同の古称に因んでのことのようです。

北魏が仏教を重視したのは、多数の民族をまとめあげるためだったといわれます。現存する主なものは雲崗の石窟ですが、往時の平城京には100もの寺院が軒をならべ、そのなかの永寧寺には高さ100mの木塔があったそうです。僧尼は3,000人にたっしました。北方仏教の中心だったのです。

鮮卑族の故郷は、中国東北地方の大興安嶺の北部にありました。はるばる南遷してきた彼らが、大同で足をとめ、都に定めたのは、ここが環境に恵まれていたからでしょう。そうでなかったら、通りすぎたはずです。「魏書」などの古文書は、水が豊かで、草木の生い茂る秀麗の地として書き残しているそうです。たしかに、森の恵みがなければ、これほどの文明を支える経済力は生まれなかったでしょう。

大同はその後、遼と金の時代に副都になりました。上下の華嚴寺と善化寺はその時代に創建されたものです。応県の木塔(仏宮寺釈迦塔)は遼代のものですが、高さ67mで、世界最大級の木造建築です。カラマツなどの大径木をふんだんにつかって、骨太にくみあげられています。鉄釘などはいっさいつかわず、木組みだけで建てられました。そう遠くないところに森林があり、しっかりした木の文化が根付いていたことの証明でしょう。

渾源県の北岳恒山のふもとには懸空寺があります。断崖絶壁に懸かるこの寺は、北魏末期の建立で、仏教、道教、儒教という中国の三大宗教をあわせためずらしい寺です。すぐ上流にダムがつくられ、谷が浅くなったのですが、もとは地面から90mもうえにあったそうです。空に懸かる寺という名前の意味を実感させられます。この寺も木造建築です。

ずっと以前、この地方に森林があったのはたしかでしょう。山西省の森林被覆率の推移について、以下のような推定があります(『山西通志』第9巻『林業志』)。

秦代以前 50%。

唐宋代 40%。

遼元代 30%。

清代 10%未満。

中華人民共和国建国時 2.4%。

このように急激に森林が失われた原因を、同書は、自然の法則を無視して、生産力の発展を実現しようとした結果だ、と述べています。増加する人口を養うために、過剰な開墾がなされました。都市造営のために、大量の木材がつかわれたことでしょう。金属器の精錬や陶磁器の

焼成にもつかわれたでしょう。あいつぐ戦火で焼かれたものも少なくなかったはずです。人類の文明が森林を消滅させたのです。

文明のまえには森林があり、文明のあとには沙漠が残る。大同はその典型の1つでしょう。

## NO. 130 祁学峰のその後 2001. 12. 13

大同を訪れたことのある人や、黄土高原だよりの読者にとって、「祁学峰」はなじみの名前だと思います。この協力事業のキーマンで、1度でも会った人には印象を残しているはずです。99年秋には、経団連の「日中植林フォーラム」で報告をおこない、たくさんのファンをつくりました。

大同市青年連合会の副主席だった彼は、94年3月から、大同側の責任者として、この協力事業を担当するようになりました。その後の数年間、私が大同に滞在しているあいだは、ほとんど24時間、行動をともにしました。

96年ごろ、日本からのツアーのメンバーに、彼はこんな話をしました。「自分は最初、上から与えられた任務としてこの事業に参加した。しかし、その後、実践のなかで重要性を認識するようになり、自分自身のやりたいこととして、この事業を考えるようになった。いまでは自己実現としてこの事業を考えている」。

私は私で、彼のことをみなに話しました。「きょうだいみたいなものです。当然、私が兄で、彼が弟です。くやしいことに、たいてい家庭と同じように、弟のほうが賢いのです」なんてね。

92年にこの事業を開始したときの山西省青年連合会の支樹平主席からきいたことがあります。重要な事業になると思ったから、いちばん信頼していた祁学峰に担当させた、というのです。支樹平はその後、共産党山西省委員会組織部長を経て、現在は共産党河南省委員会副書記・組織部長です。中国最大の省のNO.3といったところでしょう。

祁学峰は大同の都市の生まれ育ちでした。農村は、94年に私といっしょにいったのが最初だといいます。そのころは拠点の環境林センターもなく、彼と私は、県から県へ、村から村へと移動する毎日を送っていました。何日も農家に泊まりました。都市育ちの彼は、私よりつらく感じたはずですが、のちに彼は、しつこい腰痛に苦しむことになりました。

97年、主席の郜向華か、副主席の祁学峰のどちらか1人が青年団を去ることになりました。祁学峰は、このしごとを継続したいといってくれました。主席だった郜向華には、昇進の

道が用意されていました。私は、省の組織部長だった支樹平、大同市の市長その他に、祁学峰の留任を働きかけました。のちにその事情を知った中華全国青年連合会の幹部が私に、「高見さんは青年団の人事にまで介入しているそうですね」といったときも、「そうせざるをえないでしょう。必死ですよ」なんて応えたものです。

ことしになって、大同市では機構改革と人事異動が連続しました。私のために、祁学峰の出世はずっと遅れたと思います。あるとき青年団を離れた鄧向華は、鉞区の区長になり、ことしの夏からは鉞区の党書記。トップです。このたびはしかたないと腹をくくっていました。共産党大同市委員会の梁鳳書副書記からは、「祁学峰にとっては最後のチャンスです」なんていわれましたし……。

11月になって、祁学峰からファクスがはいりました。人生でいちばん輝いている青春期をずっと青年団ですごした。なかでも高見とすごした8年間は印象ぶかかった。そのことを生涯、忘れることはないだろう。といった、すこぶる感傷的な内容です。

彼とあう機会がなくなるのだろうか、読みながら考えました。ところが最後のほうに、新しい任務は南郊区の党副書記だということです。南郊区は、私たちの拠点の環境林センターがあるところです。バカバカしくなって、私はずっと返事をだしませんでした。返事がこないことを、祁学峰は気にしていたそうです。

12月初めに大同に着いてすぐ、祁学峰にあいました。忙しそうです。南郊区の副書記に就任したと思ったら、南郊区の零細炭鉞で事故が発生したそうです。山西省では、9日間で5件の炭鉞事故が発生し、100名以上の人命が損なわれました。南郊区の党書記と区長が停職処分になったそうです。いったとたんに、祁学峰は責任ある立場におかれたのです。

「着任するまでは、南郊区は豊かなところだと思っていた。でも、困難な問題はたくさんある。零細炭鉞で働いている人たちは、土地がない。全収入を炭鉞でえていたのに、そこが閉鎖されたら、生きる方策がなくなる。この問題もきわめて深刻なのだ」。

「94～95年ごろ、高見といっしょに農村を回ったときと同じようにしている。農民は、最初から心を打ち明けてはくれない。農家のオンドルに上がり、彼らと同じものを食べ、いっしょに酒を飲んでるうちに、本心を話してくれるようになる。そうだったろ？」

「あのころとちがうのは、自分もちょっとは権力を持ったことだ。かなりの問題は、即座に解決できる。その場で電話をしたり、秘書に指示すれば解決する。そうやって解決できない問題は、あとで検討することを、彼らに説明する。それで農民は納得し、私を信頼してくれる。多くの幹部は、現場をみないで、これはしてはいけない、あれもだめだ、というだけ。なにかを自分で決めて、その結果に責任を問われるのが怖いんだ。自分のしたことなら、私は自分で

責任をもてる」。

「高見といっしょに農村をまわっているとき、現場の問題は、可能なかぎり現場で解決していた。そのとき身につけた活動スタイルは、自分にとって宝だと思う」。うれしいですね。こんなふうになってくれると……。

林野庁 OB の相馬昭男さんが、昨年春から、大同に同行してくれています。ことしの春からは、私が大同にいるあいだはずっといっしょで、もう 100 日は超えたでしょう。相馬さんが、大同を訪れた日本の ODA 関係者に説明してくれます。「このプロジェクトはね、地面に木を植えるだけでなく、人の心のなかに木を植えているんですよ」。

## NO. 131 形式主義 2001. 12. 17

緑の地球ネットワークの立花吉茂代表は、大同にいるときも、仏教のお寺や道教の廟を熱心にみて回ります。といっても、目的は神仏じゃないんです。寺や廟にはさまざまな樹木が集められ、保護されているとあって、それを探すんです。雲崗の石窟にいても、五台山に登っても、植物をめざして、彼は走ります。

不肖の弟子の私にも、そのウイルスは感染しました。雲崗石窟の第 3 窟のまえて、みたことのない樹木を見つけました。同行の遠田宏顧問に尋ねると、「トネリコの 1 種でしょう」とのことでした。図鑑で調べると、モクセイ科トネリコ属(*Fraxinus*)です。中国では白蠟(バイラー)と総称します。

樹木ガイドブックのトネリコの項をみると、「枝にカイガラ虫がつき白蠟を分泌する。これをトネリという。溝に塗ると戸の滑りがよくなるという。トネリコの名はこれに基づく」とあります。中国の白蠟と、日本のトネリコと、名称のもとになったのはいっしょのようです。

材質は柔軟で、しぶといんですね。日本では野球のバットやスキー板につかいました。中国で「白蠟棍」といえば、武術でつかう棍棒です。バ〜ンッと床にたたきつけても、グニャーと曲がって反発し、折れはしない。棒高跳びのグラスファイバーのポールのようなようです。

1 本でもみつけ、名前をおぼえると、おもしろいもので、つぎつぎみつかるんです。北京の植物園に植えられているのが、目にとまりました。冬、おそくなっても、ものすごい数の種がついています。霊丘自然植物園の李向東といっしょに集めました。種がまったくついていないのは、おそらく雄株でしょう。トネリコは雌雄異株なんです。

北京の定宿の重慶飯店の周囲にも、並木にたくさん植えられています。樹形もすてきなんで

す。株の欠けたところに、若苗が補植されたんですけど、その生育も速いんです。

北京で目を養ったあと、大同県の招待所で1本を見つけました。事務所の技術者がそれをみながら、「これだったら大同市内の街路樹にも使われている」といいだしました。市街地の南のほうに、東西に走る迎賓路があります。大同市政府、大同賓館、雲崗賓館などがある道です。その街路樹に、つかわれていたんですよ。大同事務所の技術者に種を集めてもらい、環境林センターで育苗をはじめました。

発芽も生育もとてもいいんです。3年生の苗は、人の背丈に近づいています。病虫害もほとんどありません。発生したとしても、あのパラフィンが自分を守るでしょう。寒さにも強いし、夏の暑さも問題にしません。

ただ、『北京常見樹木図鑑』（中国林業出版社、99年）によると、私たちが集めた種は、どうも美国白蠟(*Fraxinus americana* L.)のようです。べつに中国種もあります。霊丘の山のうえに白蠟があるそうで、自生種の可能性が高いでしょう。霊丘植物園の山のうえには、灌木のトネリコがたくさん生えています。たいていの樹木は陽坡(日向斜面)を避けて、陰坡(日陰斜面)に育つのに、これは日向斜面のガレ場に茂っています。日本で流行しているシマトネリコに、樹形はそっくりです。シマトネリコは常緑で、こちらは落葉ですけど。

ここまでは長〜いまえおきです。大同の迎賓路の並木のトネリコが、今年の春、みんな切られてしまいました。もう採種することもできません。あんなによく育っていたのに、なぜ切られたんでしょう。

1本の道路の両側は、1種類の樹木で緑化したい、ということだったようです。たったそれだけの理由で、あの並木を切ったんでしょうか？クソつたれ！なんという形式主義。というより、犯罪です。庶民が枝1本を折っても罰金をとられるのに、バカな領導がこんなことをやる。

大同から西へ20kmのところ雲崗石窟があります。世界遺産への登録を申請中で、一兩日中に結論がでるはずですが。石窟のまえの零細なみやげもの店が撤去され、樹木の植え込みと芝生の広場になりました。ほとんどいつも、スプリンクラーで水を撒いています。ユネスコの条件だったと、地元の人からききました。真偽はわかりません。

その周囲でも緑化がすすんでいます。岩盤がむきだしで、ほとんど土がないところに大きめの穴を掘り、よそから客土してきて、トショウの大苗を植えています。大同市の政府機関すべてに、動員令がかかりました。人をだせないばあいは、そのぶんのお金をだします。一般の山の緑化にくらべて、何十倍もコストがかかります。

観光のためといっても、こんなムリをする必要があるのでしょうか。ここがハゲ山になり、土まで失われたのは、雲崗石窟ができたことと無縁ではありません。雲崗石窟が文明の遺産だとすれば、周囲のハゲ山もそうでしょう。光と陰の関係です。雲崗石窟といっしょに、周囲のハゲ山も残すべきだと私は思います。

もう1つ気がかりなことがあります。雲崗石窟の内部で、風化がすすんでいます。大きな原因は、地下水による浸食です。それでも1500年の歳月に耐えてきたのは、ここが乾燥していたからでしょう。

周囲の大面積に樹木を植え、水をやったりすれば、環境が変わるかもしれません。5年や10年では大きな変化はないでしょう。でも、1500年前から引き継いだものを、1500年後に伝えるという視点でみればどうでしょう。観光のために、ここに木を植えることはないのです。これも形式主義だと思います。

#### NO. 132 黄土高原の範囲 2001. 12. 24

「黄土高原だより」の読者と電話で話していて、ハッとしました。黄土高原をずっと小さなものとして考えているのです。それには私にも責任があります。この「黄土高原だより」のなかで、黄土高原の範囲にふれたことが1度もありませんでした。そのうえ、「山西省大同市の黄土高原の農村」なんて書き方をよくします。これじゃあ、大同市のなかに黄土高原があると誤解されてもしかたがない。

黄土高原というのは、広大な地域です。その範囲には諸説があります。基準をなににとるかで、ずいぶんちがってきます。日本のように、海に囲まれていれば、その範囲は海岸線で定まっています。国境のように人工的なものなら、難しい問題はあっても、測定可能です。

黄土高原というのは、結局のところ、「黄土」と「高原」という2つのキーワードで決まる範囲です。「黄土」が堆積しているところは、黄土高原よりずっと広い範囲です。華北平原の中央部にいったことがあります。そこの土も大同の土と大差ありません。黄土地帯といえ、華北の全体、西北の過半、東北の一部を含むわけです。そのうちの高原状のところは黄土高原だということでしょう。

話が大きくなったついでです。中国の地形は、西高東低の4つの階段状になっています。

第1段は大陸棚で、大は台湾、海南島から名もない小島まで、5,000以上の島嶼がここにあります。第2段は海岸線から海拔500m以下の地域で、東北、華北、長江中下流の3大平原とその周囲の低い丘陵とでなっています。第3段は、大興安嶺—太行山—雲貴高原のラインから西へ、海拔1,000~2,000mの地域で、ジュンガル盆地、タリム盆地、内蒙古高原、黄土高原、

四川盆地、雲貴高原などがここに属します。第4段は青海・チベット高原からパミール高原にかけてで、平均海拔は4,500mにもなり、ヒマラヤ、カラコルムの山脈には、8,000mを超える山が14もあります。富士山よりはるかに高いんですから、高原というには違和感がありますが、そういうところが中国の国土の4分の1を占めています。

さて、黄土高原の範囲ですが、どのような要素に注目するかで、いくつもの説があります。地質を重視する人は、黄土の堆積の分布と連続性に注目し、黄土高原の範囲を山西省西部の呂梁山脈以西、陝西省の渭河以北、万里の長城以南、甘肅省の蘭州盆地以東にかぎるのだそうです。面積は40万平方kmです。この説では、山西省の半分は黄土高原には入りません。でも、そこに住んでいる人たちは、黄土高原だと思っているんですね。

そういう説も、外国のことですから、説明ぬきで日本に持ちこまれます。東大で開かれたシンポジウムで、「どうして大同が黄土高原なんですか？」ときかれました。最近でた本のなかにも、黄土高原の範囲をそのように決めたものもあります。

水土保持の観点から、黄河の中流域をすべて黄土高原に含める説もあるそうです。黄河に連なる水系を列挙し、その流域をすべて黄土高原に含めます。水土流失を防止する、といった目的からすれば、実用上の利点があります。この説にしたがうと、北と西の境界が大青山山脈、陰山山脈にまで広がり、黄土高原は60万平方kmをかなり超えます。それも通念にあいません。黄土高原に、鄂爾多斯(オルドス)と河套地区を加えて、黄土高原地区という呼び方もあるんですけど、これがだいたいその範囲です。

その他の説は、この2つの説のあいだにあります。常識的と思えるところで、山西大学黄土高原地理研究所が『黄土高原整治研究』(92年、科学出版社)で提示した説を紹介します。要するに、(1)黄土が連続して堆積しているところで、(2)標高が高くて高原らしく、(3)黄土の地貌が発達し水土流失の深刻なところ、というのです。わざわざ(3)の条件を加える必要があるのか疑問ですけど、とりあえずこの説にしたがいましょう。

黄土高原の範囲はつぎのようになります。中国の地図が手元があれば、開きながら読んでください。東の境界は太行山脈です。山西省と河北省との省境といってもいい。ただ太行山脈が切れた河北省北部の4つの県は、山西省(大同市)と連続しているので、黄土高原に含めます。

北の境界は、基本的には万里の長城のラインです。多少の出入りはありますが、ここが境界になる。西の境界は、青海省の西寧を含め、その西の日月山を境にします。青海湖のすぐ東です。南の境界は、秦嶺山脈と伏牛山脈の北のふもとです。そして東の太行山脈のラインをつなぐ。

そのように黄土高原の範囲を定めると、山西省の全部、陝西省の北中部、甘肅省の中部と東

南部の大部分、寧夏回族自治区の南部、青海省の東北部、河南省の西北部、さらに内蒙古自治区の最南部と河北省の西北部の少数の県が含まれます。合計 264 の県(県クラスの市を含む)が黄土高原に属し、面積は 51.7 万平方キロになります。全中国の面積の 5.3%です。日本の国土の 1.4 倍になります。

90 年の人口は 8,360 万人で、当時の中国の人口の 7.4%でした。いまは 1 億に近いでしょう。その東北のはしっこが大同で、面積は 1 万 4200 平方キロ、人口は 300.3 万人です。黄土高原の全体からみれば、面積も人口も 3%弱です。

それなのに、「大同市の黄土高原の農村」なんて書き方をするのは理由があります。黄土高原は、いまみたように、たいへん広いんです。自然の条件も、社会的な条件も、そうとうにちがいます。私がみているのは、ほんの一部にすぎません。ここで書いているのは、黄土高原といっても、大同のことですよ、と断っておきたかったんです。

#### NO. 133 相対性 2001. 12. 30

大同からの連絡によると、雲崗石窟がユネスコの世界遺産に登録されたそうです。北京―大同間の高速道路がまもなく全面開通し、3～3.5 時間でむすばれるようになりますから、大同を訪れる人もふえるでしょう。歴史を偲ぶのとあわせて、深刻化している沙漠化問題、水の問題などを感じとってもらえるとうれしいです。私個人でいうと、JTB の『旅』に「世界遺産登録前夜の雲崗石窟」なんて記事を書いたんですけど、決まってホッとしています。流れでもしたら、赤っ恥をかくところでした。

それはともかく……。黄土高原だよりの前号で、黄土高原の東の境界について、つぎのように書きました。「東の境界は太行山脈です。山西省と河北省との省境といってもいい。ただ太行山脈が切れた河北省北部の 4 つの県は、山西省(大同市)と連続しているので、黄土高原に含めます。」山西大学黄土高原地理研究所が、『黄土高原整治研究』(92 年、科学出版社)で提示した説に依拠しました。

4 つの県とは、陽原、蔚、宣化、懷安です。これらの県は、大同市の天鎮県、広靈県と接しており、自然の条件からいって連続性をもっているのはたしかです。

ところが、大同市広靈県で地元の人たちと話しているとき、こんな意見がでたんです。「広靈は黄土高原じゃない。華北平原のいちばん高いところだ。経済・社会・文化の面でも、大同より河北省とのつながりが深い」。

広靈県は、低いところでも 1,000m 前後はありますから、華北平原というのは、私には抵抗

があります。でも、中国全体からみれば1,000mは低いところで、平原として通用するかもしれない。そして、広霊と西どなりの渾源县とのあいだには山がありますが、広霊県と河北省の蔚県とのあいだにはなく、ストレートにつながっています。

経済の面では、文句なしに河北省とのつながりがつよいと思います。大同市に近い河北省の県は、河北省のなかではワースト10にはいる経済状態ですが、大同の農村県からみると豊かです。北京から河北省をぬけてクルマで大同へくるとき、2つの省の境で道路がガクッと悪くなります。金の切れ目が道の切れ目です。

経済からいえば、豊かなところへつながるのがあたりまえですから、広霊県は河北省の経済圏といってもいい。私たちが植えているアンズも、先進地は河北省の蔚県で、大同の農村はその下請けのかたちで栽培をはじめました。

広霊県平城郷の楊窰村に日本のツアーがいったとき、村の中央の舞台で伝統劇が演じられていました。ハデなアクションと、どぎついメーキャップが売りものです。村中の人が集まって、見物します。でも、劇の内容がわかる人は多くはなかったようです。大同からきた若い人は、セリフを聞き取ることができません。演じたのは河北省蔚県の劇団でした。ナマリのせいというより、セリフが古語だったからなのでしょうけど。

大同への緑化ツアーに参加した人は、色彩豊かな切り絵を記念品にもらったことがあるはずです。あの切り絵は広霊のものです。50枚くらいの薄紙を重ね、ホッチキスで止めたものに、下絵をおき、それにあわせて刀で切っていきます。繊細な神経と、根気のいるしごとだと思えます。ちょっとでもまちがうと、全体がボツになります。私なんか、ぜったいにだめです。

切り上がったものは、5枚くらいずつ重ねて、表と裏から、絵の具で着色します。この色の鮮やかさも、ここの切り絵の特徴だと思えます。ところが、この切り絵も、蔚県からきたものようです。文化的な面でも、広霊は、河北省につながっているとみていいでしょう。

市街地と南北の郊外からなる旧・大同市と、その周囲の農村県・雁北地方が合併したのは93年でした。それまでとは異なる接触の機会が増えたはずですが、大同の人たちが私に、「広霊のことばは日本語といっしょだ」なんて話しました。そのココロは、「聞いてもわからない」です。

「知らない」は、普通語では「不知道」(プーチータオ)です。大同では「プチトウ」となります。文字はいっしょですね。ところが広霊では、「ツプトウ」です。文字で表すと「不知道」でしょう。語順が変わります。でも、河北省ではかなり広い範囲で、そのように話すそうです。

山ひとつ越えるところがう、なんていいですけど、大同の各県のことばはそのようです。たとえば、王萍は大同市第4病院の看護婦長さんですが、そこには各県からの患者がきます。彼女は、どこの県の人か、言葉をきけばわかるそうです。人によっては、県のなかのどのあたりかまで、わかるのだそうです。

私は大同の農村で、中国語に耳を慣らしました。でもその後、大同の街っ子とのつきあいが多くなりました。彼らは、なまりはあっても、普通語で私に話しかけます。それに慣れてくると、最初に中国語を勉強した渾源のことばがわかりにくくなりました。親しかった林業局の温増玉局長のことばがわかりにくいし、彼のかみさんのことばはまるでわからない。それにくらべると、市街地に近い、南郊区や大同県のことばはわかりやすい。

渾源よりさらに奥の靈丘のことばは、なおさらわからないかということ、そうでもありません。大同からみるとずっと奥でも、たとえば北京からの時間的な距離は、河北省を經由すると、靈丘のほうが近いんです。たいていのことは、相対的なものなんですね。

「正義」対「邪悪」といった、単純な、わかりやすい構造は現実の世界には存在しないと私は思っています。よいお年を！

## 【2002年】少しずつ軌道に乗りはじめる

大同での協力事業をはじめたのは1992年でしたので、これで10年が過ぎました。緑色地球ネットワーク大同事務所の活動も順調に回るようになり、緑化事業の現場では、技術改善や経験の蓄積がすすみ、活着率も改善するようになりました。でも、植えたマツの初期の生育は遅く、緑が広がったとはまだ言えません。

この黄土高原だよりをもとに、1冊の本にまとめようと考え、原稿の整理をはじめました。出版社の選定がスムーズにはすすまず、半年ほど足踏みをする事になり、実際の刊行は翌年の5月になりました。

NO. 134 10年 2002.01.12

10年前のちょうどいま、いまは大同市に属する渾源县をはじめて訪ねていました。私たちの求めに応じて、中華全国青年連合会が紹介してくれたのが、ここだったのです。93年以前の所属は雁北地区でした。雁北とは、雁門関の北の意味です。山西省北部で、万里の長城は二重になっていますが、内城にある有名な関所が雁門関です。

ついでにいうと、蘆溝橋事件を契機に日中戦争が全面化したあと、中国側が最初に勝利したのが平型関の戦いでした。中国側の指揮官は林彪でした。そのためでしょう。いまでもこのあたりでは、林彪の人気の高いのです。平型関も、雁門関と同じラインの長城にある関所で、以前の雁北地区、いまは大同市の靈丘県に属しています。

平型関といえば思い出すことがあります。93年5月のツアーが、ここを訪ねることになりました。渾源から靈丘にむけて出発するとき、通訳が私のところにやってきました。「ここから先は撮影禁止なので、カメラをあずかせてもらいたい」というのです。

私は、「撮影禁止だというのなら、撮影はしない。しかし、カメラをあずけろとはなんだ。そこまで私たちを信用できないのか」なんて、激しくやりあったんですね。そして、こちらの立場を押し通した。中国全体の開放がどんどんすすむなかのことでしたけど、この10年のあいだに、私たちの関係もずいぶんと変わってきたものです。

昨年末から正月にかけて、私はけっこう忙しくしていました。この緑化協力活動のビデオをつくるんです。第2作「森よ、よみがえれ！」を制作したのが1996年ですから、5年がたっています。ずっとプロデュースしてもらっている池場道明さんから、昨年中に完成するよういわれていたのに、ズルズルと遅れてきました。締切りのあるしごとに追い立てられて、後回しにしてきたんです。「1月10日までにシナリオをつくりますので、11日にお会いしたい」なんて約束しました。今度は、待たなしです。

この「黄土高原だより」と同じように、気楽に書きはじめました。いまもそうですけど、夜、家に帰って、ショウチュウかウィスキーをチビチビやりながら書くんです。すぐにできました。ラクショウ！それにあわせて、自分で撮ったテープから、適当なカットを探す必要があります。昨年末から、それをはじめたんですよ。

92～95年はHi8方式のカメラでした。アナログです。96年からDV(デジタルビデオ)に変えました。画質が一変したんです。驚くほどよくなりました。デジタルだけでまとめたかったので、まずそれをみました。60本ほどあります。1本60分です。

途中、速送れもつかいました。しかたないでしょ。6年ぶんですからね。いい場面がけっこうあるんです。自分で撮影したものですから、なんとか陽の目にあてたい！

そのうちに、「10年なんだから、初期のものもほしい」なんて思いがわいてきました。Hi8にも枠を広げることにしたんです。ビデオ撮影をはじめたのにあわせて、SONYのEV-NS9000なんて、けっこう高価なビデオデッキを自分で買ってたんですけど、久しぶりにテープを入れると、これがダメなんです。寝ぼけたような画像はしかたがないとして、120分テープを10本ほど回すうちに、テープがからんじやった。へたをすると、せっかくのマザーテープをダメに

してしまう。

このテープ資源はどうすべきなのでしょうね。ずいぶん手間をかけて1本1本撮影してきました。つかう可能性がそうあるわけではないけど、捨てるのは惜しい。再生装置はすでに製造終了のようです。EV-NS9000を修理するにしても、ものいりです。フォーマットが変わるというのは、カクメイ的な進歩ですけど、こういう問題があります。

正直にいうと、初期の場面をみるのは、なつかしいばかりじゃありません。つらいことも多いんです。希望に満ちてやったことでも、まもなく破綻したことがあります。いっしょに活動をはじめたのに、その後、道が変わった人もいます。どうしようかな？ この場面をいれようかな？ 事実だからな？ いれないのはまずいだろうな？なんて考えて、いったん決めても、すぐに動揺します。書いては書き直し、書いては書き直しで、そのあとがたいへんだったんです。

それにしても、よく10年ももったものです。カウンターパートに恵まれたことが大きかったと思います。幸せなことです。昨年末、大同を視察にこられた日本のODA関係者が、私たちの関係をみながら「うらやましいですよ」と話されました。

同行した山西省林業庁の責任者は、大同事務所の武春珍所長を口説いたんですね。「この仕事についたのはほんとに98年からか？林業や植物関係と、それまでほんとに無関係だったのか？たった数年で、こんなことができるようになったのか？信じられない。自分たちのところにこないか。条件はいいし、たくさんのしごとができるよ」。私のまえでこんなことをやるなんて、ちょっとひどいと思いませんか？私に中国語がわかるとは、思ってたんですけど。

それから、立花先生、遠田先生をはじめとする専門家の献身的な努力です。94年から参加していただいたんですけど、いまふりかえると、それ以前は闇のなかを手探り、足探りで歩いていたようなものです。先生たちの参加で、戦略ができたんです。ものすごいことですよ。目標と道筋ができると、力がわいてくるんです。

もちろん、いまでもたくさん問題があります。理想的になんて、すすみっこありません。でも、10年前には、現在の姿を想像もしていませんでした。当時、夢にも思わなかったことが、いまは実現しています。そして、去年はできなかったことが、ことしはできるようになっています。いまはできなくても、来年はできるかもしれません。

そんなところに希望をかけながら、いそいでビデオの編集をすすめましょう。

この「黄土高原だより」、前回の134号まで、実益のない、愚にもつかないことばかり書きつらねてまいりましたので、記念すべき135号にあたって、即効的かつ実用的なお話をさせていただきます。

なにがいけないのでしょうか？いろいろと私は誤解されるんです。けっこう器用で、実務能力だってなくはないと自分では思っているのに、不器用で、ホラをふく以外は無能だと思われがちなんです。23の歳に結婚し、25歳で子どもが生まれ、団塊世代が洗われた離婚の波も回避して今日まできたのに(そう書いてもツレアイがエライと思われるだけです)、家庭もちにはみられないことが多いんです。生活感がない、なんてよくいわれます。

大同の環境林センターでまかないをしてもらっている？さん、う～ん、名前が思い出せない。彼女が、私のことを「小孩(こども)みたいだ」と、ことあるごとにいいます。そして、「料理なんてまるでつくれないだろう」なんてからかうんですよ。

しゃくにさわるから、「ちゃんをつくれる。方便麺(インスタントラーメン)とユデタマゴだ」なんて答えるんですよ。それにプラスして、オデンだって私のメニューにあるんですけど、大同では材料が手にはいない。説明するのだってむずかしい。

昨年秋、「カササギの森」の作業棟の前にテントをはって、キャンプをしました。大同事務所の武春珍所長がとりしきって、ギョウザパーティになりました。小麦粉から皮を練るんです。それがおいしい。中国でふつうにギョウザといえば、水餃子、ゆでたものです。「菜」ではなく、「主食」に属します。男まさりの小武が、あんなにじょうずにできるなんて思ってもいませんでした。通訳の王萍の腕前は、確認済みです。

そういうチームに参加するわけにはいきません。私のプライドがゆるさない(?)。ブラブラしていたら、「じゃあ、ガオジェン(高見)はユデタマゴをつくれ」ということになりました。さっそくその作業を開始しました。なべに水を張り、それにタマゴをいれて、持参のキャンプ用ガスコンロにかけたんです。すると中国側メンバーが、「高見はユデタマゴもつくれない」といって笑うんですよ。

そして、こうやるんだといって、グラグラッに湯をわかして、そのなかにどんどんタマゴを放りこむ。私のことをあんまりバカにするから、「大同で水が沸騰するのは何度だ？」ときいたら、誰も答えられません。大同の市街地の海拔は1,040m。カササギの森は1,450m。私が答えをだせれば劣勢を挽回できたでしょうけど、私もわからなかった。再沸騰してから、10分間ゆでたらできあがりだ、ということです。

それまでずーっと、タマゴは水から入れるものだと思っていました。日本に帰って、「ユデタマゴをつくるとき、タマゴを水から入れるの？ 熱湯に入れるの？」と聞くと、これまで聞いた人は、例外なく「水から」というのです。

その理由は「熱湯にタマゴをいれたら割れてしまう」ということです。私もそう思いこんでいました。中国風に熱湯にタマゴをいれたら、たしかに、割れるものもあります。でも、せいぜい10個に1~2個です。水から入れても、それくらいは割れるでしょう。そして、いきなり熱湯のばあいは、割れても白身がすぐ固まります。かたちがくずれることがない。試してみてください。

でも、それだけだったら、水からだって、熱湯からだって、どっちだっていいじゃありませんか。中国風の利点は、カラがむきやすいことです。かんたんにクルッとむけます。

私がそういうと、「それは自分でもわかっていました。中国のユデタマゴはむきやすいんです。でも、それはタマゴが古いからだと思っていました」と事務所の東川さんが応じました。時間のたったタマゴはむきやすく、新鮮なタマゴはむきにくい、という経験則があるのだそうです。

13日、14日の連休、つれあいが東京出張でした。昨日の夜はナベ、今晚はオデン。乏しい私のメニューでは、これが限界です。こんな話題になぜなったかも、わかっただけでしょう。寒い夜、オデンをつくるときにでも、試してみてください。

なにごとであれ、その社会が1つのことを定着させ、価値や常識として固定されると、それに逆らったり、ひっくりかえしたりするのは、たいへんなことです。私は以前、「異質なものと混じる」(NO. 113)と、ベクトルが逆の話を書きました。思い出していただくと幸いです。

## NO. 136 「中国ブーム」 2002. 01. 20

「中国ブーム」なんですね。そう書くと、思いだしますよ。日本と中国の国交が正常化したのは1972年です。中国の友人の年賀状には、国交正常化30周年にふれるものがたくさんありました。パンダブームといえ、すこし若い人にも思い出してもらえるかもしれません。でも今回の「中国ブーム」はずっと異質です。カッコつきにしました。

「ユニクロ現象」なんていわれたのは、ほんの1~2年まえだったと思いますが、その段階はすぎて、「ハイテクのコメ」といわれた(これも古いですね)メモリも、中国が独占しそうですね。韓国だって、太刀打ちできないそうです。日本のお家芸だった家電、自動車なん

かも、どんどん中国に「進出」「提携」しています。進出も移転も言葉は勇ましいけど、場をゆずっていくと受け止められるようです。

マスコミに報道される大手だけじゃありません。その関連企業、地方の中小企業が中国にむかっています。いまや中国は世界の製造工場で、最後の有望市場だ、なんていわれます。いかにじょうずに中国に進出するかが、個々の企業にとっての生き残り策になっているようです。どこがうまくやったとか、やりそうだという話がでると、ここで遅れをとったら命取りになる、という雰囲気があります。

企業関係者の話をきく機会が、昨年末から年始にかけて、ずいぶんとありました。情報というのは、本質的に物々交換なのかもしれません。私が知ってる中国のことをアクセラカンと発信すると、それを受け取った人が、応えてくれます。なかには、「あれはまちがってる。ホントはこうだ」なんてね。中国人からそういわれることもあるんですけど、ワタシの対応はかなりひどい。「あんたが知らないだけだ」なんて平気で返します。

日本の企業が注目するのは、中国の労働力の安価さです。ピチピチした、すなおで良質な若年労働力が、日本にくらべて30~40分の1でえられるというんですよ。福利厚生費なんかを計算すると、それ以上かもしれない。「貼り紙1枚で、門前に列ができます」と、話してくれました

これまででいうと、韓国、台湾から東南アジア諸国まで、国民経済があるていど発展したり、外資がはいったりすると、ほどなく人件費も上昇しました。適当なところで平衡状態になるわけです。ところが、中国のばあい、そうなりそうにない、というんです。中国国内に広大な後背地があって、安価で良質な労働力がいくらでも補給されるというわけです。

北京の友人も、よくこんな話をします。日本でいう3K(きたない、きつい、きけん)のしごととは、たとえ失業していても北京人はしないで、主として南方からきた人がしているというんですよ。全体としては、東部沿海地方の発展を、内陸が支える構造といてもいいのでしょうか。その面での中国の「優位」は、しばらくは揺るがないとみられているようです。

労働力の安価さだけでなく、中国人の能力に注目する人も増えてきました。尺度はちがうようですが、私もそう思います。日本ではもう出ないであろう「人物」「大人物」から「能吏」「秀才」まで、あちこちにいるんですね。

中国だけでなく、アジア諸国の向上心に富んだ若い人には、かなわないんじゃないか、という思いは、日本の経営層にも強いようです。エリート層ばかりじゃないんです。ハッとするような人が、貧乏な農村にもいるんですよ。この活動を私が10年つづけられた理由は、そういう出会いがおもしろかった、という面がかなりあります。

その逆に、大陸ですから、ハシにもボウにもかからない人間も多いんです。日本のような島国だと、人物もいないかわりに、だめな人間もすくない。平均的なところに集まっている中国のばあいは、底辺だけじゃなく、高級幹部のなかにも、無能な人間がちゃんといるんです。無能なだけならいいんですけど、人の足を引っ張るのが専門という人さえいます。でも、日本はそうじゃない、といえない気持ちになっていますが……。

日本企業が中国に進出して、うまくいくとはかぎりません。そうでないケースが多いんです。「戦後賠償を政府がしてないぶん、個別企業がさせられている」なんてこぼす人もいました。「進むに進めず、退くに退けない」となげく企業トップの話もききました。数十億の資金を投じたのに、実績は上がらず、投資額が大きいために退くこともできないというわけです。

さらに、今回の「中国ブーム」には、構造的なやっかひさがつきまといまいます。はじめにいったように、「中国進出が生き残りのすべ」と個別の企業は考え、せっぱつまっています。ところが、それが集合した、経済界とか、政府とかなったら、受けとめかたがガラッと変わります。失業率の上昇、産業の空洞化……、問題は深刻化する一方です。日本がナワにクビをかけているのに、中国がでてきて足をひっぱるのか、といった議論があるんですね。

賃金水準がどんなにあっても、新しい分野、優秀な商品を開発・生産して、そこで生き残るんだ、という気持ちが、日本にはあったのに、いまはなくなったというんです。自信喪失状態です。

学生時代からの友人の干場革治さんが、個人通信「あまだい通信」に書いてました。農水族の議員たちにそそのかされて、日本政府がネギ、イグサ、シイタケなどでジャブをだしたら、中国は自動車その他でいきなり往復ビンタを返してきた。あまりにひどいじゃないか、という議論があるというんです。

そのとおりなんですけど、そういう反撃を日本側は予測しなかったんですかね？「強い相手には弱く、弱い相手には強い」という日本のイメージを、中国人は歴史のなかで形成しているんですよ。そう思われてもしかたのないところが、過去も現在も、日本にはあると思います。悲しいことですけど。

いい処方箋が、私なんかにあるわけではありません。ただ、いろんな問題が深層にたまっているときに、国交正常化30年の記念の年だからというので、不自然な「友好」を演出するよりは、お互いが相手を理解し、また理解してもらうために、率直なぶつかりあいをしたほうがいいんじゃないでしょうか。日常的な接触の機会は以前よりずっとふえ、深まってきていますし、今後はもっと拡大するわけですから。しばらくあいだをあけて、つづきを書きたいと思っています。

## NO. 137 環境問題、3つの根源 2002. 01. 28

環境問題は、人間がつくりだすものです。自然の現象が人間の生活に悪影響をもたらすこともあります。それは環境問題とはいわないでしょう。環境問題は人間が社会的につくりだすものだともいえます。

ということは、それを構成する個々の人間のあり方、つきつめると脳のはたらきのなかに、環境問題を引き起こすなんらかの問題点、欠陥があるといってもいいでしょう。こういう立論には飛躍がありますが、まちがっているとは思いません。人が客観的な世界を認識するのは脳のはたらきであり、脳のはたらきにあわせて、世界をつくりかえるのが人間という生きものだと思うからです。

そういうふうの問題を立てたとき、3つの問題点を私は感じます。第1は、「うるものと失うもの」の関係です。うることと失うことは同時進行します。同じことの2つの側面といっているのかもしれませんが。

たとえば人間は齢を重ねるなかで、多少の知恵と知識の代償に、みずみずしい感性と夢を失います。多少の経験と引き替えに、失敗を恐れぬ権利と勇気を失います。「若気のいたりで…」なんていうのは、ずいぶんとひからびて、しかもその自覚がないということです。

もっと卑近な例だと、いま私はこの文章をキーボードで打っています。ワープロをつかいはじめたのが1983年でしたから、20年近くなります。ペンで書いていたときの何倍ものスピードです。あるいはそれ以上かもしれない。考えるまでもなく指が動き、できあがっていく文章を、他人の文章であるかのように、ディスプレイでみえています。

ペンで文章を書く能力は完全に衰えています。なくなっています。簡単な漢字だって書けないんですよ。メモだってペンで書く気がなくなる。Palmをつかいだして、その傾向がつまりました。そこまでは、まだ自覚がある。

以前は、それなりに考え、書き出しから締めくくりまで、スジをつくってから、原稿用紙に書いていました。頭をふりしぼっている、という実感がありました。脳を訓練する効果もあったと思うんですよ。いまは思いついたことから書きはじめ、ほとんど考えない。

脳の一部を、外部のパソコンに移したような感じで、それとの対話のなかで文章ができる、ということです。そう考えると、能率をえた反面、失ったものも多いはずですけど、それがなにか自分でもわかりません。文章がカルクになったのは、まちがいないことですけど。

適切な例かどうかわかりませんが、うることと同時に、かならずなにかを失っているわけです。そして、うることの快適さ、便利さはすぐわかるけど、失っていることは自覚されないんです。失ったことに気づいたとしても、ずっとあとのことです。そのころには、以前は存在していたことさえ、人は忘れていくかもしれない。メリット・デメリットを比較しつつ選択することができないんですね。このような構造では。

農業を含めた産業の発展は、人類にたくさんのもをもたらししました。それは自覚されています。その反面で、失ったものも少なくないはずですが。環境破壊はようやく自覚されるようになりましたが、すでに手遅れかもしれない。

2番目の問題は、長期的・基本的な課題と、差し迫った目先の問題とでは、目先の問題を優先する、ということです。俗なことばでいえば、「背に腹はかえられない」ということでしょうか。あるいはもっと、単純なことかもしれません。自分自身の卑近な例を書きます。

こしはこの活動をはじめて10周年です。ビデオの前作「森よ、よみがえれ！」をつくったのは96年で、5年がたっています。新しいビデオを編集することは、昨年のはじめから決めていたんですよ。事業計画のなかでも、重視していました。ずっと気にかかっていたんです。でも、それに比べたら、ずっと小さなことでも、〇月×日までという閉めきりのあるしごとだと、そちらを優先してしまうんです。

結果として、プロデューサーの池場道明さん、ディレクターの中田眞一さんに、たいへんな迷惑をかけています。そんな経験は、みなさんにもありませんか？

環境問題というのは、長期的・基本的な問題のさいたるものなんですね。どんな社会も、どんな経済も、どんな文化も、環境の制約をはずれたら永続できないのははっきりしているのに、目先のことを重視して、環境のことは軽視しがちです。

3番目は、環境問題はまずは弱い立場の人に犠牲のいく問題だということです。そして、多くの人は、自分より弱い立場の人には関心を寄せない。そのために解決が遅れる、という問題です。

立場のいちばん弱い人って、どんな人でしょう？まだ生まれていない、これから生まれてくる未来世代です。そのつぎは、まだ自分を主張できないこどもの世代です。この人たちは、外部からの影響にひじょうに敏感なんですね。同じ汚染であっても、成人よりははるかに大きく影響を受ける。環境ホルモンが問題になるのは、そういう人たちです。

そのつぎは、差別されたり、無視されている人たちですね。世界的にもそうですし、日本の

国内でもそうです。貧乏な国(地域)の貧乏な層ほど、他から振り返られることが少ない。

そういう地域、そういう人びとの犠牲として、まずは環境問題は姿をあらわすんですね。環境問題だけではありませんが。アフガン報道を目にし、黄土高原の農村との共通点に、私は驚いていました。たとえば旱魃や水不足が深刻なこと。90年代にはいって、いっそう頻繁になり、被害が深刻化しています。

地球温暖化との関連が疑われるんですね。日本をはじめ「北」の諸国では、地球温暖化は未来形で語られるけど、「南」のそういう地域では、現在進行形なんです。弱い立場の地域や人びとに、もっと関心を寄せていたら、解決への時間もコストも短縮されるんでしょうけど、どうしても対策が遅れる。

人間という存在は、少なくとも、そのような欠陥をかかえているようです。せめてその自覚だけは失わないようにしたいと、自戒しています。なにやら、ややこしい話がつづいてしまいました。

#### NO. 138 霊丘植物園のメンバー 2002. 02. 06

昨年末からとりかかってきたビデオづくりが2月3日の夜、完成しました。ホッとしています。100時間以上の素材テープをみたんですけど、ほんの一部を除いて、自分で撮影してきたものです。ほかの人がみたら、意味を感じないようなものにも、思い入れがあるんですね。

ディレクターの中田眞一さんに、酔っぱらってから、「あれは入れて欲しかった」なんていってんですけど、中田さんにはきっぱりと拒否されました。完全に私のまちがいです。作品は、みる人のためにあるべきです。中田さんは、私たちのために、これまで3作品をまとめてくれていて、これが4番目だったんですね(うち2本はテレビ大阪の番組)。自分でいうのもなんですけど、かなりのレベルのものだと思いますよ。10年の積み上げを感じてもらえると思うのです。

ビデオの編集作業にタッチしながら、思い出したことはたくさんあります。今回はその1つ。1995年8月のことです。その年の夏のワーキングツアーは、大同市最南部の霊丘県を中心に活動しました。アブラマツ、カラマツなどの植林地をみたあと、上北泉村の果樹園(リンゴ)に回ったんですよ。

そしたら立花吉茂代表が、「この果樹園をつくった人間はできる。環境林センターに引き抜けないだろうか？」というんです。立花さんとその人物は、面識はありません。環境林センターというのは、その年の春から、大同市郊外の南郊区で建設がはじまったこの協力活動の拠点

です。大同事務所の祁学峰所長(当時)に話すと、「魚は水を離れられない。農村の人を、地元から離すのがいいとはかぎらない」と応えました。そういう具体的なことでは、私はつねに彼の意見を尊重していました。

その技術者とは、その後、ずいぶんと縁が深まりました。名前は李向東です。変わった男なんです。見かけは貧相です(自分のことをタナにあげていうとね)。植物が好きです。熱中します。ものすごい集中力です。立花さんが、その作品(果樹園)をみて感じたのは、おそらく、そういうことでしょう。

李向東はその後、環境林センター霊丘支所、霊丘植物園の責任者になりました。たいていの人が、彼にたぶらかされるんですよ。1999年のことですが、訪日研修団のメンバーとして彼がやってきました。10日ほどの短い期間に、彼は2度、迷子になりました。なにかに関心をもったら、周囲のことが消えてしまうんです。かってに動いてしまうんですよ。自分がいなくなるだけでなく、ほかの人もつれていってしまう。はたの人からみると、いかにも確信ありげだから、その動きに引きずられるんですよ。案内役の日本人まで。

JA(農協)につれていくと、農機具に興味しんしんです。中国では想像したこともない、便利なものが多いんですから。だいたい中国では、切れるノコギリやハサミを手に入れるのが至難ですからね。李向東は、もってきたお金のすべてを、農機具の購入にあてました。短く収納しても、長さが2m近い高枝切りまで買って帰りました。種子を集めるのにつごうがいい、といって。

垢じみた、というのは、彼のことをいうのでしょうか。そのうえ、荷物が人一倍おおい。案の定、北京空港の税関でとめられたそうです。大事にならなかったのは、中国国際航空(CA)が、関空出発時点で2時間以上も遅れ、北京到着が深夜になったおかげです。税関職員も疲れていたんでしょう。

彼の数字の感覚がまったくあてにならないことは、以前に書きました。彼のいう1kmは、3~5kmであることもあります。急なアップダウンの山道をさんざん引き回され、両足とも激しくケイレンしたこともあります。2時間で到着できるといわれたんですけど、実際はその3倍もかかったんですね。なんどだまされても、「高局長(彼は私をこう呼びます)、こんどはまちがない」なんて彼が口にすると、じゃあ、いってみようか、という気になるんですね。

中心になる人って、だいじだと思うんですよ。類は友を呼ぶ、といますが、霊丘自然植物園には、ほんとに植物のすきな連中があつまったんですね。

周金は、植物園のむかひの劉庄村の出身です。若いころは、薬材会社に働きにでており、海南島までいっていたんだそうです。両親が老いてきたので、出身の村に帰りました。植物園へ

は、果樹の栽培をつうじて知り合いだった李向東の誘いがありました。

周金が私に話してくれたんですね。「農民として朽ちるしかないと思っていた。そこにこんなしごとが舞い込んできた。自分の植えた木が、自分が死んだあとも生きつづけると思うと、楽しくてしかたがない」。そうって、あの真っ黒な顔に、涙まで流すんですよ。

劉庄村というのは、日中戦争のさいに、日本軍が虐殺事件をひきおこしたところです。数日間で250人以上を殺したそうです。被害の大きかった大同地区のなかでも、「劉庄惨案」として知られています。親族のなかに、犠牲になった人がかならずいるはずなのに、そんなふうに彼は話してくれるんです。

なにか新しい植物の種子がきたら、5~6人の職員に、それを分配するんですね。そして1人1人が、自分でくふうして、何種類かの方法でそれを育てる。ほかの人がどんなふうに行っているか、おたがいに気にしてますし、競争心もある。結果として、1年で、10種類以上の栽培方法が試される、ということになります。高等教育、専門教育を受けた人は1人もいないんだけど、そういう智恵が働くんです。

やっぱり、すきだからだと思えますよ。こういうしごとにとって、すきだというのが、いちばんだいじだと思います。立花さんは、果樹園を一目みて、そこまで読んだということです。

## NO. 139 「分ける」と「分かる」 2002. 02. 12

もうかなり以前のワーキングツアーのときのことで。場所は霊丘県の招待所。大同からの車中で、ここでつづけてきた協力事業の内容を紹介していました。その夜、私の部屋に集まったなかに、1人の学生がいたんです。車中の話のつづきをしました。すると彼が、「高見さん、そういう手法は〇〇〇方式というんですよ」といったんですね。〇〇〇のところにはアルファベットがはいりました。

とたんに私はしらけてしまった。情けないことですが。小学校付属果樹園のプロジェクトは、この霊丘からはじまりました。いいだしっぺは私ですが、内容の多くは、地元の青年たちがくふうしたものです。最初は、村の人たち、とくに長老の反対がきつかったんです。霊丘は日中戦争のさいに、たいへんな被害を受けました。「なにが悲しくて、いまさら日本のほどこしを受けなければいけないんだ」という反応があったんです。

反対や障害を乗り越えて、このプロジェクトは内容をたくわえました。そういう経過をとばして、「△△型」なんて枠にいれて、なんの意味があるか、と反発してしまったんですね、私は。相手の学生に、悪気のあったはずがありません。彼は大学院で、開発協力にかんする勉

強をしており、そこで教わったことと重なるモデルを発見して、うれしかったんだと思うんですよ。ところが私はそのとき、そう受け止める余裕がなかった。

なんとか、自分の気持ちを落ち着かせたかったんです。「う～ん。コーヒーをもってきてるから、それでも飲もうや。悪いけど、お湯をもらってきてくれるかい。できるだけ熱いやつを」と彼にたのんだんです。

部屋をでていった彼は、まもなく帰ってきました。手ぶらで。そして、「通訳がみつかりませんでした」なんていうんですね。「えっ、ポットにお湯をもらうのに、通訳がいるの！」なんて、私はびっくりしました。国際協力を専攻していて、やがて国外にでて、そういうしごとで就こうと思っているはずなんですよ。

私は、大学には入学したものの、授業にはほとんど出ませんでした。教室に顔をだしたのは、入学した年のゴールデンウィークまでです。寮には行って、学生運動に熱中してしまったんです。「中退というのは学歴詐称ですね、ほんとは初退です」なんていうしまつです。ですから、大学教育のホントのところはまったく知りません。

そういう私のいうことだから、いうことに説得力はないと思います。でも、現実のさまざまなできごと、ものごとを、なんらかの基準で分類し、それにラベルを貼って、わかったような気になる。まして、それがアルファベットだったりする。そういうのはどうかな、という疑問は強まるばかりです。

「分ける」と「分かる」は同根だそうです。深く理解するために、「分ける」ことが重要なものは、わからないわけじゃありません。「分析」だって、もちろん重要です。

でも、そこまで完結はできないと思います。あまり役に立たないと思います。現場で求められるのは、バラバラのものを、組み立てる能力だと思います。総合する力です。

支障なく動くパーツがそろっているわけではありません。ほかの人が見向きもしないもののなかから、価値あるものをみつけだす必要があります。だれかが捨ててしまったもののなかに、いいものがあるかもしれない。外からの協力をほんとうに必要とするところは、そういうものしかないんですよ。それを集めて、くふうして、なんとか組み立てていく。

そのばあいにはいちばん必要なのは、自分の頭を働かす、ということです。自分で考える、ということです。中国でも私はいらだって、若い技術者にあたりちらすことがあります。「あなたのアタマはボウシの台か？ 自分で考えろ！」なんてね。でも、「自分で考えろ！」なんていうのは、教育なんかじゃない。そういわれたから、じゃあ考えます、なんてわけにはいかないですね。いったいどうしたらいいんでしょうか？

前号で私は、学歴とは無縁の、霊丘植物園の技術者・職員が、自分たちでいろいろ工夫しながら、苗を育てているようすをレポートしました。「感動的な話だった」というメールがたくさんきて、私はびっくりしました。意外なときにそういう反応があって、「今回はよく書けたぞ」と自分で思うときは、あまり反応がない。どうも私の感覚は、ほかの人のそれとズレているようなんですね。そんなことはどうでもいいとして、自分で考えながらしごとをする植物園の李向東、周金なんかといっしょに、なにかをやっているのは、私にとって楽しみです。

お金もなければ、人手もない。零細 NGO の現場というのは、その典型なんですね。なにもかも足りないところで、自分の頭を働かせ、創意工夫して、問題を解決していく。それしかありません。必要なものがあるとき、お金をもって買いに行くのは、しごとじゃないんですね。タダでもらうことを考えるか、お金をつくるところから考えるか、それしかないんです。なんでも自分でやらなくてははいけない。

だから、「ひょっとすると、勉強するためだったら、零細 NGO で活動するほうが、大学院にはいるよりいいんじゃないの？」なんて、いいたい衝動に駆られます。でも、ことわっておきますけど、私たちが求めるのは即戦力です。ほかの NGO でも似たようなものでしょう。時間をかけて育てる余裕と能力がありません。学校のつもりでこられても、ていねいにつきあうことなんてできません。

そういうことでは、私たちの将来が暗いことは自覚しています。でも、いまは持続するだけでせいっぱいなんですね。ほんとに余裕がありません。う～ん、書きはじめの意図とちがうところに、着地してしまいました。それが零細 NGO の実態なんだと、理解してください。

## NO. 140 光打雷不下雨 2002. 02. 18

中国語のわかる人は、標題をみて、ニヤッとしたかもしれません。日本語に訳すと、「雷は鳴るけど、雨はこない」といったところでしょうか。

中国の中緯度地方は雨がすくないんです。こういう自然現象もたびたび起こるようです。1993 年秋のことでした。大同県徐町郷の郷政府にかなり長いあいだ、私は泊まっていました。ある夜、激しい雷になりました。稲光もすごいんですよ。瞬間、周囲の光景が浮かび上がります。それが何十回も何百回も連続して繰り返されるんですよ。

音もすごい。日本のように瞬間ではなく、ゴロゴロゴロゴロ、いつまでも鳴りつづけているんです。一晩中つづいたように思ったのですが、たぶん途中で寝てしまったでしょう。でも、雨はまったく降りませんでした。

98年の夏、霊丘の李向東のところに泊まったときもすごかったんです。南がわの山の上あたりで、稲光がすごいんです。それも瞬間に光るんじゃないんです。光りっぱなしなんです。天の高いところと雲とのあいだで放電がくりかえされ、それが雲と雲とのあいだに移った、といった感じでした。オーロラのような、光の帯といてもいいのでしょうか。かなり近いところで光っていたものが、だんだん遠ざかっていきます。それをずーっとビデオで撮っていたんですけど、でも、使い道はないですね。あとの雨がこないんですから。

そんな光景をみながら、以前に読んだ中国の小説の一節を思い出しました。「雷は鳴るけど、雨はこない」。日本語訳で読んだので、中国語でどういふのかわからなかったんですけど、池本和夫さんといっしょに農家に泊まったとき、中国語が堪能な彼にきくと、「たぶん、『光打雷不下雨』だと思うけど…」といいながら、そのオヤジにたしかめてくれました。やはり、そうでした。

小説の描写は、自然現象のことではありません。「口では大きなことをいうけど、役にたつことはしない」といったところでしょうか。老百姓(庶民)が幹部を皮肉るときに、主につかわれることばです。そういう幹部が、たしかに多いんですよ。

じゃあ、あの雷(自然現象の)は役にたたないんでしょうか？大同を訪れた植物の専門家が、ふしぎがります。盆地の畑は、水に恵まれれば、トウモロコシなんかがよく育ちます。私たちの環境林センターもそうですけど。黄土がミネラルを豊富に含んでいるのはわかるけど、でも、チッソはどこからきているか、というんですね。

農家では、堆肥や糞土をたいせつにします。糞土というのは、人間や家畜の糞尿を土にまぜて、発酵させたものです。湿気が多い日本では液体で運びますが、こちらでは固体状です。あちこちの農村で、年間の農作業について聞き取りをしたことがあります。春節があけて最初にする作業は、道路に落ちている家畜の糞ひろいだというんです。たいていの農家では、家の前の便利なところに堆肥置き場があります。よそのニワトリが、そこにはいってかきまぜ、なにかを食べてたりすると、石を投げて追っ払うんですよ。でも、面積あたりにしたら、畑にいれてる量はわずかなものだと思います。

化学肥料だってつかってはいます。これだって、わずかです。農産物の値段にくらべて、工業製品は割高ですからね。

19世紀後半に中国各地を回ったドイツのリヒトホーフェンは、「黄土には自己施肥能力がある」というようなことを書いたんだそうです。そのあと、ずっとそのような誤った説が踏襲された、とのことです。東京のあるシンポジウムで同席した原宗子さんが発表されました。でも、少なくとも盆地をみているかぎりには、「自己施肥能力」なんていいなくなる現象があるんです。

大同にこられた専門家の1人は、「アルカリの土には微生物が多いんですよ。そのなかに、チツソを土中に固定しているものがあるんじゃないか」といわれました。ツチクラゲなんかは、雨のあと、たくさんでているのはみかけます。でも、ちゃんと調査したわけではありません。

「糞土なんかで補うチツソの量は多くなくても、雨が少ないぶん、日本のように流されない。効果が持続するんじゃないか」という人もいます。これもありそうなことです。

「雷がおおいんでしょう。あの放電がチツソを固定するんですよ」といわれた人もいます。そんな話を飲み屋でしていたら、柳田耕一さんが、「雷のエネルギーはすごいんだよ。昔の人は、そのことをよく知っていた。『稲妻』というでしょ。稲の妻というくらいですからね」といいました。彼の口からでると、もっともらしい。だとすると、雨をともなわない雷にも、いいことがあります。大口だけたたいて、なにもしない人は、ずっと劣るわけですね。

ところで、そういう意味での「光打雷不下雨」に、かっこの日本語訳があります。「風呂屋の釜」です。そのココロは「ゆう(湯)だけ」。おそまつでした。

#### NO. 141 恋愛と結婚・子育て 2002. 02. 25

ことは日本と中国の国交正常化から30年の年です。日本と中国の双方で、さまざまな記念行事が計画されているようです。この30年にも、いろんな局面がありました。基調は「友好」だったでしょう。しかし、ここしばらくは不協和音やキシミが強まっています。そのぶん、ことは「友好」がよけいに強調されることでしょう。

悪いことでは、ありません。関係を悪化させるよりはずっといい。でも、「30周年記念」の「友好」ばかりでは、さびしい気がします。

注意深い人は、私がこの「黄土高原だより」のなかで、「友好」という表現を徹底して避けていることに気づいておられるかもしれません。そうなんです。この通信でなく、日本でも中国でも、この10年近くは「日中友好」を口にしたことがありません。手垢がついていて、イヤなんです。

自己反省もあります。私もこの緑化協力をはじめる以前、友好交流の活動に従事してたんですけど、あまりにも中国の実際に無知でした。「友好」という枠にはまると、それを通してしか、ものごとをみられなくなるようです。認識に甘さがでてしまう。そう考えるようになりました。

「友好」というのは、恋愛と似ているかもしれませんが。恋愛は、かなりの部分、相手にたいする無知によって燃えあがります。私の彼女は、オナラなんかしないし、トイレにもいかない、くらいに思っているときに、最高に盛り上がるんじゃないかと思うんですよ。

いったいどれだけの人が、「為日中(中日)両国人民世代代友誼、乾杯！」とやってきたんでしょうね。それが日本側で中国のことを理解するために役立ったかという、実情はお寒いものです。中国側で理解された日本も、現在の預貯金の利子・利息くらいのパーセンテージかもしれません。

木を植えて育てるのは、そういうこととは対照的なんです。やっかいなことに、木は生き物です。生き物の最大の特徴は、いったん死んだら(枯れたら)、生き返らないことです。あいまいさが許されない。

なおかつ、盛り上がりの乏しい、ゆったりとした長い過程です。はでな起工式をし、大きな記念碑を建てたところほど、失敗したように思います。本質的なあり方に反しているからでしょう。これまで10年つづけてきましたけど、緒についたばかり、というのが実感です。主体は植物で、私たちは環境を整えながら、それが育つのを待つしかありません。苗を引っ張ったって、伸びが速まるわけがない。

じゃあ、寝て待てばいいかという、そうじゃないんです。なにをやるにも適期があって、時間に追われる。新しい試みにとりくむときも、ことしのその時期を逃すと、1年先しかチャンスのないことが多い。気象のこと、土壌のこと、その樹木の特性……、それらをできるだけ深く理解する必要があります。そのことばかりを四六時中、考えている人が最低1人はいないと、うまくいきません。

そうしたこと以上に、カウンターパートとのおたがいの理解が必要です。相手の長所をみるだけでなく、短所もみすえて、カバーしあいます。カウンターパートとどういう関係を結べるか、というのが、決定的に重要だと思うんですよ。

「理想のカウンターパートは、こうあるべきだ。もっといい相手があるはずだ」といった議論をする人がいますけど、自分でしごとをする人は、そんなことは口にしないと思います。不足するところがあっても、問題があったとしても、かんたんに相手を変えることはできません。自分のことをかえりみると、高望みのできるわけがない。関係を継続しながら、自分が変わり、相手も変わる。関係するというのは、関係の双方が変わる、ということです。それしかありません。

そういうふうに考えてくると、なにかに似てますね。「友好」が恋愛だとすると、樹木を育てるのは、結婚生活を維持しながら、子育てをするようなものです。熱く燃えるよりは、相手

を理解し、長期に維持することのほうが重要です。といっても、恋愛を否定するわけではありませんよ。恋愛を飛び越えて、いきなり結婚・子育てなんてのは、たいいていの人にはごめんでしよう。

夫婦ゲンカは犬も食わない、なんていいますが、そうじゃないと思います。感情をあらわにして、ケンカをすることも、おたがいの理解を深めるために必要だと思うんですよ。それぞれの思いの内容は、言葉で表せますけど、その深さ、強さといったものは、感情によってしか伝わらないと思うんです。

そんなことを考えながら、「友好は恋愛のようなものだけど、木を植えるのは結婚・子育てのようなものだ」なんて私がどこかで話したら、カメラマンの橋本紘二さんの気に入って、「あな話をしろ」なんてほかでも催促するんです。

私もその気になって、あちこちでしていたら、親しい友人からクレームがきました。「結婚や子育ての話をする資格が、高見にあるのか」というわけです。「高見のむすこは2人だけど、太田さん(私のつれあいです)のむすこは3人だ。高見が長男だ」なんていわれるしまつですから、そのクレームに根拠はある。

夫婦ゲンカだってほとんどしたことがありません。私がカシコイからです。負けるケンカはしないんです。

## NO. 142 土への回帰(1) 2002. 03. 02

2月の末に、音威子府村にある北海道大学の中川演習林に行ってきました。「演習林」は、新しい名前が変わっているんですけど、古い話のためですから、そのまま許してもらいます。中国での話をするためです。遠田宏顧問といっしょでした。実習のための学生宿舎に、林業の古くからの道具が展示してありました。オヤジがつかっていたのと同じ、なつかしい道具をみました。それに触発されて、3月1日の夜、帰宅してからこれを書いています。

1948年、私は鳥取県の貧しい農村で生まれました。父親は戦争中に2度徴兵され、中国の東北地方と朝鮮半島を転々としたようです。ノモンハン戦役に加わったことを知ったのは、彼の葬儀のとき、神主のことばからでした(実家は神式です)。敗戦後もしばらくは朝鮮半島に残り残され、同じような境遇の数人といっしょに漁船を盗んで、日本海をこぎ渡って帰ったそうです。

「ある日、家の前に、ヒゲぼうぼうのやせこけたホイタ(乞食)さんが立った。垢で汚れた軍用毛布を頭からかぶって。こっちの顔をジーツとみてる。こっちもむこうの顔をジーツとみ

て……。なんと、それがおとうさんだったんよ」。母親が1度だけ話してくれたことがあります。そういうことがあって、私が生まれたんですね。「団塊の世代」の形成には、戦争がからんでいます。

95年12月、講演に備えて、東京の宿に泊まっていた私のところに、父親の訃報が届きました。斎場から持ち帰ったオヤジのお骨を、墓に納めました。火葬に変わったのに、葬儀の流れは土葬のころのもので、その日のうちに納骨します。親戚のものもみな帰って、心の底に穴があいたような寂しさを感じていました。そのとき、1人の老人が訪ねてきたんです。「高見さんが亡くなられたそうで、私が最後になりました」といわれます。朝鮮半島から船でいっしょに帰ったなかまだそうです。

私のオヤジは、戦争中の人とは、つきあいが薄かったようです。この緑化協力で、大同の近くにいていた戦友会の人から支援をえました。「オヤジたちは戦友会なんてないの？」と私がきくと、「あんなとこにいくのは、いいめをみてたヤツだ」とだけ苦々しげにいいました。革新的だったわけではありません。自民党議員の応援をずっとつづけていました。私が学生運動をはじめたことを知って、ずいぶん気に病んだんですよ。

そのオヤジが、私はだいすきだったんです。ふるさとは大山のふもとです。山が近い。日本海も近くて、1kmもありません。山が近くて、海が近いということは、平坦なところがない。耕地が乏しい。すなわち貧乏だ、とっていいでしょう。

私のきょうだいは全部で5人。戦争からオヤジが帰って生まれたすぐ上の兄は、「聡」と名づけられた直後に死んだそうです。彼が死んだために、生まれるチャンスが私に回ってきたんでしょう。私は戸籍上は3男ですが、実際は2男です。そして妹が2人。

わずかな田んぼと畑では、やっていけません。農業のかたわら、オヤジは木挽きと馬車引きをしていました。山の木を伐ります。主としてクロマツ。それをウマにドウビキさせます。伐った丸太にクサビを打ち込み、それをチェーンでウマの鞍とつないで、地べたを引かせるんですね。馬車のはいれる山道まで、そうやって、材木を引き出します。

その材木を、自分の肉体と、テコとをつかって、馬車に積み込みます。親父が1人でやります。私なんかみてるだけです。それから国鉄の貨物駅か、トラックのはいるところまで、運び出すんですね。

ウマから馬車から、ぜ〜んぶ込みで、私が高校生になった東京オリンピックの直前でも、1日1,000円もなかったと思います。工業高校を卒業して、県の職員に採用された5歳上の兄の初任給が8,000円くらいだったと思うんですけど。

私はオヤジっ子でした。学校にはいるまでは、金魚のウンチのように、くっついていました。小学校には行ってからも、可能なかぎり、いっしょにいました。夏休みなんて、オヤジといっしょにいるのがいちばんの楽しみだったんです。山から木を伐りだすときは、1週間とか10日、山に泊まります。馬車にドラム缶を積んで、山にはいりました。木の枝や草を刈って、小屋をつくります。

飯ごう炊飯です。「この木の芽はおいしい。

この草も食べられる。あいつは毒がある」なんて、その場その場で教えてくれるんです。キノコもとったんですけど、幼い私には理解できない、危ないと思ったんでしょう。アマタケくらいは教えてくれましたけど、キノコについては教えませんでした。

馬車に積んできたドラム缶は、五右衛門風呂になります。火をたくのは、けっこう面倒です。乾いた木なら問題ないですが、雨で湿った木、生木も燃すんですよ。ノコにつくヤニを落とすための石油を、小さなガラスビンで常備してましたけど、ときにはその助けも借りました。「火を燃せるようになったら、一人前だ」なんていうんですね。

そういった体験が、いまの活動に役立っているようなんです。植物の勉強なんてしたことないんですけど、深層に刻まれた記憶が、何十年もたって、生きてきたようです。

オヤジは相当のノンベでした。何代か前までは、焼酎をつくっていたそうで、屋号は「ショーチャ」です。ショウチュウの1升ビンを切らしたことはありません。でも、家にたどり着くまで、オヤジはシンボウできません。立ち飲み屋に寄るんですよ。

小学生の私をとなりにおいて、オヤジは酔っぱらいます。「この子は頭がよくて、勉強ができる。ジマンじゃないけど、ウチにカネはない。だけど、この子が帝大にいけるんだったら、どんなことをしても大学にやりたい」。酔っぱらいのそんなタワゴト、周囲の人は相手にしません。私だけが、その暗示にかかったのかもしれない。

飲み屋をでるとき、オヤジはグデングデンです。いまの私とおなじです。馬車の荷台に駆け込みます。でも、自動車とちがいますからね。御者のオヤジが寝てしまっても、ウマは自分の家をめざします。

海岸ぞいの狭い道です。反対方向からトラックがくると、すれちがうことができません。トラックの運ちゃんは、こちらをみて、諦めてバックします。馬車はバックできません。しかも、乗っている私のオヤジは正体不明です。

家のまえで、ウマはヒヒーンと啼きます。母親か兄が馬車を引き入れ、ウマを外して、小屋に入れます。オヤジも、家に抱え上げられます。

家族の生活にしろ、友だちとの遊びにしろ、土との関わりが濃厚でした。生産と家族の生活と子どもの遊びが、同じところにあったんです。荷車をつかってシーソー遊びをしたり、というふうに。親たちのしごとぶりをそばでみてましたから、育てられてるという実感、家族の絆も強かったんです。

1950年代の末から、日本は高度成長の時代を迎えます。そんな時代に、私は土から離れていきました。

## NO. 143 酔っぱらい大同日記 2002. 03. 05

前号で私の幼年期の思い出を書いたら、意外なほどたくさんの返事をもらいました。岡山出身の宗景正さんなんか、私と合同形とっていいような生い立ちなんですね。つづきを書かないといけないんですけど、緊急事態が発生して余裕がなくなりました。書き貯めていたものを小出しにしますが、ばあいによっては、しばらく休むかもしれません。

「黄土高原だより」を読んでも友人と、いっぱいやっているとき、「おまえ、よくもあんなに覚えているものだな」なんていわれます。「あんなに」と「覚えている」とのあいだに、「つまらないことを」がはいるんでしょう。困るのは、つまらないことを覚えているのに、だいたいなことを忘れることです。お世話になっている人たちの顔と名前を覚えられない。「覚えてないはずはないのに、あいさつもしなかった」なんて思われたら、困ってしまいます。

子どものころから私は、「この平凡さがいやだ。もっと独創性をもちたい」というコンプレックスをもっていました。でも、はたからみると、かなり変わった人間に見えるんだそうです。もともとそうだったのか、修練の結果なのか、自分でも判然としません。はっきりしているのは、私が関心をもつのは、ほかの人が見すごすことのようにです。

「黄土高原だより」のいちばん熱心な読者は、大同で私たちの通訳をしてくれる王萍(ワンピン)でしょう。「同じ場面にであっても、まったくちがう視点で問題をみているのがおもしろい」と彼女はいいます。王萍ほど人品すぐれて、善良な人は、まずいないですよ。私が保証します。そんなふうということは、私がどんなにいじけていて、ものごとを斜めからみているかという暴露でもあります。

ものごとを注意ぶかくみるようになったのは、この事業をつうじてです。契機の1つは、ビデオカメラを回しつづけたことです。作品にしようと思えば、かなり意識して、アップの絵を撮らないといけない。その場の中心となるテーマはなにかを、いつも意識することになります。それにあわせて、サイズとアングルを変えて、レンズを向ける。そういう作業をつうじて、も

のの見方が変わってきました。

それと並んで大きな意味をもったのが、「酔っぱらい大同日記」です。キッカケをつくったのは、立教大学の上田信さんです。95年にはじめて大同にきたんですけど、彼はものすごいメモ魔です。食卓でもメモをとり、招待所の部屋で酒を飲んでるときも、メモをとります。そのときのことを、彼は岩波の『へるめす』に書き、それが単行本の『森と緑の中国史』に収録されました。恥ずかしいのは、酔っぱらってから私のバカ話まで収録されていることです。

感心したのは、細かなことまでリアルに再現されていることです。臨場感、説得力があります。マネしてやろうと、私は思いました。でも私には、メモやノートをとる習慣が、子どものころからなかった。思いついて、すぐにできるようなものじゃありません。

でも、ワープロをつかうと、入力はやさしいです。はじめたのは1984年からで、富士通のOASYS、キーボードは親指シフトです。1分に300字近くは打てます。こいつをつかって日記を書こう、と思いつきました。OASYS30AD-EXの中古を買って、大同に持ち込みました。1996年の3月です。

夕食のときに「ガンベ〜イ！」をしこたまやってから、部屋でワープロにむかいます。それまで日記なんて書いたことがないから、要領はきわめて悪い。その日にあったことを、なんでも書きます。免税店で買ったウイスキーのビンを横におきます。アルコールの血中濃度が下がらないほうが、抑制がはずれて、書くスピードがあがるんです。

せっかく書いたので、日本に帰ってからプリントアウトし、世話人会のメンバーや、親しい人に配りました。3年間つづけて、合計で400字詰め原稿用紙3,700枚です。年に100日を中国にいて、そのあいだ書きつづけたので、平均すると1日5千字です。多い日は2万字を書きました。4年目の1999年も書いたんですけど、何代目かのワープロが不調で、途中が抜けました。それだけの理由で、プリントする気持ちがなくなった。妙な完璧主義も、私はもちあわせているんですよ。

ワープロの内部に黄土が侵入するようです。カメラもビデオも、それが泣きどころです。精密機器はかんたんにダウンします。

小学校の絵日記だって、授業のノートだって、みんな3日坊主だった私が、それだけつづいたのは、プリントして配ったおかげです。読んでくれる人がいたんですよ。遠田宏顧問とか、橋本紘二カメラマンは、現地で同じ行動をしていることが多かった。その2人から「あの日記がなかったら、いまほど大同を理解できませんでしたよ」なんていわれたんですね。

通訳の王萍は、「おもしろいから、受け取ったその晩のうちに読んでしまいます」なんてい

います。王萍が熱心な読者であることは、「酔っぱらい日記」にしろ、この「黄土高原だより」にしろ、それなりの制約があるということです。ウソは書けません。「高見はウソつきだ」と王萍が思ったら、この活動をつづけることはできないんです。遠田さんだって、橋本さんだって、同じですけど……。

ウソでなかったら、いいわけではありません。通訳に、こちらの正直な気持ちを伝えておくのは、実際のしごとにそれなりにプラスでしょう。私の思考の動きも含めて、そのなかに書くようにしました。

日記とつきあうと、たいせつなことは、少なくとも書くときまでは忘れないように、頭に刻み込もうとする習慣がつきます。また、あやふやなことは文字になりません。文字に残すことを意識することで、周辺のことを探ったり、つきつめて考える習慣がついたと思います。いま振り返ると、自分にとってものすごくプラスでした。

この「黄土高原だより」のスタートは、99年4月です。すでに142号、400字詰めで900枚近くになりました。構成しなおして、出版したいと思っています。あるとき、プリントアウトしたものを、橋本さんにみせました。そしたら、『酔っぱらい日記』を出版すべきなんだよ。『黄土高原だより』なんてスカミたいなもんだよ」なんて彼はいいます。う～ん…。

#### NO. 144 緑色地球ネットワーク大同事務所 2002. 03. 10

3月14日に出発する予定だったんですけど、急用ができ、きょうの午後、関空を発つことになりました。この原稿は私たちの会報の新しい号のためのものです。古い話がつづいて恐縮ですが、次号はもっと鮮度のいいものをお送りできるでしょう。

渾源県で最初に緑化協力活動をスタートさせたのは1992年です。そのころはやることやることうまくいなくて、たいへんでした。一般的に言えば、日本側と中国側とで、おたがいに事情がわからず、信頼関係も成立していなかった、ということです。

もっと具体的にいうと、93年7月に旧雁北地区と大同市が合併して、新しい大同市が誕生しました。以前の雁北地区には、右玉・左雲・懷仁・応・大同・陽高・天鎮・渾源・広靈・靈丘の10県が属していましたが、そのうちの右玉・懷仁・応の3県がとなりの朔州市に併合され、残りの7県が大同市に併合されたのです。もとの大同市は城区・砒区・南郊区・新栄区の4区からなりたっていました。新しい大同市は4区7県で構成されることになったんです。

日本でもいま企業の合併が盛んですが、人員配置の合理化、削減は、その目的の1つでしょう。大同の行政改革もそうだったでしょう。幹部＝公務員にしてみれば、自分の身分がどうな

るか、心配でたまらない時期だったんです。そして、頻繁に人事異動がくりかえされました。数か月おきに訪れると、そのたびに責任者が交替している、といったありさまです。ちゃんと引き継ぎもなされていません。

94年春から、共青团大同市委員会副書記・大同市青年連合会副主席の祁学峰が、この協力事業を担当することになりました。それまでとタイプがちがいました。「こういうことをしたい」と私がいっても、すぐにOKをだしません。考えに考えて、「この問題とこの問題を解決できれば、実現が可能だと思う」というふうに答えるんですね。頭のなかでシミュレーションしているんでしょう。それまでの幹部は、ほとんど反射的に「没問題！」（ノープロブレム）と答えるんですけど、実際はそういかないことが多かった。

初めてそのとき、74年からの私の友人の王黎傑さんが、大同にきて通訳してくれていたんですよ。彼女に私は、「あなたは祁学峰をどう思う？」と尋ねました。彼女は「ほかのメンバーは祁学峰のことを怖がってますよ」というんです。それくらいがちょうどいいだろうと、思いました。なんとか彼を、この事業に固定したいと思ったんです。

私は祁学峰を必死で口説きました。「私たちの協力活動はいまは小さいけど、発展の可能性はある。中国にとって、環境問題は深刻化するいっぽうだからだ。しかしいまの大同の体制では、長期の活動を支えることはできない。このままでは私だってつづけられない。この活動のことを四六時中考えている人間が、最低1人は必要なんだ。この活動のために専門の組織をつくり、あなたが責任者になってほしい」と。

大同側は、こちらの意図を判断しかねたようです。王黎傑のところは何度も相談にいったようです。それが私のところに伝えられます。彼女がいなかったら、あれほどスムーズにすすまなかったでしょう。

日本に帰ってから連絡がきました。こちらの希望どおりの事務所をつくるというのです。その名称が「緑色地球ネットワーク大同事務所」だった。う〜ん。「ネットワーク」です。私たちの現地事務所と誤解されそうです。日本でも中国でも。でも、先方で気に入ってくれたのに、クレームはつける話でもない。こちらも賛同しました。

祁学峰の奮闘のおかげです。大同市の政府もそれを公認し、公務員枠まで認めてくれました。「定員いっぱいまで早く人をいれて、体制を強化してほしい」と私は要請しました。すると祁学峰は、「バカをいうな。あせって人をいれて、その人がしごとができなかったらどうするんだ。できないだけならまだしも、ひとの足を引っばるのが専門の人間だっているんだ。いまはリストラの時代で、事務所にはいたい人はいくらでもいる。いったんいれたら、公務員だから、かんたんにクビにできない。いまは無能な人に席を占められないよう防ぐのがだいじだ」というんです。

たしかにそのとおりでした。私なんか甘ちゃんなんですね。こういうことにくりかえし接して、中国のことを少しずつ理解できるようになるんですけど。大同事務所ができ、祁学峰が所長になってからも、プロジェクトの失敗はありました。日本人には、理解の困難な環境です。自然だけじゃない。社会的な関係、人的な要素、いろいろあります。祁学峰も私も、失敗のなかで鍛錬されたと思います。

祁学峰は1999年、共青团大同市委員会書記・大同市青年連合会主席になり、責任の範囲がずっと広がりました。緑色地球ネットワーク大同事務所の所長に、武春珍が就任しました。彼女がこの事業に参画したのは前年からです。でも1年間の準備期間がありましたので、引き継ぎがスムーズにすすみました。

昨年4月、日中緑化交流基金の中国側受け入れ団体の会議が開かれたとき、祁学峰は、求められて2回、発言したそうです。そのなかでこの協力活動が前進できた要因として、4つあげました。

その第1が、「専門の組織を必ず作るべきだ」というものです。緑色地球ネットワーク大同事務所のことです。「そこで資金管理、技術指導、接待などのしごとを専門的に実行している。緑化事業は一時のセレモニーとはちがって、期間が長いし、内容も複雑である。青年団のばあいは人事異動が早いので、そのような組織がないと事業を継続できない」と述べたんですね。

彼のこの総括には完全に同意します。その他の3項目について、表題だけを書いておきましょう。

- 2) 緑化のための基地をつくるべきである。
- 3) 造林プロジェクトは集中したほうがいい。
- 4) 管理が重要である。

## NO. 145 植物園の急激な変化 2002. 03. 19

3月10日に北京に到着したら、気温は20度でした。翌日の夕刻、大同に到着したら、こちらも日中の気温が14度もありました。話にきくと、ことしの冬季の平均気温は、平年より0.5度も高かったそうです。そして風が強いのです。視界のあちこちでつむじ風がおこり、猛烈な勢いで土をまきあげます。これほど風砂がはげしいのは、ふつうは4月になってからのはずです。

3月15日に、河北省保定市の涞源まで、遠田宏さんはじめ4人の日本の専門家を歓迎しました。ネットワークの最初の中国人会員・張細桐さんが、北京から通訳として同行してくれて

います。ほとんど10年ぶりの出会いです。その翌日は、霊丘県の自然植物園にいきました。驚いたことに、園内の野生のモモが花を咲かせていました。去年は、3月末にツアーがここを訪れたとき、この状態でした。10日から2週間、春の訪れが早いようです。

しかし、油断はできません。17日の朝、ホテルの正面に見える太白山が、一夜にしてまっ白になっていました。霊丘から大同にむかう道路の両側の山も、雪化粧をしています。高いところでは雪がチラチラしてきました。途中のカラマツの生育ぶりをみるために、ちょっと車を降りました。ブルブル〜。寒いんです。おそらく零下もかなり下がっているでしょう。そのうえ風が強いので、体感温度はかなりのもの。あわてて車に乗り込みました。大阪の事務所とこれまで何度か連絡をとり、「暖かいよ」といっていました。3月下旬のツアーの人にそれが伝わり、薄着でこられたら、たいへんです。

今回も植物園のいちばん上まで登りました。「高低差があったほうが、さまざまな植物を育てるのにつごうがいい」という立花さんの意見に従って、低いところは900m、高いところは1,330mありますので、登るのはたいへんです。去年の夏に、同じコースを登りました。建設をはじめて3年。柴刈りや放牧を禁止してもらったところ、どんどん緑が濃くなっていることは、以前の通信にも書きました。

秋から冬にかけて植物は生長しませんから、昨年夏と変化はないはずですが、重いので、ビデオカメラは下に置いてきました。大失敗です。青葉の時期にはわからないことが、冬枯れの時期に発見できるんですね。上のほうにはリョウトウナラがびっしり生えています。葉のないまだからこそ、1年ごとの生育ぶりや幹の太さがよくわかります。

最大のもは、樹高が8mほどになっています。胸高直径は15cmほど。6~7mのもは、珍しくありません。枝の出方から3年前を推測すると、いまより1.5~2mは小さかったでしょう。3年でそれだけ伸びたわけです。以前、べつの自然林での調査では、この時期の年輪幅は5mmほどです。直径にすると、毎年1cmずつ太っているということです。

大きくなれば、それだけたくさん葉を落します。土が肥えます。生育はさらに速まるはずで、落す葉の量もふえるでしょう。そのようにして、いい循環がはじまります。

もう1つの発見は、実生の1~2年生の苗がたくさん育っていることです。夏にきたときは、草や灌木におおわれて、みることはできませんでした。周金は、それを指さしながら、「以前だったら、ヒツジやヤギに食べられていた」と説明します。天然更新が確実にすすんでいるわけです。

もう少し下にアブラマツが育っています。20年ほど前、飛行機で播種したそうです。大きいものは3~4mはあるでしょう。青々として、元気に育っています。「冬でも青いもの

がほしい」という地元の人たちの気持ちがわかります。そのなかに、マツカサをつけたものがあります。

注意して探したら、実生の苗が生えていました。1本みつけて、その気になって探すと、あります、あります。大きいものはすでに5~6年生になっています。1~2年生の小さなものもあります。

大きなマツの密度は高くありません。飛行機による播種には、かなりの資金を投入したでしょう。成果がたったこれだけか、と以前の私は考えていました。ところが、そのマツが天然更新をはじめています。森林を再生させるということは、長い目で考えなければならないことを痛感しました。

トネリコも生えています。たいていの樹木は、日陰斜面(陰坡)には育っても、日向斜面(陽坡)には育ちません。ところがこのトネリコは、陽坡に広がっています。みた感じでは矮性のもので、喬木にはならないかもしれませんが、水土の保持には役立ちます。この木は家畜の好物のようで、以前はみな食べられていたのです。

じつはこの植物園の裏側がすごいのです。リョウトウナラをはじめ、各種の樹木が大きくなっています。なにもしないでも、こちらの再生のほうが早いでしょう。資金のつごうがつけば、なんとか土地の使用権を購入して、保護したいものです。そうなると、面積は現在の86haの4~5倍になり、生態系としての完成度もずっと高まるはずです。

新しいビデオ「よみがえる森」のなかで、私は「10年もすれば、ここには森林が再生するでしょう」とナレーションをいれました。10年を待たないで、おそらくその半分で、かなりのものになるでしょう。天然更新でそれが実現されるのが、なんとしてもうれしいことです。その夜、大同のカウンターパートを相手に、みてきたことを細かく話しました。54歳の誕生日が、うれしい日になりました。

## NO. 146 山火事の危険性 2002. 03. 22

霊丘自然植物園で急速に植生が再生していることを、前号で報告しました。山からおりたあと、植物園の李向東と周金が私に訴えました。「草が茂り、木が育ってきたから、火事が心配だ。周囲に『火気厳禁』の看板を立てるけど、ほかの防火の手段をぜひ検討してほしい」というのです。前号の最後に1行だけでも、そのことに触れようかと思いました。でも、ここは言葉の世界です。現実になると困ると思って、話しませんでした。

19日の夜、同行している相馬昭男さんが私を呼びにきました。日本の短波放送を聞いてい

たら、宝塚の山火事を報道している、あなたの家は大丈夫か？ というのです。自宅に電話をしたら、「家は心配ないけど、窓から火が見える」ということです。翌朝、電話があつて、「出火から 24 時間たつけど、まだ消えていない。ヘリコプターが 6~7 台でて、消化剤を撒いている」といいます。

人家に被害はなかったようですが、2 昼夜燃えつづけ、32ha が延焼しました。手近な山歩きのコースとして、よくいったところですよ。ここは以前に何度も火事がありました。ハイカーの火の不始末が疑われました。そのつづきの斜面に宅地開発の計画があつたので、「関係があるのではないか？」というウワサも立ちました。

放牧を停止したあと、霊丘の植物園はずいぶん緑が濃くなりましたが、春のこの時期は、マツ以外は茶色です。雨はまったくといていいほど降りません。そのうえ、毎日のように強風が吹きます。乾燥がひどい。

4 月 5 日は清明節で、中国ではお墓参りをし、先祖の霊をなぐさめます。そのさいに火を使うんですね。それが周囲の草などに燃え移って、火事になることが多いんです。

またこの時期に、草焼きをします。畑のアゼなどの枯れ草に火をいれるんです。そうすると、新しくいい草が生えてくるというわけです。それが強風にあおられて、周囲に広がるんですね。

私たちのプロジェクトでも、大同県陳庄郷で、マツの造林地が焼けました。植えて 5 年もたつて、1m 以上になったマツが、黒こげの残骸になりました。手をかけて植え、5 年も育てたものが、一瞬にして無に帰したんです。

先日、馬鋪山にいつてきました。新栄区、南郊区、大同県の境界です。ここは歴史に有名な白登の戦いがあつたところです。漢の高祖＝劉邦が、匈奴の大軍に包囲され、詭計によって、ようやく脱出しました。歴史に「もし……」は禁句ですが、あのとき劉邦が死んでいたら、中国の歴史は大きく変わったでしょう。最近建てられた記念碑のほかは、なにもありません。

周囲が林場になっています。大同市の機関の幹部たちも、義務労働で植林しました。およそ 700ha で、アブラマツが大きなもので 4~5m になっています。乾燥がひどいためでしょう。育ちはいいとはいえません。

私たちを先導してくれたのは、林場のトラックでした。10 人の管理人が乗っており、夕方まで林場を見張るそうです。毎日それをつづけます。林場の下には、たくさんのお墓がありました。いちばん危険な時期を迎えて、緊張しているわけです。

大同事務所の武春珍所長がなげきます。「よくなればよくなるほど、困難になる。最初は植

えるだけだけど、そのあと新しい課題がつぎつぎでてくる」。

さしあたり、いちばん心配なのは植物園です。せっかくあそこまで育ててきているんです。1つの策で、簡単に解決することはできないでしょう。これはという知恵があれば、ぜひ教えてください。

以前の号について、訂正があります。「ゆでたまご」のことです。中国では水からたまごをいれなくて、熱湯にいれる、と書きました。大同事務所の人たちと、それを話題にすると、「自分たちも水からいれる。熱湯からだ割れる」と彼らもいいます。「高見にそう教えたのは、農村出身者だろう。村ではそうかもしれない」というのです。部分をみて、中国だと思えば、こういう失敗をします。ただし、これからは私は熱湯にたまごをいれます。そのほうがずっといい。

#### NO. 147 「中国人不怕死」（中国人は死を恐れない） 2002. 03. 28

3月20日の朝、大同賓館で目覚め、カーテンを開けてびっくりしました。ものすごい風砂です。ホテルの前庭の五星紅旗が、ちぎれそうにはためいています。大気が黄色くなって、視界がききません。1kmもないでしょう。ちょっと恐怖感を感じたくらいです。

外にでると寒いんですね。気温は5度はあるんですけど、風が8mだと、体感気温はマイナス6度くらいになるはずですよ。気温より風の要素が大きい。

雨も降ったようです。舗装面は乾いてますが、土は濡れています。いま飛んでいる風砂の発生源は、ここではないということです。そういう意味でも、今回の風砂は、私にとって初体験でした。

3月22日の「大同日報」が、1面トップでとりあげました。この10年でいちばんひどい風砂で、平面視界は1,500mだったそうです。私たちの印象はもっとひどかった。気象関係者の解説では、中国国内には風砂の発生源が4つあるそうです。風砂のルートには、西路、西北路の2つがあり、いずれも大同を通過して、北京を襲うのだそうです。おそらく日本でも黄砂がニュースになったことでしょう。

話題を変えます。さまざまな事情から、昨年末、安い中古車を買って、運転を再開しました。ほぼ10年ぶりです。その話を事務所の運転手の小郭にすると、「次回から国際免許をもってきて、大同でも運転したらどうか」といいます。私は「絶対にイヤだ」と答えました。

小郭がいま乗っている北京ジープ製のチェロキーが、新車できたとき、センターで私も試運

転しました。まっさらだったのに、ブレーキが甘かったんですね。その他の故障もくりかえし発生しました。あれから5年たっており、いまはずいぶんと改善されたようですが。

私が運転したくないのは、車のせいだけではないんです。交通状態がすごいんですね。さまざまな種類の車が走り、バイク、自転車があり、そして人が入り乱れている。日本と同じじゃないかと思われるかもしれませんが、その入り乱れ方は想像を絶します。そして事故が多い。先日、霊丘から大同にくる途中で、ひっくり返っているトラックやトレーラーを、私は3台みました。注意して探したら、ずっと多いでしょう。ずいぶんと数は減りましたが、石炭トレーラーが故障で立ち往生しています。積載能力を大幅に超えて積んでますから、落ちてくる石炭も多い。

車のかげからの飛び出しなんか、日常茶飯事なんですね。そのたびに小郭は、急ブレーキをかけ、急ハンドルをきります。先日は、小学校3~4年くらいの女の子が、バックミラーあたりに、わざと手を突き出してきました。運転はけっこううまいと自分では思っていますが、ここでは恐ろしい。

そんなことのあと、小郭が私にいいました。「中国人不怕死！」。中国人は死を恐れない、というわけです。それに私はあわせました。「排除万難一定要死！」。万難を排してかならず死んでやる、というわけです。となりの座席で武春珍が大笑いしました。

中国事情にくわしい人は苦笑いされているでしょう。革命のスローガンをもじったんですね。プロレタリア文化大革命のときにも、さかんに掲げられました。「不怕犠牲、排除万難去争取勝利！」。犠牲を恐れず、万難を排して、勝利をたたかいたいろう、というんです。

ついこのあいだまで、大同市内でも、車は少なかったんです。いまは、交通渋滞がめずらしくなくなりました。そういう変化に、人の認識がついていけないわけです。いまは過渡期でしょう。そのうちに、私にも運転ができるようになるかれしれません。あくまで可能性としてですが……。

## NO. 148 どこへいく？ 石炭の村 2002. 04. 03

大同は世界有数の石炭の街です。年間産出量は8千万t。市街から雲崗石窟にむかう途中から炭砒地帯にはいります。南郊区・新栄区・左雲県にかけた広大な地域です。渾源などその他の県にもありますが、わずかなものです。

およそ半分を国営の砒務局が産出しています。規模の大きな優良炭砒が多く、近代化もすすんでいます。それ以外の中小零細が、区・県の管轄におかれています。共産党南郊区委員会の

祁学峰副書記が、参観の機会をつくってくれました。南郊区で産出するのは1千万t、その3分の1弱を、個人経営の零細炭坑が支えています。

訪れたのは高山鎮。道路の両側に、小さな坑口がたくさんみえます。大きなもので年産5～10万t。小さなものは1～2万t。10km四方ほどの範囲に100以上あるそうです。

村のたたずまいは、一般の農村と変わりません。でも、どこもかしこも黒く染まっています。黄土の表面も黒色です。家の屋根も壁も黒色です。樹木の幹から人の顔まで石炭の色です。

低迷していた石炭価格が、昨年から高騰しました。1t40元まで落ち込んでいたのが、60元、80元、100元になり、ピークは120元にもなりました。数年来の在庫調整の効果がでたのです。いまはふたたび下降して70～80元。

悲劇はそのなかでおこりました。価格が上昇するときは、だれもがたくさん掘ろうとします。零細炭坑は、安全への配慮がありません。昨年11月に事故が発生し、10数名が亡くなりました。それを機に、周囲の危険な炭坑も、すべて操業禁止になりました。

私たちが訪れた窑洞村もその1つです。人口は800人ほどですが、よそからの出稼ぎ労働者が1,200人はいたそうです。意外だったのは、四川省をはじめ、南方の人が多かったことです。貴州省、浙江省、湖北省と広い範囲にわたっています。内蒙古自治区、河北省、山西省の他地域からの人ももちろんいます。中規模以上の炭坑は地元の経営が多いのですが、零細炭坑の経営者には浙江の人が多いいいます。

97年の1人あたり年間所得は3,800元ほどでした。500元に満たない村も多いのですから、かなりの数字です。働ける人は、みな石炭を掘っていました。家の庭に小さな小屋をいくつも建て、出稼ぎ者を泊めていました。家賃収入だってバカにはならなかったのです。

村の中心は谷の底にありました。その面積はかぎりがあります。若い人は、周囲の高いところに家を建てました。レンガづくりのりっぱな家です。テレビが映りにくいため、ケーブルテレビも導入しました。

操業停止によって、しごとが完全になくなりました。農業をしようにも、耕地がありません。出稼ぎの人は、ほかのところへ移っていきました。家賃収入もなくなりました。トラックを買って、石炭輸送をしていた人も、車を停めたままです。

地面の下は、ネズミの巣穴のようだそうです。坑道の長いものは1.4km。地面からの深さは100～120m。

85 年ごろまでは、村の中心に湧き水があり、小川になって流れていたそうです。いまは完全に干上がりました。地下水脈を坑道が切ってしまったのでしょう。山に植えられたポプラは、小老樹にもなれません。山全体が乾いています。

以前は下の村からパイプで水が送られてきました。各家に水道があり、不自由しませんでした。下の村も水が乏しくなり、ストップしました。いまは 3km 離れた村まで、水を買いに通います。バケツ 2 はいで 1 元。ドラム缶 1 本 3~5 元。いい収入のあるうちはともかく、いまは重い負担です。さらに 10km 奥にも村があります。その村は片道 13km、水を運びます。

村ごとの移転も検討課題です。南郊区内にも、スペースがないわけではありません。その日の午前、野菜生産のビニールハウス群を見学しました。働いているのは広霊県から移ってきた人たちです。余裕のできた地元の人が農業を離れ、そのすきを貧困地域の人が埋めました。彼らは身ひとつで移ってきました。場所さえ準備すれば、1 世帯 1,000 元もあれば可能だそうです。

1 人あたり 4,000 元もの収入をえていた人の移転は、ずっと困難です。家具だって、それなりにあるでしょう。「1 戸あたり 1 万元でもたりないだろう。1,000 戸で最低 1 千万元。そんな金はどこにもない」と関係者は話します。移転したとして、やっていけるともかぎりません。農業の技術や経験がありません。炭堀りだけをしてきたのですから。

こういうとき、口からでるのが「没办法」(メイファーズ)です。どうしようもない、という意味です。農村を回っていて、なんととなく聞いたことばです。

もっと貧しい村を、いくつも知っています。水のない村も少なくありません。でも、ここまで前途のない、絶望的な印象をもつことはありませんでした。荒廃としかいいようのない光景です。

## NO. 149 神さまのイタズラ 2002. 04. 09

ことしの春のワーキングツアーに、81 歳の浦田勝美さんが参加されました。はじめて知りあったのは 1971 年で、それからずっとお世話になってきました。当時の私の師匠は、「浦田さんほど誠実な人はいない。人間はああでなければならぬ」といつも話してくれました。緑の地球ネットワークの最初からの会員です。

浦田さんは、1940 年に召集兵として中国にきました。復員後、中華航空の整備士として北京で働いているときに、敗戦を迎えました。寮の先輩から、「日本に帰っても、食いものもないそうだ。自分たちの腕を生かして、食べていけるしごとが中国にある。いっしょにいつてみ

ないか」と誘われました。

着いたところは、張家口の八路軍部隊。まもなく共産党と国民党との内戦がはじまり、浦田さんは八路軍の一員として、河北省と山西省の境の太行山脈で活動しました。1947年ごろのことです。

1958年に帰国した浦田さんは、自動車修理のしごとをしながら、日中友好運動にとりくんでいました。車検のたびごとに訪ねると、浦田さんは当時の話を私にしてくれました。村の洞窟にディーゼルエンジンをすえて、発電していたというのです。長男はその近くで生まれたけれども、母親は乳がでなかったので、村の人に乳母になってもらって育てた、ともききました。幼い子どものために、タマゴを持ってきてくれる人もいたそうです。そのときの体験が、浦田さんのその後を決めたようです。

私たちは1994年から、村の小学校に付属果樹園をつくることにしました。そのときの事情は「黄土高原だより」のNO.33、NO.34に書いています。第1号となったのは、靈丘県上寨鎮下寨北村です。その話を私がすると、浦田さんは「上寨は私がいたところだ」といいました。「ずいぶん日本軍が荒し回ったところですよ。あんなに貧乏なところはみたことがない。着るものも、フトンもなかった。ああいうところに協力するのは、たいへんいいことですよ」といってくれました。

「もういちど、あそこの村にいつか行ってみたい」と、浦田さんから相談を受けました。でも浦田さんは、上寨鎮までは憶えていても、村の名前は思いだせません。「上寨までいけば、思いだせるとします」と浦田さんはいいます。「みつかるといいですね」と答えながらも、私は自信がありませんでした。上寨鎮には20以上の村があるんですから。

3月25日の夕方、靈丘に到着すると、県の青年団の幹部が私に耳打ちしました。「彼が住んでいた村が見つかった。彼のことを憶えている人も何人かいる。目の小さい男だった、と彼らはいっているけど、本人とピッタリだ。まずまちがない」。そういわれても、私は信じませんでした。

翌日、浦田さんはツアーのスケジュールを外れて、その村へでかけました。私もおともをしたかったんですけど、そうもいきません。青年団の幹部から、「やはりそうだった」という電話連絡がありました。同行した大同の新聞記者が帰ってきて、「おたがいに大感激の再会だった」と私にいいましたが、それでも私は信じません。武春珍所長が、「どうして高見は信じない、なんていうんだ。いっしょにいった人がそういってるんじゃないか」といっても、私はまだ「いや、信じない」といいかえしました。

その翌々日、大同に帰って浦田さんに会い、「いかがでしたか？」とききました。「みづかり

ました。ディーゼルエンジンで発電した洞窟はつぶれて入れませんが、ほかのいくつかの洞窟は残っていました。86歳の老人をはじめ数人が、私がいくのを待っていてくれました。私のことを憶えてくれたんですよ。その老人は、『あんたの子どもはまだ小さかった。私の妻が、帽子をつくってあげたのを憶えていないか?』ときいたんですよ。私もそのことを思い出しました。ほんとにきてよかった。何年かあとだったら、会えなかったかもしれない」。

本人からそういわれたら、私も信じるしかありません。でも、こんなことがあっていいんでしょうか。その村は下寨北村です。93年の秋、はじめて訪れ、あまりの貧しさに衝撃をうけた村です。そして第1号の小学校付属果樹園を建設しました。村の人は、労賃をプールし、ほかからの支援もえて、小学校を建て直しました。たんに木を植えるだけでなく、貧困問題の解決も同時に考えなければならないことを、あの村をつうじて学んだんです。

たんなる偶然とは思えません。霊丘にはたくさんの郷・鎮があります。そのなかで、どうして上寨鎮なんですか。上寨鎮のなかにもたくさんの村があります。そのなかで、どうして下寨北村なんですか。

こういうことのであうと、人間を超越した存在を考えたくくなります。神さまです。その神さまはイタズラがすきで、こういうことを仕組むんですかね。

## NO. 150 中日青年環保合作論壇 2002. 04. 18

表題のフォーラムが4月13日から15日まで、北京で開催されました。中国共産主義青年団中央委員会と中華全国青年連合会の主催です。胡錦濤国家副主席との会見が設定されるなど、盛大なセレモニーが連続し、不慣れな私はすっかり疲れしました。日中双方から合計20人以上の報告があり、私も時間をもらって、以下のような発言をしました。

山西省大同市の黄土高原で緑化協力を開始してから、11回目の春を迎えています。黄土高原は水土流失と沙漠化の深刻な地方です。私たちは大同市青年連合会と協力して、山や丘陵にマツを植え、また貧しい農村の教育支援を目的に、小学校付属果樹園(希望果園)を建設して、アンズなどを植えてきました。さらに、立花吉茂代表、遠田宏顧問をはじめ、日本の専門家の参加と協力のもとに、育苗・栽植技術の改善、人材の育成などソフト面の協力を強化し、育苗センター、植物園、実験林場などを建設中です。のべ150のプロジェクトにとりくみ、たくさんの活動をつづけてきました。

この事業を開始した10年前、私たちには組織がなく、資金がなく、知識がなく、なんの力もありませんでした。そのころは、みなさんから報告のあったような条件はありませんでした。環境問題にたいする中国の認識もずっと低かったのです。初期には、悪夢のような困難と失敗

がつづきました。いま振り返って、よくぞここまで発展したものだと、深い感動をおぼえます。

カウンターパートの大同市青年連合会、地元の党と政府、あたたかく見守りつづけてくれた中華全国青年連合会、そして会員ならびに日本と中国の協力者のみなさんに深く感謝しています。

私のきょうの話に題をつければ、「恋愛と結婚・子育て」です。今年は日中の国交正常化から30年の記念すべき年です。いつも以上に「友好」が語られ、乾杯が繰り返されるでしょう。自分を振り返って痛感するのですが、この「友好」と「恋愛」は似ています。おうおうにして、相手に対する無知のうえに燃え上がります。相手の欠点、悪いところは知らないほうがいいです。おたがいの気持ちのいいときだけ、いっしょにいればいい。

木を植えて育てるのは、それとは異なります。やっかいなことに、木は生き物で、いったん死んだら、生き返ることはありません。一瞬も気を抜けないのです。木を育てる過程は長く、ある意味では退屈でもあります。速く育つことを願って、苗を引っ張っても、逆効果です。では寝ていればいいかという、そうではありません。1年には四季があり、適期に作業をする必要があります。なにか実験に取り組むときも、一瞬の遅れで、1年を待たないといけない。時間との争いになります。

カウンターパートとの関係がきわめて重要ですが、その相手も理想的とは限りません。偶然の出会いや、誰かの紹介で、最初は理解しあっていないことが多いのです。自分の顔を鏡に写したら、高望みをできるわけでもありません。意識的な努力によって、相手を深く理解する必要があります。いいところだけでなく、欠点も理解しあい、補いあう必要があります。苦しいときほど寄り添って、支えあうことが必要です。苦労をともにするほど、お互いの感情も深まります。

こんなふうに考えると、なにかに似ています。「友好」が恋愛だとすると、木を植えて育てることは、結婚生活を維持し、子供を育てるようなものです。熱烈な恋愛の結果として、ばあいによっては「計画生育」のしくじりであったとしても、子供ができると、男女双方に親としての長期の責任が生じ、そのなかで絆も深まります。木を植えるのも同様で、植えっぱなしにはできません。恋愛と結婚・子育ては、連続した過程ではあっても、質の異なる段階です。そのことに無自覚であってはならないと思います。

私たちのプロジェクトのなかには、偉い人の出席のもとに盛大な起工式を挙行し、大きくりっぱな記念碑を建てたところがあります。「友好」を盛り上げるうえでは効果的です。しかし、その大部分で植林そのものは失敗しました。ふしぎなことです。性質が異なることへの自覚がなかったからでしょう。その後、私は、起工式は質素にし、記念碑も小さなものにするよう求めてきました。ずっとあとに成立する森が、最高最良の記念碑であり、それ以外のものはなくてもいいのです。形式主義は、緑化にとって有害無益です。

木を育てる過程では、困難や危機が何度も訪れます。国際的な協力が真に必要なところほど、条件はよくないのです。一例をあげましょう。モデルをつくろうと考え、ある農村で80haの畑に6万本のアンズを植えました。先方もきわめて真剣で、あれほどていねいな植樹はその後もないくらいです。順調に生育し、たった2年で花をつけました。郷の責任者は、「来年は少し実をつけさせたい。初めての経験で、農民も自信がないけど、実をつけるのをみれば激励になり、確信も深まる」といいました。私も同意しました。

1年後に訪れて愕然としました。壊滅していたのです。冬のあいだにノウサギの食害があり、夏にアブラムシが大発生しました。10%も残っていません。しかし、より根本的な原因は、責任者が替わったことです。前任はきわめて熱心だったのに、後任が管理を怠りました。立っているのがつらいくらいのショックでした。

「人事異動がこんなに頻繁だと、木を育てることはできない。官僚主義と造林は、木に竹を接ぐような話だ」と私はいいました。すると、「頻繁な人事異動は、日本の公務員制度に学んだものだ」と切り返されました。本当でしょうか？ 青年団はとくに異動が早く、任期が短い。ちょっと事情がわかったころに、転勤してしまいます。こんなことで木を育てることができるのでしょうか？

緑化事業を成功させるためには、長期的な視野をもち、1日中そのことだけを考える人が、最低1人は必要です。国際的な協力ですから、「国情がちがう。中国ではこうだ」などといわないで、双方の事情を考慮する必要があります。日本側にも同じことがいえるでしょう。私としては、日本の人たちにこそ、よく考えてほしいと思っています。

協力活動のための専門の組織をつくり、人事を固定するよう、強引に頼みこみました。中国側の努力で、「緑色地球ネットワーク大同事務所」が成立しました。計画の立案と実施、植林後の管理、技術指導、資金の管理、日本からの協力団の接待……、具体的な活動すべてに責任を負っています。それ以後も困難や失敗はありますが、それがきちんと総括され、確実に改善されるようになりました。私自身がいいしごとをしたのは、たった1つ、この事務所の設立を求めたことです。

私たちの事業の1つの特徴は、いくつかの拠点をつくったことです。育苗・実験研究・技術研修を実施する環境林センター(20ha)を建設しました。この地方の生態系、植物の遷移を探り、森林再生の道筋をみつけるための自然植物園(86ha)、実験林場(600ha)も建設中です。現場で発生するさまざまな問題を、これらの拠点に集約し、解決策をみつけて、現場に返していきます。

技術的成果の1つに、マツの育苗への菌根菌の活用があります。日本の専門家の指導で実験

したところ、わずか4か月で2倍に育ちました。その翌春から100万本単位で実用化しました。この機動性が、NGOの強みだと思います。きわめて生育がよく、現場の技術者は「こんないい苗は、つくったことはもちろん、みたこともない」といっています。

これらの拠点には、中華全国青年連合会をはじめ、中央・地方の幹部がたびたび視察に訪れています。日本政府やODAの関係者も何度もやってきました。いずれも高い評価を残しています。とりわけおたがいの関係について、「うらやましいですね。どうやってこんな関係ができたんですか？」と話す人が多いのです。林野庁OBの相馬昭男さんは、この2年間、私といっしょに100日を大同に滞在していますが、「このプロジェクトのいいところは、大地に木を植えるだけでなく、人の心に木を植えていることです」と、見学者に紹介してくれました。うれしいことです。

きのうまでこの会場に座っていた祁学峰さん(共産党南郊区委員会副書記・前大同市青年連合会主席)とは、8年間いっしょに活動し、兄弟というより、夫婦のように心を通わせあってきました。

そして、実際のしごととはすべて大同の青年たちがやってきました。ここまで私を教育したのも彼らです。表彰されるべきは彼ら彼女らであって、私ではありません。きのうはずっと、きまりの悪い思いをしていました。きょうここでも、彼らが報告したほうがよかったと思います。

初期には頻繁な人事異動に悩まされましたが、カウンターパートが青年団であって非常によかったと、いまでは考えています。いっしょに農村を泊まり歩いた青年団の幹部が、10年のあいだに昇進し、県や区の指導者になって、この協力活動を全力で支持してくれるからです。

私の話は、このような場にふさわしくなかったかもしれません。酒を飲みながら、二次会でするような話でした。でも、経験からでた本当の気持ちです。多少でも参考になれば、うれしいことです。ありがとうございました。

長い発言で、司会の湯本渕さんをハラハラさせたと思います。発言の途中でなんだか拍手があり、中国側出席者が多かったのはうれしいことです。「いい発言だった」といって、たくさんの人から握手を求められました。古くからの友人の通訳が、私の発言よりさえていたのでしよう。

## NO. 151 アンズの花盛り 2002. 04. 23

広霊県苑西庄村の農家にホームステイしたとき、アンズが三分咲きでした。4月5日のことです。オリエンタルランド労組のツアーといっしょでした。桜前線といっしょで、アンズの開

花も南から北へと移っていきます。大同へ帰る途中の渾源県では、まだチラホラ咲きでした。

東北電力総連のツアーといっしょに、4月18日朝から、陽高県に向かいました。この県は、古くからアンズの里として有名です。ちょうど満開だったんですよ。

守口堡村には、万里の長城があります。明代の造営だといわれます。この一帯の長城の風化がすすむなかで、比較的の原型が保存されている、とっていいでしょう。陽高県を訪れるツアーは、ここの長城に登ることにしています。

そのふもとに、小学校付属果樹園をつくり、アンズを植えました。1996年のことで、全ジャスコ労働組合(現イオン労働組合)の協力で建設されました。ここのアンズも満開でした。よく育っています。「あの人たちに、このようすをみせたいな」と思いました。でも、感激家が多いので、誰か1人が泣きだすと、みんな泣いてしまうだろうな。せめて写真でもみてもらおうと、何枚か撮影しました。

4月20日の朝、天鎮から大同に帰る途中、バスのなかからみると、陽高県のアンズの花は、すでに散りはじめていました。散り終わったところもあります。つい2日前が満開だったんですよ。ほぼ同じ緯度を、東から西へ走っているんですけど、標高の低いところのアンズの花は散り、高いところのものは残っています。正直なものです。

「サクラの花はパッと散る、大和民族もそれと同じようにいさぎよい、なんていってましたけど、アンズの花だって同じなんですね」と遠田先生が話しました。

今年はずいぶんと、開花時期が早いです。この10年は、毎年4月末まで大同にいるんですけど、アンズの満開をみることなんて、まずありませんでした。いつもの年にくらべて、2週間以上も早いということです。それだけ、暖かくなるのが早かった。

零下20度以下になる寒い地方ですから、早く暖かくなるのはうれしいことです。と、思いがちなんですけど、農民の気持ちはちがうでしょう。まずは農作業がたいへんです。いつもなら、土の凍結が融けてから、まず植樹にとりくみました。それが終わってから、春の農作業が始まります。土壌の凍結が融け、農耕が始まるまえに、植林緑化の時期があったんですよ。そのリズムが壊れた。

花だって、まずは野生のモモ(山桃)が咲き、アンズが咲き、オヒョウモモ(榆葉梅)が咲き、それからナシ、リンゴというように、順番があったんですよ。ことしはほとんど一斉に咲いています。

大同県聚楽郷には、采涼山緑化プロジェクトがあります。98年から協力をはじめたんですけ

ど、すでに 250ha 以上にマツを植えています。このプロジェクトでは、植えてから 3 年は、冬のあいだ苗を土で埋めます。乾いた寒風から守り、ウサギの食害から守るためです。春、陽差しが暖かくなってから、掘り出すんですけど、タイミングがだいじです。早すぎると、この時期、いちばんエサがありませんから、ウサギにかじられる。埋めた意味がない。遅くなりすぎると、土のなかでむれてしまう。掘り出すだけで、かんたんに思えますけど、1ha あたり 3,300 本ですから、たいへんな数です。

それと同時進行で、計画にしたがって、ことしのぶんを植えないといけない。農作業もはじまる。てんやわんやです。

環境林センターの育苗も、ほんとにたいへんです。平年より早めに気温が上がっても、地温が上がるのは、それより遅れます。土の凍結が融けるまでは、外での作業はそんなにできません。まずはカササギの森への針葉樹の移植からはじまりました。植える穴は、去年のうちに掘ってあります。センターの苗圃で、トウヒやトショウの苗を掘り起こします。土がまだ凍っていて、根から離れません。作業はたいへんですけど、苗のためにはいいことです。

そのうちに、移植対象になっているポプラやヤナギの芽が動きだしました。芽が動くまえに移植したいんです。何万本もありますから、いくら人海戦術だといってもたいへんです。新しく挿し木をするための、ポプラ・ヤナギの挿し穂を土伏せしてあったんですけど、4 月半ばには、この芽も動きだしました。記憶をたどると、以前は 4 月末か、5 月にはいつてから挿してたんですよ。

センターにいくと、みんなピリピリしていました。それでも 4 月 20 日すぎには、苗の移植も挿し木も、基本的なところは終わりました。遼寧省の苗圃からトウヒの小苗を 5000 本導入し、植えました。2~3 日のうちに、トショウが届くことになっています。アンズ苗の接ぎ木がはじまりましたが、これは霊丘の職人チームがやっています。

4 月 22 日は、朝から雨でした。夕方までつづき、センターでは 9.6mm でした。ここ数年、なかったことです。砂嵐がひどくて、いったいどうなるのか、恐怖心を感じたくらいですが、この雨がそれを流してくれました。農民が「春の雨は油より貴重だ」という気持ちが、痛いほどわかります。

「そうだ、ことしは馬年だ。馬年は豊作になる」。雨をみながら、そんな話ができました。悪い年がつづいたので、ひと息つきたいところです。

4月中旬、いくつかのツアーに同行して、大同県、陽高県あたりを回っていました。県の青年団の連中が寄ってきて、「バカで呑んべ」と、私にいうんですよ。表現が同じなので、おかしいな、と思っていたら、原因がありました。

4月14日付けの「大同晩報」が、タブロイド版1ページをつかって、特集記事を組んだんです。1週間まえの4月7日は、私たちの活動の写真特集でした。「大同晩報」の前身は「雁北日報」で、大同周辺の農村部＝雁北地区の地方紙でした。雁北地区が大同市に合併してから、いまの名称に変わりました。いまでも農村部でシェアが高いようです。都市部では、「大同日報」のほうが読まれています。

その特集記事の表題がなんと「私はバカで呑んべ～高見邦雄との対話」というんですね。「呑んべ」と訳したところは、「酒鬼」となっていて、「呑んべ」より意味が強いかもしれない。そんな表題が縦横＝35mm×18mmの極太活字で印刷されてるんですよ。しかもカラー印刷で。身からでたサビとはいえ、まいりましたねえ。

「私はバカで呑んべ～高見邦雄との対話」

大同晩報記者 張湛濱

【リード】

1人の日本人が、自分の利益をいささかも考えないで、ただ緑化を目的に大同にやってきた。1992年から今日までの10年間、日本の緑の地球ネットワークの発起人、高見邦雄さんは前後して合計1700万円の資金を集め、大同市の緑化に役立て、大同の緑化にたいして突出した貢献をしてきた。なぜそのようにしてきたかを問うと、その答えはただ、「私はバカだから」というものだった。

3月末、高見邦雄が組織した緑の協力団が大同市の南郊区・靈丘県・大同県を訪れ、植樹活動をおこなった。記者はこの期間に、3度、彼を取材した。以下は彼と記者との対話である

【記者】 なんのためにあなたは緑化をはじめたのですか？

【高見】 いくつか原因があります。1971年くらい、私は何度も中国にやってきましたが、環境問題が非常に深刻なことに、深い印象を持ちました。欧米の国が4～5世代かけて実現したことを、中国はわずか1世代でやろうとしており、その発展はたいへん速い。速すぎます。そのために環境問題と、環境破壊がきわめて深刻なわけです。日本と中国、韓国と朝鮮は、東アジアに位置し、同じ環境のなかで生きています。共同の努力で、環境をよくすることが必要です。中国の環境がこれ以上悪化したら、この地域は人が住めなくなるでしょう。

【問】 10年前、あなたが最初に大同にきたとき、ほかに4人の人がいたそうです。その人たちは、大同の条件があまりに悪いのに驚いて、早くにやめたそうです。あなた1人が堅持したのは、なにが原因ですか？

【答】 私がバカだったからです。

【問】 バカだから……？ どういう意味ですか？

【答】 ほかの人といっしょに、やめていたら、こんなに苦勞しなくてすんだでしょう。(笑)

【問】 では、どうしていまもつづけているんですか？

【答】 たくさんの人が私を信用し、お金を委託してくれています。私と同じくらいバカな人が、私にだまされて、たくさんここにくるようになりました。私がかってにやめるわけにはいかなかったんです。

【問】 あなたは2001年に「友誼奨」を受賞しました。この賞は、突出した貢献のあった外国人専門家に授与されるものです。聞くところによると、あなたは、受賞したものを緑色地球ネットワーク大同事務所においでしているそうです。どうしてですか？

【答】 その賞が専門家に与えられるものであるなら、私はバカ専門家として認められたということですが。私は大同に滞在しているときは、酒を飲んでいるか、人をののしっているかのどちらかで、りっぱなことをしているわけではありません。具体的なことは、すべて大同事務所のメンバーがやっています。本来なら、賞は彼らが受けるべきです。それを私が代わりに受け取ってきました。あるべきところに、おいでしているだけのことです。

【問】 酒の話がでましたが、あなたは自分で「酒鬼」だといっているそうですね。

【答】 もともと私は酒がすきです。ここに通いはじめて、人とつきあう最良の方法が酒を飲むことだったんですよ。だからいつも酒を飲んでることになった。

【問】 10年の植樹活動のなかで、もっとも深い印象はなんですか？

【答】 しんどかった、ということです。1年のうち70%は、私は日本で資金集めをしています。20%は、いろいろ発生する問題の解決に使っています。残りの10%が、大同での活動なんですよ。(実際の時間では、90~120日、彼は大同にいる)。

【問】 あなたは、インターネット上で、日記を公開しているそうですね。プリントアウトすると、厚さが1尺になると聞きました。たくさんの人が、あなたの日記に影響されて、この活動に参加しているそうですね。また、あなたの演説は、人を動かす力があるということです(日本人は高見のことを演説家だといっている)。それはほんとうですか？

【答】 (笑いながら)そんなことは知りませんねえ。私の日記を、インターネット上で読めるのは事実です。それを読んで、返事をくれる人もいます。多いときは、1日に150件にもなります。(1回に1,500通ほど送ってると私が話したのが、こんなふうには化けたわけです~高見)でもどれだけの人が読んでくれているか、私は知りません。

【問】 あなたは、自分の日記を読み返すことがありますか？

【答】 みませんね。書いたことは、たいいてい覚えていますから。

【問】あなたのお子さんは、あなたの日記を読みますか？

【答】私には2人の息子がいます。長男は28歳で、次男は23歳です。でも、彼らは読もうとはしないでしょう。私のしていることに、彼らは近よろうとはしません。たいへんさを、身近でみてますから。

【問】あなたの息子たちが、あなたを支持しないことで、困っていますか？

【答】いいえ。小さいころ、私の家はとても貧しかった。そういうなかで、私の父親はいつも私に話しました。「自分のことは自分で決めたらいい。自分のやりたいことをやるのが、いちばんだ」。息子たちも、自分のことは自分の思うとおりにしたらいい。そう思っています。

【問】あなたはいつも国外にいて忙しいんだけど、家庭にあっても孝行息子ですか？

【答】さっき話した意味では、そのとおりでしょう。

【問】協力団の人がみたビデオ(「よみがえる森」)は、あなた自身が撮影されたそうです。ナレーションを私は理解できないけど、画像をみた印象では、あなたは多くの関心を人間にむけている。

【答】(記者のほうに手をさしだし、握手したあと、笑いながら) 私が撮影したもののほうが、あなたたちの撮影したものよりいいかもしれない。(ビデオ作品は、高見自身が撮影したものである。1本4,000円(240元)で日本で販売している。その収益はすべて植樹費用になる)。

【問】あなたは植林方面で、たくさんの体験をしたと思います。そのことを話してもらえますか。

【答】植樹は、恋愛と結婚の過程に例えることもできるでしょう。双方が誠実につきあうことが必要です。どんな問題も、よく話しあって、決めるべきです。(そうしてこそ、りっぱに木を植えることができます)。

【問】あなたの組織は、地球環境の改善がモットーのはずです。でも、広霊県の苑西庄村では井戸を掘りました。地震被災地で小学校を建てたり、失学児童のために小学校付属果樹園を建設したりしています。どういう考えからですか？

【答】果樹を植えると、穀物を栽培するのに比べ、収入も増えます。同時に、防風防砂の効果があります。沙漠化を防ぐのにも役立ちます。でも、井戸を掘ったのがどうかといわれると、正しかったか、そうでなかったか、私はいまも迷っています。

【問】えっ、それはどうしてですか？

【答】まずは、地下水は有限のものです。ここで新しく井戸を掘ると、水位はますます下がります。新しい問題につながるでしょう。もし、あそこで井戸を掘らなかったら、村の人たちは、どこかに移住するしかなかった。そうすると、あそこの植物は、人為的な圧力が減少して、

自然に復活してくる。そういう意味では、貧困問題を解決する根本の方法は、その悪循環を絶つことです。(貧困が環境破壊を招き、環境破壊ののち、さらに貧困になることを指す) それは井戸掘りのような緊急避難の措置ではありません。

【問】10年間の植樹活動のなかで、あなたは失敗も経験されました(注・管理がよくないために、500haに植えたアンズが3年後に潰滅したこともある)。しかし、いまからみれば、あなたは成功したといえるでしょう。将来にたいして、どのような希望をもっていますか？

【答】最初にはじめたとき、ほとんどみな失敗しました。うまくいったのはほとんどなかった。しかし、私は放棄しませんでした。その原因は2つあります。この活動をやめて、もっといい活動にいける人もいます。しかし私にはそれがなかった。(笑) 私は1つのことをやるしかなかった。この事業が失敗だったと認めた人もいます。しかし私は、最終的な失敗だと認めなかった。以前に比べ、現在の活動はずいぶんとよくなっています。そうはいっても、植樹というのはもともと長期の事業であって、かんたんには成功といえませんが、もし希望を話すとすれば、もっとも理想的なのは、彼ら(当地の人をさす)が、「高見、もう来なくていいよ。自分たちでやるよ」といつてくれることです。

【問】あなたは「4分の1大同市民」と自称しているそうです。どういう意味でそういつているんですか？

【答】ここがすきじゃないんですよ。気候はものすごく悪いでしょ。自然条件がひどい。官僚主義にも閉口してます。万事にカネ、カネっていうことも、なじめない。

【問】これからの10年、あなたは堅持しますか？

【答】マラソンに例えると、折り返し点をすぎたところだと思えます。帰り道も、来たときとっしょでしょう。なんとかやっていけるんじゃないんでしょうか。

【高見の感想】

これ以下は、紙面になくことです。このインタビューのほかに、緑の地球ネットワークのこれまでの事業、私の経歴などが紹介されました。全体として、バランスがとれていたといっいいでしょう。

でも今回、訳載したような記事はマレでしょう。私たちの思いと、現地の人たちとのあいだを、なんとかつなごうという意図が感じられます。そういう意味で、私にとって、ありがたいものです。今回も長くなって、申しわけありません。

## NO. 153 南方からのお嫁さん 2002. 05. 07

4月上旬のある日、ツアーといっしょに、広霊県苑西庄村を訪れました。私たちが協力して、98年に井戸を掘った村です。通水式をはじめ、何回かツアーがやってきましたが、ホームステ

イしたことはありません。あまりに貧しくて、外国人を泊めるのは無理だということでした。

今回は、みんなで泊まったんです。大同事務所の武春珍所長がいうことには、「物質的な条件はよくないけど、村の人たちの歓迎の気持ちはとてもいい。それがいちばんだいじです」。ありがたかったですね。そういう判断は。県の青年団が、新しくフトンを買って、持ち込んでくれました。それが夏掛けで、寒くてたまらなかった人もいたようです。

97年の夏に、テレビ朝日「素敵な宇宙船・地球号」の取材クルーといっしょに、この村に泊まったことがあります。クルーの3人と私とで、ある農家に3泊しました。朝、洗面器の底に2~3cmの水をもらうんですね。交替で顔を洗って、最後の私が、その水を庭に撒こうとしました。それをみて、あるじが、止めにはいったんです。止められなくても、わかりましたよ。家で飼っているヒツジとニワトリが走りよってきましたから。洗いものをした水が、家畜の飲み水になるのは、一般的なことです。

その番組が強力な後押しになって、この村に井戸を掘ることができました。いまでは各家に水道がはいっています。畑を灌漑するだけの量はありませんが、各家が菜園をつくり、トマト、ナス、キュウリなど、野菜を栽培するようになりました。それによる生活の変化は大きなものだと思います。

今回も前置きが長すぎました。小学校で、こどもや村の人たちと遊んだときのことで。美人のお面をかぶり、きれいな衣装を着せてもらって、私もおおいに盛り上がりました。

こどもたちのなかに、印象的な女の子がいたんですよ。手編みのかわいい帽子をかぶっています。こざっぱりした身なりです。丸顔で、目がパッチリ。どことなく、ほかの子とちがいます。

グループに分かれた私たちを、子どもが迎えに来てくれました。私たちを迎えにきたのは、なんと、その子だったんですよ。家にいくと、弟がいました。これがまたかわいい！「明眸皓齒」なんて熟語が、その子をみたたんじに浮かんできました。そして、10歳のお姉ちゃんが、5歳の弟のめんどうを、じつによくみるんです。絵本でもみているような気になりました。

彼ら2人の母親が、私たちの食事を準備していました。いまでもそうですが、若いときはずいぶんチャーミングだったでしょう。私はいきなり聞きました。

「あなたの故郷はどこですか？」って。返ってきた答えは、  
「貴州省です。私は彝(イ)族です」というものでした。やっぱり！

北京からきてくれている王黎傑さんに話すと、みたいといって、私たちの家にきました。はい、いるなり、私にいうんですよ。

「たしかに漢族じゃないわね。きっちり片づいているもの。南方の人はよくはたらくしね」。王さんは漢族で、東北の生まれ育ちです。

彼女が根ほり葉ほり、ききはじめました。その女性が嫁いできたのは11年まえです。18歳のときです。紹介者(仲人)がいました。夫となった男、呂さんは、たくさんのみやげをもって、彼女の家に来たそうです。

「いい男だったし、おとなしそうだったし……」。

「でも、だまされたんでしょ？」と王さん。彼女のほうはキョトンとしています。

「だって、飲み水もない、こんな貧乏な村だって、彼は話さなかったでしょ。きてびっくりしたでしょ？」。

「貧乏なのはむこうも同じだけど、でも水は豊富だし、四季をつうじて緑でしょ。ここは、水はないし、緑はないし、冬は寒いでしょ。ことばだつてつうじなかったし……」。

「それで、どんなふうにしたの？」。

「どうなふうにして……なにも思わなかった」。

「そんなことないでしょ」。

「これが自分の運命だと考えたんです。それに夫はいい人で、とてもよく働かし……」。

庭には小型のトラクタとそれに引かせるトレーラーが停めてありました。農作業のかたわら、レンガ運送のしごとをしているそうです。いい男の呂さんは、病気の父親につきそって病院に泊まっているそうで、会うことはできませんでした。ざんねん。

「子どもを連れて、里帰りしたことはあるの？」と私がきくと、

「3回しか帰っていない。最近は一昨年でした。孫たちをみて、両親はとても喜んでくれるけど……。貴州は遠くて、列車で片道3日かかるし、お金だつて3,000元はいるから……。そんなに頻繁には帰れない」。

交通費はそんなにかからないけど、おみやげをたくさん買っていくようなんですわね。

貧しい農村ほど、この地方でも嫁日照りです。その事情を、この通信のNO.77「農村における格差の構造(3)」に書きました。以前の苑西庄村のように、飲み水に困るような村だったら、なおさらです。そういうばあいには、「人さらい」さえ跋扈するんですね。「手の長い仲人」と呼ばれている、という話をきいたことがあります。

この女性のばあいは、それとはちがいます。紹介者というのは、「双方の友人」ということでした。でも、直線距離で1,500kmも離れた男女の、共通の友人って、なんでしょう。すぐに思い出しました。先日、南郊区の炭鉱をみたときのことです。あそこの臨時工は、南方人が多く、四川の人がいちばん多かった、とっていました。貴州の人もいました。かなり以前から、そういう人の道ができていのでしょうか。

大同県のある村に泊まったとき、「村の人はみな漢族ですか？」ときいたら、  
「いや、少数民族もいる」といって、南方の民族名をあげた人がいました。びっくりして、  
くわしい事情を、きき忘れたんですね。

ハッピーな話題として、私はこれを書きました。あのきょうだいが、とても愛らしくて、そ  
のような印象をもったからです。母親もなんども「いい男」をくりかえしました。でも、人によ  
っては、異なる受けとめかたをするでしょう。結論をだせるほど、しっかり把握しているわ  
けではありません。そのような事例もあるのだな、というくらいに考えてください。

## NO. 154 植林はいいことか？ 2002. 05. 12

なんども書いたことですが、ことしの大同は風砂がすごかった。テレビは朝から晩まで、  
緑化のニュースを流しました。(なんていっても、朝から晩までテレビをみていたわけではあり  
ません) 緑化が新聞の記事にならない日ありません。でも、パターンが決まっていて、新鮮  
みがない。

そんな記事のなかに、「科学が『生態の債務』を返す」というコラムがありました(大同日報)。  
力卿という署名があります。遠田宏先生がみつけて、教えてくれました。長くはないので、全  
文を訳しておきましょう。

「数年来、砂嵐がひどくなって、経済被害が発生し、人びとの生活にも影響がでている。ひ  
んぱんに現れる風砂は、長年らいの『生態の債務』を、いつかは返さなければならないと、人  
びとに自覚させているようだ。

砂嵐が荒れ狂うときは、政府の官員から一般庶民まで、少なからぬ人が、沙漠にいて木を  
植えようとする。森林の防壁をつくることで、『砂の悪魔』を封じこめようというわけだ。そ  
のような熱情が、上から下まででてきたことは、悪いことではない。しかし、風砂を防止し、  
生態を改善することは、ただ熱情にまかせていい問題ではない。科学的に考えなければなら  
ないし、自然の法則にしたがう必要がある。

環境専門家の分析によると、風砂の発生源は乾燥地もしくは半乾燥地で、降水量がきわめて  
少ない。適合するのは草本と灌木だけである。自然の条件を無視して、大面積に植樹しても、  
活着しないだろう。活着したらしたで、そのあとずっと、人工的に灌水する必要がでてくる。

報道によると、ある地方で耐乾性の新しい樹種を推し広めたことがある。根系がとてもよく  
発達し、沙漠の深いところから水分を吸い上げる。その結果、その地下水位はさらに低下し、  
ほかの植物が大量に枯れてしまった。このような『生態建設』は、資金の浪費であるだけでな

く、生態環境をいっそう悪化させる。

筆者が思うに、『生態債務』の返済は、かならず科学の法則にしたがい、客観条件を尊重しなければならぬ。森林が可能なら森林にし、草がいいのなら草にする。自然の条件を無視して、やみくもに木を植えると、その結果は『以前の債務を返さないうちに、新しい債務をふやす』ことになるだろう。

ちっちゃな記事ですが、インパクトがあります。緑化、緑化の大騒ぎのなかで、書くのも、掲載するのも、勇気のいることだと思います。でも、こういうものはいったん出ると、力をもつようになります。中国人の「合理主義」は、けっこうなものです。

日本でも、中国の環境問題にたいする関心が広がってきました。国際協力や援助、とくに中国にたいするそれが縮小するなかで、環境分野は広がる傾向にあります。沙漠化防止とか、植林緑化は、その目玉のようです。民間団体のとりくみもふえてきました。

とっつきやすいからでしょう。ロマンもあります。私も、最初はそうでした。ほかから反対されにくいし、緑化だったらシロウトだってやれる。そんな思いもありました。

なんと軽薄だったことか。そのあと、イヤというほど知らされました。ほんとうのところ、緑化ほど、ワリの悪いしごとはありません。悪い結果はすぐにでるのに、いい結果がでるには、時間がかかります。木が育てばそれでいいかということ、そうともかぎらない。さっきのコラムが指摘するとおりです。

森林ができれば、保水性が高まり、水源涵養力がつよまります。森林を、「緑のダム」と形容することもあります。雨の多い日本では、それが常識です。でも、降水量より蒸発量をはるかに大きいところで、同じことがいえるでしょうか？木が育てば、降った雨を地中に蓄える作用は、高まります。その一方、樹木は地中の水分を吸い上げ、蒸散させます。木を植えることによる水収支は、どうなるでしょう？ずっと気になっていますが、適当な調査方法がみつかりません。

乾燥地・半乾燥地では、あえて順位をつけるなら、水・土・緑なんだと思います。いちばんたいせつなのは、水なんです。その地下水を汲み上げて、育つかどうかもわからない樹木にかける。育ったとしても、水収支からみて黒字かどうかわからない。北京では、街路樹のポプラに、散水車がたっぷりと水をやっています。スプリンクラーもあちこちでみかけます。でもそれは、全国に支えられる首都・北京だからできることです。

ものごとは、いろんな角度からみる必要があります。自信、確信、使命感は、ないと困るけど、ありすぎるのも困ります。ロマンでしごとはしないほうがいい。少なくとも、よその国ま

でかけては……。プラス面があるなら、マイナス面もあるでしょう。オドオド、オドオド、ウジウジ、ウジウジ。それくらいがちょうどいい。自分自身にしていることばです。

## NO. 155 ハードニング 2002. 05. 23

私たちの協力事業の拠点が、環境林センターです。大同市南郊区平旺郷にあります。大同の市街地からクルマで30分ほどのところ。なんども書いてますけど、2000年の春から、20haまで拡張しました。6万坪です。間口が平均で250m。奥行きは820mほどあります。

そのなかに、ビニール温室を2棟もっています。この地方で、ふつうにみられる構造です。北側は壁になっており、レンガ、もしくは土を突き固めた版築です。材料はどちらも黄土ですけど、燃料と手間がかかるぶん、レンガのほうが高い。でも耐久性はあるし、きれいです。南側は、鉄筋で骨格をつくり、ビニールを張ります。農村では、鉄筋のかわりに、竹材をつかうことが多い。

かんたんな構造ですけど、北側に壁があるかないかで、大ちがいです。全面ビニールの一般的なハウスでも、日中の気温はあがります。でも、夜間から明け方にかけて、気温が下がります。ときには外気温より低くなるというんですよ。その理由を、遠田先生が解説してくれたんだけど、私にはむずかしかった。

北側を壁にすると、日中の温度も上がるし、夜間もそれほど寒くならない。太陽光線の熱エネルギーは、ビニール越しにとりいれる。北からの寒風による冷却は、壁でさえぎる、ということでしょう。外の最低気温が零下20度までだったら、加温しなくても、5度前後を保てます。

春先、外が黄土色一色のときでも、温室のなかは緑です。色とりどりの花が咲いていたりする。日本からきたツアーの人たちは、それをみて歓声をあげます。中国の見学者もおなじです。

温室をつくったのは、立花代表の発案です。森林樹種や果樹苗だけつくっていても、生育サイクルが長くて、なかなか技術が向上しない。花や観葉植物をつくると、むずかしいかわりに、技術向上にやくだつ。というわけです。その作戦はみごとに的中しています。それ以外に、見学者へのデモンストレーションの意味ももってきたわけです。

ところが、そこでつくっているトマトやキュウリの苗をみて、日本人は顔をしかめます。「管理が悪すぎる。葉がしおれて、枯れそうじゃないの」。最近ではポリポットも使うようになりましたけど、以前はじかに土に植えていました。その土をハウチョウで豆腐のように切って、苗をあげます。でも、すぐには植えません。しばらく転がしておいて、水もやらない。葉はしおれてきますし、なかには枯れるものもでてくる。

日本でも、以前はこういう苗づくりがあったんですね。限界まで追い込んで、その生命力を引き出す、という考え方でしょう。苗に勢いがつき、実の着きもよくなる、ということでした。ハードニングといいます。日本語でなんというか、わからない。ネギだけは、いまでも乾かしてから植えますけどね。

でも最近は、プラグに種をまき、すこし大きくなったら、ポリポットに移します。根を切らないように、だいに育てるのがふつうです。それがふつうになると、あのハードニング方式はできなくなる。こわいんです。枯れたら困る。なにか障害が残っても困る。外的なそれだけでなく、心の深いところにトラウマを残すかもしれない。

あれっ、苗づくりの話が、子育てとダブってしまった！立花さんも同じように話しました。「ほお～、大胆にやっていますね。ハードニングによる効果のある植物もあれば、だめになる植物もあります。人間の子どもも同じですね」なんてね。若いときに鍛えることで、人間は伸びたと思うんですよ。自分を窮地において、飛躍をはかることもあったでしょ。すくなくとも、以前は。でも、それで傷つき、ダメになる可能性も否定できない。となると、無難なほうをとっちゃいますよね。

こんな体験もしました。ビニールハウスに入ろうとすると、ブワーッと熱風が吹きだしてきたんです。高温すぎるんですよ。そう思って、担当の技術者に文句をいったら、なにかいいかげです。その夜、彼が宿直だったので、つづきをききにいきました。うれしそうに、話してくれましたね。

「大同は日較差が大きく、夜は冷えるので、夏でも地温はそんなに上がらない。朝のうち、ハウスのなかに水をいれると、地温はさらに下がる。そして、日中のいちばん暑いときに、ビニールを閉め切る。ハウスのなかは、40度以上になる。それを2時間くらい維持する。地温はさして高くないので、それくらいだったら、トマトもキュウリも枯れはしない。でも、害虫や病菌、ウイルスは死んでしまう」というんですよ。

その話を立花さんにしたら、「そんなことをやっているんですか！トマトもキュウリも過密に育てているのに、病気がでてないな。農薬もそんなにかけてるようすはないのに……。ふしぎに思っていましたよ。さすがは漢方の国ですね」といって感心されました。

農村の子どもが浸食谷の崖を駆け下りるのをみて、ツアーの人たちが、「すごいですね。

日本の子なんて、かないっこない。自分の子どもも、あんなふうに育てたいですね」なんていいますから、「損耗率も考えて、多めに生んでおかないとね」と私が応じると、「それはそうですねえ！」。

でも、子育てについて、中国は私にとってナゾです。農村でも、小さい子は、屋外に出さないのがふつうです。たぶん、3歳くらいまでそうです。しかたなく出すときは、厚着をさせ、全身をガードします。それからあとは、伸び伸びさせるんですね。子どもの集団のなかで育っていく、という面が強いと思います。私なんか子どものころ、日本の農村もそうだった。

立教大学の上田信・円さん夫妻が、1歳半のみづかちゃんをつれて、大同にきたときのことを、大同事務所の小魏が話すんですよ。「あんなちっちゃな子が、外で転んでも、両親は手をださない。自分で立ち上がるのを、ジッとみているだけだ。中国の親はだめだ。すぐ助け起こして、土を払ったりする。あんなふうに育てるから、日本人は独立心が強いんだ」。ちゃんとみてるんですね。

その話をききながら、私はくすぐったかった。上田夫妻がそのようにこころがけているのは、事実でしょう。名前に「みづか」とつけるくらいですから。でも、日本人って、ほんとに独立心が強いのかなあ？ ツアーに参加する人は、そういう傾向の人が多いと思いますけど。それを日本人一般に広げるのには、ムリがある。でも、誤解であっても、小魏がそのように考えたのは、少なくとも友好的な感情がベースにあるからでしょう。

## NO. 156 土への回帰(2) 2002. 05. 28

「土への回帰(1)」と題して、NO. 142 に、幼いころの私のことを書きました。ふだんの何倍も、反響がありました。理由はいろいろでしょうが、ときどきは素顔を出さないといけないのだなど、受け止めています。つづきを準備しました。でも、3月10日から中国にでかけ、50日滞在しました。新鮮な素材に不自由しません。以前に書いた「つづき」も、大幅に変えることになりました。

鳥取県の大山のふもとの農家で、1948年に生まれた私は、土にまみれて幼いときを過ごしました。貧しさのなか、でもありました。そのなかで両親、とくに父親は、そこからの脱出を私に求めました。「タニシのように田んぼをはいずりまわるのは、自分たちまでで十分だ。可能性があるのなら、ほかの道へすすめ。おまえは次男なんだから、いるところもない」。イタズラがばれたときのおしかりと同じくらい、そんな話を聞かされたものです。

結果として、私は「科学少年」になりました。印象に残っているのは、低学年のときの鉱石ラジオです。単純な構造で、音がでるのがふしぎでした。3年生から、昆虫採集をはじめました。採集したチョウには、ホルマリンか石炭酸を注射して、防腐措置をとります。ハネをひろげる展翅板と標本箱は、カタログの写真をみながら、オヤジがキリ材で手づくりしました。

こんなふうには書くと、秀才タイプと誤解されそうですけど、そうではなかった。小学校低学

年の通信簿は、アヒル艦隊です。大部分が2と3。いや、あのころふうにいえば、「やや劣る」「ふつう」です。それでも、私の父親は「この子は頭がいいから、帝大にやろう」なんて、酔っぱらってはクダをまいていたんですからね。

ワルでもありました。ズボンのポケットに、短く切った自転車のチェーンを忍ばせていました。なにに使うかって？ ケンカ用です。自分の手は傷つけないように、半分には包帯がまいてある。

でも、私はケンカは弱かった。腕力がない。気も弱い。とっくみあいをして、すぐ泣きます。でも、泣いたあと、強くなる子っているでしょ。そういうタイプです。

そして、ひとと同じことをしたくない。みんなが運動会の行進をしていると、いつのまにかそれはずれる。なにかが流行すると、それは卒業したような顔をしている。先生がいい話を、クラスみんなが感心しているのに、私はシラケている。

そういう子どもを理解し、受け入れる大人って、そうはいないでしょう。こんなカワイくないガキはいない。ふりかえって、自分でそう思います。そのうえ反抗心がつよかった。だれであろうと、えらそうにされるのが大きらいです。それはいまでも変わらない。

小学5年からの担任に、徹底抗戦しました。私のほうがワルだったんでしょう。ある年齢にたつて、判断力がつけば、そう思います。毎朝、職員室に呼びつけられ、担任の机の横で正座するようにいわれました。教室には入れないんです。それがしばらくつづいたあと、父親がストップをかけました。でも、ひとことも私を叱らなかった。

伯父(母親の兄)の一家にあずけられたんです。それまで農村の小学校だったんですけど、鳥取市内の小学校に転校しました。県庁の近くにあつて、クラスには公務員の子どもが多かった。全国一小さな県の県庁所在地ですけど、村の子の目でみると大きな街です。

びっくりしましたね。それまでの小学校は、春と秋には、農繁休暇がありました。農業の忙しい時期は、学校が休みになり、子どもも手伝いをしました。宿題なんて、夏休みを除けば、なかった。街の小学校では、毎日、宿題がある。しかも、みんなが、それをやってくるんです。

私も同じようにしました。しかたないんです。それまでのような農村の遊びはできないし、友だちはいないし。アツというまに、成績があがったんです。ついでにクラス委員に選ばれてしまった。

中学校にあがって、実家に帰りました。おとなしかつた時期です。萎縮していたと思います。小学生で親元を離れるのは、それなりにツラかった。卓球とアマチュア無線にエネルギーを傾

けました。

真空管の時代です。配線図にもとづき、アルミのシャーシーにドリルとリーマで穴をあけ、真空管、電源トランス、バリコン、コイルをはじめ、大きな部品から配置していきます。それから、抵抗器、コンデンサーなどを、ハンダで組みつける。たいていはジャンク屋で買います。広島の子品で、カマスのなかの米軍の放出品をかきまわしたこともあった。そのころはまだ、目でみて、手でさわって、感覚的にわかることができました。IC、LSI の時代とはそこがちがいます。

高1中2なんて受信機をくみます。高周波増幅1段、中周波増幅2段、なんて意味ですね。送信機には、807なんていう巨大な真空管をつかいました。2個、並列につないで、プッシュプル。当時は意味を考えなかったけど、Push-Pull かな？ テレビの水平出力管の2E26 なんかも流用しました。ほかの人があまりやらないことをやるのが、うれしかった。トランジスタもでてきたけど、容量が小さく、安定感もなかった。

配線図どおりに組んでも、作動するとはかぎりません。そうでないばあいが多かった。パーツにばらつきがあるんです。コイルなんか、自分で巻くこともありましたし。計器といえば、テスターだけで、微調整をくりかえします。動きだしたら、ほんとにうれしかった。アンテナも、孟宗竹を支柱にした手作りです。

作動を確認できたら、それでいいんです。QSL カードだったかな？ 通信を確認しあうカードがあった。集めて、その数や距離を競う人もいたけど、私は興味がなかった。分解して、新しく組み立てなおす。その繰り返しです。

そんななかで、将来は、ものをつくるしごとだと思いつめていました。技術屋です。農村を離れるといっても、それ以上のことは、想像できなかった。日本は技術立国するしかない、という風潮がありました。1960年代前半のことで、高度成長期にはいってたんです。

有名企業の養成校に興味があり、できたばかりの高専にも魅力があったけど、進学したのは普通科高校です。授業をよくサボりました。担任から、「こんなにサボるんだったら、朝からくるな。他にたいする影響もある」といって、叱られました。でも、「サボるな」とはいわれなかった。自由な雰囲気のある進学校で、成績さえとれば、放任されたんです。

3年になって、急に成績があがりました。原因が2つあります。学校の勉強、教科書はきらいでしたが、本を読むのはすきでした。授業中も、先生の話はきかない。教科書を広げない。そのかわりに、図書館で借りだした雑多な本を、乱読していました。そういう蓄積が、ある段階で成績にはねかえったようです。

同じクラスに渡辺正くんがいました。勉強ができました。いまは東大生産技術研究所の教授です。汽車通学で、いつもいっしょでした。彼が勉強してるから、私もそれにつきあいました。すると、夏休みまえから、急に成績があがった。

それでも、英語なんて、どうにもなりません。中学校いらいの蓄積がまるでないから。夏休みに、2冊のペーパーボックスに挑戦しました。ヘミングウェイの『武器よさらば』。文章が短く、構文が単純で、わかりやすい。もう1冊は、『チャタレー夫人の恋人』。辞書をひかないで読むことを決めました。最初はわからなくても、そのうち意味が伝わってくるから、ふしぎです。試験の点は、それでとれちゃった。

大同の農村にはじめていった10年前、私は中国語がわからなかった。勉強したことはありません。でも、なんとなく伝わるようになってくる。言葉がわかるんじゃない。相手がなにを言いたいか、伝わってくる。高校生のころといっしょかもしれませんね。

土から離れる過程を、私は歩んでいました。日本の高度成長期のことです。

#### NO. 157 誰が誰を養ってる？ 2002. 06. 03

北京出張から帰ってきた大同の友人が、この春、私に話しました。「全国人民養活北京」。全国の人民が北京を養ってる、というんです。物価が高い。ちょっとしたホテルでの1泊は、彼らの1月の賃金です。食事が高い。恐ろしくて、レストランなんか、はいれません、自分のお金だったら。交通費も高い。

全国規模の会議は北京で開かれることが多い。呼び出され、自分たちのお金を巻き上げられる。そんなふうな実感なんでしょうね。大同は、北京に石炭を送り、水を送り、電気を送ってる、そう思ってますから、そういう感情がとくに強いのかも知れない。鳥取県(私の出身地です)の知事が、東京都の知事にかみつくと、似た面もあるでしょう。

北京の人にいわせると、「なにってんだ！貧乏な大同を養ってるのは、おれたちじゃないか。石炭なんて、大同から買わなくていいんだし、大同の経済は、電気を売ることになりたってるんじゃないか」なんてことかも知れない。それにも一理がある。

友人のことばを契機に、私は考えたんですね。ひよっとすると、いまは「中国人民養活日本」なのかも知れない。中国の人民が日本を養っている。私のような低所得層の食べるもの、着るもの、雑多な小物、電気製品、みんな中国製です。半分を超えて、大半とっていいくらいです。中国がなかったら、日本の私たちは生きられない。

もちろん反論があるはずですが。「ただでもらってるんじゃない、ちゃんと対価を払ってる」「中国の商品が氾濫するおかげで、日本は景気が悪くなった。日本の産業が空洞化し、失業率がこんなに高いのは誰のためだ」「農業だって、中国のためにつぶされそうじゃないか」。経済の観点からすれば、そのとおりでしょう。

でも、経済の前に、人間と人間の関係ってあるでしょ。農民の子のせいかな、私は、誰がつくったものを、誰が食べているか、誰がつくったものを、誰がつかっているか、といったことに、関心がいきます。

「黄土高原だより」の読者から、質問があったんです。「中国産のキュウリが、スーパーで1本20円ですよ。どうしてそんなに安くできるんですか。安くてうれしいというより、こんなことがつづくのか、と心配です」。

大同の私たちの拠点「環境林センター」の、女性の臨時工の日当が、7円です。1円は15円前後ですから、100円ショップの商品1個プラス消費税。ほんとによく働くんですよ。地元の人より、河北省からきている人が多い。河北省の女性は、よく働くことで有名です。同じペースだと、私はたちまちダウンします。

気の毒に思って、武春珍所長に「ちょっとは賃金をあげなさいよ」といったら、「そんなことをしたら、自立できなくなる。いつまでも日本の支援をあてにできるのか」と一蹴されました。それはそのとおりでしょう。

そのセンターですら、ビニールハウスで野菜をつくって、赤字です。1日8時間労働で、7円の賃金をかけたら、それを取り戻せない。去年から、新品種をとりいれて、直接レストランに卸すことをはじめましたが、さあ、どうだったか。こわくて、たしかめていません。

ことしの4月、南郊区の農村を見学しました。1か所にビニール温室が1000棟以上もならんでいます。温室はみな東西に長いんです。北側はレンガか土の壁でできています。それで北風と寒さを防ぐんですね。南側に鉄筋か竹材で骨をつくり、それにビニールが張ってあります。太陽光線の熱をビニール越しに取り入れる。

温室の入り口が6畳ほどの土間です。その一部に板をわたし、フトンが敷きっぱなしにしてある。綿はカチンカチンになり、フトン表は垢で黒光り。その男の人は、広霊県の農村を2年前にでてきて、ここで暮らしている。暗いうちから、暗くなるまで温室で働いて、夜もここで寝ます。それで、食べるのがやっと。

南郊区は市街地に近く、いろんなしごとがあります。土地の人は、農業をやめて、ほかのしごとにつく。その穴を、より貧しいところの人が、埋めるわけです。私の感覚では、とても耐

えられない環境ですけど、故郷に比べればまだまだから、こうやってでてくる。

私たちの環境林センターでは、それに対抗できない。まして、日本の農業が競争力をもてるはずがない。

そして大同では、農産品に比べて、工業製品は高いんです。日本製のハイテク製品となると、さらに高い。働いている人の賃金が数十倍から百倍以上もちがう。工場や製造設備に元手もたくさんかかっている。できあがる製品の値段がちがうのは、当然といえば当然です。

でもね、人間と人間の関係でみたとき、それはどうでしょう。あそこの農民のほうが、はるかにしんどい労働をしているんです。日本の労働者の数十分の一に扱われるのが、正当とは思えない。

最初に述べた大同と北京の関係は、大同の農村と大同の都市部とのあいだにもあります。中国と日本との関係にも、同じようなことがある。それはまた、世界の人びととアメリカとの関係にもつながる。グローバル化といっても、その根底にあるのは、「アメリカの、アメリカによる、アメリカのための」でしょう。地球環境にもたらされる悪影響も少なくない。

それでも、反対しにくい。「自由」と「自由化」には。この「自由」は、ものと、お金の動きにとっての自由なんです。ひとの動きは、不自由です。国境とビザその他で厳重に管理される。中国では、都市と農村のあいだに、戸籍その他の障壁がある。

人の動きも含めて、自由なほうにすすんでいくのか。それとも、ものとお金の動きにも、しるべき制約があるべきなのか。そのどっちかしかないと、シロウトの私は考えるんですけど、いかがでしょう。

## NO. 158 足元の歴史の厚み 2002. 06. 10

大同は、中国でも有数の歴史都市です。昨年末に、UNESCOの世界遺産に登録された雲崗の石窟をはじめ、たくさんの文物があります。でも、私が歴史の重さに圧倒されるのは、もっと足元のことです。

たとえば私たちの主要な拠点の、環境林センター。苗畑に、たくさん土器がコロがっているんですよ。破片ですけど。1時間もさがせば、1人でも100個ってことはないでしょう。魚釣りでいえば、「入れ食い」です。

それが専門の、摂南大学の谷口義介さんが、集まったものをセンターの実験室に並べました。

小さな破片でも、どういう容器のどの部分であるかが、専門家の目でみればわかるんですね。釉薬のあるなし、ついてる紋様などから、時代もわかる。いちばん古いのは、前漢だそうです。紀元前で、2000年以上前のものです。

なかに、円盤のようなものに、直径1cmほどの穴がたくさんあいているものがありました。私には見当もつかなかった。蒸し器の一部だそうです。鍋の底に水をいれ、こいつを敷いて火にかければ、蒸気が穴を通過して上にあがる。

カワラもたくさんみつかります。ゆるやかなカーブがついている。布目がついています。練った粘土に布をはって成形し、天日で干したあと、焼いたものだそうです。屋根の場所場所に応じて、かたちのちがうものが使われていました。そんな昔に、カワラ葺きの建物がたくさんあったとしたら、ここはどういう場所だったんでしょう？日本だったら、発掘もしないで、トラクタで引っかき回すなんて、できないでしょうね。

そこらじゅうが、そうなんです。実験林場「カササギの森」は、采涼山のふもとで、海拔が1,400m以上あります。ここの畑にも、カワラケがころがっている。いろんな時代のものが、混じりあっています。

1999年11月1日に地震があり、そのあと、小学校の再建に協力した大同県肖家窑頭村。旧校舎のすぐそばに、古墳が並んでいます。「漢墓」といわれます。この規模のものは、あちこちにある。大部分は盗掘されているようですけど。

いまでも盗掘の対象になっているものもあるようです。この協力活動を開始した1992年の話です。渾源県の青年団書記・李啓軍は、それ以前は、県の公安に所属していました。「どんな事件が多いんだ？」と私がきくと、「たいした事件は、農村にはない。酔っぱらいのケンカくらいなものだ」といって、活躍の場のないことが、残念そうでした。でも、ポツリともらしたんです。「数年前、盗掘団との銃撃戦があった」と。

岡山大学の佐藤智水さんは、日本では少ない北魏時代の研究者です。「皇帝の事績を記録した石碑が発見され、霊丘県に保存されているはずだけど、わからないだろうか？」ということですよ。大同事務所にファクスを送ったら、「覺山寺にある」との回答。霊丘自然植物園への途中にあり、なんども訪れたところです。

佐藤さんの同僚の佐川英治さんが、ことしの春、ツアーに参加されました。覺山寺での記念植樹がセットしてあったんですよ。そして、「こっちだよ」と気軽に石碑に案内してくれました。デジカメをとりだしながら、佐川さんは「撮影してもかまいませんか？」なんて、きくんですね。

そばで私が考えたのは、人間には2種類ある、ということです。「男と女」じゃないですよ。まじめな人間と、そうでない人間。私だったら、そんなことを聞くまえに、撮っていますからね。

地元の方は、「かまわない。だれも管理していない」と答えました。重要だと思っているのは、佐藤さんくらいかもしれない。中国人は、日本人よりはるかに歴史を大事にしてるんですよ。中国は4000年の歴史感覚で生きているのに、アメリカは200年、日本は戦後の50年……。そのとおりでしょう。でも、中国は歴史が長すぎるし、過去の事物が多すぎる。過去のものをすべて大切にしていたら、現代の人間が生きていく場所がない。

最初にそれを感じたのは、1995年春、場所は同じ霊丘県の三山村です。小学校付属果樹園のために、アンズを植えていました。いっしょに作業していた村の人が、歓声をあげ、1か所に駆けよっていきます。なにかをみつけたようです。私たちもそこに集まりました。

アンズを植えるための穴を掘っていたら、固いものがスコップにあたった。かなり大きなレンガです。掘りおこすと、その下に空洞がでてきた。規模は小さいけど、レンガを組んだドーム状の地下宮殿。お墓だったんです。

1人の村人が、ロープでつり下げられ、なかに降りていきました。いくつもの副葬品が運びあげられます。陶磁器がほとんどです。破片でなく、完全なものです。最後のほうで、陶製の板が上がってきました。青灰色の陶板に、墨で文字が書かれています。失望の雰囲気が広がりました。大ものなら、石に文字が刻まれているはずだ、というのです。

明代の没年が記されていました。500年くらいまえのものです。日本でいえば、戦国時代。村人の失望が、決定的になりました。「メイジャージ！」(価値がない)というんです。あまりに年代が浅すぎる。それでも、だれかが連絡したんでしょう。県の担当部局の自動車がきて、でてきた副葬品を持ち去りました。

陶板には、埋葬者の死因が書かれていました。なんと、「酒を飲みすぎて死んだ」というんです。ええっ。私は、自分の将来かと思いましたよ。

その年の夏、同じ現場を訪れました。アンズの生育ぐあいをみたあと、お墓もみしました。畑のなかに、穴があるだけ。レンガは、農家に持ち帰られ、再利用されたんでしょう。

## NO. 159 お墓 2002. 06. 17

黄土高原の農村を、クルマで走っているとします。畑のなかにポツンポツンと木が生えてい

るのがみえるはずで。何十年か、それ以上もたった古木があります。NHK-BS2の「地球に好奇心」シリーズ、「黄土高原～失われた森の文化を求めて」のタイトルバックがそれでした。大同では、大部分がヤナギです。アブラマツやトウヒが、たまにあるかな？

これが風水樹。お墓の護り木です。伝統的な農村では、死後の来世を、現世以上にだいにします。墓は、風水のいいところを選びます。風水先生がいて、場所や日にちを指示するわけです。もともといいところに、木を植えれば、風水はいつそうよくなります。そういういわれの木は伐られにくい。

風水樹を目印にすると、周囲にお墓が見つかります。土を盛り上げた、土まんじゅうです。円形のものや楕円形のものがあります。農村では、大きなものでも3m×5mくらい。風水樹のないお墓もあります。大理石やコンクリート板の墓標のあるものもありますが、表示のないものが多い。

名を秘しますが、さる大学教授がそれにむかって立ち小便をしました。「的をえて矢を放て！」。目標物が必要だったのでしょ。畑においてある堆肥の小山とまちがえたのかもしれない。

ここまで読んで、おかしい、と思われたかたがあるでしょう。来世をだいにしている、といいながら、お墓があまりに粗末じゃないか！そのように私も思っていました。ところが、ちがうんです。

環境林センターの西どなりが墓地です。と思っていたんですけど、じつはそうではなかった。村の果樹園で、アンズが植えてあったんです。管理が不十分で、目が届かないうちに、どんどんお墓をつくられてしまいました。1999年には、1年で新しいお墓が100以上もできました。風水先生が、あそこがいいとすすめているそうです。村外からもくるんです。

2000年春、環境林センターを拡張することになったとき、線引きがむずかしかった。地元の村は、私たちの範囲にそこも含ませたかった。農村といっても、ここは郊外で、土葬は禁止です。お墓をつくることは、法律と政策に違反しています。私たちに管理させたほうが、村としては便利です。「あなたたちのいうことのほうを、農民はよくききます」なんて、村の幹部がいうんですね。

こちらとしては、困りますよ。多い日は1日に3度も、葬列が環境林センターを通過します。大同事務所の武春珍所長は、「お金をだして、めんどろを買ったようなものだ」と息巻きます。遠田先生と2人で、ようすをみにいきました。

アンズ園のはずの一角で、なんと8つも、新しい穴が掘られていました。墓穴を掘ってる現場にであうなんて、めったにないことでしょう。覗きこんで、びっくりしました。それまでは、

浅い穴を掘って遺体を埋め、そのうえに土まんじゅうをつくると、思っていたんです。ぜんぜんちがう。

まずは、2m×3mほどの縦穴を掘ります。深さも3mはあります。そこから横に掘り広げるんです。規模は小さいけど、北京の明の十三陵あたりと、構造は同じです。主人が眠る室が、中央にあります。そのとなりに奥方が眠る室がある。そして、副葬品を納める部屋がある。

武春珍所長がそれを見て、村の幹部にねじこみました。結果として、そのお墓は埋め戻されました。いや、お墓じゃない。そのために掘られた穴です。

お墓が集まっていれば、埋められた人もさびしくない。法律や政策に反するといっても、みんなで渡ればこわくない。そのうえ、春にはアンズの花が満開です。最高の環境です。風水先生がすすめるのも、ムリはありません。

小武に、「風水先生を買収して、べつなところに誘導させたらいい」といいました。ジョーダンですよ。彼女の答えは、「いったいどれだけ風水先生がいると思っているのか」というもの。

中国では、お墓参りに火をつかうので、小武は、火事がこわいんです。私としては、人の生き死にのときに、日本人が関係するのを避けたかった。近親者は感情的になっているはずです。葬送の道を、につっき日本人が閉ざした、なんてことになったらどうなる？

センターの敷地とお墓とのあいだを塀で区切ることにしました。そして、外からお墓に自由にアクセスできるよう、通路を残すことを考えました。苗畑の面積は少し減るし、塀の建設費は増えます。そんなことをなぜ自分たちの経費でしないといけないのか、小武は不満でした。でも、その案をもって、村との交渉にでかけました。

村の幹部はあわてたようです。そんな通路ができれば、お墓が公認されたことになります。政策違反だといって、上から叱られるかもしれない。村で、通路と門をつくり、自分たちで管理する、という回答でした。新しい墓は認めないけど、お墓参りはかまわない、というものです。私たちにとっても、最良の解決です。

取ろうとするばかりが交渉じゃないんだな、大きくゆずることで結果がよくなる、そういうこともあるんだな、と改めて考えました。私がそこまで読んでいた、と思った人がいたようです。そんな策士じゃ私はない。あくまで、結果として。

大同には、万人坑があります。日本が大同を占領した期間に、犠牲になった炭鉱労働者を廃坑に捨てました。乾燥しているためでしょう。白骨化しないで、ミイラになっています。死後の世界をだいじにする中国人……。万人坑を見て、彼らが思うことは、私たちの想像を絶する

でしょう。

## NO. 160 フェミニストの陰謀？ 2002. 06. 24

この「黄土高原だより」、月曜日に届くことが多いはずですが。「さあ、今週もがんばるぞ！」なんて、思っておられるところに届いて、読んで、気がぬけた、という人も多いことでしょう。もうしわけないことです。私の文章は、人をダラ～とさせるほうに作用するようです。中国語でいう「放松(鬆)」ですね。

たいていは土曜日から日曜日の夜に書きます。いっぱいやりながら。アルコール濃度を一定に保っているほうが、抑制が解けて、ペースがあがります。毎回、2,400字でいどに抑えるのが目標で、1～2時間で書きあげます。でも、酔っぱらってから書いたことには、マズイことがあるかもしれない。送るまえにチェックをいれていました。

ところが、急に酒に弱くなったようです。年齢のせいでしょうか。前夜に書いたことが、翌朝、記憶にないんですよ。朝、ファイルを開いてみると、ちゃんと最後まで書かれている。そんなになおすこともない。いったいだれが書いたといえるんでしょう。

ところが、今回。書いたはずなのに、いくらさがしても、ファイルがみつかりません。書いたテーマと、内容の断片は記憶にあるんですよ。それで検索をかけても、ファイルがみつからない。気にいらなくて、自分で消してしまったのかもしれない。

しかたがないので、話題を変えます。6月22日(土)が私たちの会員総会でした。毎回のことですが、総会よりは、そのあとの懇親会がもりあがります。会員総会より、人数がふえることさえあります。

中年男数人の席での話題です。いまの若い子は、女性のほうが圧倒的にしっかりしている、ということです。それは私の実感でもあります。

大同の農村にツアーがいくと、最初に体調をくずすのは、若い男。ほんとに弱い。気持ちまで落ち込んでいる男たちを、「男の子は、繊細にできているんだからな。しかたがないんだよ」なんて、なぐさめるのが、私のしごとだった時期があります。なぐさめになっていないか。

でも、最近では、若い女性がダウンするケースが多い。原因はまるでちがうですよ。大同に着いた日の昼食で、度数の高いパイチュー(白酒)をガンガンやる。意識を失うところまでいっても、そのあと、またがんばる。NHK大河ドラマの広告に、「男たちは美しく、女たちは遅しく」とあったんですけど、それが時代精神なのかもしれない。

グループのなかで、采配をふるうのも、たいていは女性です。大阪の高校で話をする機会が  
つづいたんですけど、とりしきっていたのは、どちらも女子でした。大学でもたいていはそう  
です。話のあと、質問してくるのも、圧倒的に女子学生が多い。

だいぶ前のことですけど、関東の私立大学で話をしました。十数人が残って、つづきを話し  
たんですけど、全員が女性でした。男の子は1人もいない。ちょっとからかうような気持ちで、  
「ねえ、同級生くらいの男の子って、たよりないでしょ。恋愛とか、結婚の対象って、ひよっ  
として、このオッチャンの年代じゃない？」といったら、返ったきた答えが、じつによかった。

「だいじょうぶです。自分で育てますから」というんですね。私はすっかり感心しました。  
と同時に、自分をふりかえってみたんですよ。う～ん。カミさんに育てられだした、最初の世  
代は、私たちなのかもしれない。たちじゃなく、私なのかもしれない。ぜんぜんジマンになら  
ないけど。

これって、フェミストの陰謀じゃないか、なんて私はいうんですね。男の子は、ペットのよ  
うに育てる。そして娘には、「しっかりしなさい」とやる。結果は、無血革命ですよ。やがては、  
自然に女性の天下になる。

わが家は、2人とも男の子です。そんなことを私が口にしたら、ウチのカミさんがいいまし  
た。「なにあってんのよ。子育てに参加しなかつたくせに……」。すみません。そのとおりです。

この「黄土高原だより」には、私の父親がしばしば登場します。飲んでいるとき、友人たち  
がいうんですね。「高見さんはしあわせだよ。父親をとてもしきで、尊敬してたんだから」。そ  
れが幸せかどうか、わからないけど、でも、私は父親っ子でした。ずっと父親の背中をみて育  
った。

小学生までは、こわい存在だったんですよ。なぐられたことも、なんどもある。テレビドラ  
マに、「民主的」な父親がでてくると、それがうらやましかった。自分が父親になるときは、絶  
対にそういうふうになると、思ったことだってあったんです。

私が中学生になってからは、父親が私を叱ることはなかった。小言をいうこともなかった。  
対等にあつかおうとしていたと思います。大学進学で家をでてからは、会うこともめったにな  
かった。たまに実家に帰ったときは、いっしょに酒を飲みましたよ。

そんなときに、オヤジが私にいったんです。「おまえの息子たちは、どうしておまえになつか  
ないんだ」。悲しそうに。そのときの彼の表情を、いまでも私は覚えています。

ほんとのところ、NGO というのは、若い人たちのいい修行の場かもしれませんね。自分をみつめ、自分を鍛えるための。私たちもそういう開かれた場でありたいと思うんですけど……。

## NO. 161 マツを植えて育てる(1) 2002. 06. 28

「黄土高原だより」のこれまでのタイトルをみなおして、愕然としました。160号にもなるのに、緑化にかんするものが、あまりに少ない。なにをやってんでしょうね、ったく。そういうことだから、大きく伸びない。樹木も、この事業も。反省をこめて……。

大同でいちばん多く植えられているのは、マツです。多い順にいくと、  
モンゴリマツ(*Pinus sylvestris* Linn. var. *mongolica* Litv. 樟子松)。  
アブラマツ(*P. tabulaeformis* Carr. 油松)。  
カラマツ(*Larix principis-rupprechtii* Mayr. 華北落葉松)。

アブラマツには、「マンシュウクロマツ」という和名がありますが、なぜ「クロマツ」なのか、わからない。樹幹の色からいうと、「アカマツ」でしょう。そのままカタカナで、アブラマツとしました。

このカラマツには「ホクシカラマツ」という和名がありますが、いかにも時代がかってますから、「カホクカラマツ」とでもしたらいい。カラマツがちゃんと育つのは、海拔 1,500m 以上の山です。それより下でも植えてますけど、たいていはイジケている。苗づくりも、高いところのほうがうまくいくようです。そこで今回は、それ以外の 2 つのマツを扱います。

植えるところは傾斜地です。たいらなところは、畑その他になっている。以前に書いたように、活着と育ちのいいのは、北向きの日陰斜面(陰坡)です。南向きの日向斜面(陽坡)はよくない。でも、大同は、太古の造山運動の関係で、山の北側は切り立っていて、南側がなだらかです。陰坡の面積はせまく、理想的なところの植林は、すでに終わっています。むずかしい陽坡をどうするかが、これからの課題。実験林場「カササギの森」も、基本的には南向きの斜面です。

整地のしかたは、2 つあります。多いのは水平溝方式。等高線に沿って、水平に、幅 50cm×深さ 25cm ほどの溝を掘ります。出た土を溝の下側に盛り上げて、土手にします。これも幅 50cm×高さ 25cm。溝と土手とで、高さ 50cm の土の壁ができます。この壁に密着させて、苗を植えます。この壁が、強い陽射しと強風から、若い苗を守ります。小さな日陰斜面を、人工的についているようなものです。

溝と溝の間隔はおおよそ 3m。苗と苗の間隔は 1m。それで 1ha あたり 3,300 本になりますが、こ

れがこの地方の規格です。整地が終わったあとは、地図をみるようです。山に等高線がはいっています。

整地は、前年の雨期にするのが理想的です。雨期整地といいます。夏の雨は、せまい範囲にドシャ降りします。それが土を流すんですね。国では水土流失といいます。ところが、このように整地してあると、溝と土手とに阻まれて、流れることがありません。雨水は溝のところで土中にしみこみます。9月からは気温が下がり、11月からは月平均気温も氷点下です。蒸発がおさえられ、やがて凍結して、水は土中にたくわえられます。翌春、温度の上昇とともに、凍結水が融けて、苗を育てるわけです。この効果が思っていたいじょうに大きい。

整地のもう1つのやり方は魚鱗坑です。径50~60cmの円形もしくは楕円形の穴を掘り、穴の下側に、石や土で小さな土手をつくります。この穴と土手とで、上から流れてくる水を受け止めるわけです。苗はやはり土手に沿わせて植えます。魚鱗坑方式は、傾斜が急で作業の困難な場所、表土の薄いところで採用されます。

いずれにしても、たいへんな作業です。機械なんかつかわないで、スコップ1本で溝を掘り、木の板でたたいて土手を固める。試しにちょっとやってみるんですけど、私のような軟弱分子はすぐにダウン。いくら人海戦術といっても、労力の負担が大きすぎる。小さな苗を植えるのに、これほどの土木工事をしなくていいじゃないか、と考えました。実験区をつくって、整地しないまま、植えてみたんです。結果はよくなかった。それに、ああやって整地をして、事前に土が掘ってあるから、効率的に苗を植えられるんです。植樹の適期は、土の凍結が融けてから、芽が動きだすまでのあいだで、短いんです。この時期に、最初から穴を掘っていたんでは、効率が上がらない。

1999年の年末、農村でアンケート調査をしました。そのなかで、植林の過程で困難な作業はなにかと質問しました。いちばん多かったのは、「植えたあとの管理」で71.9%。管理の内容は、次回に書きます。つぎは「灌水」で45.6%。整地作業は3番手で、22.7%。そういうことなら、整地の省力化なんて、考えなくていい。

植栽の時期は、3月末から4月上旬です。それくらいにならないと、土が凍結していて、穴を掘れない。春の農作業がはじまるまえで、農民も動きやすい。

苗は2~3年生で、地上部は10~15cmしかありません。ことしの春、カササギの森では、モンゴリマツは3年生、アブラマツは2年生でした。一般には、露地で育てた裸根の苗をつかいます。まるで草のようで、たよりない。でも、活着率は小苗のほうがいいんです。作業もずっとラクです。コストも当然、安くてすむ。

事前整地の溝の底に、深さ25cmほどの穴を掘ります。そして、私たちのプロジェクトでは、

2握りほどの砂をいれる。黄土は粒子が小さく、根が窒息しかねないので、通気性の改善が目的です。苗を穴にいれて、ちょっと土をかけ、水をやります。その水が、土のなかに浸透するのを待って、さらに土をかけます。水が浸透するまでに土をかけると、水は上にきて、すぐに蒸発してしまうというわけです。以前は深植えが多かったけど、ここ数年でかなり改善されました。

植栽のときは、水をやります。そのあとも、可能なら1~2回は灌水します。しかし、かならず、というわけにはいかない。たとえば、1999年、2001年は、記録的な大旱魃でした。灌水が必要です。しかし、飲み水にすら困る村があります。畑の作物が枯れていくのを、手をこまねいてみているのに、山の木に水をやってくれとは、いえないんですね。いったところで、不可能でしょう。

ことは雨が多く、カササギの森では95%以上、活着したそうです。大同県の采涼山や金山寺でも90%以上、着いたそうです。環境林センターや植物園での苗づくりも、ことは順調です。最高の年だと、いってきました。こんな年も、ないと困ります。

## NO. 162 マツを植えて育てる(2) 2002. 07. 02

前回で、マツを植えるまでのことを書きました。今回はその後の管理などについてです。

最初にお断りしておきたいことがあります。日本の私たちには、こういう観念がないでしょうか。努力をすれば、かならず報いられる。うまくいかないのは、努力がたりないからだ。「なせばなる、ならざるは人のなさざるなり」なんてね。以前の私にもそういうところがありました。

ところが、黄土高原の植林では、そういうことは通用しないんですね。努力しなかったら、結果はなにもありません。努力したいじょうの結果を期待しても、むだなことです。日本には「あとは野となれ山となれ」なんてことばがあります。荒れ果てて、野や山になるという話です。ところが黄土高原では、ほっておいたら野にも山にもならない。努力して植えなかったら、環境は悪くなるっぽうです。

努力したら、かならず成果があるかといえば、そうはいかない。成果がないのは、努力がたりなかったからだ、といわれても、それは困る。環境が、日本の私たちの想像を絶するんですね。具体的にみていきましょう。

春、植える前後で困ることは、気候が不安定なことです。たとえばことは、春の訪れが、平年にくらべて、半月は早かった。3月中旬になると、日中の気温が15度を超える日ができ

ました。苗の芽が動きはじめますから、1日でも早く植えないといけない。しかし、地温はそう急速にはあがらず、土は凍結したままで、穴を掘れない。

忙しい思いをして植えたあと、4月になって、気温が零下10度に下がる日がでてきます。植えた直後に低温にあうのは、苗木の活着にとってよくありません。そのうえ、ことしは春の風が強く、苗木の水分が失われるんですね。大苗のばあいは、影響が大きい。

ここでの植林をさらにむずかしくしているのは、春の雨が少ないことです。マツはもともと乾燥と痩せ地につよい樹木です。モンゴリマツもアブラマツも、植えてから2~3年たち、根を張っていれば、少々の旱魃では枯れません。しかし、植えた最初の年はそうはいかない。

農民は、「春の雨は油より貴重だ」といいますが、植林も同じです。90年代にはいってから、4~6月の降水量は、80年代の平均にくらべて、半分に落ち込みました。この時期、2~3回の灌水ができれば理想的ですが、旱魃だとそれもできない。ひどい年の活着率は、ガタッと落ち込みます。「100年に1度」といわれる旱魃のなかで、昨年、大同県の主要なプロジェクトで、75%にもたつしたのは、驚くべきことです。でも、左雲県、新栄区では、活着率が20~30%に落ち込みました。すべてが解明されたわけではありませんが、雨期整地の有無が、明暗を分けたようです。

旱魃の年に発生するのが、バッタの害です。蝗害といっていますが、「蝗虫」はイナゴだけでなく、広くバッタ類を指します。なぜ、旱魃の年に多いかというと、バッタのタマゴは雨や湿気にあたると、カビたり、腐ったりしますが、乾燥にはめっぽう強いのだそうです。バッタのタマゴにとっては、旱魃は良好な環境で、みんな孵化します。1平方mあたり600匹という現場をみたことがあります。まだ小さなムシでしたが、場所によっては、6,000匹なんてところもあったそうです。

旱魃だと、畑の作物のできが悪い。草も乏しい。そうすると、うまいとは思えないのに、マツの芽まで食べるわけです。マツのような針葉樹は、頂芽がなくなると、生き残ることはできません。97年、98年のバッタの大発生で、金山寺をはじめ、私たちのプロジェクトは大打撃を受けました。あれさえなかったら、ずっとよくなっていたのに……。残念です。2001年も大発生し、大同の市街地までムシが進出しました。

冬の寒さと乾燥も難敵です。いちばん寒いのは1月で、月平均気温はマイナス11度です。最低気温は、マイナス20度近く。いちばん寒いときは、マイナス30度近くになります。植林現場の山は、もっと下がる。

日本では、寒い地方には、雪が積もります。雪に包まれると、温度はそんなに下がらないんですよ。0度前後のようです。ところが、大同では雪がほとんど降らない。そして、西北の乾

いた風が強い。風の日、気温もずっと下がります。

寒さと乾燥から守るために、11月ごろ、苗に土のフトンをかけます。すっぽりと埋めてしまうんです。ですから、冬にプロジェクトにいても、なにもみえません。常緑の針葉樹でも、冬は休眠しますので、あまり支障はないようです。逆に、埋め忘れたものは、水分が抜け、白くなって、枯れています。

4月中旬ごろになって、土を取り除きます。最初は黄色っぽくて元気がないけど、1~2週間もすれば、緑になります。埋めるのも、掘り出すのも、もちろん人力です。1haに3,300本ですから、100haだと33万本です。いかにたいへんな作業か、わかっていただけるでしょう。そういう作業を、ていねいなところは、3年間はずづけます。前回、溝と土手がつくる50cmほどの土の壁に密着させて苗を植える、と書きましたが、土手のうえに苗が頭をだすまで、つづけるんですね。

苗を土で埋めるのは、ノウサギから守るためでもあります。ノウサギの害がひどいのは、春先です。草が新芽をだす前。この時期、エサがいちばん不足します。ノウサギにとっても、マツがおいしいとは、思えないし、ひょっとすると、消化できないのかもしれない。でも、青いものがあれば、それに向かう。

3月末、私たちのワーキングツアーがカササギの森で、マツの苗を植えました。春の訪れが早く、日差しは和らいでいましたが、風がつよかった。去年の春に植えたマツは、土のフトンをかぶったままです。1週間後に訪れると、植えたばかりのマツの苗が切られていました。葉の生えぎわのすぐ下で、刃物で切ったように、スパッと切られています。ノウサギです。切った先の、葉の部分を食べたようすがない。土のフトンを取り除くのは、草がわずかに緑っぽくなるからです。そこまで待てば、ノウサギの害を免れることができる。

そういうことを繰り返して、5~6年で、樹高1m前後になります。生育は、きわめて緩慢です。ところが、そのあとは、主幹は毎年、20~40cmは伸びます。時期と場所によっては、1m近くも伸びるんですよ。枝も伸びますから、倍々で緑が濃くなる。そこまでたどりつくのが、容易なことではないのです。

では、これで万々歳かといえば、そのころから、ネズミの害がでてきます。大きく育ったマツが、赤くなって枯れていくのは、ネズミが根をかじったためです。ウサギにもくいし、ネズミにもくい。数年前から、東京ディズニーランドの労働組合のボランティアが、大同にきます。その人たちにいうんですね。「ミッキーもウサギも大キライ！」と。それから虫害や病害もあります。

でも、もっとこわいものがあります。山火事です。何年も何十年も苦労を積み上げたものが、

一瞬で灰になるんですからね。村の人たちが、いちばん困難なのは「植えたあとの管理だ」と答えた意味を、わかっていただけたでしょうか？

## NO. 163 アルカリ性の土 2002. 07. 08

黄土高原の土はアルカリがきついんです。はじめて専門家が調査に訪れた1994年夏のことです。土のpHをはかると、どこでも8.0以上。8.5を超すこともあります。

1994年は、春から雨が多く(相対的にですよ)、まれにみる豊作の年でした。畑の作物がよく育っていました。専門家たちが話しあいます。「これほどpHが高いところで、作物が育つなんて、信じがたいですね」「この土にあった遺伝子が選抜されてきているんでしょう」。

1996年から、私たちの拠点の環境林センターが稼働しはじめました。地元の技術者たちは、日本の種子を試したがります。畑で栽培する野菜なら問題ないでしょう。そのなかには、中国へ里帰りするものも少なくないんでしょうけど。

これがよくできるんですよ。トマトもナスもキュウリも、よく育った。ミニトマトなんて、ビニールハウスにジャングルのように育って、ピンポン玉ほどの実がなりました。そして、味が化ける。おいしくなるんです。甘味が強まるし、うまみもでてくる。「日本ではトマトはだいきらいでしたけど、これだったらおいしい」と、ツアー参加の女子高校生がなんども手を伸ばしました。

5月に蒔いたダイコンは、7月が食べごろです。日本の夏ダイコンって、辛いだけでしょう。ところがここでは、スライスしてナマで食べても、ほんとにおいしい。うまみがある。地元には、この時期に大きなダイコンはないから、種をもってくるようせがまれました。

おいしくなるのには、日較差が影響していると思われます。大同には、こういう言い方があります。朝は毛皮のコートをきて、昼はスカートをはき、夜はストーブにあたって、スイカを食べる。スイカを食べる、ということで、季節は夏です。朝夕は寒いくらいに気温が下がるというわけですよ。

日中の日差しはきついけど、湿度は低く、日陰は涼しいんです。木陰ってものは、ほとんどありませんけど。以前は過ごしやすかったようです。海拔が1,000m以上あり、北京なんかにくらべ、はるかに気温が低い。皇帝の避暑地だった歴史があります。2~3年前の7月、35度以上の日がつづくことがありましたが、これは異常です。

日照量はもちろん十分です。そして夜は、気温がグーッと下がる。植物は、日中に光合成を

して、糖をたくわえます。夜は呼吸作用で、それを消費するんですけど、気温が低いと、消費が少ない。だから、おいしくなるんだそうです。野山の花の色があざやかで、透明感がつよいのも、おなじ理由だそうです。

よけいなことにそれでしたが、日本で栽培する野菜は、ここでもよくできます。野菜にかんするかぎり、pH はあまり関係ないようです。この春、アスパラガスの苗を、環境林センターの南東のすみに植えてきました。塩害のひどいところで、pH は9を超えているかもしれない。技術者たちが、「だいじょうぶだ」というので、まかせてみたんですよ。大同ではアスパラガスを食べる習慣がまだないので、冷遇したというのがホントですけど。ダメだったら、植え直したらいい。夏にみるのが楽しみです。みるだけじゃない、食べるのが……。

アスパラガスは、乾燥にもつよいそうです。根が深くはいつて、沙漠化防止に利用できる、と中国でニュースになっています。真偽のほどはしりませんが、制ガン作用もあると、書かれていました。乾燥のひどいところでも、試してみましよう。

でも、花はそうはいかなかった。日本の花の種をもっていっても、思うように生育しないし、きれいに咲かない。木のばあいは、なおさらそうです。日本の自然の木は、大同ではりっぱに観葉植物です。ヨーロッパに渡ったアオキの人気の高いことをききました。ところがこの土ではむずかしい。アオキもアジサイも育ちません。葉が黄変し、そのうちに消えてしまう。インドゴムノキなんか、たくさん苗を仕入れてきたのに、みんなダメにした。それをなんとかするのが技術でしょうけど、そのレベルにいつていなかった。

野菜は、長いあいだ人間が栽培して、どこでも育つようになっているんだらう。pH にたいしても、広い適応性をもつ。それにくらべると、花は栽培の歴史がみじかい。花木はまだ野生のようなものだ。だからなんだらう、と私は納得していました。

そんな話を、森林総研の桜井尚武さんにしたら、桜井さんの答えは、「そういう野菜の原産地は、たいていアルカリ地帯じゃないの」というものでした。なるほどね。かんじんなことにツメの甘いのが、シロウトの悲しさです。

どなたか、そのあたりのことを調べていただけないでしょうか。中国のアルカリ土対策に、日本から専門家がでかけています。ODA のプロジェクトもあるようです。意味のないことではないはずですよ。

最後にもう 1 つ私の失敗談。大阪で園芸店をのぞいていたら、かんたんな pH 計がありました。湿った土に差し込めば、すぐに結果がでる。これは便利だと思って、買いました。環境林センターについて、畑の土で試すことにしました。畑に行く途中で、ハッとしました。メーターを確認すると、やっぱりそう。測定範囲が pH3.5~8.0 です。これでは役にたたない。日本の

土は、たいていは酸性ですから、それで当然でしょう。

## NO. 164 地球生態系にとっての人間問題 2002. 07. 14

きょう、これから、遠田宏さんと2人で、中国にむかいます。直前までバタバタしていて、それらしい準備ができませんでした。大同に着いてから、なにがない、なにがない、といったことになりそうです。次号からは、また新鮮な話題でお送りできるでしょう。

黄土高原を私がはじめて訪ねたのは、1970年代前半のことでした。中国共産党の根拠地であった延安、農業の全国モデル・大寨、といったところです。そこも「耕して天に至る」段々畑の光景です。誇らしく語られていました。「戦天闘地」といったスローガンもみられました。天と戦い、地と闘う、です。私の印象も、「英雄的に奮闘する農民」といったもので、環境問題を意識することは、まるでなかった。

その後、私は、日本で環境問題を考えるようになりました。実際の活動にも、いくらか参加しました。そのなかで、私の見方も変化したようです。農民の勤勉さの象徴であった段々畑は、「自然の大破壊」でもあります。同じ光景を目にしても、人によって理解がちがうし、ひとりの人間であっても受け止め方が変化します。

1992年と93年の秋、私は主として渾源県の農村を回りました。忙しいいとちがって、みて感じる仕事が仕事です。たまに大同の街まででかけます。大同までのバス代が、片道2元。車窓の光景がすごいんですよ。「たった2元で、こんな景色をみせてもらっていいのか」。

見える範囲の山に樹木はありません。山腹や丘陵の急斜面まで段々畑になっています。あちこちに深さ100m近いガリ＝浸食谷が刻まれています。その浸食谷の急斜面を、放牧のヒツジの群れが上り下りする。恐怖を感じるほど感動的なんです。外来者が感動するようなところほど、暮らす人にとってはしんどい。それはどこでも同じでしょう。

そういうことを繰り返して、環境問題にたいする私の認識も変化しました。それまでは、環境問題は工業化の所産で、どんなにさかのぼっても産業革命以後のことだと思っていました。ところが、そうじゃない。農業をはじめたときから、環境問題もスタートしたわけです。黄土高原は、中国のなかでも、もっとも早く文明が発展したところです。大地がこれほど傷ついているのは、文明が長かったからでしょう。

文明をもったとたんに、人類は地球生態系にとってのガン細胞になった。そんな思いが、フツと湧いてきました。しばらくして、大学の寮の同窓会で、そんな話を私はしてしまったんです。すると猛反撃がありました。「おまえこそ、日本のガン細胞じゃないか」といわんばかりで

す。民間の大手重工業で働いている男でした。私とちがって、大マジメなんです。酒の勢いで、私も議論をはじめちゃった。

私の思いつきも、練ったものじゃなかったけど、反論もワンパターンだった。縄文時代に返れというのか、式です。返れるわけがない。こんな暮らしになれてしまった日本人が。文明のもたらすもの、工業のもたらすもの。便利で快適なんです。私たちのからだ、動脈も静脈もつながっていて、切り離せっこない。

そういう快適さ、便利さをもたらしているものを、食いつぶしていいんですか。子孫だってだいじでしょ。おじいちゃんが、孫のクレジットカードで、ムダづかいしている。そういう気がしてならないんですよ。

私のほうがワルですからね。ワナをかけて、誘導しました。最後に彼は、「ガン細胞にも生きる権利がある」といいました。そうなんです。生まれたいじょう、生きる権利はだれにもある。でも、ガン細胞は、宿主があってはじめて生きられる。地球の生命系をこれいじょう傷めつけたら、人類だって生きていけない。私がいいたかったのは、そういうことです。

60億で平均しても、1人の人間がつかっているエネルギーは、ゾウ1頭ぶんより多いでしょう。それがネズミほどに増えてしまったんですから。地球の生態系と調和をとるのは、むずかしいことです。

いま、環境問題にたいする認識は、10年前とは比較になりません。広がり、深まってきました。中国でも大きな変化がありました。それだけ危機が進行した、ともいえるでしょう。現実の進行より、人間の認識が遅れるのがふつうです。

まもなくヨハネスブルグのサミットです。来春には、日本で、世界水フォーラムが開催されます。ワールドカップの盛り上がりは期待できないまでも、環境問題への関心は高まるでしょう。

でも、環境問題というと、問題になっているのは、周囲の客観的な存在だ、という雰囲気が残る。もうひとつ切迫感がない。「地球環境問題」というのは省略した表現で、その全体は、「地球生態環境にとっての人間問題」なんです。そういうふうにしたほうが、問題の正しい姿がみえやすくなります。

## NO. 165 カササギの森のいま 2002. 07. 22

7月15日から大同にきています。18日に、実験林場・カササギの森をみてきました。順調に

いっているとは聞いていましたが、自分の目でみないと実感がわきません。時間をかけて、広い範囲を歩きました。

去年1年とことしの春に植えたマツは、よく育っています。去年は記録的な早魃でしたが、それでも、ほとんど枯れませんでした。ことしは4月と6月に雨が多く、90%以上が活着しました。「枯れているところに、マツを補植する必要はないよ。広葉樹を試そう。自然に混成林になるから……」というのと、「枯れているところがない」という答えです。やっぱり、よろこぶべきなんでしょうね。

霊丘自然植物園から運んだ落葉広葉樹も、ほとんど活着しています。ゆくゆくはこの主人公になると、私たちが期待しているのはナラです。霊丘の自然林で種子をとり、植物園と環境林センターで育苗してきました。去年の春、試験的に植えてみた200本が、ほとんど損なわれずに、青い葉を広げています。すでに1回、越冬して、可能性は大きくなりました。腐植がまったくない黄土丘陵ですから、伸びのよくないのはやむをえません。元気なのがうれしいのです。

同じ年から、環境林センターでもナラを育ててきました。3年生です。条件のいい苗畑で育てたので、30~50cmあります。ことしの春、ここに植えました。ポット苗ではなく、裸根でしたが、問題なく活着しました。移植には強いようです。この結果からすると、3年までは苗畑で育てるのがいいでしょう。

モクゲンジ、オニグルミ、ハシバミ、シンジュなども1回、越冬しました。しかし、育ちはよくありません。ハギも伸びてはいますが、期待したほどではありません。でも、隣接の采涼山に植えたものは育っていますので、希望はあります。とてもいいのは、イタヤカエデのなかま(元宝槭)です。葉も姿もきれいだといって、大同事務所の武春珍所長がよろこんでいます。

環境林センターの見本園のヤナギハグミとクコが繁りすぎたので、間引いて、ここに移しました。最初のうちはよく育ったそうです。ところが、ことしはケムシが大発生して、食い荒らしました。ケムシの被害は、あちこちです。山のシラカバやポプラもずいぶんとやられました。いま伸びているのは、再生したものです。このクコは寧夏からもってきたもので、薬材になります。水土流失の防止のうえに、経済価値があれば、いうことはありません。

管理棟の周囲に、大苗や花木を植えました。主として美観のためです。というより、視察者へのデモンストレーションでしょうか。トウヒは1本も枯れませんでした。青々として元気です。ライラックもそうです。ハマナスのなかまは、八重の赤い花をたくさん咲かせています。乾燥に強いトショウ(杜松)はまずまず。これは小苗でしたが、地這いのイブキ(沙地柏)は100%着きました。

明暗を分けたのがイブキ(桧柏)です。1m以上の苗は、ダメです。葉が黄変しています。一部は生き残るでしょうが、大部分は枯れるでしょう。大きいぶんだけ損失は大きいし、めだちます。1m未満のものは、だいじょうぶでした。ことしの春は、異常な強風でした。風で水分が失われ、根を揺さぶられたためでしょう。

中央にある谷のそこに、ヤナギを挿しました。環境林センターのヤナギが伸びすぎたので、枝を切りました。太いものは直径15cmもあります。棒杭のようなものです。「これがホントの挿し木だな」なんていってたのですが、100%活着しました。50~70cmの新しい枝が、たくさん吹き出しています。

もう1つうれしかったのは、カササギの森の入り口のマツがよく育っていることです。采涼山プロジェクトです。99年春に植えたものが、40cmほどに育ち、活着率もきわめていいのです。それから毎年植えて、すでに150haを超えました。武春珍所長は、ニコニコ顔です。「自分が担当した最初のプロジェクトがここだ。それまでこの郷は植林をしてこなかった。自分たちが協力したから植えはじめた。風砂防止の政府プロジェクトがここにきたのも、その実績があったからだ」。

成績がよかったのは、4月と6月に雨が多かったためでしょう。しかし、7月にはいつてからは、雨がありません。そのうえ、異常な高温です。私たちが到着したとき、北京は40度でした。重慶、武漢、石家荘などでは、43度だそうです。大同は標高が1,000m以上で、多少はましですが、それでも35度です。

前日、広霊県の山をみにいったのですが、途中の畑は、旱害の様相でした。トウモロコシやヒマワリの葉がしおれ、枯れそうになっています。マメなどの育ちもストップしています。この近くの畑も同様です。平年なら四季を通じて流れのあるカササギの森の谷も、2日ほど断流しました。せっかくの灌漑設備も役にたちません。

この日は、朝から雲が広がっていました。昼前に、カササギの森から遠くないところで黒雲が広がりました。「こっちにこい、こっちにこい」と私が手招きすると、みんな笑っています。ところが、ほんとにやってきたのです。

外が涼しいので、テーブルを中庭にもちだし、カップ麺にお湯を注いでいました。黒雲はいっそう厚くなります。「くるぞ、くるぞ」といっていたら、突然きたんです。ポツリポツリの予告なしに、いきなりザーッ。レンガのうへの雨粒のあとが、直径5cmもあります。あわてて、室内に逃げ込みました。

20分くらいつづいたでしょうか。小降りになったので、外にでてみると、苗の水鉢がみな満杯です。いい雨です。これ以上だと、車がスタックして帰られなくなります。

運転手の小郭が周囲をみて、「ここだけが降っている」といいました。ほんとはここだけでなく、遠くにも数か所、降っているところがあります。上空に黒雲があり、その下に、黒いカーテンがかかっています。高いところからみると、そのようすがよくわかります。どこも、狭い範囲です。私たちの谷の上流のところは真っ黒。これで流れがもどるでしょう。

その日、大同市内は雨がほとんど降りませんでした。カササギの森でみても、このあたりの空は明るかったです。19日午前、市内の事務所で打ち合わせをしていると、雨が降りました。午後、環境林センターにいてみると、ここもかなり降っていました。じつは、17日に広霊県にいったときも途中から雨になり、帰り道は強かったです。3日連続して、雨だったんですね。小武が「高見が雨を連れ歩いている」といいました。まさか～！雨男を自他ともに認める立花代表ではあるまいし……。可能性があるのは、遠田宏先生でしょう。

## NO. 166 環境林センターの導入樹種 2002. 07. 31

大阪からは、気温が37度でフーフーだというような知らせが届くのですが、ことしの大同は別世界です。着いた日の日中こそ、35度もあったようですが、その後はまた雨が降り、急に涼しくなりました。最低気温16度、最高気温24度というような日が続いています。過去数年は暑い日が続いたのですが、それでも立秋(8月8日)をすぎると急に涼しくなりました。ところが大同では、二十四節気の大暑(7月23日)をすぎると涼しくなるのが、ふつうなのだそうです。夜はフトンをかけて寝ています。こんなことを書くと、あちこちのウラミを買いそうですね。

4月、6月、そして7月後半からの雨に恵まれて、ことしの環境林センターの育苗は、かなり順調です。でも例外もあります。トウヒ(雲杉)、トショウ(杜松)、イブキ(桧柏)などの針葉樹はよくないのです。第1に土壌の粒子が小さすぎ、粘っこいことです。以前から、マツの種をまいても、うまく育ちませんでした。砂などの通気性材料を加えると、改善しました。でも、センターの苗圃は20haもあるので、その全体を改善するなどというのは容易なことではありません。マツの育苗は、大同県国営苗圃の一部を借り、「針葉樹育苗基地」として運営してきました。他の針葉樹も、ほかへ移したほうがよさそうです。

そのかわりに、広葉樹の伸びはたいへんなものです。大同の近くの懷仁県で、ドイツが中国と協力して、ポプラの品種改良と研究を長くつづけました。そのなかで開発されたポプラの新品種を、46種類ほど引き取り、試験的に育てています。まだ3年ほどなのに、6～7mにも育っていて、みんなを驚かせます。葉だって、ものすごく大きいのです。以前からの新疆ポプラもぐんぐん生育しています。

アンズも去年は早魃で生育がよくなかったのですが、それでもことしの春、接ぎ木が可能な

太さに育ちました。霊丘県から職人がきて、接いでくれたものが、よく育っています。来年春には、各地の小学校付属果樹園などに出荷ができます。

この地方にポピュラーな苗木のほかに、他地方からも有望と思えるものを導入してきました。そのなかで、特徴的なものを紹介しましょう。いま資料が手元にないので、学名等ははぶきまず。

トネリコ(白蠟)。導入したなかで最高の成績でしょう。最初は北京の街路樹の種から育苗しました。樹形もきれいで、街路樹に向いています。その後、大同市内でも街路樹がみつきり、その種で増やしました。大量に育苗していますが、ほんとによく育ちます。虫もまったく着きません。山で育たないかどうか、カササギの森でも試験中です。

シンジュ(臭椿)。これについては以前に書きました。南部の霊丘県・広霊県では自生しているものがたくさんあります。北部でも、雲崗石窟には大きいものがあります。小さいうちは、先端が冬に枯れますが、木質化がすすめばだいじょうぶです。白木で、けっこういい家具になります。でも、敬遠する人が多いようです。名前がよくない、という人が多いのです。香椿(チャンチン)がべつにあって、そちらは葉が食べられるので歓迎される。臭椿は、それとの対比で、よけいにきらわれるのではないか、というのです。なにかと、ありそうな話です。

〇〇グミ(沙棗)。和名がわかりません。あるのかないのかも。雲崗石窟に古木があり、その種で育苗しました。グミ科とは信じられないような、大きな木です。これまでに育てたなかで、いちばん生育のいい木です。実が食べられるというので、挑戦しましたが、うまいとは思いませんでした。グミ科で、チツソ固定に役立ちますから、肥料木になりそうですが、本来の木を凌駕しそうです。

エンジュ(国槐)。

中国人の好きな木のひとつでしょう。国の字をいれて呼びます。ところが学名に“japonica”がはいっている。ほかの苗圃にもあるでしょうが、私たちもたくさん育てています。生育はいたってよく、山でも試したい品種です。枝垂れのエンジュを接いで、観賞木としても使います。

キササゲ(梓樹)。

もとの種は北京からきました。とても生育の速い木です。土地にもあっているようです。種から3~4年のものに、実が着いています。蒔いて生えるかどうかはわかりませんが……。木質は柔らかく、材としてはどうでしょう？でも、実が腎臓病の薬になるとききました。本草学の社会ですから、用途は考えてくれるでしょう。

イチョウ(銀杏)。種からのものは、あまり伸びません。霊丘では育っていますが。高さ1mほどの大苗を買ってきて、冬は縄を巻いて保護したところ、ちゃんと育ちました。あるていどの

大きさがあれば、越冬は可能なようです。大同では、育つけれども、実はならない、という技術者もいます。材、皮、葉、実、どれも役立つとあって、政府が推奨しているそうです。もの本によると、数ある樹種をしのいで、中国の国樹だそうです。

モクゲンジ(欒樹)。靈丘で採種しました。北京では街路樹にたくさん使われています。

樹形もすてきですし、実がおもしろい。小さいうちは頼りなかったのですが、いつのまにか大きくなっていました。先日、市内からカササギの森に行く途中の道路の片側に、まとめて植えてありました。ことしの春に植えたものです。だれが植えてくれたんでしょう。

クワ(山桑、白桑)。カイコを飼うあのクワです。なんとこれがよく育っています。靈丘では自生しているものもみましました。大阪の金剛山の山頂付近で、大きなものをみたことがあります。

シナサワグルミ(楓楊)。種を蒔いたら、その年は、驚くほど大きくなりました。山西省の南部には自生しているそうです。しかし、冬の寒さ、乾燥に耐えられないようです。一部は、地下部は生きていて、春から芽を伸ばします。でも、冬にはまた枯れてしまいます。生きてるので、抜いて捨てるわけにもいきません。悩ましい存在です。

イタヤカエデのなかま(元宝楓)。環境林センターだけでなく、カササギの森でも育っています。かといって、そんなに速く育つわけでもない。大同市の北部でも、ときどきみまします。地元の木です。多くの方が名前を知っています。でも、たいていは樹形が崩れている。限界的な場所かもしれません。

ネグンドカエデ(椴葉槭)。育ちは極端にいいのです。桑干河の橋のたもとに、大きな木があり、たくさん実をつけます。センターで育てていると、カミキリムシの成虫がとりついて、葉や茎を食べます。カエデはシロップになるくらいで、甘いでしょう。これを他の樹木に混ぜて植えると、虫を一手に引き受けて、ほかの木を守ることになるのでしょうか。それとも虫を集めて、被害を広げるのでしょうか。経験のある方は教えてください。

ことしの夏は、テレビ・新聞などの取材を含め、いろんな人が入れ代わり立ち代わりやってきます。誠心誠意の乾杯でつきあっていたら、ついに扁桃腺炎から気管支炎に発展してしまいました。28日の朝は、声がでなくなり、夏のツアーから離脱の憂き目になりました。私はからだは強いほうではありません。中国から帰国するなりダウンして、寝込むのが通常でした。ツアーなどを送り返して、そこでダウンすることもありました。でも、ツアー本番で寝込んだのははじめてです。年のせいといっても、肉体的なものより、おそらく精神力でしょう。それを自覚することで、さらに老け込むのかもしれない。

王萍さんに朝夕の点滴をしてもらいながら、落ち込んでいます。ちょっとよくなったので、起き出して、書きました。黄土高原だよりとしては、めずらしく、最初から最後までシラフで

書いたものです。

## NO. 167 自然林と人工林 2002. 08. 08

カササギの森でのことです。中央部にある谷の底で、新しい発見がありました。ことしの春に発芽したポプラの小さな苗が、無数に生えているのです。場所によっては、びっしりと、といていいほどです。のぞきこんでいる私に、大同事務所の武春珍所長がきいてきました。「それはなに？」。

「ポプラの苗だ」と答えると、彼女もいっしょに探しながら、「これもそうか、あれもそうか」とびっくりしています。これまでは、そんなものはありませんでした。ポプラの種子は、発芽の環境に恵まれないと、2~3日で生命力を失うそうです。ことしは春から雨に恵まれたからでしょう。でも、発芽したとしても、これまでは放牧のヒツジに食べられていました。私たちがここで植林をはじめ、放牧がストップしたために、生き残るようになったのです。

小武がいました。「今回のことで、ほんとうに深く認識できた。あなたたちが日本からやってきて、自然の回復力なんていっても、意味がわからなかった。中国では、緑化といえば、どれだけ大面積に植えるか、ということしかない。自然の力に頼ることが、ほんとうに大切だと思う」。そんなことを、彼女は繰り返し繰り返し話します。

この夏の私たちのテーマの1つは、大同市北部の自然林を調査することです。大阪市立大学理学部附属植物園の岡田博園長が、そのために大同にきてくれています。2000年の霊丘県での調査につづいて2回目です。「岡田さんは、大同のヒツジみたいだ」なんて失礼なことを、私はいいました。そのココロは、「下ばかりみて歩いている」です。彼は、新しい草をみつけては、標本にしてくれます。生えている草の種類が、ここにあった本来の環境を知る手がかりになります。

大同県・陽高県・渾源県・広霊県の県境にある六稜山に、シラカンバを主体にした林があることが、昨年になってわかりました。あいだにはたくさんのトウヒの若苗がでてきています。ほかにはいかと問い合わせると、広霊県の青年団から、回答がありました。六稜山以外に、県城の南の山にあるというのです。いったことのないところでした。遠田宏さんといっしょに、大同にくるなり、そこにでかけました。

案内してくれたのは、白羊峪林場の宋寿峰場長です。山の奥深くに聖仏寺という古いお寺があり、その周囲にアブラマツの林が広がっていました。お寺は、最近になって再建された粗末なものでした。仏像も新しいものです。でも、敷地は、急な斜面を階段状に整地したかなり広いところでした。いくつものお堂が以前はあり、300人のお坊さんが修行していたのだそうです。

お寺の上手にお坊さんのお墓がありました。レンガでつくったりっぱなものが並んでいます。周囲にもたくさんの土饅頭があります。なるほど、以前は盛大なお寺だったのでしょう。

お寺から上が、アブラマツの林です。場長の紹介によると、300haほどあったものが、火事で半分に減ったそうです。人工林ではなく、自然林だと、彼はいいました。親木を探すと、お寺の近くにアブラマツの古木がありました。谷に生えているために、スラーとしたいい樹形です。遠くからの目測で、直径80cmは超えていそうですし、高さも30m近くあります。

「以前は3本はえていた。1本は県政府を建て替えるために伐った。もう1本は県城の劇場を建てるために伐った。30年あまり前のことだ」とのこと。残念なことです。「樹齢1,500年はある」。いくらなんでも、それはないでしょう。それほどの古木はその1本ですが、山のうえにも、大きなマツが何本かみえます。

林のなかにはいってみても、なかなかりっぱな林です。樹齢を数えると、40～50年といったところ。スラーとよく伸びています。直径は20～30cmといったところ。先端が円錐形にとがっているのをみると、生長は衰えていないようです。生長が止まると、先端が丸くなるものです。

ここまで育ったアブラマツの林は、大同ではじめてみました。成林する可能性が、やはりあるのです。小武は、「自分たちがいま植えているマツも、あと40年たてば、こうなるんだ。そのとき自分は生きていないかもしれない。でも、想像するだけでもうれしい。木と木の間隔がここはかなり広い。大同県の遇駕山は、これまでは成功してきているけど、あそこは密生しすぎている。やはり間伐の必要がある」といいました。見るべきところは、見ているのです。

遠田宏さんが、「おかしいな、これは人工じゃないかな」とつぶやきました。「間隔がそろいすぎているし、あちこちに直線上に並んでいるところがある。自然の林だと、こうはなりませんよ」。場長に確認すると、「まちがいない。自然に復活してきた林だ」といいました。正直なところ、私にはよくわかりませんでした。

林をぬけると、吹き抜けのところになりました。マツはまばらになります。密生しているところに比べて、樹形はよくないし、先端が丸くなっています。そのかわりに、幹の太りはこちらのほうがいい。林縁に生えているヤナギハグミが黒くなって枯れています。焼けたようです。注意してみると、マツの皮にも焼けたあとがあります。やはり山火事があったようです。それにしても、よくここで止まったものです。山火事の恐ろしさを実感しました。

その夜の食卓でのことです。遠田さんが小武に「きょうの感想はどうだった？」とききました。小武の答えは、「場長は自然林だといったけど、あれは人工林だと思う。自然林なら、もっといろんな樹種がまじるはずだ。だけど、あそこはアブラマツ以外はほとんどない。大きさもそろいすぎている。ほんとうに自然林なら、いろんな大きさのものがあるはずだ」。

「もう1つ感じたのは、アブラマツだけだと、ほとんど腐葉土ができないことだ。霊丘でも、六稜山でも、広葉樹のある自然林は、若くても、厚い土ができていた。きょうみた山は、40年以上たっているのに、土ができていない。ほかの種類の木も生えてこない。人工的な林より、自然に復活した林のほうがずっといいと思う。いずれにしろ、植生調査の場所としては、不適當だと思う。みなさんに1日、無駄足をさせたんじゃないか」。

遠田さんが答えました。「いやいや、無駄足なんかじゃない。あれをみて、アブラマツが育つことに自信がもてた。それに小武、あんたは見るべきことをちゃんと見てるよ。専門の学生を森林につれていっても、基本的なことをそれだけキチンと見ている学生は少ないよ」。「センセイ、ホント？アリガトウゴザイマス」。

いやいや、私も驚きました。林にはいつているあいだ、ずっと、小武は王萍とペチャペチャ、ペチャペチャ、しゃべりつづけだったんですよ。いつものことですが。でも、見るべきことは、ちゃんと見てたんです。これもたくさんの現場をみてきたおかげでしょう。

それが、冒頭の話につながりました。小武がああいう認識をもってくれたことで、私たちの事業もずっとやりやすくなります。そうそう。あそこが人工林か自然林かの解答は、あっさりでした。大同事務所の侯喜技術顧問にたしかめると、「まちがいなく人工林だ。その場長は新任で、古いことは知らないんだろう」。老侯は、大同の林業局に40年勤めたベテラン技術者です。

## NO. 168 南郊区の山 2002. 08. 11

8月10日の朝、大同を発ち、北京経由で11日の夕方、自宅に帰りました。私たちが大同に到着した7月15日の日中までは、大同も暑かったそうですが、私たちが着いたのは夜。その後はずっと涼しく、秋の気候でした。関空に着いたとたんにモワッときて、汗が噴き出しました。日本に帰ってきたんだな～。

南郊区は大同市に4つある区の1つで、大同市街地の南に広がっています。私たちの協力事業の拠点・環境林センターは、南郊区平旺郷にあります。拠点がここにあるのに、その他のプロジェクトは南郊区においていません。武春珍所長によると、「南郊区の山は石灰岩ばかりで、植林には適さない、ときいてきた。だから、南郊区はプロジェクトを避けてきた」ということです。

大同を離れる前日の8月9日のことです。この協力事業の中心だった祁学峰からお呼びがかかりました。彼はいま共産党南郊区委員会の副書記です。どこをみたいか、電話で聞いてきた

ので、山がみたい、と答えました。私の希望ではありません。大阪市立大学植物園長の岡田博さんがことしの夏はいっしょです。彼の関心は植物に集中しています。石灰岩地域にはほかとはちがう植物がでる、ともいっています。

大同事務所のメンバーはみな、「南郊区の山なんて、なにもない」といいます。「専門家の目でみると、ちがうんだよ」と私は答えました。祁学峰といっしょに昼食をすませてから、現場に向かいました。

南郊区のいちばん南のほうにある七峰山(1,714m)のふもとです。セメント工場があり、石灰石を掘り出しています。その現場をぬけて、谷筋を少しだけ登りました。1,300mほどのところ です。専門家の目でなく、シロウトの目でみても驚きでした。植物がそうとうに多いんです。

最初に目についたのは、ピラカンサのなかまです。そこかしこにたくさん生え、びっしりと実をつけています。いまはまだ未熟ですが、熟れたら赤くなるようです。実のなる木が増えれば、小鳥がやってきます。小鳥は食べた実を、糞といっしょに蒔いてくれます。山の緑化に自然の力を生かそうと思えば、もってこいの木でしょう。

ナラもみつかりました。大部分はまだ小さいものですが、ところどころに5mクラスがあります。岡田さんは、葉と実をルーペで観察しながら、「2種類あるようです。リョウトウナラ(遼東櫟)とモンゴリナラ(蒙櫟)でしょう」といって、その見分け方を解説してくれました。

ナラの森林は、これまで南部の霊丘でみつけています。霊丘自然植物園では、山のうへのほうで、グングン伸びつつあります。この8月にも、そのようすを調査しました。でも、大同の北部では、あまりみていません。前回ちょっと触れた六稜山に、小さなものが少数あるだけです。ここでみつかったことで、生育の可能性はより強くなりました。

帰国にむけての荷物整理があるので、長く時間をとることはできませんでした。それでもかなりの種類の植物がみつかりました。岡田さんは、「ひよっとすると、この奥は宝庫ですよ。採石場になっているので、かなりの期間、人もヒツジもはっていない。種類が多いのはそのためでしょう」。

遠田宏さんがいいます。「まだ森林とはいえないけど、草と灌木がよく育っている。そのあいだに、喬木も混じってきている。土壌がかなり厚くできていますよ。これなら木も育ちます。森林になる一歩手前とっていいでしょう」。なるほど地表から50cm近くは、黒い土になっています。場所によっては、もっと厚いところもあります。

武春珍もちょうど興奮ぎみです。「南郊区の石の山でも、木は育ってるじゃないか。ここがだいじょうだとなると、植林が可能なところはずっとふえる。ここでナラが育つなら、実験林場

でも可能だ。環境林センターの足元に、こんな場所があるとは思ってもよらなかった。ここだったら、種を集めるにしろ、観察にくるにしろ、車で30分もかからない」。

そうなんです。このあたりの山は、ずっと目にしてたんです。でも、なかに入ったことがない。関心ももたなかった。今回のことがなかったら、今後もずっとそうだったでしょう。そんなことをいうと、「酒ばかり飲んでるからだ」と叱られそうです。でも、セメント工場が採石しているような山に、ふつう、関心がいきますか？

最終日のヒットは、岡田さんがきたから生まれたんです。「分類屋のしごとは、歩くことだからね」と岡田さんはいいます。歩き回ってはじめて、カンも優れてくるんでしょうね。その岡田さんを、酒を飲みながらここに誘ったのは、私ですからね。というあたりで、怠慢の罪を帳消しにしてもらいましょう。

岡田さんがこぼします。「前日にあそこにいってれば、翌日、きちんと調査できたのに……」。でも、それで、よかったんですよ。彼は、また大同にこざるをえない。みんな、そうやってこの事業にひきづりこまれるんですね。立花さんも、遠田さんも、橋本さんも、相馬さんも、みなそうだったんですから。私もそうなんです。

環境林センターの秋のしごとが一段落したら、この周囲の山を調査してもらうことにしました。おもしろい場所が見つかるかもしれません。南郊区には祁学峰がいますから、社会的・人的な条件はとていいんです。

## NO. 169 北京空港みそラーメン 2002. 08. 19

8月11日の朝、北京空港から関西空港に発つことになりました。日曜日の朝なので、アクセスの道路は空いています。天安門広場近くのホテルから空港まで40分ほどで着きました。

中国国際航空(CA)のチェックインもきわめてスムーズです。遠田さんも私も、CAのマイレージ会員になっています。マイルの積み立てはともかく、チェックイン時とバゲージの待遇は値打ちです。混み合っているときでも、サッサとすませることができます。もちろん無料です。

出入国管理のところで、新しい現象がありました。テープを張って1列に誘導し、先着順に、空いているカウンターに回すのです。駅などのトイレで、以前は用を足している人のうしろに並んだのが、いまは入り口付近に並んで、空いたところに順番にすすみます。あれと同じです。少しずつ改善されてはいるのです。

携行品のセキュリティチェックで並ぶときも、同じ方式です。1か所に並びます。でも、実際

のチェックも1か所しか開いていない。処理できるはずがありません。列が長く延び、ついには、後ろのほうで混乱してきました。「バカなことをしやがって！」～呪いの言葉が自然にでてきました。

白い制服のグループが、ノンビリと出てきました。新しいカウンターを開くんでしょう。

私は注意してみている、そこに走りました。新しい列の先頭に並んだんです。手元にもっていたザック、ノートパソコンを、X線探知機に通しました。見張りのシャオジェ(小姐)は許してくれません。

あっ、しまった！「シャオジェ」はいつのまにか、(狭い範囲の)水商売のおねえさんを指すことばになってしまって、そうでない若い女性を呼ぶには、クーニャン(姑娘)とか、ニュエアル(女兒)と呼ばないといけない、ということです。日本でも、「BG」はビジネスガール＝商売女だから、これからは「OL」＝オフィスレディと呼ばないといけない、とやったようなものでしょう。でも、こちらとしては、クーニャンやニュエアルのほうに抵抗がある。

彼女は、私のベストをX線探知機に通すよう、求めるのです。思い出しました。私がベストを着て、どこかの役所にいこうとしたら、王黎傑に制止されました。中国人の観念では、ベストはテロリストの制服だ、というんです。私なんか、制服のにあう年ではないんですけど……。クーニャンの言うとおりに、ベストを脱いで、機械を通しました。

それでもまだ、許してもらえません。小さな台に立たされ、ハンドホルドの金属探知器で、ていねいに調べられました。両手を思い切りう上に伸ばして、「ホールドアップ！」の姿勢をとったんですよ！それが、彼女を刺激したようです。やたら慎重にチェックするんですよ。別室に連れて行かれて「パンツを脱げ！」～それだけのごめんですよ。よほど危ない存在に、私がみえたんでしょうか？彼女が特別にしごと熱心だったんでしょうか？おそらくその両方でしょう。

岡田博さんが、さらに遅れてでてきました。ずっと先をいていたはずなのに、順番が入れ替わりました。「横のカウンターが開かれたんで、そちらに並んだら、ビジネスクラス用だからダメだ、とって追い返された」。しかたなしに、となりの列の最後尾に着いたそうです。

関空ゆき CA927 便の出発時刻は 09:15 です。2 時間前には空港に着いておきたい。ホテルの朝食は 06:30 からで、逆算すると、まにあわない。チェックインのとき、「朝食はいらない」といったら、「料金は部屋代に含まれている。食べる食べないは、おまえの自由だ」といって、フロントで朝食券を渡されました。クソッ！料金はとっているんだから、エラそうにいうことないんじゃないか。

一連の手続きをすませたあと、空港のなかで軽食をとれるのは、たぶん1か所です。でも、

口にあうものはない。そして、恐ろしく、高い！遠田さんと私は、毎回、「日式拉麵(醬湯)」(みそラーメン)を頼んでいます。日式というのは、日本の、という意味です。これがなんと、料金表示では 65 元、サービス料 10%プラスで、じつに 71.5 元。日本円で 1,000 円以上です。

しばらく前の通信で、環境林センターの臨時工の日当が 7 元だと書きました。武春珍所長に確認すると、この春から 8 元に上げたそうです。こういうギャップに耐えるのはむずかしいですね。シラフで飛行機に乗るのはこわいから(うふふふ)、缶ビールを注文すると、これが 1 本 35 元もして、サービス料込みで 38.5 元。レジから自分でテーブルに持ち帰り、自分で栓をあけ、カンに口をつけて飲むのに、なにがサービス料ですか！

そんなバカなものは食べない、という顔をしていた岡田博さんも、結局、同じものを頼みました。ほかにないんだから……。 「きのうまでずっと楽しくやっていたのに、最後の最後で不愉快ですね。世界中でいちばん高いですよ。オリンピックまでつづいたら、国辱ものでしょう」と岡田さん。

ラーメンに、水くらいついてあたりまえでしょ。前回、「水をください」といったら、「ミネラルウォーターですか？ 〇〇元です」と、いわれたんです。クソッ！ 頼むか！そう思って、今回はホテルのサービス品をもってきました。

パスタを食べるのによさそうなお皿に、ラーメンがはいってきます。麺が伸びきってるのはメイドのこと。でも、今回はとくにひどい。これが、ミソとは思えない。塩いりのヌカといったところ。ミソが足りなくなって、思いっきり水で延ばしたのかな？

北京空港が新しくなって、利用客にとっていいことはない、というのが私の印象でした。託送バゲージの安全検査を、航空会社のチェックインカウンターではじめたため、ひどく混乱したことがあります。チケットの半券を、搭乗券にホッチキスでとめるのは、なんのためでしょう。団体のばあいは、名前の照合に時間がかかるので、添乗員は泣き顔です。係のクーニャンに、「わずらわしい！」と私がいったら、「わずらわしいのは私よ！」と叱られました。ごもつともです。空港建設には、日本の政府開発援助(ODA)が投入されました。「施設はそのまま、従業員を総入れ換えしたほうがよかった」なんて、私は憎まれ口。

古い空港では、カップ麺が 11 元(?)でした。それでも、高いお湯ですけど。その話をしたら、日本の政府関係者にいわれました。「ビジネスクラスの待合室には、いまでもインスタントラーメンがあります」って。特権をもつ人が、うまいものを(といってもカップ麺です。あはははは)、安く手にいれることへの反発が、社会的混乱につながるんですよ。それほどのことでもないか。

この「黄土高原だより」を長く読んでいる人は、「高見は、かなりいいかげんな人間だな」とお思いでしょう。当然です。自分でもそう思います。しかも、かなり確信犯的に。

そもそも価値の軸がはっきりしない。たとえば、発展途上地域の農村支援にとりくむ人たちは、それぞれの開発理論をお持ちのはずです。私にはそれがない。こまったものです。ワーキングツアーに参加する学生たちから、そういう質問をうけるんですけど、答えられない。「まあ、いっぱいやろうや」なんて、ニヤニヤしている。

そもそも、大同付近の農村を、発展途上地域なんていっていいものかどうか。環境がきびしく、貧困ではありますけど、そんなふうと呼ぶのに、ためらいがある。

4世紀の末からほぼ100年間、大同には北魏の都(平城京)がおかれました。人口は100万人を超え、ピークは120万人といわれます。当時としては中国最大の都市ですから、おそらく世界最大でもあったでしょう。そのころの日本がどうであったか、年表で比べてみてください。あそこは、遅れた過去の世界なんかではありません。ひょっとすると私たちの未来の姿かもしれない。

こういうこともあります。この通信の常連にされてしまった相馬昭男さんは、林野庁OBです。70歳をすぎてるんですけど、北京を拠点に、単身で中国遊学中です。去年は、遠田さんや私といっしょに、100日は大同に滞在しました。ことしも春夏、大同でがいっしょ。生まれ育ちは津軽です。東北の冷害を知っているそうです。具体的な内容は聞きませんでした。ほんとうに悲惨だったそうです。

2001年の大同は、大旱魃でした。地元の人は、「100年に1度の旱魃」だといいました。1999年も大旱魃で、そのときは「建国いらいの大旱魃」といわれました。中華人民共和国の建国は、1949年ですから、50年ぶりということです。私の目でみても、1999年より2001年は、ずっとひどかったんです。

相馬さんが考え込みます。「この状況は、東北の冷害よりはるかにひどい。そうとうに悲惨なものだと思う。しかし、農民たちからは、悲惨さというものが、まるで感じられない。どういうわけでしょう?」。相馬さんの口調まで、かなり忠実に再現したと思うんですけど?

同じ疑問を、私ももちつづけています。ほとんど芽のでていないジャガイモ畑で、中耕をする老人にビデオカメラをむけると、できのいい孫のジマンでもするように、力をこめて話します。どんなに雨がふらなかつたかを。笑顔まじりで。つくった表情だとは、とても思えない。そして最後に、「生きていくぐらいは収穫できるよ」なんてね。

1 人だけだったら、ちょっとおかしな人だったな、ですむでしょう。でも、カメラをむける人、むける人、そうなんです。男も女も。ファインダーを覗きながら、私はむなしくなります。あ〜あ、これもまた作品には使えないな、と。

秋にいても、同じようなものです。早魃の深刻さを撮影したいと、伝えても、ですよ。ジャガイモ畑にいくと、いちばんいい場所を選び、育ちのいいものを掘ってくれます。大きなものを選んで、てのひらに並べてくれる。プライドなんですかね？メンツ(面子)といったほうがいいのか。

自然災害のあとで、糧食が決定的に不足するのを、私も知っています。つらいはずですが。1993年の早魃の翌春、広霊県苑西庄村をはじめ訪ねたとき、ホーローの洗面器の底のわずかなカユを、一家で囲んでいました。1997年の早魃のあと、シイナばかりのアワをみせながら、「皮ごとおカユにする。そのほうが腹もちがいい」と話してくれた老人がいます。1999年の早魃のあとは、ジャガイモからデンプンをとったあとのカスを軒先に干し、おカユにまぜて食べる、とっていました。つらくないはずがない。

それほどの自然災害のなかで、こういうふうに笑っておれるのは、なぜでしょう？そこまで掘り下げる力があれば、ビデオもいい作品になるはずですが。しかし私がつくるのは、せいぜい30分。どうあがいても、消化できっこない。それらしくみえる場面を撮影できたのは、無口な夫婦にめぐりあったからです。さいわいなことに。

こういうふうに、目に見えることは、まだわかりやすいんですよ。何週間も、農村を泊まり歩いた初期のころ、見ること、聞くこと、ナゾだらけだったんです。うん。それを書き出したら收拾不能になるから、またの機会にゆずりましょう。

いちばんわかりやすいナゾときは、「ふだん低いところに立っていると、転げ落ちても、さほど痛さを感じない」というものです。災害にも慣れっこなんです。桑干河ぞいの、大同県と陽高県の県境付近は、12年間に10回も深刻な自然災害に遭遇しました。深刻なものだけで、ですよ。

まずは地震。89年、91年、99年の3回。それからひどい早魃が5回。93年、95年、97年、99年、2001年。水害が1回。これは95年で、ヤオトン(窑洞)の屋根や壁に雨水が浸透して、たくさんの農家が倒壊しました。あとの1回は虫害。バッタが大発生し、作物や植物を食い荒らしました。ひょっとすると、2002年の虫害も加えるべきかもしれませんが、地元でどうしているか、まだ確認していません。毛虫が大発生し、さまざまな果樹、ポプラ、ヤナギハグミ、そしてカラマツの葉まで、かじり倒したんです。

そういうことが日常になると、人間の感性もちがってきて、あたりまえです。たんに自分の

体験だけでなく、親から子へ、祖父母から孫へ、というふうに、繰り返し伝えられるんですから。私なんか、かなわないな、と脱帽するしかありません。「援助してます」なんて顔は、とうていできない。教わっていることのほうが、ずっと大きいんです。

日本の自殺者数は年間3万人を超えるそうです。交通事故死の3倍です。そこまで追いつめられる前に、1回、大同の農村にこられたらどうですか。でも、そんな余裕があれば、自殺なんかしないでしょね。なんてことを書きながら、ひとつ思いつきました。黄土高原の貧しい農民は、借金がない。借金ができない。それで悩みが深刻化しないのかもしれませんが。

## NO. 171 打工(出稼ぎ) 2002. 08. 30

大同でよく耳にすることばに「打工 dagong」があります。「出稼ぎ」という意味だと思っていました。自分の耳で聞いているかぎり、そういう意味で使われています。

ことしの夏、地元の新聞をみていると、「学生の打工の変化」なんて記事がありました。このばあいの「打工」は、夏休みの学生アルバイトのこと。従来は、どんな仕事にもついていたのに、最近では自分の専攻を生かしたアルバイトをしている、といった内容です。

学生といっても、大同に大学はありません。書かれているのは、専門学校クラスです。師範学校の学生は、家庭教師につくことが多くなった。コンピュータを勉強している学生は、知識をいかせる企業でアルバイトをする。旅游専門学校の学生は、旅行客の接待にあたっている。といったことが紹介されています。こういうなかにも、最近の社会の変化があらわれています。

日本に帰ってから、辞書で探しました。「打」は、意味の広い動詞です。あとにつながる単語(文字)で、いろんな意味が生じます。でも、「打工」という項目がない。何冊も調べたけど、載っていない。俗語なんですかね? 「打短工」の用法がそれに近いのかもしれない。くわしいかたがおいででしょうから、教えてください。

大同の一带は、出稼ぎにでるほうも、くるほうも盛んです。歴史的には「走西口」なんてことばがあります。万里の長城をこえて、出稼ぎに行く。というより、落ち延びていく、都落ち、といった感じでしょう。河北省、山東省あたりでは、「越関東」といったそうです。こちらも、長城を越えて、化外に出る、といった意味でしょう。

2001年は大旱魃でした。被害の範囲が広いので、政府の手も及びにくい。地元の新聞に、「〇〇県△△郷が、施工隊を組織して、××に派遣した」といった記事がありました。記事中には、「自力自救」(自分の力で自分を救う)とあります。こういう人たちが都会にでると、きらわれるんですね。「治安が悪化する」なんて。でも、でざるをえない事情が、農村にはある。

大同は中国最大の炭鉱の街なので、出稼ぎにくる人も多いです。以前のこの通信にも書きました。出稼ぎを受け入れるのは、炭鉱や、街だけではありません。農村にも出稼ぎがきている。

最初に私がであったのは、1993年秋、大同県徐町郷政府でのことです。10日あまり、ここに泊っていました。郷政府のなかで、レンガ塀をつくったり、中庭を整備したり、といった工事をしていたんです。顔見知りになって、わかったのは、河北省からきていることです。朝は、暗いうちから起きだして働く。夕方も、暗くなるまで働きます。地元の農民と、まるでちがう。請け負ったしごとを早く終え、約束のお金を受け取って、早く帰りたいんです。

環境林センターでも、なにかの工事のときには、打工がきます。労働条件たるや、私の感覚でも恐ろしいものです。センターの管理棟と温室とのあいだに車庫があります。日本ふうのものを想像されても困ります。8割引きで、イメージしてください。2割引きならともかく、8割引きなんて、イメージできないかな？

そこにレンガを何段か積み、それを足にして板を渡し、ベッドです。センベイブトンを並べます。黒光りし、ワタがはみだしてる。となりの人と、からだのふれる間隔です。「山小屋なみ」なんて書いたら、山小屋の管理者にしかられそう。「プライバシー」なんて、これをみたら逃げ出しますよ。

温室のレンガの壁に寄せて、レンガを積み上げ、1畳ほどの厨房がつくられました。ナベを1つおいて、3食をつくります。まかないの人は、彼らがやといました。しごくかんたんな食事です。私の目でみれば、量だけはたっぷりある。

センターの季節工にも、河北省出身者が多いそうです。女性たちです。河北省といっても、太行山脈のなかの村でしょう。河北省の女性は働きもの、という評判です。それに比して、大同の女は働かない……。かわりに、大同には美人が多い、んだそうです。あんたなら、どちらをとる？

確認すべきだと思って、顔なじみの美人(?)3人に出身地をききました。1人は渾源县官児郷、恒山山脈の山深くです。彼女は、かけ値なしの働き者。2人目は、大同県倍加造郷。針葉樹育苗基地をおいているところ。3人目は、内蒙古の集寧市。といっても、農村部ですけど。河北省の人はいなかった。

それから、大同県聚楽郷にある実験林場「カササギの森」。ここで働く季節工も、すべてが外からの人です。といっても、すぐとなりの陽高県朱家窑頭郷。大同県聚楽郷の郷政府所在地は、カササギの森からすぐです。その人たちも出稼ぎにでている。だったら、同じ村の人をやと

ったらいいじゃないかと、私は考える。

でも、それではうまくいかないようです。いろんな関係が障害になる、といったらいいでしょうか。地元の幹部がもたらす話は、働いてもお金がこないことが少なくない。働いたらバカをみる。外にでたほうが、関係がはっきりしていて、安心できる。

やとうほうも、郷や村の政府を相手にするより、民間の施工隊を相手にしたほうが扱いやすい。うまくいかなかったときは、市場経済的に責任を追及できる。同じ植林プロジェクトでも、村に委託してやるより、大同事務所直営で、打工をやとったほうが、管理が届き、成果は確実に、コストパフォーマンスもいいというんですよ。

注目したいのは、打工にでた人が帰ったあとのことです。打工のあいだは、ほんとによく働くんですね。生まれ育った村では、こんな働き方はしないでしょ。時間の意味が変わります。新しい労働のリズムを身につける。ひよっとすると、これが村を変えるかもしれません。

そしてもう1つ。生まれ育ったところ以外を知ることで、自分の村を客観的に知るようになる。この事業の初期、私は農村を回って、話を聞くことが多かったんです。そのとき、村の外にでた経験のある人をさがした。そういう人だけが、自分の村のことをわかっているからです。

## NO. 172 こころざし 2002. 09. 05

今井澄(いまい・きよし)さんが亡くなりました。新聞で知りました。送られてくる印刷物の写真が、ずいぶん痩せていたので、どうしたのかなと思っていました。悲しいですね。新聞で訃報を知った、というのが、また悲しい。それくらい最近は疎遠になっていた、ということです。

今井さんの最近の肩書きは、参議院議員でした。民主党です。社会民主党だったこともあったと思います。それ以前は、医者として、地域医療に奮闘されていました。でも、私にとっての今井さんは、それよりずっと以前、学生運動の先輩、リーダーとしての今井さんです。

今井さんが大学に入学したのは、私より8年まえです。東大全学自治会の委員長になり、学生ストライキの指導者として、退学処分をうけた、というんです。その経歴をきくだけで、伝説の人のように、私は思っていました。

でも、じっさいの今井さんの印象はまるでちがった。おだやかな、おじさんだったんです。

私なんか、田舎の高校から東京にでたんですけど、その目からみたら、ほんとに大人だった。兄貴分というより、叔父さんのような存在でした。一方的に甘えさせてもらった、とって

い。議員になった今井さんを訪ねるときも、甘える一方でした。

何人もの人が、新聞に追悼文を書いていました。そのなかに、今井さんがラディカルな人だ  
というものや、「瞬間湯沸かし器」と呼ばれることもあった、などとありました。とても信じら  
れない。イヤな場面に遭遇することが、よほど多かったのかしら？

あるいは……。あの当時の学生運動の中心的なリーダーは、激越な人が多く、そのなかで今  
井さんは良識的な人にみえたけど、いまの世間標準では、今井さんもそういうふうにみられた  
のかな。

医者をめざして復学していた今井さんの人生をくわせたのは、東大闘争でした。発端は医  
学部です。でも、他の学部への波及は少なく、孤立していた。機動隊の導入を機に、大学当局  
にたいする学生の反発が強まったんです。総長との団体交渉が決裂したあと、そのまま安田講  
堂を占拠することになった。そのとき今井さんは、「本日をもって、闘争は全学に発展した。こ  
こに東大闘争全学共闘会議の成立を確認したいと思います」なんて、アジったんです。アクセ  
ントは、「全学」にあったと思います。孤立していた医学部の問題が、全学に広がった、とい  
うこと。「全共闘」が時代のキーワードになったのは、そのあとのことでした。

今井さんは、東大全共闘の代表の1人になりました。私の記憶では、山本義隆さんはじめ、  
5人が代表に選ばれたんですね、そのとき。あいだをはしります。安田講堂が機動隊に包囲さ  
れたとき、防衛隊長が、今井さんでした。逮捕され、獄につながれました。今井さんは、け  
じめをつけたんです。

そのあと撮影されたものだと思うけど、講堂の壁につぎの文句が書かれていた。「連帯を求め  
て孤立を恐れず。力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして倒れることを拒否  
する」。すきなことばじゃないけど、そういう思いが、自分のなかにもある。時代精神なんてい  
うのかもしれない。

ガンを病んだ今井さんは、最後は車椅子で活動していた、ということです。『理想の医療を語  
れますか』という本を執筆・出版したそうです。そして、さっきの言葉で本の最後をしめく  
った。朝日新聞の梶本章さんは、「いつも『全力投球』という雰囲気醸し出していた」と、今  
井さんのことを書いています。そういう最近のことを、私は知らなかった。

ここ10年の私は、1年のうち90～120日が中国です。きょうもこれから、北京経由で大同に  
むかいます。すると、まだらボケになります。重要な情報も、私の頭のなかから抜け落ちてし  
まう。今井さんの葬儀は9月8日だそうですが、それにもでれない。不義理ばかり重ねていま  
す。

今井さんは、自分の出発点と到達点に、みごとに整合させたのでしょう。こころざしをつらぬいた、ということです。そのように生きるのは、たいへんなことだと思います。この年になって、すこしずつわかってきたことです。まずは、長く堅持しないといけない。しかし、時代と社会は変化するし、自分の主体的な条件も変わる。堅持するためには、変わることも必要です。そうしないと、やがては生命力を失ってしまう。

今井さん、ごくろうさまでした。ゆっくりとお休みください。

## NO. 173 オオカミがきた！ 2002. 09. 08

9月5日の夜、大同に着きました。荷物が多かったので、大同から車で空港まで迎えにきてもらったのです。6日の夕食を、大同事務所の人たちと食べました。通訳の王萍は、頭痛のためにいません。

彼らは、彼らどおしで、話に熱中。私にとっては、これさいわい。今回の大同滞在中の宿題として、原稿を2本かかえています。1本は1万6千字で、しかも新しいテーマのため、多少のプレッシャーがあります。構成を考えながら、だまって食べていました。

気になる単語が、断片的に耳にはいつてきます。オオカミ。林場。～カササギの森のことです。死んだ。ほかにもいないか、老侯が気にしている……。割り込んで、話の内容を聞きなおしました。

2週間ほどまえのことだそうです。カササギの森に、オオカミの子があらわれ、つかまえたけど、まもなく死んだ、というのです。ええっ！戦時にこの地方にきた日本人から、オオカミのこわさを、きいています。大同事務所副所長の小魏からも、子どものころはオオカミが多かったとききました。でも10年、ここに通ってきて、生身のオオカミの話ははじめてです。

大同の植林で、困っていることはたくさんあります。気象のこと、土壌のこと、人間問題、その他その他。その他の1つに、ノウサギ、ネズミの食害があります。せっかく活着した苗木を、ノウサギがかじって、枯らす。1m以上に育ったマツが、赤くなって枯れている。ネズミが根をかじったんです。かじったなんてものじゃない。うまいとは思えないのに、1本残らず根を食べてしまう。春先に、どれだけ深刻な食糧問題がおこるか、それでわかります。ネズミ、ウサギにとっての食糧ですよ。

旱魃で枯れるのは、なんとなくアキラメがつきます。植えたばかりで、苗もまだ小さいし。ヤツラが枯らすのは、育った木です。花が咲き、結果寸前の果樹を、ノウサギが枯らす。ネズミが枯らすのは、5年以上育ってからです。もう、くやしくて、くやしくて。

先方からすれば、飢えて飢えてしかたがない。そんなときに食糧援助があったようなもの。したい放題をしてきた人間が、多少は償いをする気になったか、そんな気持ちでしょう。私たちとしては、「森林がもどれば、あなたたちも生きられるんだから、待ってちょうだい。小さな苗を食べたんでは、あなたたちのためにもならない」。でも、いっても通じないし、通じても信用してくれないでしょう。ここまで破壊してきたのは、人間ですからね。

電話で問い合わせてもらったら、オオカミの死骸はまだ残っている。予定を変えて、7日の朝からカササギの森にでかけました。ありました。ありました。道路のわきに、体長50cmほどの死体があります。自分でたしかめるまでは、半信半疑だったんですね。野犬の死体(骨?)が、オオカミとまちがえられたことが、日本でもあったでしょ。一見してわかりますよ。イヌではありえない。キバ、前足の鋭く長いツメ、前足と後ろ足の長さ、尻尾……。そして、なによりも威厳……。小さいながらも、野性そのものです。特徴的と思えるところを、写真に撮りました。

涼しいといっても、8~9月ですから、白骨化を予想してました。毛皮はちゃんと残っています。腐ってもいません。乾いて、ミイラ化しつつある。クビの針金の輪が痛々しい。

乾いているのは、8月中旬以降、雨が降らなかったからです。この通信で、ことしは雨が多く、豊作だ、と伝えてきました。途中まではそうだったんですけど、最後が悪かった。もちろん去年ほどではありませんが、ことしも早魃です。

オオカミを発見したのは、カササギの森の護林員です。林場のなかにある鷹嘴敦村の人。

現場に案内されました。ヤオトン(窯洞)の入り口のそばに、穴があります。口は直径80cmほどで、深さは2m。なかは広がっていて、ジャガイモの貯蔵などにつかいます。あやまって、落ちたようです。

腹を減らしていました。マントウを3つも食べた。肉食のオオカミが、小麦粉のマントウを食べたんですよ。大早魃の2001年、聚楽郷の1人あたり年収は295元でした。郷のなかでも条件が悪く、若い人が村をでて過疎化したこの村で、肉を与えるなんて不可能です。マントウを与えたというのが、むしろ感動もの。

手にあまって、ほかの人にやったそうです。でも、2日後に返してきた。そしてまもなく死んだ。オオカミは、中国でも保護動物です。しかし、最低の3級。ほんとうかどうか、確認していません。

ことしの夏、林場の臨時工が、猫頭鷹をもってきたそうです。フクロウかミミズク。耳があったといいますから、ミミズクの可能性が高い。ニワトリを食べにきたところをつかえまえた。

まもなく死んだそうです。

ウサギやネズミの害がひどいのは、食物連鎖が切れているからです。植林の観点からいえば、オオカミやミミズクは歓迎すべき。保護すべきだ、と私がいうと、大同事務所の人たちはすぐに同意してくれます。副所長の小魏は、「以前は人がオオカミをおそれていたけど、いまはオオカミが人をおそれている。ノウサギやネズミがいれば、オオカミは人や家畜を襲わない」といいました。

環境林センターで、鳥がふえています。周囲にほとんど樹木がないのに、ここには多い。日本のスイートコーンを食べるのを、みんな楽しみにしています。甘くて、おいしいからです。でも、ことしはダメだった。出た直後の芽を、鳥が食べてしまったんです。過渡期は苦しい。破壊されつくした自然を回復するのは、しんどいことです。

#### NO. 174 てなもんや北京空港 2002. 09. 15

黄土高原だより (NO. 169) 「北京空港みそラーメン」に、多数の反応がありました。私の文章はアッ軽いはずですが、内容は重たいことが少なくない。ときにあんな話を書くと、息抜きになるようです。あえて、今回はその続編。

今回の帰国は、9月14日の土曜日です。この日は関空への直行便がない。大連経由です。CA151便で、08時30分の出発予定。前回、大連に行ったのは、1984年です。空港の外にはできないけど、それでも楽しみです。

6時30分にホテルを出発しました。途中の道はすいていて、7時前に空港に着いたんです。空港はこの時間からけっこう混んでいました。

搭乗券には、「20番搭乗口、8時20分搭乗」とあります。係のクーニャンは、搭乗ゲートのナンバーを○で囲んで強調しました。20番ゲートは、出国審査を通過しないで、途中で左にそれます。大連までは国内線扱いで、国内線利用客も乗せます。出国手続きは大連の空港です。

私は、前回のあのレストランで、みそラーメンを食べたかった。このしつこい、マゾヒスティックな性格……。それには、直通便の待合室にいかないといけない。通路は開いているんですよ。でも、境界に警備員が立っていて、搭乗券をチェックする。「朝食を食べに行きたい」といったら、「そちらにも食堂がある」といって拒否された。そこはまだ開いていないし、何時に開店かわからないのに。

搭乗時間の8時20分になっても、ゲートの表示は「東京行き9時30分」だけ。不安になっ

て、クーニャンに確認しようと思いました。同じ意図の欧米系が、私の前にいます。クーニャンは電話で問い合わせ、 「2番搭乗口だ」と彼に答えました。私が搭乗券をだすと、「20」をボールペンで消して、「2」と書き直した。

同じ不安をかかえてたんでしょうね。カウンターに人が殺到しました。大部分が日本人です。クーニャンが同じように書き変える。こんな事態になっても、アナウンスはしません。2番搭乗口へは、さっきの関門をこえないといけない。私が追い返されたところです。書き直された搭乗券を示すと、同じ男がすぐに道をあけてくれました。(なんだ、この手があったか)。

関西弁の若い男女10名ほどが、必死の形相で私を追い越しました。出発時間まで10分を切ってるから、無理もない。ここで、ハタッと私は考えた。こういうミスがあったんだから、どうせ遅れるはず。あわてることはない。搭乗券にプリントアウトされたのは、20番ゲートだった。2番ゲートが正しいといったのは、あのクーニャン1人。そっちもまちがっているかもしれない。

出発便を案内するディスプレイを探しました。すぐにみつかりました。でも、「大阪・OSAKA」行きがない。搭乗券で便名をたしかめると、「CA151」です。「CA151」はディスプレイにあり、終点は「大連」になっている。搭乗口は2番。名古屋、福岡行きは終点にそう表示され、経由地に大連・上海があります。

2番搭乗口の電光表示も、目的地は「大連」、中継地は空白。クーニャンに確認すると、大阪にもいくそうです。ここでまちがいありません。出発時刻は、8時50分に遅らせてある。じっさいは9時30分になりましたけど。

こういうことは、しばらくまえまで日常茶飯事で、気にもしなかった。そんなことを気にしたら、中国ではやっていけなかった。出発や到着の数時間遅れはふつうだし、直前にキャンセルされたこともある。運が悪かったと、あきらめることも多かったんです。

最近はずいぶんよくなってきたんです。しかし、こんなことがまだある。ゆだんはできない。こういう体験のなかで生きているから、中国人は頭をつかうんです。日本のようになったら、ものごとを考えなくなる。世界は逆説で成り立っています。

2番搭乗口でバスに乗りました。2番搭乗口は、空港のはしっこです。飛行機が待っていたのは、反対側のはしっこ。10分近くもバスで走りましたから、空港見学会のようなものです。いらちな大阪人は「日本まで着いちゃうぞ〜！」〜私じゃない。

そこになんと、以前の空港の建物！私が最初に北京にきたのは、1971年でした。20歳代の前半です。そのころは「全世界人民大団結万歳！」なんてスローガンがあった。私も変わったけ

ど、中国の変化はすごい！思いがけぬセンチメンタルジャーニーでした。

## NO. 175 雨の日の会話 2002. 09. 21

9月9日朝から12日夜まで、サントリーとサントリーフーズの労働組合のツアーが大同にやってきました。お気の毒だったのは、広靈県にいけばそこで雨が降り、渾源県に帰れば雨に会い、大同県に帰り着いたらまたそこで大雨、というふうにならずと雨だったことです。カササギの森へもいったんですけど、バスを下りたら、あまりに雨が激しくて、すぐに引き返しました。

どこの県でも、40日ぶりの雨だというんです。7月までは雨が合ったけど、8月にはいって降らなかった。ことしもまた不作です。ツアーの人たちが、雨を連れ歩いたみたいで、地元の大歓迎を受けました。つけたされたのが、「もう1か月早くきてほしかった！」。私自身は、降ってほしいような、降ってほしくないような、複雑な心境でした。気持ちの深いところでは、降ってくれて、うれしかった。ツアーの人たちには、うしろめたいけど。

10日の夜は、大同県の中高庄村でホームステイ。私が泊まったのは、周海森・董荷燕夫妻の家で、昨年夏につづいて2度目です。主人が、おもしろい人です。前回、私が酒をすすめたら（それもおかしいね）、「受苦人はそんなものは飲まない」といって、きっぱり拒否しました。「気持ちだけでも」といっても、パイチュー（白酒）はおろか、ビールも1滴も口にしない。それがわかっていたから、今回は誘いもしなかった。

北京からきてくれた通訳の隋華義さんは、私の旧友、李建華、王黎傑、楊晶といった人たちの大学時代の日本語の先生です。そして隋さんの日本語の先生（日本人）は、私の知り合いで、いっしょに飲んだものです。中国は国が狭いし、人も少ないから、こういう偶然がしょっちゅうです。隋さんと同じ農家に泊まりました。

隋さんが主人を「大爺！」（おじいさん）と呼んだんですね。髪がまっ白だし、顔は日に焼けて、シワがふかい。私はとめました。「やめなさいよ、隋さん。きっと、あなたより年下だから」。隋さんはびっくり。隋さんは1946年生まれ。たしかめると、あるじは1948年生まれ。私と同じ年です。

あるじも今回はきげんがよくて、いろんなことを話しました。サントリー労組がつれてきた雨のおかげかもしれない。「夜のうちに手をよく洗って、指の関節をほぐしておかないと、翌朝、ものを握れなくなる。関節がまがらないんだ。受苦人はみんなそうだよ。毎日、毎日、野良仕事をして、この年になると、ガタがくる。勤め人には定年があるけど、百姓は、70歳になっても、80歳になっても、生きてるかぎり働かないといけない。

百姓しごとは、限度がないからね。ここまでやれば終わりってものがない。もちろん、働きものもいれば、怠けものもいる。働き者が報われるかという、そうとはかぎらない。やったしごとの表面だけみれば、そんなにちがいがあわけじゃないし。だけど、やらないでおれないんだね。これも性分かな。

黄花菜の収穫がいちばんたいへんだよ。朝3時半には起きて、まだ星のみえるころに畑にでる。ぼんやりとみえるツボミを、摘んでは、首にかけた袋に入れていく。花が開いたら、値打ちがないからね。10時までには終わらないといけない。袋が重くなると、肩や首が痛いんだよ。でも、戻ってカゴに入れるのは、時間のむだだから、がまんする。

摘むのが終わったら、すぐに加工しないとけない。まず蒸して、それから広げて、天日で乾燥する。去年の夏、ガオジェン(高見)はこの家に泊まって、みてた。ああいうふうにする。グズグズしてたら、へんな臭いがつくからね。ごはんなんて、食べてるヒマはない。水だって飲まない。夜になって1食だけ、なんて日もあるね。夏の時期、40日くらいそれがつづく。

去年は大旱魃だった。そのぶん値段はよくて、1斤(500グラム)5元だった。ことしは黄花菜は豊作だけど、値段が下がって4元。収入は、2000元くらいかな。でも、作業はつらいし。肥料代、灌漑用の水代、出費も多いし。残るところは、たいしてない」。

黄花菜というのは、キスゲのなかまです。開くまえのツボミを食用にします。ナマで炒めたら、ほんとに美味しいけど、それは産地だけのゼイタク。ふつうは乾燥したものを、水にもどして料理します。大同県はその特産地。最近は、「ユリの花」と称して、日本のスーパー店頭でもみられることもあります。翌朝は激しい雨で、私たちも外での作業をあきらめました。あるじの話のつづき。

「ジャオシャンハオ！(おはようございます)。よく休めましたか？あ、そう、バスの警笛で目がさめたんですか？大同行きです。朝早く出発して、昼すぎに帰ってくる。また大同に折り返して、夕方までどってくる。日に2便です。乗るのは、街になにか用事のある人。病院に行くとか、買い物をするとか。しごとに行くために乗る人はいない。

きょうはこの雨ですからね。私もちょっと骨休めです。百姓にとって、休みは雨のときくらい。いつも、なにか、しごとがあるんですよ。この雨がやんだら、ヤオトン(窯洞)の屋根にあがって、土をたたいて、固めておかないといけない。ちゃんとしておかないと、雨漏りするから。

去年いたむすめ？ あれは末っ子です。ことし、家をでたんですよ。大同の超市(超級市場・スーパーマーケット)で働いてます。そりゃあ、ちょっとはさびしいですよ。息子2人は、新疆とか、遠いところにいってますしね。夫婦2人になってしまった。

いまの時代は、男の子も女の子もいっしょですよ。むしろ女の子のほうがいい。女の子は、家をでて、年に数回は帰ってきて、よくしてくれる。男の子は、せいぜい1年に1度帰るだけ。そのぶん、嫁の両親にはよくするんだろうけど。

えっ？ いまでも3人も4人も子どもを生んでる農村があるんですか？この大同で？この村なんかは、最初の子が男だったら、それでもういい。女の子だったら、もう1人。それくらいです。こどもの数は、ずいぶん減りましたよ。こどもが多いと、くらしがたいへんだから。

この村なんか、いちばん貧乏だと思ってたけど、そうじゃないんですか？ほかの県のことなんか、あまり知らない。天鎮県なんか、たいへんだとは、聞いてましたよ。でも、それほど…！大同にはいきますよ。でも、天鎮に行くことは、まずない。

朝のあのバスですけど、大同まで片道2元です。あれで打工(出稼ぎ)に通うなんて、それはないですよ。打工の日当は、元気な男で15~20元ですから。交通費に4元もつかえないですよ。

改革開放いらい、収入はず~っと増えましたよ。何十倍にもね。でも、物価も高くなりましたからね。私たち受苦人の生活は、あまり変わらない。うちなんて、ず~っとこのヤオトン(窑洞)だし。

若いころ、う~ん、30年くらいまえかな。村の外にでて、働いたことがあります。炭鉱で石炭を運ぶしごとをして、1日1毛銭(0.1元)でした。1月まるまる働いて、3元。そのお金も、月末にしかはいらなから、手元はいつもピーピー。

外で食べるなんて、できないですよ。もったいない。トウモロコシの粉でつくったウオトウをもって、しごとにいきます。食堂の人に頼んで、お湯だけもらう。それで、すまします。

炭鉱への途中に、雲崗石窟があるでしょ。往復のたびに外からみてて、なかに入りたいたいですよ。そのころは、入場券が5分銭(0.05元)。でも、そのお金がもったいない。食べるのにやっとですからね。

しごとにいくたびに、あそこの前を通るでしょ。門番をしてる人が、顔を覚えてくれる。「農村の人だろ。みたいかい？」なんて、きいてくれます。「みたいです」と答えると、こっそり入れてくれるんですよ。5分銭だったけど、参観者は、ほとんどいませんでした。

いま雲崗石窟の拝観料は1人50元でしょ。そのころの何倍ですか？100倍？ いや、1,000倍です。でも、参観する人はずいぶんふえましたね。大同に打工して、日当はせいぜい15~20

元。門票に、2～3日ぶんの賃金を払わないといけない。ちょっと、はいれないですね。

みなさん、東京からですか？飛行機って、どんなふうです？えっ、たった3時間。近いんですね。いくらです？6,000元！そんなにかかるんですか！500～600元だろうと思ってましたよ」。

## NO. 176 こよみ 2002. 09. 26

きょうは、2002年9月26日です。朝、このメールを送ります。このあと、大同にむかって出発します。経団連自然保護協議会のミッションが、私たちのプロジェクトを視察してくれることになりました。10日足らずで帰ってくるんですけど。帰ったらまたすぐ、北京にいかないといけません。ことしはとても忙しい。

世界的にみれば、いまはまだ、9月25日のところが多いはずです。日付変更線は東経180度（つまり西経180度）を基本に決められています。0度は、ごぞんじのように、グリニッジ。1つの生活圏が2つの日に分かれるのはまずいから、日付変更線は人の住む島を避けて、曲がっています。世界でも早いうちに、日本は21世紀にはいりました。時間は、自然の流れのようですけど、人間が社会的に決めた部分が多い。

なにか1つをもって、すべてこれでなければいけない、というものではないはずです。独自のものがあっていい。だからといって、おれはおれの「こよみ」でいく、というわけにもいきません。おれが生まれた瞬間からはじめる、といってもかまわないけど、だれもがそれをいざしたら、基準にならない。それぞれの国や地域で、独自のこよみ、独自の時間をいったんでは、不便がでてくる。

日本には、元号があります。役所と銀行は元号。似てるのかな？ 私の祖父母は「明治」生まれ。父母は「大正」。私たち夫婦も、息子2人も、「昭和」です。「昭和」は長かった。外務省発行のパスポートは西暦だけ、名前もアルファベットです。

人間社会のこよみは、一般的には、太陽のまわりを地球が周回する「公転」、地球自身が1回転する「自転」、そして地球の周囲を衛星の月が1周する、という3つの要素の組み合わせで決まってきたようです。それをもとに、1年、1日、1月をきめた。どの要素を重視するかで、いろんな組み合わせがあったけど、世界的には太陽暦が支配的になった。

それも単純ではありません。公転の時間は、自転の365倍キッチリじゃないんです。公転をもとにした1年は、365.2422日だということです。差異の「0.2422…日」を吸収するために、うるう日＝「2月29日」がつくられました。西暦年が4で割り切れる年はうるう年にし、2月29日をおきます。

それでは差異を生じるので、4 で割り切れるけれども、同時に 100 で割り切れる年は、うるう年にしません。微調整のために、100 で割り切れ、400 でも割り切れる年は、うるう年にしません。そういう約束をつくりました。だから、2000 年には 2 月 29 日があった。

そういうふうにしても、1 年は 365.2425 日となり、1 年に 0.0003 日のズレが残るといいます。さらに端数も残るでしょう。数千年に 1 日の補正が必要なんですけど、その方法は未定だそうです。遠田宏さんに教わりました。

こうみると、基準は西暦しかありません。日本の元号と、どう調節されているんでしょう？そういうことが気になる性格なんです、私は。ずっと以前に調べたことがあります。

天皇の在位で決める元号では、ルール化は不可能です。基準になったのは、なんと、「皇紀」。神武天皇が即位したとされる年が、基準です。皇紀は、西暦より 660 年長い。皇紀から 660 を引いて、それが 4 で割り切れる年は「うるう年」とし、さらに 100 で割り切れる年はそれから除外し、さらに 400 で割り切れる年は……というふうに、明治のはじめの太政官令かなんかで決めた。いかにも日本らしい、ですね？

私の話は、いつも前置きが長い。だからきらわれます。私が話したかったのは、中国の農村の「こよみ」についてです。一般に使われているのは、中国でいうところの「農曆」。都市でも、正月は農曆の「春節」で祝うことがおおいでしょう。「うるう日」ならぬ「うるう月」が、数年に 1 回、はいりこみます。1 年のなかに、同じ月を 2 回くりかえす。

農曆で〇月×日といっても、太陽暦に換算すると、一定しません。春夏秋冬は、太陽にたいする地軸の角度できまります。農耕のさまざまな作業も、それに従わざるをえない。大きくずれることのある農曆は、役にたちません。

でも、太陽暦は農村になかなか浸透しない。西暦(公暦)の普及に、努力しているようですが、農村はそれでは動かない。日本の農村では、陰暦はあつというまに消えたけど(漁村はちがうでしょうけど)、ここはちがいます。なぜなんでしょう？おわかりのかたは教えてください。

農曆の不足を補うために、農村でつかわれているのは、二十四節気です。日本の私たちも、一部は知っていますが、大部分は忘れてるか、知らないか。大同の農村では、この二十四節気がいまでも現役です。私は、PDA に太陽暦との対照表をいれ、農村で話をきくときはひっぱりだします。だいたいな通訳です。ここに写しておきましょう。

#### 【春】

立春／02月04日 雨水／02月19日 啓蟄／03月06日 春分／03月21日 清明／04月05日

日 穀雨／04月20日

【夏】

立夏／05月06日 小満／05月21日 芒種／06月06日 夏至／06月22日 小暑／07月08日  
日 大暑／07月23日

【秋】

立秋／08月08日 処暑／08月24日 白露／09月08日 秋分／09月23日 寒露／10月09日  
日 霜降／10月24日

【冬】

立冬／11月08日 小雪／11月23日 大雪／12月08日 冬至／12月22日 小寒／01月06日  
日 大寒／01月20日

1年を4等分して、それに春夏秋冬をわりあてるのには、無理があります。8月8日が立秋で、それからあとは秋のはず。ところが日本では、そのあとが暑い。高校野球の甲子園大会なんて、カンカン照りです。それでも、立秋をすぎているという理由で、「残暑」といいます。この日を境に、暑中見舞いが、残暑見舞いになります。

でも、中国では、すくなくとも華北・西北地方では、二十四節気の季節区分はわかりやすい。北京はことしも40度を超える日がつづいたんですけど、立秋をすぎると、ずっと涼しくなります。立春のころは、まだ寒いけど、暖かいほうへ向かっているのははっきりします。立夏の5月上旬は、北京では、30度を超える日がでて、りっぱに夏です。

## NO.177 松枯れ騒動の顛末(1) 2002.10.05

経団連自然保護協議会のミッションの案内役で、大同に行き、10月3日に帰ってきました。ところが7日から、また北京にいかないといけない。日中環境週間のプログラム、環境総合フォーラムに出席するためです。ことしは、ほんとに忙しい。今回は、ちょっと古い話です。

小川眞さん(関西総合環境センター生物環境研究所長)が、菌根菌を活用した育苗の指導のために、大同にきてくださったのは、1997年4月末のことです。センターでの指導のあいまに、いくつかの造林地をみてもらいました。大同県の遇駕山では、地元の人たちが1985年に植えたマツが育っています。1,000haを1年で植えた、広大なところ。大部分はアブラマツで、一部にモンゴリマツがあります。

そのモンゴリマツの一部が変調をきたしていたんです。なんども自分たちでみにいったんですけど、はっきりしたことはわからない。現場の護林員は、袁さんという老人です。村から遠く離れた山頂の管理小屋に住み込んで、マツを見守っている。彼が、ほんとに心配そうなんですよ。96年になって、勢いの衰えるものがでてきた。97年になると、枯れるものもでてきた。

この地方のモデル造林で、中国国内だけでなく、国外からも視察が多い。そこで被害が広がったら、いったいどうなるか。

小川さんは、それらのマツを見回り、地上部をみるだけでなく、根を掘って、そのようすも観察された。携帯用の実体鏡をもちだし、センチウがいないか観察されたが、幸い、その場では発見されなかった。でも、短時間では、原因はわからなかった。去りぎわに、小川さんは、「ちょっと騒いだほうがいいですよ。これだけ大面積に植えられているのだから、処置をまちがえると、たいへんなことになります」といわれたんです。

それはそうです。大同では毎年、想像を絶する広大な面積で造林がすすめられており、その主力になっているのが、このモンゴリマツ。緯度にして約10度北の大興安嶺あたりから、導入してきたものです。もし、問題が発生したら、その影響はとても大きい。私たちじしんも、えらいことになる。

帰りの北京で、その事情を王黎傑さんたちに話しました。その年の6月末、彼らは、当時の林業部(現在は林業局)の祝光耀副部長との面会の機会をつくってくれました。副部長は、日本でいえば次官です。祝光耀さんは、その後、環境保護総局に移ったはずですが、せっかくの機会ですから、私は、大同でのできごとを率直に話しました。すぐにでも、調査にとりくんでほしいとお願いしました。副部長は即座に、そのことを約束してくれました。

4月末に日本に帰ってから、私は日本の専門家にも、調査を依頼していました。東大大学院の鈴木和夫さんが、その年の夏にでも、大同に立ち寄ってくれることになりました。国際緑化推進センターに専門家派遣を申請したところ、森林総研の前所長、小林一三さんを派遣してくれることになったんです。できれば、日本と中国の共同調査にしてほしいと話すと、彼らは即座に同意してくれました。困ったことがあれば、いつでも、どんな問題でも協力する、と伝えてくれました。とんとん拍子で話はすすんだんです。

同席していた幹部の1人が、「モンゴリマツをあの地方に植えることには、十分な検証がなされていない。にもかかわらず、現地では大面積に植えてしまった」と話しました。ここでも、そのような問題に関心があるんだな、と私は受け止めたんです。

その日の夜行列車で、私は大同にむかいました。いいことをしたと、自分では満足だったんです。翌朝、大同駅に着くと、祁学峰が迎えにきていました。車に乗り込むなり、彼がいったんです。「おまえは、いったい北京でなにをしたんだ。自分はもう3回も市の林業局に呼び出され、叱られている。これまでのように自由な活動はできなくなるかもしれない」と。

思いもしない方向に、事態がすすんでいたんです。私が辞去した直後、国家林業部は、山西省の林業庁に電話をしたようです。山西省林業庁は、大同市の林業局に、ただちに電話をかけ

た。問題が発生しているのに、どうして報告しなかった、というお叱りです。大同市林業局にとっては、晴天の霹靂。いったいだれが、国家林業部まで、そんな話をもちこんだか？あぶりだされたのが、日本の私たちと協力をつづけている青年連合会だった。

祁学峰が車のなかで私に話すんですよ。「おまえが考えるほど、問題は単純じゃない。市や省を飛び越して、いきなり国の林業部にいくなんて、非常識だ。市の林業局にとっても、省の林業庁にとっても、愉快的なことじゃない。林業局の事業には、国のお金だってきている。それを止められたら、回っていかない。問題が起きたからといって、すぐ報告できるとはかぎらないんだ」。

いわれてみれば、もっともなんだけど、私の頭には、そういう回路が備わっていない。ホテルに着くと、市の林業局の局長、副局長以下、幹部が10人近くも集まっていたんです。その顔が、みんな緊張している。どんな悪いやつがやってくるのか、といった雰囲気です。

だいたい私は、人の期待に応えるのが、得意じゃない。先方にとっては、拍子抜けだったでしょうね。なんとなく頼りなくて、ボーッとしたのがやってきた。お茶1杯だけいっしょに飲んで、私が先方を訪れる約束をしました。もう5年以上も大同に通ってきてるけど、市の林業局とはそれまで関係がなかった。最初の出会いが、ユーウツなものになってしまったものです。小川真さんに、まんまと乗せられたものだ、そのときは後悔しましたよ。でも、自分でやったことだから、責任転嫁はできない。つづきは次回に。

## NO. 178 日中環境協力総合フォーラム 2002. 10. 11

表題のフォーラムが、外務省、環境省、日本大使館、中国国家環境保護総局などの主催で、10月8～9日、北京の中日友好環境保護センターで開催されました。発言の機会が与えられ、私も出席しました。たくさんの課題が、多数の報告者から提出され、キャパシティの小さな私の頭は、破裂しそうでした。

たくさんの人と知り合いになれたのは、なによりの収穫でした。名刺を交換するとき、何人ものかたから、「黄土高原だよりを以前から読んでいますよ。初対面の感じがしません」といっていただきました。いくつものメーリングリストと、転送の労をとってくださっているかたのおかげです。

前号「松枯れ騒動の顛末」のつづきを書いたのですが、このかんに新しい読者がふえたので（私が勝手に送りつけるだけですが）、全体のようにすをわかっていたくために、フォーラムでの私の発言を、ここに割り込ませます。

私たち緑の地球ネットワークが、山西省大同市の黄土高原で緑化協力を開始してから、11年が過ぎました。黄土高原は、水土流失と沙漠化の深刻な地域です。黄土丘陵や山地に、マツなどを植えて、グリーンベルトをつくります。水土流失と風砂防止に役立て、将来的には用材林として、経済収益もめざします。これまでにおよそ3,100ha、1,200万本を植えてきました。

沙漠化が深刻で、飲み水に困る村があるくらいですから、農村の生活は困難です。大同市に属する7つの県のうち、5つが貧困県だといわれます。1人あたり年収が800元を切る貧困層が、30万人にのぼります。農村人口の6人に1人です。

教育環境が悪く、学校にいけない子もいるので、小学校に付属果樹園をつくり、アンズなどを植えてきました。実がなり、収入があがれば、その一部を失学児童の就学保障など、教育支援にあてるわけです。これまでに延べ50近くの村に建設し、およそ半数で収穫がはじまりました。アンズは旱魃などの災害に強く、アワ・キビ・ジャガイモなどに比べ、4~5倍の収入をもたらします。これまでに700ha、64万本を植えました。

スタートのとき、私たちは、しろうとばかりでした。緑化のこともわからなければ、中国の農村の知識もありませんでした。緑化だったら、しろうとでもできるだろうと、甘くみていたのです。じつのところ、緑化ほど割の悪い事業はありません。悪い結果はすぐ出るのに、いい結果がでるまでには時間がかかります。こういう沙漠化地域では、旱魃はしょっちゅうで、地元の民謡に、「10年のうち9年は旱魃」とあるくらいです。春にたくさんの苗を植え、数か月後の夏に訪れると、すでに全滅している、といったこともありました。

逆にいい結果がでるのには、長い時間がかかります。この事業の初期、モデルをつくろうと、80ヘクタールの畑に、6万本のアンズを植えたことがあります。とても熱心な責任者に恵まれ、最初はきわめて順調でした。よく成長し、2年目の春には花を咲かせました。その郷の党書記は私に、「来年は少しだけ実をつけさせたい。ここの農民は果樹を植えたことがないので、まだ確信がない。実っているのを自分の目でみれば、自信も着くし、力もでる」といいました。私も即座に同意しました。

ところが、翌年の夏にしてみると、アンズは全滅していました。冬のあいだにノウサギがでて苗をかじり、夏になってアブラムシが大発生したためです。それいじょうに痛かったのは、あの熱心な党書記が他の郷に転勤になり、後任は管理を放棄していたのです。くりかえしますが、いい結果がでるには、長い年月がかかり、そのかんに問題が発生しないとも限らないのです。

とくに、人事異動には泣かされました。絶望的な思いをしたのは、1度や2度ではありません。転機となるできごとが、2つありました。私たちのカウンターパートは大同市青年連合会で

すが、この協力事業のために、専門の組織、緑色地球ネットワーク大同事務所を設置し、人事を固定してくれました。それはまた、私の願いだったのです。1年365日、つねにこの事業のことを考えている人間が、中国側にも最低1人はいないと、このような事業はうまくいきません。

もう1つは、日本の専門家の参加があったことです。その1人、東北大学元植物園長の遠田宏さんは、年間70日から90日、現地に滞在し、事情を詳細に調査しました。最初の3年間、彼はほとんど話をしませんでした。日本と条件があまりにちがっているので、自分で納得がいくまでに、それだけの歳月がかかったというのです。

多くの分野の専門家が大同に集まり、自由に意見を交換するなかで、ここでの緑化の筋道、問題点、追求すべきことなどが、しだいに明瞭になってきました。いまの時点で、それ以前を振り返ると、闇のなかをさまよっていたようなものです。

育苗や栽植技術の改善、人材の育成など、ソフト面の協力も強化してきました。そのための拠点として、苗圃・実験園・研修施設などを備えた環境林センター(20ha)、自然植物園(86ha)、実験林場(600ha)などを建設中です。

先に報告した現場のプロジェクトとあわせて、これまでにおよそ1,700万円を費やしてきました。直接経費だけで、です。私たちの事業を理解し、ご協力いただいたみなさんに深く感謝しています。

これまでにあげた具体的な技術成果に、たとえば、マツの育苗における菌根菌の活用があります。木炭のクズ、松林の表土など、地元の材料を使い、簡単な作業をするだけで、マツ苗の生育量は2倍になりました。植林現場での活着率も著しく向上しています。地元の技術者は、こんないい苗はつくったことはもちろん、みたこともない、とっています。

また黄土の粒子は、ひじょうに小さく、つまっています。植えた苗に水をやり、その土を足で踏み固めれば、土は日干しレンガのようになり、根が窒息して苗は枯れてしまいます。しかし、水不足に悩む地元の技術者は、それを最善の策と考え、そのような指導をつづけていたのです。

立花吉茂代表など日本の専門家は、むしろ、植え穴に軽石や砂、石炭ガラなどの通気材料を入れ、踏まないように、と主張しましたが、地元の技術者は、乾燥地の事情に無知だといって、相手にしませんでした。根の呼吸作用、通気性がきわめて重要なことが、地元の技術者に理解されたのは、数年をかけた対照実験をへてのことです。日中双方の努力によって、活着率も上昇し、初期に植えたものは、かなり大きく育ってきました。

私たちはまた、おたがいに顔のみえる協力関係のために、ワーキングツアーを派遣していま

す。いまでは毎年 250 人ほどが訪れ、通算で 1400 人近くになりました。最年少者は 1.5 歳、最高齢者は 84 歳で、職業などはマチマチです。その日の生活にも困る条件下で、農民がけんめいに緑化をすすめる姿は、日本からの訪問者に、強烈な印象を残します。「援助なんて、えらそうなことはいえない。感謝すべきは日本の自分たちだと思う」というのです。 いっしょに汗を流し、農家にホームステイすることで、感情はずっと深いものになります。

黄土高原の農村は、環境破壊と貧困の悪循環のなかにあります。その年、その年の暮らしを立てるために、条件の悪いところまで畑を拡大し、ヒツジやヤギを放牧して、やっと生きるのです。そのために、生態環境が破壊され、さらなる貧困を招きます。

でも、この悪循環は、とにもかくにも動きであり、静止した、死の世界、沙漠とはちがいます。いい循環に変える可能性があるのです。

同時に、悪循環のなかにあるということは、そこの人たちの力だけでは、脱出が容易でないということです。外部からの支援が必要であり、それが役に立つということでもあります。私たちは、それを頼りに、これまで事業をすすめてきました。

日本政府関係者、外務相派遣の ODA 民間モニター、経団連自然保護協議会のミッションなども現地を訪れ、高い評価を残してくれました。

中華全国青年連合会の副主席 2 人をはじめ、中国側でも、中央や省の指導者が私たちのプロジェクトを訪れ、「貴重な成功例だ」と評価してくれます。中華全国青年連合会主催の「環境保全国際青年キャンプ」が、2 年つづけて、私たちのプロジェクトで開催され、イギリス、アメリカ、ドイツ、トルコ、日本などの青年が参加しました。世界の人びとが中国の環境に注目しています。

最後に、私の気がかりなことを、お話しいたします。大同は深刻な水不足に陥っています。ここ数年、ダムというダム、河川という河川が干上がっています。地下水位の低下も急で、毎年 2~3m になるそうです。「2008 年には完全に涸渇する」と地元紙が書いたことがあります。

地図で確認していただきたいのですが、大同を西から東に横切る桑干河は、河北省にはいつて、官庁ダムに流れ込みます。官庁ダムは、密雲ダムとならんで、2 つしかない北京の水ガメの 1 つです。そういうことからいうと、大同は北京の水源地です。干上がっている河川のなかには、桑干河や洋河も含まれます。北京にとって、大同は、けっして他人事ではないのです。

環境問題は、貧困な地域の弱い人びとに、最初にしわ寄せがいくというのが鉄則です。日本もそのような経験をしばしばしました。その段階で問題をとらえ、解決策をとれば、被害もコストも軽くてすみます。方向転換も容易です。環境問題にとりくむみなさんが、こうした困難

な地域に、心を配ってくださるよう、心からお願いいたします。

## NO. 179 松枯れ騒動の顛末(2) 2002. 10. 18

NO. 177「松枯れ騒動の顛末(1)」を思わせぶりに終えたものですから、

「高見のことだから、大ゲンカをしたんだろう」と、思われたかたがあったようです。ところが、そうじゃなかった。1回あいだがあいたので、ちょっとおさらい。

1997年のことです。大同の造林地で、モンゴリマツ(樟子松)に枯れるものがでてきた。それを中国林業部(当時)の祝光耀副部長に話したら、大同が大騒動になったんです。北京から「問題が発生しているのに、なぜ報告しない」という電話が、太原の山西省林業庁にいき、同じ内容のお叱りが、山西省林業庁から大同市林業局にきた。大同市青年連合会の祁学峰主席は、大同市林業局に3度も呼び出され、叱られた。「北京にまで問題を広げたのは、おまえたちだろう」というわけです。

祝光耀さんはその後、国家環境保護総局の副局長に異動したんですけど、先日の日中環境協力フォーラム(北京)の中国側レセプションのホストでした。もう5年もたったんですね。書いた直後に顔をあわせることになって、やっぱり「言霊の世界かな」なんて思ってます。

大同市林業局の面々とあったのは、97年7月末のことです。場所は雁北賓館の経理室。祁学峰が、「高見の軽率な行動のために、自由に活動できなくなるかもしれない」なんていうものですから、私もすこしは緊張してました。でも、もっと緊張していたのは、林業局の面々です。市の林業局だけでなく、山西省的林業庁からも、3人ほど参加していたんですよ。私にたいしても、なにか要求があるかもしれない、なんて考えてたんですけど、そんなことはいっさいなかった。

考えてみれば、そりゃそうです。祁学峰は叱られたんですけど、それはあくまで内輪だけで通じる話です。外国人で、しかも役所の論理なんかと無縁な私に、先方から問題にできることはなにもない。これ以上ことを荒だてないで納める、ということしかなかったと思うんです。

話は方向ちがいに飛びますけど、去年の大阪でのことです。地下鉄駅で、オリンピック招致運動のポスターをみて、ホントに恥ずかしかった。居酒屋のイラストです。壁に、「東京オリンピック・1964年」「札幌冬季オリンピック・〇〇年」「長野冬季……」とメニューが張り出している。そこに、「おっちゃん、オリンピックちょうだい！」というコピー。「あれはないよ！」と私がいうと、「大阪人は本音で生きてるんだよ」と友人がいました。でも、それはあくまで内輪の話で、国際的な場に通用することじゃない。

話をもとにもどします。林業局の副局長が、大同における緑化の歴史を、詳細に紹介しました。印象的だったのは、小老樹のことで、中華人民共和国が成立し、北京が首都になって、大同ではすぐに緑化の大運動がはじまりました。水源涵養と風砂防止がねらいです。植えられたのはポプラ(小葉楊)。桑干河流域を中心に、広大な面積に植えられました。最初のうちは、ひじょうによく育ったんです。60年代には、「南の湛江、北の雁北」といって、全国モデルになったそうです。雁北は、雁門関の北の意味で、大同の周囲の農村地域のことで、

そのポプラが、のちに暗転してしまいました。小さな苗のうちは水の必要量も大きくないけど、育つにしたがって増えていきます。となりどうして根が重なり、水を奪いあうようになる。早魃の年がやってくると、先端枯れをおこします。下部は生きているから、枝の1本が幹に変わって、また伸びる。そのあと早魃がくると、それもまた枯れる。そういうことを繰り返すうちに、グニャグニャに曲がった、ポプラとは思えない樹形になる。それを小老樹といいます。

そういう経験があるので、松枯れについても、かなり調査したようです。なにせ、モンゴリマツは大同だけで2万6,000ヘクタールも植えている。そして、96年から、あちこちのプロジェクトで、弱ったり、枯れたりするものがでてきている。省からきた昆虫や細菌の専門家も、あいだで小報告をいれてくれました。これだと思われるものは、発見されないそうです。

とりあえずの結論は、気象によるもの、ということでした。95年、春はものすごい早魃だったけど、8月末から長雨がつづきました。たくさんの窯洞(ヤオトン)が倒壊したのはこの年です。原産地の気候と、あまりにちがいきすぎる。その翌年から、弱るものがでてきて、一部が枯れた。広い範囲のプロジェクトで、同じ現象が一斉に発生したのも、その推測を裏付けているようです。原産地に人を派遣して、調査したいといっていました。

出席者から会場の外で聞いた話は、国の林業部と、くいちがいがあります。林業部では、「モンゴリマツは十分検証されていないのに、地元がいきなり広げた」ということだったんですけど、地元の関係者は、「ここをモンゴリマツ基地にきめたのは林業部だ」というんです。そしてその後、何度も国から表彰をうけている。だから林業部が地元で全責任を押しつけるのはおかしい、というんです。でも、話しにくそうでした。

私も短い発言をしました。毎年、100日前後は大同にいるので、「4分の1大同市民だ」といったんです。大同市青年連合会主席で、祁学峰の上司の鄧向華が、私がたくさんの農村を回っていることを話しました。カウンターパートも私も、ことを荒だてたくなかったんです。祁学峰は、この協力活動の経緯を紹介しました。

共通の経験をもっているし、課題は同じですから、親近感をもちました。私が、「並木のポプラにカミキリムシがはいったので、いま大同ではマツに植え替えている。でも、マツは大気汚染に弱い。石炭輸送の大型トレーラーが黒煙をまき散らすようなところにはムリだろう」とい

うと、林業局の技術者たちは、わかっているようで、「北京の毛主席記念堂のマツは、毎年のように植え替えている」と話し、「それでも、冬でも青いものがほしい、という要求がある」と答えました。「枯れてしまったら、夏だって青くないでしょう」と私がいうと、みんな苦笑い。

この話の発端の遇駕山で、こんなことがありました。マツのなかにヤナギハグミが混植されているところは、被害がすくない。小老樹のポプラとマツが混植されているところは、枯れるものはないし、マツの生育もいい。それをみながら、小川眞さんが、「教科書みたいですね」といったんです。

その話を私がすると、林業局の技術者から、「混植の効果を意図して、そのように植えた」という回答がありました。私は人が悪いから、「効果があがっているのに、その後、なぜそのようにしないのか？」と、しつこくききました。答えに困ってしまったんですね。でてきた回答は「予算がたりないから……」というものだった。そういう問題もやはりあるでしょう。〇〇を××ヘクタール植える、という予算はついても、なにかを実験する、といったことはややこしい。日本もおなじです。

そんな話をつみあげて、やっと和んだところに、山西省林業庁の副庁長が入ってきたんです。女性です。とても硬い表情だった。その場の雰囲気、一瞬に冷え、最初のところにもどってしまった。

私はとっさに、「美人をみると、私なんか緊張してしまいますね」といいました。通訳は北京の王黎傑さんです。すぐあとで、彼女が私にいいました。「高見さんは、いつから女性をほめることができるようになったの？」「いや、あの表情ではいってこられると、ぶちこわしだから、カバーしたかったんだよ」と私がいうと、王黎傑は、「私はわかりましたよ。でも、そういう小細工は、ここでは通じません」というんです。たしかに効果は乏しかった。でも、ホントに美人だったんですよ。

よけいなことばかり書くから、また結果にいきつけなかった。でも、このときの騒動は、あとにいい結果を残したんです。しんぼうして、もう1回、つきあってください。

## NO. 180 松枯れ騒動の顛末(3) 2002. 10. 23

5年前のことで、あっ軽く書いてますけど、当時は必死でした。モンゴリマツ(樟子松)の一部に枯れるものがでてきたのは、地元のプロジェクトです。見過ごすこともできたかもしれない。でも、その面積が信じがたいほど大きい。1,000ha 規模のプロジェクトが、大同県だけで3つも4つもあります。問題が深刻化したら、私の感覚では、再起不能です。

私たちのプロジェクトでも、モンゴリマツをたくさん植えてきました。場所も隣接している。被害が拡大するようだと、致命的な打撃を受けます。「騒いだほうがいいです」といったのは小川眞さんだけ、私じしんも、できることはなんでもやろうと考えました。

97年の5月初め、日本に帰ってから、関係の研究者をけんめいにさがしました。東大大学院の鈴木和夫さんは、学生寮での先輩、桜井尚武さんが紹介してくれました。陝西省安塞の研究サイトにいく途中で、大同に寄ってもらうことになりました。でも私は同行できなかった。鈴木さんは、モンゴリマツのいくつかのプロジェクトを調査してくれました。あとでもらったレポートは、気象ストレスによる生理障害を指摘するもので、「成林の可能性はある」ということでした。うれしかったですね。

そのあと、国際緑化推進センターの専門家派遣の支援で、森林総研の元所長・小林一三さんが大同にきてくれました。97年9月のことです。このときは私も同行しました。

それより少し前、中国側の専門家とも何度も接触しました。ドイツの協力プロジェクトにかかわってきた人たちです。「モンゴリマツにハダニが発生している。新種のものだ。これがマツを枯らしている」と彼らはいいます。私が、「それならサンプルがほしい」というと、「提供できない」というんですね。私なんかには理解不能くらい、そのあたりがややこしい。

小林一三さんの調査には、大同事務所にはいったばかりの楊元勝が同行しました。彼は、モンゴリマツに着いているハダニと、そのタマゴを肉眼で見つけるんです。それには驚いたんですけど、彼はドイツのプロジェクトで実習したことがあって、以前に実物をみてたんです。そうはいっても、私の目では、なにもみえなかった。

小林一三さんは、そういう情報で揺れることはありませんでした。ハダニがマツを枯らすことはないだろう。仮に虫がいたとしても、弱った木に着いたのであって、一次的な原因ではない。木が元気であれば、ヤニをだしたりして、自分を防衛する。虫が取り付くのは、弱っているからだ。というのです。なるほどね。

この松枯れ騒動で私は、専門的な研究者の必要性和、その力量を思い知らされました。そして、鈴木和夫さんも、小林一三さんも、その後、ずいぶん協力してくださった。この騒ぎの発端になった小川眞さんも森林総研が長くて、お互いに親しい関係だったんですよ。前出の桜井尚武さんもそうです。だれが絵を描いたんでもないけど、そういう関係のなかで、私は踊っていた。

そのときの松枯れ騒動は、それで治まりました。枯れたのは、育ちの悪い劣勢木で、それ以上には広がらなかった。とりあえず、ホッとしました。

中国側でも、いいことがあったんですよ。大同市青年連合会と大同市林業局とのあいだに、それまでほとんど関係がなかった。私も大同に5年以上、通ってきていたけど、林業局との接触はなかった。この騒動をきっかけに、関係が生まれたんです。チャンスを逃さず、祁学峰は、技術的な助力を林業局に求めました。

林業局長は、定年退職したばかりのベテラン技術者を推薦してくれました。侯喜です。大同事務所は、技術顧問に彼を迎えました。雁北地区と大同市の林業部門で、40年も働いた人です。ずっと現場にいました。遇駕山の造林プロジェクトにも、技術方面の責任者として、彼は参加していました。彼が大同事務所に来てくれたおかげで、プロジェクトの設計、実施と指導監督、点検などが大幅に改善されたんです。

こんなことを、いまでも覚えています。遠田宏顧問は、森林生態学が専門です。でも、本来の彼の能力を生かせる森林は、そこいらにはない。しかたがないから(だけでもないんでしょうけど)、小老樹の姿をスケッチし、年輪を解析し、根のようすを調査していた。私たちの自由になる環境林センターで、主にやってたんです。でも、もっと典型的なところで調べたかった。

大同県の倍加皂鎮で、小老樹の林にはいり、ポプラを数本、伐ったんですよ。それを、村の人にみとがめられた。寄ってきて、「なにをしている!」。いっしょにいた侯喜が、「おまえの名前は?」ときいたんですね。そして、「そうか。おまえのオヤジは〇〇〇で、おっかあは△△村からきただろ」なんていうんですよ。その男は、だまって、ひきさがった。

とにかく彼は現場につよい。生き字引です。そして、こういうしごとが好きなんですよ。カササギの森の建設をはじめたとき、彼は、現場の管理小屋に泊まり込みました。もう67歳で、しかも腕を骨折して首からつってたんですけど、スチールの2段ベッドで寝起きしたんです。カササギの森が上々のスタートを切ったのは、そのおかげです。好きでなければ、そんなことはできない。訪日研修に彼も加わって、きのう日本にきました。

でも、ふしぎですね。この活動をふりかえってみても、なにか問題が発生して、必死になっているとき、いいしごとをしているんです。逆に、順調にいつているように思えるときは、あとになって振り返ると、停滞か、新しい問題をしこんでいる時期なんです。そんなことを何度か何度くりかえすと、いいことがあっても、あまりうれしく思えないし、悪いことがあっても、あまりしょげないですむ。不感症?

数人のかたから、このテーマのものはすでに読んだ、という連絡がありました。自分でも調べ直してみると、たしかに書いていました。なんども告白するように、たいていは飲みながら書いています。つれあいが私に、よくいうんですよ。「酔っぱらってから話したことは、あくる日、なにも覚えていない」と。書いたことが、まったく記憶にありませんでした。もうしわけありません。

## NO. 181 またまた、中国の水問題 2002. 11. 11

10月22日から11月3日まで、大同のカウンターパートを日本に呼んで、研修をおこないました。関西・関東のほかに、今回はじめて、北海道大学の研究林でしっかり勉強させてもらいました。たくさんのかたにお世話になりました。ありがとうございます。

ぶざまなことに私は、成田で彼らを見送ったあと、風邪を引いて、3日ほど寝込みました。そのうえ、7月に買ったばかりのノートパソコンを、この期間になくしたんです。何年も迷って、やっとの思いで買ったのに。操作に熟達するまえに、なくしてしまった。くやしくて、くやしくて。

そういつて嘆いていると、「新しいうちで、よかったじゃないですか。使い込んで、データを貯めたあとだったら、たいへんだったでしょう」と、なぐさめてくれる先輩がありました。その一言で立ち直った私は、そうとうに単純。

話はガラッと変わります。世話人の巽良生さんがメールで知らせてくれました。水不足の天津に、黄河の水をひくことを、中国国務院(政府)が決めたというんです。新華社の発表内容は、おおざっぱにつきのようです。

天津は1997年から6年連続して旱魃にみまわれているが、ことしはとくに深刻である。水がめの潘家口ダムは貯水量1億m<sup>3</sup>(立方メートルをこう表記します)を切り、平年の10分の1もない。「生命線」である灤河も、需要をみたすことはできない。黄河からの送水は今回が7回目で、来年2月中旬まで実施する。

送水ルートは、山東省の位山水門で取水し、位臨水路を経て、衛運河から清涼江を通り、泊頭市付近で南運河に入り、九宣水門から天津市に到着する、というもの。位山水門から九宣水門までは440km。九宣水門から天津市街地までは140km。位山水門での取水量は約8億m<sup>3</sup>。天津の九宣水門に届くのは3億,5000万m<sup>3</sup>。

中国の水問題については、これまでも何回か触れてきました。中国の環境問題のなかでも、水問題はもっとも重要だと思います。大同で緑化にかかわるなかで、その重大性がわかってきました。この夏、いくらか文献に目を通し、認識が深まりました。そのサワリを紹介します。数値はすべて中国で公刊されている書物のものですが、精度を保証する力にはありません。

国連持続可能な開発委員会などの統計によると、1人あたりの水資源量は、中国は世界153国家中の121位だそうです(1997年)。また、国際人口行動の規定では、1人あたり水資源量が、

1,700m<sup>3</sup> で水ストレス (water stress)、1,000m<sup>3</sup> で欠水 (water scarcity)、500m<sup>3</sup> 未満を嚴重欠水 (absolute scarcity) と呼ぶのだそうです。中国は 1 人あたり 2,220m<sup>3</sup> ですから、余裕がありそうにみえます。

でも、それはあくまで全国平均。毎年のように氾濫する長江が象徴するように、中国南部は水がかなり豊富です。中国全体の水資源量の 80% が南部に集中しています。1 人あたり 3,481m<sup>3</sup>。日本のそれが 3,353m<sup>3</sup> ですから、日本を上回ります。耕地 1ha あたりでは 64,750m<sup>3</sup>。しかし、耕地は全国の 34.7% しかない。

それにたいして、中国の北部は、黄河の断流が象徴するように、水が乏しい。東北地方はまだましです。黄河、海河・灤河、淮河の流域がとくにひどい。1 人あたりの水資源量は 453m<sup>3</sup> です。さきほどの嚴重欠水の基準を下回るんです。耕地 1ha あたりでは 5,070m<sup>3</sup> で、南方の 8 分の 1 しかない。(この数字は、黄河が土砂を押し流すために最低必要な 200 億 m<sup>3</sup> を控除しています)。

黄河流域のなかには、源流の青海省なども含まれます。中西部の厳しい乾燥地帯も含まれる。でも、そういうところは人口が少ない。1 人あたりの水資源量となると、人口が稠密な北京・天津地区がきびしいんです。

そういった事情を頭にいれて、読み取ってほしいんですけど、黄河、海河・灤河、淮河流域には、人口の 34.7%、耕地の 39.4%、GDP の 32.4% が集中しています。発展中国のシンボルである北京・天津はもちろん、中国史にしばしば登場する中原の諸都市もここに属します。華北の穀倉地帯もここ。華北の農村は、全国の食糧生産の 40% を支えています。そういうことからいうと、耕地のない南部には水があり、耕地の多い北部には水がない。数字ばかりみていると、「南水北調もしかたがないか」なんて思えてくるから、困ったもの。

最近、日中環境協力のシンポジウムなどに呼び出されることがあります。私はもお、バカの 1 つ覚え。「北京の地下水位は平均何 m ですか、毎年の低下は何 m ですか？」そればかり質問しています。「いい質問です」「重要な問題です」という答えがあり、「帰られるまでにはかならずお返事をします」というんだけど、返ってきたことがない。

公刊された資料のなかに、こういうデータがありました。「北京・天津地区の 1980 年代初期の地表水資源は 60 億 m<sup>3</sup> だったが、現在では 50 億 m<sup>3</sup> に減少した。地下水の使用量は 70 億 m<sup>3</sup>」。地表水はきびしくなって、地下水利用がふえ、60% 近くを占めるようになっていく。本来は再生可能な資源のはずの水が決定的に不足している。さあ、この先どうなるんでしょう？

10 月初めの北京のフォーラムでは、中国側の責任者の 1 人から、「北京・天津地区、そして華北の 1 帯からは、農業を撤退させ、それによって都市の生活用水と工業用水を確保する」とい

った発言もありました。水を基準に生産性をはかると、農業は工業の70分の1だそうです。農業に勝ち目はない。でも、ほんとに、そんなことが可能でしょうか。可能だとすれば、中国の産業構造全体にかかわる大問題です。日本人の胃袋にも直結するでしょう。

読むほうも疲れるんでしょうけど、こういう文章は、書くほうも疲れます。『環境年表』のページを繰っていると、「水産業」という項目がありました。私は、つい「みず・さんぎょう」と読んでしまった。つかりすぎ……。

## NO. 182 島と大陸 2002. 11. 15

2~3年まえから大同で、「日本豆腐」なるものが食卓に並ぶようになりました。きめの細かい絹ごしのような豆腐で、プリンよりひと回り大きい。そういわれても、日本ではみたことがない。

それから「日本油菜」。油菜はアブラナじゃなくて、日本でいうところのチンゲンサイ。日本がつくのがなぜか、わからない。一般のものより、小さいのはたしか。

で、私が、「小さいものはなんでも日本なんだろ」とからみます。シャオリーベン(小日本)ということばを聞くし、「倭」の字には、小さいという意味があるんじゃないでしょうか？

中国の地図には、日本の本州だって、「本州島」と書いてあります。日本がせまい島国なのは事実。発想も、ほんとに島国的だな、と自分で思うことが少なくないんです。

そういうとき思い出すのが、『ゾウの時間ネズミの時間』(本川達雄著・中公新書)の一節。この本はとにかくおもしろい。10年前のベストセラーだけど、これくらいたってから読むのが通！おすすめします。そのなかに「島の規則」というのがあります。乱暴に要約すると、こういうことです。

大陸と島とでは、住んでいる動物のサイズにちがいがあがる。進化の過程で、島に隔離されると、大きな動物は小さくなり、小さな動物は大きくなる。島のゾウは小さくなり、ネズミは大きくなる。(その理由は、この本を読んで、考えてほしい)。

アメリカで暮らしてみると、大学の研究者なんかには抜きんでた人がいて、とてもかなわないな、と思う。ところが、学外にでると、ようすがちがう。スーパーのレジや車の修理工の対応が、あきれほどのろいし、不適切。イライラさせられる。振り返って、一般の日本人の有能さに気づかされる。

あつ、これは「島の規則」だ！島国の環境では、エリートは小さくなり、巨人と呼びうる人物はでてきにくい。逆に庶民のスケールは大きくなり、知的レベルは高い。平均的なところに、まとまっている。(要約はここまで)

中国ももちろん大陸。びっくりするような人物、大人物がいるんですよ。歴史に裏付けられた強靱な思想をもっている。もちろん、少数だけど。日本では、これからも、ちょっと期待できないでしょうね。こういう人がでてくることは。いい友だちをつくりたいなら、中国人とつきあうことを、私はすすめたい。この「黄土高原だより」、隠されたテーマはこれなんですよ。

逆に、箸にも棒にもかからない人間もいます。数も多いし、「遍天下」。一般社会のなかだけでなく、幹部のなかにもちゃんという。特定の人をさしてると思われると困ります。あくまで一般論。

こういうことがありました。渾源県の鼎城の南に北岳恒山があります。ふもとにあるのが、北魏後期創建の懸空寺。そのすぐうえに、恒山トンネルがあります。五台山、太原などに行くには、そのトンネルをくぐる。岩盤をくりぬいただけで、換気設備も照明もない。路面も凸凹で、超低速でしか走れません。ことしの夏から改修中で、まもなく竣工の予定です。

私たちのツアーが、このトンネルを抜けて、靈丘県にむかおうとしました。運悪く、トンネルのなかで渋滞がはじまりました。くわしい原因はわかりません。私たちの前を走っていた車列が、トンネルの手前で動かなくなった。それとともに、対向車線をとおってトンネルからでてくる車もなくなりました。

それをいいことに、対向車線をとおって、トンネルに突入する車がどんどんでてきたんです。驚きましたね。トンネルの反対側でも、同じことがおこるでしょう。結果として、なにが起るか。1秒も考えたら、わかるはずです。私たちのバスはトンネルのなかで動かなくなり、1kmほどの暗闇を抜けるのに、小1時間かかりました。

大同では、車の運転手はなかなかの技術者です。車の構造を理解し、日常的なメンテナンスはもちろん、ちょっとした修理を現場でできなければ、車を動かさせません。車のトラブルがじつに多い。待遇だって悪くない。日本でも、東名→名神高速ができたころ、トラック運転手の賃金は、大手企業の役員クラスと変わらなかったそうです。

その人たちが、ああいう場面で、たとえ50cmでも自分の車を前にだすことに専念する。つぎの結果については、あまり考えない。いや、そんなことまで考えていたら、自分の生きる場がなくなる。でも、バカにしちゃいけない。こういうアナーキーな活力が、社会の飛躍を促進するんです。日本ではみられなくなったけど。

長くつきあってみて、中国人はこうだ、というふうには、なかなかいえません。いい人もいれば、悪いヤツもいる。有能な人もいれば、そうでない人もいます。つきあいたい人もいれば、イヤだなと思う人もいる。それは、日本人も同じです。でも、日本人がつくる分布の幅より、中国人のそれはずっと広い。日本の私たちが中国人を理解できなくなるのは、そのためでしょう。

その中国で、もみにもまかれると、人間が変わってきます。きのうの夜、朝日新聞の鈴木暁彦さんが事務所にきてくれて、そのあと近くで飲みました。中国総局にいたころ大同にきてくれて、そのあと東京、いまは大阪経済部のデスク。中国に帰りたい、というんですよ。あの刺激に慣れちゃうと、日本の平穏では暮らせなくなるのかもしれない。

## NO. 183 大同の道路事情 2002. 11. 21

大同市の面積はおおよそ 14,210 平方 km。関西地方に重ねると、大阪府、京都府、兵庫県をあわせた面積です。その 4 区 7 県の全体に、延べ 150 ほどの協力プロジェクトが分散していますから、移動がたいへん。たよるのは道路。

まずは北京から大同までの高速道路。ほぼ完成し、供用されてるんですけど、官庁ダムにかかる橋がまだです。サンタナなどの乗用車でとばせば、空港から大同まで 4 時間半。ネックは、官庁ダムを迂回する地道。距離は 40km ほどで、順調なら 1 時間ですが、ときに大渋滞がある。9 月末に経団連自然保護協議会のミッションがきたときのこと。フジテレビの取材クルーは、夜 9 時に北京を出発して、大同に到着したのは翌朝 10 時。大型トラックなどで大渋滞していたそうです。官庁ダムの橋もまもなく完成するそうですが、それまでは安心できない。

中国は中央集権ですから、国道も北京を始点に放射状に伸びるのがメイン。大同の南部、靈丘県を東西に横切るのが、国道 108 号線です。太原(山西省)、西安(陝西省)、成都(四川省)をへて、終点は昆明(雲南省)で、延長は 3,230km。大同の北部には国道 109 号線がとおっていて、大同までのかなりの部分は先の高速道路と平行しています。そのあと、銀川(寧夏回族自治区)、蘭州(甘肅省)、西寧(青海省)などをへて、終点はチベットのラサ(拉薩)、総延長は 3,890km もあります。通過する都市名、延長のキロ数で、中国の広さがわかります。さすがに国道で、だいたいにおいて、よく管理されています。

だいたいにおいて、と留保をつけたのは、例外もあるからです。国道といっても、管理は地元がするようですね。「金の切れ目が道路の切れ目」なんて私はいうんですけど、裕福なところとそうでないところで、道路の状態が大きくちがいます。河北省から山西省にはいるところで、ガクッと悪くなる。大同から内蒙古にはいったとたんに、よくなる。山西省は貧乏なんだな、と思います。「いや、そうじゃない。金より人だ」といわれたら、反論の材料を私はもちあわせ

ない。

県城(県政府の所在地)と県城を結ぶ省道クラスもよくなりました。この協力活動の初期はひどかったんですよ。大同から渾源までは 80km ほどですけど、その途中で難所が何か所もあった。地形的に低いところですよ。周囲は塩害地になっている。道路の下を伏流水が通ってるようです。基礎からちゃんとしてあげればいいんですけど、たいていはテンプラ舗装。積載オーバーの石炭トレーラーが、ガンガン通りますから、たちまち舗装が壊れる。するとたちまち泥んこのグチャグチャになります。そのたびに、ツアーのメンバーはバスをおり、うしろから押す。それが名物だったんですけど、最近は少なくなった。

でもまだ、工事はしょっちゅうある。舗装のやりかえでも、車を通行させながら、片側車線ずつ、工事をする習慣がない。全面でいっせいはじめる。しかも予告がない。現場に行くまではわからないのがふつう。しかたがないから、車は、道路脇の畑のなかに迂回路をつくる。農民はかわいそうです。なかにはシッカリものがいて、「10 元ださなければ、絶対に通さない」といって、車の前に立ちほだかる。タフな小武が、しかたなしにお金を払ったことがあります。

また橋が恐ろしい。手前に、土を盛り上げて、交通止めがしてある。橋のまんなか、ズボッと穴があいたり、橋桁が落ちたりしてるんですね。1998 年の長江の洪水で、現場を訪れた朱鎔基総理が、あまりにいいかげんな堤防を、「オカラ工事」と罵ってから、それが流行語になりました。その実例がどこにでもあったからでしょうね。

私たちの活動の悩みの 1 つが、移動に時間がかかることです。とくに自然植物園は、靈丘県のいちばん南で、大同から最低 5~6 時間もかかります。高速道路が全面開通したら、相対的に、北京の 2 倍も遠くなる。そしたら、ことしの夏、大同—渾源—広靈—靈丘を環状にむすぶ道路を整備する、という発表がありました。山東省の威海と内蒙古の烏海をむすぶ道路が、靈丘—広靈—渾源—大同を通過する、という新聞記事もありました。完成すると、便利になるでしょうね。「これ以上、車をふやしてどうするんだ」といいながら、自分たちが便利になることには、抵抗できない。勝手なものです。

道路なんかの建設は、日本よりはるかに速いんです。日本では「計画 10 年、反対 10 年、買収 10 年、建設 10 年」なんていうでしょ。中国は乱暴で、いきなり住民を追い払うことまである。広靈、靈丘などの環状道路の完成予定は 2005 年だそうです。でも、単純には喜べない。完成までの工事期間は、最悪の交通事情でしょう。

県城から、郷・鎮の中心までの道路は、いちおうは舗装してあります。でも、質はずっと落ちる。日本でも、「ソロバン道路」ってのがあったでしょ。テンプラ舗装のうえを車が通れば、弱いところが凹んでいきます。凸凹で車が跳ねる。落ちたところの道路がまた凹む。その間隔と車の車軸のあいだが一致して、共振をはじめ、走っているうちに、しだいにジャンプが大き

くなる。ソロバンみたいに、路面が規則的に波打つんです。

農村の道路は、たいていは未舗装。交通は天候しだい。黄土は、固まっているときはカチンカチンで、スコップの歯もたちにくい。スキやクワでいったん砕かれると、パウダーになります。ちょっとでも水がはいると、こんどはグリス。そんななかに車がいりこむと、車輪がすべって動けなくなります。

知らないあいだは、私も勇敢だったんですよ。1993年のある夕方、大同県の皇城から、徐町郷にむかおうとした。途中で雨になったんです。運転手は、「ムリだ。引き返そう」といったんだけど、私は前進を主張。ところが、車が2mほども、滑り始めたんですよ。まっ暗ななかで、左右に。場所によっては、ふかい浸食谷が口をあけてるでしょ。しかたなしに、引き返しました。そういう経験をするうちに、絶対にムリをしないようになったんです。

少々の雨なら、谷の底のほうが安心です。たいていは砂利が混じっていて、タイヤがすべらないし、沈むことも少ない。ツアーの人たちが「ここは川なんですか？道なんですか？」なんてきくから、「雨で水が流れるときは川です。車が通るときは道路です」と答えます。

## NO. 184 大同の道路事情(2) 2002. 11. 26

前号を送ったすぐあと、北京の友人が、「朝のテレビで、高速道路全面開通のニュースをやっていた」と知らせてくれました。これで北京―大同は、車で3~4時間です。私たちの活動にとって、いろいろ便利になると思います。でも、冬の時期は、雪が降ったり、凍ったりします。明日から、北京と大同にでかけますが、今回は列車にしましょう。もう1回、道路事情をつづけます。

以前は、大同のたいていの道路は、石炭トレーラーが列をなしていました。どれもこれも過積載です。荷台の枠いっぱい、もちろん石炭を積み込みます。枠から上にも、石炭の大きな固まりをつかって、外回りをレンガ積みのように固めます。芸術的といっているくらい。その内側にも、もちろん石炭を詰める。シートなんか、かけはしない。

積載量30tのトレーラーに、60tも80tも積んだそうです。そのためにテンブラ舗装の道路はすぐ壊れます。あちこちに凹んだところや、段差ができる。さきほどのトレーラーがさしかかると、荷台が大揺れして、石炭が転げ落ちます。それを待っている人がいるんですね。麻袋をぶらさげて。一家の燃料分くらいはすぐに集まったでしょう。生業にする人もいたと思います。私は「小さな炭鉱」と名づけました。

もっとすごいのは、先端にカギをつけた竿をもっている男たちです。交差点付近に出没しま

す。信号待ちなんかでトレーラーが止まると、そのカギで石炭を引き落とす。いつも数人のグループです。運転手は気づいても、見て見ぬふりをしている。こうなると、りっぱな犯罪でしょうけど、取り締まりがおよばない。

車の能力を超えて積みますから、トラブルはしょっちゅう。きつい坂でもないのに、登れない。機械のトラブルで動けなくなる。タイヤがパンクしてしまう。車体の下にもぐりこみ、オイルで黒く汚れた運転手。そのあとには、渋滞の長蛇の列。なんど、巻き込まれたことか。

そういうことが最近はほとんどなくなりました。石炭を積んだ車は、ほぼ例外なくシートで覆うようになりました。それよりなにより、石炭の車を一般道路ではあまり見かけなくなった。石炭の消費が減ったことも、原因の1つでしょう。それともう1つ、大同の炭鉱地帯を出発点に、雲崗石窟のうしろを通過して、張家口までの石炭専用道路が完成したことです。雲崗石窟まへの道路は、観光専用になった。

国道クラスは、しばらくのあいだに、ほんとうによくなったんですよ。大同から、陽高県・天鎮県を通過して、張家口にいたる道路は、アスファルトのテンプラ舗装ではなく、コンクリートで、全面的につくりなおされました。りっぱなものです。

でも、車の交通量はほんとに少ない。石炭専用道路が北側に平行しています。すぐ南には、北京とラサ(拉薩)を結ぶ国道109号線がある。北京-大同高速もこれと平行している。あわせて4本です。

内蒙古にいくと、広漠とした沙漠のまんなか、片側2車線のりっぱな道路が走っている。地平線までまっすぐな道路の前方に、1台の車もみえない。地平線までまっすぐな道路の後方に、1台の車もみえない。日本で「列島改造」だったことが、ここでは「大陸改造」であるようです。

農村の道路を走っていると、道端でものを売っている人がいます。だいたい夏の時期で、スイカ(西瓜)、マクワウリ(香瓜)、トウモロコシ(玉米)など。並木のポプラなんかの木陰を選んでいます。ポプラの枝をつかって、小さな小屋をつくっている人もいます。大きなスイカが1個2元、マクワウリは2つで1元といったところ。客はついてるのをみないので、1日の稼ぎがどれだけになるか、気になります。

道路わきの買い物で、感動したことがあります。養蜂の一家が巣箱を並べ、蜂蜜を売っていました。ペットボトルに分けてもらいました。なんの蜜か、わかりませんが、これがほんとに美味！香りがとてもよかったです。1日動き回ったあと、ちょっと嘗めると、疲れが消える気がしたものです。

前号で「金の切れ目が道路の切れ目」などと書きました。ほんとにそうなんです。このところ渾源の道路がよくないな、と思っていたんです。あちこちで舗装が破れ、グチャグチャになるところが目立った。渾源県は、大同の7つの県のなかでは、景気がいいほう。県を脱して、市に昇格する、そういう申請をしていました。県城で、それをアピールする看板をみました。ところが、また貧困県に逆戻りした、という話を耳にしました。

道路管理の良し悪しと、政治や幹部の良し悪しを、結びつけることがしばしばです。「△△△が県長になってから、道路が急に悪くなった」というふうです。「この県の道路はどうだ？」なんて、私も聞かれることがあります。それは道路のことだけでなく、県の幹部の評価も含むようです。そういう危険は、避けるにしくはない。

どこの県長も、そういうふうにみられているのは、承知のはずです。なにをおいても、道路には気をつけているはず。それでも、きちんと管理できないのは、能力を問われてもしかたがないか。

#### NO. 185 観察されていた私たち 2002. 12. 06

11月27日から12月5日まで中国でした。今回は、大同は3日間だけ。北京の4日間で、話す機会を4回与えられました。大使館が関係する農村女性リーダーのワークショップで、中国の環境問題について話しました。みんなとても熱心で、感心しました。JICA中国事務所創立20周年の記念シンポジウムにパネリストとして参加しました。会場は人民大会堂常務委員会会議室。私なんかに白羽の矢がたったのが、いまでもわからない。3つめは北京環境ボランティアネットワークの講演会。毎年12月に招かれ、ことしで3回目ですが、150人からの参加者でびっくり。そして日本人学校。小学6年生から中学3年までの100人ちょっと。90分もぶっつづけで話したのに、よくきいてくれて、質問も活発だった。北京でのことは、またの機会に書くことにします。

この協力活動の初期にであった人で、忘れがたい人が何人かいます。当時、渾源県の林業局長だった温増玉は、その筆頭です。92年と93年の秋、渾源に滞在したとき、私は毎朝、彼の家を訪ねて、朝食をごちそうになりました。アワとジャガイモが主食で、ハクサイのつけものがつくくらいでした。つれあいの郭おばさんにも、とてもよくしてもらいました。その事情は『黄土高原だより』のNO. 101に書きました。その後、郭おばさんが脳溢血で倒れたので、心配していました。

老温を訪ねようと思ったのは、あの当時、彼がどのような気持ちで私を受け入れてくれたか、きいてみたかったからです。事前に連絡をしてあったので、家のまえで郭おばさんが待ってい

ました。左半身が多少、不自由なようですが、杖もつかないで、自分で歩くことができます。安心しました。ちょっと太ったようですが、口を開くと、以前の調子と変わりません。方言がきつくて、いまもほとんど聞き取れないのですが……。

私の質問に老温が答えます。「高見のことを、とても人格がいいと思った。あるとき、乾糧(ビスケットやパンのようなもの)と水だけをもって、いっしょに山の奥にはいった。途中の道でまどって、県城に帰ったら、食堂はみんな閉まっていた。しかたがないので、自分の家につれてきたんだけど、口にあわないものもあるだろうに、うれしそうにみんな食べたんだ。それからだね。毎朝、私の家に顔をだすようになったのは。

この県には、日本軍に殺されたり、荒らされたりした村がたくさんある。そういうところにいくと、高見はほんとにすまなさそうにしているんだ。彼に責任のあることじゃないけど、日本人として、受け止めようとしていることがよくわかった。犠牲者の子孫のために、自分にできることをしたいという気持ちをもっている。

とにかく熱心なんだね。山を回っているときも、その海拔が何メートルで、降水量がどれくらいで、生えている木はなんだ、というようなことを、くわしくきいてくる。土をさわってみたり。夜、帰ってからも、また検討し、記録したんだろうね。翌日になって、抜けてるところを、ききなおしてくる。とても熱心だし、科学的な態度が身につけていると思った」。

自分で書くのは、どうにも照れくさい話ですけど、老温の見方ですから、そのまま書いておきましょう。そのあと老温は、「高見にわびなければいけないことがある」というんですよ。そんなことがあったかな？思い出せない。

「1992年1月、日本から5人が渾源にきて、恒山飯店で話し合いをもった。そのとき上から、発言にあたっては、内外区別するようにと注意を受けた。相手は日本人だから、まずいことは話すな、ということだ。それからあとは、自分の責任になったんだけど、日本人としごとをしたことはないから、気をつかったんだよ。

ここにくる目的はほんとに植林なんだろうか、ほかの目的をもってないだろうか、と。地形のことを調べたり、道路を調査したり、軍事的なことを探ったり、そういうことがないかどうか、心配したんだね。最初のうちは、プロジェクトに関係するところにしか、つれていかなかった。でも、いっしょに動いているうちに、高見の目的が緑化であることがわかってきた。こういう人間は、めったにいない。いい友人になったんだ。それから案内する範囲を、しだいに広げていった」。

なるほどね。気をつけていたんですね。老温の家で朝食をごちそうになりながら、その日の予定をきいたものです。現場に行く、という答えだったら、同行させてもらいました。会議

だといわれると、しかたがないから、自分1人で動きました。その会議が多かったんですね。その昔、農民の敬遠したものが、共産党の会議、国民党の税だったそうです。でも、老温は、私をつれていくのが不都合なときは、会議だといったのかもしれない。

「2年間いっしょに活動して、最終的に判断した。高見たちがここにくる目的は、ほんとに植林なんだと。中国の環境がこれいじょう悪化したら、日本の環境もずっと悪くなる。中国の環境問題を、自分たちのこととして考えている。それを理解できた。だから94年からは、高見がみたいというところは、どこでもつれていった。恒山山脈のカラマツの自然林をみせたのは、94年だっただろ」。

そんなふうには観察されてるなんて、鈍感な私にはわかりませんでした。老温はいい人だと考えて、まわりついでにいただけなんです。それに私は呑んべです。酔っぱらうと、秘密なんて保てないで、なんでもしゃべっちゃうし、態度にあらわれちゃう。だから、スパイなんかできっこない。そんなふうは無邪気にしてたのが、結果としてよかったんですよ。

「地図がほしいといわれたのに、ない、と答えた。ほんとは1万分の1の地図があるし、航空写真もある。でも、みせることができなかった。いまでももうしわけないと思っている。そのかわりに、現場のほうは、たいていのところをみせたはずだ」。

郭お婆さんは、道路に面した小さな土間で、小商売をやっていました。酒、たばこ、酢、そういうもの売ってたんです。老温は、その商品を買ってにもちだして、友だちにふるまうんですね。「売れるのより、老温がもちだすほうが多い」と、私もいって、大笑いになったことがあります。

その店が、あるとき、電器修理の店に変わっていました。郭お婆さんが、ほかの人に貸したんです。「1か月の家賃が80元にもなる」といって、ホクホク顔でした。「えっ、それまでの店は、80元にもならなかったの？」と、私は驚いたんです。

郭お婆さんの答えがすごい。「もうけようと思って、あの店をやったわけじゃない。お客がおおいはうれしいでしょ。老温はあの性格だし。小売りで買うのより、まとめて買ったほうが安いと思って、店をやったんだよ」。いまでもこの家は、友だちがたくさん集まるんですね。

老温が最後にいいました。「あなたたちは、ほんとによくやったと思う。なにもないところからはじめて、ここまで事業を拡大し、理解してくれる人をふやしてきた。ほんとにうれしい」。

老温から、そういわれて、私もほんとにうれしかったんですよ。最初の段階で、彼に会うことがなかったら、私は、この事業をつづけることはなかったと思います。それにしても、2年間も観察されていたんですね。じっくりと。

NO. 186 西留郷再訪 2002. 12. 14

毎年 12 月に大同に行くことにしています。例年だと、最低気温はマイナス 20 度近く、最高気温も氷点下で、外での活動は不可能です。そのぶん農民もヒマですから、村を回って、話をきくことにしています。ところがことしは、北京で 4 日もとられ、大同には 3 日しかいなかった。

出発直前に、北京の日本大使館の目賀田公使から、Eメールがはいりました。草の根無償資金協力で病院を建てたいという申請が、渾源県からでていて、事情がわからないだろうか、というのです。渾源は、私たちの協力を立ち上げたところで、くわしいほうです。そう答えたら、折り返し、ファクスがきました。みて、びっくり。

場所が、西留郷西留村なんです。1992 年 1 月、私たちの最初の考察団が、最初に訪れた村です。最初のプロジェクトは、この郷につくりました。みごとに失敗しましたが。92 年の秋、私が農村調査をしたのも、ここが出发点でした。郷の林業ステーションの劉天文にあちこち案内され、彼の家に泊めてもらいました。「日本鬼子！」と呼ばれ止められたのも、この村です。

それにしても、どうして、こういう偶然が多いんでしょう。なにも渾源でなくてもいいでしょう。渾源にも郷は 20 以上あるんですから、西留郷でなくてもいいはず。中国は狭いし、人も少ないから、こういう偶然がおこるんでしょうね。なんてことを、これまで何回、口にしたか。こういうことがほんとに多いんです。遠田先生は、「いちいち驚いておれませんか。いつものことですから……」といわれるんですけどね。

目賀田さんになんと答えるにしろ、いかないわけにはいきません。渾源訪問に 1 日をあてました。县城から、党の副書記が同行しました。なつかしい道です。劉天文の家は村のはずれなんです。窓の外に注意してたら、なんと顔見知り、それぞれの門口に立っている！

あわてて車を止めたら、劉天文が駆け寄ってきた。どちらからともなく、抱きあったんですね。私にくるときいて、寒いなかを待っていてくれたんです。

郷政府にいき、郷長の部屋で説明を受けました。レンガづくりの窯洞です。この窯洞は、私たちが建てたものです。ツアーの人たちを、農村に泊めたいと考えて、94 年に建てました。そのころは 10 人集めるのもたいへんだったから、4 室で十分だと思ったんです。直後から参加者がふえ、30~40 人にもなるから、役に立たなくなった。ホームステイのほうがもっといいし。

郷政府のそばに「西留衛生院」がありました。50 年代に建てられたもので、もうボロボロ。

お医者さんが5人いて、うち1人が専門学校卒。あとの4人は、初等専門学校卒。高校級の専門学校です。つかえる診察器具は、聴診器だけ。風邪と腹痛くらいしか、対応できないそうです。

ちょうど男の子が腹痛できてたんです。治療しているところを写真に撮ろうとしたら、お医者さんがあわててとなりの部屋にいきました。白衣をひっぱりだしてきたんです。なるほど、白衣を着ると、お医者さんにみえる。

劉天文が思い出したんですよ。この郷に泊まっているとき、私が風邪をひいたんです。彼の兄が「はだしの医者」をしているというので、鍼灸の治療をたのもうとした。すると、「曇りの日は鍼灸はできない」といってことわられた。しかたがないから、县城まで帰ったんですよ。う〜ん、病院というのは、ひとごとじゃないな。

渾源県は一時期、羽振りがよかったんです。県を脱して、市になりたいと、申請をしました。ところが、また貧困県にもどった、という話をききました。副書記にたしかめると、いまは「扶貧重点県」というんだそうです。それが山西省には35県ある。山西省には118の県(市・区)があり、そのなかの35ですから、省全体が貧乏なんです。そのうちの5つを大同が占める。

扶貧重点県になって、国の投資が増えたそうです。まずは道路建設。景気刺激が、公共投資で、道路。同じ構造ですね。西留郷のまんなかを、応県に抜ける省道が通るそうです。来年の着工。それから、山東省の威海と、内蒙古の烏海をむすぶ高速道路もこの郷を通過する。

病院の建設予定地は、省道(予定)から50mほどのところですよ。100m四方はあります。農民から請け負いの希望がでたけど、この話のためにとっておいたそう。この村は、渾源県西部の中心なんですね。だから私も、この村を足場に農村調査をやったんですけど。病院ができれば、およそ15万人が対象になる。立地条件としては申し分ないでしょう。そしてニーズはつよい。問題は、持続できるかどうかですけど、それにはいい医者がそろうかどうか。結局は人の問題ですけど、いまの段階では、そこまではわからない。

帰りに劉天文の家に寄りました。娘ふたりは、結婚して家をでました。そのころ12歳だった息子は、きょうはしごとで留守。代わりに、かわいいお嫁さんがいました。劉天文夫妻は、息子夫婦に母屋をゆずって、門のわきの小部屋に移っていました。10年というのは、そういう時間なんですね。

帰りの北京で、目賀田公使を訪ねました。私のところに話がきたときは、結論はでてたんだと思います。とくに問題がなければ、協力しようということで。村の人たちはよろこぶでしょうね。

これを機に、私たちももう1回、やりなおすのがいいかもしれない。失敗がつづいて、あのときの力量では、継続は困難だった。経験と技術を蓄積して、いまなら対応できるでしょう。それができたら、うれしいですね。長いあいだのシコリの1つがとけるわけですから。

## NO. 187 受けのケンカ 2002. 12. 18

【要約】よくケンカする私。それでも見捨てられなかったのは、ある原則をつくったからです。先に手をださない。カウンター狙いに徹したケンカです(?)

中国で、よくケンカをしたと、自分でも思います。といっても、ボディランゲージによるケンカは避けてきました。一方的にやられるに決まってる。もともと、ひとにエラそうにされるのが、きれいな人間なんです。ところが中国は、国や政府の力が強くて、というか、民の力が弱くて、私なんかは気にいらぬことが多いんです。

何年前ですけど、北京駅の入口で、「切符をみせろ！」と公安がいいながら、口より先に、私の前の農民ふうの男を蹴り上げた。カッとなったんですけど、どうしようもない。

私は中国語はしゃべれないし……。自己嫌悪におちいり、もう中国なんか2度ときたくない、そういうときは思う。

1995年夏のことです。大阪青年会議所のツアーがきたんですけど、人数が多くて、列車での移動がむずかしかった。北京-大同の飛行機をチャーターしたんです。帰りは私も便乗させてもらいました。懷仁県にあった大同空港は、もともと軍事空港です。

私のだいたいなウイスキーを没収するというんですよ。「開栓されているから、中味がなにかわからない」という。「グラスを2つ貸してくれ」と頼みました。「私が最初に1杯飲むから、あなたも自分でたしかめてくれ」と。だめだというんですよ。「じゃあ、1つでいいから貸してくれ。とられるくらいなら、ここで飲んでしまう」といったんです。

そのときは王黎傑が通訳してくれました。彼女が通訳のときしか、こういうケンカはできなかったんです。そのときも「この男は言い出したら、あとには退かない」と彼女がつけ加えたんですよ。そしたら、ウイスキーは私のもとに帰ってきた。返されたんじゃないんです。帰ってきた。ウイスキーだって、私に飲まれるのがうれしいに決まってる。

私のみるところ、中国人の多くは、「日本人は弱いものには強い。強いものには弱い」と思っているようです。そういう傾向はどこのだれにもあるでしょうけど、日本人はとくにそうだと思われている。それが誤解でないのが悲しいですね。「強きを挫き、弱きを助ける」なんてのは、日本国内でも死語になってしまった。だから最初にガツンとくる。

北京空港から国内線の飛行機で上海にむかおうとしたら、「あなたの席はキャンセルされている」と、チェックイン・カウンターで、高飛車にいわれたんです。私がキャンセルしたんじゃないんですよ。オーバーブッキングのせいともかぎらない。エライさんの急な出張が決まったり、関係の深い人から裏口で頼まれたりすると、だれかがイケニエにされるんです。そういう場面にであったことは、それまでに何回もある。

カタコトの中国語で応対したりしたら、ろくなことになりません。やっぱり大阪弁です。カウンターをたたいて、抗議する。すると日本語のできる人間がむこうからでてきて応対するから、ずっと優位に立てる。外国語なんて、話せるのがいいとはかぎらないんです。

ケンカをそそのかすわけではありませんよ。日本国内でケンカをしたことのない人が、いきなり外国でやって、うまくいくはずがないんです。国内でやれないことを、国外でできるはずがない。

それに、そういうケンカは、本質的なものではありません。必要なケンカは、目的のあるものです。たとえば、アンズの苗を植えるときに、苗を植えたあと、水をかけ、農民たちは周囲の土を踏み固めるわけですよ。立花吉茂さんは、「それだと日干しレンガに植えるようなもので、根が窒息して枯れるんだ」といわれました。

でも彼らは、ずっとそのように植えてきて習慣になっているし、技術者もそのように指導してきた。こちらがちょっと話したくらいで、変わるはずがない。無意識のうちに、足が動いてしまうんです。

そういうとき私は、「さあ、しっかり力をこめて、踏んでください。思いっきり。ただし、苗木から50cm以上離れたところを！」なんていうんですね。みんなワーッと笑って、こちらの話が伝わっていく。印象にも残るんです。「高見さん、うまいな」といって、そういうときだけ立花さんがほめてくれるんですけど。

技術者たちは、固く土をふむように、農民を指導してきたんです。自分でもそう信じてたんです。農民たちの前で、その技術者たちのメンツを丸つぶれにしたのでは、これから誰に依拠して、しごとをしたらいいんですか。そこのところを考えなくてはならない。

それから、日本の専門家や技術者から、いろんな改善意見が出されます。ありがたいんですけど、それをすぐに実行したり、中国側に提案するとはかぎりません。まず、自然の条件がらがうから、そのまま役にたたないことも少なくありません。どこかでこっそり実験してみて、うまくいくようだったら、それからです。

社会のしくみにも、正反対とっていいちがいがあります。日本のばあいは、資本が豊富で、生産過剰で、工業製品が安く、人件費が高い。なにをするにも、要求のレベルが高いんです。大同の農村だと、それとは逆に、資本が乏しくて、ものが不足していて、工業製品が割高で、人件費が安い。日本のばあいは、設備をつくって、労働力を省く技術が多いんですけど、ここでは役にたたない。

人の雇用は、増やしたほうがいいんです。ワークシェアリング。いまの日本でも、そのほうがいいに決まってるけど、それができない。日本社会の、むしろ大きな欠陥でしょう。また、日本の基準をここに適用したら、オーパースペックになり、経費その他のムダになります。

ほんとの専門家や、熟達したリーダーは、総合的に検討し、適切なやり方を提案するんですけど、そういう能力を私に望まれてもムリ。

どうするかというと、ジーンと待ちます。地元の人たちのやり方で、それなりの成果があがるんだったら、口をだす必要がない。日本のやり方をもちこんで、活着率を10パーセントあげることができても、資材や手間をつかうんだったら、意味がない。枯れたところを、翌年、補植すればすむ話です。

なにかで失敗したとき、このときがチャンスなんですね。できるだけ根本から考えて、いい方向に変革する、といったことを追求するんです。あれこれの技術改善なども、そのときにまとめて試します。失敗したとき、人間は自分を反省し、考えようと思えますから、そういうときに、いっしょに考えるのがいい。失敗をぬけだす可能性は、たくさんあるほど、先方からも歓迎されます。

また、そういうとき、いっしょに失敗するのがだいじなことだと思います。失敗の経験を共有すると、成功の共有以上に、連帯感が深まります。ことばは悪いけど、「共犯意識」のようなもの。そういうせっかくの機会に、「失敗したのはあなたたちで、私は関係ない」という顔をしたら、信頼関係は深まらないんです。

受けのケンカに徹すること。それがだいじだと思います。

## NO. 188 作物 2002. 12. 24

【要旨】半乾燥地の大同では、畑の作物にとっても最大の制約要因は水。水と土の状態で、作物の種類が一変します。黄土高原だよりも欠けがちだった、そのあたりの情報。

1992年9月下旬、渾源县西留郷について私に、案内役の劉天文は、「トウモロコシやコウリ

ヤンをつくっているのがいい畑だ」といいました。「畑」という字は日本製の和字で、中国にはありません。むこうの農村では「土地」もしくは「田」ですが、「田」は日本では水田ですから、「畑」をつかいます。その時期は収穫期の終わりで、意味はわかりませんでした。

94年、初めて夏にあって、実感できました。まれにみる豊作の年だったんです。高いところに立つと、畑の緑を一望できます。その緑が一様でない。グラデーションがかかっているんです。

下のほうの畑は、緑が濃い。水と土に恵まれた盆地です。海拔にしたら1,000~1,100mくらい。ここに植えられているのが、トウモロコシ(玉米)、コーリヤン(高粱)など、背の高い作物。トウモロコシは、食味の面では歓迎されませんが、収量が多いので、可能なところは優先的に植えます。

コーリヤンは食べることはまずなく、もっぱら酒に加工します。白酒の主原料。でも、畑で栽培されているのを、大同ではみなくなりました。ビール党が増え、白酒を飲まなくなったから、というわけじゃないでしょう。2001年、久しぶりに新栄区でみたんですけど、旱魃のために、腰ぐらいしか丈がなかった。これじゃあ、高粱じゃなく、低粱だな、なんていったものです。

ちょっと上の村でも、トウモロコシをつくります。1,200mを超えたら、灌漑は不可能なので、丈は低く、収量も減ります。ここらの中心は、アワ(穀子、小米)、キビ(黍子、黄米)、ジャガイモ(土豆、山薬)です。マメもつくり、主としてリョクトウ(緑豆)です。盆地に比べると、見た目の緑が薄くなります。

農家の主食は、アワとジャガイモが多いのです。アワは薄いおかゆにします。おかゆというより、おもゆといったところ。食べるではなく、飲むです。緑豆をいれたアワのおかゆは、暑気あたりにいいそうで、夏の食卓の定番。ジャガイモを蒸してつぶし、それとアワをあわせたものも、かゆといいます。温増玉さんの家では、ほぼ交互に食べていました。

広霊県には、アワの特産地があります。郷のなまえを忘れましたが、そこでしかできないというのです。なまえは「東方亮」。大同市内でも売っていますが、ニセモノが多い。とてもおいしいので、北京からも産地に買いにくるそう。広霊にいくと、その機会におみやげに買います。きれいな黄色で、煮えるのも早いそう。アワの味は、私にはわかりません。

キビは粉にひいたものを、お湯で練り、モチ(糕・ガオ)にします。他の副食といっしょに、そのまま食べますが、あんこをいれて、油で揚げることもある。油で揚げたものは、結婚式などのお祝いと、上等のお客がきたときだけ、食卓にならべるそうです。高(ガオ)と同音で、縁起をかついでいる面もある。

栽培していないものも書いておきましょう。1万4,200平方キロの大同等、コメの栽培は、霊丘県の唐河の河川敷で微々たるもの。ない、といって差し支えない。温度や日照時間に問題はなくても、水がない。農村では、食べることもほとんどありません。

コムギもひじょうに少ない。96年がこの地方にはめずらしい豊作で、トウモロコシの価格が暴落したそうです。あくる97年、あちこちの畑でコムギをみましたが、この年がまたひどい早魃でした。それからまたコムギをみなくなった。

丘陵の上のほうにあがると、トウモロコシは姿を消します。あるのは、アワ、キビ、ジャガイモ、マメといったところ。水土流失がいちばん激しく、収穫も多くを期待できません。99年とか2001年のように、激しい早魃の年には、耕作を放棄しました。

海拔1,500mを越す山区では、無霜期が100日を切るので、作物が変わります。多いのがエンバク(燕麦)。ユウマイ(莜麦)です。私の故郷では、青刈りして飼料でしたが、ここでは人さまの食糧。粉にひいて、さまざまな麺に加工します。街の人はエンバクは消化が悪いといいますが、農村の人は腹持ちがよくていい、といいます。

何気なく麺と書きましたが、日本ではうどんのように細長いもののイメージ。中国では、粉にして食べるのが麺です。たとえばパンは麵包。うどんは麺条。条のほうに、細長いという意味があるわけです。ギョウザ(餃子)もマントウ(饅頭)も麺です。

ソバ(蕎麦)も生育期間の短い穀物で、大同では霊丘県で栽培します。その他の県では、みたことがない。収穫量の少ないのが敬遠されるようです。霊丘のソバは苦蕎麦で、日本のような甜蕎麦は少ない。苦蕎麦のほうが健康にいい、といいますけど、どうかな？収量は苦蕎麦が多い。

山区では、ソラマメ(蚕豆)もつくります。実は小指の頭くらいで、日本のものよりずっと小さい。春まきで、かなり密植しますので、収穫量はそこそこ。それからエンドウ(豌豆)もあります。ツルなしの小さなもので、マメを麺にして食べます。

油糧として、ヒマワリ、ナタネ、アマ(亜麻)をつくります。アマはきれいなブルーの花。山西省で胡麻といえ、アマのことでした。

大同の街中に、粗糧を売り物にしたレストランが、堂々と看板をだしました。粗糧とは、雑穀のこと。店のなかに、大書してあります。「過去は貧乏のために粗糧を食べた。現在は健康のために粗糧を食べる」。

NO. 189 隣人は選べない 2002. 12. 31

【要旨】日本と中国の協力事業の現場で、ストレスがたまっているようです。あるベテランは、「四大文明の国はみなむずかしい」といいました。中国側からみても、どうも日本とは波長があわない。どうしたらいいんでしょうね。

2002 年は国交正常化 30 年の年でした。日本と中国との関係は、このところ摩擦つづきでしたから、友好ムードを盛りあげようと、さまざまな企画がありました。私も数回、環境協力をめぐるシンポジウムなどに出席しました。たいていは北京ですけど。

そのたびに感じたのは、どうしてもっと率直に話しあえないのだろう、ということ。現場で協力をつづけてきた双方に、ストレスがたまっていることを感じるんですよ。長くつづけてきた人ほど。自分の思いをこめてきた人ほど。

ホテルのりっぱな部屋をとっていただくんですけど、もったいないですね。私はフロにはいったことがありません。たいていはだれかの部屋に、夜おそくまでおジャマして、酒を飲みながら、議論をしていました。泥酔して部屋にもどって、ベッドに転げこむだけ。

その議論のあいだ、不満が吹き出すんですよ。緑化に関係する人は、地方の農村にいてることが多いから、農村の貧しさと、北京とのあまりの格差にガマンがならない。「いったいなんだ、この国は！」なんていうんですね。酒のいきおいもあるし。「あしたは、絶対にそのことを話すぞ!」。もちろん、私の思いでもありますよ。

ところが、翌日の本番では、そういう話がでない。でたとしても、わかっているどおしで、「ああ、あのことをいってるな」という程度。相手側には伝わらないでしょう。あからさまな話を現場でしたら、やりにくくなることもあるでしょうから、こういうときこそチャンスじゃないですか。出席している中国と日本のえらい人たちにも、わかってもらいたい機会のはず。

あるとき私が、「官僚主義、形式主義と緑化は、木に竹を接ぐような話だ。いちばんの苦勞はそのことです」と話したら、同席していた日本人にさえぎられたんです。「友好に反する」とでも思われたんでしょうけど。そのあと、中国側から私にとどいたメッセージは、「高見と、もう 1 人の藤原だけが、ほんとうの話をした」というものでした。

協力現場の中国人だって、ストレスをためてるんです。ばあいによっては、日本側以上でしょうね。「どうして日本人は、相手によって、コロコロと態度を変えるんだ?」「日本人どうしてヒソヒソ話をしてるけど、いったいなにを考えてるんだ?」「手続きが煩瑣で、決まるまでに時間がかかりすぎる。経済援助といっても、必要なときにはこないで、忘れたころにやって

くる」。

あとの2つについて、すこし解説しましょう。中国人は、一般的に声が大きいんです。足音も高い。国が広いからでしょうね。日本人がふつうに話し、ふつうに歩いているのが、なにか陰謀をたくらんでいるように思えたり、ドロボウの忍び足のように感じるそうなんですよ。

この協力事業をはじめようとしたとき、中国の旧友は私に「日本人が中国の農村でそういうことをやるんだったら、『5つのあ』を忘れたらいけない」とアドバイスしてくれました。あせらず、あわてず、あてにせず、あなどらず、あきらめず、というものです。いま、これがひっくりかえった、というんですよ。中国の幹部は若返った。自信をもってしごとをしている。決度も速い。それにたいして、日本側の反応はどんどん遅くなる、というんです。おそらくそうでしょう。

ところが、シンポジウムの場合、そういう話がでてこない。中国側の発言は、「感謝、感謝、また感謝」といったところですよ。たいていは、用意された原稿を読み上げるんですけどね。中国にたいする日本の経済協力の削減は、もう既定事実で、その理由の1つが、「中国側の感謝がたりない」というもの。それにたいするリアクションでしょう。

日本人と中国人と、おかれている環境も、性格も、そうとうにちがいます。はっきりいって、あわない。とくに困るのは、つきあいが長く、接触が深まるほど、悪感情をもつことが多いですね。私なんか、中国がすきだと思われるんですけど、それは誤解ですよ。そんなにタンジュンなものじゃない。一方で、日本にくる中国人留学生なんかも、日本がきれいになるケースが少なくない。

だけど、つきあっていくしかないんですよ。「友人は選ぶことができるけれども、隣人を選ぶことはできない」といったのは夏衍さんだそうです。さすがですね。国ごと引っ越すなんてできないですからね。自分の考えや思いを率直にぶつけるなかで、相互の理解を深めることが重要だと思うんです。

ことしも残りあと数時間。年内に書いておかないと、という思いが先に立って、できがよくないと自分でも思うんですけど、送らせていただきます。みなさん、よいお年をお迎えください。

## NO. 190 大同は寒い 2003. 01. 08

【要旨】昨年12月、大同は暖かかったんです。ことしも暖冬かな、と思っていました。ところがそのあと冷え込んだようです。ことしはどんな年になるのでしょうか？

あけましておめでとうございます。正月 2 日、比叡山から大原まで歩きました。寒波の到来で、この日は雪でした。おうちゃくをして、登りは坂本からケーブルカーに乗ったんです。延暦寺の根本中堂を横目にスタートし、まずは横川中堂へ。初詣客は少なくないのですが、歩く人はまれ。東海自然歩道に足跡は 10 人もない。

根本中堂をすぎて、仰木峠にむかうと、雪が深くなりました。20cm から 30cm。足跡ひとつありません。まっさらさらで気持ちいい。

雪は音を吸収するんですね。きこえるのは、つれあいと私の、雪を踏む音だけ。リュキュ、リュキュ、リュキュ……。立ちどまると、まったくの無音。いいですねえ。なんというぜいたく！

昨年 12 月初めは大同でした。最低気温がマイナス 6~7 度で、最高気温はプラス 6~7 度もあった。あたたかいですね。祁学峰が、「お前といっしょに農村を回ったときなんか、ものすごく寒かったらう。ああいう寒い日がなくなった」といいました。

都市育ちの祁学峰は、はじめての農村で、とくに寒く感じたのでしょうか。でも、近年より寒かったのはたしか。農村の人は、そのころも、「以前はずっと寒かった。最近は寒い日がなくなった」といっていたんです。暖かくなっているんですね。

1970 年ごろにくらべ、年平均気温は 1 度上がっています。7 月の平均気温はほとんど変わっていません。年間でいちばん寒い 1 月の平均気温は 2 度上がっています。

農村でアンケートをすると、

夏が以前より暑くなった	51.6%
夏は以前より涼しい	27.8%
冬に寒い日がなくなった	77.8%
冬は以前より寒くなった	10.9%
変化はない	2.8%

けっこう正確にとらえられてるように思うんです。

たとえマイナス 10 度でも、日が照っていて、風がなければ、そんなに寒くは感じません。おそらく乾燥しているせいだと思います。老人たちも外にでて、土塀によりかかって、ひなたぼっこをしています。風がでると、とたんに寒くなります。体感的には、気温よりも、風のあるなしが大きい。

ことしもまた暖冬だな、なんて思っていたんですよ。ところが、12 月 23 日から、急に冷え込

んだようです。最高気温がマイナス 14 度から 16 度。最低気温はマイナス 27 度から 29 度。南郊区の環境林センターの観測ですけど。これくらいになると、ピリッとしてるでしょうね。

冬の寒い地方ですから、暖冬になればすごしやすい。はずなんですけど、そうとばかりいえない。暖冬がつづく、まずは虫害がふえます。暖冬でそのあと早魃だと、バッタやアブラムシが大発生します。去年は、ケムシの害もひどかった。

それから、暖冬の年は、アンズの花が早く咲くようです。おそらくサクラと同じなのでしょう。気温の積算がある数字にたつると、開花する。アンズの開花は、平年は 4 月末ですけど、2002 年は 2 週間以上も早く咲いてしまった。

そのまま暖かくなればいいんですけど、4 月末か 5 月初めに、もう 1 回、冷え込みがあります。昨年もそうでした。花が終わって、着いたばかりの小さな実が、凍って、落ちてしまったんです。そのために、昨年、アンズは不作だったんです。

「大同は寒いですよ」と私がいうと、「雪が多いんですか？」と返されるのがよくあること。日本人には、「寒い」と「雪」はセットのようです。でも、大同の平地では、雪はほとんど降りません。降ってもわずかなもので、すぐとけます。

1,500m 以上の山で、樹木のあるところは、雪が積もります。樹木がないと、風で吹き飛ばされ、太陽光でとかわされる。逆に、雪があるようなところは、樹木も育ちます。両者には、そういう関係があります。

雪があれば、樹木の苗は乾燥と寒さから保護されますし、春先の水に困らなくてすみます。農業にとってもいいことでしょう。1999 年のことでした。いつもより多めに雪が降ったんですよ。農家で、「よかったですね」といって、たしなめられました。「雪の降る年は早魃になる」というんですよ。たしかにこの年、建国いらい最悪の大早魃だった。

大同でいちばん寒いのは 1 月です。できるならこの時期は避けたいんです。ところが、急用ができて、来週にはいかないといけない。ブルブルッ。

## NO. 191 大泉山村の松林 2003. 01. 17

1980 年代半ばに、大同では何度めかの植林熱の高潮があったようです。中央政府の三北防護林～緑の長城計画の影響でしょう。三北というのは、華北・東北・西北の 3 地方を指します。沙漠化の進行から北京などを守るため、万里の長城沿いに総延長 7,000km のグリーンベルトを築く壮大な計画です。

大同市北部はその重点地域の1つであり、この時期、いくつもの植林プロジェクトが実施されました。たとえば、大同県の遇駕山プロジェクト。大部分はアブラマツで、一部にモンゴリマツを植えています。面積はおよそ1,000ha。1haあたり最低でも3,300本は植えていますので、ここだけで300万本以上。それだけのプロジェクトを、1~2年で作ったんですから、すごいもの。

20年近くたち、平均でも4m前後に育ってきました。かなり混みあってきています。生育にとって最大の制約要因は水ですから、枝打ちをしたり、間伐をしないといけない。ところが、そういった作業は、植えるのよりずっとたいへんです。しかも気の遠くなる面積と本数。間伐材がお金になればいいんですけど、それにはもうちょっと時間がかかる。

このようなプロジェクトは、整地と植栽には村人を大動員しますが、その後は、徹底した「封山育林」です。山を閉ざし、人を排除して、育ててきたわけです。いきなりそれを解禁して、枝をつかえ、間伐をしろ、といったら、結果がどうなるかわからない。そういう悩みが、できています。

陽高県大泉山村のばあいは、事情が異なります。この村のことを紹介するには、歴史に触れる必要がありますが、それはあとにまわし、とりあえずは「歴史原因により」としておきます。52世帯192人のこの村に、樹齢25年からのマツの林が、200haも残されました。この林がきちんと管理されているんですよ。

人民公社による集団化の時代には、春と秋の2回、日を決めて、いっせいに枝打ちをしたそうです。切った枝は、それぞれが燃料としてつかっていました。

80年代以降、耕地の使用権が農家ごとに分配され、農業もいわば個人経営になりました。マツの枝打ちも、各自が自分で決めて、自分でやるようになりました。時期はいまでも春と秋です。

村の幹部によると、「まめな人は多く枝打ちするし、不精ものはあまりしない」ということのようにです。枝打ちは、農民にとって、林を育てるためと同時に、生活燃料をまかなうためです。

マツの枝が燃料になるまえは、石炭を買っていました。お金のない家は、草や灌木を燃やしていたそうですが、とても足りず、寒さにふるえていました。いまではタキギは使いきれないくらいで、2冬ぶんくらい備蓄しているそうです。

現在でも夏は石炭をつかいますが、それはタキギが足りないからではないそうです。この地方の農村では、煮炊きの煙をオンドルに通し、床暖房をしています。夏にマツの枝で炊事をす

ると、オンドルが熱くなり、寝苦しくなります。火力のつよい石炭だと、燃やす時間が短く、あまり熱くならない。

枝打ちをするのは村の人だけです。経験のない人が、いいかげんなことをするのがこわい。村の人たちは林のたいせつさがわかるから、たばこの火にも気をつかうけど、他の村の人はそうとはかぎらない。過去2回、火をだしたことがあるそうです。

松葉かきは、ほかの村の人にも解禁しているそうです。松葉はアブラが多く、よく燃えます。林床には、落ち葉がほとんどないんですよ。村の幹部は山火事防止のためだといっています。マツのばあいは、土がやせているほうがいいようです。腐葉土がたまって、土が豊かになると、弱ってることが多い。松林のためには、せっせと松葉かきをしたほうがいい。

村の山であっても、木を自由に伐ることはできません。まず郷政府に届け出て、郷の林業ステーションの許可をうる。それから県の林業局に届け出て、その承認をえないといけないのだそうです。

人民公社の時代は、森林の管理は集団のしごとで、村の幹部が責任をもっていました。81年以降は、専門の護林員を2人おいています。任期は1年で、継続も可能です。主なしごとは、盗伐と山火事の防止。

マツの林には、雨期になると、キノコがでます。たいていはアマタケです。よけいなことですが、日本では最近、アマタケがみられなくなりました。私のいなかでは、以前はいちばんポピュラーだったのに、いまでは、高級。ほんとにおいしいんです。ここでもさまざまに調理して、楽しんでいるそうです。いろんな角度からみて、以前の日本の「里山」のようになりつつあるわけです。

大同は中国一の石炭産地で、農村でも石炭をつかいます。それでも焚き付けは必要。トウモロコシの芯、ヒマワリの茎、アワやキビのワラ……。こういう畑の副産物はみな、まずは家畜の飼料となり、つぎに燃料になります。村の近くに林ができ、燃料を確保できれば、それらのものを堆肥として畑にもどすことができます。

長い目でみると、もっといいこともあります。霊丘県の礪寺台村も、村の近くにアブラマツを植えました。60年代のことです。その下枝が燃料としてつかえるようになると、それよりずっと奥の山に、自然に森林が再生しました。ナラ、カエデ、シナノキ、カバノキなどの落葉広葉樹の林です。このような自然林は、人手による管理を必要としません。

マツを植え、管理するにも、村の生活と結びついているのが理想です。大泉山村は1つのモデルでしょう。1つ1つのプロジェクトは、あまり大きくないほうがいいのです。村に近いほ

うが便利です。でも、どのプロジェクトもそのようにする、というわけにはいかないのも事実です。

大泉山村の事情は、池本和夫さんが村に泊り込んでいろいろ調べてくれました。

## NO. 192 大泉山村の故事 2003. 01. 20

陽高県大白登鎮大泉山村の中心に1つの記念碑が立っており、そこにはこう刻まれています。「このような典型的な例を得たからには、広く華北・西北および水土流失問題をかかえるあらゆる地方は、これを見習って自らの問題を解決できる。それも多くの時間を必要としない。3年、5年、7年、あるいはいまま少しの時間をかければ十分である。肝要なことは、総合的な計画を立て、指導を強化することである」。

これは毛沢東のことばです。1950年代のこと。この県の指導者が、この村の緑化の経験を、「見よ、大泉山が変わったようすを」という報告書にまとめたところ、毛沢東の目にとまり、このような按語(コメント)がつけられたのでした。

発端は、日中戦争全面化の直後、1938年までさかのぼります。1人の男がこの村にたどりつき、荒れ果てた寺に住みつきました。荒れ地を耕して生計を立てていましたが、風砂や水土流失が深刻です。一念発起して、「谷坊」(谷につくった小さなため池)や「魚鱗坑」(山の斜面に魚のウロコのような浅い穴を掘る整地の方式)によって、山に木を植えはじめました。

45年にもまた1人の男がやってきて、2人は協力して、大泉山の緑化にとりくみました。ヨモギも生えなかった山に、アンズやポプラが育っていったのです。中華人民共和国の建国後、2人はこの経験を周囲に普及し、だんだんと緑を広げていきました。その経験がさきほどの報告書や毛沢東のことばにつながっていったのです。

60年代から70年代にかけて、中国では「農業は大寨に学べ」という運動がさかんでした。毛沢東の号令によるものです。大寨も、同じ山西省の太行山脈と黄土高原が接するところにあります。大同から距離にして300kmほどで、自然環境はよく似ています。そこでの問題も水土流失です。黄土丘陵の急斜面の畑を、段々畑に改造し、土壌の浸食を軽減していきました。それが刻苦奮闘、自力更生のモデルにされました。

上からの号令による運動には、形式主義の弊害があらわれました。信じられないことですが、東北地方の農村では、平坦地にわざわざ土を盛り、段々畑にしたところさえあったそうです。食糧生産が一面的に強調され、かえって生態系を破壊したところも少なくなかったようです。

私は70年代に数回、大寨を訪れ、賈来恒副隊長や鉄の娘隊の話をききました。そして農民の奮闘ぶりに、ただただ感動するだけでした。同じ時期に大寨を訪れた友人が私に、「大寨では小鳥の声がかきこえなかった」と話しました。彼は、大寨で森林が失われてしまったことを問題にしたのです。当時の私は、そのことの意味を考える能力がありませんでした。

話をもとにもどします。毛沢東のコメントが公表されてのち、大泉山村は緑化のモデルになります。都会からもたくさんの青年や労働者が押し寄せました。その宿泊のための招待所や、長期に住み着く人のために、住宅も建てられました。住宅の一部は現在、農民の住居になっていますが、地元の農家とは構造がちがうので、見分けがつかず。労働力とみたとき、彼らはあまり役にたたなかったようです。しかし、激励にはなったでしょう。めんどうもかけたでしょうけど……。

初期に植えられたのはポプラなどでしたが、のちには痩せ地につよいアブラマツが主体になりました。なにぶん水の乏しいところですから、生育は良好とはいえません。しかし、水土の保持のためには、役割をはたすでしょう。農家の生活燃料をまかなってあまりあることは、前回に書きました。そして、注意してみると、林縁に小さなマツが育ちつつあります。天然更新がはじまっているのです。

マツのほかに、ニレ、イタヤカエデ、ギョリュウ、野生のモモなどが、数はわずかですが植えられています。ムレスズメ(マメ科の灌木)も混植されています。「マツの生育は遅いので、早く緑にみえるようにムレスズメを植えた」というのが地元の意図ですが、結果としては混成林になりました。そしてこの村には、管理の方法が定着しました。

最初に報告書を書いた指導者が、その後に失脚したこともあり、この地域の緑化運動は、その後、下火になったようです。都市からきた人たちも、みな去りました。しかし、村の人たちは、毛沢東のあの評価をいまでも誇りにしています。

毛沢東が「3年、5年、7年、あるいはいまい少しの時間をかければ十分である」と書いたのは、あまりにも乱暴なことです。30年、50年、70年でも、十分とはいええないでしょう。森林を再生するには、そのような時間の尺度が必要です。

建国初期の中国の発展はめざましいものだったといえます。日本人による証言もあります。ものごとが順調に発展するとき、自信が大きくなるのは、人間の本性でしょう。ときにそれは過剰なものになります。さまざまな制約には目がむきません。

人間社会のことは、人間の力でなんとかできますが、自然はかならずしもそうではありません。人間の社会は、けっきょくのところ、自然の制約のなかにあつて、それとの共生をめざさないということでしょう。しかし、それに気づくまでには、時間がかかるようです。

## NO. 193 大同のヒツジ 2003. 01. 28

ちょっと時期が遅れてしまいましたが、ことしは未(羊)年です。中国では春節(旧正月・今年  
は2月1日)を祝いますから、あながち時期外れともいえないでしょう。大同の名物といえば、  
ヒツジの火鍋(しゃぶしゃぶ)。ツアーの人たちも、かならず一度は食べているはずで、日本  
の鍋物が冬のものであるように、寒い時期ほどおいしいのです。

以前は、中央に煙突のある専用のナベをつかっていました。燃料は木炭。熱は中央から外側  
へ伝わるので、強い火力でグラグラ煮立てても、吹きこぼれることはありません。火力を強め  
るには、煙突をたして、長くしました。

最近、木炭は灰が飛んで不衛生だといって、たいていはガスになりました。それに応じて、  
陰陽太極図のようなかたちで、中央に仕切りのはいったナベに変わりました。片方にはふつう  
のスープをいれ、片方にはトウガラシをたっぷりきかせた激辛のスープをいれます。各自がす  
きなほうを食べればよい。南方からやってきた方式です。以前を知っているものには、ちょっ  
とさびしい。

ヒツジの大部分は、放牧です。道路の両側、荒地、浸食谷の急斜面、草があるところなら  
どこでもいきます。いたるところに獣道ができていのはそのためです。収穫の終わったあと  
は、畑にいて、残っているアワやキビのわらを食べさせます。たいていは20~100頭の群れ  
です。農家が飼っているのは2~3頭ですが、専門にしている男が毎朝集めて、放牧にでるの  
です。背中にペンキで着色してあるのは、各家の目印です。

冬から春にかけて、エサが足りなくなります。旱魃の年は草が少ないので、とくに深刻です。  
ヒツジは草の根までほじくって食べます。1か所に長くとどめると、草が再生不能になるので、  
かなりのスピードで歩かせます。樹木の苗があればそれをかじります。木の皮もかじります。  
すると、ますます植生が乏しくなる。悪循環ですね。

昨年春先、内蒙古の草原をみにいきました。大同から車で3時間ほどのところ。草原  
といっても、草の芽生えるまえで、緑はほとんどありません。そこでもヒツジの放牧がおこな  
われていました。それをみて、大同事務所の面々がびっくりしました。「まるで子牛じゃないか！  
図体が、大同のヒツジにくらべ、少なくとも3倍はあるでしょう。そしてそれらのヒツジは昂  
然と頭をあげているのです。

大同のヒツジは、小さいんです。そしていつも頭を下げ、地面をみている。いつも腹を減ら  
し、草を探しているうちに、そういう姿になったのでしょうか。「私なんか、ケンカばかりして

きたから、来世は、おとなしいヒツジに生まれ変わるかもしれない。たとえヒツジに生まれるとしても、大同には生まれたくはないな」と私がいうと、みんな苦笑いします。気持ちは同じでしょう。

ヒツジのほかにヤギも放牧されます。山羊と書くように、こちらは山です。足がつよくて、岩山にも登っていける。ヤギの肉は硬くて、おいしくない。当然、値段も安い。だから、ヒツジの歩けるところでは、かならずヒツジ。ヤギはヒツジを放牧できないところにかぎります。

沙漠化と風砂の問題があまりにも深刻になったため、中国政府も対策に乗り出しました。その中心が「退耕還林・退耕還草」。急傾斜地など、条件の悪い畑の耕作をやめ、そこを森林や草地に返そうというのです。そして放牧を制限する。

大同でもいま、植林と同時に大面積に牧草を植えはじめました。その牧草をつかって、ヒツジを飼おうとしています。条件のいいところにはウシも導入するようです。放牧ではなく、囲いのなかで飼う。

あわせてヒツジの優良品種の導入がはじまりました。世界のあちこちから導入して試しているそうです。最近の地元の新聞に記事がでており、なかには生育がとても速く、1頭が600円で売れたものもあるそう。これまでのヒツジは1頭がせいぜい200元。あの内蒙古のヒツジと体格をくらべても、その開きは理解できます。

しかし、育ちがそれだけ速いということは、良質のエサを大量に必要とすることでしょう。方向としては正しいでしょうが、問題が発生するおそれは、当然あります。

環境を回復するためには、絶対に放牧を制限すべきだ、と私はいつもいいます。とくにカササギの森の奥には、麻地溝という村があり、そこのヒツジは大同中でいちばんおいしいそうです。放牧のヒツジがこないよう、きびしく要求しました。

その私が、夕食のテーブルで「おいしい、おいしい」といって、ヒツジの火鍋を食べる。「羊雑」というのは、ヒツジの内蔵で、最初にきたころは、これだけは口にできなかったのに、いまではこれがないとさびしいくらい。なんといいかげんな人間だろうと、自分でも思いますよ。

## NO. 194 東北虎 2003. 02. 05

トラに憑依された上田信さんは、一冊の本を書きました。『トラが語る中国史～エコロジカル・ヒストリーの可能性』（山川出版社、2002年）。私もいまトラについて書きますが、しかし、こちらは、いかにも浅はか、浅ましい話であって、書くことの意味もなければ、

読んでいただく価値もない。さいわいこのメルマガは無料で、つねひごろから、時間的余裕のある人だけが読者であろうと思われまので、(もちろんジョーダンです)あえて、駄文をものします。

北京—大同の高速道路が、昨年 11 月に全線開通しました。その大同インターチェンジのすぐそばに、昨年夏、「東北虎園」なるものが開園したのです。広大な土地をフェンスで囲い、東北虎を 20 頭あまり放しています。来園者は鉄格子のはまった車に乗り、窓からトラのようすをみます。

昨年 8 月、私たち一行は、南郊区党委員会を訪ねて、祁学峰にいました。彼は、ここの副書記になりました。忙しかったようで、自分で接待できない代わりに、この虎園を手配してくれました。虎園の経営は第 3 セクターといったところで、個人の出資もあるようですが、最大の出資者は南郊区政府。私たちは無料の招待客となりました。

暑いさかりの昼下がり。樹木も植えつけられていますが、なにせ、乾燥地の大同のこと。活着率は高くない。「補植にいけ」といわれても、こんなところは私だってイヤ！枯れて葉の落ちた木の根元で、トラさんは昼寝をしています。

活き餌を客に売るんですね。ニワトリが 20 元(1 元=15 円)。ウサギが〇〇元。ヒツジが 300 元くらい。ロバが……。子牛がいちばん高くて 1,000 元くらいだったかしら。

だれかがお金をはらって、ニワトリを買ったんです。もう 1 台、ジープがやってきて、私たちの乗っている車の近くで、そのニワトリを放した。近くには 2 頭のおとなのトラと、こどものトラとがいたんですけど、起き上がろうともしない。

そんなことではその後の営業にもかかわりますから、さっきのジープがトラのそばまで押しかけ、クラクションでムリヤリ起こしたんです。おとなのオスだけがだるそうに起き上がって、ニワトリを追いました。獅子は兎を追うのにも全力をつくすそうですが、このトラにはそういう真剣さはない。

ニワトリには、トラの怖さがわかるんでしょう。必死に逃げます。私たちが乗っている車の下に入り込んだ。でも、非情な人間たちは、窮鳥を助けようとはしない。車を動かして、ふたたびトラのまえにさらしたんです。ネコがネズミをいたぶるのと同じですよ。つかまえたあとも、わざと放して、逃げさせる。そしてまたつかまえる。

絶命したニワトリを、丸飲みするかと思ったら、そうじゃない。前脚でおさえておいて、口をつかって、羽毛を抜いていく。ほとんど丸はだかになってから、食べはじめ。そのあいだも、ほかの 2 頭はまったく関心をみせないで、ただ横になっていた。

管理棟まで帰ったら、生まれたばかりの子トラをみせてくれました。大同に到着するまでの段階で、妊娠していたというんですよ。母トラが授乳しようとしないので、人工乳で育てているそうです。トラノコをしっかりだけばよかったのに、私はただ写真を撮っただけ。だからことしも、お金の問題で苦勞するばかりです。

少なくとも1時間はいたと思うんですよ。そのあいだ、ほかの入園者がいなかった。親切に案内してもらったんだけど、私たちは、お金を払わない客です。開園の当座、入園料は60元だったそうです。あまりに入りが悪いので、50元に下げた。それでも入らないので、40元まで下げた、というのがそのときの段階。

玉萍妻夫は、娘をつれて、門前まできたそうですけど、入園料の高さに驚いて、はいらないで帰ったそう。雲崗石窟の拝観料が50元です。高いですよ。地元の人たちはちょっと入れない。でも、世界遺産ですからね。大同以外ではみることのできないものです。国内はもとより、世界中から人がくる。それでもってるんです。

だけど、よそからの人が大同でトラをみる必然性なんてどこにもない。地元の人にとっては、信じられないような入園料。はいるのは、私たちのような招待客ばかりだったんじゃないんでしょうか。

コストはかかりますよ。トラたちは、東北地方からのレンタルで、1頭が年間4万元だそうです。それが20頭あまり。トラは肉食ですからね。1頭のエサ代が1日100元もかかると、ききました。客がどんどんはいて、お金をだして、子牛あたりをやってくれるといいんですけど、そうはなっていない。従業員もたくさんいるけど、その賃金はどこからでるか。

1月後半に大同にいて、帰ってきたばかりですけど、地元の新聞に、入園料は1人20元になり、一家だったら何人でも60元、市内から無料の送迎バスをだし……といったことが書かれていました。そして副見出しに、「1日の入場料収入は100元ほど」とありました。有料入場者が1日5人しかいない、ということでしょうか。

大同公園に、小さな動物園が併設されています。オオカミをみたいと思って、いってきました。大同公園の入園料が1元。動物園にはいるには3元の追加。1頭ですけど、ちゃんと東北虎もいるんです。

心配ですよ。エサをもらえないトラたちが、共食いはじめないかどうか。ケンカが絶えない、という話をききました。救いは、このトラたちがレンタルだったこと。死んでしまったら、大同は返済をしないといけないでしょう。簡単には死なせられないはずですよ。

NO. 195 王萍(ワンピン) 2003. 02. 17

大同での緑化協力をはじめたあと、現地での折衝を私が担当したんですけど、私は中国語を話せません。学ぶ意志も能力もないんです。そして、「中国語を話せなかったのが、事業の成功の要因だ」なんてジマンするくらいだから、上達の可能性はゼロ。(NO. 44～46「ガオジェンの中国語」参照)

なんとか地元で通訳を養成しようと、大同側も考えたんです。最初に地元テレビ局の取材があったとき、通訳したのが、大同青年旅行社の日本語ガイド。私がなにを話しても、「中日友好のために……」と訳すんですよ。実際のしごとをすすめるうえで、いちばん困るのは、こういう友好的な通訳なんですね。話がずーっとすすんでから、おたがいが「そんなはずじゃなかった」ということになる。危ないなと思って、彼の通訳は避けるようにしたんです。

その後も、数人の通訳がきたんですけど、じっくりしなかった。私がワガママなこともあります。そして私の話はとても通訳しにくいようです。長年の友人、王黎傑が「あなたの通訳がいちばんむずかしい」というくらいです。性格がでて、話のスジがグニャグニャにねじまがる。事務所の東川さんまで、「高見さんの話はどこまでが本気で、どこからが冗談なのか、境目がはっきりしない」といいます。

だけど、それだけじゃないんです。都市の人は農村には行きたくないんですね。生活条件があまりにもちがすぎるから。ところが、このしごとは、農村にいかないことには話にならない。

1995年の春、祁学峰が1人の通訳候補をつれてきました。王萍(ワンピン)です。本職は看護婦さんで、5年ほどまえ、日本の埼玉医大で1年間研修したことがあるというのです。でも、私と会ったときは、日本語をすっかり忘れていました。「ええ～、これでなんとかなるの～？私が日本語の先生になるのかな」なんて思ったくらいです。

最初の1回目こそ、彼女は緊張してましたけど、つぎにあったときからは、なにをみても、なにをきいても、コロコロコロ笑い転げる。丸顔がいつそう丸くなります。私は本来、こういう性格のいい人がきらいで、どちらかという、毒のある人間がすきなんです。ところがこの王萍は例外。

そのころは、環境林センターとか、カササギの森とか、植物園とか、そういう拠点がなかったんですよ。腰を落ち着ける場所がない。夜行列車で大同に到着すると、どこかで朝食をとり、すぐに協力プロジェクトのある農村にむかいます。祁学峰と王萍と運転手の張徳、私です。毎日、毎日、農村を転々として、家に泊まることも多かったです。

最初に農村にいったとき、王萍は、こどもをみつけては、年齢をきいてましたよ。そして私のところにきて、「タカミさん、村の子は、年齢のわりにずっと小さいですよ。私の娘より2歳も大きい子が、身長は私の娘より小さいんです。どうしてですか？」ときく。

それから天鎮県の李二烟村にいったときは、浸食谷の底の湧き水を見て、「タカミさん、こんな水を飲んでもだいじょうぶですか？」ときいてくる。村の人は、「この村の泉はどんな旱魃の年にも涸れたことがない」なんてジマンするんだけど、じっさいは、小さな水たまりで、その水は、ゾウキンの絞り汁のような色をしているんですよ。

そのたびに私は、「そんなことを私に聞くな！あんたのしごとはなんなんだ！」。遠田先生はやさしいから、「だいじょうぶですよ。ポーフラが生きてますから」なんて答えるんですけどね。王萍のしごとは、大同市第4病院、つまり伝染病病院の看護婦さん。その後、えらくなって、150人の部下をもつ看護婦長さんです。

余談ですけど、そのあと彼女が職場にでて、農村の見聞を話しても、同僚の医者や看護婦は、それが現実だと信じてくれないというんです。市街地からほんの数キロ離れたら、そんな農村が広がっているんですよ。でも、街の人の生活と意識のなかでの農村との距離は、ずっと遠い。

王萍はがんばりやですからね。その後、急速に日本語が回復しました。タイミングもよかったですよ。加藤純子さんというかたが、シルバーボランティアで大同にいかれて、日本語を教えられることになったんです。王萍はそこで学びました。おそらく優等生だったでしょう。必要性も差し迫っていましたし……。

立花さん、遠田さんなど、植物の専門家が大同に通うようになると、通訳の内容もずっとむずかしくなりました。いっしょに現場を回りながら、王萍は、ことばと実体、そして技術を同時に習得していきました。

ある年の春、王萍がカメラマンの橋本さんと現場を回り、李二烟村の植林をみてきたんですけど、「タカミさん、あそこのマツは着きませんよ。植えてる場所も、苗の大きさもデタラメです」といったんです。そのとおりでした。でも、これは王萍がえらいというより、この県の林業局の技術者が、あまりにもデタラメだった。

いっしょに活動をつづけて、まる2年もたってからです。私がなにかにサインするのを、横で王萍がみていて、「えっ、タカミさんって、そういうふうを書くんですか？」っていったんですよ。どう書くと思っていたんでしょうね？まあ、「高見」は、中国では「すばらしい意見だ！」という意味。イメージが私に重ならなかったのはムリもない。

あるとき、霊丘県にむかう車のなかで、中央の指導者のことが話題になったんですよ。王萍が話に割り込んできたのはいいんですけど、いきなりボケをかました。「いま胡耀邦はどういうしごとをしてるんでしょうね？」と。胡耀邦の死去が、89年の天安門事件の契機になったんですよ。これくらい政治にうといことも、善良に生きることの必要条件かもしれません。

## NO. 196 もっと水をつかおう！ 2003. 02. 26

ことし3月に、京都・滋賀・大阪で世界水フォーラムが開催されます。そのせいなんですよけど、昨年後半から、本業の「木」をさしおいて、「水」について、書いたり、話したりが多いんです。それがつづくと、緑化について話すはずだったのに、いつのまにか「水」の話に脱線してる、なんてこともできます。

この1月、急用で2週間ほど、大同にいきました。私は見落とししたのですが、地元テレビが、大同の水問題について報道したそうです。友人たちがメモをとって、あとで話してくれました。大同は、中国の「十大欠水都市」の1つだそうです。農村部を含めた全市の、1人1年の水資源量は430立方m。市区にかざると、221立方mだそうです。

国際人口行動の指標では、1,700立方mで水ストレス、1,000立方mで欠水、500立方mで嚴重欠水。大同は、嚴重欠水の指標を大きく下回るわけです。イスラエルが289立方mだそうですから、そのあたりの水準にあるとっていいでしょう。

大同の水問題については、これまでなんども書いてきました。私が大同に通いはじめてから、とくに奇数年は、旱魃の連続でした。1999年が「建国いらい最悪の旱魃」で、2001年は「100年に1度の旱魃」といわれていました。河川という河川、ダムというダムが干上がったんです。

地下水にたよるしかないんですね。飲み水だけでなく、農業灌漑につかっています。その結果が、急激な地下水位の低下です。ちょっとまえに大同の新聞は、「2008年には完全に涸渇する」と書きましたし、先日のテレビは、「2010年には水がなくなる」と放送したそうです。最近では、市街地からだいぶ離れた大同県の農村に井戸を掘り、パイプで市街地まで運ぶ、ということもやっています。

大同は北京・天津の水源地なんですね。大同の中央部を西から東に横切る桑干河は、河北省にはいて、官庁ダムに注ぐんです。この官庁ダムと密雲ダムが、2つしかない北京の水源地です。ところが、官庁ダムは水量が激減し、水質が悪化して、98年以降は、上水道につかえなくなったそうです。

桑干河で、最後に流れをみたのは、97年の夏でした。テレビ朝日の取材クルーがきたとき、

桑干河の流れで、からだを洗うヒツジの群れを撮影しました。私もその濁流をビンに汲み、「1立方mの水に44kgの土が含まれています」などと説明し、水土流失の深刻さを訴えました。それ以降、年に最低10回はこの河を渡っているのに、雨の直後を除いて、流れているのをみたことがありません。官庁ダムの話と、年が符合します。

北京・天津地区の地表水資源が、80年代は60億立方m、90年代は50億立方m、というふう  
に、急速に減っていることを、黄土高原だよりのNO.181に書きました。それには官庁ダムのマ  
イナスは、まだ反映されていないかもしれない。それに対して、地下水の利用が、70億立方m。

ワールドウォッチ研究所のレスター・ブラウンは、北京の地下水位は、99年、1年間で2.5  
メートル低下し、65年以降の低下は、59mにたつすると、レポートしています。たいへんな数  
字だと思います。私は北京で機会あるたびに、おなじ質問をくりかえしましたが、みな「とて  
も重要な問題だ」というだけで、具体的な数字はえられませんでした。

大同の農村での1人1日あたりの水使用量は、私たちのアンケート調査によると、21の村の  
平均で23.8リットル。少ない村で15.6リットルでした。公刊されている資料では、山西省の  
農村の1人1日あたりが40リットルですから、妥当な数字だと思います。

緑化ワーキングツアーは、大同の農村で、1晩はホームステイをします。東北大学の明日香  
川さんも、Jrの鴻くんと農家に泊まったんだけど、顔を洗う水をもらえなかったといっていま  
した。若い人たちが、帰ってきてから、話すんですね。「高見さん、水のたいせつさがよくわか  
りました。日本ではほんとに無駄遣いをしていました。これからは節水に努めます」。

私はいうんですよ。「いや、それは困りますよ。日本は世界でもめずらしいくらい水が豊富な  
んだから、もっと水をつかわないといけないんです」。相手はポカ〜ンとしています。すかさず  
話をつづけるんですよ。

トウモロコシやコムギを1t生産するのに、1,000tの水が必要だといわれます。食糧は水の  
かたまりです。野菜だって、もちろんそう。穀物や草を飼料につかうウシやブタの肉も、水の  
かたまりです。木材もそう。

日本は世界でもめずらしいくらい、雨が多く、水に恵まれた国です。その日本が、水のかた  
まりをどんどん輸入している。中国の北部は乾きに乾いているんですけど、そこから大量の食  
品その他を輸入しているんです。目先の経済関係からいえば、それも必要なんでしょうけど、  
こんな関係が長くつづくはずがない。

2月22日、関東 brunch の集まりで水問題について話したら、45名の参加がありました。出  
席者名簿をあとで送ってもらって、「えっ、あの人もきてたの!」。私は人の名前を覚えるのが

苦手なんですけど、顔はなおさら。ちょっと声をかけていただけるとよかったですけど……。ほんとにもうしわけないことです。

## NO. 197 万里の長城 2003. 03. 03

私たちの緑化協力地の大同は、山西省の最北部です。すぐ北が内蒙古自治区。ということは、大同の北部には万里の長城があるはず。地図にも、そのように表示されています。ところが、長城の手前に壁がありました。

1992年と93年の秋、1人で大同に行きました。大同市内と、大同→五台山→太原という観光の大通りを除くと、この地方の大部分は対外未開放地区でした。農村はほとんどそうです。外国人の行動はきびしく制約されていました。

92年9月に2～3か月の予定で行ったときも、先方が用意していた外国人旅行証は、たった1週間でした。対外未開放地区に行くには、ビザのほかに、これが必要だったんです。そして、行き先とルートがかなり細かく指定されています。私を受け入れた人たちも、経験がないうえに、私を疑っていますので、なかなか動きがとれないんですね。

そのときホテルでみつけた観光案内に、「宏賜堡の万里の長城が開放されている」と、書いてあったんですよ。新栄区です。「ほら、これを見て！外国人だっていけると書いてある」といいました。青年団の人たちも歴史に関心がないわけじゃないんだけど、具体的な場所はどうでもいい。「どうせ、なにもないよ」といって、いきたがらない。宏賜堡がどこかもわからない。そのころは、詳細な地図は、どこでもみつからなかった。

高彦東の同行がきました。このあたりだろうと見当をつけて、バスを下り、付近の農民にきくと、「すぐそこにある。古い長城だ」というんですよ。でも、いくら歩いて、たどりつけない。途中で、馬車をみつけて、乗せてもらったりしました。

長城にはたどりつけたんです。版築でつくられた土づくりの長城です。風化するにまかされています。大きなのろし台が2つあり、そのあいだで口が開いており、石づくりの獅子が2つ、北をむいて門をにらんでいました。でも、ここが宏賜堡かどうかはわからない。開放されている場所のあることがわかれば、こうやって大っぴらにすることができるところです。

帰りの苦行はいまでも忘れません。道路わきに立っていると、大同行きのマイクロバスがきたんです。ところが車内は満席で座れない。床にも人が座っています。すきまをみつけたのはいいんだけど、天井が低くて、まっすぐ立つことができないんです。中腰の姿勢で2時間近くも乗っていました。拷問です。足がしびれ、腰が痛くなります。ほんとにひどかった。

93年5月のツアーがきたとき、宏賜堡の長城をみてもらいました。このときは旅行社のバスでガイドがついたから、まちがないでしょう。ここも風化するままになっていたんですけど、土の壁にコマクサが咲いていました。何倍もトクをしたような気になったものです。ここは前年の秋、私がきたところではありませんでした。

新しいところにいこうと思っても、1回でスツといけることはまずありません。1回目は近くまでいき、事情のわかる人でもつかめば、それでよし、です。2回目、3回目で、目的のところに行き着ければ、御の字。そういうことが起こるのも、地元の人と私たちとで、関心の持ち方がかなりちがうですよ。

大同の人たちも、北京にいけば、八達嶺の長城にいきたいと思うでしょうよ。そこでだったら、記念写真も撮りたい。でも、大同の長城なんて、崩れかけた土のかたまりで、なにもない、と思う。私なんかからすれば、観光収入めあてに、近年に修復された八達嶺や居庸関より、風化するにまかされている大同の長城のほうが、ずっとインスピレーションがわくんですけどね。

95年には、陽高県乳頭山村にいきました。村の背後に丸い山が2つあって、そのうえにのろし台があります。それがおっばいのようにみえるんですね。村名の由来でしょう。この村は、村のまんなか長城があります。う〜ん、そうではなくて、村はもとは長城の内側にあったのに、その後、大きくなって、長城の外側にも広がったのでしょう。

長城は、山の尾根に築かれたところと、山のすそにつくられたところがあります。新栄区から東にすすみ、陽高県にはいるときは、長城は尾根を通ってきます。それが陽高県の守口堡で、山からふもとに降ります。乳頭山村は、守口堡の東にあります。乳頭山村の長城は、山のふもとにあり、長城の両側に村が広がるのが可能なんです。

山すそを東進してきた長城は、天鎮県にはいって、宣家塔郷で、ふたたび山の稜線へかけあがります。いろんなところで長城をみて思うんですけど、絵になるところは、高低差のあるところなんですね。いくらもとの形が残っていても、平たいところに延びている長城はおもしろくない。

大同でのおすすめは、陽高県守口堡でしょうか。山のうえの狼煙台に登るときは、スリルです。狼煙台のうえから、西をみれば、山の稜線に、長城がずーっと連なっているところがみえます。東をみると、長城は山のすそ野に延びていきます。地元の人、「陽高の八達嶺」と呼んでいるそうです。

大同のあたりでは、地図のうえでも、長城は二重ですけど、ほんとは二重どころではありません。何重にも何重にもなっているんですよ。だからどの県にいても、長城があります。写

真でみるだけで、実物はあまりみてないんですけど、内城のほうが、レンガが残っていたりして、形は整っているようです。もし長城に関心の強い人が大同にすれば、見どころはたくさんあります。

## NO. 198 農村のこどもたち 2003. 03. 12

この通信のなかで、農村のこどもについて書くのは、回数が多いだろうと思います。自分も農村で育って、思い入れがあるんですよ。そして、現在の日本のこどもがおかれている状況とのあまりのちがいに驚くからでもあります。

貧しい地域のこどもの写真を中国でもみる機会があるんですけど、なにかちがうと思うんですね。援助を呼びかける内容のものなんですけど。どの写真も、見下ろすような角度で撮っているから、こどもたちは上目づかいで、ものほしげで、惨めそうにみえる。そういう現実があるのを否定するわけじゃないけど、意図的にアングルをえらんで、そのように撮ることだってできるわけですよ。橋本紘二さんがあんな写真を撮るんだったら、絶対に協力することはなかったと思います。

そうとうに貧しい村にいても、こどもたちは元気なんですね。そして、好奇心でいっぱい。目を輝かせていますよ。広い世界を知ってるわけじゃないから、ほかと比較して、自分たちが貧乏だと思ってるわけでもない。周囲は似たようなものですからね。

最近、日本でよくみる風景なんですけど、小さい子が走ると、「危ないから走っちゃだめ！」といって、若いママやパパが、止めるんですね。駅のプラットホームや、交通のはげしい道路だったら、それもわかりますけど、どこででもそうなんですね。

その点、黄土高原の農村の子はすごいですよ。小学校低学年の子だって、私の目には垂直にみえるような、深さ数十mはある浸食谷の崖面を、ダーッと走り下りたりするんですね。もっと小さい子が、それを追いかけてよとしたり……。

ワーキングツアーに参加した日本人が、そういう光景をみて、びっくりしちゃって、「いいですねえ、こんなふうにごどもを育てたいですね」というから、「そのためには、数人のスペアを用意しとかなないとだめですよ」なんて私は応えるんですけどね。こどもの数が多いからといって、いらぬ子がいるわけじゃないんでしょうけど、育て方にちがいができるのは事実でしょう。そして、きょうだいが多ければ、そこにこどもの社会が成立しますからね。

中国だって、都会の子はまったくちがいますよ。計画生育で、たいていは1人っ子。それを2人の親と、4人の祖父母が囲むんですから。しかも、大人たちは、自分たちがこどものころ貧

しくて、したくてもできなかったことを、自分の子や孫に、まるごと、かなえさせようとするんです。「小皇帝」と呼ぶそうですが、まさにそのとおり。太りすぎの子、虫歯の子、近視の子、そして厚着の子がめだつんですよ。

農村の子は、学習意欲もけっこう高いんですよ。条件は悪いですけどね、そのぶんハングリ―精神がつよいんです。

霊丘県上北泉村は、ツアーの人とよくホームステイする村ですけど、もともとは耕地の乏しい、貧しい村だったんです。80年代半ばから、村の後ろの山を切り開いて、果樹をはじめたんですね。それが大当たり。県下有数の豊かな村に変わったんです。数年前までは、道路から村にはいるのに、河をジャブジャブわたらないといけなかったんですけど、りっぱな橋を自力でかけました。

こういう段階がいちばん活気があるんですね。それはすぐ、こどもにも反映されます。朝早く起きて、外にでてみると、まだ暗いうちに、こどもたちが小学校にむかうんですね。教室には明かりが点いていて、みんなで自習しているんですよ。

数年まえまでは、こどもたちに「なにになりたい？」ときくと、男の子は「兵士」と答えるのが多かったし、女の子は「学校の先生」だったんです。てっとりばやく農村からでる道が、それだったんですね。いまはこれも変わったかもしれない。

中国の若い外交官と食事をしたとき、「中国は問題ですよ。このままでは人口素質が低下します。都市の高学歴の夫婦は1人っ子で、無教養の農村でたくさんこどもが増えるんです」と彼がいうから、私は必死で怒りをおさえてたんです。

あの農村の子に機会を与えてごらんなさいよ。どんな可能性が切り開かれていくかわからないんだから。う〜ん。でも、そうやって機会をつかんだ子は、都市にでて、農村を捨てるのかもしれない。そして、自分が子をもつようになると、あの外交官と同じようなことを口にするのかもしれない。

## NO. 199 雪 2003. 03. 25

3月19日の夜、大同に到着しました。今回はあわただしい出発でした。3月17日は経団連自然保護協議会の創立10周年記念シンポジウム。パネリストとして呼んでいただきました。18日は、環境を考える経済人の会21の朝食会で、中国の水問題について報告しました。終わるとすぐに服を着替え、成田空港から北京にきたのです。遠田宏先生がいっしょです。

19日の昼ごろ、大同から車で迎えにきてくれることになっていたのですが、早朝、大同事務所の武春珍所長から、「大同は大雪(下大雪)で、10m 先も見えない。こんな大雪は10 数年来なかったことだ。高速道路はおそらく不通になるから、列車の切符も確保してもらいたい」という電話がきました。北京は、曇ってはいますが、雪なんか降っていません。大同に大雪が降るなんて、ふしぎなことです。

昼過ぎに、迎えの小魏が到着しました。「大同のあたりは大雪だったけど、宣化(張家口市)から手前は、まったく降っていなかった。大同に問い合わせたら、高速道路は通じているから、このまま車で大同にむかう」ということです。

遠田先生は、北京—大同を車で走ったことがありません。いつも列車だったのです。昨年11月に北京—大同の高速道路が開通したので、今回の自動車の旅を楽しみにしていました。でも、あいにくの天候です。北京から八達嶺までのあいだは、霧がかかっていました。せっかくの万里の長城も、ぼんやりとしかみえません。

八達嶺をすぎると、雨に変わりました。北京の天気予報は、夜は雪になる、といていましたので、天気は西から東へゆっくり移っているようです。宣化をすぎると、雨はやみ、うっすらと青空もみえます。高速道路は、華北平原から黄土高原へと登っていきます。いちばん高いところは、手元の高度計で1,200mを超えました。左右の山は、雪化粧をしています。こんな光景は、はじめてみました。しかし、道路には雪はなく、乾いているところさえあります。

大同まで3時間30分でした。舗装も悪くなく、そんなに飛ばしたようには感じられません。北京から大同まで330kmほどです。列車だと、昼間の特快で5時間半、夜行だと7時間。高速道路には問題がある、などといいながら、自分のこととなると、この快適さ、便利さを拒否できません。

大同市内にはいると、路面には雪がなく、道路わきの並木の根元にだけ、集められた雪が残っています。ゴミや煤塵のせいで、黒っぽい。それでも、雪のおかげでしょう、いつもより空気がきれいな気がします。湿度もあって、呼吸がラクです。

20日の朝も雪でした。ホテルにやってきた小武が、「また大雪だ。こんなに大きい。こんな大きな雪はほんとに久しぶりだ」といって、親指と人指し指でマルをつくってみせます。な〜んだ。大雪というのは、たくさん雪が降って積もった、という意味ではなく、雪のひとひら、ひとひらが大きかった、ということか？

彼らの話からすると、ぼたん雪だったようです。ということは、気温はそんなに低くなく、湿っぽい雪だったということでしょう。そうはいても、この日の最高気温は2度、最低気温はマイナス8度です。食事のあと、外に出てみると、雪はもう止んでいました。道路にはビ

シャビシャの雪がほんのちょっとあるだけです。

昨年の3月、大同県・陽高県・渾源県・広霊県の県境の六稜山に自然林をみにいきました。樹木のあるところは、雪が膝の下まで残っていて、なかにはいることができません。山は平地より雪が多いのです。でも、樹木のないところは、風で吹き飛ばされ、すぐに雪はなくなりません。樹木があることで、雪が保存されるのです。

春まで雪があれば、気温の上昇とともに溶けて、樹木の生長を助けます。ある厚さで雪があれば、雪の下は保温され、土の凍結を防ぎます。樹木の苗を、寒風害から守ります。樹木と雪はそのような相互関係を持ち、森林の成立に、いい条件をつくるのです。

大同で雪が降っていることを知って、私たちのあとを追いかけてくる池本和夫さんから「とても楽しみだ」と事務所に連絡があったそうです。中国では「瑞雪兆豊年」というそうです。

私もそう思っていたんです。雪が降ってくれば、春の植物生長を助けるはずです。小さなため池が、たくさんあるようなものです。そういったら、地元の農民にたしなめられました。「雪の多い年は旱魃になる」というのです。大同というところは、なにごとも、すなおにはいかないのです。

ことはどういう年になるんでしょう？1992年くらい、この地に通いだして、相対的にいい年は、94年、96年、98年、2000年でした。旱魃の年は、93年、95年、97年、99年、2001年です。なかでも、99年と2001年がひどく、それぞれ、「建国後最悪」「百年に一度」の旱魃だといわれました。奇数年には、いい年がないのです。ほんとは、こういうことを口にしたり、文字にしたりしてはいけないんですよ。ここは「言霊の世界」なんですから。

## NO. 200 ノウサギの早業 2003. 04. 01

ついフラフラ～とはじめた「黄土高原だより」が、200号になってしまいました。第1号が1999年の4月末でしたので、まもなく4年になります。平均すると、週刊に近いペースで出したことになります。いまエディターで文字数を計算すると、50万字になります。400字詰め原稿用紙で1,250枚です。

最初のうちは、いまより短くまとめていました。とりあげる問題がこみいってきて、しだいに長くなり、1回につき1,800字という自己規制をはじめたのですが、それでもおさまらなくなりました。いまでは2,400字をメドにしていますが、それすらオーバーすることがあります。パソコンのディスプレイでそれを読まされるみなさんには、申しわけないことです。

それでも多くの読者に恵まれ、なかには毎回のよう、感想を送ってくださるかたがあります。いろんなかたが、転送してくださっているため、こちらから直接送っているものの数倍の読者があるようです。思いがけぬ人から「読んでますよ」といわれて、びっくりすることもしばしばです。

なかなかの難産でしたが、やっと出版の運びになりました。いま再校を待っているところですので、近いうちに、そのご案内ができると思います。

大同はここしばらく暖冬がつづき、春の訪れも早かったのですが、昨年末にはこの地方の最低気温が記録され、なんども雪が降りました。1週間前までは、かなり寒かったのです。

私たちのワーキングツアーが3月25日に大同に到着しました。最初の3日間は最南部の霊丘県で活動しましたが、去年はすでに咲いていた野生のモモ(山桃)のツボミがまだ固いのです。アンズが咲くにも、時間がかかりそうです。去年はとくに早かったのですが、ことしはそれから2週間以上、遅れそうです。

28日は、大同県の「カササギの森」で、マツの苗を植えました。土が凍結しているため、作業できるかどうか不安だったのですが、苗を植えるギリギリの深さまでとけていたため、かろうじて作業ができました。

これまでの2年で植えた苗は、大苗で植えたものを除いて、まったく姿がみえません。冬の入り口に、土で埋めてしまったのです。そうしておかないと、冬の冷たく乾いた風で、水分をとばされ、枯れてしまいます。

もう1つの重要な目的は、ノウサギの食害から守ることです。ここもノウサギがたいへん多いです。いたるところに、ものすごい量のフンが転がっていますし、管理棟の周囲に植えたライラックは、被害を受けました。トゲだらけのハマナスの苗まで、頭がなくなりました。まるで刃物でスパッと切られたようです。

以前に植えたマツのようすも、ツアーのメンバーにみてほしいので、数本を掘り出しました。掘り出してすぐは、葉が黄色くなって、ちょっと心配なくらいですが、2週間も陽光をあびると、緑の葉に変わります。そういう事情を説明しました。

その翌々日、遠田先生といっしょに、また現場に行きました。なんと、たった2晩のあいだに、掘り出したばかりのマツの頭を切られていました。6本のうちの3本も！

春の訪れの早い年なら、この時期はもう、草の芽が動きだしています。ノウサギはそれを食べ、マツの苗は、見向きもしません。ノウサギにとって、ことしはいまが、いちばん辛い時期

のようです。

ツアーの人たちが植えたばかりのマツの苗が気になりました。でも、だいじょうぶでした。作業を終えて、私たちが市内に帰ったあと、この人たちが、土で埋めておいてくれたのです。

「カササギの森」に隣接して采涼山の協力プロジェクトがあります。1999年から植えはじめて、ことしの春で200haになります。2000年春に植えたモンゴリマツを、ツアーの人たちにみてもらいました。3成長期がすぎ、40～50cmに育っています。活着率もとても高く、地元の誇りです。

ここまで育てば、埋めなくてもだいじょうぶです。寒風害にも耐えています。ノウサギの被害も、まったくありません。これからあとは、毎年20～40センチも伸びます。この冬は雪が多かったので、とくに伸びがいいでしょう。夏にきてみるのが、ほんとに楽しみです。

じつは、私たちの拠点の環境林センターでも、ノウサギが多いんです。先日は、立ち小便している私の足元から跳びだしてびっくりしました。アンズの木にも被害がでたんです。ウサギ取りの網を買ってきて、村の名人にしかけてもらったら、18羽もかかったそうです。センターは20haの全体をレンガの塀で囲っていますから、そうするだけでも効果は大きいでしょう。

長さ400mの網が80元だそうなので、「カササギの森」にも、しかけることにしました。しかし、こちらは600haもあり、出入り自由ですから、それほどの効果は期待できません。天敵が増えるまでは、痛みを耐えるしかないのでしょうか。

## NO. 201 汚水処理(1) 2003. 04. 07

大同の水問題の深刻さを、これまで何回も、書いてきました。当然、私たちのプロジェクトも大きな影響を受けます。もっとも深刻だったのが、2001年夏です。「100年に1度の大旱魃」のうえに、環境林センターでつかっていた井戸水が汚染され、使用停止になったのです。

環境林センターはその前年、20haへと、いきよに規模を3倍に拡大しました。2001年春、たくさんの苗を移植したので、水をやらないわけにはいきません。しかたなしに、砵務局の住宅の生活汚水を灌漑に使いました。周囲の畑も、みなこの水をつかっています。

やがて、問題が発生しました。根が腐って、枯れていく苗が増えたのです。それまで順調だったポプラの苗も、全滅のありさま。苗畑の土壌が、汚染されてしまったのです。その悪影響は、いまでもまだつづいています。

日本大使館の杉本公使に泣きついて、草の根無償資金協力による支援を要請しました。うれしいことに、即座にといいいいスピードで、助成が決まりました。まず井戸掘りにとりかかりました。140mも掘って、計画どおりの水がでました。2002年春から、この水が灌漑につかえるようになりました。

この一帯は、年間2~3mも地下水位が低下し、2008年には涸渇するという報道があるくらいです。新規の井戸は、全面的に禁止されていました。この事業の重要性を考慮して、市長本人が、特別に許可してくれたのです。もし1年あとだったら、絶対に許されなかつたろうと、党の幹部からききました。

そのような地下水を、無神経につかうわけにはいきません。一方で、あの汚廃水を浄化してつかうことを計画し、日本で専門家を探したところ、友人の干場革治さんが、長崎大学の石崎勝義さんを紹介してくれ、石崎さんが、大阪産業大学の菅原正孝さんを紹介してくださいました。

菅原さんは、現地に来て、状況をみたあと、土壌浄化の基本設計をしてくださいました。そのあと、大阪環境技術研究所が、技術者を派遣し、詳細設計をしてくれました。川島和義さんといっしょに、建設中の装置をなんども見学し、土壌ブロックづくりの手ほどきを受けました。装置のコントロール盤は、会員の中村文生さんが、自分でパーツを買い集め、手作りしてくださったのです。

ところが、その後の工事が難航しました。2002年は、6~7月の雨が多かったのです。予定の場所がヌルヌルになって、機械も人もは入れません。8月に着工したものの、湧き水がひどくて、重機をつかえないのです。

「こんな浅いところで、水がでるのなら、あの井戸は必要なかったじゃないか」などと、冗談をいうゆとりが、最初はあったのですが、人力による穴掘りは遅々としてすすまず、ほんとにイライラしました。必要なときには水がなく、ジャマなところに水があるのです。

本体工事は、11月末に完成したものの、すでに気温が低下して、試運転は、今春に持ち越さざるをえませんでした。契約の期限を超えてしまって、日本大使館にも、迷惑をかけました。

根幹のところ、ほかにも問題がありました。設計にあたってくれた技術者は、黄土をみて、「えっ、こんな土なんですか!」とって、あきれかえりました。黄土は粒子の小さなシルトで、透水性が悪いうえに、水にあうと、たちまち溶けてしまいます。土壌浄化にとって、最悪の土とっていいでしょう。

しかし、近くにあるのは黄土ばかりです。どこにいても黄土です。造林地の調査のさいも、

あちこちで車をとめて、土を探しました。くわしく書くときりがないので、はしょりますが、ついには、トンネル工事の現場からも、土を運びました。

この春のツアーが3月末に帰ったあと、遠田先生といっしょに、環境林センターにへばりつき、立ち上げにとりくんできました。これがまた、たいへんなんですね。日本の設計と、大同で入手できる機材とでは、規格のあわないところがでてきます。それはもう、現場あわせでいくしかありません。

設計では、オーバーフローの水は、ポンプで逃がすことになっていましたが、停電の多いここでは、役に立ちません。その問題に気づくのは、私しかいないのに、日本にいるときは、頭が回りませんでした。処理槽の入り口に、レンガで小さな汚水柵をつくり、水位があがると、そこからあふれでて、もとの水路に戻るようにしました。遠田さんがなんども水位を測り、最適の位置を決めました。

いよいよ立ち上げです。各種のセンサーやリレーは、事前にテストしましたが、現場で実際に動くかどうか、やはり不安です。1つ1つ、段階を追って、作動状況をたしかめました。一部のポンプの能力が弱いことがわかったのですが、作動時間を長めにすることで、解決しました。そうやって1つ1つをたしかめながら、同時に全体のバランスを考えていきます。

地元の作業者との意思疎通もたいへんです。彼らはまったく経験がありませんし、ことばの説明では、なかなか意味が伝わりません。タイマーが作動して、ポンプが止まると、すわっ、トラブルか！といったふうです。

ストレスと興奮のせいでしょう。私は、睡眠が極端に短くなり、食欲がガタッと落ちました。でも、おもしろいんですね。こういうことが。もともと私は、技術者志望だったんですけど、こういうことに、ほんとうに向いているようです。道をまちがえてしまったのが、ザンネン！

4月4日、いよいよ全体を動かすことができます。朝食を早めにとり、朝早くから現場に行きました。ところがなんと！動かないんです。突然の停電です。イライラしながら復旧を待ったのですが、お昼をすぎても、電気がきません。しかたがないので、電気がきたときの指示を残して、「山西日報」の取材につきあって、午後から、渾源県の呉城郷にいつてきました。

夕方4時すぎに、携帯電話が鳴りました。現場に残った、大同事務所の魏生学副所長からです。「処理がはじまった。すごくきれいな水だ。手を洗ってみたが、臭いもほとんどない。このままでは飲めないが、灌漑にはまったく問題ない」。

ことばでそうきいても、どの程度か、わかりません。自分の目でみないことには、信じることはできません。5日の朝も、早くから現場にいきました。私の想像よりは、きれいな水です。

最初のうちは、軽石の汚れや一部の土壌が流れだし、にごっていると想像していたのに、それもほとんどありません。

小武は、「こんなにきれいになるとは、思ってもいませんでした。汚水処理といっても、これまでみたところはどこも汚かったし、本格的な処理場は、ものすごく大きいし、経費も膨大です。タカミサンが汚水処理を提案したときも、じつのところ、困ったことになった、と思ったんです。こんな簡単な設備で、こんなにきれいになるのは信じられない」といって、興奮ぎみです。

センターの職員が総出で、残土の運び出しと、周囲の掃除をはじめました。これだったら、たくさんの人が見学にくる、というのです。効果を自分の目でみたからでしょう。1人1人の動きが、ほんとに生き生きとしてきました。

鉱泉水のペットボトルに、処理水をいれてみました。この程度の少量をとると、にごりはほとんど気になりません。「だまって食堂に置いておいたら、絶対にだれかが飲む」と運転手の小郭がいます。でも、わずかに臭いがあります。

いまはまだしかたがないでしょう。水温も低いし、運転をはじめたばかりです。微生物の働きが活発になれば、ずっときれいになるでしょう。

あんなに苦勞してきたんだから、もっとうれしくていいはずなのに、喜びはあまりありません。今後の運転の過程でも、きっと問題が発生するでしょう。でも、一段階は越えたのです。ホッとしている、というのが正直な気持ちです。

それにしても、人から人へ、たくさんの人の協力がありました。感謝の気持ちでいっぱいです。これまで述べたような事情で、その人たちへも報告が遅れ、もうしわけありませんでした。長くなりましたので、つづきは次回に。

## NO. 202 汚水処理(2) 2003. 04. 15

汚水処理施設は、その後も順調に動いています。4月11日に、地元の水道水水質検査網による検査結果が届きました。それが、にわかには信じがたいほどすごいのです。データを写しておきましょう。カッコ内は中国の上水道の基準です。

混濁度	10.09 NTU	(3度以下)
色	5度未満	(15度以下)
COD	6.8mg/L	(3mg/L)

硝酸塩	0.9mg/L	(20mg/L)
亜硝酸塩	0.055mg/L	(0.15mg/L)
総大腸菌群	230 個未満/L	(3 個以下/L)
塩化物	281.2mg/L	(250mg/L)
pH	8.02	(6.5~8.5)
鉛	0.002mg/L	(0.01mg/L)
砒素	0.003mg/L	(0.05mg/L)
水銀	0.001mg/L 未満	(0.001mg/L)

……

(“L”はリットル)

大部分の項目で、上水道の基準をクリアしているんですね。混濁度が高いのは、試運転から日が浅く、軽石などに付着した土が流れ出るのですから、当然です。総大腸菌群が多いのは、あのドロドロの汚水をみれば、これも当然のことです。大腸菌だけなら、沸騰させれば、飲用にもつかえるでしょう。塩化物は、オーバーしていますが、わずかです。

問題は、汚水中の有機物が、どれだけ残っているかです。ここではBOD(生物化学的酸素要求量)の検査がなく、COD(化学的酸素要求量)だけです。これがなんと、1ケタ！日本でも、散水目的だったら、20mg/L でいいそうです。気温が上がるのはこれからですし、運転をつづけて、微生物の活動が本格化するのには2~3 か月後のことでしょう。そのころに1ケタになればいいな、と思ってたんですよ。それなのに、いきなり1ケタがきた。これから、どこまで下がってくれるんでしょうね。

設備は小さなものです。10m×20m ですから、25m プールを、2 割ほど小さくしたようなものです。見た目にも、装置はいかにもかんたんです。それでも処理能力は、1日250トンあるんですよ。1か月では7,500トンです。

大同事務所の魏生学副所長の1か月の水使用量は3トンだそうです。3人家族ですから、1人1トン。武春珍所長の家は、1か月2トンだそうです。ここも3人家族。昼間は水がでないんだから、しかたがない。大同の異常なまでの欠水を反映して、きわめて少ないんですよ。

平均1人1トンとして計算すると、これだけの装置で、7,500人分が処理できるということです。これを100つくったら、単純計算では75万人分で、大同市内の人口の半分を超えるんですね。しかも、1セットが、日本円で400万円もかからない。

4月13日の「大同日報」は、北京の水源を守るため、中央政府が多額の資金を投入する、そのための山西省の会議が大同で開催されたと1面トップで報じています。3市にまたがるんですけど、大同市がいちばん多くて、16億元なんだそうです。諸外国の例からいうと、大規模な

汚水処理施設が建設されるんでしょうね。日本も例外ではありませんでした。そして、その後の経済的な負担に、苦しんでいます。

ほんとうは、発生源に近いところに、小さなものをたくさんつくったほうが、よほど効率的だし、経費もケタがちがいに低くてすむんです。水の再利用にもそのほうがべんりです。

試運転がはじまってから、毎日、数グループの見学があります。「すぐにでも、自分のところにつくりたい」といった人もいました。それをみて、思いついたんです。

じつは、4月11日の夜から、北京の日本大使館の目賀田周一郎公使が、2日間の日程で私たちのプロジェクトを視察してくれることになっていました。土日をつぶしての熱心さには頭が下がります。共産党大同市委員会の梁鳳書副書記が、ずっと同行してくれることになりました。せっかくの機会を利用させてもらおうと考えたんです。

ちょっとだけ派手な通水式を考えました。本来、私はこういう儀式がだいきらいです。ご近所の「希望学校」から、30名の鼓笛隊にきてもらいました。ド～ン、ド～ンとかなりの数の花火をあげました。ポンプのスイッチを、目賀田公使と、梁鳳書副書記にいれてもらったんです。テレビカメラや新聞記者も、すべての社からやってきました。きょうはその追加取材がきています。まもなく報道されることでしょう。

当日、集まる人のために、私は以下のような宣伝文をつくりました。王萍に中国語に訳してもらって、配ったんです。これまで書いてきたことと、ダブるところもありますが、つぎに全文を書いておきます。

#### 汚水処理施設の特長

##### 1. 汚水処理の目的

近くの住宅からの生活汚水を浄化し、環境林センターの苗圃の灌漑に用いるのが直接の目的である。あわせて、大同地域は水不足が深刻なことから、水の循環利用のための実験装置としての意味ももっている。

##### 2. 処理装置の能力

通常運転時の処理能力は1時間10.4トン、1日250トン、1月7,500トンである。灌漑用水の水質への要求は高くないことから、水質をいくらか犠牲にして、処理量を増やすことも可能である。

##### 3. 技術上の特長

この施設の最大の特長は、高度処理に土壌浄化法を採用したことである。土壌中にはたくさんの微生物が生息しており、その分解能力を利用すれば、品質の高い処理が実現できることは、

広く知られている。しかし従来の土壌浄化法は効率が低く、大量の処理を行うには広大な面積が必要だった。

この施設は、土壌ブロックと透水層(軽石)をレンガ積みと同じように多段に積み重ねることによって、良好な水質と高効率をともに実現したものである。このように小さな簡単な施設でありながら、処理水はきれいで、効率も極めて高い。灌漑への使用は問題ないし、トイレ水など中間水として利用でき、再処理すれば飲用水にも使えるようになる。

機材の大部分を地元で調達するため、安価に建設できるし、運転に要する経費も低い。構造が単純なため故障が少なく、運転にも格別の技術を必要としない。機材の故障など問題が発生しても迅速に対応できる。

日本では国立公園内のトイレ水の循環などに、最近利用されはじめた最新の技術である。

#### 4. 設計などの協力と建設資金

この施設は日本の外務省草の根無償資金協力によって建設された。基本設計を大阪産業大学人間科学部学部長の菅原正孝教授が行い、詳細設計には大阪環境技術研究所があたり、制御盤は緑の地球ネットワーク会員の中村文生氏が自作した。

処理水の水質は、生物膜が形成され微生物が活性化するとともに向上し、運転開始2~3か月後に設計能力に達する。

2003年4月13日

緑の地球ネットワーク

私が現場にへばりついているのをみて、相馬昭男さんが「高見さんのオモチャだな」といいました。「そうやって、あそびながら、もっと知恵をつけなさい」という意味だそうです。

### NO. 203 消えゆく村 2003. 04. 17

朝日新聞の「明日への環境賞」を、緑の地球ネットワークが受賞することがきました。きょう新聞発表があったそうです。第1回から今回の第4回まで、ずっと最終候補に残っているながら、最後の段階で落ちつづけてたんだそうです。「ながらくお待たせいたしました」といわれました。

でも、よかった。まにあって。なにに、まにあったかですって?つぶれるまえに、ですよ。こんなふうになると、ジョーダンだと思われるんですけど、私の話は、ジョーダンにまぎらわせて、本心をいっていることが多いんです。早くからの読者はお気づきでしょうけど。経済的

な自立が、ほんとにむずかしいんです。

いつものレポートにはいります。実験林場「カササギの森」は、采涼山のふもとにあります。黄土丘陵で、管理棟あたりの標高は1,450m。環境は、ひじょうに厳しいですね。

一昨年から作業道を建設していました。管理棟から、いちばん北まで車が入れるようにしたんですよ。周囲の畑と荒地でも、緑化がすすんでいます。北京天津地区風砂防止のプロジェクトが、聚楽郷にやってきて、けっこう資金も下りたんですよ。そのプロジェクトのために、郷も道路をつけました。それと、私たちの作業道が連結したため、ずっと奥まで車でいけるようになったんです。

すると、そこに村がありました。海拔は1,600mを超えているでしょう。遠くからみたとき、立ち並ぶ窯洞(ヤオドン)に崩れたものがまじり、廢墟のようにみえたんですね。近づくと、人影がみえました。人が住んでるんです。

村の近くの畑のあぜ道で、運転手の小郭が「オオカミのフンがある」というんですよ。フンのなかにたくさんの毛がまじっているところを見ると、肉食獣のものであるのはたしかでしょう。昨年末、カササギの森にも、オオカミの子があらわれました。その親がいてもふしぎはない。オオカミのフンを燃やすと、白い煙がでるといいます。「狼煙」(のろし)と書くのは、そのためだそうです。

近づいてきた老人に話しかけました。村にはこないけど、山にオオカミはいるそうです。そのほかにいくつかのケモノのなまえがでましたが、なにかはわからない。村のなまえは馬脊梁。若ものは、みんなでてしまったそうです。残っているのは、老人ばかり20~30人。

いろいろ話してくれるのですが、ここまでくらいが私のヒアリングの限界。王萍に助けを求めると、その老人は「あのハイズ(孩子=こども)のいうことはわからない」と王萍にいいました。ハイズというのは、55歳の私のことです。

その数日後、山西日報の記者につきあって、渾源県の呉城郷にいきました。道ばたで日向ぼっこをしている老人のなかに、顔見知りがありました。5年前に、彼の家を訪ねて、話をきいたことがあります。老人も私のことを覚えていて、「高(ガオ)という姓の日本人だ」というんです。大同で、「ガオジェン」はけっこう有名人なんですね。バカで呑んべ、なんてオマケつきですけど。そして、みんな「高・健」だと思っている。「見」と「健」は同じ発音です。

先日、日本大使館の目賀田周一郎公使が、私たちのプロジェクトを視察しました。大同日報に、大見出しで紹介されたんです。「日本駐華公使目賀田来同」。これを見て、大多数の人は「目(ム一)という姓の日本の公使」と思うでしょうね。「目」という姓も、中国にあります。

呉城郷で会った老人は84歳です。かみさんは82歳。私の年齢をきかれて、答えると、「シャオハイズ(小孩子)」と呼ばれてしまいました。84歳からみると、55歳はたしかにこどもです。

またまた大脱線しました。馬脊梁村の老人の話にもどります。この村はすでに移転がきまっており、夏にも実施されるそうです。「退耕還林」で、この春の作付けは禁止されており、どの畑にも木を植えるんだそうです。

この村もそうですけど、およそ人が住むべきでないと思える山地や丘陵に、たくさんの村があるんですね。そんなところでらせるのは、神様か仙人のように、私には思えるんですよ。しかし、住んでいるのは生身の人間。畑が必要ですし、燃料の柴もとらないといけない。生態環境の貧しいところに、人が住むと、徹底的な環境破壊につながります。

そして、人が住み、村ができれば、行政としても、なにかをしなないといけない。道路をつくったり、電気を引いたり、少人数のためにするには、コストが大きすぎる。そして、税金なんて、まるで期待できません。このような自然村は、そもそも課税の対象から、はずされているそうです。

大同市は、200人未満の村を対象に、移転を決めました。該当する2,247の村を実地調査し、住民の意見をきいて、235の村の移転・併合を決めたそうです。「大を以て小を引き、富を以て窮を帯する」のが原則だそうです。比較的大きく、豊かな、近くの村に吸収合併するわけですね。

環境破壊と貧困の悪循環を断ち切るための現実的方策だと、私も思います。しかし、それには双方の住民の同意が必要でしょう。調査した村のうち、移転するのは10%ほどですから、移りたくない住民が多いんでしょうね。新聞報道にも「たいへん困難なしごとだった」とありました。

馬脊梁村が移るのは聚楽村。郷政府のある村です。移転の費用は、政府が負担するそうです。住宅が準備され、1人あたり1畝=6.7aの耕地が分配されます。水と土の条件がいいので、最低限の食糧は得られるといえます。

でも、その老人は「もうヒツジを飼えなくなる」といって、寂しそうでした。生まれてから、ずーっとここで生きてきたんですからね。年老いて、新しい土地で、新しい暮らしを立てることに、不安も大きいでしょう。

4月20日に、遠田先生といっしょに帰ってきました。そのあと、いろんな人にきかれるんですね。SARSについてです。問い合わせのメールもたくさんきています。いちいち答えるのもめんどうなので、「黄土高原だより」の1回を、それにあてることにしました。でも、期待しないでください。内部にいるということは、情報がひじょうに乏しい、ということです。

一般の大同の人たちは、今回の非典型肺炎について、あまり関心はなかったと思います。私たちの通訳の王萍が、伝染病病院の婦長さんなので、報は彼女からえていました。でも、のんびりしたものだったんですよ。「治療法はちゃんとあります。古いタイプの抗生物質がよくききます。かかっても心配はいりません」といったもの。

具体的な情報は、日本からEメールできました。香港、広東省のつぎに、山西省が汚染地域としてあげられ、「慎重に行動するよう」外務省が求めている、というのです。太原での発症は知っていましたが、な～に、太原と大同はこんなに遠い、太原では平気で育つ木も、大同では育たない、山西省とひとくくりにするほうがおかしいんだよ、といった気分。

ただ、旅行者はすぐに落ち込みましたね。会議があるときを除いて、ホテルの客の数がずっと減りました。マネージャーにきくと、「新しいキャンセルなんかはない」といってましたけど、自己防衛のためだったのでしょうか。旅行社のガイドさんは、「すでに賃金を減額された」といってました。

でも、私たちが活動しているのは主として農村。ああいう伝染病のこわいのは、人口密集の繁華街。農村で活動しているかぎりは安全だよ、と思っていました。宝くじにもあたったことがないんだから、それ以下の確率の伝染病になんかかかりっこない、と。いずれにしろ、「非典型肺炎」なるものへの認識は、きわめて薄かったんです。

驚いたのは、北京にでてからですね。まずはここではNHK国際放送のテレビを視聴できる。日本語放送です。くわしい事情がやっとわかりはじめた。

それから北京駐在の日本人から話をきいたこと。日本企業で働いている人たちの、家族の多くはすでに帰ったそうです。医療機器を扱っている会社が、最初に家族を帰したことから、それが全体に及んだんだそうです。企業人は、逆に足止めされているそう。日本に帰っても、10日間は自宅待機し、会社にはでてくるな、というんだそうです。これじゃあ、どんなにSARSがこわくても、日本に帰るわけにはいかない。

航空機の利用が激減しているそうです。なかには1便でわずか11人、なんてこともあったそう。乗組員の数より少なかったそうです。「セスナにしたらどうですか」なんて不謹慎なことを口にしたのも、まだ深刻さを実感していなかったからです。

中国のさる機関の国際連絡部を訪れました。訪中団などがのきなみキャンセルされ、ヒマで、ヒマで、ということでした。親友たちがやっている会社も、ツアーなどがつぎつぎキャンセルされ、「思い切って、休みにしました」なんていってましたけど、こちらは体力のない民間。こんな状態がつづいたら、困るでしょうね。

街頭を歩くと、マスク姿の人がめだちます。大同には、こういったようすはまるでなかったんですよ。それでも、私たちが北京であった中国人は、「マスクをしているほうが少数派ですよ。どうせ、なにかで死ぬんですから……。バイジュウ(白酒)をやっている人と、タバコを吸う人は、感染例がないそうです」なんてことをいう人ばかり。

ところが、20日の日、北京空港にいったら、ここでは、マスクをしていない人には、立入禁止命令がでているのかと思うくらい。空港で働いている人たちは、まず例外なしにマスクをしています。旅客も、ほとんどの人がマスクをしています。それにしても、客たちはどこで買ったんでしょうね。私たちの情報の遅れに、ちょっと驚いたんですよ。

中国国際航空をつかったんですけど、スチュワーデスも、みんなマスクをしていました。あのマスクというのは、自分がかからないためなんですかね？それとも、他にうつさないためなんですかね？そういう私の考え方は、ほんとはまちがいです。自分がかからないことで、他人にうつさないですむんですよ。でも、自分でマスクをする気には、なかなかない。

これまで、他人事のように書いてきましたけど、私たちにとって、切実な問題なんですね。イラク戦争のおかげで、ことしの春は2つのツアーがキャンセルになりました。SARSのおかげで、1つの下見が中止になったんです。

今回はまだ、「よかったですね。もしツアーがきていたら、汚水浄化施設を立ち上げることはできなかったでしょう」なんて、ノンキなことをいってたんですけど、長期につづくようなら、零細 NGO の私たちは、持ちこたえられないかもしれない。

潜伏期間は、3日ないし1週間ほどだとききました。どこかで感染している可能性を、まだ完全には否定できないんですね。10日くらいは自宅待機するのがいいんでしょうけど、そういうわけにもなかなかいかない。SARS ウィルスと、コンピュータウィルスが交配して、新しいウィルスを生む可能性があるから、こういうメールもばらまかないほうがいいんでしょうけどね。

## NO. 205 かすんだ風砂 2003. 05. 01

ことしの春も、3月18日から4月20日まで、中国でした。いつもなら50日は滞在しますの

で、ことしは異例に短い。アメリカのイラク侵攻で、取り消しになったツアーがありました。SARSの影響もありました。朝日新聞「明日への環境賞」の授賞式にも出席しないといけません。さまざまな事情から、早めに切り上げたんです。

自然の条件からいうと、顕著な特徴が2つありました。まずは、冬が寒く、長かったこと。この通信のなかで「ことしも暖冬」といった表現をつかったかもしれませんが、それはまちがいでした。私も昨年12月と、ことし1月に大同にいったのですが、「そんなに寒くはなかった」という印象がありました。カメラマンの橋本紘二さんが、大同から電話で「あったかいよ、東京と変わらないよ」といってきたこともあります。

でも、大同では、昨年12月の下旬、これまでの歴代最低気温マイナス28度を、更新しました。マイナス29度です。ことしにはいってからも、春の訪れが遅かったのです。

私たちのワーキングツアーが霊丘を訪れる3月25日ごろには、霊丘自然植物園では、野生のモモ(山桃)が咲いているのがふつうです。すくなくとも五分咲きにはなっています。ところが、ことしはまだツボミが固かった。以前のことを知っている酒井さんが「枯れたんですか?」と聞いて、心配していました。4月12日、渾源県の懸空寺を訪ねても、ここのモモもツボミが固く、開花はまだまだのようでした。

オヒョウモモ(榆葉梅)が、それにつづいて花を咲かせるはずですが、これがまたきれいなんですね。ふつうは一重なんですけど、八重咲きもあります。大同市政府にたくさんありますし、雲崗石窟でもみられます。これも、ツボミが膨らみはじめたところで、開花はまだ。年によっては、アンズ、ナシ、スモモなどの花がみれるんですけど、ことしは、なにもみなかった。

花だけじゃありません。樹木の芽生えもおそいんです。大同を発つ4月17日になって、ポプラの芽がやっと動きだしたところ。それより一足早いヤナギが、やっと、うっすらと緑っぽくなった。15日から急に気温が上がり、最高気温が24度にもなったので、ヤナギやポプラもあわてだしたんですね。

それから雪や雨が多かったのも、冬から春にかけてのことしの特徴でした。この地方では、春にとくに雨が少なく、「春の雨は油より貴重だ」というくらいですが、3月から4月にかけて、例年になく、雨が降ったのです。大同市内や環境林センターが雨のときは、カササギの森は雪になり、10cm以上も積もった、という連絡がきたりしました。

気温が低く、雨や雪が多い、ということから、当然、でてくる結果があります。風砂が少なかったのです。ちょうど1か月、大同に滞在したのですが、そのかんに風砂はたった1回だけでした。4月11日のことで、目賀田公使が北京からきたので、「あなたを歓迎するために、きょうは吹いていますよ」などといったものです。

2000年から3年つづけて、強い沙塵暴(砂嵐)がありました。みんなびっくりしたんですね。「黄砂現象」が、日中韓三か国の環境協力の目玉になったくらいです。ところがことしの春はなかった。大同に通った12回の春のなかでも、はじめてのことです。

緑化関係の中国の新聞は、「3~4月の気温が低く、雪や雨が多くて、乾燥せず、風も強くなかったせいだ」と報道していました。それはそのとおりでしょう。知りたいのはその先の、なぜそうなのか、ということですが、それはむずかしいんでしょうね。

そのかわり、さきほどのつづきに、「三北防護林、北京・天津地区風砂防止プロジェクトなどが前進し、緑化がすすんだためだ」と書かれていました。そう書きたい気持ちを、わからないじゃないけど、これはやっぱり手前味噌。

北京でも、大同でも、数年前まで、「以前にくらべて、風砂がおさまった。緑化がすすんだおかげだ」とっていたんですよ。ヘソ曲がりの私は、そのたびに、「そんなことあるかい！チョコチョコと木を植えたからといって、目にみえる効果があるわけがない」とっていたんです。そしたら、2000年から、あの沙塵暴なんですね。ことしになって、風砂がなかったからといって、どうして、こんな議論がでてくるんですか。

寒い地方のことですから、冬の気温が低いのは、生活にとって、つらいことです。春の訪れがおそいのは、そこに住む人にとって、めいわくなことに思えるかもしれません。でも、そうとばかりはいえないんですね。まずは、そのおかげで風砂がすくなかった。

それ以上に、重要なこともあるんですよ。渾源县呉城郷は、たくさんのアンズを植え、大成功させました。収入だって、それまでのアワ・キビ・ジャガイモにくらべ、4~5倍にもなったんです。ところが去年は、ダメだったんですよ、完全に。去年は、平年にくらべ、2週間以上も早くアンズの花が咲きました。4月中旬です。そのまま順調に暖かくなれば、いいんですけど、4月末に寒波がきたんです。着いたばかりの小さな実が、凍って、落ちてしまったんです。ことしは、花の開くのが遅く、雪や雨も多かったので、村の人は「ことしは安心だ」としていました。

大阪市立大学植物園の、岡田博園長から、大同にメールが回ってきました。昨年夏、大同では、「毛毛虫」と呼ばれる虫が大発生し、ヤナギ、ポプラなどの広葉樹、ヤナギハグミ、クコなどの灌木、それから針葉樹のカラマツまで、葉を食い荒らしてしまったんです。なかには枯れるものもでてきた。そして8月ごろ、それがガになった。あちこちにタマゴを産みつけているのも、みたんですよ。岡田さんの連絡では、これはツガカレハのなかまのようで、ユーラシア大陸の乾燥地で、大発生しているんだそうです。

この虫は、2年かけて、成虫になります。冬が寒かったら、幼虫が死ぬそうです。ここ数年、冬が暖かかったのが、虫の発生を助けたのでしょう。昨年末の記録的な寒さや、春の訪れの遅さが、押さえになってくれないか、祈るような気持ちです。

## NO. 206 ぼやき 2003. 05. 12

一生のしごとが、その人の性格にかなっていたら、幸せでしょうね。それを生涯つづけられたら、いうことない。べつにお金にならなくたって、それほどいいことはないだろうと思うんですよ。このあいだ、大同で、污水浄化施設の立ち上げに取り組みながら、そんなことを考えていました。

私のぼあいは、まちがっちゃったんです。私はもともと、ものをつくるしごとにつきたかったんです。鳥取県の農村に生まれ育って、実家は農家でしたし、目にする職業も、育てるか、つくるかのどちらか。たいていが体を張ってのしごとです。

こどものころは、けっこう科学少年でした。昆虫採集に熱中した時期もあります。父親が、いまとはまったくちがう意味に教育熱心で、そのようにしむけたのかもしれませんが。少なくとも応援をしてくれた。展翅板とか、標本箱とか、桐の板を探してきて、彼が手作りしてくれたんです。カタログの写真をみただけで……。

そのあと、アマチュア無線にのめり込みました。といっても、受信機と送信機とを、つくってはこわし、つくってはこわし。完成して、受信できたり、電波がでていることを確認できたら、それでいいですよ。分解して、また新しい回路に挑戦する。

課題を与えられて、いろいろ工夫をして、それをブレイクスルーする。といったことが、おもしろかったんです。どちらかという、1から10までぜんぶ自分1人でやるのが性に合っています。そういうことだったら、寝食を忘れて、完全に没頭できます。ほかの人と協調したり、組織として動く、といったことは、性格にあわない。

学校の成績だって、数学、物理といった科目は、高校2年あたりから伸びはじめたんですけど、社会科とか国語とかはだめでした。英語なんて、どうにもならなかった。

人前で話すなんてことも、できなくはなかったけど、すきではありませんでした。文章を書くのは、すききらいのまえに、やったことがないし、やろうとも思いませんでした。

志望の大学を選ぶころは、原発の技術者になりたいと思ったんだけど、私がイメージしたそれは、どちらかという職人の世界。このあたりでもう、まちがっていたんですね。それまで

の一般的な技術と、現代の巨大技術とのちがいを、ほんとのところで、わかっていなかった。

大学の寮にはいって、学生運動に飛び込んだんです。入学したのは1966年。同期生に、科学の世界、政治の世界、いろんな分野に著名人がいるんですけど、そのころは目立たなかった人が多いんです。その年頃で、パッと表にでちゃって、私なんか「あいつは天才じゃないか」と思った人は、コースをはずれたり、蒸発したり……。

学生運動にかかわって、あの時期ほど勉強したことはないですね。その前も、その後も。いろいろ論争もして、むこうが知ってることを、自分が知らないで、恥だと思う。その日のニュースに、それなりの解説をつけて、ビラにして配るんですよ。

むちゃくちゃな先輩がいたんですね。原稿も書かないで、いきなりガリに切るんですけど、半分くらいのところで、「高見、つづきはお前が書け！」とあって、どこかにいっちゃう。私は、字体まで彼のまねをして、ガリを切る。若い人は、ガリ版なんてわからないだろうから、この部分は飛ばして読んでください。それが私の文章修行だったんです。

そんなこと、イヤにきまってるじゃないですか。イヤだから、早く片づけたい。本来が職人的な性格ですからね。いろいろ工夫をしていくと、なんとか、こなせるようになる。すると、あいつはそういうことがトクイじゃないかと、誤解されて、そういうしごとが集まってくる。

いまの事業だって、そうなんです。以前にも書きましたけど、私は中国をすきになれないですね。きれいとはまでは、あえていいませんが……。とにかく、あわない。青い海と緑の山がであろうところで、私は生まれ育ったんですから、黄色い大地がすきになれるはずがない。

それからいまの中国社会。セミが多いんですね。ジェ〜ニ、ジェ〜ニ、ジェ〜ニ、カ〜ネ、カ〜ネ、カ〜ネ、ミンミンゼミだけがいない。私がこういうことをいうと、セミをみたことのない(らしい)王萍が、通訳に困るんですね。

「それから政治……」って、私がいったら、頭の回転はとても速いのに、それをじょうずに使えない常健民が、「お前の考えはわかっているから、口にするな！」とあわてて止めましたよ。

人とのつきあいだって、しんどいんです。むこうは大陸ですからね。ほんとに人物、大人物がいるんですよ。少数ですけど。それと自分とを比べると、ちょっと情けないんですね。あまりに自分が小さくて。

そのいっぽう、箸にも棒にもかからない人間が多いんです。これはもう遍天下、天下あまねく、どこにでもいる。日本人が思い描く人間の分布の幅を、はるかに超越しているんですよ。だから、しんどい。

ところが、なんとなく、「高見は中国人とのつきあいをうまくやってるじゃないか」なんて思われてしまった。そんなことないんですよ。この通信をお読みになってわかるように、振り回されてることが多いんです。

要するに、苦手なほうへ、苦手なほうへと、どういうわけか、きちやったんですよ。自業自得とはいえ、くやしいことです。定年まぢかの人間が、そんなことを口にするのは、みっともないことですけど……。

## NO. 207 『ぼくらの村にアンズが実った』 出版 2003. 05. 19

「黄土高原だより」をまとめたものが、まもなく出版されます。最近の私は、くそ「リアリズム」でありまして、実物を見るまでは、信じることができません。5 日前には、見本の本が届いたのですが、それでもまだ、ほんとかな？

日本経済新聞社の出版です。表題は「ぼくらの村にアンズが実った」。出版局編集部の國分正哉さんが、驚くほどていねいにつくってくださいました。菊池薫さんに、たいへんお世話になりました。アップルシード・エージェンシーの鬼塚忠さんに感謝です。出るまでには紆余曲折がありました。時期もずいぶんと遅れました。その過程で、いくつかの出版社と、たくさんの方のお世話になりました。ありがとうございます。

日経新聞のきょうの夕刊の「日経からのお知らせ」に、出版の案内が掲載されましたので、まちがいないだろうと思って、このメールを送ります。5 月 21 日の発売だそうです。22 日か 23 日には、書店にならぶのでしょうか。

舞台裏の話を書きます。名もない私の本が、書店で売れるとは思っていません。そのかわり、年に 30 回以上、講演を頼まれますので、話をきいてくれた人が、その場で買ってくださいるかもしれない。提げていくんですから、条件があります。軽いこと。薄いこと。安いこと。書いている内容にもピッタリですね。

國分さんが努力してくださったんですよ。「限界までやりました」とのことです。口絵カラーが 12 ページ、本文 288 ページですから、300 ページの本です。それでいて、薄い。ページのわりには、3 割も薄いんだそうです。そして、値段を「1600 円＋税」におさえていただいた。「採算度外視のお買い得！」とのこと。でも、買ってトクかどうかは、中味しだい。

メールマガジンでは、1 回ごとに、話題を転換しました。意識的にです。飛び飛びのものを、退屈しないで読んでいただくため。1 冊の本となると、事情は異なります。スムーズに読んでい

ただくため、順番を整えました。内容をアップデートしました。ダブリを除き、整合性をもたせるために、大幅に書き改めたんです。

最終的に私が考えた表題は、「黄色い大地に森を育てる」というもの。それが私の限界。「ぼくらの村にアンズが実った」は、國分さんの発案でしょう。最初にきいたときは、違和感がありました。でも、どちらの案をとるか、迫られて、私は自発的に、彼の案に同意しました。できあがった本をみても、最初は違和感があった。でも、だんだんなじんでいます。

國分さんの考えは、環境と国際協力のコーナーからいかにして抜け出させるか、といったことだったようです。同じことを、べつの編集者にも、アドバイスされました。「だましてでも、手にとらせよう」ということなのでしょうね。そういうふうに、考えてもらえるのは、書き手としては、うれしいことです。

店頭にならぶのは、長くて3週間だそうです。そのあいだに売れなかったら、すぐ引っ込められる。きびしいんですね。できることなら、本屋で買ってください。お願いします。まとめて、というようなかたがあれば、こちらにご連絡をお願いします。

私が、尊敬しつつけている先生がいます。高校生のころ、最初に彼の本を読み、それが私の人生を変える力をもちました。あとになって、ご本人と知りあいました。彼の本を読んだり、話をきいたりすることが、そのたびに、私の生き方に影響を与えたんです。私は「師匠」と呼びたいんですけど、弟子として、認知してもらえないでしょう。

彼の考えかたがユニークなんです。たとえば、「情報革命」「地方の時代」が騒がれはじめたとき、「どこでも、いつでも、ただで、入手できる情報なんて、価値がなくなる。

そういうことがすすめば、すすむほど、顔をあわせて、酒でも飲みながら、こっそり交換する情報が、価値をもつんです。そうなると、東京一極集中は、いっそう強まるでしょう」。

いまから20年近くまえに、その話をききました。インターネットが普及するまえです。

そのころは、東京、大阪……だったのに、いまでは、東京、その他……、になってしまった。

あるとき、「そういう考えかたをどうしてできるんですか？」と私は尋ねたんです。

先生の答えは、「考えに考える」というものでした。「内容に独創性があれば、いうことはありません。最低でも、表現に独創性がなければいけません。そうでなかったら、知識人たるものの、話したり、書いたりすべきではありません」。

その教えは、私に大きな影響を与えました。内容にユニークさを期待されても、つねにそうはいきません。せめて表現に独創性をもたせたい。それなりに考える。表現があぶなくなる。ねじくれる。それが習慣化すると、意識しないでも、人間が変わっていくようです。

ある人が私にすすめてくれました。「早く本にしなさいよ。零細 NGO なんて、いつつぶれてもおかしくないんだから。1冊でも本をだしておけば、「作家」とか「著述業」とか、名刺に書けるんですよ」。もちろん、ジョーダンでしょう。いまつぶれたら、ほんとに困ります！

## NO. 208 シロウトがはじめた強み 2003. 05. 26

「黄土高原だより」をまとめた本、『ぼくらの村にアンズが実ったー中国植林プロジェクトの10年』（日本経済新聞社、1600円＋税）が、先週、出版されました。きょうは朝日新聞の「天声人語」で紹介されました。たくさんの人に読んでもらえると、うれしいんですけど。

この協力事業を1992年にスタートしたとき、おもだったメンバーはシロウトばかりでした。中国の環境問題は深刻だ、可能な協力をしなければならぬ、それは日本自身のためでもある、そういう気持ちは共通していたと思いますが、たとえば植物の専門家はいなかった。国際協力の専門家、経験のある人、そういう人もいなかったんです。

植林や緑化だったら、シロウトだってなんとかなるだろう、そういう思いがなくはなかったんです。仮に、水や大気の問題だったら、専門家をさがすところから、スタートしたはずですが、ところが、これが大まちがい。緑化っていうのは、もっともむずかしい分野なんですね。いまになって考えると。

悪い結果はすぐでます。苗木、土壌、植え方、その年の気象……植えた苗が活着し、育つためには、たくさん条件がそろわないといけない。1つでも欠けると、枯れちゃうんです。ところが、黄土高原では、そのすべてがそろわないのは、奇跡のようなもの。

地元の林業関係者のあいだで、「植樹3分、管理7分」といわれます。整地して、植えるまでもけっこうたいへんだと、私なんかは思うんですけど、あとの管理がずっとたいへんだというんです。大同県聚楽郷の張春書記は、緑化にたいへん熱心で、全国表彰を受けた男ですけど、彼は「植樹1分、管理9分」というんですよ。それだけ管理したとしても、いい結果がでるのは一つとあと。

最初のころは、失敗することが多かったんです。地元の関係者は、プロジェクトを開始するまでは、成功率の高さをほこったんです。私たちがみても、よさそうにみえました。悪いところはみせるわけがないし、全滅したところはなにも残っていないから、みてもわからない。

実際にはじめると、結果はさんたんたるものです。申しあわせたように技術者は、「ことしは旱魃がひどかった」といいます。しかし、私のシロウト目でみても、そんなに単純じゃない。

かなりネチネチと原因を追及したんですよ。でも、わからない。日本でけんめいに専門家を探したのは、そういう過程をへてのことです。

最初に専門家の参加があったのは、1994年夏です。その後、プロジェクトは内容的にも大きく変わり、活着率をはじめとする成績も、顕著に改善されました。

にもかかわらず、私は、シロウトがはじめたのがよかった、といまでも思っています。もし、専門家がこの事業を思い立ったのなら、かならずマスタープランが先にあり、それにしたがってプロジェクトがくまれるでしょう。主体は日本側で、中国側が、それにたいする協力者になったかもしれません。

私たちのばあい、日本側はシロウトばかりでしたから、あくまで主体は中国側で、日本側は応援団。そういう関係ができたんです。とても重要なことだったと思います。

もう1つよかったことは、はじめたのがシロウトだったから、専門家にたいしても、とてもオープンな関係ができたんですね。いろんな大学や研究所から、たくさんの研究者にきてもらえた。そして、さまざまな助けをえられたんです。どこかの先生がはじめたプロジェクトだったら、学校系列などにしばられて、こうはいかなかったかもしれない。

10日ほどまえのことです。石原忠一顧問が、小川房人顧問に質問されたんですよ。「小川先生はどういう経緯で、ネットワークと関係されたんですか？」って。答えは「立花さんが代表だからですよ」。小川顧問と立花代表は、大阪市立大学理学部附属植物園の同僚でした。

それにつづけて小川さんが、「自分が関係してもいいなと思ったのは、みなさんがシロウトだったからですよ。シロウトが中国で、ここまでのことをやってきた。それは、現地のやり方にしたがってやった、ということでしょう。それだったら、たとえ失敗しても、取り返すことができる。だいじょうぶだと、思いました。

専門知識をもっている人たちはそれにしばられますからね。日本の考え方、自分のやり方でやってしまう。おうおうにして、現地の実情とあわないんです。そこから問題が発生するんですね」。

小川さんは顧問ですから、私たちを激励しようと考えて、そういう話をされるんでしょう。でも、含まれている意味の深さに、いつも驚かされるんですよ。やっぱり私は、先生に恵まれていると思うんですよ。そういうときに、しみじみと。

カササギの森に立って、南をみると、緑におおわれた山があります。遇駕山です。義和団の反乱に直面して、西太后は西安へ逃亡しました。大同経由だったんです。西太后の乗った駕籠が、どうかこうとか、ということで、遇駕山の名がついたんだそうです。あいまいなことで、すみません。カササギの森のふもとの聚楽村には、西太后が、一夜を過ごした家が、残っています。

遇駕山の山頂は 1,290m。山裾は 1,100m。なだらかな山です。ここに 1985 年、1,000ha 弱のマツが植えられました。現在の規格では、1ha 3,300 本ですけど、その当時は、もうちょっと、密に植えたようです。少なくとも 300 万本はあるでしょう。

生育のいいところでは 5~6m に育って、緑の山になりました。この地方の山は、ほとんど例外なしにハゲ山ですから、遇駕山はととてもめだちます。めだつことをねらって、北京一包頭の鉄道と、大同-張家口の道路のあいだにきめられました。三北防護林(緑の長城計画)の成功例として、国内外の見学・視察も少なくないんです。

ふもとから山頂にいたる、数ルートの道路があり、車で上がることができます。山頂には、管理小屋があり、護林員の袁さん夫婦が、暮らしています。その横に、小さなあずまやも建てられています。

見学・視察の人は、ここまで一気に、車であがってくるんですね。あずまやで、周囲の景色をみながら、説明を受けます。緑色地球ネットワーク大同事務所の技術顧問、老侯は、当時の主要な技術スタッフの 1 人でした。私たちのツアーがここにくるとき、「ちょっと説明してよ」と、老侯に頼むと、ちょっと、ではすまないんですね。そりゃあ、そうでしょう。働き盛りの、思い出の場所ですから。

たいていの植林プロジェクトには、同じような構造があります。てっぺんに、あずまやがあって、そこから周囲を見下ろすようになっています。上の指導者たちも、車でサーッとあがってきて、周囲をみる。「うん、よくやった。全山が緑になったじゃないか」というんでしょうね。じつのところ、これではもったいない。

これまでの観察では、海拔 1,500m を超えるところの植林は、たいていうまくいっています。それより低いところに問題が集中する。ここでの最大の制約要因は水で、高いところは気温が低いぶん、蒸発量が少なく、樹木が育ちやすいようです。また高いところほど、雲や霧がかかるので、それに助けられる。降水量も多いようです。

水が制約要因だ、というのは明々白々です。遇駕山でそれぞれ 50 本ずつ、7 ポイントで調査したんですけど、前年 9 月からその年 5 月までの降水量の合計と、マツの主幹の伸長量は、み

ごとに比例します。幹の太りは、1年遅れてあらわれるようです。雨の多かった年の翌年、幹が太るんですね。

高いところのほうが、生育がいいということは、一般的な傾向ですけれども、単独の山には通用しません。遇駕山の海拔1,290mの山頂は、カラカラに乾いています。もともと木のなかったところですから、土壌も流されていて、浅いんです。岩盤が露出しているところもあります。ですから、マツの生育ぶりはよくない。

それに比べて、ふもとは、生育がいいんです。降った雨も、流された土も、ふもとに集まってくるんですからね。伏流水も下のほうが期待できます。モンゴリマツもアブラマツも、平均で1年に30~40cmも伸びています。水条件のいいところでは、40~50cmは伸びます。樹形も、スラーツとしていて、ふもとのほうがはるかにすてきです。

ふもとのマツをみせたほうが、評価だって高まるはずなのに、それをしないんですね。サーツと山のうえにいて、またサーツと車で帰る。時間さえあれば、両方をみせるのがいいんでしょうけど、視察にくるほうが、そんなに熱心ともかぎらないんでしょう。

なんとか経験するうちに、私も気づきました。山のかたちも、山のようすも、山頂からみおろしたんでは、わからないんですね。ふもとから見上げるべきです。全景の写真を撮ろうと思ったら、もちろんふもとで、あるていど、離れる必要がある。

国のかたちも、国のようすも、北京からみおろしていたんでは、わからないでしょうね。ふもとからみないといけない。それが、たとえば大同あたりでしょう。すると、うしろ姿に、疲れがみえて、ハッとすることもあるでしょうし。

ことしの春も、桑干河はカラカラでした。この河は官庁ダムに流れ込み、北京の水源になるはずでした。ところが、官庁ダムは水質が悪化して、98年以降は、水源として役に立たない。

北京から日本にきている留学生に、私のつれあいが、「北京は水不足が深刻でしょう」と話しかけたら、「いいえ、北京は首都ですから、だいじょうぶです」と、こたえたそうです。山頂にいたら、山頂のこともわからないんですね。

そんなふうになると、「じゃあ、日本はどうなんだ？」と、逆襲されそう。世界からいえば、日本もそういう位置にあるのかもしれない。いや、サミットはとっくにすぎて、ふもとに近づきつつある、そういうチャチャをいれる人もあるでしょうね。

すでに書いたことですが、この協力事業をはじめ、最初の4年は、自分を抑えていました。歴史的なつながりの深すぎる地域ですので、ちょっとした一言が、関係を破壊しかねない。たとえば私が誰かを「バカ！」とものしったとする。「バカ！」とか「バカヤロー！」は、中国の革命映画やテレビドラマでくりかえされていて、特別の意味を、もってきてますからね。

同様の例に、「ミシミシ」があります。日本のヘイタイが、「メシメシ！ クーニャン！」といて、食べものや、若い娘を、探すんですね。映画なんかのなかで。いや、じっさいにその場に遭遇した人も、いないわけじゃないでしょう。「メシメシ」が、「ミシミシ」になまったんです。そして「ミシミシ」は、日本人をさすようになりました。

こんなふうにつかわれます。私が、知り合いの職場に、電話をかける。電話口にてた人が、「〇〇！ 電話！」と呼んでくれます。「だれから？」「ミシミシ！」（ちょっと声をひそめて）だれかはわからないけど、日本人からだ、というわけです。そのばあい、当然、蔑視のニュアンスが含まれます。私が、自分で体験したことです。

村の人から、「リーベンクイズ」（日本鬼子）といわれたことは、なんどもあります。それはしかたがない。対処のしかたもある。小学校にはいるまえの小さな子が、ニコニコ笑いながら、私を指さして、「ミシミシ！」と呼びかけてくる。これにはほんとに困るんですね。悪気があって、そういつてるわけじゃないから。

私としては、よくしんぼうしたと思うんですよ。この性格で、4年間ですから。そのあいだ、まったくケンカしなかったか、といえ、そうでもないんですけど。でも、基調としては、「友好一筋」だったんです。ウン、いま書いていて、突然、頭に浮かんだんですけど、

私が「日中友好」なんて、口にしたくない、耳にしたくもない、と思うのは、あの4年間の反動があるのかもしれない。

このままでは、暴発しかねないと、自分で自分に危機を感じてきたんですよ。96年春のことですけど、自分のタズナを、ちょっとゆるめたんです。すると、でてくる、でてくる。それまで、さほど不満に思っていなかったことまで、腹が立って、しかたないんですね。それをみんな、ぶつけた。

ずーっとつきあってきた祁学峰や王萍は、「高見はあのときから変わった」というんですけど、そういう事情があったんです。いまからふりかえって、それはよかったと思います。私が感情をぶつけるようになって、むこうも心を開いてくれるようになった。

そういう時期のことですけど、「山西省の青年団が、緑化のテレビ番組に、取り組むことになった。それに出演してほしい」という依頼がきたんですよ。いやだな、とは思ったんですけど、

緑化を広く訴えるのは、私のしごとのうちですから、太原まで、でかけたんです。通訳には、王黎傑がきてくれました。

テレビ局にいてわかったのは、緑化の番組というのは名ばかり。実態は歌謡ショーだったんですよ。歌と踊りのあいだに、「緑化先進青年の表彰をおこなう」というだけなんです。

「話がちがう」といって、私はかみつきました。「緑化の番組なんて、だれもみない。だから、こうやって、少しずつ、宣伝することに意味があるんだ」と、省の青年団は説明するんだけど、私は私で、「最初からそうきいてたら、絶対にこなかった」と、完全にすねてしまった。

本番のまえにリハーサルがある。いやだ、といてたんだけど、まあ、おぎなりに、なにかをしゃべったんですね。すると、「とてもよかった」とほめるんですけど、でも、「本番でおなじことを話すとはかぎらない」なんて、まだすねてたんですよ。

先方はホントに困ったようです。原因はよくわからないけど、高見はすねてる、生放送だから、本番でとんでもないことをいわれたら困る、と思ったようです。しばらくまえに、アメリカ人が、テレビの生放送でチベット問題を、突然、もちだしたんだそうです。王黎傑のところに、なんども、なんども、「高見はだいじょうぶだろうか？」と、たしかめたんだそうです。王黎傑は、私に、「へんなことを本番で話しても、私は通訳しませんからね」なんて、いいますし……。

表題の「ビートルズ」をみて、ここまで読んできた人は、「いったいなんの話だ？」と思われるでしょうね。本番の直前に、私のキゲンは一変したんです。スタジオにはいったら、BGMにビートルズが流れていたんです。「Let It Be」。聞いてるうちに、すっかりおだやかになったんですね。ビートルズの最盛期、私は大学生でした。でも、忙しくて、きいてる時間なんてなかった。すきでもなかったんです。でも、あれほど流行したんですから、耳には、自然には聞いてたんですよ。

そのとき、ほんとにいいな、と思ったんです。そして、なにかのときの鎮静剤になる、と。最初はカセットウオークマン。つぎはCD ウオークマン。最近ではMP3。ジョン・レノンのイメージを、満天の星空の下できいてると、悲しくもないのに、涙がとまらない。

小川房人顧問がいうんですよ。「ビートルズがこんなにいいとは思わなかった。あのころは騒がしいとしか思わなかったのに……」。あとになって、その話を紹介し、「ここで、ビートルズファンを、ふやしてますからね」とジマンすると、もう1人の顧問の遠田宏さんが、「きかされるのは、そればかりなんだから、慣れてくるんですよ」。

「黄土高原だより」をまとめた『ぼくらの村にアンズが実った』（日本経済新聞社刊・1600円）が、売れてるようなんですよ。「売り切れてて、探すのに苦労しました」という連絡があります。出版元のホームページに、「残りわずか」とあります。ロコミなんかで、広げてもらったようです。ありがとうございます。

## NO. 211 時間の流れ 2003. 06. 16

20年近くもまえのことです。鶴見良行さんを招いて、話をしてもらいました。本番が終わったあと、喫茶店にくりこみました。鶴見さんは、私たちにことわって、自分1人で離れた席にいき、ビールを注文し、チビリチビリ飲みながら、その日のことを、ノートにまとめておられました。

そのあと、私たちに加わってくださったんですけど、そのときの話が、ほんとにおもしろかった。書かれたものや、講演の内容は、いつでも、どこでも、知ることができる時代かもしれないけど、そういう場での話こそ、ほんとに価値がある。

いまでもはっきり覚えているのは、「アジアの時間は、ゆっくり流れる」というものです。「日本はアジアじゃないのか」なんてチャチャはいれないでください。わかったうえでのことから。

「ちくま」に、『ナマコの眼』の連載がはじまる、ちょっと前だったと思います。時間の流れが、国や社会によって異なる、というのは、そのとき、私には意外だったんですね。だから、記憶に残っている。

私はその後、大同の農村と、かかわることになりました。時間の感覚がまったくちがうんですよ。鶴見さんが話したのは、こういうことなのか、と思いました。あの話をきいていなかったら、とまどいは、もっと大きかったと思います。

でも、鶴見さんとは逆に、「ゆっくり流れる」のではなく、「速く流れる」と感じたのです。急用ができて、太原に1本、電話をかけないといけなかったんです。ところが、何回かけても通じない。だれもでてこなかったり、話し中になったり。ほんとに、まる1日、ダイヤルを回してたんですよ。それでも通じなかった。

なにもしないうちに、1日がすぎてしまいました。その日、1日、太原中の電話が故障してたんだそうです。それでも、なんのアナウンスもなかった。あったのかもしれないけど、私はわからなかった。おなじようにして、ほとんどなにもしないうちに、数週間がすぎてたりすると、ここの時間の流れは、なんと速いんだと、思ってしまうんですね。

農村は変化が少ないんです。辺鄙な貧しい農村は、映画にでてくる半世紀以上まえの農村と、ちがうところがないように思えます。日本人の私が、そう思うだけじゃありません。天鎮県の李二烟村にいったとき、北京からきた若い女性は、「こんなところは中国じゃありません」といいました。「革命によって、そのような問題はなくなった」と、教わりつづけてきたことが、目の前の現実としてあるのをみて、混乱してしまったのでしょう。

橋本紘二さんは、私と同年配のカメラマンですけど、モノクロが好きなんですよ。私の勝手な想像ですけど、そのほうが、いまの社会の、とくに農村の光と影を表現できると思っているのかもしれない。そのモノクロの写真を、中国の若い世代にみせると、「現代のものじゃないでしょう。少なくとも1970年代以前のものです」というんですね。

そういう農村の動きは、ゆったりした時間の流れ、とみることもできるでしょう。でも、私には、時間が、人びとを置き去りにして、ものすごい速さで、流れていくように感じられるんです。中国の農村の人は、内部にいて、どう感じているんでしょう？

そんなことを書きながらも、同じことだよ。表現は逆のようにみえても同じことなんだよ。という声も、自分のなかからきこえてくるんですけど。

日本と中国とで、まったく逆転する現象も、最近では、でてきたんですね。中国では、行政のトップが、どんどん若返っています。40歳前後の市長も、めずらしくない。もともとトップダウンの可能な体制ですからね。決定がものすごく速くなっています。

企業だって同じです。若い人たちが、起業するケースが増えました。国外に留学していた人たちが、中国国内のほうがチャンスが多いとみて、帰国することだって多いんです。私の知り合いのなかにも。

社会の変化も、ものすごく速いんですね。とくに沿海の都市部では。そのような人たちからみて、いまの日本はまだるっこしくて、しょうがない。どうでもいいような、プロトコルがやたら長くて、かんじんなことに、なかなかはいらない。双方をみながら、私もそれを感じます。

環境協力のなかでも、同じ問題があります。昨年、北京のシンポジウムで、中国側参加者から、ききました。場外での発言が多いんですけど。日本の協力はありがたいけど、手続きがやたら煩瑣で、決定に時間がかかる。必要なときにはこないで、いらなくなってからやってくる、と。

お金は、生かしてつかうべきだと、私は思いますよ。あっ、今回のテーマは、それじゃない

んです。「時間の流れ」でした。

6月14日が、私たちの第9回会員総会でした。槌田劭さんの講演も、たいへんよくて、いい総会だったと思います。

『ぼくらの村にアンズが実った』の書評が、6月15日付け読売新聞に掲載されました。評者の浅羽雅晴さんは、読売新聞の編集委員ですが、環境問題に造詣の深いかただそうです。私が書こうとした意図を、ピシッとまとめていただいて、ほんとにうれしいですね。

## NO. 212 日本村って、どこにある？ 2003. 06. 23

6月22日(日)の朝日新聞朝刊の1面トップに、汚水浄化の記事が、大きく掲載されました。東京版は2面左肩だったようです。

この春から、大同の環境林センターで、稼働している施設のことです。あの施設が動きはじめたとき、私たち以上によろこばれたのが、大阪産業大学の菅原正孝さんと、環境技術研究所の新井剛典さんだったんですよ。このクラスのものでは、「世界第1号ですよ」といって。でも、この汚水浄化装置については、私はすでに2回、この通信でくわしく書きました。

イラク戦争やSARSの関係で、この春の大同滞在は短かったんですね。新鮮なネタに困ってるんです。となると、古いものしかないんだけど、いまは梅雨どき。なまものだと、あたると怖いので、カラカラの干物にします。賞味期限をすぎているかもしれません。

1993年秋のことです。大同の農村を1人でブラブラしました。まっ黒に、日焼けしました。日焼けだけじゃなかったでしょうね。シャワーもろくろく浴びないから、垢だらけでもあった。会う人はだれも、私を日本人とは思わなかったようです。

私の中国語能力は、そのころがピークでした。勉強したわけじゃないけど、日本人は自分1人で、360度、どの方向からも聞こえてくるのは、中国語だけ。そういう環境にいと、自然に、つうじるようになります。発音はデタラメでも、必要最低限のことは、なんとか話せるようになる。

農村での日程を終え、太原にいったんですよ。滞在は短いので、バスもある、ちょっとはマシなホテルに泊まったんです。

ひょんなことから、ホテルのお医者さんと知り合ったんです。私のことを、彼は、少数民族だと思ったようです。漢語の話せない中国人は、少くないんですね。南方の漢語は、北方と

はまったくちがいます。漢族以外の少数民族もたくさんいます。そのなかには、漢語を話せない人も当然、います。だから、私のカタコトでも、外国人とは思われなかった。

「お前の故郷はどこだ？」って、聞いてきたんですね。「リーベン」といっても、つうじなかった。なんと言っても。山西省で「日本」というのは、私の耳に「ズーボン」と聞こえるから、それに似せて、なんどもくりかえした。でも、つうじない。

しかたがないので、メモ用紙をだして、「日本」と書いたんですよ。ところが、帰ってきた答えは、「ズーボン村って、どこにあるんだ？」。私の風体と日本とは、徹底して、結びつかなかったようです。あとで、いっしょに大笑い。

そのあと、北京にでて、タクシーをひろおうとしたら、「ニィダホワ、ティンプードン！」（お前のことばはわからない）なんていわれて、乗車拒否です。外国人とは思ってないんですね。どこかの農村からでてきた農民だと思われた。外国人だったら、こういう扱いはしない。

でも、悪いことばかりじゃないんです。そのころの北京の観光名所は、中国人と外国人とで、入場料がちがったんです。外国人は何倍もとられた。ところが私は、中国人なみ。積極的に、だましたんじゃないんですよ。

中国人料金が5元、外国人料金が10元、といったところで、私は、10元札をだす。すると、5元、おつりが投げ返されてくる。そこに、置きっぱなしにするわけにはいかないし、自分が外国人であることの証明は、私の語学力では、むずかしいから、その5元札を、ありがたく、いただいていく。

そういう場面で、「釣り銭を投げ返されるのが、とてもいやだ」という日本人がいます。おおげさにいえば、「あれで中国がイヤになった」という人までいる。神聖なお金をなんと思っているのか、というのかな？客をなんどこころえているのか、というのかな？私は、「私は平気ですよ」と答えます。「自分でも、投げて渡せばいいんですよ」とね。うん。そういうふうにしてきたから、中国人とまちがえられたのかもしれない。

たしか、紫竹院公園の入り口だったと思うんですけど、北京の王黎傑と、待ち合わせたんですね。私はちょっと早めに着いたんですけど、ほどなく、彼女もやってきました。私のすぐ前に立ったんですけど、私に気づかない。時計をみながら、人待ち顔。そのようすをしばらく楽しんでから、声をかけると、飛び上がらんばかりに、びっくりしたんですね。

ついでに話しますと、私はその日、この公園で、初めて会った人の家に泊めてもらい、そのまま1週間も居つづけたんです。私のズーズーしさを、ジマンしてるんじゃないんですよ。そういうところにも、中国の人たちの、心の広さがあるんです。私なんかに、同じことのできる

はずがない。

## NO. 213 汚水浄化の評判 2003. 07. 03

大同の汚水浄化装置について、話したいことはいっぱいあるんですけど、あんまりそっちに流れてしまうと、「緑化のNGO」を離れてしまいそうで、自制しているんですよ。

ところが、大同では、見学者があいついでいるようなんです。そういう人たちの素朴な感想を、何本か、大同事務所の武春珍が送ってきてくれたんですよ。それを読むと、やっぱり書かないわけにはいかないんですね。ちょっと紹介してみましょう。

「私は趙二女といい、48歳です。十数年来、南郊区平旺村で畑を借り、野菜をつくっています。水がないので、砵務局の生活区からくる汚水を野菜にやっています。ほかの人たちも同じようにしていますよ。この水は汚いし、臭気プンプン、野菜にもよくないことは、みんなわかっています。でも、きれいな水なんてないし、汚水だって、ただ流したんではもったいないでしょ。だから畑にいれているんです。

そうすると、肥料分が多くなりすぎたんですね、1年、1年、野菜がだめになってきたんですよ。とくにこの2~3年はひどくて、すぐ病気にかかっちゃうんです。畑が汚水で汚染されたせいじゃないかと考えました。で、水をやるたびに、怖いな、と思ってたんです。

はっきり思い出せないんですけど、この春のある日、流れてくる水が、突然、きれいになっちゃったんですよ。びっくりして、聞いて回ったら、植林の協力にきている日本人が、環境林センターのなかに、汚水処理池をつくったというんですね。村の人といっしょにみにいったら、処理池が1つあって、南から入るときは汚水なのに、北側にでるときはきれいな水なんです。

それでよくわかったんですよ。この水なら、安心して野菜にやれます。土壌を汚染することもないし、野菜の病気や毒を心配しなくていい。安心して売れるんですね。ですから、環境林センターの人に話したんですよ。日本の友人はほんとにいいことをしてくれました。今度会ったら、よろしくお礼を伝えてほしい、とね」。

趙二女(平旺村村民)

う〜ん。環境林センターで余ったぶんを、外に流したんでしょうね。それを周囲の農民たちが、とても喜んでくれているようです。この話を聞き取った小武の、トクイそうな顔も目に浮かびます。

でもね、こういうふうにしたのがよかったのか、どうか？いったんそのようにすると、それ

があたりまえになっちゃうでしょ。天候のかげんなんかで、水が必要になったら、自分のところを優先せざるをえないでしょう。そしたら、はたからどう思われるか？水の問題が、ここでは決定的な重みをもつだけに、慎重であらねばならない問題も、少なくないんですよ。

大同の水問題の深刻さは、つぎの感想からも、わかってもらえるでしょう。話しているのは、大同の石炭産地、左雲県で、小さな炭鉱の経営に参加している人なんだそうです。

「この汚水浄化装置をみて、ひらめくものがあつたんですよ。

小さな炭鉱はたいてい山の上にあり、石炭を掘っていくうちに、地下水がだんだん深くなるんです。炭鉱労働者は飲む水に困るし、まして、風呂なんてどうしようもないんですね。労働者たちは坑内で働いて、出てくるときは石炭でまっ黒。ほんとに風呂に入りたいんですよ。でも、それができるのは大炭鉱だけです。

炭鉱には、水がないわけじゃないんですよ。でも、あるのは汚水で、きれいな水はない。こんな小さな装置で浄化できるんだったら、水の悩みがなくなりますね。いまは仕事をはじめたばかりで、資金が緊張してますけど、ちょっと余裕ができれば、ぜひともこういう装置をつくりたいですよ」。

高化龍(左雲県小炭鉱責任者)

じつは、8年間、ずっといっしょに活動した祁学峰が、いまは南郊区の党の副書記です。炭鉱も彼の担当です。そこも水がないところが多いんです。飲み水もない。廃坑には水がたまっているというんですよ。その水を浄化できないかと、頼まれたんです。

あの浄化設備の基本設計をされた大阪産業大学人間環境学部の菅原正孝教授にたのんだら、なんとかなりそうだという返事です。うれしいですね。

共産党大同市委員会副書記の、梁鳳書書記の評価を最後に引いておきましょう。

「小規模汚水がわが市の環境に与える悪影響は、軽視できない状態です。たとえ流量は少なくとも、周囲の土壌と水源にたいする汚染は深刻です。この小規模汚水を処理することはわが市の環境保護対策が直面する重要な課題です。

環境林センターの汚水処理プロジェクトは、この小規模汚水問題を解決するための貴重な試みです。このプロジェクトの建設は、環境林センターの周辺数百ヘクタールの土地と水源汚染を改変するだけでなく、わが市の小規模汚水処理にとって、非常に重要なモデルとなるものです。

このプロジェクトは日本大使館の絶大なる支持と高見邦雄さんの助力によって建設されたものであり、わが市の環境保護にたいする新たな貢献です。十数年来、彼らが大同の環境のため

にはたした貢献は誰もが敬服しています。私は 300 万大同人民とともに、謝意を表します」。

私たちの協力は「木」ではじまったんですよ。そのなかで、「水」と「土」の重要性に気づいたんです。水、木、土。「金」がぬけてますね。お金の苦労がだんだん重くなり、少しも安定しないのは、そのせいでしょうか？

## NO. 214 困った性格 2003. 07. 07

陽高県の外事公安と、ケンカになったことは、以前に書きました。そのあと、仲直りをして、とてもいい関係になったんです。

後味の悪いのが、そのとなりの、天鎮県の公安とのケンカです。やりすぎちゃったんですね、私が。このときも、きっかけになったのは、カメラマンの橋本さんです。こう書いて、気づいたんですけど、大同でしたケンカによく、橋本さんがからんでいるんですよ。彼が原因というわけじゃないんだけど、どういうわけか、からむんです。

中国では、なにか大きな政治的なイベントがあると、その前後、とくに前が、異様に緊張するんです。そのときは 1997 年で、香港復帰を、直前に控えていました。こういうときには絶対に、問題をおこしたくない、というのが、中国なんですね。仮に、問題がおきても、純国内問題なら、もみ消しもできるでしょうけど、外国人がからむと、そうはいかない。そういうときには、できることなら外国人にきてほしくない。

沿海の大都市は、外国との関係も絡みあっていて、外国人を排除するなんて、不可能でしょうけど、大同ではまだ可能なんですよ。じっさいにやります。その結果として、対外開放が遅れるし、外資導入なんかも、うまくいかない。悪循環でしょうね。橋本さんたちが、撮影にきてても、その年は、動きがつきにくかったんですよ。

大同のなかでも天鎮県は、開放の度合いが低くて、問題がおきやすいんです。大同のカウンターパートも、それを気にしています。ところが天鎮県は、水土流失もいちばん深刻で、浸食谷も深いんです。水土流失や沙漠化がテーマなら、この県が、いちばん絵になるんですよ。

あらかじめ、電話連絡がしてあって、県の青年団の幹部が、陽高県との県境まで迎えにきてたんです。そして、いままでのところ、公安の許可がでてなくて、陽高県との県境に近い温泉で待つように、との指示なんだそうです。そこに公安がやってくる、と。

ところが、いくら待ってもこない。私たちだけならいいんですけど、今回は橋本さんが、全農映のビデオクルーを、誘ってきてるんですよ。時間がかざられているのに、初日からこれだ

と予定がくるうんですね。私もジリジリしてきたんです。催促の電話を、くりかえし、かけてもらうんだけど、「しばらく待て」というだけなんですね。お昼はすぎ、日が傾いてきた。

大同にいる祁学峰に、電話連絡をとると、「まちがいなく許可はでるから、もうすこし待つように」と、いったんですよ。それなのに、私は、「もう待てない、予定の場所にいこう」と、しぶる青年団のメンバーを、せき立てました。ちょっと車で移動したら、公安のパトカーがやってきたんですよ。そして、もういちど温泉に戻るように指示した。

私は頭にきたんですね。長く待たされて、イライラしていたうえに、先方が、まっ赤な顔をしてたからです。昼からパイチュー(白酒)をやってたんでしょう。私たちを待たせながら、で、温泉まで戻って、車を降りたとたんに、その公安をののしったんですよ。こちらはギリギリの日程を立て、お金もつかって、きているのに、貴重な時間をムダにってしまった、とって。

先方も負い目がありますから、最初のうちは、かなり低姿勢だったんです。そこで、やめるべきだったんですよ。相手が引け目に思っているところで、条件の交渉をし、有利に運べば、よかったんです。バカなことに私は、潮をみまちがえて、さらにエスカレートしてしまったんですよ。

そしたら、その公安が反撃してきたんです。「パスポートをみせてほしい」とって。間の悪いことに、そのときパスポートは、環境林センターの金庫にあずけていたんですね。

カウンターパートたちも、「大同のなかだったら、持っていなくてだいじょうぶだよ。落とすことのほうが心配だ」といったもんですから。

公安は、私のパスポート不携帯を知って、高飛車にでてきたんです。「さっきまでの話をきいていると、おまえは中国のことを、とてもよく知っているのに、外国人に、護照(パスポート)を常時携行する義務があることを知らないわけがない」というんですよ。

そんなことをいわれても、また、繰り返すだけのズルサ、ズーズーしさを、そのころの私は、身につけてなかったんですね。腰が砕けてしまった。引き下がらざるをえなかったんです。せめてもの幸いは、翌日からの行動に、支障がなかったことです。予定どおりに、撮影ができました。

天鎮県のその公安は、それ以後も、私たちのツアーが、あの県を訪れるたびに、全員にパスポートを提出させて、点検するようになったんですね。その作業に、私たちの通訳を、立ち合わせて……。通訳不在のために、県長主催の歓迎宴をはじめることができない、なんてことも、あったんですよ。

これではまずいし、陽高県の公安と仲直りした経験もあったから、あるとき、そばによって、

関係修復をはかろうとしたんですよ。そしたら、「私語はしない」の一言。とりつく島もない。

あのとき、私がやりすぎたのが、その後はずーっと尾をひいてしまったんです。反省はしたはずなのに、その後も、同じようなことを、私はくりかえしてるんですね。ほんとに困った性格です。どちらかという、小心で臆病なのに、あるところで、切れてしまう。

じつは一昨日、出身の米子で講演をしたんですよ。政策工学総研の、勝部日出男さんにいわれて。懇親会の乾杯の音頭を、小・中・高の同級生、白石義光さんが、とってくれたんです。私が小学校3年のとき、担任の先生にくっついてかかって、参観日に廊下に立たされた、といったことを、彼は暴露したんですね。私は記憶になかったんですけど、(そんなことが多すぎたからでしょう)、小学校低学年から、こうだったようです。死ぬまで、治らないかもしれない。

## NO. 215 村の意思決定 2003. 07. 24

1997年夏のことです。大同県の東閣老山村を訪れて、びっくりしました。最初は廃墟かと思ったんですね。たくさんのヤオトン(窯洞)がつぶれています。人の姿もみられなかった。

この村は、1989年の地震で被害を受けました。大同県と陽高県の県境が震源で、両県の被害が重なったので、「大陽地震」と命名されたんです。その復興のために、世界銀行の借款を受けました。政府が世銀からお金を借り、それを被災民に又貸したんです。

農村の住居は、それまで、大部分がヤオトンでした。材料は日干しレンガです。

土窯(トゥヤオ)といいます。人が住まなくなったら、やがては風化し、土に返っていきます。だったら、壊れた住居を片づけて、おなじ場所に、新しい家を建てるより、べつのところに村ごと移転し、そこに新しい家を建てたほうが、手間もかからないし、費用も安くてすむ。そういう例を、それまでにもみていました。

東閣老山村のばあいも、1kmほど離れたところに、新村がみえたんですよ。あそこがそうだ、と郷の幹部に紹介されたんです。まるごと移転したんだと、最初は考えたんですよ。ところが……、廃墟と思った村のなかに、人影があったんです。

大陽地震は1989年だったんですけど、91年にもかなり大きな余震があったんですね。そして95年の秋、長雨がつづきました。2度の地震でひび割れたヤオトンは、このときの雨で、傷口を広げました。私たちが訪れたのは、そういうときです。

傾きかけたヤオトンを、ポプラの丸太のつかい棒が支えています。そのつかい棒に洗濯物が干してあったりする。入り口のすぐ横の部屋は、亀裂が激しくて、とても住めないだけ

ど、その奥の部屋に一家の4~5人が寄りそって、暮らしている、なんて家があるんですね。

母屋はつぶれてしまい、庭の家畜小屋で一家が暮らしている、なんて家まであったんです。遠田宏さんは、ヒツジでも飼っているのかな、とのぞきこんだ小屋に、一家が暮らしていて、ほんとにびっくりした、と話していました。95年の水害からでも、2年近くたっていたんですよ。

住民の一部が、従来の子に残ったようです。その理由が複雑なんです。取り残された人たちの話では、「世銀の借款の話があったとき、確実に返せる見込みのない家は、対象から除外された」というんですよ。貸してもらえなかった、というわけです。残されたのは、パツとしない人が多いようです。

私なんか、日本の戦後民主主義の洗礼を受けた最後の世代とっていいと思うんです。人は平等で、出発点においておなじ能力を持っている、といった信念で生きてきたんですけど、現実はそのようではないようです。人の能力は、一様ではないんですね。取り柄、取り柄もあるんですよ。

リーダーシップをとるのがすきで、それがトクイな人がいるんですね。実際的なことはなんにもできないけど、話をさせたら、人をその気にさせる、という人もいるでしょ。その反対に、人前で話なんてできないし、存在も地味だけど、確実なしごとをする、という人だっています。いろんな人が集まって、社会を構成しているんです。

ところがこの村は、かなり乱暴な基準で、2つに分けられたわけです。住宅を再建するための借金を、返すあてがあるか、そうでないか、といったところで。その基準でみれば、旧村に残った人たちは、落ちこぼれです。村としての機能も、失われたようです。みんなの中心になって、リーダーシップを発揮する、そういうタイプの人々がまったくいなくなったからです。

村を回ったあとで、郷の幹部に話をきいたら、異なる回答が、返ってきました。「あの人たちは、借金をするのが怖いから、お金を借りようとしなかった」というんですよ。借金のために、土地を失ったり、妻子を売ったり、といった歴史が、中国の農村では繰り返されたんですからね。

「借金をさせてくれなかった」のか「借金が怖くて、しなかった」のか。まったくちがうことが、いわれているわけです。「正解は1つで、どちらかがウソをいってる」と思われるかたもあるでしょう。

でも、そうじゃないようです。なんどもなんども集まり、話し合いをもつなかで、「返せそうにない人まで借りたら、その人のぶんまで連帯責任になるかもしれない。そういう人は借りる

べきでない」という暗黙の了解(のようなもの)が、できたようなんですよ。そして「自分たちは借りません」とあたかも自発的にいいだした人たちがいた。そういう事情は、外からでは、なかなかわからないんですね。

聞き取り調査というのは、ほんとにむずかしいんですよ。1人、2人だけからきくのなら、きかないほうがいいくらい。きくんだったら、たくさんの人にきく必要がある。そういうことを、つよく感じたのが、この村だったんです。

昨晚、いっしょに飲んだとき、世話人の前川さんから、「最近、たより、でてませんね」といわれてしまいました。ちょっとあいだがあいてますね。私のPDAには、52回分のテーマのメモがあり、増えることはあっても、減ることはないので、(出来不出来はともかく)ネタに困ることはないんですけど……。

いまの時期、日本にいるのは12年ぶりです。SARSで、夏のツアーが、すべて中止になったためです。でも、7月27日から、また中国です。次号は現場のホットな話題を送れるでしょう。

## NO. 216 洪水 2003. 08. 05

7月28日から、大同にきています。悲しい知らせです。私たちが大同にくる直前、7月25日に、大同県、陽高県、南郊区を中心に、集中豪雨がありました。1937年以来の、激しい雨だったそうです。

なかでも深刻だったのが、大同県聚楽郷です。そう。私たちの「カササギの森」があるところ。被害が大きい、ということなので、心配して、みにいきました。

登る途中に、采涼山の植林プロジェクトがあります。毎回、マツの伸びぐあいを見ています。ことしは、マツの育ちが、とてもいいんですね。3月に雪がなにか降り、4月の雨も、例年より多かったのです。2000年に植えたもので、1m前後に育ったものもあります。この春から、30cm以上も伸びています。

そのつづきで、ことしの春に植えたものを、みにいきました。ここも、活着率はきわめていいのです。私が「90%は行ってますね」というと、林野庁OBの相馬昭男さん、棟方鋼男さんが、「いや、もっといいですよ。枯れているものが、ほとんどない。95%は行っているでしょう」。

とはいっても、その苗は小さいんです。地上に顔をだしているのは、せいぜい10cmくらいのもので、草のかげにかくれています。報告のために、写真が必要なんですけど、それが苦勞なんです。あいだにはムレスズメが混植してあります。これもよく育っています。

カササギの森でも同様です。2001年に植えたマツなんか、驚くほど、大きくなったんですよ。管理棟より下では、道路のあちこちに、水がえぐった溝ができていますが、苗への被害は、ほとんどありません。

ところが、管理棟の周囲では、マツの枝の折れているのが、めだちます。葉っぱがむしられているのも、少なくありません。雨といっしょに降った、ヒョウによるものだそうです。

カササギの森の技術者に、話をききました。7月25日の午前10時ごろから、雨は降りはじめ、およそ1時間、激しく降ったそうです。ヒョウが降ったのは、15分ほど。直径2cmほどで、「ここまで積もった」とジェスチャーで示されたのは、25cmほどでした。

こういう話は、おおげさになりがちなものですよ。にわかには、信じられませんでした。ところが、管理棟より上のほうにいくと、道路の両側の土に、直径3~5cmのくぼみが、無数にできているのです。これだけの痕跡を残すとなると、ヒョウはかなりの大きさで、勢いも強烈だったでしょう。頭にでもあたれば、大ケガをします。

上のほうにいくほど、苗の被害がめだってきました。ここの植林は、魚鱗坑方式が多く、穴を掘って、流れてきた水を貯めるようにし、その底に、苗を植えます。その苗が、流れてきた土で、埋まってしまいました。ここの人たちは、総出で、苗木の掘り出しに、あたっていました。

実験的に植えているナラやカンバの苗は、ヒョウに葉をたたき落とされ、茎だけになっているものがあります。大同事務所の武春珍所長が、7月20日に見回ったときは、とてもよく育っていたそうで、なんども、なんども、くやしがりました。

ここにこられた人はご存じのように、敷地の中央に谷があります。谷の幅は最大200mほど。平素の流れは、せいぜい幅2mくらいですが、なかなかきれいな水です。その下には伏流水があり、ポプラが、スラーッとよく育っています。自然に生えたヤナギやヤナギハグミ(沙棘)が谷の大半を埋めて、青々と茂ってきました。

環境林センターの並木のヤナギの直径5~8cmほどの、棒杭のような枝を直接ここに挿したら、みな活着しました。「これがほんとの挿し木だな！」などといって喜んでいました。

それから、ここの谷底には、ポプラやヤナギの小さな苗が、たくさん生えてきていました。以前は放牧のヒツジに食べられていたのに、私たちがここを管理するようになって、生き残るようになったのです。大同の周囲には、こういうところは、ほかにありません。ちょっとした自然の公園のようになっていたんですね。

ところが……谷の両側の太いポプラを除いて、壊滅してしまったんですよ。大小の石が、ゴロゴロ転がる、ただの河原に、なってしまいました。一抱えもあるポプラが、何本もなぎ倒されました。

残っているポプラの立ち木に、茶色く枯れた木の幹、枝、根などが、たくさんひかかっています。なかには地面から2.5mくらいのところに、ひかかっているものもありますから、それだけの水が出た、ということでしょう。想像するだけで、恐ろしくなります。

技術者の話では、増水がはじまったのは正午ごろで、夕方6時くらいに、退きはじめたが、それでも、人は渡れなかったそうです。カササギの森の観測では、降水量は48.4mmだったそうです。でも、あれだけのヒョウが降ったとすれば、降雨計の外に、こぼれたものが、あったかもしれません。

そのうえ、北のほう、山のほうほど、被害が大きいことをみると、谷の奥ほど、降水量は多かった可能性があります。この谷は、奥行きが10km以上あり、広い範囲から、水が集まってきたのです。

私たちは、谷底に貯水槽をつくり、川の水をそこに貯め、ポンプアップして、植樹のさいの灌水に利用してきました。その貯水槽が、跡形もありません。幅90cm、長さ3mほどのコンクリート製のフタが、数十mも下で、みつかりました。レンガを積み、モルタルで包んだ貯水槽の壁部も、一部は100m以上、流されていました。ポンプはみつかりません。石の下に埋まってしまったのでしょうか。

高さ1.3mほどの自然石に、「喜鵲林(カササギの森)」と、小武がペンキで書き、看板がわりにしていたんですけど、その石がみつからないんです。そんな石まで、流されたんですね。

カササギの森の被害は、そんなところですけど、いつもお世話になる聚楽村では、流れ込んだ水で、家の土壁が倒壊し、合計3人が亡くなりました。1人は行方不明で、絶望視されていました。

土砂が流れ込んで、壊滅した畑が130haほど。ヒョウによる被害も、少なくなかったようです。ひどいところは、鶏卵大のヒョウだったそうです。郷の経済損失は、1700万円にのぼる見込みです。

私が、大同に足を運ぶようになって、12年。奇数年でいい年は、1度もありませんでした。なかでも、1999年は、「建国いらい最悪」と呼ばれる大旱魃。2001年はさらにひどく、「100年に1度の大旱魃」だと、地元の人は嘆いていました。聚楽郷は、大同県のなかでは貧しい郷で、

そのときの1人あたり年収は、150～200元だったといいます。そこに今回の洪水の害。ことしも奇数年です。

災害は、貧しいところを狙い撃ちする。その実感を深めざるをえません。

## NO. 217 プレスエクスカージョン 2003. 08. 09

本来なら、まもなく近畿洋上大学の500人が、大同にやってくるはずだったんですね。ところが、SARSのために、中止になった。夏の私たちのツアーも、中止しました。9月に予定されていた、2つの労働組合のツアーも中止です。私たちにとって、打撃は痛烈です。

いまの大同は観光シーズンです。ところが、雲崗石窟にいても、観光客が少ないんです。とくに、外国人の姿が、まったくみられない。2001年12月に、ユネスコの世界遺産に登録されてから、外国の観光客も増えてたんですけど、いまはいないんですね。

大同の中国国際旅行社の日本部部长に、「どうですか？」ときいたら、「減ったんじゃないんです。まったくこないんです」との答え。以前は1700元だった職員の賃金が、いまは400元。「生きていくのがやっとなです」。

当然、ホテルはガラガラのはずです。ところが、満室とはいかないまでも、けっこうお客がいるんですね。観光客や、ビジネス関係も、いないわけじゃないけど、会議参加者が多い。いろんな名前の会議が、連日、開かれているようです。

「ホテルがなりたつのは、共産党のおかげですね」と私がいうと、みんな苦笑いします。昔から、「共産党の会議、国民党の税」というんですね。民衆は、そのために苦しんだというんですよ。

そんなわけで、私たちも、多少はヒマになるはずだったんですけど、北京の日本大使館が主催するプレスエクスカージョンを、受け入れることになったんですね。ことしの4月、目賀田周一郎公使がきて、成果をあげているから、中国の人にも、もっと広く知ってもらいたい、ということになったんです。

北京を7日の朝にでて、8日中には、北京に帰り着くという、強行日程です。そこに、渾源県呉城郷、大同県采涼山プロジェクト、カササギの森、環境林センターと、これだけはみてほしい、というところをつつこんだんです。それから、雲崗の石窟も。

参加したのは、人民日報、中央電視台(山西電視台)、新華社、China Daily、北京日報、北京

青年報、工人日報、北京晩報、中国経済時報、中国新聞社、中国環境報、という中国側 11 社と、北海道新聞、時事通信、日本テレビの、日本側 3 社でした。

最初は、大使館の公使がくる予定で、参加予定のプレスももっとあったんですけど、日本の外相が、訪中したんですかね。ずっと農村をまわっていて、ニュースに、うといんですけど。

「大新聞社ばかりじゃないか。まとまって大同にくるなんて、はじめてのことだ」と大同の人たちは、緊張したんですよ。ところがこの人たちが、若いんですね。3~4 人以外、20 歳代でしょう。農村出身者に、手をあげてもらったら、たったの 1 人でした。

大同から渾源に行く道が、橋が落ちて、通れないんですよ。しかたがないので、未舗装道路をいったんですけど、ガンガン揺られて、それに驚いていましたから、農村に行くことも、ほとんどないんでしょうね。

遠田さんと私とで、ふだんのツアーと同じように、バスのなかで案内しました。それを王萍が、通訳してくれます。いつも話していることだから、彼女も、余裕をもってやっています。

中国側記者たちは、とまどったと思うんですよ。大同の現場の説明を、地元の人ではなく、日本人の、私たちがするんですから。

私たちには、作戦があったんです。これだけの記者があつまると、せっかくの機会ですから、水問題の深刻さを、認識してもらいたかったんですね。大同から渾源に、直接いく道、応県経由で、渾源から大同に帰る道、どちらのルートを通っても、桑干河を、橋で渡るんですけど、そのとき、流れがまったくないのを、みてもらえる。とくに、応県のほうは、河川敷が、ほぼ全面、トウモロコシ畑になってるんですね。ところが、どちらも工事中で、通れないんです。

本来なら、冊田ダムの底になっているところに、未舗装の道路があるんですね。流されてくる土で、ダムの底が埋まってきた。かなりの部分が畑になり、道もつくられたんです。新しい地図にも、載っていません。そこを往復しました。多少の水はあるんですけど、そのようすを、彼らにもみてもらいました。

「ほんとにこれが桑干河か。流れなんてないじゃないか」といって、みんな、驚いていました。北京の人たちも、桑干河が北京の水源だなんて、知らない人が多いから、コース案内をかねて、地図のコピーを、配っておきました。遠田さんの発案です。

呉城郷の、成功したアンズ畑をみて、彼らの態度も、変わったんです。ここの村が、これほどの規模で、成功させているとは、思っていなかったんでしょうね。それから、遠田さんも私も、質問攻めにあっただけです。

この調子で書いたら、1回で終われそうにありません。しかも、これから北京に向かって出発する時間が迫っているんですね。明日は、日本に帰ります。興味深いこともあったので、それについては、機会をみつけて、また書くことにします。

聚楽郷の洪水で、4人の死者がでたことは、前回の通信で書きました。それを、どこかの新聞が、「半分は天災、半分は人災」と、書いたんですね。そして郷の党書記の、張春が批判されたんです。私の知るかぎりでは、彼はいい幹部ですよ。彼のような責任感があり、熱心な人は、めったにいない。

そりゃあ、たしかに、自然災害への備えを、行政がしておくべきです。だけど、あれだけ貧困な、末端の郷に、どれだけのことができるんですか。問題にするなら、もっと上を対象にすべきでしょう。

農村の実情を、知らないから、災害の、悲惨な結果だけをみて、そんな記事を、書いてしまうんですね。大同の人たちが、今回、とても緊張していたのは、たぶん、そういうことを恐れたんですよ。農村のことを、まったく知らない、北京の記者は、なにを書くかわからない、と。

## NO. 218 白紙にきれいな絵を 2003. 08. 19

前々号で「カササギの森」の洪水について書いたら、たくさんのかたから、慰めと励ましをいただきました。「地元の人たちは、さぞかし力落としのことでしょう」と心配していただいたんですけど、彼ら、彼女らは、みんな元気です。これくらいのことには、なんとも思っていないようです。なんて書いて、神経が通っていないと思われても困るんですけど、ほんとに、たいして、こたえていません。

このていどの災害は、しょっちゅうなんですね。自然の災害だけでなく、人間のもたらす災害にも、たびたび直面してきました。私なんかより、はるかに人間が、強靱にできあがっています。少しはマネをして、私も、もうちょっと強くなりたいものだと思います。

『中国生活誌－黄土高原の衣食住』（大修館書店、1984年）という本があって、内容は、羅漾明さんと、竹内実さんの対談です。羅漾明さんの故郷は、山西省朔県（現・朔州市朔城区）で、大同のすぐ近くなんですね。幼いころの思い出がたくさん語られています。大同を理解するうえで、この本に、ずいぶん助けてもらいました。

ふつうに助けてもらっただけではありません。大同の若い人たちを前に、「この地方の農村で

は、こういう風習があった」などと、この本の受け売りをすると、彼らは、「どうしてそんなことまで知っているんだ？」と聞いて、おそれいるんですね。あはははは。

そのなかに、豪雨の話がでてきます。「……黄土色の水がおしよせてきた。ちょうど二、三階だての建物が前進してくるみたいにしてやってくる。われわれが立っているところのぎりぎりいっぱいまできたんです」と、命からがら逃げたことを、羅漾明さんは語っています。

それから、こうも語られています。「……平地はまったくいい天気なのに、山奥にそういう雨が降ると河が急にはんらんする。むかしは年に何回かこういうことがあって、子どものときよく城外の河にそれを見にいったんですよ。中に立ち木やら家畜やら家財道具、ときには人間の死体も流れてくるんです」。

「……雹の大きいやつは直径4、5センチくらいあって、牛が死んだという話を聞いたことがあります。よく瓦を割るんですよ」。

こういう話を最初に読んだときは、ほんとうとは、思えなかったんですね。その後、私は大回に通うようになって、話されていることの精確さに、驚いたんですけど、ここの部分だけは、いくらなんでも、まさか、と思ってたんです。こどものころの記憶は、大きくなりがちだから、と。

ところが、私が自分の目で調べたところでも、カササギの森の、7月25日の洪水は、深さ(高さ)が、2.5mはあった。地元の人たちは、最大4mだといっています。谷の幅のせまいところは、水位があがるから、そういうところもあったでしょう。だとすると、「2、3階だて」の水がでて、ふしぎはない。

洪水の一部が、聚楽村へ流れ込んだんですよ。数軒の家を、直撃しました。土の壁が破られ、その下敷きになって、2人の人が亡くなった。その現場を、私たちもみてきました。もうちょっと、しっかりした家だったら、人命にかかわることは、なかったでしょうけど……。この村では、合計4人が亡くなりました。

カササギの森で、雨が激しかったのは、7月25日の午前10時から、1時間だったといえます。谷底が増水し、洪水になったのは、正午ごろから。雨が小降りになり、やがてやんだころに、洪水がやってきたんです。

カササギの森の谷の底には、ポプラやヤナギ、ヤナギハグミ、ギョリュウなどが生い茂って、ちょっとした林になっていました。空いたところに、私たちも、ヤナギなんかを5000本ほど植えて、それがよく着いてたんです。その大部分が、あつというまに流され、ただの河原になってしまった。

私がしょげているのをみて、遠田宏さんが、「けっこう速く復元しますよ」と、なぐさめてくださったんですね。北海道の浪花彰彦さんも、おなじ趣旨のメールをくださったんです。「ヤナギなんかは強いですからね。石の下に埋まっても、けっこう生きていて、すぐに芽を吹きだしますよ。下流のほうの緑化も一気にすすめることになった、と思ったらいいじゃないですか」ということです。おそらく、そうなるだろうと思います。

そして今回は、少なくとも表面はすべて流されて、白紙になっちゃいました。せつかくですから、これもいかしたいですね。昨年春あたりから、この谷の底には、ポプラやヤナギが、たくさん芽生えていました。タネが自然に飛んできたんです。ほかの樹種も、同じように試せるかもしれない。たとえば、シラカンバ(白樺)です。

自然林にこだわって、いくつもいくつも探してきたんですけど、先駆樹種の1つが、シラカンバです。よく育っています。なかには、カラマツの人工植林のなかに、いつのまにか入り込み、カラマツを追い抜いてしまった、なんてところもあります。霊丘の植物園でも、どんどん自生してきて、伸びがいいんです。そういうことからみると、もっと注目すべき木なんでしょうね。

あの谷を、ずっとさかのぼったところに、村があり、名前は麻地溝です。「麻地溝の羊」といえば、大同で有名なんですね。この谷には、たくさんのハーブが生えており、それを食べて育ったヒツジは、臭くなくて、おいしい、というんです。麻地溝村の近くには、シラカンバがあります。

ところが、その下流の、カササギの森の敷地のなかでは、これまで、みたことがありません。数は多くなくていいんで、大きめのものを移植しておきたいんですね。シードソース(種の供給源)にします。林野庁OBの棟方鋼男さんが、「こうやったらいいですよ」といって、移植方法のメモを、残してくださいました。ほかにも試せる樹木が、数種類はあるでしょう。

せつかく白紙になったんですから、その一部に、これまで以上にきれいな絵を、かいてみたいものです。あの洪水は、1937年以來というんですから、またくる可能性はあっても、この1回で、あきらめることはないでしょう。

カササギの森に、中国と日本の若い記者たちがきたとき、いま書いた最後の一節を話したら、なんと、拍手がきたんです。いかにも中国的な表現だったんですね。長く中国にかかると、自分で意識しないうちに、しだいに取り込まれているのかもしれない。

いまから4年前のことです。自宅のまえの道路は、幅員が1.8mしかなかったのを、4mあまりに、拡張することになりました。この家に引っ越してきて、すぐに植えたカリンの木が、それにひっかかるんです。たくさん実をつけるようになって、カリン酒にしたり、シロップをつくったり。枯らさないで、なんとか移したかったんですよ。

住んでるのは、宝塚市山本で、植木や花の産地です。近所の造園業者さんが、作業をしてくれました。3人がかりで、ていねいにスコップをつかい、大きな根鉢を、つくってくれました。声をかけあいながら、わら縄で根巻きをしていきます。そのようすをそばでみていて、あきなかったですね。まさに芸術ですよ。きちんと巻いて、最後の最後に、ゴクツと持ち上げたんですけど、根の周りの土を、根から離しません。

それほどていねいにしてもらったんですけど、そのカリンは、弱って、去年の秋には、枯れてしまいました。根際を、テッポウムシが、食い荒らしていたんですよ。気づくのが、遅かったんですね。移植のやり方が、まずかったわけじゃないんです。

そのような作業にくらべると、中国のやり方って、乱暴そのものです。ことしの4月、環境林センターに汚水浄化施設が完成しました。見学者が多くなるぞ、とって、周囲の環境整備をはじめたんですね。なんと、直径7~8cmにもなった、シンジュ(ニワウルシ)の木を3本運んできました。「苗」と呼ぶのが、はばかられます。

根鉢なんて、いえたもんじゃない。土はすっかり落ちて、太い根が、無残に、断ち切られているのが、まるみえです。「そんなものが着くのか？」と私がいうと、「着く、着く。この木は、これくらい太いほうが、着きやすいんだ」と答えるんですよ。

ポプラやヤナギだと、そんなものでも、よく着くんです。直径10cmもあるヤナギの棒杭を地面に打ち込んでおくと、そこから芽がでる。そういう場面もみてきました。でも、シンジュは、もっと小さい苗を植えたときでも、枯れるものが、多かったですよ。たぶん着かないだろうと、私は思ってたんです。

ところが、7月にいってみると、3本とも、着いてたんですよ。青々と、葉を広げていました。う〜ん。認識を改める必要が、あるでしょうね。

2002年の春、環境林センターの新築レンガ塀の内側に、エンジュの木を、ズラッと植えました。これも、胸高直径7~8cmで、根なんて、ほとんど、ついてなかった。日本の園芸屋さんがみたら、卒倒するでしょう。でも、活着率は、95%はあったでしょう。枯れたものは、ほとんどなかった。

針葉樹は、そうはいかないんですよ。カササギの森に、イブキの大苗を植えたところ、ほとんど着かなかった。春先の強風に、揺さぶられたことも、あるんですけど。全体的にみて、針葉樹は、移植に弱いようです。もちろん、落葉広葉樹のなかにも、移植に弱いものも、あるでしょう。でも、日本で考えられているのよりは、ずっと強いようです。

日本では、苗を植えるといっても、数は、たいしたことはありません。多少はお金がかかっても、それも、たいしたことないでしょう。たいていは公共の場ですしね。1本も枯れないように植えることに、価値が求められるようです。

ところが中国では、たとえば道路わきの並木でも、国が広いぶん、ものすごい数になります。つい並木と書いたんですけど、いまやられている緑化運動は、道路の両側に、50～100メートルの緑化帯をつくったりしてるんですね。あれはやりすぎですよ。あんなことをする必要が、どこにあるんでしょう。道路のきわの、好条件の畑をつぶしてるんですから。

話がそれちゃいましたけど、あの数をこなすには、省力的な植え方が必要でしょう。仮に1～2割が枯れても、あとで補植すればすむ話ですからね。大きな根鉢をつければ、苗の輸送だって、穴掘りだって、たいへんなことになるでしょう。コストパフォーマンスも、考慮しないとイケない。

そう考えると、日本ふうのていねいなやり方が、技術的にすぐれているとは、いえないんです。その一方で、いまのようなやり方だけでは、着きやすいものだけを植える、といったことになりかねません。着きやすいものには、それなりの扱いをし、むずかしいものにも、ちゃんと対処できる、そういう技術が必要になるんでしょうね。

## NO. 220 関久子さんのこと 2003. 09. 01

9月1日から、また大同です。前日の8月31日、山歩きがしたくなりました。前夜からの激しい雨が、朝まで残っていたので、近場にするしかありません。能勢電車に乗って、妙見山にいきました。登りは、ケーブルカーとリフトで、下りだけ歩く、いつもながらの横着ぶり。

下りは谷筋なんですけど、そこに、マタタビの実が落ちてたんですよ。あちこちに。マタタビは、水に近いところが、好きなようです。マタタビの実の本来の姿は、砲弾のようなかたちで、スマートなんですけど、自然のなかのものは、たいてい虫えい(虫こぶ)がついていて、でこぼこのカボチャのようになっています。薬効はこちらのほうが、高いといえます。

つれあいといっしょに、ビニール袋にひろいました。帰ってから体重計に載せたら、4kgありました。ショウチュウにつけて、薬酒をつくるんですよ。

30歳代末から、40歳代はじめにかけて、私のからだはガタガタでした。いまよりずっと、やせてましたし、顔も性格も、とんがってた。十二指腸潰瘍と、胃潰瘍は、いつものことだったし、腰痛にも悩んでました。ちょっとムリをすると、そのあと動けなくなるんです。

関久子さんが、能勢へ、薬草とりに、誘ってくださったんですね。胃腸のために、とって、ヒキオコシ(延命草)を、すすめられました。腰痛には、マタタビがいい、ということでした。マタタビの実を、10kg以上もひろって、ショウチュウにつけたこともあります。

それらのおかげも、あったのでしょう。つらい、つらい、数年間をすごしたあと、私は、健康をとりもどしました。大同の農村を、泊まり歩いたのは、44歳からなんですけど、たいいていの人には負けないくらい、元気になったんですね。そのころから、性格も変わってきたと、自分で思います。

マタタビをひろいながら、関久子さんのことを、思い出していました。関さんは、20世紀にはいつてすぐの生まれ、でした。戦前・戦中・戦後をつうじて、反戦と平和のために、たたかいぬかれた人です。日中友好にもたいへん熱心でした。感性豊かな歌人でもありました。でも、関さんの全体像を伝えるのは、私には荷が重すぎます。思い出の、断片を書きます。

関さんは、豊中市内の、国道沿いの家に、住んでおられました。ほかにないくらい、ガタガタの、小さなボロ家でした。はいつてすぐは、小さな土間で、そのすぐ左に、関さんのくらす部屋がありました。コタツのあることが多かったと、記憶しています。いつも何匹か、ネコがいました。もう90歳くらいだったのでしょうか。

道路に面した、入り口の戸の、建てつけが悪く、開け閉めに苦労されていたので、大工道具をもちこみ、私が修理することにしました。ガラス戸をはずし、戸車とレールを付け替え、ガタガタしているところに、補強金具をあて、木ネジで締めて、さあ、できあがり！そう思ったのですが、かえって、動かないのです。家そのものが、傾いているとき、戸だけを、直角に組み直しても、どうしようもないんですね。それまでは、戸がガタガタ揺らいでいたから、開け閉めができてたんですよ。

関さんの家の近くに、スーパーがありました。買い物にいかれることも、あったようです。私に、こぼされます。「このネコたちがいなかったら、買い物なんか、しなくてすむんだけど…」。

そういう暮らしを送りながら、関さんは、「中国の緑化費用です」といって、なんどか、私にお金を渡されたんです。びっくりする額でした。私が、「関さん、とても受け取れませんよ」というと、「あなたにじゃないんです。中国の緑化のためです」とおっしゃいました。

そして、「もう何年かまえに、あなたがこのことを思い立ってたら、中国にいて、私も木を植えられたんですよ。でも、もうムリです。途中で倒れたりしたら、先方に迷惑をかけるでしょ。そんなことは、絶対にできません」。そんなふうにいわれると、私は、お金を受け取って、帰るしかありませんでした。

その後、どんどん私は時間がなくなり、関さんが亡くなられたときも、大同にいて、その事実さえ知りませんでした。

関さんのようなかたの参加があったから、緑の地球ネットワークは、いくたびもの困難を、乗り越えることができたんですよ。じゃあ、関さんの期待に応えることができたかということ、私には、その自信がありません。関さんは、ずーっと遠いところを、みておられたでしょう。

## NO. 221 なんと、したたかな 2003. 09. 08

9月1日の夕方、大同に着きました。今回は日程が短く、きょう(9月7日)の夜行列車で、北京にでます。たくさんのことをしないとイケなかったのも、ほんとに大忙しでした。

3日夜から、4日朝にかけて18mm、6日の夕方から、7日早朝にかけて22mmと2度、雨が降りました。どちらも強い雨です。とくに6日の雨は、ドシャ降り、ヒョウも混じりました。

以前の大同では、雨期は、6月から8月上旬くらいまでで、9月には降らなかったのですが、90年代以降、9月、10月の雨が増えています。そのかわりに、春の雨が減っている。

雨といえば、7月25日の豪雨によるカササギの森の被害のその後です。魚鱗坑に、土が流れ込み、今春、植えたばかりの小さな苗が埋まってしまいましたが、それを懸命に掘り出しました。その作業は、だいたい終わったようです。被害が何割になり、そのうちの何割を救出できたか、冬を越すまでは、正確にはわかりません。枯れたものもあるでしょうし、春になって、芽をだすものもあるでしょう。

いま、作業の中心は、農薬散布になっていました。春にも毛虫が大発生したのですが、いまになって、また発生しています。黒っぽくて、長さは2センチほど。広葉樹の葉を、かじるのです。

すきな樹種があるようで、最初はエンジュ、ナナカマドなどにびっしりと着き、鳥肌が立ちます。それらの葉がなくなってからは、新疆ポプラにまで着きますが、ポプラの被害は大きくありません。薬で殺しても、草のあいだからまたでてくる、とっています。

この地方の植林は、主としてマツなどの針葉樹でおこなわれています。カササギの森では、さまざまな広葉樹を、実験的に植えています。数は多くないし、枯らすのは、あまりに残念ですから、薬をかけているのですが、背負い式の、手動噴霧器で、なかなか、はかどりません。

隣接する采涼山プロジェクトでは、マツのあいだに混植したヤナギハグミ(沙棘)の葉が、すっかりやられ、枯れたように、みえるものもあります。ここは220haの大面积ですから、手のうちようがありません。

おなじ広葉樹でも、被害の軽いものもあり、マメ科のムレスズメ(樺条)は、まったく被害がありません。おなじマメ科の、ムラサキモメンズル(沙打旺)も、青々として、おいしそうなのに、虫はみつきりませんでした。

谷の底に、降りてみました。以前は、ヤナギやヤナギハグミが生い茂っていたのに、7月の洪水で、流されてしまいました。谷底に建設した、貯水槽は跡形もなくなり、ポンプも、みつきりませんでした。

でも、以前よりは小振りですが、新しい貯水槽が、再建されていました。8月1日の竣工、と書いてあります。1週間で、つくったんですね。

谷の西側の植林は、基本的に終了し、いま東側の整地作業がすすんでいます。以前は、灌水の設備がなかったのですが、7月までに、新しく貯水槽をつくりました。ところが、あの洪水で流れが変わり、そこまで、水がこなくなりました。上流に工夫をし、水を引く必要があります。損失は小さくないのですが、なんとか、克服できそうです。

植物も、したたかです。すっかり裸地になったところに、草の芽が、たくさんでています。なぎ倒され、土に埋まったヤナギやギョリュウから、緑の芽が、たくさんでています。今回は、観察する時間がなかったのですが、浪花彰彦さんがいうように、流されたものが、下流で芽をだしている可能性があります。

この谷底には、ウメバチソウの群落がありました。私は、あの花がだいすきなんですね。どうなっているか、心配だったんですけど、きれいな花を咲かせているものを、数は多くありませんが、発見できました。遠からず、再生することでしょう。

カササギの森で、いい話をききました。ここに、ことし3月から、新しい技術者がきました。1960年から、大同の林業局で働いた、ベテラン技術者です。カササギの森の北側の、長城林場で経験が長く、この一帯のことに、とてもくわしいのです。

彼の話では、カササギの森から、4~5kmのところ、リョウトウナラが、自生しているそう

です。しかも、山の南面だそうです。おそらく、ほかの樹種もみつかるでしょう。車はいけないので、今回はあきらめました。機会をつくって、来年は、いってみましょう。また可能性が、深まってきました。

## NO. 222 太陽照在玉米地上 2003. 09. 12

この題をみて、ニヤツとした人もいるはず。丁玲の有名な小説『太陽照在桑干河上』（1949年）（太陽は桑乾河を照らす）を、もじりました。「乾」の字は、中国では、特殊のばあいをのぞいて、「干」をつかうようになりました。「玉米地」は、トウモロコシ畑です。

この小説を、自宅の本棚で探したんですけど、みつかりません。作者と題は、しっかり覚えているんですけど、内容は、まったく記憶にありません。読んだことがあるのか、ないのか、それすら、はっきりしません。

この協力事業は、92年、渾源县からはじまりました。そのころ、渾源县は、大同市ではなく、雁北地区に属していました。同じ地区に属していたのは、

（右玉県）、左雲県、（応県）、（懐仁県）、大同県、陽高県、天鎮県、渾源县 広靈県 靈丘県、の10県でした。そのうちの7県が、93年夏に、城区 磁区 新栄区 南郊区 の4区からなる大同市と合併し（吸収され）、新しい大同市ができたんです。（ ）でくくった3県は、となりの朔州市にいきました。

93年のころは、カウンターパートも、共青团雁北地区委員会で、農村部では、懐仁県、応県などが中心でしたので、そちらにも、よくいっていました。最初につくった、拠点の苗畑は、懐仁県新家园郷にあったんです。

応県の境内を、桑干河が、ジグザグにながれているんですね。その当時、桑干河には、水があったんですよ。大雨のたびに、水がでて、岸辺をえぐるんです。応県の青年団は、護岸のために、たくさんのヤナギを、川岸に植えていました。私たちも、それに協力したんです。手元に、当時の写真が残っているんですけど、そのヤナギが、植えたばかりで、まだ小さい。なかに、根元を水にえぐられて、倒れかかっているものが、あるんですよ。

いま、いってみると、そのヤナギが、直径25センチくらいに育って、緑陰をつくっているんですね。10年という時間は、そういう変化を、もたらすんですよ。

これは、好ましい変化ですけど、好ましくない変化もあります。桑干河の河川敷全体が、なんと、トウモロコシとヒマワリの畑に、なってしまったんです。橋より下流には、ちょっとした水たまりがありますけど、橋の上流は、全面がすっかり畑になり、水の流れるところが、残

っていません。土に水分が多いからでしょう。ふつうの畑にくらべて、トウモロコシやヒマワリの生育は、ずっといいんです。まもなく収穫できるところまで、育っています。

同行した日本の留学生たちが、私に「説明がなかったら、ここが河だなんて思わないで、通りすぎてましたよ」といいました。そうでしょうね。中国人だって、これがあの有名な桑干河だとは思いませんでしょう。橋の欄干に、「応県桑干河」と書かれていなければ、私が説明しても、信じてもらえないかもしれない。

耕作を、政府が奨励してるんじゃないんですよ。いったん水がでたときには、洪水の被害を、格段に大きくする危険きわまりないことでしょう。農民が、勝手に、入り込んだんですね。河川敷のハジッコを、耕している光景は、以前から、なんどもみてるんです。ことしの4月にも、みました。人力で耕しているときもあれば、牛馬をつかっていることもある。しかし、いまみると、全面が、畑になっている。これは、衝撃ですね。

市内から、渾源にむかう途中で、桑干河にかかる、固定橋をわたります。ここでも、1997年の夏を最後に、流れを、みたことがありません。たいていは水がなく、川床がひび割れています。でも、その光景は、私が通るとき、たまたま、そうなのかもしれないんですね。ほかのときは、流れがあるのかもしれない。

ところが、応県のトウモロコシ畑は、農民たちが、水が流れてくることを、まったく期待していない、ということでしょう。まったく恐れていない、ということでしょう。そして、事実として、春からいままで、1度も、水は流れてこなかった。もし流れてきたら、トウモロコシに、被害がでたはず。そんなようすは、どこにもない。

日本大使館のプレスエクスカージョンに参加した記者たちに、このようすを、みせたかったですね。ずっと、インパクトが、強かったですでしょう。あのときも、そう考えたんですけど、道路が工事中で、このルートを使えなかった。

まったくのジョーダンですけど、「私はこんど、小説を書くよ。題だけが決まった。『太陽照在玉米地上』だよ」と私がいうと、中国の友人たちが、「うん、それはいいよ。新しい小説まで待たないで、あの『ぼくらの村にアンズが実った』を中国語に訳するとき、それを題にしたらいいんじゃない。『ぼくらの村に……』を、そのまま中国語に訳しても、それはおもしろくないよ」といいます。

9月25日に以下の勉強会をやるんですけど、それほどの水不足が背景にあることを、わかってほしいですね。そしてまた、もう1つの水プロジェクトにとりくむんですよ。成功したら、12年間の緑化協力が、かすむかもしれない。それくらい、インパクトは大きいでしょう。内容は当日のお楽しみ。

## NO. 223 水に困らない? 2003. 09. 16

9月上旬に、大同に行ってきました。菅原正孝さん(大阪産業大学人間環境学部学部長)、濱崎竜英さん(同講師)などの一行に、ごいっしょするためです。汚水浄化装置の、基本設計をした人たちです。コントロールパネルを手作りした中村文生さん、橋爪新太さん、川島和義さんにも、つきあってもらいました。

装置そのものは、まずまず順調です。処理水で、金魚を飼っていますが、みな、元気に泳いでいました。改善点を、現場でみつけてもらいたいんですけど、そのためには、発生源からのルートを、みてもらうのが、だいじだと考えました。あの汚水は、砒務局の住宅区からやってきます。

砒務局には、大同の国有基幹炭鉱が、所属します。炭鉱の街、大同の中核とっていいでしょう。石炭から石油、天然ガスへのエネルギー転換が、中国でも、急ピッチで、進行中です。その影響をうけて、中小零細炭鉱では、閉鎖やレイオフがふつうですが、そういうマイナスの影響は、いちばんあとで受けるはずのところですよ。

砒務局の生活区では、いまでも10数万人が、暮らしているそうです。私たちが訪れた一角は、砒務局のなかでは、中ほど以下の職員の住宅だと思えます。それでも、大同の平均的な住宅よりは、ずっとりっぱ。

中層の住宅、4棟の生活汚廃水は、前庭ふうのところの、地下にある沈澱槽に集められます。およそ300世帯、1000人分です。上澄みが、外へ流れ、私たちが利用しているのは、その一部です。沈澱物は、バキュームカーで、定期的に、汲み出すそうです。

管理にあたっている女性から、説明をききました。1人1日、どれくらいの下水ができるか、知りたかったんです。でも、それはわかりにくい。水道水の使用量がわかれば、下水の推定もできるでしょう。

水道は各戸に通じているけど、給水時間は1日1回、20分間だけだ、というんですよ。午後7時から。1日につかうぶんを、バスタブに、ためておくんだそうです。どの家も、いっしょだそうです。

バスタブの容量さえわかれば、あとはカンタンです。私たちの質問に、その女性は、知り合いと相談しながら、答えてくれました。「バスルームの一辺が、1.8メートルだから、バスタブの長さは、1.5メートルくらいでしょ。横幅は、1メートルくらいかな。水のたまる深さを、0.6

メートルとして、だいたい1立方メートルでしょう」。

そんな数字を、私は信用できないですね。高級ホテルのバスタブより、ずっと大きい。そんなもの、ありっこない。日本の浴槽でも、200リットルかそこらでしょ。ましてや、ここは水不足の大同。

「あなたの家を、みせてくれませんか？」とたのんだら、はずかしがりながらも、オッケーしてくれました。その住宅の4階でした。部屋の片づけを待つあいだに、同行の中村文生さんが、「水道の蛇口から、20分で、1立方メートルをためるのは不可能ですよ」と話しかけてきました。さすが、中村さん、計算したんですね。

部屋に案内されてから、池田恵美さんが、バスルームにはいりこみ、メジャーをあてて、測ります。「長いほうが90cm、短いほうが40cm、深さはせいぜい30cmです。底のほうほど、狭くなってますから、100リットルが、いいところでしょう」。1立方メートルのはずが、10分の1の、100リットルだったんですね。ねっ。自分の目でみないと、わからないものでしょ。

私のレポートには、数字が多いと、自分でも思います。わずらわしいと、思われる人もあるはず。でも、大同の話は、日本とギャップが大きいので、数字をいれないと、伝わらないんですね。自分がそう習慣づくと、他人の書いたものでも、数字がはいっていないと、信用できなくなっちゃう。困ったものです。

その家は、夫婦2人に、子ども2人。ですから、1人1日あたり25リットル。1月では、750リットルです。バケツその他に、ためたとしても、わずかなものでしょう。

私は、これまでずっと、知りあいの人たちに、1月の水使用量を尋ねてきて、平均1人1トンだと、推計してきました。あたらずとも、遠からず、といったところでしょう。

1999年の暮れに、大同の農村で、緑化にかんするアンケート調査を実施し、その結果から、1人1日あたりの、水使用量を割り出したら、21の村の平均が、22.8リットル、少ない村では、15.6リットルでした。そういう状態にありながら、彼らの多くは、「水には困らない」と答えるんですね。

このたび、おジャマした女性に尋ねたんですね。「不自由ではないですか?」「ずーっと、こうですから、慣れっこです」。それは、そうでしょう。水の使い方にはついては、ずいぶん、いろんなチエがあることでしょう。洗い物をした、最後の水で、トイレを流すとか……。

そのぶん、私たちの汚水浄化装置にくる原水(汚水)は、日本のものにくらべ、ずいぶん濃厚なわけですよ。

NO. 224 バカくらべ 2003. 09. 22

霊丘自然植物園の建設は、私にとっては、冒険でした。その意義を確信し、見通しをもっていたのは、言い出しっぺの、立花吉茂代表と、遠田宏顧問くらいのものであったでしょう。私は、その言いつけに従っただけで、自信なんて、なかったんですね。大同のカウンターパートには、その意味は、もっとわかりにくかったですよ。

着工は、1999年の春だったので、これまでに、5成長期が、すぎたわけです。ことしは、谷筋に、作業道を建設しました。いちばん高いところまで、通じています。上のほうは、雨に流されないよう、コンクリートの、階段ができています。谷筋のほうが、植物種が多いので、足の弱い日本人にも、それをみせてやろう、という、ここの責任者、李向東の配慮でしょう。

植物園の敷地は、86haあり、いちばん低いところは900m。高いところは、地図のうえにも「南天門」というりっぱな名前があり、1340mほどあります。ですから、高低差は400mあまり。途中は、かなり急ですから、ラクになったとはいえ、ひと汗かかないといけません。

1000mを超えるあたりから、リョウトウナラが出現します。北向きの、日陰斜面が中心です。大きなものは、樹高が8mを超え、胸高直径も、15cm以上あります。ぐんぐん伸びています。その下には、各年齢のものが、たくさん生えているんですね。5年前に、このプロジェクトをはじめたときは、こんなに早く育つとは、とても、イメージできませんでした。

植物園建設を思い立ったとき、李向東たちに、候補地探しと、植生調査を頼みました。彼らは、そのなかで、いくつかの自然林をみつけてきました。私たちも、みにいったんですけど、いちばん印象的なのは、リョウトウナラでした。ひと抱え以上のものまであり、林床には、腐葉土が厚くたまり、その下は、まっ黒の土に変わっているんですね。この地方の緑化のイメージは、それをみたことで、ガラッと変わってしまったんです。

そういう状況を、再現してみせるのが、この植物園の、最大の意義だと考えましたよ。遠田先生と、8か所もまわって、最後に決めたのが、いまの場所なんですね。自然林から遠くないし、標高も、方位も、地形も似ているし、上のほうには、ナラやハシバミが育ちつつあったので、ここでだいじょうぶだとは、思ったんです。でも、もっと時間がかかると思った。

自然の再生を待つっぽう、人の手で、それを加速することも、必要なんです。あの自然林から種子を集め、苗を育て、敷地内に植えていくんです。ことばで表すと、一行ですけど、実行するのは、たいへんなんですね。

まず種集め。リョウトウナラのドングリひとつとっても、最初は、熟す時期が、わからないんですね。未熟なものをとってもダメですし、地面に落ちてから、時間がたち、乾燥してしまうと、発芽率が落ちます。それから、リスやノネズミ、シカなどに、食べられてしまいます。私たちの足だと、片道5～6時間、彼らの足でも、その半分はかかるところから、ドングリを、毎年、200～300kgも集めたんですよ。

種子の保存だって、たいへんなんですね。ビニール袋に2重にいれ、乾かないように、気をつけて、環境林センターの地下室で、保存したんです。途中で、袋を開けてみたら、プ～ンと、いい香りがするんですね。その年は、10月まで気温が高くて、ドングリのデンプンが、アルコール発酵しちゃったんですよ。最初の年は、そんな失敗もしました。

私が、いちばん心配したのは、こういうことです。「この地方の主役は、おそらくリョウトウナラだろう」と私が、技術者たちに話したら、大同事務所の侯喜技術顧問は、即座に、「そんな木は役に立たない」と、いったんですね。もちろん、私は反論しましたが、そんなことで、彼らの認識が、変わるはずがない。

山間の貧しい村にいくと、生活燃料に、山の木をつかっています。たいていは、直径5cmくらいまでの太さです。いい刃物がないので、それより太い木は、伐ることができない。農家の軒先なんか、タキギが積んであるんですけど、そのなかに、ナラやカエデ、カバノキなんか混じっています。植物園の技術者たちも、当然、そういう光景をみているわけですね。

ナラなんて、初期の生育は遅いんですよ。株元の直径が、3cmになるのに、5年も、10年も、かかるでしょう。遠いところまで、種を集めにいき、重たいのを、背中に担いで帰り、何年もかけて、苗を育て、敷地のなかに植えては、育つのを待つ。そこから遠くないところでは、村の人たちが、同じ木を、切って、燃やしているわけですよ。放牧のヤギやウシが、それらの木をかじっているわけですよ。

じつに、バカなことですよ。そんなバカなことを、何年も何年も、つづけることができるんでしょうか？私もそうですけど、あの技術者たちが、それに耐えることが、できるんでしょうか。お金のため、じゃ、だめですからね。心を注ぎ、愛情を注いでくれないと。バカらしいと思って、作業がおざなりになったら、こういう事業って、すぐに崩壊してしまう。

ありがたいことに、私が危惧したことの一部は、乗り越えたようなんですよ。周金なんかは、敷地内の緑が、どんどん濃くなるのを示して、「みてくれ！以前は家畜が食っていたのが、いまは残るようになった。どんどん変化していく」といって、私に、ジマンするんですね。ほんとに植物のすきな連中が、集まってきたんですよ。すきでなかったら、こんなこと、やれないですね。

ここの樹木が、育ってくるのをみて、付近の農民が、「あそこでは、ナラなんかを、お金や労力をかけて、あんなにだいに育てている。たしかに、その値打ちはありそうだ。そんな木を伐って、ただ燃やしているのは、なんともバカなことじゃないか」なんて、考えるようになってくれたら、ほんとに、うれしいんですけどね。

そうなるためには、代替の燃料が必要なことは、いうまでもないんですけど……。

## NO. 225 冊田ダムの水、北京へ 2003. 09. 30

水の話がつづいて、恐縮ですが、これを、書かないわけにはいきません。この通信にも、たびたび登場する冊田ダムの水が、いま、北京に送られています。26日午前11時すぎに、水門が開かれ、5000万tの水が、桑干河の河道を通過して、北京の水ガメ、官庁ダムに流れ込みます。

当初の予定では、29日午前に到着するはずで、式典も準備されていたようですが、さきほどウェブページで調べると、水の流れが、計画よりずっと遅く、きょう30日、午前8時の段階で、180kmのうちの175kmのところ流頭があるそうです。きょうの午後には、官庁ダムに到着するでしょう。

9月21日あたりから、北京では、ポツポツと報道がはじまったようですが、私は、北京の大野木さんのメールをみるまで、知りませんでした。9月26日には、冊田ダムで、式典が開催され、北京の新聞も、いっせいに報道したようです。なかには、1面トップで報道したところも、あったそうです。時事通信は、日本むけに記事を配信しました。

北京の報道記事から知ったことですが、この水は、北京の用水量の8日分に当たるそうです。1300万人の、14日分の生活用水だとも書いてありました。5000万tをその数字で割ると、生活用水は、1人1日285リットルになり、ちょっと多すぎる気がします。まあ、そういった量の水です。

北京でも、大きなニュースになったのは、北京市が、市外から水を引くのは、歴史上、はじめてのこと、だからだそうです。そういわれて、私はふしぎだったんですね。今回、水が流れこむ官庁ダムは、密雲ダムにつぐ、北京の水ガメなんですけど、その本体は、河北省にあります。北京市の延慶県に属する部分も、あるにはあるけど、それはほんの一部です。官庁ダムから、水をとるのは、市外から、じゃなかったんですかね？

北京市は、5年つづきの早魃だそうです。大同とのつきあいが長い私は、北京にでてくるたびに、「ああ、北京はいいな。これだけ水があれば、十分に森林が育つのにな」なんて思っていました。600～700mmはあったはずなんですよ。

ところが、北京環境ボランティアネットワークの三田明日香さんが、統計年鑑で調べてくれたところでは、2000年は、371.1mm、2001年は、338.9mm、なんだそうです。それにたいして、1986年は、666.0mm。ぬけてるところは、彼女が、また知らせてくれるでしょう。極端な増減は、大陸中国の特徴ですから、これだけで即断はできませんが、この2年にかぎれば、たしかに少ないですね。

密雲ダムも、官庁ダムも、このままでは、数か月で、水がなくなるというんですよ。だから、山西省から、水を引いたわけですよ。といっても、山西省にも、水があるわけじゃないんですよ。北京以上に、カラカラです。

報道をみていて、びっくりしたことが、2つあります。まずは、データのあつかいが、あまりにもザツなこと。たとえば、大野木さんが最初に知らせてくれた9月19日付け北京晩報の記事。

#### 【3000万トンの山西省の水を北京に引水】

北京の今年の深刻な水不足の状況にかんがみ、9月26日より山西省冊田ダムから北京官庁ダムへ3000万トン引水する。伝えられるところによると、これは北京史上初の北京外部からの引水となる。冊田ダムは山西省大同市東南50kmに位置し、山西省第二のダムとなっている。冊田ダムの水資源は比較的豊富で、容量は5.8億立方メートル、年間平均流量3.3億立方メートル、水面面積3~4万ムー、水質は比較的良好である。26日から正式に水門を開き、3000万トンの水を桑干河に沿って北に流す。72時間で196km流れ、29日には官庁ダムに流入する。関連部門は現在引水事業の準備を行っている。

私がこれを添削しても、まっ赤になりますよ。まずは、「3000万トン」とあるのは、5000万トン。「桑干河に沿って北に流す」とありますけど、桑干河は、冊田ダムから東に流れています。北は山脈があって、水はいけない。地図をみたら、こんなまちがい、しっこないんですけどね。大同日報もそう書いてますから、もとになった発表が、まちがってたんでしょう。

もっと本質的なのは、ダムの容量が、5.8億立方メートルとあるんですけど、じっさいは、流れ込んだ土の堆積などで、そのうちの60%以上は、ダムの機能がなくなっています。

それから、年間平均流量3.3億立方メートルのまえには、「多年」ということばがあって、これは、冊田ダムが運用開始された、1960年からの平均だということですよ。

私は最近、「太陽照在玉米地上」（太陽はトウモロコシ畑を照らす）と題して、桑干河がいかにかラカラであるかレポートしました。この年間流量3.3億トンからは、そんな実態は、まったくみえてこない。それどころか、官庁ダムのすぐうえに、りっぱな水源が、利用もされないで、しまつてあった、というような印象でしょ。

冊田ダムからの引水と、それにたいする報道を契機に、北京の人たちが、自分たちの水源のことを考えてくれるようになれば、それはそれでいいことだと、私は思ったんですけど、これでは、逆効果でしょうね。

もう1つ、報道で驚いたのは、あまりにも、北京本位なことです。まさに“我田引水”。なかには、社会の安全と安定のための、山西省の政治的な任務だ、などという報道まであった。そこには、北京よりはるかに深刻な欠水に苦しむ、山西省、大同市、そういうところの人びとにたいする思いやりのカケラも、感じられないんですね。まあ、私は4分の1大同市民で、思い込みが強すぎるとは思いますけど。

最近、私は、北京での講演などのたびに、つぎのように、話をしめくくるんです。「中国には、水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れるな、という格言がありますが、それにもう1つ加えて、水を飲むときは、上流のことを忘れないようにしてほしい、逆に、なにかを流すときは、下流のことを思ってほしい」。ほんとに、そうあってほしいですね。

これからちょっと、講演会にでかけますので、ちゃんと読み返さないまま、送ることになります。

## NO. 226 逃げきれない？ 2003. 10. 06

事情は、そのうちに話しますが、ことしの3月、カウンターパートが、大同市青年連合会から、大同市総工会に、移行しました。でも、実際のしごとをやってきた緑色地球ネットワーク大同事務所が、メンバーごと、総工会に移管されたので、現場に、大きな変化はありません。

総工会で、この事業を担当することになった柴京雲副主席は、なかなか、おもしろい人です。弟と2人で、「数来宝」をやっています。「数来宝」というのは、かけあい漫才のようなもの。方言を多用し、テンポが速いので、内容は、まったくわかりません。テレビによくでてるし、録音ものも、だしています。

彼が作詞・作曲した曲を、北京の有名歌手が、歌っているそうです。何種類もの楽器をひけるし、歌も歌える。書もできるし、絵もうまい。人をそらさない、魅力的な男です。いっしょにレストランにはいると、用がなくても、クーニャンたちが、のぞきにくるんですね。もちろん、彼の顔をみるためです。なかなかの有名人です。

大同市内で、大きな看板を、いくつかみつけたんですよ。彼と弟の写真です。携帯電話、その他の広告の看板。市内に20か所近く、あるのだそうです。私がすすめた酒を、ことわりきれ

なくて、ほんのちょっと、口にしたために、何日も体調をくずした彼が、テレビで、パイチュー(白酒)のCMをやっているのだそうです。

そういったことが、話題になると、彼は、「悪いことをしたら、とうてい逃げきれません」と、笑います。そんなふうには、おもしろい男なんです。

8月に、往復ふくめて2日だけで、霊丘自然植物園を、みることにしました。時間の節約のため、植物園にテントを張って、キャンプをしました。すると、彼は、夫人をつれてきました。2人にとって、とても楽しく、印象深かったようです。自分たちのプロジェクトを、担当者が、すきになってくれるのは、とても重要なことです。

「悪いことをしたら、とうてい逃げきれません」で、思い出したんですよ。これまでよく、工商銀行培训中心というホテルに泊まりました。部屋に、シャワーはあるけど、バスタブはありません。たまには、お湯につかりたくなるじゃないですか。ホテルの3階にある、名ばかりのサウナにいくと、アカスリのお兄ちゃんが、私を知ってる、っていうんですね。こちらは、もちろん知らない。事情をきくと、渾源県照壁村の出身で、彼が小学生のころ、私が学校にきた、というんですよ。小学校果樹園づくりのために、なんども、訪れた村です。

大同市内にある華嚴寺は、遼代の創建です。堂塔より、仏像が有名です。私も何回となく、訪れました。あるとき、客の列が切れたとき、お坊さんが、私に、話しかけてきました。いや、剃髪していても、お坊さんとはかぎらない。いまの中国では、お坊さんがいなくて、ただ、文化財・観光資源となっている、お寺も多いんです。信心のある人が守らないと、由緒あるお寺も、荒れていきますけどね。

「緑化に協力している日本人ですね。テレビでみたことがあります」と、いうんですよ。彼は陽高県の出身で、里帰りしているとき、みたそうです。私がビデオカメラを掲げているのをみて、「撮影しなさい！」と、促すんです。もちろん堂内は、撮影厳禁です。彼は、入り口を見張りにいきました。私は、遠慮しいしい、短時間、ビデオを回しました。

そのつぎにいったときも、また話しかけてきました。「ゆっくり撮影しなさい。私が見張りをしていますから」というんですよ。彼にとって、怖いのは、仏さまより、人のようです。2回目の私は、三脚をすえて、しっかり撮影しました。

「google」の日本版で、「緑の地球ネットワーク」を検索すると、ひっかかるのは、2950項目だったんですけど、「google」中国版で、「綠色地球網絡」(中国の簡体字)を検索したら、なんと、30400項目です。ギョッ!そのなかには、「綠色」「綠色地球」「網絡」の、単独のものまで、含まれるし、その大部分は、無関係のもの。これらの単語は、いま、中国で、ファッションですから、多いのは当然ですけど、フルの「綠色地球網絡」だって、日本より、ずっと多そう。

とくに、めだつのは、日本大使館主催の、プレスエクスカージョンのあとの、各社の記事です。人民日報や、環境報などの記事が、地方紙など、他の新聞に、転載されているんですね。私たちが考えたのより、ずっと多くの人の、目に止まったかもしれない。

たわむれに、「高見邦雄」で、検索してみたら……。やめときましょう。悪いことをしたとき、私も、だんだん、逃げきれなくなるかもしれません。

## NO. 227 悪事千里を走る 2003. 10. 14

大同では、奇数年はず、いい年にはなりません。1995年、典型的な自然災害の年でした。前年の秋から、この年の7月半ばまで、ほとんど雨が降らず、深刻な旱魃だったんです。

ところが、7月18日から突如、雨が降りだしました。それまでは、8月後半になると、雨は降らなくなったのに、この年は、8月末から、9月後半まで、やみまなしに、雨が降りつづいたんです。

農村の住居は、土窯が、多かったんです。黄土を練って、日干しレンガをつくり、それを積み上げた、窯洞(ヤオトン)です。断熱効果が高いために、夏は涼しく、冬は暖かくて、風土に適した住居なんですね。乾燥してますから、湿気に困ることもない。雨が少ないから、土づくりでも、長い年月、もったんです。

ところが、この長雨には、耐えきれなかった。バタバタと、倒壊しました。大同の農村で、6万世帯、24万人が、住居を失ったといえます。なかには、95%以上の農家がつぶれ 村ごと、新しいところに移転して、再建したところもあります。このときも、「100年に1度の大雨」と、いってましたね。

知らせをきいて、私が駆けつけたのは、10月10日ごろでした。断続的に、まだ雨が降っていました。復旧どころでなく、土に埋まった家財道具を、庭先にひっぱり出すのが、やっと、と いったところ。あちこちの村で、小学校もつぶれていました。

そのとき、私は、村の人たちに、きいたんです。「旱魃と水害と、どちらが怖いか？」と。家がつぶれて、ガックリきている人たちに、そんなことを、きくんですからね。いまだったら、ちょっと、きけないでしょう。あのときは、特別だったんです。

その年の1月、日本では、阪神大震災がありました。私の家も半壊になり、その後、救援活動に走り回りました。その経験があったので、春と夏、大同の農村をまわったさいも、「村のオ

ンボロ校舎、なんとかしないとね。日本では、学校が避難所になったけど、ここだと、まっ先に学校がつぶれるよ」なんていってたんです。そして、そのとおりになった。

被災者としての連帯感が、私にもあったし、大同の人たちも、なんとなく、感じてくれたと思うんですよ。

返ってきた答えは、「早魃のほうがこわい」というものでした。水害は、被害が激烈だし、見た目には深刻だけど、被害のおよぶ範囲はせまい。政府も、なんらかの対応をするし、親類や、友人の援助も期待できる。

それにたいして早魃は、被害は、目にはあまり見えないけど、収穫がまったくないことも、しばしばだ。そして、範囲が広い。政府も打つ手がないし、ほかからの援助も、期待できない。というものだったんです。

こんなことを、いまごろ、なぜ書くかというと、「カササギの森」の水害のレポートに、反応が強かったからです。これも、同じようなものです。見た目の被害が、激烈だから、私が文章にしても、印象がつよかったようです。でも、その範囲は、全体からいえば、ほんの一部。

それにたいして、大早魃のときは、広い範囲にわたって、被害をうけますからね。1999年や、2001年の大早魃のほうが、植林にとっては、はるかにむずかしかったんです。枯れるものも、多かった。

だから私も、あのレポートを書くさいに、最初に、生育の良好なもののことを書き、被害は一部であることを、明示したはずですけどね。それなりに、バランスを考えましたよ。

ところが、たくさんの人から、「たいへんだったんですね」といわれます。壊滅したかのよう、に、思う人もいます。それは、事実と反するんですね。カササギの森のなかでも、苗木がうけた被害は、10%に満たないでしょう。けんめいに救出にあたりましたので。その点は、ご安心ください。

こういうことから、痛感するんですよ。失敗や、よくないことは、つよく印象に残るし、人から人へ、パーッと広がるんですね。悪事千里を走る、です。その逆に、いいことや、成功したことは、なかなか伝わっていかない。

この黄土高原だよりでは、うまくいってることも、書いてますけど、失敗や困難を、けっこう公開してきました。これからも、そのつもりです。そもそも、この黄土高原だよりは、ウイスキーやショウチュウのビンに、吹き込んでいけばいいグチを、書き散らかすことから、はじまったんですね。

そして、成功したことや、ジマン話よりも、失敗や、よくないことのほうが、おもしろいでしょ。役に立つことも、多いはずです。たくさんの人に、ご心配をいただいて、ありがたかったんですけど、水害の被害は、私たちの存続にかかわるほどのものでは、ありません。

それよりずっと、頭が痛いのは、イラク戦争と、SARSによって、ことしのツアーのほぼすべてが、中止になったことです。なだらかながらも、増えつづけてきた会員が、この1年は、減ってしまいました。

## NO. 228 日本人観 2003. 10. 20

大同の農村で、日本からのツアーが木を植えていると、取り囲んで、みている人がたくさんいます。「みてばかりいないで、自分でも植えたらどうなの」と、いいたいところ。でも、それは、その村の人とは、かぎりません。

ずーっと遠くの村から、わざわざ、やってくる人がいるんですよ。日本人をみるために、です。そういう人たちにとって、

私たちのツアーは、「日本軍いらいの外国人」なんです。

陽高県の朱家窩頭村の農家で、昼食をごちそうになっていたら、おばあさんの集団が、やってきました。なかには纏足の人もいました。こちらがハシを止めると、「いまの日本人は、どういふふうに食事をするか、みたいから、食べてみてください」とリクエスト。

照れくさいんですけど、いわれるとおり、ハシを動かしていると、「こんどは酒を飲んでみせてください」というんですよ。また、そうします。

食事をして、酒を飲んでも、中国の人と変わらないと思うんですけど、それをジューッと観察していて、おたがいに、なにか感想をいいあいながら、帰っていきます。たいていの人が、「日本人が変わった」というんですね。

きわめつけは、渾源県温庄郷でのことです。渾源県の最南部で、恒山山脈の奥深く、です。五台山から、このあたりにかけては、日中戦争(中国では抗日戦争)から、国共内戦の時期をつうじて、中国共産党の、重要な拠点だったところです。日本軍の攻撃も集中し、たくさんの犠牲者をだしました。

村の共産党の、以前の書記が、応対してくれました。70歳を、かなり回っていました。村の長老です。父親は、日本軍に殺されたそうで、銃を撃つジェスチャーをしながら、そのことを

話してくれました。彼は少年のころから、抗日戦争に参戦し、17歳で、中国共産党に入党したそうです。

共産党内部のことに、詳しいわけじゃありませんけど、こういう幹部は、優遇されたはずで。中華人民共和国成立以前に入党した人は、苦しい時期を、くぐってきてますからね。それ以後に入党した人とでは、別格扱いです。

その老人も、建国後は、大同の街にでて、鉄鋼会社の労働者として、働いたそうです。ところが、1960年前後の飢饉時に、食糧がたりなくなったため、郷里の農村に、送り返されたんですね。それからずっと、この村で暮らしてきました。

その長老が、私の顔を、まっ正面から、のぞきこんでくるんですよ。だんだん、顔を近づけてくる。そして、ポツリ。「変わった。たしかに、変わった。昔の日本人じゃない」。

ずっと日本に住んで、戦後に生まれた私たちは、戦前・戦中と、戦後とで、日本人が変わった、その顔が変わった、なんて、あまり意識しませんけど、

なにかの資料で、昔の写真をみたりすると、日本人の顔つきが、ほんとに変わったと、思うんですよ。私たちの世代と、いまのこどもたちとでも、また、すっかり変わってますけどね。

あいだに銃弾をはさんで、激戦地で、対峙した中国の人たちにとって、日本人のこの変化は、信じられないほどなんでしょう。みんな、かわいく、おだやかそうで、かつ軟弱になった。

村の長老の、そのあとのことばが、すごかったんです。「日本も社会主義になったのか?」。ジョーダンじゃなかったでしょう。大まじめです。

経済発展から取り残された、山西省の、大同市の、こういう山のなかの村ですから、ラクな暮らしじゃ、もちろんありません。その長老が、自分で、「もう十数年も、村には嫁なんて、きてない」といったくらいですから。それにしても、それ以前にくらべたら、うんとよくなった、と思っているんでしょうね。それが社会主義だと。

戦争中、ここに送られた日本軍の兵士は、日本にいても、そういい生活があったんじゃないんでしょう。東北地方の農民が、多かったようです。秋田県の能代市で、講演したとき、大同にいていた、という老人に、話しかけられました。そういう人が、敵意に包囲され、飛んでくる銃弾に向かって、目を血走らせていた。

それにくらべたら、私なんか、おだやかなものでしょう。おだやかというより、まぬけな感じかな? 何十年ぶりにみた日本人の、顔の変わりようから、日本社会の変化を感じたんでしょうね。それが、「日本も社会主義になったのか?」になった。

私たちのささやかな活動も、少しずつですけど、村の人たちの日本人観を変えてると思うんですよ。ところが、日本の総理が、靖国神社に参拝した、というようなニュースが伝わると、私たちの緑化の記念碑に、泥で、×印と「打倒日本帝国主義！」なんて、書かれたりするんですね。やっぱり、そういう大きな動きには、とてもかなわない。

## NO. 229 東京駅写真展こぼれ話 2003. 10. 27

10月26日から、東京駅丸の内北口ドームで、橋本紘二さん撮影の写真展「中国黄土高原～沙漠化する大地と人びと」が、はじまりました。朝からずーっと、会場に詰めて、もうクタクタ。同じところに立ってるのは、歩くのより、疲れるんですね。そのあと、橋本さんや、ボランティアの人たちと、会場の近くで、軽〜く(?)いっぱいやり、ビジネスホテルの狭い部屋に帰って、これを書いています。

ここまでくるのに、ずいぶんと苦労があったんですよ。農水省OBの小畑勝裕さんなんか、走り回ってくれて、やっと実現したんですね。「こぼれ話」っていうのは、本来なら、正規の報告があって、そのあとにくるものでしょ。でも、そういうルールを守ると、きょうの私の印象は、どこかに消えてしまうから、まずは、気持ちのままに、書いておきましょう。

10時からの開会なんですけど、9時すぎには会場につき、照明をつけ、みてもらうことにしたんです。朝の時間は、外国人が多かったんですね。全日を通してみても、大阪よりは、外国人の比率が、ずっと多い。とりわけ、中国人がめだちます。

熱心にのぞきこんでいる、3人組の若い男に、話しかけたんです。「中国人ですか?」「そうです」。「どこからきたんですか?」「上海です」。そのあと、手を振って、写真全体を指しながら、「ものすごく、貧しい!」。その表情が、ちょっと悲しげだったんですね。

おそらく、中国にいるとき、こういう農村のようすを、たとえ写真ででも、みたことは、なかったにちがいありません。たとえ、みたことがあっても、きょうのような印象を、もたなかったでしょう。

あんなところのヤツらが貧しいのは、ちゃんと働かないからだ、上海が豊かになったのは、おれたちのように、よく働いたからだ、というふうに。よそごとだと思ったんでしょうね。これは、邪推じゃありませんよ。大同にきた上海や、南方の人から、そういう話を、なんどもきいていますから。

ここが、東京だから、よかったんです。ここから見直すと、上海も、黄土高原の農村も、1つ

の国の、中国ですからね。国外にでたときって、自分の国や社会を、考えなおすことが多いでしょ。彼らにとっても、いい機会になったと思います。もっと感想をきかせてもらいたかったんですけど、ものすごく真剣な顔でみてるから、複雑な回答が返ってきても、私の語学力では、どうせ、わかりっこない。それ以上、ジャマしないことにしました。

もう1組、中国人。若い女性は、スラーツとした、たいへんな美人です。モデルさんかなにかかな、と思いましたよ。つれの男は、おつきのもの、といった雰囲気。はじめて東京にいったんでしょね。改札口をバックにして、彼女は、記念写真を撮らせました。

男のほうが、反対向きでも撮りましょう、といったんですよ。改札口をでたすぐのところが、私たちの写真展の会場ですから、そうすると、「中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと」という看板なんかが、バックにはいります。彼女はもう、明確に、意思表示しました。イヤ、だって。

京都を皮切りに、これまで、名古屋、大阪、広島、岡山大阪で、同じ写真展を開催してきました。JR各社のご協力で、駅コンコースをお借りしてきたんです。でも、大阪駅でチラッと参加した以外、私は、会場にいたことがない。その期間、いつも中国でした。だから、今回が初体験。

大部分の人は、通りすがりの人です。まあ、初日の26日は、日曜日だから、そう忙しい人は、すくないんでしょうけど、最初は、トットと歩きながら、チラッと、写真をみるんです。そして、最初のところまで、もどって、1枚1枚、ていねいに見直していく。みんなだまって、むずかしい顔。長いキャプションでも、立ち止まって、ちゃんと読むんですよ。

企画をすすめてくれたJR東日本企画の担当者が、「みなさん、関心が高いんですね」といって、びっくりしています。中国の環境問題に、一般的に関心が高いわけじゃないから、これはやっぱり、橋本さんの作品の力だと思います。彼は、写真専門学校で、教えてもいるんですけど、その同僚がみにきて、「橋本さん、自分でも、ちゃんと写真撮れるんですね。感動しましたよ。彼の写真を、はじめてみました」なんて、私に話すんです。学校で、なにやってんだろうね？

何人もの日本人が、「人工衛星をあげるより、こういう問題の解決にお金をつかったらいいのに……」と感想をもらします。たいていは、私の世代から上の、男の人ですけど。悔しい思いも、ウラにはあるようですね。

環境を重視すべきだ、という思いは、私だっていっしょですけど、「国」とかのレベルの、動きようは、どこの国も、似たようなものでしょう。沙漠化防止や環境問題に、資金を集中したって、経済にとっての見返りは、そう大きくない。でも、そんなことをいってられないほど、中国の環境問題は、深刻化している。そういうことが、この写真展から、伝わっていけば、いいんですけどね。ここ、丸の内北口の乗降客は、この国のありように、影響を与える人が多い

んでしょうから。

## NO. 230 都市と農村 2003. 11. 05

前号につづいて、東京駅での写真展のことからはじめます。私より少しだけ年配の男性が、話しかけてきました。世間的ないい方をすれば、エリートサラリーマンといった感じ。「ここは、通勤ルートなんです。イベントを、よくやっていますけど、足を止めたことはありません。今回は、引き込まれたんですよ。どうしてなんででしょう？」

そんなことを、私にきかれても、わかるはずないんですけど、なんとなく、通じたんですね。彼が、ジーンとみていた写真が、私の、お気に入りでも、あったからです。

そのまえの晩、東北大学の明日香壽川さんが、会場に、立ち寄ってくれたので、彼が仙台に帰る最終まで、飲んだんですよ。そのとき、明日香さんが、「高見さんの、いちばんすきな写真は、どれですか？」って、きいたんです。

問題なしに、1枚をイメージしました。たくさんの、こどもの写っている、躍動感あふれる、写真です。全体のなかでは小品ですが、それをみながら、私は「シャッターを切った瞬間、橋本さんは、手応えを感じただろうな。ふるえるほど、うれしかったんじゃないかな」なんて、思いつづけていたんですよ。

会場で、話しかけてきた男性は、つづけて、こういいました。「この子たちは、いつも、こんなふうな笑顔をしているんですか？それとも、カメラを意識してですか？」。かたちは質問ですけど、自分で解答をもっていて、私に、同意を求めたんだと思います。あんな笑顔を、急につくれっこない。

農村の風景が、とても、きれいなんですね。感動的なまでに。でも、ちょこっと外部からきた人が、風景に感動するようなところって、そこで暮らす人にとって、たいていは苛酷なところでしょ。感動的なまでに厳しい環境と、人びとの笑顔……。

そんなことから考えついたんですけど、橋本さんの写真のテーマは、都市と農村なんだろうね。そんなこといったって、都市なんか、どこにも写ってないじゃないか、といわれそうですけど、みる人たちが都市なんですよ。都市に疲れた人たちが、農村とそこでの暮らしをジーンとみている。

オープニングパーティの二次会で、となりに座ったのが、池谷薫さんでした。黄土高原を撮りつづけている映画監督で、「延安の娘」の上映が、まもなくはじまります。試写会で一度、み

せてもらったんですけど、何か月か前のことで、内容を紹介できるほど、私の記憶力はよくないし、チラシに書かれていることを、書き写そうとも思わない。

「あれはドキュメンタリーじゃないですよ」なんて、失礼なことを、ノッケにいっちゃったんです。国際的なドキュメンタリー映画の賞を、たくさんとっている作品にたいして……。「あれはドラマですよ。演じてるがわも、撮ってるがわも、人生をかけてるドラマですよ」。なんて、私はつづけたんですけどね。

被写体になった人たちは、カメラをむけられなかったら、絶対に、あれとはちがう行動をとった。いけないんじゃないんです。いいんです。カメラがはいることで、彼らも、自分の人生を、まっとうすることに、踏み切ったんですから。池谷さんは、いいしごとをしたんです。それから、私は、カメラマンがすごいと思う。

あの映画をみるほうの、私のテーマは、やっぱり、都市と農村でした。それが、とつても、にがい。

プロレタリア文化大革命を発動した毛沢東は、「都市と農村の格差解消」をかかげて、たくさんの知識人・紅衛兵を、農村に送り込んだんですね。農民に学べ、とって。中国共産党中央がおかれた革命の聖地・延安にも、北京などから、青年たちがやってきた。この映画の出発点は、そこです。

でも、その運動は、完全に失敗しました。その後、都市と農村の格差・差別は、とどまるどころを知らず、拡大しているわけです。そういう差別がよくないことだ、というまっとうな考えがでてくる基盤まで、その失敗がこわしちゃったようです。

たとえば、あやまった路線が、(たんなる権力闘争だ、という人もいますが)都市の知識人を、あの非人間的な農村の環境に、強制的に送り込んだ、自分たちは、その被害者だ、という人たちがいます。文学作品にも、たくさん描かれました。そして、農村の労働を、拷問のように、描いている作品もあります。それは、そのとおりでしょ。

でも、その「非人間的な農村」で、毎日、そのような労働をしている人がいるわけですね。生涯をつうじて。それでもなお、暮らしが立たなくて、都市に出稼ぎにいき、その最底辺で、暮らす人もいます。

そういう人たちのことを、どう考えたらいいんでしょう。こんなことを書き出したら、私はまた迷路にはまってしまいます。

中国で生きることは、日本で生きることにくらべ、はるかに重く、濃密だと思います。日々

の暮らしが、便利で快適になると人は考えなくなります。生きかたも、軽く、薄くなる。

中国の農村と都市という、現代の大問題の広大な広がり、都市と農村の格差解消をかかげた運動の失敗とその後遺症という、歴史の縦糸。その交点で演じられるドラマ。

日本の若い人たちが、映画「延安の娘」に、はまっているようです。場所も、歴史背景も、縁遠いはずなのに、同時代を生きていることの共感がどこかにあるんでしょうね。

池谷さんからは、そのようなスタイルを、彼がつくるまでの苦労や失敗をききました。芸術のセンスの、かけらもない私としては、ほんとにうらやましい。

## NO. 231 ドジドジ、バタバタ 2003. 11. 14

11月13日午後に関空を発って、北京発の夜行列車に乗り、14日早朝に大同に着きました。その前が、たいへんだったんです。

私のしごとは、このところ、忙しくなるばかりです。11月中に引き受けた講演が、8回あります。東京が多い。そのあいだに、お呼びのかかった会議が、かなりあります。書かないといけない原稿は、数えるのもイヤになります。

たいていは、かなり以前に約束したものです。引き受けたときも、忙しかったんですけど、ずっと先の依頼は、余裕があるように感じるんですね。つねひごろから、「講演と原稿の依頼、酒の誘いはことわらない」なんて、バカなことを、いってるものですから、ふかく考えないで引き受けたんですね、そのときは。ところが、いざ、そのときがくると、毎日のように、予定がつまってる。

いまから12年ほどまえ、中国の緑化に協力しようなんて、最初にいいはじめたときは、人さまからバカにされるだけで、話をきいてやろうなんて人は、ありはしなかったんです。こちらから押しかけても、あまり相手にしてもらえなかった。

だから、先方から声がかかったりすると、うれしくて、しかたなかったんですね。ことわるなんて、バチあたりなことをしたら、2度と声がかからないんじゃないか、という、恐怖心が先立つんですよ。

それから、東京駅での写真展があったんです。会期の前半は、会場につめました。正規には、10時開会だったんですけど、時間前から、写真のまえに立ち止まって、見入ってくれる人がたくさんいます。けっきょく、毎朝、9時前に、会場にはいって、ライトだけでも、点けるように

したんですよ。

それから、いろいろ、しごとがおもしろくなったでしょ。ことしの4月から、環境林センターで、汚水処理施設を立ち上げたら、その効果が、すばらしかった。

くわしいことは、ちょっと先に書きますけど、それにつづいて、炭鉱の坑道にたまる汚水を、浄化して、生活用水にする実験プロジェクトが、もちあがったんです。問題は、零下30度にもなる冬季に集中するはずですから、いまの時期を逃したら、結果がでるのが、1年、先になります。

大阪産業大学の菅原正孝さんのチームが、前回、大同にきて、現場をみてくれたのは、9月のことだったんですけど、今年中のスタートを、むりやり決めたんです。

大同事務所には、ムリを承知でたのみこみ、土が凍結するまえに、実験の場所を確保してもらい、配管を土中ふかく、埋めてもらいました。

こういう問題での私の知恵袋の、橋爪新太、中村文生、川島和義といった人にも、なんども、大阪産業大学に集まってもらい、基本構想を打ち立てました。中村文生さんは、おつれあいの母親が亡くなるといった事態のなかで、コントロールパネルを、手作りしてくださったんですね。もう、うれしくて……。

性能のたしかな、小型ポンプは、中国では入手が困難なので、日本から、運ぶことにしたんです。発注したのはいいんですけど、届いたのが、60ヘルツ用。現地は、50ヘルツ。メーカーにたしかめると、性能が30%以上、落ちるということです。あとになって、やっと気づくのが、シロウトの悲しさです。あわてて交換することにしたんですけど、それが前日。

出発の前夜おそくに、中村さんのところに、コントロールパネルを、受け取りにいきました。そしたら、高速道路が、若返り工事かなにかで、8時以降は、通行止め。しかたがないから、下の道を帰ったんです。

10年ほど、ペーパードライバーでしたから、カンがにぶっているんですよ。左側車線を走っていると、車の列がすすまない。右側に車線変更すると、こんどは右側が動かなくなる。そんなことの繰り返し。

翌朝、なんとか荷造りをし、持参するノートパソコンを立ち上げてみたら、メールソフトが不調なんですよ。きのうまでは問題なかったのに、受信がうまくいかない。こんなときに、あせったら、傷口を広げるだけなのに、いろいろやってみたんですけど、やっぱりダメ。べつのメールソフトをインストールしたんですけど、こんどは設定が、うまくいかない。

気がついたら、出発予定の時間をとっくに過ぎてたんです。大阪空港まではタクシーで、そのあと、関空までのリムジンバス。予定の70分で着けば、なんとかまにあうはずだけど、渋滞でもあったら、飛行機に乗り遅れる。バスのなかでも、イライラ、ハラハラ。運のいいことに、50分で着いたんです。

チェックイン・カウンターでたしかめると、この日のCA便は、満席。搭乗口に走ると、その大部分は中国人で、もう、エネルギーで、にぎやかなこと。もお、これ以上、疲れたくな〜い。搭乗がはじまったんですけど、彼らの列から離れて、最後に、ゆっくり乗ることにしたんです。

ところがこれが、大失敗。みんな、荷物が多いんですよ。ごったがえしている通路をかいくぐって、後部の座席に、たどりついたら、どの棚もあふれかえっていて、私の荷物を、入れる余地がない。私だって、たいへんな荷物ですから、文句をいえた筋合いは、ないんですけど。

いちいち話しませんけど、周囲の席では、ものすごい話題が、盛り上がり、北京まで、にぎやか、にぎやか。そして、着陸したとたんに、いっせいに、携帯電話で、どなりあうんですよ。

ゲンナリしたんですけど、飛行機が止まったとたんに、私も、すぐ立ち上がり、荷物を、手に提げてたんですね。ふしぎなものです。あんなにグッタリしていたのに、私も、中国モードに、切り替わったようです。とにかく、今朝、なにごともなく、大同に着きました。

好運を吹聴すると、そのウンは、逃げていく、なんていいませんか？こうやって、不運を書いて、たくさんの人に、読んでもらったら、それも、私から離れるかもしれない。もうしわけないですけど、どなたか、引き受けてくださいな。

## NO. 232 JICA 主催のワークショップ(1) 2003. 11. 21

北京で国際協力機構(JICA)中国事務所主催の「日中緑化協力ワークショップ」が、11月17日、北京で開催されました。そのあと18~19日は、両国の出席者、60名近くが、大同の私たちのプロジェクトをみにきてくれました。17日は、私も1時間をもって、報告をしました。以下はその発言稿です。長いので、3分割して送ります。

### 1. 環境破壊と貧困の悪循環～沙漠化の大きな原因

緑の地球ネットワークが、山西省大同市の黄土高原の農村で緑化協力をはじめて12年になります。そのなかにはたくさんの失敗・困難と、さまざまな経験がありました。きょうは現場の

具体的で、率直なお話をしたいと思います。

「山は近くにあるけれど、煮炊きにつかう柴はなし。十の年を重ねれば、九年は旱(ひでり)で一年は大水」～地元の農民は、環境と生活の厳しさを、このように歌いつづけてきました。これは、まさに私の実感でもあります。

山という山に樹木がなく、草もまばらです。丘陵や山腹の急斜面も畑になっており、「耕して天に至る」という表現は、誇張ではありません。私が、黄土高原の農村を、最初にみたのは1971年でしたが、そのときは「ああ、どこの国でも、農民は苦勞して、がんばっているんだな」とたいへん感動しました。その後、日本で環境問題に関心をもつようになったんですが、その目でみると、これは自然の大破壊でもあります。

歌にあったように、毎年のように旱魃が襲います。近いところでは1999年が「建国いらい最悪」といわれる大旱魃で、大同の農業生産は、平年に比べ82%の減だったそうです。ただでさえ貧しいのに、平年の5分の1もとれなかったのです。この年の冬、農村を回っていて、ジャガイモからデンプンをしぼったカスが、軒先に、干してあるのをみました。尋ねると、「春節をすぎたころには、食糧が足りなくなるから、おかゆに混ぜて食べる」ということでした。

2001年はさらにひどく、「百年に一度」といわれる大旱魃でした。夏になっても、山が茶色のままなんです。乾燥に強い草まで枯れてしまったのです。山や丘陵など条件の悪い畑を中心に、3分の1の耕地で作付けをあきらめました。収穫があったのは、地下水をつかって灌漑している畑だけです。平均の年間降水量は400mmほどですが、これらの年は250mmほどしかありませんでした。

とくに春に雨が乏しく、「農民は春の雨は油より貴重だ」といって待ち焦がれますが、春に雨は降りません。

雨は、降れば降ったで、問題をおこします。年間降水量の半分から3分の2が、7～8月の短期間に集中します。たとえば1995年。この年はどうしたのか、8月末から長雨がつづき、土づくりの住居・窑洞の屋根や壁に雨がしみこみ、つぎつぎと倒壊しました。6万世帯24万人が被害を受けたそうです。

1時間70mmという豪雨を、私もなにか体験したことがあります。ことしの夏は、私たちのプロジェクトをおいている大同県聚楽郷で、土石流のために4人の死者がでました。

植生の貧しいところに、こういう雨が降ると、表土が流されます。水土流失です。土壌が劣化して、作物や植物が育たなくなります。これがここでの沙漠化なんです。皮肉なことに、この地方では、雨が沙漠化を加速しています。

90年代以降、気になる現象があります。もともと少ない春の雨がいつそう少なくなり、8～10月の雨が増えています。年間トータルの降水量は、それほど減っているようには思えないのですが、このような微妙な変化が、農業には致命的な影響を与えます。地球温暖化の影響が考えられますが、たしかなことはわかりません。

沙漠化のもう1つの原因は、水と土のキャパシティを超えた過大な人口です。この10年で中国には巨大な変化がありました。内陸部の農村ではさほどの変化はありません。あいかわらず貧しく、1人あたり年間所得が1000元に満たない人がたくさんいます。旱魃の年には、200元を切る村まででてきます。

最低限の生活のために、条件の悪い急傾斜地まで畑にしてきました。農耕だけでは食べていけないので、ヒツジやヤギの放牧をします。森林や草場がなくなり、生態環境が悪化し、水土流失が深刻になります。それがまた貧困を招きます。

生産性の低い土地ほど、農家1戸あたりの耕地は広く、役畜を飼う資金も飼料もありませんから、労働はすべて人力です。男手がないとやっていけませんから、農民は男の子をほしがります。地元の政府も人口政策に懸命ですが、どうしても人口が増えるんですね。するとまた耕地が必要になる。「環境破壊と貧困の悪循環」とでもいうべき構造が、ここに成立します。

最近、私はよく「沙漠に木を植えれば、沙漠が沙漠でなくなるんですか。沙漠化が止まるんですか」などといって、この会場にもおいでのような、植林団体の人のヒンシュクをかいます。

でも、沙漠化には、その地方固有の原因があり、沙漠化を防止するにはその原因を取り除くか、軽減する以外にないと思うのです。大同のばあいは、この「環境破壊と貧困の悪循環」が問題です。

## 2. 失敗をくりかえして学んできたこと

前置きが長くなりましたが、私たちがやってきたこととお話しします。スタートしたとき、私たちはシロウトばかりでしたので、苗木の費用を贈る、といった簡単な方法で、地元の計画を応援するしかありませんでした。

最初に取り組んだのが、水土流失と風砂防止をねらった防護林の建設です。主に3種類のマツを植えたんですけど、のちにはヤナギハグミ(沙棘)、ムレスズメ(樺条)などを混植するようになりました。

貧困な農村では、小学校にいけない子が少なくありません。低学年のための学校はたいいていの村にありますが、高学年の通う学校は、大きな村にしかないのがふつうでした。小学校に付

属果樹園を建設し、アンズなどを植えました。そこからの収益の一部を学校に回し、教育を支援することにしました。

このプロジェクトは「希望果樹園」と呼ばれ、地元からはたいへん歓迎されました。マツを植えるのにくらべ、短時間で経済効果があがるからです。しかし、管理は、マツを植えるずっとたいへんです。いまでは大成功し、アワ・キビ・ジャガイモなど従来の作物にくらべ、面積あたりで5~10倍の収入をえられるようになり、1人あたり年間所得も300元から800元に増えた、といったところまでできました。それまでにはたいへんな苦労があったわけです。

おもしろいのは、そういったプロジェクトの賃金部分をプールして、小学校を建て替えたり、給水設備をつくったりする村がでてきたことです。1つのお金でも、村のなかで回転すれば、幾重にも役立つわけです。そのように目にみえる短期の利益と、果樹のような中期の利益、マツを植えて環境を改善するといった長期の利益、この3つを、うまく組み合わせることで、農民の積極性を引き出すことができます。

私の経験では、中国の幹部たちは「規模は大きいほうがいい、資金も多いほうがいい」といいます。しかし、彼らの頭にあるのは、農民を大動員して整地し、植栽する、そこまでのばあいが多かったのです。ところが、その後の管理は、その何倍もむずかしいですね。中国には「植樹3分管理7分」といった言い方がありますが、現場で苦労している人は「植樹1分管理9分」だといっています。いったん環境がこわされたところで、樹木を育てるのは、それくらいむずかしい。

地元の管理能力を超えたプロジェクトはかならず失敗する、というのが私たちのえた教訓です。最初は小さく出発し、地元の農民が経験を積み、自信をつけてから、徐々に拡大するのがいいのです。

ここで手痛い失敗を話しておきましょう。1994年のことですが、モデルをつくろうと欲張って、80ha、6万本のアンズを植えました。地元の幹部も、農民も、たいへん熱心で、いま振り返っても、あれほど真剣に、ていねいに作業したことはないほどです。それは結果にも現れて、活着率もよかったし、よく生長して、2年目には花を咲かせるまでになったんです。

郷の党書記が私にいました。「とても順調にいつているから、来年は少しだけ実をつけさせたい。結果をみれば、農民の励みになるし、自信をもつことができる」といいました。私も即座に同意しました。ところが翌年、現場にしてみると、全滅していました。残っているのは10%もありません。

直接の原因はノウサギの食害、虫害ですが、根本には人の問題がありました。人事異動で熱心だった党書記が他の郷にいき、後任の幹部は管理を怠ったんですよ。やっかいなことに木は

生き物で、いったん死んだら、生き返ることはないんです。ちょっとの油断が命取りになります。そのうえ、苗木のなかに、接ぎ木に失敗した「ニセ苗」が混じっていたんです。これだと、実がなっても、経済性はほとんどありません。農民の積極性を維持できるわけがない。

プロジェクトを成功させるには、自然条件、社会関係、人的要素という3つの条件が重要ですが、なかでもたいせつなのが、人の条件です。その他の条件に、多少、劣るところがあっても、しっかりしたリーダーがいて、村の人をまとめていけば、なんとかできます。成功したのは、たいてい、こういうところですよ。「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」というのは孟子でしたね、たしか？自然条件は地の利でしょう、社会関係は天の時、人的条件は人の和です。聖人の教えにたどりつくまでに、私たちはずいぶん遠回りをしました。

## NO. 233 JICA 主催のワークショップ(2) 2003. 11. 21

### 3. 拠点をつくり、2本足で歩く

私たちの協力事業の大きな特徴は、いくつかの拠点をつくったことです。「各県にバラバラにプロジェクトがあっては管理できないので、それらを統合し牽引する基地が必要だ」という提案が、中国側からありました。日本側で参加するようになった専門家の立花吉茂さん(現代表)は、海外での豊富な経験をもとに、「このような事業のためにはパイロットファームのようなものがいい」と提案しました。この2つをドッキングして、大同市の郊外に、拠点となる「環境林センター」を設立したのです。

これも当初は、村から敷地を無償提供してもらい、3.5haの小規模でスタートしました。トラクタは村から運転手・燃料つきで提供してもらいましたし、電気や水は、こういう場では話しにくいのですが、盗電・盗水だったんです。

事業が順調にすすむようになって、20haに拡張しました。中心は苗畑であり、協力事業のための苗を自前で生産するようになりました。初期に多かった苗木の品質のバラツキやニセ苗の問題をこれによって解決しました。

また、ここでは、各種の実験、研究、研修などを実施し、技術の向上をはかり、新品種の導入にも積極的に取り組んできました。それから、現場で発生するさまざまな問題を、ここに持ち帰って研究し、現場に返すようにしました。

いまでは、ここが私たちの協力事業の顔になっています。JICAからなんども外国に派遣されたベテランのフォレスターが、ここでやっていることをみて、「NGOの緑化協力なんて、ママゴトのようなものだと思ってましたけど、こんなことまでやってるんですか。すっかり認識を改めました」といってくれました。

明日から大同にいかれる方には、ここをみてもらう予定なんですけど、カウンターパートの武春珍所長は、「現場をみるには時期が悪すぎます。いまの時期はなにもありません」といって、残念がっています。まあ、みなさんはプロですから、緑の衣を脱いだ裸の姿のほうが、参考になるかと思います。

事業が順調にすすみだした理由の1つに、大同市林業局を退職したばかりのベテラン技術者を招いたことがあります。彼は、現場の事情を熟知しているんですね。それから日本の専門家の貢献が大きい。私たちの顧問の遠田宏さんは、東北大学理学部附属植物園の元園長ですが、毎年70~80日は現地にきてくれるんですね。ところが最初の3年間、自分の意見をいいませんでした。ひたすら調査と研究をつづけたんです。「日本とはまったく自然の条件がちがうんだから、ここでは学生のつもりではじめました」と彼はいうんです。

「煮炊きにつかう柴はなし」と歌われた山のなかで、自然林にたどりついたのは7年目です。人里からずっと離れた、ロクな道のない山の奥です。私なんか、着いたときには両足が痙攣していました。ナラ、カバノキ、カエデ、シナノキ、トネリコ、ナナカマドなどの落葉広葉樹が中心で、なかには一抱え以上のものもあります。その後、同様の自然林をいくつもみています。それによって、私たちの緑化にたいするイメージは一変しました。

もっとも条件のいい霊丘県に86haの土地を確保し、99年から植物園づくりをはじめました。付近の村と協定して、柴刈りや放牧を排除したところ、草や灌木の丈が伸び、種類もずっと増えてきました。場所によっては、ナラ、トネリコなどが急速に伸び、最大のものは樹高8~9m、胸高直径15cmほどに育っています。森林の再生力はあるのに、人間が壊しつづけていたんですね。それをみて中国側のメンバーは、「植えるだけが緑化ではない」といいだしました。

そうした基礎のうえに、600ha弱の土地を確保し、実験林場を建設中です。主体はマツなどの針葉樹ですが、あわせて自生の広葉樹や草なども試しています。ここでも、放牧がなくなっただけで、草が急に伸び、夏にはお花畑ができます。大きめの苗を移植し、天然更新の可能性も探りたいと思います。

技術上の改善点としては、粒子の小さな黄土の丘陵に木を植えるときは、深植えをやめる、足で踏み固めない、砂などを加えて通気性を改善する、といったものがあります。

また、マツの育苗に菌根菌を活用したところ、1~2年の育苗期間に乾燥重量が2倍になり、根の生育がとくに良好です。掘り出した苗を振っても、土が根から離れないんですよ。根と土の結合がつよく、乏しい水もよく吸収しますから、活着率も初期生育も顕著に改善されました。

#### 4. 恋愛と結婚・子育て

地元の人たちとの関係ですが、最初の4年間は、なかよくなることをこころがけました。大同は日中戦争にさいして大きな被害をだしており、私も「日本鬼子」と呼ばれたりしたものです。下手なことを口にする、問題がどこにいくかわからなかったんです。かなり激烈な口論やケンカをはじめたのは5年目からです。日本からきた私の友人は、それをみて、「ハラハラするよ」といいますが、こちらが感情をむきだしにしたとき、相手も心を開いてくれたのです。

「友好」は恋愛のようなもので、おたがいにみつめあい、甘いことばを交わしていればいいのですが、結婚生活を維持し、子どもを育てるには、おたがいの長所だけでなく短所も理解し、補いあっていく必要があります。木を育てるのは、子育てといっしょです。

協力事業を成功させるには、1日中、そのことだけを考えている人間が、日中双方に最低でも1人は必要です。専門の組織・緑色地球ネットワーク大同事務所を設立してもらい、人事を固定したのですが、それがその後の前進に大きく役立ちました。私がたった1ついい提案をしたのは、このことです。彼ら、彼女らは、ほんとうによくやりました。初期の失敗つづきから、こういう場で報告させてもらうまでになったのは、カウンターパートの功績です。

住民の態度の変化についてきかれることがありますが、問題は幹部です。初期には、日本からのワーキングツアーと、村の人や子どもが植えている横で、上からきた幹部がトランプに興じていることさえあったんです。

「あんたたちは、なんだ。現場にこようとしないし、きても、なかにはいらぬ。なかにはいっても、みようとしない。みても理解する力がない。官僚主義と緑化は木に竹を接ぐような話だ」などと、ののしったものです。

幹部たちも、自分で木を植えると、植えた木が気になるんですよ。すきになるんですよ。それがだいじなことだと思います。

もっと大きな変化もあったと思います。中国全体で、環境にたいする意識と政策がずいぶん変わったことを、私は現場で実感してきました。幹部が先頭に立てば、みんなが変わるんですよ。

## NO. 234 JICA 主催のワークショップ(3) 2003. 11. 21

### 5. 水問題の深刻さ

大同は、中国の十大欠水都市の1つで、カラカラに乾いています。丘陵や山の上のほうでは、井戸や湧き水の涸れる村が続出しています。私たちも、2つの村で井戸を掘るのに協力し、たいへん喜ばれました。しかし、それ以後はやめてしまいました。そのような村は無数にあり、緊

急避難にはなっても、根本的な解決にはならないからです。井戸を掘ることで解決するレベルを、はるかに超えてしまったんです。

私たちが実施したアンケート調査では、21の村の1人1日あたりの水使用料は23.8L、少ない村は15.6Lでした。都市部のアパートでも、1日20分だけの時間給水で、1人1日あたり25L前後といったところが少なくないようです。どういう生活か、想像できますか？

大同の中央部を流れる桑干河で、私が最後に流れをみたのは1997年夏です。それ以降は四季を通じて水がありません。驚いたのは、今年の9月、桑干河の河川敷の全面がトウモロコシ畑になっていたことです。水の流れる余地がありません。農民は水がくることを、まったく期待していないし、恐れてもいないということです。そしてそのとおりになった。

『太陽は桑干河を照らす』（太陽照在桑干河上）という丁玲の有名な小説がありますが、いまなら『太陽はトウモロコシ畑を照らす』（太陽照在玉米地上）でしょう。その他の河川も、中小のダムも、干上がっています。

いまにして思うことですが、大切なものにあえて順番をつければ、水→土→木でしょう。水収支にとって植林がプラスだというのは、神話ではないかと思います。私たちのような小規模ならともかく、大面積にとりくむばあいには、事実かどうか、まじめに研究する必要があると思います。それにしても、森林は必要でしょう。だとすると、どういう場所に、どのような森林をつくれればいいのか、検討が必要です。

このような深刻な水不足が、一地方の話なら、まだいいのです。しかし、先ほどの桑干河は、北京の重要な水源なのです。ことし8月、日本大使館の主催するプレスエクスカージョンが大同で実施され、中国側も有力な11社が参加しました。その直前に目賀田周一郎公使からメールがはいって、「大同は北京の水源として重要なところだと、私が紹介すると、いえ、そんなことはありません、と記者たちがいうのです」とのことでした。「私なら、あんたたちが知らないだけだ、の一言ですけど……」と私は返信しました。知らない人が多いんですね。

ことしの9月末のことです。桑干河にかかる冊田ダムの水5000万tが、北京の水ガメ・官庁ダムに送られたことを、みなさん、ごぞんじでしょうか？北京よりずっと水不足が深刻な大同の水が、北京に送られたんです。水門を開く儀式では、「5000万tの水で首都に貢献する」というスローガンが掲げられました。「社会の安全と安定のための山西省の政治的な任務だ」という報道もありました。大同の人たちの内心はどうなんでしょう？

中国には「水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れるな」という格言がありますが、「水を飲むときは上流のことを思う」という一句を、ぜひ加えてほしいと思います。逆になにかを流すときは、下流のことを考えるべきです。

私たちは、環境林センターの灌漑用水を確保するために、付近の住宅の生活污水を浄化してつかうことにしました。外務省草の根資金の協力をえましました。きわめて簡単な設備で、効果は高く、処理水で金魚を飼っています。いまはまた、炭鉱の坑道にたまる汚水を浄化して、生活用水に変える実験プロジェクトを立ち上げようとしています。

## 6. いま直面する困難

木からはじまった私たちの関心は、土、水とききました。せっかく育った木が、清明節のお墓参りの失火で焼かれたこともありますから、火も体験しましたが、これには近づきたくありません。抜けているのは、金です。そのためでしょうか、資金面では慢性的に困っています。

私たちのように零細な民間団体は、協力現地の資金を支えるいっぽう、自分たちの日本国内の活動費もつukらないといけません。私たちの賃金は、会員の会費や寄付にたよっています。

最近では毎年 250 人、累計で 1500 人の日本人が大同の農村にやってきて、地元の農民といっしょに汗を流しました。1 晩は農家にホームステイし、親しく交流してきました。朝、顔を洗う水にも困るのですが、不平を口にする人はいません。5 回、10 回とやってくる人もいます。

もともと日本人にたいする感情は、最悪とっていいところですが、そういうことを通じて、戦争を知る老人からも「日本人が変わった」といわれます。少しずつ、理解が深まってきたとっていいでしょう。

私たちの会員の中心は、そのようなツアーの体験者です。現地の実情を知り、この事業の意義を理解して入会してくれるわけです。ところが、イラク戦争と SARS の影響で、ことしはツアーの大部分が中止になり、水脈が途絶えてしまいました。この一事をとっても、緑化や環境の協力は、平和と安定がどんなに大事か、痛感しているところです。

そして、この難局をどうやって乗り越えるかが、いま私たちの最大の悩みです。なんとか来年もつづけたいと思います。最後はしみったれた話になりましたが、そのような実態も知っていただけるとさいわいです。

発言を終えてから、ずいぶんたくさんの方の中国側参加者に、話しかけられたんですね。「いい報告だった」といつてくれたんですよ。まあ、地方から参加した人が、そういつてくれるのは、わかるけど、中国林業局や林業科学院の参加者からも、そういわれました。どういうことでしょうか？なかに、「あなたが、大同の祁学峰の相手ですか？」といった人がいたんです。周囲の人が、うなずきました。なるほど、それでわかった！

中国と日本との緑化協力にかんする、全国規模の中国側の会議が開かれるとき、大同におけ

る私の相棒、祁学峰が、なんども、なんども、私たちの協力事業を報告していたんです。私たちの協力事業は、中国で、より広く知られていたようです。

## NO. 235 炭鉱汚水の浄化実験 2003. 12. 02

炭鉱汚水の浄化に、取り組むことにしました。地元の「大同日報」によると、1tの石炭を採掘する過程で、平均2.48立方mの地下水が、失われるそうです。坑道が地下深く伸びると、地下水脈を破壊して、坑道に水がでてきます。その水を汲み出しますが、汚染されていて、そのままでは使えません。多くを、捨ててしまいます。

大同は、中国一の石炭の街です。大小466の炭鉱があり、その周囲で、80数万人が、深刻な水不足に、苦しんでいるそうです。ことし7月から、雲崗石窟へいく途中の青磁窯炭鉱で、炭鉱水の浄化がはじまりました。逆浸透膜をつかった日量1350tの本格的な施設で、建設費が、500万元以上かかったそうです。処理水は、水道用水になります。民間企業の経営で、水1tの販売価格は4元。

お金のある大炭鉱では、そういうことも可能です。しかし、いま大同の多くの零細炭鉱は、操業もままならず、水を買うお金にも困る状態です。

大阪産業大学の菅原正孝さんのチームが、生物処理を、提案してくれました。鉄バクテリアをつかいます。大規模な設備も、薬品も必要ないので、安価に、処理できる可能性があります。

実験の場所を、南郊区雲崗鎮の、呉官屯に決めました。雲崗石窟の、すぐそばです。9月にいったときも、11月にいったときも、村営の小炭鉱は、操業を停止しています。このまま、廃坑になる可能性も、なくはない。血まみれになった労働者を、何人もみました。ケンカしたんですよ。仕事はないし、お金はないしで、気がたっているようです。

入り口から覗いても、坑道はまっ暗。25度くらいの傾斜で、斜坑が、350メートルほど、地下に伸び、そこに水がたまっているそうです。垂直の深さは、地表から100mほど。水温は10～13度。実験装置は、簡単なものですから、坑道の奥の、水面に近いところにつくれば、冬も凍結しないし、すべてが簡単ですみます。

ところが、外部の人間は、坑道へは立入禁止。安全上の問題がある。「臨時工として、私を、やとったらいい」といったんですけど、相手にされなかった。しかたがないので、地上で実験することにしました。保温その他、めんどろですけど、しかたがない。

ところが、いまひとつ、気乗りうすに感じられたんですね、その炭鉱の人たちが。大同事務

所の武春珍所長が再度、交渉にあたったところ、費用の負担を求められることを、心配していたそうです。操業停止で、まったくお金がない。

その心配はいらないことを説明して、実験するための場所を、提供してもらいました。11月14日、大同に到着するとすぐさま、私は、現場を訪れました。物置の1室が、きちんと整頓され、ドラム缶などの資材も、準備されていました。日本で準備した図面をわたし、構造を説明しました。

17日は、北京での JICA のワークショップにのぞみ、そのあとの2日間、大同の私たちのプロジェクトに、参加者を案内しました。20日に、現場にいき、できあがった装置を、動かしたところ、前後の連係の悪いところがみつき、21日、手直ししてもらいました。

大阪産業大学の濱崎竜英さんと、王英さんが、大同に到着したのは、21日の夜です。準備が整ったと伝えると、「こんなに短期間でできるなんて、とても信じられませんよ」と、濱崎さん。いわれてみると、それは、そうでしょう。日本国内だって、こうはいかない。

22日朝から、装置を立ち上げました。動きとしては、まず、問題はありません。直径30センチの塩ビパイプと、ドラム缶をつかった、かんたん装置ですが、1日あたりの処理量は70tほどです。いまの段階では、5種類の濾過材をもちい、それぞれの効果を、比較することにしました。

坑道から、揚がってくる水は、にごっています。ドラム缶にためると、底がみえない。この段階でわかったことは、水のなかに、タール分も含まれることです。これまでは、ミネラルウォーターの空きビンに、サンプルを採ってたんですけど、それくらいの量では、発見できなかった。

濾過したあとの水は、透明です。少し、口に含んでみました。臭いも、味も、ない。有毒物質のないことは、水質検査でわかっていますが、飲用には、鉄、マンガン、硫酸イオンなどが、多すぎます。それらの除去には、微生物の定着・繁殖まで、多少の時間がかかります。

装置の組みつけは、この炭鉱の電工、王如がやってくれました。とてもいねいで、溶接はじめ、いろんな作業をこなせるので、重宝です。白髪で、シワが深いので、60歳は超えているかな、と思ったんですけど、「きっと、私より若いよ」と、通訳の王萍には、いったんです。そのあたりが、私の経験というもの。本人にたしかめたら、「44歳で、1960年の生まれです」といいますから、44歳も、かぞえですね。

今後の管理も、彼に頼むことを、内々で決めました。炭鉱は操業停止ですから、彼にとっても、つごうがいいはず。

22日の午後、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長が、急用で、市内に帰って行きました。それまで、どんな問題も、彼女を通じて、現場の人たちと、話していたんですね。それで、スムーズにすすんできました。

簡単な器材しかないんですけど、濱崎さんが、熱心に水質を測定しているのをみて、王如が、話しかけてきました。「この水を、きれいにする目的は、なんですか?」。もちろん、村の人に、つかってもらいます。そのことは、武春珍も、彼らに説明していたはず。でも、そんなうまい話は、信じてもらえなかった。「あなたたちが、木を植えるために、この水をつかうんだと、思っていましたよ」というんです。そこのところを、王萍に、ていねいに説明してもらいました。すると、彼の表情が、変わったんです。

そして、彼は、話したんですね。「ポンプを設置してあるのは、2号坑で、入り口から350m、垂直の深さは100mです。そこの水は、季節により、変動が大きいんです。さらに130mほど奥に、3号坑があり、ここの水は、安定しており、水質もいいんです。垂直の深さは130mですけど、遠心ポンプの揚程は、160mですから、能力的に、問題はありません」。

なんということでしょう!こちらの目的を伝えるのは、なにをやるにしろ、最初の第1歩なのに、それができていなかった。どこにいても、自分の目で、現場をみるのに、今回はそれができなかった。でも、まだ、まにあいます。ポンプの設置場所を、変えてもらうことにしました。

その夜、武春珍に、ジョーダンめかして、話しました。「あなたがいっしょだと、あなたのおしゃべりばかり、聞かされる。あなたがいないと、ほかの人の話をきくことができる。だから、きょうは、収穫が大きかったよ」。私自身にとっても、大きな反省点です。

## NO. 236 大同でであった戦争の傷痕 2003. 12. 09

はじめて長期に大同に滞在した1992年秋のことです。各県の青年団の幹部のなかで、いちばん気のあったのが、懐仁県の田東書記でした。たくさんの農村をいっしょに回りましたし、彼の家を訪ねて、まだ小さかった彼のこどもを抱いたこともあります。

第1号の苗畑を、懐仁県新家園郷につくることにしたのは、自然の条件もよかったんですけど、彼が信頼できたからです。ところが、懐仁県は、1993年夏の行政区画変更で、となりの朔州市に併合されてしまった。そのころ、田東も、青年団を卒業し、懐仁県の、どこかの郷の、郷長になりました。

何日も、いっしょに、行動していたころのことです。田東が私に、ポソッと話したんです。「懐仁県は模範県だったから、徹底抗戦した、靈丘県や渾源県の人たちには、いまでも肩身が狭い」と。

「模範県」というのは、侵攻してきた日本軍からみての「模範」です。懐仁県は、大部分が盆地で、土地と水に比較的恵まれ、一帯では、いちばん豊かな県です。日本軍がきたときには、目標になりやすかったし、ほぼ無血で、明け渡されたようです。それにたいして、靈丘県も、渾源県も、山の多い、貧しい県です。県城のある盆地の中心部は、早く陥落したけど、山岳の村に依拠して、遊撃隊や八路軍が、抗戦をつづけたんですね。

共産主義青年団は、共産党の青年部のようなもので、党と政府の登竜門でもあります。胡錦濤共産党総書記・国家主席をはじめ、共産党や政府の最高指導部に、共青团出身者が、少なくないんですけど、同じ構造が、地方にもあります。その青年団の、1つの県のトップが、半世紀もまえの歴史をもちだして、「肩身がせまい」というんですよ。

日中戦争のときのことを、多少は知っていないと、ここでの協力事業はできないな、と考えて、そんな話を農村できいてまわることが、最初のうち、したんです。でも、話題がそこにくると、たちまち座が緊張し、関係がギクシャクしちゃうんですね。たいていの県には「烈士記念塔」がありますから、そこを訪れて、写真や記録を、みせてもらったこともあります。

日本軍だけで戦争してれば、まだよかったと、思ったんですよ。日本では、あまり知られていないし、私は現地に行くまで、まったく知らなかったんですけど、ここには、「蒙古連盟自治政府」とか「蒙疆連合自治政府」とかの名称の「第2の満州国」がつくられたんですね。日中戦争が全面化した、1937年秋からのことです。中心は、現在は河北省に属する、張家口でした。

「満州国」のばあい、満州族の元皇帝がかつがれたんですけど、ここでも、モンゴル族の王さまが、かつがれました。でも、その背後というか中心に、日本と日本軍があったことは、明々白々です。

政府だけじゃない。「軍」もつくられました。各地を侵攻・制圧するときは、この「軍」が、矢面に立たされることが、あったようです。「偽軍」といって、民衆は、忌み嫌ったんですよ。

日本は、1945年の8月15日で、「負けました」といって、帰れば、それで、よかったんですね。そして、焦土と化した国土をまえに、一億総懺悔で、復興・再起を誓うこともできた。というふうになると、あまりの単純化ですけど……。

ところが、日本についての中国人たちは、地元の間人が、多かったんですよ。逃げて帰るところがない。大同の農村で、私が知りあったなかにも、日本軍の散髪をしていたために、そのあ

ともず一っと、日本の協力者だとみなされた、家族がいました。なにかの政治的な変動期には、「おまえの一家は、日本軍に従った」といって、激しく、糾弾されたというんですよ。勝ったはずの中国人のなかに、深い亀裂が残された。

そんな見聞を私が話すと、北京から通訳にきてくれた崔文が、「日本人は許せても、奸漢は許せません」といいました。「奸漢」というのは、民族の裏切り者、ということです。

同じ民族のなかでも、もちろん、対立は生じます。そして、激しく対立しながらでも、つながっているところも、ちゃんと残されている。外部の人間には、そこどころが、わかりにくいですね。たとえ 100 パーセント、善意から出発したばあいでも、よその人間が、一方に与したりすると、その対立が決定的なものになり、修復不能になっちゃうんです。そして、いうまでもなく、100 パーセントの善意なんて、ありえないわけですよ。

私は、大同の農村を回るなかで、絶対に戦争をしてはいけない、とくに、よその国にいて、戦争をしてはいけないと、強く思うようになりました。それは、そういう経験を通じてのことです。

## NO. 237 ポプラの伐採 2003. 12. 15

環境林センターは、大同市の南郊外にあります。市の中心部から車で 20 分ほど。南北に長く、北辺のほぼ中央に、正門があります。南北の奥行きは 820m、東西の間口の平均は 250m、面積は 20ha です。周囲をレンガ塀で囲い、その延長は 2km 以上ですから、かなり広い。

11 月にここを訪れると、風景が一変していました。正門から、中央を、南に延びる道路があり、路側には、東側にはポプラ、西側にはヤナギの並木がありました。400 本あまりあった、そのポプラを、伐ってしまったんです。あったものがなくなると、さびしいですね。カササギの巣が、いくつもあったのに、それもなくなった。そして、以前よりず〜っと広く感じられる。

すぐあとで、JICA 主催のワークショップ参加者が、ここを訪れたんですけど、その人たちも、広く感じて、びっくりしたでしょうね。こんなに広い苗畑を経営しているのか、と。

私たちが、最初にこの場所を訪れたのは、1994 年 8 月でした。専門家の最初の調査団です。当時、ここは村経営の果樹園で、リンゴナシが植えてありました。リンゴナシというのは、みかけは赤いリンゴ、味と実体はナシです。

並木のポプラは、すでにあっただんですけど、高さは 6~7m、胸高直径 15cm くらいの、まだ若木でした。それから、グングン伸びて、最近では、直径が 30~40cm まで、育ってきました。樹

高も 15m くらい。

大きくなるのは、けっこうですけど、困ったことも、おこりました。日陰をつくって、その下の苗木の育ちがよくない。でも、それくらいは、しんぼうできます。

つぎの問題は、この並木に沿って、高圧線が通っていることです。強風で梢が揺れたりすると、電線をたたく恐れが、でてきました。まあ、これだって、危ないところを、切り詰めていけば、なんとかならないわけじゃない。

いちばんの問題は、カミキリムシの害が、ひどくなったことです。幼虫が樹幹にはいります。最初は、先端のほうがかれてきます。早魃の翌年に、被害がめだちます。並木が枯れるだけなら、影響は大きくないんですけど、環境林センターの最大の役割は苗圃で、ポプラをはじめ、いろんな広葉樹の育苗をしています。それに被害がでてきたんですよ。

とくにひどいのは、見本園に導入したネグンドカエデです。シロップをとるくらいですから、カエデは、甘くて、おいしいんでしょうね。1本の若苗に、何匹もカミキリムシが着いてるんですよ。みつけては、踏みつぶし、ときには殺虫剤を散布するんですけど、とても追いつかない。形成層をグルリとかじられて、枯れるものもでてきます。

ポプラの苗は、最近、カミキリムシの被害の少ない新疆ポプラが中心なんですけど、それでも、カミキリの幼虫がはいって、コブができちゃうんですね。

センターの職員や、日本の専門家とも相談して、伐るしかないな、ということになった。最初は、村の幹部が反対だったんです。せつかく育った木を、伐りたくない。そのうえ、よそからの視察が、村にあったとき、村と日本との協力プロジェクトとして、彼らは、ここを案内してましたからね。スタート時のことを思えば、それもウソじゃない。

先端が枯れるくらいは、よかったんですけど、そのうち、大きな枝が枯れたり、全体の枯れるものが、でてきたんです。そうになると、高圧線への影響が大きいし、下を通る人の安全にもかかわります。

早く伐りたいんですけど、問題は、だれが、どうやって、伐るかです。大きな木を伐った経験のある人はいませんし、チェーンソーだってない。高圧線を考えると、上から少しずつ伐らないといけないけど、センターの職員は、木登りだってできない。ケガでもされたら、おおごとです。

そんなとき、耳よりの話がありました。合板をつくっている会社が、売ってくれ、というんですよ。一昨年のことです。自分たちで伐って、根まで掘り起こして、8千円を支払う、という

んですよ。

すぐにでも、乗りたかったんですけど、カンタンじゃないんですね。木を伐るのに、許可が必要なんです。郷はすぐいけるんですけど、そのあと、南郊区の許可をえて、大同市林業局の批准をえて、さらに省の林業庁まで、いかないといけない。

手間も、時間もかかりますけど、それだけじゃない、お金もかかるんですよ。南郊区の許可をうるのに、4000 元が必要だというんです。そのあとに、市があり、省があるでしょ。

武春珍は、あの性格ですから、そんなお金を、かけたくないんですよ。祁学峰が、南郊区の党の副書記ですから、南郊区はなんとかクリアできた。でも、そのあと……。

そんなこんなで、3 年がかりに、なっちゃったんです。伐ったあとは、替わりを、すぐに植えるんですよ。木を伐るといっても、その目的は、育苗に支障をきたさないため、なんですよ。でも、そういうことが、すぐには通らない。

武春珍に、「いくらで売れたの？」ときくと、浮かぬ顔です。あの話は、流れちゃったんでしょうね。「伐るのに、株もとを、こんなに残していった」といって、50cm 以上のジェスチャーをします。短く切り直して、それを土で埋めて……。見学者を迎えるのに、センターの職員と臨時工が総出で、バタバタしたようです。

林業関係のお役人は、私たちの質問に答えて、「植えた木は、私有権が認められます」というんですけど、ほんとは、こんなメンドウがついて回ります。やたら伐られても困るけど、伐る自由も保障されなかったら、木を植えようという、意欲はでてこないじゃないですか。ほんとに困ったものです。

## NO. 238 安全の確保 2003. 12. 19

最近は、マシになったようですが、数年前、大同の治安は、ひどかったんです。大同は石炭の街で、経済基盤を、石炭が支えています。農業や観光など、その他の産業も、なくはないけど、経済に占める割合は、微少なもの。

石炭の動向が、大同のすべてを左右するんですね。5~6 年前のことでしょうか、となりの陝西省の榆林で、天然ガスの採掘が本格化し、パイプラインで、北京まで、運ばれることになりました。それまでの石炭から、天然ガスへ、エネルギーの転換がはじまったんですね。

環境のためには、そのほうがいいでしょう。大気汚染は、ずっと軽減されます。しかし、石

炭産地では、新しい問題が発生します。過剰在庫をかかえ、石炭価格が暴落したんですよ。一時期は1t150元ほどだったものが、90元、80元、70元と低落し、ついには、60元にまで、なりました。(今年の冬は暴騰し、1tが180元だそうです)。

石炭産業の内部でも、生き残りをかけて、熾烈な闘争が展開されました。そこでは、大手が強く、零細が弱い。競争の条件は、公正とはいえないし、経済の枠内に、とどまらないわけです。行政の命令で、弱小零細炭鉱が、閉鎖されたんです。電線を切り、入口を、コンクリートで封鎖した。私たちも、みたことがあります。

中小以下の炭鉱では、安全面なんか考慮されませんから、事故がつづきます。すると、一斉点検が命じられ、操業を停止しないとイケない。それが長引くと、企業も、労働者も、持ちこたえられなくなります。

しごとのない人が、ふえるんですよ。地元の人だけじゃないんです。南からは遠く、四川省、貴州省からも、出稼ぎにきてたんですよ。炭鉱だったら、からだひとつで、しごとができ、お金になる、というわけで……。ところが、大同にいても、しごとにならないし、お金がないから、帰るに帰れない。

その人たちのせいだけじゃないけど、そういうときは、治安が悪化します。カウンターパートの女性たちも、「市場に買い物に行くとき、ポケットのなかで、お金を握りしめてますよ」といってました。スリが多いと、私たちに注意してくれたんですね。

私たちの環境林センターがある平旺村は、炭鉱の中心に、近いところです。炭鉱からあぶれた人が、街からちょっと足を延ばすと、そこにあるのが、ここの村。タタミ1畳ほどの空き地にも、野菜なんか、植えられたんですね。失業者が、食べ物の助けにしようとしたんです。

環境林センターで働く人たちも、ピリピリしてました。センターは、もともと村の果樹園でしたから、土塀で囲まれていたんですよ。その土塀がしょっちゅう破られ、いろんなものが盗まれる。その土塀の破れ目から、放牧のヒツジの群が、苗畑にはいりこみ、苗木をかじる。

センターには、猛犬がいました。いまでも、3頭います。狼狗(ランゴウ)といいますけど、オオカミとイヌのあいだのような風体。モーレツな勢いで、私にも、吠えかかる。それでも、私が近づこうとすると、飼い主で、門衛の熊貴が、止めるんですよ。「毎日エサをやっている自分にだって、かみつくことがある」といって。

「夜中は、イヌを放し飼いにしたらどうだ」と、私がいったんですね。そしたら、祁学峰が、バカにしました。「イヌなんて、役に立たない」といって。じじつ、そうだったんですよ。私たちのいない季節ですけど、ある晩、1度に3頭も、狼狗がいなくなった。クサリでつないであっ

たのに……。

毒エサで、やられたようです。いつも腹を減らしているから、臭いのいいものでも投げられたら、すぐに、食いつくわけですよ。睡眠剤かもしれませんね。いずれにしろ、意識を失ったイヌは、どこぞに運ばれて、狗肉料理になったのでしょうか。

日本の専門家や、スタッフもここに寝泊まりするんですけど、これじゃあ、ブッソウ。私たちが泊まると、職員の宿直を増やし、地元の公安を呼んで、いっしょに泊めたりして、安全確保に気をつかうんですね。

なにか事故があったら、これまでの積み上げが、水のアワでしょ。修理しても、土塀はすぐ破られるから、レンガ塀に変えよう、ということになったんです。井戸掘り、汚水処理施設とあわせて、外務省草の根無償資金の支援をえました。高さ 2.5m、延長は 2km を超すんですね。

武春珍は、念には念をいれ、塀の上に、ガラスの破片を埋め込んで、忍び返しまで、つくったんです。

完成から、半年ほどたったときのことです。武春珍が私に、「絶対に、だれにも話さないください」と告げながら、それでもためらうんですね。高見なんて、シラフのときはともかく、酔っぱらったら、なんでもしゃべってしまう、安心できない、と思ったんでしょう。「絶対に、だれにも話してはいけない話です」といって、また念を押します。それを、3、4度もくりかえしたあと、私に話したんですよ。

「明け方の 4 時すぎ、私の自宅に、センターから電話がありました。盗まれてしまった、というんですよ。なにを？ ときいても、すぐには答えないんです。夜中 2 時の見回りでは、異常なかったのに、4 時には、もうなくなっていた、というんですよ。なにを盗まれたんだ？ と重ねてきいたら、正門の、鉄製の門扉だ、といいます。こんな恥ずかしい話は、ありません。あれだけの大きさ、重さですから、1 人や 2 人でできることじゃない。おそらく、トラックを、もってきたんでしょうけど、すぐそばの門衛室に泊まっていて、それに気がつかなかったんです」。

それをきいて、不謹慎ながら、私は笑ってしまいました。外務省への申請書で、安全確保の重要性を、私は、しっかり書いたんですね。レンガ塀が、ぜひとも必要だといって。でも、正門の門扉を盗まれたら、レンガ塀に、どんな意味があるでしょう。でもまあ、そんな事件まであったことで、必要性は、わかってもらえるでしょう。それで十分かとなると、こちらは、これで安心という、限度がありません。

……というようなことを書いて、きょうはこれを発送するつもりで、大阪の事務所に着いた

ら数人の警官がいるんですね。入口のドアの網入りガラスを、乱暴に破って、空き巣が、はいっていたんですよ。ビルの管理事務所が、それに気づいて110番をしたんだそうです。

スチールの事務機の引き出しを、こじ開けて、現金だけを、持ち去っていました。ピッキング対策はしてあったんですけど、ガラスを割られたら、どうしようもない。「これ以上の対策はムリですしね……」と警官。

貧乏団体の、事務所にある現金なんて、高額であるはずないんですけど、資料などには、かけがえのないものもありますからね。でも、それには見向きもしなかった。不幸中のさいわい、と自分をなぐさめるしかないです。50年を超える人生で、国内で盗難に遭ったのははじめてなんです。

## NO. 239 禍福は糾える縄の如し 2003. 12. 26

この1年の緑の地球ネットワークの事業は、いいこと、わるいこと、めまぐるしく展開して、ほんとに、たいへんだったんです。2003年の正月があけたとたんに、11年間のカウンターパート大同市青年連合会との協力をやめ、大同市総工会との協力を切り換えたんですね。

2002年の1年間は、青年連合会の新任の主席とどうにも折り合わなくて、危機的な状況になったんですけど、共産党大同市委員会との協議をつうじて、緑色地球ネットワーク大同事務所のメンバーと資産を大同市総工会にすべて移管し、安定した環境を、取り戻すことができました。この問題について書くと、長くなるから、そのうちに、単独のテーマにいたします。

2003年春の大同は、雪と雨が多かったんです。おかげで、春に植えた苗木は活着率も、初期生育も、良好でした。なかでも、「カササギの森」では、活着率は、100%近かった。菌根菌をつかった苗木、ベテランの技術者の牽引、少人数の、固定した作業員、責任体制が明確な管理、こうしたことの結果です。

ところが、7月末になって、豪雨と雹(ヒョウ)の被害があり、谷底のヤナギ、ヤナギハグミ、ギョリュウなどが流された。試験的に植えているナラなどの広葉樹も、土をかぶったり、流されたりしました。灌水用の貯水槽も、ポンプごと、なくなったんですけど、1週間以内に、再建しました。ヤナギ、ギョリュウなどは、流され、埋まっても、9月には、新しい芽をだしましたから、回復は、意外と早いかもしれない。以前はなかったところにも、広がる可能性があります。

これまでの成果が、ことしくらいから、目にみえるようになったんですね。カササギの森の入り口の、采涼山プロジェクトでは、2000年に植えたモンゴリマツが、60~70cmに、伸びてき

ました。大同にくる人は、かならず、カササギの森へ案内しますので、入り口のマツが、好成績なのは、うれしいことです。そこから少し離れた、大同県金山寺のマツは、人の背丈を、超えてきました。

小学校付属果樹園で、アンズなどの収穫が、増えてきました。典型は、渾源県呉城郷で、村の人は、その後も、アンズを植え広げ、600ha、50万本にもなりました。面積あたりの収入は、以前のアワ、キビ、ジャガイモなどに比べ、5倍から10倍、いいところでは20倍にもなったそうです。

でも、こういうことを、いくら話しても、書いても、なかなか、わかってもらえないでしょうね。自分の目で、みてもらわないことには……。

祁学峰は、以前は大同事務所の所長で、大同市青年連合会の副主席、主席を務め、この協力事業の、責任者でした。2001年11月に、青年団を卒業し、南郊区の共産党副書記に栄転しました。そこでも、激務なんですね。彼は仕事ができるから、仕事のほうから、集まってくるわけです。それから、離れてしまった職務のところへは、気軽に来にくかったようです。

祁学峰と会う機会に、私と武春珍とで、どこそこのアンズがどうなった、とか、あそこのマツはこうなった、とか、そういう話をするんですけど、なかなか彼に通じない。彼はわかったつもりですけど、むしろ、私たちがもどかしい。祁学峰が責任者であった時期、苦労ばかり多くて、目にみえる成果は乏しかったですからね。10年近くも、いっしょに現場を回ってきた祁学峰に、こういう話を通じないんですから、彼も含めて、自分の目で、みてもらうしかないんです。

環境林センターの汚水処理施設は、土壌浄化法を採用し、大成功でした。処理水のなかで、金魚が、元気に泳いでいました。160匹ほどです。冬は、零下30度近くまで、下がるんですよ。小さな池に、水があつたら、凍結で、筐体が破砕します。「冬はどうするんだ」ときいたら、「それまでに食べてしまう」といったんですね。コイだといわれて、買って来たんですけど、まちがいなく、金魚です。でも、11月にいってみると、温室の水槽に移してありました。低温で動きはニブイから、狭いところでも、生きられるようです。

そのあと、炭鉱汚水の浄化に、挑戦していることは、最近の通信で、書きました。忙しいはずのときに、水処理施設を、立ち上げることができたのは、この1年、1つを除いて、ワーキングツアーが、すべて中止になったからです。予定されたツアーがきていたら、こういうことに、取り組む余裕はなかった。イラク戦争と、新型肺炎 SARS のためです。

水問題に、取り組んでいなかったら、私たちのこの1年は、とても貧しかったでしょうね。自転車操業の、零細 NGO ですから、もう、こけていたかもしれない。

水問題への取り組みが評価されたり、私の『ぼくらの村でアンズが実った』が、たくさんの人に読まれたり、東京駅での橋本紘二さんの写真展が成功したりで、新しく会員になってくださった方もあるんですよ。でも、イラク戦争と、SARSの影響は、そんなことでは取り返せないくらい、深刻でした。緑の地球ネットワークの会員は、1年前に比べ、100人の減です。環境にとって、平和と安定した環境が、いかにたいせつか、卑近なところで、痛感しました。

2003年8月、日本大使館主催のプレスエクスカージョンで、中国側11社の記者が、大同を取材しました。武春珍が、これまでの経過を説明すると、「高見って、どういう人間なんだ？」という質問が出るんですよ。すると、武春珍は「これだけの困難にであれば、たいていの人は、途中で放棄するでしょう。彼が堅持しているのは、私のみるところ、困難に挑戦するのが好きな人だからです」なんて答えるんですね。

やめて、ちょうだいよ！不運なだけです。10年以上もつづけてきて、成果もみえはじめたから、もっとラクに展開して、ふしぎじゃなかった。ところがこの1年、ほんとにしんどかった。来年は、いい年になってほしいです。みなさんも、いい年をお迎えください。

#### NO. 240 ブルブルッ 2004. 01. 05

あけまして、おめでとうございます。新年初の号くらいは、明るい話題でいきたい、と思うのですが、残念なことに、思いつきません。せめて、冬の話題でいこうと思いついて、これを書いていました。ほぼ、書き終えていたんです。すると、つれあいが、階下で、呼ぶのです。「スズムシがかえっている」というんですよ。

昨年の夏、プラスチックのケースにはいったものを、私が買って来たんですね。3週間ほど、澄んだ音色を、楽しみながら、「ゴキブリも、せめてこれくらいの声で鳴いたら、きらわれることもないだろうに……」などと、ひとさまの受け売りをしていました。オスが先に死に、メスもあとを追ったんですけど、土のなかに、たくさんタマゴがありました。最初のうちは、水をかけて、土が乾きすぎないようにしていました。ところが、あきて、忘れちゃったんです。そのあとは、つれあいが、代わりに水をやっていました。気の毒に、いつものパターンです。

そのタマゴが、正月に、かえっちゃったんですよ。明るいところにもちだして、数えると、ちいさな、ちいさな虫が、7匹、触覚を動かしています。かわいいんですね、これが。タマゴは、まだたくさんあります。ぜ〜んぶ、かえったら、どういうことになるんでしょう。あわてて、キウリとスズムシのエサをやりました。付いてきたパンフレットによると、「6月上旬に孵化する」とあります。それにしても、早すぎます。どうしたらいいか、経験のあるかた、教えてください。

大同は、北緯40度ほどです。北京と、だいたい同緯度。日本でいえば、秋田・岩手・青森のラインです。でも、海拔は、大同の市街地で、1000m ちょっと。大同盆地の中心にあって、大同のなかでは、標高はもっとも低い。南部の霊丘県、広霊県には、それより低いところもありますが、例外的です。

北緯40度、海拔1000m超から、容易に推測できることは、冬が寒い！しかも、ここは大陸の内陸部。大陸というのは、なんでも極端なんですね。

いちばん寒いのは1月で、月平均気温の歴年平均は、マイナス12度前後、暖かい年は、マイナス9度くらいで、寒い年は、マイナス14.5度くらい。1月の最低気温の平均は、マイナス19度前後。これは平均で、歴史上の最低気温はマイナス29度。一昨年(2017年)の12月下旬に、更新しました。

1月の最高気温の平均は、マイナス3.3度くらい。日中でも、零度以上になることは、めったにありません。

一昨年、歴史上の最低気温を記録しましたが、それは例外で、全体としてみれば、暖冬つづきです。1970年頃にくらべ、大同の年間平均気温は、1度上昇しました。1年でいちばん暑い7月の月平均気温は、ほとんど変化がなく、いちばん寒い、1月の月平均気温は、1.8度ほど、上昇しているのです。

数年前、農村でアンケート調査をやったら、「10年前にくらべ、気温はどうですか？」という問いに、

夏は以前より暑くなった	51.6%
夏は以前より涼しい	27.8%
冬に寒い日がなくなった	77.8%
冬が以前より寒くなった	10.9%
変化はない	2.8%

みんな、けっこう敏感に、感じ取っていると思いませんか？冬が寒くなった、という人が、10人に1人いるのは、ふところぐあい(関係)かな？

冬が寒い地方ですから、暖冬は悪いことではない、と思われるでしょうけど、そのせいで、虫害が増えたり、アズキの花が早く咲きすぎて、その後の凍害にやられやすいことなどは、以前に紹介しました。降水パターンの変化にも、影響しているかもしれません。自然が相手の農業にとって、急激な変化は、望ましいことではないのです。

ともあれ、私たちの標準では、この地方の冬は、しっかりと寒いのです。朝夕は、路面は確

実に、凍結しています。ところが、車はノーマルタイヤで、たいていはツルツル。日本で、運転中に、スリップした経験のある私なんかは、怖くて、怖くて、しかたがないんですけど、彼らは平気なんですね。乾燥していて、路面に水分がないからだろうと、私は考えましたし、そういうことも、たしかに、あるんでしょうけど、そうとばかりもいえない。

昨年の11月、大同にいったとき、めずらしく、雪が降ったんです。市内の道路にも、雪が残っていたんですけど、それでも、あまりすべらなかつた。車は、平素より、スピードを落としますが、そんなに、用心深いようにはみえない。事故多発、というわけでもない。どうしてなんでしょう？おわかりのかたは、教えてください。

大同の冬は、気温の数字ほどには、寒く感じません。雪が降ったり、風が吹いたりしたら、べつですよ。大同ではなく、張家口市張北県でのことですが、地震被災地で、小学校再建に協力することになり、車で現地に向かいました。1998年3月の中旬だったんですけど、この日は吹雪で、風も強かった。地元の人々は止めたんですけど、なんとか現地に行きたかった。雪のために、途中で、車が、スタックしたんです。「歩いてでも行きます」なんて、最初は、私も、勇ましかつた。

そこが、吹きっさらしだったんですね。ダウンジャケットを着て、フードで覆っているんですけど、耳が、寒いんじゃないくて、痛いんです。わずかのあいだに、その感覚すらなくなった。それと同時に、私は、腰が砕けて、もとのところに、引き返したんですね。大同からきたメンバーも「これほどの寒さは知りません」と、いっていました。

風がなく、日がでていれば、さほど寒く感じないのは、湿度が低いせいでしょうか。気温はマイナス10度以下であっても、そんなに寒く感じません。そんな日、農村にいくと、老人たちが、家々の土塀によりかかって、座り込み、集団で、日向ぼっこをしています。私も、上着を脱いで、そのなかに、混じったりする。

昨年11月、炭鉱水の浄化実験を、開始するとき、手元の温度計で外気温を計ると、7度ほどでした。マイナスです。そのあと、温度計を陽光にさらすと、5度でした。こちらはプラス。

## NO. 241 陰陽 2004. 01. 15

私は、鳥取県の、日本海に近い農村で、育ちました。いまごろの季節は、太陽をみることはありません。海もナマリ色、空もナマリ色。境目がはっきりしません。そして、海鳴り。私がこどものころは、いまよりずっと雪が多く、いつもゴムの長靴でした。いや、冬だけじゃない、その他の季節も、長靴で野山を、駆け回っていたような、気がします。

もう十数年前だと思いますが、テレビドラマの『夢千代日記』をみていたら、主人公の友人が育てている女の子を、産みの親が連れ戻しにきて、「もっと太陽の多いところに行こう」と誘うんですね。ドラマのスジも、結末も、まったく記憶にないんですけど、その場面だけが、みように鮮明です。あの舞台も、山陰でした。

山陰の「陰」がよくない、べつな表現に変えるべきだ、という主張がありました。運動にまで、されたようです。その後、どうなったんでしょう？私たちにとって、「陰」のイメージは、たしかに、よくありません。陰気、陰鬱、陰湿、陰険、陰惨、陰謀……。音の同じ、淫も、隠も、印象がよくない。

それにたいして「陽」は、あれっ、こっちを辞書で調べても、プラスの価値をともなう熟語が、あるわけじゃないですね。陰気にたいする、陽気くらいかな？それだって、かならずしもいい意味じゃない。軽薄な感じがあります。

大同に通って、しかも、緑化にかかわったりすると、この陰・陽の感覚も、変わってくるんですね。日本では晴天が「いい天気」ですけど、大同にいるときは、雨が降ると、うれしい。まあ、ツアーのみなさんがきているときは、行動に支障があるから、そのときだけはべつですよ。なんて、言葉ではいうんですけど、「うれしそうですね」とツアーのメンバーにいわれます。そういう表情になっちゃうんでしょうね。地元のお百姓さんも、傘なんかささないで、雨にぬれながら、うれしそうにしています。

植林地を決めるとき、最初に気にするのが、「陰坡」(インポー)か、「陽坡」(ヤンポー)か、ということです。「坡」は傾斜したところの意味で、「陰坡」は日陰斜面、「陽坡」は日向斜面です。

植物の生育に向いているのは、一般的には、「陰坡」です。北側の日陰斜面。意外に思いましたか？一帯の山を、グルッと見て回ると、一目でわかります。灌木や草が茂っているのは、たいてい陰坡です。

霊丘県あたりには、アブラマツの種を、飛行機で蒔いたところがあります。60年代のことだそうです。活着して、残っているのは、多くないんですけど、その大部分が陰坡。陽坡にも、数えるほど、残っていたりするので、少なくとも一部は、陽坡にも蒔いたはずなのに、こちらは着かなかった。

中国五岳の1つで、道教の聖山、北岳恒山の山頂付近で、北面には、各種の樹木が自生し、南面は草も乏しいことを、この通信でも、以前に書きました。

98年くらい、いくつかの自然林をみたんですけど、これも大部分が、陰坡です。陰坡には、

ちゃんとした森林ができて、陽坡には、なかなか、木が育たない。陰坡と陽坡のあいだにも、いくつかの段階があって、「半陰坡」「半陽坡」といった区別をします。

最大の原因は、水でしょう。陽光のあたる、南側の日向斜面は、乾燥が、ひどすぎるんです。それから、冬の時期、植物の細胞が、夜間に凍結するんですけど、そこに、いきなり朝日があつたると、細胞が、破壊されるそうです。「日較差が大きすぎる」と表現した、日本の専門家もいます。そんなわけで、陽坡はむずかしい。

ところが、現在、大同では、三北防護林＝緑の長城計画、太行山緑化工程、環北京天津風砂防止工程、といった国家プロジェクトを含めて、たくさんの緑化プロジェクトで、陽坡が中心。私たちのプロジェクトもそうです。

太古の造山運動の関係で、この地方の山は、北側は切り立っており、面積は、ほんとに少ないんです。その緑化は、基本的に、終わっています。傾斜がゆるやかで、面積が広いのは、南向きの陽坡。大同の緑化がむずかしい、原因の1つに、この問題があります。

霊丘自然植物園で、昨年春、植樹をしているとき、地元の技術者たちが、「陰坡の松樹(インポーダソンシュー)、陽坡の柏(ヤンポーダビャー)」と、歌うように、口にしました。柏は、ヒノキ科のコノテガシワ。普通話(標準語)では、「バイ」ですけど、大同方言では「ビャー」です。「松柏」と並び称されても、生育環境に、ちがいがあつるんですね。

それから、果樹はまた、べつですよ。アンズその他の果樹も、生育は、陰坡のほうが、いいのかもしれない。しかし、日陰では、ろくな実がなりません。それだったら、果樹の意味がない。

これからの大同の緑化にとって、陽坡に育つ樹種をみつけること、陽坡での植林技術を開発すること、この2つは、とても重要なことです。植物園での観察では、トネリコの1種、ニンジンボク、野生のモモなどが、陽坡に元気に育ち、以前は、地肌のめだつたところを、緑に、変えてきています。

## NO. 242 「中日民間水フォーラム」 2004. 01. 22

今回は、重要な情報です。無駄口をつつしみ、短くします。メールマガジンやB.C.Cでなく、お一人お一人に送りたいところですが、現実にはムリなので、いつものスタイルにします。でも、ぜひ読んでください。そして、できるだけ、多くの人に、知らせてください。

中国の水問題がきわめて深刻であることは、おりにふれ、話してきました。危機的、といつ

ていいでしょう。でも、日本人の多くは、それを知りません。私たちが食べている、中国産の野菜その他の食品、生活の、あらゆる分野におよぶ、工業製品……。それらがなかったら、いまや、私たちの生活は、なりたちません。そのすべてが、水のかたまり、とっていいのに…。

日本人が知らなくても、ムリはないのです。中国人のなかでも、深刻さに気づいている人は、多くはないのです。ひじょうに少ない、といってもいいでしょう。あまりに、アッケラカんとしているのです、私は最近、「中国では、杞の国の子孫は、死に絶えて、楽観的 DNA だけが、選抜されて、残っている。これは悪口ではありませんよ、ほめているんです。私のような軟弱分子は、こういう環境におかれたら、生きていく意欲がなくなります」なんて、北京での、講演会なんかで、話します。杞の国は、天が落ちることを心配し、「杞憂」の言葉を残した人たちですね。無駄口をつつしむ、と書いたばかりなのに、バカな話に逸れて、もうしわけありません。

日本と中国の、環境協力をめぐる、政府間や、民間のシンポジウム、フォーラムなんかにも、出席させていただく機会が、増えてきました。ふしぎなことに、そういう場で、水が課題になりません。

私なんか、「北京の水資源はどうなっていますか？地下水位は、いま、どのくらいですか？1年に、どれくらい低下していますか？」と、無遠慮に、しつこく質問するんですけど、中国側の代表からは、「きわめて重大な問題です」という答えがあるだけで、具体的な数値は、でてきたタメシがない。「きわめて重大」といいながら、環境問題の専門家が、それに答えられないんです。よくわかっているけど、公表できない事情があるのかな？

中国では、水資源を扱うのは、水利部です。環境保護総局なんかは、ほとんどタッチしない。そして、水利部は、国内の資源問題として扱っていて、国際性を備えた環境問題とは、あまり意識しないようです。日本側カウンターパートは、国土交通省で、旧建設省の領分でしょうけど、守備範囲は「国土」で、中国の環境は、視野になかったでしょうね。少なくとも、従来は。

ところが、このたび、中華全国青年連合会が、北京で「中日民間水フォーラム」を、開催するというんです。中華全国青年連合会は、共産主義青年団中央委員会と、重なる組織。共産主義青年団は、共産党と政府の登竜門で、胡錦濤共産党総書記・国家主席の、出身母体です。中央と省・自治区の幹部にも、厚い人脈があります。フォーラムを発起した、周強書記は、次代の中国の、トップリーダーの1人でしょう。そして、後援に、水利部、建設部、環境保護総局などが名を連ねています。

期日は、出席者の登録が4月21日(水)、22日(木)の開幕で、24日まで。会場は、五州飯店の予定だそうです。

テーマは、水に関する文化、政策、技術の広い範囲に及びます。

中国側の出席者、発言者の主なメンバーが決まりつつあるようですが、水資源、水環境の研究者、前述の各部のほか、農業部などの中央政府と、黄河・長江流域の、地方政府の責任者、環境 NGO の代表、ジャーナリズム関係者など、多彩なメンバーです。

水処理などについては、日本の企業の参加を求め、商談や、展示の場も、設けるそうです。「なかなか、もうけさせてもらえません」という声も、日本の企業関係者から聞きますが、変化のきざしを、見逃さないほうがいいでしょう。環境ビジネスにとって、中国は、

魅力ある市場に、なりつつあるようです。青山周さん(日本経団連事務局)の『環境ビジネスのターゲットは中国・巨大市場』(日本工業新聞社、2003年)が、参考になるでしょう。

このフォーラムに、尾田栄章さんはじめ、第3回世界水フォーラム事務局のみなさんが、協力されます。そして、日中新世紀協会などの日本の若い世代が、かんばっておられる。ほんとうに、成功してほしい。つぎの機会に、つなげてもらいたい。祈るような気持ちです。

関心をもっていただける方は、とりあえず、私のところへ、ご連絡ください。新しい情報をお届けします。

## NO. 243 のむ、うつ、かく 2004. 02. 06

2月5日の夕方、大阪から北京について、一夜、明けたところです。着陸時の案内では、気温はマイナス1度で、そう寒くはありませんでした。夜中から、寒波がやってきたようで、ホテルの7階に泊まっていると、ピューピュー、風の音がします。窓際の、テーブルに座って、ノートパソコンに、向かうと、カーテンを、下ろしたままなのに、窓側の、身体の半分だけ、冷えてきます。

きょうの、午後3時すぎの列車に乗り、大同に着くのは、夜の8時半すぎ。本格的な寒さは、それからですので、それについては、大同に着いてからレポートしましょう。今回は(も)、バカな話。

道楽者の、三拍子は「のむ、うつ、かう」。私の「のむ」については、これまでも、しばしば書いてきました。「うつ、かう」は、縁がなかった。幸か不幸か、先立つ条件がない。そのうえ、なにごとにおいても、すぐに、のめりこむタチ。結果は、先にみえますから、意識的に、避けてきた、ところでもあります。一文字、変えて、今回は「うつ、かく」について。

私の、文章修行は、以前にも、書いたとおり、学生運動の、アジビラ書きでした。下書きもしないで、ガリ版に、直にむかいます。あれは、書き直しは、不可能に近いので、最初から、

最後まで、頭のなかで文章をこしらえ、分量も整えて、それからはじめます。ムチャな先輩がいて、途中まで書いたものを、私に渡し、「つづきは、おまえが書け!」。字体まで、彼に似せて、つづきを書いたんですよ。

そのあと、機関紙編集の、まねごとをしました。他人の文章を、ちょこちょこっと、いじったり、自分でも、短い文章を書いたり。そのころから、万年筆を使いだしたんですけど、けっこう、凝ったんですね。当時としては、ものすごい、ぜいたくをして、買ったのが、クラシックなペリカン。ものを書いているときは、神経質になって、ペン先がひかかったり、インクが、ちょっと、かすれるだけで、イライラしたんですけど、そのペンは、そういうことがなかった。自分の心情を込めた、文章は、それでない、と、書けないような気がしたんです。

肌身離さず、持ち歩いて、10年ほど、使い込み、すっかり、なじんできたそれを、なくしてしまっただけです。ショックが大きくて、何週間も、文章を書く気が、おこらなかつた。同じペリカンを、探したんですけど、もう売ってなくて、代わりに、モンブランの太軸を、買ったんですけど、なじむまえに……。

それなりに、まとまったものを、書くときは、1人で、静かなところでしか、書けなかつたんです。たいていは、ほかの人が寝静まった、夜中。書き出しから、結末まで、頭のなかで、まとめ、具体的な表現まで、つくりあげて、それから文字にしたんですね。書いたあとも、それを覚えていて、1~2週間のあいだなら、そのままのかたちで、完全に、書き直すことができたほどです。当然、少産です。書く機会も、そんなにありはしなかつた。

「かく」が、「うつ」に変わったのは、1984年です。そのころの事務所に、ワープロがはいりました。富士通の、OASYS100F。キーボードが、親指シフトです。そのあと、ポータブルの、Light-F(?)を買った。生産性の「向上」は、ものすごいものです。とにかく、考えなくて、いい。順番の、入れ替えは、簡単ですし、書き直しは、いくらでも、できますから、思いついたことから、書いて(打って)いけばいい。先に結論を書いて、最後に書き出し、なんてことも、思いのまま。

夜中、静かなところで、1人でないと、書けなかつたのに、事務所で、ほかの人と、しゃべりながら、なんてのが、へっちゃら。時間に、追われているときは、みっともない思いさえ、しんぼうすれば、通勤の、電車のなかでだって、書けちゃう。はなはだしきは、この通信のように、ウイスキーか、ショウチュウを、チビリチビリやりながら、なんてことになっちゃうんですね。モンブランは、存在すら、忘れてしまったんです。

でも、ワープロをはじめて、1年たったころ、ガクッと、きました。書けないんです。書くことが、頭のなかに、でてこない。

ペンで、書いているときは、文字にするまでに、いろいろ考えたんですね。文字にならないことも、考えたんです。いろいろ調べることもした。それが、アタマにとっては、インプットだったんですよ。ワープロになると、それがなくなる。ただ、アウトプットだけ。思いつきを書いて、分量に達したら、それ以上を、調べることも、しなくなる。だから、涸渇する。

ワープロで、文章を書くってことは、自分の頭脳の、かなりの部分を、ワープロに、移しかえること、なのかもしれない。ワープロがないと、短文だって書けないし、書く気さえ、おきないというのは、そういうことでしょうね。

まったく書けない、って状態は、私のばあい、そのうちに解消しました。どういう過程があったのか、自分でも、わからない。書けるようには、なったんです。

でも、文章というか、文体というか、ものすごく、変わったと思います。ひとことでいうと、軽くなった。薄くなった。だいたい、たったいま、書いているものだって、ペンだったら、ぜったいに、書かない内容です。

この「黄土高原だより」や、それをまとめた『ぼくらの村にアンズが実った』を読んで、「重たい問題を、サラリと、さわやかに……」なんて書評がでたり、そういう感想を、寄せてくださるかたがあったり、「癒し系です」と、いわれたりするんですけど、そう意図してる、わけじゃないんです。ことばが、すべってるんでしょうね。自分の思いが、伝わっていかない、もどかしさを、感じるものが、ないわけじゃない。

だからといって、ペンに戻れるかといったら、要するエネルギーの巨大さを思うと、怖げがいちやいます。

先週、東京で2回、パワーポイントを使って、報告をしました。はじめてです。やってみると、便利で、ラクなんですね。でも、それで、話したいことが、伝わってるんでしょうか？これも、同じ道かもしれない。話をしている、私のほうは、これまでだったら、それなりの緊張感があって、きいてくれる人の顔をみながら、それに触発されて、自分でも、新しい発見があった。そういうことが、薄まるように、思えるんです。どうなんでしょう？

## NO. 244 道路が分ける明暗 2004. 02. 12

大同の市街から、渾源にむかう途中に、小さな山脈があります。大同県と、渾源县との県境。高低差500mほどを、道路は、曲がりくねって、登っていきます。峠を越えた、眼下にあるのが、三嶺村。ここの眺めが、絶景なんですね。日本では、絶対に、みられない。

遠くの山には、まったく樹木がない。草も、まばらです。人の手の届くところは、どこも段々畑になっている。「耕して天に至る」は、誇張ではありません。畑の畦が、地図の等高線のようで、ほんとに、きれいです。その畑を、夏の雨による、浸食谷が切り裂く。

三嶺村は、日干しレンガの、窯洞(ヤオトン)の村。20戸ほどでしょうか。村のはずれに、ノロシ台があります。明代のもので、わりと完全に、保存されています。私たちのツアーの参加者は、「ノロシ台の村」と、呼ぶようになりました。「夢の国のようです」という人もいます。「これをみただけで、きたかいがありました」という人もいました。

黄土高原の、典型的な、光景とっていいでしょう。フォト・スポットです。国外からの観光客は、みな、バスを止めて、峠からの眺めを楽しみ、シャッターを切りました。「あそこは、懸空寺以上の、観光価値があるよ。峠のところに、駐車場をつくったら……」などと、大同市の幹部に、私がしつこく、すすめたくらいです。

外来の人が、感動するような場所は、そこで暮らす人にとっては、苛酷な環境です。あの段々畑でつくれるのは、アワ、キビ、ジャガイモですが、収量は、わずかなもの。旱魃の年は、耕作をあきらめて、畑を放置します。その旱魃が、90年代以降、連続しました。村の水源は涸れ、4kmほど離れた、谷底の井戸まで、水を汲みに、通っています。

村の人たちにとって、貴重な収入源は、バスを止める観光客に、ささやかな、みやげものを、売ること。シンチュウ製の馬鈴、1個3~5元。刺繍をほどこした、靴の中敷き、5元。布でつくった馬など、5元。観光バスが止まるたびに、先を争って、それを売りにくる。たいていは、小学生くらいの、こどもと、村の女性たちです。かなり、しつこく、せがむんですね。

ツアー参加者には、それをいやがる人が多い。「こどもに、こんなことを、させて！」というわけです。私の、最初の印象も、そうです。でもね、乞食をしているわけじゃない。ものを売ることが、非難されるんだったら、世界中の経済が、なりたたないでしょう。20歳をすぎて、親にやしなわれる日本のこどもと、10歳前から、家計を助けるために、働くこどもと、どちらが、まともでしょう？

私が、根本的に、認識を改めたのは、こんな事件です。ツアー参加者が、この村の付近で、フィルム交換のさいに、落とし物を、したんです。峠の、野外のことです。そのなかに、パスポート、飛行機のチケット、そして、かなりの大金が、入っていた。それを、村の人が、みつけて、通りがかった、タクシーで、渾源県の皇城まで、追っかけてきたんですよ。落とした人が、大同に向かったのか、渾源に向かったのか、どの団の、どの人なのか、わかりっこないんですよ。

落とした本人に、直後に、それが返るといのは、まさに奇跡でしょ。そういうことが、現

実に、あったんです。奇跡は、奇跡だけど、村のその人の、善良さがなかったら、こんなことは、ありえない。

この道路は、大同一五台山―太原の山西省の、観光の幹線なんです。そのなかで、高低差が500mある、彎曲した峠道は、難所です。とくに、冬は、雪が積もったり、凍結したりで、通行が、困難になる。谷底に、転落しているトラックなんかを、みることも、あったんですよ。

道のつけかえが、すすんだんです。これまでの、峠道を避け、崖をけずり、谷を埋め、新しい道路が、昨年秋に完成しました。大同一渾源は、従来の1時間半が、1時間以内に、短縮されました。ずっと安全にもなったんです。乗用車で、10元という、有料にもなりましたが。

新しい道は、三嶺村を、避けてしまった。旧道は、またたくまに、廃れました。2月10日、朝から、そっちに行ってみたんですけど、通る車は、まったくありません。旧道への分岐も、たいていの人は、見落とすでしょう。車を峠に止めて、写真をとっていても、みやげものを、売りにくる人は、いません。三嶺村の人たちは、どうやって、暮らしを立てるのでしょうか。せっかくのスポットを、観光客も、みることはできません。

いつも、通訳をしてくれている王萍が、きょうは、本来のしごとで、太原にいきました。代わりに、大同の旅行社の、幹部がきてくれました。彼の話です。

―昨年11月、北京―大同の、高速道路が、全線開通しました。それによって、北京―大同は、乗用車では、2.5～3時間。バスでも、4時間になりました。ずいぶん、便利になったんですね。それまでは、北京―包頭線の列車だけ。近年になって運行された、昼間の快速急行で、5.5時間。夜行だと、夜の11時半に、北京西駅をでて、大同に着くのが、翌朝の6時半です。

そういうふうに、便利になって、大同の旅行社は、ピンチだそうです。大同観光が、北京の旅行社に、移ったんですね。従来は、鉄道で大同に着いた旅行客を、大同の車が、雲崗石窟、その他を、案内していました。ところが、いまは、北京から直接、車でくる。ホテルも、北京の旅行社が、手配をする。

くるのは、ガイドの依頼だけ。いくつかある大同の旅行社の、奪い合いで、その価格も、下がる一方。そのうえ、SARS(新型肺炎)の影響も、深刻でしたからね。職員や、ガイドの賃金も、大幅にカットされたそうです。その傾向に、拍車をかけても、不本意なので、具体的な数字は、書かないことにします。

新しい動きは、たしかに、効果をもたらすでしょう。でも、それによって、不利益をこうむる人もいます。現在の中国は、得るものと、失っているものが、極端です。

## NO. 245 首都の水資源保護 2004. 02. 25

2月の前半に大同を訪れました。着いた日の最低気温はマイナス18度、最高気温はマイナス8度。でも、その後は寒さがゆるんで、日中の最高気温がプラスに転じることさえ、あったんです。新栄区、渾源县まで足を延ばしました。

新しく目についたのが、「二十一世紀首都水資源項目治理区」の大きな看板。北京の水資源確保のためのプロジェクト区、というわけです。

この通信でも、なんども書いてきたように、大同は北京、天津の水源です。黄河に平行する南北に長い山脈＝呂梁山脈の北部に水源をもつ桑干河は、大同の中央部を西から東に流れ、(最近には流れないことが多いんですけど)河北省にはいって、官庁ダムに注ぎます。

官庁ダムから下は、名称が変わって、永定河。ずっと以前は氾濫をくりかえし、しょっちゅう河道を変えたので、永く定まるよう、名前を変えた、と聞きました。中国では、文字は神秘の力をもちますからね。天津の近くで海河に合流し、渤海に注ぎます。

それから大同は、西北からの風砂の吹き出し口です。風砂のルートは、西ルート、西北ルートの2つがあるそうですが、その2つとも大同を通過します。

こういう位置にあるために、大同では早くも、中華人民共和国成立直後の1950年代から、緑化に大々的にとりくみました。大同じしんのためというより、首都・北京を守る、その色彩が濃かったんです。沙漠化が深刻化するいま、そうした課題はさらに重くなりました。

大同市の北部は、緑化の国家プロジェクト「三北防護林＝緑の長城計画」の重点地域です。大同市の南部は、同じく国家プロジェクト「太行山緑化工程」の重点地域です。そして、2000年からは、「環京津風沙源治理工程」がスタートし、大同市北部が、その重点地区になりました。

2000年から2002年にかけて、沙塵暴(砂嵐)がひどかったんですけど、それにあわせて、このプロジェクトが立ち上がったわけです。「京津」は、北京・天津です。

具体的には、

### 【林業系統】

人工造林、飛播造林、農田林網、封山育林、退耕還林、種苗基地

### 【農業系統】

人工植草、飛播牧草、草植基地、基本草場、生態移民、舎飼禁牧

### 【水利系統】

## 水利配套措置(水源工程、節水灌漑)、小流域治理

日本語に訳そう、と思ったんですけど、そうすると長くなる。表意文字のいいところで、だいたいの意味はわかると思いますし、四字成句の雰囲気を楽しむのも、悪くないでしょう。

規模がまた、すごいんですね。

2000年 14万畝 (93.3km<sup>2</sup>)

2001年 34万畝 (226.7km<sup>2</sup>)

2002年 40万畝 (266.7km<sup>2</sup>)

2003年 74万畝 (493.3km<sup>2</sup>)

2004年 76万畝 (506.7km<sup>2</sup>)

畝(ムー)は、中国の面積単位で、1畝=6.67アールです。私は、15畝=1ha というふうに覚えて、計算しています。

ここまでの合計は、238万畝。=15.8万ha(=1580平方km)。大同市の面積が、14200平方kmですから、総面積の11%以上。それだけの面積を、たった5年のうちに、樹木、灌木、草で、覆ってしまう、というわけです。

統一的な計画は、まにあわないようです。その地、その地の、事情にあわせて、適当と思えることを、やっていく。混乱なく、すすむほうが、ふしぎでしょうね。そのための資金は、国が大きく投資し、省、市、県も、負担する。

そのうえに、冒頭に書いた、「首都水資源保護21世紀項目」がやってきました。2001年から2005年までに、およそ45項目で、総投資額は10.32億元。

- |                |      |             |       |
|----------------|------|-------------|-------|
| 1. 農業節水項目      | 26項目 | 節水量6842万立方m | 2.2億元 |
| 2. 水土流失治理項目    | 10項目 |             | 6.0億元 |
| 3. 水源保護、その他の項目 | 8項目  |             | 1.6億元 |
| 4. 能力建設        | 1項目  |             | 0.5億元 |

4番目の「能力建設」は、人材育成などだろうというのですが、正確なところは、わからなかった。そのついでにいておきますと、これまでの数字は、ちゃんと確認をとっていませんので、目安くらいに考えてください。

そのなかで、投資額最大の「水土流失治理項目」も、主に、植樹植草です。その現場近くに、「下定決心抓好首都水資源工程」(決意を固め、首都水資源プロジェクトをりっぱにやろう)、「排除万難確保北京一億米<sup>3</sup>供水」(万難を排して、北京への1億立方メートルの供水を確保しよう)といった、スローガンが、大書されていました。「下定決心」「排除万難」なんて言葉がならばと、プロレタリア文化大革命のころを、思い出しますね。

それでもう、いたるところが、造林用に整地され、この春、苗を植えるばかりに準備されています。いやあ、びっくりしますね。1992年から、13回目の春で、これほどの緑化熱は、はじめてです。やる以上は、成功してほしいものですけど……。

それから、官庁水庫の水質改善が目的でしょう。大同市の砒務局、新栄区、城区、開発区、県(おそらく陽高県)に汚水処理施設を新設するのだそうです。総投資額が、17.33億元。

中国としても、水問題に、本腰をいれだしたんですね。あの国のことですから、いったんやるとなったら、急アクセルです。日本としても、こういった挑戦が成果をあげるよう、さまざまな角度から協力すべきだと、私は思います。それは日本じしんのためにも、必要なことです。

この通信は、1週間まえに書いていたんですけど、2月19日が、日帰りの東京出張で、「帰ってから発送しよう」と思っていたら、帰った翌日から、発熱してダウン。念のために、病院にいったら、39.3度もある。いろいろ検査をして、その結果、「よかったですね、インフルエンザです」と告げられました。A型。中国から帰って、1週間だったから、インフルエンザでよかった、というわけですよ。

高熱は1日とちょっと。目をつぶると、わけのわからぬ妄念が、つぎつぎわくんですね。熱がおさまると、こんどはうつ状態で、「このまま、おれはダメなんじゃないか」なんて思いが、くりかえし湧いてくる。病気になったら、いつものことなんですけどね。きょうも、まだ本調子じゃないんです。

あれこれ課題を抱え込んで、大忙しの時期に、1週間で空費したんですよ。そのぶん、このあとがまた、辛くなるわけです。あ〜あ。年齢のせいにされるのは、くやしいから、「いや、若いときから、軟弱だったんです」なんていうんですけど、そんな抵抗をしても、意味はないですね。

『科学』(岩波書店)の3月号の特集が、「植林の現在(いま)―研究と実践の交差するところ」。吉良竜夫さんはじめ、尊敬するかたたちの、お名前がならんでいます。読んでからだと、内容について書かないといけないでしょうから、きょうは読むまえに、お知らせだけ。私も2ページ、もらっています。

## NO. 246 拒馬河の水争い 2004. 03. 04

北京の友人から、先日、メールが届きました。「あなたの懸念していたことが、現実になりました」といって……。なんだろうと思ったら、北京と河北省の水争い、です。

拒馬河の水源は、河北省涑源県にあります。涑源県は、太行山のなかにあり、私たちの植物園がある大同市靈丘県と、省境をはさんだ、となりの県です。北京から靈丘に行くときは、大同経由でいくより、河北省高碑店市から国道 108 号線で、涑源県を経由したほうが、近いんですよ。そういうこともあって、なんどかこの河を渡ったことがあります。

拒馬河は、東に流れ下り、河北省の涑水県と、北京市の房山区の境界を流れるんですけど、そのうち 30 数キロが北京市の境内です。北京原人で有名な、周口店の近く。ここで、昨年 9 月、「引拒濟京工程」なるものが、はじまったというんですよ。

まずはダムをかさあげして、河の水を北京の工業用水に回す。それからたくさんの井戸を掘って、伏流水も、パイプで北京に運びます。拒馬河はふたたび、河北省に戻るんですけど、下流には、水がいなくなっちゃうんですね。河北省の 9 つの市と県、300 万以上の住民が、深刻な影響を受けるそうです。1 年の 4 分の 3 は、流れがなくなり、7 万 ha の畑の灌漑ができなくなる。

それほどのおおごとなのに、北京市は、河北省に、事前の断りをまったくしなかったようです。で、河北省が、カンカンに怒った。そこらの詳しい事情が、環境保護総局関連のホームページ、「中国環境在線」に、掲載されています。

[http://www.chinaeol.net/news\\_content.asp?newsid={F44B8EE4-5EF3-4123-9592-A1776F5803C8}](http://www.chinaeol.net/news_content.asp?newsid={F44B8EE4-5EF3-4123-9592-A1776F5803C8})。

この記事には、華北地方の水問題についての基本的ことがらが、まとめられているので、おすすめて。「拒馬河」(簡体字)で検索をかけると、そのほかのホームページにも、関連のニュースがあります。

河北省は、北京市、天津市という 2 つの巨大都市、大経済圏を抱きかかえています。河北省じしん、水不足がきわめて深刻なのに、これらの巨大都市に、水を供給してきました。北京の水ガメ、密雲ダム、官庁ダムの所在もしくは集水域は河北省ですからね。

一昨年秋だったと思います。北京で開催された日本と中国の環境フォーラムに出席したさい、「北京・天津では、地下水が過剰に使用されています。これでは、持続可能な発展どころの話ではないんじゃないか」という意味の発言を、私がしたんですよ。

すると中国側から、2 つの方策が示されました。「北京・天津地区、華北の一部からは、農業を撤退し、浮かした水を、都市生活と工業に回します」。「地下水の利用を極力抑制し、地表水をつかうようにします」。

私は驚いて、「地表水って、どこにあるんですか?」と聞き直したら、「内蒙古自治区、山西

省、河北省」ということでした。そのときは、「どこもカラカラなのに、ジョーダンだろ」と思ったんですけど、本気だったんですね。この拒馬河のこともそう、昨年9月、大同の冊田ダムの水門を開けさせ、5000万立方mの水を、官庁ダムに流させたのもそう。

「農業を撤退し……」というのも、具体化しているようです。北京市には、従来2万haの水田があったものが、2003年から、全面的に禁止されたそうです。コムギの作付けも、40%ほどに削減されているようです。

さきほどのホームページのタイトルは、「すべて欠水が引き起こした禍」です。そして、北京は2008年オリンピックにむけて、急膨張をつづけているわけで、欠水も、深刻化が避けられない。だとすると、水争いも、繰り返されるでしょう。

今回のばあい、北京市と河北省が、最初は「机をたたいて、口論していた」のが、「座って話ができる」ようになり、「双方の態度はとてもいい」そうです。

けっこうなことなのでしょうけど、そうなると、シワヨセがいくのは、農民のところでしょうね。水を基準とした生産性において、農業は、工業の70分の1だそうです。水争いにおいて、農業に勝ち目はない。この予測が外れるようだと、私は中国を見直します。

## NO. 247 「古井戸」をみました 2004.03.11

「古井戸」という中国映画ができたのは、1980年代後半です。中国語の原題は「老井」。原作の小説「老井」(鄭義著)は、かなり幻想的な作品ですが、映画は、かなりリアルです。監督は、呉天明(ウー・ティエンミン)、主演と撮影が、張芸謀(チャン・イーモウ)。張芸謀は、その後、中国映画の代表的監督として名を馳せています。

最初に大阪の映画館でみて、その後、テレビ放映をみ、それをビデオにとって、またみしました。その後も、みたいと思ったんですけど、95年の震災で、テープが行方不明になりました。この2月に、DVDが発売されることを知り、予約したんですよ。それが届いたから、10年ぶりに、またみなんです。なぜ、こんなに執着するかというと、映画じたいが、名作なこともあるんですけど、風景や、エキストラの老若男女に、ひかれるんですね。

映画「老井村」のモデルになったのは、山西省左権県の石玉蛟村だそうです。大同から真南に300kmのところ、太行山のなかにあります。大同市靈丘県の風景と、そっくりなんですね。人の表情まで含めて。ちがうのは、映画の村のほうが、気候的に多少、おだやかな感じがするくらい。

たまたまのタイミングなんですけど、中国発行の日本語雑誌『人民中国』の2月号が、「“貧困の山”を移す闘い」という特集をくみ、その最初に、『古井戸』の村が変わった(李世清=文、魯忠民=写真)というルポがあります。それによると、この県も抗日戦争当時の根拠地で、八路軍の「前敵総指揮部」が置かれていたそうです。八路軍副参謀長の左権将軍が、ここで戦死したため、それまでの遼県を、左権県に改めたそう。そういう歴史まで、霊丘とそっくりなんです。

じつは『人民中国』の同じ号に、私の友人の李建華さんが、「大地と心に友好の樹を植える」という文章を書き、私が書いた『ぼくらの村にアンズが実った』の紹介をしてくれましたよ。それで手に入れたら、さっきの特集があったんです。私についての記事は、「書かれているのは、りっぱすぎて、だれか、べつの人の話としか思えませんよ」と李建華さんに話しました。

DVDをみながら、原作の話と、映画の話と、モデルの村の話と、霊丘県の話が、私の頭のなかで、グッチャグッチャになって、涙腺が、ゆるみっぱなしだったんですね。映画のなかでも、モデル村でも、井戸を掘るのに、たいへんな犠牲をだして、悪戦苦闘しました。でも、そのあらすじを紹介するよりも、霊丘で、私たちが、井戸を掘ったときのことを、話したほうがいいでしょう。

霊丘県の北部の山地で、広霊県との県境に近い史庄郷のことです。98年夏なんですけど、霊丘でのしごとを終えて、遠田先生といっしょに、大同に帰ることにしたんですよ。そしたら、県の青年団の幹部に、「省の青年団の“扶貧プロジェクト”をみにいかないか」と誘われたんです。通いなれた道を帰るより、新しいところをみたほうがいいと、軽い気持ちで、それに応じました。

山西省の青年団学校の教員で、馬秀蘭という中年の女性が、現地に住み着いて、いっしょうけんめいだったんですね。いくつかの現場を、いっしょに回りながら、話をききました。貧困地区の経済的自立のために、いろんな援助をしてるんだけど、なにをやるにしろ、最初に必要なのは、水問題の解決。井戸を掘らないといけないけど、思うようにお金が集まらない、ということでした。

井戸掘りが予定されていたのは、石瓮村です。この村には清の光緒6年(1880年)に掘られた井戸があったんです。深さは36m。外にでて成功した村の出身者が、お金をだし、村の人も発奮して、井戸を掘ったんですね。井戸の横に、石の記念碑があり、そのような事情が、刻んでありました。

村の人の紹介によると、たいへんな難工事で、「土一斗を掘るのに、どんぶりいっぱいのお金が必要だった」とのことです。私の「アンズ」の本に、そのように書いたら、小野信爾さんから、「いくらなんでも多すぎる」と注意されました。そうでしょうね。黄土だったら、柔らかくて、

掘るのはたやすいけど、ここは太行山中で、岩盤を、いくつも抜かないといけないんですね。映画と同じような苦闘が、あったかもしれません。

その井戸に頼って暮らしてきたのに、ちょうど百年がすぎたころ、水が減ったというんですよ。あわてて、掘りたしたけど、効果はなかった。そして、1993年ごろ、完全に涸れてしまった。しかたがないので、村から4.5kmほど下った北水泉村まで、もらい水に通っていたんですよ。ゴロゴロと石の転がる河川敷のようなところを、ドラム缶を積んだ馬車をロバに引かせ、往復していました。

私たちが、最初に、この村を訪ねたとき、1人のお年寄りの女性が、馬車を引いて、村に帰ってきたところでした。朝6時、まだ暗いうちに村をでたそうですが、帰ってきたのが、お昼前。私がビデオカメラを向けながら、「タンクから水を取り出してほしい」と、リクエストすると、馬車ごと、タンクを傾けてくれるんだけど、なかなか水がでてこない。バケツ数杯分しか、水はなかったんです。

「おばあちゃん、水を汲みにいくつもりで、油を売っていたんじゃないの」なんて、私はいったんですけど、そうじゃないんです。北水泉村も、水がなくなっているんですね。その名のとおり、この村は、以前はたくさん湧き水があったそうです。周囲は山で、谷の底のようなところに村がありますから、水はでて、あたりまえでしょう。ところが、その湧き水が、つぎつぎに涸れてしまった。私たちがいったときは、1か所だけになってたんですけど、その水も、「バケツをいっぱいにするのに、3年前は1分だったけど、いまは8分かかる」とのことでした。湧水量が、3年で8分の1に、減ったわけですね。

もらい水にきているわけですからね。この村の人が、水を汲みにくると、順番をゆずらないわけにはいきません。村のヒツジが、水を飲みに来ても、場所をゆずらないといけません。そんなわけで、ちょっとの水を汲むのにも、ずいぶん時間がかかるんですね。ドラム缶をいっぴいにしようと思ったら、一日仕事になりかねないんです。

そんなことから、石瓮村では、「油を借りて返さないことがあっても、水を借りたら、かならず返さないといけない」という決まりがあるのだそうです。

この話、1回で終わりませんでした。次回に、つづけることにします。

## NO. 248 井戸掘りに協力 2004. 03. 16

すみません。前号で「古井戸」のDVDをみたことから、霊丘県史庄郷石瓮村で、井戸水が涸れた話につなげました。ところが、この村の井戸掘り、この「黄土高原だより」の第1号と、

第4号で、取り上げていたんですね。1999年のことです。

考えてみると、この通信は、中国北部の水問題の深刻さを伝えることで、終始していたようです。ほぼ5年たって、出発点に戻ってきたんですね。同じ話題は、できるだけ避けているんですけど、前回の話、あのままやめるわけにはいかないので、重複を、許してください。

石瓮村には、中年の共産党支部書記がいました。若いころは、軍にいったんですけど、復員したあとの半生を、井戸掘りに、かけてきたんです。山のなかの、ほんとに貧しい村ですけど、なんとか、井戸を掘りたかった。あちこち駆け回って、支援を集め、まずは電気を引いたんですけど、これも、井戸を掘るための、準備だったというんですよ。会ったのは、短時間だったんですけど、思い詰めた表情が、印象的でした。

清代の井戸掘りは、人間の力でやったんですよ。幾重もの岩盤をくりぬいて、36mを掘るのは、たいへんだったと思います。映画「古井戸」の井戸掘りと、似たようなものだと思います。ところが、その深さの井戸は、この一帯では、涸れてしまっています。北水泉の湧き水も、つぎつぎ涸れました。

ゾーッとしたのは、浦里村での見聞です。浦里村は、北水泉村から3kmほど下にある小さな村で、この村も、湧き水にたよっていました。山ぎわに、直径1mほどの、浅い井戸のようなものがあり、コンコンと湧きだす清水が、小さな流れをつくっているんですね。村の老人に話をきくと、「30年前は、ずーっと量が多くて、畑の灌漑にもつかっていたけど、いまはこれだけになってしまった」と嘆きました。その半年後に、いってみると、湧き水は、小さな水たまりになって、外の流れは、完全になくなっていました。人から話にきくのと、自分の目でみるのでは、インパクトはずいぶんちがうものです。

これから掘る井戸は、機械によるボーリングしかないんです。浅くても、100m以下ということはありません。その前年、私たちは、広霊県苑西庄村で、井戸掘りに協力したんですけど、水がでたのは、地下176mでした。人の力で、命がけで掘る、というわけじゃないけど、そのかわりに、お金がかかる。

その日のうちに、私たちは大同に帰ったんですけど、翌日、馬秀蘭さんが、大同まで追いかけてきました。「可能なら、ぜひ協力してほしい」といって。太原を中心に、寄付金を集めてきたけど、残りのメドがたたないというんです。同様のお金の苦勞を、私たちもつづけているわけで、その気持ちは、痛いほど、わかりました。

広霊県苑西庄村で、井戸掘りに協力できたのは、テレビ朝日の取材班が、村に泊まり込んで番組をつくり、それが「素敵な宇宙船・地球号」シリーズで放映されたからなんですね。おかげで、資金が集まりました。郵政省国際ボランティア貯金と、JA全中(JAグループ環境推進

協議会)から助成金・寄付金もできました。この村の井戸掘りにも、協力することにしたんです。

村の人は、ものすごく喜んでくれたんです。98年秋から、ボーリングがはじまりました。10月末にいてみると、中休みしていました。浅いところと、深いところとでは、ボーリングの機械を交換する、ということです。「ガオジェン(高見)がくるときいて、機械の交換を待ってもらっていたんだけど、あまりに遅いから、もう持ち帰った。新しいのは、まだきていない。残念だ。井戸掘りは、ほんとにおもしろいんだ。1日中みても、あきることがない」なんてね。寒くなると、しごとはヒマですから、村の人は、現場に集まって、ボーリングのようすを、ズーッとみてたんですよ。

その日は、党支部書記の家に、村の人が集まって、宴会になったんですね。書記はその前日、散弾銃をもって、猟に行ったそうでノウサギ、キジなんかを、とってきていました。なかに「野猫」(野生のネコ?)というのがある、「これがうまい!」といって私のドンブリに、その肉を取ってくれるんだけど、うまいとも思えなかった。ひょっとすると、保護動物かなんかで、こんなことを書いたら、ヒンシュクものでしょうね。

そのさいに、いっしょに酔っぱらった井戸掘り隊の隊長が、話してくれたんですよ。

「県境付近の山中では、どこの村でも、井戸や湧き水が涸れている。水のない生活の苦しさは、自分たちがいちばんよくわかるから、たとえ、お金にならなくても、掘ってあげたい。しかし、そんな村は素寒貧で、井戸を掘るお金なんてない。注文がこなくて、自分たちも賃金が遅れるくらいだから、気持ちはあっても、どうにもならない」。そんなことを、くりかえし、くりかえし……。

冬は零下30度以下に、気温が下がります。だから、井戸掘りの作業も、中断しました。春になって、ボーリングが再開されたんですね。

99年春のツアーが、この村を訪れました。40年近い私の友人の干場革治さんが、昼食のあと、農家の中庭にいたら、生まれたばかりの子ヤギが、彼になついて、離れないんです。どうしてかというと、その子ヤギは、母ヤギのところに、乳を求めていったんだけど、エサもないし、水も飲めない母ヤギが、授乳を拒否したんです。で、子ヤギは、しかたなしに、干場さんのところに寄っていった。

村の中心にほど近いところに、ヤナギの古木があり、その下が、小さな池になっていました。池というより、直径10mほどの、くぼみですね。汚れた水が、底に少々。ヒツジやヤギの糞だらけです。じつは、この水が、家畜の飲み水なんです。洗濯だって、この水ですするというんですけど、逆効果じゃない?

そういうようすをみて、秋田県出身の干場さんは、「日本には“水呑み百姓”という言い方が

あったけど、ここでは水も飲めないんだな」といいました。

そのあとも、水がでたという知らせがないんです。大同でも、関係者がイライラしてたわけですよ。「こんなに作業が遅れるのは、水のでる見込みがなくなったからではないだろうか」なんて、悪いほうへ、悪いほうへと、考えたんです。でも、5月末には、ちゃんと水がでました。深さ 182m。事前の調査と、ピタリ一致してますから。そこらの技術は、なかなかのものです。

6月に、日本からのツアーも参加して、通水式をもち、村の人は大喜びだったんです。そのとき小学生の娘が、母親に「これからは毎日、顔を洗ってもいいの？」と尋ねたんだそうです。それを小耳にはさんだといって、祁学峰が、その話をよくしていました。

私もうれしかったんですけど、でも、手放しに、というわけにはいかなかった。こういう村では、どこでも水がなくなっているという、井戸掘り隊の隊長の話が、頭を去らなかったんです。今回も、書きたいと思ったところに、行き着くことができませんでした。すみません。この話題、もう1回つづけてください。

## NO. 249 あらたな迷い 2004. 03. 22

霊丘県石瓮村で掘った井戸が、深さ 182m で水がでたと、前号で書いたら、その深さに驚いて、数人のかたからメールがきました。でも、それくらいで驚いちゃいけない。

大同から渾源にむかう途中に、二嶺村があります。浸食谷の底の井戸をつかってましたが、それでは水がたりない。400 人の村民のうち、300 人分が不足します。水を買うための、專業者をつくり、4km ほど下の、下韓村まで通っていました。一昨年秋、この村を通りかかったら、ボーリングのやぐらが、立っていました。どこからかの支援で、井戸掘りにとりかかったそうです。

この2月に、村を訪れると、各家に「自来水」(水道)が、引かれていました。あの井戸で、水がでたんですね。親しい家族もいますから、私もうれしい。井戸の深さは、300m だそうです。費用は、50 万円もかかった。

このような村は、山か丘陵で、高いところにあります。地下水位が、地表から深くなるのは、しかたがない。私たちの拠点の、環境林センターは、大同盆地の底にあります。海拔はほぼ 1000m。それなのに、ここで掘った井戸も、140m です。それだけ掘らないと、安定的な水はえられない。

石瓮村での井戸掘りが成功し、村の人や、私たちの関係者は大喜びなのに、私はみょうに、冷めていたんです。井戸掘り隊の隊長がいうように、どこでも水が潤れているとすると、この

地方の水問題は、井戸を掘って解決できるレベルを、とっくに超えているんですね。緊急避難にはなっても、本質的な解決には、ならないわけです。

私を悩ませた問題が、もう1つあります。石瓮村の近くの山に、はいって見たんですよ。ここも、太行山のなかです。人里に近いので、しょっちゅうタキギにつかわれているでしょう。そう大きな木はないし、森林というには、ちょっと抵抗があります。でも、植物の種類は、けっこう豊富なんです。「あっ、アジサイまである」と、私は思ったんですけど、それはノリウツギでした。

1998年の夏、私たちは、霊丘県でいくつもの自然林を訪ね、植物園建設の候補地を探しました。石瓮村を訪れたのは、その帰り道だったんです。ここの山には、それまでみた自然林にない植物種も、けっこうあったんです。

仮にですよ。石瓮村も、北水泉も、浦里も、その他の村も、水が涸れてしまったとしたら、人は住めなくなり、村もなくなります。いや、仮定の話ではなく、井戸を掘ることに、私たちが協力しなかったら、ほかからの協力がなかったら、数年を待たず、これらの村はなくなるでしょう。村人たちは、いまある村を離れ、どこかに流れ出るしかないはずです。すると、付近の山の植物は、圧力をまぬがれ、やがて、森林を再生させるでしょう。

これらの村があるところは、本来なら、人が住むべきところでは、ないのではないかと。自然の森林と、自然の動物たちの世界であるべきでしょう。どういう歴史経緯があったかはわかりませんが、そこを人間が侵してしまった。いま水が涸れているのは、「人間よ、退け」という、自然の警告かもしれません。おそらく、そうでしょう。そして、人が退けば、そこに自然が再生するのです。

この地方では、そのようなことが、くりかえされてきたのかもしれませんが。人が長く住んで、環境破壊が限度を超えると、人が住めなくなる。人は、撤退します。するとそこに自然が復活する。環境が再生すると、それを求めて、人がまた進出してくる。波打ちぎわの、波のように、そういう関係が、数千年もつづいてきたのかもしれない。

けっきょく、その後は、村で井戸を掘ることに、協力しませんでした。ニーズが大きいことは、知っているんですよ。住民に、これほど喜ばれることはないことも、わかっています。でも、協力してこなかった。これまで述べたように、そのことにちゃんと理屈は立つんです。でも、ほんとうに、それでよかったんでしょうか？

1年ちょっと前のことですけど、さる学会で、報告する機会をもらいました。報告を終えて、席に帰る途中で、ある研究者から、話しかけられました。「あの問題は、私たちのほうが先に着手していました」と。そのとき、私は答えました。「先生たち研究者は、だれが先かがたいせつ

でしょうけど、 私たち NGO は、最後まで残ることが、たいせつだと思っています」。

理だけでわりきっては、いけないはずです。困っている人たちに、もっと寄り添うのが、NGO の本来的なあり方かもしれない。みんなが、みょうに利口になったら、NGO なんて、そもそも成り立たないのかもしれない。私の気持ちは揺らいでいます。

ことしの春の私たちのワーキングツアーが、石瓮村を訪ねることになりました。私も、5年ぶりです。途中の道路がよくないので、ためらっていると、「その部分は、小型のくるまを準備します」と大同事務所から、連絡がありました。この5年のあいだに、あの一帯はどうなったのでしょうか。本番をひかえた、受験生のような気持ちです。

きょうの午後の飛行機で、関西空港を発ち、北京経由で、大同にむかいます。

## NO. 250 清明節 2004. 04. 04

きょう4月4日は、清明節でした。1日から3日間、中華全国総工会の副主席一行が、私たちのプロジェクトを、視察してくれました。大同市最南部の靈丘県で別れ、3時間あまりかけて、大同市内に帰ってきました。その途中、上墳(お墓参り)の人が、たくさんいました。

日本の春の彼岸にあたるのが、中国では清明節。お墓に参って、マントウはじめ、故人が好きだった食べ物を供えます。どの組も、男しかみなかったので、たしかめると、清明節は、女は上墳をしないそう。しかし、それは土葬をする農村の風習で、都市では、一家そろっていくようです。

日本にない習慣は、紙銭を焼くこと。あちらの世界の故人に、煙にして届けるわけですね。百元札をまねた、「冥国銀行」発行の紙幣で、毛沢東の肖像のかわりに、玉皇大帝の絵があるそう。ずっと以前に、私も買ったことがあります。額面が「1億元」でした。最近、冥国も、経済が発展したのでしょうか。最高額紙幣は、「10億元」。金貨を模した、紙製のお金もあります。それを束にして燃やします。

冥国銀行発行の紙幣は、その額面にかかわらず、人民幣による価格は、いっしょだそうです。「高額のものほど、いいじゃないか」と私がいうと、「おつりのないようなお金では、買い物できない」と、大同事務所の若い人は笑います。冥国銀行のお札にも、やはりニセ札があるそう。うふふふふ。

人によっては、やはり紙製の家、自動車、テレビ、冷蔵庫、その他を送るそう。生前、ほしがっていたもの、夢枕に立って、訴えられたものなど。

日本の秋の彼岸にあたるのが、陰暦 10 月 1 日の「送衣服」。寒さに備えて、紙でつくった衣服や綿を燃やします。

清明節までに、墳墓の盛り土をしなおし、かたちを整えます。しかし、陰暦の閏年は、それをしないそう。ことしは閏年で、2 月が 2 回ありました。話がそれますが、閏年は、春の訪れが遅く、夏が暑い、という言い伝えがあります。ことしは昨年にくらべ、10 日～2 週間は、遅いよう。ヤナギやポプラの発芽も、アンズの開花も、遅れています。4 月 2 日はものすごく寒く、昼間でも、0 度前後でした。

問題は、お墓参りに、火をつかうことです。この時期は、強風が吹き、ものすごく乾燥しています。周囲の草も、カラカラ。毎年、山火事のニュースが報道されます。私がみた墳墓のなかに、周囲の草が焼けて、黒くなっているのがありました。ことしは盛り土をなおさないで、墳墓に生えた草に、火を放ったのかもしれませんが。

霊丘自然植物園は、放牧を禁止してから、たくさんの樹木が育ってきました。草の丈も高くなり、枯れ草が地面を覆っています。敷地内や周囲に、お墓があるんですね。責任者の李向東は、たいへん心配しています。清明節の当日だけだったら、人の配置もできるんですけど、お墓参りは、この日を中心に、前 3 日、後ろ 3 日のうちにおこなわれますから、まる 1 週間、人を張り付けるわけにもいきません。緑化にとって、いちばん人手の必要な時期ですから。

日本では、墓参りに水をつかうことを紹介し、「こういうふう宣伝したらどうだ。あちらの世界も、最近では旱魃と水不足で、ご先祖さまも、火よりは水をほしがっている、と」。答えは「宣伝してから、現実になるまでに、50 年はかかる」。歴史の長い国で、農村の風習を改めるのは、ほんとうにむずかしい、ということでしょう。

墳墓のそばで、古木をよくみます。私たちの会報『緑の地球』3 月号の表紙に、その写真をつかい、「お墓の守り木＝風水樹」と紹介しました。ツアーの途中で、そのように紹介したこともあります。日本の中国研究者からの、受け売りだったんですけど、この地方では、そうではありませんでした。いったん信じて、インプットされた情報は、修正の機会が、なかなかみつかりません。おわびして、訂正いたします。

お墓にむかう葬列の先頭に、いちばん大きな、孫が立つそうです。この孫も、男にかぎられます。孫がいなければ、代理。その人は、「引魂幡」(または「墳杆」)を、捧げ持ちます。手頃な生木に、細長い白い紙をつけたもの。故人が、男のばあいはポプラ、女のばあいはヤナギ、と使い分ける農村、どちらもヤナギの農村、いろいろのようです。

遺体を埋葬し、盛り土をしたあと、盛り土の最前部に、それを挿します。私もみたことがあ

ります。それが発根し、育ったのが、あの木。しかし、生育を意図してのことではありません。大同事務所の魏生学の話では、3日後に、わざと揺さぶって、発根しないようにするといいます。でも、活着して、育つこともある。

そういうふうにいわれると、思いあたります。この一帯の、墳墓のそばの木は、ポプラとヤナギです。お墓の風水を、意図して植えたものなら、ほかの樹木が、かならず入るはず。なかでも、松と柏(ヒノキ科の針葉樹、一般にはコノテガシワ)がないはずがない。この地方で、ちゃんと育つんですから。

お墓のそばに、木を植えることもあるけど、それは最近のことだそう。このような話は、お年寄りにきくのがいいでしょうけど、内容が細かくなりすぎて、長くなるのも困ります。私が育った日本の農村でも、このような風習は、村によって、かなりちがうもの。おことわりしておきます。

## NO. 251 書くことの意味 2004. 04. 14

「黄土高原だより」の第1号が、1999年4月末でした。250号を超えましたから、ほぼ週刊で、5年間つづけたこととなります。それをもとに、去年は、多数の人の助けをえて、『ぼくらの村にアンズが実った』(日本経済新聞社)を出版することもできました。

中国での出版のために、中国の友人たちが、奔走してくれたのですが、サントリー文化財団の翻訳出版助成が決まり、どうやら現実になりそうです。大同の友人たちも、楽しみにしていますが、自分が、悪しざまに書かれているのをしって、ガクゼンとするかもしれません。あはははは。

書いてきたのは、主として、大同のことですが、ここは北京のすぐそばで、水源であり、風砂の吹き出し口でもありますから、たんに一地方のことではないはず。中国への理解を全面化するために、読者にとっても、多少は役立ったかもしれません。

しかし、私自身が、この作業をつうじてえた収穫は、それ以上に、大きなものに思えます。この「黄土高原だより」の発行に先立って、1996年春から4年間、大同滞在中は1日も欠かさず、「酔っぱらい大同日記」なるものを書きつづけていました。

そのように書くクセをつけると、ものごとの観察が、深まるような気がします。なにかをみるときも、書くことを考えて、みるようになります。あとで書くときに、あいまいなことがないよう、より全面的、詳細にみようとします。最近の例をあげると、今回、北京から大同にくるとき、高速道路を降りて、官庁ダムをみてきました。水際が1km以上も後退し、干上がった湖底が、畑に変わっています。以前だったら、みて、それで終わりだったでしょう。

今回は、くわしい内容を省きますが、たとえば、官庁ダムの欠水を書こうとすると、それだけでは、材料が不足します。もとは湖底だったところで、春耕している農民から、話をききました。もとは湖底だった畑の表面を、じっくりみて、撮影してきました。それで1回分になるでしょう。

そして、それがなにを意味するのか、どのようにまとめるのか、といったことを車のなかでも、歩きながらでも、つねに考えるようになったのです。いつもなにかを考えて、整理していると、同じ現象を目にしても、以前よりは、深く観察し、深く理解するようです。こうした習慣を、身につけたのが、さまざまな場面で、役立っているように思います。

それから、このレポートの発行には、通信事情の変化が、大きく作用しています。これを送り出した当初は、間隔が大きくあくことがありました。大同滞在中は、発送の手段がなかったからです。インターネットが実用化することで、大同からの発送が可能になりました。それにあわせて、私の手元も、中古のワープロ専用機から、中古のノートパソコンに変わりました。

そのように書くと、初期のことを想起します。日本への電話は、農村ではムリでした。県城（県政府の所在地）まで戻り、ホテルに部屋をとり、カウンターで申し込むと、2〜3時間後につながるのです。サービスが呼びにくると、あわててカウンターまで走りました。NHK ラジオの電話出演が決まり、県政府の郵電局から、何度ダイヤルしてもつながらず、パーになったこともあります。

ファクスは、もっとおおごとでした。大同市内まで戻り、郵電局で送るしかありません。A4の原稿2枚の送信に、何度もエラーがでて、400元もとられたことがあります。中クラスの農村の、1人あたりの年収です。大同事務所にファクスをいれて、その問題は解決しましたが、今春は停電が多く、メイファーズ！（没法子＝どうにもならない）。

それがいまでは、私も、日本ではほとんど使わない、携帯電話をいつも身につけています。数年前までは、県城以外では通じなかったのに、いまでは山の上で、作業をしているときでもかかってくる。そうとうに辺鄙な農村や、山の上にも、携帯電話のアンテナが立ってきたからです。中国の農村で、いちばん速い変化は、通信事情でしょう。

では、全面的に、バンザイかという、そうではありません。ことしの春は、6組のツアーと視察があります。ずっと農村を案内します。そのうえ4月20日からは、北京での水フォーラムに出席します。それだけでも、そうとうに忙しいのに、あいだで、たくさんの原稿や報告書を書かないといけないのです。以前は、考えられなかったことです。

これはもう、近現代がたどった歴史を、私個人が、追体験しているようなものです。たしか

に、便利になりました。いったん手にいれると、捨てることはできません。でも、豊かになったかという、そうとはいえない。生命をけずっているのです。

ボヤキは、ここまでにしましょう。ありがたいことに、こうやって情報を発信することは、情報を受け取ることでもあります。私が水問題を書きつづけていると、それに関する情報があったとき、読者が、それを知らせてくれます。昨年秋、大同の冊田ダムの水が、官庁ダムにむけて、放流されたときもそうです。最近では、拒馬河をめぐる北京と河北省の、水争いの情報もそうでした。発信すればするほど、受け取るものは、大きくなります。ずいぶんと、私は、トクをしたと思います。

メールをいただくなかには、反論や、批判的なものもあります。これも水問題をめぐってですが、少々、乱暴にまとめると、つぎのようなメールがありました。「シロウトが、そんなことを書いても、ゴマメの歯ぎしりではないか。もっと専門の研究者の意見をきき、行政や、政策決定者に働きかけるべきではないか」。

もっともな意見だと思います。私なんか、なにを書こうと、たいした力のあろうはずがない。それは、しかたのないことで、私は、私のできることを、するしかないのです。

あれや、これやを考えると、この黄土高原だより、これからもつづけることになるでしょう。書いておきたい材料は、活動のなかで、つねにでてきます。しばらくは、おつきあいをお願いいたします。

## NO. 252 なんなの、この春？ 2004. 04. 19

大同に到着したのは、3月23日でした。そのころは、気温も低かったのです。春の訪れが遅いな、と感じました。地元の人も、「ことしは閏年だから、春が遅い。昨年にくらべ、10日から2週間は遅い。そして、閏年は夏が暑くなる」といっていました。ことしは、陰暦（農曆）の閏年で、2月が、2回ありました。ヤナギやポプラの芽も、アンズをつぼみも固かったのです。

「三寒四温」という言葉があります。寒い日何日かつづき、そのあと暖かくなっても、また寒い日がやってくる。それをくりかえしながら、だんだん暖かくなるわけですね。私はこれで13回目の大同の春ですが、いつも、この言葉を思い起こしていました。

4月の初めが、そうだったんですよ。3月下旬になって、暖かくなりつつあったのに、そのあと、グ〜ッと気温が下がって、日中の最高気温が、0度前後になりました。

4月7日から10日まで、OFS（オリエンタルランド労組）、9日から12日までイオン労組のツ

アーがやってきたので、それに同行して、農村を回りました。前半はまだ寒かったんですけど、後半は、かなり暖かくなりました。でも、まだ土が凍結していて、穴を掘りにくいところもあったんですよ。アンズをつぼみも、固くて、すぐには、咲きそうになかったんです。

そのあと、もう1回、寒くなっても、よかったですよ。それが、ふつうです。ところが、東北電力総連のツアーといっしょに、16日から、農村にでかけると、アンズの花が、いっきよに満開だったんですね。大同市も、北部の、陽高県で。平年に比べて、ずっと早い。

そして、18日の日中の気温は、28度にまでなりました。真夏なみとっていい。若い人たちは、半袖になっていましたよ。ところが、「カササギの森」の谷の底には、氷が残っていました。気温の上昇が、たいへん急だったことを証明しています。

植樹の作業は、ことしの春、ほんとにたいへんです。土が凍結しているあいだは、植え穴を、掘れません。芽が動きだしてから、苗木を植えたのでは、活着がむずかしくなる。その短いあいだが、ここでの植樹シーズンです。ところが、その期間が、ことしはとくに短い。

そのうえに、雨が降りません。この1か月、雨はまったく降っていません。それは、私たちの体験で、地元の話では、「ことしになってから、一滴も降っていない。去年の秋からだから、もう半年も降っていない」ということになります。雨が降らないことと、気温の急上昇は、同一のことでもあります。雨が降ったら、気温は下がるんですから。

気温が高くなって、しかも雨が降らない。このところずっと、雲ひとつないんですから。なにもかも、カラカラです。植栽の作業も困難です。水があれば、黄土は柔らかいのですが、乾いているときは、スコップの歯がたたない。小さなマツを植えるのに、深さ30cmの穴1つ掘るのが、苦労なのです。そして、力いっぱいスコップを踏み込むと、黄色い土が、粉になって、舞い上がります。

水をやろうと思っても、その水がありません。カササギの森と、采涼山プロジェクトは、地つづきです。采涼山プロジェクトは、地元の聚楽郷と協力して1999年から、継続しており、私たちの協力しているぶんだけでも、250ha。郷独自の造林も、とても広い。ことしの8月、植林にかんする全国規模の会議が、大同で開かれるんですけど、ここが、現場見学会の会場に、予定されているんですね。いつも以上に、けんめいに植えています。

そのための水を、カササギの森の貯水槽に汲みにきます。村の人が地主さんで、こちらが店子のようなものですから、カササギの森の管理人たちは、それを、ことわりにくい。でも、いわれるままにしていると、自分たちの水がなくなる。ほんとに、兄弟ゲンカのようなものです。

19日の早朝、ここまで書いて、外のようすを見にいきました。ちょうど、日が昇るところで

した。きょうも、雲ひとつありません。いい天気じゃない。最悪の天気です。

## NO. 253 後ろ姿の北京は砂上の楼閣？ 2004. 04. 26

中国共産主義青年団中央委員会、中華全国青年連合会の主催で、4月20日から22日まで、日中水フォーラムが、北京で開催されました。新聞報道によると、初日の参加者は1,500人。大成功です。私にとっては、内容的にも、大きな収穫がありました。とくに、そこで明らかになった、北京の水問題の深刻さは、私の推測を、はるかに超えるものだったのです。

参加者のうち、水ユースの人たちが、22日の夜行列車で、大同を訪れ、2日間、水問題の現場をみてくれました。それに同行して、私も大同にもどり、25日の午後、北京に帰ってきました。

うれしいことがありました。それまで1度も雨がなかったのに、私たちが大同を発つころから、ポツリポツリと雨がきて、途中で本降りになったのです。大同に問い合わせると、大同でも降っているそうです。半年ぶりの雨です。泊まっているのが22階で、よくはわかりませんが、道行く人が傘をさしたり、雨着をつけています。1晩、降りつづいたのでしょう。これで、植物も生気をとりもどすでしょう。

水フォーラムでは、私も、発言の機会をもらいました。以下は、その要旨です。中国側の参加者からも、拍手をもらいましたから、問題に気づいている人も、少なくないのでしょう。

私たち緑の地球ネットワークは1992年から山西省大同市の農村で緑化協力事業を続けてきました。私自身も、日焼けと酒焼けで、こんなふうになっ黒になりながら、農村を歩き回っています。そのなかで危機感、というより恐怖を感じるようになったのは、この一帯から、底がぬけたように、水がなくなっていることです。

最初に気づいたのは、県と県の境に位置する辺鄙な農村でした。井戸や湧き水が涸れ、何キロも離れたほかの村にもらい水に通います。見るに見かねて2つの村で井戸を掘るのに協力しました。幸い水は出ましたが、深さは176メートルと182メートル。村の人は大喜びだったんですね。お年寄りは泣きながら「生きている間にこんないいことに出会うとは思わなかった」といって、私の手を放しません。私も、もらい泣きしました。

そこで知り合った、井戸掘り隊のリーダーの話が、また衝撃的でした。「県境の一帯は例外なく水がなくなっている。水のない暮らしの困難さは、自分たちが一番よくわかるから、お金にならなくても掘ってやりたい。しかし、そういう村は素寒貧で、井戸を掘るお金なんてない。

井戸掘りの注文も少なく、自分たちの賃金も遅れるくらいだから、どうにもならない」。そうだとすると、井戸を掘ることは、緊急避難にはなっても、根本的な解決にはならないんですね。ここの水不足は、井戸で解決できるレベルを超えているわけです。

私たちは、かつて、21の村の900人を対象にアンケート調査したことがあります。1人1日の水使用量は平均で23.8リットル、少ない村は15.6リットルでした。そして、水が少ない村ほど「最近の減少が激しい」というのです。

つぎに気づいたのは、大同中の河という河、ダムというダムが干上がったことです。大同の中央部を桑干河が横切りますが、最後に流れをみたのは1997年夏で、それ以後、毎年10回以上この河を渡っているのに、流れを見たことがありません。はなはだしきは昨年9月、応県でこの河を渡るときのことです。川底の全面がトウモロコシ畑になって、水の流れる余地がまったくありません。橋の表示を見なければ、そこが河だとは誰も思わないでしょう。地元の農民は、水が流れてくることを期待も恐れもしていないのです。丁玲の有名な小説に『太陽は桑干河を照らす』がありますが、これでは『太陽はトウモロコシ畑を照らす』です。

都市の水不足も深刻です。昨年、大同の炭鉱職員住宅を訪れました。水道の給水時間は1日にわずか20分。バスタブに貯める100リットルが、4人家族の1日分でした。

地下水位も急速に低下しています。地元の新聞は「主要地域では毎年2〜3メートルも低下しており、2008年には完全に涸渇する」と報道しました。

広い中国ですから、そういう地方もあって不思議ではないでしょう。しかし大同は北京の水源地にあたります。先ほどの桑干河は官庁ダムに注ぎますが、官庁ダムは、密雲ダムに次ぐ北京の水ガメなんです。

1か月ほど前、大同に行く途中で高速道路を降り、官庁ダムをみました。水際が、以前のそれから1キロ以上も後退しています。干上がったダム湖の底が畑に変わり、春耕の最中でした。リンゴやブドウの果樹園、ヤナギの苗畑もありました。水際に近いところに貝の死骸が転がり、水草が腐っていました。農民の話では「この5、6年の水位低下が激しい」とのことです。

昨年の国慶節直前、大同の冊田ダムの水門が開かれ、5000万トンの水が官庁ダムに流されました。そのときの儀式で「首都を守るのは光栄な任務だ」と強調されました。しかし大同の水不足は、北京に比べずっと深刻で、大同からみれば、北京の水の使い方はぜいたくです。大同市民がどんな思いであの5000万トンを見送ったか、北京の人はわかっているのでしょうか？

日本からみる北京は大発展・中国の頂点で、私も通過するたびにその変貌に驚かされます。しかし、大同から見る後ろ姿の北京は、「砂上の楼閣」のように思えてならないのです。昨日か

ら中国側の報告もたくさんありました。節水その他、みなさんの努力に敬意を表します。しかし、いまのような勢いで、北京が膨張をつづけるなら、それも限度のあることでしょう。

このような話を、外国人の私がするのは、非常識で、無礼きわまりないことでしょう。それは私も承知しています。しかし、毎年100～120日、大同に滞在している私は、この席に立った以上は、話さないわけにはいかないことを、理解していただきたいと思います。

私たちの本業は木を植えることですが、ささやかながら、水のプロジェクトにも取り組んできました。農村で井戸を掘ったことはすでに話しました。それから私たちの拠点の環境林センターで、小さな污水处理施設をつくりました。ここには20ヘクタールほどの苗圃があり、苗づくりには水が必要です。日本の外務省草の根無償資金協力の支援で、井戸を掘りましたが、地下水位が急速に低下するなかで、無神経に水を使うわけにはいきません。先ほどの炭鉱住宅の生活汚水を浄化して使うことを思い立ちました。

きょうも在席の大阪産業大学の菅原正孝教授が手弁当で現地にきてくれました。採用した技術は土壌浄化法です。25メートルプールほどの簡単な設備で、1日250トン进行处理できます。処理水で金魚を飼っていますから、灌漑用水としては十分なレベルでしょう。たくさんの人が見学に来て、「こんな簡単な設備でいいのなら、すぐにでもつくりたい」といいます。しかし実際に運転すると、さらに改善できる点がでてきます。いまそれに取り組んでいるところです。

灌漑用に計画したため、零下30度近くになる大同では、冬季の運転はできませんが、それが可能になれば用途はさらに広がります。人口の密集する都市では大規模施設が有効でも、そうでない農村部では、汚水の発生源近くに小規模施設を数多く建設し、処理水を河に流すほうが効率的なはずで、そうすれば河もよみがえります。

このプロジェクトの成功に味をしめ、昨年秋から炭鉱汚水の浄化実験にとりかかりました。大同は中国最大の石炭の街です。坑道を深く掘れば当然、地下水がでてきます。その水には鉄、マンガン、その他が含まれ、そのままでは使えませんから、捨てられていました。石炭1トン掘る過程で、平均2.5トンの水資源が破壊されるそうです。最近になって、その水を浄化して水道用水にするプロジェクトが稼働しました。逆浸透法によるもので、多額の資金を要し、豊かな大炭鉱では可能でも、零細炭鉱では使えません。

私たちが採用したのは、生物処理です。オモチャのように簡単な設備ですが、1日あたりの処理量は70トン、800人のその村には十分すぎる量です。運転開始後3か月で、水道水の基準には距離がありますが、洗濯、浴用などには問題ないレベルにたっしました。炭鉱労働者はまっ黒になってでてきますから、風呂に入れるようになれば助かるはずで、

ところがこの実験は3月に中断されました。その炭鉱の廃止が決まり、通告の翌日、上部の

命令で入り口を封鎖されたのです。せっかく積み上げてきたのに、無念でなりません。地元の要求も強いので、なんとか再開したいと願っています。このようなトラブルは、地方ではしばしば発生します。過去にも経験しました。日本側のみなさんには、そのような事態であわてないよう、あきらめないよう、お願いします。中国側には、このような問題をできるだけ早く解決するよう要望します。

たいていの社会問題は、辺境の貧しいところで、最初に顕在化します。どこの国、どこの社会でもそうだと思います。環境問題、水問題はその最たるものでしょう。そのようなところに、つねに目が向けられる社会であれば、問題が早く認識され、軌道修正が容易で、負担も軽くてすみます。

中国には「水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れるな」という格言があります。いい言葉です。それに加えて、水を飲むときは上流のことを考えてほしい、逆になにかを流すときは、下流のことを忘れないでほしいのです。

このあとの分科会の議論が盛り上がり、深まることを願って、思うところを率直に話しました。たいへん楽しみにしています。発言の機会を与えてくれた主催者に、心から感謝いたします。

## NO. 254 農村で娘をもちました 2004. 05. 06

OFS（オリエンタルランド労組）のツアーといっしょに、4月中旬、広霊県苑西庄村でアンズを植え、農家にホームステイしました。日程の最後に、小学校を見学したんです。50世帯ほどの村で、この学校の生徒は13人。村の規模にくらべ少ないのは、1～3年生だけだからです。1つの教室で、1人の先生が教えています。4年生から上は、となりの苑庄村の小学校に通います。

中学校は、昨瞳郷の学校に寄宿するしかありません。金曜日の午後、生徒たちが集団で、自分の村に帰るようすを、あちこちで目にしました。苑西庄村では、中学校に行くのは、多くて、年に1人。ゼロの年もあるそうです。

そういいながら、女の先生は、1人の女の子を、教壇に呼び寄せました。「この子は、勉強がすきで、成績もいいんです。いま、となりの苑庄村の学校に通っていますが、そこでも、20数人のなかで、ずっとトップです。みてください。教室の、後ろの黒板の文字と絵は、彼女が書いたものです。でも、この子は、中学校にはいけません。下に弟が2人いて、3人の子を学校にやるお金は、家庭にないのです」。

先生が、そう話しているうちに、その子は、両手で顔をおおって、泣きだしてしまいました。

話をきいていた、日本のツアー参加者も、大同事務所のメンバーも、泣いていました。私も、例外ではありません。

私を大学に送るために、進学願いの強かった、5歳上の兄の進学を、私の両親は、あきらめさせました。高卒で働きだした兄が、東京での私の生活費を送ってくれたのです。にもかかわらず、私は、両親や兄妹の期待を裏切って、大学を中退してしまいました。もう40年近く前のことです。

こんな話を、ききたくなかったのです。こんな場面を、みたくないと思っていました。そのために、思いついたのが、小学校付属果樹園でした。

苑西庄村を最初に訪れたのは、1994年です。そのときには、いくつかのほかの村で、同様の計画がすすんでいました。同行していた大同事務所のメンバーの1人（当時）が、私に話しました。「高見のことだから、なんとかしたいと思っているだろうけど、この村ではムリだ。まず水がない。貧しすぎる。お金をわたしても、木を植えることにならなくて、食べるもの変わるだけだ。輸血をつづけても、自立にはつながらない」。

水の問題を解決しないことには、なにもできないことを、私も悟りました。それ以後も、毎年、この村に通っていましたが、事態は、悪化するばかり。95年の水害で、あの先生の家をはじめ、いくつもの住居が、倒壊しました。井戸が涸れ、水がでるのは4つだけ、合計で、バケツ100杯。その水を、150人の住民と家畜で分けあっていたのです。

テレビ朝日の「素敵なお宇宙船地球号」の取材クルーを97年の夏、この村に案内しました。そうする以上は、井戸を掘るしかないのですが、日本で報道されて、資金が集まることに、賭けたのです。さいわい大きな反響がありましたし、郵政省（当時）国際ボランティア貯金と、JA（農協）全国中央会の助成も決まりました。

水の問題が解決したあと、村のなかから、「自分たちも木を植えたい」という声が、自発的にあがってきました。2001年から、果樹園の建設を、小規模で開始しました。経験が乏しいので、最初の年は枯れるものもあったのですが、2002年春に植えたものは、比較的よく育っています。来年は、わずかでも収穫をもたらすでしょう。

10年をかけて、少しずつ、事業をすすめてきたのです。村の人たちも、私たちに信頼してくれるようになりました。その成果が、まもなくでようとしているわけです。しかし、それは、目の前で泣いている少女の問題には、まにあいません。ツアーのメンバーのなかから、数人が、学費のたしに、とってお金を渡しました。

私は、こういうばあいの個人的な支援を、できるだけ避けてきました。しかし、あの先生が、

ここまで話すのは、よほどのことでしょう。いつも控えめで、自分からなにかを求めるようなことは、これまで1度もなかったのです。遠田先生が、今回は彼女の家に泊まりましたが、「あの先生は敬虔な仏教徒で、『肉類は口にしませんので、粗末なもので、まことにもうしわけありません』と書いてましたよ」と、私に話したばかりです。緊急避難として、自分のルールを破り、学費の問題について、この子の里親になることにしました。私は、これからも、この村に通うでしょうから、成長を見守ることもできます。

武春珍所長が、そのことを少女に告げ、「高見おじいちゃんの娘になるんだから、かならず、しっかり勉強しないとイケない」といいました。少女から表情が消え、ほうけたような顔をしています。事態の急転に、意識がついていかなかったのでしょうか。彼女の家を訪ね、母親に同意を求めると、なんども頭をさげられました。カマドの横に小さな黒板があり、チョークで、英単語を書いては消し、書いては消し、していました。ノート替わりの紙の束には、しっかりした小さな文字が、びっしりと書かれています。ほんとに勉強がすきなのです。

## NO. 255 小話 2004. 05. 10

寸鉄人を刺す、といいます。ことばに力があることの例えでしょう。私にとって、それはあこがれ。実際の私の文は、ダラダラ、ダラダラと、しまりのない散文。悲しいですね。

なんでも環境のせいにするのが、よくないことは、百も承知ですけど、いわせてください。少なくとも表面上は、「表現の自由」が保障され、なにを言っても自由、なにを書いても自由、書籍も雑誌もあふれかえっています。それが長くつづくと、表現力は、かえって失われるのかもしれないですね。

逆に、徹底した言論統制があったりすると、表現そのものが死んでしまう。

いまの中国がおもしろいのは、その中間にあるからでしょう。といっても、官製ジャーナリズムや公式会議での、代表発言じゃないですよ。それらは「おもしろい」の対極にあって、何時間も聞かされるのは、拷問のようなもの。おもしろい典型は、人から人へと伝えられる小話のようなもの。携帯電話が普及してから、転送、転送で送られてくるその種の携帯メールが、どっと増えました。

私が目にした最高傑作は、旗は共産主義、看板は社会主義、道は資本主義、根は封建主義。というもの。解説の必要のなさからいっても、イチオシ。

大同ローカルの話では、「大同の四化」と題するものがあります。「四化」は、「四つの現代化」のことで、最初に唱えたのは、たしか周恩来でした。工業、農業、科学技術、国防の現代化で、

改革開放の旗印にもなりました。

【大同の四化】

城市農村化 街は農村化し（管理が悪化している）  
馬路市場化 道路は市場化し（屋台なんか道路をふさぎ）  
幹部商品化 幹部は商品化し（官職が売買の対象になり）  
市長没文化 市長には文化がない

でもね、こういうときの「文化がない」は、学歴偏重の考えだったりして、私は同意したくないことが多いのです。

つぎも、同じ系統に属するでしょう。

官是買的 官職は買ったもの  
頭髮是染的 頭髮は染めたもの  
档案是改的 経歴はごまかしたもの

多少の解説をしますと、いま幹部の若返りがすごいですね。市長クラスでも、30歳代がめずらしくない。何歳まで、という規定があるんです。だから、髪を染めたり、経歴をごまかしたりしないといけない。

つぎは、日本の中国研究者からきいた小話で、政治色が濃いのです。舞台はいまから15年ほどさかのぼり、天安門事件の直後のことです。

天安門広場に、1頭のロバが迷い込んでいました。ときの李鵬総理が、「コラッ、ロバ！この広場は、中国のもっとも神聖な場所で、おまえなんかのいる場所ではない。そうそうに立ち去れ！」といいました。しかし、ロバは馬耳東風。動こうとしません。

そのあと楊尚昆がやってきて、大音量のスピーカーで警告しました。「そこのロバッ！早くそこを退かないと、戦車でひき殺すぞ！」しかし、ロバは知らんぷり。

つぎにきたのは鄧老です。ロバの耳元に近寄ると、なにごとかを、小声で、ささやきました。そのとたんに、ロバは一目散に、広場から駆け去ったのです。それをみていた人たちは、

「さすがは鄧老だ！ちょっとささやいただけで、ロバが逃げ去った。ところで、なんとおっしゃったんですか？」。鄧老の答えは、「いや、な～に、『おまえがまだがんばるんだったら、共産党の総書記にするぞ！』とittedただけだよ」。

すごい話だと思うんですけど、中国現代史の知識がなかったら、わかりにくいかもしれない。解説をはじめると、長くなりますから、わからなかった人は、無視してください。

食事のとき、そんなことが話題になったら、北京の友人は、転送されてきた携帯メールを検索して、何編か、私に書き写してくれました。そのなかで、私がおもしろいと思ったもの。

【俺村窮】 【おれの村は貧しい】

穿衣基本靠紡 衣服は基本的に自分でつむぎ

喫飯基本靠党	メシは基本的に党に頼り
致富基本靠槍	豊かになるのは基本的にかっぱらい
結婚基本靠想	結婚は基本的に願いに頼る
【俺村更窮】	【おれの村はさらに貧しい】
通信基本靠吼	通信は基本的に吼える
交通基本靠走	交通は基本的に足
治安基本靠狗	治安は基本的にイヌに頼り
取暖基本靠抖	暖を取るのは基本的に震えることに頼る

ちゃんと韻を踏んでるんですよ。原文の味わいは、私にはだせません。「治安はイヌに頼り」なんですけど、環境林センターの猛犬 3 頭が、1 晩のうちに盗まれたことは、以前の通信に書きました。

【領導的四清四不清】	【指導者の四清四不清】
開啥会不清楚	なんの会議かわからなくても
坐哪清楚	坐る席はわかっている
誰送礼不清楚	誰が贈り物をくれたかわからなくても
誰没送礼清楚	寄こさなかった奴はわかっている
誰干得好不清楚	誰が仕事ができるかわからなくても
該提撥誰清楚	誰を抜擢すべきかはわかっている
晚上和誰睡不清楚	夜、誰と寝るかはわからなくても
睡覺干什麼清楚	寝てなにをするかはわかっている

「四清四不清」も歴史背景のあることばで、解説が必要なんでしょうけど、はしょります。

小話の対象になるのは、やっぱり政治や社会、幹部の腐敗なんかが多いようです。そこに表現されるような現象をとりあげて、いまにも中国が崩壊しそうな話がないわけじゃないけど、どっこい、そうはいかない。むしろ、腐敗があるくらいのほうが、経済の活性化には有利なようです。問題はその後……。

## NO. 256 ポプラの予知能力 2004. 05. 14

冒頭で、ご連絡したいことがあります。最近、私たちのメールアドレス「gentree@vc.kcom.ne.jp」をかたらって、私たちとは無関係なメールを流している集団もしくは個人があります。顔がみえない、インターネット社会の怖さです。

政治と宗教にはかかわってはならない、というのが、NGO にとっての鉄則だそうです。それに 100 パーセント徹することも、困難なことでしょうけど、軽はずみに乗ることはありません。い

つもと完全にちがう論調を目にされたら、ああ、これがそうかな、と思ってください。念のために、こちらに転送していただけると、ありがたいです。

この春、「カササギの森」に、数回いったんですけど、ちょっとさびしいんですね。原因は、はっきりしています。昨年7月25日の雹と豪雨で、敷地内の、谷の底が、土石流で流されたからです。ここには、10年以上前に、聚楽村の人が植えたポプラが、育ってきています。一抱え以上のものもあり、カササギが、いくつも、いくつも、巣をつくっています。この実験林場の愛称を、「カササギの森」としたのも、そのイメージがあったからです。

ポプラの大部分は、土石流に耐えて、なんとか生き残ったんですけど、上流側の樹皮のはがれたものが少なくありません。石や砂で、けずられました。なかには、なぎ倒されたものもあります。

谷の中央部には、ヤナギ、ヤナギハグミ（沙棘）、ギョリュウ＝タマリスクなどからなるブッシュが茂っていました。「退耕還林」の対象になったこの土地600haの使用権を入手し、2001年春以降、ヒツジの放牧を排除してから、どんどん緑が濃くなっていました。まるで、自然の公園のようになっていました。谷底には、きれいな水も流れており、こんなところは、大同周辺では、めったにありません。そのブッシュも流されてしまいました。

草もよかったですね。ブッシュの周辺に、シロネの群落がありました。ハッカ（薄荷）のなかまで、いい香りがします。それから、ウメバチソウも群生していました。私の大好きな花です。土石流で流されたかと思ったんですけど、昨年9月の観察でも、残っていました。

ブッシュが流されたところも、そのときの観察では、ヤナギ、ヤナギハグミ、ギョリュウといったものが、砂に埋まった枝から、緑の、小さな芽をだしていたんですよ。ああ、だいじょうぶだな、思ったより早く、再生するだろうな、と思いました。

今回、びっくりしたのは、植生のいっさいが流されて、河原のようになったところに、緑の小さな芽がでていたことです。場所によっては、

ビッシリとっていいくらい。1平方メートルのなかに、百本以上のところもあります。ポプラの苗です。かわいいんですね。踏みたくないんですけど、それだったら歩けない。

地上部は数センチですが、地下の根っこは、10センチどころではありません。道具なしには、掘り出せないくらい。洪水で流されて、ここが木も草もない、裸地になったから、こうやって、生えてきたんです。そこまで考えて、ふしぎに思ったんですよ。ポプラは、花はすでに咲いたかもしれないけど、種子はまだ、できていません。葉がようやく広がりだしたところです。

ポプラやヤナギの種は、綿毛にくるまっていて、風に舞って、遠くに飛んで行きます。地面

で転がっているうちに、まとまって、ボールのようになることもあります。柳絮（りゅうじょ）です。北京の風物詩だったんですけど、現代の北京人には、きらわれるようです。オスは残しても、メスはなくされるようです。ポプラそのものを減らして、イチョウその他に切り換えてもいます。

柳絮は、北京では4月ですけど、大同は、もう少しあとです。ですから、これらのポプラの芽は、ことしの種が発芽したものではありえない。

去年の春の種かという、その可能性もありません。ポプラやヤナギの種の寿命は、2～3週間だそうです。生命があるあいだに、水と光の環境に出会わなかったら、生き残ることはできません。去年の種が生えたとしても、あの水害で、流されてしまったでしょう。

ふしぎそうな顔をしている私をみて、遠田さんが、話しかけてきました。「覚えていませんか？水害の直後にここにきたとき、ときならぬ柳絮が飛んでいたでしょ。ずいぶんたくさん。あれが、すぐに発芽して、冬を越して、生き残ったんですよ」

季節はずれの8月に、柳絮が飛ぶなんて、めったにあることではないそう。だとすると、ポプラはかしこいんですね。大雨と、ここが裸地になることを、予知して、種をつくり、飛ばしたのかもしれない。そんなことを、勝手に空想していると、人間社会の、さまざまなことを忘れて、ゆかいな気持ちになってきます。

## NO. 257 北京の水危機（1） 2004. 05. 20

北京での水フォーラム。「後ろ姿の北京は砂上の楼閣？」と題する報告を、私がしたところ、日本側出席者の数人から、「あそこまで話して、だいじょうぶですか？」と話しかけられました。だいじょうぶでしょう。中国の人たちは太っ腹です。

それよりなにより、私よりずっとすごい報告が、中国側からあったんです。たとえば、北京市水利局、王金如さんの「北京水資源の現状と展望」と題する報告。全文を訳出しても、おもしろいと思いますけど、私には荷が重すぎる。

ことしの3月、北京から大同に行く途中で、官庁ダムをみました。「大寨に学べ」運動のものでしょうけど、灌漑用の水道橋の残骸が、残っていました。水のなかにあった取水口から、現在の水際までは、1km以上も離れています。地元の農民の話では、ここ5～6年の水位の低下が激しい、ということです。

北京市水利局の報告も、それを裏付けています。データを引かせてもらいましょう。官庁ダ

ムから流れ出る河は、永定河。密雲ダムから流れ出る河は、潮白河。2つの河を通して、北京市内にはいる水の量は、つぎのようになっています。単位は億立方 m

	永定河	潮白河	合計
56～59年	19.8	17.0	36.8
60～69年	12.9	6.8	19.7
70～79年	8.4	7.9	16.3
80～89年	4.2	3.9	8.1
90～99年	3.12	5.91	9.03
2000年	1.7	2.51	4.21
2002年	0.78	1.87	2.65

(報告のパワーポイントのデータによる)

信じられないほど、急激な減少です。2000年でみると、1950年代に比べ、永定河（官庁ダム）は、11分の1以下。潮白河（密雲ダム）は、6分の1以下。2002年は、さらに減っています。かつては、官庁ダムのほうが、密雲ダムより大きかったことを、私は知りませんでした。逆転したのは、1980年代のことのよう。

水の減少の原因として、2つ指摘されました。まずは、1999年から2003年まで、北京は旱魃がつづき、年間降水量の平均が428mmにとどまったこと。

1999年	373mm
2000年	438mm
2001年	455mm
2002年	413mm
2003年	461mm

この数字は、大同あたりの平年と、あまり変わりませんね。北京の降水量の歴年平均は、595mmですから、428mmは、その72%です。

旱魃の年が、昨年までで、5年つづきました。きょう電話できくと、ことしもあまり降っていないようです。ふつう、旱魃の連続は2～3年だそうですが、9年くらいつづくこともあり、歴史上の記載では、20年もあるそうです。水利関係者にとって、頭の痛いところ。

もう1つの原因は、上流での水使用量が増えたことだそうです。それは、そのとおりでしょう。2つのダムの上流には、それぞれ数百万人の人が、住んでいるわけで、水使用量の増加は、しかたがない。その人たちの水の使い方は、北京にくらべて、ぜいたくとはいえません。

つぎに、北京市の水の需給バランスについて、報告されたデータはつぎのとおりです。2000年の全市の水供給量は、

地表水	13.39 億立方 m		
密雲・官庁両ダム	10.07 億立方 m、	地表水全体の	76%
その他のダム	1.40 億立方 m	同	10%
引水その他	1.88 億立方 m	同	14%
地下水	27.08 億立方 m		

この数字、納得できないところがあります。密雲・官庁両ダムの数字が、先ほどの報告と、ちがいます。それから、べつところで、5年間の旱魃時期（1999～2003年）の両ダムの利用可能な年平均供水量は3.41億立方mで、それは歴年平均の4分の1、といった表現もありますから、2つのダムの2000年の供水量は、10.07億立方mには、とうてい達しなかったでしょう。地表水の数字が、これより小さければ、その差額の大きな部分も、地下水にたよったことでしょう。

一方で、この年の水の需要は、40.47億立方mです。その内訳をみると、

工業	9.86 億立方 m (24%)
城鎮生活	10.62 億立方 m (26%)
都市環境	0.43 億立方 m (1%)
農業・農村	19.56 億立方 m (49%)

北京でも、ほぼ半分を農業・農村生活が占めています。

すみませんね。退屈でしょうけど、もうちょっと、つきあってください。発表された数字でも、水供給量の3分の2以上を、地下水に頼っているんですね。それは、このかんの地下水補給量をずっと超えています。

当然、地下水位は低下します。それがどこまですすんでいるのか、私はたいへん興味があるんですけど今回、図で示されました。それがなんと、1959年と、1981年のものなんですよ。問題の構造的な理解には、役立つんですけど、それにしても、20数年前のものですからね。問題が深刻化したのは、それ以後でしょう。

それについては、2000年と1980年の同期を比較すると、全市の平野部の地下水は、累計で56億立方mが消失し、面積1,000平方kmで地下水位の低下と、漏斗現象がおり、水質悪化、地盤沈下がおこっている、ということです。

水利関係者にとって、2008年の北京オリンピックが、肩に重くのしかかっているようです。それについては、次回に話しましょう。

本題にはいるまえに、ちょっとご連絡。何号か前から、この通信を引用したり、転送してもいいか、というお問い合わせが、増えています。もちろん、けっこうです。私の手元から送っているのは、2,000弱なんですけど、なかには、1人で3,000以上も、転送してくれる人があり、いったい、どれくらいの人の手元に届いているか、私にも、わかりません。読んでくださる方があるのは、うれしいことです。

北京は、1999年から2003年まで、連続して旱魃でした。5年間の平均は428mmで、歴年平均595mmの72%しかなかった。北京の水ガメである官庁ダム、密雲ダムも大ピンチ。電話で問い合わせたところ、ことしも雨は多くないようです。地下水の過剰な汲み上げで、地下水位が低下し、漏斗現象が広がり、水質の悪化、地盤沈下も深刻化しています。

その一方で、2008年のオリンピックをひかえ、北京は、膨張につぐ膨張。中国の経済成長率は、目標の7%をはるかに上回り、10%にとどく勢い。このペースだと、7年で、経済規模は2倍になります。水の使用量も当然、増えるはず。

対策としてとられるのが、まずは節水です。「節水はこの一滴から……」“Saving Water from every drop”なんてちょっと気のきいた標語ですけど、あまり実際的ではありません。水フォーラムの会場だった北京のホテルも、部屋のトイレがこわれていて、水が流れっぱなしなんです。タンクに手をつっこんで、止めるんですけど、そのたびに、磁器のフタをはずすのは、めんどろ。はずしっぱなしにして、床においとくと、掃除のたびに、クレーンがもとにもどすんです。でも、トイレをなおそうとはしない。

蛇口にくるまでの、水道管での漏水もひどいようです。具体的な数字をみて、驚いたことがあります。いま探しても、みつかりません。またの機会に。

節水のために、効果の高い方法は、水道料金の値上げでしょう。累進制とくみあわせると、効果的はずです。ちょっと遅すぎたくらいですけど、最近、値上げされました。

それよりなにより、節水の最大のターゲットは、農業・農村の分野でしょうね。前回みたように、北京市でも、農業・農村の用水量は全体のほぼ半分を占めます。節水できれば、効果は大きいわけです。それまで2万ヘクタールあった水田が、2003年から、禁止されたそうです。小麦の作付けも、4割に落とされました。水をもとにした生産性は、農業は工業にくらべ、70分の1だそうですから、農業に勝ち目はありません。

それから、域内での新たな水源開発に、けんめいです。たとえば、北京市街と密雲ダムの間、懐柔ダムがありますが、その川下に、数多くの井戸を掘る。天津に近いところに、平谷県がありますが、そのあたりにも、井戸を掘る。

この通信の NO. 246 で、「拒馬河の水争い」について書きましたが、あれも、その一環だったんです。かんたんにまとめると、河北省涿水県と、北京市房山区との境界を、拒馬河が流れます。30km だけ、北京境内を流れるんですけど、そこに、ダムをつくり、井戸を掘って、地表水も、伏流水も、みんな北京でつかおうというわけ。それほど重要な問題が、ないしょですすんでいたため、河北省がカンカンに怒った、という内容でした。

やり方が、あまりにズサンで、乱暴ですから、なにかの手ちがいか、偶発的なできごとだろうと思っていたら、北京市の水源確保の、重要なプロジェクトのようです。しかも、この計画、もともと 1980 年代からあり、ずいぶん議論されてもいるようです。河北省にとっても、「寝耳に水」の問題ではなさそう。

北京の域内だけでなく、周辺の水も集めます。昨年 9 月下旬、国慶節の直前に、大同の冊田ダムの水門が開かれ、5000 万トンの水が、官庁ダムに流されました。それが、域外からの引水の第一弾で、その後も、周囲の水が、北京に集められています。

私のつれあいが、北京からの留学生に、「北京は水不足が深刻でしょ？」ときいたら、「いえ、だいじょうぶです。北京は首都ですから」と答えたそうです。できすぎた小話のようですが、実際の話で、しかも 1 人じゃない、というんですよ。何人もの留学生に、同じ質問をしても、同じような答えが返ってきたそう。

そういう意識なんです。大同で、私も、似た体験をしていますからね。北京にいるというだけで、なにか自分がえらいように、思っているんですよ。北京からくると、運転手だって、えらそうに、口をだしますからね。

でもね、北京の周囲（上流側）は、河北省、山西省、内蒙古自治区で、北京いじょうに、水がありません。カラカラです。どんなにムリをしても、必要な水の量はまかなえない。

期待されるのが、「南水北調」です。すでに、東ルートと、中ルートが着工しています。東ルートは、江蘇省の揚州から天津へ、水を運ぶものです。大運河ならびにそれと平行する河川を流すので、技術的にも、大きな問題はなさそう。でも、このルートは、天津には水がいきますけど、北京には、きません。人口密集地を、オープンで通しますから、「南水北調ではなく、汚水北調になる」という専門家もいます。

北京に関係するのは、中ルートです。第 1 期は、長江支流の漢江にかかる丹江口ダムから、北京と天津に水を引きます。直線距離で 900km はあり、水路の延長は 1,250km ほど。これだけの距離で、高低差はわずかです。途中では、黄河のような大河を越えないといけない。たいへんな難工事でしょう。完成の予定は 2010 年で、計画どおり進行しても、オリンピックにはまに

あいません。

このルートも、昨年12月までに、着工しました。ニュースとしては、私も知っていました。そのさいに、ふしぎに思ったのは、河北省の石家荘と、北京とのあいだが、急ピッチで、すすめられていることです。いうまでもなく、ここは終段なんですね。水源の工事がすすまなければ、終段が完成しても、意味がないわけです。どういうことでしょうか？じつは、ここにウルトラCがありました。

2,500字を超えたのに、終点まで、たどりつけませんでした。すみません。この話題、もう1回、つづけさせてください。

## NO. 259 北京の水危機 (3) 2004. 06. 03

昨年の4月、中国共産党大同市委員会の、梁鳳書副書記に誘われました。河北省の実家に帰るけど、いっしょにこないか、と。「用事なんてなにもない。ただ遊びにきてくれたらいい」ということです。ゴタゴタしていた、カウンターパートの問題が、やっとかたづいたので、気晴らしに、誘ってくれたのでしょう。

彼の故郷は、河北省石家荘市の平山県です。太行山脈のなかにあり、山西省と接しています。途中の車中できいたんですけど、この県に、西柏坡があります。建国前、ここには中国共産党の中央が存在しました。

共産党中央の、歴史的所在地として、延安が有名です。陝西省北部にあります。西柏坡は、日本では、それほど知られていません。その原因は、期間が短かったからでしょう。延安を放棄した毛沢東らトップが、陝西省北部を転々としたあと、西柏坡に到着したのは、1948年5月末。北平（北京）にむかって、出発したのが翌年3月下旬。1年もなかったわけです。

しかし、共産党中央が西柏坡にあった期間は、中国革命のクライマックス、とっていいでしょう。国民党軍の包囲を受け、1947年3月には延安すら放棄せざるをえなかったのに、たった2年間の決戦で、勢力は完全に逆転し、全国的な勝利へむかいました。その期間の戦略的な指揮所が、西柏坡だったのです。内戦勝利後の、国家建設のビジョンが議論されたのも、この西柏坡でした。

農村を中心に活動してきた中国共産党が、このころから、都市に重点を移すことになりました。都市は誘惑が多いから、今後は「糖衣砲弾」とのたたかいが重要になる、と強調されたそうです。西柏坡を発つ朝、毛沢東は、「李自成の道を歩んではならない」と語ったそうです。明末の農民反乱の指導者、李自成は、明朝を倒し、北京に入ったあと、たちまち変質し、自分で

皇帝を名乗り、清軍の攻撃を受けて、敗走しました。

胡錦濤さんが、中国共産党のトップに選ばれたのは、2002年の11月でした。そして、最初の地方視察に臨んだのが、この西柏坡です。そのときの談話で、彼は「2つの必須」を強調しました。謙虚さをたもち、おごらない作風。刻苦奮闘の作風。

中国の友人たちの評価は、高かったんです。「最初の視察地を、西柏坡にしたのにはメッセージが込められている。彼は前任者とはちがう。中国がかかえる問題に、着実に、実務的に、とりくもうとしている。以前の解放区は、どこも現在でも貧しい。貧しい人たちのことを忘れない、というメッセージでもあります」。そうであってほしいと、私も思います。

ここまで読んできたみなさんは、「標題は、北京の水問題だったはずじゃないか。なんの関係があるんだ」と思われたはずです。すみません、前置きが長くて。もうちょっと、待ってください。

西柏坡には、革命の歴史を伝える記念館があります。私たちが訪れた日、なにかの行事があって、バスが何台も停まっていた。胡錦濤さんがきて、まがなかったから、参観者が、増えているのかもしれない。

毛沢東、周恩来、朱徳、劉少奇といった、当時の指導者たちの、住まいがあります。家具、調度のたぐいは、当時の実物もあるようですが、住居は、場所を移して、復元されたものです。というのは、そのころの共産党中央の所在地は、建国後の1958年に建設された崗南ダムの底に、沈没してしまったからです。

ここからが、やっとな本論です。「南水北調」中ルートの中終段、石家荘ー北京の区間で、突貫工事がおこなわれていると前号で書いたんですけど、その目的は、このダムの水を、北京に引くためなんです。平山県には、下流にもう1つ、黄壁庄ダムがあります。それから、隣の保定市に、王快ダム、西大洋ダムがあります。この4つのダムを、水路で結び、その水を、効率的に運用し、北京に運べるようにする。それが、石家荘ー北京間の工事を急ぐ理由です。

崗南ダム・黄壁庄ダムの主たる水源は滹沱河で、この河は、五台山をグルッと巻いており、水源は、大同市の渾源县、靈丘県の近くにあります。王快ダム・西大洋ダムの水源は大沙河で、この源流は、大同市の靈丘県にあります。ですから、私たちの活動地とも、無縁ではないんですね。

工事の完成は、2006年末が目標で、2007年の年初から、ここの水を使えるようにし、2010年の「南水北調」中ルート完成までのあいだを、なんとか、もたせたい。それが、現在の計画のようです。2008年のオリンピック開催にとって、ギリギリの、綱渡りがつづくわけです。

そして、このような事情を知ると、胡錦濤さんの、西柏坡訪問が、たんなる革命聖地詣ででなかったように思えます。下衆の勘繰りでしょうか？胡錦濤さんの目的に、水問題があったとしても、イチャモンをつけるわけじゃないんですよ。こういう大きな問題のときに、トップが現地へ足を運ぶことは、むしろ称賛に値すると、私は思います。こうみえてくると、北京の水問題は深刻ですよ。みなさん、どうお考えですか？

#### 【追伸】

数年前、友人の村田忠禧さんが、彼が監訳した、上下あわせて900余ページの大作『毛沢東伝』（金沖及主編、みすず書房）を送ってくれました。あわてて取り出し、今回の参考にさせてもらいました。

### NO. 260 苑西庄村の一夜 2004. 06. 08

ことしの4月7日、広霊県苑西庄村の農家に、ホームステイしたときのことで。その夜は9時前から、オンドルの上で、眠りにつきました。農家に泊まるときは、夜、することがないので、睡眠不足の解消になります。なるはずです。

どれくらいたったか、わかりませんが、騒がしさに、目を覚ましました。ドンドンッ、ドンドンッ、ドンドンッ、ドンドンッ、だれかが激しく、戸をたたいています。「ガオジェン！ ガオジェン！」と叫ぶ声もきこえます。自分の名前を呼ばれているとは、気づきませんでした。なにかあるんだろうけど、どうでもいいや、という気分です。

懐中電灯の光を、顔にあてられたんですね。しかたなしに目をあけると、パイチュー（白酒）のビンが、突き出されてきました。この村の、共産党の書記です。夕食の残りを、山盛りにしたドンブリが、カマドにおかれました。薄暗い裸電球もつけられた。ええっ！ いま何時なの？ 枕元においていた、腕時計をのぞくと、11時すぎ。

おバカさんの頭が、ゆっくり働きはじめます。この家で、夕食をとったとき、ビールはあったけど、この家の主人は飲まないし、私は飲んだけど、量はちょっと。ほとんど依存症の身としては、ちょっと、欲求不満だったんですね。同行しているのがサントリーの労働組合なら、いつでも、どこでも、なにかがでてくるんですけど、今回は、べつの労働組合。

ツアーが農村に泊まるとき、問題がないかどうか、地方の幹部と、大同事務所のスタッフとで農家を巡回してくるんですよ。そのとき、武春珍所長に、「パイチューを、ちょっと頼むよ」と、本気と冗談との境目で、話しました。心待ちにしているところも、なくはなかったけど、すぐには、こなかった。あきらめて、眠ったんです。こんな時間になって、それがくるとは思

わなかった。

いっしょに泊まっている、ツアーのメンバー1人も、起きてきました。いや、起こされました。あと2人、いっしょに寝てるんですけど、タヌキを決め込んでいるんでしょう、知らんぷり。党書記のうしろに、もう1人、農民が控えています。こういうとき、途中で終わることは、ないんですね。早く終わろうと思ったら、パイチュー1本を、カラにするしかない。ビンを私がとって、それぞれのコップに4等分しました。ガンベ〜イ（乾杯）、ガンベ〜イ（乾杯）、ガンベ〜イ（乾杯）、急ピッチです。

ドンブリのつまみを、すすめてくれるんだけど、しつこいものは、もうけっこう。お皿にあった、小さなピーナツと、これまた、ずーっと小さなソラマメ、そして、干しアンズに、手を伸ばしました。みかけは、よくないけど、味は濃厚。みていた党書記が、「それがすきなのか？」ときいたんです。うなづいたんですよ。そしたら、翌日、村を去るとき、麻袋いっぱい、車に積みこまれ、あとで、ツアーのメンバーに、分配されたようです。どうしてそうなったか、伝わらなかったでしょうね。

さらに、ガンベ〜イ、ガンベ〜イ、ガンベ〜イ、急ピッチの乾杯で、アルコールが、まわってくるんでしょう。党書記も、うしろの男も、声が大きくなります。そのたんびに、私は、「シーッ!」。党書記は、このツアーの団長の枕元にこしかけていて、乾杯の声と、アクションが大きくなると、太ももあたりが、団長の頭に、あたるんですけど、それでも、彼は起きてこない。すっかりタヌキに、腹を決めているようです。

そのように、私は推察してたんですけど、翌朝、彼にきくと、夜中にあったことを、まったく知らないそう。ほんとに、眠りこんでいた。いい度胸をしてますね。

1斤（500グラム）のビンを、15分ほどで、カラにしました。度数は、40度を超えていますから、けっこうなピッチです。そしたら、党書記は、うしろの男に、「もう1本!」。それはもう、かんべん!

彼ら2人を送り返すとき、いっしょに外に出ました。寝る前にみた星空が、すごかったんですよ。ここは海拔1,000mを超えていますし、空気はきれい。そのうえ、農村は照明が小さくて、土塀の外にできれば、まっ暗でしょ。12時近くですから、もっとすごいだらうと思ったんですけど、月が大きくて、星はかくれてしまった。農村ホームステイの、大きな楽しみが、この星空なんですけどね。とくに夏の天の川（銀河）をみると、日本の若い人たちは、みたことがありませんから、「こわい!」といますよ。

この村にたいする、私の感情にも、特別のものがありますけど、私たちにたいする、村の人の思いにも、格別のものがあるよう。こうやって、日本からツアーがやってくると、村の外に、

出稼ぎにでている人たちも、よその村に嫁いだ人たちも、わざわざ帰ってきてくれるんですね。まあ、村祭りのようなものです。

村の入り口の、小学校のトイレに、老人たちが、いつも、しゃがんでいます。そのなかに、私が交じっていると、老人の数は、さらに増えます。今回、とくにうれしかったのは、そのなかに以前の村長がいたことです。97年夏に、テレビ朝日の取材クルーが、この村にきたとき、ぶっつけ本番で、村の長老会議をやったんですけど、(中国がわも、ぶっつけだったと、思っているんですけど) じつはその朝、4kmほどある山まで、散歩をしていて、1人の老人にであい、村の事情を聞くことができたんです。偶然なことに、それがこの前任の村長でした。

村の長老会議でも、彼がリードしましたから、井戸掘りの話も、スムーズに決まったんです。ところがそのあと、井戸の水がでるまえに、彼は脳血栓で倒れ、県城の病院に、入院しました。村にいくたびに、尋ねていたんですけど、いつも村にいなかった。きょうはこうやって、7年ぶりに、彼に会えました。マヒが多少あるようですけど、元気そうです。そのときも、今回も、通訳は王黎傑です。

## NO. 261 石瓮村のその後 2004. 06. 16

この通信の、第247号から第249号で、霊丘県石瓮村の、井戸掘りについて、書きました。今回は、そのつづきです。この3月末、ツアーの人たちと、あの村にいつてきました。1999年6月の通水式くらいですから、5年ぶりです。これまでも、いこうとしたんですけど、雨が降ると、そのたびに、峠の道が流されて、交通が閉ざされます。そして、すぐには修復されない。今回も、29人乗りの、マイクロバスだとムリだから、霊丘の県城で、ワゴン車2台に、乗り換ええました。そのうちの1台が、とくにボロボロ。ふつうの道でも、途中でつぶれないかと、心配しました。

途中の浦里村が、どうなっているか、気になったんですけど、時間の関係で、そのまま通過。ここも、水のなくなっていた村です。

北水泉村に、着きました。1か所だけ、わき水が残っていた村です。4.5km上流の、石瓮村の人も、ここまで、もらい水に通っていました。1998年にきたとき、「バケツをいっぱいにするのに、3年前は1分だったけど、いまは8分かかる」といっていました。3年で、8分の1に減少したわけで、風前の灯火かな、と思ったものです。

いまみると、一滴の水もありません。村の人にきくと、潤れたのは、3年前のことだそう。飲み水をどうしているか、きくと、「上の村で井戸を掘ったから、そこまで、もらい水に通っている」とのこと。私たちが協力して掘った、石瓮村の井戸のことです。あの井戸は、ちゃんと、

水がでているようです。ホッとしました。

河原のようなところを、車は上っていきます。石がゴロゴロしているところに、車の幅だけの、狭い道がある。ひと雨くれば、ここも土石流でしょう。こういう場面で、必ずといっていいくらいの質問があります。「ここは川なんですか？ それとも……？」。私の答えも、変わり映えがしない。「水が流れるときは、川です。車が走るときは、道です」

石瓮村に、着きました。村のたたずまいは、変わっていません。でも、なんとなく、雰囲気がちがっています。井戸のそばで、村の代表が、あいさつしました。以前の共産党の支部書記ではありません。去年までは、会計をしていた人だそうです。

井戸の横に、ドラム缶を積んだ2台の馬車があり、男たちが、水を汲んでいました。どこからきたのか、きくと、さらに上流の高庄村で、2.5kmほど離れているそう。私は、いったことがありません。その村も、2、3年前に、井戸が涸れました。いまは、ここまで、もらい水に通ってきます。下の北水泉村からも、一部の人が水を汲みにくるそうです。ということは、この井戸を掘らなかつたら、いくつかの村が、存続できなかつた、ということです。

井戸のそばに、記念植樹用のトショウ（杜松）の大苗が、準備してありました。ネズミサシのなかまです。でも、まだ土が凍結していて、穴を掘ることができません。そのころになって、最初から感じていた違和感が、はっきりしてきました。村の人の動きが、バラバラなんですね。

私たちの車が、村に着いたとき、村の人たちは、遠巻きにみているだけで、近づいてこようとは、しませんでした。はじめての村じゃないんですよ。私は、何回もきてますし、1度なんかは、党書記の家に、村中の人が集まって、酒盛りをしました。ツアーだって、2つはきており、グループに分かれて、農家で昼食をごちそうになったんです。すっかり、なじんでいたはずなのに、ようすが、へんだったんです。

記念植樹ができないので、浮いた時間で、村のなかを、見て回ることにしました。ツアーの人たちが、村にはいっていくと、そこそこで、人の輪ができ、交流がはじまります。やっと、いつもの雰囲気になってきました。

村の中心に、ヤナギの古木があります。2人がかりでも抱けないくらいの、大きな木です。その根元に、杖をついた老人が、寄りかかっています。私のことを覚えていて、笑いかけました。そばによると、「党書記が死んだ。去年のことだ」と、さびしそうに話しました。享年56歳。農村は数え年ですから、私と同年です。

彼は若いころ、軍にいました。復員してからは、村の党書記になり、井戸を掘るのに、けんめいだったんです。私たちが、井戸掘りに協力しようと考えたのも、その姿に共鳴して、

という要素が大きかったんです。

1990年ごろに、この村の井戸が涸れたあと、村をでていく人が、つぎつぎにでました。もとは230人いた村が、半分以下になったそう。そういうばあいには、才覚がはたらき、腕力・体力に恵まれ、度胸もある、そういう人から先に、外にでていくんですね。本来なら、村のリーダーになる人たちです。その流れに抗して、あの党書記は、1人で持ちこたえて、いたのかもしれない。そして、彼がいなくなって、村の雰囲気も、変わってしまった。

もし、井戸を掘らなかったら、いくつかの村が、消えていったでしょう。いまからみると、確実にそうです。そうすれば、この一帯には、自然に、森林がよみがえったことでしょう。くる途中の山に、自生のシラカンバなどが育ちつつありました。霊丘県の山区では、人の圧力さえ取り除けば、森林が、自然に再生するのです。

あの井戸を掘ったのが、よかったのか、どうか、以前にも書いたように、私はずっと迷っていました。今回、ツアーの人たちと、この村を訪れて、その解答をえたいと思っていました。ところが、問題は、さらに大きくなったように、思えてなりません。

それから、第255号の「小話」に、追加です。書こう、書こうと思っていたのに、落としてしまいました。これは、だれかの創作ではなく、じっさいの話です。

雲崗石窟の第6窟には、釈迦牟尼の、誕生から成仏までの物語が、繊細なレリーフで描かれています。誕生直後のお釈迦さんに、9匹の龍が、水をかけて、沐浴させる場面があります。

それを示しながら、旅行社のガイドが、「『九』という数は、中国ではもっとも神聖な数です」と説明しました。横で私が、「でも、いちばん好きな数字は『八』です」と、チャチャをいれました。「発財」（もうかる）の「発」と「八」の発音が同じで、「8」がすきなんですね。自動車のナンバープレートでも、電話番号でも、「8888」なんてのは、プレミアムがつくんですよ。

すると、ガイドさん、平然と、「八を手にいれると、九がほしくなります。いまの江沢民がそうです」とつづけたんですね。そのころは、「三箇代表」（三つの代表）という江沢民理論の学習が、盛んでした。

## NO. 262 地図 2004. 06. 25

中国の農村でしごとをすると、不便なことがいろいろあります。緑化協力のなかで、もっとも困ることの1つは地図の入手が困難なこと。1992年1月、最初に渾源県に行ったとき、県の招待所につくなり、「地図がほしい」と、女性のサービス員に話しかけたら、怪訝な表情が、返って

きました。地図が、軍事的な理由その他で、公開されていないことを、私は知らなかったんです。

その年の5月、現顧問の石原忠一さんを団長に、最初の緑化協力団が、この県を訪れたとき、かなり詳細な地図が存在することは、わかったんですよ。通された県長の執務室に、張ってありました。写真をとってもいいかと、私が尋ねたら、ダメだ、といわれました。それくらいだから、そんな地図、手に入りっこない。

92年の秋、大同の農村での活動を終えた私は、最後に、省都の太原にでました。山西省青年連合会を訪ねるためです。その機会に、主だった書店を回りました。地図を探したんです。でも、みつからなかった。店員にきいても、ただひとこと「没有！」(ない！)

それであきらめちゃ、いけないんですね。具体的な地名は忘れましたが、商店街の横道のようなところに、路上の本屋があったんです。本屋はおおげさですね。シーツくらいの大きさの布を広げ、本や雑誌を、ならべているんですよ。自由市場の野菜が、本に変わったようなもの。

だれからきいたか、これも忘れたんですけど、友人の中国研究者であるのはたしかです。国営の新華書店なんかには、官許の、毒にも薬にもならない本しかないけど、そういうところに、出物があるというんですよ。主としてそれは、政治的な内容を指してたんですけど。

で、私は、大同滞在中も、そういう「店」をのぞくことにしていました。懷仁県の県城は、一帯では大きくて、出店も、たくさんありました。たいていは、雑誌です。「法律与生活」(法律と生活)とか、「生活与法律」(生活と法律)なんて雑誌が積んであります。お固いものにみえますけど、そんなものが、数売れるはずがない。中味は、エログロナンセンス。

中国では、「ピンク」のことを、「黄色」というんですね。これが、文字ばかりで、しかも漢字。漢字だけのポルノ、というのも味気ないですよ。そういう本をならべてますから、公安がくると、逃げるんですね。そのときに、あの敷物が威力を発揮する。四隅をつかんで、パーッとともつと、袋のようになって、すぐ逃げ出せる。あざやかなものです。そして、公安が行き過ぎると、また戻ってくる。

脱線しちゃいましたが、私が最初に、地図をみつけたのは、太原の路上だったんです。山西省の分県地図冊で、値段はいくらだったかな？B6版の小さなもので、裏表紙の上のほうに、「取り扱い注意」の表示がありました。外国人の私が、こんなもの広げていたらまずいかな？なんて最初は思ったけど、旅行社のガイドから、うらやましがられただけ。

1つ1つの県の地図が、見開きで載っていますが、主な道路と、郷・鎮の境目、村の名称が表

示されているだけで、等高線はありません。便利だったのは、各県の面積、人口、気象、特産物なんかが、紹介されていて、それを写すと、ちょっとした報告書になります。最初のうちは重宝しました。厚手の、わりといい紙が使われてたんですけど、そのために、装丁の糊がききにくく、たちまち、バラバラになりました。

それから2年ほどたって、その第2版が、書店に並びました。「取り扱い注意」の表示はとれました。何冊か買ったんですけど、欲しいという人に、渡しているうちに、手元に残ったのは1冊だけ。これも装丁がとれて、バラバラです。中国では、ほしいと思った本は、その場で買っておかないとダメ。その後は、いくら探しても、みつからなかった。

2000年以降、3~4種類の、同様の地図冊がでました。サイズはA5版になり、多少は見やすくなりました。でも、正確さは問題。渾源の懸空寺は、道路の西側にあるんですけど、東側に表示した地図があります。ごていねいに、その部分を拡大して、表紙のデザインに使ってあります。誤植も多いんですよ。私でも、何か所もみつけれられる。県の面積が、大幅にちがっているものもあります。

何年前か、池本和夫さんから、この地方の地図の、カラーコピーが届きました。やはり山西省の県ごとの地図です。A4サイズの見開きが多く、縮尺は25万分の1。100m間隔の等高線が入り、標高ごとに、色付けしてあります。

日本の古本屋で買ったそうなんですけど、もう1冊、手に入ったとって、現物が送られてきました。1973年の発行で、巻頭の解説文に、毛沢東語録が引用され、その部分だけゴチック体で、活字も大きい。「機密」とあり、ナンバリングもしてあります。大同の全体的な地形を知るうえでは、ものすごく役に立ちました。でも、緑化計画の、基礎にするには、粗すぎる。

地図をみれば、必ず買うことにしました。最近、高速道路もつぎつぎできて、地図に、記載されてるけどふしぎなことに、インターチェンジの表示がない。なにか、理由があるんでしょうか？

しばらく前の日本の新聞に、日本の企業が、中国の「カーナビ」事業に進出する、という記事が載りました。カーナビが成立するには、精度の高い、地図の公開が前提でしょう。中国は、そこまで開けてきたのでしょうか？事情をご存知の方、教えてください。

## NO. 263 若すぎるお嫁さん 2004. 07. 02

この春、ツアーのメンバーといっしょに、農家に、ホームステイしたときのことです。家族構成に、疑問をもったんですよ。年齢がうえの方からいきます。おばあちゃんがあります。髪な

んか、かなり白くなり、老けてみえますけど、実際には、私より年下でしょう。私たちをもてなすために、一生懸命です。

そのつれあいはいません。亡くなったよう。いつもは彼女が寝ている、門の横の小さな部屋に、私たちが泊めてもらいました。寝具は、県の招待所から、借りてきたもの。

その息子が主人です。年齢は29歳。数え年です。なかなかハンサムです。貧しい村では、若い男は打工（出稼ぎ）にでているケースが多いんですけど、彼は村に残っている。食事の準備などにも、ほんとうによく、体を動かしています。

私たちのホームステイが決まったために、隣村に嫁いでいる娘が、実家に帰ってきました。主人の妹です。こちらも細面で、なかなかの美人。婚家でも大事にされているのでしょう。顔が白くて、野良仕事をしているようには、みえません。年齢を、聞き忘れましたが、4、5歳の娘をつれてきていましたので、20歳代の半ばでしょう。

紹介の順番がちがうんですけど、そのちっちゃなクーニャン。かわいいんですね。長〜いお下げ髪で、先に小さなリボンが結んである。笑うと、両方のほっぺに、くっきりとエクボができます。あんまりかわいいんで、抱き上げようとしたんですけど、逃げられてしまった。ボウシだけを、つかんだら、お下げは、ボウシについてきちゃった。

私を混乱させたのは、もう1人の若い娘です。20歳くらいだろうと、見当をつけました。そういう方面の、私の観察眼は、日本においては、まったくアテになりません。でも、大同の農村にいるときは、プロの目。

彼女のあとに、5、6歳の男の子が、いつも、くっついてきます。金魚のフンのよう。

とてもおとなしい子です。この娘が、主人のお嫁さんだとすると、問題は、カンタンなんです。男の子は、彼女と主人との息子、ということになります。ふつうの一家。

そういうふうを考えるうえでの障害は、第1に、子どもが大きすぎる。彼女が、20歳くらいであるのは、まちがいありません。25歳以上ということは、ありえない。この一帯の農村では、年齢より老けてみえるのがふつうで、その逆は、ありえないんです。中国の農村では、女性は一般に早婚ですけど、彼女が、主人のお嫁さんだと仮定すると、どう考えても、子どもが、大きすぎます。

第2に、なにひとつ仕事をしないこと。おばあちゃんも、隣村から里帰りした娘も、主人も、私たちを迎えて、それぞれに動いているのに、彼女だけは、なにもしないんですね。男の子と、いっしょに遊んでいるだけ。う〜ん？

思い切って、本人にきいたんですよ。いくつかって。答えは22歳なんですけど、これは数え年です。満年齢でいえば、21歳でしょう。20歳の可能性も、なくはない。横にいる子を、息子かって尋ねたら、「そうです」。ええっ！まちががなく、この家のお嫁さんです。息子は6歳だといいますから、5歳ですね。この家に嫁入りしたのは、6年前だそう。満年齢でいえば、彼女が15歳か14歳のときです。

この通信の、第254号で書きましたけど、私はこの春、広霊県苑西庄村で、娘を持ちました。まもなく、小学校を卒業するのに、経済的理由で、中学校に進学できないんです。緊急避難として、進学をサポートしようと考えました。あの子は、1991年の陰暦2月2日の生まれです。川島和義さんが、調べてくれたら、陽暦では3月17日でした。13歳です。あの子より、たった1、2歳うえて、嫁にきたんですね。法律上のことは、いいこなしですよ。

「あなたの出身の村はどこなの？」と、つづいて聞きました。返ってきた答えを、即座に理解できる人は少ないでしょうね。なんと、四川省でした。私は、こういうケースに、何回か遭遇しています。たとえば、この通信でも、第153号の「南方からのお嫁さん」に書いていますので、そちらをみてください。そのお嫁さんは、貴州省の出身で、少数民族・彝（イ）族でした。ついでに、その一部を訂正します。南方の女性は働きものだと、強調したんですけど、今回のようなこともあるんですね。

夕食のときのことです。この地方では、どこの農家にいっても、私たちのような、お客があるとき、女性や子供は、食事をいっしょにしません。あとで食べるか、別の場所で食べる。小さな子供が、いっしょに食べることは、まれにあっても、その家の主婦が、いっしょに食べることは、まずない。ツアーでホームステイする人たちは、不満なんですけど、長い間の、先方の習慣ですからね。

ところが、このときは、そのお嫁さんも、小さな子供も、1つのオンドルのうえて、いっしょに食事をしたんですよ。主人の母親も誘ったんですけど、こちらは、絶対に応じなかった。でもまあ、いっしょに食事をしたといっても、そのお嫁さんは、子供といっしょに、テレビの番組に、熱中していましたけど。

そして、そのころには、ダンナにピッタリくっついて、離れないんですね。関係をみまちがえる可能性ゼロです。それをみた、ツアーのメンバー。中国にきて、まだ2日めなのに、「家に帰りたくなっちゃったな～」

この号で、「主人」「嫁」「嫁にきた」なんて言葉を連発すると、目障りな読者も、いると思うんですね。でも、そういうふうには書かないと、農村の家庭とは、ちがうことになってしまいますからね。

## NO. 264 毛主席紀念堂の行列 2004. 07. 14

7月12日の正午過ぎ、北京に着きました。中国国際航空と、全日空共同運航の関空→北京の朝の便ができて、私ははじめて。夕方、友人の李建華さんを、事務所に訪ねると、私たちの顔をみるなり、「よかったですよ、昨日でなくて」。11日、北京は集中豪雨で、空港が閉鎖になり、飛行機が、天津に回ったりしたんだそう。

そのあと乗ったタクシーの運転手の話では、道路の低くなったところに水がたまり、たくさんのタクシーやバスが水びたしになったそうです。「保険はきかないし、会社も補償しないし、みんな運転手が、負担しないといけない。こういう自然災害のばあいは、日本でも保険はきかないんですか？」と聞かれました。どうなのでしょう？

天安門あたりがひどかったそうで、2時間で60mmほど。もう1か所どこかで、100mmを超えたところもあったよう。水不足にとっては、朗報のはずですが、周囲の農村部では、たいしたことはなく、密雲ダムも官庁ダムも、水位はさして変わらないそう。水のほしいところは、雨がなく、害になる都心で、たくさん降った。

13日は、雲ひとつなく、ピーカンです。午前中、ちょっと時間があいたので、天安門広場の、おのぼりさんを決めました。北京など東部沿海の大都市と、内陸部農村との格差拡大、なんてことを、あちこちで話しているのに、北京の写真が、私の手元にありません。何枚か、撮っておきたかったんですよ。車で通過はしても、天安門広場に、自分でいくなんて、もう、10年もなかったんです。

天安門の写真を撮り、地下道をくぐって、広場にでました。たくさんの人です。凧をあげたり、売ったりしている人がいて、外見上は、のんびりしたもの。

人民英雄紀念碑は、以前は台座に上れたのに、いまはロープで囲まれ、遠巻きにするだけ。その南に、毛主席紀念堂があります。毛沢東主席の遺体が、安置されているんですね。一般市民も対面でき、ずっと以前、私もいったことがあります。

紀念堂の北側の正面に、長い列があったので、写真に撮りました。出発点は広場の西、歴史博物館のがわです。紀念堂の東がわ、人民大会堂のほうに回ったら、そこにも横4、5人の列が、ずーっと伸びています。南に向いた列が、天安門広場の北の端、長安街を尻尾に、先頭は広場の南の端、正陽門（前門）のラインまでつづいています。ところが、よくみると、その奥、人民大会堂に近いほうにもう1本、逆向きの列があります。これも広場の南の端から、北の端まで。

そういうふうに、書くのは簡単ですけど、すぐに見渡せるわけじゃないんです。日本人には想像できないくらい、広いんですから。インターネットで検索すると、広場の南北は、天安門から正陽門まで、880m。東西は、人民大会堂から歴史博物館まで、500m。大集会のときは、50万人～100万人を収容します。行列の始点、終点は、あとで自分で、端から端まで歩いて、たしかめたことです。

どこに行く列か、見当が付きませんでした。位置的にみて、人民大会堂の特別公開かなにかかな、と一瞬、考えました。ならんでいる人に、尋ねたんですけど、私の中国語は、通じなかった。というより、彼らにとって、あまりにわかりきったことで、バカにされたのかもしれない。

列の整理をしている人にきくと、「毛主席紀念堂です。カメラを持っては入れません」といって、胸のデジタル一眼を、指さされました。そこで、いったいどこまでつづいているか、たしかめたい気持ちがおきたんですよ。列に沿って、歩きはじめました。

そのときの驚きを、順に書いていきたいんですけど、読む人には、タイクツでしょうから、結論を急ぎます。行列の始点は、広場の南東の角です。なんの表示もないし、時々刻々変わるから、ならんでいる人に聞いて、見当をつけるしかない。

そこから北へ、長安街まですすみ、そこで折り返して、もういちど、南東の角にもどる。90度、方向転換をして、こんどは西にすすみ、広場の半分ちよつと、毛主席紀念堂を通りこしたところで、また方向転換をして、こんどは北にすすむ。人民英雄紀念碑のラインで、東に方向転換し、正面から、毛主席紀念堂にむかう。

地面は石畳で、照り返しがはげしいんですね。何割かの人には、日傘をさしています。地方からの団体が多いんですけど、個人や家族づれもいます。私たちは早足で歩きましたけど、列は、立ち止まることも多く、ゆっくり。目見当ですけど、2時間くらいはかかりそう。う～ん。あまりの光景に、ただ驚くだけ。これほどの列を、ここでみたのは、はじめて。

整理にあたっている人に、もう1度、尋ねました。「暑くなったから、ちょっと減ったけど、1日に4万人から6万人」とのこと。案内の表示には、「月曜日は休み。7、8月は、午前中だけ。8時から11時半。無料」とありました。ほかの季節のことは、わかりません。

ほんとに、びっくりしました。たしかに、分母が大きいんですよ。13億人の1割がくるとして、1億3千万人。1日5万人として、2600日かかります。1年300日として、じつに9年近く。それにしても……。中国政治を追っている人は、こういう現象の背後を、どうみるんでしょう？

NO. 265 まぼろしの胡楊 2004. 07. 20

最初に前号「毛主席紀念堂の行列」の訂正です。あの文章のなかの「西」と「東」がすべて、入れ替わっていました。前川宏さんに指摘されるまで、気がつきませんでした。どうも、広場の磁場に影響されて、私のあわれな脳味噌は、西も東も、わからなくなっていたようです。

「胡楊」について、最初に話をきいたのは、立花先生からです。「乾燥地に育つポプラがある」とのことでした。内蒙古の西のほうや、甘肅省あたりに多いようです。「いちどみにいって、できれば植物園に導入しましょう」といっていたのですが、しごとが忙しくなって、実現していません。

そのことは、ずっと気になっていて、私のPDAの「やらないといけないこと」の項目のなかに、何年も「胡楊の入手」があります。西のほうにでかける人に出会うたび、「繁殖方法をきいて、枝か苗を大同に届けてください」とたのむのですが、自分にできないことを、他人に期待してもしかたのないことのように。

そのようななかで、「胡楊三千年」といった言い方に出会いました。とても寿命が長いのだそうです。それから、原産地のほうで、急速に数が減っている、という話もききました。

私の興味をさらにかきたてたのは、岡山大学の吉川賢さんの話です。去年だったと思うんですけど、海外環境協力センターのプログラムで、同席したんです。胡楊の特徴をあげるなかで、吉川さんは、「成長錐を抜くと、その穴からピューと水が吹き出したんですよ」といって、スライドをみせてくれました。

成長錐というのは、樹木の幹にねじこんで、年輪のサンプルをとりだす道具です。これを使えば、木を伐らなくても、年輪がわかります。傷口をふさいでおけば、そのうちに、樹皮が巻いていきます。

植物によっては、傷口から樹液や水を、かなりの量、したたらせるものがあります。それを、吹き出す、と形容することもあるでしょう。でも、ほんとに吹き出す樹木があるなんて……。どういう構造でそういうことが起こるのか、いまのところ、ナゾだと、吉川さんは話しました。そういう話をきくと、私なんかワクワクします。

7月16日、カササギの森の中央にある谷を上りつめてきました。いちばん奥に、麻地溝という村があります。何年かまえにもいったんですけど、たくさんのハーブや、高山植物がありました。野生のアスターの美しさは、忘れられません。面積は少ないけど、カラマツの林があり、シラカンバなども生えていました。もう少し範囲を広げて歩けば、新しい発見があるかもしれ

ません。

期待したほどでは、なかったんですけど、帰り道で、山楊（チョウセンヤマナラシ）をみつけました。ポプラの一種です。内蒙古林学院の研究者から、この活動の初期に、大同あたりのパイオニア樹種は、白樺と、山楊だと、きいたことがあります。その後、シラカンバにはたくさん出会いましたが、ヤマナラシは、数えるほどしかみていません。小さい苗を山取りして、環境林センターの見本園に植えましたが、根付きませんでした。

ここだと便利なので、いちばんいい季節にセンターの見本園や、カササギの森に、苗を移してもらうことができます。短い枝をとってきて、カササギの森のベテラン技術者、馬さんに、そうしてくれるよう、頼みました。

そこから、話がポプラに発展しました。私が胡楊を話題にしたら、馬さんが、大同にもある、というのです。「当年の枝につく葉は、ヤナギのように細長いけど、2年目以降は、丸い葉になる。それが特徴の1つだ」と、彼はいいました。場所をきくと、陽高県の金家庄村。地図でたしかめると、ここから遠くありません。すぐに、車で向かうことにしました。

ついたのは、以前につくられた林場です。大面積に、ポプラが植えられていますが、たいいていは、先端が枯れています。小老樹になる前段階、とっていいでしょう。原因は、水不足と、カミキリムシです。レンガ建ての管理棟が、幾棟もありますが、管理する人がいなくなり、荒れ果てています。

馬さんは、胡楊のあったところに、小走りしました。でも、そこに残っていたのは、切り株だけ。彼は、呆然としています。「貴重な樹木で、省からきた幹部たちも、かならず見ていたのに……」

そのうちの1本の、直径30cmほどの株元から、何十本ものヒコバエが生えていますが、みんなヒツジにかじられました。しゃがみこんで、みたら、なかに1本だけ、数枚の葉を残していました。ヤナギのように、細長い葉です。それをみて、馬さんは「まちがいない。胡楊だ」。胡楊との初対面は、悲しいものでした。

馬さんは、帰りの車中で、なにも話しません。若いころ、7年間、ここで働いたのに、残っていたのは、残骸でした。

それから2日後、彼は、私の顔をみるなり、「べつの場所に、胡楊があった。大同県徐堡郷に、2本ある。電話で確認した」といいました。冊田ダムに行くときは、そこを通ります。いますぐではなく、繁殖方法などを、確認してから、いってみることにしましょう。私にとって、胡楊はまぼろしの木です。

NO. 266 加藤登紀子さんの大同訪問 2004. 07. 26

昨秋のことです。環境省地球環境局長・小島敏郎さんの局長就任を祝う会が、都内でありました。アーティスト主体の集まりに、どういうわけか、友人の干場くんといっしょに、私も混じっていました。

加藤登紀子さんが、私の顔を見て、「来年は、いよいよ本命の中国です」といわれました。加藤さんは、国連環境計画（UNEP）親善大使として、諸外国を、訪問しておられるんですね。本命の……といわれたのは、環境問題にとって、中国がいかに大切かということでしょうし、加藤さんにとっては、生まれた国ですから、特別のところ、ということでしょう。

私は「そのときは、ぜひ大同にきてください。高速道路が開通して、北京から3～4時間でこれます」と誘いました。記憶のなかで、私は軽く誘ったんですけど、その後、アルコールがはいって、そうとうしつこかったようですね。からみついた、と行っていいくらい。翌日、小島さんとまた顔をあわせたら、「高見さん、昔と少しも変わりませんね」とひやかされましたから。

ことしの4月、日本への帰途、北京の日本大使館によったら、環境省からきている染野さんが、「加藤さんの中国訪問が、7月に決まり、大同視察を、本人が希望されています」といわれたので、「それはじつは……」と説明しました。

う～ん。こんな調子で書くと、発行部数において「黄土高原だより」に数倍し、知る人ぞ知る、干場革治くんの「あまだい通信」そっくりになっちゃいますね。あいだを、はしよります。

加藤さんの大同到着は、7月20日の夜9時近くでした。日本人が立てた計画にしたがって動くと、中国は広いし、北京は広いし、渋滞はあるしで、しだいしだいに、時間が押してしまうんですね。大同市総工会の李世傑主席による歓迎宴が、遅れてスタートしました。

その席で、加藤さんは、わざわざ部屋から、ギターを取り寄せて、「知床旅情」を、うたってくれたんですよ。どういうわけですかねえ？ 登紀子さんの歌をきくと、私は、哀しくなっちゃうんですね。CDで、涙ぐんちゃうことがあるくらいですから、このときはもっと……。遠田さんは、根室の生まれ育ちだから、いっそう、そうだったみたい。

私たちのプロジェクトを、できるだけゆっくり、みてもらいたかったんですけど、忙しい人のこと、そうもいきません。22日の夜は、北京でコンサート、そのまえにも、会見の予定があるということで、朝のうちに発ってもらうことにしたんです。だとすると、大同での実質は、21日のまる一日。

環境林センターは、まず決まりです。雲崗石窟は、私もみてもらいたいけど、ここを抜かすのは、大同側に失礼になる。あとはせいぜい1か所で、しかも近くのプロジェク。選んだのは、渾源県呉城郷、アンズの村です。このルートにすれば、途中で、北京の水源の桑干河や、渾源県三嶺村の景色を、楽しんでもらうことができますからね。

よけいなことですが、何号かまえに、地図について書きました。同じ問題で、苦労した人が多いようで、たくさんの反響があったんですよ。石田米子さんが、等高線のはいった山西省の大判の地図集が、太原で売られていることを、知らせてくださったんです。すぐ手配して、手に入れたんですけど、この地図集の「風景名勝」のページで、三嶺村の一带は、「典型黄土地貌」と記されています。私たちが、毎回、車を停めるようになったのも、当然なんですね。

桑干河に、流れはありませんでした。出発のときは、曇っていて、三嶺村は、帰途に回すことに決めていたのに、峠にさしかかるころから、クリアに晴れてきたんですね。あわてて先導車に連絡をとって、車を停めてもらいました。こんなに見通しのきく日は、めったにあるものじゃないんです。

呉城郷は、アンズの収穫の真っ最中だったんですよ。熟したら、すぐ収穫しますから、毎年、7月に大同にきていても、収穫のようすをみるのは、私も初めてなんですよ。登紀子さんは、枝もたわわに実ったアンズの前で、ポーズをとってくれました。

村の党書記の話では、1畝=6.7アールあたりの収穫は1,000元になるそうです。アワ、キビ、ジャガイモだったら、100元にしかならなかったもので、すでに10倍です。とてもよく実っていると思うんですけど、これでも、昨年には及ばないそう。成り年と裏年とがあって、ことしは後者。

2軒の農家を、家庭訪問しました。1軒は窯洞（ヤオトン）です。そのあと、村の小学校で、生徒たちと交流。登紀子さんは、歌唱指導までするサービスぶりで、こどもたちに、もみくちやにされました。それが、まったくの自然体で、すごいねえ！

市内に帰って、雲崗石窟をみたあと、環境林センターを、みてもらいました。最後に、職員や臨時工のまえで、また何曲か、うたってくださいました。設備は悪いし、聴衆はひとにぎりだし、歌詞は通じないし……それでも、全力投球なんですね。私はとくに、裏方で取り仕切っておられるお姉さんの幸子さんの熱心さに、感動しました。

今回の大同訪問は、登紀子さんにとって充電になってくれたらいいと、私は考えてたんですよ。できるだけ、たくさんみてもらって、彼女の活動に、役立つところがあればいいと思って。それなのに、こんなにサービスしてもらっちゃって……。

別れ際に、新著にサインをして、くださったんですね。その最後に、「大同にて」と書いて。うれしいですね、ファンのひとりとして。

### 【追伸】

呉城郷には、その前日、独自にいつてきたんです。アンズの実っている、写真を撮りたかった。いい写真が、これまでなかったんです。昼食のオンドルで、こんな話をききました。80年代、90年代、この村から大学に行く人は、1人もいなかった。2000年になって、1人が進学し、そのあと毎年、2〜3人ずつ、大学にいつているそうです。

その場に、それらの学生の父親が、2人いて、話題がそこにいったら、ほんとにうれしそう。そして、「あんたたちが、支援してくれたおかげだ。教育の大切さを認識するようになったんだ」というんですよ。その話をきいてから、何回も、何回も、乾杯して……。うれしいですね！

## NO. 267 抱きしめた胡楊 2004. 07. 29

最近の号で、「まぼろしの胡楊」を書いたところ、たくさんの方から、情報をいただきました。三重大学の齊藤昌宏さんは、胡楊の特徴、繁殖方法などくわしい資料を送っていただきました。おもしろくて、胡楊にたいする興味は深まるいっぽう。さっそくプリントして、地元の技術者たちに、配りました。北海道大学の浪花彰彦さんからは、根挿し法などの資料がきました。

前中国大使の佐藤嘉恭さんは、新疆ウイグル自治区の、タリム地域を視察したときの樹林の情景を、知らせてくださいました。秋に黄葉し、黄金色に輝く光景は、じつに見事だったそうです。

中国滞在中の宮下利江さんからは、「繁殖方法を調べてから、なんて、のんきなことをいつていたら、なくなってしまうかもしれませんよ。ここは中国なんですから」と忠告がきました。

大同県許堡郷に、2本、残っているということで、7月26日に、現場に行くはずでした。ところが、前夜からの雨で、カササギの森に住み込んでいる案内役の馬占山さんと、合流できませんでした。黄土の道に雨がふると、グリスのようになって、車は動けなくなります。馬さんは、大同市林業局を定年退職したベテラン技術者で、もう65歳ですけど、あそこの、スチール製2段ベッドで寝起きし、陣頭指揮しています。またも、おあずけ。

ことしの夏の大同は、雨が多いんですよ。25、26日の2日間で、環境林センターでは58.6mm、カササギの森は46mm、降りました。霊丘植物園では、7月25日までの降水量が374mmにたっし、まちがいなく500mmを超す、といっています。市内では、27日の夜も降り、28日夜は強雨

です。樹木や作物の生育が、例年になく良好です。

27日は、朝のうち、晴天でした。カササギの森で、馬さんをピックアップし、現場にむかいました。道路わきに、九梁窪林場の管理事務所があります。モンゴリマツの大規模造林を1970年代末から実施したところで、当時は、たくさんの労働者が、暮らしたようですが、いまは、数人が残っているだけ。

そこに、あこがれの木が、ありました！高さは20m近く。胸高直径は、30cmから40cmほど。2本ときいていたのに、7本あります。図鑑で調べたとおりで、新しい枝の葉は、ヤナギのように細長く、上のほうの葉は、ヤマナラシにそっくり。その中間に、いく通りもの形があります。樹皮は厚く、縦にたくさんのスジがはいっています。樹形はやや、くずれてきていますが、かえってそれが、風格を感じさせます。

望外のよろこびは、たくさんの小苗があることです。大きなものは、樹高4mほど。小さいものは、数センチ。こまかく数えれば、100本はくだらないでしょう。ふしぎなのは、平たいところには、小苗がみられず、崩れ落ちた土塀のうへと、その根元にだけあることです。ヒツジの食害、その他の影響でしょうか。

大半は、地表近くを、横に伸びた根からの、ヒコバエのよう。土塀のところに、根が地表にあらわれ、そこから萌芽しているものも、みられました。ヤマナラシと、似た性質です。根挿しによる繁殖が、有効でしょう。

ポプラは、雌雄異株です。2株しかない、ときいていたので、オスとメスがそろって確率は、50%だと考えていました。ところが実際は7本。これだと、確率は、ずっと高まります。

よくみると、枝の先に、小さなヒョウタンのようなものが、ついています。千成瓢箪のように。実です。まだ完熟していませんが、なかに、種子がはいっていました。ほかのポプラといっしょだとしたら、種ができるのは、春のはず。この時期にあるのは、私たちを、待っていてくれたのかもしれない。親木から20m以上、離れたところにも、苗が生えています。実生の可能性があります。

いまはまだ早いので、落葉を待って、苗を掘りとり、環境林センターの見本園に移してもらうことにしました。根を掘りとり、根挿しもしてもらいます。1週間後くらいに、種子を集めて、育苗を試みってくれるよう、頼みました。

ここだったら、大同から1時間もかかりません。2000年の地震のあと、外務省草の根無償資金の支援で、この郷の、肖家窩子頭村に、小学校を再建しました。冊田ダムも、すぐそば。なんども、なんども、この道を通っていたのです。10年も前から、探し求めていた胡楊が、足も

とにあったとは！

胡楊は、寿命は長いけど、成長は遅い、ときいていました。でも、ここに植えられたのは、1960年代です。それが、樹高は20m近く、胸高直径は40cm。概算で、年輪幅は5mm。ポプラとしては、生育が遅いかもしれないけど、一般の樹木からすると、速いほうでしょう。

帰りの車中で、馬さんが、「胡楊は、塩害地のほうが、育ちがいいようです」と話しました。斎藤さんからの資料によると、胡楊は、塩害地の改善に役立つそうです。地中から、塩分を吸収し、葉のつけねに、塩の結晶をつくります。「胡楊塩」と呼ばれ、食用や工業用になるそう。集めるのがたいへんですから、いまの時代に、実用にはならないでしょうが、塩害地に植えるのも、おもしろい。

ほんとに、ふしぎな樹木です。原生地で、この木をみたい気持ちが、いっそう強まりました。標題を「抱きしめた胡楊」としたのですが、誇張があります。じっさいは、午後から雨になって、いま述べたような状態を観察し、写真を撮るのが、やっとでした。でも、心のなかでは、この木々を抱きしめ、ほおずりしていました。

あした(29日)の朝、大同を発ち、北京経由で、31日に帰国します。

## NO. 268 工事現場の国 (1) 2004. 08. 06

7月24日、大同を発って、靈丘県にある、私たちの植物園に向かうことにしました。順調に行っても、大同－靈丘県城は3.5時間ですし、植物園は県城から40分。時間的には、北京より遠いんですね。ルートは、最短の、大同－渾源－靈丘のほか、大同－渾源－広靈－靈丘、大同－応県－繁峙－靈丘と、複数あるんですけどそのどれも、いま、道路工事中。完成すれば、とても便利になるけど、それまでが地獄。

これまでつやってきた、北京ジープのチェロキーは、すでに8年目にはいり、走行距離が28万km弱。トラブルがつづき、修理費はかさむし、燃費は悪いし、安全にも関わりますから、なんとかしないと、いけなかったんです。世話人の竹中さんが、応援してくれることになって、このたび、7～8人乗りの、新車を買ったんですよ。まだ、正規のナンバープレートもついていない、ホヤホヤ。

運転手の郭保青は、1日に何回も、なめるように、洗車してますからね。はじめての遠出で、キズでもつけたらたいへんだと、地図をみては、ルートを検討していました。でた結論は、走行距離は長くなるけど、道路状態を優先する、というもの。大同から、河北省陽原県の化稍営まで、高速道路を走り、そこから国道207号線(一部109号線と併用)で、河北省の涿源にい

く、というものです。涑源から植物園までの距離は、霊丘からと、差がありません。

高速道路は、順調に走りました。つぎに、国道 207 号線を南下し、河北省蔚県の境内にはいりました。そのうちに、私は居眠りをし、目を覚ましたら、車は道路をはずれ、河川敷を走っていたんです。西合営のあたりで、道路工事にであって、迂回したそう。その状態が、1 時間以上もつづきました。道路は、左側の、一段高いところにあり、トラックが見え隠れするんですけど、そこにもどる道がない。

ここを走って、まちがない証拠に、石炭トレーラーなんかも、たくさん走っていますし、反対方向から、路線バスもやってきました。そのうちに、その河川敷と、国道 207 号線が交わるところにでたんです。やれやれ、のはずだったんですけど、南に行く国道は、工事中で、大型のローラーが、道をならしている最中。通行できません。

河川敷のほうも、たくさんのトラックが渋滞して、停まっているんですよ。その運転手を目当てに、カップ麺や、ゆで卵なんかを売りつける臨時の店まで、できているんですね。小郭が、ようすをききにいったら、なんと、きのうの 11 時から、動けないんだそうです。27 時間もたっています。

それをみて、どういうわけか、私は日中戦争のさいに、谷底におびき寄せられた日本軍が、待ち伏せ攻撃を受ける場面を、想像してしまいました。一刻もはやく、逃げ出したいんです。北に向かっては、道路に上がることができました。方向は逆ですけど、そうするしかありません。

しばらく走ると、道路の全面に、土をもりあげて、「前方工事中、迂回しなさい」と表示があるんですね。ここにくるまで、まったく予告はなかったし、迂回路の案内もありません。とにかく、有無をいわず。

南にいけないから、北にきたんです。ところが、北にもいけない。困っているところに、路線バスがきました。20 人乗りくらいのマイクロバスに、その倍くらいの客が、ギューギュー詰め。通行止めを知らなくて、ここにきたんでしょう。迂回路をしってるらしく、サッサと引き返しますから私たちも、あとを追いました。

西の脇道にそれるところに、また、盛り土がしてあったんですよ。中国製のマイクロバスは、車高が高いから、難なく、乗り越えたんですけど、私たちの車は、そうはいかない。私たちを降ろして、底をすらないかどうか、小郭が、慎重にたしかめるんですね。

なんとか乗り越え、1km ほど走ったら、また盛り土があった。袋のネズミになったよう。悪戦苦闘のすえに、やっと、国道 109 号線にたどりついたんですけど、高速を降りてから、3 時間半

も経過。

不案内なところですから、安全を第一に、北京方面に、国道 109 号線を走ることになりました。この道は、河北省涿鹿県の岔道から、北京と河北省の境界に平行して、南にいきます。遠回りですけど、目的地に確実に近づけます。そのはずだったんです。

ところが、岔道から、すぐのところ、また、盛り土！今回も、予告もなにも、なかったんですよ。迂回路の指示がないのも、いっしょ。100 番代の国道は、北京から、各地方に放射状にむかう、1 級国道中の、1 級国道ですよ。しかも、ここから北京は、指呼の間。ああ、それなのに！

日本だと、こういう工事は、道路の片側ずつ、やるでしょ。最低限の交通は、確保する。やむなく全面のときは、夜間の工事です。ところが、ここではいつも、いきなり全面。「この人たちは、道路はだいじだけど、交通はどうでもいいんだ」なんて、私はののしるんですけど、もちろん、どこにも届きはしない。

その工事現場に、農耕用のトラクタが、数台はあって、畑のように、土を鋤いているんですよ。あれって、なんなんですかね？その端っこを、南のほうから、アウディがやってきたんです。いけるかどうか、きくと、条件はよくないけど、なんとかいける、といいます。

私たちの後ろに、サンタナがきて、私たちがどうするか、観察しているんですね。こちらは、サンタナを先にやりたいから、待っていると、彼らも動こうとしない。しかたがないから、私たちも、工事現場に、突入したんですよ。

まるで、重機の展示場なんですね。ショベルは、日本のメーカーが、日立（ミニショベルをもらってから、あの表示に親しみがわきます）、小松製作所、神戸製鋼。それから、韓国の大宇。ボルボは、スウェーデンでしたかね？ブルドーザは、中国メーカーが多いようです。タンクの技術が、そのまま、いかせるのでしょうか？みんな大型なのに、周囲の光景が大きいから、小さくみえてしまう。

しだいに、荒野をいくような気になってくるんですね。狭いところでも、幅 30m 以上、広いところは、100m 以上ありますからね。そこら中の土が、掘り返されています。その端っこを、私たちの新車は、泥んこになりながらも、ロングスカートのお姫さまのように、しずしず。

完成すれば、片側 3 車線は、十分にとれそう。1 年後くらいには、それがバーンと通っていて、いまのこのようすは、想像もできないでしょう。

悪戦苦闘の連続だったんですけど、読む人にはたいくつでしょう。国道らしい状態にもどっ

たのは、太平堡からで、脱出に、2時間あまり、かかりました。

泊まっている環境林センターをでたのは、朝の10時だったんですよ。この日の目的地の涞源についたのは、なんと夜の12時すぎですからね。今回のお話、1回では、脱出できませんでした。ぬかるみは、それほど深かったんです。

## NO. 269 工事現場の国 (2) 2004. 08. 12

国道109号線を、南にむかって走ってるんですけど、工事現場のぬかるみは、河北省涿鹿県の太平堡で終わり、そこからは、まずまず順調でした。109号線を、そのまま走ったら、北京市内にはいっちゃいますから、(反対方向の終点は、チベットの拉薩です)。国道108号線に、乗り換え、こんどは西に向かわないといけない。108号線は、始点は北京、終点は雲南省の昆明です。

2つの国道をむすぶ接続道路は、地方道です。1級国道でも、これほどの苦勞ですから、なにがあるか、わからない。分岐点の孔澗で、小郭は車を停め、道端で話し込んでいる、男たちのところにいき、道路事情をたしかめました。その先が工事中で、通れない、ということです。

接続道路は、この先に、もう1本あります。地図でみると、109号線はこのあと急な彎曲をくりかえすんですけど、北京に近づくんですから、心配ないでしょう。

道路は急に登りだし、山のなかにはいりました。つぎからつぎへと連なる山の中腹を、曲がりくねりながら、縫っていきます。遠田さんが、「これはまた、りっぱな山岳道路ですね」といいました。運がよかったんですよ。本体工事が終わったばかりで、いまは、ガードレールがわりのレンガを路側に、積んでいるところ。深い山の、ところどころに、飯場があり、関係者が泊り込んで、工事をしているよう。

両側の山が、きれいなんです。アブラマツが、たくさん、植林してあります。建国後しばらく、なされたものでしょう。最低でも、40年はたっています。それから、自生のシラカンバがみえます。その他の樹種も、けっこうありそう。車を停めて、調査したいけど、いま、その余裕はありません。

これも、突然のことでした。「北京欢迎您！」という、看板が、あらわれたのです。「えーっ、北京だ！」と、小武が叫びました。「靈山風景区」の、大きな看板もでてきました。地図で調べると、河北省と北京市の境界を越え、門頭溝区のはずれに、はいっていました。

道路はくだりはじめ、やっと人家がでてきました。8時をすぎて、すっかり暗くなり、家々に

は電灯が点いています。齊家庄村の分岐で、地方道に降り、南西にすすみます。ふたたび、北京市と河北省涑水県の、境界にきました。なんと、ここでも、盛り土が、道路をふさいでいるんですよ。カッとなったのは一瞬で、それは恐怖に変わりました。こんなに暗くなった山中で、近くに人家はないし、車も通らないよう。通らないはずですよ、道がふさいであるのですから。ここを乗り越えたとして、その先がどうなっているか、わかりません。

よくないときは、よくないことを考えるものです。最近でも、太行山には山賊がでる、ときいたことがあります。北京―大同の高速道路に、「打撃車匪！」なんて、スローガンがありますから、その可能性だって、なくはないでしょう。ここは太行山ではありませんが、深い山であることはたしか。そんなことを考えながら、私は、立ち小便をしていました。

そのとき、前方からエンジン音が聞こえ、ヘッドライトの光が、みえてきました。トラックが、やってきたのです。後方からは、4輪駆動の、ランドクルーザーがやってきました。小郭が道を尋ねると、「ここまでこないで、孔澗で曲がるべきだった」と男たち。小郭は「工事中で通れなかった」と応じました。

4輪駆動は、私たちの進行方向にすすみました。私たちも、そのあとにつづきました。こうなっても、小郭は慎重さを失いません。懐中電灯で、なんどもなんども、確認したあと、盛り土を、慎重に乗り越え、工事中的ガタガタ道に、はいりました。人家はまったくなく、まっ暗な山中です。

気持ちのなかでは、すごく長かったんですけど、じっさいの距離は、それほどでもなかったでしょう。やがて人家がでてきて、村もありました。でも、たいていの家の窓に、灯はありません。びっくりしたのは、ヘッドライトの先に、突然、道路に座り込んでいる、人の集団がでてくることです。まっ暗ななかで、夕涼み。いえ、夕涼みの時間じゃないですよ。10時に近いんですから。なかに、こどもも混じっています。山区の農民が、どのように夜を過ごすかなんて、これまで考えたこともなかった。

やがて、広い道にでました。涑水県九龍庄鎮です。小郭は、進路を右にとり、光を消した、小さなガソリンスタンドに車を止め、人を呼び起こして、ガソリンをいれました。たった10リットル。あまりに小さな店で、品質が信頼できないし、リットルあたり、0.05元高かったから、とのこと。道を尋ねると、逆方向に走っていたようです。1kmほど引き返し、国道108号線にはいりました。これからは、西に一本道です。やがて、涑源まで89km、の表示がありました。

涑源に着いたのは、12時でした。予約してあったホテルに、部屋はありません。着くのが、遅すぎたから。運よく、別のホテルに空き室があり、転げ込みました。食堂はしまってますから、翌日の昼食用のカップ麺に、お湯を注ぎ、みんなで、食べました。

この日の走行距離は 520km。14 時間のうち、昼食時を除いて、小郭は、走りつづけました。「疲れたろう？」と私がいうと、「若いときは、ずっとこうでした」と答えます。以前、彼は、長距離の大型トラックを、運転していました。

翌朝は、8 時に、宿をでました。ここから霊丘自然植物園までは、30～40 分のはず。ところが、河北省と山西省の境の、馬頭関が大渋滞です。108 号線のこの先に、工事中のところがあり、迂回路を求めて、トラックが集中するからです。反対車線がちょっとでも空くと、すかさず、そこに乗り出します。両方向から、それをやるから、にっちもさっちもいなくなる。反対車線の運転手に、事情をきくと、5km すすむのに、一昼夜かかったそう。

運転席をカラにして、路側で、トランプをしています。うどん売りの屋台がでています。あちこちに、ウンコのかたまり。これだけ待てば、もよおすこともあるでしょう。植物園に着いたのは、11 時でした。

たいへんなロス、だと思ふんですよ。私が、「温家宝総理の経済戦略だ」というと、中国側メンバーは、ケゲンな顔。「いま経済が過熱しすぎているから、ブレーキをかけるには、これがいちばんカンタンなんだよ」というと、「高見のバカ話がまたはじまった」という顔をします。

道路を修理するのは、悪くないことです。北京市内は、いま建築ラッシュです。それ以前は、道路の大工事でした。爆発的な波が、周辺に押し寄せているのでしょう。迂回路を残しながら、計画的にやればいいのに、無秩序に、いっせいにやります。

日本で、列島改造だったことが、この国では、大陸改造です。いたるところが、工事現場。ちょっとそこまで、のはずが、たいへんな旅になりました、でも、そのおかげで、えたことも、少なくありません。

いつも長くて、もうしわけありません。加藤登紀子さんに、「高見さんのレポートは、長すぎますよ。疲れたときは、最後まで読めません」といわれました。でも、私のいまの能力では、こういうふうには、書けそうにありません。

## NO. 270 中国版への序文 2004. 08. 19

どんなに有名な人の書いたものでも、そのままのかたちでは、人の目にふれない文章があります。それは为什么呢？外国で翻訳・出版されるときにつける、序文がそうですね。私の「ぼくらの村にアンズが実った」の中国での出版にむけ、翻訳がすすんでいます。

序文って、たいせつでしょ。そこで、人の目をひきつけることができなければ、そのあとに、

すすんでもらうことはできません。だから、私もかなりの精力を注いで、それを書きました。せつかく書いたのに、日本語で、だれの目にもとまらないのもくやしいから、ここでとりあげることになります。

私が最初に中国を訪れたのは1971年で、日中国交正常化の前年でした。その後の中国の変化は巨大で、あとき北京の街角で目にした光景は、いまはみつかりません。早朝の大通りでレンガ満載の馬車の列をみましたが、城壁を壊して環状道路をつくるためのものだったようです。朝夕の出退勤時は自転車の洪水でしたが、いまそれは自動車の大渋滞に変わっています。

前世紀の80年代以降の中国の変化は「世界の奇跡」と呼ぶに値するでしょう。欧米や日本などが数世代をかけた現代化を、中国はわずか一世代のうちに実現しようとしているのですから。まさに強烈な光です。

光は陰を伴います。光が強いぶん、陰も濃いようです。陰の最たるものは、格差の拡大でしょう。都市と農村、東部沿海地方と内陸部、成功した者とそうでないもの、そのあいだの格差は自由競争を原理とする西側資本主義国のそれをはるかに超えています。

もうひとつの陰は環境破壊です。中国は大陸で、日本に比べ26倍も大きいのですが、生態環境も資源も恵まれているとはいえません。13億の人口で割れば、脆弱といってもいいでしょう。そこに奇跡的な経済膨張が継続すれば、なにがもたらされるか。それは中国だけの問題ではなく、世界の問題であり、隣国の日本も強い影響を受けます。

民間団体(NGO)緑の地球ネットワークが、山西省大同市の黄土高原の農村で緑化協力事業を開始したのは1992年1月ですから、すでに12年がすぎました。私にとってもっとも印象深いのは、地元の人たちとの交流の積み上げです。平坦な道でなかったことは、大同が日中戦争に際して深刻な被害を受けたことを指摘するだけでわかってもらえるでしょう。それらは序文に要約できることではなく、この1冊をもってようやく可能なことです。

東部沿海の大都市を光もしくは頂点に例えると、内陸の黄土丘陵や山区の農村は陰であり、発展に取り残されたところであり、底辺に位置するといってもいいでしょう。経済発展を時代の牽引力とみなせば、環境問題はその副作用であり、これも底辺です。

1つの国、1つの社会の正確な姿は、底辺からみると、明らかになると思います。山頂に立つだけでは、山の形はみえません。山の形をみようと思ったら、ふもとまで下るしかないのです。私は大同で緑化協力をつづけながら、しだいに北京をみつめるようになりました。大同は北京をみるうえで最適の距離にあります。日本から、海外からみる北京が正面の姿だとすると、大同からみる北京は後ろ姿です。

2003年の夏、中国側の主要な報道機関11社と日本側3社が大同のプロジェクトを取材にきました。彼らが一様に驚いたのは、大同がカラカラに干上がり、北京の水源の桑干河も断流していることでした。新聞記者が驚くくらいですから、一般の方にはなおさら認識がないかもしれません。そのような問題と10年余り苦闘してきた大同の仲間と私たちの体験は、読んでいただく価値がなくはないでしょう。

日本語版が出版されてすでに1年余りがすぎ、原稿を書き上げたときからすれば2年近くたっています。この事業は現在も進行中ですから、その後の変化をふまえて書き改めたいこともあります。そのなかには中国側のカウンターパートが青年連合会から総工会に交替したことがあります。その事情は簡単には書けません。また、私の性格を考えると、どこか一か所に手をつければ、結局は全体を書き改めることになりかねません。そういう面倒は避けることにしました。ただ、水問題の重要性と緊急性を考慮して、第11章に1節を加えました。

翻訳者について書いておきましょう。李建華さん、王黎傑さんと私が知り合ったのは1974年3月ですから、もう30年以上も前です。そのころ2人は学生で、私もまだ20歳代半ばでした。

この緑化協力事業を構想し、実現の可能性を探るため、1991年秋に私は北京の関係部門を回りましたが、相手にされませんでした。組織も資金もないのですから、そういう扱いを受けて当然です。李建華さんと呼び出し、酒を飲みかわしながら苦衷を訴えると、彼は「それだったら地方にいきなさい。地方にいけば、このような事業は歓迎されます」とアドバイスしてくれました。彼の助言がなければ、この緑化協力事業は存在しませんでしたし、私の苦労もなくてすんだのです。

ことばも気持ちもなかなか伝わらず、大同の農村で悪戦苦闘しているとき、北京から駆けつけてくれたのが王黎傑さんでした。彼女の支援がなければ、この事業は生まれたばかりで挫折したでしょう。多忙きわまる現在も年に数回は大同のプロジェクトを訪れるのは、この事業が彼女の子どもでもあるからでしょう。翻訳者として、これ以上の人たちはありません。その他、出版にあたってご協力をいただいた中国側関係者のみなさんに感謝いたします。

そして日本のサントリー文化財団の翻訳・出版助成が決まらなければ、この中国版が日の目を見ることはなかったでしょう。深く感謝いたします。

この本は韓国でも出版されることになりました。東北アジアの国々は、黄砂の到来で春の訪れを知ります。同一環境に存在していることの証明でしょう。環境に国境はないのです。私たちのささやかな環境協力が、この地域の相互理解と協力のために、多少なりとも役に立てば、それ以上の喜びはありません。

2004年7月7日

著者

北京に送って、しばらくして、過不足なく書けてはいるけど、おもしろくないな、と思って、翻訳をストップしてもらい、もう1本を書きました。でも、やっぱり、もとのほうがいいな、と思いはじめています。あしたから、また中国です。

## NO. 271 地底旅行 2004. 08. 31

大同は、中国最大の、石炭の街です。雲崗石窟に行く道の左右にも、大小の炭鉱が、いくつもあります。いちど見学したいと、以前から思っていたのですが、これは、簡単じゃない。炭鉱汚水の浄化実験にとりくんだときも、坑道は、外から覗くだけで、なかには入れなかった。

晋華宮という、国営の、大きな炭鉱が、お金をとって、坑道のなかに入れて、というんですよ。観光開発です。私も、その看板をみました。運転手の小郭も、行って来た、といいます。江沢民が大同にきたとき、その炭鉱を視察しました。安全にも、問題ないでしょう。

受け付けにいくと、きょうはダメ、といわれました。いろいろ人手と費用がかかるので、10人以上まとまらないと、入れないとのこと。私たちは4人。こういうとき、武春珍所長がいると、さっさと話をつけるんですけど、きょうの交渉役は、小郭ですから、そこまでのことはできない。

それでもグズグズしていたら、坑道の入り口まで、つれていってくれました。途中の立ち話で、緑の地球ネットワークの人間だとわかったら、「以前から知っている」といって、急に態度が変わりました。あちこちに連絡をとってくれ、なかに入れることになりました。

まず、作業服に、着替えます。首のまわりに、新しいタオルを、巻いてくれました。靴下も、新しいもの。長靴をはきます。ヘルメットをかぶりました。カメラ、ライターは、ロッカーに預けるように注意されました。

坑道の入り口で、ヘッドランプをつけ、腰に、バッテリーと、「自救器」をつけます。かなりの重さ。自救器は、濾過式のガスマスクで、いざというとき、40分間は呼吸できるそう。実際に使うことはまずないが、規則だそう。にわか炭鉱労働者のできあがりです。

まず垂直坑を、エレベータで、地下260mまで降りました。ドイツ製で、秒速7m。あっというまです。そこからしばらく歩いて、こんどは、トロックに乗ります。ちょうど交替時間で、たくさん労働者が、すでに乗り込んでおり、詰めてもらって、バラバラに乗り込みました。

最初はゆっくりでしたが、途中は、かなりのスピード。ほぼ水平な坑道を、15分ほどで、2.5km

走りました。ここは、側壁も、天井も、コンクリートで固められています。天井の架線から、小さなパンタグラフで、トロッコは、電気をとっています。架線のつなぎ目で、青い火花が飛びます。

坑道は途中で、いくつにも枝分かれしています。終点には、小さな待合室がつくられ、交替で引き上げる労働者が待っていました。朝7時からの労働を終えたところで、顔は、みんな真っ黒。私たちといっしょにきた労働者は、さらに奥に、徒歩ですすみませう。なかには、2時間歩くグループもあるそう。

私たちは、見学用の坑道に、すすみました。生産が、終了したところです。安全点検の担当者が、臨時のガイド。たしかに、内部のことをいちばんよく知っているはずです。途中で数か所、ガス検知器があり、メタンガスと、二酸化炭素の濃度をデジタル表示していました。

その奥に、採炭方法の歴史的な変化が、実物で、展示してあります。といっても、最初の原始的な方法は、人が、ツルハシと、スコップで、掘ってますから、リアルにできた人形。ヘッドランプのかわりに、頭に、小さな油壺をつけています。掘った石炭は、手押し車で運びます。

つぎの段階は、電動ドリルで炭層に、穴をうがち、発破をかけます。ごていねいに、導火線がでていところも展示してありました。この段階になると、輸送も、小さなトロッコから、ベルトコンベアに変わっていきます。

小炭鉱、零細炭鉱では、このレベルの方法が、いまでも現役だそうです。発破のかけかたで、1度に掘れる石炭の量は、ずいぶん変わるそう。上手へたが、問われるところだと、説明してくれました。

坑道の天井を支える坑木もこの段階は、マツの木です。ここの炭鉱では、1960年代まで使われました。その後、鉄骨から、鉄のパイプに変わり、いまでは、油圧式的大型機器で、天井全体を支え、労働者は、油圧シリンダのあいだで作業するので、以前のような危険はない、と説明してくれました。逆にいえば、零細炭鉱では、危険な状態がつづいている、ということでしょう。

現在の切羽では、特殊合金の爪をたくさんつけた大型機械が石炭を掘り、コンベアで自動的に運び出されます。坑道を切り開くための機械とならべて、実物が、展示してありました。1台で、400万円くらいするので、リースだそうです。

この炭鉱には、石炭層が27層あり、ここは第12層。炭層の厚さは、平均1.4mだけれども、厚いところでは、5~9mもあるそう。ジュラ紀(2億0800万年前~1億4600万年前)のものだそうですが、これほどの規模の形成に、どれだけの時間がかかったか、人類の時間とは、何桁

もちがいます。

日本の炭鉱につきものの、ボタ山（ズリ山）を、大同では、みることはありません。石炭の純層が、きわめて厚いということです。

労働者は3交替です。私たちと入れ替わりに、あがった人たちは、朝の7時から、働いていたそう。交替の時間を含めると、8時間前後でしょうが、そのあいだに、食事をとることはありません。かなりきつい条件ですが、賃金は2000元くらい。

くるときのコースを、逆にたどって、地上に出ました。でも、こんどのトロッコは、黄色い塗装をほどこした、新しいもので、「旅游専用」の表示がありましたが、もちろん、労働者も乗っています。

うへの受け付けで質問すると、去年から開始したけど、手続きが完了していないため、一般の客はわずかで、上からの視察がほとんど、ということでした。経済的には、なりたっていないわけですね。その日の大同日報が、国家旅游局の副局長が、ここも視察した記事が載っていました。そのうちに、オープンになる可能性があります。

ロッカールームで、服を着替えました。となりの部屋に、大きな浴槽があり、入浴をすすめられましたが、働いたわけではないので、ことわって、帰りました。現実の切羽こそ、みませんでした。予想よりは、ずっと現場に近く、えがたい体験だったと思います。

## NO. 272 雨の多い年 2004. 09. 09

8月下旬から大同にきて、プロジェクトをまわっています。ことしの夏は、雨が多かったんですね。霊丘自然植物園での測定では、8月末までに514.4mmでした。9月にはいっても、降っていますから、ことしは、600mmを、確実に超すでしょう。

9月8日の大同晩報も、ことしは雨が多く、大同にある2つのダム、趙家窰ダムと冊田ダムの貯水量は、この10年で最高位にある、と報道しています。そして、都市の地下水の補給にも足りるだろう、と述べていますが、こちらは、そう簡単ではないでしょう。

この協力事業をはじめてから、年間降水量が、600mmを超したのは、1995年だけです。でも、あの年は、秋にはいつての固め降りりで、役に立たなかった。逆に、ヤオトン（窰洞）が倒壊し、6万世帯、24万人が、被害を受けました。いいことはなかったんです。

ことしは、畑のできがとていいのです。天水に頼っている地区では、トウモロコシの背丈

が、平年の倍はあります。いつもの年、いかに水が足りていないか、これでわかります。

樹木の生育も、順調です。カササギの森の入り口、采涼山で、2000年に植えたマツを、ツアーの人たちに、いつもみてもらいます。ことしは、標準的なところで30cm、とくにいいものは、40cm以上も伸びました。背丈が1mを超えるものも、かなりでてきました。

ことしも、春はよくなかったのです。4月上旬までは、春の到来が遅く、土の凍結が、なかなか融けなかったのに、中旬になって、急に温度があがりました。雨も、4月末まで、降りませんでした。5月からの雨が、平年より多いことは知っていましたが、いったん枯れたら、生き返ることはありませんから、ことし植えたものの活着率は、そうとうに低くなると、考えていました。

しかし、現場を回ってみると、ひどく悪いのは、せまい区画です。植付け作業が、遅れたために、苗木がダメになっていた可能性があります。全体の成績は、悪くないのです。悪いところでも、70%くらいは、活着しています。

驚いたのは、昨春、40～50cmの大苗で植えられ、葉が茶色になって、枯れたとしか思えなかったマツが、緑の葉をだし、生き返っていることです。冬芽も、ちゃんとできているよう。葉は枯れても、本体には生命力が、残されていたようです。

草の生育も、良好です。高いところの草花が、とくにきれいです。霊丘自然植物園でも、カササギの森でも、高山植物の、お花畑ができました。デルフィニウム（飛燕草）、マツムシソウ、カラマツソウ、セキチク、アスター、ツリガネニンジン、リンドウ、ウスユキソウ、ユリ、トリカブト、レイジンソウ、ウメバチソウ……。最後の3つは、湿地のもののはずですが、植林地の周縁などで、みることができます。

日本のものより、背丈が高く、花が大きく、色が鮮やかなのです。なかには、1株で、ものすごい数の花をつけ、自然の花束になっているものもあります。たくさん写真を撮りましたので、そのうち、ウェブページに、掲載しましょう。

日本は猛暑だったようですが、こちらは、とても涼しかったのです。みなさんに、もうしわけないような気がします。毎日のように、雨が降り、降らない日も、曇っていて、気温が、上がらないのです。1週間のうち、お日さまをみるのが、1日ほど、といたぐあい。私たちは、7月末から3週間、日本に帰りましたが、地元の話では、暑かったのは、1日だけだったそう。

北国の方は、お気づきでしょう。逆に、日照不足と、冷害が心配なのです。農民も、あまり口にしません、それを心配しているようです。作物の背丈が伸び、みかけはよくなっても、

実がはいらなかつたら、意味はないからです。いまから、これだけ涼しかつたら、早霜の恐れもあります。

でも、ここは言霊の世界です。悪いことを考えたり、口にしたりすれば、それが現実になります。話題の転換を、急ぎましょう。ここ4日間、連続して晴れました。夕方から朝にかけて、雨が降っても、昼間は、よく晴れました。朝夕は寒いほどなのに、日中は半袖で、作業の汗を、流しています。

訪れる農家で、蒸したトウモロコシがでます。それも、朝、昼、晩の3回。とても充実しています。農民の表情にも、ゆとりがでてきました。明るい気持ちで、秋を迎えましょう。14日には帰国しますので、収穫風景をみるができないのが、心残りです。

## NO. 273 小学校の併合 2004. 09. 14

最初に、おことわりです。ここしばらく、モーレツな忙しさと、農村を回っていて、通信事情が悪いため、メールをいただいたかたなどに、不義理をしています。お許してください。

9月初めに、陽高県大泉山村に、いってきました。ツアーを民泊させてもらっていますから、なじみの人も、多いはずです。この村で、大きな変化がありました。9月の新学年から、あその小学校が、廃校になったのです。こどもたちと遊んだ、あの小さな学校です。中国では、9月に、新学年がはじまります。

ことしの春、全校生徒は15人でした。1つの教室、1人の先生で、教えていました。1年生と、3年生と、5年生。「2年生、4年生、6年生はいないの？」と、私がきいたら、「それは来年です」との答え。最初は、意味がわからなかったんですけど、隔年で、生徒を入学させるんですよ。1年から6年まで、6学年もあつたら、1人の先生では教えきれないから。

6歳になったとき、入学できない子もできるから、5歳でも、入学が認められるそう。

そうすると、5歳で入学する子、6歳で入学する子、7歳で入学する子ができます。同じ学年でも、年齢、体の大きさ、その他がバラバラなのは、そのためなんですね。

こういう小さな村のばあい、低学年しかいないのが、ふつうなんですよ。1人の先生では、高学年を教えられないためです。この村の先生は、とてもできる人だから、変則的ながら、6年まで、受け入れていたんですね。

ついでにいいますと、霊丘県の上北泉村と、下北泉村の小学校では、1年生は、両方の小学校にいます。そのあと、2年生、4年生、6年生は、上北泉村。3年生、5年生は、下北泉村。とい

うふうに分けています。両方の村が近いために、このようなことが可能です。

話をもどします。この9月から、大泉山村の小学校は、鎮政府が所在する、大白登村の小学校に吸収されました。5kmほど、離れています。定期バスなどは、ありませんので、学校に、寄宿します。月曜の朝から、金曜の午後まで。徒歩で、通えない距離ではないと思いますが、「不安全だから……」とのことでした。

教育の条件からいえば、そのほうがいいでしょう。大白登村の小学校には、400～500人の子がいるそう。設備だって、先生だって、整っています。刺激もふえるし、こどもの視野も広がるでしょう。

話が、ジグザグしますが、大泉山村のまえに訪れた、陽高県董庄村では、新しい校舎1棟と、寄宿舎建設の準備をしていました。ほかの村の子を、受け入れるためです。この村には、上海の企業が資金提供した「希望小学校」があり、校舎もりっぱですし、先生もそろっています。

そういうことからみると、小学校の併合が、制度として、すすめられているわけですね。以前、日本大使館の斎藤淳子さんから、きいたこともあります。大泉山村の先生は、「先生が1人だけの、小さな学校は併合されます。先生が2人の学校は、そのままです」といいました。べつの人は、「自然村の学校は廃止され、近くの行政村の学校に統合される」と答えました。

それにしても、小学校1年生は、6歳ですからね。その年齢で、親元を離れるのは、かわいそうでしょう。もとの大泉山村の先生にそういうと、「それはそのとおりです。なかなか慣れない子もいます」と、率直でした。（その先生はいま、べつの村の学校に、モーターバイクで、通っています）。

でも、中国では、こういう方面に、実績があります。都市でも、両親とも働いているばあいが多く、以前から、全託の小中学校がありました。土、日だけ、両親のところに、帰るんですね。私は最近、都市のことにうとくなくて、いま、どうなっているか、知りません。

費用の問題もあります。学費と教科書代、その他の雑費で、半年80元、年間160元だそうです。そのほかに、寄宿費用が月50元で、年間600元。主食の材料は、自分で運ぶことが多いようです。こどもの多い家庭には、軽い負担ではありません。

大泉山村は、貧しい農村ですけど、特殊な歴史があり、(NO. 191 参照) 教育に、とても熱心ですから、いまは、どの子も、学校に寄宿しています。でも、就学が、これまで以上に困難になる村、困難になる子もいることでしょう。そこのところをどう考えるかは、バランスの問題でしょうね。

渾源県の、通りがかりの小さな村で、数人の子に、「学習好不好？」（勉強はできるか？）ときいたら、いっせいに「不好！」（できない!）と答えました。「どうして？」ときくと、「先生が教えてくれない」とのこと。「先生は、マージャンばかりやってる」って、いうんですね。まあ、これは特殊な例でしょうけど。

この通信でも、よくとりあげる苑西庄村の先生なんて、ほんとにいい人ですよ。村の人で、1人1人の生活環境を知りきっていて、自分の子同様に、たいせつにしています。小学校を卒業するのも、たいへんな村ですけど、こどもは素直で、潑刺としている。こういうことは、日本でも、中国でも都市の環境に、求めることはできないんです。8月のツアーに参加した武林さんは、すっかり感動して、奨学制度を、自分でつくってくれたほどです。先生が1人、ということ、あたりはずれが大きい。

こういうことを書いてくると、私は、自分の生い立ちを、思い出さざるをえません。私は、鳥取県の農村の育ちですが、先生に反抗して、学校におれなくなり、伯父さんの家に預けられ、鳥取市内の小学校に、通うことになりました。いまみると、小さな地方都市ですけど、農村しか知らない私には、大都会に思えたものです。伯父の一家に、家族以上に、よくしてもらったんですけど、それでも、寂しかったのを、思い出します。そのとき私は、小学校の高学年にはなりましたが。

驚いたのは、学校で、宿題がでて、クラスメート全員が、それをしてくることでした。農村の小学校では、農繁期休暇があるくらいで、こどもも家に帰ると、それなりの役割をもっていました。そんなふうですから、街の学校になじめるはずがありません。同級生からも、よくしてもらった印象はあるんですけど、1人の名前も、顔も、思い出せません。空白です。緊張していて、余裕がなかったんですね。

でも、そのときの経験は、私のその後を決めた、と思っています。そのことがなかったら、べつの人生を歩んだでしょう。

大泉山村の、あの子たちも、さびしいだろうと思います。とまどうことと思います。でも、それを乗り越えて、自分を形成して行ってほしい。心からの、エールを送りたいと思います。

## NO. 274 ダムの水 2004. 09. 21

2004年、中国北部は、広い範囲で、雨に恵まれたようです。大同のばあい、年によっては、北部は旱魃だけれども、南部には雨があたり、その逆であつたりしたのですが、ことしは、全域で、雨が多かったのです。このあと、大きな問題がなければ、豊作を迎えることが、できるはずですよ。

その一方で、ふしぎなのは、河川の水が、あまり増えないことです。7月から9月まで、数回にわたって、桑干河をわたりました。そのたびに、車を降り、固定橋の中央まで行って、流れを観察してきました。

この河で、最後に流れをみたのは、1997年夏のことです。テレビ朝日のクルーが、「素敵な宇宙船地球号」の取材で、大同にきたとき、ヒツジの群れが、桑干河に追い入れられ、泳ぎながら、体を洗っているようすを、撮影しました。黄色く濁った水が、渦をつくりながら、流れていました。

それからあとは、シーズンを問わず、1滴の水もなく、干上がっている光景か、水はあっても、幅が数mの、とても流れとはいえない光景ばかりでした。それには、これより上流の朔州市に、東榆林ダムが、完成したことが大きいでしょう。でも、ダムから下の集水域も、そうとうに広いのです。

ことしの夏は、雨が多いので、増水を期待したのです。これまでの年より、多いのはたしかですが、流れといえるほどではありません。雨が降っても、河まできていないのです。畑も山も乾ききっていて、少々の雨が降っても、そこで吸い取ってしまうのでしょうか。

気になるのは、汚染がひどいことです。雨のあとですから、水のなかに大量の土がはいっています。それは、しかたのないこと。土を沈澱させたあとの、上澄みを測ってみました。生物化学的酸素要求量=COD(Cr)は、56mg/Lでした。パックテストでは、30mg/Lほどです。アンモニア性窒素は、10.5mg/Lです。そうとうに、ひどい汚染です。原因は上流にあるはずですが、自分の目でたしかめるまでは、たしかなことはいえません。

9月8日の大同晩報で、冊田ダムも、趙家窰ダムも、この10年で最高水位を記録した、と報道されました。趙家窰ダムは、報道の10日ほどまえ、みにいったのですが、水量はさほどなく、ダムの石垣を、張り替え工事中でした。工事のために、水位をさげているものと、そのとき私は、考えていました。

北京に帰る途中で、冊田ダムに回りました。水量は、以前より、増えています。ずっと遠くですが、湖底に栽培されているトウモロコシが、水に浸かっているのがみえます。写真を撮って、春のものとは比べてみたところ、増えてはいますが、劇的とまではいえません。満水には、ほど遠いし、オーバーフローのラインより、水面はずっと下です。放水もしていません。

予定を変えて、官庁ダムもみにいくことにしました。河北省懐来県で、ダムに注ぎこむ直前の桑干河を渡ります。内蒙古からくる洋河も、壺流河その他も、すでに合流しています。その集水域は、広大なものです。鉄道と道路の数本の鉄橋は、長さがゆうに1キロ以上あります。

でも、その下の大部分は、トウモロコシ畑になり、黄色く濁った流れの幅は、わずかなものです。河底が、顔をだしているところもあります。

官庁ダムは、密雲ダムとならぶ、北京の水源です。大きなダムですよ。フェーズがかかっていることもあって、対岸が、みえないくらいです。その大きさを目のまえにして、桑干河のみじめさが、あらためて実感されました。

予想に反して、ここも、水量は増えていません。もし増えていれば、陸の草が、水没しているはずですが、そのようなようすは、みられません。水際に集まっているのは、打ち寄せられた、水草です。地元の人にきくと、「ことしも、水は減少した。水際は、3mほど後退した」ということです。

私たちが、大同からきたことを知って、その男は、「あのあと、水位は少しあがった」といって、ジェスチャーで、25センチほどを、示しました。昨年、国慶節前、大同の冊田ダムの、水門が開かれ、5000万tの水が、官庁ダムに流されたときのことです。「でも、1週間ほどで、もとの水位にもどった」。

北京と、その周辺でも、ことしは雨が多いのです。滞在中の日本人からも、その話を聞きました。車の水没する事故が、あったほどです。にもかかわらず、官庁ダムの水は、増えていないですね。水危機は、慢性化しているといっていいいでしょう。

ところで、今回の帰国直前、中国の友人から、「南水北調」の東ルート（江蘇省の揚州～天津）が、大きな曲がり角に立たされている、と聞かされました。水の汚染が、ひどいそうです。以前から、識者のあいだで、「汚水北調になる」という指摘があったのですが、ルートにあたるどころの水が、超5類が57%、5類が12%弱、残りは4類というふうにひどく汚染されているようです。超5類というのは、COD(生物化学的酸素要求量)でいえば、40mg/L以上ということですから。こんな水を北に運べば、海河水系の水と土壌の汚染が、よりひどくなるというんです。

「そんな水はいらないと、北部の一部の市がいつている」という報道を、目にしたことがありますが、それが、天津市のようなんです。でも、確認はとれていません。それが事実だとしたら、計画の、根本にかかわることですよね。事情をごぞんじの方は、お知らせください。

## NO. 275 河北省・野三坡の自然林 2004. 09. 27

前号で、「COD(生物化学的酸素要求量)」なんて2回も、書いてしまいましたけど、「COD(化学的酸素要求量)」のまちがいです。すみません。

ことしの夏・秋の、収穫の1つは、河北省で、自然林をみたことです。きっかけは、7月の、魔の長旅です。そのもようを、克明にレポートしたところ、「冗長すぎる」といって、読者から、お叱りを受けました。すみません。

そのとき、まっ暗になった山のなかで、車のヘッドライトに浮かび上がった「野三坡」の、観光用の看板をみたんです。同行していた王萍が、「とてもいいところです」と話しました。しばらくまえ、家族で行ったそう。運転免許をとったばかりの王萍は、自分で運転できる、車の少ないところが、ほしかったよう。

河北省の地図で、野三坡をさがしたら、涿水県に属し、観光名所のマークつきです。そこに、「原始森林」の表示があるんですよ。そんなところに、原始林なんてありっこないけど、人工林ではない自然林、と考えたらいいでしょう。9月1日から、摂南大学のツアーが、涿源—靈丘のルートできますので、出迎えかたがた、そこを探してみました。

途中が、いいんですね。遠目ですが、万里の長城がみえます。レンガ張りで、保存の状態も、かなりよさそう。内城です。烏龍溝城というのが、その名。私は、外城が本来の長城で、内城は、そのあとにできたオマケ、のように思っていたんですけど、そうじゃなくて、内城が先にでき、農耕民族の膨張に従って、そのあとに、外城ができたのかもしれない。大同市広靈県にある長城は、内城に属しますが、戦国時代の趙のもので、この時代のものとしては、現存する唯一のものだそう。

草花が、また、すごいんですよ。いちばんめだったのは、野生のアスター。花は一重ですけど、その群生は、ほんとにみごとです。トリカブトなんて、つれあいには育ててほしくないけど、(こういうジョーダンも、若い人には通じないでしょうね)。私の、大好きな花です。同属で、花がクリーム色の、レイジンソウもあります。それから、ツリガネニンジン(沙参)、マツムソウも多い。1株にたくさん花がついて、花束のようにになっているものもあります。

野三坡の入り口で、たまたま、地元のガイドさんを、みつけました。いや、こちらがみつけられて、半日10円で、売り込まれたんです。そうでなかったら、野三坡といっても、広大ですから、ストレートには、目的地に、たどりつけなかった。

そこは、白草畔といいます。時間がなくて、そのときは、入り口付近しかみませんでしたが、そうとうの森林があるのは、たしかです。ナラ、カバノキなどを主体とする、落葉広葉樹の、林です。案内板には、樹種がとても豊富だとあります。林の周縁には、これまた、たくさんの花が、咲いているんですね。

北京への、帰りのルートを変更し、靈丘自然植物園の、李向東、周金を誘って、もう1度、ここにくることにしました。彼らの視野を広げるのが、第1の目的。可能なら、種子や、株を

採種するのもいい。

途中の経過を省きますが、ここで2泊して、9月11日のまる1日を、白草畔にあてました。宿泊施設もあり、シーズンには、北京からの観光客もあるよう。門票（入場券）は、1人30元。馬や輿の売り込みも、かなりしつこいものでした。

私が心配したのは、スコップです。種子を採取できるものはいいんですけど、時期をはずれて、それのできない貴重なものは、株を掘りとりとうと、考えていました。ド・ロ・ボ・ウ・です。車のなかに、スコップを2種類、用意したんですよ。1つは、折り畳み式で、こっそり、持ち込むことができます。もう1つは、小型の園芸用スコップ。

中国側スタッフは、園芸用スコップを、持ち込もうとします。小型といっても、隠すことなんて、できないんですね。周金が、背中に背負いました。あまりに見え見えで、私は心配したんです。あいだを飛ばして、結果を書きますけど、これが、いい結果をもたらしました。李向東も、周金も、靈丘の地元にあるものは、種子も、株も、とろうとしません。私が催促しても、「それはあります」と答えるのです。けっきょく、スコップを使ったのは、数回でした。それを遠目、近目で観察していた、地元の管理人たちが、すっかり感心した、というんですね。今回、考察にきた人たちは、ほんとうに熱心で、どこにいても、土を掘り返して、いろいろ調べていた、とって。

種子についても、同じように、みられたでしょう。シラカンバ以外のカバノキがあり、その種子もほしかったけど、どうしても、みつからなかった。みたことのないトネリコ（白蠟）のなかまがあって、ほしかったんだけど、種子はまだ未熟。ナラの種は、たくさん落ちていました。落ち葉のかげで、根をだしているものもあります。みんなで拾っては、周金の背負っているザックに投げ込みました。

靈丘に自生するナラは、リョウトウナラ（遼東櫟 *Quercus liaotungensis* Koidz.）です。あそこの自然林や、靈丘自然植物園にたくさんありますけど、これの樹高は、5~10m。もう1種類、モンゴリナラ（蒙櫟 *Quercus mongolica* Fisch.）が大同にもあるはずで、こちらは樹高30mにもなる。でも、私には見分けがつかえません。図鑑でも、葉の感じは、よく似ています。

大阪市立大学植物園の岡田博園長が、簡単な見分け方として、葉脈が、5~7対のものは、リョウトウナラ、7~11対のものは、モンゴリナラ、と教えてくださったんですけど、いくら探しても、靈丘では、最多のものが7対で、これだと、すべてリョウトウナラなのか、モンゴリナラも、混じっているのか、そのところが、よくわからない。

ところが、表示板に、「蒙櫟」とあったんです。葉脈の数を、あらためて数えると、8対以上のものが、たくさんあって、なるほど、モンゴリナラです。最初から期待したわけではないの

に、たくさんの種を、集めることができました。さらに、そこからそう遠くないところで、カシワ(柞櫟 *Quercus dentata* Thunb.)の種も集まりました。

野三坡は、北京と同緯度で、霊丘自然植物園より、ほんのすこし北にあります。太行山脈と、燕山山脈の境界を表す大きな石碑が、建っていました。地質的にも、おもしろいところのようです。標高は、低いところが900mで、中心になっているのは、霊丘植物園とほぼ同じ高さ。

それでも緑は、ここのほうが、ずっと濃いです。ちがうのは、降水量でしょうね。野三坡は太行山脈のなかでは、東側に属しますが、霊丘は、山脈の西側です。山脈の東と西とでは、降水量がまるでちがいます。ここは、雪も50~60cmは、積もるようですが、霊丘では、ほとんど降りません。そういう大きなちがいはありながらも、モデルにすべき、いい場所が見つかったものです。

#### NO. 276 意図せざるビオトープ 2004. 10. 01

協力拠点の環境林センターで、2003年4月から、污水浄化をはじめました。土壌浄化法による簡単な設備で、建設費用は安価でしたが、処理水の品質、能力とも、びっくりするほどいいんです。1年の運転結果をふまえて、2004年春、若干の改善を加えたところ、処理水の水質は、いっそう向上しました。COD(化学的酸素要求量)は、85%が除去されています。

視察・見学にくる人への、デモンストレーションをねらって、小さな池をつくり、処理水で、金魚を飼うことを、緑色地球ネットワーク大同事務所の、武春珍所長にすすめました。半信半疑だった彼女を、このプロジェクトに乗せるためです。私としては、1~2平方mもあつたら、よかったですよ。ところが、彼女は、そういうことが性にあってるじゃないですか。自分でデザインして、かなり大きな、ひょうたんのような、池をつくったんです。変わった形で、面積を割り出しにくいんですけど、30平方mくらいは、あるんじゃないでしょうか。困ったのは、污水处理施設の、本体工事を急いでいるのに、職人さんが、そちらにかかりっきりになったことです。

池のまんなか、自然石をくんだオブジェがおかれ、噴水も、設置されました。タイマーで、コントロールします。池の周りに、コンクリートのイスもつくったんですけど、噴水の水が、そこにもかかるのが、おもしろい。処理水は、自然流下で、この池にはいつてくるんですけど、オーバーフローがないために、ちゃんと循環しなかった。技術者たちは、そういうことはわかっているはずですけど、上からいわれると、とりあえず、そのリクエストに応じるんです。

金魚が、最初は50匹余り、放されたんですよ。ところが、小さなものを買ってきたので、この広さの池では、目につかない。さらに追加され、合計150匹ほどになりました。

ところで、ここは、冬は零下 30℃近くになります。池全体が凍るのはいいとしても、その圧力で、レンガの筐体は破裂します。冬のあいだは、水を抜いておかないといけない。じゃあ、金魚は、どうなるんですか？

「冬になるまでに、食べる！」というんですよ。「えーっ？ 金魚を？」と、私が驚くと、「あれは、金魚じゃない。コイ（鯉）だ。秋までに、食べられる大きさになることを、買うときに、たしかめた」と答えるんですよ。

「コイにはヒゲがあるはずだ。しかし、この魚には、ヒゲがない。したがって、これはコイではなくて、金魚だ」というと、しぶしぶながらも、認めざるをえない。おかげで、あの魚たちは、人の胃袋に入ることなく、センターの温室の貯水槽で、冬を越すことができたんです。

2004 年の春になって、金魚たちは、あの池に戻されました。大部分が越冬できたのは、うれしいことです。夏にみると、去年より、ずいぶん大きくなったんですよ。群れで泳いでいると、その水が、赤くみえるくらい。

その金魚が、たくさんの子を産みました。小さいうちは、色が黒くて、めだたなかったんですけど、ある大きさになると、白くなり、やがて、赤くなってきました。かなりの数ですね。去年と同じように、温室の貯水槽に、収容することができるのでしょうか？ 親たちも、この 1 年で、多少、数は減ったでしょうけど、姿は、ずっと大きくなっていますし。

去年春、この池ができて、周囲に集まる、動物が、増えました。いちばん目立つのは、ホモ・サピエンス。昼休みや、夕方なんかに、池のそばに座って、憩っています。乾燥地の人でも…、いや、だからこそ、水が恋しいらしいのです。

そのつぎに、おどろくほど増えたのが、水辺の小鳥の、セキレイです。漢字で書けば、中国でもいっしょで、「鶺鴒」(jiling)。属はいっしょでも、日本のものと、種はちがうよう。いつも、かなりの数が、池の近くに集まっています。大同事務所の魏生学副所長も、すぐ気づいたようです。

それ以上にびっくりしたのが、池の水面を、アメンボウが、泳いでいること。ミズカマキリも、みつけられました。セキレイがくるのは、まだわかりやすいんです。飛行距離のある、鳥ですからね。でも、その他の昆虫は、どこからきたんでしょう？ 近くに、水場を思いつけないんですけど。

この通信を書きながら、思い出したことがあります。去年の 8 月、ヒメガマ、オモダカなど数種類の水草を、冊田ダムなどから、集めてきました。くっついてきた土のなかに、卵があったのかもしれない。たしかなことは、わかりませんが。

意図したわけではないのに、ビオトープのようなものが、できあがったわけです。

## NO. 277 北岳恒山のうらない 2004. 10. 13

連休の予定が、台風 22 号でくるってしまいました。まったくプライベートに、千葉県の養老溪谷に行くはずだったんですけど、目的地では、避難勧告まででたようです。途中の新幹線もズタズタ。

自宅ですごすことになったんですけど、その間に、使いつづけている PDA が、トラブルを起こしました。一昔前の表現では、「電子手帳」。簡単なトラブルにみえて、どうにも解決できません。12 日に、事務所にでて、ハードリセットをかけ、パソコンのバックアップを移したのですが、生き返りません。なんどやっても、ダメ。

とにかく、なんでも、このなかに入れているんですね。予定も、しなければいけないしごとも、アドレスも、各種のデータも。急速に自覚しはじめた、記憶力の衰えを、これで、なんとか、カバーしているわけです。脳の半分が、ここにあるとっていいくらい。それが壊れたら、たちまち立ち往生です。

しかたがないので、12 日、帰宅の途中で、ショップに立ち寄り、替わりを、さがしました。2 年くらい前までは、選択に困るくらい、たくさんのメーカーの、数多くの機種があったのに、いつのまにか、どのメーカーも撤退して、いまあるのは、SONY だけ。そう、PALM です。その SONY も、シンプルなタイプはなくなって、機能テンコモリのものばかり。お値段も高くなれば、操作も複雑です。あのシンプルさ、軽さが、PALM の魅力だったのに。あ〜あ。でも、ほかになければ、しかたがない。

帰宅してから、貯め込んだデータを、パソコンのバックアップから、移そうとしたら、なんとまたトラブル。悪戦苦闘の末にわかったのは、ノートパソコンの、USB 端子の不調。こういう故障って、つぎつぎ伝染すると、思いませんか？なんとか、それらを乗り切って、朝から、この通信を書いています。

話題が、変わります。私たちが、最初に協力を開始した、大同市渾源県に、北岳恒山があります。海拔 2,016m。中国五岳の 1 つで、道教の聖山です。五岳というのは、東岳泰山（山東省）、南岳衡山（湖南省）、西岳華山（陝西省）、北岳恒山（山西省）、中岳嵩山（河南省）。五行思想にもとづき、戦国時代に生まれたそうなんですけど、北岳が、現在の恒山になったのは、後の世のことだそう。

恒山には、内外から、年間数十万人が参拝します。旧暦4月8日が、最大の廟会のように、ある年、私たちがこの山に登ったら、その翌日。まさに、「祭りのあと」で、全山が、ゴミの山になっていました！

民間では、ここもうらないが、人気のようです。恒山の中腹。傾斜40度といわれる、急な石段、103段の奥に、北岳大帝をまつる、北岳大廟があります。息を切らせて、登りきると、まん前に陣取る、道士ふうの男が、私を手招きしました。ヒゲを長く伸ばしていますが、顔はやさしそう。この9月のことです。

生年月日を尋ねますので、答えました。すると、「1991年から92年にかけては、よかった。大きな変化があった」と、話しはじめました。この協力事業を計画し、実行に移した年です。そこから、苦労がはじまったので、「よかった」と、一言ではいえませんが、大きな変化があったのは、事実。

黄色い薄い紙をもちだして、そのように書きました。そして、つぎに「02年-03年 よくない」と書き、大きな声で、そういいました。02年は、以前のカウンターパートとのあいだで、ゴタゴタつづき。03年は、イラク戦争と新型肺炎・SARSで、まさしく、危機に陥りました。「もう1年つづいたら、私たちはつぶれるよ」なんていってたくらいです。思わず、「対、対」（そうです）と答えていました。ふしぎといえば、ふしぎですね。顔かどこかに、なにかの痕跡が刻み込まれるんですかね？

さらに、「04年はよくて、05年はさらによくなる」と、書いてくれました。そうあって、ほしいものです。つぎに、折り畳んだ、8枚のカードを取り出し、私に1枚を引かせました。開くと、赤い字でなにかが書いてあります。「上上」だと、解説してくれました。

「赤がいいんだよ」といいながら、8枚全部を、開いてみせてくれたんですけど、なるほど、黒が5枚に、赤が3枚。人生には、苦しいこと、哀しいことのほうが、おおいんですかね？そのなかの赤を、私はひきあてた。黄色い紙を、もう1枚とりだして、短い解説の文句を、書いてくれたんですけど、なんでも、1年以内にならず、いい知らせがあり、これからは、運が開けるんだそう。

写真のはいった、りっぱな名刺をくれました。北岳恒山周易研究会会長、山西省周易研究会理事、五台山易学特級相学大師、とあります。

いっしょに、10人ほどで登ったんですけど、そのなかから、私を選んで、手招きしたのは、いちばん、乗せやすい、と思われたんでしょうね。観相の先生なら、それくらいのことは、すぐにわかるはず。

## NO. 278 日本軍の置きみやげ？ 2004. 10. 18

この協力事業をスタートさせる直前の、1992年1月、北京の中華全国青年連合会を訪ねました。緑化協力の相手に、大同市の渾源県をすすめてくれたのは、共青团中央の、当時の青年農民部長でした。きまじめそうな人です。渾源県で、何年間か、しごとをしていたのだそう。

「いいところです。緑化にとっても熱心です」と、紹介されました。それから、「歴史的に、美人の産地として有名で、いい酒もあります」というじゃないですか。そのしばらく前に、日本で流行していた歌のとおりですね。「天国よいとこ、いちどはおいで。酒はうまいし、ねーちゃんはきれいだ……」。

大同の歴史の本には、歴代皇帝の皇后がたくさん出ている、とありますし、美人産出の、原因の分析まであるんですよ。第1に、たくさんの民族が交流する場所で、早くから混血がすすんだ、ということ。第2に、この地方は、北の異民族に備える軍事の要衝で、そこを守る将士をねぎらうために、たびたび、宮女がさげわたされた、というのです。大同のなかでも、渾源県、応県に美人が集中するのはそのためだ、とも書かれていました。

渾源に美人が多いというのは、大同でも、通説になっているようです。「とくに歯がきれいなのです」と、大同市内出身の留学生が、私に解説してくれました。その人も、女性ですけど。

共青团の部長は、そのとき、男についても、話しました。「渾源の人間は魔法瓶のようだ、といわれています。外観は冷たいけど、なかは温かい、と」。それを思い出して、大同の知り合いに話すと、「美人の産地」には、異議をはさまないのに、こちらについては、「それはウソだ」と、力をこめます。

「渾源の人間は、性格が荒い」と、彼らはいうんですよ。すると、「靈丘のほうがもっとすごい」という声もある。大同市の南部にある2つの県です。靈丘自然植物園の、李向東や、周金なんかとつきあっていて、そんなふうには、感じないんですけどね。

逆に、ほんとうに人がいいのは、いちばん北にあり、内モンゴルと接する

新栄区だといいます。そういわれてみると、大同事務所の副所長、魏生学は、新栄区の人間です。私が、「小魏は、100%の好人だ」というと、武春珍が、「そうじゃない。老魏は、120%の好人だ」というくらいですからね。人のよさでは、誰からも認められている。そのぶん、多少、反応が遅いんですけどね。人からなにかいわれて、すぐ反論するようだと、いい人だとは、いわれないものです。

若い幹部は、現実には、南の県には、赴任したがりません。とくに靈丘には。大同の街

から遠い、ということも、もちろんあります。自分の家は街中においたまま、単身赴任ですから、週末に自宅に帰るときも、遠いと不便です。

それから、顧問が多すぎる、というんですよ。若い幹部が、新しいことをやろうとしても、よってたかって、つぶしてしまう。靈丘や渾源は、抗日戦争のころからの、老区です。中国共産党の、拠点だったわけですね。ここでは、日本軍とのあいだで日常的に、戦闘がありましたから、前線そのものでもありました。

靈丘県の平型関は、その典型です。中国共産党の、林彪の軍団が、日本の板垣師団の1部隊を、ここで殲滅しました。1937年9月25日のことです。くわしい話は、べつの機会にゆずりますけど、これが、盧溝橋事件によって、日中戦争が全面化してしまい、中国側がえた、最初の勝利なんです。日本では、知る人は、多くないですけど、中国にとっては、たいへんなことでした。ずいぶんと、宣伝されたようですし、共産党と、国民党との、力関係にも、大きな影響を、与えました。

平型関に、記念館がつくられています。1993年にはじめて訪れたときは、林彪失脚のあおりで、廃墟になっていました。戦勝50周年を記念して、1995年から再開されています。そのなかに、この戦闘に参加し、中華人民共和国の成立後、中央政府などの、幹部に就任した人たちの写真と経歴が、展示されています。たいへんな数なんですね。

そういう試練をくぐると、そのあとも、機会が増えますから、人材が、育ったんでしょうね。と同時に、そのときの関係をつうじて、上は下をひきあげ、下は上を押し上げる人脈の構造も、否定できないでしょう。そのネットワークの末端が、地元の靈丘に残っているのは、自然なことでしょう。

靈丘のすぐとなりの、河北省涿源県で、この夏、1泊しました。ここも、太行山のなかにあがり、老区として、有名なところ。深夜の1時ごろから、外で、大騒動が、はじめたんですね。寝入りばなを、私は起こされました。3階の部屋に、泊まっていたんですけど、震源はその窓の真下。激しいケンカです。動きが、敏捷なんですね。パトカーで、公安もきたんですけど、そうそうに引きあげた。

翌朝、外に出てみると、車が2台、つぶされていました。事情に通じた地元の人が、「部隊の連中が、40人ほど、加わった」と話してくれました。「えーっ？ 解放軍がケンカをするの？」と、私がいうと、「彼らのケンカは激しいんだ！」というのです。「労働者農民の子弟兵」といったイメージが、私には残っていて、それが表情にでたのでしょう。「大きな都市には、精鋭が集められるけど、こういうところにいるのは、雑兵ばかりだ」とその男は解説してくれました。

そして、彼がつづけたのは、「老区の人間は、性格が荒くて、すぐケンカをする」。う〜ん。

たしかに、40人の戦闘のプロを、敵にするにしろ、味方にするにしろ、やっちゅうわけですからね。そういう気風と、ここが老区であったこととは、無縁ではないでしょう。日本軍の置きみやげ、なのかもしれません。

とはいっても、誰も、そこまでの責任はとれないでしょう。問う人も、いないでしょう。でも、関係がないとはいえない。人間の歴史における、揺れ動きの波は、通常感覚より、周期がずっと長いものです。それは、そのまま、現代の世界にも、通じることでしょくど。

## NO. 279 2つの国での災害体験 2004. 11. 01

この通信、べつのもろ稿を、先々週中に書いてたんですけど、その後、台風や、地震の被害が、発生し、イラクの拉致事件まで、あったものですから、發送するのを、つい、ためらってしまったんですね。で、別のテーマで、書き直したものを……。

1995年の阪神大震災で、自宅も半壊になりました。震度7の東北のはずれで、地域では犠牲者もでましたし、たくさんの方が、倒壊しました。直後から、私も、救援活動に、走り回りました。

中国の大同というところが、これまた災害が多いんですよ。たとえば、大同県と陽高県、広靈県、渾源県の境界で、89年、91年、99年と、10年で3回の地震がありました。そのほか、この15年ほどのあいだに、厳しい旱魃が、93年、97年、99年、2001年の計4回、水害が95年と2004年の2回、イナゴ、バッタの害が、98年、2002年というふうに発生し、数えてみると、これだけで、11回になります。陽高県の、西団堡村なんか、震源の真上にあるということで、40kmほど離れた、別のところに、村ごと引っ越したんです。

以前に、何回も、書きましたけど、貧しい一帯の農村のなかでも、県境の村は、とくに貧しいんです。山や丘陵などで、自然の条件に恵まれず、人口の薄いところが、行政の境界になるわけですから、当然でしょうね。そこに、地震まで、集中するんですね。まるで、災害が、貧乏な村を、狙い撃ちしているようにみえます。

前2回の地震を、私は直接、知らないんですけど、99年のときは、発生を知って、すぐさま、現場に駆けつけました。12月の寒い時期で、最低気温は、零下30度近くになります。とくに気の毒だったのは、この年が、「建国いらい最悪」といわれた大旱魃の年だったことです。

1年の旱魃なら、まだ、いいですよ。たいていの農家は、旱魃その他の災害に備えて、最低1年分の、食糧の備蓄に、つとめています。ところが、97年が、大同全域で、旱魃だったんです。98年は、市全体では、悪い年でなかったのに、この付近では、雨が少ないうえ、バッタの

害が発生しました。つまり、自然災害が、3年つづいていたんです。食糧も、尽きていたんですよ。

ジャガイモから、デンプンを搾ったカスが、農家の軒下に、干してありました。それを、おかゆに混ぜて食べていました。という話をし、写真を見てもらうんですけど、それは、そのときのことです。貧しい農村のなかでも、もっとも貧しく、困難ななかでも、もっとも困難な時期に、そのときの地震は、起こったんですね。

1998年1月の、河北省張家口市の地震は、北京が揺れたこともあって、国外にも報道されました。たまたま私は、震源から70kmほどのところにおり、翌朝、被災地にかけつけて、救援活動のようすなどを、みました。帰国したあと、阪神大震災の被災地を中心に、たくさんの人の協力をえて、被災地の村の、小学校を再建しました。

被災地の中心は、張北県で、万里の長城の外です。河北省に、135ある県（県クラスの市を含む）のなかで、ビリから7番目の、貧しい県でした。となりの尚義県も被害を受けましたが、こちらは、ビリから2番目。震源は、その2つの県の県境ですから、ここも、貧しい地域のなかでも、貧しいところですよ。

1995年9月には、大同で大規模な水害がありましたが、このときも、発生直後の農村を回り、救援活動にも、とりくみました。そういう体験をつうじて、感じることは少なくないのですが、とくに印象的なのは、2つです。

第1に、救援活動が素早いこと。かならずといっていいほど、市のトップの幹部が現場にいき、陣頭指揮を、とっています。決定権限のある人間が、現場にいき、その場で、決めていくことが、救援活動を、迅速にしていると思います。

内容は、けっして、十分とはいえないですよ。端的に言えば、餓死はさせない、凍死はさせない、という2か条です。たとえば、張家口の地震のときは、年間でいちばん寒い1月で、零下30度に、気温が下がります。被災の翌日、私がいったときは、寒さが一服中で、それほどでもなかったんですけど、直後からの寒波で、救援のトラックの燃料が凍り、立ち往生したくらい。

私がみたのは、こんな光景です。地震発生後、半日足らずで、部隊がでて、生き埋めになった人たちを、夜通しで、掘り出していました。犠牲になった人が、毛布にくるまれて、道ばたに、寝かせてありました。軍用トラックで、最優先に運び込んでいたのは、テントと食料です。被災地が農村で、道路が狭いため、それ以外の車両は、現場に、近づけません。軍用トラックも、一方通行で、循環させていました。医薬品の搬入と、重傷者の搬出は、ヘリコプター。あざやかなものです。災害が多いから、慣れてもいるんですね。

もう1つ、大きくちがうのは、被災者が、ジッとしていないことです。大同の農村でも、強く感じたことです。被災の直後から、ありあわせの材料で、一家が暮らすための、避難小屋を建てはじめます。倒壊した住居からはずしたレンガ、窓ガラス、毛布、いろんなものが、使われています。屋根が低く、立って入るのがやっとなのですが、それでも、オンドルが据えられ、寒さを防ぎます。余震が激しいときは、政府支給の、テントにもどるけど、テントでは寒くて、冬を越せない、というのです。

西団堡村では、学校も、すぐさま再開されていました。私がいったのは、週末だったんですけど、被災で遅れた分を、取り戻しているというのです。大きめのテントを、2つ、連結して、教室です。風のために、裾が、バタバタあおられ、雪が、吹き込みます。日中でも、外は、零下20度ですけど、ストーブは、ありません。子どもたちは、着込めるだけ、着込んでますけど、それでも、凍える。机の下で、足をガタガタ、踏みしめます。そんななかでも、笑い声が、あがるんですよ。

災害にたいして、頑健なんです。とくに、精神的に強い。誤解をおそれずにいえば、ふだん、低いところで、生きてると、多少、転げ落ちて、痛みを感じないのかもしれない。

おなじことを、いまの日本で求めても、それはムリでしょう。でも、被災者も、それぞれに可能な自助努力に、できるだけ早く、とりくむべきだし、そういう保障が、必要でしょう。そのほうが、立ち直りも、ずっと早いのです。

## NO. 280 環境林センター裏話（1） 2004. 11. 09

苗畑をつくることは、緑化協力のスタート時から、考えにありました。苗半作、のことばどおり、カンジカナメのことだと、思ったからです。でも、それほど容易なことじゃない。場所を、固定するわけですし、簡単には、やりなおしが、ききません。長期的な経営を考えると、なによりも、人材が必要です。

1994年から、大同市青年連合会副主席の祁学峰が、この協力事業を、担当することになりました。彼を信頼した私は、すぐさまこの事業専門の組織をつくるよう、彼に頼みました。一日中、そのことばかりを、考えている人間が、中国側にも、最低1人はいないと、成功は、おぼつかないと考えたからです。

「緑色地球ネットワーク大同事務所」が、それによって成立しました。「緑色地球ネットワーク」は、日本語に訳すると、「緑の地球ネットワーク」です。中国側で決めたものです。名称のために、日本側の現地事務所と誤解されることもあるんですけど、そうではなく、中国側の組織です。

事務所が成立したあと、初代の所長になった祁学峰が、提案してきました。あちこちの県に、バラバラにプロジェクトがあるだけでは、どうにも管理ができない。なにか中心をつくって、そこが全体を統合し、牽引していくべきだ、というのです。

同じ時期に、緑の地球ネットワークの活動に参加された立花吉茂代表も、ほぼ同じような構想を、示されたのです。国外で、そのような事業をすすめるためには、パイロットファームのようなものが、絶対に、必要だと。日中の双方からでた構想は、1つのこととして、実現できます。中国側のプランに、立花さんの構想を加えて、ひと回り大きくして、投げ返しました。

こう書きながら、気づいたんですけど、大同で実施している事業は、たいてい、こんなふうには、すすみます。私なんか、シロウトですから、なにをしいか、わからない。だれかが、なにかを、すすめてくれるんですけど、それが、いいか、悪いかわからない。そのときに、まったくべつの人が、同じような構想を、もちこんでくれるんですね。3人、4人と、重なることもある。そういうときには、思い切って、乗ることにしてるんですよ。それも、縁だと思って。こんな内幕を書くと、バカにされそうですけど。

環境林センターの原型は、大同県に、できるはずだったんです。そういう連絡が、祁学峰からきていました。1994年の夏、立花団長をはじめとする最初の専門家の調査団が、大同を訪れたとき、候補地を、みることになったんですけど、それは、南郊区平旺郷平旺村の、現在地でした。どういうわけか、場所が、変わってしまった。交通が便利で、水の条件がよく、土も肥えていました。植林の現場の環境と、あまりにちがすぎるので、こんなところにつくった苗は、現場でショック死しないか、私は心配でした。

当時は名城大学教授だった、前中久行さんから、「それはだいじょうぶでしょう。モデルになるものは、できるだけ条件のいいところにつくっておいて、その条件がないところでは、欠けてるところをどう補うか、考えたらいいんです」と、アドバイスがありました。で、95年春から、その場所で、スタートしました。

なぜ、場所が変わったか、理由がわかったのは、1998年になってからです。1992年、この協力事業をはじめるとき、協議のあいては、山西省青年連合会でした。主席は、共産主義青年団の書記で、支樹平さん。副主席は、同じく副書記の郭良孝さんですが、この人はいま、大同市の市長です。

支樹平さんは、その後、急スピードで出世して、山西省の共産党の組織部長になり、常務委員になりました。この人が、人物なんですね。彼のばあいは、まちがいなく実力です。早くに父親を亡くし、6人の弟妹の父親がわりをしながら、小学校、中学校の教員から、その地位に駆け上った。その後、河南省に転出して、省の党委員会の組織部長になり、いまは副書記です。

年齢は、私より、ずっと若いのに、共産党中央委員会の候補委員でもありますから、まだまだ、えらくなるんでしょうね。

その彼が、省の組織部長だったころ、環境林センターの、視察にきました。人事を握る、重要なポストですから、大同市の党書記、市長はじめ、幹部がせいぞろいしました。帰りの車に、いっしょに乗ったとき、彼が話したんですよ。「ここは、自分の故郷の村です」と。で、私が、「ここに決めたのは、あなたですか？」ときいたら、「ええ、私も、出身の村に、ひとつくらいは、いいことをしたかったんです」とのこと。私の問いに答えるかたちで、大同市の幹部たちに、それを聞かせたかったんでしょうね。

それだけじゃ、ないんです。環境林センターの初代の経理（所長）は、邢雁俐さんですが、彼女は、支樹平さんのつれあいの、妹なんですね。大同の旅行社の副社長から、環境林センターの経理になって、あれを立ち上げて、軌道に乗せ、その後、雲崗賓館の、副経理にもどりました。

支樹平さんは、「故郷の村にいいことをしたかった」といいましたが、いいことになるかどうか、まったくわからない段階ですからね。いずれにしろ、彼の支持があって、はじめて、動きだしたんですけど、つづきはまたの機会に、お話しすることにいたします。

## NO. 281 家庭菜園 2004. 11. 12

最初に、ラジオ出演のお知らせです。明日（11月13日）の午前7時から7時40分まで、FM-COCOLO（76.5MH）の、HITO-CLICK というコーナーで、中国の環境問題について、お話しします。といっても、なにを話したか、もう憶えてないんですけど。インタビュアーは、孔怡（Kong Yi）さんです。彼女の美声と、私の悪声の対比が……。

自宅の前庭が、ネズミのひたいほどの、家庭菜園です。20平米ほどでしょうか。いま植わっているのは、ダイコン、ハクサイ、キャベツ3種、ブロッコリ、コウサイタイ（紅葉苔）、アスパラガス。

前を通りかかる人たちが、しっかり覗き込んでいくんですね。「ほらっ、こんなふうにして、野菜はできるんだよ！」と小学生低学年の娘に、解説する母親。「キャベツもあるねえ」なんて、孫に話している、おじいさん。なかには、「みせてください」といって、はいてくる人までいるんです。見知らぬ人。こんなことって、はじめてですね。記録的な数の、台風に襲われ、野菜が品簿で、ものすごい高値。みんなが、野菜に、関心をもつようです。

11月にはいって、ダイコン、ブロッコリ、キャベツ、ハクサイの順で、食べられるように、

なりました。アスパラガスはもう終わりで、地上部を刈り取り。中国野菜の、紅葉苔は、野菜がもっとも不足する1~2月に、栄養たっぷりの、苔(とう)を、食べられます。例年なら、どの野菜も、もっと育ちが遅いのですが、ことしは、8月20日から9月中旬まで、中国でしたので、出発前に、早めに、種を蒔き、苗を植えました。それが正解で、野菜のバカ高い、いまごろ収穫できます。

育つのを、待っているのは、ヒトだけではありません。巻きはじめたキャベツに、つぎつぎに割れ目がはいるので、ふしぎに思っていたら、なんと鳥が、つつくようです。おそらくカラス。真冬に、ブロッコリの葉なんかを、ヒヨドリが、穴だらけにすることはありますけど、こんなことは、はじめて。

収穫したキャベツを、かかえながら、「へんな虫がいる」といって、つれあいが、呼びます。見慣れない虫が、葉のなかにはいりこんでいます。ひっぱりだしてみると、なんと、これがミミズ。それも4匹も。ここの土、ミミズは多いんですけど、キャベツにはいりこんでいるのは、はじめて。どうなってるんでしょうね？

私は、鳥取県の、農家の、生まれ育ちで、畑仕事その他を、手伝うことはあったんですけど、小さいころから、農村からの脱出が、夢でしたからね。高校から、大学にかけて、土なんて、さわりたくもなかった。ケッコンして、長男が生まれるころ、それまで眠っていた、DNAが目覚めたんでしょうか？最初は、タタミ1枚ほどの、空いたところで、葉菜を、つくりだしたんです。もう、30年も前。

やってみると、おもしろいんですね。育てようと思ったら、土をつくるしかないですからね。山に入って、腐葉土をバケツで運び出し、なんども、なんども、入れました。そして、種を蒔く。芽の出るのが、うれしいんですね。あるていどまで育ち、実のなるところまでいく。興味が持続するのは、そこまでです。収穫して、食べるころになると、おもしろくない。早く片付けて、つぎになにを蒔き、どう育てるかを考えます。

私なんて、夜店ですくってきた、数匹の、金魚のために、ハウツー本を、何冊も買って、飼育方法を、「研究」するような人間ですからね。ネズミのひたいの、野菜づくりに、たくさんの本を買って、読みました。いろいろ観察して、自分でも、くふうします。けっこう、じょうずになったんですよ。トマトなんて、11段もなって、11月まで、とれました。早く片付けたいと、私は思うんですけど、つれあいは、もったいない、という。たしかに、この時期になると、トマトも高い。

以前は、栽培する種類も、多かったです。種苗会社の、カタログを、取り寄せて、めずらしいものに、挑戦しました。付近の農家の方が、のぞきこんで、「農事試験所みたいですね」と、いうくらい。いまのように、ありきたりのものばかりになったのは、調理する人が、背をむけ

たから。それと、ひろく定着しているものは、やっぱり、おいしいんですね。一時期、中国野菜が、ずいぶん商品化されましたけど、残ったのは、チンゲンサイくらいですね。

よけいなことですが、中国で、あれはヨウツアイ（油菜）といいます。数年前から、大同でも、「日本油菜」というのが、出回りました。どうみても、中国産の、チンゲンサイ。ただ、小さめ。そのまえから、「リーベン・ドウフ」（日本豆腐）が、ありました。日本でみたことのない、シロモノですけど、これも小さい。で、私は、「小さければ、なんでも、日本か！」といって、からむんですけどね。

話を、もどします。いまの活動が、忙しくなってから、私の菜園も、さっぱりです。だいたい、3月中ごろから4月いっぱい、7月10日ごろからお盆前まで、9月初めから20日ごろまで、そして12月、というふうに、毎年、中国に行きますでしょ。種を蒔く時期、苗を植え付ける時期、野菜づくりにとって、いちばん大事な時期を、ルスにしちゃいます。これじゃあ、どうしようもない。（この話題、つづく）

## NO. 282 家庭菜園（続） 2004. 11. 15

家庭菜園をやってる人って、多いんですねえ！前の号を送ったあと、意外と思える人からも、メールや電話がありました。たいていは、私と同世代か、すこし上の人ですけど。農村育ち、都会育ち、どちらもいますが、高度成長とともに育ってきた世代で、それ以前の記憶が、残っている人のよう。

家庭菜園で栽培する、野菜は、新鮮さを求められるものが、いちばんでしょう。イチオシは、アスパラガス。朝、収穫して、すぐに食べる。自然の甘味が、なんともいえません。困るのは、これを食べると、買ってきたアスパラガスは、まずくて、食べられなくなること。庭のすみにも、植えておくと、少なくとも、10年以上、収穫することができます。

雌雄異株で、オスのほうが、太さも太いし、でてくる数も多いんです。ヒヨコの選別とは逆に、プロの生産者は、メスを捨てて、オスだけ、残すそう。私なんか、そんな技術はありませんので、育てた苗をそのまま。そしたら、自宅の前の、小公園はじめ、あちこちに、生えてきているよう。小鳥が、タネをはこぶんですね。

新鮮さを、第1に考えると、キャベツやハクサイより、ハウレンソウ、シュンギクなどの軟弱野菜を、中心にすべきでしょう。なかでも、おもしろいのは、ハウレンボク。そんなもの、きいたことがないでしょ？ハウレンソウが育ちすぎて、薑（とう）が立ち、木のようなもの。中空ですけど。これが、おいしいんですね。そうなくても、炒めると、かたくないし、泥臭さがなくなって、ほんとに美味。ハウレンソウを、ふつうに収穫したあと、すこしだけ、

残しておけばいいのです。戦犯として、中国に残され、辛酸をなめつくして帰国した、板倉筆一さんに、教わりました。

でも、前号で書いたように、うちの菜園は、ハクサイ、キャベツ、ダイコンなど、ありきたりのものばかり。つれあいも帰宅が遅いので、秋から冬は、暗くなって、軟弱野菜は、収穫できないんですね。整理するのに、時間もかかるし。だから、しかたなく……。

収穫期間が長いことも、選択の基準でしょう。いつときに、ドツととれるものより、ダラダラと、長く収穫できるものが、家庭菜園むき。ブロッコリが、定番になったのは、てっぺんのつぼみの、収穫が終わったあと、わきのつぼみが、つぎつぎとれるからです。やわらかくて、こちらのほうが、おいしいと思う人も、少なくないでしょう。商品として、買うことはできません。5~6本も植えておけば、10月末から、翌年3月まで、ずっと収穫できます。

収穫期間を長くし、収穫量をふやすために、いくらかの、くふうもあります。種をまく時期をずらす、といったことも、一時期は、したのですが、もともとネズミのひたいのところで、めんどくさすぎる。いま、やっているのは、生育環境によるコントロール。いや、コントロールをはずす、といったほうが正確かな。とにかく、バラバラにするんですよ。肥料だって、均一にはまかない。栽培の間隔も、密植を基本に、バラバラ。ダイコンなんか、平均15cm間隔の、密植で、太くなったものから、抜いていくと、その、となりのものが、急に太るんですね。

とにかく、だいじなのは、生育をそろわせないこと。プロの農家とは、そこが逆。商品めあてなら、いつときに、均一のものを、出荷しないといけないから、そのように、栽培方法を、くふうするんですね。大きすぎるもの、小さいもの、そういうものを間引いて、標準化するんですけど、家庭菜園のばあい、目標がちがいます。差があり、バラバラであることが、収穫期間を長くするためには、大事なことです。

化学肥料は、使いません。5人家族が排出する、台所ゴミを、大型のポリバケツを、さかさにして、フタをつけたような「〇〇コンポスト」なる容器を、庭のすみに2つならべ、それにいれて、発酵・腐敗させます。あいだに、土をいれたりしてたんですけど、最近では、コーランという、発酵促進剤を、コメヌカとまぜて、月に2~3回、パラパラッと、まきます。1~2年後に、取り出すころは、フカフカの土。

発酵牛糞や、鶏糞を、農協で買ってきて、少量、与えます。何年前か、「日本の畑は富栄養化している」という、農業雑誌の、記事を信じて、まったく肥料をやらなかったら、ハクサイやキャベツは、巻かず、ダイコンは、太らなかった。こういうものは、多めの肥料が、必要だろう。

農薬はつかいません、というわけには、残念ながら、いきません。ことしも、9月半ばに、中

国から帰ったら、ハクサイ、キャベツ、ブロッコリ、ダイコン。種を蒔くのが、早かったこともあって、虫だらけ、穴だらけ。正確にいうと、残っているのはスジだけ、という状態。同居の義母が、「どうして、虫が食べるんだろうね？」なんていってるくらいですから、虫には、だれも、手をだそうとしない。

天然除虫菊製剤、というのを買ってきて、散布するんですけど、効果は、あまりない。葉の表面につく、アオムシなんかは、まだいいんですけど、ハクサイに、潜りこんだ、ヨトウムシは、どうにもならない。夜中に懐中電灯で探す！口でいうのは、カンタンですけど、そこまでのことは、とてもできない。虫が食って、虫が食って、中国でみる、透かし彫りのようになって、しかも、虫のウンコだらけ。カッとなって、青酸カリでも、撒いてやりたいくらい！さすがに、そこまでは、しませんけど……。

そういう経験を、たびたびすると、有機無農薬栽培の方たちに、無条件で、脱帽！そのようにつくられたものを、食べる資格がないと、私なんか、思います。

同好のみなさんに、おしらせです。中国産の、キュウリのタネ、希望者にさしあげます。ただし、来年になってから。いま日本で、栽培されている、キュウリは、たいてい中国の「四葉」のDNAを、受け継いでいます。でも、その後の改良の方向は、日本と中国とでちがうよう。ここ数年、私は中国品種をつかっていますが、夏の暑さと、乾燥に、つよいんです。皮が固いのですが、若取りすると、気になりません。甘味は、日本の品種よりつよくて、けっこうおいしい。なる数は、日本のものより、少ないでしょう。収穫したあと、短時間で、外見が悪くなります。ですから、商品栽培には、むきません。家庭菜園には、おもしろい 試してみようかと思う人は、ご連絡ください。

## NO. 283 環境林センター裏話（2） 2004. 11. 24

環境林センターは、その後も、順調な発展を遂げたといえるでしょう。私たちの協力事業の拠点でもあり、顔とも、なりました。

おもしろいのは、つい最近まで、看板がなかったことです。中心となる管理棟は、中国ふうの建物です。ぐるりを、レンガの壁で囲い、その壁は、赤く塗られています。目に見えるところだけ、ですけど、黄色のかわらが、しかれています。門も、それにみあった、中国ふう。

いまでは、その門に、シンチュウ製の文字で、「中日合作環境林中心」の表示がありますけど、あれは3、4年前にできたもの。それまでは、ありませんでした。ツアーがきたり、どこからかお客さんのあるとき、黄色い紙で、文字を切りぬいて、あわてて、張っていました。それが、私は、気に入っていたんです。

えらい人が参加して、盛大な起工式をもったところ、大きく、りっぱな記念碑を建てたところ、そういうところほど、かんじんのプロジェクトは、失敗しました。なんてことを、私は、おおよけの場で、発言し、書いていたんですけど、その逆に、紙を切り抜き、糊で貼って、看板にしているようなプロジェクトが、うまくいっていたんですね。

1999年には、中華全国青年連合会が主催した、「環境保護国際ボランティアキャンプ」が、ここで開催され、イギリス、ドイツ、アメリカ、日本、中国などの青年が、9泊もして、汗を流しました。その翌年も、同じように、数泊しました。青年団の中央から、トップリーダーがやってきて、「国際協力の、貴重な成功例だ。これから、もっと発展させるように」といって、激励があったんですね。大同事務所や、環境林センターのメンバーには、たいへん名誉なこと、だったようです。

樹木の苗は、アンズのように、種を蒔いてから、2~3年で出荷できるもの。ポプラのように、挿し木から、4~5年のもの。トネリコのように、最低でも、7~8年はかかるもの。いろいろなんですね。樹種が増えるにしたがって、必要な、苗畑の面積も、増えていきます。当初の3.5haでは、手狭になったため、1999年から、6haほどに拡張したんです。

もともとここは、南郊区平旺郷平旺村の、果樹園だったところですよ。よけいなことを、差し挟みますけど、平旺郷は、大同市街地と、砒区の膨張にともなって、農業離れ、しているところです。中国では、郷というのは農村。鎮は、日本ふうにいえば町で、人口がまとまり、農業以外の産業もかかえている。この平旺郷は、実態からいえば、りっぱに鎮ですが、郷のまま。そして、平旺村は人口が1万人をゆうに超え、村としては、山西省最大だそう。

絵に描いたような、近郊農村で、つくっているのは、野菜が主体。大きな市場が、すぐそばにあります。ですから、農村としては、余裕があります。私たちにたいしても、おうようで、土地だけでなく、運転手・燃料付きのトラクタまで、無償で貸してくれていたんですね。

それと、果樹園ということで、集団経営の名残も、あったんでしょうね。おそろしいほどの、土地の浪費もあったんですよ。栽培していたのは、リンゴナシ（萍果梨）。表皮が赤くて、みかけはリンゴですけど、内実も、味も、ナシです。かなり古い品種で、好まれないんですね。袋につめて、売っても、ジャガイモより安い、ということだった。

それ以上に、驚いたのは、このリンゴナシのなかに、接ぎ木に失敗し、台木の育ったものが、たくさんあったことです。台木は野生のナシ（杜梨）で、実は直径1cmほど。経済価値は、ありません。それなのに、10本のうち、少なくとも7本はそれ、という一角まで、あるんですよ。それが20年近く、つづいてきていた。

忘れもしない、2000年3月17日の朝、大同駅に着いた、遠田さんと私は、その足で、環境林センターに、回りました。大同側の、おもだったメンバーがそろい、「緊急事態だ。すぐに相談したい」といったんですね。

ここの果樹園20haのうち、北側の半分について、買収の話が、すすんでいる。きょうの午後から、契約の段取りで、村長は、いま、太原にいつている。最初の話は、環境保護施設がくる、ということだったけど、調べて、わかったことは、くるのは、コークス工場、ということだ。そんなことになったら、環境林センターも困るけど、周囲の野菜農家も、たいへんなことになる。

村の希望は、ここの使用权を、代わりに日本側で、買ってもらえないか、というものだ。そうしてくれれば、まるくおさまる。安くても、いいということだ。どうだろうか？時間が、差し迫っているので、早く決断してほしい。そんな話です。

コークス工場なんかきたら、5年間の積み上げは、水泡に帰するじゃないですか。遠田さんの考えも、同じでした。花吉茂代表に、電話で相談したら、「いま、金利が安いですから、私が、借金しても、いいですよ」とのこと。ここぞというとき、いつも立花先生の言にはげまされるんです。このような事情から、環境林センターは、いっきよに、20haにまで、拡張されました。

それからの、具体的な作業で活躍したのは、郝大同市青年連合会副主席の郝軍生です。彼の兄が、南郊区の、党書記だったんですね。相場より、うんと安い値段で、20年の使用权を入手できました。その後のことについては、あちこちで話しています。

土地の買収の話なんて、どこかの幹部が、からんでいたのに、ちがいないんです。大同の人たちは、私たちの背後には、支樹平さんが、いまでも控えていると、思っているでしょうね。支樹平さんは、この村の出身、その後、ずいぶん出世して、いま、共産党の河南省委員会の副書記、共産党中央委員会の候補委員でもあります。まあ、たいていのカードよりは、彼のほうが強い。彼の名前ができれば、まるくおさまると、考えたのでしょうか。そして、そのとおりになりました。

中国で、なにかをするときは、人脈が、きわめて、大きな意味をもちます。日本でも、そうですけど、その重みは、中国のほうがすごい。この協力事業が、大同で、それなりに順調にすすんできたことに人と人との、ふしぎな縁を、感じています。

## NO. 284 「悪循環」のもつ意味 2004. 12. 03

黄土高原の農村とつきあいながら、ここの問題を、私は、「環境破壊と貧困の悪循環」と集約

し、図までつくりました。

この地方は、年間降水量は、わずか400mmですが、その大半は、6月後半から、8月上旬までの短期間に集中します。その降りかたが、よくないんですね。狭い範囲に、短時間に、集中的に降ります。1時間70mmなんて雨を、私も何度か体験しました。

植生の乏しいところに、こういう雨が降ると、雨は、土中に浸透しないで、土の表面を走り、土壌を流します。そうなりやすい性質を、黄土は備えています。中国では、これを「水土流失」といいます。その結果、土がしだいにやせ、作物や植物が育たなくなります。それが、この地方の「沙漠化」なんですね。

ここまでは、問題の半分です。残された半分のほうが、実践的には、より重要でしょう。ひとことでいえば、人口問題です。自然の生態系、とくに、水と土のキャパシティを超えた人口が、長く、ここで生きてきたために、過重な負荷を、環境にかけてきました。具体的には、過剰な耕作、過剰な放牧、といったことです。その結果、森林の消失をはじめ、さまざまな環境破壊がすすみます。

環境破壊がすすむと、生活と農業の環境もいっそう悪化し、貧困化が進みます。貧乏人の子だくさんの、ことばどおり、貧しくなると、子どもがふえ、人口も増加します。そして、また……。簡単にいうと、これが環境破壊と貧困の悪循環です。こうした議論を、私はなんどとなく、繰り返してきましたので、以前からの読者は、「またか」と、思われるでしょうね。しばらくのご辛抱を、お願いいたします。

「乾燥、半乾燥及び乾燥半湿潤地域におけるさまざまな要因（気候変動及び人間の活動を含む）に起因する土地の劣化」が、すなわち砂漠化だというのが、1992年、リオデジャネイロにおける、地球サミットで、採択された「アジェンダ21」の定義です。それは、その後の、砂漠化防止条約でも、踏襲されました。水土流失によって加速される、黄土高原の沙漠化は、この定義を、絵に描いたようなものだと、思います。

このような悪循環の存在は、いうまでもなく、好ましいものではないでしょう。しかし、いつのころからか、私は、この悪循環こそ、この地方における環境修復のカギだ、と考えるようになったのです。理由は、2つあります。

第1に、悪循環であろうと、なんであろうと、そこには、動きがあります。動いているものは、外からのちょっとした力に、敏感に反応します。車の運転だって、そうでしょ。車が動いているとき、つまりタイヤが回っているときは、ハンドルは、軽く切れます。車が止まっているときの、ハンドルの据え切りは大きな力が必要です。

悪循環の根っこにある、巨大な人口は、大きな負荷でもありますけど、その力を、環境修復のために、動員できれば、前向きな大きな力にも、転ずるはずです。具体的にいえば、私たちの緑化協力事業が、わずかな資金で、比較的大きなしごとができたのは、低廉で、豊富な労働力が、ここの農村に存在したからです。

地元の農民の立場からすれば、外の基準では、安い賃金であっても、貴重な現金収入なんです。そして、出稼ぎなんかとちがって、自分の働きが、自分の生まれ育った土地の改善に直結する、よろこびがあるわけです。これは、とても重要なことです。

もう1つの問題は、悪循環が成立しているということは、そのなかに組み込まれた人間の力では、容易には、抜け出せない、ということです。そりゃ、そうでしょう。簡単に脱出できるようなら、悪循環なんて、そもそも成立しない。

私がよく例えるのは、サラ金地獄です。私がA社からの借金を、膨らませたとします。利子すら、返せない。しかたなく、B社からも借金をし、それで、A社の利子を支払う。つぎに、B社の利子を払うために、新しく、C社からも、お金を借りる。このくりかえしで、雪だるま式に借金がふえます。こうなったら、私は、この借金地獄から、自分の力では、抜け出せないんです。

そのとき、どなたか、私を助けてくれる人がいたら……。ただで、お金を、くれなくてもいいんです。たとえば、旧い友人のDさんが、低利で、お金を貸してくださる、とします。そのお金で、私は、サラ金の、高利のお金を返し、あとは自分で働いて、少しずつ、Dさんに返していく。立ち直れる可能性が、でてくるわけです。

そのときの、外部からの支援は、べつに、国外からでなくてもいいんです。大同の農村の環境がよくなれば、川下、風下に位置する、北京や天津の人たちにとって、とてもいいことですから、その人たちが、率先して、応分の負担をすべきでしょう。たいていの日本人が、そのように考えるでしょうね。

では、もうちょっと、その関係を広げてみましょう。黄土高原に、森林が広がったら、日本の私たちだって、益がないわけじゃないんです。そのためには、多少の負担を、私たちが、してもいいじゃないですか。それはまた、黄土高原の農村の環境問題を、北京など、中国の都市の人たちが、考え直す、呼び水の作用にもなるんですから。

## NO. 285 本音と建前 2004. 12. 08

中国の友人たちが、私のことを、「日本人らしくない」といいます。一点は、上下関係がきわ

めて希薄で、誰にでも、同じ態度で接する、相手が農民であろうと、大臣クラスの人であろうと、いつも対等な話し方をする、ふしぎな人間だ、というのです。まあ、これは、社会的な訓練が不足していて、礼儀をわきまえない、敬語なんかをつかえない、ということにすぎないでしょう。

もう一点は、いつも本音の議論で、本音と建前の乖離がない、というのです。もっと簡単にいうと、しらふのときも、酔っぱらってからも、同じ話しかしない、ということのよう。これも、日本社会のなかで、大人になりそこねた、ということであって、ジマンになることじゃない。

そんなことを話すと、日本の友人たちからは、本音と建前の一致じゃなく、ジョーダンと、本気の一一致だろう、高見の本気は、かぎりなくジョーダンに近い、なんて、いわれそう。

そういうことから、逆にわかることは、中国人にとって、日本人は、本音と建前の乖離がひどい、とみられているようです。それは、日本のことばの構造にも原因があるのかもしれない。あんまりアケスケな表現は、日本語としては、上等とみられないでしょ。もってまわった言い方をしても、中国にかぎらず、よその国では、なかなか理解してもらえない。それが「本音と建前」の問題として、誤解されていることも、少なくないよう。

いま小泉首相の、靖国神社参拝が、日中間の問題になっていますが、あれって、なんなのでしょう？小泉さんは、「国のために命をささげた人たちに、尊敬の念をもつのは当然だし、自分は戦争を反省し、平和を誓うために、靖国神社に参拝している」という意味のことを、くりかえします。こういう議論が、村内以外で通用することは、絶対に、ないでしょうね。しかも、こういったことが、小泉さんの口から出ると、あまりにも、軽い。パフォーマンスとしか、思えない。

あるジャーナリストが、「橋本龍太郎さんが、首相のとき、靖国に参拝して、中国や韓国から非難され、一回だけで、やめてしまった。それを痛烈に非難したのが、小泉さんだった。その経緯からいっても、小泉さんは、やめるわけにはいかないんだよ」といっています。そこらあたりが本音、なのかもしれません。そんなことに、振り回されているとすれば、日中関係は、なんとも悲しいものです。

ひるがえって、中国人はどうでしょう。たとえば、ある人の前で、その人をほめちぎっていた人間が、一步、外にでたとたんに、徹底してけなす、なんてことを、私は、しょっちゅう目にします。ほめちぎられたり、けなされたりするほうも、そのあたりは、ちゃんと了解しているよう。

だいたい中国人は、面と向かって、批判されるのをきらうようです。とくに、ほかの人が

いるところでは。メンツをつぶされたといって。その逆に、陰でいろいろいわれるぶんには、あまり気にしないよう。

面と向かって、心にもないことをいって、相手を持ち上げるのも、人間関係を円滑にするための、潤滑剤ぐらいに、考えられているようです。もし、だれかが、あなたをほめあげてきたら、ああ、なにか魂胆があるな、と考えるべきです。そんなところで、にやついたら、バカにされるだけ。あとになって、「ウソだった」なんて、騒ぎ立てても、幼稚な証拠、恥の上塗り、としかみられないでしょう。私なんか、けっこう乗せられますので、えらそうなことは、いえませんが……。

そういう例をもちだし、列举して、「中国人のほうが、本音と建前の乖離はひどい」と私がいうと、私よりずっと年配の、知日派幹部が、「いや、そうじゃない。中国人は、いつでも本音だ」と、言い切りました。そして、私の困惑した顔をみながら、「しかし、中国人の本音は、時と場合によって、つねに変化する」というんですよ。ニヤッ。

なるほどねえ。日本人なんて、建前の話をしているときは、たいてい、一見して、そのようにわかるでしょ。中国人のばあいは、そういうあいまいさがない。いつも本気です。

古い歴史をもちだすまでもなく、現代になっても、政治的、社会的な激動が、つづきましたからね。その波のなかで、舵取りを、すこしでも誤ると、失脚し、沈没するしか、なかった。軽々の、建前では、そういう場面を、乗り切れなかったでしょう。TPO に応じてではあっても、つねに本音で、真剣だったんです。

あさってから、東京出張。12日から中国です。次号は現地から、ホットな話題を、じゃなかった。武春珍からの連絡では、最低気温はマイナス25度くらい。たくさん着込んでこい、とのこと。ブルブルッの話題です。

## NO. 286 建設中の新しい苗圃 2004. 12. 14

12月12日の夕刻、大同に着きました。大阪を出発する前、大同事務所の、武春珍所長からの連絡で、「最低気温は零下25度、できるだけ着込んできてください」ということだったのですが、12月の初め、一度だけ寒波がきたけど、その後は、ずっと暖かいそう。厚手のダウンジャケットを、着込んできたのに、すっかり拍子抜けです。

いちばん気がかりだったのは、新しく建設中の、苗圃のことです。国際協力機構（JICA）の、草の根技術協力のプロジェクトですが、契約が、8月20日だったので、土が凍結するまでに、時間がありませんでした。

ことしのうちに、整地をすませ、管理棟などを、完成しておかなければ、来春からの、育苗にまにあいません。自然相手のしごとは、時間との競争で、少しの遅れでも、1年を、棒に振ることに、なりかねません。

大同に滞在中の9月、大同県周土庄鎮牛家堡村の候補地を調べ、いったん場所を決めたのですが、その後、いくつものお墓があることがわかり、場所を少し、移動させました。そんなことで、着工がまた遅れたのです。

12月13日、朝から、現場にでかけました。苗圃の整地は、終わっていました。水不足のために、伸び悩んだポプラ＝小老樹は抜かれ、幹や枝はどこかに運び出され、根っこが、山積みになっています。そのあと、ブルドーザで平らにならし、トラクタで、荒おこしされています。幹線の道路も、いちおうできています。ここですすんでいれば、なんとか育苗にまにあうでしょう。

面積は、7ha強。ここの土も、もちろん黄土が主体ですが、かなりの割合の、砂利が混じっています。トラクタで、ある深さまで、掘り起こしたところ、砂の割合は、より多くなりました。直径10cmほどの石も、かなりあります。大昔、地球が温暖で、雨が多かった時代に、近くの山から、流れてきたものでしょう。

敷地の正面に、白登山がみえます。現在の名前は、馬鋪山。漢の高祖、劉邦が、匈奴の冒頓単于の軍隊に、7日7晩包囲され、命からがら逃げ出した「白登山の戦い」で、有名なところです。新しい苗圃の名前を、「白登山苗圃」にしよう、と私がいうと、地元の人たちは、気乗り薄。ご先祖さまが、負けたところの名前なんか、つけたくないよう。負けず嫌いの、武春珍なんか、その話になると、匈奴に負けたんじゃない、寒さに負けたんだ、といった言い方をしますからね。いっそのこと、「冒頓苗圃」なんて、どうでしょう？

砂利が多く、さらさらしていることが、ここを選んだ理由なんですよ。平旺郷の環境林センターは、土壌の粒子が小さすぎ、しかも、富栄養化したために、マツなど、針葉樹の育苗に、適さなかったんです。新しい苗圃は、針葉樹主体になるでしょう。

小老樹の根や、大きな石を取り除く作業が、たいへんだったようです。人手でやるしかないのですが、作業以前に、労働力の確保が、むずかしかった。日本でも、たびたび報道されるように、中国は、エネルギー不足が、深刻です。石炭価格が高騰し、中国最大の石炭産地、大同は、沸き立ったんですね。牛家堡村は、大同市内から10kmの、交通の便利なところ。ほかのしごとに、人手を、吸い上げられてしまった。賃金の相場も、当然、上がります。地元では、人手を確保できず、内蒙古から、集団で雇ったそうです。

管理棟、厨房、トイレも完成間近で、周囲を、塀で、囲ってあります。これらはすべて、レンガ建てですが、表面は、モルタルで、塗ってあります。このあと、塗装が必要ですが、寒くなってしまったので、それは来春。

人手不足は、来年も予想されるので、急遽、部屋数を増やし、労働者が、宿泊できるようにしました。老侯や老馬など、ベテラン技術者の知恵です。彼らも、ここに泊り込んで、陣頭指揮をしたそう。すべてをまかされ、一から手がけるしごとは、彼らにとって、ほんとうに、うれしいよう。

いまは、井戸掘りの最中です。長さ 3m、直径 25cm ほどの、鋼鉄製の巨大な銚をワイヤで引き上げては、地中に突き落とし、同時に、水を注ぎ込みます。砕かれた土と、水が混じって、ドロドロになります。ときおり、直径 30cm、長さ 2m ほどの、巨大なバケツをおろして、ドロドロになった土と水を、汲み上げるわけです。その繰り返しで、機械式の上総掘り、といったところ。

のんびりした、しごとのようですが、これが、けっこう速いんですね。9日の朝から掘りはじめて、13日朝には、60m まできていました。まだ湿気の残った、管理棟に泊り込んで、夜通し、掘っているのです。探査の結果、目標の水脈は、地下 80m だそうですから、14日には、到達できそう。地表から 30m までは、黄土の層で、その下に、4~5m、砂利の層があり、それからまた、黄土になったそう。

暖冬で、よかったんですね。ことしは夏が涼しくて、このようすでは冬も早いだろうと、みんな心配してたんですけど、そうはならなかった。

12日の夕刻、大同に到着すると、国家林業局のチーム、2人がきていました。日中緑化交流基金（小渕基金）のプロジェクトの検査だそうです。北京から、夜行列車で朝早くきて、午前中は、大同県聚楽郷の采涼山プロジェクト、午後は暗くなるまで、渾源县聚楽郷のアンズをみたそう。

「大同のプロジェクトは、中国側関係者にも有名ですが、たしかに、その評価に恥じないものです。これほどの困難な条件下で、たいへんりっぱなものです。いい勉強をさせてもらいました」といって、最大級の評価でした。今回の担当者は、内蒙古で長く研究してきた人で、小武は、「現場をみるなり、問題点をわかってくれた」といっていました。現場のことを、まったくわからないくせに、あれこれいう人間も、少なくないのですが……。

私たちの実験林場、カササギの森に、ことしの春、200羽ほどの、ニワトリのヒナが入れられました。1羽1元。すこしは、エサをやっていますが、放し飼いで、彼らの、自力更生です。育つにつれて、かなり遠方まで、出張します。バッタ、その他の虫を食べて、大きくなります。広葉樹の、試験栽培をはじめから、虫害が悩みですので、その対策になります。事実、ニワトリの行動範囲では、虫は、ずいぶん減ったそう。

管理棟のすぐそばに、レンガづくりのりっぱな小屋が、建てられました。敷地内にあった、鷹嘴塚村の崩れかけた土づくりの住居＝窯洞より、ずっとりっぱ。昼間は、外にでかけていても、暗くなるころには、帰ってきて、眠りにつきます。りこうなものです。

そのトリが、いまはゼロ。とくに、日本からのツアーがきたとき、数が減ります。ここでの昼食のために、つぶされるんですね。冬も、飼いつづけようと思うと、エサ、その他の問題がありますのでみな、人の胃袋におさまったのです。

大鍋で、煮るだけです。いろんな野菜、トウフなどといっしょに、煮込むこともあります。あそこのコックさんは、ふつうの農民で、あそこの受苦人のために、食事をつくっている人ですから、ほかの料理法なんか、知らなくてあたりまえ。

私は、おいしいと思っていました。というより、なつかしかったのでしょう。農村育ちの私は、肉を食べることは、めったにありませんでした。たまに食べるのは、年老いて、タマゴを生まなくなったニワトリ。野菜やトウフと煮込んで、「ジャブ」と、呼んでいました。たいへんなゴチソウ。

ツアーで、大同に同行した人に、先日、東京で、私がお話をしたら、「おいしくないよ。素材はいいんだろうけど、あの料理法では、せっかくのそれを殺している」といわれました。「トリの肉を、グツグツ煮込むなんて、そんな料理法は、中華料理にないだろ」とも。

大同での、夕食のときに、たまたま話題が、カササギの森の、ニワトリにいったのです。大同事務所のメンバーも、おいしくないといいます。街育ちで、口がおごっているんでしょうね。でも、渾源の、岩塩をつかって、焼いたニワトリ、油で炒めたトリ、私にもおいしいのは、たしかです。せっかくの素材ですから、来年は、くふうしてもらいましょう。

カササギの森の、トリ小屋のそばに、1頭の、イヌがつながれています。おとなしいイヌで、よそから人がきても吠えないし、ニワトリにも、悪さをしない。毒にも、薬にもならないと、思っていました。カササギの森は、ノウサギの被害が深刻ですので、ここにイヌあり！のほうが、いいと思っていたのです。

ところが、大同事務所の人たちの話では、あのイヌは、とても利口なのだそう。日本人がき

たときは、おとなしくつながれ、まったく吠えない。きちんとした身なりの人がきても、吠えない。あやしげな人間がくると、吠えたてる、というのです。「おれなんて、いいかげんな服装だぞ」と私がいうと、「あなたは日本人だ」と、小武がいました。

思い出したことがあります。私が小学生のころ、わが家に、小犬がやってきました。雑種の小犬を、父親か兄が、もらってきたのだと思います。ちっちゃかったので、みんなで、「チビ」と呼んでいました。いい遊び相手でした。学校から帰ってくると、馬車の下なんかひそんでいたチビが、飛び出してきます。畑に行くときも、山に行くときも、前になり、後になり、いっしょでした。もちろん、つないでなんて、いません。

わが家の納屋には、精米機があったので、隣家の人、使いにきていました。みなさん、おっしゃるのです。「このイヌは、ほんとに利口だ。玄米を運び込むときは、一言も吠えず、どこにいるか、わからない。精米が終わって、運び出そうとすると、激しく吠えかかり、家の人が顔を出すまでは、許そうとしない」

私が、大学に進学し、数年も、帰省しないことがあって、久しぶりに、家に帰ったら、私にも、激しく、吠えかかりました。「チビ！」と呼んだら、瞬間に、理解したのでしょうか。たちまち、のどを鳴らし、じゃれついてきたのです。

カササギの森の、あのイヌ。よそから、視察その他のくる昼間は、ああやって、つないであるのだそう。でも、夕方からは、解き放つのだそうです。そうすると、遠くまでいって、迷ったニワトリをトリ小屋に、追って、帰ってくるそうです。

まさに名犬！名前は？ ときいたら、その場の人、みんな、知らない。環境林センターの、番犬の狼狗だって、ターラン、アーラン、サンランまでは、おぼえているけど、それがいなくなったあとにきたイヌは、私も知らない。どんな家畜だって、名前をつけてしまったら、食べることは、できなくなりますからね。名前があるか、ないかが、家畜と、ペットとの、ちがいかもしれない。

あれっ！今回の標題、「名犬名無し」と、打ったつもりが、ナッシー、になってた。チビリチビリのウイスキーが、回ってきたようです。「名犬ラッシー」は、こどものころの、あこがれでした。

## NO. 288 ヤナギハグミ（沙棘） 2004. 12. 27

今回の大同滞在中、右玉県まで、足を伸ばしてきました。1992年、私たちが渾源県で、協力をはじめたときは、渾源県と同じ、雁北地区に属していました。93年、雁北地区の7つの県が、

大同市と合併したとき、右玉県は、朔州市に併合されました。以前の雁北地区 10 県のなかで、右玉県だけが特別だったのは、ほかの県が、海河の水系に属するのにたいし、右玉県は、黄河の水系だったことです。早くから、緑化の先進県として、知られていました。

右玉県にはいって、すぐ目にとまるのは、ヤナギハグミ（沙棘＝サージ）が、とても多いことです。ほかの県でみるのより、背丈が高く、たくさん実をつけています。私も、けっこうこの地方を回りますが、これほどのヤナギハグミは、みたことがない。

ヤナギハグミは、グミ科の灌木です。秋になると、アキグミくらいの甘酸っぱい、小さな実を、びっしりとつけます。熟したものの色は、オレンジ色から赤まで。枝には、鋭いトゲもっています。根に、放線菌、フランキアが共生し、空気中のチツソを、固定する作用があります。根を掘ってみると、小さなコブが、たくさんつき、ネマトーダ＝センチュウが、ついたようにみえますが、これがそれです。マメ科の根粒菌と、同じようなもの。

自分で、肥料をつくりますから、痩せ地に強いんですね。乾燥にも強く、黄土丘陵や、山のかなり上まで、広がります。この特性をいかして、マツなどと混植するのに適した樹木です。私たちも、多くの造林地で、そのようにしてきました。

ところが、大同の農村は、1999 年が、建国いらい最悪、といわれる旱魃、2001 年が、100 年に 1 度、といわれる旱魃、でした。それにあわせて、毛虫が大発生したのです。しかも、春と秋の 2 回。さしものヤナギハグミも、枯れるものが多く、大きな被害ができました。

右玉県には、中国科学院の、沙棘研究所があり、優良系統の選抜と固定、製品開発などに、とりくんでいました。前回訪れたのは、1997 年で、このときの目的は、ここから優良品種を導入し、環境林センターに、ヤナギハグミの見本園をつくることでした。そのほかに、寧夏回族自治区銀川市の、沙棘研究所からも、中国以外のものも含めた、20 品種ほどを導入したのですが、その後の結果をみると、右玉県から導入したものが、圧倒的に、成績はいいのです。やはり、近くのものがいいようです。

今回は、製品開発に、関心をもっていきました。ところが、沙棘研究所は、すでに撤退し、なくなっていました。かわりに、いくつかのジュース工場が、生産をはじめています。ヤナギハグミの果実には、ビタミン類をはじめ、たくさんの栄養素が含まれており、果物の王様、といっているのだそうです。健康増進、免疫強化、美容痩身、その他、その他。ジュースのほか、種子を搾って、沙棘油もできるそう。

それにしても、ですよ。あの実は、大きなものでも、直径 5mm ほどしかない。ジュース、その他に、加工するには、その実を、集めないといけない。あのトゲのなかでの作業は、ほんとに、たいへんでしょう。そんなことが可能なのは、内陸の農村が、たいへんに貧しく、人件費

が、低廉であるからです。

さすがに、1粒1粒、採取するんじゃないんですね。実の密集した枝を、切り取ってきて、工場の庭に、山積みしてありました。枝ごと搾って、ジュースにするわけです。この工場では、缶入り、ペットボトル、紙パック、その他のかたちで、商品化していました。

搾った残りカスから、種子をより分けていました。このタネは、育苗につかたり、沙棘オイルの生産に、つかうわけです。

工場の近くの、舗装道路に、最後の残滓が、広がっています。そのうえを、車が通るたびに、枝なども、小さく砕かれます。これを、有機肥料として、使うわけですね。付近の農民が、個人で利用しているようです。そのほかに、葉を加工して、お茶にできるし、幹や枝も、燃料その他になります。ムダなところが、どこにもない。

道路わきに、「国家天然林保護区」の標識がたくさんありました。しかし、周囲に、それらしき山はみえない。興味津々で、県の林業局をのぞいたのですが、ちょうど昼休みで、人影がなかった。「天然林保護工程辦公室」のまえに、写真がはってあったので、それをみると、たいていは、川端の、ヤナギハグミと、ヤナギなどです。重点工程とされている、蒼頭河沿いに、車を走らせました。

河川敷に、ヤナギハグミと、ヤナギ、ポプラなどが、茂っています。ヤナギハグミも、水条件のいいところでは、樹高3~4mに育ち、直径も15cm以上になります。こうなると、灌木というより、小喬木でしょうね。私たちの、カササギの森の、谷底の光景とそっくり。そのそばに、モンゴリマツやポプラを植え、鉄線で囲った、区域がありました。

これが、天然林保護工程です。みる人によっては、拍子抜けでしょうけど、現地の、自然条件にあわせたすぐれた、やり方だと思います。なにも、全域に、マツを植える必要はないんですね。そして、四方八方に、目配りがしてある。世界銀行の借款や、日本の円借款も導入しているようで、表示がありました。

放牧の、ヒツジの群れが、あちこちにいます。畑の作物の、残りのワラや、道端の枯れ草をさがしては、食べています。青いものはありませんから、これからが、つらい季節。親子2人で、280頭のヒツジを、追っていました。他人のヒツジを、あずかっているそう。

「ほかの県では、肉のほかに、皮革も、いいお金になるけど、右玉県ではダメ」。どうして？「沙棘が多いので、皮にキズが多くて、使い物にならない」。そうです。ヤナギハグミのトゲは、鋭い。

## NO. 289 霊丘自然植物園の湧き水 2005. 01. 05

あけましておめでとうございます。なにがおめでたいのか、といわれそうですが、災害の多かった昨年……、新しい年が変わって、いいことがあってほしいものです。

私たち緑の地球ネットワークのメールボックス、1月3日から、あふれかえって、受信不能になっていました。スパムメールが何百通もたまっています。これまでにメールをいただいた方、すみませんが、再送していただけないでしょうか。

去年の8月、仙丈ガ岳に登ったとき、朝方の一瞬、雲と霧が晴れて、富士山と、北岳が望めたんです。ノートパソコンのディスプレイに、そのときの写真を開いて、大同事務所のメンバーに、「日本で一番と、二番の山だ」とジマンすると、「高さは何メートル？」とくるから、「3,776メートルと、えーと、北岳は……」と考えると、「なんだ、たったそれだけか」と、バカにした口調。

中国は、もちろん大陸で、しかも海拔1,000メートル以下のところより、海拔5,000メートル以上のところのほうが、面積が広い、と書いてあるのを読んだんですけど、ほんとですか？それだったら、高さだけを、問題にするなら日本一、二の山も、たいしたことない。でも、山高きが故に貴からず、です。

黄土高原の、あの浸食谷。深さ100メートルあるものでも、彼らは、「溝」(gou)と呼びます。漢字が、島国に、渡ってきたとき、景観にあわせて、自然に、ダウンサイジングしたんですかね。

まれなことですけど、その逆も、ないわけじゃない。「泉」ときいて、なにをイメージしますか？1994年に、天鎮県李二烟村にいったときのことで。ツアーの人たちに、村長が説明しました。「この村には、とてもいい泉があって、どんな旱魃の年にも、涸れたことがない」。人数が多くて、2つの班に分かれてたんですけど、私の班は、すぐにその「泉」をみにいきました。

浸食谷の底に、わずかな湧き水があり、石垣で囲って、井戸のようにして、つかっています。タタミ3畳ぶん、あるかないか。その水が、すごいんですね。ゾウキンの絞り汁のような、色をしていて、はじめて農村にきた、王萍が、「こんな水を飲んで、だいじょうぶですか？」と、ききました。私にとっては、小さな水たまりですが、水の乏しい、黄土高原の農村では、湧いてさえいけば、それは「泉水」のよう。

霊丘県上寨鎮に、私たちが建設中の「霊丘自然植物園」には、泉水があります。李二烟村の、あの泉よりは、ずっとりっぱ。数か所に、湧き口があり、それが集まって、直径5~6メートル

の、池ができています。澄み切った、きれいな水です。何度か、私も、おっかなびっくり、ナマで飲みましたけど、なにごとも、起こらなかった。

1998年のことですけど、自然植物園を、霊丘県でつくろうと決め、その候補地さがしを、李向東に頼みました。あの情熱と、馬力で、ずいぶん、走り回ってくれました。遠田先生と、私とで、それをみて回ったんですけど、7つめの、最後にみたのが、ここでした。直後に合流した、立花代表も、気に入ってくれました。最大の魅力は、あの湧き水が、あること。苗をつくるにしろ、木を植えるにしろ、最低限の水は、やはり必要でしょ。

86haの土地の、100年間の使用権を、大同事務所の名義で、購入しました。大部分は、山。高低差のあるほうが、多種類の植物の栽培には、つごうがいい、という立花代表の意見にしたがい、標高差は、400メートルもあります。ふもとのほうの、わずかばかりの畑を、苗畑として、利用しています。

この植生が、急速に再生してきていることは、なんども、報告しています。それにともなって、水の量が、どう変化するか、それが、新しい関心事です。李向東はじめ、地元の関係者は、「水が増えてきている」といいます。そこで、2003年1月から、湧き水の測定を、彼らに頼んだんですよ。

2か所で、やることにしました。1か所は、先ほどの池の尻の、出口です。この敷地は、86haの山が、扇状に広がっており、扇の要の位置に、この池があります。雨が降れば、地表を流れる水は、すべてここに集まります。湧き水も、地表に出てくるものは、すべて、ここに集まります。

もう1か所、わかりやすい、泉水の湧き口をとりました。ここで計れば、雨の影響を受けないので、地下水の、増減をみるのに適当と考えました。複雑な方法は、とれないので、10リットルのバケツが、いっぱいになる時間を計ってもらうことにしました。

ところがね、この計画が、1年で、中座していたんですよ、2004年12月に、現地に行ってみると。根本の原因は、作業の意味を、十分、理解してくれてなかったことです。行くたびに、私が、結果をチェックしていれば、よかったんですけどね。それを、していなかった。

ほかにも、理由があります。水の湧きだしの状況が、変わってきたんです。従来は、主な湧きだし口は、2つでした。その1つで、測定していました。近くに、もう1つ、新しい湧きだし口が、できたんです。そういうはっきりした湧きだし口のほかに、一帯が、じめじめしてきて、どこからとはいえない、湧出量が増えてきました。

さらに、もう1つの沢筋の、問題があります。ここにも、以前から、湧き水があり、雨の多

い夏は、湧いていましたが、秋から春にかけては、涸れていたんです。ところが、2004年は、冬になっても、この湧き水があり、池まで流れてきています。原因として、2004年の雨が多かったことが、考えられます。年平均400mmのところ、550mmはあった。もう1つ考えられるのは、植生が増え、保水力が高まったことです。

そういう変化があるからこそ、測定データがだいじなんですけど、彼らは混乱して、意味がなくなった、と、考え違いを、してしまったんです。育苗作業ほか、忙しいことが、ないわけじゃないし。

植生の再生、もしくは造林によって、水収支に、どういう変化があらわれるかは、乾燥地にとって、死活の問題だと思います。森林が成立すれば、水が増えるという、神話があったんですけど、現実には、そうではありません。降雨時の、一時的な出水も考えると、樹木が増え、森林が成立することによって、そこから流れ出る水の量は、むしろ減るようです。その一方、これまでみてきたように、植生が増えることで、保水性が高まり、湧き水の量が増えることは、十分、考えられます。水の安定的な供給に、森林は役立つわけです。

霊丘自然植物園は、その具体的なデータをうるために、絶好の条件を、備えているようです。あの池の下に、小さな1つの堰をつくり、水量計測の装置をおいて、記録をつづければいいのです。長期につづければ、貴重な資料がえられるでしょう。どこかの研究チームで、この計画を支えていただけないでしょうか。

## NO. 290 「おれは侯喜だ」 2005. 01. 11

1月2日の、NHKの「新シルクロード」第1回。主演のひとつが、乾燥地のポプラ、胡楊。知れば知るほど、おもしろい木ですね。植物の専門家にとっても、なぞだらけ、だそう。柴田昌平さんが、元気にディレクタをつとめていて、それもうれしかった。

昨年9月、大同でたどりついた、胡楊から、種子を採取し、環境林センターの、温室内の湿らせた砂のうえに、蒔きました。ほんとに小さな種です。数日で、発芽しました。でも、芽も葉も小さい。12月にいってみると、青い葉が残っていますが、以前のままの大きさ。この時期ですから、伸びようがない。自然状態では、根をサーッと伸ばしておき、葉は枯れて、翌年の春を、待つそう。

それから、若い細い枝の、挿し木も試みていました。ヤナギそっくりの、小さな、青い葉を、だしています。発根しているどうか、抜いてみればわかりますけど、もったいなくて、そんなことはできない。

親木の周囲を、観察すると、小さなひこばえが、根からでているものがあります。掘り起こしてみると、10本から20本も、かたまって、出ています。1本1本に分けて、これも温室で挿していますが、発根する前に、下のほうから、腐ってしまうよう。時期が、よくなかったのかもしれない。

直径3~4cmの若木を、3本、掘ってきて、センターの見本園に、植えてありました。私たちが、たのんだことです。1本は、大きな根鉢で、土をつけて移し、2本は、裸根だったそう。活着してくれると、うれしいんですけど。

「この木を掘っているとき、じつは……」といって、大同事務所の運転手の、郭保青が、話しはじめました。「林場の人間に、見とがめられたんですよ。なにをしているか！」といって。そしたら、侯老が、『おれは侯喜だ』といったんです。それで、おさまってしまいました」。

侯喜は、私たちのカウンターパート、大同事務所の技術顧問です。中国では、目上の人にたいして、姓の前に老(ラオ)をつけて呼びます。それが逆転して、姓+老となるのは、尊敬の意味が、加重され、長老扱いですね。

私たちも、同じ体験をしたことがあります。遠田宏顧問が、水不足で伸び悩んだポプラ=小老樹の生態を知るために、何本か、伐ったり、根を掘ったり、してみたかったんです。典型的な小老樹林のある、大同県倍加造鎮で、ノコギリを、つかっていたんですよ。ところが、中国で、木を伐るのは、おおごとなんです。目的のいかんを問わず、何段階もの許可が必要。正式に手続きすれば、何か月どころか、何年かかるか、わからない。

案の定、それを見とがめた男が、いたんです。「なにをしている！」といって、気色ばんでいました。そのとき、老侯が、まえにでて、「おまえは、なんて名前だ？」ときいたんですね。男が答えると、老侯はいきなり、「じゃあ、おまえのオヤジは〇〇〇で、おっかあは、△△村から嫁にきただろ」。その男は、だまって、引き下がりました。

こんどの胡楊のときは、「おれは侯喜だ」ではじまり、つぎは、「帰って、父親にきいてみろ」だったそうですが、父親に、きいてみるまでもなく、その男も、侯喜の名前は、よく知っていたそう。彼は、大同市林業局を中心に、林業関係の現場を40年も回ってきました。その方面の、生き字引です。そして、とにかく顔が広い。あちこちの村に、たくさん知り合いがおり、係累にまで、通じている。

そのうえね、この数年、老侯を、中心に扱ったテレビや新聞の特集が、何回か、あったんですよ。40年間、大同の緑化に、情熱を傾けてきた老技術者が、定年後、日本との協力の現場で、青春を取り戻し、新しい事業にかけている、といって。そりゃ、そのとおりです。70歳間近で、かわいい曾孫までいるのに、実験林場・カササギの森をつくるときも、今回の、新しい苗圃を

つくるときも、現場の土間の、スチールベッドで寝て、陣頭指揮を、とるわけですからね。

それから、最近はこの協力活動のなかで、日本の専門家を通じてえたことを、林業局が開催する、セミナーで話したり、なにかに書いたりも、しているんですね。

たとえば、苗を植えるとき、水をかけてから、足で固く踏みつけるのが、現地のやり方だったんですね。立花吉茂さんが、それにたいして、それでは日干しレンガに、植えるようなもので、根が窒息して、枯れてしまう、踏んではいけない、砂を加えて通気性をよくすべきだ、といったとき、すぐには納得しなかったのが、老侯ですけど、いったん自分で確認すると、「砂を添えて、踏まない」という四字成語をつくり、普及して、回ったんです。

すきでなきゃ、できないですよ。番組のなかで、老侯がなんども「これがすきだから、やってる」と、いうんですね。そういうやり方、考え方に、中国でも、若い人は、すぐには共感できないところが、あるようですけど、それは、どこの国でも、同じでしょう。老侯のおかげで、私たちのプロジェクトは、どれだけ、有形無形の、プラスをえたか、わからないくらい、それは大きい。

## NO. 291 乱開発（1） 2005. 01. 17

カササギの森の周囲で、地元の聚楽郷が、大面積の、緑化にとりくみました。北京天津風砂源治理工程の一環で、政府の、資金がでます。周囲の黄土丘陵に、作業道ができました。すこし奥まで足をのばすと、村がありました。馬脊梁という、小さな自然村。老人の話では、この村は、まもなくなくなる、ふもとの聚楽郷に移る、ということでした。この通信の 203 号に書きました。2003 年 4 月のことです。

そのとき、老人は、「ちょっと前に、日本人がきた」といったんです。カササギの森には、私たちもしょっちゅうきますが、ここまできたのは、はじめて。なんだろう、と瞬間は思ったんですけど、すぐに、忘れてしまった。通訳の、王萍がいなかったので、私は、カタコトの中国語で、応対してたんですけど、その老人は、いっしょにきていた老侯なんかに、「あの孩子（こども）の言葉は、わからない」と、話していました。「孩子」というのは、当時 55 歳の、私のことです。私のことを、日本人とは、思っていなかった。逆に、彼がみたという日本人も、そうじゃないだろうと、私は考えたのです。

ところが、これが、重要な意味を持っていたことが、あとになって、わかりました。2004 年の春、そこの村の、さらに奥で、鉄鉱石の、採掘が、はじまりました。カササギの森から、2～3km、北にあがったところです。規模は小さい。日に、数十台のダンプカーが、往復して、鉱石を、運び出します。ルートは、カササギの森の中央にある、あの谷底。

おかげで、あの谷の清流が、まっ茶色ににごって、しまいました。水源のひとつを、ダンプカーが、踏み荒らすためです。採掘地点の水は、ほかの谷筋に行きますけど、そこも汚染されるでしょう。

2004年夏、カササギの森に、私たちが泊まったとき、郷の党書記、張春が、私を訪ねてきました。カササギの森のなかに、ダンプカーを通す道をつけさせてほしい、と。すでに、酒がはいていたこともあって、私はしつこく、彼を、ののしりました。遠田先生から、途中でなんども、制止されたにもかかわらず……。どうして、事前に、相談がないのだ、友だちがいが、ないではないか、と。いって。

張春とは、長いつきあいなんですよ。緑化に、とても、熱心な男で、造林模範として、全国表彰を受けています。いつも現場にでて、顔はまっ黒。まあ、焼けの一部は、私はいっしょで、アルコールによるものでしょうけど。この郷での、協力プロジェクトが、とてもうまくいったのは、彼がいた、おかげです。こんな幹部ばかりだったら、私の苦労は、ずっと少なくてすんだ。

聚楽郷は、大同県のなかで、1、2を争う、貧乏な郷です。数年前、となりの閤老山郷と、合併したんですけど、閤老山郷も、貧乏さにおいて、聚楽郷といい勝負。貧乏人同士がくっついて、いいことは、あまり、ないんですね。

そのうえ、2003年7月、この一帯では、何十年もなかった、暴雨と雹があり、土石流によって、死者もでました。自然災害にたいする、備えがなかったと。いって、党書記の張春は、新聞で糾弾され、メンツを失ったそうです。けど、2001年のあの、大旱魃の年、聚楽郷の、1人あたり年収は、159元だったそう。そんな郷で、自然災害に備えるといっても、いったい、なにができるんですか。

そんなところに、鉱山ができ、わずかでも、収入になるとすれば、飛びつくのが、ふつうでしょうね。村の農民にも、多少のおこぼれが、まわっていくかもしれない。そういう事情は、わからないでもない。

大同事務所も、カササギの森の技術者たちも、この鉱山にたいしては、猛反対だったんです。おそらく、正規の開発許可は、とっていないでしょうね。そのおかげで、敷地内の水が汚濁され、生活用水として、使えなくなったし、灌漑用水としてつかうにも、ポンプの損耗、貯水槽の泥砂蓄積、その他の問題が発生する。

張春には、あんなふうに、あたったものの、聚楽郷の農村と、彼の立場の、たいへんさは、理解できます。大同を離れる直前、武春珍所長に、私は、「有理有利有節でいくべきで、地元の

農民のことも考え、張春の立場も考慮すべきだ」といったのです。道理があり、利益にもなり、しかし節度をもって、ということ。立場や意見の異なる人たちと、合意を形成するための、中国共産党の、伝統的なやり方です。

具体的には、カササギの森の敷地内に、新しく道路をつくることに、譲歩してもいいけど、鉦山を経営する、先方の企業は、いまの、谷筋の道を、そのまま利用し、新しい道路とで、循環ルートをねらうだろうから、それだけは、拒否したらいい、と行ってたんです。すると、先方のねらいは、そのとおりであったよう。現在の、中国の経営者たちは、他人の迷惑なんか、一顧だにしない。まさに、ワイルド・キャピタリズム！

冒頭に返って、「日本人がきた」と、老人からきいたとき、あのとき、この計画がわかっていたら……。計画が動き出すまえだったら、もっと気軽に、敢然と、反対できたでしょうね。ほんとに、ザンネン！

ここまでの話、じつは、昨年12月の体験の、マクラに、軽くふるつもりだったのに、ほぼ、一回分の文字数になってしまいました。すみません。本論は、次号です。

## NO. 292 乱開発 (2) 2005. 01. 24

緑の地球ネットワークの、会報『緑の地球』最新号に、阪南大学助教授の、洪詩鴻さんが、私たちのイベントに、参加した感想を、寄せてくれました。なかなか感動的。そのなかに、唐突に、「北京でいつも機嫌悪そうな顔をしている事務局長の高見氏」と、私のことが、でてくるんですね。20年、30年前の私が、怒った顔をしていた、というのなら、即座に、私も、同意します。自分でも、ピリピリしていたと、思います。

でも、いまの私は、客商売のようなもの。不自然で、にあわないかもしれませんが、せいっぱい、笑顔を、こころがけている。だけど、洪さんの印象に残ったのが、昨年4月の、北京における、日中水フォーラムでの私なら、そうとられる可能性も、なきにしもあらず。

中国の、水問題の深刻さを、私は真に、憂っています。どうして、みんな、まじめに考えてくれないんだ、と、いって憤っています。仮面の笑みの下の、真の表情を、読んでくれたんですから、洪さんには、感謝、感謝。

いまの中国は、「中華全国総工事現場」。2008年、オリンピックを控えた北京は、膨張につぐ、膨張。高層ビルも、道路も、どんどん建設中。波紋のように、地方にも、広がっていきます。日中国交正常化と前後して、日本で「列島改造」がありましたが、中国は、大陸改造。スケールは、ずっと大きい。

セメントの、1人あたり消費量は、日本を、超えたそうですね。国単位では、日本の10倍以上、ということ。鉄も、セメントも、たりません。電力、石炭などのエネルギーも、不足している。鉄鋼や、鉄鉱石の、国際価格が、急上昇しましたが、その火元は、中国。

前号でふれたような、小鉱山は、これまで、成り立たなかったはず。ところが、鉄鉱石価格が、急騰しました。値段だけでなく、品そのものがなくなったために、零細な鉱山まで、採算にのる。

去年の夏、太行山脈を、ウロウロしました。植物を、さがしたんです。そのとき、あちこちで目についたんですよ。国道108号線は、北京を起点に、雲南省の、昆明にいたる道ですけど、この道を、車で走るだけでも、採掘現場や、処理場が、いくつもみえます。なかには、サーチライトをつけて、ナイターで、掘っている現場さえ、ありました。

大同市最南部の、靈丘県も、太行山脈のなかです。大同市の北部が、寒温帯に属するのにたいし、ここは、中温帯。気象面での環境は、相対的に恵まれてますけど、山地が大部分で、平坦な土地がない。農業以外の産業は、ほとんどなかったの、全国クラスの、貧困県の1つでした。

ところが、最近、羽振りがいいんです。県内の道路を、急ピッチで、修復しました。いっせいにやったので、昨年の一時期、この県は、陸の孤島になりました。でも、昨年末に、訪れると、大同-靈丘の、道路がすばらしくなり、以前の、ほぼ半分の時間で、到着できました。

県城（武靈鎮）の、整備も、進行中です。道路も整備されていますし、従来を中心部から、すこし離れたところに、新しい繁華街を、建設中です。

そのような経済発展の、牽引力が、地下資源の、開発だそう。もともと、靈丘県は、資源に恵まれていたんですけど、その開発に、火がついた。いま大同では、靈丘が発展のモデルだそう。

この県には、私たちの代表的なプロジェクトが、いくつかあります。その1つ、自然植物園の入り口の、河川敷に、鉄鉱石の、中間処理場が、できました。露天の、ちっちゃなものです。目の前の上寨河の水で、鉱石を洗い、汚濁した水を、直接、河にもどします。清流が、一瞬にして、茶色の汚水に変わります。なにもなければ、いいんですけど、鉱物ですから、毒性の可能性もなくはない。きちんと、検査を受けてる、くらいだったら、あんな乱暴な、汚染を、するはずがない。下流の住民の、健康被害が気になります。

帰りの車窓から、そのすぐ下流にも、同じような施設を、みつけました。鉱石の、選別と洗

浄には、水が不可欠のよう。鉱山と水汚染は、セットですね。

ところで、この上寨河は、すぐ下流で、唐河に合流します。唐河は、太行山を横切って、河北省に抜け、西大洋ダムに、注ぎます。このダムは、保定市の重要な水源です。それだけでなく、いま、突貫工事がつづけられている、南水北調・中ルート、石家荘―北京区間が、完成すれば、北京の、水源になるはずのところ。2006年中に完成し、翌年からの供水が、目標だそうです。オリンピック乗り切りの、秘策！

前世紀90年代の末から、中国でも、環境意識の高まりを、つよく感じていたんですよ。北京の水資源を守るために、大同でも、たくさんのプロジェクトがはじまり、中央からの、資金も投じられています。ところが、最近、急激な経済膨張にともなって、逆の現象も、あちこちで目にするんですね。

とくに、貧困地域で、千載一遇のチャンスのように、開発に、飛びついていく。最近、そちらのほうが、ずっと気になる。単純に、反対もできないですしね。そして、いったん壊してしまうと、その修復は容易ではない。1元を私的にもうけるために、1万元の公益を損なうようなことは、あってはならないと、思うのですが……。

## NO. 293 ああ、ダンカイ。 2005. 02. 02

今回は、のっけから、引用です。「なにかにつけひとこと多いのは、戦後民主主義教育で育った私たちの年頃の救いがたいクセで、年をとればますますその度合いは増す。いわば、口から先に生まれ、口が最後に死ぬような連中である。おおかたが老人ホームに入っても経営陣と対立するのが趣味、意地でも人と違いたい「個性化信仰」の持ち主でもあるから、同居者同士の摩擦も絶えなかり。わけても、融和という言葉も知らずに生きてきたような、猫もまたいで通りすぎる「×××」稼業を長年つづけてきたような老人なら。」

(伏せ字は高見)

この一節を目にして、あっ、自分のことだ！と、思ったんですね。私は、それなりに努力して、自分をつくりあげてきたと、思っていたんですよ。というのは、あるとき、尊敬する師匠に、「どうすれば、先生のように、そのような（ユニークな）発想ができるんですか？」ときいたんです。

その当時、情報革命と、地方の時代といわれて、日本中が、盛り上がっていました。コンピュータ網、インターネットの到来！同じ情報が、世界中に、瞬時に伝わる、そうなれば、どこにいてもいっしょだから、地方の時代がはじまる、ということだったんですよ。

そのとき、師匠が話したのは、「どこでも、いつでも、ただで、入手できる、情報なんて情報としての、価値はない。そういう情報が、増えれば、増えるほど、酒を酌み交わしながら、こっそり、交換するような情報だけが、価値をもつようになる。これからは、東京一極集中が、いっそう強まる」ということだったのです。

以前は、東京、大阪だったのが、いまは完全に、東京、その他、でしょ。現状を見て、師匠のようにいうのは、なんでもないけど、あの当時に、そのようにいわれて、私は感電しました。で、自分では師匠とあおいだんですけど、先方は、私を弟子とは、認めてくれない。ですから、師匠の名前は、伏せたまま。

「どうすれば……」という、私の質問に、師匠の答えは、「考えに、考え、さらに考え抜く」というもの。「およそ、知識に頼って、生きていこうとするものは、オリジナリティのないことを、話したり、書いたり、すべきでない。内容にオリジナリティがあれば、いうことはないけど、最低でも、表現に、それがなければならぬ」ということだったんですね。私は、その言葉どおりに修練し、自分をつくってきたと、考えて、いたんですよ。ところが、のっけに引用した一節は、ひとつの世代すべてが、そのようであると、主張する。

試みに、私たちの事務所のニューフェイス、会田伸子さんを相手に、「ここに、あなたのお父さんのことが、書いてあるよ」と、前置きして、さっきの一節を、私が読んだんですね。彼女は、一昨年と、昨年と、秋に2回、大同にきたのが縁で、ここで働くことになった、がんばり屋さんです。これも、ふしぎな縁ですけど、彼女の父親が、学生寮で、私と同期だったんですね。あとになって、わかったことですけど。

笑いカワセミのように、軽やかに笑ってから、彼女は、いいました。「父親は、無口で、あんまり話しませんけど、それ以外のところは、そのとおりです」。彼女は、知らないんですね。家庭では、あまり話をしないけど、外では、一をいわれると、十で返すんですよ、彼女の父親は。きつと。

かなり古い本で、恐縮ですが、冒頭に引いたのは、関川夏央著「中年シングル生活」（文庫は講談社）の一節。関川さんは、1949年生まれだそうで、私の、1個だけ下。団塊ですね。伏せ字にしたところには、「書き手」とありました。まさに、師匠のいう、「知識によって生きていこうとするもの」ですね。それが、猫またぎ、なんです。

1999年の、夏のことです。現在のイオン労働組合、当時の全ジャスコ労働組合が、資金を提供して、霊丘県南庄村の、小学校建て替えに、協力してくれました。霊丘自然植物園を、建設中の村。雨が降ると、雨漏りがひどいので、自動的に、休学になる、というのが、それまでの、校舎だったんです。それが、レンガ建て、タイルばりの、ちょっと、しゃれた、校舎に変わっ

た。

内装も終わって、あとは開校式を待つばかり、という時期に、私たちのツアーが、訪れました。すると、黒板のいちばん下に「打倒日本地国主意」と、小さく書かれていたんですよ。子どもが書いたものでしょう。「地国主意」は、「帝国主義」と音が同じです。

その夜、県城のホテルに帰ったあと、ツアー参加者のなかでは、「日本人の思いが、理解してもらえてなくて、とても悲しかった」というような意見が、多かったようです。あとで、きいたところでは。

同じ時間に、べつの1室に集まった面々は、「不良中年の会」と称する小集団。「こどものころから、あれくらいの骨がないと、困るよね」「なんといっても、そういう歴史のあるところだからね」などと、不穏なことを語り合う。その主体は、やはり、ダンカイ。

その翌日も、だいたい同じメンツが集まって、酒を酌み交わしているなかに、若い娘が、まじってきたんです。私のつれあいの、太田と同室で、「あの部屋を、のぞいてごらん。いろいろ集まってるようだから」と、すすめられたそう。

翌朝、太田が、私に、問いただすんですよ。「昨晚、いったい、なにがあったの？」と。その女子学生が、部屋に帰ってから、「たいへんですよ。大ゲンカが、はじまって……」と、告げたそう。えっ、なんのこと？ 私たちは、ふつうに話していただけなんですけどね。私たちのふつうが、ふつうでなくなった。

ことしの春のツアー。なんの異変か、20歳代の若ものと、女性が、おおいんです。その2つが、だぶっている人も多い。そのつぎは、飛びに飛んで、70歳代。このところ多かった、50歳代の自分さがし組は、どうしたのかな？ たくさんいても、おたがい、ややこしいけど、いないとなると、やっぱり、さびしい。

## NO. 294 徐町郷 2005. 02. 09

初期のプロジェクトは、失敗が多かったんですけど、そのなかでも、忘れられないのは、大岡山徐町郷です。2年目まで、たいへんよく育ち、花まで咲くようになったアンズが、3年目に壊滅してしまいました。それも80ha、6万本という規模で。これについては、なんども書いたり、話したりしていますから、内容については触れません。【注】この郷のなまえはただしくは徐疇でした。でもこの字が日本にありませんし、地元でも略字の徐町をふつうに使っていましたが、この文章のなかで両方が混じることをお許しください。

その傷痕は、すっかりふさがり、あの失敗のおかげで、りこうになった、と自分では、思っているんですけど、私が、よくその話をするものですから、よほど深い、トラウマになっているんじゃないかと、考える人もあるよう。中国側でも、「ガオジェン（高見）、やりなおそうよ」といいます。

事情があって、2003年3月から、大同のカウンターパートが、青年団から、総工会（労働組合の連合体）に変わったんですけど、大同県総工会の主席が、李子明です。なつかしい再会でした。李子明は、1992年4月、最初に徐町郷を訪れたときの、党書記です。徐町郷を、モデルにしようと考えた、理由の1つが、彼を、信頼したことです。彼が党書記のあいだは、とてもうまくいき、人事異動で、彼がいなくなったとたんに、失敗しました。

そんなこんなで、徐町郷小王村に、小さなプロジェクトを、1つ、つくることになりました。数年前の行政区画変更で、徐町郷は、となりの郷と合併し、いまでは峰峪郷ですけど。あとで、わかったことですけど、この村は、環境林センターの、立ち上げ時に活躍した、徐尚紅（現在は城区の党の副書記）は、この村で生まれ育ちました。人間関係が、からむんですね。からんだほうが、こういうケースでは、うまくいくものです。

昨年12月に、大同を訪れたとき、1日を割いて、小王村に、行ってきました。党支部書記の案内で、プロジェクト予定地をみたんですけど、その話は、いつか、独立の1回で書きましよう。ふと、王秘書のことを、私が口にしたのです。李子明が党書記のころ、郷政府の秘書をしていました。小王村の人です。するとすぐ、携帯電話で、連絡をとってくれました。折悪しく、彼は、所用で、大同市内に、でかけていました。でも、飛んで帰るから、待っていてくれ、とのこと。

人の顔を、憶えないのが、私の才能なんですね。本人に会っても、わからなかったらどうしよう、なんて心配をしてたんです。でも、だいじょうぶでした。私が、「用事ででかけていたのに、呼び戻してゴメン！」というと、「外国の友人が、自分を訪ねてくれるなんて、こんなうれしいことが、あるものか！テレビでは、あなたのことを何度もみていた」といって、抱きしめて、くれました。

堰を切ったように、いろんなことを思い出したんですね。92年と93年の秋、ここの郷政府に、通算で、3週間は泊まったんですけど、そのとき、世話をやいてくれたのが、王さんでした。そのころは、私も、いまのように忙しくなく、あるとき、釣り竿を借りて、冊田ダムに、釣りにいったんです。遠来の客への、サービス精神なんて、まったくなく、ここの魚は、1匹も、釣れてくれなかった。

私が、くやしがるのをみて、よほど魚を食べたいんだと、王さんは、考えたよう。どこからか、生きたフナを、買ってきてくれたんです。なにかの袋に入った魚を、バイクの荷台に積み、

そのうえに、私が座って、彼の家にいったんです。お尻のしたで、ムズムズと動きますしね。ズボンのお尻が、濡れてきますしね。そんな感触まで、よみがえってきたんですよ。私は、そのときも、徹底的に、酔っぱらってしまったんですけど。

村のうしろは、渾源泉との県境の、龍首山です。村のはずれの、山すそから、きれいな水が流れ出ており、村の女性が、集まって、洗濯をしていたものです。その横に、高さ2m以上の、石の塔が、立っていました。ずいぶんと歴史をへた、仏教関係の塔で、端正な姿が、印象的でした。なんども、みにきたものです。「いつてみたい」と、王さんにいうと、「2002年の10月1日に、盗まれてしまった」と、いうんですよ。国慶節の、めでたい日を、ねらわれた。「えっ、だれに？」と、思わずいったんですけど、それがわかるくらいなら、なくなりほしめない。

激しい雨が降ると、龍首山から、土石流が発生します。前方には、桑干河をせき止めた、冊田ダムがあり、この郷は、ダム湖に面しています。少しだけ、龍首山に登ると、山からダム湖までに、ものすごい数の、浸食谷がみえるんですよ。大小あわせて48、という話をきいたこともあります。水土流失の問題を、説明するのに、とてもわかりやすい光景ですから、以前にも、何回も、何回も、写真を撮りました。

今回、同じ場所まで、登って、ビックリ！ファインダーをのぞいて、なおさらビックリ！あれほどの、浸食谷が、みえないんですよ。マツの木と、ポプラが、おおいにきました。(緑の地球ネットワークの、会報1月号表紙の写真です)。ここまで育てば、水土流失の防止に、役立つでしょうね。このマツの植林にも、当時、私たちは協力しました。でも、アンズの失敗の、ショックが大きくて、マツを植えたことなど、すっかり忘れていたのです。

緑化というのは、割りの悪いしごとで、悪い結果は、すぐにでます。あのときの、アンズの失敗が、そうです。そして、いい結果がでるには、長い時間がかかります。いま私が目にしている、成長したマツが、その実例です。まったく予期してなかったんですけど、ほんとにうれしかった！

## NO. 295 友を選ばば、中国人 2005. 02. 15

私のばあい、中国にかかわる活動をつづけてますから、特別だとは思いますが、周囲で、最近、中国人と結婚する、若い人が、多いんですよ。しかも、すこし前までは、(女) 中国人— (男) 日本人というケースが、圧倒的に、多かったのに、このところは、(女) 日本人— (男) 中国人というカップルばかり。その女性たちが、自立心がつよく、有能な人たち。いい女！

最初に、私が中国を訪れたのは、1971年で、国交正常化の前年。もう33年にも、なるんですね。そのとき、私は、23歳。すてきな中国人女性に、お目にかかりましたし、その後も、さま

ざまに、お世話になってますけど、恋愛や、結婚の対象として、考えたことがない。

理由の第1に、私には、勇気がない。彼女たちは、美人で、有能で、そして、おっかない。理由の第2に、私は22の歳には、すでにケツコンしていて、わき目をふる、余裕がなかった。第3に、これが決定的な理由ですけど、先方の、相手を選ぶ権利が、優先するでしょう。要するに、見向きもされない。

恋愛や結婚はともかく、友だちとして、つきあうには、ゼツタイに、中国人だと、私は思います。若い人に、ぜひ、おすすめしたい。なぜなら、とても刺激的で、おもしろく、自分の成長に、役立つからです。自分の成長のために、なんていうと、やらしいと、思われるかもしれませんが、まあ、ちょっと、きいてください。

以前にも、書いたことがありますけど、日本は島国で、そこに暮らす私たちは、平均的などころに、みんな、まとまってしまった。人物、大人物もいないかわりに、箸にも棒にもかからない、そういう人間も少ないんです。

そのうえ、自分の頭で、考えたり、自分のことばで、しゃべったり、そういうことも、なくなっただけ。社会のなかで、割り振られた役割、自分が期待されている、役割に応じて、そのとおりに、しゃべっているにすぎない。立場がいわせる言葉が、氾濫していて、その人の肉声が、きこえてこない。ひょっとすると、肉声で話すことを、忘れてしまったのかもしれない。

えらそうなことは、私も、いえないんですよ。昨年末、東京で開催された、アジアの環境をめぐるシンポジウムで、発言の機会を、いただきました。終わったあと、出席者の1人が、話しかけてこられた。「あなたの話、おもしろかったですよ。NGO といっても、キャリアをつみ、ある程度の規模になると、その立場からの、発言になるのに、あなたには、それがいい」と。

私には、事務局長としての、自覚が欠けているんでしょうね。でも、私だって、自分の立場を、まったく考えてない、わけじゃないんです。13年間、つづけてきたことを、中途半端に、つぶしたくない。継続させたいし、発展もさせたい。そういう気持ちは、ちゃんとあると、思っています。でも、自分というものを、つぶしてでも、なんてふうには、考えない。そして、そういう公の場に、私を呼んでくれる人が、私に求めている（であろう）役回りに、私も応えているんですね。場をこわさない程度に、ハメをはずし、さざ波をたてる。そういうことでしょう。ほんとの、ぶつかりあいとまでは、なかなかいかない。

ところが、中国っていうのは、そうじゃない。中国人っていうのは、そうじゃない。人物、大人物がいるんですけど、それは少数。その反面、箸にも棒にもかからない人間が、少なくないんです。「遍天下」（天下に遍く）で、どこにでもいる。地方でいえば、トップクラスの幹部にも、ちゃんといます。私たちが十数年かけて、積み上げてきた成果だって、一夜で、崩壊し

かねない、そういう場面にであうんですよ。それにたいして、私は、自分の全智全能をかけて、たたかってみる。中味を詳しく書くのは、もうちょっと待ってほしいんですけど、カウンターパートが、大同市青年連合会から、大同市総工会（労働組合の連合体）に、移行した背景には、そういうことがあったんです。

それなりの結果を、うることはできました。そのおかげで、いまも変わりなく、協力事業が進展している。でも、そのとき、つきあいの長い、北京の幹部は、私にいったんです。「高見さん、あなたのやり方は、なまぬるすぎますよ。バカに対抗するには、それ以上のバカにならないとダメです」。中国語では、「以無頼对付無頼」というのだそうです。示された内容は、すごいものでした。自分では、とても思いつかない。私は、すっかり、その気になり、アドバイスされたとおりに、数通の、文書を、準備しました。でも、プリントアウトすることは、なかった。途中で、怖くなったんです。そのもたらす、結果が。

ほんとに、たいへんだったんですよ。1年以上もつづいた、あのゴタゴタは。でも、ほんとに親身な中国の友人の助けで、難関を、越えることができました。その一段を通過したあと、ずーっと、パワーアップした自分を、感じます。関係者の、相互の理解と、信頼関係も、格段に、強まったと思うのです。

ケンカひとつするにも、歴史的に練りあげられた、文化があるわけですね。自己主張と、自己防衛の強烈な、十数億人の、美しくいえば、切磋琢磨、ひらたくいえば、ぶつかりあいのなかで、人間関係の、処理法なんかも、磨き抜かれたものが、あるわけですよ。「正義 VS 邪悪」などという、単純かつ狭小な見方は、足もとにもよりつけない。

今回の題で、正月あけから、書きはじめたんです。でも、途中で頓挫して、デスクトップに置いたまま。半月ほど前、朝日新聞アジアネットワークの、都丸さんが、取材に、こられました。今回書いたようなことを、粗削りのまま、話したんです。それがきょうの朝刊に、短く、まとめられています。

## NO. 296 伝言ゲーム 2005. 02. 21

黄土高原の、沙漠化の原因として「環境破壊と貧困の悪循環」が、あげられます。そのもとを、たどれば、過大な人口の圧力。貧困から抜け出すために、耕地を広げる。貧困から抜け出すために、放牧の家畜の頭数を増やす。悪循環の内部にある人が、あがけばあがくほど、悪循環は、さらに強まります。

しばらく前から、中国政府は、「退耕還林・退耕還草」政策を、打ち出しました。急傾斜地など、条件の悪い畑での耕作をやめ、森林や草地に還していこう、というもの。黄土高原の、農

村の実情からみて、妥当な政策だと、私は、思いました。

なかでも、いいと考えたのは、予算の、裏打ちが、あったこと。従前の、中国の農村政策では、けっこうなことが、いわれても、一方的に、農民の負担になったり、かけ声に終わることが、多かったのです。今回は、退耕還林に応じる、農民にたいして、食糧や、現金のかたちで、補償があった。悪循環から脱けだすためには、外部の支援が必要なんです。年限の短いのが、心配ではあったんですけど。

たとえば、大同の農村の環境がよくなれば、河下、風下の、北京、天津の環境も、よくなります。逆に、大同の農村の環境が、これ以上悪化すれば、北京、天津は、人が住めなくなるかもしれない。環境難民の悪夢も、現実にならないとはかぎらない。そういうことを考えたら、退耕還林には、画期的な意義があると、私は思いました。

ちょっと脇道にそれますが、難産だった京都議定書が、2月16日に発効しました。そのなかに、クリーン開発メカニズム（CDM）が、あります。工業先進国と、開発途上国との、協力を促すことになれば、積極的な意味があると、思うんですね。現在の中国は、その身のうちに、世界を抱え込んだようなもので、世界の最先進（富裕）から、最貧困に近いところまでの、すべてがあります。そういうことからいうと、「退耕還林」を、CDMの、中国国内版だと考えても、いいでしょう。

ところが、農村の現場では、疑問を感じるものが、少なくないのです。顔見知りの農民は、それまで耕していた畑の、大半が、退耕還林の対象になった、といました。作物の代わりに、植えることになったのが、イタチハギ（中国では紫穂槐といいます）と、アンズ。イタチハギはともかく、アンズだったら、なんとかなるだろうと、思われるかもしれませんが。私も、そんな題名の本を書き、成功例として、なんども話したり、しています。

でも、彼は、アンズの種を、畑に直播きしたっていうんですね。黄土丘陵で、水も、肥料分も、乏しいから、1年たっても、20~30cmほどしか、伸びない。仮に、育っても、実生の苗ですからね、実がなっても、経済性はほとんどない。政府の食糧補償が、あるあいだはともかく、そのあと、どうやって、生きていくんでしょう。こういうことで、農民が、積極的になれるはずがない。

それとは対照的に、幹線道路の道路沿いに、すばらしい広さの、緑化帯がつくられています。片側で、幅50mはあるから、両側で、最低100m。ポプラを植えているんですね。この地方でいえば、1等地！交通の便も、水の便もいい。肥料も、優先して、いれてきているでしょう。その耕地をつぶして、ポプラを植える。なんの意味が、あるんでしょう。

ある郷の、党書記が、顔なじみです。この協力事業の初期に、いっしょに農村を回りました。

激しく、ケンカしたこともある。彼が、「この郷では、退耕還林もうまくいったし、すばらしい緑化ができた」といって、鼻高々。大同から、五台山にいたる、あの観光道路に面していて、片側 50m どころじゃない幅に、ポプラを植えた。でも、それが育ったら、観光客は、トンネルを走るようなもので、周囲の景色は、まったくみえない。

そういう場面にであうたびに、遠田宏顧問が心配してたんですね。食糧問題が、おこりはしないか、と。たんに、面積の問題じゃないですからね。農耕地にたいする、基本の考え方が、揺らいでいるわけですよ。

そしたら、昨年春の、全国人民代表大会で、木を植えるのは、いいことであっても、そのために、農地を、つぶしてはならない、という決定がなされたそう。前年秋から、道路の両側に、ものすごい数の穴が掘ってありましたからね。あの穴に、はたしてポプラが植えられるか、中止されるか、注意して、見てたんですよ。たいていは、植えられました。

その一方、この地方で人気のある、新疆ポプラの、苗木の値段は、暴落しました。私たちの、環境林センターでは、かなりの数の育苗をしていましたので、打撃は、小さくなかった。

昨年 12 月、大同の農村を回っていると、多く目にしたのは、「基本農田保護」のスローガンでした。一転して、食糧や、農地が、重要視されるようになったのでしょうか。農業政策は、たいていの国で、ジグザグします。日本なんかも、その典型でしょう。だから、中国が、とくにひどいというわけじゃない。

でも、中国には、ひとつの大きな問題があります。中央、北京は、それなりに、理念的で、長期的な政策を、だすんですね。単純な、私なんか、つい、ほれこんでしまうくらい。ところが、それが、中央—省—市—県—郷・鎮—村というふうにだんだん下におり、会議—会議—会議……をへて、現場に着くころには、ずいぶんと、ちがう内容に、なってしまう。各段階で、つごうのいい解釈がなされるんですね。ときには、中央の考えが、現場の実際とは、大きく遊離していることもある。

わが家の、息子たちが、小学生のころ、「電話連絡網」というのが、組織されており、学校を出発前に、連絡事項が、家庭に伝えられるんですけど、内容が、変わってしまって、理解に苦しむこともありました。そう、「伝言ゲーム」ですね。国の広い中国は、その苦勞が、大きいようです。

## NO. 297 粗悪な農器具 2005. 03. 01

私の衣類の、ほぼすべてが“Made in China”。パソコン周りなども、中国製がいっぱい。べつ

に、中国びいき、だからじゃ、ないですよ。いまや中国は、世界の生産工場。市場も大きくなって、「中国が風邪をひいたら、日本経済は死んでしまう」なんて、いわれるしまつ。中国製品がなかったら、国の経済はともかく、庶民の、生活がなりたたない、というのは事実。

ところが、私が中国にでかけるとき、かなり大きめの、スーツケースが、いつも満杯。体重ぶんくらい、あつたりします。まるで、かつぎ屋。といっても、ハイテク製品が、つまってる、わけじゃないのです。それとは、まったく、逆。

環境林センターのなかにあった小老樹（伸び悩みのポプラ）を切って、年輪の調査を、したかったんです。5年ほど前のこと。センターの職員に、ノコギリを買いに、走ってもらいました。店から、電話をかけてきて、「1mのものと、1.5mのものと、どちらが、いいでしょうか？」とのこと。どちらも、大きすぎますが、ほかにないというので、1mのものを、たのみました。届いたものをみて、びっくり！

両側に柄をつけて、2人が向かいあって引く、ノコギリです。いや、ノコギリに似たもの、です。鉄板を、プレスで抜いて、ノコギリの刃の、ギザギザには、してあるんだけど、目立てはしてないし、刃のフレもついてない。もちろん、柄はついてない。それらは、ぜ～んぶ、「自分でやりなさい」。

職員が使っている、剪定ハサミも、ひどいものです。切れません。しょっちゅう研いでますが、材質が悪いし、かみあわせも悪いから、どうにもならない。切る、というよりは、はさんで折る、といった感じで、切り口は、バサバサ。彼らの話では、改革開放前にくらべても、品質は、転落したそう。能力のあった製造者は、より、もうかる分野に、移ったのでしょうか。

しかたなく、冒頭に書いたように、刃物を中心に、日本製を、運んだんですね。技術者たちが、それを手にし、手近の、木の枝なんかで試して、切れ味に、びっくり！ポプラや、ヤナギの挿し穂とか、アンズ苗の根とか、切り口がきれいであれば、そこからの発根も早いけど、切り口がグチャグチャだと、根がでにくいし、腐りやすいでしょ。

「あんたらに、ラクさせようと思って、運んできたんじゃないよ。あんなハサミじゃ、苗木がかわいそう。苗木のために、もってきたんだよ」だなんて、いわなくてもいいことを、私はいいます。切れ味を知った、ほかの苗圃の技術者まで、「お金は払うから、自分のぶんも、買ってきてもらってくれ」と頼むんですね。

刃物に、かぎりません。クワ、スコップなども、刃の材質が、よくないんですね。材質がよくないうえに、薄すぎて、力をこめると、刃がしなうんですよ。体重をかけて、踏み込んでも、その力は、逃げてしまう。それから、柄に適した、木がありません。スコップの柄も、ポプラだったりするから、こじると、すぐに折れちゃう。ワーキングツアー参加者は、みんな経験し

たはず。

これまで何度か、大同の技術者たちを、研修のため、日本に、招きました。彼らは、おみやげに、農器具を買います。家族への、おみやげのまえにね。霊丘自然植物園の、李向東なんか、トンガや、高枝切りまで、持ち帰りました。そういう姿を目にすると、私も運び屋を、志願せざるをえないんですね。ところが、体重なみの、荷を運ぶのは、年齢とともに、こたえてきました。チェックイン時に、重量オーバーを、すりぬけるのも、たび重なると、つらい。そこで、考えました。大同でこそ、いいものは、手に入らないけど、北京だったら、あるだろう。こんなに、大発展して、デパートなんかの、品ぞろえも、充実してきたんだから。北京で入手できれば、ずっとラクになる、と。

王府井にいけば、衣類や、おしゃれ用品は、たくさんならんでいます。中関村にいけば、IT商品は、そろいます。でも、そんなところに、農器具があるわけない。北京の友人に、メールで尋ねて、それをもとに、探してみました。日本のメーカーの、農業機械も、けっこう、並んでいます。チェーンソーなんか、品ぞろえ豊かだし、電動の、大工道具もそろっている。

エンジンつきの、苧払い機（草刈り機）を、私たちも、購入しました。

ところが、ノコギリ、ハサミ、といった小物は、北京の市街地では、みつからなかった。しかたがないので、近郊の、農村地帯まで、足を延ばすと、そこでは、もちろん、農器具も、売られています。でもね、そのものは、大同で売られているものと、大差ない。切れそうにないハサミ、切れそうにないノコギリ。それだけでなく、プラスチック製品なども、北京市の中心部でみるものと、まったく別もの。店にはいっただけで、溶剤の刺激で、目がショボショボする。都市と農村とで、なにもかも、ちがうんです。

まあね、刃物についていえば、切れる刃物があると、樹木が犠牲になるから、製造と流通が、国の政策で、禁止されているようです。効率のいい農器具についても、それが普及すると、ただでさえ過剰な、農村の労働力が、いっそう余るので、これも、禁止の対象。逆に、切れない刃物、効率の悪い農器具は、農民に、忍従の精神を育てるので、奨励されている。（中国の友人たちは、こういうジョーダンを、4字×4行あたりの、小話にするんでしょうね。私にはムリ、ごめんなさい）

現在、大同県周士庄鎮に、新しい苗圃を、建設中です。漢の高祖・劉邦が、匈奴の冒頓単于に、7日7晩包囲された、世界の歴史名所（！）白登山を、正面に望むところ。4月からは、育苗がはじまります。そうすると、大小、さまざまの農器具が必要になります。いい入手方法を、ご存知の方は、ありませんでしょうか？

今回は、いや、今回も、黄土高原とは、無関係の話。1月下旬のことです。わが家の、家庭菜園の、野菜の残りカスを片付けていました。それが終わったら、浅い溝を掘り、分解して、土に還った、台所の生ゴミを、埋めていきます。大寒の直後の、いちばん寒い季節で、臭いも立ちにくく、こういう作業に、最適。ご近所に、迷惑をかけなくて済みます。もっとも、コンポスト容器のなかで、発酵促進剤を加え、1年以上寝かせているため、完全にフカフカの土に還っていて、悪臭は、ありませんけど。

枯れて、白く乾いた、ハクサイの外葉のウラに、長さ 25mm ほどの、小さなサナギをみつけました。複雑な色合いの、褐色です。何気なく、室内にもちかえって、ランの鉢に、くっつけておきました。南向きの明るい出窓に、おいてあります。

いつもなら、そんなことしないでしょうけど、その直前、伊丹市の昆陽池にある、昆虫館を訪ねたんです。自宅から、歩いてそう遠くない。温室のなかで、無数のチョウが飛んでいます。花の香りがプンプンで、文字通り常夏。サナギもいろいろ、展示してありました。なかには、羽化が近づくと黄金色に輝く、というものも……。ペイントしてあると、最初は思ったんですけど、そうじゃない。自然のまま、ほんとにきれいで、神秘的！

わが家のサナギは、それほどではありません。1か月、たちましたけど、変化はみられない。生きているのか、死んでいるのか、それすら、わからない。存在を忘れてしまいます。

2月27日の日曜日、つれあいの母親が、「窓から、チョウチョがはいってきた！」。まさかね、こんな季節に。つれあいが、思い出しました。「あのサナギじゃあ？」。たしかめると、背中が割れて、空っぽ。ザンネン！ 羽化するところを、観察できたら、おもしろかったのに。

キアゲハです。小学生のころ、私は昆虫少年で、虫アミで、チョウを追っかけてましたから、それくらいはわかります。わかるはず。それにしては、小さいかな？うん。チョウによっては、春先のものは小型で、夏になると……。というふうに、季節で大きさのちがうものも、あったはずだから、春、第一代のキアゲハは、小型なんだろうと、自分を納得させ、家族にも解説しました。

出窓のスペースを、パタパタ、飛ぶんですね。明るいほうを、めざします。でも、そこにはガラス。部屋のほうには、障壁はないんだけど、そちらは暗いから、チョウはいこうとしない。幅 60cm、高さ 120cm、奥行き 40cm ほどの半ば密室(?)の空間を、元気に飛び回ります。日中の、暖かいあいだは……。夜間になると、外の最低気温は氷点下で、スイレンの水は、凍っていますから、外に放すわけには、いかないでしょう。

生きているものを、死なせたくないですからね。飼育法でもでてないかと、インターネット

で、「キアゲハ」を検索しました。類似のチョウに、「ナミアゲハ」があるそうです。「ナミ」は、「並み」で、たんに「アゲハ」「アゲハチョウ」とも、呼ぶのだそう。このたびのチョウは、こちらのようです。ポピュラーなはずなのに、昆虫少年だったはずの、私が、その存在すら知らなかった。その中途半端さが、私の限界なんですね。なにごとにおいても。

キアゲハの幼虫のエサは、セリ科植物。ナミアゲハの幼虫のエサは、ミカン科の植物。数年前までは、セリ科のパセリも植えてましたけど、いまはなく、ミカン科の甘夏が、いまもあります。それからいっても、これはナミアゲハ。

甘夏の葉についてる幼虫は、みたことがあります。このアゲハだったんですね。でも、サナギがくっついてたのは、ハクサイの外葉。甘夏からそこまで、7~8mは離れています。サナギになりかかった体で、はっていったんでしょうか？

つれあいは、砂糖水を小皿に入れて、出窓におきました。アブラナ科の、紅葉苔の花を、花瓶にいけ、ウメの花も、それに挿しました。何種類もの切り花、鉢植えを、買ってきました。「思いもかけぬ出費」といいながら、彼女は楽しそう。

左半身が不自由な、つれあいの母親は、出窓のチョウの動きを、一日、見守っていて、話してくれます。春を待つ、といったところなんでしょうね。1つの小さないのちが、こんなにも、なぐさめてくれます。3月8日朝も元気だったので、もう10日目。

こんなことを、書きながらも、ハクサイやキャベツにつく、チョウの幼虫をみれば、これからも私は、皆殺し策を、探すんでしょうか？親たるチョウが飛んできたら、憎々しげに思うんでしょうか？ひよっとすると、ちょっとは考えが変わるかもしれない。

文革期、農村に下放された中国の文学者、謝冰心さんが、「チョウチョは美しいもの、と思い込んでいた自分の価値観が、農村生活で変わった」という意味のことを、書いていました。ほんとうは、どういう気持ちだったのでしょうか？いま、中国の都市の人が、農村をみて、どういうことを、考えるのでしょうか？

## NO. 299 各県の名産 2005. 03. 14

大同市には、4つの区と7つの県があります。それぞれに、名物があるんですね。大同の市内から、どこかの県に出張するとします。昼食のとき、夕食のとき、その県の名産を、注文します。家族へのおみやげに、買って帰ります。えらい人がやってきたら、地元の幹部が、車のトランクに押し込みます。

いちばん南の霊丘県の名物は、ソバです。ソバは生育期間が短く、痩せ地で育ちますので、無霜期の短い大同の全体で、適するはず。でも、ほかの県では、ソバは歓迎されません。面積あたりの収穫が、少ないからです。日本のように、商品として高く売れば、話はべつですけど、たいていの農村は、自給ができるかどうか、ですからね。

日本のソバが、甜蕎麦と呼ばれるのにたいし、ここのものは、苦蕎麦が中心。苦蕎麦は、糖尿病その他にたいして、治療効果があるけど、甜蕎麦を食べると、旧い病気がぶりかえす、なんて話を、地元の人から、きかされました。日本で韃靼（だつたん）ソバといわれるものが、同じものかもしれない。霊丘のソバは、調理のしかたも、日本とは異なり、水っぽくて、えっ、これがソバ？

広霊県の名物に、銘柄粟の「東方亮」があります。1つの郷の、狭い地域でしかできず、同じタネでも、べつのところ栽培すると、ずっと質が落ちる、とか。鮮やかな黄色をしており、すぐに煮えて、甘みがあるそう。人から人へ評判になり、遠くは北京からも、買いにくるそう。大同市内でも売っていますが、ニセモノが多いそうです。スーパーで、私が手に取っていると、「黄色が濃すぎるから、着色したニセモノ」といわれました。

この県の、以前の青年団書記が、その郷の、郷長に赴任しました。「有機栽培したものを、伝統的な石臼で加工し、緑色食品として売り出したいから、協力してくれないか」といわれたんですけど、断ったんです。そんな余裕はなかった。いまだったら、それで利益をあげて、緑化活動を支える、というようなことを、考えるかもしれない。

広霊県の名物に、もうひとつ、豆腐乾があります。高野豆腐を、さらに固くしたようなもので、しっかりした歯ごたえがあります。白酒（パイチュー）のツマミに、すすめられますが、私は、おいしいと思ったことがない。

その西隣りの渾源県。北岳恒山と、懸空寺を擁する、観光資源の豊富な県です。最初に協力を開始したのが、この県でした。名物といわれるのは、リャンフェン（涼粉）。ジャガイモ・デンプンでつくった、トコロテンのようなものです。それに、乾燥して炒った小粒のソラマメと、ラー油を、自分で加えて、食べます。ラー油には、まっ赤になるくらい、トウガラシがはいっているけど、このトウガラシは、あまり辛くない。ジャガイモ・デンプンですから、ふつうなら、主食に属し、最後にでてくるはずですけど、ここでは、テーブルの最初にでてきます。

この県で、私にとって印象深い名物は、白酒（パイチュー）です。コーリャンなどを材料にした、透明の蒸留酒。変わった形のビンの、「老白干」には、「パリ国際博覧会で金賞受賞」と、書かれていました。アルコール度数は、56度。これは、お値段も高くて、めったに飲まなかった。その下に、何種類か、ありました。いちばん親しんだのは、「高粱酒」で、1斤=500gのビンが、2.7元。屋台のはかり売りだと、1斤が2元。リットルあたりで、ガソリンと同じ値段で

した。酒の話になると、それだけで1回ぶんの原稿量を超えますので、ここまで。

大同県のいちばんの名物は、黄花菜でしょう。乾燥したものを、金針菜ともいいます。ユリ科の、キスゲ、ユウスゲのなかまです。花も、とても美しく、香りが、すばらしいんですね。日本の園芸店には、属名「ヘメロカリス」そのまま、いろんな品種がでていますが、あの仲間。早朝、開く前のツボミを摘んで、蒸したあと、天日で乾燥して商品にします。日本のスーパーにも、「百合の花」で、並ぶようになりました。ナマで炒めると最高ですけど、それは産地だけのぜいたく。ふつうは、乾燥したものを、水でもどして調理します。

大同市西北の角、左雲県の名物は、胡麻油です。胡麻はゴマですけど、この地方で胡麻というのは、アマ(亜麻)のことです。薄い水色の、きれいな花が咲きます。背丈はそう高くなく、40~50cm。その小さなタネを搾って、油をとります。食用油です。左雲県とか、となりの右玉県とか、出張が決まると、油を持ち帰るための、容器を準備する人もいるくらい。同じ花が、山の、カラマツ林の周縁なんか、咲いているのを、みかけることがあります。はたして、野生のものか？栽培ものが、エスケープしたのか？

新栄区の名物に、ユウマイ(莜麦)があります。エンバク(燕麦)=カラスムギです。黒パンの材料ですね。しばらく前まで、この地方で、もっとたくさん、栽培されていたようです。いろんな作物が品種改良され、栽培技術も改善されたので、逆比例して、栽培面積が減少したのでしょうか？新栄区では、30年余りまえ、周恩来総理にともなわれた、フランスのポンピドゥー大統領が大同を訪れたさいに、新栄区のエンバクが供せられたことがいまでもジマンです。

この協力事業が、スタートしたてのころ。対日関係の長老、張香山さんから、「あそこにはエンバクがあって、おいしいけど、外の人が、たくさん食べると、下痢をしますよ」と、忠告がありました。抗日戦争の最中、この地方を転戦しているとき、村人にすすめられて、食べすぎ、ひどい目にあっただそうです。

陽高県は、ずーっと以前から、果物で有名でした。といっても、山西省内のことでしょうけど。中心は、アンズです。道路の両側に、年輪を重ねた、古木があります。時期には、サクラに負けない花盛り。収穫は、7月です。いろんな種類の、アンズがおいしい。

最近、他の県で、植えられているアンズの大半は、杏仁(タネの中身)を目的にした、仁用杏ですが、陽高県には、果肉目的の、新旧の品種が、たくさんあります。生食用にもだしますし、アスコルビン酸(ビタミンC)で防腐処置をして、乾果としても、出荷します。カウンターパートの技術者のなかに、陽高県出身者が多いのは、そういう伝統のためなのでしょうね。

最後に残ったのが、天鎮県です。大同市のなかで、自然環境のもっとも厳しい県です。経済的にも、もっとも貧しい。なんとかしたいと、私たちも、プロジェクトをつくってきました。

でも、たいてい失敗しました。橋本紘二さんの写真集『中国黄土高原—砂漠化する大地と人びと』に、いちばん多く収録されているのも、この県です。

でも、この県に、名産というべきものがあったかどうか、いくら考えても、思い出せません。ところが、北京の友人の話では、彼の住宅のすぐそばで、天鎮県産の野菜が「緑色食品」として、飛ぶように売れているそう。値段が高いにもかかわらず……。北京には、距離的に近いんです。その利点をいかしたんでしょう。

「名産」とあるのをみて、多少でも期待した人は、「な〜んだ」と思われるでしょうね。たいしたもの、ないんです。でも、10年前までは、こういうものが、ゴチソウだった。いまでは遠方からも、いろいろなものが入ってきますから、そういうものを食べられる人は、あまり魅力に感じないでしょうね。次号は、大同からお送りします。

## NO. 300 『雁棲塞北』 2005. 03. 24

「黄土高原だより」が、300号です。第1号は、1999年4月ですから、まる6年。ついフラフラ〜とはじめたのに、よくつづいたものです。読みつづけてくださった方たちのおかげです。200号の段階で、それまでをまとめたものを、『ぼくらの村にアンズが実った』（日本経済新聞社、2003年）として、刊行することができました。

しばらく前から、友人の李建華さん、王黎傑さんによって、中国文への翻訳がつづいていましたが、まもなく出版の運びになりました。大同にくる途中の北京で、関係者と、夕食をとみにしました。表題は、『雁棲塞北〜来自黄土高原的報告』。出版社は、国際文化出版公司。サントリ文化財団の、翻訳出版助成を受けました。前上海総領事の杉本信行さんから、「あの本は、日本人より、中国人に読んでもらいたい」といわれていたのですが、それが実現します。

序文を、劉徳有さんが寄せてくださいました。毛沢東はじめ、中国のトップリーダーの通訳を務めた方で、その後、駐日記者として、長く活躍されました。帰国後、中華人民共和国文化部の、副部長でした。日本風にいうと、文化省次官。書いてもらっただけでうれしいのに、あまりに評価が高すぎて、私としては、身の置き所がありません。

題字は、中華全国総工会副主席の、徐錫澄さんが、贈ってくださいました。中国書法家協会会員で、書家としても著名な方です。昨年4月には、大同の協力プロジェクトを、視察されています。装丁とデザインは、呂敬人さんで、その方面の第一人者だそう。2000年に、私たちを同行取材された『世界知識』記者・葛軍さんの記事を、とくに頼み込んで、収録させていただきました。「解説」としても、ぴったりだと思います。

4月25日に、北京で、出版記念会が開催されます。白立文さんのお骨折りで、主催は、中国職工対外交流中心、国際文化出版公司、北京東方之星綜合企画有限公司、の3者になりました。苦勞をともにした、大同のなかまも出席してくれます。

表題の「雁棲塞北」は、李建華さんの発案です。塞北は、長城の北の意味で、中国人には、すぐにわかってもらえるでしょう。大同の南に、万里の長城の内城があり、平型関、雁門関などが有名です。「棲」は、住み着くとか、鳥が止まる、といった意味。雁は、季節の渡り鳥ですから、「塞北を渡る雁」とでも、訳したいところ。この表題でもわかるように、李建華さんは、文化人ですから、彼が訳すと、私なんか酔っぱらって書いたものでも、教養ある人が書いたように、誤解されそう。

このたび、桑干河を渡るさい、わずかですが、水が流れていました。そこに、大型の水鳥が群がっています。車を止め、河原において、カメラを向けると、いっせいに飛び立ちました。一陣、また一陣。300羽はいるでしょう。「大雁だ！」と、同行の魏生学が叫びました。大きな声で鳴きながら、独特の隊形をつくります。大同に通いはじめて、14回目の春ですが、このような光景を目にするのは、はじめて。

春分を迎えたというのに、ことしの春は、ほんとに寒いのです。10日前は、最低気温が零下20度近くだったそう。23日も最低気温が0度。土もまだ、凍結しています。28日朝には、私たちのツアーが到着し、最南部の、霊丘自然植物園での作業からスタートしますが、さあ、それまでに、融けてくれるかどうか？

平年なら、春耕が始まる時期なのに、畑に人影は、ほとんどみられません。大同県で、新しく建設中の苗圃をみにいくと、そろそろ作業開始のはずだったのに、小雪のちらつく天候でした。

冬が長く、寒い地方ですから、春を待ちわびる気持ちも、ひとしお。それなのに、今年は遅い。すると、人びとは、思い起こします。「冬が寒いと、夏の雨が少なく、春が寒いと、夏の雨が多い」。古くからの、言い伝えです。

昨年12月にきたときは、とても暖かかったのです。なかなか、寒くならなかった。その後に冷え込み、春の訪れがとても遅い。だとすると、ことしの夏は、雨が多いでしょう。夏の雨は、豊作の約束です。いい年に、なってほしいものです。この地方の農村にとっても、私たちにとっても。

北京－大同間の、高速道路が開通してから、大同が、ずいぶん近くなりました。車で3時間ほどです。この道路は、八達嶺をへて、官庁ダムを橋で渡り、桑干河沿いに、大同に達します。

大同市最南部の靈丘県には、私たちの重点プロジェクトが、いくつかあり、ときには、直接、そちらに行くこともあります。北京－石家荘の高速道路を、河北省の高碑店でおり、国道112号線を西にすすみ、途中で、108号線に自然に移り、河北省の西端、涇源までくると、いい時間になるので、ここで泊まります。ここから靈丘自然植物園までは、40分ほど。今回も、そのようにして、大同にきました。

このルートには、おもしろいものが、いくつもあります。たとえば、秦の始皇帝の暗殺に向かう荊軻が、「易水送別の歌」をつくったところ（前227）。「風蕭々として易水寒し、壮士一たび去ってまた還らず」。暗殺は失敗し、彼は殺されます。それを記念した、荊軻塔があります。最初は、遼代の1103年に建てられ、その後、何度か修建されたものです。残念ながら、まだ行っていません。

同じ易県に、清西陵があります。河北省遵化市にある、清東陵と並ぶ、清朝の、歴代皇帝の陵墓です。その存在を、数年前に知り、人にはすすめて、訪れてもらったのですが、私自身は、行ったことがありませんでした。今回は、少し時間を浮かせて、立ち寄ってみたのです。

予想をはるかに超える、広大なものです。紹介によると、全体の区域は、800平方kmもあるそう。現在の保護区域は8300haで、皇帝陵4座、皇后陵3座をはじめ、14座の陵・寝があり、4人の皇帝、9人の皇后、57人の妃嬪など、合計78人が、埋葬されています。

このたびは、雍正皇帝の泰陵、光緒皇帝の崇陵の2つをみましたが、それだけでも、車をつかって、たっぷり2時間かかりました。崇陵だけは、地下宮殿も公開されていますが、明の十三陵よりは、かなり小振り。1938年に、盗掘されたそうです。しかし、地上の宮殿は、こちらのほうがりっぱでしょう。保存の状態も、時代が新しいこともあって、ずっと良好です。

殿宇を、巨大な丸柱が支えています。直径は、1mを超すでしょう。梁や、斗[木共]（ときょう）も、巨大です。柱は、金箔が張られたり、丹塗りされていて、最初は、1本柱と思っていたのですが、塗りのはげたところを見ると、何本もの木を組み合わせ、鉄のたがで、締めてありました。もともとそうなのか、修復によるものなのか、そのところは、私にはわかりません。

なにもかも、巨大、壮麗、というしかありません。全体の建築面積は、5万平方mもあるそう。参観をつづけるうちに、私は、ここが陵墓であることを、忘れていました。2000年11月に、世界文化遺産に登録されました。陵の近くには、十いくつの満州族の村があります。清朝は、満州族の王朝ですから、お墓を護っていた人たちの子孫が、いまもここで暮らすのでしよう。

ラストエンペラー、愛新覚羅溥儀は、数奇な生涯を送り、1967年に北京で亡くなりましたが、その遺骨は、北京の八宝山人民公墓に納められたあと、この易県の、華龍皇家陵園に移されているそうです。父親の光緒皇帝の崇陵の近く。

清西陵から、そう遠くないところに、烏龍溝長城があります。万里の長城の内城で、稜線を縫っています。私は、道路から遠望しただけですが、レンガづくりの、整然とした姿が印象的でした。いつか、たどりつきたいと思っています。

西隣りの涞源県は、太行山のなかにあります。平地のほとんどない、貧しい県です。抗日戦争のあいだは、ここも老区（根拠地）でした。平地の豊かなところは、日本軍が占領し、八路軍や遊撃隊は、貧しい山地にこもって、抗戦をつづけたわけです。自然条件が劣悪ですから、中華人民共和国になってからも、ずっと貧しいままでした。

ところが、最近、ここも経済が沸騰しています。新しい、きれいなホテルが、開店間近でした。途中でみる山が、痛々しいまでに、乱開発されています。ここには、さまざまな鉱石が埋蔵されています。それについては、最近も書きましたが、昨年夏にくらべても、いまはずっとひどくなっています。

涞源には、拒馬河の水源があります。地名の由来も、そこにあるのかもしれませんが。拒馬河は、北京市と河北省が、水争いをしているところ。貴重な水源です。その水が、鉱石の選別と洗浄のために、ひどく汚濁しています。どうなるのでしょうか？

## NO. 302 呉城村のアンズ (1) 2005. 04. 07

この春は、日程が立て込みすぎていて、バテバテ。黄土高原だよりを書くのも、ままなりません。さる報告書のために、呉城郷のアンズについて、これまでの経験と、新たな調査にもとづいて、一文をつくりました。長いのと、立ち入った内容もあるので、とくに関心のある人に、読んでもらいたいと思います。

渾源県呉城郷呉城村は県の最北部に位置し、大同県との県境近くにある。典型的な黄土高原の地貌を備え、水土流失がきわめて深刻で、畑は深い浸食谷に寸断され、村のすぐそばまで浸食谷が迫っている。典型的な「三跑田」で、土壌は痩せている。跑は逃げるという意味で、雨のたびに水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げるといのである。田は畑のことで、「畑」は和字で中国にはない。

ところが、この村で最近、大きな変化が進行中である。黄土丘陵の上部がアンズの林に覆わ

れたのである。4月中旬、この村を訪れる人はびっくりするだろう。遠望する満開のアンズの花はキラキラと白く輝き、黄土の丘陵に突然、広大な湖面があらわれたかのようにみえる。地元の人たちはこの時期に「杏花節」を設けているが、この期間に村を訪れる人は1万人を超すという。渾源県内、大同市内はもとより、なかには遠く太原から訪れる人もいる。

北京、太原、大同などの報道機関や上部からの視察も、年間数十チームが訪れ、緑化と退耕還林のモデルとして繰り返し報道されるようになった。2002年4月には、国家水利部と水土流失が深刻な8つの市・省が主催する「全国小流域治理水利水保宣伝会議」が大同で開催されたさいに、この呉城村で会議出席者の現場見学会が開催されている。

緑の地球ネットワークは1995年春、呉城郷の翟家湾村（地震被災後、村ごと移転して再建され、振興村と改名された）の小学校付属果樹園の建設に小面積の協力をおこなったが、その後、1998年から呉城村と協力するようになった。ここでは呉城村のアンズ栽培の経験を紹介したい。

このような貧困地域の経済を活性化するために、政府は適地適作の作物としてアンズ（仁用杏）の導入を検討した。1992年ごろのことである。呉城郷では当時の党書記（陳杏花、女性）が村人を組織して、アンズ栽培の先進地、河北省張家口市の蔚・涿鹿・懷来の各県を視察した。数回に分かれて、呉城村から50人ほどが参加している。

仁用杏は、果肉ではなく、種のなかの杏仁を目的に特化した種類であり、果肉は薄く、種が大きい。杏仁は食用、医薬・化粧品、工業用など広い用途をもつ。また乾燥保存が容易で、簡単な加工によって原料、半製品として出荷できるため、このような農村での栽培に適している。

仁用杏にもたくさんの栽培品種がある。視察を通じて呉城村が選択したのは「優一」である。乾燥と寒さに強く、毎年連続して収穫でき、他の品種に比べて杏仁の価格がよく、経済性が高かった。

村の先進分子による一通りの視察を終えたあと、村では8回の村民大会を開き、アンズ栽培の利点を広報した。しかしすべての村民が理解したわけではなく、最初に植えたのは村内460戸の半数弱の220戸、全体の面積は92haで、1戸あたり0.42ha、345本ほどである。栽植は希望する農家の畑におこない、管理も各農家がおこなう。収穫物はその農家のものである。計画と技術指導などのサービスを郷や村が提供した。植栽した農家のなかからも、その後、栽培をやめたものもでて、大面積の植栽はいったんストップした。

この時期、大同市の各県では仁用杏の栽培が大々的に奨励され、あちこちに「万畝仁用杏基地」が建設され、大きな記念碑が建てられた。1万畝は670haほどだから、かなりの規模である。しかしその大部分が失敗に終わっている。

緑の地球ネットワークも、手痛い失敗の経験をもっている。呉城郷の北隣りの大同県徐町郷で、仁用杏プロジェクトに協力し、80ha、6万本の植栽をおこなった。当時の私たちの力量はいまよりずっと小さかったが、ここをモデルにしたいと考え、かなりの資金を集中した。1994年春のことである。

最初の2年間は良好に生育し、なかには開花するものもできた。しかし3年目に壊滅してしまった。冬季ノウサギが出没し、苗木の皮をかじったために半分が枯れ、夏にはアブラムシによる被害があった。また購入した苗のなかに接ぎ木に失敗し、台木の芽の伸びた苗がたくさん混じっていた。そのまま生育し、実がなったとしても、果実は小さくて苦く、杏仁も苦杏仁で価格が安く、経済価値は乏しい。そのために農民に見限られてしまったのである。さらにアンズの導入に熱心だった有能な党書記が異動でこの郷を去ったことも大きい。

全体としてみれば、現地の農民には栽培の経験がなく、管理能力が低いのに、いきなり大面積に植えたため、いったん問題が発生すると受動に陥り、手をこまねいているしかなかったのである。また、アンズの生育は他の樹木に比べて速いが、それでも収穫までに4~5年はかかる。その間、施肥、農薬散布など資金と労力を要するのに、収入はまったくない。そのうえ、その他の作物の栽培面積は減少する。それをきらう農民によって、生育しはじめた苗木を抜かれることすらあった。その期間を持ちこたえるためには、強力なリーダーシップが必要であり、有能な人材の存在が不可欠である。

緑の地球ネットワークはその後もアンズを主とする、果樹栽培への協力をつづけてきたが、そのさいには最初は小さい面積でスタートし、農民が経験を積み、自信をつけ、成果に確信をもつようになってから拡大することにしてきた。この地方の気象条件は変動が大きいので、リスクを分散するためでもある。植栽までは簡単でも、その後の管理はずっとむずかしいので、地元の管理能力を超えるプロジェクトはかならず失敗するといっている。それが私たちのえた教訓である。

他の多くのプロジェクトが失敗したのに、呉城村は冒頭に述べたような大成功をおさめた。その要因を追ってみたい。

この村が卓越していたことの1つは技術の習得と管理に熱心だったことだろう。先述したように、先進地の視察を繰り返すとともに、河北省の専門機関から技術者を招聘したのもその1つ。年間7~8回、合計1.5か月くらいきてもらい、冬から春にかけては植栽の方法と準備、夏は農薬散布、秋はノウサギの食害の防御など越冬への備え、苗木が育ってからは剪定や接ぎ木の方法、というふうに四季の管理について、村人を集めては講習と実技指導を繰り返した。招聘費用は年間3,000元だったというが、その効果はきわめて大きかったといえる。

他のプロジェクトを悩ませたニセ苗の問題は、この村では最初から専門の技術者の指導があ

ったことで、基本的に回避できた。見る目をもった人間のところには、悪いものを売ろうとはしない。台木の伸びたものが部分的にあっても、活着後、現場での接ぎ木によって解決できることを知っていたし、その実践を通じて、いまでは村民の大部分が接ぎ木の技術を習得している。

ノウサギへの備えは針金によるワナ、毒エサ、苗木への忌避剤塗布、テープ・布切れの巻き付けなどで解決してきた。忌避剤は石灰に食塩、ディーゼル油などを混ぜたもので、虫害予防の効果もある。しかし、草が芽生えるまでの春先はノウサギにとってもエサが不足する時期で、忌避剤の塗り残しがあればそこをかじる。農民はインスタントラーメンの空き袋を巻き付けてそれに対抗する、といったようすを私たちも目にしている。

施肥は最初の4年間はおこなわない。苗の小さいあいだは、あいだにマメ、ジャガイモ、アワなどの作物を栽培しているので、その肥料が回っていくのだろう。その後の収穫期は、適量の農家肥（糞土）と複合肥料、炭酸アンモニウムなどを1株あたり1～1.5kg、大株には2.5kgほどを与える。

農薬散布は4月末と6月の2回実施する。中国農業科学院が開発した「菊脂」で、殺虫と殺菌の効果がある。幼苗ではアブラムシなどの害が致命的なものになりかねないが、ある大きさまで育てば大きな問題にならない。果肉が目的ならもっと虫害防除が必要だろうが、果肉に虫が多少はいても、杏仁の収穫にはあまり影響しない。

授粉は自然授粉であるが、いくらかの工夫がある。ここの栽培品種は主として「優一」だが、その5列にたいして1列の割合で、別品種の「龍王帽」を混植している。雌蕊と雄蕊の成熟の時間的なズレを、他種を混植することで解決しているのである。このあたりにも技術上の周到的な準備がみられる。「龍王帽」も仁用杏の1種で、実は「優一」以上に大きく、収穫量も多いが、杏仁に苦みが残り、価格は安い。

剪定は春節（旧正月）直後におこなわれる。かなりの経験と技術が必要で、初期は河北省から応援をえていたが、いまでは村民が自分でおこなえるようになった。他の村のアンズ園に比べての外見上の最大のちがいは、樹形がみごとに整っていることである。剪定—整姿にかぎらず、この村の多くの人が他の村にでかけて栽培指導ができるまでになっている。

アンズは旱魃と低温に強く、その特長は生育にしたがって強まる。土中深く根を伸ばし、深層の水分をも吸収するのである。乾燥がひどく、地下水位の低いところほど根は深く伸び、山西省の黄土丘陵では6m以上に達するという。この地方の在来樹種のニレ以上に旱魃に強いことを私たちも実見している。1999年と2001年はそれぞれ50年に1度、100年に1度といわれる大旱魃だったが、周囲の雑草や灌木が枯れるなかで、生育にほとんど影響がなく、正常に収穫された。

またアンズの寿命は長く、一般に 100 年は収穫が可能だといわれる。仮に地上部が老化しても、伐採すれば萌芽更新し、速やかに収穫を再開できる。競合する新品種が開発されたばあいにも、高枝で接ぎ木することによって、品種の更新が可能である。

残っている最大の問題は、開花・結果後の遅霜と凍害である。この村での開花時期は 4 月 15 日から 10 日間ほどだが、その後に気温が氷点下に下がると、幼果はみな落ち、収穫はゼロになる。最初の収穫を期待された 1997 年にそのような状況に陥ったし、最近では 2002 年がそうだった。ホルモン処理によって、開花時期を遅らせる研究がなされているようだが、この村では実施していない。

豊作の年のアンズ収入は、その他の作物の豊作年の 3 年分以上に匹敵する。最近では 2003 年、2004 年が豊作だった。3 年以上連続して落果する可能性は低いので、アンズ栽培の優越性は揺るがない。

#### NO. 303 呉城村のアンズ (2) 2005. 04. 08

いったん中断されていた大面積の植栽は、最初に植えたものの成功にはげまされて、2001 年に再開された。現在では全村で 290ha 余り、20 万本以上に拡大している。村の耕地面積は 440ha ほどだから、およそ 3 分の 2 をアンズが占めている。農業収入の 4 分の 3 がアンズによるものである。その他の作物はジャガイモ、アワ、キビと、浸食谷の底の水土の条件のいいところでトウモロコシが栽培されている。それらは自家用である。呉城郷全体ではアンズの栽培面積は 1,200ha になる。

呉城村ではいまのところ、170ha ほどで収穫が可能になった。1ha あたり 1,300~2,500kg の杏核を収穫でき、杏核 1kg は「優一」のばあい 10~12 元になる。「龍王帽」はそれより安く、杏核 1kg が 5.6~6 元である。1ha あたりの収入は 15,000~30,000 元だが、数年後には倍増が期待されている。

これまでの雑穀の収穫量は、1ha あたり 2,250~3,000kg で、1ha あたりの収入は 3,000 元以下、凶作の年はその半分しかなかった。面積あたりの収入は平均でも 4~5 倍、よく生育したところでは 10~20 倍になっている。

アンズの栽培を開始する前は、1 人あたりの年間収入は 300~500 元だったが、2004 年は 1,000 元を超えた。もっともよかった家では、2 人の労働力で 3 万円の収入をえている。

村の念願は加工場の建設である。大部分の収穫物は殻つきの杏核で出荷しているが、殻をと

って杏仁にすれば「優一」は1kgが34～40元になる（「龍王帽」は30～32元）。杏核3kg弱から1kgの杏仁がとれる。殻は良質の活性炭材料であり、1kg0.4元で取り引きされ、額は多くないけれども副収入になる。

仁用杏の果肉は薄く、味もよくないが、それでも自家で乾燥して出荷している。1kgあたり2元になる。アズの落ち葉はかき集めて家畜の飼料として利用され、トウモロコシの茎などに比べ、ずっと良質だという。

剪定した枝は家庭の燃料として使われるほか、線香の原料になるが、量は多くない。若い枝は、接ぎ木のための接ぎ穂としても利用される。これも量は多くない。

渾源県では呉城郷の成功以後、ふたたび大面積に仁用杏が植えられるようになり、栽培面積はすでに6600haを超えている。退耕還林の有望な栽培品種として注目されているからだ。

栽培面積の急速な拡大にともなって、今後、2つの可能性が考えられる。1つは供給過剰による価格の低落である。呉城村が河北省を視察した92年の段階では「優一」の杏核の価格は1kg43元だったが、現在の水準まで20%近く下落してきている。

有利な可能性としては、栽培面積の拡大によって生産が安定的に確保され、地元での製品加工が可能になることである。搾油、製粉などによって、付加価値をつけて出荷できれば、地元の経済が潤う。さらに、分散した村で小面積栽培され、販売ルートのなかったところでも出荷が可能になる。

従来日本では、杏仁は中華デザートのアズ豆腐の原料や医薬原料として少量が消費されるだけだったが、最近、良質の保湿剤として化粧品に使われたり、高栄養のナッツとしての消費が拡大しつつあり、中国からの輸入量も増加している。日本をはじめ国外での商品開発と販売ルートの確立は、今後の大きな課題になる。それが実現すればこうした農村の経済的自立にとっても大きな意味をもつ。

これまで主に経済面からアズ栽培の効果をみてきたが、環境保全の面での効果もきわめて大きい。この地方の環境問題にとって最大の課題は水土流失の防止である。アズが生育し枝を広げて地表を覆うようになれば、強い雨が降っても直接地面をたたいて、土を流すことはなくなる。雨水は葉と枝で受け止められ、その多くが幹を伝って地面におり、根に沿って地中に浸透するようになる。それはまた深く根を伸ばし、土中の水分を吸収して育つアズの生育を助けることになる。

黄土はまた通常の状態ではそうとうに固く、スコップの刃も立たないくらいだが、いったん耕起されるとパウダー状になって風に舞い、わずかの雨でも流されるようになる。アズ栽培

では耕耘の必要がないので、それだけでも流失が軽減されるのである。

剪定した枝が生活燃料になれば、周囲の山の灌木なども燃料に使われなくなる。農家の収入が安定すれば、ヒツジやヤギの放牧にたよる割合も低下する。山に自然に林が再生する条件が生まれるのである。その他の作物の茎や藁なども堆肥として畑に戻されることになり、徐々に畑の土を肥やす。長くつづいてきた貧困と環境破壊の悪循環が、ゆっくりとではあっても、良性の循環に変わっていくのである。

呉城村で最近起こった変化の1つに教育がある。開闢以来、この村から大学に進学する若ものは皆無であった。ところが2000年にはじめて1人が進学し、その後は毎年数人ずつになり、2004年には20人を数えるまでになった。四川連合大学、西南交通大学、武漢大学、湘潭大学などで、理工系が多い。まもなく大学院生も生まれるという。

それを支える初級・中級の教育も充実してきている。交通の不便な、県下でも有数の貧しい農村であったにもかかわらず、中学生の成績は県内一で、中学卒業生27人のうち16人が高校に進学し、高校進学率も県内一だという。それは村の関係者の大きな誇りになっている。

2004年7月、国連環境計画（UNEP）親善大使の加藤登紀子さんがこの村を訪れたとき、そのことを紹介したあと、村のリーダーは「これも日本のみなさんのおかげです。みなさんが小学校付属果樹園の建設を通じて教育の重要性を伝えてくれたのです」と述べた。この村はもともと教育に熱心であり、私たちの寄与は大きくないけれども、このような変化がおきたことはほんとうにうれしい。村では現在も15室の教室の新築準備をすすめている。

教育が普及すれば、無理に制限しなくても、出生数は自然に低下する。悪循環を絶つうえで、それも重要な要素である。村の人材育成がすすめば、農村の経済的自立と安定化がすすみ、環境にとっても積極的な効果をもたらすことはまちがいない。

#### NO. 304 「女は働かない」 2005. 04. 15

広霊県の農家で、4月初旬、1泊しました。戸数400戸あまり、人口1,700人の、大きな村です。1人あたり年間収入は、1,000元ですから、まずまずの村。私たちが、泊まったのは、村の党書記の家です。大隊長（人民公社時代の「村長」）を5年、党書記を30年つづけてきた、といい、もう65歳だそう。よほどの人材難かと思ったのですが、村長は35歳だそう。後継者も、いるのです。

1男1女がいるそうですが、どちらも県城で働き、すでに結婚しているそう。実家には、めったに帰ってこない。老夫婦2人で、かなり古い家に住み、家具も、たいしたものはありません。

生活は質素。いかつい顔を、いつもしかめているのでしょうか。そういうシワがあります。笑っても、不自然。ところが、私たちのことを、とても気遣い、親切にしてくれるのです。

上級である、郷の党書記が、旧くからの私のなじみなので、「彼はしごとができるか？」ときいたら、「不行！」(だめだ)と、まず一言。それから、「こんな貧しいところには、できる人間はこない」といいました。率直な人柄なのでしょう。こういう機会に、いろんなことをきいておくべきです。

党書記のしごとで、いちばん頭が痛いのは、計画生育のことだそうです。農民は、絶対に男の子がほしい、男の子が生まれるまでは、産みつづけたい、それなのに、農村でも2人までという政府の厳しい、要求がある。その板挟みに、なるんですね。

いろんな問題について、「ここは(党の)模範支部だ」といっていたのですが、この問題については「そうじゃない」と答えました。それでも、多くても3人だといいますから、まあ、うまくいっているほうでしょう。私なんか、農村で、6人、8人、というケースに、であってますからね。

党員は、何人かときいたら、30人だそうです。うち女性は4人。党員の割合をしりたいと思って、村の労働力数をきいたら、580人だそうです。「うち女性は？」ときくと、「全員が男だ。女は働かない」とのこと。

そうなんですね。この地方の農村では、女性が野良にでて働いているのを、まずみないんです。たいていは、ハイヒールの靴をはいて、村のあちこちで、立ち話をしているか、数人で、いっしょに、編み物をしている。

水がかつぐのも、男のしごとです。昨年秋に、大同の私たちのプロジェクトを訪れた、幸田シャーマンさんが、そのことに感動していました。南のほうでは、水汲みは、女の仕事のようなですね。大同では、炊事も男がする家だって、あるんですよ。この書記の家では、老婦人が、私たちのために、たいへんおいしい料理をかいがいしく、つくってくれましたけど。

ツアーに参加したみなさんは、私たちの拠点の、環境林センターで、女性たちが、とてもよく働いているのを、みているはずですよ。あの女性たちの多くは、じつは、山西省以外の、出身者です。とくに河北省の女性は、よく働くことで有名です。

広霊県は、河北省に接していて、西隣りの、渾源县との境には、山があるのに、東の河北省との境は、平地が連続しています。経済の結びつきも、河北省とのほうが強いし、文化的なつながりも深い。ことばだって、大同弁とはかなりちがいます。ずっと以前のことですが、市の青年団の幹部が、私に、「広霊のことばは、日本語といっしょだ」といいますから、なんのこと

かと思ったら、「きいても、わからない」。

この党書記も、河北省に近いことを、なんども強調したんですよ。ことばも、風俗も、その他も、張家口市に近くて、大同とは、まるでちがう、とって。そのことを、誇ってもいるようです。ところが、女性が働かない。この一点において、広靈県は、確実に、山西省であり、大同市であるようです。

南方からの、お嫁さんの話が、そのつづきで、先方からでてきたんですね。「ここに嫁にくると、働かなくていい、ということで、雲南あたりからやってくる、娘がふえている」といって。そういうことは、たしかにあるでしょう。私が知ってるケースでも、まず1人、南方から、嫁にきて、その人が、自分の出身地の村の娘を、呼び寄せる。つぎからつぎへと。

翌朝、村を歩いているとき、党書記が、「彼女は雲南の人間だ」といいました。赤いハイヒールをはいて、編み物をしていました。私が、「慣れたかい？」ときくと、「慣れない、慣れない。ここは寒いし、水もない、緑もない」と答えました。カメラを向けると、人の陰に、隠れてしまいました。笑いながらですけど。

運転手の小郭が、小話を仕入れてきました。「農村的不放心」（農村の心配）と題するもので、「騎両車、坐三輪車、家里放的四川猴兒、十八九的姑娘出了門」。前の2つは、モーターバイクと、農用三輪車に、乗ること。不安定な車で、農村の悪路を走るのは、とても危険です。3番めは家にいる、南方からのお嫁さんのことで、どこにいったらいいか、わからないというのです。南方を、四川で代表させたのは、実際に多いのか、その他の意味があるのか、たんに二、三、四と、語呂あわせをしたのか、そこのところは、わかりません。年ごろの娘が、外にでるのも心配だといいます。それは、娘をもつ日本の親だって、いっしょ。問題は、程度の問題でしょう。

#### NO. 305 橋本さんの体験 2005. 04. 19

1996年夏のことです。天鎮県で、黄という姓の副県長が、日本からのツアーを、案内してくれていました。彼が、私のところにやってきて、「あなたたちの団員から、戦争のとき、この県でなにがあったか、話してほしいという要求があるが、本当に話してもいいのか？」ときいてきました。私は、「そういうことなら、話してほしい。私もききたい」と答えました。

県長は、この県についての紹介のなかで、「七七事変（1937年の盧溝橋事件）の2か月後、日本軍が、この県にやってきました。血なまぐさい虐殺があり、2千数百人が犠牲になって、県城は、血で染まりました」と、言葉少なく、語りました。

そのリクエストをしたのが、前年につづいて、2回目に大同にきた、カメラマンの橋本紘二さんだったようです。彼は昼食後、4台の一眼レフを肩にかけて、町中の撮影にでかけました。カメラで、日本人だとわかったのでしょう。1人の老人に、呼び止められました。最初は、おだやかだったそうです。そのうちに、だんだん激してきました。

橋本さんは、中国語が、まったくわかりません。おそらく戦争のことだろうな、くらいは雰囲気でもわかったそう。周囲に、数十人が、集まってきました。おじいさんの話をきいて、その人たちが、興奮しはじめたそうです。それにつられて、おじいさんは、さらに興奮し、橋本さんの鼻先に、指をつきだして、罵りはじめたそうです。口から、アワをふきだしながら。取り囲んだ人たちは、さらにエキサイトします。橋本さんは、「おじいさんはともかく、周囲の人は、ほんとに怖かった」と、あとで私に話しました。そりゃ、そうでしょう。

青年旅行社のガイド、張紅兵さんが、ツアーについていました。人ばかりしているのをみて、ツアーの人が関係していないか、と考えました。まんなかに、橋本さんが立たされ、おじいさんが、彼を罵っていました。人垣を分けて、なかにはいり、おじいさんの言葉を、橋本さんに通訳しました。

要約すると、「自分が3歳のときだった。日本軍によって、両親も、兄弟も、親族も、みな、殺された。自分だけが、父親の死体のしたで、生き残った。そういうことがあったのを、おまえは、知っているか！3歳の子が、その後、どういう苦勞をして生きてきたか、おまえに想像できるか！」ということでした。

橋本さんは、「もうしわけない」といって、謝ったそうです。そのあと、張紅兵さんが、「大爺！最近、日本から、植林の協力にきているのを、あなたはしていますか？」ときいたそうです。おじいさんは、「知っている」と答えました。「この人は、そのメンバーです」と、張さんは話しました。

すると、おじいさんは、「それは、悪いことをした！」といって、橋本さんの、カメラマンジャケットの、ポケットというポケットに、ヒマワリやカボチャの種を、ギュウギュウに押し込みました。瓜子といって、中国人は、よく食べますね。おじいさんは、瓜子を売って、暮らしていたのです。そのお相伴にあずかりながら、私は、橋本さんの話をききました。

話は、それで終わりません。橋本さんは、それから、天鎮県を訪れるたびに、おじいさんが、元気でいるかどうか、さがしにいきます。おじいさんは、おじいさんで、日本人がきているときくと、橋本さんがいるかどうか、さがしにきました。

あるとき、昼食をいっしょにしました。橋本さんと、おじいさんが、乾杯しました。橋本さんのカメラを借りて、2人が、肩をくんでいる写真を、私が撮りました。橋本さんの家に行く

と、大きく引き伸ばした、その写真が、額にいれて、壁にかけてありました。

話は、まだつづきます。橋本さんが、山形の実家に帰ったとき、大同の農村で撮った写真を、父親にみせところ、父親は、「昔と変わらないな」と、話したそうです。父親が、兵役で中国にいらっていたことは、橋本さんも、知っていたそうです。でも、山西省だったことは、しらなかった。父親も、話さなかったのでしょうか。

橋本さんは、「あのとき自分は、父親のかわりに謝ったんだな」と考え、「このしごとは、いかげんにはできない」と、思ったそうです。橋本さんが、写真集『中国黄土高原』（東方出版）をだしたのは、通算6年も、大同の農村に、通ったあとのことでした。

ツアーの参加者に、私はしばしば、この話をしました。それを、だれかから、ききつけたのでしょうか。橋本さんが、私に、「高見さん、いつもおれの話をしているらしいな」といいました。口の悪さでは、橋本さんは、私と勝負。私は、ちょっと、身構えました。すると、橋本さんは、「だけど、いい話だよな」と、静かにひとこと。彼は、写真集のあとがきに、自分の体験を書きました。

解禁されたんだな、と考えて、私はその後も、この話を、みんなにしています。以前、このたよりも、短く書いたことがあります。たくさん教訓があると考えて、この機会にまとめました。まだ、書きたい気持ちもありますが、これくらいで、いいでしょう。みなさんに、考えてほしいのです。

## NO. 306 磁場 2005. 04. 22

私は、自分の心に、悪魔が棲んでいるのを知っています。と同時に、多少の良心もあって、悪魔を、抑えようとする。自分の心のなかに、両極端をもち、いろいろと葛藤しながら、自分の行動を、決めているんですね。

中国にたいする感情も、親しい友人たちは、とても好きですけど、なにかのときには、ああ、いやだな、もう2度ときたくないな、と思うことも、しばしばとはいわないまでも、やはりあります。

中国人の、日本と、日本人にたいする思いも、そう簡単じゃないですよ。戦争が残した傷痕は、ほんとに深いです。多少は歴史を勉強した日本人でも、日中戦争といえば、1937年の、盧溝橋事件以後を考える。すこし詳しい人は、1931年の、「満州事変」までさかのぼる。

ところが、中国人にとって、スタートは、甲午戦争です。日本でいえば、日清戦争（1894～

1895年)。敗れた中国は、莫大な賠償金を、日本に支払うため、鉄道敷設権などを、列強に売り渡し、転がるように、半植民地化していったんです。イギリスによる阿片戦争もあるけど、同じアジアの日本から、そのようにされたことは、もっと屈辱的で、くやしかったのは当然でしょう。両国の、歴史感覚のズレは、それくらい大きい。

私は、中国人が、心の奥底に、日本にたいする恨みを残しているのは、当然だと思います。それは、なにも中国だけのことじゃない。アジアの諸国民に、共通の感情でしょう。その一方で、過去のことは、過去のことで、なんとかいい関係をつくりたい、という思いもある。親日派といわれる人のなかにも、反日の感情は当然あるし、反日といわれる人のなかにも、そうでない感情は、多少はあるかもしれない。

1人1人のなかにも、そのような両極があるし、10数億の中国人のなかには、ほんとに、さまざまな人がいます。だけど、そこに、強力な磁力がかかれば、それらの思いは、はっきりと1つの方向にむかうんです。強力な磁石を近づければ、鉄の原子が一定の方向にそろい、それ自身が、磁化するようなもの。日本人は、とくに日本の政治家は、それくらいのことは、しておくべきです。

中国人のなかにも、日本のことを理解し、親しい感情をもつ人がいます。日本としては、たいせつにすべき人たちです。ところが、いまのようなことがつづく、その人たちを孤立させ、日本がきれいな人たちを勢いづかせ、全体として、よくない方向にいかざるをえない。

私は、いま大同にいて、日本からの情報は、きわめて乏しいんです。インターネットで、日本の新聞ニュースなどをみますけど、これが、どうも極端に思えてならない。あれをみると、全中国が、反日で湧いているかのようです。日本人の嫌中感情も、ずいぶん盛り上がっているようですね。肌身でそれを知らないで、日本に帰ると、浦島太郎に、なってしまうかもしれない。NGOの日本人などが、イラクで拉致されたとき、「自己責任」論が沸騰したそうですけど、あのときも私は、中国にいて、日本に帰ってから、それをしって、唾然としました。

大同の農村は、日中戦争の被害が、大きかったところです。いっしょに活動しているなかまのなかにも、親族を殺された人が、何人もいます。霊丘自然植物園の周金は、劉庄村の出身で、おばさんを日本軍に殺されました。劉庄の虐殺事件は、少なくとも山西省では、とても有名です。でも、彼は、「自分の植えた木が、自分が死んだあとも育つと思うと、ほんとにうれしい」といって、泣くんですね。そして、ほんとうによく働く。私は、周金がだいすきです。

今回、いくつものグループにつきあって、農村を回りましたが、どこでも大歓迎でした。市内であう人たちも、ニュースはもちろん知っているでしょうけど、いつも以上に、いたわってくれます。

4月22日から、大同市の広場に面する、展覧館で、北京の環境NGO・自然の友が主催するアースデイ記念の、写真展がはじまりました。玄関先での、開幕式で、私もあいさつを求められました。数百人の、子どもや市民はもちろん、通行中の人たちも、足を止めて話をきき、あたたかい拍手をしてくれました。

日本と中国のあいだには、むずかしい問題があります。アジアの問題の解決に、日本と中国が協力しあわないといけない問題も、たくさんあります。むずかしい問題は、良好な環境のなかでしか、解決できないでしょう。憎悪と、反感の悪循環を、これ以上、拡大すべきではないでしょう。

## NO. 307 『雁棲塞北』出版記念会 2005. 04. 28

4月26日早朝の便で、北京から日本に帰りました。その前日の25日夜、『ぼくらの村にアンズが実った』（日経新聞社、2003年）の中国版『雁棲塞北～来自黄土高原的報告』（李建華・王黎傑訳・国際文化出版社）の出版記念会が、中国職工之家で開催されました。

これが盛会だったんですね。120人余りが、参加してくれました。司会は、中国職工対外交流中心の、自立文副秘書長。最初に中国語で話し、そのあと日本語で……。裏方から、表舞台まで、彼が取り仕切ってくれて、私は、感謝のことばもありません。「職工之家」ときいて、日本人のなかには居酒屋をイメージされた人が、多かったようですけど、なんとこれが26階建ての、4つ星ホテル。

あいさつのトップバッターは、張秋儉さん。中華全国総工会書記処書記、兼、中国職工対外交流中心副会長です。つづいて、劉徳有さん。毛沢東、周恩来など、中国のトップリーダーの通訳を務め、そのあと、記者として、東京に長く滞在し、帰国後は、中国文化部の副部長でした。その経歴にふさわしくと、というか、最初に中国語で話し、そのあと日本語で、という調子。劉徳有さんの通訳は、だれだってやりにくいでしょう。

つぎに私が、感謝のことばを、述べました。感謝のことば、といいながら、私が話したのは、『黄土高原だより』NO. 305号と同じ内容。正直にいうと、あいさつのための原稿を、すこしアレンジして送ったのが、あの号でした。

つづいて、国際文化出版社の総経理、張貴来さん。大同からの出席者を代表して、大同市総工会の柴京雲さん。つづいて、中国共産党中央対外連絡部副部長、劉洪才さんの乾杯のあいさつ。当初の予定では、ここまで30分のはずだったんですけど、実際には、1時間半あまり。

話が、長かったのは、私だけじゃないんですよ。みんな、時間なんて考えてないふう。劉徳

有さんの話なんか、あまりに評価が高すぎて、私なんか、身の置き場もなかった。司会の白立文さんは、「こんなに思いが深いんだから、

長くなるのはしかたがないでしょう。みなさん、しっかりつきあってください」といった調子で、時間がかかるのを、まったく意に介さないようす。

中国の先輩、友人も、長老格から、学生まで、いろいろな人が、集まってきて、ほんとにうれしかった。ジャーナリストも、多かったようです。日本からも、私の保護者のような人たちが、10数人も参加してくれたんですね。閉会になったあとも、すぐにはみな帰らないで、名残惜しそうに、会場に残ってくれたんですよ。ずいぶんの人が。

ところで、かんじんの中国版ですけど、出版のスケジュールが、どんどん遅れて、ハラハラしました。なんとか、まにあったんですけど、会場に届いたのが、その日の昼過ぎ。李建華さんなんか、ほんとに心配したでしょうね。

呂敬人さんと、徳浩さんのデザインで、ゆったりした組み。写真も、日本版よりずっとたくさん入れて、カラーグラビアページも含めて、340ページ。定価は、29元です。

中国でお買い求めのばあい、全国の新華書店が、取り扱っているはずですが、注文その他は、下記まで。部数がまとまるばあい、そして、日本国内で、希望のあるばあいは、高見までご連絡ください。

出版公司 国際文化出版公司

住所 北京市朝陽区東土城路乙9号 (郵編 100013)

電話 010-64271187 64279032 FAX. 010-84257656

## NO. 308 内因と外因 2005. 05. 06

私たちの、NGO 経営からいえば、ゼツタイに、触れたくない話題です。ことしの春、ワーキングツアー参加者のなかに、健康を害う人が、でました。下痢と嘔吐。発熱した人もいます。たいていは、地元の医療機関による治療で、短期間に、快復しました。でも、ご本人にとっては、たいへんな旅だったと思います。

このようなことは、夏には、これまでもありましたけど、春には、ほんとにまれ。原因は、食べ物でしょうから、発生時間から考え、その日の昼食を、まず疑いました。霊丘自然植物園には、大人数の食事をつくる設備はありませんから、方便麺 (インスタントラーメン)、ソーセージ、ザーサイ、煮卵の真空パック、といったところ。大同市内の、大手スーパーで、買ったものです。

会田さんが、症状のでた人、1人1人に、前後を含めて、食べたものを、きいて回りました。タマゴが怪しいとか、ソーセージではないとか、仮説はあったんですけど、けっきょくは、絞り込めなかった。食べてないのに、症状のでた人もいれば、食べたのに、症状のでない人もいる。

去年の夏の経験から、藤原國雄さんが、熱処理したものは、問題ないだろうけど、食器を洗った水を、調べるべきじゃないか、という提案がありました。そのときは、べつの県、べつの村です。そのようにしたんですね。案の定、大腸菌に汚染されていました。しかし、水を汲んだときから、検査までに、時間がかかってますから、汚染の、程度はよくわからない。今回は、食器を水で洗うこともしていない。

症状に応じて、大同市内の病院で、点滴を受けたり、飲み薬をもらったりしました。これが、かなりよく効くのです。でも、点滴は、時間がかかります。最後の人は、夜中の3時になってしまいました。それなのに、大同のボランティア通訳、王萍さんや、環境林センターの運転手の小魏が、その時間まで、ずっと、つきあっていたことに、感動した人も、いたようです。王萍は、大同市第4病院の看護婦さんでしたが、いまはえらくなって、院長助理。

医者の見立てが、変わっているんですよ。疲労だと、いうんです。急に、暑くなったのに、長時間、きつい運動をして、汗をかき、冷たい場所に、座ったからだ、と。きつい労働をして、というのは、たくさん、木を植えたのではありません。霊丘自然植物園の、いちばん高いところは、「南天門」といい、海拔1,330m。下からだ、と、高低差が400mほどあります。そこに、リュウトウナラなどの樹木が、自然に茂ってきているようすを、みてほしくて、そこまで登ってもらった。それほどの重労働とは思わないけど、人には、体力の強弱があります。それを私は、十分に考えなかった。そのあと、昼食のカップ麺を食べるとき、軒下の、コンクリートに、座り込んでいる人が多かった。いわれてみると、医者というとおりです。

私も、以前に、同じような経験をしたとき、大同の医者から、そういわれました。体力を消耗し、疲労している、と。私がリクツっぽく、みえたのでしょうか。それに追加して、「ものごとには、内因と、外因とがある。そのなかで、より主導的なのは、内因である。外因も重要だが、それは内因をつうじて、作用する」と。

ふた昔くらい前までは、中国における、政治の言葉として、そのような話を、よくききました。しかし、最近は、きいたことがない。いや、話されてはいるのに、私がきいていないのかもしれない。政治について、関心を失ってますからね。そんな話を、お医者から、健康の問題で、きこうとは思ってもいなかった。

でも、よくよく考えてみると、もっともなことなんですね。漢方の医療は、もともと、この

内因を重視し、内因をいかに強化するか、ということになりたっているでしょう。体質の改善、強化といっても、いいのかもしれない。

それにたいして、日本を含む、西洋の医学は、どちらかというと、外因主義でしょ。外からくる、よくないものを、排除しようとする。いや、医療のレベルでは、そこまででないのに、日常生活の場で、徹底してしまったのかもしれない。清潔に、清潔に、ということで、身の回りから、まずは虫を徹底的に排除し、さらに、菌類やウィルスを1匹残らず、撃滅(!) 抗菌グッズの数々が、その象徴なんでしょうね。最近はそのことの弊害も、指摘されるようになりました。

日本にいるあいだは、あるいは外国でも、首都なんかのホテルでは、そのような環境を、なんとか維持できても、内陸の農村にくると、そうはいかない。虫や、細菌類、その他の異物とも、ふだんから、適当に、なかよくしておく必要があるようです。例外はありますけど、この春の大同でも、中国に長くいる人ほど、症状がでなかったよう。上海あたりの留学生も、地方にでかけると、同じようなことを、体験するそうですから、そこに中国の広さ、格差が表現されているんでしょうね。

この「外因と内因」の見方、健康問題にかぎらず、いまでも多くの中国人の、考え方の基本のところに、おさまっているようです。

#### NO. 309 白登苗圃 2005. 05. 16

2005年3月31日、私たちのワーキングツアーが訪れた機会に、新しい苗圃(苗畑)の、開所式を挙りました。大同市からは、共産党大同市委員会常務委員の李世傑さん(女性)が出席し、あいさつしました。大同市総工会の主席でもあります。銅鑼・太鼓の演奏、花火と爆竹が、雰囲気をもりあげました。この苗圃については、No. 286(2004. 12. 14)で書いています。

私たちが提案した名称は、「白登山苗圃」です。この苗畑の正面に、馬鋪山がみえます。マープーションです。大同市の、南郊区、新栄区、大同県の、境界にあります。なんの変哲もない、丘陵状の山です。この山の古い名称は、白登山。中国の、古代史に関心ある人は、すぐに思いあたるはず。そして、たいていの中国人は、歴史ずきです。

漢の高祖・劉邦が、匈奴(きょうど)の冒頓単于(ぼくとつぜんう)に7日7晩包囲され、屈辱的な講和をむすび、命からがら、逃げ出したところ。せつかく、歴史的に、有名な場所ですから、それに因んだ名を、使わない手はない。ところが、大同側は、気乗り薄だったんですね。武春珍所長なんか、負けずぎらいの性格そのままに、「劉邦は、匈奴に負けたんじゃない。寒さに負けたんです」なんて、いってますからね。漢族にとっては、「平城の恥」。平城

は、大同の古い名称です。

開所式で、門柱にかけられた赤い布を除くと、シンチュウの板に「中日合作白登育苗基地」と書かれていました。やったね！ 押し切ったんです。開所式で、とても残念だったのは、あれだけ熱心に、この苗圃建設にとりくんできた、技術顧問の、侯喜が、病気で出席できなかったことです。3週間ほどあとに、自宅を見舞うと、「開所式の様子を、新聞で見ました。白登苗圃という名前も、とてもいい」と、いっていました。彼が、よろこんでくれて、よかった、よかった。

開所式のあと、敷地内の作業道の両側に、枝垂れのニレを、ツアー参加者が植えました。みんな、記念植樹くらいのもりだったようですが、でてくる、でてくる、いくらでも苗がでてくる。なにせ、この苗圃も、面積は8haあります。作業道の両側に、植えるだけで、500本を、超えますからね。いつもの団は、植えることに、不完全燃焼の気持ちがあつて、もっと植えたかった、という人がいるんですけど、しっかり植えた気に、なってくれたでしょう。

じつは、この苗畑、計画面積は7haでした。中国の面積単位でいえば、105ムー(畝)。ところが、借地の、測量のときに、だれかがズルをして、実際は、120ムーある。ちょうど、8ha。どちらの数字をつかったら、いいんでしょうね。

開所式のあとの、実質的な作業が、たいへんでした。ことしは、春の訪れが、平年にくらべ、10日から2週間、遅かったんです。穴を掘ろうとしても、土が凍結していて、掘れないんです。どうしようもない。

あの枝垂れニレを植える穴は、あらかじめ、掘ってあったんです。ここも、もちろん凍結しているんですよ。どうやって、掘るか？ 陽光をあびて、表面のところは融けてますから、まず、そこを掘ります。そのあとは凍っていて、掘れなくなるから、そのままにして、つぎの穴に移ります。時間をおいて、帰ってくると、陽光をあびて、もう少し深いところまで、融けているんですね。また掘って、つぎに移っていく。

地元の中国人は、そのようにするんですけど、日本人は、どうも、こういう手順が苦手です。なんとしても、カンペキに1本を、掘りあげたい。固くて、スコップの刃もたたないのに、長い時間をかけて、がんばりつづける。ヘトヘトになって。閑話休題。

いくら、春の訪れが、遅いといっても、4月中旬にもなれば、気温は上がります。苗木の芽が、動きはじめるんですよ。芽が動きはじめてから、苗を動かすと、活着率は、ガクッと、落ちます。樹木の種類別に、発芽の早いもの、遅いものを、みきわめて、植え替える順番をきめ、できるだけ早く、作業をしないといけない。

新しい、白登苗圃では、土質に適した、針葉樹の育苗が中心です。タネから育てる、マツなんかは、5月にはいってからでいい。でも、小苗を買ってきて、ある程度まで育てて、出荷するトウヒ（雲杉）、トショウ（杜松）、イブキ（桧柏）なんかは、早くしないといけない。もう、待ったなしです。大同事務所のメンバーは、それぞれに分かれて、苗木の、買いつけに、走ります。

いまの中国は、日本以上に、市場経済なんですよ。一物一価の成立は、流通の成熟が前提ですけど、広い中国では、それがカンタンではない。同じ苗でも、ところによって、値段がちがいます。同じ地域のなかでも、貧富の差が大きいので、一般的に言えば、遠くの、辺鄙なところまで買いつけにいくと、苗木の値段は、かくだんに下がります。

そのうえ、苗は生き物でしょ。生きていてこそその、値打ちです。タイミングによっても、値段がずいぶんちがいます。だいたいにおいて、シーズンの初めは、高い。終わりになって、売りそこなったら、価値がなくなる、というところになると、当然、値段は下がります。

問題を、よりシビアにしているのは、近年、農民が、苗づくりに参加していることです。零細経営が基本ですし、苗木なんて、売ら（れ）ないことにはなんの価値もないですからね。自分で、食べるわけにもいかないし。あせって、早く売ろうとして、値を下げます。それが、全体の値くずれを、誘引する。

そんなこんなは、ありながらも、私たちが大同を去る、4月24日までに、苗場の面積の、3～4割くらいは、植え終わったでしょうか。たったそれだけなの、と驚かれても困るんです。全部を植えてしまったら、苗畑としては回転できない。空いているところは、それなりに有効利用しながら、数年先をにらんだ、苗圃経営をしないといけない。それができるだけ、経験を積んできたのが、私たちのジマンといえば、ジマンなんですね。

## NO. 310 温泉 2005. 05. 24

中国と温泉のかかわりは、薄いと、日本では考えられています。たしかに、火山と地震の国、日本ほど、多くない。でも、大同にも、あるんですね。以前からあるのは、渾源县最南端の湯頭温泉。大同と、五台山をむすぶ、観光ルートのすぐそば。

地の利はありますし、お湯の質だって、悪くないのに、パッとしません。たしか、大同の磁務局の関係で管理し、サナトリウムのような、経営をしているんですよ。磁務局というのは、大手の国営炭鉱です。で、なんとなく、くすぶったイメージで、観光客なんか、よりつこうとしないんですね。

私も、思い出があります。93年秋のことです。大同市の青年団の幹部といっしょに、近くを、通りかかりました。私も、日本人ですから、温泉があるとなると、なんとしても、はいつてみたい。でも、がっかりしたんですね。各個室にバスタブがおいてあって、そこに温泉がひいてあるのが、ふつうのありよう。

もう1つは、コンクリート打ちっぱなしの、金魚の養殖池のような、大きな浴槽です。屋根、壁に囲まれた、屋内ですけど。ふだんは、お湯もはいつてないんですけど、何人か、希望者があると、コックを開いて、お湯を張ってくれる。当然、こちらを希望して、お湯をいれてもらったんですね。でも、コンクリートは、ヌルヌルしてるし、シャワーは、ヘッドがないもの、故障しているものが大部分で、満足につかえない。

それでも、翌年も、またいったんですよ。農村を回っていると、風呂にはいる機会は多くないので、そういう機会を逃したくない。同行者のなかに、前回もいっしょだった男がいて、「ガオジェン（高見）、絶対に、なにもしゃべるな！」というんですね。なぜかと思ったら、前回、1人は外国人だといったら、入浴に200元もとられた、というんですよ。一般の10倍以上。それを知っていたら、私のはいろうとは思わなかったのに、みんな、だまっていたんですね。

その後も、98年夏くらいに、ツアーの人といっしょに、この温泉にいったことがあります。壺丘県の招待所は、設備が悪くて、シャワーもつかえなかったんですね。暑い時期の、山歩きで、汗ぐっしょりになったので、ここまで遠出をしたんですよ。あのころは、壺丘の県城から、1時間以上かかったんですけど、渾源—壺丘の道路が、昨年から付け替えられ、この温泉のすぐそばを、通るようになりました。ホテルその他の条件は、ずいぶん変わってきているので、この温泉も、以前とはちがってきているかもしれませんが、最近は、いったことがない。

もう1つの温泉は、天鎮県にあります。陽高県との、県境に近いところ。ここは、できてまだ10年ほどです。畑のまんなかに、灌漑用の井戸を掘っていたら、地下10mほどで、40数度のお湯がでたそう。で、畑のまん中に建物を建て、療養所ふうのものを、つくろうとしたんです。

おそらくは、お金が、たりなかったんでしょう。工事が中断して、なかなか完成しません。例によって、コネをつかって、試しに、いれてもらいました。温泉成分の関係もあるんでしょうけど、まだ開業前なのに、あちこちが腐植してるんですね。シャワーヘッドなんかも、なくなっているところが多い。

その後も、天鎮県にいくさいに、何回か、立ち寄りしました。泊まったこともあります。源泉の温度は、入浴適温よりちょっと高いんですけど、配管の断熱が、不十分なために、寒い季節は、部屋のバスタブに届くまでに、冷えちゃうんですね。お湯にしずんでれば、なんとかしのげる、ぬるさなんですけど、でようとすると寒いので、なかなかその決意ができない。バスタ

ブの長さが、十分じゃないでしょ。お腹まで、お湯につけようと思えば、足を、外にだすしかない。足をお湯につけようと思えば、お腹をだすしかない。ぐずぐずと、そんなことをやっています。

逆に夏は、各部屋のバスタブに、温泉をひいてますので、その熱で、暑くてしかたがない。もともと涼しい地方ですから、冷房は、考えられていません。そのうえ、ドロボウよけのために、窓に鉄格子がはいっていて、窓も開けられません。まさに、ガマンくらべです。

数年まえのことです。日本からのツアーがきたときに、せっかくですから、ここに泊まってもらうことにしました。私も同行するはずだったのに、扁桃腺をはらして、高熱をだし、陽高県でダウン。

大同に帰ってきた人たちの、感想がさんざんでした。部屋のトイレがつまっていた、先客のおきみやげが、そのままだったんだそう。文句をいうと、「外のトイレにいけばいい」のひとこと。雨のなかを、傘をさして、外のトイレまでいったんだそうです。そして、温泉にはいろいろとすると、泊まり客からも、お金をとるんだそう。それに反発して、はいらなかった人もいる。

私は温泉がだいすきなのに、こうやって書いてみると、ろくな話にならなかったですね。とにかく、しごとをしなくてすむ年齢になったら、どこか、温泉の近くに引っ越して、しずかに暮らしたいと、思っていたんですよ。そしたら、去年の春、自宅から歩いて5分のところに、温泉が、むこうから、やってきたんです。最初こそ、ものめずらしくて、なんども通いましたけど、最近は、めったにいきません。温泉っていうのは、ちがうところにおいて、日常生活と、スパッと切れるのが、いいのであって、自宅のそばにあっても、あんまり、ありがたみがないようです。まいど、ばかばかしい話ですみません。

#### NO. 311 「日勤教育」社会 2005. 05. 31

4月下旬に、中国から帰って、2つのことを、きかれます。まずは、中国の「反日」デモについて。すでに、ご報告しているように、大同は、平静そのものでしたし、農村を回っていても、いつも以上に、だいにされました。そういうわけで、残念ながら、「期待」に答えることができません。

もう1つも、大事件です。私は、宝塚市に住んでいます。JR宝塚線→宝塚市、高見運転手→高見、の連想なんでしょうね。心配して、電話やメールをくださるんですよ。周囲を含めて、無事でした、と思っていたんですけど、私たちのビデオ2本を、制作してくださった、ディレクターが、あの電車で、乗り合わせていたよう。運よく、軽傷ですんだそうです。

事故発生は25日で、私は北京にいました。帰国したのは、26日です。日本で、鉄道事故があった、という情報は、北京で、えたんですけど、あれほどの規模とは、思わなかったし、こんなに、身近な場所とも、思わなかった。

その瞬間に、日本にいなかったために、受ける印象が、決定的に、ちがうように思います。どうも実感がともなわない。阪神大震災のときに、あの激震を体験していない人が、テレビなどで、話しているのをきいて、もどかしさを感じたんですけど、その逆の立場です。とくに、犠牲になった人たちには、もうしわけない気がいたします。

そのことを、お断りしたうえでのことですけど、それにしても、いまの社会の雰囲気、かなりの違和感を、感じます。1か月のあいだ、新聞の1面トップ記事は、ほぼ毎日、事故関連でした。JR西日本を、徹底的にたたく。これは大阪版だけのことで、他地方の版はちがうのでしょうか？

テレビも、同様のようです。昼時に食堂にはいったら、客の1人が、テレビをみながら、「どうして、両親を引き出さないんだ？」というんですね。亡くなった、高見運転手のことです。いやですね！さすがに、店のおかみさんは、「親がなんの関係があるのよ」と、いってましたけどね。

事故の原因は、解明されなければなりませんし、責任も、はっきりさせないといけない。ああいうことを、起こさないために、それは、必要なことです。でも、いまのありようは、ちがうような気がします。感情的に、とにかく、たたく。たたかれる人たちは、負い目があるから、反論もなにもできない。それをいいことに、一方的に、たたいているわけですね。

私は、阪急宝塚線で、大阪へ、通勤しています。JRの振替えで、ずいぶん混みあってきて、朝も夕方も、まずは座れない。新聞によると、乗客は3割増しだそうです。改札の一部が、振替え客専用になっています。その横に、JR西日本の社員が立って、「もうしわけございません」といって、いちいち頭を下げるんですね。毎日、毎日、ずっとです。つらいでしょうね。だけど、ああいうことに、どういう意味があるんでしょう。ここまで、つづけてしまうと、理由に困って、やめるにやめられないのかもしれない。

事故の原因として、過密なダイヤや、運転士はじめ職員を圧迫する「日勤教育」の存在が、クローズアップされてきました。1分どころか、秒単位まで、正確さを要求され、わずかでも遅らせると、「日勤教育」の対象になる。反省文をなんども書かされたり、草むしりをさせられたり、というわけですね。

どうも、いまは、社会全体も、ジャーナリズムも、JR西日本にたいする「日勤教育」のように、思えるのです。そして、いまはJR西日本がその対象ですが、それが終わると、また、べつ

のところ、むかわずにはおれないでしょう。いつも、どこかのだれかに、矛先をむけ、はけ口をつくらないでは、おれない。そして、それがいつ、自分にむかってくるかもしれない恐怖がある。息苦しいですね。被害者と感情を共有しているつもりで、いつのまにか、加害者側に回っていないともかぎらない。

## NO. 312 認定特定非営利活動法人 2005. 06. 01

今回の表題、声をだして読んだら、舌をかみそう。3回くりかえすと、まるで、早口言葉。じつは、きょうから、緑の地球ネットワークには、このような「肩書き」がつきます。国税庁長官から、「認定特定非営利活動法人」に、認定され、昨日、その通知を、受け取りました。有効期間は、2005年6月1日から、2007年5月31日までの、2年間です。これによって、新しい発展の条件が、できたといっているでしょう。

「認定」がつくことで、なにが変わるかという、緑の地球ネットワークへの寄付金が、税の控除対象になります。それは、つぎの3つに、適用されます。

1. 個人
2. 法人
3. 遺産相続または遺贈の財産を寄付された場合

それぞれについて、こまかい決まりがありますので、私たちのウェブページで、近日中にご案内いたします。

これによって、寄付していただくばあいに、敷居が低くなることを、期待できます。ぶっちゃけた話、「どうせ、税金にいくのなら、使い道がはっきりしていて、自分も共感できる NGO に寄付しようか」と、いったところでしょうか。でも、じっさいには、寄付した金額が、所得から控除されるだけで、寄付したお金の全額分の、税金が安くなるわけではありません。おおざっぱに、寄付金額×税率ぶん、税金が減ります。

それなのに、この制度は、きわめて複雑で、やっかいです。こんなもの、役にたたないといつて、背をむける NPO が、少なくありません。制度が発足して、すでに3年半がすぎたのに、これまでで、認定されたのが、34団体しかないことでも、それはわかります。全国で、ですよ！ 特定非営利活動法人は、3万を超えたのに、認定 NPO 法人は、その0.1%しかない。千三つ（せんみつ）といえ、あまりに少ないことへのヤユですが、さらにその3分の1しかないわけで、制度として、生きていないということでしょう。

緑の地球ネットワークのばあいも、きわめて難産でした。昨年6月の、第10回会員総会で、申請を決めました。予備的な準備は、そのまえからすすめていたのです。たとえば、最低でも、青色申告に準ずる会計が必要だということで、税理士さんのお世話になりました。たくさん、

というよりは、膨大な書類を、準備しました。なんどか、大阪国税局の担当者としりあわせをし、港税務署に、申請書を提出したのは、10月19日でした。

その後、11月末から12月初めにかけて、3日間、大阪国税局の担当者による、「調査」がありました。帳簿、預金通帳、会員名簿などはもとより、会費や寄付金が払い込まれてくる、郵便振替通知票まで、1枚1枚チェックしました。朝10時から、夕方5時すぎまで。2日目までは、2人でしたけど、最終日には、「主査」という人もやってきて、認定の要件を、みたくしているかどうか、1項目ずつ、確認していったのです。そのあいだ、かなりきびしいやりとりもしました。

そのあと、日経新聞の取材があったんですね。12月25日の夕刊、プリズム現代第21集踊り場のNPO(5)。「『非合理的な要件』認定の壁」と題する記事に、つぎのようにあります。

「特定非営利活動法人(NPO法人)を財政面で支援しようと、2001年にできた認定NPO法人制度。今秋、認定の申請をした「緑の地球ネットワーク」(大阪市)の高見邦雄事務局長(56)には、疲労感と憤りが残った。同会は長年、中国で緑化協力事業を続け、大阪府のおおさか環境賞大賞も受賞したNPO法人。会費や助成金、支援者の寄付が収入の柱だ。

認定法人になると、寄付者が税控除などの優遇措置を受けられるため、寄付を集めやすくなる。しかし現在、全国の認定法人は約2万ある全NPO法人の約0.1%にあたる26団体しかない。「制度を作った意味がない」と評されるほど要件が厳しいためだ。実際に申請してみて高見さんもそう感じた。

もっとも困ったのは「親族や特定グループの人数が、役員、正会員の3分の1を超えていない」という要件だった。会員には研修旅行などを通じて入会した有力企業の社員が目立つが、1社で何割も占めているわけではない。特定の一族の組織的加入もない。しかし、会員全員が所属組織の肩書や別会員との血縁関係を示して入会しているわけではなく、「6親等以内の人間が多くいない証明をしろと言われても……」と困惑せざるをえなかった。

国税局には補足資料で役員と会員全員の名簿の提出を求められたが拒み、係官が事務所で名簿や会費の郵便振替通知票などをチェックして、今月、申請手続を終えた。

「非合理的な要件が多いから申請が少ないのではないか。仮に認定されても、2年後また同じことをする必要があると思うとうんざりする」

私たちにかんする記事は、ここまでです。私が話したことを、おだやかにまとめてくれたと思います。「会員全員の名簿の提出」については、説明の必要があるでしょう。国税局の最初の説明では、「かならず提出する必要があります。例外はありません。東京では、こんなに厚い名簿を提出した団体もあります」ということでした。

それはまた、所轄の税務署で、閲覧の対象になる、ということでした。「国税庁の決定の公正さを、閲覧によって、担保する必要があります」というのが、その理由です。私たちは、個人

情報保護が、これほど重要視される時勢に、いくらなんでもひどすぎる、そのようなことは制度上も求められていない、とあって、申請時に、そのような名簿を提出しませんでした。当時の私たちの会員数は、641人でしたからね。

事務所での調査にさいしても、何回も何回も、やりとりした結果、国税局の説明は、「必ず提出する必要がある、閲覧対象になる、といったのは、まちが이었다。審査をスムーズにすすめるために、協力をお願いする性格のものだ」というふうに変化したのです。それで、私たちは、「そういうことなら、提出はいたしません」といって、提出しませんでした。「メモもだめですか？」と問われて、「ご遠慮ください」と答えました。

名簿がないために、スムーズな審査ができなかったのでしょうか？認定がきまったのは、申請書の提出から8か月目です。ずいぶんと、待たされたものです。でも、決まって、ホッとしました。うれしいというより、ホッとしました。これだけ苦労して、寄付金が増えなかったら、なんのための苦労だったか、わかりません。みなさんの、ご協力をお願いいたします。

この認定制度には、もっと根本的な問題点があります。それについては、機会を改めます。

#### NO. 313 高度・低度 2005.06.07

高いといっても、低いといっても、それは、相対的なものです。高いがあるから、低いがあり、低いがあるから、高いがあり、相互依存関係、でもあります。のっけから、わけのわからぬことをいいますが、今回は、酒の話。

大同で、酒といえば、白酒です。シロザケとは大ちがいの、バイチュー。主たる原料は、コーリャン、ムギ、トウモロコシなど。蒸留酒で、たいていは無色透明。ですから、白酒です。10年ほど前までは、私の知るかぎり、すべてが、50度以上でした。

このあいだ読んだ、どなたかの中国レポートに、中国の、きつい酒として、「老酒」（ラオチュー）が、書かれていました。このかたは、酒と縁がないんでしょうね。老酒は、南方の、もち米でつくった醸造酒で、アルコール度数は、高くありません。本酒と、大差ない。その代表が紹興酒。長く寝かせるために、老酒といいます。大同で、「老酒」でも飲もうものなら、「体調が悪いのか？」とあって、心配されます。「病人が飲む酒だ」と、いうんですよ。病気のときまで、酒を飲まなくたって、いいはずですけど。

でも、白酒も、ずいぶんと、おだやかになりました。現在の主流は、アルコール度数、38度です。これが最初にてたのは、1995年だったと思います。この年の9月、北京で、世界女性会議が開かれました。38度というのは、3月8日の国際女性デーにちなんでのものだそうです。

おなごにも飲ませれば、2倍売れて、2倍もうかると、考えたんでしょうね。

ところが、この作戦は、おとこどもにも、歓迎されたようです。50度を超す、気ちがい水は、ほんとの呑んべ(酒鬼)以外には、やっかいな存在だったんでしょうね。「ガンベ〜イ」(乾杯)といって、キュッとあげ、グラスの底をみせあうんですけど、そのときの表情が、うれしそうな人の割合は、高くない。たいてい、しかめっ面。

38度の白酒を、低度酒というようになりました。低度酒の登場以降、以前の50度以上の白酒が、高度酒と、呼ばれるようになったのです。その境界は、だんだん下がってきて、最近では、45度のものでも、高度酒と呼びます。いまでは、ふつうに白酒をたのむと、低度酒がほとんどで、高度酒のシェアは低い。

中国人は、香りをたいせつします。ウメとサクラと、どっちをとるかとなると、おそらくウメでしょう。目でみた姿と、色だけでは、ダメなんです。香りがないと。白酒も、おなじです。芳香を、ひじょうに、だいじにします。日本でブームの、ショウチュウも、蒸留酒ですけど、白酒と、日本の焼酎との、最大のちがいは、香りへのこだわり、ではないかと、思います。

白酒は、香りによって、分類されます。代表的な白酒をあげると、つぎのようになるそうです。

清香型	汾酒(山西省)
醬香型	茅台酒(貴州省)
濃厚型	五糧液(四川省)
米香型	桂林三花酒(江西省)
兼香型	董酒(貴州省)

おもしろいのは、有名な酒の産地は、大部分が、貧しい地方であることです。酒でウサをはらしているうちに、さらに貧しくなる？

私が、いちばん好きなのは、五糧液です。でも、ものすごく値段が高い。大同市総工会の、柴京雲副主席の自宅に、お呼ばれしたら、これがあった。その晩、どうやって帰り着いたか、まったく記憶にありません。このときばかりでは、ありませんけど。これは濃香型で、香りがつよい。

山西省の汾酒は、香りが淡いんです。低度酒へ移行するとき、顧客がかなり離れたようです。もともと淡い香りが、さらに薄くなってしまった。酒鬼にとっては、低度酒は、ものたりないようです。

環境林センターの初代の経理、邢雁俐さんが、「仰韶酒」というのを、おみやげにくれたんですよ。仰韶というのは、河南省の1つの村名ですが、ここで、新石器時代の、遺跡が発見され、

仰韶文明と、呼ばれています。この酒がすごい！アルコール度数 70 度の、原酒です。おいしいんですよ。さわやかな甘味と、芳香が、なんともいえない。これを飲んだあと、一般の白酒を飲むと、45 度の高度酒でも、水っぽく感じられる。やっぱり、相対的なものです。

なにかをもらったり、してもらったりしたときに、お礼をいうのは、中国では、その場の 1 回きりです。くりかえし、お礼をいうのは、次回の催促のようで、きまりが悪い。日本の対中 ODA からんで、「感謝がたりない」などという人がいますけど、中国の文化や風習をしらないから、そんなふうを受け取るんですね。私は、知ってますけど、くりかえし、彼女にお礼をいたしました。もちろん、これは催促。

彼女は、北京での私の出版記念会にも、出席してくれました。でも、さすがに、あの仰韶酒は、まにあわなかった。かわりに茅台酒を 3 本、差し入れしてくれました。でも、北京の宴会では、最近では、白酒の乾杯は、しないんですね。このときも、ワインまででした。

#### NO. 314 なげきの認定 NPO 法人 2005. 06. 17

第 312 号でも、書きましたように、緑の地球ネットワークは、国税庁長官の認定を受け、2005 年 6 月 1 日から、2 年間、認定 NPO 法人になりました。このことによって、緑の地球ネットワークへの寄付金は、個人のばあい、所得から控除されます。法人のばあい、損金として扱うことができます。遺産相続や遺贈による財産を寄付された場合、それは課税対象になりません。いくらかの制限や、限度もありますので、詳しくは、お問い合わせください。

私たちがのような NPO にとって、たしかに、大きなメリットがあります。これによって、寄付をえやすくなります。認定されてから、短期間ですが、そのことの、実感もあります。にもかかわらず、バンザイといかないのは、さまざまな制約が、多すぎるからです。手続き上のことについて、すでに述べましたから、より本質的な問題について書きます。

税制上の優遇は、税金の一部を、その団体に回す、というような性格を含みますから、団体と、活動が、国民の広範な支援をえていることが、必要条件となるのは、当然といえば、当然でもあります。そのうえで、これまでの許認可に、役所の恣意的な判断が、はいりがちなことから、より客観的な基準を導入すべきだ、ということになったようです。それが、パブリックサポートテストです。同様な趣旨の、アメリカの制度が参考にされ、最初にそれを提唱したのは、NPO の関係者、研究者だったといえます。

ある団体の、支持の広がりを見るのに、その団体の収入に着目するのは、なるほどな、と思います。その団体が、どういう人たちに、支持されているか、すぐわかります。その分布の広がりを、数値化しようというのも、おもしろいと思います。

しかし、「日本版」パブリックサポートテストは、NPOの現場にいる人からは、酷評を受けています。あまりに非現実的だ、という人が少なくありません。パブリックサポートテストを、簡単に要約すれば、受け入れた、寄付金の額が、総収入にたいして、一定の割合を超えている、ということです。

その数値が、2001年秋のスタート時は、3分の1以上でした。それをみたすのは、たいへんなんです。認定された団体は、1年半たっても、1ダースほど。2003年4月の改正で、それが5分の1に、下げられました。それでやっと、私たちは、クリアできました。でも、全体から見ると、この関門をくぐれるのは、NPO法人のうちの、5%くらいだといいます。

私たちを例にとって、具体的にみると、収入のうち、金額の大きなものには、

- (1) 会費、自主事業収入、受託事業収入、
- (2) 寄付金、
- (3) 助成金、補助金、
- (4) 雑収入、といったものがあります。

このご時世では、金利、運用益といったものは、ほとんどないので、私たちは、雑収入にいられています。

寄付金(2) / 総収入(1 + 2 + 3 + 4)  $\geq$  1 / 5 が条件です。ところが、それらの項目にも、複雑な条件があるんです。まずは、分子でいうと……。寄付金であっても、寄付者の氏名不明のもの、1,000円未満のもの、1者あたり基準限度超過額は、寄付金に算入されません。1者あたり基準限度超過額というのは、同一の人からの寄付金のうち、受け入れ寄付金総額の5%を超える部分の金額を指します。どうです、わかりますか？最後の条件は、少数のだけれど、ドカッと寄付をしても、それではパスできませんよ、というわけですね。

つぎに、分母をみてみましょう。会費の性格は、大半のNPOにとって、寄付と同様でしょうが、ここでは、寄付金とは、明確に区別されます。私たちのばあいには、会費には、総会に出席して、決議に参加する【対価】がある、というわけです。分母には算入されるけど、分子には影響しない。だから、会費の割合が高いほど、パブリックサポートテストをパスしにくい。それは事業収入も、同じです。

民間の団体にとって、会員をふやし、会費収入をふやすことは、生命線だと思います。私たちも、そのようにしてきました。ところが、まじめにそれをやれば、パブリックサポートテストを通過しにくくなる。本来の非営利活動に近いところで、事業を展開し、事業収入を確保することは、団体の安定のために、不可欠なことです。ところが、これも、パブリックサポートテストにとっては、ふつごうなことです。

(3) 助成金、補助金は3つに分かれます。民間の財団などからの助成金は、寄付金と同じ扱いで、分子・分母の両方に算入します。国、地方公共団体、日本が加盟している国際機関からの補助金、国、地方公共団体、日本が加盟している国際機関からの委託事業費は、分子に算入されないかわりに、分母からも差し引かれます。このあたりが、おもしろいですね。国や、地方公共団体、国際機関は、パブリックではない、というわけです。

私たちがいま、いちばん困っているのは、国際協力機構（JICA）の「草の根技術協力」の委託事業費です。JICAは、一昨年からでしょうか、独立行政法人になりました。だから、民間団体だというのが、国税庁の判断です。国や地方公共団体などの委託事業費は、分母から差し引かれますが、JICAは、民間団体だから、その対象にならない、というわけですね。分子には、まったく反映されず、分母をふくらませるだけです。でも、JICAの事業経費は、ほぼすべてが国民の税金です。JICAが民間団体であるなら、JICAの事業はODAから除外され、NGOとして、カウントされているのでしょうか？そんなバカなことは、ないはずですよ。

こうやって、私がブツブツいっていると、「それは、悪用を避けるためです」という人がいます。「政治家が介入するのを防ぐ意味があります」といった人もいました。その意味は、わからないではありませんが、民間の自主的な活動を元気づける、といった本来の目的は、どこにいったってしまったのでしょうか？明日、午後から、私たちの会員総会です。

## NO. 315 オモチャのヘビ 2005. 06. 22

4月23日のことです。旧友の干場革治くんが、大同にやってきました。私も、とても忙しい時期だったんですけど、日ごろの世話になりようからいったら、そんなことを、いってはおられません。そのうえ、北京での、私の本の出版記念会に、娘の、未来子ちゃんまで、中国人のフィアンセ同伴で、上海から、きてくれることになっています。多額の、寄付金まで携えて。最大限に、サービスする必要があるでしょう。農村に、同行することにしました。

なんていいながら、自分のことを考えています。呉城郷の、アンズ満開の写真を、撮りたかったんです。『ぼくらの村にアンズが実った』（日経新聞社刊）の表紙カバーになっている、あそこの村。先日の、NHKの番組でも、あの写真のインパクトはとても大きかった。橋本紘二さんによる撮影ですが、すでに4年もまえのもの。いまなら、ずっと、すごい写真が撮れるはずですよ。

平年なら、4月15日ごろから開花するんですけど、ことしは、春が遅かった。23日になっているのに、まだチラホラ咲き。一般的に言えば、開花の遅いのは、悪いことではありません。花が咲いたあと、温度が下がると、着いたばかりの幼果が、落ちてしまいます。この村での、アンズ栽培にとって、これが最大の悩み。開花が遅ければ、そのぶん、危険性は薄らぎます。

でも、今回の目的は、写真撮影。この状態では、写真になりません。

そのあと、応県の木塔に回りました。遼代の建設で、いまから千年近く前のものです。高さ67mで、木造建築物としては、世界最大級。本来なら、それについて書くべきでしょうが、今回、木塔はわき役。木塔の参道と、境内に、たくさんの店が並び、みやげものを、ならべています。雲崗石窟でも、懸空寺でもそうですが、どうして、こうも、パツとしないんでしょう。気のきいたものが、まるでない。

ところが、ここにくるなり、干場くんは、なにかをみつけ、「帰りには、ゼットイにあれを買おう!」。マオツートンの立像です。みかけは銅ですけど、たたいて音をきくと、プラスチックかなにかに、それらしく塗装をほどこしたもののよう。文革時代の、骨董(?)のようにみせかけてますけど、最近になってつくった、まがいものでしょう。趣味がいいとは、けっしていけないのに、かつてのマオイストは、自分の青春につながるものとして、これを、見逃せない。それにしては、しっかりと値切って、買ったんですけど、何軒か、となりの店で、値段をきいて、くやしがっていました。

私は、あとの店で、掘り出しものを、みつけました。木でつくった、オモチャのヘビ。これが、ほんとによくできている。70×2ピースほどの木片を、布のようなものを芯にして、つなぎあわせてあります。ただ置いてるだけでは、なんの変哲もありません。つくりものだと、すぐにわかります。手で軽く動かすと、とたんに、生きているかのような、リアルな動き! 残念なのは、頭の部分が、コブラのようにふくらんでいることですけど、それくらいは、目をつぶれます。

値段をきくと、30元だ、といます。私は、「3元!」と、いいました。相手は、そっぽを向きます。しかたがないので、「6元」にあげる。相手は、20元に、下げました。じゃあ、いらぬ。歩きはじめると、店番の彼女が、おいかけてきます。けっきょく、10元になりました。

値切ったのはいいとして、その結果、無用なものまで、買ってしまいがちなんですけど、今回のものは、すごく気に入っています。10元では安すぎる。あとになって、ありったけ、買い占めるべきだった、と思うくらい。

小さな食堂で、昼食をとることになり、私が、そのヘビを動かしていると、となりのテーブルの、客たちが、興味しんしんで、のぞいてきます。自分だけ、食事を早く切り上げて、食堂の玄関先で、これを動かしていると、きました、きました! 学校帰りの、悪童どもが、私を取り囲んできます。この事業のスタート時、渾源の農村に1人できたとき、こどもと、なかよくなることから、私ははじめたんですけど、そのとき、これがあれば、絶大な効果を発揮したでしょう。

私がそういうと、事務所のニューフェイス、会田伸子さんは、「でも、女の子は、ゼツタイに近寄りませんよ！」とあって、顔を、しかめます。木製のオモチャだと、わかっていても、動きが、あまりにリアルで、ほんとにこわいんだそう。

ためしてみましょ。拠点の、環境林センターに、帰ると、10人近くの、女性の臨時工が、なにか作業をしていますよ。そのうちの、アルニュイは、もう10年もここで働いています。ニコニコ笑いながら、近づいて、背中のカゲから、ソーッと、これをだしたら、彼女はいきなり、10mは跳んでしまった！しかも、自分で植えていた、シャクヤクの苗を踏みつけて。彼女たちは、「高見のせいだ！」とあって、私をののしります。

北京まで、帰ってきたら、大学生のインタビューが、待っていました。「反日デモ」の、最中で、「日本人に話をききたい」ということだったんです。ジャーナリスト志望の、北京外国語大学の、3年生。李建華さんが、通訳してくれました。最初は、靖国問題、教科書問題だったんです。いや～、よく勉強しているんですね。インターネットを駆使して、扶桑社の歴史教科書の、採択率まで、きちんと調べていました。

話題は、この協力活動の、初期のことに移りました。どのようにして、農村に入ったんですかと、彼女がききます。私は、わざわざバッグをとりについて、彼女の目のまえで、アイツを取り出したんですよ。「ヒャー！」悲鳴をあげて、飛び上がったんです。「こういうものが、そのときあれば、苦労はなかったんですけどね。こどもが遊んでいるそばで、小一時間もしゃがみこんで、彼らが、なじんでくれるのを、待っていました」なんて、説明しました。

オモチャと、わかったあとでも、気味悪そうに、私の、手のなかのものを、みつめています。たしかに、女の子は、近づいてきそうにない。ヘビのきれいな人が、ここまで多いのは、どういう原因が、あるのでしょうか？

日本に帰って、ゴールデンウィークは、千葉の、養老溪谷に行きました。山道を歩いているとき、アマガエルをくわえた、ヘビにでくわしたんですよ。写真を撮ろうと思って、正面に回り込み、そばに寄りました。すると、そのヘビは、カエルをくわえたまま、こちらにむかってきたのです。おっ！あわてて、跳びさがって、紋様をたしかめると、マムシです。たいていのヘビは、人をみると逃げますが、マムシは、向かってくることがある。

それから何日かあと、自宅に近い山で、ワラビ取りをしていると、つれあいが、またマムシを見つけました。野歩き、山歩きをしても、ヘビに出くわす機会は、ほとんど、なくなっていたのに、急に、どうしたことでしょう。オモチャが、ホンモノを、呼んでるのかしら？

大同を出発し、途中で桑干河を渡り、渾源にいたる道です。1992年1月に、はじめて車で走って、その後、何度となく、通ってきました。ことしの春は、ちょっと驚きました。

桑干河のすこし北側が、この一帯では、いちばん低いところですが、大同県に属します。海拔が、1,000mを、わずかに切ります。なんとなく、湿った感じで、ところどころに、水たまりがある。考古学者によると、10万年前、大同盆地は、1つの大きな湖だったそうです。「大同湖」。その後、だんだん乾燥して、湖は、干上がってしまった。そのいちばん深いところが、このあたりだったのでしょ。

そこがいま、塩害地なのです。乾燥する、春の季節は、土の表面が、白くなります。雨が降ると、溶けて、目には見えなくなる。ことしの春は、ことのほか、それが白かったんです。まるで、雪が、薄く積もったよう。といっても、純白ではありませんで、なんとなく、茶色がかかっている。車を止めて、写真に撮ることにしました。土の表面に、厚さ5mmくらいの、白い層ができています。

塩といっても、塩化ナトリウムではありません。カルシウム、マグネシウム、ナトリウムなどの炭酸塩が主体です。なめてみると、塩辛くはなく、渋いような、いやな感じが、口に残ります。アルカリが、きついです。以前に、土のpHをはかると、10を、超えていました。

そのような物質が、一帯の土には、もともと、たくさん含まれています。それが溶け込んだ水が、地形の低い、ここに集り、水は蒸発し、塩が地表に残ります。蒸発皿の、底のようなものです。

塩害が、ここまでひどいと、作物はおろか、たいていの植物が育ちません。道路わきには、ヤナギが植えられます。ポプラより、塩害につよいということで。しかし、何度植えても、活着し、育つことはありません。塩害につよいといって、ギョリュウ（タマリスク）が、植えられたこともあります。いつのまにか、これも、なくなってしまった。

それでも、芽生えてくる草は、あります。強いものが、あるんですね。ところが、ここはウシやウマ、その他の家畜の放牧地になっていて、伸びるまもなく、食べられてしまう。放牧がなかったら、それなりに草地になる可能性も、捨てきれないと、思うのですけど。

何年かまえ、さる大学の一行を、案内しました。すると、若い先生が、学生たちに、「土地利用に、問題がある」と、解説しました。そのときは、夏の雨のあとで、塩の堆積が、見えなかったんですね。広々とした、平坦な土地で、水の条件も、よさそうに、みえますからね。黄土丘陵の痩せ地に、ムリをして段々畑をつくりながら、こんないい土地を、なぜ遊ばせている！というわけです。そーっと、耳打ちしました。「ここは塩害地ですよ」と。

大同の塩害地は、たいていは、自然の地形が、つくりだすようです。私たちの拠点の、環境林センターでも、南東のコーナーの、いちばん低いところは、最初から、塩害がひどかったのです。ことしの春は、ここも、とくに白くなりました。なんとか、したいんですけど、でも、ここがいちばん低くて、敷地の外に、水を出すこともできない。

灌漑農業によって、農地に水をまくと、毛細管現象によって、地中の塩分を誘い出し、地表に、堆積させるようです。人工的な、塩害ですね。中国でも、華北平原などで、広く問題になっています。こうなると、作物栽培に、深刻に影響します。古代の文明の多くが、その後、崩壊した原因に、この塩害があったといわれます。土地の塩化も、沙漠化の、大きな原因なんですね。

大同周辺の塩害地、広大な面積ですから、なにか使い道はないものでしょうか？ そうだ、墓地を造成して、売り出したらいい！ 高速道路開通で、北京から3時間です。塩漬けで、来世での再生にもつごうがいい！ それを、売り文句にしたらいいじゃないかと、私がいうと、友人に、止められましたよ。いつまでも、腐らなかつたら、キョンシになるというのが、中国の考え方です、と。お金にからむことは、私には不向きなようです。

#### NO. 317 マオウ（麻黄） 2005. 07. 06

1994年夏のことです。大同県徐町郷を訪れたとき、奇妙な植物をみました。葉はまるで、スギナの親分のように、トクサの子分のように。根元のほうに、直径7~8mmの、赤い実をつけています。透明感のある赤が、イチゴのようです。地元の子が、「能喫！」（食べられる）といって、食べてみせます。私たちも、食べてみました。あっさりした甘味で、なかなかおいしい。

そのあとの変化が、劇的だったんです。腹痛と下痢に、私は悩まされてたんですけど、速攻で、おさまりました。郷政府での、昼食のテーブルが、またすごかった。そのころのツアーは、10日以上での現地滞在で、農村を回るうちに、みんな疲れて、グターツとしてたんですよ。それが、急に生き返って、沸き立ったんです。自分たちで、びっくりするくらい。

郷の幹部が、大笑いして、いうんですよ。麻黄（マオウ）の作用によるものだ、興奮剤だから、食べすぎると、眠れなくなるところだった、と。そのときのマオウは、草麻黄、*Ephedra sinica* Stapf です。大同には、もう1種、木賊麻黄、*Ephedra equisetina* Bunge があります。

そのツアーが帰ると、入れ替わりに、はじめての、植物の専門家の調査団が、やってきました。団長が、立花吉茂さん。遠田宏さん、前中久行さんも、メンバーでした。さすがは、専門家です！ シロウトは、食べて興奮しましたが、専門家は、みるだけで興奮しました。

マオウは、裸子植物で、ソテツ、イチヨウなどとならぶ、古い時代からの、植物です。分類学のテキストの、最初にあり、かならず勉強するんだそうです。ところが、たいていの植物の専門家は、植物の乏しい乾燥地は、縁がうすいので、自然状態で生えている、実物を、みたことがない。はじめてだ、というんですね。

かたちも奇妙ですけど、生えている場所が、また変わっています。一般の植物が生育しやすい、水分に恵まれ、土の肥えた、たとえば森林の周縁あたりでは、みつからない。たいていは、黄土丘陵のなかでも、もっとも条件の悪そうなところですよ。

浸食谷の、崖面や、エッジなんかは、好んで生えます。まかりまちがうと、何十mも、転げ落ちそうなところ。それから黄土を突き固めた、万里の長城の、城壁にも、へばりついています。畑のアゼで、みることもあります、そのばあいも、垂直な面か、エッジです。専門家の調査団は、北岳恒山のふもとの、北斜面で、崖の上の、とても人が近寄れないようなところに、木質化した幹が、直径15センチにも育った、マオウをみました。少なくとも、数百年はへているだろう、とのことでした。

そういうところが、好きなんですか？可能性としては、崖面のエッジなんかは、上昇気流とともに、湿気がやってきて、ほかのところより、水分がある、といったことも考えられます。古い植物で、繁殖力も、成長力も強くはないので、条件のいいところは、ほかの植物に占領され、そんな片隅で、ひっそりと生き残った、ということも、ありうる話です。

マオウの属名は、Ephedra ですが、これから精製される薬が、エフェドリン。広範な薬効をもつ、貴重な薬材です。そのために、徹底的に採取されたようです。薬効成分を、抽出したあとのカスを、堆肥の材料にしているのをみたことがあります、それだけでも、たいへんな量でした。ですから、平坦な、とりやすい場所は、とられてしまって、崖面などの、とりにくいところにだけ、残っている、とも考えられます。

恒山のふもとの、あの古木は、とうてい、人の手が届くところではない、と考えていたのですが、数年前、あそこに行ってみると、恒山森林公園の一角に、組み入れられ、なだらかに、整地されて、地表をはぎ取られ、かわりに、マツが植えてありました。大型の、重機がつかわれたのでしょ。

環境林センターなど、手近なところで、栽培しようと、なんどか、マオウの移植を、試みました。活着しやすいだろうと考えて、小さなものを選んで掘るんですけど、根とも茎ともつかないものが、横にもものすごく長い。全部を掘るのは、まずムリです。そして、新しい細根は、ほとんどついていない。その結果、何回、試みても、うまく活着しません。霊丘県の、鍋帽山には、葉が、雲龍形に、よじれているものがあり、植物図鑑にも載っていないから、ひよっと

すると、新種だぞ、とって、何度も試みるんですけど、やっぱり着かない。

というようなことを、以前は自由に試みてましたけど、いまでは、そうはいきません。何年かまえ、マオウは、麻薬取り締まりの国際条約で、規制リストにあげられました。栽培も、採取も、運搬も、さまざまな制約を受けるのでしょ。まさに、クスリはリスク。

## NO. 318 雨期整地 2005. 07. 12

むずかしい条件下での植林ですから、中国の乾燥地には、いろいろな技術が、蓄積されています。「雨期整地」も、そのひとつ。大同の年間降水量は、平均 400mm ですが、その 3 分の 2 が、6~9 月に降ります。その他の季節は、ほとんど降りません。雨期と乾期が、はっきりしています。

樹木の苗を、植栽するのは、3 月末から、4 月にかけてです。11 月から 2 月までは、月平均気温が氷点下で、土壌も、凍結します。カチンカチンに凍っていて、スコップの刃も立たない。3 月になると、徐々に気温が上がり、地表から、だんだんと、凍結が融けていきます。深さ 30~40cm の、植え穴が掘れるようになるのは、3 月末からです。中国では、3 月 12 日が植樹節ですが、北緯 40 度で、海拔が最低で 1,000m という大同では、1 か月遅れです。

4 月も後半になりますと、気温が上昇し、苗木の芽が、動きはじめます。芽が動きはじめてから、苗を動かしたのでは、活着率が、下がります。休眠しているあいだに、植えるのが、鉄則です。4 月後半になると、農作業も忙しくなりますから、そうなる前に、植栽をすますのが、いいわけです。植栽の適期は、短いのです。

植えるための整地作業は、前年のうちにすませます。いまみたように、植栽の適期は短いのに、植林の面積は大きいので、効率よく植えるためには、事前に整地しておく必要があります。

大同でよくみかける整地の方式は、3 つあります。1 つは水平溝方式。黄土丘陵の斜面に、等高線に沿って、幅 40cm×深さ 20cm ほどの、溝を掘ります。溝のなかの土は、さらに深さ 20cm ほど、耕起して、やわらげておきます。そうすることで、植栽作業がスムーズに、はかどります。そして掘った土で、溝の下手に、幅 40cm×高さ 20cm ほどの、土手を盛りあげます。そうすると、溝と土手とで、高さ 40cm ほどの、土の壁ができますね。マツの苗は、この壁に沿わせて、植えるわけです。

溝と溝との間隔は、だいたい 3m です。そこに 1m 間隔で、マツの小苗を植えます。すると、1ha あたり 3,300 本になります。日本でいうところの、「坪植え」です。この水平溝方式は、傾斜が比較的ゆるやかで、表土に厚さがあり、労働力も、それなりに確保できるところで、実施

します。

第2の方式は、魚鱗坑。こちらは、傾斜が比較的きつく、表土が薄くて、労働力の確保もむずかしい、といった条件で、採用します。斜面に直径40～80cmほどの穴を掘り、穴の下手に、土を盛りあげて、水を蓄えるようにするわけです。山地で、石が多く出てくるばあいは、その石も、穴の下手に積み上げます。ときには、その石を、石灰で、白く塗ったりする。そのかたらが、魚のウロコのようにみえるので、魚鱗坑というわけですね。

第3の方式は、比較的平らな土地に、果樹や、ポプラなどを植えるときに、採用します。幅20cm、高さ20cmくらいの、小さな土手で、2m四方くらいに、土地を区切り、そのなかに、苗木を植えていきます。名前は、なんといったかな？

地形その他に応じて、異なる方式をとりますが、基本の考えは、いっしょです。林野庁OBの、棟方鋼男さんからきいたのですが、日本の林業の世界でも、「水を止めるな、走らすな」というのだそうです。大雨が降ったときの水を、一か所にためないで、ゆっくり流れるようにコントロールするわけです。

黄土高原の夏の雨は、局所集中的な豪雨になることが、多いのです。狭い範囲ですけれども、1時間70mmといった雨を、なんどか私も、体験したことがあります。しかし、その雨は、長時間にわたることはなく、総量は、たいしたことはない。だから、水が止まることは気にしないでいい。むしろ、水をそこに止めて、地中に浸透させたい。水を暴走させないことだけを、考えればいいんです。

水が暴走するのは、まとまるからです。そのさいに、土壌浸食を引き起こします。それを水土流失といい、黄土高原の沙漠化の原因になります。小面積ずつ区切って、水を分裂させておけば、たやすくコントロールできます。分裂統治といえば、政治の世界にも共通する話ですね。いろんな整地のやりかたは、そのような目的によるものです。

この作業は、7～9月の雨期に実施するのが、最良です。耕す前の黄土は、カチンカチンに固まっていて、スコップの刃も立たないくらいです。雨で、湿っていると、その作業がずっとたやすい。

それから、このように整地しておくのと、雨期の雨は、整地されたところで、地中に浸透します。そして、9月になると、気温が低下し、蒸発量も、抑えられます。11月になると、気温は氷点下になり、土中の水分は、凍結して、蒸発することがありません。そして、翌春、気温の上昇にしたがって、徐々に融け、苗木に水分をもたらすわけです。

黄土高原では、春の雨はとくに少なく、農民は「春の雨は油より貴重だ」というくらい。し

かし、降ったとしても、この時期の降水量はわずかなもので、苗木を育てるのには、とうてい足りません。それを補っているのが、この凍結水です。雨期整地というのは、理に適ったやりかたで、これをやるか、やらないかで、活着率に大きなちがいがでます。

あすからまた中国です。ホットな話題を提供できるでしょうが、気候のほうは、ホットになってほしくありません。

## NO. 319 今年も旱魃 2005. 07. 19

大同に通いだしてから、14年目。そのなかで、奇数年は、よかった年がありません。たいていは旱魃で、雨が降らない。最近では、1999年が建国いらい最悪、といわれる旱魃、2001年は、それに輪をかけてひどく、100年に一度の大旱魃といわれました。

なかには、雨による被害のでた年もあります。1995年は春は旱魃で、夏から秋にかけて、水害がおこった。土づくりのヤオトン（窯洞）が、屋根や壁に水を含んで倒壊し、大きな被害がでました。2003年にも、カササギの森の付近の村で、土石流による死者が、4名もでました。それらも奇数年です。

ことしも奇数年ですから、心配だったんですね。でも、ここの農村は、言霊の世界で、悪いことを考えたり、口にしたりすると、それが現実になります。私も、それに習うべきです。4月から5月にかけて、わりと雨が降ったので、ああ、ことしは、いい年になるぞ、と思っていたんですね。その後は、雨のことなど、考えないようにしていました。

7月13日に、北京空港から、霊丘県に直行しました。翌日、霊丘自然植物園に回ったんですけど、途中の、トウモロコシなどの生育が、よくありません。この時期にしては、小さいんですね。なかには、葉がしおれて、遠目には、アロエのように、みえるものもあります。かなりひどい、旱魃のようです。

霊丘自然植物園で、李向東に話をききました。6月以降、雨らしい雨が、まったくないということでした。

13日の午後日、河北省の涞源あたりから、かなり強い雨が降り、車のワイパーは大忙しでした。霊丘の県城までは、その雨がついてきたのに、すこし西の、植物園には、届かなかったのです。

14日は、1日を植物園ですごしました。午後から、ずっと雷が鳴っていました。しかし、なかなか雨は降らない。「光打雷不下雨」（雷は鳴っても雨は降らない）。よくしゃべるけど、実際のしごととはできない人間を、このように皮肉ります。夕方、ポツリ、ポツリときたので、車は

先に帰りました。黄土の道は、雨水を含むと、グリス状になって、車は危なくて、走れなくなる。歩いているうちに、雨具の準備のなかった私は、しっとり濡れてきました。途中で待っていた車に、乗り込んだとたん、雨はやみました。翌日、また植物園にいてみると、土は、まったく湿っていません。雨は、私を濡らしただけです。あそこの池に集まる水の量も、平年よりずっと少ないのです。

山のうへのほうに、登ってみました。5年ほど前から、放牧と柴刈りを禁止したところ、ユリ（山丹丹）がたくさん増え、あちこちに群落をつくっていたのに、ことしは、ガクッと減りました。平年の10%も、咲かなかったそう。芽生えても、ツボミをつけないもの、発芽しなかったものが、多かったようです。それでも球根は、土のなかで、生きているよう。

乾燥に強いはずの、ニンジンボクやシャクナゲ、トネリコのなかにも、しおれているものがあります。その他の草や灌木のなかにも、茶色くなっているもの、しおれてきているものがあります。数日のうちに、雨があれば、なんとか生き延びるでしょうけど、それがすぎると、被害は、さらに拡大するでしょう。李向東は、「こんなことははじめてだ。特殊の一年だ」と、繰り返しています。もちろん、私にとっても、はじめて。

海拔1,100mよりうへは、リョウトウナラの世界です。最近になって、回復のスピードが、上がってきていました。いまみても、リョウトウナラは、弱っているようにみえません。それどころか、3年ほど前に、植生調査を実施したところは、樹木が生い茂って、道が閉ざされ、入ることすらできません。頼もしいですね。そもそも、ここに生えている植物は、乾燥に強いものばかりで、平年では、差がみえませんが、このような旱魃になると、より強いものと、そうでないものと、ちがいが、はっきりしてきます。

15日の夕方、大同にむかいました。その途中で、桑干河を渡りますが、ここの流れが、完全にストップしていました。何度も書いているように、ここで流れらしい流れをみたのは、1997年夏のことです。それからあとは、7月の雨期になっても、一滴の水もないことが、多かったのです。

ところが、ここ2~3年、流れというほどではありませんが、水がありました。しかし、その水がひどかった。アオコが発生して、まっ青になっているところ、原因はわかりませんが、チョコレート色になっているところ、いろいろで、橋のうへまで、刺激臭があったのです。北京からきた人に、それをみせると、びっくりしていました。いまは、その水もありません。

この桑干河は、河北省にはいって、官庁ダムに流れこみます。官庁ダムは、密雲ダムとならび、2つしかない、北京の水ガメの1つです。首都の水資源を、保護するために、具体的には、官庁ダムの水質を回復するために、いくつものプロジェクトが、大同でも計画されています。大きな汚水処理場も、つくられるはずですが、大同の下水のうち、処理されているのは半分にも

いかないのですが、その水は、いったいどこにいつているのでしょうか？汚水処理場ができたとしても、水は増えることはありません。処理水が、桑干河の水を増やすことが、はたしてあるのでしょうか？官庁ダムにとって、プラスになるのでしょうか？

大同の北部は、6月初旬に、雨が降りました。北京環境ボランティアネットワークの人たちが、大同にきたときは、2日間、かなりの雨が降り、予定していた作業が、できませんでした。ところが、そのあとは、雨がなかった。そして、異常な高温がつづいたそうです。6月25日には、39.6度という、史上最高を記録しました。大同は、皇帝の避暑地だった歴史があります。ところが、このように暑い。空調なくして、すごせなくなったんですけど、それがまた、ヒートアイランド現象をひきおこすでしょう。

河北省の省都、石家荘では、40度以上の日が、7日間、つづきました。いまでは、全国で、いちばん暑い都市だそうです。西安から、帰ってきたばかりの王萍によると、西安でも、40度以上の日が、7日間、つづいたそう。それにくらべると、大同はまだ涼しい。

さいわいなことに、私たちの拠点の環境林センターでは、7月なかば、かなり強い雨が降り、2日ほどで、70mmほどになりました。一息つくことが、できたのです。でも、そこから20kmほどの、白登育苗センターでは、まったく雨がありません。雨の範囲は、そう広くはなかったようです。

## NO. 320 「日本から雨をつれてきた」 2005. 07. 25

つい先日まで、大同は雨がありませんでした。ところが、7月21日の夕方から、降りはじめ、22日、23日と降ったのです。シトシト、シトシトとゆるやかな雨が、何時間かずつ、降りました。

じつは20日の夜、東北電力総連の協力隊がやってきました。21日は朝から新栄区にいき、郭家窩郷の、弥陀山のふもとで、モンゴリマツの補植をしました。ところが新栄区は、道路事情がほんとに悪い。現場に着くまでに、時間がかかって、作業は、短時間しか、できません。でも、いっしょに取り組んだ、子どもたちと感情が深まって、別れるときは、どちらも辛そう。区の招待所に帰って、夕食をとるところから、雨が降りはじめたのです。

夜通しではありませんでしたが、22日の朝方から、また、降りました。この日は、破魯郷で、小学校付属果樹園の補植をし、その夜は、農家でホームステイの計画です。この雨では、アクセスがむずかしいと考えました。運転手も、同じ意見です。村に着けたとしても、現場の畑はぬかるんでいて、作業はムリでしょう。

地元のメンバーは、口では「困った、困った」といいながら、言葉とは裏腹に、表情は、うれしそうです。そりゃ、そうでしょう。ここにくる途中の、道路ぎわの畑でも、トウモロコシの葉が、しおれていました。どの作物の背丈も、平年より、ずっと低いのです。長らく、待ちわびていた、雨です。誰もが、同じ言葉を、口にします。「みなさんは、日本から、雨をつれてきてくれました」と。10日早ければ、もっとよかったのに。

予定の村を、日本人のツアーが訪れるのは、はじめてです。もちろん、ホームステイの経験はありません。村でも、区のほうでも、とても緊張して、早くから、準備してきたといいます。先方の気持ちを考えると、あっさりとは諦められません。アクセスを、試みました。舗装道路は、問題ありません。それを外れて、地道に入ったとたんに、先行する、事務所の車が、立ち往生しました。協力団のマイクロバスは、とてもムリです。しかも、天気予報は、雨がつづくといっています。

新栄区での、このあとの活動をあきらめて、大同市内に、引き返しました。環境林センターで、急ごしらえの昼食をとり、午後は、雲崗石窟を参観しました。その夜は、環境林センターに泊まることにして、夕食は、中庭で、バーベキュー。とても、盛り上がったんですよ。そういう場面には、団長の性格も反映します。ありがたかった。

この時期、大同は、観光シーズンで、ホテルは、どこも満室です。雲崗国際ホテルの経理が、最近の回転率は104.8%だと、うれしそうに、統計表をみせてくれたばかり。百パーセントを超えているのは、朝、客がチェックアウトした部屋に、つぎの客がはいるからだそう。急に、部屋をとるのは、絶対に不可能です。自由に使える、拠点があることのありがたさを、あらためて実感しました。

23日も、朝は小雨。天気予報は、「午後は暴雨」と告げています。計画を入れ換えて、午前中、カササギの森、午後は、新しく建設中の白登苗圃、ということにしました。ところが、カササギの森に近づくと、まっ暗になり、ひどい霧がでてきました。山のほうでは、大雨の可能性があります。引き返さざるをえません。聚楽郷と協力している、采涼山のプロジェクトで、モンゴリマツが育っているのを、かろうじて、みてもらえたのが、最低限の収穫でした。

ここのマツは、とてもよく育っています。ことしは5月に雨がいったので、ことのほか、伸びがいいのです。2列、200本の生育調査をしましたので、つぎの機会に、報告いたします。

白登苗圃も、前日に雨が降りました。苗畑のなかは、ぬかるんでいて、そこでの作業は、ムリ。敷地内での、道路修理に、あたってもらいました。おもしろい仕事ではないのに、みんな熱心で、感心しました。

最終日の24日は、薄曇りで、ときおり太陽が顔をのぞかせる天気。環境林センターで、作業

をしました。昨年の秋、種を埋めておいたアンズが、50cm あまりに育っています。地表から、15cm までの、横枝と、葉を、切り取ります。来春、これを台木にして、仁用杏を接ぎ木しますが、その作業の、事前準備です。接ぎ木の適期は、短いので、その効率を上げるために、必要な作業です。

前回、猛暑のことを、書きましたので、数人の方から、心配のメールを、いただきました。雨が降ったこともあって、気温は、ずっと下がりました。最高気温は、23～24 度。最低気温は、17～18 度。大阪あたりの人なら、大喜びでしょうけど、彼らはみな、東北各県の人。それほどでもありません。

こちらでは、夏のピークは、すでにすぎました。8月にはいれば、さらに涼しくなり、立秋（8月8日）を迎えると、もう秋です。涼しさに慣れた体が、大阪の猛暑に耐えられるか、いまから心配しています。

## NO. 321 自然体 2005. 07. 28

黄土高原での、緑化協力にかかわってから、私の性格は、ずいぶん変わったと、自分で思います。ひとことでいえば、力が抜けてきた。中国語でいえば、「放松（鬆）」といったところでしょう。加齢による部分もあるでしょうけど、それだけでもない。

ここでの緑化は、ほんとうにむずかしいのです。この夏も、大同にいますが、雨の降る時期が、遅れました。5月の雨には、恵まれたので、ことしの春、植えた苗の、初期の活着率は、とてもよかったのです。大部分のプロジェクトで、80%を超えていました。ところが、6月になって雨がなく、しかも高温でした。枯れてしまったものも、少なくなかったのです。

そういう条件のもとで、仕事がいいかげんになったら、生きる苗も、生きません。育つ苗も、育ちません。やるべきことは、ちゃんとやらないといけないので、そういうときは、私も一生懸命です。中国側のスタッフ、関係者と、激しく、ケンカすることもあります。最近は、少なくなりましたけど。

でも、自然相手のしごとは、天候その他に、左右されます。天命を待たないと、なにごとも成功しません。力んでいると、すぐに疲れます。成功にむけての、願望や努力は、もちろん必要ですが、あまり強すぎると、よけいな軋轢をつくります。

ここ2年ほどは、すっかりさぼっていますが、私はずーっと、ビデオカメラを、回していました。2001年の光景が、忘れられません。100年に1度といわれる旱魃で、夏になっても、山は茶色のままでした。乾燥に強い雑草まで、枯れてしまった。畑の作物も、壊滅状態です。雨

が降らないので、作付けをあきらめた畑が、市の耕地の、3分の1以上になりました。種を蒔いたところも、育ちません。植えたもののうち、1割も育っていない畑を、一生懸命、中耕している老人がいました。

私がカメラをむけると、手を休めて、話をしてくれました。ことしの雨はどうですか？ときくと、ニコニコ笑って、両手を振り回しながら、「いやあ、まったく降らない。この年になるまで、こんなことはまったくなかった」と話します。まるで、孫のジマン話でも、しているよう。

ファインダーを覗きつつ、私は考えます。「ああ、まただ。こんな場면을撮っても、作品に使えるわけがない」。何回も、何回も、ムダを繰り返して、やっと無口な人を見つけ、ホッとしたものです。

私は、村を回って、老人たちの話をきくのが、好きです。老人たちは、みな、ごっつい手をしています。まるでグローブのように、大きくて、黒い。野良仕事で、つくりあげた手です。その人たちが、村のできごとや、家族のことを、淡々と、話してくれる。よかったこと、ひどかったこと、ほんとに、自然に、話してくれます。

そのなかには、私のことを「姓高的日本孩子」（「高」という姓の日本のこども）なんて、呼んでくれる、老人もいるんですよ。大同では、多くの人が、いまでも、私は、姓が「高」で、下の名は「健」、「建」と思っていますからね。「見」と、「健」「建」は、発音が同じです。まあ、相手は、80歳を超した、村の長老ですから、60歳前の、私は、たしかにこどもでしょう。

やるべきときは、やらないといけないんですけど、多くを望んでも、しかたがないし、悪いことが、あったばあいに、それを悲しみすぎても、しかたがないんですね。たんたんと、生きていくしか、ありません。そういう生きかたが、多少、私にも、感染してきたのかもしれない。

人とつきあうばあいも、自分をよくみせようという思いは、なくなるわけではありませんけど、ずいぶん薄くなった。どうせなら、長いつきあいを、したいわけです。メッキをつけたところで、やがては、はげる。それだったら、いいところも、悪いところも、最初からみてもらって、それでもかまわないなら、受け入れてもらえれば、ありがたいです。

実体以上に、評価されたいと考えたら、緊張したり、あがったりすることも、あるでしょう。えらい人と会ったり、人前で話したりするときも、そういうことが、なくなった。あるがままの自分を、さらけ出すことが、少しずつ、できてきたのかもしれない。自分が、力を抜くことを覚えると、それで、みえてくることも、あるようです。

こんなふうになると、ずいぶん丸くなったと、思われるかもしれませんが、かならずしも、

そうではありません。際限のない議論を、やたらふっかけたり、幼いころからの、反骨は、どこまでいっても、なおらない。それで、どれだけ、損をしていることか。そういう自分の、ややこしい性格を含めて、「自然体」といったところでしょうか。

## NO. 322 人工降雨 2005. 08. 08

7月21日に、大同では、雨が降りました。その後、7月26日にも、降りました。8月にはいってからは、各県で、散発的に雨が降り、私たちの、ツアーの行動にも、影響がでました。地元の新報、「大同日報」によると、これは、人工降雨だったそうです。前の2回とも、記事が掲載されました。かいつまんで、紹介しましょう。

大同は、夏になっても、雨が少なく、7月上・中旬の降水量は、11.5mmしかなく、平年にくらべ、81%の減、だったそう。市の気象局は、空模様をみながら、人工降雨の準備をしました。20日午後、広霊、霊丘の両県で、雨が降りはじめました。21日の夕方になると、雲が厚くなったので、7つの農業県に、9台の車載ロケットと、全部の“37”高射砲を出動させ、合計740発あまりの、「増雨弾」を打ち上げました。この作業は、比較的、成功をおさめ、大同県を除いて、中雨、大雨のレベルの雨が降りました。とくに霊丘県では、72.7mmにたったそうです。(7月25日、「大同日報」)

前回の、人工降雨の成果は、不均衡で、大同県、左雲県、新栄区は、ひどい旱魃がつづきました。市の気象局は、天候の状態を見守りつづけ、26日の午後から夜にかけて、各県・区で、人工降雨に踏み切り、“WR型”車載ロケットによる、増雨弾110発と、“37”高射砲400余発を、打ち上げました。これによって、市区では21.1mm、天鎮県 68mm(最多)、広霊県 1.3mm(最少)、左雲県 23.5mm、陽高県 18.8mm、大同県 16.3mm、霊丘県 4.5mm、渾源県 3.8mmの雨が降りました。2回の人工降雨によって、旱魃はかなりやわらぎ、7月の降水量は、平年にくらべ、20%減までこぎつけたそう。(7月28日、「大同日報」)

車載ロケットが、どのようなものか、見当もつきません。シートをかぶった、高射砲が郷政府の庭にあるのは、みたことがあります。雲が厚くなって、パラパラッと雨が落ちはじめたころ、ドーン、ドーンと、大きな音がするのは、きいたことがあります。8月のツアーの、大同滞在中も、雲が厚くなると、毎回のように、その音をききました。あれが、人工降雨なのでしょう。そのあと、雨が降ってくる。打ち上げているのは、沃化銀あたりでしょうが、くわしいことは、わかりません。

一定の条件ができれば、たしかに効果はあるはずですが。上空の湿度が高まり、雲がかかったときに、雨粒の核になるものを、うちあげるわけですね。そうすれば、確実に雲を雨に変え、打ち落とすことができます。北京あたりでは、航空機で、散布することもあるようですが、大

同では、打ち上げ方式です。

でも、これらの報道でわかるとおり、空中湿度を高め、雲をつくることは、人工的にはできません。それは、自然の現象を、待つしかない。農民が、龍王に、雨を祈っているのにたいし、人工降雨を「科学の勝利」と、報道することもあります。科学であるからには、限界も、はっきりあります。

農村を回ってみると、たしかに、多少は、もちなおしたようです。霊丘自然植物園の、雑草や灌木も、しおれてきていることを、320号で、報告しましたが、7月27日についてみると、かなり回復していました。作物によっては、ちょっと遅かったようで、霊丘県のトウモロコシは、雄花は開いているのに、雌花の数が、きわめて少ないのです。収穫への打撃は、小さくはないでしょう。

北京の水源の桑干河は、26日の雨の直後の、27日朝は、河底は湿っているものの、流れはありませんでした。28日夕刻に、また通りかかると、幅2mほどの、小さな流れが、できていました。河の水が増えるには、そのような時間差があるのでしょうか。

人工降雨のために、どれくらい費用がかかるか、私にはわかりません。雨が降れば、気温が下がるから、空調の使用なども抑えられ、十分な経済効果がある、という新聞報道を、読んだことがあります。それにしても、雨がほしいですね。心の底から。

## NO. 323 胡楊の保護・増殖 2005.08.17

以前に何号か、乾燥地のポプラ、胡楊について、書きました。ずっと、西方の木ですが、おそらく、前世紀の50~60年代に、大同にも、導入されていました。陽高県の数本は、すでに枯れたり、切られたり。枯れたので、切られたのでしょうか。

大同県の数本は、健在でした。ここは、山西省楊樹局の九梁窪林場が、管理している土地です。でも、いつ、だれが植えたか、すっかり忘れられています。大同事務所の技術顧問、馬占山さんが、存在だけを、思い出してくれました。彼の二男が、いまこの林場で、働いています。昨年、胡楊に、めぐりあったとき、種をつけていました。時期がすぎて、ほとんど散っていましたが、樹上に、わずかに、残っていました。すでに、乾ききっています。

環境林センターの、温室に、それを蒔きました。ポプラやヤナギの種は、寿命が短かく、乾燥してしまうと、発芽しないそうなので、半分、あきらめていたのですが、ちゃんと発芽して、大きなものは、いま1m以上に、育っています。うれしいですね。

とても、おもしろい性質をもつ樹木で、世界的に、注目されています。原生地でも、急減しているそうですから、できれば、保護し、増殖したい。大同県の親木のところに、行ってみました。うれしいことに、成木7本のうち、最低2本はメスで、実をつけています。それも、驚くほど、たくさん。でも、まだ青くて、熟していませんでした。熟すると、綿毛になって、飛びます。柳絮ですね。

飛ぶ前に、知らせてくれるよう、頼みました。できるだけ、種を集めて、育苗してみたい。1週間後、実がはじけた、という連絡がありました。駆けつけると、多少、黄色くなってはいますが、熟すのには、まがある。はじけているのは、なんらかの理由で、枯れた実です。

ヒマな時間が、できました。周囲をぶらついていると、周囲に生えてきた若木のなかにも、実をつけているものが、3本あります。成木にくらべると、実の大きさは、ずっと小さいけど、保護と増殖の可能性は、ずっと広がりました。去年も、かなりの種を、飛ばしたようです。その種が、発芽能力を持っていたのは、たしかめてあります。天然更新したものが、周囲にあっても、ふしぎでない。いっしょうけんめい、探してみました。でも、みつからない。あきらめかけていました。

そしたら、遠田さんが、「みつかった！」というのです。立ち小便、していたんだそう。いいのかな？ こんなことまで、書いて。胡楊の苗木に、まちがいありません。ポプラらしからぬ、ケショウヤナギそっくりの葉です。さがしものって、たいてい、そうですね。けんめいに探しても、みつからないのに、なにげないときに、でてくる。

1本みつかりと、つぎつぎ、みつかるものです。私も、気持ちをとりなおして、また探しました。胡楊の、親木の下は、草地です。放牧のヒツジが、つねに、はいついていて、芝生のよう。横に走った、胡楊の根からでた、ヒコバエも確認できますが、地上部は、すべてかじられている。

ちょっと離れたところが、ヒマワリ畑になっています。付近の農民が、土地を耕し、植えたものです。そのなかをさがすと、ありました！1本をみつけると、あとはつぎつぎにみつかります。高さは、せいぜい40~60cm。みつただけで、10本以上ですから、その何倍かはあるでしょう。あきらかに、実生のものがあります。種がここまで飛んできて、それから生えたもの。親木から、横に根が伸び、そこから萌芽した苗もあります。根を、掘っていけば、たいてい区別がつかます。ヒマワリの収穫時期には、ひっくり返されますから、遠慮なく、苗をいただくことにしました。環境林センターの、見本園に移します。

夕食の席で、そのことを話題にしながら、だれからともなく、新しい計画が、生まれました。胡楊を中心とする、狭い範囲を、鉄条網で囲い、保護するのです。親木の近くは、耕しておく。そうすれば、落ちた種が発芽して、自然に苗ができるでしょう。大同事務所の、魏生学副所長

は、「ポプラの種は、遠くまで飛んで行く。囲うなら、もっと広いほうがいい」。そりゃ、そうでしょうけど、全部を、自分のものにしなくても、いいでしょう。

その席で、武春珍所長が、携帯電話をかけはじめました。墓参りで、実家に帰っている、馬占山さんにあてて。彼を通じて、九梁窪林場の同意をとりつけるというのです。

それから4日後の、7月29日朝のことです。作業をはじめたので、みにいこうと誘われました。胡楊の下は、すでに、すき起こしてあります。コンクリートの杭を、立てはじめています。有刺鉄線も、運ばれてきました。あつというまに、作業はすすんでいきます。囲う範囲は、昨日のうちに、林場長の立ち会いのもとに、決まっていました。私たちの構想より、ずっと広く、およそ1haあります。まあ、広くて、それで困ることはないでしょう。一部に、ちいさな流れがあって、湿地のようになっています。放牧を排除することで、そこがどう変化するか、オマケまでついてきました。どうです、この進展ぶりは！

胡楊は、塩害に、かなり強いようです。大同にも、広大な塩害地があり、なんどもなんども、緑化が試みられていますが、そのたびに、失敗してきました。この胡楊が、そこに定着し、イチョウのように、黄金色に黄葉する光景なんて、想像するだけで、楽しくなりますね。半世紀も前に、ここに胡楊を導入した先人のしごとが、そういうかたちで実ると、うれしいんですけど。

#### NO. 324 羊雑（ヤンザー） 2005. 08. 19

まずは「大同人の願望」と題する、最近の小話から。

首都改到雲崗	首都を雲崗に移す
市委取代中央	（共産党）大同市委員会が中央に代わる
联合国設在平旺	国際連合を平旺郷に置く
北京是大同一個郷	北京は大同の1つの郷
国宴渴羊雑湯	国宴では羊雑スープ
国語是大同腔	国語は大同弁
国歌大同啊港的故郷	国歌は「大同よ、わが故郷」

北京への、大同人の思いが、顔をだして、大同びいきの私は、ちょっと悲しくなります。かなりの程度に、ひがみっぽい。

大同が首都になったとき、国宴で供するはずの、羊雑（ヤンザー）とは、ヒツジのモツのことです。内蔵のあれこれと、血を固まらせたものも、はいっています。それにプラスして、ジャガイモでんぷんからつくった細めの麺が、煮込んである。

私は、けっこう粗食に耐えられると、自分で思います。汚いところが平気、まずいものも食べられる、そこそこケンカもできる。こういうことは、いまからほぼ40年前、大学の寮で、身につけたものです。もちろん、それだけじゃないですよ。寮にいたおかげで、たくさんの友人をえて、いまでも、いろんな方面で、助けられています。

その私が、92年秋、1人で大同の農村を回っているとき、口にできないものが、ありました。羊雑です。いまは朔州市に所属する、懷仁県の政府招待所では、毎日、メインのメニューでした。その臭いが、ダメなんですね。どうしても、口に近づけられない。いっしょに活動していた、県の青年団の田東が、「ムリをするな、ムリをするな、地元にも、食べられない人間はいる」といいました。

それがいまは、大の好物なんですね。ないと、さびしいくらいに。それだけ、どっぷり、この土地に、取り込まれたのかもしれない。

2002年のことです。当時、トップの、江沢民さんが、大同にやってきました。宿になった、大同賓館で、この羊雑をだしたそうです。それが、とても気に入った。大同賓館は、つぎの訪問地の太原まで、コックを派遣し、生きたヒツジも、夜中に調達して、運んだ、といいいます。大同賓館のジマンで、エレベーターのなかにも、そのことを、貼りだしてましたよ。

大同事務所の運転手、郭宝青が、私に告げました。雲崗国際酒店の前の、羊雑館のものが、とてもおいしいと。さっそく、翌朝、ホテルのバイキングのチケットを、ほかに回して、そこに駆けつけました。「清真」の表示があります。ブタ肉などは、まったく取り扱わず、ヒツジも、しきたりにしたがって、調理されている、回族が、安心して食べられる店です。たいへんな、人気なんですね。テーブルを並べただけの、店のなかは、客でいっぱいです。歩道にも、テーブルと椅子がならび、そこも満席。

大きなドンブリで、それだけを食べます。こどもむきの味だとは、思えないのに、小さな子も、けっこう、箸を運んでいます。やっとな、順番がきました。たしかに、おいしい。文字にもかけない、おいしさです。これを口にしたら、ホテルのものは、食べられなくなりますよ。

私がそう言うと、小郭は、「いや、この時間帯は、だめです。客が多すぎて、ていねいにつくっていません」。それにつづけて、「もっとおいしいのは、なんといっても、懷仁の羊雑です」。う～ん。そうまでいわれたら、懷仁県にもいってみたいと、いけませんね。田東は、ほんとにまじめで、有能な男でしたけど、いまは、共産党朔州市委員会の、弁公室主任。彼にも、十数年ぶりに、会ってみたいし。

ヒツジにかぎらず、この地方では、動物の総体を、残さず、食べます。ニワトリも、トサカ

から、ケツメまで。ムダにするところが、ほとんどない。日本では、内蔵は、どうしてるんでしょうね？モツを食べるのになれると、肉だけでは、ものたりなくなります。でも、店でさがしても、たいしたものは、ないんですね。日本でも、肉を、多食するようになって、それに見合った量の、内蔵も、でてはいるはず。どうしているんでしょう？

8月22日から、北京経由で大同にいきます。むこうは、すっかり、秋でしょう。

## NO. 325 農村の女性教師 2005. 09. 02

広霊県苑西庄村の、小学校の先生と、知り合ってから、10年になります。いつも親切にしてもらって、ワーキングツアーの人たちが、なんども彼女の家に、ホームステイしています。

今回も、毎日国際交流賞の受賞がきまって、その特集記事のために、毎日新聞の根本記者が同行し、この村を取材しました。8月31日に、特集記事が掲載されたそうですが、私はまだ大同にいますので、みていません。

苑西庄村の小学校には、先生は1人。1年生から、3年生まで、1つの教室で教えます。児童数は、10人前後。4年生から上は、1.5kmほど離れた、となりの苑庄村の、小学校に通います。こちらの村のほうが、少しだけ大きい。

その先生の名前は、楊維花。41歳の女性です。今回はじめて、経歴をききました。彼女は、この村から、そう遠くない平城村の、生まれ育ち。2002年の、作疇郷との合併前は、平城郷の、政府があった村で、苑西庄村に比べると、ずっと大きく、豊かです。

豊かな村から、貧しい村への、人の移動は、ふつうではありません。それなのに、23年前、彼女は、苑西庄村にやってきました。しつこく、事情をきいたんですよ。彼女がまだ、幼かったころ、「上山下郷」運動がありました。貧しい農山村にでかけ、そこで農民たちに学んで、自分を鍛え、村の発展にも役立とう、という運動です。毛沢東が提唱した、といわれます。都市と農村の、格差解消も、うたわれました。

大同における、そのモデルが、李世傑だったといえます。鉄の娘、といわれました。彼女はいま、大同市総工会の主席で、共産党大同市委員会の、常務委員でもあります。総工会は、労働組合の連合体。大同における、私たちのカウンターパートが、青年連合会から、総工会に移ったので、李世傑さんとは、とても親しくしているんですよ。楊維花さんにとって、李世傑は、あこがれだったそうです。

高校を卒業して、彼女は、もっとも貧しい農村で、教壇に立つことを、志望しました。やっ

てきたのが、苑西庄村です。私たちが井戸掘りに協力するまでは、飲み水にも、困っていました。それまで、この村に、先生はおらず、勉強したい子どもたちは、ほかの村の学校に通うしかありませんでした。村の人たちは、彼女を、とても歓迎したそうです。

でも、理想は理想、現実が現実。この村での生活は、農村育ちの彼女にとっても、苦勞の連続だったそう。そのときの小学校は、土づくり。教室に連なる、小部屋に1人で住み、自分で水をついで、自炊したそう。

「そのとき、私は18歳でしたから、さびしくて、つらくて、なんども泣きました。でも、勉強がしたくて、まっ正面から、自分をみつめてくる子どもたちに対すると、逃げることは、できませんでした」。

それより、もっと、つらかったのは、教えている子どもが、家庭の事情のために、学校をやめていったことだそう。その気持ち、すこしは、私にもわかります。

都市から農村におもむいた、知識青年の大部分は、その後、町に帰りました。その当時、高校を卒業すれば、知識青年と呼ばれたのです。都市と農村の、ギャップを考えれば、彼ら、彼女らが、街に帰るのは、当然のことです。深いきずあとを、残した例も、少なくありません。そういう結果を残した、あの運動、政策は、失敗と評価されています。非道なことと、いわれもします。でもね、農民はその前も、その後も、ずっと同じようにくらしていますからね。そのことを、忘れてはならないでしょう。

彼女はそのまま、村に残りました。伴侶もそこでえて、2人の子どもがいます。

彼女と、はじめて会ったときから、ふつうの先生とはちがうことを、私は、なんとなく、感じていました。子どもにたいする愛情が、尋常ではないのです。この村に、こだわるようになった原因の1つに、まちがいなく、彼女の存在が、あったと思います。

話をききながら、私は、頭のなかで、計算していました。23年前は、1982年。上山下郷運動は、終息していたはずですが、私が、そう指摘すると、彼女は、つけたしました。「自分には1歳下の、弟がいたので、それ以上、勉強することは考えられず、教育のしごとに、つきたかったのです」

理想は理想、現実が現実。その接点で、彼女は生きてきたのでしょう。でも、運動の熱気に押されて、そのような選択をしたのではなく、本人の、自発的な意志として、進路を選んだことが、志を堅持させたのでしょう。

10年前に、はじめて会ったときの、彼女の賃金は、65元。現在のそれは、100元。

中学校を卒業した娘は、初等の教育専門学校に、合格しました。でも、あきらめさせるしかない、彼女は決めていました。息子は、小学校5年生。彼を中学校にすすめるにも、年間、2,000元がかかります。

## NO. 326 薬草 2005. 09. 08

大同の一带は、薬草の、宝庫なのだそうです。いちばん有名なのは、オウギ（黄耆）。マメ科の植物で、根を利用します。最低でも、6年生以上でないと、ものにならないそう。渾源県のものが有名で、「北岳黄耆」の商標があり、華僑、華人の社会を中心に、輸出もされています。薬膳として、炒めものなどに、加える。滋養強壯の、効果があるそう。

そんな複雑なことは、私にはできっこありません。簡単な方法としては、白酒につけ込めばいいそう。そうやってみたんですけど、モヤシのような臭いが強烈で、おいしいとは、とてもいえない。長さ1mもある、野生の、りっぱなものをもらったのに、ムダにしたことがあります。

植生調査で、山を歩いているとき、掘り返した穴に、よく出会います。採取している人間に、遭遇することもある。黄耆があるのは、日のあたる草地ですから、別ものでしょう。農村の掲示板に、種類ごとの、買い上げ価格が書いてあることもあります。

霊丘自然植物園の周金は、製薬会社で働いた経験があり、薬草のことに、とてもくわしいのです。話をきいていると、およそ、薬草でない植物は、ないくらい。なんだって、薬になる。彼らはいま、薬草園を準備しています。

たいていの薬草は、肥料を与えて、畑で育てると、大きく、りっぱそうにみえても、薬効は乏しいそう。時間をかけて、自然に育ったものに、価値がある。そういうことからすると、薬草の宝庫というのは、土地がやせてる、ことであるかもしれません。採取には、時間と手間がかかりますけど、それをする人間がいるということは、ほかの産業がなく、貧乏だということでしょう。

じつは、私も、薬草の世話になっています。ご承知のとおり、呑んべですが、さいわい、肝臓は、じょうぶだったんです。呑んべにとって、気がかりだという、γGTPも、18~43のあいだにありました。正常値は、7~60だそうで、すっかり余裕。ところが、一昨年健康診断で、γGTPが突然、98になった。こりゃ、たいへん！その話をすると、先日まで大同にきていたサントリー労働組合のメンバーが、「98なんて、問題ではなりませんよ。うちには、200を超えているのが、ざらにいます」とのこと。でもねえ、むこうはプロ、私はアマチュアでしょ。

やっぱり、気になったんですけど、酒を控えるのは、むずかしい。そのつもりでいても、1滴、アルコールがはいると、なにもかも、飛び越えてしまって、泥酔状態。で、ウコンの粉末を、飲みはじめました。うちの近くの、清荒神の参道あたりで、安いものを、買ってくる。この性格ですから、毎日、定量を、きちんと飲む、なんてことはできません。飛び飛びになっちゃうんですけど、それでも効果はあるようで、半年後の健診で、33まで落ちてしまった。ことしも、そうです。

先日、広霊県の農村で、センブリをみつけ、採取してきました。浸食谷の崖面にあったのです。中国では、当薬といいます。リンドウ科の植物で、きれいな、小さな花をつけます。私がこどものころは、松林の縁あたりで、よくみかけたんですけど、最近、日本ではめったにみません。何年かまえ、六甲山のゴルフ場のそばに、小さな群落があったけど、翌年には、消えてしまった。

数年まえ、霊丘自然植物園への、小道のわきに、たくさん生えているのをみました。日本のものとは、種がちがうようで、草丈が大きくて、花の数も多い。ところが、このものも、まもなく消えてしまいました。ちょっとした、環境の変化で、なくなるようです。

日本語で、センブリというのは、千回、振り出しても、まだ苦い、という意味だそうです。たしかに苦く、いつまでも、口のなかに、苦さが残ります。ふつうは、胃薬にします。胃痛をおさえるのにも、使えるそうですが、それは、血管拡張作用があるからだど、ききました。

それで、ハタと思いついたんですね。これを頭につけたら、どうだろうか、と。十数年前に、自分で、試してみました。アルコールで滲出して、ヘアトニックのようにつかう。そのとき、ちょっとでも目にはいると、口のなかが、モーレツに苦くなるので、注意が必要。ほんとに、髪が、濃くなったんですよ。額の生え際の、産毛のようなものさえ、太く、黒くなった。そのときは、まだ、余裕がありましたからね。効果さえたしかめれば、それでよかった。

このたびは、待たなしです。以前に比べると、情けないほど、髪が細くなってますし、とくに、頭頂部がたよりない。ひたいの生え際も、ずいぶん、後退しました。取ってきたセンブリは、部屋で、陰干ししています。アルコールを入手して、ウイスキーの空きビンに、つけこむつもりです。このあと、どこかでお会いしたときに、頭髪が、残っているとすれば、それはセンブリ効果です。

でもね、薬草をつかうのは、自然破壊でもあります。繁殖力の強いもの、人工栽培のきくものなら、まだいいんですけど。とくに、先ほどのオウギや、カンゾウ（甘草）など、根を使用するものは、問題が発生しやすいと思います。有用だから、保護する、というふうに行くのが、いいことだと、思うんですけど。

## NO. 327 天鎮県の悪夢 (1) 2005. 09. 14

私たちのワーキングツアーが、この夏、天鎮県新平堡鎮を、訪ねた時のことです。県城（県政府所在地）から、目的地に行こうとすると、途中の道路が、工事中のため、大回りして、河北省に出て、懐安県の、県城を經由して、ふたたび天鎮県の最北部にでました。ここは、天鎮県の最北部であるだけでなく、山西省の最北部でもあり、山西省、河北省、内蒙古自治区の、接するところです。

植林の現場に、直接、行きました。公道をはずれて、車はムリですので、地道を 30 分ほど歩きました。途中が、きれいなんですね。道のそばに、きれいな流れがあります。そのまま、飲みそう。実際に、この夜、私たちが、ホームステイした義和壩村は、この山の水を、パイプで引いて、生活用水にしていました。

草花も、きれいです。海拔が 1,300m 以上あって、さまざまな高山植物が、咲き誇っています。あちこちに、群落がある。とくに、めだったのは、マツムシソウです。日本のものと、種がちがうのかもしれませんが。草丈も、花の大きさも、こちらのほうが、ずっと大きい。日本では、西洋ものの園芸種が、「スカビオサ」という名前で、売られていますけど、花色の透明感その他からすると、問題にならない。こちらのほうが、ずっときれいです。

30 人ほどの、ツアー参加者ですけど、ここにきた目的、関心のもちようは、一様ではありませんので、先を急ぐ人、高山植物をのぞきこむ人、いろいろあって、列は長く伸びます。そういうことを、気にする人もあるでしょうけど、私は、多様性論者ですので、気にしません。いちばん最後になったりする。うふふふ。

そういう高山性の、草原のようなところに、何軒かの農家があり、その周囲が造林地でした。主として、アブラマツを、植えています。

この場所は、じつは、私もはじめてです。プロジェクトを、はじめるまえに、最低でも 1 度は、訪れるようにしてますけど、数がふえると、かならずしも、そうはいかなくなった。そのうえ、道路工事なども多くて、思うように移動できない。

今回のワーキングツアーの、ここでのしごとは、この春に植えたもののうち、枯れているものを、ポットで育てた苗で、補植します。「ポットで……」と、つい書きましたが、実際は、小さなポリ袋に、土をつめて、それで苗を育てています。地元の人、「營養袋」と呼びます。

この春に植えたマツが、ほぼ全滅です。「ほぼ」は、語調を整えるために、意味なく挿入したもので、率直に言えば、文字通り、全滅！ 生きているものが、まったくない。地元の幹部や、

技術者が、いろいろ説明しているあいだに、私は、枯れている、それらの苗を、みてまわりました。原因は、たいていは根にありますから、引き抜いてみます。

何本か、そうやってみて、ガクゼンとしました。ポリ袋を破らないで、そのまま植えているのです。いや、植えているとは、いえないでしょう。ただ、埋めてあるのです。それでも、私は、ここを植えた1人の人間が、たまたま、横着をして、そのようにしたんだろうと思ってましたよ。

私たちの団員に、植えかたの指導をしているのは、この鎮の林業ステーションの、技術者だそうです。「袋を破る必要はない、そのまま植えればいい」といっています。「そんなことで、活着するはずがないじゃないか」と私がいうと、「だいじょうぶだ。ちゃんと袋には、穴があいているから、苗はそこから、根をだすことができる。この苗を育てた、河北省の苗圃の人間が、そういっていた。そのとおりにして、これまでも、みな活着していた。いま枯れているのは、6月、7月の旱魃のせいだ」というのです。そして、私たちに同行していた県長なんかも、それに同調する。

このバカ！そんなふうに私が罵るのは、歴史問題まで、よみがえらせるので、ここではゼツタイに、してはいけないことです。でも、私は、たまらず、怒鳴ってましたよ。私は、その技術者といっしょに、枯れた苗木を1本、1本、抜いては、新しく、補植していきました。そのたびに、「これもだめだ。穴から根はでていない」と、しつこく説明しました。大同事務所の運転手の郭宝青が、私たちのなかに、割り込んできて、私がいわんとすることを、相手の技術者に、伝えていきます。私の中国語は、ほんとにいいかげんなので、小郭の、その機転は、ほんとにうれしかった。

あの技術者も、これでわかったでしょう。それにしても、高い授業料です。はじめて取り組むときは、私たちのプロジェクトはできるだけ、小規模にしています。こういうリスクがあるからです。ところが、この鎮では、中央政府からの、北京・天津風砂源改善プロジェクトも建設中で、そこでも、同じように植えたそうですから。

作業が終わった、帰り道で、大同事務所の武春珍所長は、「天鎮県は、いつも問題をおこす。私たちの話を、きこうとしない。毎年、毎年、植樹はするけど、成果はなにもない」といって、こぼします。先ほどのようすからみると、たしかに、そのとおりでしょう。

ここの造林地は、中国でいうところの「陰坡」、北斜面で、マツの生育には、いい場所です。たくさんのレキが混じっているうえに、ここの土は、まっ黒で、軽い。長年のあいだに、草その他の腐植が、たまっているのでしょう。理想的、といっているいい場所です。このような、バカなことがなかったら、問題なく、育っていたでしょう。

NO. 328 天鎮県の悪夢 (2) 2005. 09. 20

表題を「天鎮県の悪夢」としたのは、こういう理由からです。天鎮県のプロジェクトは、従来から、失敗に終わることが、多かったのです。大同事務所の技術者が、現地調査をして、マツを植える計画を立てて、いざ、現場に行ってみると、アンズを植えている。ここは、灌木以外はムリだな、と判断して、ヤナギハグミ（沙棘）を植える計画を立てていると、実際には、マツを植えている。そんなことが、多かったのです。

李二烟村は、私にとって、こだわりの強い村です。ですが、みごとに、連続して、失敗しました。ここで、マツを植えたときなど、乾燥がひどすぎて、植物の育ちにくい日向斜面「陽坡」だけを、選んでいたのです。マツは「陰坡」に植えるのが、この地方の常識ですよ。私がそういうと、この県の技術者は、「マツは陽樹だから、日向斜面がいい」といって、ガンコに言い張りました。

橋本さんの、写真撮影につきあって、この村にきた王萍が、あまりにもアンバランスな、大苗を植えているのをみて、私に知らせてくれました。「こんなに大きかったら、活着がむずかしいだろう」と私がいうと、県の林業局の技術者は、「大きな苗のほうが、ノウサギの害が少ない」といいましたから、「枯れてしまって、青いものがなくなったら、ノウサギもかじらないだろう」などと、私は言い返しましたよ。

ちょっとお断りしておきますと、最近、私たちは、南面の「陽坡」にもマツを植えますし、比較的大苗の、マツも用います。それは、大同における、これからの緑化の重点は、「陽坡」になると、思うからです。ノウサギの被害が、あまりに深刻になったので、それへの対策を、最優先する必要があります。こうしたことを、成功させるためには、いくつもの、技術上の問題を、クリアする必要がありました。思いつきでやっても、たいてい失敗します。

話をもとに戻しますが、何度も、何度も、試みても、成功の例を残すことは、天鎮県では、ひじょうにむずかしかった。しばらくの期間、この県での協力は、見送っていたのです。このたびは、大同市におけるカウンターパートも変わったことすし、この機会になんとかしたいと思ったのです。ところが、このしまつ。

そのときのツアーが帰ることになって、歓送会が、大同市内でもたれました。大同市総工会の、柴京雲副主席が、出席しました。そのテーブルで、私は、天鎮県での問題を、くわしく報告し、「問題の経緯と責任とをはっきりさせて、きちんと解決してほしい」と頼みました。彼も、熱心にきいてくれました。

それが、だんだんエスカレートして、「悪いのは、共産党だ！」と、私がいいたしたのは、ア

ルコールのせいもあったでしょう。「どうして、いきなり、そんなところに話がとぶんだ？」と柴京雲はいぶかしがります。「共産党は、領導（指導者）が頭で、老百姓（大衆）は、手足だと考えているだろう。考えるのは頭で、おまえたち手足はだまって、いわれるとおりにしていればいい、と」。

「もともと農民は、生き物を相手に生活しているから、植物の根はどういうふうに扱うべきか、考えたら、わかるはずだ。でも、県あたりの指導者が、彼らに考えさせないで、こうしろ、ああしろ、と一方通行の話をする。そのために、信じられないような、バカなことがおこる」。

しつこい酔っぱらいに、柴京雲は、手を焼いています。そのうちに、「仮に、自分が、あなたと同じように考えたとしても、そんなことを、私の口からいえるわけないでしょう！」といいました。そりゃ、そうですね。ごめんなさい。

通訳の王萍が、口をはさみました。「天鎮県は、もともと問題つづきで、うまくいったことがないでしょ。だから、私は、天鎮県とは協力しないほうがいい、とってたんです」。うん、そのとおりです。でも、とぼっちりが、王萍にも、むかいました。

「だけどな、王萍、李二烟村で失敗し、私がもうムリだ、と思って、席を立とうとしたとき、『みんな、泣いてますよ』とあって、もう1年つづけさせ、傷口を広げる原因をつくったのは、誰だったんだ？」。それは王萍です。

王萍は、しかたなく、「でも、高見さん、李二烟のばあいは特別ですよ。あんなに、人のいい人たちは、ほかにはいません」。

それにたいして、私は、

「こんどの義和壩村も、そうなんだよ。1晩、泊めてもらっただけだけど、ツアーの人たちも、みんな感動しているんだ。ほんとに気持ちよく、歓迎してもらって、人がよくなって……。ああいう村とは、ずーっと関係をつづけたいから、なんとか、プロジェクトがうまくいくように、してほしいんだよ」。私がそういうと、王萍もびっくりしてますけど、ほんとに、親切な村だったんですね。ここまで思うことは、めったにありません。

私たちのほうにも、事情がありました。大同事務所の技術顧問、侯喜さんが、春から病気で。彼は、かならず現場に行って、きちんと、指導してくれてましたから、もし、彼が元気だったら、こういうことはなかったはず。

それから、县城からの、道路修理。ふつうだったら、私たちの苗圃でつくった苗を届けますから、こんなことは、起こらなかった。ところが、最初にのべたような事情で、河北省経由で、大回りしないとイケないから、近くの苗圃で、苗を購入したんですね。悪いときには、悪いこ

とが、重なるものです。

## NO. 329 農村の結婚式 (1) 2005. 09. 29

9月16日から21日まで、大同に行っていました。立花吉茂代表の、おともです。初日から、私は、風邪をひきました。中国にいるあいだは、スケジュールをこなしていましたが、帰国後に、肺炎に進行。39.2度ほど、発熱しました。毎日、点滴に通い、そのあいまに、あちこちで講演。たった2度の、体温上昇でも、もう、フラフラ。う〜ん。地球は、生命系だから、わずかの気温上昇でも、ほんとにたいへんだ、などと、わけのわからぬことを……。でも、もうだいたいじょうぶです。

9月20日のことです。環境林センターの技術者、劉有軍の結婚式だといひます。大同県解庄村の、実家だそうですので、ぜひとも、行ってみたいところ。午後から、センターの技術者相手に、立花代表が、講義することになっていますが、センターの技術者も、大半が結婚式に出ますので、進行が遅れて、彼らの帰りが遅くなるのを、イライラして待つのも、シヤクなもの。立花先生を誘うと、先生もみたいとのこと。招かれてもいないのに、押しかけました。

生花で飾りたてた、白塗りの乗用車から、花嫁と、花婿が、降り立ちました。この日の朝、花婿側の一団が、花嫁の家を訪れ、こうやってつれてきたのです。

花婿は、三つ揃えのスーツに、赤い派手なネクタイ。いつもの小劉とは、別人のようです。花嫁は、全身、赤ずくめ。赤い上着に、赤いズボン、靴下も、靴も、まっ赤。そのうえ、赤いレースのベールをかぶっており、残念ながら、顔はみえませぬ。中国の農村で、結婚式のことを、赤いお祝いというのは、こういうことからなんでしょう。

車のそばで、花婿は、花嫁を、抱きかかえました。抱いたまま、部屋まで、運ばないといけないのです。途中で、おろしたりすれば、その結婚は破談になるとか。重量級の女性だと、たいへんなことですが、さいわい、小劉のお嫁さんは、小柄です。

小劉が、実家の門に近づくと、爆竹に、火が放たれました。バチバチバチバチバチバチ。ものすごい数です。私は、門の内側で、カメラをかまえていたのですが、もうもうたる煙で、新郎新婦の影も、もうろう。彼らも、とても、門をくぐれません。あぶないのです。そのかん、3分くらい。花嫁を抱きかかえた、小劉は、もう汗だく。

爆竹が鳴りやんで、はいろうとすると、小劉の悪友たちが、前に立ちはだかって、妨害します。右からはいろうとすると、右をさえぎり、左からはいろうとすると、左をさえぎる。それを、2〜3分も繰り返すうちに、なんと、小劉は、花嫁を地面におろしてしまったのです。この

コンジョなし！もうちょっと、私が若かったら、代わりに、かっさらっていきたいところ。

悪友たちは、こうやるとラクなんだよ、といって、稲束でもそうするように、肩にかつぐポーズをとってみせます。でも、花嫁がいやがる。しばらくは、グズグズしていましたが、結局は、肩にかついで、控えの一室におさまった。

どの部屋も、招待客で、満室です。オンドルには、ちゃぶ台がおかれ、土間には、丸テーブルがおいてあります。それだけでは、とうてい足りないから、庭には、テントが張られ、ここにも、テーブルと椅子。それも満席です。百人は、ゆうに超えています。

環境林センターのメンバーにまじって、私たちも、テーブルの1つに、落ち着きました。じつは、ふしぎに思っていたことがあります。今朝、環境林センターにいくと、きょう、車列をつくってきた車数台が、中庭に、停まっていた。新郎新婦の乗る車には、花束が飾ってありますし、その他の車には、赤い風船が、つけてありました。センターの職員たちは、式に参列する人も、そうでない人も、朝からソワソワしています。いくら、この職員とはいっても、結婚式は、家庭のことははず。ここまで、でしゃばって、いいのでしょうか？

理由が、わかりました。花嫁は、センターのある、平旺村の、娘なのだそう。臨時工として、センターで働いている女性が、仲をとりもちました。その彼女は、私たちの部屋の、オンドルに上がって、どっしりと、座っています。なるほどね。

正午を、すこし、すぎたころ、はじまるぞ、と知らせがきました。私はカメラをもって、玄関前に飛び出しました。ビデオカメラをもった、立花先生がつづきます。何発か、花火が、打ち上げられました。お祝い事には、花火と爆竹が、欠かせません。

ベールをはずした花嫁が、参列客のなかにもぐって、なにかをさがしています。1人の年配の男を、ひっぱってきました。玄関先におかれた、椅子に腰かけさせます。また、さがしにいきました。こんどは、やせたおばさんを、ひっぱってきました。先ほどの男の、膝のうえに、座させます。花婿の、両親です。ちゃんと顔がわかるかどうか、テストなんでしょうね。

新しい両親の手を握って、花嫁がなにか話します。もともとは、厳粛な、儀式だったのかもしれない。ところが、いまはもうメチャクチャ。周囲の、若い男どもが、クラッカーを鳴らして、花嫁と、両親の頭に、紙吹雪をかけます。私は、はじめてみるんですけど、スプレー缶の、ボタンを押すと、ノズルから、さまざまな色の、泡が吹き出し、瞬時に、ヒモのようになります。紙テープの進化したもの、なんでしょうね。それをわざと、花嫁の顔をねらって、ふきつけたものだから、目にあたって、しばらく彼女は、手で目を押さえてましたよ。

ここからが、クライマックスなんですけど、それは次回に。

## NO. 330 農村の結婚式 (2) 2005. 10. 03

結婚式のあった、大同県倍加造鎮解家庄村は、大同の農村としては、とても豊かな、大きな村です。人口は、5,000人もいるそう。大同県は平地が多く、大同市の農村7県のなかで、農業環境は、もっとも恵まれています、そのなかでも、最高のところでしょう。村のなかの道路まで、コンクリートで、しっかりと舗装してあります。近年、建設のはじまった、「開発区」のすぐ後背にあり、建設中の、大同空港も、すぐ近くです。交通の便にも、恵まれています。

花婿の、劉有軍は、28歳です。中国の農村では、一般に、年齢はかぞえですから、満でいえば、27歳でしょうか。農村の結婚年齢としては、遅いほうです。しかも、この家の1人っ子です、その結婚式に、力が入るのは、当然でしょう。

玄関から、2mほどのところに、高さ50cmほどの円錐形に、石炭が積まれ、炎をあげて、燃え盛っています。結婚の儀式は、この火を囲んで、とりおこなわれます。進行役は、小劉と同年輩の、若い男。紅い紙に書かれた、進行スケジュールにしたがって、ことをすすめます。

玄関先に立った、小劉の両親にむかって、新郎新婦が、そろって、叩頭します。そのあいだに、石炭の火をはさみます。雨が降ったり、やんだりしていますので、地面はぬかるみ。そこで、木の板と敷物が持ち出され、花婿と花嫁は、そのうえに跪きました。司会の、かけ声にしたがって、3度、叩頭しますが、おもしろいのは、新郎新婦の背後に立った男が、新郎新婦の首筋をつかんで、顔面を、地面にぎゅうぎゅうに押し付けることです。

ここらが、儀式のクライマックスでしょうけど、あいかわらず、クラッカーが鳴らされ、紙吹雪がまかれ、あの色つきのヒモが、といったところ。センターのメンバーにきくと、「いまは、たいてい、こういう調子です。10年くらいまえまでは、こんなことはなかったけど……」といていました。旧いしきたりが崩れ、新しいものは、まだでてきていない、ってところでしょうか。くわしい事情はわかりません。

ついでにいうと、新郎が新婦を抱きかかえて、最初に、門を入ろうとするとき、若い男たちが、立ちふさがってジャマをするのは、これは、昔からの風習だそうです。たいていは、新郎の友人に、あらかじめ、たのんでおくそう。まあ、こちらのほうは、結婚式を盛りあげるうえでも、おおいに役立っていると、いえるでしょう。

司会の進行にしたがって、2人がキスをします。衆人環視のなかですから、最初は2人とも照れてますが、けっして、いやではないでしょう、濃厚なキスを、みせつけてくれました。

ふたたび、花婿が、花嫁を抱きかかえます。でも、小劉は自信がなさそう。肩にかつげ、肩車をしろ、と周囲がはやしますが、これは花嫁がイヤイヤ。結局、背負うことになりました。そして、火の周りを、回ります。最初に、時計の反対回りに3回。それから、その反対回りに3回。

小劉が、なにかブツブツ言っていますが、声が小さくて、聞こえません。周囲が、もっと大きな声で、と要求します。小劉は、やけになって、大きな声で唱えます。

結婚好！                      結婚はすばらしい！  
結婚好！                      結婚はすばらしい！  
結婚就是好！                結婚はほんとにすばらしい！

火の周囲を、回るのは、2人の結婚生活が、かまどの火に困らないように、ということのよう。かまどの火というのは、食べものと燃料の両方をさすのでしょう。王萍にあとできくと、彼女の結婚式のときは、火を、自分で、飛び越えたそうです。

玄関先での行事は、これで終わり。あとは、部屋とテントにもどって、お祝いの宴。待っていても、お料理はなかなかこないんですね。そう思っていると、新郎新婦が回ってきましたよ。私たちの座っているのが、メインテーブルのようで、最初にやってきました。いつのまにか、主賓になっていたんですね。

竹カゴから、花嫁がアメを2つ選んで、客に配ります。無造作に、じゃないんですね。なんども、なんども、お客ごとに選びなおし、なにか、口上を述べながら……。このアメを、「喜糖」といいます。

私がこどものころは、日本の農村でもありましたね。花嫁が、アメやセンベイを、配って回る。近所の結婚式に、こどもたちが集まるんですけど、それは、花嫁にたいする興味とともに、この甘味の魅力が、あったと思うんですよ。とにかく、甘いものに、飢えてましたから。

立花先生や私は、すなおに受け取って、「謝謝！祝你們幸福！」と、お祝いを述べたんですけど、大同事務所の、武春珍所長は、その口上にケチをつけて、なんども、なんども、言い直させ、それから、にっこり笑って、受け取りましたよ。たんなるイジワルでは、なさそう。

そのあと、花嫁、花婿が、ビールのお酌をして、回りました。日本では、ただつぐだけ、というのも許されるんですけど、ここは中国ですから、そのたびに、彼らもカンパ〜イ。百数十人のお客と、それを繰り返したら、たいへんだろうな、と同情したんですけど、それは、メインテーブルの私たちだけへの、サービスのよう。そのほかにも、いろいろあったんですけど、書くのは、これくらいにしましょう。

そのあと、ものすごい皿数の料理がでました。お味のほどは？翌朝、雲崗国際酒店の、バイキングを食べながら、立花先生に、私が、「おいしくないですね」というと、「きのうの料理は、愛情がこもっていますからね」ということでした。

この日の集いは、花婿がわ関係者だけの出席です。翌日は、花嫁がわの、関係者によって、同じように、継続されます。初夜はいつ？

## NO. 331 ニンジンボクのふしぎ 2005. 10. 11

いまから6年ほどまえ、北京の西北の郊外、妙峰山にある北京林業大学の、教学実験林場を訪れたとき、さかんに花を咲かせている、灌木がありました。名前を尋ねると、「荊条」とのこと。図鑑で調べると、荊条は *Vitex negundo* L. var. *heterophylla* (Franch.) Rehd. です。その母種に *Vitex negundo* L. var. *cannabifolia* (Sieb. et Zucc.) Hand. -Mazz. があり、中国名は、牡荊。和名は、「ニンジンボク」だそうです。

分布域をみると、牡荊は、中国でも比較的南のほうが多く、日本にも、あるそう。荊条のほうは、中国の南方にもありますが、北のほうが、分布の中心で、北京のものは、やはり荊条でしょう。でも、ここでは、ニンジンボクのなかま、横着して、ニンジンボクとしておきます。日本の分類では、クマツヅラ科ハマゴウ属に、属します。

植物というのは、自分で名前を調べると、急に、親しみがわきます。どれほど目にしても、それまで、意識にかからなかったのに、とたんに、目を引くようになります。北京-大同を、昼間の列車で走ると、この灌木が、万里の長城の、八達嶺あたりにたくさんあることが、わかりました。自然に生えているだけでなく、人工的にも、植えられたようです。

なんのことはない、それから、私たちの霊丘自然植物園にも、たくさん生えていました。このものは、みな自生です。しばらく前までは、ヒツジやヤギの放牧がありましたが、それらの家畜も、このニンジンボクは食べなかった。地元の技術者は、「毒がある」といいます。駆虫剤、つまり、お腹のなかの寄生虫を下すのに、つかっていた、というのです。立花先生によると、これをいぶすと、蚊遣（かやり）になるそう。

道草になりますが、私の自宅は宝塚市山本にあり、植木屋さんに囲まれています。つい先日、園芸ショップのなかに、「斑入り（ふいり）ニンジンボク」の鉢が、出品され、けっこうな値段が、ついていました。関心をもつと、そんなものにも、目を引きつけられるようになります。

話を戻します。毒がある、というのは、意味があります。ニンジンボクをふやすことによって、ほかの樹木に、虫がつくのを、減らすことが、できるかもしれません。植物図鑑によると、

そのほかに、芳香油をとったり、鎮静鎮痛薬としても、使えるそう。しかも、寒さと乾燥によくて、痩せ地に耐えます。なかなか魅力的な、樹種に思えてきました。

この地方の緑化では、喬木が可能なところは喬木、灌木が適するところは灌木、草が適するところは草、というふうに、柔軟に考える必要があります。その組み合わせが、重要でしょう。ところが、灌木だって、この地方に自生するものは、そう多くはありません。

私たちは、最初、ヤナギハグミ(沙棘)に注目し、たくさん苗を育てて、植えてきました。これについては、以前に書きましたね。ところが、1999年、2001年の大旱魃時に、かなり弱ってしまいました。そこに、毛虫が大発生し、葉を食べつくしました。しかも、春と、秋の、2回。枯れるものも、でてきてしまったのです。

それに比して、強いのが、マメ科の、ムレスズメ(檜条)です。ほかの灌木や雑草が、旱魃のために、枯れてしまっても、まったくダメージが、感じられません。たくさんの実をつけ、しかもよく充実しています。その結果、いまでは、どのプロジェクトでも、ムレスズメ一辺倒です。こうなると、これがまた心配なんですね。

ところで、あのニンジンボク。北京あたりでは、重視されてきたようなのに、大同では、つかわれているようすがない。そして、霊丘県には、あれほどたくさんあるのに、大同の北部の県では、まったくみかけません。霊丘県のすぐ北の、広霊県でも、私は行くたびに、さがしているんですけど、みつきりません。

私たちの拠点の、環境林センターの見本園に、何本か、植えてみました。ここは大同の北部ですけど、問題なく育ちました。ちゃんと、越冬もします。昨年から、ことしにかけて、環境林センターと、新しく建設中の白登苗圃で、育苗にとりくみました。種を蒔くだけで、そのあとは、事実上、放置してますけど、よく育っています。

ことしの夏になって、北部の陽高県の、大泉山村で、このニンジンボクを、何本か、みつけました。

村の党支部書記によると、「多くはない。しかし、少なくもない」とのこと。もともと、村にはなかったものを、外から、導入したのだそうです。この村は、毛沢東によって、水土流失防止と、緑化のモデルにされたところで、こういうことも、試みられたのでしょうか。それらの周囲に、小苗が生えていないか、さがしてみたんですけど、みつきりませんでした。

それにしても、植物の分布の境界って、どうなってるんでしょう。霊丘南部には、あれほどたくさん生えているニンジンボクが、すぐ北の広霊県で、まったくみつからない。ピタッと、なくなる。

なんとか、これを、北部の県にも、広げてみたいのです。ことし、育てた苗を、来春には、実験林場「カササギの森」に、植えてみることにします。種の直播きも、試みます。広がっていってくれれば、うれしいんですけど。

こういうことを書くと、結果がでてから書けばいい、といわれるかもしれませんが、天然更新まで、確認できるのは、どんなに早くても、5年や10年は、かかるでしょう。1種類でも、根付かせるというのは、そういうことでしょう。こうやって、はっきり言明しておかないことには、途中で、気持ちが、くじけるかもしれません。

### NO. 332 呉城村のアンズ (3) 2005. 10. 17

渾源県呉城郷呉城村のくアンズについて、ことし4月に、2回、書きました (NO. 302、303)。じつは、JICA と北京林業管理幹部学院とですすめる日中林業生態研修センターから求められ、私たちの緑化協力事業の経験をまとめたなかの、一節におさめたものです。現在、中国語に翻訳中で、ウェブページにおかれるほか、紙の報告書にも、なるそうです。今回は、そのつづき。呉城村のアンズが、みごとに成功していることを、紹介したあと、NO. 302の末尾に、私は、つぎのように書きました。

残っている最大の問題は、開花・結果後の遅霜と凍害である。この村での開花時期は4月15日から10日間ほどだが、その後に気温が氷点下に下がると、幼果はみな落ち、収穫はゼロになる。最初の収穫を期待された1997年にそのような状況に陥ったし、最近では2002年がそうだった。ホルモン処理によって、開花時期を遅らせる研究がなされているようだが、この村では実施していない。

豊作の年のアンズ収入は、その他の作物の豊作年の3年以上に匹敵する。最近では2003年、2004年が豊作だった。3年以上連続して落果する可能性は低いので、アンズ栽培の優越性は揺るがない。(引用ここまで)

ここに書いたのは、呉城村の当支部書記、王迎才からの、聞き取りをもとにしたものです。4月初めに聞いて、書きました。その後、じつは、最悪の事態を、迎えてしまいました。いま引用したレポートでは、開花し、結果したあと、気温が氷点下に下がると、被害がでる、としています。開花まえであっても、ツボミがふくらんだあと、きびしい寒さがやってくると、雌しべが影響を受け、結実に、影響するようです。4月中旬に、そのような被害が、まずでました。

そのあと、5月3日になって、氷点下3度まで、気温が下がりました。幼果がついて、いちばん敏感な時期です。人間でいえば、妊娠初期にでも、たとえられるでしょうか。すべての実

が落ち、収穫は、基本的に、ゼロになりました。

王迎才書記も、ことしの春の段階では、まだ余裕があったんですよ。豊作の年の、アンズによる収入は、その他の作物の、豊作年の収入の、3年分に相当するし、アンズが、3年つづけて落果することはないし、その他の作物も、しょっちゅう早魃で減収になるから、アンズ栽培の優位は、揺るがない、ということでした。

客観的、かつ冷静にみれば、それは、そうなんですね。そして、豊作の年のアンズ収入を、しっかり蓄えておけば、凶作の年にも、うろたえることはない、ということでしょう。

理屈としては、そのとおりなんですけど、実際は、そうはいかないわけです。王迎才本人も、問題をかかえていました。彼のむすこは、成都の、西南交通大学に、進学しています。アンズによる、収入の向上がなかったら、考えもしなかったことでしょう。都会の大学に、こどもを進学させようと思ったら、毎年1万元前後も、費用がかかりますから、貧困地域の、農家にとっては、たいへんな負担です。でも、貧乏の味は、自分たちが、いちばんよく知っているから、条件があれば、なんとしてでも、こどもは、そこから脱出させたい。王迎才も、そのようにしたんですよ。去年は、アンズの収入があったから、学費その他の送金に、問題はなかった。

ところが、ことしは、アンズがまったくだめで、収入が、ガクッと減ってしまった。ほんとに、困りきった顔をしていました。これまでとは、一転して、元気がなかったのです。アンズ栽培にかぎっても、これまでも、なんどもなんども、試練にあい、それを乗り越えてきてるんですよ。でも、今回の問題は、これまでとは、ちょっと性格が変わってきているように、私には、感じられました。

そして、私に、たのむんですね。日本に、アンズの、開花時期を遅らせる、方法がないだろうか、と。中国でも、そのような研究がすすめられ、ホルモン剤が、あるのだそうです。以前に、それを試したことがあるけど、アンズにたいしては、期待しただけの効果は、なかったそう。

アンズは、バラ科の植物で、サクラとも近縁です。これらの植物の、開花時期を決めるのは、冬からの、積算温度のようです。一定の気温になったら、パッと咲く、というのではなく、毎日の気温を加算したものが、ある数値にたったら、開花するようですね。となると、いまのように、温暖化がすすみ、暖冬がつづくようになると、開花時期は、当然、早まります。

そのまま、一直線に、暖かくなれば、問題はないんですけど、ことしのように、5月にはいつてからも、氷点下になる可能性が、あるわけです。そうすると、大きな被害を、受けることになる。今後も、このような問題はつづきますから、なにかいい方法を、ご存じのかたは、ぜひ、教えてください。少しでも、可能性のあることなら、なんでもけっこうです。いろいろ、試し

てみたいのです。試してみる方法があるうちは、前向きの気持ちを、失わないですみます。

### NO. 333 環境林センターの見本園 2005. 10. 24

私たちの協力事業の拠点、環境林センターは、2000年春から、20ヘクタールに拡張しました。そのさいに、最初に取り組んだのが、見本園の建設です。一般の苗圃は、そこに樹木苗が植わっているのは、長くても数年です。育てては、外にだし、育てては、外にだし、その繰り返しです。ところが見本園は、一か所に、長く、固定する必要があります。樹木の種類が増えると、面積も、ふやしていかないといけない。そのことを考えて、敷地の東北のはじっこに決めました。正門をはいって、すぐ左のところですよ。

大きくわけて、2つの区画があります。1つは、ポプラの見本園です。ちょっと、わけあります。いまは隣の朔州市に編入された、懷仁県に、ドイツのODAによって建設された、ポプラの研究所がありました。中国側カウンターパートは、山西省楊樹局です。1985年あたりから、13年継続され、その後、ドイツは撤退しました。

たいへん、りっぱな設備が、残されましたが、中国側に、生かして、使い切る力量は、不足していたようです。私は、ドイツが撤退するまえから、なんどか見学しましたが、施設のりっぱさと、実施されている事業の内実にギャップを感じていました。ドイツの撤退後は、資金も不足し、運営は、いっそう困難になったようです。

数十種類の、ポプラの新品種が開発され、見本園に保存されているけれども、その見本園が荒れてきている、という話を耳にしました。もったいないことです。遺伝子の保存だけでもしたいと考え、各品種の挿し穂を、買ってきてほしいと、私たちの技術者に、たのみました。ところが、帰ってきた彼らは、手ぶらです。事情を尋ねると、「枝1本が5元だといわれた。いくらなんでも、高すぎる！」と、憤慨しています。私ら、NGOの事業が、いかに零細に実施されているか、問わず語りに、物語っています。

「開発費用が、どれだけ、かかっていると思うんだ。バカなことをいってないで、もう1回、いってきてくれ」と、たのみました。42品種ほどが届き、それをもとに育苗をつづけているときに、環境林センターの拡大があり、東北の一角に、ポプラの見本園ができたのです。王子製紙の協力、その他もえて、少し拡大しました。

ドイツのものは、速成と、カミキリムシの防御をねらって、育種されたもののようです。生育がひじょうに速い。5年がたったところですけど、太いものは、直径20cmほどに育って、けっこう、見栄えがするようになりました。

もうひとつは、ポプラ以外の、樹種の見本園です。私たちとしては、大同地区に育つ、野生の樹種を、集めたかったのです。というのは、このセンターには、北京、太原を含め、たくさんの指導幹部がきますし、地元の子どもたちも、見学にやってきます。もちろん、林業関係者もいます。その人たちに、この地方で育つ樹木を、知ってほしかったのです。名前を知れば、関心も強まるだろうと、自分の経験から、考えました。

ところが、大同事務所の武春珍所長は、そこに、環境林センターが育苗している、さまざまな樹種の見栄えのいいもの、かたちのいいものを、集めたかったのです。ひとことでいえば、「好看！」です。そのために、いまのところ、非系統的に、ゴツチャゴツチャ。でも、この面においては、私たちの執念が、まさっていますので、少しずつ、少しずつ、種子を集めたり、苗木を山取りしてきたりして、野生の樹種を、ふやしています。

まずは、よく育っているものを、紹介しておきましょう。

●沙棗 (*Elaeagnus angustifolia* L. グミ科の喬木)。雲崗石窟に、直径 1m 近い、古木があり、その種をひろってきて、育てました。播種から 6 年ほどで、胸高直径 15cm 以上に育ち、ことしは、びっくりするほどたくさん、実をつけました。実に価値があり、塩害に強いそうなので、たくさん育苗して、そういう場所に植えてみたいものです。

●桑樹 (*Morus* クワ)。カイコを飼う、あのクワです。数種類がまじって、種名まではわかりませんが、よく育っています。

●美国白蠟 (*Fraxinus americana* L.)。最初は、北京のさる植物園から、その後は、大同の街路樹から、種子を採って、育てました。いま環境林センターで、大量に、苗を育てています。なんと、これがアメリカナだった。今春、北京の苗圃から、チャイネンシスを、入手したんですけど、そちらのほうが、水条件がよければ、育ちはいいけど、乾燥には、アメリカナに劣る、ということです。

●複葉槭 (*Acer negundo* Linn. ネグンドカエデ)。桑干河の川辺や、雲崗石窟に、古いものがあるところをみると、一時期、あちこちで、試験的に、植えられたのでしょうか。生育ぶりは、とてもいいのです。ところが、カミキリムシの被害が、ひどい。何本か、枯れるものがでてきましたが、いま生き残った数本には、被害がほとんどありません。

●遼東櫟 (*Quercus liaotungensis* Koidz. リョウトウナラ)。霊丘の、自然林の、主人公です。ここに運んできて、最初の育ちは、よくありませんでした。霊丘の李向東が、いちばんいい苗は、手元において、この見本園にも、B クラスしか送って寄こしませんでした。でも、ことしになって、急に伸び始めました。これからが楽しみ！

あと、臭椿 (*Niwoulsh*)、榆樹 (*Nile*)、槐樹 (*Engju*)、刺槐 (*Niseakasia*) なども、よく

育っています。でも、これまでになんとか紹介しましたので、ここでは省きます。

枯れてしまったもの、消えてしまったものも、かなりあります。だいたい、冬の寒さに、やられてしまいます。こちらは、勝負が早い。逆に、数種類の雲杉(トウヒ)は、もともと、この地方の、1700m以上の山に、自生しています。小さいうちは、1000mの平地でも、よく育つのですが、そうですね、植えて10年近くたち、樹高が3~4mを超えるころから、だんだん、キゲンの悪くなるケースが、多いようです。夏の暑さが、こたえるんでしょうね。

中国の、国の樹木には、銀杏(イチョウ)の名が、あがっています。北京あたりでは、街路樹としても、よく育っています。私たちも、河北省から苗を入れたことがありますし、200本ほど、無料でもらったこともあります。これが、枯れはしません。でも、伸びもしない。ただ、苗圃で、場所をふさいでいます。抜き捨てるわけにもいかないし、やっかいですね。

こんなことを書いていくと、どこまでもつづきそう。今回は、ここらあたりまでにします。

#### NO. 334 声 2005. 11. 01

大同に滞在していて、いつも思うんですよ。どうして中国人は、こんなに声がでかいんだ、って！そりゃあ、日本は島国ですけど、中国は大陸で、しかも中央集権ですから、声がでかくないと、届かない、という意識がつよいんでしょうね。こちらは、むこうが大きいと思うけど、先方は、日本人はとくべつに小さいと思うようで、私たちが、ふつうに話していても、「ああ、日本人がまた、ひそひそ話をして、なにを悪企みしているんだと、中国人は思いますよ」と、中国人の旧友が、話してくれたことがあります。私なんて、しわがれ声の、小声だから、ちょっとした、陰謀家でしょうね。

その象徴が、あの会議室でしょう。だだっ広い部屋の、壁に沿って、巨大なイスが、ならべてある。日本人だったら、顔つきあわせて(えらいかたたちは、料亭で)、というふうが、落ち着くんでしょうけど、中国は、思いっきり、遠い。

北京にくらべても、大同の言葉は、ぶっきらぼうで、ぶつけるような感じが、あるようですね。5年ほど前のことですけど、さる日本のテレビ局の取材があり、補助役で、北京の人たちが、やってきました。到着したその晩に、そのうちの1人が、私のところにやってきて、「大同の人たちは、悪いですよ。ケンカばかりしています」といったんですね。べつに、ケンカをしているわけではなく、ふつうに話していても、北京の人からすると、意味はききとれないし、そのように聞こえる、らしいのです。

その他の、生活の場でも、よけいな音をだすのは、マナーに反すると、私たちは、思ってる

じゃないですか。歩くときも、バタバタ音を立てるのは、みっともないことだと、教えられている。ところが、あちらでは、足音をたてないで歩くのは、「あいつは、なんなんだ。ひよっとすると、やつのしごとは、夜のしごとじゃないか？」なんて、思うようですね。

こういう表現は、最近の若い人には、通じないようです。夜のしごと、というのは、どろぼうさんのことです。いまは、夜のしごとも、たくさんありますが、昔は、夜は、眠っているのがふつうで、しごとをしているのは、そういう特別のことだったのです。

私は以前、四国の高松での講演で、「頭の黒いネズミの大発生で、黄土高原は、森林が失われてしまいました」と話したんですけど、翌日の地方紙に、私のカラー写真つきで、「黄土高原では、20年前から、ネズミが大発生し、森林を枯らしてしまった」なんて、書かれたんですね。中国の長い歴史が、なぜか、20年になってしまっ。て。いらい、恥ずかしくて、四国には、行きづらいですね。

食べる時も、ピチャピチャ、音を立てるし……。でも、それに慣れると、そうやって食べてる、彼らのほうが、何倍もおいしそうに、思えてくる。

あらゆる音を、乗り越えて、さらににぎやかに、会話をしながら、食べますから、食事の場は、ものすごいものです。評判の、おいしい店は、たいていは満席です。ものすごく、にぎやかななかで、会話をなりたさせるためには、それぞれの声が、だんだんと、エスカレートする。そのなかにいるだけで、私なんか、神経がささくれだって、拷問のようなものです。

比較的、静かな店というのは、これがほんとに、正直なんですね。同じ材料、同じような料理方法で、どうしてこんなにちがうんだ、ということが、味オンチの私にも、しっかりとわかる。そういう店は、たいてい地元じゃない人が、選びます。北京あたりの旅行社や、おえらさんのおつきが決める。地元の人、は、口を出しにくい。値段は、概して高いんです。「高い金をはらって、まずいものを食べる」といって、地元の連中は、バカにします。静謐と美味の両立は、ほんとにむずかしい。

それから、日本人の会話というのは、たとえば、ハンディトーキー、のようなものでしょ。だれかの発言がおわって、口に出さないけど、「どぞ」となって、それで相手が、話しはじめる。ところが、彼ら彼女らの会話は、常時、双方通行なんですね。どちらも自分の話したいことを、どんどん、どんどん話す。大同事務所の武春珍と、王萍なんて、いっしょにいるあいだじゅう、ず~~~~としゃべって、しゃべって、しゃべって、しゃべって、ますよ。

原因は、言語構造にある、という説を、なにかの本で、読んだ記憶があります。日本語は、最後まできかないと、肯定か、否定か、わからない構造だから、相手のいうことを、最後まで聞くしかないのだ、と。それはヨーロッパ語との、対比のかたちで書かれていて、日本

語への、コンプレックスが、感じられたんですね。イヤな感じがして、記憶に残っています。欧米の人間も、同時双方向で話すんですかね？私は、つきあいが少なく、わかりません。

私がよく引用する、大同の民謡の一節です。「靠着山呀，没柴烧。十箇年頭，十年早一年涝」。漢字で書けば、たった16文字ですけど（「呀」は音だけの、意味のない字なので数にいけない）日本語に訳すと、「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を数えれば、九年は日照りで、一年は大水」となります。上田信さんの、すてきな訳でも、こんなに長くなっちゃう。しかも、中国語ってというのは、1文字1音節です。意思伝達において、日本語より、ずっと効率がいいはずですよ。

効率がいい言語で、双方向の密度で、あんなに長く、話しあっているのだから、私たちには、想像もつかないほどのものすごい意思疎通が、できているかと思うと、実際のところ、そうとはかぎらない。そりゃあ、そうでしょう。意思疎通が、それだけ密接におこなわれたら、中国人の認識の共有化は、ものすごく、すすむはずですけど、それぞれが勝手なことを、考えています。よくいえば、多様性がある。聞いてはおくけど、私には、私の考えがあるよ、ということなのかもしれない。

話がずれていきそうなので、ここまでにしますけど、正直なところ、私は、あの騒音のなかで過ごすのは、ものすごく苦痛です。

## NO. 335 あてにならない数字 2005. 11. 15

こういう、ややこしい話は、すこし、時間をおいてからしか、書けないものです。しかも、めんどうをきらって、県名を、伏せることにします。

ある県の、招待所の部屋にはいったとき、私は、すっかり、すねていました。かなり以前のこと、原因は忘れてしまいました。同行していた、大同事務所のメンバーと、当時のカウンターパートの、県の青年団の代表が、私を、呼びにきました。「県長があいにくにいるから、早くきてほしい」といって。私は、ほっといたんですね。それからすると、すねてる原因は、この県のことだったんでしょう。また、呼びにきたんですけど、ほっといた。そしたら、3度目に呼びに来て、「遠田先生が、相手をしてるけど、困ってます」というのです。そうなると、行かないわけにはいきません。

県長は、遠田さんに、県の状況を、話していました。「この県は、急速に発展していて、1人あたりの年収は、千〇百元になった」というようなことです。私には、とうてい信じられない、数字でした。で、部屋に入るなり、「有水分百分之多少？」と、口をはさんだ。正確な中国語じゃないでしょうけど、どんだけ、水増しがあるのか、と聞いたんです。そこにいた、中

国側のメンバーは、瞬間に凍ったそうです。どうなることか、とと思って。

県長のほうが、腰が、引けました。私の顔を見て、ひと呼吸おいて、「まあ、そんなところだと思ってくれ。以前の、計画経済のころは、そういう数字も把握できたけど、改革開放で、市場経済になってからは、そういう数値は、よくわからなくなった。きちんと調査するだけの、予算もないし……」ということだったんです。

べつの県で、森林覆盖率（被覆率）を、誰かが質問したら、県長に代わって、林業局長が、答えました。これも、驚くような数字でしたから、私は、いくつか、追加質問しました。

「ヤナギハグミ（沙棘＝グミ科の灌木）が、パラパラッと、生えているようなところも、森林ですか？」「そうです」。「ことしの春、小さなマツを植えたところは、森林ですか？」「国家の規定では、1m以上に育ってから、森林に入れるということですけど、この県では、特例として、それも加えることにしています」。「昨年植えて、森林面積に加えたけど、その後に枯れてしまった、というところは、森林面積から、差し引きますか？」「そういうことはしません」。

またまた、別の県の、林業局長が報告しました。「国の林業部（現在は局）から、幹部が視察にきて、この県のプロジェクトをみたあと、活着率を質問されたので、90%です、と答えたら、きみ、それは謙虚すぎるよ、謙虚はいいけど、謙虚すぎるのはよくない、その2割増しくらいは、活着しているだろう、といわれました」。そういって、自慢するんですね。

そしたら、日本からきていた、私たちの、ワーキングツアーのメンバーが、拍手したんですね。私はもう、恥ずかしくて、しかたがなかった。90%の2割増しは、いったい、いくらになるんですか。その直後、その県の、前任の党書記にあう機会があったので、こういうことがあったよ、と話したら、「あいつは、もう……」といて、白けきっていましたよ。

どうして、こんなことが起こるのでしょうか？それはまあ、その人個人の資質の問題も、ないとはいえないでしょうけど、本質的には、制度、仕組みの問題でしょうね。みんな、お役人なんですけど、成績を上げないことには、いいポストに、つけないわけです。ですから、成果のところは、多少は、話をふくらませたい。まずいところは、できるだけ触れたくない。上のほうが期待する報告も、そういうものです。

ところが、前任者がすでに、ふくらませているわけですね。もし、正直に言えば、自分が、落としたことになります。かといって、前任者の報告が、ウソだったとは、まず、いえないわけですね。そういうことは、どこの社会でも、似たようなものでしょう。

そのような問題にであったとき、あれが、ウソだったと、あとで騒いでも、あまり、いいことはないでしょう。やっぱり自分自身を、訓練して、正確なところを、きちんと判断する能力

をつけるしか、ないのだと思います。

## NO. 336 環境にとっての人間問題 2005. 11. 21

ほぼ毎週、送りつけられる、この「黄土高原だより」の長さに、へきえきされたのでしょう。朝日新聞企画報道部の、都丸修一さんから「人に読んでもらえる、短い文章を高見さんは、書けないの？」という連絡。私は、「読んでもらえるかどうかは、別ですけど、短い文章も、書けなくはないですよ。(社)日中友好協会の機関紙に、600字ほどの原稿を、ほぼ3年間、90回ほど書きつづけてますから……」。

というような架空の対話があり、うふふふふ、きょう、11月21日(月)から、朝日新聞のオピニオン面に「高見邦雄の 中国・黄土高原の村から」という、ミニコラムが、3週間(月～金)にわたって、計15回、連載されることになりました。反響の大きいコーナーだそうですから、読者のブーイングの嵐で、途中降板の可能性も、ないとはいえませんが。おつきあいいただけると、さいわいです。

つい先日、私たちのネットワークに、1人の、新入会のかたがあり、事務所に、会費を送っていただきました。ありがたいことですが、びっくりしたのは、ネットワークのことを知ってから、入会までの、短い期間に、この黄土高原だよりを、第1号から、最新号まで、全部を通して、読まれたそうです。パソコンで計算してみると、400字詰め原稿用紙にして、なんと、2,200枚分もありますよ。私なんか、ゼツタイに、そんな気にはなれません。

まあ、それにしても、私も、書いたものです。材料は、たくさんあります。無限、といってもいい。でも、体験、見聞が、すぐ文章になるかということ、そうはいかないことも、あるのです。少し、熟成させる必要があります。それには、私のばあい、人前で話すのが、いちばん、いいようです。

どちらかという、ゆるんだ人間ですので、人前に立ったときの、かすかな緊張感があつたほうが、大脳の働きにも、いいようなんです。聞いていただいている人の、表情、反応をみているうちに、急に、新しい考えがでてきたり、それまで考えつづけていたことが、突然、まとまったりするわけです。いちおう、レジュメとかを、準備してたんですけど、話の途中の思いつきで、予定外の方に、パーっと飛んでいくわけですね。聞いてる人には、迷惑な話かもしれませんが、私にとっては、ありがたいことでした。そうやって思いついた内容が、黄土高原だよりの材料になりますし、いったん、文章にすると、次からお話しするときの、骨組みになります。

ところが、最近、パソコンのパワーポイントを、使うようになりました。あれは、いけませ

んねえ！話すうえでは、つかうとラクなんですよ。考える必要がない。聞いている人たちも、ビジュアルに見れますから、わかっている気には、なってもらえるかもしれない。でも、私にとっては、以前はわずかにしろあった緊張感といったものが、なくなります。会場を暗くしますから、きいてる人の表情が見えにくい。あらかじめ、用意した「絵」にあわせて、サラッと話すだけです。自分自身の、新たな発見が、なくなる。これがつづく、この黄土高原よりも、行き詰まるかもしれません。

6月のことですが、さるところでの講演で、ハプニングがあり、予定していた、パワーポイントが、つかえなかったのです。スタート時は不安だったんですけど、自分としては満足できました。深く考えたわけではないのに、勝手にことばがでてきました。「地球環境問題などと、よくいきますけど、あれは、省略された表現です。フルネームを、ごぞんじですか？『地球環境にとっての人間問題』というんですよ。これでは長すぎるから、略して、『地球環境問題』と、いっているんです」なんてね。

10月初めの、加藤登紀子さんとの対談で、そのことを話したら、彼女の積極的な賛同がありました。で、あちこちで、この「人間問題」を、話しています。こういうふうにと考えると、環境問題の、境界が、はっきりするんですね。

たとえば、来年、2006年は、国連の、「砂漠と砂漠化に関する国際年」です。沙漠化問題に、関心が集まるでしょう。いや、それほどでもないかな？国連も、存在感が、薄れてますからね。ことしの3月から、「命のための水・国際の10年」がはじまっていますけど、水の問題に、私も関心をもっているはずなのに、ほんとうのところ、おとといまで、私はそれを知りませんでした。みなさんは、ごぞんじでしたか？いえ、そんなことを、言っちゃあいけないですね。せつかく、国連が、このような問題をとりあげるわけですから、なんとか、みなさんに関心をもってほしいものです。

そのさいに、「砂漠化問題」というと、漠然としてますけど、「砂漠化にとっての人間問題」というふうに、考えると、枠組みが、実践的に明確になり、取り組みの優先順位まで、はっきりしてくると、思うのです。第1に、新しく、砂漠化させるようなことを、予防しないとイケない。あらゆる環境問題にとって、予防が最重要です。そのつぎに、人間が沙漠化させたところの修復。それも、時代の新しいところを、優先すべきでしょう。古くに砂漠化させたところは、環境が大きく変化していて、修復も困難である可能性が、高いと思います。

さらに、自然環境として、砂漠であるところは、手をつけるべきでない、と私は思います。それは、環境問題ではないのです。それでも、手をつけるというのは、環境対策ではなく、開発事業でしょう。開発事業として、資源として、砂漠をみる人もいます。でも、私は、砂漠くらは、未開発のまま、これからの世代のために、残しておくのがいい、と私は思います。

というふうに、「環境にとっての人間問題」として、環境を考えると、見る角度をすこしずらすことができ、いろんなことを、立体的に、認識できると思うのです。

## NO. 337 亡国？のゲーム 2005. 11. 29

黄土高原の農村を歩いていると、村の「大通り」のあちこちに、座り込んで、なにかに興じている、人だかりに、出会います。たいていは、トランプ。土のうえに、薄い敷物をおき、それを場にして、遊んでいます。やっているのは、4、5人。それと同数くらいの人が、のぞきこんでいます。

賭けていることも、たまにはあるようですが、たいていは、遊んでいるだけ。それでも、点数は、キチッと、計算しているよう。

私たちの、カウンターパートの、スタッフも、トランプは、大好きです。拠点の環境林センターに、当直したときなんか、夜おそくまで、テーブルを囲んでますよ。各県の、プロジェクトを巡回するときも、招待所の、どこかの部屋に集まって、やっています。

最初のころは、私も、誘われました。でも、横で観察していても、ルールがわからないんですね。2組のカードをいっしょにして、100枚以上を、使いますからね。それ以上に、ゲームとか、賭け事とか、私はちょっと、怖いんですね。いったん始めたら、のめりこみそうで。ですから、若いときから、近づかないようにしてきました。

ゼットタイに強かったのは、祁学峰だそうです。2001年まで、大同市青年連合会の主席で、8年間、この協力事業の、中国側責任者をつとめ、私とは、兄弟のようにしていました。なぜ、強いかというと、頭の回転が速くて、カンがよかった。天性のものか、実戦で鍛え上げたのか、そこは知りません。それ以上に、すごかったのは、負けてるあいだは、ゼットタイにやめなかった、そうです。他のプレイヤーは、根負けしてしまうんですね。こういうところに、性格が、表れるのでしょうか。

マージャンも、もちろん、盛んです。でも、こちらは、たいてい屋内。この協力事業の初期、私を案内していた青年団の幹部が、農村に着くなり、私をほっぽりだして、テーブルを、囲んでいたこともあります。

私たちが、最初に、協力にとりくんだのは、渾源县です。92年、93年のころ、私は、かなりの頻度で、県の林業局長の、温増玉さんの家を、訪れました。もっと正確にいうと、入り浸っていた、という期間があったのです。老温の連れ合いの、郭玉香さんが、肝っ玉おっかあで、まっ昼間から、若い男どもを引き込んで、雀卓を、囲んでいることがありました。賭けている

ことも、あったようですが、わずかなもの。

温増玉さんも、数年前に、定年を迎えました。いまや、悠々自適です。移動の途中で、彼ら夫婦を、訪ねることを、突然、私が思いつきます。すると、通訳の王萍が、断定的にいいます。

「ゼットタイに、マージャンをやってますよ」。アタリ。友人たちが、集まって、熱中しています。郭お婆さんは、以前とまったく同じ調子で、「ちょっと待って！　これが終わるまで」。私に同行している中国人たちは、「外国の友人が、わざわざ訪ねてきているのに」といって、あきれられるんですけど、郭お婆さんが、以前とまったく同じように、迎えてくれるのが、私は、うれしいのです。

いまの共産党政権が誕生してから、マージャンは、「亡国のゲーム」として、禁止されたことがあったそうです。日本人の知り合いから、そのように教わったんですけど、ほんとうかどうか、私にはわかりません。でも、まあ、たいしたことはありませんよ。たかが、ゲームですから。

大同から、渾源に移動するとき、ちょっとした峠を越えて、すぐでてくるのが、三嶺村でした（いまは道が付け替えになって、ここを通りません）。明代ののろし台と、日干しレンガ造りのヤオトン（窯洞）で、フォトスポットに、なっていました。海外からの、観光客は、ここで必ずバスを止め、いかにも黄土高原らしい景観を、楽しんだのです。

それをねらって、村の子どもや、お婆ちゃんたちが、みやげものを、売りつけにきました。手作りの馬鈴、布でつくった馬のおもちゃなど。「マイガバ！　マイガバ！」（買って、買って）と、しつこいのです。小学生くらいの、子どもたちが、そのようにするのを見て、日本人の、ツアー参加者は、いい気はしなかったようです。でも、私は、子どもが一家の経済に、参加するのが、わるいとは、とても思えなかった。30歳をすぎても、親がかりでいる、日本のほうが、ずっとひどいと、私は思っています。

その子どもの一人に、私は聞いたのです。「学習好不好？」（勉強はどうだい？）彼だけでなく、一群の子どもから、返ってきたのは、大声で、「不好！」（できない！）。で、私は「どうして？」「老師、不教！」（先生は、教えてくれない！）。私「先生は、なにしてるの？」「打麻雀！」（麻雀してる！）

私も、その先生を、何回か、みています。私は、農村の、すてきな先生のことを、これまで、何回か、書いています。それと対照的に、三嶺村の先生は、相当にひどいと思います。でも、村の学校の、先生は一人つきり。こどもには、逃げ場というか、救いというか、それがありません。

ここまでいくと、マージャンは、亡国のゲームに、近づきつつあるよう。でも、最近、日本

の若い人のあいだでは、マージャンの4人も、集まらないのだそうですね。コミュニケーションも、だんだん下手になる。こちらのほうが、もっと怖いのかもかもしれません。

ここ何回か、中国について、辛辣なことを書いたら、「高見は、疲れてるんじゃないか？大同の現場に、うまくいかないことがあって……」という声が、あったそうです。それは、そうじゃないんです。みなさんも、おそらく、そうでしょうけど、少なくとも、私のばあい、否定的なこと、失敗の経験、そういうことを書けるのは、実際のしごとが、うまくいってるときだけ。ほんとにしんどいときは、いい話を書いて、自分をはげまさないと、やっていけません。

## NO. 338 六稜山の自然林 2005. 12. 05

大同で、自然林といえば、すぐに、私の頭に浮かぶのは、靈丘県のもので、大同市の、最南部の県の、しかも南南部にあり、河北省との、省境に近い。この通信でも、しばしば書いています。

大同市の北部にも、森林というべきものは、なくはないのです。でも、それらは、人工林。大同市の、北部を、桑干河が流れています。この河は、北京の水源ですから、水源涵養の、ねらいもあって、大同における、初期の植林事業は、桑干河流域で、おこなわれました。そのために、人工造林による森林は、北部が、中心になっています。でも、自然林は、ほとんどない。

六稜山の自然林は、その意味で、貴重なものです。標高は、2,375m。大同県、陽高県、渾源県、広靈県の、県境の山です。行政単位の、境い目は、たしかに辺境です。村があったとしても、小さく、人口も少ない。生活は貧しいんですけど、人口圧力は、相対的に、少ないことが多い。

ここに、樺林背林場があります。私たちが、自然林を、懸命にさがしているのを知って、緑色地球ネットワーク大同事務所の、技術顧問、侯喜さんが、1999年に、案内してくれました。靈丘県の自然林は、すべて、公道から遠いところにあります。碣寺山は、その典型で、国道108号線沿いの村から、私たちの足では、片道4時間を歩かないと、いきつけません。ところが、樺林背林場は、道路のすぐそば。そのかわり、標高は1,600mより上です。

いちばん多い樹種は、その名のとおり、シラカンバです。胸高直径は、せいぜい20cmくらいまで、大きなものはありません。わりと最近まで、人手で伐られていたようで、切り株が残っています。いま生えているものは、切り株から萌芽更新したものが、多いのです。

そのほかに、カラマツ（華北落葉松）、トウヒ（雲杉）、トショウ（杜松）といった針葉樹も、混じっています。とくに、トウヒは、大きなものは、目につきませんが、木々の下の、陰にな

っているところに、小苗が、かなりの数、育っています。パラソル型と、いうのだそうですが、ほかの樹木の陰で、乏しい光線を、できるだけ多くとるために、背丈は小さいのに、枝葉を、横に大きく広げています。その姿が、傘のようなんです。

いまはそうやって、下積みに耐えています。なんらかの事情で、上の木がなくなれば、いっきょに、成長をはじめます。そういうことからいうと、シラカンバが主人公であるのは、仮の姿で、最終的には、トウヒが、ここの主役になるのでしょうか。人工的に、上の木を取り除いて、その過程を、促進することもできます。

カラマツと、トウヒの関係についてみても、カラマツ林のなかに、カラマツの小苗はみつきませんが、トウヒの小苗はあります。トウヒの林のなかに、トウヒの小苗は育ってますけど、カラマツの小苗はありません。そういうことからいうと、この地方の、海拔 1,600m 以上のところは、最終的に、トウヒの森林に、行き着きそうです。リョウトウナラなどの、落葉広葉樹は、もう少し、標高が低いところの、主役のよう。

2 年ほど、あいだをあけて、2005 年夏に行ってみると、思いがけず、大きな変化がありました。車を走らせながら、はるか下のほうで、気づきました。道のそばに、コンクリートの棒杭を立て、鉄条網を、張りめぐらしてあります。山のなかに、ヤギ、ヒツジなどの家畜を、入れないようにしているのです。「封山育林」。

けっこう、それが効果を、あげています。それで、伸びが速まった、というわけでは、もちろんありません。しかし、植物の種類が、急速にふえています。樹木でいうと、リョウトウナラ、ミズキ、ヤマナラシ、ナナカマド……。数年のうちに、芽生えた、若苗です。環境林センターの、見本園に植えたいので、春の発芽前に、掘り取るため、目印の、赤いテープを、巻いてきました。草は、レイジンソウ、マイヅルソウ、ギョウジャニンニク、ウメバチソウ……。数種類ですが、掘りとって、環境林センターに移しました。

このように、条件のあるところでは、人の影響を、排除することによって、かなり急速に、植生が再生するようです。それは霊丘県でも、みてきました。そういうところでは、人工的に植えなくても、大丈夫です。でも、どこでもそうとは、いきません。最低でも、シードソース、親となる木があって、種を飛ばしてくれないと、どうにもならないのです。

## NO. 339 移転した村 2005. 12. 10

12 月 7 日の、朝 7 時に、大同駅に着きました。北京から、夜行列車です。もちろん、暖房は、はいていますが、外気に負けて、あまりきかない。夜中に、寒さで、目がさめました。窓側を、頭にしていたので、首筋から、肩にかけてが、こわばっています。足もとにかけていた、ダウンジャケットを、頭から、すっぽり被りました。

私たちがくる直前、猛烈な寒波がきたそうです。最低気温がマイナス 20 度、最高気温がマイナス 13 度。12 月の初めとしては、50 年来、なかったことだそう。その後、少しずつ、やわらいでいますが、山にあがって、風に吹かれると、体の芯から、冷えきります。

今回は、短い滞在ですが、1 日をさいて、陽高県獅子屯郷の、農村を回ってきました。郷政府で、郷長の説明を受けたあと、移転して、廃村になった村を、みにいきました。高家窯といえます。「高」という名字の、一族の村なのでしょう。私も、ここの農村では、「姓高的日本人」（高という姓の日本人）と、呼ばれますので、私の、故郷のようなもの。

平たいところから、標高が 200m 余り高い、山のうえです。30 数戸の、土の窯洞があり、ピークは 200 人近くが、住んでいたそうです。住人がいなくなって、まさに廃墟。家財道具といえるようなものは、まったくなく、古レンガまで、持ち去られています。

移転の、直接の原因は、湧き水が、涸れたこと。急斜面につくられた、幅 50cm ほどの小道を、200m ほど下って、谷底にしてみました。コンクリートで囲った、ちいさな湧き水があり、底に、少しだけ、水がたまっていました。落ち葉が、はいりこんで、濁っています。水があったころも、わずかなものだったでしょう。これだけの水でもあれば、そこに人が住み、村ができるのです。

谷をはさんだ、村の反対側に、猫のひたいほどの、段々畑が、散らばっています。こんなところで、よく、暮らせたものです。いっしょにきている、会田さんに「こういう村で、3 年、暮らしたら、とても、いいことがあるよ」というと、不審そうな顔。世の中に、こわいことが、なくなるでしょう！

そこから、さらに上にも、村がみえました。任家窯村といい、井戸があるそうです。郷政府の統計では、64 戸、248 人とありますから、高家窯よりは、ずっと大きい。

この郷の、統計表をみると、2003 年の、1 人あたり年間収入は、郷全体の平均で、1,357 元（1 元=13 円）です。当時は、25 の村が、ありました。うち、10 の村が、1,000 元以上で、最高は、1,957 元です。15 の村が、1,000 元未満で、最低の村は、748 元。それが、高家窯村でした。

2003 年は、かなり、いい年だったようです。その前年は、郷全体の平均で、1,288 元。大旱魃の 2001 年は、586 元。そのような年、高家窯のような村は、ほとんど、収入がなかったでしょう。

ついでに、1 畝 (6.7a) あたりの、食糧生産高をみておくと、郷全体の平均で、2003 年は 205kg。

2002 年は、182kg。2001 年は、43kg です。

標高の低い、平地の村は、かなり豊かだと思います。衣食住には、不自由しない、中国でいうところの、「小康」です。放し飼いのブタが、あちこちを歩いています。乳牛の飼育を、専門にしている村も、訪れました。それが、1 人あたり年収の、いちばん多い村です。活気があります。案内してくれた郷長は、「豊かな村は、ますます豊かになり、貧しい村は、ますます貧しくなる」といいました。

最後に、高家窯村の、移転先をみました。大きな村の、はずれに、小さなレンガ建てが、ならんでいました。政府が、支給したものです。郷長の説明では、これは「南房」だそうです。一般の住居は、南向きに建てられますが、これは、北向き。この地方の農家は、たいてい、塀で、囲まれています。金のある家はレンガ塀、一般的には、土塀です。門は、東南の角にあります。ついでにいうと、便所は、西南の角。門のすぐ横に、小さな建物があり、農具その他が、しまっています。それが、「南房」です。

1 軒をのぞくと、狭い内に、寸足らずのオンドルがあり、若夫婦と、2 か月の、赤ん坊がいました。北向きですから、とにかく寒い。私は、あわてて、逃げ出しました。能力もないのに、首をつっこむと、心中の負担が、重くなるだけ。

耕地は、1 人あたり、1.5 畝 (10a) が配分されているそうです。この家は、6 畝 (40a)。平地といっても、塩害があるようですから、食べるのが、やっとならね。それから、出稼ぎにでる。あるじが家にいたのは、子供が産まれたばかりだからでしょう。

庭には、井戸があり、手押しポンプがありました。南向きの母家は、各自がお金を貯めて、建てるのだそうです。すでに建築中の家もありましたが、それは、数軒だけ。移ってきて、2 年がたっています。まだまだ、苦闘がつづくのでしょう。

## NO. 340 渋滞のアクシデント 2005. 12. 19

大同を発つ 12 月 11 日になって、ふたたび寒波がやってきました。天気予報では、最低がマイナス 19 度、最高がマイナス 12 度です。外にでると、風があつて、ブルブル。これくらいの気温だと、多少の温度差より、風のあるなしが、体感気温を、大きく左右します。

北京から大同にくるときは、夜汽車でしたが、あの寒さにこりて、大同事務所の小郭に、北京まで、車で送ってもらうことにしました。夕方から北京で約束がありますし、渋滞でもあったら、困るから、朝 9 時前に出発しました。最初は、順調でした。前回までは、高速道路の、舗装の、若返り工事が、あちこちであったんですけど、今回はそれもなし。

北京→大同の下り線は、もともと問題が少ないんです。でも、大同→北京の上り線は、路面の傷みが激しく、しょっちゅう、工事をしています。石炭を満載した、大型トレーラーが、通るからです。過積載の、取り締まりが、厳重になりましたが、車を止めますから、おうおうにして、それが渋滞の原因になる。下り線を走るときは、たいてい空荷です。

河北省張家口市の、宣化の料金所の係員から、官庁ダムのところで、高速の通行がストップしているので、地道を走るよう、告げられました。石炭トラックが、事故か、故障だということですが、たしかなことは、わかりません。

懐来のインターチェンジで、高速をおり、北京にむかって、国道 110 号線を走り始めたら、その料金所でも、渋滞だから、別の道をいくように、指示されました。中国の地方では、一般道でも、料金を徴収されます。けっこうな頻度ですので、その合計を考えたら、地道のほうが、高速道より、高くつく可能性もあります。

官庁ダムの、南側を、回ることになりました。この道は、ダムに注ぐ直前の、桑干河をわたります。いや、桑干河だと、私は思いこみ、そのように書きましたけど、橋の表示をみると、ここはもう、永定河だそう。もう少し上流で、桑干河に、洋河が合流します。そのあたりから、永定河に、名前が変わるようです。

ダムの上を走りました。20t 以上の車は通行禁止、の表示がありますが、張家口→北京の路線バスも、ここに迂回してきています。さすがに、石炭トラックは、みませんでした。

もと走っていた、高速道路の下をくぐったあたりから、渋滞がはじまりました。最大 5 列もの、トラックや乗用車が、上り、下り、入り乱れて、道幅いっぱいを、ふさいでいます。このようすをみれば、日本人なら、パニックにおちいるでしょう。そのすきまを、器用にすりぬけて、小郭は車をすすめます。しかし、それも、限度のある話。ついに、まったく動かなくなりました。

Uターンして、わき道へいく、乗用車があります。私たちも、それについていきました。2 人乗りのバイクが、私たちの車の横につけて、誘導してやるから、少し、お金をだせ、といいました。小郭は、地図があるから大丈夫だといって、それをことわりました。そのあとも、数組の、若い男たちが、同じように寄ってきました。

その先に、村があり、村の入り口で、道のまん中に、バイクを停めて、道をふさいでいます。6、7 人の、男の子が、私たちの車を、取り囲みました。10 歳代半ば、といったところでしょう。ここから先は、私有地だから、通り抜けるなら、金をだせ、といいます。小郭は、運転席の窓を、少しだけ開けて、それに反論しています。やりとりの声が、少しずつ、大きくなります。

子供から、大人になりかけの年代ですから、あまり、興奮させないほうが、いいでしょう。そのあたりは、小郭もわかっていて、適当に、あしらっています。その子供たちは、声は威圧的です。脅し、とっていいでしょう。でも、1人が、運転席の窓ガラスをたたくと、別の1人が、それを制止しました。この状態だと、大事にはならないでしょう。

小郭は、いくらだ？ ととききました。50元、と彼らはいいます。小郭は、携帯電話をとりだして、110番しましたが、なんどやっても、通じません。私は、デジカメをとりだして、彼らの写真を、撮りました。背中を向けたり、顔をそむけたりしますが、1人だけ、こちらに正面を向けて、ニコニコ笑いながら、ピースサインする子もいます。遊び感覚、なのでしょう。

けっきょく、20円で折り合いをつけて、そこを通りぬけました。村のなかで、男女数人の大人が、脱穀後のわらを、片づけていました。村の名前をきくと、懐来県大南辛堡村です。彼らも、村のこどもがやっていることを、知っているでしょうが、知らんぷり。北京市との境界から、数キロの村です。村の反対側の入り口から、もとの道に戻りましたが、けっきょく、ここも大渋滞。ほんの1kmほど、前に進むのに、20元を要したわけです。

小郭は、その後も、何度も110番しました。しかし、通じません。自分の携帯電話で、私も試みてみました。しかし、呼び出し音になる前に、切れてしまう。ついでに言うと、警察は110番。交通事故の連絡は、112番。消防は、119番。救急車は、112番です。かんじんなときに、通じるかどうか、それは、いま、書いたとおりです。

やっと、110番がつうじて、小郭が、口を開く前に、女の声で、屠車か？と聞かれました。渋滞問題か、ということでしょう。そうだと答え、「それから路覇だ」といって、小郭が、事情を話しましたが、警察は、とりあいませんでした。同様のことは、続発しているのでしょう。その後も、10分で抜けられる道を案内してやる、なんて男が、声をかけてきましたから。おもしろい産業が、現れたものです。

大同の純農村地帯では、こういう経験はありません。ちょっと考えにくい。問題の村は、北京市の延慶県からすぐ近くです。延慶県のリゾートホテルは、村からみえるくらい。その周囲には「平成日式度假村」（日本式の休暇村）の看板をかけた、一戸建て別荘が、ならんでいたりします。こういう境目に、ストレスが、貯まっているのかもしれない。

#### NO. 341 少数派もしくは異端 2005. 12. 26

新聞などの取材と、来春の講演依頼が、あいついでいます。来年が、国連の「砂漠と砂漠化に関する国際年」であること、2005年3月から、国連の「命のための水の国際10年」がはじま

っていること、などが、その理由でしょう。

そうやって、声がかかるのも、この「黄土高原だより」の存在が大きいです。字数などにとらわれず、私が体験してきたことを、ざっくばらんに、書いてきました。ここまで、号数を重ねたのは、いうまでもなく、パソコンと、インターネットのおかげです。

パソコンを選ぶ要素は、いろいろあると思います。CPU の性能と速度、メモリや、ハードディスクの容量。CD、DVD の読み書き。OS のバージョン、それからデザイン、スタイル。もちろん値段も。

その選択において、私は、けっこう不自由な、条件下にあります。その第 1 は、私に使えるキーボードは、1980 年代に、富士通が開発した、「親指シフト」だけであること。キー配列が、独特の、かな入力です。

そのころ、私は、数種類のキーボードを、検討しました。ワープロの草創期で、いまよりずっと多くの種類のキー配列がありました。日本語入力に、適したものを、いろんなメーカーが探っていたわけです。日電の森田式なんて、形からして、まったくユニークでした。

ローマ字入力も、もちろん、ありました。でも、不便ですね。かな 1 文字の入力に、子音と母音の 2 回、キータッチしないといけないし、アルファベットのキー配列が、機械式タイプライターの踏襲です。速く打ちすぎると、近接の印字ヘッドがもつれますから、わざと不自然な、配列にしてある、ということです。もっとも多用する、「a」の入力に、左手小指を使うことでも、その不便さがわかります。

JIS 配列の、かな入力も、実用にほど遠いんです。よほど熟練しないと、ブラインドタッチは、ムリでしょう。キーの数が多すぎて、キーを目でみないことには、打てないのです。改良版と称する「新 JIS」が、規格化されたはずですけど、現物を、みたことは、ありません。

いろいろ比較検討した結果、私は親指シフトを選びました。たいそう合理的にできています。印刷会社などで、ずいぶんたくさん、採用していました。でも、この社会、技術的にすぐれたものが、生き残るとは、かぎりません。その逆のことも、多いのです。圧倒的な大多数は、ローマ字入力でしょう。その他の方式は、あっというまに、消えてしまいました。親指シフトも、ワープロ専用機がなくなり、パソコンのワープロソフトに、変わるころから、完全に少数派になり、いまや風前の灯火。なんて、いっちゃあ、いけないかな。

第 2 に、私たちの事務所のパソコンは、Macintosh です。会報その他の印刷に使うことが、最初の目的だったんですけど、その領域は、当時は完全に、Macintosh の世界でした。1994 年のことですから、もう 10 年以上たっています。Windows95 がでるまえで、Macintosh は、ものす

ごく高価でしたけど、1 式を、寄付してもらったんです。でも、いまや、Macintosh は、完全な少数派。

少数派の Macintosh に、異端の親指シフトのキーボードをつなごうというのですから、これはなかなか、たいへん。少し前までは、新潟の REUDO という会社が、R-Boad という、専用のキーボードを出してましたが、それも製造中止。いまあるものを、だいに、だいに、使いつないでいる状態です。でも、新しいパソコンをいれたり、OS を入れ換えたりとなると、どうにもなりません。

ノートパソコンも、Macintosh に、フリーウェアのソフトを載せて、親指シフトとして、使うことが可能です。私は「TESLA」のお世話になっています。そうやって、自宅で、使っているんですけど、変換キーの、位置がちがったりするので、不自由なところが、少なくありません。

いま、これを打っているのは、Windows のノートです。一般の、キーボードなんですけど、富士通の「Japanist2003」という、IME（文字入力ソフト）を使って、親指シフトのキー配列に変えて、使っています。専用キーボードのものも、発売されていますが、選べる機種は、ひじょうに少ない。インターネットで調べると、「在庫少数」とか、「在庫 2 台」とかになっています。悩ましいこと。

パソコンにかぎらず、私はどうも、多数派に縁がないようです。しなくてもいいはずの、苦勞を強いられる。

2005 年の「黄土高原だより」は、これが最後です。みなさん、いい年を、お迎えください。

## NO. 342 衛星画像のなかの大同 2006. 01. 05

昨年の 10 月、パソコンに、Google Earth をダウンロードしました。大阪府立大学の、前中久行さんに、教えてもらいました。人工衛星からの、画像ソフトです。北京などの、人口密集地、政治、経済、その他の、重要地点は、解像度が、かなり高くて、天安門広場や、故宮のあたりは、自動車はもちろん、人影も、わかるくらい。中国共産党中央と、中国国務院の所在地、中南海は、北京市の地図でも、空白みみたいなものなのに、建物の 1 つ 1 つまで、くっきりとみえる。とても失礼なことかもしれませんが……。

年末年始の休みで、時間に余裕がありましたから、手元の地図を、対照しながら、大同のあたりを、じっくり観察しました。このクラスの地方都市や、農村になると、解像度は、グーッと落ちて、市街地でも、大きな公園なんかが、ああ、あそこだなど、判別できる程度。

それでも、鉄道や道路をたどったり、緯度・経度をたよりにして、大同市傘下の、7つの県の、県城（県政府所在地）を特定することはできますし、山脈や、河川、ダムなどのようすを、知ることもできます。画像ですから、縮尺に、意味はありませんけど、私のノートパソコンの、13.3インチのディスプレイで表示して、5万分の1くらいまでは、鮮明です。これくらいの精度の地図は、これまで、入手できませんでした。私のようなシロウトには、地形のようすが、地図以上に、感覚的にわかって、おもしろい。

いちばんの印象は、以前から、よく私が話してきた、「お皿の構造」が、くっきりとわかることです。大同は、とにかく、山が多いんです。それから黄土の丘陵と、盆地、その3つの要素で、成り立っています。盆地が、お皿の底で、山や丘陵が、お皿のふちです。

現場では、それほど感じませんでしたが、衛星画像でみると、山で浸食された、土や砂礫が、谷筋を通過して、流れだし、盆地にむかって、扇状に広がっているようすが、よくわかります。そして、浸食の範囲の広さに、驚かされます。現場でみえるのは、あたりまえのことながら、目にみえる範囲です。ところが、衛星画像でみると、山という山、丘陵という丘陵に、浸食が及んでいます。現場でみる以上に、生々しい。

その結果、山や丘陵は、だんだん土が失われ、水も、そこに、とどまりません。絶対的に、貧しくなるわけです。それにたいして、盆地は、流れてきた土が、堆積します。水も、地表水が、集まるだけでなく、地下水も、盆地の地下に、集まります。土と水とが、人間活動のキャパシティを決めますから、盆地は、相対的に、豊かになるわけです。

山の中腹や、丘陵まで、人手で耕され、段々畑になっていることも、みてとれます。黄土高原の上空を、飛行機で飛ぶと、山という山、丘陵という丘陵に、等高線が、はいっています。段々畑の畦が、等高線のように、みえるんですね。人工衛星からの、画像でも、それが、くっきりとみえます。山のずっと奥まで、人の活動のあとがあることに、改めて、驚かされます。

最初にみたとき、もう1つ、印象的だったのは、標高の低いところが、茶色っぽいのに、山の高いところの、緑が濃いことです。草木の緑だろうと、考えました。けっこう緑が回復してきてるんだなと、うれしくなったんです。今回の通信の主題を、そこに置こうと、最初は考えました。正月に、ふさわしい話題でしょ。

きっかけは、大同から東北に、20kmあまりのところ、ほかの場所とは、色が、変わっていたからです。遇駕山のあたり。ここは1985年に、大規模な植林が、なされたところです。面積は、930haほどで、主体となっているのはアブラマツ（油松）。一部に、モンゴリマツ（樟子松）が、混じっています。いまの標準は、1ha3,300本ですが、当時はもっと密植ですから、300万本は、超えているでしょう。大同事務所の技術顧問、侯喜さんが、若いころ、このプロジェクトの建設に、タッチしました。平均で3~4m、大きなものは、5m以上に育っています。その緑

が、人工衛星からも、みえるんですね。

ついでにいきますと、この遇駕山から、東南の方向に、いくつもの、火山があります。大同火山群といって、専門家のあいだでは、世界的に、有名なのだそうです。私たちの、ワーキングツアーに、参加した人のなかには、そのなかの1つ、金山寺の麓で、植樹した人がいるはず。現場でみると、赤黒い、溶岩の固まりでしかありませんが、衛星画像でみると、火口のかたちが、はっきりみえます。ものごとを正確に知るには、すぐそばでみるだけでなく、距離をおいてみることも、必要なようです。

ところが、山が緑にみえるのは、必ずしも、草木ではないよう。というのは、この地方の山で、草が茂り、木が育つのは、ふつうは、北がわの日陰斜面（陰坡）です。南むきの、日向斜面（陽坡）は、乾燥がひどい、その他の理由で、植物は、育ちにくいのです。ところが、この衛星画像をみると、全体的な傾向として、南斜面のほうが、緑が濃く、みえます。

でも、しつこく画像をみているうちに、谷のはずのところ、尾根に、尾根のはずのところ、谷に、ひっくりかえって、みえてきました。困ったな。もう、このくらいでやめておきましょう。山が緑にみえるのは、どういう理由があるのでしょうか？理由をご存じのかたは、教えてください。

なお、Google Earth は、簡単にダウンロードできます。私が、使ったのは、無料のもの。いまのところ、サービスがあるのは、Windows 版だけで、Macintosh 版も準備中だと、ありました。古い機種だと、使えないものもあるそう。大同市の範囲は、北緯 39 度 02 分～40 度 43 分、東経 112 度 34 分～114 度 34 分です。

#### NO. 343 シャンマー（相馬さん） 2006. 01. 10

相馬さんが、はじめて大同にきたのは、2000 年の 3 月末でした。厳寒の時期はすぎたとはいえ、北緯 40 度、海拔 1,000m 以上の大同は、まだ、かなり寒かったのです。いっしょにこられた藤沢春海さんも、相馬さんも、薄着で、寒そうでした。2 人は、その数年前から、北京郵電大学に留学して、中国語を勉強している、ということでした。北京で暮らしているために、「寒いといっても、もう 3 月末。たいしたことはなかろう」と、大同の寒さを、みくびったのでしよう。

相馬さんは、それを機に、足しげく、大同に通うようになりました。青森の営林局長を最後に退職した、林野庁 OB だということは、本人からも、元同僚からも、きいていましたが、役人くさを、まったく感じませんでした。もともと、そういう人では、なかったでしょう。役人らしい、役人だっただろう、と私は思います。現職のときは、判で押したような役人だった人

間が、退職後、ガラッと人が変わるケースは、私の友人のなかにも、めずらしくありません。しごとが、人をつくる、ということでしょう。

相馬さんは、68歳になってから、中国語の学習を思い立ち、単身、北京にきました。あいまには、中国の、ほぼすべての省・自治区を旅していますから、あのひょうひょうとした風格は、旅のなかでつくられたかもしれません。私は、そう理解していました。

大同事務所のメンバーも、農村の人たちも、相馬さんが、大好きでした。「シャンマー」といって、呼び捨てにするか、「ソオ・マサン」と、へんなところにアクセントをおいて、彼を呼んでいました。相馬さんが、中国語で応じると、困ったようすで、横にいる私の顔を、うかがいます。相馬さんの中国語も、私と同じで、相手の理解力・想像力にたよる、それだったのです。

よれよれのジャンパーに、くたびれたデイバッグ、ベトナム製の、色のさめた、赤い帽子、そのような、いでたちにもかかわらず、どことなく品があって、どこにいても、すぐに、日本人だと見抜かれました。しかも、金持ちに、みられるのです。困ったことに。

2001年の春、ツアーのあいまをぬって、私たちは、山西省偏関県万家寨鎮に、でかけました。対岸は、内蒙古のオルドス（鄂爾多斯）であり、ここにダムをつくって、黄河をせき止め、その水を、太原と、大同に、送る計画が進行中でした。それをみたかったのです。

昼どきに、小さなレストランにはいりました。ひととおりのものを、注文したあと、黄河のコイが、名物だときいて、それを追加しました。支払いの段になって、びっくり。コイ1匹が、なんと、200元！7人分の、その他の菜すべてより、ふっかけられたのです。店の主は、「釣ってきたコイだから高い。網で獲ったコイとは、わけがちがう」と言い張りましたが、私は、「いや、希少なものは高い、というのが市場経済だ。日本人の客なんて、めずらしいし、金持ちは、なおさら、めずらしい。だから、しかたないんだ」と、いいました。原因がシャンマーであることに、全員が一致しました。

私にとって、相馬さんは、とてもありがたい存在でした。なんともいうように、緑化にとって、私は門外漢です。国際協力にとっても、門外漢です。それでも、ある段階から、この協力事業は、とんでもない失敗作とはいえないだろうな、と思えるようになりましたが、客観的にみて、どういうレベルにあるか、わかりませんでした。北京からきた中国の幹部が、「貴重な成功例だ」と評価しますが、彼らは、面と向かって、まずいことは口にしないでしようし、プロジェクトの細部を、理解できるわけでもない。

相馬さんは、私たちのプロジェクトを、ひととおりに、みたあと、「民間団体の緑化協力なんて、ママゴトだろうと思ってましたよ。こんなことまでやっているとは、思ってもいなかった。認識をあらためましたよ」と、評価してくれました。リップサービスだけでなく、それから数年

間、彼は、毎年 100 日以上も、私たちのプロジェクトに、滞在してくれたのです。そして、日本からやってきた、視察のメンバーに、「このプロジェクトの、すごいところはね、大地に木を植えるだけでなく、人の心に木を植えていることです」なんて解説してくれました。そんなこと、私たちの口からはいえませんよ、恥ずかしくて。相馬さんに誘われることで、私たちのプロジェクトに、関心をもつ人も、ふえてきました。そんなことを通じて、私たちは、少しずつ、自信をもてるようになったのです。

故渡辺桂さんによると、フォレスター症候群というのが、あるそうです。その 1 つに、フォレスターは、樹木をみると、うれしくなる、まっすぐ、大きな木をみると、ことのほか、うれしくなる、というのがありました。相馬さんは、まちがいなく、フォレスターでした。霊丘自然植物園の、いちばん高いところを、「南天門」といいます。地図にも載っている、正式の地名で、海拔は 1,300m 強です。その近くには、リョウトウナラの群落ができています。ふもとの管理棟からは、高低差で 400m ほどありますし、作業道をつくるまでは、踏み分け道しか、ありませんでした。

70 歳代半ばの相馬さんには、相当にきつかったと思います。途中まで、いっしょに登ると、「行けるところまで、ゆっくり行くから、先にいってください」といわれます。どうせ、一本道で、そこに帰ってきますから、私たちは先にいきます。でも、ちょっとだけ遅れて、相馬さんは、かならず、やってくるのです。「相馬さん、あなたは、こどものころから、ケンカすると、すぐに泣いて、泣いてから、強くなるタイプだったでしょ」なんて、失礼なことを、私はいいました。

2001 年の春、私たちは、大同の南西にある、芦芽山にいきました。ここには、トウヒ（雲杉）と、カラマツ（華北落葉松）の林があります。こんなにっばな森林が、ここに残っているのは、沙漠のなかの、オアシスのようなもの。トウヒなんか、直径 60cm 以上のものが、たくさんあります。相馬さんは、車が止まったとたん、転げるように、そとに出て、走り出すんですよ。立ち木が、逃げるわけがないのに……。

相馬さんはまた、ナナカマドやミズキが、だいすきでした。冊田ダムの横の道をぬけて、六稜山にのぼると、途中で、自然林があります。シラカンバが中心ですが、そのなかに、ナナカマドがありました。「中国でも、ずいぶん山をみたけど、ナナカマドをみるのは、はじめてです」といって、抱きついて、登ろうとするんですね。運転手の小郭は、どうしたものかと、あわててましたよ。

この年末年始の休みがあけて、事務所にでると、1 通のファクスが、はいつていました。日中緑化交流基金の、小林榎さんからです。1 月 1 日午前 4 時 05 分、相馬昭男さんが亡くなった、という知らせです。78 歳でした。緑色地球ネットワーク大同事務所の、武春珍所長に電話をすると、彼女は「惜しいことです、ほんとに惜しいことです」と、それだけをくりかえしました。

相馬さん、ほんとうに、ありがとうございました。ごくろうさまでした。

NO. 344 ラオチー（老七） 2006. 01. 16

私たちのカウンターパート・緑色地球ネットワーク大同事務所の副所長、魏生学（ウェイ・ションシエ）は、私の目からみて、ふしぎな男です。顔も、体も、まるっこくて、いつもニコニコしている。所長の武春珍が、いかにも、やり手で、どんなときでも、前にでるのにたいして、小魏は、あまり目立たない。あまり、じゃない。この饒舌な、『黄土高原だより』にも、彼は、ほとんど登場していません。

この協力事業に、彼が参加したのは、早いのです。大同事務所の創立は、1994年夏ですが、そのときに、彼は加わっています。祁学峰が、所長に就任したのと、同じ時期。通訳の王萍が、1995年春、所長の武春珍は、1998年春ですから、それに比べても、ずっと古手です。にもかかわらず、目立たない。

引っ込み思案です。この協力事業のことを紹介して、といわれても、モジモジするばかりで、前にはでない。ツアーがきているときに、なにかアクシデントがあって、急に決定しないといけないことがおきても、自分では、なかなか決めることができない。イライラ、させられることが、あります。

ところが、彼は、大同の人たちのあいだでは、存在感が、あるんですね。私たちの通訳で、本職は大同市第4病院・院長助理の、王萍は、ずいぶん早くから私に、「魏生学は、とても聡明な人ですよ」といいました。ほかの、若いスタッフたちも、小魏のことを、とても大事にしています。小魏は、裏方のしごとの、ほぼすべてを、掌握していました。でも、評価のギャップを、私はなかなか、埋められなかった。

あるとき、武春珍が、彼のことを「ラオチー」と、呼んでいるのに、気づきました。「老七」です。彼は、きょうだいのうち、7番目で、家では、そう呼ばれていたのだそう。産めよ増やせの、毛沢東時代とはいえ、都市部では、そこまでの子だくさんは、まれでしょう。小魏は、新栄区の、農村の、生まれ育ちです。子だくさんですから、生活は、苦しかったようです。いっしょに、農村をまわっていると、「あれも食べた、これも食べた」といって、彼が指さすのは、野草、木の葉。

私とのあいだで、意気投合したことがあります。私には兄がいて、こどものころ、着るものは、いつもそのお下がりでした。お下がりでも、ピッタリだと、いいんですけど、身の丈にあうようになるまでに、それまでのものが破れてしまい、ダブダブのものを、着ないといけない。

私の体が伸び、その服があってくるまえに、また破れてしまう。その繰り返しです。そんなことを話すと、彼は、それに身振り、手振り、あわすのです。まあ、私は上に1人ですけど、彼は兄弟が6人ですからね。

小魏は、村開闢いらいの、秀才であったようです。本人はいいませんが、周囲の連中が、私に「告げ口」します。大同には、大学がありませんので、小魏は、それに代わる最高学府、師範学校をでました。1960年代前半生まれの、大同の秀才たちに、共通のパターンのようです。祁学峰も、武春珍も、同じコースをとり、その後、中学校（日本の中学高校）の、数学の先生になり、途中で、共青团の幹部に、抜擢されています。太原の、大学にすすむものが出るのは、もう少し、時代が下ってからです。

秀才の片鱗は、残ってますよ。とにかく数字にかかわることを、よく覚えている。昨年12月、大同における、平均的な賃金の推移や、石炭価格の推移を、調べてほしいと、頼んだら、調べたまでもなく、彼は、その場で、メモにして、渡してくれました。共青团にいるころ、彼は、そういうしごとをしていたのだそうです。

それから、人がいいのは、まちがいない。モンゴル族は、人のよさで、世界的に有名なようですが、彼の生まれ育った新栄区は、内蒙古自治区との境界に近く、あの風貌をみると、モンゴル族のDNAも、混じっているにちがいません。「小魏は、100%のハオレン（好人）だ」と、私がいうと、小武は、「そうではありません。120%のハオレンです」といいます。人間は、多少の毒がないと、おもしろくないと、私は思ってますから、「100%のハオレン」には、否定的な意味合いも、あるんですけど、120%となると、そんなことは、超えてしまっているようです。

昨年の春、内蒙古自治区の、フホト（呼和浩特）を訪れたとき、小魏の友人が、私たちを、熱烈に歓待してくれました。「熱烈」のなかには、ガンベ〜イの嵐が、含まれています。そのとき、その男が、小魏を「ラオチー」と呼び、自分を、ずっと、下におくんですね。自分は「ラオパー」（老人）で、末っ子だともいいます。

どういうことかときくと、彼らは義兄弟だといえます。べつに、姻戚関係があるわけじゃない。そして、老人が末だけど、老大（一番目）と、老四は欠けている、と。じゃあ、欠けてるところに、おれをいれてくれと、私がいうと、それはダメだといえます。彼ら義兄弟の6人も、それぞれの家庭における、きょうだいの順番と、一致している、それが条件だ、ということです。

なんだ、たあいもない、遊びじゃないか、と思われるかもしれませんが、さらに尋ねると、そうでもないよう。実のきょうだい以上に、なかよく、助け合っているようなんです。フホトを、私たちが訪れるにあたって、老人は、老七の依頼を受けて、ほんとに熱心に、下調査

をしてきていました。私たちだけなら、何日もかかることが、大同からの、日帰り、できてしまった。

それから、私たちの協力拠点、環境林センターなんかでも、燃料として、かなりの量の、石炭を購入しますが、その値段は、市場価格にくらべて、たいへん安いのだそうです。それは、老七の、何番目かの兄貴が、石炭関連の企業で、働いているからだそう。特別に安く、回してくれるわけです。

中国で、すこしでも仕事をした人は、人脈の、重要さを、知っているはず。それがなかったら、なにもできないし、確実な人脈を、たどることができれば、不可能と思えることも、実現することができます。彼らの義兄弟は、それが濃密になったものかもしれない。

人間という存在は、皮膚のうちの個体であるだけでなく、人生のつみあげと、そのなかでつくられた関係性の総体だと、私は思います。そう考えると、ラオチーが、以前とは、まったくちがう人間のように、みえてきます。

#### NO. 345 大同の景気 2006. 01. 23

大同は、中国最大の、石炭の街です。その他の産業も、あるにはありますが、それらも、石炭関連の産業に、ぶら下がっている、と考えていいと思います。

以前、大同市青年連合会の主席で、その後、大同市南郊区の、共産党委員会副書記に昇進した祁学峰が、私に話したことがあります。「南郊区は、大同のなかでは、環境に恵まれているし、近郊農村だから、農業収入も多いと、思っていたけど、南郊区で働くようになって、驚いたのは、収入の大部分は、石炭によるものだった。農業は、農民が、なんとか自分で、生きてくれば、それでいい、といった程度」。

ですから、大同の景気は、石炭に大きく左右されます。一時期、石炭価格が、落ち込んだことがあります。となりの陝西省や、内モンゴで、天然ガスの開発がすすみ、北京などでも、石炭から、石油、天然ガスへの、エネルギー転換がすすむ、と思われたわけです。生産調整によって、石炭価格を維持し、あわせて、国営の大手炭鉱を守るために、中小・零細の炭鉱が、整理されました。

大同の炭鉱には、四川省、雲南省などの南方を含め、遠方からの、出稼ぎ労働者が、たくさんいました。その人たちの、しごとがなくなります。しかし、お金がなくて、帰るに帰れない。失業者がたくさんいて、治安もわるくなり、とげとげしい雰囲気、なったんですね。

ところが、最近の、中国の経済発展は、エネルギー転換さえ、追い越して、しまいました。石炭だって、生産が追いつかないのです。石炭産出で名高い、山西省で、輸入炭をつかうことすら、あったようです。価格も、どんどん上がっています。

大同の炭鉱の、坑口での価格は、つぎのように変化したそうです。いずれも、1トンの価格です。94～98年：30～40元、98～2000年：40～50元、2001年：80元、2002年：120元、2003年：150元、2004年：180元、2005年：240元。すごいでしょ。この数年で、何倍にも、高騰しました。

それにもなって、各方面の賃金も、上がっています。おおまかな傾向を示すと、つぎのようになります（月収）。まずは、政府機関や、事業単位の公務員。

1990年：108元、1995年：310元、2000年：780元、2005年：1480元

大同の花形企業、第2火力発電所の労働者のばあい。ここは発電した電力の、全量を、北京に送っています。

1990年：2800元、1995年：3000元、2000年：3200元、2005年：3500元

市内の一般企業

1990年：100元、1995年：200元、2000年：400元、2005年：500元

所得倍増、なんてものじゃないんですね。もちろん、消費者物価も、上昇してますけど。中国全体でも、経済の大膨張があったんですけど、大同のばあい、石炭だけの単一経済といつていいくらいですから、ほかの都市以上に、変化が激しかったかもしれません。

とにかく、私が最初に大同に行った、1992年ころは、大同の目抜き通りを、馬車が歩いていました。自動車は、ほとんどなく、タクシーも、外国人の泊まることのできる、2つのホテル、つまり、雲崗賓館と、大同賓館のまえに、数台ずつが、停まっているだけで、流しなんて、まず、ありませんでした。みな、ノーマーターで、どこに行くのも、20元だといわれました。賃金との比較でも、ベラボウな料金を、ふっかけてたんですよ。「高すぎる」と私がいうと、「じゃあ、乗るな」の一言。

ここ数年、大同の市街地では、道路の拡幅がつづきました。従来の倍にも、道を広げたのです。それでも、朝夕のラッシュ時には、渋滞がおこります。タクシーの数も、すごいものですし、個人経営者などで、車を持つ人も、ふえてきた。表通りに面して、中層のビルが、建ち並びました。でも、裏通りにはまだまだ、レンガ建て、平屋の四合院が、みられます。

市街地は、このように、大きく変化しましたが、農村の変化は、それほどでもありません。まずまずと思える村でも、1人あたり年収は、千数百元、といったところ。4人家族を基準に考

えると、一家の年収が5～6千元です。1人あたり年収が、5百元を切る村も、まだまだあります。最近のレートは、1元が、14～15円といったところ。要するに、水も、土地も、かぎりがあり、収穫は、自分の家で食べるのが、やっと。食糧価格が、多少、上がっても、剰余がなければ、売ることではできませんから、収入の増加にはつながらないのです。

人びとの生活水準が上がるのは、けっこうなことでしょうけど、その一方で、狭い地域のなかでも、都市と農村とで、ここまで、格差が拡大するのは、大きな問題です。政府も、農業税の廃止など、さまざまな手を打っていますが、この格差を解消するのは、容易ではありません。

私たちも、じつは困っています。協力事業の規模を、これまで拡大できたのは、地元の、低賃金構造が、あったからです。農村が、低所得であるのは、変わらなくても、出稼ぎの賃金は、確実に、上昇してますからね。私たちも、その影響を受けます。

一昨年に着工した、大同県の、白登育苗センターは、労働力の確保が難しく、単価も、また、高がついたのです。ただ、彼らは、遠方からきての、泊まり込みで、「労働時間は、どんなに長くてもいいから、1日あたりの賃金を、高くしてくれ」とのことでした。実際に、朝は日のでるまえから、夜は暗くなるまで、働いたのです。おかげで、作業は、はかどりましたけど。1日あたりの賃金も、30元以上になりました。

南郊区平旺郷の、環境林センターでは、女性の臨時工の日当は、数年前まで、なんと7元だったのです。その後、8元から10元ほどになりました。でも、このまま、維持することはできないでしょう。頭の痛いことです。

## NO. 346 采涼山のマツ 2006. 02. 03

采涼山は、大同市北部の山で、新栄区、大同県、陽高県の、区県境いになっています。最高峰は、2,145m。日本にもってくれば、高山ですが、大同は、盆地の底でも1,000mですので、そう高くは、感じません。

北側の斜面は、50年代から、植林が取り組まれ、カラマツの、りっぱな林場になっています。なんども触れているように、このような乾燥地では、北側の、日陰斜面（中国語で陰坡）で、植物はよく育ち、日向斜面（陽坡）は、むずかしいのです。北側の植林は、すでに終わっており、このところの課題は、より困難な、南面の植林です。

私たちが、采涼山プロジェクトと呼んでいるのは、この山の、南がわのふもとに建設中の、マツの造林地です。大同の市街地から、東北東に25kmほどのところで、大同—張家口の道路と、京包線の鉄道に接しています。私たちの実験林場「カササギの森」の入り口、といえば、ツア

一に参加されたみなさんは、すぐおわかりでしょう。2000年春に植えたマツを、みてもらっています。

ここのマツは、等高線に沿って、3mおきに、水平溝と土手をつくり、溝の底に、1m間隔で、植えました。ですから、1haに、3300本の計算になります。日本ふうにいえば、1坪に1本の、坪植えです。植えた苗木は、2~3年生の、小苗です。地上部は、せいぜい15cmほどで、草のように頼りなく、ツアー参加者からは、「こんな苗で、ほんとにだいじょうぶですか？」と何度も、念を押されます。

2005年8月、大同事務所のメンバーといっしょに、ここで生育調査をしました。遠田宏顧問が、その結果を整理してくださったので、それにもとづいて、報告いたします。

隣りあった2列を選び、それぞれ100本、合計200本の、過去5年間の、主幹の伸長量を測りました。ごぞんじのように、マツは、1年に1節ずつ伸びます。過去の年の伸長量も、簡単に測れるわけです。

200本のうち、枯れて、なくなっていたのは36本で、全体の18.0%。それから、生育障害樹が10本、5.0%あります。その大部分は、幹の先端が枯れてしまったもので、枝の1本が幹に替わって、復活する可能性があります。しかし、生育は、ずっと遅れるでしょう。

残りの154本をみると、樹高の平均は94.6cmで、最大のもは150cm台。最小のもは40cm台でした。小さいものなかには、最初に植えたものが枯れ、補植されたものも、含まれているでしょうが、そこまで細かくは、調査していません。

比較のために、2004年のものをみると、樹高の平均は、65.8cm。最大のもは100cm台。最小のもは20cm台。マツが、縦に大きくなるのは、大同では4月下旬から、7月初めにかけてです。ですから、2005年春の、ツアー参加者がみたのは、この数字のもです。

そのあとの数か月で、平均で28.8cmも伸び、もっとも伸びのいいものは、50cmも伸びたこととなります。遠田先生は、私たちの会報「緑の地球」1月号に、年々の伸長量が、急速に増え、加加速度的に、大きくなるようすを、グラフで示されています。でも、文字では、なかなか表現しにくい。平均の伸長量だけ、書いておきましょう。

00年5.1cm、01年6.9cm、02年11.3cm、03年16.7cm、04年21.3cm、05年28.8cm。

現場での印象は、もっと強烈です。樹木は、主幹だけでなく、枝も伸びます。現場で、私が、それを具体的に示しながら、「いまは、みなさんが、みているとおりですが、ことしの春までは、こんなにちっちゃかった。来年の夏にきてもらおうと、これくらいに育っているでしょう」といって、ひとまわり大きな姿を、空に手で描きます。そうすると、東北電力総連の、1人の参加者

が、「風船がふくらむようすを、イメージすればいいんですね」といいました。まさに、そのとおり。倍々で、緑は濃くなります。

この采涼山プロジェクトは、大同県聚楽郷と協力して、実施しました。数年をかけて、およそ 250ha に植えました。マツだけでなく、ヤナギハグミ（沙棘）や、ムレスズメ（檜条）と、混植しました。

このプロジェクトがうまくいったのは、人の要素が大きかったと思います。とくに、リーダーです。プロジェクトの2年目に、張春が、郷の党書記に就任しました。ものすごく、緑化に、熱心な男です。いつも外にでて、陣頭指揮をとり、まっ黒に、日焼けしていました。県政府での、デスクワークに戻るよういわれて、それを断ったことがあります。緑化の模範として、全国規模の表彰を、受けたことがあります。中国には、「緑化3分管理7分」という言い方がありますが、彼はいつも、「緑化1分管理9分」といっていました。でも、去年から彼は、県の水務局長になりました。

大同は、北京の水源であり、風砂の吹き出し口です。ここの緑化は、中国にとって、戦略的な重要性があります。緑化関係の、全国や、全省の会議が、毎年のように、大同で開催されます。采涼山の緑化プロジェクトでは、そのたびに現場見学会が開かれます。カササギの森までの道路が、いつも整備されているのは、そのおかげです。

#### NO. 347 小川房人先生を偲ぶ 2006. 02. 09

小川房人先生が、2月4日に亡くなりました。緑の地球ネットワークの顧問として、長いあいだ、たくさんのことを、私たちに教えてくださいました。でも、もう、そのような機会がないと思うと、どうして、もっと多くを、学んでおかなかったのかと、後悔の気持ちを、おさえることができません。シベリアの、タイガ訪問の体験を、たくさんスライドを交えて、話してくださったのは、去年の11月も末のことでしたから、あまりにも急な、というしかありません。

小川先生のことばが、いまでも私のなかに残っているのは、フィールドのなかで、自分自身で体験されたことであること、その体験が、十分に練り上げられ、教訓化されていたからだと思います。

1992年の秋、大同の農村を、私は1人で回りました。そのさいに、日本語の本を、1冊だけ、私は携帯しました。朝日文庫からでてまもない、『大興安嶺探検』です。今西錦司編となっていますが、実際の編集作業は吉良竜夫先生が、多く、たずさわられたのだそうです。中国語を、まったく理解しない私が、農村を歩き回るのは、自分でも、けっこう不安なことでした。その

とき、この1冊の文庫本が、私を勇気づけてくれたのです。

その後、世話人の川島和義さんによって、立花吉茂先生（現代表）を、紹介してもらい、さらに、小川房人先生にも、いろいろ教わるようになりました。お二人の先生とも、吉良先生の弟子であり、長いあいだの、同僚でも、あったんですね。ふしぎなことです。

忘れられないのは、私たちの小さな事務所で、小川房人先生を囲んで、「海外調査心得」について、学んだことです。先生は、みずからの体験をもとに、そのような表題の、小さなパンフレットをつくっておられました。私は数年間、大同での手さぐりの経験がありましたから、とりわけ、学ぶことが大きかったと思います。

東南アジアの国々で、調査活動にあたる時、地元の政府の許可をとるのが、たいへんだったそうです。「だめです!」と断られると、ことばがよくわからないかのように、すっとぼけて、「そうですか。きょうはだめですか。では、あした、またきます」といって、相手が、「あしたはだめです」と答えると、「じゃあ、あさってですね」というふうに、つけいるのだそうです。「平均、8回通えば、たいていの問題は解決しますよ」とのことでした。

私は、この教えを、忠実に実行したことがあります。大同市青年連合会の、人事異動にともなって、大同での活動が、暗礁に乗り上げたことがあります。2002年から、2003年にかけてのことです。そのまま、つづけても、破綻は目にみえていましたし、事故でもあれば、取り返しがつかない、と考えました。

青年連合会を相手にしても、らちがあかなかったので、共産党大同市委員会を、訪ねることにしました。顔見知りの幹部が、外地にでて留守のため、アポイントもなしで、でかけました。たまたま訪ねた秘書長が、私のことを知っていて、プロトコールは、意外とスムーズだったんですけど、問題そのものは、簡単ではありませんでした。で、毎日、朝にいて、昼にいて、というふうにしたんです。

先方からは、「ガオジェン（高見）、あんたの満足がいくように、かならずするから、もう少し、時間をくれ」といわれたんですけど、それでも、私は、またいきました。ついに、「こんなにしょっちゅう、こられたら、自分のしごとができないよ」と、こぼされましたけど、それでも、私は通いました。よほど、しつこい人間だと、思われたことでしょう。

じつは、私は、小川先生のことばを思い出して、1回、2回、3回……と、数えていたんですね。8回通うころには、じっさいに、解決できました。現地のカウンターパートが、大同市総工会に変わり、安定した環境を、取り戻すことが、できたのです。こんなことは、本来の私に、できるはずがありません。

「狭い日本にゃ住みあきた、なんていって、海外にでる人がいるけど、日本でできないことが、国外でできるはずがない」と小川先生はいわれました。「おれたちや、街には住めないからに～、なんて歌では歌うけど、街で暮らせない人が、山で生きていけるわけがない」といわれました。もっともなことだと、思います。日常のなかで、自分をつくり、鍛えないといけないのです。

私たちのもう1人の顧問、石原忠一先生が、小川先生に、「どういうわけで、顧問を引き受けられたんですか？」と尋ねられたことがあります。「海外で失敗するのは、日本のやり方をそのまま持ち込んで、それが通用しなくて、だめになるんでしょう。この人たちは、日本ではみんなシロウトで、中国にきて、中国のやり方とおりあいをつけて、ここまできている。これから失敗することがあっても、それでも、やりぬくでしょう。自分の力を貸した方がいい、と思ったんです」ということでした。ありがたいことです。

その小川先生が、「自分らの先生たちにくらべると、私たちは、ずーっと小粒ですよ」と、いわれたことがあります。先生たちというのは、そのとき名があがったのは、今西錦司さんにはじまって、吉良竜夫さん、梅棹忠夫さん、といったところでした。巨人ですからね。そういうふうにいわれると、私たちの世代なんて、生きていく場所もないように、思えてきます。若い人たちの、踏み台になれ！ということでしょう。きもに銘じないといけません。

いくつか、おしらせです。神鋼環境ソリューション労働組合の機関誌『UNION OPEN HOUSE』(NO. 46)が、A4版32ページの大部分を使って、吉良竜夫先生の「なぜ環境問題にかかわるようになったのかー生涯をふりかえって若い世代の方々に伝えるー」という講演の記録を、特集しています。大興安嶺探検から、最近のモンゴルの調査まで、貴重な写真がたくさんはいついて、ほんとに、すばらしいです。いただいた機関誌は、残部がないのですが、あわせて、PDFファイルをいただいております、「自由に配布してもいい」とのことです。希望者に、お送りしますので、ご連絡をお願いいたします。

緑の地球ネットワークのウェブページの、中国語版をアップしました。いまのところ、いたって簡単なものですが、徐々に、充実させていきます。日本語版のホームページに、リンクがありますので、ごらんください。

それから、私も、ブログなるものを、はじめました。といっても、賞味期限の切れそうな、在庫をならべているだけですが……。 (社)日中友好協会の機関誌『日本と中国』に、「黄土高原レポート」という、コーナーをいただいて、4年目になります。毎号、600字+写真1枚の、短いものですが、すでに100号近くになっており、とりあえず、2003年分を、アップしました。その後も、継続の予定です。以下でごらんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

## NO. 348 いま、なぜ、中国？ 2006. 02. 17

最初に、お知らせです。私たちの、関東ブランチの月例会で、「黄土高原の緑化協力～スタート時を振り返る」という題のお話を、私がいたします。すでにこの事業も15年目にはいっており、このあたりで、こういうテーマも、いいのかもしれませんが。

とき・2月28日（火）18:30～20:00 ごろ

ところ・立教大学池袋キャンパス5号館1回会議室

終了後、懇親会の予定です。どなたでも、お気軽に、おいでください。

2002年11月、国際協力事業団（現国際協力機構・JICA）の中国事務所開設20周年と、日中国交正常化30周年を記念して、北京の人民大会堂・常務委員会会議室というところで、記念のシンポジウムが、開催されました。どういうわけか、私も、その末席につらなりました。セレモニー、記念講演のあと、最後に、パネルディスカッションが、もたれました。パネリストは、中国側4人、日本側4人で、私が最後の発言でした。

「この壇上で私が一番だなあと思うことが一つあるんですよ。それはお行儀の悪さで、大変率直なことをこれからお話しさせていただきたいと思います」と前置きして、話しはじめました。じつは、その後、このシンポジウムの報告書（日本語と中国語）がでてまして、こんな発言まで、活字になると、いよいよ場ちがいな、気がいたします。

「これから私は、夜行列車で、大同に向かうんですが、列車に乗る前に、いつも自分に言い聞かせるんですよ。これから行くのは、別の社会、別の国、別の宇宙なんだと。これが一つの国だと思うと、自分が暴発してしまいそうになるんです。この非常に発達、発展した北京と、列車で一晩寝ているあいだに着く大同の農村との格差がこんなにある。これが果たして一つの国だろうか考えると、もう辛抱できなくなりそうで、そのように自分に言い聞かせるのです」。私は、そのように述べて、大同の農村のことを、手短かに話しました。

そのときの、シンポジウムの基調は、日本のそれまでの（「第1次の」という表現があったと思います）対中ODA（政府間協力）は、終わった、それも、成功裏に終わった、というものだったと思います。そして、これから、どうあるべきか、論じられました。

対中ODAの開始にあたっての、日本の考え方は、「中国の安定的な発展は、日本の安定的な発展に資するとともに、アジアの安全と繁栄に資する」というものでした。1970年代末のことで、ときの大平首相が、そのように述べました。その後、中国経済が発展しはじめてからは、「中国が責任ある大国になる方向で日本が協力する」ということがいわれました。

中国の進路に、日本が関与する、ということですがけれども、もうちょっと、ロコツな解説で

は、「中国を、市場経済に誘導する」ということが言われたわけです。

こうした目的からすれば、日本の協力は、大成功だったと思います。中国経済は、未曾有の発展をとげています。従来の道への、あともどりは、絶対に不可能でしょう。「官職の商品化」を皮肉る小話が、携帯メールを飛び交うくらいですから、市場経済化も、日本の期待以上に進んだ、とっていいでしょう。

このシンポジウムの当時は、経済面での、中国脅威論がありました。日本の経済事情は、いまより暗かった。「日本経済が、ナワにクビをかけているときに、中国がでてきて、足を引っ張るのか」といった経済界の意見を、私もきいたことがあります。中国のために、日本が空洞化する、とも言われました。今日の局面では、日本経済の上昇を、中国経済の発展が支えている、そういう感があるくらいです。

そのような雰囲気の中でも、シンポジウムでは、日本の対中 ODA は、これからは、内陸、環境、人道、人材、NGO、といった分野に発展させよう。これまでは、東部沿海地方を軸に、ハード中心だったけど、これからは、ソフト面の協力にすすもう。そういった意見が、日本側の有識者からも、強かったと思います。ずっと、前向きだった。

私も、そのような考えに、共鳴しました。中国の経済発展が光だとすれば、それに付随する陰こそ、格差の拡大や、環境問題である。中国の環境問題が悪化すれば、日本もかならず影響をうけるわけです。日本の ODA が、中国の経済発展に、事実、貢献したとすれば、その陰の部分に、責任がないとはいえない、ともいえるわけです。

ところが、いまの日本社会では、そのレベルの議論すら、消えてしまったようです。嫌中と反日が、悪性のスパイラルに、はいつている面が少なくない。困ったことです。私たちのばあい、困ったこと、だけですまないんですね。なぜなら、いまも、これからも、環境協力をつづけるわけです。いま、なぜ、中国か？という問いに、答えないとはいけません。旧友の、宮脇さんに、この問いを突きつけられて、ここまでの文章は、昨年末に、書いていました。

ある程度の答えには、なっていると思います。でも、なにかが、決定的に、欠けています。最後まで書けなくて、途中で、ほっぽりだしてしまいました。そこに、助け船が、あらわれたのです。けさ、自宅で、受信ボックスをあけると、北京から、つぎのような E メールがはいつていました。まったく知らない人で、私たちのアドレス帳にも、名前がみつかりません。

「私は北京の日系銀行で現地行員として働いているのですが、2 年前社員旅行の幹事をした際、皆の反対を押し切って大同に行きました。それも高見さんの活動の場を少しでも見てみたい、環境問題について無関心な中国人スタッフ、日本人駐在員とその家族に、北京と非常に関係のある大同を見てもらいたかったからです。現地のバスガイドさんはたまたま GEN のお手伝

いをしたことがあるという方で、移動中、熱心に大同の環境破壊について語っていらっしゃいました。その話を聞いた社員達（ほとんどが北京人）は、そんな話は初めて聞いた、北京で何の不自由もなく暮らせるのは、こんな姿になった大同のお陰なのかと、荒れ果てた緑ひとつない土地を見て感慨深げでした。」（引用おわり）

うれしいですね。私たちが、この協力事業の開始にあたって考えたのは、環境問題での、呼び水になる、ということでした。私たちがはじめたのは、大同でしたから、とくに北京の人たちのことを、意識していました。そのとき願ったことが、ここに少しだけ、実現されているような、気がするのです。そしてそれは、同心円的に広がるだけではないようです。どこかに、パッと飛び火することだって、あるんですね。

#### NO. 349 土壌の凍結 2006. 03. 06

緑の地球ネットワークの派遣する、ワーキングツアーが、今年も、3月25日に、出発します。大同市には、4区7県があるのに、このツアーの、たどるコースは、毎年、靈丘県が中心で、ほぼ、おなじコース。5回、10回のリピーターもおられるのに、申しわけないことです。

やむをえない、事情があります。学生のみなさんに、ぜひ、参加してほしいんですね。春休み利用となると、早めに、帰ってこないといけない。ところが、大同は、冬が寒くて、長く、春の訪れが、おそいんです。ちょっとぐらい、寒くたって、いいじゃないか、と思われるでしょうが、そうはいきません。土壌が凍結していると、穴を掘れないんです。

地表近くは、融けていても、その下はカチンカチン。大きな岩にでも、ぶつかったようで、スコップばかりか、ツルハシだって、はじき返されます。1cm掘るのも、容易じゃないんです。

一口に、大同市と言いますが、1万4200平方kmあって、けっこう広いんです。いちばん南の、靈丘県の端（河北省との境界）から、いちばん北の、天鎮県の内モンゴルとの境界までは、直線距離で、190kmほどあります。その中間に、恒山山脈がありますが、中国の地図によると、この山脈から南は、中温帯で、北は、寒温帯に属するそう。

しかも、靈丘の最南部は、標高も低くて、1,000mを切ります。長く協力を継続している上北泉村は、700mほど。北のほうは、最低でも1,000mです。そのために、南と北では、春の訪れが、2週間ほど、前後します。ですから3月末の、最初のツアーは、靈丘県を中心に活動し、そのあとからくるツアーは、だんだんと北上するわけです。中国では、3月12日が「植樹節」ですけれど、大同では、本格的な、植樹シーズンは、1か月遅れ。

冬の最低気温は、零下30度近くまでなります。日本のみなさんは、寒いときくと、ほぼ反射

的に、「雪はどれくらいですか？」というんですけど、雪は、ほとんど降りません。あれって、雪が降ってくると、ありがたいんですね。雪が50cmも積もれば、温かいフトンを、かぶっているようなもの。地表の気温は、せいぜい零度前後に、保たれるのだそうです。寒いうえに、雪がないと、大地は、遠慮なしに凍ります。雪のないほうが、植物にとっては、はるかに厳しい環境です。

大同では、地表から、最大1.2mくらいまで、凍結します。私たちも、2つの村で、井戸を掘るのに協力したんですけど、水道管は、1.5mくらいの深さに、埋めてあります。そこまで埋めておかないと、凍結してしまいます。

凍土の、融ける時期は、年によっても、かなりちがいます。ここ数年は、遅い年が、多かったです。霊丘自然植物園には、管理棟の近くに、野生のモモの木があります。中国では、「山桃」(シャントウ)といいます。これを日本語で「ヤマモモ」と呼ぶと、日本の「ヤマモモ」と、混乱しますから、ちょっと、やっかいです。日本でいう「ヤマモモ」は、中国では「楊梅」(ヤンメイ)ですが、常緑の楊梅は、大同では、育ちません。

よけいなことをいいましたが、この野生のモモは、花は鮮やかなピンクで、とても美しいのです。そして、春、いちばん早く咲きます。そのつぎが、アンズです。そんなこともあって、私たちは、霊丘自然植物園にも、実験林場・カササギの森にも、このモモの苗を、たくさん植えています。ほかの樹木の育たない、南向きの日向斜面でよく育ちますし、アンズで深刻な、ノウサギの食害も、ありません。私たちのツアーが、霊丘を訪れたとき、あそこのモモが、花を咲かせていれば、その年は、春の訪れが早く、土壌の凍結は、融けているはずです。

ついでにいうと、霊丘で、最初に咲く、野の花は、「白頭翁」です。文字をみて、見当をつけられたかたもあるはず。そう、オキナグサのなかまです。日本のものと、種はちがうようで、*Pulsatilla chinensis* 青紫の花弁に、黄色いおしべで、なかなか、きれいです。自然植物園でも、よくみえますし、上北泉村で、アンズを植えているときにも、足もとで、みつかることがあります。

こういう花が咲くのは、日当たりのいい、南斜面です。土壌の凍結が、早く融けるのも、やはり南斜面です。そういうわけで、最初のツアーが、作業をするのは、基本的には南斜面。以前から、紹介していますように、南斜面と、北斜面では、育つ樹種がちがいます。植える場所によっても、樹種を選ばないといけないわけですね。

ところで、日本のツアー参加者が、凍土を相手に、悪戦苦闘している横に、地元の人たちが、植え穴を、事前に準備しています。どうやって、掘ったんでしょう？力のつよさが、まるでちがう！それも事実。掘るのに、コツがある。それもピンポーン。じつは、こうやって、掘ります。太陽に照らされて、地表付近の凍結は、融けています。ラクに掘れるところを、まず掘

って、凍結層にたっしたら、となりに移ります。つぎつぎにそれをやって、しばらくたって、最初の穴にもどると、太陽の熱で、少し、融けてきています。掘れるだけを掘って、また、となりに移ります。これを、くりかえすんですね。

日本人は、どうも、1 つずつ、完全にやりきりたいようです。カチン、カチンに凍っていても、すぐにはあきらめないで、なんとか、そこで、がんばろうとする。どちらかという、私も、そういう性格です。

この黄土高原だより、しばらく、あいだがあきました。「届かないけど、どうかしたの？」という問い合わせを、いただきました。すみません。東京、仙台などへの、出張がつづきました。そのうえに、風邪がみだったのです。いつもなら、カーッと熱が出て、そのぶん、なおりが早いのに、このたびは、発熱しないかわりに、2 週間以上もグズグズ。気持ちも、落ち込んでいました。

## NO. 350 龍山 2006. 03. 17

緑の地球ネットワークが、最初に緑化協力をはじめたのは、渾源県です。1992 年 1 月のことですから、すでに 15 年目にはいっています。渾源の県城（県の中心、県政府所在地）のすぐ南を、東西に走る、恒山山脈がふさいでいます。県城をふくむ盆地の標高は約 1,000m、稜線の標高は 2,000m ほど。県城からみえる山脈の北面は、断層崖になっており、高さ 1,000m の、ほぼ垂直の壁です。

恒山の主峰は、県城の真南にあります。標高 2,016.8m。北岳恒山と呼ばれ、中国五岳の 1 つで、道教の聖山として、有名です。残りの 4 山は、東岳・泰山（山東省）、南岳・衡山（湖南省）、西岳・華山（陝西省）、中岳・崇山（河南省）。この恒山にも、たくさん見所と、伝説があり、中国の全土からだけでなく、華僑・華人を中心に、海外からも、年間数十万人の、参拝客、観光客が訪れます。

恒山主峰のことは、べつの機会にゆずることにして、今回は、主峰から 10km ほど南西の龍山の話です。1994 年の夏、立花吉茂先生を団長に、日本から初の、専門家の代表団が、大同を訪れることになりました。この土地のことを、できるだけ理解してもらい、環境に適した、戦略を立ててもらおうのが、目的でしたから、できるだけ、植生の残っているところを、みてもらいたかったのです。

地元が選んだのが、この龍山でした。地図でみると、県城のすぐ西の、荊庄郷から遠くありません。それなのに、成立したばかりの、大同事務所のメンバーは、頭をかかえています。地元の地図に、等高線はありませんから、すぐ近くにみえるんですけど、じつは荊庄郷から、龍

山までは、ほぼ 1000m の、垂直の壁が、さえぎっています。踏み分け道はあり、地元の人は、上り下りしているようですが、日本人だと、安全に問題があるし、どれだけ時間がかかるか、わからないそう。

大きく、南に迂回すれば、なんとか車の通れる、山道があるそうです。まずは 1994 年 7 月末の、ワーキングツアーが、このルートに、挑戦することになりました。いくつかの郷政府に頼んで、7 台ほどの軍用ジープを集めてもらい、それに、分乗しました。霊丘県に向かう、公道は、まだよかったですよ。山道に、はいってからが、たいへんです。道とは思えない、道です。途中、水のない川底を走りますし、断崖絶壁のうえも走ります。車がまた、車なんですね。クッションが悪く、乗っているだけで、全身マッサージ。天井にしょっちゅう、頭をぶつけます。へたをすると、ムチウチになりそう。

道路の終点で、車を降りました。「あれがカラマツの原生林だ」と指さされました。たしかに、樹齢は、重ねているようです。風格があります。でも、生えているのはまばらで、あそこに数本、こちらに数本、という感じです。自分のイメージのなかの、原生林にはほど遠かった。

頂上をめざして、歩きました。小さな、踏み分け道をたどります。登るにしたがって、感動が深まりました。まさに、高山植物の宝庫。色とりどりの草花が、咲き誇っています。しかも、日本のそれに比べて、花がずっと大きく、色が華やかで、透明感があります。そのあと、立花先生にきいたところでは、日中、強光線のもとで光合成をし、夜間は気温が下がって、呼吸による消耗が少ないと、このように色が鮮やかになるのだそう。でも、残念なことに、そのころ、私は植物のことを、ほとんど知りませんでした。ですから、名前をあげることができません。

ハーブも、多かったです。私たちが歩くと、踏みつぶされた草が、鮮烈な香りを、ただよわせます。もったいなくて、もうしわけないような気持ち。参加者の 1 人、中野紀子さんは、短い夏休みを、このツアーに参加するか、日本アルプスに登って、高山植物を楽しむか、ずいぶん迷ったそうです。でも、ここにくることで、両方をあじわうことができた、とあって、よろこんでいました。

途中から傾斜が急になって、あまり先のところは、みえません。息も、苦しくなります。あそこまで歩けば、頂上だろうと思い定めて、がんばると、また、同じような光景が、くり返しでできます。それどころでは、ありません。なんと、畑がでてきたのです。

結局、2,066m という、龍山の頂上には、行き着けませんでしたが、でも、頂上がみえるところには、たどりつきました。驚いたのは、それより上に、畑があったことです。頂上のすぐ下です。植えられていたのは、菜の花。こんなところで、冬越しはできませんので、菜の花といっても、春蒔き。それが 7 月末に、黄色いカーペットのように、満開なのです。背丈は、30cm もありません。

畑があるくらいですから、人が住んでいて、村があります。私たちがジープを止めたところから、遠くで人がみているのは、わかっていたんですよ。それがいつのまにか、数十人になって、私たちを取り囲んでいました。そういう情報が、どうやって通じるのか、私にはわかりません。

山頂近くの、小さな台地に、石の記念碑がありました。ここには、早くも周代に、宗教の修行場があり、北岳恒山より、ずっと古い、ということでした。くわしい内容は、忘れてしまいましたけど。

帰りもまた、同じ道を帰りました。こういう山道は、登りより、下りのほうが、ずっと怖いものです。しかも、何台かのジープが、途中で、トラブルを起こしました。ブレーキ故障でもあったら……。夫婦で参加していた、前川恒子さんが、「べつべつの車に乗ればよかったねえ。そしたら、どちらかが事故にあっても、つれて帰ることができたのにね」といいました。10年たっても、私は、その言葉を忘れることができません。

そのせいでもないんでしょうけど、祁学峰が、「あまりに危険すぎる。私たちのやっているのは、冒険じゃない」といいだして、そのあとにくる専門家の調査団には、べつのコースを、準備しました。その後も機会はなくて、龍山にいったのは、あの1回だけ。もし、道がよくなっているようなら、再度、挑戦してみたいものです。

## NO. 351 黄土高原における環境協力～小さな NGO の経験 2006. 03. 23

ことしの1月末から、3月初めにかけて、いくつものシンポジウムや、ワークショップに参加させていただきました。以下は、そのなかの1つのために準備した発言原稿です。私たちの活動を紹介するものとして、お読みいただけるとさいわいです。

小さな NGO・緑の地球ネットワークは、1992年1月から、中国山西省大同市で、緑化協力を継続してきました。私自身も毎年100日前後、現地の農村で活動しております。

大同市は黄土高原の東北端にあり、水土流失（土壌浸食）と砂漠化、水不足の深刻な地方です。大同市の中央部を西から東に流れる桑干河は、北京の水ガメ＝官庁ダムの主要な流入河川ですので、大同は北京の水源地だといっているでしょう。

大同の年間降水量は400mmほどですが、年ごとの変動が大きく、多い年は650mm、少ない年は250mmほどになります。また雨期は季節的に偏っており、3分の2以上の雨が6月後半から8月前半に集中します。植物の芽生え育つ春先に、とくに雨が少なく、地元の農民は「春の雨は油より貴重だ」といって雨を待ちますが、その時期の雨はほとんどありません。

雨期の雨は狭い範囲で短時間、集中的に降ります。私も1時間70mmという豪雨を何度か体験したことがあります。植生の乏しい大地にこのような雨が降ると、雨は大地をたたき、土壌浸食を引き起こします。雨水もそこにとどまることはありません。

山腹や山の急斜面まで、畑になっており、そのような畑は「3つが逃げる畑」といわれます。雨のたびに、水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げる、というわけです。大地のいたるところに、深い浸食谷が刻まれ、黄土高原特有の景観をつくりだしています。砂漠化の原因と現象にはさまざまな形態がありますが、黄土高原の場合、土壌浸食が大きな原因であり、雨が砂漠化を加速する皮肉な現象があるわけです。

そのような自然現象は、砂漠化の原因の半分だと思います。より重要な半分は「環境破壊と貧困の悪循環」とでもいうべきものと、私たちは考えるようになりました。人為的、歴史的な原因です。まず重要なのは、この地方が水と土のキャパシティを超える人口を抱えてきたことです。黄土高原が中国文明の主要な発祥の地であったことも、それに関係しているでしょう。大同も4世紀末から5世紀にかけて、北魏の都であり、5世紀にはすでに100万都市であったといわれます。

食糧をまかなうために、条件の悪いところまで開墾され、ヒツジ、ヤギなどの過剰な放牧、生活燃料のための伐採がつづきました。森林が消失し、植生が貧弱化し、雨のたびに土壌が流されます。耕地が破壊されると、生産力が落ち、貧困化がすすみます。ふしぎなことに、貧困になればなるほど、こどもの数が増え、人口増加がすすみます。砂漠化を防ぐには、このような悪循環を絶つことが不可欠だと思います。

山の斜面や黄土丘陵にグリーンベルトをつくれれば、土壌浸食や風砂を抑えることができます。植えているのは、主として数種類のマツです。私たちは2~3年生の、地上部がせいぜい15cmほどの小苗を用います。日本からきたボランティアは、「こんな草のように頼りない苗が育つんですか？」といてびっくりしますが、大同は乾燥がひどく、風が強いので、小苗のほうが活着率がいいのです。コストパフォーマンスも、もちろん小苗のほうがいい。

マツの育苗に、私たちは多少の技術的な改善を試みました。日本の専門家が「菌根菌」を活用した育苗方法を指導しました。菌根菌はキノコやカビのなかまの土壌微生物で、これを植物の根と共生させることで、根と土との結合を強め、水やミネラルの吸収がよくなり、乾燥とその他の悪条件に強くなり、一般の苗にくらべ生育もよくなります。種から育てて、1年後には乾燥重量で2倍あり、現地に植えてからも、活着率と生育がきわだって改善されています。

日本の研究者が感心させられる地元の技術もあります。共同でおこなった技術改善もたくさんあります。マツは植栽後7~8年で、大きなものは3メートル近くに育ちます。

このような砂漠化地域が貧困であるのはいまでもありません。この 10 数年でずいぶん改善されたのは事実ですが、沿海地方や都市の発展とは比較になりません。いまでも 1 人あたり年収が 500 元を切る村を探すのは、けっして困難ではありません。

農村には小学校を失学する児童がたくさんいました。小学校の低学年が通う学校はたいいていの村にありますが、高学年が通う学校は大きな村にしかないのがふつうです。まして中学校となると、郷政府の所在する大きな村にしかありません。「9 年生の義務教育」はスローガンはたくさんありますが、それを実現するのは容易なことではありません。

小学校に付属果樹園をつくり、アンズなどを植えることにしました。植栽後 5 年目くらいから収入がもたらされるので、その一部を学校に回し、教育支援にあてます。お年寄りから子どもまで、村中の人々が参加し、日本からのボランティアもそれに加わります。

私たちの協力は小規模なものですが、たとえば渾源县呉城村では、その後もアンズを植えつづけ、いまでは 600ha、50 万本にもなっています。となりの木と枝が重なるようになると、雨が直接、地表をたたくことがなくなります。葉や枝で受け止められ、幹を伝って地上に下り、根に沿って地中に浸透するのです。土壌の浸食は基本的に止まりますし、水も地中に蓄えられるようになります。

収入ももたらされます。このアンズの目的は果肉ではなく、杏仁で、ナッツなどの形で食用にされたり、菓や化粧品に加工されます。面積あたりでいえば、従来のアワ、キビ、ジャガイモなどに比べ、いいところでは 10 倍以上の収入をえています。大学進学なんてそれまで考えたこともなかったのに、2000 年に初めての大学生がでて、いまでは 20 人以上になっています。人材の育成にも役立つのです。

緑化協力事業のなかで、驚くべき事態に遭遇しました。一帯からものすごい勢いで水がなくなっています。私たちの調査によると、21 の村の 1 人 1 日あたりの水使用量はわずか 23.8L、少ない村は 15.6L でした。風呂やシャワーはありませんし、洗濯もほとんどしません。洗い物をした最後の水を、家畜の飲み水にするくらいです。

みるにみかねて、2 つの村で井戸掘りに協力しました。さいわい、どちらの村でも水がでましたが、深さは 180m もあります。親しくなった井戸掘り隊の隊長の話では、一帯の高所の村ではどこでも水が涸れているそうです。この地方の農村の水不足は、井戸掘りで解決できるレベルを超えています。

河川やダムからも水がなくなりました。桑干河で私が最後に流れをみたのは 1997 年の夏です。ちょっと衝撃的な写真もあります。前方にみえているのは橋です。ここは桑干河なんです

けど、河底の全面にトウモロコシが植えられています。土が肥沃で、水分もありますから、一般の畑よりできがいいんです。それから10年あまり前には、水が河岸を洗ったこともあるんですよ。この河の岸で、ポプラを植えたことがあります。出水によって、その根を洗われる経験をしたことがあります。いまでは、付近の農民は、河に水が流れてくることを期待もしなければ、恐れもしていません。

私たちは数か所の苗畑を経営しており、そのための灌漑用水が必要です。井戸も掘りましたが、地元の新聞が「2008年には完全に涸渇する」とたびたび報道するくらいですので、付近の住宅の生活汚水を浄化して、灌漑に使用することにしました。土壌浸透浄化法を採用しており、25m プールを一回り小さくしたサイズで、1日250立方mを処理できます。

原水のCOD(Cr)は230mg/Lですが、処理水は20mg/L前後で、CODの85~90%を除去できます。デモンストラーションのために処理水で金魚を飼っていますが、一昨年はたくさんの子どもが生まれました。灌漑用水として、水質に問題はありません。

2003年、04年と順調に運転しましたが、2005年は運転できませんでした。汚水の原水がこなかったためです。この年は6、7月に雨が少なく、高温だったため、周囲の畑で汚水が奪い合いになりました。未処理のものを直接、畑の灌漑に使っているわけです。水不足はそこまで深刻化しています。

広い中国のことですから、そんな地方があっても、ふしぎではないと思います。しかし、最初にもいいましたように、大同は北京の水源であり、桑干河は官庁ダムの主要な水の供給源であり、単に一地方の話ではすまないでしょう。ご報告したいことはまだまだありますが、時間の関係でこれまでといたします。どうもありがとうございました。

## NO. 352 恒山の山火事 2006. 03. 27

22日に北京につき、23日に大同にきました。とんでもないニュースが、待っていました。渾源県の北岳恒山で、山火事が発生したというのです。夕食のとき、中央テレビ第一の、ニュース特集で、取り扱っていました。日本の、NHK 総合のようなものですから、全国の、多くの人が、みたでしょう。恒山については、この黄土高原だよりの前々号で、ちょっと、書いたばかりです。

地元紙の、大同晩報は、3月22日の1面下で報道しています。中央テレビの扱いに比して、あっけないほど小さい。火災が発生したのは、3月20日の午後1時ごろ。恒山の、北側斜面だそうです。恒山は、中国五岳の一つで、道教の聖山です。そのために、中央電視台も、あのような報道をしたのでしょう。その他の地方放送局も、広く報道したようです。上海テレビでみ

た、という人もいました。

北岳大廟をはじめとする、多くの宗教施設は、恒山の南面にあります。北面は、ほぼ垂直な、高さ1,000mの断層崖で、山頂付近に、自生の森林ができているほかに、長い年月をかけて、アブラマツなどの人工造林をつづけてきました。北面のほうが、活着も、育ちもいいので、マツも、けっこう育ってきていたのです。テレビの画面は、数mに育ったマツを、赤い炎が、なめていくようすを、なんども映していました。

火災の発生後、省と市の指導部の直接指揮のもとに、県の幹部と大衆、軍、武装警察、消防など1万人近くが緊急動員され、消火作業にあたったそう。延焼防止のために、緊急に防火隔離帯をつくる作業、スコップで土を掘って、火線にかぶせる作業などは、まさに、人海戦術です。2機のヘリコプターが、大きなタンクをつりさげ、近くの恒山ダムの水をくみあげて、散水するようすも、テレビ画面にも映し出されました。計96立方mの水をかけたそうです。

鎮火したのは、翌日の午前7時で、18時間も燃えまじりました。焼失した面積は48.7ha、うち森林面積が37ha、荒地が11.7haだそう。あそこまで育てるのにかけた、手間と時間は、どれほどのものだったでしょう。それが、一瞬のあいだに、灰塵に帰りました。ほんとうにくやしいことです。さいわいなことに、人身への被害はなかったようですし、南面におおい、歴史的な文物にも、被害は及びませんでした。

3月26日の朝、緑の地球ネットワークが派遣する春のワーキングツアーが、この恒山のふもとを通過して、さらに南の靈丘県を訪れることになっています。

また、同じ日に、大同県の九梁窪林場でも、森林火災が発生し、こちらでは全体で80haが燃え、林地には30haの被害があったそうです。1980年ごろから、モンゴリマツ、アブラマツなどの造林をおこなったところで、大同市のなかで、もっともりっぱな、造林地とっていいところですよ。

春のこの時期は、山火事の危険が、極限まで高まります。雨はまったく降りませんので、大地も、枯れ草も、山の木も、乾燥しきっています。そのうえに、年間でもいちばん、風がつよい季節です。それがいっそう乾燥を強めますし、火をあおります。しかも、4月5日の清明節の前後には、人びとがお墓参りをします。中国の習慣では、そのときに火をつかいます。

畑のあぜなどを、野焼きする習慣もあります。枯れ草を燃やしておくと、そのあとでいい草が生えるわけですね。日本の農村にも、そのような習慣があります。私も今回、高速道路で北京から大同にくる途中で、そういう光景を、目にしました。なかには、その火がマツの造林地にはいりこみ、葉と枝を、焦がしているところも、ありました。

地元の林業関係者の話では、最近、特殊な事情もあるようです。以前にお伝えしたように、このところ、石炭価格が高騰しています。石炭を買えない人たちが、山にはいつて、タキギをとるケースが、ふえているそうです。タバコの不始末、その他の原因につながります。社会のことは、複雑にからまっていることを、このことから、感じました。

以前のように、山に、木も草もほとんど生えていなかったら、山火事の危険も、問題にならなかったでしょう。ところが、この数十年間、みなさんでがんばって、ずいぶん緑化がすすんできました。マツの造林地なども、早かったところは、数mから、10m近くまで、育っているわけです。そこに火がはいたら、と思うと、ほんとに怖くなります。

私たちの関係者も、この時期は、いちばん緊張しています。たとえば、霊丘自然植物園は、以前は、山火事のことなど、まったく気になりませんでした。ところが、この7年ほどで、ずいぶん草木が繁ってきました。地表には、枯れ草が、厚く層をなしています。これが土をつくるわけで、歓迎すべきことです。ところが、山火事の面からみると、たいへん危険なことです。大同事務所の武春珍所長は、私たちの目のまえでも、何回も電話をし、しつこいくらいに、注意をうながしています。

#### NO. 353 シュワルツは18歳 2006. 04. 03

3月27日、霊丘県の上北泉村の、農家に、ワーキングツアーが、ホームステイしました。いつものツアーにもまして、熱烈な歓迎でした。この村で協力を開始したのが、1996年の春ですから、ちょうど、10年。私たちが、大同の農村で協力をはじめてから、15年目でもあります。それを記念してのことです。ついでに言えば、1994年に、世話人の竹中隆さんと、私とで、この村を訪ねたのが、最初の縁でした。

県、郷などの幹部が、参加したなかで、村の党書記の、鄭海水さんが、歓迎のあいさつをしました。彼なくして、このプロジェクトの継続も、成功もなかったでしょう。10年の変化について、彼は話しました。私も、急に、あいさつを求められ、思いつきの話を、手みじかにしました。話し終えたとたん、「しまったあ！」と思いました。1人の若い男が、視野にはいったからです。

名前は、知りません。覚えていません。ジャスコ労働組合の、桜井さんが、「シュワルツ」と、呼びはじめました。とても目立つ、ワルガキだったのです。こどもたちのなかでの、リーダーシップは、突出していました。軍用の迷彩服をまねた、服をきていました。シュワルツェネッガー演じる、映画の主人公に擬して、そのように呼んだのです。

桜井さんが相手になると、蜂の巣をつついたように、ヤンチャぶりを発揮しました。私が相

手をすると、おとなしくなります。ウオークマンの、イヤホンの片方を貸して、ビートルズの「イエスタデイ」を聞かせると、静かにきいて、片手を私にあずけていました。これも、ひとがらですね。エヘン！

目のまえの、シュワルツは、いい大人です。歳をきくと、18歳だといいます。彼の周囲にも、同じくらいの若ものが、数人、立っていました。このくらいの年齢の若もの集団を、農村で目にするのは、めったにありません。たいていは、出稼ぎにでています。いたとしても、近寄ってくることは、まれです。中国でも、むずかしい、年ごろなんですよ。

上北泉村の、その年齢の若ものは、こどものころ、私たちといっしょに、作業をした経験もっています。なつかしく思って、10年という、節目に、そろって、でてきてくれたのだと思います。「しまったあ！」と思ったのは、そのことを話して、「10年というのは、8歳のこどもが、18歳になる、それだけの時間です」といったことを、話せばよかった、と考えたからです。

この10年のあいだに、上北泉村は、ほんとに変わりました。ずいぶんと、豊かになったのです。レンガ建ての、住居が、つぎつぎに新築されています。家のなかには、さまざまな家電があります。村のなかの道路も、コンクリート舗装されました。村の中央には、新しい、大きな、舞台ができました。はじめてきた人、最近になって通う人には、以前のことは、想像もつかないでしょうね。逆に、以前にこの村を訪れ、その後、きていない人には、村のいまの状態は、イメージするのが、むずかしいでしょう。

村のすぐまえを、唐河が流れています。唐河を渡れば、そこは国道108号線です。そういえば、交通至便な村に思えるでしょうが、5年ほど前まで、この河に、橋がありませんでした。村にはいるには、唐河を、歩いてわたるか、農用車で、流れのなかを、突っ切るしか、ありません。

はだしになって、ズボンをからげ、歩いてわたった経験を、私もなんだか、もっています。そのようにいえば、ああ、あそこの村か、と思い出してくれる、初期のツアー参加者も、おられるでしょう。1つ南の、下北泉村経由なら、陸路がありましたが、それには、大回りしないといけなかった。

あそこに、りっぱな橋が、かかったんですね。そのためのお金は、基本的には、村がまかなくなりました。外部にも寄付を求めたのでしょう。寄付した人の名前が、寄附額とともに、記念碑に、刻まれていました。私も親しかった、当時の県の党書記・李田山の名前が最初にあり、金額は500元。少ない人は、5元くらいまであります。

橋がかかり、交通が便利になることで、2つの可能性が、あったと思います。若ものを中心

に、いっそう多くの方が外に出て、村の空洞化がすすむのが、1つ。もう1つの可能性は、村が活性化することで、出稼ぎにでていた若ものたちまで、村にもどってくること。

さいわいなことに、いまのところ、この村は、後者の道を、歩んでいるようです。このたびの、歓迎の場に、若い男女の姿が、たくさんみられたのも、それを物語っています。私も毎年、この村の農家に、泊まっていますが、いったんは、外に出稼ぎにでていた人たちが、結婚を機に、村に戻ってきた、というケースが多かったのです。今回、お世話になった、呂二軍さんも、大同の石炭関連企業で、7年間働いたあと、村に帰ってきました。夫妻とも、私の本の中国版『雁棲塞北』の、読者だったことはありがたいことです。

こうしたことを、可能にしたのが、果樹栽培です。この村は、他にさきがけて、1980年代から、果樹にとりくんできました。村に生まれた、数人の若ものグループが、桃源郷を夢みて、果樹づくりを、はじめたのでした。いまは、霊丘植物園の中心になっている、李向東も、この村の育ちで、グループの一員でした。そのころの写真を、みせてもらったことがあります。

私たちも、小学校果樹園の建設というかたちで、この10年間、それをサポートしてきました。その面積は、60ha 近くになっていますし、植えた本数は、5万本にも、なるでしょう。鄭海水書記の話では、その半分が結実しはじめ、果樹だけによる年収が、1人あたり、500元になるとのことでした。村の人たちは、そのことを、とてもよろこんでいます。ツアーが、あと2週間あとにこの村にきたら、花盛りのようすを、みることができたいでしょうに。

## NO. 354 農村の私立小学校 2006. 04. 10

一昨年夏の、朝早く、のことです。なじみの霊丘県上北泉村を歩いていると、いつもの小学校のまえを、素通りする、数人のこどもがいました。「どこに行くんだ？」ときくと、「学校！」といって、その先を指さします。農家のならぶ露地に、ベニヤ板がぶらさげられ、「霊泉小学」と、書いてありました。

なんだろうと思って、なかにはいっていくと、民家の、せまい土間に、机と椅子がぎゅうぎゅう詰め。そこが教室だったのです。その奥の部屋では、大慌てで、朝食をかきこむこどもの姿がみられました。何枚か、私は、その写真を撮りました。

すくなくとも、この村の子どもたちのあいだでは、私は10年通った「有名人」ですから、すぐに、連絡がいったのでしょう。女性の、校長先生が、でてきました。事情を、話してくれます。もともと彼女は、この一帯の小学校で働いた先生で、上北泉村小学校の、校長をしたこともあります。このたび、定年退職したのを機に、自分で小学校を経営するのを、思い立ったそう。私立小学校です。

近隣の村の、たいていの親たちは、彼女の、教え子だそうです。近隣の村の、たいていの学校の先生も、彼女の教え子か、もと同僚です。「自分の教育にたいする熱心さと、手腕は、みんな知っているから、こどもを、この学校に、送り込んでくれます」と、彼女は、自信まんまんでした。

当の上北泉村のほか、唐河のすぐ下流にある下北泉村、郷政府のある紅石楞村、すこし離れた劉庄村、そして、となりの河北省の、いくつかの村からも、この学校にきているのだそうです。離れた村のこどもたちは、ここで寄宿しています。

新しいできごとなんですけど、そのことを私は、これまで、この通信にも、書きませんでした。農村と、私立学校の組み合わせが、よくわからなかったし、その後どうなるか、見当もつきませんでした。どちらかという、時期尚早と、冷ややかにみていたのです。

昨年春の、ボランティア・ツアーも、この村でホームステイしました。そのとき、従来の公立学校と、この私立学校の、両方のこどもたちが、たくさんのおし物を演じて、私たちを、熱烈歓迎してくれました。学校が2つになっただけでも、おし物の数は、単純にふえます。私立の靈泉小学校は、つぶれるどころか、こどもの数をぐんと、ふやしているようです。

靈丘県は、このところ、景気がいいのです。太行山のなかには、たくさんの地下資源があります。個々の規模は大きくなく、以前は、採算にのらなかったようで、開発はすすみませんでした。ところが近年の、中国経済の大膨張。価格高騰だけでなく、鉄、セメントをはじめ、品物が、なくなるところまで、いったんです。いっせいに、開発が、はじまりました。そのあおりで、以前にレポートしたように、水汚染はじめ、深刻な環境問題も、発生しています。

でも、ものごとは、たいてい2面性があります。靈丘は、民営企業が、急発展したのだそうです。その結果、税収がふえる。おかげで、靈丘県では、昨年からは、小学校の学費は、免除されたのだそう。でも、それは、公立のこと。

ことしの春の、ボランティアツアーも、上北泉村に、ホームステイしました。私は、朝早く、私立小学校を、のぞいてみました。驚いたことに、いまでは2階建ての、新しい、りっぱな校舎が、建っていました。生徒数も、200人になっているそうです。急速な発展、といいでしょう。そういえば、村にはいるなり、ジャージーに、「靈泉小学」と染め抜いた、この学校の制服が、ずいぶんと目立っていましたよ。それにたいして、公立学校のほうは、25人なのだそうです。完全に、圧倒しています。

毎回、お金のことばかりで、わるいんですけど、私は、あの女性の校長に、質問しました。すると、「1学期400元ですから、1年で800元。もうけようなんて、考えていません。先生た

ちの給料ができれば、それでいいのです」寄宿者には、生活費がプラスされて、2,000 元だそう。800 元といえば、農村では大金です。しかも、公立だったら、いまは無料なのです。

じつは、きょう 10 日から、また中国です。いつのまにか、出発の時間が、迫っていました。つづきは、またの機会に、ということにいたします。

## NO. 355 空港の抜け道 2006. 04. 13

関空ー北京の往復に、中国の航空会社をつかうと、春・夏シーズンを除けば、関空出発は午後、北京出発は早朝、の便しかありません。北京空港では、時間の余裕がないときにかぎって、なにかのトラブルで、ハラハラしますので、2 時間くらい前に着きたい。ホテルの朝食を食べていたら、まにあいません。

空港に着いて、とりあえず、チェックインをすませて、スーツケースをあずけ、身軽になってから、腹ごしらえに、むかいます。すると、利用できるレストランは、1 店だけ。そのあまりにも、バカバカしいようすを、私は以前、「北京空港みそラーメン」と題して、この『黄土高原だより』に、書きました (NO. 169)。ふつうだったら、ノドを通らないような、まずい「みそラーメン」が、なんと 65 元！ (1 元=15 円)。それにプラスして、サービス費 10%！ ついでにいうと、中国産缶ビールが 35 元、プラスサービス費 10%。ある人は、「世界一高い。国辱ものですよ」といいました。

その後、私は、みそラーメンをやめ、「韓式辛拉麺」に、宗旨がえしました。韓国ピリ辛ラーメンです。内容は、似たりよったりですが、値段が 45 元 (プラスサービス費 10%) で、金銭的、心理的なストレスが、ちょっと軽い。しばらくして、メニューから「韓式」が抜け、ただの「辛拉麺」に変わりました。

メニューは、しばらく前に、「辛拉麺一套」に変わり、値段が、55 元 (プラスサービス費) になりました。セットものに、なったんです。カウンターの見本でみると、直径 3 センチ、長さ 4 センチほどの海苔巻きか、玉子焼きふうのものが、加わっていました。なんでしょう？ ハクサイのキムチです。それで、プラス 10 元ですから、ベラボウな、キムチです。

この 4 月初旬、中国東方航空 (MU) で、いったん帰国することになりました。山東省の煙台、経由です。チェックインをすませ、スーツケースを、あずけました。直行便のばあいは、そのあとすぐ、出国手続きにむかいます。中国国内の、他の都市を経由するばあい、出国手続きは、その飛行場ですので、途中で、人の流れから分かれ、「S」表示のゲートを通して、安全検査をうけ、べつの搭乗口・待合室に、いきます。今回は、50 番でした。

イスがならんでいるだけの、殺風景な場所で、なにもありません。いや、ジュース類の、自動販売機だけがあります。搭乗口で、よもやま話をしている、係員のところにいき、「食べるところはないの?」と、尋ねました。「ない!」のひとこと。われながら、驚いたんですけど、ほとんど、反射的に、「ほんとに、ないの?」。すると、相手は、私の顔を見返し、ひと呼吸おいて、「この先を、ずーっと、どこまでも行け」。

いわれたとおりに、壁とついたらに沿って、ずーっと、歩いていきました。途中、まったく人影のないところがあったり、公安らしき人が、たむろしていたりで、不安になるんですけど、それでも、ずーっと、歩く。すると、なんと、一般の国際便搭乗口のところに、でるんですよ。免税店があり、コーヒーショップがあり、例のレストランがある。

おもしろいですねえ。ほかの人たちは、出国審査をすませて、パスポートに、出国スタンプが押されている。彼らがいるのは、中国であって、中国でない世界です。そのなかに、まだ中国にいるはずの、私1人が混じっている。このネタを、なにかの「犯罪」とか、推理小説とかに、利用できないかと、くりかえし考えてるんですけど、いまのところ、思いつきません。

でも、ある意味で、これが中国なんですね。「ない!」といわれて、そこですますと、不満をかかえながら、あきらめるしかない。そこをもう1歩、つっこんだり、人のつながりをたどると、新しい道が、みつかるものです。

いま、朝方の北京のホテルで、このところを書いているんですけど、昨夜は、風がつよく、雪がちらついたりくらいで、寒いんですね。空調のコントローラをみると、すべて「ON」になり、ファンは、「HIGH」になっています。でも、動いていない。ためしに、ファンを「LOW」にしたら、ファンが回りはじめた。接続を、逆にしたんでしょうね。なにごとも、たたいてみないと、わからない。

例のレストランにいくと、「大幅値下げ、30~40%」の看板がでていました。そりゃ、そうでしょう。オリンピックは、2年後ですからね。いつまでも、「国辱」をつづけるわけには、いかないでしょう。名前は「飛仙」、ローマ字表記は「BISEN」ですけど、これは、どこの資本でしょう? なかにはいって、メニューをみると、以前と変わりません。みそラーメンは65元、ピリ辛ラーメンは55元。あ~あ。

ここまで書きながら、考えたんですけど、北京空港を知ってる人には、読んで、わかるでしょうけど、知らない人には、わからないんじゃないかな。日本の空港とは、根本的なところで、流れがちがいます。

国際線のばあい、空港に到着すると、すべての荷物をもったまま、最初に、通関手続きをします。最近になって、そのさいに、1枚の書類の提出を求められるので、ロビーで、適当に書き

込み、係員にわたします。彼らは一瞬しか、それをみないんですけど、(まったくみないことも多いんですけど) なぜか、最後のサインを忘れていて、突っ返されたりする。1%くらいの確率で、荷物を、X線装置に通すよう、要求されますけど、それは、セキュリティチェックではありません。

ここまでくるのは、国際線利用客だけで、見送りの人なんかとは、税関管理のゲートで別れますし、そこから引き返すことも、できないはずです。私も、これまで、試みたことがない。

そのあと、航空会社ごとに分かれた、チェックイン・カウンターになります。ここで、スーツケースなどの、大きな荷物をあずける。セキュリティチェックは、ここで、おこなわれます。私は以前、スーツケースのなかの、ペットボトル入り、飲み残しウィスキーが、ひっかかり、「没収されるくらいなら、ここで自分で飲む」といって、2口まで飲んだんですけど、それ以上は、あきらめました。

そういうバカな客が、何人かいると、チェックインの列は、大混乱で、前にすすまなくなります。ほかにも、意味のわからない「改善」がなされ、私が「マーファン！（わずらわしい）」という、係のおねえさんが、「マーファンなのは、私よ！」と叫び返すくらい。ですから、空港には、余裕をもって、おいでください。

チェックインが終わってから、健康カードの提出、出国審査、携帯品と身体の安全検査とつづき、それで、やっと、搭乗口・待合室です。免税店や、レストランがある。ところが、ここにあるレストランは、1店だけですからね。競争というものが、まったくない。ですから、ぽつたくりの、しほうだい。

日本の空港は、チェックインは、管理区の外ですませます。大きな荷物を身から離し、気分的にもラクになって、「食事でもしようか」ということになります。店だって、食べるものだって、選択の幅がひろいわけですよ。北京の空港では、それができない。利用客にとっては、きわめて不便だと思うんですけど、管理するがわにとって、なにか、いいことがあるんでしょうか？ごぞんじのかたは、教えてください。

## NO. 356 三寒四温 2006. 04. 17

前号の、北京空港の抜け道について、たくさんの人から、さまざまな教示と、感想をいただきました。私は、いったん通関したらもどれないのではないかと書きましたが、チェックインをして、荷物をあずけてから、逆行して、もどってくることもできる、とのこと。恋人との名残をおしむ、男性が編み出したそうで、「チェックインして荷物を預けて、安心してギリギリまで逢瀬を楽しむための裏技」とのことです。私のばあい、そのような強い動機に、縁遠

いので、試みたことが、ありませんでした。

4月10日から、中国に、またきています。日本出発の前日、大同に残っている会田さんから、「暖くなりました。きょうは26度です」という、メールが届きました。それで、すっかり、油断しました。この時期の、大同の気候の不安定さは、いやというほど、体感しているのに、現地からの、しかも信頼する、同僚からの、ライブ情報となると、それに引きずられてしまいます。もってくるべき、厚手の上着を、省いてしまったんですよ。

べつの理由もあります。もう30年近いつきあいがあり、私たちを、最初に、大同に紹介してくれた、曹衛洲さんが、中華全国青年連合会を、数年前に卒業して、全国人民代表大会常務委員会に異動し、現在は、そこの副秘書長です。呉邦国委員長の、側近だ、という人もいます。えらいんですよ。ことし、年賀状をもらったときに、なつかしいな、会ってみたいな、と思いました。彼の秘書の電話を、きいてましたので、会田さんに、電話をしてもらったら、すぐあとで、中華全国青年連合会の、湯本淵さんをつうじて、返事がありました。11日のお昼を、北京の人民大会堂で、ごちそうしてくれるそう。

スーツに、ネクタイくらい、必要なんだろうな、と思いました。根本的に、自分に欠けている、常識というものを、定年まぢかの年齢になって、勉強している最中です。友人の、干場くんが回してくれた、スーツを準備すると、クツも、トレッキングシューズというわけには、いかないでしょう。黒いクツを、スーツケースに、押し込みます。その他、しごとに必要なものを詰めると、防寒の、上着のはいる、余地なし。

おいしい、ごちそうをいただいたんですけど、以前と変わらぬ、曹さんの笑顔をまえに、ジョーダンを、いいあっていたら、キュークツなものを、着てきた自分が、バカみたい。思い出話に、花を咲かせ、遠慮のないことを、いわせてもらいました。

その夜は、森林生態研修計画の宇津木さん、成海さん、人民日報国際部の于青さん、そして、李建華さん、王黎傑さんなどと、会食しました。帰り道が、すごかったんです。気温が、急速に、下がりました。そして、風がつよい。からの段ボール箱が、くるくる回って、ダンスをしているようでしたよ。パラパラパラパラ、空から、なにかが降ってきます。ゴミかな？ と最初は思ったんですけど、アラレであることが、わかりました。でも、ホテルの部屋に戻ってみると、髪の中に、つぶつぶが、いっぱいありましたから、ゴミも、たくさん、飛んでいたでしょう。ことしの北京は、黄砂も、ゴミも、すごいそうです。

昼の人民大会堂に、大同事務所の、武春珍所長も参加しました。イギリス、アメリカ、ドイツ、トルコ、日本などの青年と中国の青年が参加して、大同の私たちの拠点の、環境林センターで、環境保護国際ボランティアキャンプが、開催されたとき、主催者の代表が、曹衛洲さんでした。1999年のことです。小武は、そのとき現場で、走り回りましたから、久しぶりに、曹

さんの顔を見かけたんでしょう。彼女は、そのあと、くるまで大同にむかい、夜になって、無事に帰ったと、電話で知らせてきました。

そのさいに、いうんですよ。「大雪が、降っています。大同県のあたりは、たいしたことなかったけど、市内にもどると、大雪です」。まあね。大同の冬は、寒いけど、カラカラに乾ききっていて、雨も、雪も、降りません。ですから、ちょっとの雪でも、「大雪」になる。そう思って、私は、バカにしていました。

ところが、12日の夜、大同のホテルに着くと、入り口に、雪が積んでありました。かなりの量です。それなりに降ったんですね。といっても、東京の大雪と、おなじくらいのものでしょう。地元の話では、これも人工降雨だったそうです。「増雨弾」を打ち上げ、飛行機でも撒布したそう。気温が低かったため、雨でなく、雪になりました。でも、水のほしい農村部には、あまり降らず、市内に、たくさん降った。「役にたたない」という人もいます。

話は、ちょっと、もどりますけど、東北電力総連の、ツアーといっしょに、12日の昼まの列車で、大同にむかうと、大同に近づき、高度があがるにつれて、ガラス窓を介して、外の冷気が、つたわってきます。私は、あわてて、パジャマの上をとりだし、着込みました。北京よりは、ずっと寒いのです。11日は、最高気温が零度、最低がマイナス9度。12日は、最高2度、最低マイナス14度。大同駅に迎えにきていた、大同事務所の魏生学副所長が、「大同の天気は、ほんとにひどい。10日は、26度まであがって、半袖になっていたのに、翌日には、零度になる」。こぼすこと、こぼすこと。

その後、15日までに、陽高県の大泉山村、守口堡村、大同県の小王村と、回ってきました。どうなることか、ハラハラしていましたが、最高気温のほうは、12度、14度と、少しずつ、回復してきました。でも、風が強いので、体感気温は、ずっと低い。作業のさいには、土が飛び、ときには、目をあけていられないくらい。カメラのボディは、黒いので、土にまみれていくのが、よくわかります。

「三寒四温」という言葉があります。3日寒くて、4日温かい。大同では、この時期、この言葉どおりにすすみます。なんだか、それをくりかえすうちに、だんだんと、暖かくなっていき、やがて、寒さへの後戻りが、なくなります。でも、そこまでいくのは、まだ先のこと。メーデーのあとに、雪が降った、ということさえあるのですから。

以前にもお知らせしましたが、(社)日中友好協会の機関紙『日本と中国』に連載中の「黄土高原レポート」を、ブログにしました。写真つきです。以下でござんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

3号前に、上北泉村の、私立小学校について書いたら、たくさんのかたから、つづきを求めるメールがありました。それも、各分野の専門家から。ちょっと、気が重くなりました。くわしく、調査しているわけでも、ないからです。でも、書かないのも、返すべき借金をいつまでもかかえているようで、気分がよくない。

しかたなく、パソコンに向かったら、問題が、起こってしまいました。ノートパソコン (WinXP) が、唐突に、「スタンバイの準備をしています」と表示しては、スタンバイ状態に、はいるので。再度のスイッチで、立ちあがるのですが、しばらくすると、また、「スタンバイの準備をしています」と表示して、同じことを、頻繁にくりかえします。

さいわい、そうなるまえの状態は、かな漢字変換中を含めて、立ちあがったのちも、保持されています。ですから、原稿だって、書けなくはないのですが、使えている時間が、長くて数分、短いときは、数秒から0秒、スタンバイから、立ちあがるまでの時間が、ときには、その何倍もかかって、精神にあたえる影響は、よくありません。イライラします。大きな作業は、とうていムリなので、書き終わったとしても、発送できるかどうか、心配です。

私は、キーボードが、富士通の親指シフトしか使えないため、大同の、この環境では、代替のパソコンなんて、とうていムリなのです。こういう事態を、克服する方法がありましたら、どなたか、ぜひ、教えてください。バッテリーと、ACアダプタには、異常がないようです。

この春、上北泉村に、ホームステイしたとき、朝早く、私立の「霊泉小学校」の教室を、そーっと、のぞいてみました。2階建ての校舎が建ったので、いまでは、1つの教室に、30人くらいで、ゆったりした感じです。若い男の先生が、すぐに私に気づいて、ひとこと、なにか合図したんですよ。すると、こどもたちが、いっせいに、歓迎の拍手を、はじめてしまった。自然の姿を、もう少し、観察したかったんですけど、最初から、破綻してしまいました。たまたま2年生のクラスで、私がホームステイした家の息子の姿も、教室のうしろのほうに、ありました。

授業時間をきいて、ほんとに驚きました。午前は5時半～7時、8時半～12時半、午後は2時半～5時半、7時～8時半、合計で10時間にもなります。寄宿している子は、9時半が消灯だということです。学校プラス学習塾の、勉強づけで、都会の進学校も、顔負けでしょう。

そのあたりが、この私立学校の、売りなんでしょうね。それなりの特色を、ださないことには、農家にとっては、大枚の、年間800元をはらってまで、この学校に、こどもをださないでしょう。教育を、たんなる義務としてでなく、お金をだしても、意味のあるものとして、理解している、ということでしょう。つい最近まで、この一帯には、小学校にも通えない子が、た

くさんいましたし、いまでも、完全には、なくなっていないのに、どういうことでしょう。

みるかぎり、教室の雰囲気は、暗くなく、私がホームステイした家の、むすこなんかも、どちらかというと、はつらつとしています。親たちは、「勉強はできない」といっていましたけど。

その日、午前中は、村の果樹園を見学し、そのあと、ポプラ苗の植付けをおこないました。いつもの年は、果樹を植えました、ことしは寒くて、高いところでの作業はムリなので、唐河のほとりに、植えたのです。午後からは、歓迎の、交歓会がありました。場所は、公立学校の中庭です。私立学校のほうは、校舎こそ、建ったものの、そのようなスペースは、ありません。

村のおとなも、伝統的な踊りを、おどってくれたんですけど、なんといっても、主役は、子どもたちです。今回は、私も、かなり注意してみました。というのは、今年の春、同じような歓迎会のあとで、ツアー参加者の鶴木さんが、「公立の子のほうが、のびのびしていました」といったんですね。私は、まんぜんとみているだけで、そんなことを、気にかけてもいなかった。

出し物の内容も、子どもたちの態度も、ほんとに、対照的でした。私立学校のほうは、出し物に応じた、そろいの衣装と、金紙、銀紙でつくった、飾りをつけてる。音楽と歌は、録音テープを使って、それにあわせて、メリハリのある、踊りをしました。くわしいことはわかりませんが、新しいもののよう。街の学校と同じものを、取り入れているのでしょう。

それにたいして、公立学校のほうは、服装は、てんでバラバラです。ようするに、普段着。なんといっても、外国からのお客さんを迎えるのですから、一張羅でしょうけど。踊りも、自分たちがうたう歌にあわせて、おどります。内容も、一見して、古くさいものです。動きも、自分たちでは、いっしょうけんめいなんでしょうけど、ぜんぜんあわない。

のびのびしている、ということからいうと、たしかに、後者でしょうよ。日本からの観客の、表情を観察してみると、どちらかというと、こちらの評価が高いようです。農村の素朴さ、といったものが、「純粹」ですからね。出し物については、目に見えますが、2つの学校の、教育そのものを評価するには、もっと時間が、必要でしょう。

私の印象は、このような私立学校は、上北泉村だからこそ、できた、というものです。中国側の、スタッフにきいても、農村で、私立小学校に、出会ったことはないし、そのような報道も、記憶にないそうです。

もともと、教育に熱心な村、だったのです。朝、まだ暗いうちから、(公立の)学校に子どもが集まって、自習をしていました。そのあと、朝食を食べに、家に帰って、また、学校にきました。そのようすをみた、大阪の小学校の先生が、「とても信じられない」と、くりかえしてま

したよ。

中国の農村の、こどもたちの向学心は、強いと思います。私が、小学校付属果樹園を、思い立ったのも、そのようなこどもたちに、触発されてのことでした。私も、農村の育ちですから、わかるような気がします。本を読んだり、話を聞いたり、なにか新しいことをして、新しい知識をうるのが、とても、楽しかった。いちばんおもしろい、遊び。そういう感じなんですよ。学校なり、村なりの、小さな社会が、それに応え、支えていけば、こどもはグッと伸びる。

上北泉村には、それがあったということでしょう。経済的に、豊かになる前から、学校の校舎は、村の経済状態に比して、ずっとりっぱでしたし、先生たちも、熱心でした。そういうことに、あの私立学校の女性の校長が、どれだけ貢献したか、もっと大きな要因があるのか、くわしく調査しないことには、わかりません。

話をきいているうちに、わかったことは、この村の共産党書記の、鄭海水は、もともと、村の小学校の、教員だったのです。私立学校の校長は、そのときの先輩教員だったそうで、鄭書記のことを「教員をつづけるには、才能が多すぎた」といいましたし、鄭海水は、「学校においてくれなかった」と笑っていました。いずれにしろ、長く村のトップをつづける人間が、教育を志していたことは、意味があったでしょう。教育を大事にするということは、村の将来を考えていることだと思います。

## NO. 358 風砂 2006. 04. 25

大同では、雨らしい雨は、もう半年もふらず、カラカラに、乾ききっています。そのうえ、風が強く、土が舞い上がります。ブワッと、土ぼこりが迫ってくると、あわてて、背をむけ、しゃがみこんで、目をつぶります。それでも、口や鼻のなかは、ジャリジャリ。こういう地産のものは、感覚的には激しいんですけど、じつは、かわいいもの。

本格タイプは、もっと西の、砂漠地帯の土が、偏西風に乗って、東へ、東へと、上空を飛んでいくもの。大同は、その通過点です。晴れているのに、薄暗くなり、白く濁ったような、大気を通して、ときおり、青白い太陽が、顔を見せます。そして、すぐに、消えていく。ひどいときは、視界は1キロもききません。ことしは、そのどちらのタイプも、やたら多いのです。太陽をみない日が、何日も、つづいたくらい。

日本でも、黄砂の到来が、今年が多いようですね。大同を、風砂がおそうと、その翌日に北京でニュースになり、さらに2日後くらいに、日本で、黄砂になります。こんなふうに、気軽に私は、「風砂」を使いますが、まだ、日本語に、なっていないようですね。いくつかの、辞

書をひいても、でていません。「黄砂」では弱いし、「砂嵐」では強すぎるし……。中国語では、「風沙」をよく使いますが、手元の中日辞書では、「風と砂ぼこり」となっています。ほかにいい言葉がないので、とりあえず、「風砂」を使うことにしましょう。

いまも、強烈な風砂が、恐ろしいほどの、うなり声をたてるので、ちょっと窓をあけてみたら、とたんに、土ぼこりが顔にぶつかり、目にはいりました。じつは昨日（4月24日）、テレビ朝日中国総局の、取材がありました。私たちが、地元と協力して、木を植えているところを、撮影しました。あわせて、強風が、土を巻き上げるところを、撮りたかったんですね。それなのに、あれほど強烈だった風砂が、その日にかぎって、ピタリとやみ、おだやかな天気、植樹のためには、絶好だったのです。地元の村人や、子供たちも参加して、熱心に植えましたので、いい場面が、撮れたでしょう。

しかし、風砂のほうは、まるで撮影できなかった。取材陣は、「このあと、風が吹くでしょうか？」ときくんですけど、私としては、そんなことに、なってほしくない。ここは、言霊の世界で、口にすると、それが現実になりますから、いいことだけを、話したい。「3日くらいは、この天気もつでしょう」なんて、答えました。ご苦労なことに、取材クルーは、風砂を求めて、内蒙古のほうに、足を延ばしました。きょうも、午前中は、風はなかったんです。でも、午後になって、このように強烈な、風砂がやってきました。皮肉なものです。あの人たちも、どこかで、であっていることでしょう。今週のうちに、「報道ステーション」で、放映されるそう。

撮影の横で、地元の農民に、話をききました。いま、カササギの森の、植えつけ作業にきています。「ほんとうは、こんなことをしていたくない」といいます。どういうことでしょうか。「トウモロコシの種まきは、4月18日から25日までのあいだに、しないといけないけど、雨がまったく降らないから、それができない。種まきが、それより遅れると、成熟するまでの、日数がたりなくなる」というのです。

トウモロコシには、種まきから収穫までが、110日くらいの早生（わせ）種から、125日くらいかかる、晩生（おくて）種まで、何種類もあるそうです。晩生のほうが、収穫量が多いので、できれば、それを植えたい。種子は、もう購入してあるわけですね。ところが、種まきの、最終の期限が、迫ってきたのに、雨が、降ってくれない。いまの種子は、一代雑種で、外から購入したものです。以前のものにくらべ、収穫は期待できるけど、値段が高い。1斤（500g）が3.5円で、35斤ほど買ってあるそう。種子代だけでも、120元ほどが、ムダになります。

トウモロコシが、まにあわなければ、アワ、キビ、ジャガイモ、などに、切り換えます。そのばあいの、収穫高は、ずっと少なくなる。かなり、深刻な状況にある、と思うんですよ。

ひとつごとでは、ありません。私たちが植えた、樹木の苗も、雨を待っています。あと何日も、

降らなかったら、活着率は、ガクッと落ちるでしょう。

おもしろいことが、ありました。昨晚まで、大同にいた、自治労大阪府本部の人たちの通訳として、私の友人の、李建華さんが、きていました。私の本の、翻訳をしてくれた人です。テレビ朝日の、若い中国人スタッフに、声をかけられたそうです。「あの李建華さんですか？」と。なんて、前の職場の同僚の、息子さんで、彼が小さなときに会って、それ以来だそうです。中国は、国が小さくて、人が少ないので、こういうことが、しょっちゅう、おこります。

## NO. 359 侯喜さん 2006. 05. 01

大同市林業局を、定年退職した、侯喜さんを、カウンターパートの、緑色地球ネットワーク大同事務所に、迎えたのは、1997年のことです。私たち日本の、緑の地球ネットワークが、発足後の数年間、しろうとだけの集まりであったのと同様に、大同事務所も、緑化にかんしては、しろうとの集まりでした。そのことによる、さまざまな問題を解決するために、技術顧問として、彼を迎えたのです。

40年間、大同の現場で、働いた人でしたから、強烈な、プライドが、あったと思います。最初のころ、その押し出しの強さ、声の大きさに、私は多少、へきえきしていました。私が、引けばひくほど、彼は押してきます。そういう関係を、劇的に改善したのが、遠田宏顧問でした。遠田さんは、老侯の経験を、きちんと理解し、評価されたのです。そのおかげで、双方が、かみあうようになりました。

忘れられないのは、大同県で、その年輪を解析するために、小老樹を、切り倒したときのことです。小老樹というのは、1950年代、60年代に、桑干河流域を中心に、大同の大面积に植えられたポプラが、水不足、その他の原因で、伸び悩んだもので、文字通り、小さな、老いぼれの、樹です。

中国では、木を切るのは、1本でも、おおごとで、何段階もの、政府の、許可をえる必要があります。案の定、私たちは、村人によって、見とがめられました。すると、老侯は、「おまえは、なんて名前だ？じゃあ、おやじは、〇〇〇で、おふくろは、△△村から、嫁にきただろ」。それだけで、その男は、引き下がりました。

九梁窪林場で、胡楊の苗を、掘っているときも、林場の若い男に、制止されました。「おれは侯喜だ。家に帰って、おやじにきいてみろ」と老侯はいいました。おやじにきかなくても、侯喜の名は、その男も知っていて、それだけで、問題は解決しました。

ほんとに、まじめな人で、いつも全力投球でした。新たにプロジェクトをつくるときは、か

ならず自分で、くりかえし、その現場を調査していましたし、苗も、かならず自分で、えらんでいました。「カササギの森」を建設するときは、すでに70歳間近だったのに、管理棟の、スチール製2段ベッドで、寝起きし、いつも陣頭指揮でした。責任者が、先頭にたつプロジェクトだけが、ここでは、成功します。

その数年前のことです。霊丘で、自然林をみたあと、私たちは、その主人公の、リョウトウナラ（遼東櫟）を、植林に、もっと活用すべきだと、考えました。私がそう話すと、老侯は、「そんなものは役にたたない」といいました。私は、むきになって、反論しました。

カササギの森の、建設がはじまったとき、老侯は、「霊丘植物園で育てている、リョウトウナラの苗を、ここに植えてもいいか？」と、私にききました。私が、「まだ小さすぎる。来年にしたらどうだ」と答えると、「リョウトウナラを植えるなんて、大同では、だれもしたことがない。やってみたいのだ」と、老侯はいいました。以前のことを、ちゃんと、おぼえていたのです。

老侯は、そのように、新しいことを取り入れるのにも、柔軟でした。そして、日本の専門家がもちこんだ新技術を、大同の林業関係者に、熱心に普及してくれました。彼がいたからこそ、私たちの事業は、大同に、根付くことができたのです。

その老侯が、一昨年暮、病気で倒れてしまいました。ガンです。風邪ひとつひかない、頑強な人でしたから、発見が、遅れてしまいました。あんなに、世話になったのに、私は、たった2度しか、彼を見舞うことがなく、あとは、大同にくるたびに、人を介して、見舞いを届けていました。

言い訳をすると、忙しかったのは、事実です。そして、私は、自身が病気のとき、すごく落ち込んで、だれとも、顔をあわせたくありません。自分のその気持ちに、ひきづられて、病気の人を見舞うことに、おじけづきます。

4月に、大同に引き返すとき、かならず見舞うよう、つれあいに言い含められ、東川さんから、見舞いの品を、託されました。みんなで、突き飛ばして、くれたわけです。4月20日、自宅に、老侯を見舞いました。夫人のほかに、3人の娘さんがそろって、とても、歓迎してくれました。老侯は、右手は利かなくなっており、左手で、じっと私の手を、握りしめました。私は、この春、みてきた現場のようすを、伝えました。

しばらくして、老侯は、「あなたが去年、つれてきた女の子は、どうしているのか？」とききました。そのとき、会田さんがいっしょだったことを、私は、忘れていました。今回も同行した、会田さんが、自分がそうだと伝えると、老侯は、ほんとに、うれしそうにしました。私たちのことを、ずっと、気にかけてくれたのです。別れぎわ、老侯は無理をして、立ち上がり、私たちを、送り出しました。

大同を離れる前日、経費の清算などを、すべて終えたあと、武春珍所長が、いいました。「老侯が亡くなりました。一昨日（26日）のことです」。そんなことを、どうして、いまになって！彼女も、いいだしにくかったのでしょうか。

遺体も、家族も、大同県の実家に、帰っているそうです。あわてて、そこにむかいました。数人のお坊さんが、お経をとなえていました。家族、親族が、白い着物をきて、ひざまづいています。私たちも、ひざまづいて、老侯に、お別れをしました。

「あのとき、あなたたちが、見舞いにきてくださって、老侯は、ほんとに、うれしかったんです」と、夫人と娘さんが、何度も何度も、私にくりかえしました。そう言われると、私はさらに、つらくなります。ひとつことも、話すことができず、涙をぬぐうだけでした。

#### NO. 360 ノウサギはなんのために 2006. 05. 08

マツを植えたあとの、ノウサギの食害に、困っています。以前、ずいぶんと苦しめられた、果樹苗のばあいは、全体の本数がすくないので、ポリエチレンの、フィルムを巻き付けたり、石灰に、ブタの血や、廃油をまぜ、それを忌避剤として、苗に塗ることで、ある程度は、防止できます。

山のマツは、植える数も多いし、横枝もあるし、なかなか、いい方法が、みつかりません。頂芽が、つぎつぎに、かみ切られます。場所によっては、全滅に近い状態。何年か前、国家林業局の専門家が、私たちのプロジェクトを、視察したあと、「ノウサギへの対策がない」と批判的なレポートがでたので、「どうしたらいいのか、教えてください」といったところ、「決定策がなくて、困っている」とのことでした。

以前は、これほどのことは、なかったのです。大同をみわたしても、以前にくらべ、樹木も、草も、ふえてきました。ずいぶんと、みなさん、努力してきたのです。その結果が、ノウサギに、いい環境を提供し、数が、ふえてきたのでしょうか。糞が、山のようになっているところがあります。

じつは、このノウサギ、中国では、2級保護動物だそうで、勝手につかまえたり、殺したり、できません。でもね、現場では、そんなことをいっておれないんです。さるところで知りあった、林業局のべつの幹部は、具体的には、話しませんでしたけど、あきらかに、殺してしまう方法を、もっているようでした。そういう事情があつて、公に顕彰することはできませんけど、私たちの関係者のなかに、このひと冬で、50羽以上の、ノウサギをワナで捕獲し、「もう、食べたくない」といっている男がいます。私の目からみたら、英雄ですよ。

昨年、北海道を訪ねたとき、林野庁OBの、棟方鋼男さんが、襟裳岬の、あのすばらしい緑化の現場を、案内してくれました。そのとき、おもしろい話を、ききました。あそこは、ノウサギではなく、シカだそうです。これが、苗をいためつけるんですね。ところが、天然に生えてきたものには、被害がみられず、人工的に植えたものに、被害が集中する、とのことでした。

どうも、エサとして、食べるために、そうしているのではなく、人がやっていることに、イタズラしているのではないか、ともいわれました。いろいろと、調査研究中のようですので、その後の、レポートを、待ちたいと思います。

私は、そのときは、とてもおもしろく聞いたんですけど、その場かぎりで、半ば、忘れていました。ところが、このたび、霊丘自然植物園を、見回っていて、同じような現象に、気づきました。

ここも、マツに、大きな被害がでています。小苗だと、被害が深刻だというので、最近では、4年生くらいの、かなり大きな苗を使っています。これくらいになると、裸根では、活着がむずかしいので、ポリ袋を、ポットにして育て、土をつけて植えます。育苗に、ずいぶん手間がかかるし、苗の運搬も、植えつけも、めんどろですが、しかたがない。反面、このような大苗だと、耐寒性が強まっているので、冬のあいだ、土伏せする、必要はありません。

しかし、その大苗にも、被害がでていいます。とくにひどいのは、山のうへのほうに、植えたものです。のきなみ、かじられています。下のほうに降りてくると、被害が少なくなります。そのことを指摘すると、責任者の李向東は、「ノウサギは、冬のあいだ、山のうへのほうにいる」といいます。ほんとうでしょうか？

じつは、この山には、かなりの数の、アブラマツが生えています。1960年代くらいに、種子を航空散布したものだそう。生えている密度は、高くありません。効率からみると、いいとはいえないでしょう。ところが、その周囲に、天然更新した、小さな苗が、育ちはじめています。人工的に植えたものが、育っても、それでは、まだ成功とは、いえないと思います。その子どもや、孫が根づいて、はじめて成功だと思えます。だから、この小さな苗をみて、とてもうれしかったのです。何枚も、写真を撮りました。

あとになって、ハッとしました。これらの天然更新した苗には、ノウサギの食害がないんですよ。それと対照的に、その周囲に、人手で植えたものは、のきなみ、かじられています。かじられたといっても、食べているわけではありません。苗の頭を、かみ切るだけです。ただまあ、そのときたしかめた、天然更新の苗は、数が、そう多くなかった。ですから、確定的なこととは、いえません。

棟方さんの話を、李向東にしました。すると、李向東は、ノウサギは、好奇心が、とても強いのだといいます。それまでみかけなかった、苗木が、人によって、植えられると、なんだろうかと思って、かじってみる、というのです。それにたいして、天然更新の苗は、自然に、ゆっくりと、育っていくので、ノウサギの、関心をひかない。棟方説とも、共通しているようです。

同じようなことを、体験したかたは、いらっしゃらないでしょうか？もし、それがほんとうなら、ノウサギの害を軽減するために、なにかの、くふうができないものでしょうか。

## NO. 361 桑干河流域自然保護区 2006. 05. 15

趣味、というわけでは、ないんですけど、大同、もしくは山西省の、新しい地図が目にはいれば、迷わず、購入することになっています。ここで、しごとをすすめるうえで、なにかと役にたつ、情報がえられるはずです。

この春、新しく入手した、大同の地図に、「桑干河流域自然保護区」というのがあります。大同市の南部に、移動するさい、かならず通過する、固定橋の、すぐそばです。いつてみたいと思いました。

ところが、大同事務所のメンバーは、そのような情報を、まずは、信用しません。「自然保護区？」と、語尾をあげて、せせら笑うのです。それにも、無理のないところがあります。「自然保護区」とか、「森林公園」の看板は、あちこちに立っているのに、その実体のないことが、多いんです。「博物館」が、からっぽ、なんてこともある。

昨年、朔州市の右玉県にいったとき、林業局の案内に、「天然林」とあるので、わざわざ、でかけてみたら、河川敷のようなところに、ヤナギハグミ(沙棘)が、生えているだけ。天然であることは、まちがいないんですけどね。まあ、私たちも、小さな苗を植えたばかりのところに、「カササギの森」なんて、名づけているんですから、ひとさまのことを、とやかくいえません。

地図も、不正確なことが、多いのです。新しく買った、その地図でも、私はチラッとみただけで、何か所も、まちがいを発見しました。たとえば、名所旧跡などは、道路の反対側に、配置されているくらいは、ふつうで、かけ離れた場所にあることも、少なくないんです。スペースのあるところに、とりあえず貼りつけた、という感じ。おおらかな、ものです。

右玉県で、ヤナギハグミの天然林をみたときにも、地図に「宝寧寺」の表示がありました。しかも、山西省の旅游図にも、それがありません。県城のなかでするので、訪ねることにしました。ところが、地元の人にきいても、だれも知りません。何人目かにつかまえた人が、やっと教え

てくれました。なんと、25km も、離れたところだったのです。

この県の県城は、以前は、右玉城鎮（または右衛鎮）でした。内蒙古との境にある、長城のすぐそばで、右玉県の西北のはずれ。大がかりな、土の城壁で、囲まれており、宝寧寺も、そのなかにあります。むかしとしては、大きな町だったでしょうが、県政府所在地としては、位置的にも、不便でしょう。

県城は、いまの新城鎮（梁家油坊鎮）に移りました。ここは、県の中央部にあります。地図のうえで、県城を移すさいに、お寺まで、いっしょに動かしてしまったようです。「お〜い！ 宝寧寺は、県城のすぐ北でいいんだな？」「そうだよ、そのとおり！」といった、やりとりが、編集室で、あったのでしょうか。

そのまちがいが、他の地図にも、踏襲されます。つい最近にでたものは、やっと修正されましたけど、以前の地図は、たいてい、まちがっています。「一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」。そんなことは、私たちの身近でも、めずしくないでしょう。

桑干河流域自然保護区は、地図のうえでは、大同県吉家庄郷の、郷政府のそばです。その近くで、地元の人に、小郭が、道をきこうとしました。私は、「だめだよ、だめだよ。知ってるはずがない。郷政府にいつてきかないと……」といいました。そのとおりだったんですね。地元の農民が、とてもくわしいこともあります。こういう問題については、関心がないのがふつうです。

郷政府で教えられた道を、はいつていきました。桑干河の、川岸にでました。一部が、鉄条網で囲ってありますが、なかには、なにもありません。河川敷には、せいぜい腰の高さくらいの、灌木が、しげっています。ギョリュウ（檉柳、紅柳、タマリスク）です。そこに、大きな記念碑があつて、文字は、もう、かすれていますが、最後のところが、「……開発区」と読める。同行している、大同事務所の副所長、魏生学が、「ほ〜ら、みろ！」という顔をしています。小郭は、桑干河の堤防のうえを、固定橋にむかって、くるまをすすめました。

すると、進行方向右手に、カモやガンなどの、水鳥がみえました。そこは、堤防の外ですが、水がたまって、湿地になっています。相当の面積でしょう。桑干河の水は、いまや刺激臭のつよい、まっ黒な、純度 100%の、汚水ですけど、この水は、きれいです。

小郭が、歓声をあげました。湿地のなかに、30~40羽の、大きな、灰色の、ツルが、降り立っていたのです。私が、カメラをもって、飛び出そうとすると、小郭が、止めました。人の姿をみたら、すぐ逃げるから、くるまのなかで、みたほうがいい、というのです。

私の、デジタル一眼レフの、望遠側は、35mm フィルム換算で、300mm ですが、それではやは

り、不足するので、もう少し、近寄りたい。ドアをあけて、くるまを降りたとたん、ツルたちは、いっせいに飛び立ってしまいました。あわてて、シャッターを、切りました。逆光で、シルエットぎみなのと、黄砂のために、かすんでいるのが残念ですが、まずまずのできです。

小郭が、思いだしたところでは、桑干河に白鳥が降り立った、という報道が、しばしば、あるそうです。10月くらいのことだそう。それも、おそらく、ここだろうとのこと。

日本の水鳥は、もっと、人に慣れていますね。かなり近づいても、逃げようとしません。ここは、「自然保護区」といっても、周囲の人が、そのことを、知らないくらいですからね。水鳥が、人をこわがらないようなら、かんたんに、人のお腹に、おさまるでしょう。

それにしても、カラカラに乾燥して、黄砂のまう黄土高原に、水鳥のあそぶ、湿地があるなんてね。バードウォッチが趣味の、池本さんに電話をかけてきいたら、おそらくそれは、クロヅルか、ナベヅルだろうとのこと。

同じ地図に、「霊丘県黒鶴保護区」というのがあり、霊丘自然植物園に行く、途中です。近づいて、みたかったんですけど、そのあたりの道路わきには、石炭の集積場が、連なっていて、道路を発見できませんでした。どんな色のツルであろうと、これではみんな、黒鶴になりそうです。

## NO. 362 シャオグオ（郭宝青） 2006. 05. 22

私たちのカウンターパート、緑色地球ネットワーク大同事務所の、現在の運転手は、郭宝青です。シャオグオ（小郭）と、呼んでいます。事務所にきたのは、2000年春ですから、もう6年になります。

それまでの運転手の、シャオチャン（張徳）は、イタズラ好きの、おどけものでした。立花先生にまで、ちょっかいを出してましたよ。それに比べると、小郭は、ずっとおとなしく、ハンサムです。

事務所にくるまでは、大型トラックに乗って、石炭を、運んでいました。故郷の山陰県から、雁門関、応県、繁峙、霊丘、唐県などを經由して、河北省の、石家荘まで、往復したそう。地図ではかった、直線距離は、230kmほどですが、ルート的大部分は、太行山脈の、山中ですので、実際の走行距離は、ずっと多いでしょう。最大積載量10tほどのトラックに、その3倍から5倍の、石炭を、積み上げていました。夜中も走り、疲れて、眠くなると、ハンドルにもたれて、数時間、眠ったそうです。

当時は、道路も、いまより、ずっと悪く、渋滞も、しょっちゅうでした。道路を走れなくなると、谷底を走りました。そこも渋滞になり、2~3日、動けなくなることもしばしば。川の水を飲み、6日6晩、方便面（インスタントラーメン）だけで、すごしたことも、あったそうです。「とても愉快でした！」とあって、小郭は、すばらしい笑顔をみせます。

そのころの稼ぎは、いまの何倍も、あったようです。ただ、荒っぼいしごとだし、からだにもきついから、こちらにきたそう。大型車に乗っていた、運転手は、技術がたしかです。彼の運転する、車に乗っていて、私はなんども、「ああ、自分が運転していたら、いまの瞬間、完全に、事故っていたな！」と思いました。武春珍も、つねづね、「小郭の技術はたいしたもの、接触事故の、ひとつもありません」とあって、ほめます。

人、自転車、バイク、三輪車、乗用車、バス、トラック、ときには馬車、ありとあらゆる、交通手段が、ゴッチャ、ゴッチャになって、動いているのが、いまの大同です。交通マナーも、めちゃくちゃ。急な飛び出しなんて、めずらしくもない。北京からきた運転手が、おびえるくらい。大同で、運転資格のある日本人は、大阪人だけだと思いますが、大阪からきたプロの運転手も、「ここでは運転したくない」。

小郭の運転は、ひじょうに慎重です。それは、安全のため、だけではありません。ものすごく、車をだいじにしている、すこしでも、キズをつけたりしたくないのです。悪路を走るときは、シャーシーをこすることがないか、車をおりて、何度も、何度も、車体の下をのぞきこんで、確認します。遠田先生が、ちょっとイライラして、「だいじょうぶだよ。ちょっとぐらい、こすったとしても、べつに影響ない」といっても、そんな声に、耳を貸そうとしません。

2年前までは、小張が乗っていた、お古の、北京ジープ製、チェロキーを、運転していました。ひまさえあれば、ぞうきんをかけて、車体に書かれた、車名の文字が、やせ細ったほど。その後、ホンダの、オデッセイに替えると、彼の、くるま愛護心は、いっそう強まって、私が、ボタンと、ドアを開めると、「もっと、ていねいに、ドアを開めてください」というくらいです。

新しいくるまは、1年間で65,000kmも、走りました。私たちのプロジェクトは、面積1万4千平方km余りの、大同市の最南部から、最北部までに、散らばっていますので、どうしても、走行距離が伸びる。そのうえ、北京までの、日帰りも、しょっちゅうです。そうとうに、疲れるはずなのに、チラッとでも、いやそうな顔を、みせたことがない。北京から、通訳にくる人たちも、「小郭は、ほんとに、いい性格をしていますよ」とほめます。

これまでの大同では、運転手は、技術者でした。機械いじりが、好きで、得意な人間が、運転手になったのです。そして、ときには、道路わきで、エンジン分解の、大修理まで、やっつけてくれました。そうでなければ、以前のくるまは、走らせることが、できなかったのです。トラブルが、とても多かった。

具体的にいうと、私たちが、大同で、最初に入手したくるまは、大同の、地元産の、「雲岡」マークの、バンでした。エンジンその他の、基幹部品は、他から購入して、組み立てを、地元の、零細企業が、やっていたものです。私たちは、ずいぶんと、お世話になりましたけど、運転手は、ずいぶんと、お世話をしていました。走行中、ラジエターのホースに、穴があいたときは、穴のあいた部分を、切りつめ、短くして、つないでましたよ。もともと、それぐらいの余裕が、あったんですね。小郭も、そういう一時期を通過した、技術者としての運転手です。

私たちの感覚からすれば、運転だけさせておくのは、ほんとに、もったいないですよ。張家口市張北県の、地震被災地をみまったとき、外国人の私は、写真撮影を禁止されました。そのとき、以前の運転手の、小張が、何枚か、写真を撮っていました。(なんと、その写真は、岩波書店の『科学』に掲載されました)。それ以来、ビデオとスティルの、カメラを使えるのが、大同事務所の、運転手の、伝統になりました。

それだけではありません。緑化や環境についての、知識と関心を、運転手ももってくれると、私たちが入手できる、情報の量は、ぐっとふえます。なんとといっても、彼らは、広い範囲を、走りまわっていますし、私たちのように、居眠りする、なんてことがない。そして、運転手なかまの、きずなは深く、情報交換の、ルートが、できあがっているわけです。小郭も、どこになにかがある、といった情報を、たくさん、もたらしてくれます。

いま、小郭は、29歳です。3歳半の、息子がいます。つれあいは、23歳だといいます。結婚したのは、6年前。ということは、そのとき、彼女は、17歳。いまの23歳も、おらそく数えでしょうから、結婚したときの満年齢は、16歳か、15歳ということでしょう。

## NO. 363 「有意義なメーデー」 2006. 05. 26

大同における、私たちの協力事業も、すでに15年目。このかんに、ボランティアツアーその他で、現地を訪れた人は、2,100人を超えました。記念事業の1つとして、写真コンクールを開催中です。90人ほどから、約220点の応募がありました。いま、私たちのウェブページに展示し、みなさんの投票を、受け付けています。

その投票が、バラバラに散るんですね。よくもまあ、ここまで、と思うほど。事務所の会田さんは、「いい作品が、そろっているということですよ」(いい性格、してますね!)。私「傑出したものが、ないということだよ」。みなさんの判断は、いかが?

4月30日に帰国する私に、北京の李建華さんが、「どうして、わずか1~2日を、延ばせないの」と文句をいいました。そんなことをいったって、大同なんかで、グズグズしてたら、せつ

かくの、日本での連休が、飛んじゃうんじゃないの。

そんなことを、李さんがいったのは、彼らの、小学校から高校までの同級生、13人が、メーデー休暇をつかって、5月1日から3日間、大同を訪れ、私たちのプロジェクトで、木を植えることになっていたからです。日本や、長春からの、出席者もあるそう。その人たちに、会わせたいと、李建華さんは思ったんですね。

彼らの大同滞在は、有意義なものに、なったようです。私たちの会報「緑の地球」の原稿に、といって、数本の原稿が、寄せられました。みなさん、中国人ですが、日本語で書いてくれました。まずは、「有意義なメーデー」と題された一文。

このたび、有意義なメーデー休日を過ごした。かつて長春外国語学校時代のクラスメートと一緒に山西省大同県巨楽郷「カササギの森」へ植林にいった。五十も過ぎて、かつてのクラスメートで植林にいくなんで、しゃれたことをするなと思われるかも知れない。しかし、これはしゃれではない。私たちはますますひどくなる「黄砂」を体験して、微力とは知りながら、一中国人として行動に出たのだ。

それぞれポケットマネーを拠出し、GWの休暇を利用して、黄砂来襲三ルートの内の一つ、山西省に向かった。黄色い大地を相手にショベルで奮闘し、作業を半日も続けると、汗が額から、顔から、体中から滴り、まったく水っ気のない大地に染みいる。

それでも二百数十本の松の苗木が大地に立ったという成果を見ると、顔が汗と砂ぼこりでまみれていながらも、心で少しは環境保全の力添えになったと満足感を覚えている。クラスメートたちが幼い頃の思い出に話が弾み、兄弟姉妹のような連帯感もいっそう強くなった。

地元の農民は一同に「老高」という名前を口にする。高見邦雄さんのことを指している。「老高」は1992年からここで植林事業をしてきた。彼と彼のお伴の日本人が最初にこの山村に来た頃、小石を投げつけられたこともあったそうだ。旧日本軍が中国を侵略した時、山西省の人々も大きな損害を受けたからだ。それでも高見さんは農民と真心の交流を続け、地元から「老高」という全然わだかまりのない、親しい呼び名を付けられるようになったのだ。

植林緑化事業は日本の多くの機構、団体から資金、人的援助、協力を頂き、段々大きく実を結ぶようになった。これを通じて、中日両国人民の間に心の絆が結ばれ、橋が架けられつつある気がする。

北京へ帰る車の外を眺めると、草木のない黄色い大地が延々と伸びている。これからも、より多くの「老高」と、私たちのような「老青年」がこの事業に参加し、努力を続けていかなければならない。【引用ここまで】

これを書いたのは、どういう人だと思いますか？なんと、東京の中国大使館で、この春まで、公使をつとめていた、程永華さんなんですよ。マレーシア大使として、新たな任地におもむく前の短い休暇のあいだに、大同にきてくれたのです。たしか、1月だったと思いますが、たまたま、東京で顔をあわせたとき、「李建華に誘われて、大同にいきますよ」といっていたんですけど、まさか、本気だとは、思っていませんでした。

うれしいですね。私たちが、この協力事業をはじめたとき、理解してもらうのは、むずかしかったんです。「わずかな日本人が、あの広大な中国で、いったい、なにができるんだ！」といわれました。そのとおりです。黄色い大地の、あの広大さを目にして、言い出しっぺの私なんかも、ゾーッとしました。

しかも、このしごとは、マイナスからのスタートでした。程永華さんの文をみて、彼がどの村で話をきいたか、すぐわかりましたよ。渾源県の、あの村でしょう。私が歩いているあとを、数人の男の子がつけてあるいて、「ダーダオ・リーベン、ダーダオ・リーベン……」と節をつけて、うたいながら、小石をひろって、投げるマネをしていた、というんですね。「打倒日本、打倒日本」です。そのとき、本人の私は、まったく気づいてなかったんですけど。知ってたら、くじけていたかもしれません。

なにができるんだ、といわれたときに、口はばったいようですけど、「呼び水の作用をはたすんだ」と、答えたんです。それが少しずつ、現実になって、北京あたりの人たちが、砂漠化や水不足の問題に、関心をもち、自分たちでも、動いてくれるようになったんですね。そして、私たちがやってきたことを、こうやって評価してくださる。ありがたいことです。

## NO. 364 精密機器は泣いている 2006. 06. 02

黄土の粒子は、ひじょうに小さくて、大きいものでも、10分の1ミリ以下。平均的なのは、100分の2ミリくらいです。秋から春の、乾燥する時期には、これが、いつも、空気中を、ただよっています。そして、どんな小さな、すきまにも、はいりこむ。黄土とは、なかよくしないといけない立場の、私ですけど、困ることもあります。

いちばん、被害を受けたのは、ビデオカメラです。1997年ごろ、だったと思います。現在は私たちの監査の池場さん、以前の世話人の板坂さんなど、映像方面のプロの、協力をえて、現地で撮影したビデオを、作品に編集しました。そうすると、画質にも、こだわりたくなります。民生用のHi8機として、当時、最高級だった、SONYの、VX1を使うことにしました。キットこみで、30万円近く。

春先、最初のツアーは、毎年、霊丘県で活動します。日本からのみなさんが、アンズの苗を植えているところに、極力、接近して、撮影したんですね。ちょっと、こった、アップの絵も、ほしかったのです。スコープを使ってますから、当然、土けむりが、舞い上がります。でも、それほど、ひどくはなかった。いわゆる、砂かぶり、というほどではありません。ところが、宿に帰って、撮影したテープを、再生してみると、ノイズがひどくて、使えたものじゃない。そのあと、ほかで撮影しても、もうダメなんですね。おニューを、なんと、1日で、オシヤカにしてしまった。

帰国してから、修理にだしました。もちろん、保証期間内です。「鉄粉のような、微粉末がはいっています」と連絡がありました。なんとか修理が終わって、手元に返ってきました。念のために、自宅近くで、テスト撮影を試みたんです。すると、10分もしないうちに、パカッと、いきなり、テープが飛び出し、おさまらなくなった。事情を話して、再度、修理にだすと、「修理不能です」という連絡があり、新品に、交換してくれました。

そのときは、「日本のメーカーは、良心的だ」と、感激したんですけど、よくよく、考えてみると、機械が、軟弱すぎるんじゃないか。テープの挿入口などが、あますぎるし、そこからはいったホコリは、機動部や、録再ヘッドなどの、心臓部、大脳に、すぐに、たっするんですね。

でも、文句をいうのは、かんたんですけど、それで、どうなるわけでもないの、自衛手段を、とらざるをえません。ビニールその他の、フィルムや袋で、レンズの前面以外の、カメラ全体を、すっぽりと、包むことにしました。操作上は、不便ですけど、必要なものを、撮影して、記録に残すためには、いくらかの犠牲は、しかたがありません。マスキングテープで、目張りしたこともあります。

スティルのカメラは、ビデオカメラよりは、いくらかましです。私が、主につかってきたのは、一眼レフです。露出だけオートで、その他はマニュアルのペンタックスLXが、ながかった。でも、屋外で、レンズ交換をすれば、空気中を浮遊している土が、カメラ本体に、はいりますから、そんな恐ろしいことはできません。28~105mmあたりの、標準ズームに、頼ってきました。フィルムの交換も、屋外は、できるだけ避けます。それでも、ズームリングのあたりには、土がはいりこんで、ジャリジャリになります。フィルターの内側まで、土がはいりこむのはふつうで、レンズのあわせガラスのなかにまで、忍びこむ。毎回とは、いきませんが、ときには、オーバーホールが必要になる。その費用が、バカになりません。

最近、デジタル一眼レフをつかっていますが、年に1回くらいは、トラブルに、みまわれます。いまも、ファインダーのなかに、小さなカゲができていて、とても、気になります。気になるだけで、撮影する内容に、影響はありませんので、オーバーホールにだすか、どうか、思案しているところ。

パソコンのトラブルにも、泣かされます。室内でしか、つかわないのに、それでもトラブルが多い。この4月、大同で、私のノートパソコンが、つぶれました。帰国後、修理にだしたところ、ハードディスク、その他の、故障だったそうです。OSその他が、プレインストールされた、ハードディスクに、あっさりと、交換されていました。重要なファイルは、バックアップがあったんですけど、ことしの春の、現地の写真など、失われたものもあります。私は、キーボードは、親指シフトしかつかえませんが、関連ソフトの、インストールなど、使えるようにするまでに、たくさんの手はずが必要でした。まだ、完全には、復活していません。

それでも、パソコンの進化によって、被害が軽くなったのは事実です。以前、記憶媒体に、フロッピーディスクをつかっていたときは、もっと、しばしば、トラブルたものです。フロッピードライブのように、回転機構をもち、しかも開口部のあるものが、いちばんやっかいです。ハードディスク主体になって、開口部が減りました。

2000年前後のことですが、気象データをもらうために、大同市気象局に、通ったことがあります。専門の、コンピュータ室があり、みなさん、白衣を着て、靴をはきかえ、作業をしていました。それをみて、私は、「ひと時代まえの、コンピュータじゃあるまいし、たかがパソコンに、ここまで、おおげさにすることないじゃないか」と、悪口を、いったんです。

でも、その直後に、思い直しました。それまで持ち込んでいた、ワープロ専用機の、OASYSとか、いまよりは、ずっとごっつい、ノートパソコンとか、何台も、自分で、つぶしていたんですよ。おニューだと、もったいないから、中古で、手に入れるんですけど、それが、つぎつぎに、ダウンしていました。その残骸が、気の毒なことに、王萍の自宅に、山積みになっているはずですよ。

カメラだって、電気器具だって、中国人のあいだで、日本製品の、機能への評価は、とても高いんですけど、耐久性を、問題にする人は、多いんです。いったん、購入したら、私たちよりは、ずっと長く、つかいつづけますしね。大同にかぎらず、北京あたりでも、ずっとほこりっぱいんです。そのあたりのことを、もうちょっと、考慮すべきだと思います。

でも、それよりなにより、完全にこわれてしまったのは、私の、あたまです。大同に、通うようになるまでは、もうちょっと、精密な思考が、できていたと思うんですよ、自分では。でも、あそこでは、こまかなところを、つきつめて、考えても、しかたがないのです。あるところから先は、天にまかせるしかありません。ああ、雨よ、雨よ、と。ちよっとくらい、ゴミがはいろうと、油が切れよう、ガタゴト、ガタゴト、いいながらも、それでも、思考がまわっていく、そういうじょうぶさを、身につけないと、とてもやっていけません。

4月のある夜、靈丘県のホテルで一泊すると、その日の夜と翌朝、劉文光が、私を訪ねてきてくれました。もと靈丘県の青年団の副書記で、何年か、いっしょにしごとをしたことがあります。その後、彼は、平型関中国青年旅行社を立ち上げ、社員6人の小さな会社ながら、その総経理です。しごとと関係なくなっても、あちこちの県で、こうやって、なつかしんでくれる人がいるのは、うれしいことです。

彼の旅行社が、受け入れる靈丘への旅行者は、年間に3,200人。県内の観光地としては、平型関、覺山寺、空中草原の3つが中心で、そのほかに、趙武靈王の墓、桃花鍾乳洞などがあります。前の3つは、中国人にとっては、魅力的だろうと思います。でも、いかんせん、靈丘までの、交通の便はよくありません。

県内の旅行者を、外へ送り出す、手配もします。こちらは、年間600人ほど。大部分は国内で、昆明、成都など、南方の都市と、大連など、東北の都市が多い。北京は近いので、旅行社のしごとには、ならないでしょう。国外は、シンガポール、マレーシア、タイが多く、去年は、日本にも、5人を送り出したそう。

旅行者を靈丘に受け入れるのは、数は多いけど、単価は安い。送り出す方は、数は少ないけど、利幅は大きいとのこと。お客1人あたりでいえば、利益の比較は1対8だといいます。だとすると、利益の6割は、600人の送り出しで、生まれていることになります。

ほんの数年前まで、靈丘県は、国家級の貧困県でした。靈丘県は太行山脈のなかにあり、山地が多く、耕地は少ないのです。農業以外の産業は、ありませんでした。しかし、太行山脈のなかに、鉄鉱石をはじめ、地下資源は、豊富だったのです。近年の、中国経済の急膨張で、その開発が、いっせいに始まりました。

靈丘県は、貧困県から、いっきょに抜け出し、GDPは、大同市のなかで、3位。1位は南郊区、2位は左雲県で、どちらも石炭産地です。成長率は、だんぜん、他を抜いて、靈丘県がトップです。そのために、外に旅行にでる人も、急に増えているんでしょうね。小劉に私が、「うちはいま、経済的に苦しいから寄付をたのみたいよ」というと、「たくさんは無理だけど、ちょっとなら」と答えました。

靈丘で、新しく、注目されている、旅游地として、花塔村がある、といいます。私たちの植物園から、大同に帰るさい、別ルートをとれば、すぐ近くです。距離も、時間も、いつものルートと、さして差がないはず。しかも、石仏で有名な、曲回寺が、途中にあり、それも、みられる。そう考えたんですけど、曲回寺は、去年、再建されたばかりの、小さな寺で、管理人がいなくて、石仏も、みることができなかつた。

途中の村々は、貧しいんですね。霊丘は豊かになった、というんですけど、どこの話かと思いましたよ。そのわりには、あちこちが乱開発で、山は傷だらけです。同行しているスタッフたちは、「市の幹部も、県の幹部も、こんなところにはきてないだろう」といいます。たしかに、道がよくない。国道 108 号線なんですけどね。えらいさんがきていれば、道はちょっとはましなはずですよ。

やがて、目前に、万里の長城がみえてきました。山西省の北部で、長城は、地図のうえでも、二重になっています。実際は、二重どころではなく、何重にもなっているんですけど、これは、内城です。とりでが、りっぱなんですよ。目にみえる範囲に 3 つあり、1 つは道のそばで、なかに、はいることもできます。土台のところは、きちんと四角に成型された石材が積んであります。そのうえは、大きな、上質のレンガです。運転手の小郭は、「いまこれをつくれば、1 つ 5 万円はかかる」といいました。いえいえ、そんなものでは、絶対に無理でしょう。

この長城が、花塔村の入り口の、目印でした。ここから、村まで、5km です。せまい道ですが、コンクリートで、舗装してあります。やがて、トンネルがでてきました。くるま 1 台がやっとの、ほそい素掘りのものですが、長さは、800m もありました。とおくのほうにみえる、出口の明かりをみていると、この先に、なにがでてくるか、ワクワクしてきます。

そこに、花塔村がありました。四方八方すべて、山がそこまで迫っています。ぽっかりと、そこにあいた小さなお皿が、この村で、海拔は、600m を切っています。大同市の最南端に位置し、ひと山越せば、そこは河北省です。村のはずれに、きれいな小川が流れています。山で囲まれていますから、風もない。家々に植えられた、アンズやモモが、ちょうど花盛りでした。まるで、桃源郷です。小郭は、「帰りたくない」といいました。

それにしても、どういう経緯で、こんなところに、村ができたのでしょうか。いまみるかぎり、あのトンネル以外に、外への出入り口は、ないようです。トンネルは、1981 年 7 月に、完成しました。それまでは、どのようにして、外の世界とつながっていたのでしょうか？川があるのですから、流れにそって、せまい道があるのかもしれませんが。

外来の人が、その光景に、感動するようなところは、そこに住む人にとっては、過酷な環境です。この村も、例外ではないようです。川のすぐそばに、石を積んで、水から守って、せまい畑がつくられています。これで、どれほどの作物を、収穫できることでしょうか。春耕の時期ですが、そこに牛馬はみられません。小さなスキを、1 人が引き、1 人が押していました。500 人もの人が、ここで暮らしているそうです。

私たちのくるまをみて、村人が数人、近寄ってきました。袋をかついでいます。おばあちゃんが、花椒（サンショウの実）と、クルミをすすめました。小郭が、「タマゴがあれば、それを買う」といいました。地飼いのトリの、タマゴはおいしい、というのです。けっきょく、16 斤

(1斤は500g)も買いましたよ。1斤が6元。それから、クルミも。こちらは1斤が8元。殻が、ほんとに薄くて、おいしいクルミです。

観光客の受け入れは、この村の特色をいかして、最近、はじめたのだそうです。農家で、食事をだして、農村生活を味わってもらおう。そういうことを好む階層が、でてきているんですね。それは、大同に帰ってから、きいた話で、私たちには、だれも食事をすすめてくれなかった。この日の昼食は、4時になってからでした。

## NO. 366 涸れたダム 2006. 06. 21

大同の、市街地から、東へ6kmほどのところに、石家寨水庫(ダム)があります。別名の、文瀾湖(ぶんえいこ)のほうが、地元では、親しまれているよう。周囲が、遊歩道のようになっていて、夕涼みの場にも、なっていました。

以前、立花代表といっしょに、ここにきました。立花先生は、水草に関心があるので、おもしろいものが、なにか、あるかもしれないと思ったのです。

前にも、書いたことがあります。立花先生は、有名な雨男です。日本国内で開催する、自然と親しむ会で、立花先生に、案内をたのんだときは、ほぼ、例外なしに、雨です。湖西の、比良山に登ったときは、モーレツな嵐になって、参加者全員が、上も、下も、ずぶぬれになりました。帰りに、リフトの駅で、ストーブにあたって、服を乾かしました。高槻で、里歩きをしたときは、朝から、快晴だったのです。珍しいことがあるものだ、とよろこんでいたら、3時ごろになって、急に、まっ暗になり、激しいカミナリとともに、土砂降りになってしまいました。寒天小屋に逃げ込んで、雨宿りしました。

立花先生は、「自分のせいじゃない」といわれます。ほかの催しでは、そういうことがないのだそう。「高見さんといっしょになると、雨になる」と。最近では、そういう催しの参加者たちが、「ああ、2人の距離が近づくと、雨がひどくなる」といいます。

そのジンクスは、大同でも生きていて、立花先生がいるときは、雨が多いのです。文瀾湖にいったときは、その前日が、雨でした。そのために、増水し、水が濁っていて、水草を、つぶさに観察することは、できませんでした。でも、そのなかの、数種類について、名前と、その性質を、教えてもらったことを、覚えています。

この4月28日のこと。大同県にいった帰りの、車のなかで、大同事務所の、魏生学副所長が、「文瀾湖に、水がない」といいました。「没水(水がない)」という口調が、軽かったんですね。貯水量が、半分にでも、落ち込んだらと、思いました。文瀾湖は、道のそばですか

ら、立ち寄ることにしました。

そしたら、なんと、1滴も、水がないんですよ。カラカラに、乾いています。イヌが1匹、湖底を、走り回っていました。

このダムに流れ込むのは、御河です。大同市街地の、すぐ東にある河。あの河も、水がありません。市街地と、御河とのあいだに、御河生態公園を、建設中です。公園ですから、水がほしいのですが、御河は、「断流」してしまって、水がありません。そこで、ビニールの堰で、河をせき止め、プールのように、水を貯めていました。ところが、ことしは、そのプールにも、ほとんど、水がありません。文瀾湖には、水を、回せなくなったのでしょうか。

帰国してから、Google Earthで、そのダム湖を、さがしてみました。人工衛星の、画像です。何年かまえの、画像なんでしょうね。ちゃんと、水があるんですよ。このソフトには、メジャーもついてますから、長さを、測ってみました。すると、長い方は、南北方向に、3.4kmほど、短い方は、東西方向に、1.8kmほどあります。以前の地図をみても、それくらいの大きさです。これまでの、私の文章を読んで、どの程度の大きさを、想像されたか、わかりませんが、かなりの大きさであるのは、たしかでしょう。

でも、中国の、この地方では、ダムは、一見して、大きいようにみえても、深さは、浅いのがふつうです。もとは、それなりの深さがあっても、流れ込む土によって、すぐに埋まってしまいます。この文瀾湖も、貯水量は、そう多くはなかったでしょう。

それにしても、そこらのため池じゃないですよ。それがいつのまにか、干上がってしまっていた。これはショックですね。水のない河は、この地方ではあたりまえです。干上がったダムをみるのも、もちろん今回が、はじめてではありません。なんども、みています。でも、その多くについて、生前を知りませんでした。つまり、水を蓄えている姿を、みたことはありません。今回は、知り合いが亡くなったような思いです。

## NO. 367 豊富になった野菜 2006. 06. 2

大同に通いはじめて、15年になりますが、大きく変わったこと、変わらないこと、さまざまです。変わったことの1つに、食事があります。とくに野菜類が、ずいぶん豊富になりました。といっても、街と農村とでは、事情がちがいますので、今回は、とりあえず、街でのことを、書きます。

15年前は、野菜が欠乏しました。とくに、4~5月が、谷間です。秋に収穫した、ハクサイを、古新聞でくるんで、部屋の片隅にでも、貯蔵しておきます。かなり長期間、保存がききます。

あ、そうそう。ハクサイや、キャベツは、新鮮なものがとれる時期でも、畑でとった、そのままを食べるより、数日間、天日にさらし、シナーツとなったものを、食べることのほうが、多いようです。甘くなって、おいしい、といます。ためしてみてください。栄養価は、どうなるか、わかりませんが。

貯蔵してあったハクサイも、3月ごろには、底を突きます。大同の冬は寒く、長いのです。樹木も、常緑のものは、マツなどの針葉樹だけです。広葉樹は、すべて落葉。屋外で、冬でも育つ、野菜は、ありません。ハウレンソウに、宿根性の品種がありますが、冬は、地上部がありません。春作の野菜が、収穫できるまでには、まだ時間がかかります。

野菜といったら、マメのモヤシと、ニンニクの芽くらい。あと、ジャガイモを千切りにしたものが、なんとなく野菜っぽいですけど、野菜とはいえないでしょうね。よけいなことですが、中国では、統計上は、ジャガイモは、5キロを、穀物1キロに換算して、糧食として、扱います。農家では、洗面器などの容器に、土をいれて、タマネギを植え、でてくる葉を、野菜として食べる、ということもしていました。もちろん、室内におきます。

こうしたことは、いまはむかし。四季をつうじて、新鮮な野菜を、入手できるようになりました。お金さえだせば、のことですけど。大同の街はもちろん、各県の、県城付近の農村に、たくさんの、ビニール温室ができました。日本では、ビニールハウスですが、冬の寒い、ここでは、ビニール温室です。

寒風の吹きつける北側に、レンガの壁をつくります。それは上等で、多くのばあいは、版築による、黄土の壁です。壁の厚みの間隔をあけ、両側に、木の板をたてます。そのあいだに、黄土をいれ、少しだけ、水をかけて、上から、木の棒で、突き固めます。土のなかの、空気を、追い出すわけです。そのようにしてから、乾燥させると、黄土は、岩のように、固くなって、ちょっとくらい雨が降っても、崩れることは、ありません。万里の長城や、城壁、堡塁も、そのようにして建造されました。その小型版です。

南がわには、鉄筋、その他の材料で、ゆるいカーブの、骨組みをつくり、そのうえに、ビニールを張ります。安上がりにつくるには、骨に、割り竹をつかう。東西に長い、ビニールハウスの、北側が、レンガや、土の、壁になったものを、想像してください。それだけのちがいで、このビニール温室は、ビニールハウスとは、まったく、ちがうものになります。北からの冷気は、レンガや土の、厚い壁でさえぎり、南からの、太陽熱を、効率的に、とりいれます。そして、夕方から、朝までは、ビニールのうえに、むしろをかけ、日中に取り込んだ熱が、失われるのを防ぎます。

冬の、いちばん寒い時期には、石炭による、加熱をおこないます。農村の温室では、たいて

いは、ほぼ水平に延ばした、土管のなかに、石炭を燃やした煙を通し、その熱で、温めます。このような温室のなかで、たくさんの種類の、野菜を、育てるわけですね。

何年かまえ、南郊区で、温室を、見学したことがあります。温室の入り口が、小さな土間の、部屋になっています。そこに、レンガを何段か、積み重ね、格子状に、モウソウ竹を編んだものをわたして、ベッドにして、せんべいフトンが、敷いてありました。土間のすみに、かんたんなカマドをつくり、鍋がかけてあります。その土間で、夫婦2人が、1年中、暮らしていました。朝、明るくなるのと同時に、温室内で作業をし、夜、暗くなるまで、それをつづけます。多少でも、お金が残ると、それを実家に送る。

その温室村は、広霊県の人が、多かったのです。南郊区は、都市近郊ですので、地元の方は、農業以外のしごとで就く。畑に、温室を建て、ほかの農民に、貸すわけですね。最初に、広霊の農民が、そこに住み着くと、同じ村の人を、つぎつぎに、呼び込みます。私には、しんぼうできそうにない、生活ですが、それでも、広霊の農村よりはましで、稼ぎにもなるのでしよう。だから、やってくる。

この春、市場に行ってみました。道ばたの、自由市場もおもしろそうですが、それは、つぎの機会にまわして、屋根のついた、公設市場にいきました。王萍の、職場の近くで、彼女がいつも、買い物しているところ。夕方にいってみると、にぎやかなんですね。まずは、ものすごい数の客。まあ、街中、どこも人が多いんですけど、それがギュッと、凝縮された感じ。そして、よくしゃべるんですよ。ときには、値段についての「真剣勝負」もあります。ブーン、ブーン……、私の耳には、ミツバチの巣にでも、飛び込んだ感じですよ。

肉、魚、酒、その他の食品から、日用品まで、売ってますけど、おもしろいのは、やはり野菜で、品数が多い。以前だったら、いちばんの谷間の、4月下旬に、こんなにも、野菜が多いのです。地元の、温室でつくったもののほかに、他地方から、運ばれてきたものも、あります。それも、交通網が整備されて、可能になったこと。

主婦たちの悩みは、野菜の値上がりが、激しいことです。石炭の街、大同は、いま好景気に、わいています。賃金相場もあがっていますが、物価も急騰中。なかでも、野菜が、すごかった。それにくらべると、肉や卵、果物は、変化が少ない。石炭価格の高騰が、温室栽培の野菜に、直接、影響しているのかもしれない。

## NO. 368 農村の野菜事情 2006. 07. 03

前号で、季節を問わずに、野菜を食べられるようになった、と書きました。しかし、それはあくまで、大同市内や、県城（県政府所在地）で、お金をだせば、のこと。農村の事情は、

まるでちがいます。

農村といっても、私たちが知っているのは、大同の農村のなかでも、条件が悪く、貧しい村です。私たちの協力は、緑化とあわせて、貧困な農村への支援を、目標の1つにかかげましたので、どうしても、そのような農村が中心になります。

山地や、黄土丘陵では、農家も、野菜は、ほとんどつくりません。つくれないのです。栽培するのは、おもに穀物です。水と土の条件のいい畑では、トウモロコシ。といっても、山地や丘陵の村では、そのような畑は、多くはありません。一般的なのは、アワ、キビ、ジャガイモ、といったところ。ジャガイモは、穀物ではありませんが、前号で触れたように、ジャガイモ5kgを、穀物1kgに換算して、糧食に含めます。そのほかに、マメ、ソバ、エンバクなどをつくります。

大同は、冬の気温は、低いのですが、夏の気温は、けっこう上がります。気温の面からいうと、野菜づくりに、問題はありません。緯度が高く（北緯40度前後）、夏の日照時間が長くて、日中の温度は上がっても、夜間はグッと冷えるので、野菜は、たいへん、おいしいのです。日中に、しっかり光合成し、夜間は、低温のおかげで、呼吸による、消耗が少ないからです。

野菜がつくれないのは、もっぱら、水不足のためです。雨は、少ないうえに、まったく気ままです。ときには、40日も降らない、といったことがあります。先にあげたような、旱魃に強い穀物でも、いまにも、枯れそうになるくらい。いえ、枯れることも、少なくありません。そういうわけで、灌漑が可能な、低いところの、農村でしか、野菜をつくることは、できません。

いつか、大同県倍加造鎮の農村で、悲しい光景に、であったことがあります。ここは、比較的低いところにある村で、畑に、スイカが、植えられていました。ひでりがつづいて、枯れそうになったんです。農家の親父さんが、天秤棒で、水を運んできて、わずかな水を、ひしゃくで、かけていました。まさに、焼け石に水、ですね。それで、どうなるわけでも、ないでしょうけど、運んでいける水があれば、そうしないわけにはいかない。

丘陵や、山の上の多くの村は、飲む水に困るくらいです。そういう村では、葉物も、果菜も、最初から、つくりません。ほかの村から、野菜を、売りにくるんですね。バタバタの三輪農用車や、トラックに積んで。ハクサイ、キャベツ、トマト、ナス、スイカ、といったところが、定番です。河北省から、自転車で、ニンニクを売りにきているのに、であったこともあります。農家には、現金がないことが、多かったので、以前は、物々交換もやっていました。一定の交換比率によって、アワ、キビなどの穀物が、お金のかわりをします。

多少でも、水に余裕があれば、土堀で囲まれた、家の前庭で、野菜を、栽培します。広霊県苑西庄村では、私たちが、井戸掘りに協力したあと、そのような、野菜づくりをはじめました。

1軒1軒で、それぞれが好きな野菜を、つくるわけです。ほんの数坪で、わが家の家庭菜園と、同じくらいの面積です。自家消費と、せいぜい近所と交換するくらいのもので、販売するだけの量は、望めません。土地よりも、水の量の、制約によるものです。

夏に、自分の家でとれるものは、それなりに食べるでしょうけど、買って食べる、野菜の量は、わずかなものです。村に売りにくる、野菜の種類も、かぎられています。とくに、冬は、値段もあがりますし、売りにもきませんから、食べる量は、ずっと少なくなるでしょう。そのような農村にいけば、いまでも、洗面器に植えている、タマネギをみることもあります。もちろん、家のなかです。葉を伸ばさせて、それを食べます。

天鎮県は、大同の農村県のなかでも、もっとも貧しい県です。私たちは、以前、県の南部の、賈家屯郷李二烟村、谷大屯郷韓小屯村といったところで、協力事業を、実施しました。しかし、ここの地域は、土壌浸食が激しく、自然の条件が、たいへん厳しいうえに、むずかしい問題が、たくさんあって、失敗が多く、成果は乏しかったのです。

ところが数年前、北京の友人から、「家の近くで、“天鎮の野菜”を売っています。绿色食品を、売り物にして、ほかのものより、ずっと高いのですが、それでも、よく売れます」と、聞かされました。大同できくと、天鎮県の中央部が、産地ようです。ここは盆地で、土壌の条件がいいのです。しかも、南洋河と、その支流があって、水にも、比較的、恵まれています。海拔は、1,000m以上あり、冬が寒いかわりに、夏は涼しいのです。そして、大同市のもっとも東にあり、北京へ、近いのです。そのような条件を生かし、いわば、高原野菜として、産地形成したんでしょうね。この夏にでも、見学してきたいと、思っています。

## NO. 369 黄砂は悪者か？ 2006. 07. 18

大阪のさる団体の機関誌に寄せた原稿です。以前にも、この表題で、書いたことがあります。

### 【数年ぶりの激しい風砂】

この春、日本でも黄砂がひどかったようですね。私が滞在していた山西省大同市は黄土高原の東北端ですが、ここでも風砂が激しかったのです。ブワーツと土煙が迫ってくると、あわてて背をむけ、しゃがみこんで目をつぶります。それでも口のなかはジャリジャリ。野外活動を控えるように、という黄砂警報もでました。でも、この地元タイプは見た目には強烈でも、実際はかわいいものです。

本格派の故郷はもっと西です。数人の死者が出たとか、列車の片側の二重強化ガラスがほとんど割れたというニュースがありました。中国では沙塵暴といいます。日本語に訳すと砂嵐といったところでしょうか。

大同はこの本格派の通過点でもあります。タクラマカン、ゴビなどの沙漠で巻き上げられた土が偏西風に乗って東へ東へと運ばれていきます。昼間でも夕暮れのように暗く、ときおり白っぽい太陽が顔をみせては消えていきます。空気も黄色く濁ったようで、視界は1kmもききません。その翌日に北京で風砂が騒がれ、さらに2日後に日本で黄砂がニュースになります。

黄砂と中国の沙漠化を結びつけて、センセーショナルな報道があったようです。私もさるテレビ局の取材に大同で応じ、それが放映されましたが、中国の沙漠化が深刻化し、悪いものが日本に飛んでくる、といった内容でした。それには違和感があります。

### 【風砂・黄砂は地球の歴史】

砂嵐も黄砂もいまにはじまったことではありません。タクラマカンやゴビが土を飛ばす現象は、いまから170万年前から現代までつづいています。黄土高原の面積は52万km<sup>2</sup>で日本の国土の1.4倍ですが、その土はそれが積もったものです。黄土地帯となるとさらに広く、華北平原の大部分、東北地方の一部が含まれます。中国の国土の相当部分を黄土が覆い、中国文明はそこに成立しました。

黄土高原の黄土層は数メートルから厚いところで200mだそうです。仮に85mとしましょうか。170万年で85mだと1万年で50cm、100年で5mm、1年で0.05mmです。時間の長さでいっても、広大さでいっても、地球規模の歴史です。

4月17日は北京で1日に30万tの土が降ったとあって大騒ぎでした。1平方mあたり20gだそう。それを厚みにすると0.014mmほどです。あれくらいの土が毎年平均4回、170万年降りつづくと85mになる計算です。北京としては多いでしょうが、異変、異常というほどではありません。

そんなに長い話でなくても、風砂には多い年、少ない年があります。北京で緑化協力の予備調査をした1990年ごろ、こんな話がありました。「1950～60年代は砂嵐が多く、外出に苦労したし、洗濯物を外に干せなかった、緑化がすすんだ結果、風砂がおさまってきた」と。そのとき私は「そんなに急に改善されるわけがないでしょう」と答えました。

### 【黄砂が増えた、ほんとうか？】

その後、2000年前後の数年間、風砂が激しく、北京空港が閉鎖されたこともあります。日中韓の環境大臣会合で黄砂対策に共同で取り組むことが決まり、日本でも研究者が急増しました。皮肉なことにそのあと黄砂はおさまって、静かな年が何年かつづいたのです。去年は中国でも「緑化の成果で風砂がおさまった」という報道が多かったのです。ところが今年はまた多い。

中国の国家林業局の発表によると、「発生源において雨が降らなかったため、乾燥がひどく風も強い」のが原因だそうです。そのとおりでしょう。沙塵暴や風砂の発生には乾燥と風が最大

の要件であり、関係するのは地球規模の気象です。もう1つの要素が草木のない荒地や畑が広がり、風で土が舞い上がることです。沙漠化の進行で沙塵暴が増える可能性はありますが、従属的な要素でしょう。その点からすると、発言すべきは気象部門だと思うのですが、なぜか林業局がでてきます。沙塵暴の対策としての植樹ということで、予算がからむためでしょう。

では、日本の黄砂は増えているのでしょうか。気象庁が設置する103か所のポイントで、目視による観測が継続されており、前世紀までは観測のべ日数（同じ日にnポイントで観察されればn日として計算）が年間300日を超える年はまれだったのに、2000年以降は毎年になり、2002年は1,200日近いのです。この数字をみると驚異的ですが、観測日数（同じ日に複数ポイントで観察されても1日と計算）では、増加傾向にはあっても「のべ日数」ほど顕著ではありません。

人びとの実感では増えているようです。以前はなかったのに最近でてきた、と思っている人が私の周辺にもいます。事実としては昔からあったのです。「春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも」（大友家持）をはじめ、万葉集には霞を詠んだ歌がたくさんありますが、この霞は黄砂のことです。万葉の昔から黄砂は春の風物詩でした。

現代人が黄砂をいちばん意識するのは車の屋根の汚れでしょう。車をもつようになったからです。そして以前は身近だった土ぼこりも、道路の舗装で遠のいた。「汚れ」という実体があるわけではなく、それは社会関係がつくりだすもので、畑にある土は汚れではありませんが、車の屋根の土は汚れになります。生活が土から離れることで、土が汚れとして意識されます。世間の関心が集まると観測者も注意深くなり、観測される回数が増える。ありうる話です。

#### 【黄砂は悪者か？】

黄砂は悪者なのでしょうか。犠牲者がでたり、物的な損害が深刻な発生源ではたしかに問題でしょう。それは自然災害であって、台風やハリケーンの被害と同じ性質のもので、台風やハリケーンも地球温暖化によって被害が拡大しているとすれば、そこまで含めて同質です。

黄土高原で黄土は強いアルカリ性を示します。主成分はカルシウム、カリウム、マグネシウム、ナトリウムなどの炭酸塩です。ところが日本に飛来する黄砂はpHがかなり下がっているよう。飛んでくる途中で排ガスに由来するイオウ酸化物、チッソ酸化物などを中和したと思われる。これらは酸性雨の原因物質であり、もともと雨が多く土が酸性の日本にとって、黄砂はありがたい存在ともいえます。

アメリカなどの研究によると、太平洋など海上に降った黄砂は栄養物質として、プランクトンの生育を助けるそうです。陸地から遠く離れ、無機塩の補給がないはずの大洋のまん中に魚がいるのはそのおかげです。黄砂騒ぎのおかげで多方面から研究がすすみ、黄土や黄砂のさまざまな性質が解き明かされつつあります。総合的な評価はその結果を待つべきでしょう。

なかには黄砂は健康によくない、有害だという説もあります。もともとの黄土は自然のもので問題はないけど、工業地帯や都市の上空を移動中に有害物質を吸着するというわけです。今春はこのような説が力をえたようで、先ほどのテレビ番組の基調もそうでした。黄砂のせいで喉がおかしい、胃や肝臓まで変調したという人もいるようで、そのように医者に診断されたという話まであります。

酸性雨の原因物質を中和しているといえ、それはプラスの評価です。有害物質を吸着して運んでくるといえばマイナス評価です。しかし指している現象はまったく同一です。後者のように考えると、黄砂は有害物質を運んでくるからよくない、黄砂を止めなければならない、ということになります。本末転倒だと私は思います。問題は人が有害物質を排出することではないでしょうか。黄砂がなければ、それらは問題にならないのでしょうか。

私は最近、「環境問題というのは省略した言い方で、正しくは環境にとっての人間問題です」といいます。その枠組みで考えると、黄砂の問題でも解決すべきはなにかがはっきりすると思うのです。

#### NO. 370 苑西庄村の舗装道路 2006. 07. 24

7月13日に、北京から、大同市広霊県にはいりました。自治労大阪府本部の、ツアーといっしょです。北京空港から、バスで、高速道路を乗り継ぎ、大同への途中の、河北省の化稍営で、地道におり、蔚県をへて、広霊に着きました。ツアーの乗ってきた、JAL 便の関空出発が、2時間遅れだったため、県の招待所に着いたときは、暗くなっていました。

途中の蔚県では、道路の両側の畑で、トウモロコシが、なぎ倒されていました。局地的に、大雨が降ったようです。注意してみると、その葉が、バラバラに砕かれ、乱れ髪とでも、表現すべき状態。ヒョウ（雹）によるものです。日本人には、なじみがないでしょうが、まあ、アラレを大きくしたものを、想像してもらいましょう。これだけの被害となると、ひょっとすると鶏卵大でしょう。私は、この地方で、春にも体験しましたが、夏が多いようです。早魃の地方が多く、作物の生育も思わしくないのに、降るとなったら、このような降り方をするのです。

14日午前から、15日朝まで、苑西庄村で、すごしました。私にとっては、特別に、印象深い村です。1994年3月に、はじめて、この村にきて、それから、毎年、数回ずつ、訪れています。つぎつぎに井戸が涸れ、飲む水にも、困っていました。1997年夏に、テレビ朝日の「素敵な宇宙船・地球号」の番組が、この村を、主要な舞台にして、制作され、それが縁になって、各方面の協力で、この村にも、井戸を掘りました。

通水式の場면을、私は、いまでも、覚えています。村のお年寄りが、私の手を握って、離しません。「この村の、もらい水の歴史に、終止符が打たれた」といって、大泣きしました。私も、もらい泣きして、しまったのです。中国では、生水は、絶対に飲まないことに、決めているのに、「飲んでみてください。こんな甘い水は、どこにもありません」といって、つぎつぎに、コップをさしだされ、このときだけは、飲まないわけには、いかなかったのです。

村の人たちは、そのときの気持ちを、もちつづけています。日本人がくるとなると、よその村に嫁いだ女性も、村に帰ってきます。今回、私が、泊めてもらった家でも、主の姉が、息子をつれて、帰ってきて、私たちの、食事、その他のめんどろを、みてくれました。出稼ぎにでている人も、この機会に、帰ってきます。まるで、村祭りのようなものです。ツアーの人たちも、その心のこもった接待に、感動していました。

私が泊まったのは、私の義理の娘の家です。家庭の貧困が原因で、中学校にいけなくなるのを、私が、寄宿費を含めた、学費を支援することにしました。年に2千元(3万円弱)。何回か、これまでも、家を訪ねていましたが、泊まるのは、はじめてです。村のなかでも、おそらく、いちばん貧乏でしょう。私たちのために、まあたらしいフトンが、準備してありました。買ったものか、借りたものか？

小学校の小さな庭で、私の娘が、あらかじめ書いていた、あいさつの原稿を、読もうとしました。涙で、声をつまらせて、自分では、読めません。「勉強したくて、たまらなかったのに、そのときは、貧乏のために、中学校への進学を、あきらめていました。私は、家庭の貧乏を、呪いましたし、そのような両親を、恨んだこともあります」。通訳の崔文さんが、原稿をみて、訳してくれました。

彼女の父親も、このたびは、出稼ぎから、帰っていました。娘の、そのような思いを、知っていたでしょうか。善良そのもの、といていい人です。気の、弱い人でしょう。どんなしごとも、てきぱきとは、できそうにない。私としては、しごとのパートナーとしては、選びたくない。でも、いっしょにいたら、善良な人であることが、すぐにわかります。

程度のちがいはあっても、この村の人、すべてが、彼と、相似形の存在かも、しれません。農村にホームステイするとき、ほかの村であれば、私は、「暗くなってからは、家の外に出ないでください」と、要求します。夜ですし、酒もはいつていますから、なにかあったら、困ります。宿泊した家でも、家族の人が、十分に注意して、玄関(といえるかどうかは別として)のカンヌキをかけ、門にも、内からカギをかけます。ところが、この村では、それがいい！かけようにも、カンヌキも、カギもない家が多い。私が泊まった家は、家を取り囲む、土塀すらありません。

夕涼みかたがた、外にでると、そこはもう、道路です。ちょっと歩いたら、道にちゃぶ台を

おいて、何人かが、それを囲んでいます。県からきた、公安です。捕まるかわりに、私は、何杯も、何杯も、白酒で、乾杯させられました。翌朝、運転手の小郭が、「だいじょうぶですか？」と、私にききました。「たった1人で、あれだけを相手にして？」と。

総勢 200 人あまりの、小さな村ですけど、井戸ができたために、村の人口が、戻ってきています。以前は、嫁さんなんて、ゼツタイとっていいほど、こなかったけど、最近、それがあって、小さな、赤ん坊がいます。赤ん坊や、こどもの声がすると、自分の孫でなくても、年寄りたちも、しあわせなんですよ。

大同市では、200 人未満の、小さな、貧困な村は、原則として、移転させることを、決めました。近くの、比較的大きな村に、吸収させるわけです。苑西庄村も、その対象でした。引き受けるほうの村は、楊窩村で、この村とも、私たちは協力関係を、継続しており、私も、なんだか、泊まったことがあります。人口は、800 人ほど。

苑西庄村は、それに抵抗していました。井戸があり、2000 年から植えているアンズも、まもなく、収穫できるからです。条件はよくなくても、新しいところに移って、ひょっとして、肩身のせまい思いをすることになるより、ここにとどまりたいと、思ったのでしょう。

恐ろしいことに、楊窩村の井戸が、最近、涸れてしまったのです。いまは、谷底の、わずかな水に、頼っているそうです。800 人の、比較的大きな村ですから、なにをするにしろ、簡単ではありません。私も、怖くて、みにいけません。苑西庄村で、井戸を掘ったことを、彼らはもちろん知っていますから、そのように期待されても、困るからです。苑西庄村が移転する話は、立ち消えでしょう。

これまでは、苑西庄村まで、バスをすすめるのに、苦勞しました。数年前の、サントリー労働組合のツアーは、雨のために、村に近づけず、予定を変更して、帰らざるをえませんでした。村にはいったら、はいったで、いつも天候が気がかりでした。雨になったら、道がぬかるんで、帰れなくなります。

今回は、途中の、レンガ工場のところで、ちょっと、もたつきましたが、あとは順調でした。なんと、あそこの道が、コンクリートで、舗装されたのです。村のなかの、「大通り」も、舗装されました。県が、出資したそうです。移転の話は、これで最終的になくなったと、みていいでしょう。この村も、だんだんと、ふつうの村になります。

## NO. 371 やっかいごとが多すぎる！ 2006. 07. 27

日本の、本格的な暑さは、これからですね。緯度も、標高も高い、大同は、暑さの

ピークを過ぎました。日中は暑い日で25度前後ですが、朝夕はめっきり涼しくなりませす。ホテルの部屋では、クーラーを停め、フトンをきて、寝ています。8月8日の立秋からは、暦どおりに、秋になります。それでも、日差しは、強烈。私はもう、まっ黒！ ことしは酒は控えめで、酒焼けはないはずですけど……。

緑色地球ネットワーク大同事務所の、魏生学副所長が、私の部屋に、はいつてくるなり、いきました。「麻煩的事太多！」 やっかいごとが、多すぎる、というのです。

彼は、私の希望をきいてくれ、7月19日から21日まで、3日間、呼和浩特（フホト）→包頭（パオトウ）→鄂爾多斯（オールドス）と内蒙古の旅に、つきあってくれました。21日は、夜おそくに、帰ってきました。22日は土曜日なのに、朝早くから、彼は、環境林センターにでかけました。

環境林センターの門前で、いま、大工事がはじまっています。大同の市街地を、大きく周回する、環状高速道路のインターチェンジが、ここにできます。私たちの、もう1つの新しい拠点、白登育苗センターのすぐ近くにも、この環状高速のインターチェンジがあります。そのあたりは、昨年末に、開通しました。環状高速が開通すれば、2つの拠点は、高速道路で結ばれ、たいへん便利になります。およそ、計画というものは、このように、先を見通して、立てられるべきです。えへん！

なんてことが、私にできるはずがありません。結果として、そうなった、というだけ。ついていたとは、いえるでしょう。でも、それは、開通後の話。開通するまでの、工事期間は、困ったことばかりです。工事現場を、くるまで抜けるのは、たいへんですよ。そのうえ、工事現場の連中が、あやまって、電線を、切ってしまいました。当然、停電になる。停電になれば、ポンプも動かせませんから、水もなくなります。

その事故が起きたのは、内蒙古に出発する前でしたから、当然、解決しているものと、思っていました。ところが、そうになっていなかった。道路工事の関係者は、徹底して、責任を避けようとします。電力会社は、無料で、修理したくないだけでなく、いくらか、おまけも、とりたいなのでしょう。そのはざま、もう6日間も、停電がつづいていたのです。

職員の、生活用水は、トラックにタンクを積んで、平旺村から、もらい水です。問題は、苗畑の灌漑用水。17日夜に、かなりの雨が降ったのですが、それから、雨はありません。水をやらないと、弱ってしまうものが、でてきます。とくに、野菜畑。しかたがないので、炭鉱職員住宅からの生活汚水を、未処理のまま、畑に入れることにしました。

ところが、それすら、問題なんですね。私たちは、この汚水を、土壌浄化法で処理し、きれいになった水を、灌漑に使うようにしました。2003年、2004年と、とてもうまくいったのです。ところが昨年、2005年は、旱魃がひどくて、この汚水すら、周辺の農家で、奪い合いになりました。ケンカが、しょっちゅうだったのです。

ことしも、緊迫した状態が、つづいています。汚水の、下流に畑をもつ農民は、私たちがつかうために、その汚水がなくなるのではないかと、見回りにきます。そんなところで、ケンカをしたくない。外務省の草の根無償資金協力によって、掘ってもらった井戸の水を使うしか、ないわけです。停電になると、それも使えません。

このたびは、緊急避難で、汚水をつかうしかありません。昼間だと、問題になる恐れがありますから、夜と、朝方だけ、引き込むそうです。その手配を、してきたのだと、小魏はいいます。それから、電気復旧の交渉をしたので、25日の火曜日には、この問題が解決するそうです。私がでると、すぐケンカになりそうなことを、小魏は、気弱すぎると思えるくらい、ていねいに、おだやかに解決します。私が彼を、内蒙古につれだしたため、解決が数日、遅れてしまいました。

やっかいごとのついでに、小魏がいました。ことしの夏、カササギの森に2回、白登育苗センターに1回、あわせて3回も、雷が落ち、電力関係が破壊されました。カササギの森では、1回は変圧器が壊れました。油が飛び散り、銅線が焼け、すさまじかったようです。新品に交換すれば、1万2千元もかかるそう。そこを、彼の得意とする、人脈をつかって、中古のトランスを、みつけて、交換してしまいました。

カササギの森の、もう1回と、白登育苗センターの1回は、避雷器が壊れただけで、各180円で交換できたそう。カササギの森も、白登育苗センターも、ことしは雨が少なく、生育がもうひとつです。カササギの森なんか、雨の多い年は、高山植物の、お花畑になるのに、ことしはだめです。それなのに、あわせて3回も、落雷があった。

広霊県の苑西庄村に、泊まったときも、前日、落雷があったそうで、停電でした。いつもなら、私たちが協力した井戸から、水を汲み上げるようすを、ツアーの人たちに、みてもらうのに、このときみたのは、黒こげになった、配電盤でした。

中国に「光打雷不下雨」という言葉があります。雷は鳴るけど、雨は降らない。まさにそれです。これを、大阪弁で訳すと、「風呂屋の釜」です。こころは、ゆう（湯）だけ。いろいろとしゃべるけど、自分ではなにもしない人、とくに幹部を、皮肉るわけですね。こういう自然現象も、社会現象も、たいへん多い。

よけいなことですが、大阪には、しゃれた言い方が、たくさんあります。たとえ

ば、「夏の蛤 (はまぐり)」。店などでの、ひやかしをさします。「見くさって、買いくさらん」「身腐って、貝腐らん」というわけです。しかし、そういう言い方は、若い人には、通じないようです。

日本も大雨で、たいへんだそうですね。インターネットで、日本のニュースを、ときおりみますが、もうしわけないことに、あまり実感をもてません。中国も、北部は乾燥していますが、南部は、またまた大雨と、洪水で、テレビは、毎日、その報道です。安徽省では、10 分間で、180mm も降ったそうです。これほどの数字を、信じられますか？しかし、なにがあっても、ふしぎはないのが、中国です。

### 【追伸】

なんてことを書いて、きょう (26 日) 送る予定でした。そしたら、出先の朔州市のホテルで、夜明け前から、ものすごい雷です。真昼のように、明るくなり、つぎにガツン、ガツン、ドーン、ドーンと、音がつづく。これほどの雷は、中国でもはじめてです。写真に撮ろうと考えて、ベランダにでたら、強烈な、雨になりました。雷は3時間もつづき、ついに停電。と同時に、水もストップ。でも、まあ、復旧に、何日もかかることはないでしょう。ここのホテルは、「電力大酒店」といい、電力会社の副業です。なんて気楽なことを書いていたら、魏生学副所長のところに、白登育苗センターから電話がきて、また、変圧器に、落雷があったそうです。被害の程度は、わかりません。

## NO. 372 『楊家将』がおもしろい 2006. 08. 01

7月11日、中国にむかって発つとき、空港の本屋に立ち寄って、文庫本をさがしました。中国にいるあいだに、手持ち無沙汰な時間ができるもの。活字中毒の私ですから、なにかほしい。手にする状況からすると、固いものはしんどい。魅力的なミステリなんかで、本業をおしのけて、読みふけるようなものでも、困る。軽くて、流し読みができ、アツというまに読み終わるのも、コストパフォーマンスが悪い。このばあいのコストは、お金ではなく、数冊しか、携帯できない、という制約です。

平積みの文庫本の『楊家将』(PHP 文庫)に、目がいきました。表題より、やや小さいゴシック活字で、「北方謙三」とあります。けっこう、すきなんです。追っかけて読む、というよりは、文庫になったころに読む、という程度のファン。

学年が同期か、彼が1こ、私より上でしょう。この世代が共有する世界観が、彼の作品には流れています。おそらく、若いころ、同じ場所に、いたことがあるでしょう。共通の友人は、いるにちがいない。いま、私が知らないだけ。でも、彼が描き出す、

人物像は、みな、カッコいいですね。それぞれに個性的で、芯が通っている。

でも、私じしんは、作品の英雄の、対極にあります。中途半端で、意気地がない。そのために、あこがれるのかもしれない。なんてことを、気軽にいってますけど、小説を読んでも、スジも、内容も、すぐに忘れます。どんな本についても、それは、いっしょ。記憶からは消えても、身につくところがほしいので、乱読してしまうのが、私の読書です。

この『楊家将』の表題について、私の印象は、一般の読者より、ずっと深かったはずです。中国の書店で、たびたび、目にしていました。時代小説のコーナーに、かならずある。ビデオや、DVD も。でも、内容は、まったく知らなかった。北方本を、読んでみたら、なんと、舞台が、なじみのところじゃないですか。

時は、10世紀。宋と、遼が、万里の長城をはさんで、激しく、抗争したときの、物語です。主人公の、楊業の一人は、代州（山西省忻州市代県）に本拠をおき、雁門関を、守っています。この地域の長城は、外城と、内城とがあり、雁門関は、内城きつての、関所です。

対する遼は、北方の騎馬民族、契丹（きったん）が、建てた国で、物語の開始以前に、燕雲16州を、宋から奪取しました。燕州の都が、燕京で、現在の北京。雲州の都は、大同。その後、大同は、遼の副都になりました。

大同周辺の農村部は、1993年まで、行政区としても、雁北地区と、呼ばれていました。雁門関の北、の意味です。小説にでてくる地名は、現代のものと、呼び方はちがいますが、（現代の県が、州というように）どこのことか、たいていわかります。たとえば、前々回あたり、この「たより」で書いた蔚県は、物語では蔚州です。易県は、易州。応県は、応州というように。

私たちは、大同を本拠に、活動してますけど、当然、その周囲も、走り回ってきました。物語のころは、走るといえば、両足か、馬によるものですけど、私たちは、車です。そのちがいはあっても、地形は、さして変わっていないはず。ああ、あのあたりのことだな、と見当がつきます。

物語だから当然、といえばそれまでですが、スケールのでかい話です。私たちは、車ですから、高速のばあいは、100kmを1時間ですし、車は疲れるということがないから、連続して、走れますけど、両足と、馬で、これほどの移動をするんですね。日本で、決戦といえば、関が原でしょうけど、あの規模で、この戦いを想像したら、おまちがいです。

大同事務所のメンバーに、文庫本のカバーをみせると、「知ってます、もちろん知ってます！」三国志、水滸伝の、つぎにつける、ポピュラーなものよう。漢の世界を守るために、異民族の侵攻と、英雄的にたたかう！内輪もめの、ベスト2より、親しめるのかもしれない。水滸の英雄、青面獣楊志も、この楊一族の子孫、という設定です。

これはもう、楊家将の本拠、代県に、いかないわけには、いかないでしょう。これまでは、ただ、通過するだけでした。靈丘にいく用事がありますから、帰りを、代県経由にしましょう。そう思って、また、新しい地図を買ったら、代県に、「趙泉観国家森林公園」があります。その考察という、りっぱな名目も立ちます。

靈丘から、代県にかけては、太行山の大山脈です。道路は、国道108号線ですけど、途中からは、さながら、石炭専用道路。走っている車の、99%はトラックとトレーラーで、そのうちの90%以上が、石炭輸送車でしょう。積載能力の2倍、100トン以上を積んでいるのも、珍しくない。上り坂ではエンコしますし、下り坂ではブレーキを焼く。故障車のたびに、渋滞です。

運転手の小郭は、反対車線も、みごとにつかって、どンドン車をすすめます。技術は、もちろん、たしかです。しかし、技術だけで、どうなるものでもありません。度胸がなければ、度胸もまた、判断力と技術に裏打ちされなければ、危なくてしかたがない。小郭の運転に、私は、まったく不安を感じません。

代県で、まずは、楊忠武祠にいきました。楊業とその息子8人、さらにその子孫を、まつっています。彼らの、ほぼ等身大の、塑像がおかれていました。ただみても、なんの変哲もありません。でも、物語を読み、想像をふくらませてからみると、おもしろいんですね。

北方版「楊家将」で、私が、かすかに残念に思ったのは、華北平原と、太行山、黄土高原の、高低差が、あまりでてこないことです。ここには、ほぼ1,000mの、差があります。読み落としたのかも、しれません。とにかく、そんなところを、両足プラス馬で、駆け回っているんですね。

北方『楊家将』は、2004年、第38回吉川英治文学賞を、受賞しています。文庫になった機会に、もっとたくさんの方が読んで、楊家将が日本でもポピュラーになれば、ありがたいことです。楊家将の旅、なんてのはどうですか。ついでに、私たちのプロジェクトにも、立ち寄ってください。

NO. 373 杉本信行さんを悼む 2006. 08. 07

帰国前日の 8 月 4 日、北京の日本大使館で、「昨日、杉本信行さんが亡くなりました」と、告げられました。まさか、という思いと、やはり、という気持ちが、私のなかで、交差しました。

杉本さんには、彼が北京の大使館の公使だったころ、いろいろと、お世話になりました。そのころのことを、毎日新聞（2000 年 11 月 12 日）の、1 面下のコラム「余祿」が、取りあげています。張芸謀（チャンイーモウ）の映画「初恋のきた道」を導入につかったあと、

「▲日本の NGO「緑の地球ネットワーク」が、土壌が流失し、草も木も生えない黄土高原の緑化運動に取り組んでいる。メンバーが、山西省の許堡郷という貧しい山村で 3 年前に地震で倒壊したままの小学校を見つけ、日本大使館に支援を要請した。▲北京から片道 7 時間の夜汽車に揺られ、車に乗り換え、公使が現地を見に行つた。校舎はビニールテント。電灯もない。寒いので先生も生徒も立ったまま足踏みで暖を取りながら授業をしていた。3 月、日本の「草の根無償資金協力」でレンガ造りの新校舎建設が始まった。もうじき完成する。この冬はもうこごえないだろう。▲「草の根無償資金協力」を使った学校は、中国だけでも 100 校を超えたという。日本の援助が感謝されないなら援助など減らしてしまえという意見が自民党から出てきた。少し早計ではないか。思いがけない援助に純朴な村人たちは心から日本に感謝しているそうだ。そう聞くとやはりうれしい。」（引用ここまで）

ことわるまでもなく、文中の「公使」は、杉本さんのことです。あのとき、杉本さんは、ほんとに忙しかつたのです。北京発 11 時過ぎの、夜汽車に乗り、翌朝 7 時まえに、大同駅に着き、まる 1 日かけて、ぼくらのプロジェクトを、いくつも回ってくれ、文中にある、小学校 2 つの再建支援の、署名式に出席し、そして、その晩 11 時過ぎの、夜行列車で、北京に、帰っていきました。

どんな制度も、仕組みも、人間が動かすものです。地元の農村の人たちは、学校が再建されることも、うれしかったでしょうけど、日本大使館の公使が、このようにして、わざわざ、僻地の村にきたことに、ほんとに驚き、感謝したのだと思います。そのとき、杉本さんは、昼食を、地元の農家でとりました。

その少しまえのことです。杉本さんを、大使館に訪ねたあと、私は、中国人の、ある幹部に、会う予定がありました。いまはもう、次官クラスの人ですが、彼が学生のころから、私は、つきあいがあります。ポロッと、私がもらすと、杉本さんは、「いっ

しよに行って、かまいませんか？」とあって、すぐにコートの袖に、手を通しました。「杉本公使が、高見についてくるなんてね！」とあってそのときの相手は、おおいに驚いていましたが、それにかまわず、杉本さんは、率直に、自分の意見を述べ、かなりしつこく、相手の考えを、きいていました。

そんなことを、繰り返すうちに、杉本さんと私は、親しくなりました。大同に、通うようになってから、中国の、水問題の深刻さを、私は知ようになり、それを、いつでも、どこでも、強調するようになりました。杉本さんは、しつこい私の話を、いやがりもせず、まじめに、きいてくれました。

私が驚いたのは、杉本さんが、ほんとに短期間に、中国の水問題についての、レポートをまとめたことです。私なんかの、ただ体験的、直感的なものどちがって、きちんとデータをまとめた、説得力のあるものでした。ずっと以前から、構想をあたためていたのでしょう。中国の水利部門も、それには驚いたようです。

中華全国青年連合会が、中心になって、2004年4月に、北京で、「日中水フォーラム」を開催したとき、その準備の過程で、私たちはこのレポートを、大いに、利用させてもらいました。上海総領事になっていた、杉本さんに、フォーラムへの、出席を頼んだところ、二つ返事で引き受け、北京にきて、話をしてくれました。

「黄土高原だよりの、愛読者ですよ」と、いってくださっただけでなく、多数の読者を、紹介してくれました。私の『ぼくらの村にアンズが実った』が出版されたとき、「この本は、日本人よりは、中国人、とくに上海あたりの中国人に、読んでもらいたい本です」といって、中国版の出版を、つよくすすめてくれました。彼の励ましがなかったら、実現までこぎつけられたかどうか、わかりません。

杉本さんが、患って帰国したあと、会ったのは、2度ほどでしたが、電話では、何度も、話をしました。本を書いていること、とりあえずの課題が靖国問題であること、そのときどきの、彼の関心も、話してくれました。私たちの、会計事情まで、心配してくれるのが、常でした。

杉本さんの本『大地の咆哮』(PHP 研究所)の出版が、決まったことを知り、インターネットで、予約をいれてから、彼のところに、電話をしました。電話の声は、元気そうだったのです。まもなく出ますという声は、はずんでさえ、きこえました。「贈呈者のなかに、いれましたから、まもなく本が届くはずですよ」と、彼はいいました。共通の友人の、李建華さんが、そのころ、大阪にくることになっていましたから、じゃあ、一冊を彼に渡します、と私は答えました。

杉本さんは、外交官として、幅広い問題にとりくんでいました。私は、零細 NGO の一員として、中国の局部の問題と、格闘しつづけてきました。ですから、立場も、考え方も、ちがいました。でも、あなたを、私は尊敬していました。あなたも、とりとめのない私の話を、ききつづけてくれました。あなたの本についても、じっくりと話をしたかったのです。

杉本さん、それにしても、あなたは早すぎるよ！こんなに早いとは、考えたくもなかった。あなたは、中国と格闘するには、まじめすぎたんです。しごとで命を削ったうえに、一冊の本のために、さらに命を削ってしまっただけで、でも、あなたは、文字通り、そこに命をかけたのでしょうか。あなたの本を、一人でも多くの中国の人に、読んでほしいと願うけど、あなたの思いが、通じるのでしょうか。あなたは、かけがえのない私たちの会員の一人でもありました。ほんとに、残念です。

#### NO. 374 白山の高山植物 2006. 08. 21

白山に登ることが、十年来の、念願でした。でも、予定をたてても、天候に阻まれたり、体調を崩したり。去年の夏は、疲労がひどく、ふもとのスーパー林道で、ブラブラしていました。この夏は、その願いが、実現しました。しかも、最高のかたちで！暑い下界で、まじめにしごとをしている人は、今号にかぎっては、読まないでください。

しっかりと時間をかけて、じつに、3泊4日で、臨みました。日帰りの登山者も、少なくない、というのに。計画を立てたのは、私のつれあいで、私は、どこのコースで、夜、どこに泊まるのかも、意識にないまま。聞きはしたんでしょうけど、右から左に素通り。いいですねえ。こんなふうに、なにも考えないで、人にいわれるまま、それに従うのが、私の本性に、あっているのでしょうか。そういうことからいうと、私の現実のありようは、苦痛の、連続です。うふふふふ。

たどったのは、もっともオーソドックスなコース、砂防新道です。ふもとにある、市ノ瀬の宿を、朝6時のバスで出発し、7時すぎに、別当出合の登山口から、歩き始めました。印象的だったのは、若い人が、多いことです。最近、山歩きで出会うのは、私と年代か、それ以上で、しかも圧倒的に、女性が多い。中高年が多いのは、この山も同じですけど、それに混じって、若い男女が、たくさんいました。おじいちゃん、おばあちゃんと、小さなお孫さん、という組み合わせも、めだちました。

それをもって、あまっちょろい山、と思われても、困ります。別当出合の登山口が、海拔1,250mで、山小屋のある、室堂が、2,450m。最高峰の、御前峰は、2,702mで、西

日本では、いちばん高い山です。富士山、立山とあわせて、日本三山と、呼ぶそう。数ある登山道のなかで、今回選んだのは、最短距離のものですが、それでも、室堂の山小屋まで6km、けっこう長いのです。登山道はよく整備されており、危険箇所や、浮き石などはなく、安全性には、問題がない。こどもでも、だいじょうぶなんですね。

最高のかたち、といったのは、まず第1に、天候に恵まれたことです。登山の前夜、雨がすごかったんですよ。もうれつな気配に、目を覚まし、宿の廊下のガラス窓を、自分で、閉めて回ったくらい。山は、午後からは、雨になりやすいので、なんとか、昼までに、室堂の山小屋に、到着したかった。雲や霧が、迫ってきたことはありました。コース半ばの、甚之助避難小屋近くでは、ポツリ、ポツリと、大粒の雨が降ってきて、雨具を着けるかどうか、迷いました。ところが、そのあと、天候は順調でした。

山小屋の消灯時間の、8時半前後には、天の川をはじめ、ほんとにきれいな、星空が広がりました。月もなかったから、星がよくみえたのです。夜中の、2時過ぎに、トイレに起きると、霧に包まれていて、なにも、みえませんでした。5時09分の、日の出を、山頂で見るために、4時すぎから、歩き始めましたが、このころには月がでていて、懐中電灯も、必要ないくらい。そして、山頂では、日の出をみることができました。北アルプス、南アルプスの山並みは、雲にかくれてましたけど、その雲のうえに、まっ赤な太陽が、顔をだすところを、楽しませて、もらいました。下山まで、雨にたたられることは、まったくなかったのです。

最高のかたちの第2は、冬からの気象に、かかわっています。ことしは、雪が多いうえに、春の訪れが、特別に、遅かったようです。雪が、なかなか、消えなかった。そのために、高山植物の花々が、ものすごく、きれいだったんですよ。とくに、印象深かったものだけでも、チングルマ、クロユリ、コザクラソウ、イワギキョウ、アオノツガザクラ、ニッコウキスゲ、クルマユリ、などがあります。それぞれ、大群落をつくっていました。これほどまでの光景は、どこの山でも、みたことがない。

散策中にであった、地元の登山家からは、「あなたたちは、運がいい。本来なら、いまの時期、花は少ないんです。チングルマなんか、カザグルマに、なっているはず。雪が溶けるのが、遅かったので、いま花盛りなんです」といわれました。春夏の花が、いま、咲き、秋の花まで、咲きはじめている、というのです。春の花から、秋の花まで、いっせいに咲く、というのが、高山の花の、特徴だといいます。そのなかでも、ことしは、特別だったんですね。アップで、写真を撮った、高山植物の花だけでも、50種を超えています。

残念だったのは、コバイケイソウの花が、ほとんどみられなかったこと。本来なら、咲き終わっているはずなのに、まだ、ツボミすら、ついていない。生育が、大幅に、

遅れたよう。雪溪が、溶けたばかりのところには、芽生えのものさえあります。山は、すでにもう、秋の気配ですから、その多くは、開花がまにあわないでしょう。それから、トリカブト、レイジンソウは、まだツボミでした。

話は、ちょっと飛びますが、私は、この夏、意外なものを、みつけました。霊芝です。サルノコシカケ科のキノコで、天然ものは、ほんとに、めずらしい。効果の高い、薬草として、知られています。白山ではなく、宝塚の自宅近くの、山で見つけました。山道の、足もとに、3本はえており、人通りの多いところですから、たくさんの人の、目にとまっているはずですが、でも、たいていの人は、その正体を、知らないでしょうね。私は、中国で、鑑賞用をかねて栽培されているのを、みていたので、それが霊芝であることが、すぐわかりましたけど。

白山の、ふもとの宿のあるじに、そのことを話しました。山歩き超ベテランの彼も、霊芝は、採ったことはもちろん、みたこともないそうです。ジマンは、そこでやめておけば、よかったですね。私は、数年前に採った、サルノコシカケのことを話しました。話をちょっとふくらませて、直径 30cm ちょっとの、ジェスチャーをしました。実際にも、25cm は、越えているんですよ。すると、宿のあるじは、「サルノコシカケは、ここの山では、ドラム缶くらいのが、珍しくありません。チェーンソーがないと、切れないくらい」とのこと。脱帽するしかありません。

話を、もとに戻します。白山の、山頂近くの山小屋では、夕方、日の落ちるまえでも、気温は 13 度を切っていました。夜になると、寒いくらいです。下るにしたがって、蒸し暑くなりました。心を山の上に残しながら、ふもとの宿で一泊し、15 日の朝、テレビのスイッチをいれたら、靖国一色です。なんということでしょう！汗が吹きだす思い。

## NO. 375 15 周年記念イベント 2006. 08. 28

緑の地球ネットワークが、大同で緑化協力をはじめたのは、1992 年 1 月です。満 15 年には足りませんが、植樹の主要時季の春を、15 回迎えましたので、15 周年といっても、そう誇大ではないでしょう。それを記念して、いろんな計画を立て、9 月末には、東京で、加藤登紀子さんのランチタイムコンサートを、計画しています。まだ、席に余裕がありますので、ぜひおいでください。

ここ大同でも、15 年を記念して、毎回のツアーにたいして、特別の歓迎体制がとられてきました。その集大成として、8 月 26 日朝、私たちの拠点、環境林センターで、記念の、大イベントが、開催されました。わざわざ大とつけたのは、ほんとに盛大だ

ったからです。

環境林センターの、正門から、管理棟までは、450メートルほどあります。その道の両側、2mおきに、ヤンゴー（秧歌）隊の女性が立ち、「歓迎！歓迎！熱烈歓迎！」と叫びながら、いかにも中国的なリズムの踊りを、おどっています。その数、じつに400人余。大同市内の、定年退職後の女性たち（一部男性）の、趣味のサークルを、5つも動員したのだそうです。ですので、「妙齡」とはいいがたい。彼女たちも、出番があるのは、うれしいのだそう。開会2時間前の、朝7時には、全員が集まってくれました。

それとはべつに、30人ほどの、軍楽隊も出演しました。たくさんの花火と、爆竹がたかれました。にぎやかなこと、にぎやかなこと。そのなかで、まず最初に、記念植樹。

大同市からは、豊立祥市長、馬福山党委員会副書記、李世傑総工会主席、冀明德副市长、馬維平人民代表大会常務委員会副主任、徐世立政治協商会議副主席、李方明外事辦公室主任などが、出席し、壇上に並びました。新来の市長以外は、顔なじみです。それから、近くの希望学校から、こどもたち50人あまりも、出席しました。

日本側の出席者は、これまた、この活動を継続して、10周年になるイオン労働組合の、新妻健治委員長以下23名。そして、昨年につづいて、2度目に大同を訪れる、日中友好沙漠緑化協会の、武村正義会長をはじめとする72名。それに、会田さんや私を加えて、およそ100名。この式典は、もともと春に計画されていたのですが、いろいろな事情で、のびのびになっていました。これだけの数の日本人が、一堂に会するのは、15年でも、はじめてのこと。結果としては、よかったと思います。

中国側からは、李世傑総工会主席が、15年のあいだに、共同であげた成果を、くわしく報告し馬福山副書記が、祝辞を述べました。それから、私に、「榮譽市民」の称号が、授与されることになり、人民代表大会の決定を、冀明德副市长が読み上げ、市長から、りっぱな証書を、受け取りました。外国人の榮譽市民は、私が第1号だということで、いろいろな人から、お祝いの声をかけられましたが、こどものころから、人にほめられることの少なかった私は、どんな顔をしていいのか、とまどっています。

新妻委員長、武村会長も、ほんとにすてきな、あいさつをしてくださいました。この機会に、私は、私の中国語版の本『雁棲塞北』を、市の幹部たちに、配って回りました。

そのあとが、またたいへん。いろんな歌や踊りの、演出がありました。プロ、セミプロによる、すばらしいものです。私にとって、いちばんうれしかったのは、総工会

の、柴京雲副主席と、娘の柴帥の、二胡の合奏です。柴帥は、北京の音楽学院の、修士過程で勉強していて、すでに、何回も演奏会を開いている、秀才です。そこで終われば、よかったのですが、まだまだ、延々とつづくんですね。

日本からきている人にとって、たいへん貴重な時間ですから、それが、私は気になって、気になって。あとで、あやまって回ったんですけど、何人もの人が、「いえいえ、とんでもない、一生の思い出になりますよ」といってくださって、ありがたかったです。

日本側出席者に、センターを案内したあと、全員で、昼食をとりました。中国側のスタッフを加えると、ゆうに 100 人を超えます。よくまあ、これだけのことを、やったものですね。

この夏、合計 12 のグループを、案内しています。そのなかには、サントリー労働組合と、外務省派遣の ODA 民間モニター、イオン労働組合と、日中友好沙漠緑化協会、というふうに、同時に、2 つの団を、迎えることもあります。そのあいまをぬって、このイベントを、準備してくれたんですね。表にみえた概略は、以上のとおりですけど、実際は、雨が降ったときの、裏のプランも準備していました。前日は雨でしたし、この日の朝も、雲が厚くて、ほんとに心配しましたが、だんだん回復して、ホッとしました。

儀式、式典といったものが、私は大きいです。できれば、逃げたいところ。そういうと、武春珍は、「形式もだいじです。形式を整えないと、内容も実現できません」といいます。それは、そのとおりでしょう。でも、私は逃げたい。

その夜、テレビが、長時間にわたって、報道したそう。大同の 2 つの新聞も、記事にしました。たしかに、こういうことの積み重ねで、現場のしごとが、やりやすくなります。武春珍所長はじめ、大同事務所の手腕に、私は、ほんとに驚嘆しています。

## NO. 376 胡楊の育苗 2006. 09. 01

胡楊は、乾燥地に育つ、ポプラです。コトカケヤナギという、和名もあるようですが、だれも知らないでしょうから、中国名を、そのまま使いましょう。とても、おもしろい性質をもっており、それについて、この通信でも、何度も書きました。昨年 8 月の、第 323 号では、「胡楊の保護・増殖」と題して、大同でみつかった、数本の胡楊を、どうやって、保護し、ふやしていくか、いくつかの試みを、紹介しています。今回は、そのつづきです。

ポプラである以上、挿し木でふやせるはず。そう考えて、数種類のやり方で、挑戦しました。しかし、いずれも、失敗しました。枝を挿すと、芽がでるところまで、いくことがあります。根がでるまえに、挿し穂が、土のなかで腐って、やがて、枯れてしまいます。

それから、親木の下に生えている小さな苗を掘ってきて、移植を試みました。種から発芽した苗ではなく、親木の根からでた、ヒコバエのようです。株元の直径が、3～4cmほどの、かなり大きな苗から、1cm未満の小さなものまで、いろいろ、試してみましたが、これも失敗しました。そのうちの1本は、直径70cmほどの、根鉢をつけて、移植したところ、翌年の春、20本ほどの、小枝をだし、希望を持たせたのですが、翌々年になると、枯れてしまいました。

一般のポプラは、挿し木も簡単です。根のほとんどない、大きな苗を、乱暴に扱っても、たいていは、活着します。そういうことからいうと、胡楊は、ほんとに、扱いにくい。

いまのところ、うまくいっているのは、種からの、育苗です。一昨年8月末、胡楊をはじめてみたときには、種はすでに飛んでしまい、枝のうえに、わずかに残っているだけでした。乾燥しているから、だめだろうと思ったのですが、試しに、温室に蒔いたところ、数日で、発芽しました。温室のなかとはいえ、その後、日は短くなり、気温も下がります。胡楊の芽生えも、生長を止め、1～2cmで、ジッとしています。翌年の、立春をすぎるところから、伸長を再開し、1年後の8月末には、大きなものは、1mを超えました。

それに力をえて、昨年は、8月中旬、種が飛ぶ直前に、たくさん採取してきました。それを蒔いたものが、同じように温室で生長し、いま、大きなものは、高さ2mほどに、育っています。胡楊の生育は、一般のポプラほど速くないといいますが、温室のなかとはいえ、これなら、りっぱなもの。

問題は、いつ、温室の外にだすかです。一般の苗木は、春に植えることが多いのですが、温室で育てた苗は、立春（2月初め）ごろには、すでに生育を再開しています。しかしそのころ、露地は、土が凍結しています。ですから、春の移植は、条件が悪すぎます。

環境林センターの技術者、王君祥は、秋の終わりの、昨年10月に、屋外に移植しました。温室で育てた苗ですから、保護が必要だと考えて、植えたあと、苗木をたわめて、全体を、土伏せして、おいたそうです。土のなかに、埋めたわけですね。春先に、

掘り出したところ、ちゃんと活着していました。しかし、たわめたときの、クセが残って、幹が曲がって、かっこわるい。そこで、地際で、カットしたそうです。そこから新しい芽がでて、いま、100本ほどが1~1.2mまで、育っています。活着率は、90%以上です。

この苗が、土伏せをしないで、ことしの冬を、無事に越せたら、とりあえず、ひとおりの育苗は、成功したことになります。でもまあ、そのあと、現場に移植するにはどのようにすればいいか、新しい課題があります。一般のポプラほど、大きく育てたら、移植はむずかしいでしょう。

それから、露地で種を蒔いて、育ててみる必要があります。いつまでも、温室をつかうのでは、大量の育苗はむりです。ポプラの種は、例の柳絮です。白い、綿毛がついています。種子の本体は、ケシ粒ほどに小さくて、栄養を、ほとんど蓄えていません。水分のあるところに、種が落ちて、すぐに発芽し、自分で光合成して、育つしかないわけです。8月に落ちた種が、翌春になって、芽をだすことはありません。

ということは、1~2cmの、小さな芽生えで、越冬しないとイケない、ということですよ。大同の、過酷な環境で、そんな小さな芽生えが、生き残れるでしょうか？そのことをたしかめるために、昨年7月、大同県の、胡楊の親木の周囲を、有刺鉄線で囲い、土の表面を、軽く、耕しておきました。落ちた種が、発芽しやすいように、したわけです。9月に観察してみると、胡楊と思われる、小さな芽生えが、たしかにありました。有刺鉄線で囲ったのは、胡楊の苗が育ったとしても、放牧のヒツジに食べられたら、どうしようもないからです。

この保護策は、失敗でした。囲いを、破られてしまったんですね。最初は、有刺鉄線のすきまを、押し広げて、そこから、ヒツジをいれていたのですが、だんだんエスカレートして、コンクリート製の杭を、押し倒してしまいました。8月19日にいってみると、囲いのなかも、まるで、芝刈機をかけたように、短く、草がかじられています。有刺鉄線を張っても、守る人がいなかったら、どうしようもない。こういう問題がなかったら、ここでのしごとは、どんなにやりやすいことでしょう。

それでも、胡楊の苗が、残っていないか、さがしてみました。囲いのなかでは、みつきりません。囲いの外の、トウモロコシ畑のなかに、何本か、すぐにみつきりました。去年は、ヒマワリ畑だったところですよ。ここで、小さな苗をみつけたのをきっかけに、私たちは、この保護策を、思いついたわけです。いまの段階で、直感的にいえば、その苗は、実生苗である可能性は、むしろ少なく、親木の根からでた、ヒコバエのようです。でも、たしかなことは、わかりません。

ちょうど、種が飛びはじめたところです。環境林センターの技術者たちに、8月20日、現場に行って、種を集めてもらいました。そして、また、何種類かの育苗試験を、継続してもらいます。

## NO. 377 コーリヤンの謎 2006. 09. 07

ことしの大同の農村は、めずらしく豊作を見込めます。「十年のうち、九年は早魃」といわれていますが、夏になって、雨にめぐまれました。いつもの年より、畑の作物の、背丈が高く、緑が濃いのです。

そのなかで、気になることがあります。コーリヤンの栽培面積が、急に広がっています。コーリヤン（高粱）は、中国産のモロコシ（ソルガム）で、以前は、食用にもしましたが、いまは、ほとんど食べません。このたび、大同のスーパーで、「高粱麵」を売っていたので、手にとったら、大同事務所の李海静が、「買わないで、買わないで。とてもまずいから」といって、止めました。

家畜の、飼料にもなりますが、それより身近なのは、白酒（パイチュー）の、だいたいな原料です。映画「紅い高粱」を、ごらんになったかたもあるでしょう。大同に通うようになってから、私も、ずいぶん、お世話になってきました。

白酒の消費量は、伸びていないと思います。落ちているでしょう。昔のように、ガンガン、飲んでるところを、レストランでもみません。10年あまりまえまでは、50度以上あったものが、いまでは、38度のものが、ふつうです。ウイスキー以下。女性にも飲ませようと、この度数にしたといえます。3月8日の「国際婦人デー」にちなみでのこと。高度酒といわれるものでも、いまでは45度ていど。多くの人が飲むのは、ビールになってしまいました。

この夏やってきた、サントリー労働組合のSさんが、ガラスのコップ、8分目ほどの、白酒を、まるで、ジュースかビールのように、一息で空けるのをみて、中国側も、びっくりしていました。ことほどさように、飲まなくなったのです。昔は、そのような「酒鬼」も、めずらしくなかった。

大同における、コーリヤンの栽培も、減っていたと思います。1990年代の初めは、よくみたのに、その後、あまりみなくなりました。大同市の代表的な作物として、私の本に、トウモロコシと並べて、コーリヤンをあげていたので、ちょっと後ろめたかったくらいです。最近みるのは、新栄区が多く、たいていは水不足で、伸び悩んでいましたので、「コーリヤンではなく、ディーリヤン（低粱）だ」などと、バカなことを、

私はいっていました。そのように、成績がよくないこと、白酒の、消費と生産が、減ったことが、原因だろうと、自分でかってに、納得していたのです。

ところが、ことしは急に増えました。何人もの地元の人に、理由を、きいてみました。しかし、「値段がよくなったんだろう。農民はみんな、もうかるものをつくりたがる。みんなが、いっせいにつくるから、結果としては、生産過剰で、暴落してしまう」という答えが返ってくるだけ。私が、「なぜ、値段がよくなったんだ？」ときくと、「酒の値段が上がったからだろう。20%は上がっている」というのです。それでは、納得できません。

9月3日は、霊丘自然植物園に、回りましたので、その夜は、河北省の、涿源に泊まり、4日朝から、帰国のために、北京にむかいました。国道108号線・112号線で、太行山脈を横断して、高碑店から、北京—石家荘の、高速道路に乗りました。高速道路の直前で、運転手の小郭は、残りの燃料に、不安をもちました。みつかったのは、小さなガソリンスタンドだけで、彼は、それを見送りました。「品質に問題があったら、くるまに害がある」というのです。

高速道路の、サービスエリアで、給油機のまえにくるまを着けましたが、係員と、ふたことみこと、話ただけで、また、発進しました。きいて、びっくり！「酒精（アルコール）燃料しか、ないということでした。これまで、話にきいたこともないので、やめました」。1リットルが、4.9元（1元＝14円）だそう。#93のガソリンは、1リットルが5.09元でしたから、それより安い。発進したあとだったので、それ以上のことは、きけませんでした。

地球温暖化対策で、バイオマスの利用が、課題になっています。ガソリンのかわりに、エチルアルコールをつかうのも、方策のひとつ。南米などで、実用化されている、ときいていました。しかし、それが中国でも、すすんでいるとは……。週刊誌かなにかの広告で、中国の食糧と燃料とで、アマゾンの森林が、危機におちいる、といった記事の見出しを、これを書きながら、思い出しました。しかし、内容は知りません。

この問題について、北京で、何人かの人に、話をききました。早くから、アルコール添加をはじめたのは、ブラジルだそうです。石油不足に、応じるため。ただし、マフラーの腐植を、招きがちだったとのこと。べつの人のお話では、中国では、かなり本格的にはじめており、大手石油会社による、大型プラントもはじまっているそう。10%くらいまでの添加なら、害はなさそうだといっていました。具体的なことまでは、わかりません。実際に運転している人は、正体がよくわからないし、できればつかいたくないけど、なんの規制もないので、知らないままに、つかっているだろう、とのこと。この人は、アルコール添加があることを、知っていました。

コーリヤンの作付けが、ふえたことと、バイオマス燃料の利用は、関係があるかもしれません。たとえば、トウモロコシとくらべて、コーリヤンのほうが、アルコールをとるのに、有利な点があるのでしょうか。サトウモロコシ（サトウキビ）が、もっとも有利だそうで、その栽培が拡大しているそうですが、ごぞんじでしょうか？

こうした問題について、情報のあるかたは、どのようなことでもけっこうですので、教えてください。現場にかじりついていると、そのような問題にだんだん、うとくなってしまう。

#### NO. 378 乳牛 2006. 09. 14

前号の、エタノール燃料の問題について、たくさんの方から、ご教示をいただきました。たいへんありがとうございます。思った以上に、事態がすすんでいるのを、感じました。勉強してみたいと、思っています。

ことしの8月、イオン労働組合のツアーといっしょに、広霊県の、百瞳東堡村の、農家に、ホームステイしました。もともとは、百瞳村といって、人口5,000人以上の、大きな村だったのを、大きすぎて、不便なので、東堡村、西堡村、南庄村の3つに、分割したそうです。3つの村の中央に、文化体育センターがあり、広場と、舞台がありました。周辺には、商店と市があります。

私たちのバスが、この広場に着いたとき、度肝を抜かれました。最初は、小中学生が、道路の両側にならんで、「歓迎！ 歓迎！ 熱烈歓迎！」と叫んでいるいつもの列のなかを、通り抜けたのですが、それが終わったあと、ものすごい数の老若男女が、私たちのほうに、押し寄せてきたんですね。これはもう、押し寄せてきた、としかいいようがない。村の人口の半分としても、2,500人です。それが、好奇心をまるだしにして。ツアー参加者のなかには、恐怖を感じた人まで、いたかもしれない。

植樹のことは、省きまして、その夜は、農家に、ホームステイしました。新しい体験は、この家で、乳牛を飼っており、搾りたての牛乳を、朝食にだしてくれたことです。「1人1斤(500g)でいいですか？」ときかれたので、「多すぎます。半分でいいです」と答えたのですが、はじめての搾りたてを、同宿者は、もてあましていました。陽高県の大泉山村でも、乳牛を、飼いはじめていました。あちこちではじまっています。

朝、5時すぎに、庭にでてみると、おじいさんが起きて、牛の世話をしていました。

搾乳にいくのかと、手真似できくと、6時にでかける、とのこと。まだ時間がありますから、私は、トイレにいきました。農家の、例のトイレです。でてきてみると、牛がいません。出発してしまったのです。でも、心配はいりません。前日、雨が降ったので、牛の足跡がついています。

足跡は、はじめは村のなかにありましたが、そのうち、村を離れ、畑のなかにはいっていきます。おかしいな、まちがえたかな、と思ったのですが、後ろのほうに、人にひかれてくる、乳牛がみえました。いろんなところから、集まってきています。その人たちから、話をききました。1日に、いい牛は35kg、悪い牛は15kg、平均で25kgほどの乳をだすそうです。乳価は、1kgが1.6元。年間、10か月は、搾乳できるそう。ザーッと計算で、年間12,000元ほどの、粗収入を見込めます。大の男が、出稼ぎにでて、日当は、30元ほどですから、その収入を、上回ります。

メスの子牛は、1頭が、2,000元ほど。以前は、高かったけど、値が下がってきたそうです。農家に、行き渡ったためでしょう。子牛は、初期投資であり、のちには収入になります。オスの子牛は、値段を、ききわすれました。

乳牛のほうが、ブタより、ずっと有利だ、という話をききました。ブタは、草だけではだめで、穀物をやらないといけない。ウシは、夏は草を食べさせ、冬はトウモロコシの茎葉を食べさせる。濃厚飼料として、トウモロコシをやるのは、まれなことだそうです。それで、ちゃんと乳をだすんですかね？日本とはかなりのちがいはありますが、日本では、1日平均、どれくらいの乳をだすのでしょうか？そして、ウシは、農作業につかえるけど、ブタは、それができない。

そんな話をきいているうちに、レンガ建ての建物がならんだ、一角に着きました。たくさんの乳牛が、1つの建物に、はいったり、でたり……。その列にまぎれて、私もはいてみました。搾乳所です。搾乳機の前の柵に、牛がつながれると、係の青年が、消毒液をつけた布で、牛の乳房を拭きます。そして、手早く、搾乳の管をとりつける。白い乳が、透明の大きなボトルに、そそぎこみます。片側に12頭ずつが、むかいあわせに、ならんでいます。となりの部屋には、ステンレス製の、大きな横長のタンクがありました。

私が、無断で、どんどん写真をとっていると、青年たちが、にらみます。これはもう、農村青年の顔ではなく、企業人の顔です。たしかめてみると、中国最大の乳業企業、「蒙牛」集団が投資した、牛舎でした。ここに100頭ほどの、乳牛を飼育しているようです。村の農家では、600頭ほどの、乳牛が飼われています。たいていの家は、1～2頭のようなのですが、なかには、5～6頭の家もあるそう。

村のなかで飼われている乳牛も、ここに搾乳に集まります。日に2回、もしくは3回だそう。なかなかいい、やり方でしょうね。農家の牛小屋は、まちがっても、清潔とはいえない。搾乳する農民も、衛生観念があるとはいえない。搾乳を、企業が自分ですることによって、その問題を解決しているわけです。農家も、機械で搾乳されることによって、手間が省けます。いや、1日に、2~3回、ここまで往復することを考えると、そうはいえないかもしれません。私がこどものころ、村に、乳牛を飼っている人がいました。牛乳ビンを大きくしたような形の、金属の缶にいれて、企業が集めにくるのを、待っていましたね。

都市を中心に、牛乳と、乳製品の消費がふえ、それは、生活様式の変化をも、もたらしつつあるようです。今後も、その傾向はすすむでしょう。都市における経済発展が、ゆるやかながら、農村に波及している、ひとつの例でしょう。

【追伸】インターネットで、日本の乳牛について調べると、1日平均の乳量は、25リットルほどと、ありました。それだったら、あんまり変わらないんですね。もっと、大きな差があると、想像していました。

#### NO. 379 石炭トラックが消えた夏 2006. 09. 19

ことしの夏、大同近辺の道路に、大きな異変がありました。リピーターの人たちに、バスのなかで、「みなさん、お気づきでないですか？」と、問いかけたんですけど、わからなかったようです。それまでなかったものが、新しく現れると、その変化に、みな、すぐ気づきます。その逆に、それまであったものが、急になくなっても、なかなか、それを意識できないようですね。

えらそんなことをいえないのは、私じしん、7月中旬から4週間、大同に滞在しましたが、そのさいは、気づきませんでした。8月中旬に、ふたたび訪れて、やっと気づいたのです。

じつは、大同名物とっていい、石炭を満載した、トラックやトレーラーの列が、この夏、消えてしまったのです。何号かまえに、北方謙三さんの『楊家将』について書き、そのなかで、「100トンあまりの石炭を満載したトラック……」と書きました。それと矛盾するんじゃないかと、思われるかもしれませんが、あそこは、大同市内ではありませんし、積んでいる石炭も、大同のものではありませんでした。

そして、「いくらなんでも、100トンあまりというのは非現実的ではないか」という、反響がありました。そこで、私は、運転手の郭宝青に、再度、確認しました。100トン

あまりというのは、まちがいありません。彼は、すれちがうトラックを示しながら、「あれは、最低でも、120 トンは積んでいます」といいますから、「定格の積載能力は、いくらなの？」ときくと、「60 トンです」ということでした。2 倍くらい積むのは、めずらしくないのです。だから、道路が、すぐに壊れます。小郭は、大同事務所にくるまでは、石炭トラックの、運転をしていましたから、彼のいうことに、まちがいはありません。よけいところに、話がそれましたが、その石炭トラック、トレーラーが、この夏、消えてしまったのです。

原因は、5 月 18 日に、大同市左雲県でおこった、炭鉱事故です。これについては、日本国内の新聞でも報道され、私も、概略を知っていました。かんたんによいと、坑内に地下水が噴出し、56 人の労働者が、犠牲になったのです。炭鉱事故は、中国では珍しくありませんが、これほどの規模となると、そうしょっちゅうでは、ないでしょう。

そして、人びとを驚愕させることが、いくつも発覚しました。まずは、責任者が逃げてしまった。それから、坑内に閉じ込められた労働者の数を、5 人というふうに、最初、ごまかして発表していました。事故を、小さくみせようとしたんですね。それから、下請け一孫請けといった三重、四重、の請負制がとられており、中間搾取が大きいというのに、責任の所在が、はっきりしなかった。

事故多発に手を焼いた、山西省政府の決定で、炭鉱事故の犠牲者にたいして、企業は、1 人あたり 20 万元の補償をしないとイケない、ということになりました。生命の値段を高くすることで、安全対策の確立を求めたわけですね。ところが、事故をつうじて、明らかになったのは、「万一のことがあっても、労働者としての権利を主張しない」といった契約条項をいれていた、ということです。

中央からも、人が派遣され、省のトップの党書記も、現場にかけつけたそうです。そして、県長、担当の副県長が解任され、逮捕者も、20 人を超えました。

そして、この炭鉱にかぎらず、すべての地方炭鉱にたいして、安全制度の確立が、確認されるまでは、一斉に操業を停止する、という荒療治が行われました。

国有の大炭鉱は、専用の引き込み線をもっており、掘り出した、石炭の輸送は、鉄道です。道路輸送に頼っているのは、地方炭鉱です。その地方炭鉱が、すべて、操業停止になりました。石炭がでてこないのですから、道路上から、トラックが消えたのは、理の当然です。操業再開は、8 月末でしたから、3 か月も、その状態がつづいたわけですね。

地方炭鉱で働く、労働者にとっては、たいへんなことだったでしょうね。そのかん、しごとがないのですから。休業補償なんて、気の利いたことをする企業は、まずなかったと思います。安全の確保は、もちろんだいじですけど、そのまえに、食っていくことが、もっとだいじだ、と思った人も、いたことでしょう。

ちまたのウワサでは、大同のここの GDP は、前年比 20%減になるだろう、とのこと。いや、もっと下がる、という人もいます。大同は、中国最大の、石炭の街で、GDP の半分以上を、石炭で稼いでいますから、地方炭鉱にかぎられる、とはいえ、3 か月操業停止の影響は、そうとうに、大きいことでしょう。

その影響で、石炭価格の上昇が、急だったようです。このところ、ずっと上昇傾向だったものに、ドライブがかかった。国営の大炭鉱は、もうかったようです。最低でも 400 元、賃金アップがあった、といわれます。

1つの事故であっても、その及ぼす影響は、一方では、困難にあがく人たちをつくりだし、他方では、それを機に、利益をふくらませる人をうみだすんですね。どういう場面でも、ありうることでですけど、中国のばあいは、極端なかたちをとります。

## NO. 380 この夏の霊丘自然植物園（1） 2006. 09. 25

霊丘自然植物園は、総面積 86ha の、小さなプロジェクトですけど、私たちにとっては、まさに、希望です。発案者は、いうまでもなく、立花吉茂先生。大同のなかでも、樹木の生育に、条件のいい、いちばん南の、霊丘県のなかでも、もっとも南にある、上寨鎮を選びました。

1998 年に、計画をスタートさせてから、毎年、春と夏の、最低 2 回は、ここを訪ねました。多い年は、5 回は行っています。この夏も、7 月末に、行こうとしたんです。近くの、南庄村の入り口に着くと、前夜の雨で、上寨河が増水し、くるまでも、渡れそうにありません。

この河には橋がありませんが、私たちが知っている、1998 年以降でも、だんだん水が少なくなって、くるまでは簡単に渡れますし、飛び石づたいに、わたることも、可能でした。ところが、急に増水したのです。

植物園の技術者の、李向東に連絡をとると、前夜の雨は、10 分間で、50mm も降り、河が増水しただけでなく、途中の道路も、あちこちで壊れており、近づくことはできない、ということでした。しかたがないので、李向東の自宅により、渡すものだけを、

渡したのです。

ことしの夏は、その後、ツアーや視察が多く、壺丘に行く時間を、とれそうになかったのですが、帰国の日にちを、むりやり延ばし、9月3日に、行ってきました。心配したとおり、南庄村から、植物園への道路は、何か所も、崩壊していました。そのうちの2か所は、大破とっていい状態で、修理するには、時間も、お金も、かかりそうです。

事前の連絡を、しないでいきましたが、私の声をききつけて、李向東や周金が、かけよってきて、敷地内を、案内してくれました。私は、何本かの樹木を選んで、定点観測し、毎年、写真を撮ってきていますので、なんとしても、今年も、それをしたかったのです。海拔1,100mを超えるところまで、登ってきました。もちろん、この春にはきましたけど、そのときは、ことしのぶんは、伸びてませんでしたので……。

道まで流す豪雨は、困りますけど、雨が多いこと自体は、うれしいことです。去年は早魃で、年間250mmしか降りませんでした。ことしは8月末まで、460mmを記録しています。このあとも、多少は期待できますので、おそらく500mmはいくでしょう。この地方では、降水量が、植物にとっての、最大の制約要因です。雨が多いために、樹木や、草の伸びが、とてもいいのです。

管理棟のすぐうえに、シラカンバの実生苗があります。昨年春は、樹高が1.2mくらいの、弱々しいもので、事務局の会田さんが、背比べをして、よろこんでいました。ところが、ことしの夏は、3mにも、育っています。彼女が、いくら背伸びをしたところで、もう、手も、とどきません。

そこから、50mほどの、谷筋には、数本の、シラカンバが生えています。これも、あつというまに、大きくなりました。きちんと測る、時間はありませんでしたが、10m近くに、なっているでしょう。ことしもよく、実をつけていますが、昨年、採取した種は、まったく発芽しなかったそう。すべてが、同じ株元からでたものの可能性があり、自家受粉では、発芽能力がないのかもしれない、と李向東はっています。

海拔1,100mあたりの、作業道のよこに、なかなか姿のいい、リョウトウナラがあります。その横に、李向東を立たせて、モノサシ替わりにし、ここ数年、写真を撮りつづけてきました。ことしも、それをやりましたが、枝葉が、繁ってきて、李向東の姿が、よくみえません。困ったような、うれしいような……。

これらのものは、自然に再生しつつあるものですが、初期に、人工的に植えたものも、かなり育ってきました。アブラマツの大きなものは、2mほどになり、青緑の葉を、

茂らせています。いまは、その他の草木も緑のため、あまりめだちませんが、冬になると、この緑の葉は、茶色一色のなかで、おおいにめだつことでしょう。

海拔 1,100m ほどの高さで、水平方向に、南に向かって、作業道をつけました。幅 1m ほどの、小さな道で、地形に沿って、うねうねと曲がりくねっていますが、作業は、ずいぶんとラクになったそうですし、私としては、樹木を観察できて、とてもうれしいのです。ここの主人公は、リョウトウナラですが、そのほかに、ニレ科、モクセイ科、カバノキ科などの、落葉広葉樹が、まじっています。灌木は、トネリコ属の 1 種、ハシバミ属の数種、などです。

シャクナゲの 1 種も、増えつつあります。ひよっとすると、1,000m 前後のところを、これが占領するかもしれません。その他の灌木が、おおい繁っているなかに、無数の、小さな苗が、平気で育っているからです。広葉樹は、喬木も、灌木も、すべて落葉するなかで、このシャクナゲだけが、半常緑で、冬になると、葉は茶色に変色しますが、落葉はせず、春になると、また緑色がよみがえります。残念ながら、花は白色の豆粒の集りで、あまりきれいではありません。ほかに、日本のミツバツツジに似た、紅色の花のものがありますので、李向東は、このシャクナゲを台木にして、そのツツジを接ぎ木してみたい、とっています。

アブラマツの 50 年ほどたったものが、1 本だけあり、なかなかいい姿をしています。70 年代ころに、飛行機で播種されたというアブラマツも、高さ 4~5m に、育ってきました。

李向東と周金は、いろいろな植栽方法を試しています。なかには彼ら 2 人が、おたがいに秘密にしているものもあって、私にだけ、こっそり教えてくれます。ものかげにある、それをみせてもらうのは、とても愉快です。今年の夏は、大旱魃のため、樹木の育ちも悪かったので、彼ら 2 人も、なんとなく、元気がなかったのですが、ことしの夏は、ハツラツとしていました。植物園の話、もう 1 回、書きます。

私が書いているブログ「黄土高原レポート」に、中国語版が、加わりました。

【日本語】

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

【中国語】

<http://blog.sina.com.cn/u/1254565527>

北京の友人、呉文莉さんのすてきな翻訳で、いまのところ、第 20 回まで、アップしています。

霊丘自然植物園では、樹木も伸びてきて、以前とはずいぶん、ようすが変わったんですけど、夏の時期、見た目の印象を、大きく変えているのが、草の繁茂です。ことしは、とくに、夏の雨がおおかったので、とても、伸びがいいのです。

なかでも、人目を集めるのは、花をつけるもの。その代表が、アツモリソウです。李向東たちが、園内や付近を、目を皿のようにして、探していますが、これまでみつかったのは、1株だけです。ラン科で、こぶりの鶏卵大の、紅色の、花をつけます。2年目の2000年に、はじめて花をつけましたが、そのときは、1つだけでした。その後、倍々で、花の数はふえ、ことしは、20以上の花が咲いたそうです。

花のうちの、最低半分は、結実します。夏でも、涼しいことが、いいんでしょうね。ことしも十いくつ、サヤがついていました。ランの種子は、ひじょうに小さくて、1つのサヤに、何万ものタネが、あるようですね。でも、タネが小さいということは、発芽と生育の、能力が弱い、ということでもあります。じっさい、ランと共生する菌根菌、ラン菌と共生できないと、育つことは、できないよう。

ですから、できたタネも、もとある株の、半径1m以内に、集中的に、まくようになっています。そのことを、何年か、つづけた結果、ことしの9月の観察では、もともとある株の、ちょっと離れたところに、少なくとも5本は、実生の苗が、みられます。もっと、あるのかもしれませんが、小さなうちは、私には、見分けがつきません。

じつは、私は、アツモリソウの、現物の花を、みたことがないのです。残念なことに、どうしても、私が、日本にいないといけないうちに、6月ごろに、咲きます。ただ、写真をみただけ。李向東が、同じ写真を、近在の友人たちに、みせたところ、あそこにある、ここにある、という情報が集まったのですが、じっさいに、行ってみると、なかったり、べつのものであったり、したそう。それくらい、貴重で、ふやしにくい花です。

ところが、近年、日本で、中国産や、韓国産の、アツモリソウの鉢植えが、園芸店に、並んでいます。かなり高価ですが、とてもきれいな花の、ラベルがついてますから、買う人もあるでしょう。その春の花は、おそらく、咲くでしょうが、そのあと、日本の都会の、暑い夏を、越えることは、まずむりです。おそらく、人工培養によるものでしょうが、こういう野生ランの栽培が、中国でもブームになって、自生地での、絶滅を招くなんてことが、あってはならないと思います。脱線しましたが、アツモリソウが増えているのは、この植物園における、生態再生の、1つのシンボルです。大事にしたいと、思います。

人為的な影響を、排除して、放置しておけば、このように、自然に、再生がすすむのは、事実です。逆に、悩ましい問題もあります。管理棟から、近いところに、湧き水があって、水分には、恵まれています。湿地とっていい、状態のところもある。いろんな草花が、以前から、育っています。私がすきなのは、純白の花を咲かせる、ウメバチソウ。日本のものと、同種かどうか、わかりませんが、中国の標準名では、「梅花草」といいます。ことしの9月初旬には、ツボミはついてましたが、開花はまだでした。

私たちが、ここを管理し、むやみに伐採しなくなってから、もともと生えていた、ヤナギの枝が大きく広がり、カゲをつくるようになりました。ヤナギハグミ（沙棘）も、ここは、水条件がいいので、たちまち3m以上の、ブッシュをつくりました。どこからきたのか、ニセアカシアも、成長をはじめています。これが、ウメバチソウをはじめとする、草花を圧迫します。ヤナギ、ヤナギハグミ、ニセアカシアなどは、ほかにも、たくさん生えているので、ここでは、遠慮してもらいましょう。そう考えて、李向東たちに伝えたと、彼らは、去年のうちに、ヤナギの枝をはらい、ヤナギハグミや、ニセアカシアを、伐採してくれました。

そのおかげで、ずいぶん明るくなったのです。おかげで、ウメバチソウも、元気を取り戻しました。ところが、ウメバチソウ以上に、元気になったのが、ワレモコウです。これが、もう、すごい。日本では、ワレモコウは、ずいぶん減ってしまいましたし、だいたい、おとなしい草花です。ところが、このワレモコウは、ずいぶん大きいのです。背丈は、1~1.2mくらいあり、日本のものより、ずっと、エネルギッシュな感じ。それがもう、びっしりと生えてきました。

このたび、印象的だった、草花を、ほかにあげるとすれば、まずはシャジン、ツリガネニンジンでしょうね。植物園入り口の、低いところから、海拔1,100mあたりまで、どこにでもあり、たくさん花をつけていました。大きなものは、1つの株で、おそらく数百から、それ以上の花をつけており、日本のものとは、かなりちがいます。

それからマツムシソウ。これも、日本のものよりは、花がずっと大きい。花期は、ずいぶん長いようで、盛りをすぎたものから、まだツボミのものまで、いろいろでした。

小さなヤマユリ＝山丹丹や、キキョウは、すでに花を終え、タネをつけています。去年は、旱魃のために、あまりみられなかったのですが、ことしは、たくさん、咲いたそう。

樹木にしろ、草にしろ、その再生ぶりは、私たちの予想を、はるかに超えています。

いっしょに回っている、李向東や周金が、「最初のころとの変化は、たいへん大きい」と、同じことばを、なんども、なんどもくり返します。彼らの、考えるところでは、放牧がなくなったことの影響が、いちばん大きいようです。「100人の、人間が、植えたものを、100頭の、ヒツジやヤギが、台無しにし、それ以上の、被害を与える」といっていました。

植物園の、西がわの山の、広大な面積、30年の使用権を、五台山林場が、買い取り、まもなく作業をはじめ、とききました。こちらからみるかぎり、岩盤がむき出しになった山で、土がほとんどありません。30年という期限は、植林のためには、短すぎる気がします。この一帯の山は、いま、鉄鉱石の採掘がさかんで、ひどく痛めつけられています。そういうことからいうと、ここに林場ができるのは、たいへん、いいことです。

私が、あとで、友人の中国人に、その話をすると、「ホントに、植林が目的ですか？」と、問い返されました。「いつまでたっても、甘いですね！」と、いわれたようなもの。そうです。環境保全施設がやってきます、という名目で、コークス工場が、つくられようとしたのは、私たちも、身近に体験してきたこと。

話は、また、変わります。ことしの夏、私は、靈芝をみつけ、採取しました。山歩きを、本業のようにする人でも、出会うのは、まれなんだそう。そのことを、なんども、ジマンしていました。すると、北京の友人が、「天然物の靈芝は、野生の人参と同じくらい貴重で、何万元もすることがありますよ。鑑定してもらったら、どうですか」といわれました。

そしたら、なんと、ごく最近も、また、みつけて、採ったんですよ。日本国内です。場所は、ヒミツにするしか、ないところ。こんどのもののほうが、ずっと大きい。私は、運がいいのでしょうか？それとも、こんなことで、運を、使い果たしつつ、あるのでしょうか？

## NO. 382 満天の星空 2006. 10. 10

最初に、最近の、いくつかの号について、訂正。私は、ことしの夏は、雨が多くて、豊作が見込める、と書きました。ところが、9月に大同に行った、私たちの事務所の、会田さんによると、8月末以降、まる1か月も雨がなく、作物にも枯れるものがでてきたり、実がはいらなかつたりで、けっして、豊作ではないそうです。とくに、トウモロコシが、よくないそう。

それで、思い出しました。ことしの春、雨がなかったんですね。そのために、種まきの時期が、遅れていました。トウモロコシは、夏に、よく育ったようにみえていても、成熟に要する、日数が足りていなかったようです。うかつなことは、言えないものです。ことほどさように、大同の環境は、きびしい。

ことしの夏は、たくさんのツアーが、きましたから、その人たちといっしょに、計5回、農村で、ホームステイしました。そのさいの、楽しみの1つが、星空です。なぜ、星空と農村、かといいますと、日本では、都市はもちろん、農村でも、星空が、みえなくなったのですが、中国でも、都市は、星空なんて、みえません。大気の汚染が、ひどすぎます。それから、夜でも、明るすぎる。

なんてことを、私がいいますと、ときに、反発を買います。「日本でも、ちゃんとみえてます」といって。それは、そのとおり。大阪では、どうかわからないけど、私が住んでいる、宝塚でだって、星は、みえますよ。でも、それは、星空とは、呼びにくい。高い山のうえで、星空がみえることは、この夏の、白山の体験を、私は、このメルマガにも書きました。

いやあ、大同の農村でみる、星空は、日本の高山でみる、星空と、あまり変わらないんですよ。それくらい、きれいです。夏でいえば、天の川が、ほんとに川のようにみえます。銀河をはじめてみた、日本の若い人たちが、「なんだか、こわい！」というくらい。大同盆地の標高は、1,000mで、たいていの農村は、それより高いのです。日本にもってくると、けっこうな山の高さ。

それから、夜でも、周囲が明るいと、星はみえませんが、月夜は、星はみえませんが、街の灯も、同じように、星空をさえぎります。私たちの実験林場「カササギの森」で、何年かまえの夏、キャンプをしました。管理棟の、すぐ横に、モンゴル式のテント、モンゴリパオ（蒙古包）を、張ったのです。外モンゴルでは、ゲルというそう。ひそかに、私は、満点の星空を、期待していました。あそこの海拔は、1,450mはありますから、高さとしては、十分。近くには、人家もありません。周囲の照明に、妨害されることはない、思っていたのです。

ところが、ダメでした。あそこは、大同の市街地に、近すぎるんですよ。カササギの森から、大同のほうをみても、日中は、そこに都市があることは、ほとんどわかりません。20km以上、離れていますので、建造物なんかは、みえませんが、夜になると、だめなんですね。市街地の、方角が、明るいだけでなく、それが空全体に、影響します。

あきらめるしか、ないのかもしれない。2000年の秋、あその場所を、決めるに

あたって、市内からの距離を、かなりの程度、優先しました。毎回のツアーが、訪れるためには、交通の便利さが、欠かせません。

しかも、カササギの森を着工した、2001年当時、あそこの道路は、最悪だったんですね。大同と、張家口を結ぶ、幹線道路で、石炭トラック、トレーラーが、たくさん通るのに、路面の舗装は、悲しいものでした。上っ面だけ、アスファルトを張った、テンプラ舗装なのに、100t以上の石炭を積んだトラックが、列をなしますので、舗装は、たちまち、破壊されます。大同市内から、2時間かかるのは、ふつうでしたし、スタックした、マイクロバスを降りて、押しているうちに、ころんで、手を骨折した人まで、あったのです。できるだけ、市内から、近いところにしたかったのです。

前置きが、長くなりましたが、星空をみる、最大のチャンスが、農村での、ホームステイです。なるだけ、市街地や、県城から、遠いところが、いいのです。それから、明るさは敵。農家の電気も、消したいんですけど、私たちのツアーが、泊まっていると、庭にまで、照明をつけてくれるので、頼み込んで、消してもらわないといけない。

ところが、農村では、停電が多いんですね。泊めてくれた農家は、たいへん恐縮します。自分の責任であるかのように。ところが、私は、よろこんでいます。星空をみるのに、最高の条件ですから。

大同で、樹木を育てるうえで、最大の悪条件は、雨のないことです。ところが、夏にだけ、降ります。どちらかという、夜だけ、雨がふって、日中は、晴れることが、多いのです。ですから、日中の作業には、支障がない。

もちろん、例外はあります。印象に、残っているところでは、ある年の、サントリー労組の、ツアーです。行くところ、行くところ、毎日、毎日が、雨で、最終日まで、1本の苗も、植えられなかった。ところが、彼らが訪れる前、どの県も、40日以上もつづく早魃に、あえいでいました。「あなたたちが、雨をつれてきてくれた」といって、ものすごく、感謝されたのです。東北電力総連のツアーでも、そういうことがありました。

ことしの夏は、雨は、そこそこ、降ったのです。全体として、作物の育ちは、よかった。(そのときまでは、です)そして、ツアーが、農村を訪れる日には、降らないまでも、曇っている日が、多かったのです。きょうは星空は、むりだろうな、と夕方まで、思っていました。ところが、日が落ちて、暗くなるころに、星が出てきます。農家に泊まる時は、みな早く、寝床につきますから、それまでは、まだ、星がみえなくても、夜中に、トイレに起きてみると、なんと、満天の星空！眠っている同宿者を、起こすべきか、どうか、ずいぶん迷いましたよ。けっきょく、この夏、5晩、農村に泊

まって、毎回、星空をみました。

流れ星も、たくさんあります。ときには、大きなものが、長い尾を引いて、びっくり！それから、人工衛星が多いですね。肉眼で、はっきりみえます（私のばあいは、メガネがないとだめですけど）。光りながら、飛んでいくんですけど、あれって、大気の屈折率の関係か、なんかでしょうか、ピピッ、ピピッと、その光が、小さなジグザグをえがきます。つねに、何個かをみつけられますし、静止衛星も、たくさん上がっているはずで、全体としては、すごい数なんだろうね。

ふつうに日本で生活してたら、夜空をみあげるなんてことは、まず、ないでしょう。いつもは考えないことを、みんな考えるようです。最初は、やれ、あれが北極星だ、北斗七星だなんて、やっていますけど、知ってる星座なんて、しれたもの。そのうち、みんな、黙りこくって、空をみています。そこの家の、おやじさんが、ふしぎに思っ  
て、声をかけてくるんですよ。「日本には、星がないんですか？」

#### NO. 383 麺（めん） 2006. 10. 18

山西省は、世界の麺の故郷、といわれます。よく知られているのは、刀削麺（とうしょうめん）。固く練った、小麦粉の固まりを、刃物で、薄く、削ります。削られた、1片、1片が、沸き立った大鍋に、直接、落とされるんですね。小麦粉の固まりを、頭のうえに載せて、削ったり、刃物の代わりに、割れた茶碗のかけらをつかったり、さまざまな、曲芸的な、パフォーマンスもあって、みているだけでも、楽しいものです。

日本で麺といえば、うどんのように、細長いものと、決まっていますけど、中国では、粉にひいて食べるものは、みな麵食。マントウ、ギョウザ、パン、これらは、みな麵です。うどんは、麵条（ミエンティアオ）といいます。それを、ただ、麵ということも、あります。

材料は、もちろん小麦粉もありますけど、そのほかにも、たくさんあります。ソバ＝蕎麦（チャオマイ）は、日本でもよく食べますが、もちろん、大同にもあります。多く産するのは、靈丘県で、ほかの県では、めったに、みかけません。靈丘県のものも、苦（クー）蕎麦が中心で、日本で食する、甜（ティエン）蕎麦はあまりありません。苦蕎麦は、最近、日本でも、韃靼（だつたん）ソバという名で、すこし、出回りはじめましたね。ただし、靈丘の苦蕎麦は、日本のソバのようにしては、食わず、もっと水っぽくて、柔らかい、トコロテンのようなもの。苦蕎涼粉（クーチャオリャンフェン）といいます。

それから、莜麦（ヨウマイ）があります。これは、燕麦（えんばく）＝カラスムギの一種。栄養価が高く、腹持ちがいいとあって、農村では、好まれます。こういういい方もありますね。三十里的莜麵（サンシリーダヨウミェン）、四十里的糕（スーシリーダガオ）、十里的蕎麵餓断腰（シーリーダチャオミェンウードアンヤオ）。

三十里のエンバク、四十里のキビもち、十里のソバは、腹がへって、腰が抜ける、といったところでしょうか。中国の1里は、500mで、それぞれの食べ物は、食べてから、どれだけ歩けるかということ。

食堂のメニューに、「莜面魚」がありました。私は、どんな魚だろうかと思って、それを注文してみました。そしたら、泥鰌（どじょう）のような形に、練った、莜麵が、スープのなかを、泳いでいました。魚じゃ、ないんですね。

それから、大同の麵食としては、マメがあります。これも、種類は、たくさんあります。とくに、新栄区で、たくさんつくり、よく食べるようです。代表的なのは、エンドウの麵（豌豆麵）。といっても、サヤエンドウ、グリーンピースのように、大きなものではなく、草丈も小さいし、莢も小さいし、実も小さいのです。これも、粉にひいて、麵にしますが、粘りが少ないためでしょう、うどんのように長くはしないで、小さな猫の耳のようなかたちにつくります。そういうかたちのものを、「猫耳麵」といいます。

もっとも美味なのは、扁豆麵（ビエンドウミェン）だと、以前から、きいていました。ことしの夏、新栄区の農村で、ホームステイしたとき、15年目にして、はじめて食べました。直径3mmほどの、平べったい豆です。雑草の、カラスノエンドウを、わずかに、大きくした程度。タネをすこしもらって、苗畑に蒔いてみようと思ったら、「いい土地にはもったいない」といわれました。収量が、ひじょうに少ないのだそう。そのぶん、値段は、小麦よりは、何倍も高いそうです。

粉に、水を注いで、しっかりと練り、大きなまな板のうえで、麵棒をつかって、平たく、延ばします。それを、ほうちょうで、細長く、切ります。つくりかたは、手打ちそばと、いっしょ。食べたときは、ほんとに美味しいと、思いました。でも、いまは、まったく思い出せません。ですから、味について、書くのはムリ。

何年かまえ、手動の製麵機で、うどんをつくってくれた農家もありました。むかしの洗濯機で、洗濯物を、ゴムのローラーのあいだを通して、手動で絞る式のものがありましたね。あれと、同じように、水で練った、各種の粉を、手動の、ローラーのあいだを、何度も何度も、通して、練り上げていきます。それで、こしがでる。そして、最後は、ローラーの出口のほうに、針金の、網のようなものをとりつけて、それで、切るわけです。長い、長い、麵ができます。はさみで切ってから、鍋でゆでます。

おもしろいな、と思いました。値段をきくと、とても安かったので、買って帰ろうかと、考えました。でも、買わないで、よかった。私がおもしろいと思って、買ったもので、まったくつかわれていないものが、たくさんありますから。

これまで書いてきたのは、麺食の文化の、ほんの一部です。山西省に、麺の種類は、数千もあるとのこと。そのうちの、どれだけを、私は食べているのでしょうか？

### NO. 384 3代の共青团書記 2006. 10. 23

大同における、環境協力事業の、当初のカウンターパートは、大同市青年連合会で、その実体は、共産主義青年団（共青团）大同市委員会ですけど、いちばん、関係が深かったのは、祁学峰です。1994年春から、副書記として、この協力事業を担当し、緑色地球ネットワーク大同事務所をつくって、初代の所長でもありました。私が大同に滞在しているあいだ、つねに農村をいっしょに回り、兄弟か、それ以上の、親密な関係だったのです。1998年から、彼は、共青团の書記になり、それまでより、接触の機会は減りましたが、いっしょうけんめい、サポートしてくれました。

2001年の年末に、祁学峰は、共青团を離れ、南郊区の、共産党の、副書記に転じました。ナンバー4あたりの、地位です。共青团に、新しい書記が、就任したんですけど、彼とは、気持ちの通じることが、ありませんでした。1年ちょっとつきあいましたが、薄氷をふむ思いの連続。2003年になって、このままでは、いずれ破綻すると考え、無残につぶれるよりは、撤退したいと、共産党大同市委員会に、申し入れました。その決定で、カウンターパートが、総工会に交替することになったのです。

ちょっと、話がそれますが、この夏、私は、大同市榮譽市民、ということになりました。大同市人民代表大会常務委員会の決定で、決議文が、大きな活字で、新聞に載りましたし、市政府の、ホームページにも、掲載されているそうです。で、私は、関係者にきいたんですよ、「反対票は、何票でしたか？」と。答えてくそうにしたあと、相手は、「反対票はなかったけど、棄権が1票でした」。あっはっはっは。それは、おもしろい。

祁学峰の、前任の共青团書記は、郜向華でした。祁学峰より、1歳年下でしたが、風格と人情味のある男で、この協力事業を、とてもたいせつに思ってくれました。1998年のことですが、私を訪ねてきて、そろそろ、自分か祁学峰か、どちらかが共青团を離れる時期だけど、自分としては、祁学峰をあとに残したい、そのほうが、高見の事業にとっても、有利だろう、と彼はいいました。

鄧向華から、そのようにいわれましたので、私は、祁学峰が、青年団に残るよう、市長にも訴えましたし、山西省の、人事方面の幹部にも、そのように、働きかけました。効果のほどは、しりませんよ。共青团中央の、さる幹部が、そのことを知って、「高見さんは、団の人事にまで介入しているそうですね」といったことがあります。ことは、願いどおりにすすみ、鄧向華は砒区の区長になり、祁学峰は、書記として、共青团に残りました。

その鄧向華が、青年団の新しい書記と、私との、ゴタゴタを心配し、なんども、私を訪ねてきて、なぐさめてくれましたが、たいていは深夜でした。相手が組織となると、つきあいも、むずかしいものです。でも、うれしかった。祁学峰も、もちろん、心配してくれたでしょうけど、こういうばあいには、動きがつかないものです。

新しく、カウンターパートになった、大同市総工会の主席は、李世傑という、すてきな女性でした。彼女もまた、共青团の出身で、鄧向華の前任の、書記だったのです。鄧向華は、青年団書記を卒業したあと、砒区の区長から、そこの党書記というふうに、出世していきましたが、つねに一步先を、歩いていたのが、李世傑でした。青年団書記→砒区区長→砒区党書記→総工会主席を、歴任したわけです。総工会主席のときは、共産党大同市委員会の、常務委員でもありました。念のために、ことわっておくと、党の書記がナンバー1で、行政の長は、ナンバー2です。

李世傑は、貧困家庭の出身だと、自分でいいます。彼女が、頭角を表したのは、文化大革命のころで、「鉄姑娘」（鉄の娘）と呼ばれ、農村で大活躍したそうです。鉄の娘といえは、有名なのは、大寨の郭鳳蓮ですが、李世傑は、彼女とも、親交があったそう。文革のころに、突出した人間は、その後、挫折したり、失脚した人も、少なくないのですが、彼女は、生き残りました。もちろん、公私ともに、たいへんな苦労があったでしょう。それが、つや消しの、魅力になっていると、私は思います。

この協力事業が、総工会へ移管されることが、決まったとき、李世傑は、私に、この事業をここまで発展させたのは、大同側では共青团だから、それがこういうことになって、鄧向華も、祁学峰も、内心では、悔しいと思う、でも、移管先が総工会、その責任者が私であることで、その思いも、いくらかは和らぐだろう、と告げました。その言葉をききながら、私は、この人なら安心できる、と考えたものです。

彼女はまた、祁学峰のことを、「祁学峰を、使いこなせる指導者は、そうはいません。彼は、能力はあります。自分の意志も強いので、だれの下でも、しごとができる、というわけにはいきません」と、評しました。祁学峰について、私が、評価したようなことは、役人の世界では、いいこととは、かぎらないんですね。

祁学峰は、南郊区の、副書記になりましたが、そこで、何年も、足踏みしていました。私が祁学峰を、青年団に引き止めたために、彼の出世を遅らせたと、以前、私は書いたのですが、かならずしも、そうではないよう。青年団を、書記で卒業するのと、副書記で中退するのとでは、その後のコースが、ずいぶんと、ちがうようです。

彼ら3代の書記の、関係がとてよ良かったことで、いいことがありました。李世傑が、私といっしょに食事をするときには、鄧向華と、祁学峰を、毎回、呼んでくれます。私を呼んで、酒につきあわないわけにはいきませんし、つきあったら、李世傑は、酔っぱらってしまいます。副主席の、柴京雲は、生理的に、酒を受け付けません。だから、あの2人がくると、つごうがいい。ときには、鄧向華か、祁学峰が、お金を払います。私にとっても、3回の宴会が、1回になるのは、ありがたい。といっても、鄧向華は、体が受け付けなくなったといつて、ほとんど飲みませんが、一生のぶんを、すでに、飲み尽くしたのでしょう。

ことしの春から夏にかけて、大同では、大がかりな、人事異動があり、李世傑は、総工会を離れ、副市長になりました。それも、筆頭の専務副市長です。私は、残念な気持ちですが、大同の関係者は、「よかった、よかった。このしごとは、ずっとやりやすくなりますよ」といいます。李世傑も、「どこにいったとしても、この事業を全力で支持する」といってくれましたけど。李世傑のあとの、総工会主席は、李世傑のさらに前任の、共青团書記だそうです。いつか、「3代」を「4代、5代」に変えて、同じようなことを、書くかもしれません。

鄧向華も、副市長をうかがう、場所にいるようですね。いま、若い幹部の登用が急ですので、その可能性は高いでしょう。祁学峰も、この春から、城区の区長になりました。今回の枠からは、はずしてしまいましたけど、最初期に、いっしょに農村をまわった、馬斌は、何年もまえから、新栄区の党書記。環境林センターの建設で、活躍した、徐尚紅は、この春から、天鎮県の、県長です。そうやって、えらくなっても、みんな、昔の関係を、だいに思ってくれるのは、ありがたいことです。

## NO. 385 ダイエット日記 2006. 10. 30

私の性格と、行動は、合理主義には、ほど遠いもの。深くは考えず、計画性も乏しく、そのときのインスピレーションにしたがって、パッと、動いてしまいます。パツというほど、勢いも、決意もなく、つい、フラフラっと、いったところ。それでも、大きく、しくじらずにすんでいるのは、カバーしてくださっている、みなさんのおかげです。

このたびは、ごくごく、プライベートなところで、それを、はじめてしまいました。なんと、ダイエット！常識的にいえば、ゼツタイに、必要なことでした。このところ、急激に、太ってましたからね。

大学生のころ、私の体重は、50kg を、切っていました。46～48kg くらい。身長は、167cm ほどですけど。ウエストなんて、66cm で、いちばん細いズボンを、さらに、詰めて、はいていました。そのころは、顔つきも、性格も、とんがってたんですね。神経質で、ピリピリ、してました。胃炎とか、十二指腸潰瘍とか、友だちづきあい。

だんだん、丸くなったんですね。性格、行動、そして、顔と体型。恐ろしいことに、私の DNA は、かなり危ないようです。幼少時、いつも手をひいてくれた、私のおじいちゃんは、上野の山の、西郷さんの銅像を、小型にした体型だったと、伯父、叔母から、聞かされつづけていました。私の父親も、重労働の連続でしたから、そこまではありませんけど、太っていたのは、まちがいない。それから、兄妹。やばいですね。

私は、毎年 100～120 日は、中国の大同です。数年前まで、この点では、問題は大きくありませんでした。食事に、なじめなかったのです。アワ、キビ、ジャガイモ、トウモロコシ。たまに食べると、目先が変わって、いいですよ。でも、毎日、そればかりだとね。たまに、白麵（小麦粉）の、うどんがでてくると、ほんとに、おいしくて、感動するくらい。でも、大同の農村では、コムギは、植えません。おいしい、おいしい、というのは、そこにはないものを、ねだっているようで、はしたない。

食べてる量は、ものすごいものです。日本での食事の、何倍も。その証拠は、○ンコの量。太○、長○ものが、たくさん○ます。それでも、体が、それらの食物の、栄養分を、吸収できないのでしょうか。春の滞在期間が、いちばん長くて、1か月半くらいですけど、帰ってから、体重を測ると、5kg も、減っています。この時期に、野菜がほとんどなかったことは、以前に書きました。

日本に帰ってくると、なにを食べても、おいしいんですね。私がそう言うと、つれあいは、「おいしいものを、食べさせているんです」といいます。そうなのでしょう。5kg なんて、数日のうちに、取り戻しますよ。眠っているあいだも、太っているかのよう。大同は、カラカラですけど、こちらは湿度が高いから、空気中の、水分を、取り込んでいるのかもしれない（笑）。そのくりかえしだと、そんなに、太ることもなかったのです。大きく振れますけど、振れの中心は 65kg くらい。

ところが、最近、大同の食べ物は、急速によくなりました。先日、都市下水協の人たちが、5年ぶりに大同に行きました。前回の人たちから、話をきいて、みんな心配な

んですね。食べられるものが、ないぞ、って。カップ麺、レトルトカレー、そういうものを持参したようそれが、現地に着くと、あれは、なんの話だったんだ、ということになります。加藤登紀子さん姉妹に、「食事の旅」を組んだら、といわれたくらい。

私も、ほんとにおいしいと、思いますよ。で、食べる量も、ふえます。それでも、大同にいるときは、ものすごく忙しいし、野外が主で、運動量も大きいから、太ることはありません。だいたい、同じ体重で、帰ってきます。ところが、日本に帰ってくると、こっちの食事がおいしいんですね。胃袋は、中国で、拡張しています。パソコンの前に、座っている時間が長くて、運動量が少ない。結果として、帰国後に、グツとふえます。これを繰り返せば、どうなるでしょう？最近、70kgに、かぎりなく近づいたんですね。ウエストは、87cmにもなってしまった。

で、フラフラッと、ダイエットをはじめました。まずは、100グラム刻みの、体重計を、買ってきました。9月10日のことです。それから、朝晩、測っています。PDA（携帯端末）に、専用ソフトをいれました。体重を入力すると、即座に、グラフになります。ダイエットなんて、原理は、簡単ですね。アウトプット以上に、インプットがあるから、その差が、身につくわけです。ずぼらな人間ですから、走ったり、運動したりは、苦手です。だとすると、インプットを抑えるしかない。

3度の食事を、心持ち、少なめにしています。たとえば、昼食のうどんを、以前は大盛だったのに、並にするとか。それでも確実に、体重は落ちます。1か月半で、3kgほど減り、ベルトも、穴1つ、縮まりました。しかし、一直線ではありません。グラフは、ジグザグ。友人と、飲んだりすると、てきめん、ふえます。前回の測定から、1kg以上ふえると、体重計の、アラームが鳴ります。それが多いため、困るんですね。これも、植樹と同じです。悪い結果はすぐでるけど、いい結果はなかなかでない。ふえるときは、急角度で、減るときは、ゆるゆるとです。

そんなことより、酒をひかえたらどうだ、という声があります。もっともではありますが、そんなことをすれば、自分が自分でなくなりそう。生きてることが、いちばん健康に悪い、という団伊玖磨先生の、教えもあることですし……。

これくらいのペースだと、空腹感も、ほとんどありません。慣れちゃうんでしょうね。なんてことを、書いていながら、また太ったりすると、カッコ悪いですね。こうやって、公開することで、自分を追い込む、効果を、期待しています。それにしても、フラフラッではあるけど、だれにいわれたのでもない、自分で思いついたから、つづけることができます。

私たちの実験林場「カササギの森」の入り口に、采涼山プロジェクトがあります。采涼山の山頂は、カササギの森より、ずっと奥にあり、海拔は、2,145m。南側の、ふもとにあたるので、采涼山の名を、冠しました。地元の、聚楽郷と協力して、これまで、およそ 250ha に、モンゴリマツと、アブラマツを植えてきました。グミ科の灌木のヤナギハグミと、マメ科のムレスズメを混植しています。ここのプロジェクトで実施した、マツの生育調査の結果を、今年の、第 346 号で、報告しています。

夏のツアー常連の、藤原國雄さんが、訪れるたびに、ここの写真を、撮ってくれていました。佐々木陽子さんはじめ、数人の常連が、感嘆の声をあげます。「鳥肌が立つほど、感動しました」といった人もいます。マツの大きいものは、いまでは、人の背丈を超えて、2m ほどに育っており、1年で 50cm も、伸びますから、それこそ、倍々で、緑が濃くなります。その人たちは、ここのプロジェクトに、取りかかる前をみて、写真に撮り、その後、毎年のように、訪れていますから、思いが、深いのだと思います。

たしかに、以前の姿とは、一変しました。もともと、木は、まったくなく、草も、ほとんど生えず、荒涼としていました。かなり急な斜面なので、雨のたびに、土が流されます。水も、とどまることはありません。土はやせ、水分も乏しいので、草も育ちようがない。貧弱な草を、放牧のヒツジが、毎日のようにかじる。

采涼山プロジェクトの、西の境界は、大きな谷です。カササギの森の、管理棟のそばの、あの谷。谷を 11km ほど、さかのぼると、突き当たりに、村があり、村の名は、麻地溝です。「麻地溝の羊」といえば、大同中で、知らない人はいないくらい。あの谷には、シロネ（ペパーミントのなかま）をはじめとするたくさんのハーブ、薬草が生えています。それを食しているから、麻地溝の羊は、肉に臭みがなく、おいしい、というわけ。

麻地溝の村を、数年前に訪ねると、数軒の農家しかなく、それらの家も、冬は下の村に、引き上げるそう。1軒の農家で、飼っているヒツジは、せいぜい百頭ほど。合計でも、数百頭といったところでしょう。市場にでる「麻地溝の羊」は、そんなものであろうはずがない。ニセモノがでるくらいなんですね。麻地溝村そのものでなくても、同じエサを食べていれば、大差はないはず。この一帯では、ヒツジの放牧が、盛んでした。カササギの森で、植樹のための、作業道をつけたんですけど、最初の年、「これじゃあ、放牧のために、道をつけたようなものじゃないか！」と、私はなげいたものです。

「雨期整地」というテーマで、以前に紹介したように、等高線に沿って、溝を掘り、

土手を築けば、雨水は、土中に蓄えられ、土壌の浸食が止まります。これだけで、草の育ちは、格段によくなります。そして、植林がなされると、放牧は禁止されます。完全に、ではないですよ。でも、公々然とやっているのと、こっそりやるのとでは、その数も、影響も、異なります。この2つが重なることで、草の繁茂がはじまります。

マツも、植えて3~4年は、生育が遅いんですね。しかも、私たちが植えるのは、地上部がせいぜい15cmほどの、小さな、頼りないもの。なかなか大きくならないで、じれったいものです。ところが、5年あたりから、急に伸びます。なかには、1年に50~60cmも伸びるものがある。2mほどに育ったものは、1999年に整地し、2000年春に植えたもので、このプロジェクトの2年目のものです。翌年から、日中緑化交流基金（小渕基金）の助成を受けて、規模も拡大しました。

このプロジェクトの成功には、何よりも、人の要素が、大きかったと思います。地元の聚楽郷の党書記に、張春が就任したのは、スタートの翌年です。この人が、緑化事業に、とても熱心でした。全国の労働模範に、選ばれたくらい。いつも現場に出て、陣頭指揮をとり、まっ黒です。まあ、無類の酒好きで、飲んでるスキに、くるまを盗まれたくらいですから、半分は、酒焼けかもしれません。この地方には、「植樹3分、管理7分」という、言い方があります。植えるのより、あとの管理がたいせつ、というわけ。ところが、張春は、「植樹1分、管理9分」といっていました。いい時期に、いい人がきてくれたのです。

私たちの、拠点林場を、ここと地つづきに、つくったのは、張春がいたからです。ところが、カササギの森の、着工と前後して、大同州政府の幹部として、デスクワークにつく話が、持ち上がりました。彼は、まだ、現場のしごとをしたかったのです。それを知って、私たちは、大同市の副市長に働きかけ、彼をひきつづき、聚楽郷の党書記に、残してもらいました。その後、張春は異動し、いまは大同県の水務局長です。

あるプロジェクトが、どれだけ注目されるかは、成功、不成功のほかに、べつの要因も、関係します。ツアー参加者に、注目されるようになったのは、このプロジェクトの奥で、「カササギの森」がはじまり、ツアー参加の日本人は、かならず、この采涼山プロジェクトを、通過するようになったからです。

それから、ここのプロジェクトの成功を見て、隣接地に、北京・天津風砂源改善の、国家プロジェクトが、やってきました。面積は1,000haで、規模はずっと大きい。北京、天津からみると、大同は、風砂の吹き出し口です。重要な地点であるため、緑化にかんする全国規模の会議が、しばしば、大同で開催されます。そのさいに、現場見学会が、きまって、この采涼山で、開かれます。プロジェクト内の作業道は、雨のたびに流されて、ツアーのバスがはいるのに、苦勞していたんですけど、会議参加の、

えらい人がくると、道路修理がひんぱんになされます。おかげで、私らは、大助かり！

冒頭の、藤原さんから、叱られました。成果があがっているのに、どうして宣伝しないのか？ って。彼も、写真を提供してくれたんですけど、さがしてみたら、ありました！1999年春の、起工式の写真。サントリー労組らしい、日本人1組と、地元の子どもたち。村の大人たちが、もっといたはずですけど、写っていません。「采涼山緑化工程開工儀式」の、布の横幕が、1枚あるだけ。地味だったんですね。その前後の写真をもても、木はないし、夏になっても、草もまばら。

じつは、このプロジェクトは、武春珍が、大同事務所にきて、自分で手がけた、最初のプロジェクトです。計画にあたって、技術者を呼んで、判断を求めたところ、条件が悪すぎる、とあって、全員が反対したそう。

第一に、ここは、南面です。この地方では、日の当たる南面は、乾燥がひどくて、植物が、育ちにくい。それ以上に、草も生えていないようすをみれば、避けたほうがいいと思うのは、当然でしょう。おそろおそろの、スタートだったのです。この起工式にも、それが、あらわれています。

7～8年のうちに、風景は一変しました。この劇的な変化は、たしかに、見た目に、訴えます。その写真を、ホームページに掲載しました。「大同での緑化協力」→「地球環境林」→「采涼山プロジェクト」と、たどってください。

## NO. 387 采涼山のアミタケ 2006. 11. 10

采涼山プロジェクトについて、もう1回、書かせてください。このプロジェクトは、武春珍が、大同事務所に所属して、最初に、自分で手がけた、プロジェクトです。特別の思いが、あるようですね。現場で、彼女が、紹介をはじめると、なかなか、止まりません。

そのさいに、かならず話すのが、数人の、林業技術者に、現場をみてもらったら、条件が悪すぎるとあって、全員が反対した、ということです。それなのに、高見は、困難に挑戦するのが好きだから、こんな場所を、あえて選んだ、と彼女はつづけます。それは、事実ではありません。大同で、この事業をはじめたとき、多少はそのような気持ちが、私にも、ありました。

たとえば、天鎮県の李二烟村で、プロジェクトを計画したとき。よその村の人からは、「あそこの村には、もうクズしか残っていないから、なにをやっても、うまくいく

はずがない」と、忠告されたのです。そのとき、私は「なにを！」と思いましたし、そういう困難なところで、成功させてみたいと、思ったのです。でもね、この大同の農村は、特別に恵まれた、ごく一部を除けば、どこを選んでも、困難なんですよ。ラクをしたいとは思わないけど、わざわざ困難を選ぶなんて、そんな気持ちは、とっくに卒業しました。

采涼山の、最大の問題は、ここがすべて、南面であることです。乾燥する南面は、植物が育ちにくい。そのうえに、大同の農村には「陰坡的松樹、陽坡的柏」という言い方があります。日陰斜面にはマツ、日向斜面にはコノテガシワ、です。マツを、南斜面に植えることじたい、常識はずれ。でも、そうせざるをえないのは、大同には、もう、陰坡が、残っていないからです。なにを、神さまが、つくりまちがえたか、この地方の山は、みんな、北斜面は急峻で、南斜面がなだらか。北斜面の面積は少なく、すでに緑化が終わっています。これからの課題は、南斜面をどうするか、なんですよ。

武春珍の話に、私が、そのような「補足」をしていて、マツの根本に、キノコを、発見しました。アミタケです。やったあ！

日本からもちこんだ技術に、「菌根菌」による育苗があります。むずかしい采涼山の緑化が、このようにうまくいったのには、それが大きく、やくだっています。日本の第一人者＝小川眞さんが、わざわざ大同にきて、育苗方法を、指導してくれました。1997年春のこと。環境林センターで、テストしたところ、たった4か月で、マツの苗は、ほかの苗の、2倍に生長しました。その翌春から、大同県国営苗圃の一角を借り、実用化しました。

菌根菌は、キノコやカビのなかまで、植物の根と共生します。栄養は、植物からもらい、そのお返しに、植物の根と、土との結びつきを強めて、水やミネラルの吸収を助け、病菌や寒さなどから、根を守る働きをします。菌根菌のついた苗は、ちょっとぐらい振っても、土が落ちませんよ。

そのさいに、利用したのが、アミタケ。采涼山のお向かいの遇駕山や、大同県城のすぐ東の山の松林の表土を集めてきて、苗床の土に混ぜました。いくらかの、木炭の粉といっしょに。それらのマツは、1985年ごろに植えられたもので、20年以上たち、キノコが生えるようになっていました。表土には、キノコの胞子が、はいってますからね。

育てた苗に、菌根菌がついているのは、根を調べて、わかっていました。フワフワの、白い、綿クズのような、菌糸を、肉眼でもみることができます。その苗を植えたのですから、采涼山の植林地には、菌根菌が、繁殖しているはず。

根を掘ってみれば、わかるんですけど、  
めんどろをきらって、私はやっていませんでした。

こうやって、アマタケがでてきているのは、菌根菌が、繁殖している、証拠です。一般の植物の、花や実にあたるものが、キノコですからね。あの傘の裏に、たくさんの胞子を、つけているわけです。菌体が、大きく育っていなければ、キノコがでるはずがない。

つぎのツアーを案内したときも、よく育っているマツの根元を探すと、ありました、ありました！私がみつけれないときは、ツアーのメンバーが、みつけてくれます。菌根菌が繁殖すると、ほかのマツにもつぎつぎに感染し、木と木をつなげていきます。マツの生育ぶりに、かなりの差がでる、原因のひとつに、菌根菌のつき方が、かかわっているよう。小川さんは、あのとき、マツの根を掘って、教えてくれました。よく育っているマツには、かならず菌根菌がついていました。育ちの悪いものは、ないか、とても少なかった。いまみても、アマタケは、特別によく育った、マツの根元にしか、生えていません。ところが、菌根菌によって、木と木が結びつけられると、全体の木の生育がよくなり、育ちぶりがそろってくるそうです。

アマタケは、食べても、とてもおいしいですね。野生のキノコのなかで、私は、いちばん好きです。以前は、もっともポピュラーな、キノコでもありました。日本でのことですよ。ただ、消化がよくないようで、どんぶり一杯も食べて、私は、激しい下痢をしたことがあります。でも、その翌日には、もう、やめられない。ところが、日本で、このアマタケが、減ってきました。めったに、みることはありません。

采涼山に、アマタケがでてきて、楽しみが増えました。そのうちに、口と舌も、楽しませてやりましょう。そんなことを考えていて、自分で写真を撮るのを、忘れていました。残念！

## NO. 388 山西の醋（す） 2006. 11. 16

東京における、11月11日のセミナー、250名近いかたに、おいでいただいて、盛会でした。あんなにご出席いただけるとは、思っていませんでした。ほんとうに、ありがとうございます。私は、35年ぶりに、顔をあわせた人もあって、開会前に、ちょっとウルウル。

何号か前に、山西省の麵、について書いたら、思いがけぬ、たくさんの反響がありました。2匹目の、ドジョウをねらって、また食べもの。麵とならぶ、山西省名物とな

ったら、醋（す）です。日本では「酢」ですけど、中国では「醋」で、意味は「昔の酒」。糖分を、アルコール発酵させると、酒になり、酒を、さらに酢酸発酵させると、醋になります。昔は酒だった、というのは、理にかなっています。といったことは、私の、かつてな解釈。

「北京的醤油、山西的醋」という言い方があります。醤油は北京、醋は山西、というわけ。広大な中国には、地方、地方に特産があって、列車が、地方の、代表的な駅に停まると、土産物屋がホームにいますし、乗客も、競って購入します。そういう風景が、以前はみられたんですけど、スピード優先のいまは、消えてしまったのでしょうか？日本の酢のメーカーが、中国に進出したとき、「醋は、中国のものが、おいしいです。日本の醤油は、独特ですから、醤油のほうが好きでほしい」といった、日本通の、中国人がいました。

私が、山西省で、最初に訪れたのは、太原です。1970年代初めのこと。航空便の、乗り継ぎの関係だったのでしょうか。北京→太原→延安のコースの、中継地になりました。大寨にむかうとき、太原を経由したこともあります。わずかな時間をつかって、晋祠などを見学しました。市内を回ると、異様な臭いがありました。もともと中国の料理は、私の好みに、あわないんですけど、食べられない、というほどじゃない。でも、そのとき、のどを通らない、料理に、はじめてあいました。原因は、におい。その正体が、あとになって、わかりました。醋です。

地元の人にきくと、原料は、アワ、コーリャン、オオムギ、マメ……。いろいろなものがあります。ダツタンソバ（苦蕎麦）を、原料にしたものもあります。デンプンがあれば、いいですね。糖にかえて、その後、時間をかけて、発酵させます。そして、かなりの期間、寝かせる。老陳醋と呼ばれるものは、少なくとも、3年は寝かせるそう。「陳」は、古いとか、昔の、という意味。そのうえに、「老」が、重ねてあるわけですからね。古ければ、古いほど、貴重だそうで、何十年ものも、あるようですね。同じ醸造所のものでも、「老陳」は、コクがあり、特別に酸っぱい！ずっと、濃縮されるわけですね。書いているだけで、つばがでできます。

発酵は、大きなカメのなかで、すすめるようです。すみません。今回は、「ようです」という表現が、やたらと多い。醋を、たくさんつくっているのは、太原を中心とする、山西省の中部です。大同でも、つくっているかもしれませんが、その現場を、私は、みたことが、ありません。スーパーにいくと、たくさんの種類の、醋がならんでいますが、そのすべてが、太原周辺の産。

濃縮するほど、醋は、コクがでて、通には、歓迎されますが、どうやって、濃縮するのでしょう？これは、聞いた話で、真否の保障はできません。寒い地方なので、冬

は、カメのなかの、醋の表面に、氷が張ります。凍るのは、基本的には、水だけ。氷を割って、外に取り出します。そのぶん、醋は、濃縮されます。また、氷が張ります。割って、取り出す。それを繰り返すと、醋は、どんどん濃縮される、というわけです。

レストランなどで、食卓につくと、取り分け皿のよこに、小皿があります。うえに、レンゲが乗っていることもあります。客が席につくと、服务员は最初に、その小皿か、レンゲに、醋を、注いで回ります。まっ黒で、醤油と、区別が付きません。なかには、注がれた醋を、飲む人がいます。食がすすみ、健康にいいといいます。ときどき、私も、挑みます。

しかし、醋を飲む、「喫醋」というのは、異なる意味があります。「焼きもちを焼く」ということのように。皇帝と、皇后か、妃にかかわる話を、きいたのですが、内容を、忘れてしまいました。

同じようなことに、「緑帽子」があります。緑の帽子は、「女房を寝取られた男」の意味。1997年のことですが、テレビ朝日の取材があったとき、その直前にきた、どこかの企業のツアー参加者が、緑色の帽子を、私にくれました。放映された番組にも、長時間、映っています。それをみて、中国の友人が、笑うのですね。そして、意味を、教えてくれました。緑化協力ですから、緑はシンボル色。わざわざ、緑の帽子を、そろえてきたグループだって、あるんです。お気の毒。

食卓につくと、地元のホストが、まずは、醋をすすめます。なににでも、醋をつけたり、かけたりすると、おいしいし、健康にもいい、というのです。長々と、講釈をはじめると、いないわけじゃない。でも、北京からきた、ある幹部は、「山西人が、醋の、強要をやめたら、これほど、田舎もの扱いされないだろうにね」と、いいましたよ。すきじゃない人も、もちろん、いるのです。

あれはね、臭いですよ。臭いというのは、好き嫌いが、はっきりします。山西の醋を、日本に持ち帰って、どんな料理にでも、少量いれると、すべてが、中華風になります。おすまじだつて、中華スープに変わる。小さな、おちょこ風の、小皿に入れて、部屋の隅におくと、すてきな香りに、満たされるのだそう。これは山西の人から、ききましたけど、私は、遠慮したい。

スキな人は、スキなんですね、日本人でも。「せっかく山西にいくんだから、ぜひ！」と、頼まれることもあります。スーツケースに入れて、持ち帰ります。税関は、問題ないと、思いますよ。大問題は、容器の、ふたです。ガラスビンも、プラスチック容器も、たいていは、もれます。飛行機の減圧には、ゼツタイに、耐えられません。それどころか、列車に積んで、北京に出るまでに、スーツケースのなかで、もれてしまう。

それを始末しているうちに、あの臭いを、ホテルの廊下まで、充満させたことがあります。

NO. 389 あんちょこ 2006. 11. 27

佛教大学の、吉田富夫さんから、電話がありました。久しぶりに、きく声です。京都の集りで、中国の水について話せ、ということ。私の書いた、短いものを、読んでいただいたそう。25日の、土曜日に、でかけてきました。何人もの、なつかしい顔とであって、うれしかった。

話し終わったあと、質問がつづきました。中国北部では、急速に、水がなくなっているんですけど、その原因はなにか、ときかれました。丸顔の、年配の、いかにも学者らしいかたです。いろいろ考えられるけど、たしかなことは、私にはわかりません、と答えました。それでも、また同じ質問を、くりかえされました。わからないものは、わからないんですね。つっけんどんな、答えだった、と思います。

会が終わったあと、そのかたが、会場の入り口で、名刺を、くださったんです。「竹内實」とありました。まいったなあ。出席していた人たちは、私を、よほど横着な人間だと、思ったでしょうね。アカデミズムの世界とは、私は、縁がなく、これまで、お目にかかったことが、ありません。竹内先生は、そのあと、私が、日中友好協会の機関誌に、連載している「黄土高原レポート」について、「読んでいます、参考になります」といわれました。

その一言で、私の頭は、急回転しました。竹内先生は、私にとっての、大恩人なんですよ、じつは。1冊の本をつうじて。それは、『中国生活誌－黄土高原の衣食住』とあって、大修館書店の刊行で、初版は1984年。羅濛明さんという中国人と、竹内先生との対談です。羅先生が、大同と近い、朔県の生まれで、幼少年期の思い出を、克明に話されています。羅先生は、「竹内さんの〈誘導尋問〉によって、わたしの子どものころの記憶がひきだされました」と、あとがきに、書いています。いい聞き手が、あったらこそ、だったんでしょう。

私たちが、大同の農村で、緑化協力をはじめてまもなく、清田祐一郎さんが、この本を、教えてくれました。あそこ、中国の農村についての知識は、皆無でしたからね。「農業は大寨に学べ」といった、キャンペーンをつうじて、知ったつもりになった農村と、自分の目でみた農村とは、まったく、べつのものでした。すべてが手さぐりです。

羅先生は、1920年の生まれで、この本に書かれているのは、かなり以前のことですが、それが古くないんですね。朔県は、この地方では、大きな町です。いまは朔州市の中心で、大同以上に、近代的な街。何十年前であることが、僻地の農村を、理解する助けとしては、むしろ、よかったです。くりかえし、くりかえし、読みました。いまでも、ときおり、引っ張りだします。出版社に、残っていたのを、何冊も買って、人に、すすめたりもしました。ひょっとすると、私が、いちばんいい読者かもしれないですね。なにしろ、現場をみていますから……。それにしても、すごい、観察力、記憶力ですね。自分でも、こうやって、雑文を書くようになって、そのすごさを、改めて感じます。

裕福な家庭だった、でしょうね。羅さんが、生まれ育った家は、630坪もあり、院子（中庭）の2つある、「両進院」だったそう。にもかかわらず、「いえ、これは山西省ではふつうの大きさの家です。わたしの町ではこれより大きな家はいくらでもありません」とおっしゃる。私が体験した、雁北の農村とは、まるで別世界。へんに聞こえるかもしれませんが、だから、いいですよ。視野が広くて、生活に変化があり、さまざまなことが語られる。まずしい農村の生活だったら、平板で、1冊の本になる、なんてことが、ないでしょう。両者をくらべることで、歴史観にも、広がりができます。

私は、この本をつうじて、

この地方についての、知識をもっただけでなく、それを、けっこう、利用させてもらいました。この本の受け売りをして、これはこうだろう、と話す、「どうして、おまえは、そんなことまで知っているんだ！」と、地元の人は、びっくりしますよ。話の糸口ができ、親近感にもつながった、と思います。あんちょこ、です。

なかにはね、「ほんとかな？」と思ったことも、あります。こどもの羅濛明さんが、大人たちにつれられて、谷の道を、進んでいるとき、山のほうで、暗くなり、雨が降ってくる。死に物ぐるいで、みんな、逃げました。「その雲のうしろにかくれて、水、まっきいろい、黄土色の水がおしよせてきた。ちょうど二、三階だての建物が前進してくるみたいにやってくる」というんですよ。

いまでは、そのとおり、私は、信じます。2003年7月、カササギの森にある谷で、土石流がおき、下の聚楽村では、4人の犠牲者がでました。あ那时的土石流は、深いところで、4mもありました。体験者の証言が、羅さんのものと、変わらないんです。今年の夏、羅さんの故郷、朔州で、私も、1時間80mmの、激しい雨に、みまわれましたよ。カミナリもすごかった。

竹内先生に、話しかけると、こんな話が返ってきました。文化大革命の時期、中国に、いけなかったんですって。中国人のいるところが、中国だと考えて、あのような

対談を、計画されたそう。何年もつづいた、長い対談だったそうです。本にまとめるには、ずいぶん苦勞があったとのこと。出版社は、シリーズで、出したかったようですが、あとが、つづかなかった。最初のものの、できがよすぎると、二番手は困るでしょうね。

あの本のなかで、私が気づいたこと。地方の主食として、「莜麦」がでてきます。以前、私はこれを、エンバク（燕麦）＝カラスムギと、紹介していましたが、ただしくは、「ハダカエンバク」と、いうのだそう。その本には、和名は、でていません。また、イラストが載っていますけど、あれはべつものです。

## NO. 390 大同、空からの旅 2006. 12. 04

のぞき見って、やらしいよね。でも、やらしいことほど、やってみたい気もします。その最大、最悪のものが、Google Earth なのでしょうね。人工衛星で、世界中を、のぞき見する。よその国を、一方的に、ここまで、のぞいていいものか、国によっては、拒否反応が強いようですし、その気持ちが、わからないではありません。でも、存在する以上は、一部の人に独占されるより、広く利用したほうがいい、という考えも、なりたつでしょう。最近、日本語版も、準備されましたので、可能な方は、この機会に、試していただきましょうか。Google Earth のサイトから、ダウンロードして、インストールします（無料）。Macintosh も、OS10. 3. 9 以降なら、対応しています。

今回、ご案内するのは、私たちの協力プロジェクトです。大同は、「Datong」と、表示されています。北緯 40 度 05 分 33 秒、東経 113 度 17 分 07 秒のあたり。秒の小数点以下は、省略することにします。付近を、探してみてください。ここは、大同市街の中心部で、すぐ南が「広場」です。広場の北側に、大きな建物があり、これは展覧館。北京の人民大会堂を、模して、設計されたそう。この夏から、大がかりな、改修工事中です。

解像度が、高いことに、驚かれるでしょう。車は、1 台 1 台、識別できますし、歩いている人の影まで、みえます。大同周辺も、最近、画像のバージョンアップがあり、市街地を中心に、高解像度になりました。でも、そうでないところもありますので、このたびは、解像度の高いところを中心に、ご案内いたしましょう。

そこから真東に、進路をとります。北緯 40 度 05 分 32 秒、東経 113 度 19 分 09 秒、ここは御河にかかる、橋です。御河は、大同市街の東の外れを、北から南に流れる河で、桑干河の、最大の支流。でも、よくみてください。水があるところは、ごく一部。河の西岸が、最近、整備されて、御河生態公園になりました。公園には、水がほしい。

でも、流れるだけの、水がない。そこで、河をせきとめて、プールのようにしました。

さらに、東へすすみ、北緯 40 度 06 分 34 秒、東経 113 度 25 分 11 秒のあたりをみてください。小さな建物が、あります。2004 年 9 月から、建設中の「白登苗圃」の、管理棟です。国際協力機構（JICA）の、草の根技術協力によるプロジェクト。すぐ東にある、小さな建物は、井戸です。管理棟の南側が、苗圃になっており、マツ、トウヒなど、主に針葉樹の苗を、育てています。苗畑のあいだに、通路があり、通路の両側に、点々と、なにかが、植えられていますね。あれは、昨年春の、ツアーの人たちが植えた、シダレニレ。これくらいの解像度になると、1 本 1 本、数えることも可能です。

管理棟の北側に、いま果樹園を、造成中です。来春から、果樹を植えて、私たちの協力プロジェクトの維持管理費を、稼ぎだすつもり。でも、それは、画像には、でていませんよ。ことわるまでもなく、これらの画像は、リアルタイムではありません。

その北西、北緯 40 度 08 分 24 秒、東経 113 度 22 分 42 秒のあたりが、かの有名な、白登山です。いまは、名が変わって、馬鋪山。漢の高祖・劉邦が、匈奴の冒頓単于によって、7 日 7 晩包囲され、命からがら、逃げ延びたところ。紀元前 200 年のことです。白くみえているのが、大同市政府による、記念碑だと思いますが、はっきりしません。苗圃の名前は、この山にちなんでつけました。

北緯 40 度 11 分 01 秒、東経 113 度 32 分 49 秒をみてください。この建物は、実験林場「カササギの森」の、管理棟です。建物の、すぐ東に、円形の穴がみえるのが、「大寨に学ぶ運動」でつくられた、貯水池の跡ですね。そのなかにある、小さな建物は、ニワトリ小屋。ニワトリを放し飼いすると、虫を食べて、いいんですけど、鳥インフルエンザのおかげで、いまは中断しています。

すぐ東に、大きな谷があります。ツアーに参加した人は、あの谷をみながら、このプロジェクトの、紹介を受けたはず。谷を、北のほうに、さかのぼってください。しばらくいくと、解像度がさがりますね。そのかわりに、緑が濃くなります。そして、海拔の表示をみると、山が高くなります。いちばん高いところが、采涼山。その北側を中心に、緑が多くあるところが、「長城林場」です。植えられているのは、主としてカラマツ。もう 40 年以上たって、大きく育っていますよ。「白登苗圃」でがんばっている、馬占山さんは、現役時代、この林場の、場長でした。

そこから南に、目を移します。北緯 40 度 09 分 55 秒、東経 113 度 33 分 09 秒。ここは、地元の聚楽郷と協力して実施した、采涼山プロジェクトです。采涼山のふもとに、位置するので、そう名付けました。250ha 弱に、モンゴリマツと、アブラマツを、植え

ています。グーッと接近してもらおうと、それらのマツがみえるはずですが、縞もようにみえるのは、植えられたマツによるもの。大きなプロジェクトであることを、空の上からでも、わかってもらえるでしょう。

そこからすぐ北西、北緯 40 度 10 分 15 秒、東経 113 度 32 分 49 秒のあたり、なにが、みえますか？近寄ってみると、文字ですね。「生態建設富国利民」とあります。石をならべ、それに石灰を塗って、山の斜面に、大きな文字を、書いたわけ。こうやってみれば、だれのために書いたものか、わかりますね、うふふふふ。そのすぐ左下に、円形のものが見えるのは、展望台。このプロジェクトは、いまやこの地方のモデルであり、全国からの、視察があります。

すこし、遠ざかってみてください。中国でいうところの、「水土流失」の深刻さが、わかると思います。山の土が浸食され、谷沿いに流れ出ているようすを、現場でみる以上に、生々しく、感じませんか。ここでの緑化の、主たる目的が、水土流失の防止にあることを、ひと目で、わかってもらえるでしょう。

さらに南、北緯 40 度 07 分 42 秒、東経 113 度 32 分 45 秒のあたり。同心円状に、緑の縞があります。それから、その周囲にも、緑が広がっていますね。ここは地元政府が、1985 年に植えた、遇駕山のプロジェクトです。面積が、930ha もある、マツの一大造林地。いまは亡き、大同事務所の技術顧問、侯喜さんが先頭でとりくみ、誇りにしていた、プロジェクトです。

そこから西に、大同の市街地を飛び越えて、北緯 40 度 01 分 50 秒、東経 113 度 11 分 24 秒。アップにすると、なにがなんだか、わかりませんね。じつは、ここが私たちの拠点、環境林センターなんですけど、残念なことに、一步だけ、高解像度域から、はずれています。それから、北緯 40 度 06 分 44 秒、東経 113 度 07 分 11 秒。ここは雲崗石窟ですが、ここも解像度が低くて、よくわからない。

まだまだ、ご案内したいプロジェクトは、たくさんあるんですけど、大同市街地から、遠いところは、解像度が低くて、よくわからないんですね。地図との照合も、むずかしい。そんなわけで、またの機会と、いたしましょう。

## NO. 391 雪があれば… 2006. 12. 14

事務所では、ずっと Macintosh をつかってきました。長く、つかいこんでいます。石原さんから、より新しいものをいただいたのを機に、それまでのものも、OS を 10.3 に入れ替えたのです。すると、ディスプレイの表示が、おかしいのです。文字がにじ

んで、かすんで、とても実用にならない。イライラしてきて、5階の窓から、投げ出されたくになります。どうしたらいいか、ご存知のかたは、教えてください。

例年、12月に、大同にいきます。外での活動はできませんが、そのぶん、じっくり話ができます。ことしは、早くから計画しないでいたら、虫食いのように、スケジュールがはいつて、身動きが、つかなくなりました。しかたがないので、年明け早々から、ということにします。考えてみると、この協力事業のスタートは、1992年1月の、現地訪問ですから、まさに満15年。そして、1月に中国を訪れることは、めったにありません。

ついでにいいますと、この15年、私は中国に、年間100~120日、滞在し、どのシーズンも、体験してますけど、春節（旧正月）に、訪れたことは、ありません。それだけじゃない。最初に、中国を訪れたのが、1971年ですから、もう35年になりますけど、春節には、訪れたことがない。なんといっても、しごと中心だったんですね。春節に、中国にいても、実際のしごとは、なにもできないじゃないですか。薄志弱行の私は、なにかを貫くということが、あまりないので、せめて、これくらいは、つづけたいと思います。春節の中国には、いかない！

大同の1月は、年間で、いちばん寒い、季節です。月平均気温が、マイナス10度くらい。歴史上の、最低気温は、マイナス30度です。寒いんですね。緯度は、北緯40度ですけど、大同の中心部でも、海拔が1000mを、超えていますからね。緑化にとりくむ、山となると、もっと低温になります。

寒いですよ、と私が話すと、日本人からは、「雪は、どれくらい、積もりますか？」と、返ってきます。ところが、雪は、ほとんど、ないのです。10月から、少なくとも、3月までは、気温のうえでは、冬ですけど、この間の降水量は、かぎりなく、ゼロに近いのです。まったくといっていいほど、降りません。

乾燥していると、体感的には、それほど、寒く感じません。風がなく、陽がでていれば、零下10度くらいは、いい陽気です。農村の老人たちは、外にでて、ひなたぼっこをしています。私も、かなりの薄着で、ウロウロ。

風があると、事情は、まったく異なります。手元の表によると、マイナス8度のとき、風速が2m/秒だと体感気温はマイナス11度、風速が5mだとマイナス20度、8mだとマイナス24度、11mだとマイナス29度というふうに、極端に、下がるようです。そのような、モーレツな体験を、私も、張家口市張北県の、地震被災地で、したことがあります。このとき、私の「勇敢さ」は、一瞬で、砕けました。

本題から、それてしまいましたので、あわてて戻します。日本人の感覚では、寒いイコール雪、となります。寒ければ、寒いほど、雪が多い。雪がないのなら、そう寒くはない、という感覚。ところが、そうじゃないんですね。

たとえば、雪が50cmも積もると、地表面の温度は、0度あたりに、とどまるそうです。厚いフトンを、かけているようなものなんですね。雪でつくった、カマクラのなかが、温かいのと、おなじでしょうか。

大同のように、雪がなくて、零下30度とかになると、大地が凍ります。土中の水分が凍って、カチンカチンになります。スコップも、ツルハシも、はじき返されます。大同のばあいは、深さ1.2mくらい、凍結するそうです。ですから、農村でも、水道管を埋めるときは、1.5mくらいの深さに、埋めます。どういうわけか、水道のある村でも、家屋のなかまで、水道を引いている家は、まず、ありません。たいていは前庭に、蛇口があります。地表にでていると、冬季は、凍結しますから深さ1.5mほどの、井戸のような穴を掘り、そのなかに、ゴムホースの先についた蛇口を、しまい込んでおきます。ロープが結んであり、必要なときに、引き上げるわけ。

私なんか、雪があれば、と思うんですね。雪があれば、土が凍りませんから、植物の越冬が、ずいぶんラクになるはずです。たとえば、いまは植えたばかりの、マツの小苗は、秋の終わりに、土をかぶせるわけですよ。そして、春先、寒さがゆるんでから、掘り出します。そうしないと、乾燥した、寒い強風を受けて、枯れてしまいます。冬は休眠してますから、太陽光がなくても、枯れはしません。積雪があれば、そんな作業は、必要なくなります。天然の、樹木の芽生えも、同じように、雪で保護されるでしょう。

それから、積雪があれば、春の水不足も、ずいぶん緩和されるでしょう。山のうえに、ため池があるようなもの。山の高いところに、自然林が再生しているのは、積雪のあるなしも、大きく、影響しているでしょうね。

というようなわけで、日本の北海道や、日本海側で、雪の多いことは、悪いことばかりじゃ、ないんです。寒いにもかかわらず、雪のないところは、べつの問題を、かかえこみます。

私が、いくら雪がほしいと思っても、自然現象ですから、ないものねだりにすぎません。でも、ある年、大同にめずらしく、雪が降ったんですね。農村にでかけたとき、私が「おめでとう。ことしはきっと、豊作でしょう」といいました。そしたら、地元の農民から、返ってきました。「この地方では、雪の年は、早魃になります」って。うまくいかないものです。

## NO. 392 失敗を語る 2006. 12. 18

「講演と原稿の依頼、そして酒の誘いは、ことわりません」なんて、いったのが、よかったのか、悪かったのか。おおぜいのまえで話す機会が、ここ数年は、年に30回以上あります。そのうちの半分以上が、じつは、東京を中心に関東。オープンな集りのばあい、毎回のように出席される年配のかたが、おられます。恐縮する私に、いわれるんですね。「NGOも、長くつづいて、ある規模になると、話が、つまらなくなります。でも、あなたは、まったく変わらない」と。

私にだって、わかります。長くつづくと、守らないといけないものが、多くなります。あちこちに、気もつかわないといけない。ですから、私の話が、そのように、いわれるのは、ほめられたこと、ではないでしょう。いつまでたっても、大人になりきれない、ということです。何度も、何度も、ききにくる人がまじっていると、ありがたいことでは、ありますけど、話をする立場からいうと、やりにくいですね。

大同の、私たちのプロジェクトは、いま、成長期ですから、1年のうちにも、どんどん変貌します。実際の姿を、そのとおりに話せば、マンネリにならないでしょう。ところが、このたびは、11月11日に、JICA地球ひろばにおけるセミナーで、話をしました。11月28日には、日本経団連自然保護協議会と、世界銀行情報センター主催の、コーヒーアワーで、話をする事になったのです。9月30日にも、ちょっと話しましたし、6月にも、そういう機会がありました。つづけて出席される人が、あるはず。ガラッと内容を、変えたい。

失敗談を、話すことにしました。しかも、1時間半にわたって、それだけを。まあ、一般的な状況を、知ってもらうため、最初に、ちょっとだけ、パワーポイントによるスライドを、みてもらいましたけど。そのあとは、初期の失敗、さまざまな困難、最近もあった、信じられないような失敗、もっぱら、そういうことを話しました。

きいてくださっているかたの、気持ちは、顔を見ていれば、だいたい、わかりますよ。おもしろいと、思っただけだ、はずです。他人の失敗は、そもそも、おもしろいです。へたな自慢話より、役に立つことが、多いと思います。

外務省が派遣した、ODA民間モニターの報告書が、15日に届きました。この8月に、大同のプロジェクトに迎えたのです。1日余りの、わずかな時間ですので、どこまで理解してもらえたか、不安でした。でも、ずいぶん高く、評価してもらっています。何人もの人が、書いているんですよ。最初に、私たちのプロジェクトをみたときは、砂

漠を想像していたけど、なんだ、ずいぶん緑があるじゃないか、と思ったんだそう。そのあと、いろんな失敗と困難の体験を、私からきいたり、ビデオにでてくる、事業実施前の風景をみて、「それこそが、15年の成果であり、失敗と、試行錯誤の末のことだと、理解しました」とあります。ありがたいですね。

このときも、失敗や、困難の話をして、よかったのです。いくら緑が濃くなったといっても、日本の山とは比べものになりませんよ。中国にきたばかりの人が、私たちのプロジェクトをみても、「たいしたことない」と思って、あたりまえ。その背後にある、失敗や試行錯誤は、目にはみえませんがね。

でも、一般的にいえば、そういう話は、しにくくなっています。ここ数年、シンポジウム、フォーラム、ワークショップ、ダイアログ、それと、なにかの学会。呼び方はさまざまですが、出席の機会を、たくさんもらい、議論をきき、私も発言しています。世間のせまい私にとっては、勉強になることが多いのです。でも、以前とは、傾向が、変わってきているように、感じます。成果が、強調されます。ほんとの成果なら、それでいいんでしょうけど、私が理解できる分野の話を、注意してきいていると、小さな島ひとつで、その周囲を広く領海にするような、議論があります。逆に、失敗の話なんか、ほとんどでません。そんななかで、私が失敗の話をすると、私1人が、バカじゃないですか。

帰りの電車のなかで、高名な先生に、話しかけました。私が気にするくらいですから、よくござんじでした。いまや、大学のキャンパスにも、「成果主義」が及んで、つぎつぎに、成果をださないと、いけないのだそう。じっくり時間をかけて、新しいことにも挑戦して、というふうには、なりにくいようです。

失敗を、自慢話のようにする私に、世界銀行の、大森さんから、質問がありました。そのとき、資金提供者に、どのように報告したんですか、と。さすが！痛いところを、突いてきますね。まずは、ほおっかむりしました。ごめんなさい。事業報告は、その年度の事業についてですから、翌年以降に、全滅したものについて、リアルタイムに、文書では、報告しませんでした。

それから、もう1つは、初期から、複数のプロジェクトを、同時並行ですすめたんですね。私は、広げたくなかったけど、現地のカウンターパートが、それを強く望みました。どの県にも、協力プロジェクトがあれば、青年団の活動として、すすめやすい、といって。なかには、比較的うまくいくプロジェクトもあったので、そこに目をむけることで、つらく、苦しい時期を、生き延びたわけですね。結果的に、リスク分散に、なっていました。

小さなプロジェクトを、あちこちにつくったことで、べつのメリットもありました。私たちの活動は、見方を変えれば、実験でもあります。いくつものプロジェクトを、比較することで、成功と、失敗の原因を、はっきりさせることができます。どういふばあいに成功し、どういふばあいに失敗するか、わかります。

そのような、私たちの経験からいうと、日本の社会も、(とくに若ものの) 失敗にたいして、もっと寛容であってほしいですね。それでなかったら、新しいことに挑戦するなんてこと、できないじゃないですか。上の人が、「自分が責任をとる」といってやれる社会や組織で、ありたいものです。順調一筋にきた人間よりも、何度も何度も失敗し、それを乗り越ってきた人間のほうが、ずっと魅力的だと、私は思うのですけど。

前回、事務所の Macintosh のことを書いたら、いろいろご教示をいただきました。結論からもうしますと、新しく 1 台を購入しました。以前のものは、もう 8 年も使っており、能力的にも限界だったようです。あんなに働いてくれたのに、窓から放り出したいなどと、乱暴なことをいったものです。反省しております。

## NO. 393 2006 年をふりかえって 2006. 12. 28

正式の報告でも、総括でもなく、この一年の印象を、思いつくまま。いちばん印象に残っているのは、やっぱり、植えた木が、伸びはじめたこと。それも、あちこちで、いっせいに。やっと、成果が目に見えはじめた、とっていいでしょう。これまで、私は、「緑化ほど、わりの悪いしごとはない。悪い結果はすぐにでるし、いい結果がでるには時間がかかる」というグチを、口ぐせのようにしていました。

それは、いまでも、そう思いますけど、樹木というのは、植えて、枯れさえしなければ、時期がくれば、伸びるものでもあるよ、というところ。まあ、なかには、枯れはしないけど、まったく伸びない、というものもあります。たとえば、環境林センターの、見本園のイチョウ。生きてはいるんですけど、伸びないんですね。それから、大同の事業家から、イチョウの苗を数百本もらいうけ、苗畑に植えているんですけど、これも伸びません。育たないものを、おいているのは、経済的には損失ですけど、捨てる思い切りも、なかなかできません。

それから、シナサワグルミ。冬になると、地上部が、枯れてしまいます。でも、根っこは生きていて、春になると新芽を伸ばし、秋までに 1m ちょっとなりですけど、冬にまた枯れる。その繰り返しです。「山西樹木志」という本のなかに、名前を発見して、試験導入したんですけど、だめでした。よく調べたら、自生地は、山西省でもいちばん南。北緯 35 度のあたりですから、緯度にしたら 5 度ちがいます。おなじ県から

いの感覚でいると、おおまちがい。成功話を書くつもりだったのに、またそれてしまいました。

采涼山のふもとに植えた、マツが、急に伸びはじめました。ここは、カササギの森の、入り口です。ツアーのみなさんにみてもらうのは、たいてい、2000年春に植えたもの。ですから、植えて、7年。最初の数年は、まだるっこしいくらい、生育が遅いのです。去年あたりから、伸びはじめたな、と感じていたのですが、ことしは、いいものは1年で50センチも伸びました。樹高2mを超えるものもあります。これについては、最近も書きましたが、毎年のように、夏のツアーに参加する藤原國雄さんが、それに注目してくれたから。「どうして、宣伝しないんですか？」と、いわれてしまって。

霊丘自然植物園も、なかなか、すごいのです。あそこは、7、8月の雨がおおかったので、ことしの夏は、とくに緑が濃くなりました。海拔1,000m ちょっとのところに、水平方向の、作業道・兼・見学道を、追加しましたので、リョウトウナラなどが、育ちはじめたようすを、身近にみてもらうことができます。たくさん葉を落とし、土壌を肥やしますから、今後いっそう、生育が速まるでしょう。そうになると、山火事が心配。防護の体制を、強化する必要があります。

全体としてみれば、気候は、いい年ではありませんでした。とくに春、気温が上がったのに、雨が降らず、風も強かったのです。現地では、数年ぶりに、風砂がひどかった。日本にやってくる黄砂も、激しかったようですね。そのために、春の植林は、たいへんむずかしく、結果も、低調でした。カササギの森の、活着率は、例年より10%は低いのですが、それでも、70~80%はキープしています。悪い年でも、それなりの結果をだせるようになった、とっていいでしょうか。あそこは、季節工を含めて、ベテランぞろいで、そのことの効果が大きいようです。

アンズは、悲喜こもごも、といったところ。果樹プロジェクトの、私たちのモデルに、霊丘県上北泉村があります。協力をはじめて、ことしが10年だったんですけど、合計で、60haほどになりました。アンズだけでなく、リンゴ、ナシ、クルミ、サンショウなど、いろんな種類を植えています。それでも、主力はアンズですが、ことしはだめでした。花が咲いたあと、寒波にみまわれ、幼果が凍って、落ちてしまったのです。全滅でした。

広霊県苑西庄村も、だめだったのです。おなじ理由。この村には、私の娘もいて、親類のように感じてますし、ことしが最初の収穫になるはずでしたから、ずいぶん、期待したんですけど、うまくいかないものです。災害にあうと、私なんかは、そうとう深刻に、落ち込むと思うんですけど、地元の人には、それほどでもないよう。誤解を恐れずにいえば、平素、低いところで生きていると、転げ落ちて、あまり痛みを感

じないのかもしれませんが。慣れっこ、ということ。

渾源县呉城郷のアンズは、大豊作でした。ここも昨年、全滅しましたので、心配したんですけど、ことしは、ちゃんと、いけました。村で、小さな加工場までつくって、意気盛ん。上北泉村や、苑西庄村は、大同のなかでは、南に位置します。とくに上北泉村は、海拔が700mしかありませんので、大同市のなかでは、暖かいところです。そこで被害がでました。呉城郷は、渾源县のいちばん北にあり、黄土丘陵にあって、1,300m以上と、海拔も高いんです。凍害ですから、常識的にいえば、北の寒いところで被害がでそうですが、そうともかぎりません。検討の必要があります。

環境林センターも、白登苗圃も、まずまず順調でした。これからは、どこまで自立に近づけるかが、課題です。

大同を訪れたボランティアツアーは、10グループ以上で、350人になりました。同時に、2つのツアーが、重なることもあり、私もそうですけど、大同事務所は、息を抜くヒマもありません。そのなかで、あの盛大な、15周年記念イベントをこなしたことに、私は、すっかり、感心しました。来年は、ツアーが、もっと集中しそうな、気配です。受け入れ態勢の強化が、緊急の課題になります。

地元大同では、この協力事業が、くりかえし報道されました。事業のスタート時、大同の責任者だった劉懷光が、いま、大同テレビ局の局長です。フラッと訪ねたのが縁で、20分の番組が決まりました。私のジョーダンに、キャスターも大笑い。視聴者も、けっこうよろこんでくれたようで、再放送、再放送で、私がきいたかぎり、5回も放映されたそう。来年1月10日から、中国です。みなさん、いいお年を、お迎えください。

## NO. 394 没法子（メイファーズ） 2007. 01. 09

もっとも、正月にふさわしくない、話題です。私が、5番目に、覚えた中国語が、表題。いまでも私は、中国語を話せませんが、1992年の9月、大同の農村に1人で行ったとき、話せたのは、ニィハオ！（こんにちわ）、シェシェ！（ありがとう）、ツァイツェン！（さようなら）、ツゥスォザイナーリ？（トイレはどこですか）。発音なんてでたらめで、いまでも、カタカナ中国語。それにつぐ、5番目ですから、現場で最初に覚えたことば、とっていいでしょう。

「没法子」の、「法」は、方法のこと。手段とか、やり方といったところ。「没」は、「ない」という意味。ですから、どうしようもない、しかたがない、ということです。

大同の農村は、災害が多いですからね。大同県と陽高県の県境なんか、とくにひどくて、10年間で、地震が3回もありました。1989年、1991年、1999年です。そのたびに、住居が倒壊して、ついには40kmほど離れたところに、村ごと、移転した村もあります。それから、毎年のように、旱魃になる。旱魃の年は、バッタなど、虫害が重なります。1995年は秋の長雨で、土づくりの住居＝窯洞（ヤオトン）が、たくさん倒壊しました。風は一年中、つよいですし、冬から春は凍害、春は遅霜、秋は早霜、夏には大雨のほかに、落雷、雹（ひょう）といったふうで、まさに、なんでもあり！規模の大きな自然災害にしばっても、12年で8回も襲いました。

その災害も、重なったり、連続することが多いんですね。たとえば1999年、建国いらい最悪という大旱魃で、大同市の農業生産は、平年比82%減でした。5分の1もなかったのです。地震がやってきたのは、その年の冬。政府の救済食糧はありますけど、十分ではありません。食べるものが不足するので、実のはいらぬアワを皮ごと、おかゆにしたり、ジャガイモから、デンプンを搾った、搾りかすをおかゆにまぜて食べる、ということでした。この時期は、最低気温が零下30度近くまで、下がるんですね。空腹で、寒さに耐えることほど、つらいことはないでしょう。

そういうとき、農民の口から、自然に出るのが、「メイファーズ」なんですね。カタカナどおりに、ふつうに発音すれば、それでつうじます。だから、私も、すぐに覚えました。とても、悲しいことばだと、私は、思いつづけてきました。

昨年末に、北京の李建華さんから、メールが届きました。彼と、彼の事務所の呂冰さんが翻訳した『約束の夏』（若松みき江著、北海道新聞社、第1回ふるさと自費出版大賞受賞）の、中国語版が出版され、出版記念会を開催したそうです。できあがった本が、その日になって、届いたようですから、私の『雁棲塞北』のときと、いっしょ。相変わらずの、綱渡りをやっているんですね、彼も。

「戦火の満州国（中国東北部）から命からがら引き揚げる一家五人の逃避行を、八歳の少女の目で描いた長編」ということです。こういう内容の本は、いまの私には、優先順位は高くありません。でも、李建華さんから、「いい本です」といわれ、彼が翻訳したとなると、読まないわけにはいけません。年末年始の休みで、時間はありましたから、読みました。その感想は、ひとことではいえないので、やめます。

その物語に登場する、中国人が、しばしば、「メイファーズ」を、口にするわけですよ。かっこに入れて、日本語があるんですけど、それが、（仕方がない、なんとかなるさ）となっている。びっくりしましたよ！「仕方がない」と「なんとかなるさ」では、反対じゃないですか。

すぐに、李建華さんと、私のブログ「黄土高原レポート」を中国語に翻訳してくれている

呉文莉さんにメールで、問い合わせました。呉からは、その日のうちに、返事があって、その両方の意味が、含まれている、というんですね。あわてて、何冊か、手元の辞書をひいてみたんですけど、やっぱり、「方法がない」「しかたない」「処置なし」といった意味ばかり。なかには、「没法子」じたいが載っていない、辞書もあります。メイファーズ！

農村で最初に、私が、このことばを覚えたのは、とても意味のあることだったのではないか、という気がしてきました。農村と、老百姓（民衆）を理解するうえでの、キーワードなのかもしれません。悲観と楽観という、相反するものが、1つのことばに同居していて、せつまつまったところで、自然にでてくる。私は、これまで、半分の意味しか、理解していなかった。

折にふれて、書いていることです。昨年元旦に亡くなった相馬昭夫さんは、津軽の生まれ育ちで、戦前の東北の大冷害を、身近に体験しました。（日本の東北地方ですよ、念のため）。娘の身売りといったこともあって、それは、悲惨なものだったそう。その相馬さんが、晩年の一時期、大同に入り浸っていて、私に語りかけるんですよ。「この地方の自然災害は、客観的にみて、東北の、あの冷害よりもひどい。それにしては、悲惨さといったものが感じられない。どういうわけでしょう？」私に、答えられっこありません。そのナゾを解くヒントが、メイファーズなのかもしれません。

明 10 日から、大同です。大同事務所からは、暖冬だという連絡がきていましたが、それは昨年末のこと。暖かいといっても、最低気温はマイナス 20 度前後のようですから、じゅうぶんに寒い、ということでしょうか。

## NO. 395 物価狂乱 (1) 2007. 01. 16

1 月 10 日から、大同にきています。プロジェクトの進行状況、来年の計画などを話し合っていますが、そのなかで、頭の痛いことがあります。物価も、賃金も、おそろしい勢いで、上昇しています。どれほどのものか、ちょっと紹介しましょう。単位は、元です。

	2000 年	2004 年	2005 年	2006 年
臨時工賃金 (日)	15	25	35	50
石炭 (1t)	60	210	320	450

小麦粉 (25kg)	32	39	42	55
豚肉 (1kg)	9	9.6	9.6	15
鶏卵 (1kg)	4	4.2	4.6	7.2
プラスチック (1kg)	6	7	8	14
住宅 (平米)	800	1000	1500	2000
ガソリン (L)	1.8	2.9	3.9	4.95
尿素 (肥料/1袋)	65	75	85	125
農薬 (1瓶)	6	7	9	12

大同事務所の魏生学副所長の記憶によるもので、多少の誤差は、ごかんべんください。でも、彼の、数字等の記憶能力は、信頼できます。あげた品目の偏りも、仕事内容によるもの。プラスチックとあるのは、水道ホース、ポリフィルムなど、プラスチック製品の、平均的な価格です。こういうものを、中国では、目方で売っているんですね。

野菜が抜け落ちていましたので、あらためて、きくと、季節による変動が大きいので、いいにくいとのこと。冬を基準に、思い出してもらいました。

	2000年	2006年
ハクサイ (1kg)	0.2	3
キュウリ (1kg)	1.6	6
トマト (1kg)	3	7

衣食住のすべてにわたって、といたいところですが、そうじゃないですね。衣が、抜け落ちています。衣服なんかは、あまり変わっていないそうです。それから、現代の生活には欠かせない、家電なんかは、逆に、値段が下がっているそう。

くりかえし、書いていますように、大同は、中国一の、石炭の街です。逆にいえば、市の経済は、石炭に頼りきっています。GDPの60%以上が、石炭関連。その浮沈ぶりが、激しいんですね。

一昔前までは、中国のエネルギー源といえば、完全に、石炭だったと思います。そして、庶民の、生活燃料でもあった。そのために、政策的に、価格が抑えられていました。80年代からの、中国の経済発展にともなって、たとえば、建築ブームが訪れました。その材料の、砂利なんかは、高騰しましたが、石炭は、据え置かれたまま。石炭が、砂利より安い、という事態さえあったんです。1tが、30元とか40元。

それから、石炭から石油、天然ガスへの転換、といった過程も、すすみました。お

隣の陝西省の榆林や、内蒙古などで、天然ガスが開発され、それを北京に運ぶ、パイプラインが大同を通過しています。そのおかげで、石炭は、売れない。廃れていくかのように、みえたんですね。そのころの大同は、沈みきっていました。街中が、暗かった。そのときのことは、機会をあらためて、書きましょう。

ところが、近年の中国経済の大膨張で、石炭だって、生産がまにあわない。価格も、みていただいたように、暴騰しました。なんと、6年で、7.5倍ですよ。みんな、まだまだ上がると、考えています。

私たちの拠点の環境林センターでも、燃料に石炭をつかいます。毎年、まとめ買いをします。ことは、とくに多い。あちこちに、積んでいます。さらに上がると見越して、すこし余分に買ったんですね。こういうことをするから、さらなる価格上昇の結果するんでしょう。それは、石炭以外のものにも、通じます。値段があがるとみると、先を争って、買うわけですね。街中に、活気を感じます。

5月末だったと思います。左雲県で、大きな炭鉱事故があり、50人以上の犠牲者がでました。経営者の、あまりの無責任ぶりが、問題を広げ、およそ3か月間、すべての地方炭鉱に、安全点検が課せられ、その期間、操業停止になりました。思い切ったというか、乱暴というか。市の経済にとって、そうとう大きなダメージがあると、いろんな筋からききましたし、私もそう考えました。ところが、先日、いっしょに飲んだ、祁学峰によると、地方炭鉱は閉鎖したけれども、国営炭鉱は、増産していたので、市全体の、産炭量は、減っていないというのです。けれども、たとえば南郊区は、地方炭鉱が集中してますので、個別にみれば、打撃はあったよう。彼はいま、城区の区長ですが、そのまえは、南郊区の、党の副書記でしたから、まずまちがいないでしょう。

とにかく、会う人、会う人が、「なにもかも、高くなった」といいます。とくに、一昨年から、昨年にかけての上昇が、急だったそうです。日本でも、狂乱物価といわれた時期がありました。この数字をみていると、あれなんか、かわいいものです。

## NO. 396 物価狂乱 (2) 2007. 01. 23

大同のメンバーの印象では、この1年の物価上昇が急だそう。前回の数字を、もういちど、みなおしてみます。2005年にくらべ、2006年の物価は、何パーセント高くなったか。

臨時工賃金	43%
石炭	41%

小麦粉	31%
豚肉	56%
鶏卵	57%
プラスチック	75%
住宅	33%
ガソリン	27%
尿素	47%
農薬	33%

41%増が2年つづけば、2倍になります。30%増でも、3年つづけば、2.2倍になります。そういうペースですよ。冬の野菜も、おなじように、あがっているよう。衣料は横ばい、家電や自動車は、値下がりしています。

なんとか自衛策をとろうとするんですね。協力拠点の環境林センターでは、石炭をまとめ買い。これからも、上がりつづけるから、とって。だけど、そういう個々の対策は、石炭価格をさらに押し上げるでしょう。不動産なんかは、投機対象にもなっていそう。

こんなに物価があがる一方で、賃金もあがっています。年間に30%以上、あがることもめずらしくないよう。そうでなかったら、生きていけません。でも、どの分野でもそうというわけには、いかないでしょう。年金生活者なんて、たいへんだと思いますけど、農村では、年金は、ないのがふつうです。それに、条件のよくないところの農村は、食糧だって、自家消費分がやっとなら、売らざるを得ない、収穫はありませんからね。穀物価格が上昇しても、収入がふえるわけではありません。逆に、化学肥料や農薬、種子などは、確実に高くなります。

資源の偏在による、格差も大きくなります。以前にも書きましたが、霊丘県は大きく伸びており、GDP成長率は、大同市でいちばんだといいます。ここは太行山のなかにあり、山ばかりで平坦な土地がなく、しかも、産業は農業だけで、長年、国家級の貧困県でした。ところが、鉄鉱石をはじめとする地下資源があり、その開発がすすんだために、急成長しているわけです。ついでにいっておけば、霊丘自然植物園の地下にも、鉄鉱石がありますし、実験林場「カササギの森」にもあります。どちらも、隣接地では、開発がはじまっています。

大同県は、いまでも農業県です。県全体で見れば、人口のわりに、耕地が広く、農業条件は、相対的に、良好だったのです。しかし、石炭はありません。鉄鉱石その他の資源も、カササギの森の北側が開発されているように、皆無ではありませんが、量的にはさほどでもないよう。農業の生産性は、鉱工業とはくらべものになりませんか

ら、やっぱり苦しいだろうと思います。

私たちの協力事業がかかえる困難は、現地の人の生活より、深刻かもしれません。化学肥料も、農薬も、その他の物価も上昇しています。現地の人たちは、それを補う賃金上昇が、大なり小なり、期待できるわけですが、私たちにとっては、賃金上昇もたいへん痛い。郷や村と協力し、そこで実施するプロジェクトは、賃金も、苗木代も、計画時の値段で実施できますが、環境林センターをはじめとする、いくつかの拠点は、平均的な賃金でなければ、労働力を確保できませんから、維持がほんとにたいへん。

そのうえ、このところ、中国元にたいして、円安がつづきます。2006年4月は、1元=14円前後でしたが、2007年1月は、1元=15円以上になっています。10%の変動が、プロジェクト費だけでも、数百万円のちがいになりますからね。ダブルパンチ、トリプルパンチです。

北京まで帰ってから、知人たちに、物価についての情報を求めたのですが、どちらかという、生活感の薄い人が多くて、はっきりしたことは、わかりませんでした。全体として、やや上がっているようですが、大同ほど、顕著ではないよう。事情をごぞんじのかたは、教えてください。

大同の物価が、まさに狂乱というべき状況にある原因は、石炭の高騰が、その他の物価まで押し上げていること。山西省は、改革開放と、経済発展が遅れてスタートし、物価も、賃金も、ずっと低めだったものが、全国的な水準を、追いかけはじめた。といったところでしょうか。いずれにしろ、少し落ち着いてくれないことには、次年度以降の計画を立てるのも困難です。

## NO. 397 ありがとうございます 2007. 02. 01

1月27日の夕刻から、「GEN15周年を祝うみんなの集い」が、大阪で開催されました。緑の地球ネットワークの主催でなく、「みんな」がみそ。ワーキングツアーの、これまでの参加者を中心になんどもなんども集って、すべてを準備してくださいました。GENの世話人も、発起人から、はずれているんですね。

いつもの集りなら、少なくとも、開会の1時間まえには、会場に着き、準備をするのに、この日は、お客さん気分。開会10分ほどまえに、会場にはいりました。それまで、京都で、遊んでいたんですね。「遅れたら、みなさんに悪いでしょ」と、つれあいに催促されなかったら、ほんとに、遅刻しているところ。

いちばん遠くからの出席者は、北京在住の宮崎さんですけど、日本国内からでも、札幌の棟方さん、関東は多いので、省きますけど、西のほうでは、広島岩田さんといったぐあい、遠方からも、駆けつけてくださったんですね。前日までに、出席を確認したのは、50人だったんですけど、じっさいに、出席されたのは、53人。司会の松島清さんによると、こういうイベントでは、1割くらいは、減るのがふつうですけど、増えてしまうのが、緑の地球ネットワークらしくて、いいですね。会員総会でも、二次会のほうが、出席者が多かったですし。

小寺範生さんの開会のあいさつのあと、石原忠一顧問が、乾杯の音頭をとってくださいました。第1回の緑化協力団の、団長でした。1992年の4月から5月にかけてです。あいさつのなかで、ある「伝説」について、ふれられたんですけど、それについては、私もあいさつで述べましたので、自分のことばを、あとで採録しましょう。

しばし、食べることと、歓談に集中したあと、全員の自己紹介です。50人を超えますから、1人1分でも、1時間近いのですが、松島さんが、みごとにしきって、ぴったり予定通り。

そのつぎに、昨年8月、私が大同市の荣誉市民になったのを祝して、記念品をくださったのですよ。その事実さえ、私は記憶から消えていたので、びっくりしました。細長い箱にはいったものを、岡田真子さんから渡され、ちょっと振って、音をきいて、すぐに中身がわかりました。ウイスキー！でも、ただのウイスキーじゃないんですね。「祝 大同市荣誉市民」と、ビンに彫刻してあります。気軽には、口を切れませんね。でも、飾っているだけなら、ウイスキーとはいえません。花束なんて、私ににあわないと考えていただいたんでしょう。

つれあいが感心することが、私に、1つだけあるんですって。酒のことだけは、よく気づいて、切らすことがないと。そうはいつても、いつもより、量がすすんで、足りなくなることだって、ないわけじゃありません。そういうときは、気持ちも大きくなってますから、「いいだろう、買ってきたものを、あとで足しておけば。だれにも、わかりゃあしない」なんてことに、ならないともかぎらない。でも、だいにいたします。ありがとうございました。

この集りのテーマは、もちろん15周年です。ここまでの継続は、乾杯のあいさつをされた石原顧問の存在なしには、なかったかもしれません。1992年の春、太原から、五台山をへて、大同にいたる過程で、石原団長は、なんどもなんども、「この活動は、20年はつづけます」と、宣言されたんです。だけど、日本側で、そんな議論はありませんでした。団長の口で、いきなり中国側に、そう約束された。横にいて、私はハラハラしたんですけど、団長の発言を、止めたり、覆したりなんて、だれもできないで

しょ。翌日つぶれてもおかしくないのに、いきなり 20 年ですからね。

でも、そのおかげで、長期の体制をとろうと、努力しました。中国側に、専門の事務所の設立を求めたのも、長期に持続しないといけない、という思いがあったからです。何号かまえに、大同のプロジェクトで、植えた苗が、急に成長しはじめたことを報告しました。小学校果樹園のアンズも、収穫期をむかえました。集いでは、石原務さん編集の DVD と、東川さん編集の、活動初期のお宝写真で、紹介されました。目に見える成果を、自分たちの目で、たしかめることができるのは、15 年間、つづけてきたおかげです。みなさんのご尽力に感謝いたします。

おとなりの席にすわった、イオン労組の上條さんから、「20 年のあとは、どうするんですか？」ときかれました。気の早い話しですねえ。といっても、5 年なんて、あつというまかもしれません。そりゃあ、希望や、夢が、ないわけではありませんけど、でも、あまりに、強い思いをもつと、それは欲になるでしょ。こういう活動にとって、欲というのは、あまりいい作用をはたしませんよね。

現地のプロジェクトの前進、日本国内での支援の広がり、といったものをみると、これまでで、ピークにあるとっていいのでしょうけど、こういうときこそ、自分たちの問題点や、短所に目を向け、じっくりと、とりくみたいものだと思います。

## NO. 398 天鎮の緑色食品 2007. 02. 08

北京の友人の、李建華さんが話していました。近くの市場で、「天鎮の野菜」というと、一般のものより高くても、飛ぶように売れるというのです。そのヒミツは、「緑色食品」だから、ということ。日本ふうにいえば、「有機無農薬栽培」といったところでしょうか。

「天鎮」というのは、大同市天鎮県のことです。大同市の東北の端にあり、大同からは遠いのですが、そのぶん北京に近いのです。黄土高原だよりの読者のなかにも、大同を、奥地のことと誤解している人があるかもしれませんが、大同市は、北京市のとなりのとなりの市です。北京の西どなりが、河北省の張家口市で、そのとなりが山西省の大同市です。北京の天安門から、天鎮県の東の端までの直線距離は、地図ではかってみると、165km しかありません。北京市と天鎮県の、いちばん近いところは、100km ほど。近いんですね。野菜を運ぶにも、つごうがいい。

1 月に、大同を訪れるとき、1 か所は農村にいきたいと思っていたら、大同事務所は、天鎮県を按配していました。以前から、野菜産地をみたいといっていたからです。訪

れたのは南河堡郷東沙河村。

世界をつくった神さまは、たいへん差別的だと思います。天鎮県は、大同市の4つの区、7つの県のなかでも、もっとも貧しいとっていいんですけど、この郷は、南洋河の流域にあたり、水と土とに恵まれています。大同市のなかでも、もっとも条件のいい部類でしょう。この村のあと、もっとも貧しい李二烟村にいきましたので、よけいにそれを感じました。そのことは、またの機会に書きましょう。

郷の党委員会の、安和仁書記が、村を案内してくれました。十年近くまえ、彼は県の青年団の書記でした。私たちの緑化協力の、カウンターパートだったこともあり、特別の親しみを感じているよう。最初に、村がとりくむ果樹園建設の現場を案内してくれました。1万畝の計画だそうで、広いんですね。畝(ム一)は、中国の面積単位で、1畝=6.7a。15畝が1haですから、1万畝は667haになります。すでに道路、灌漑設備など、インフラが整備され、あとは苗木を植えるだけ。それにしても、思い切ったことをやるものです。

踏ん切りをつけさせたのは、私たちが協力した果樹園だそう。以前にも書いたように、天鎮県のプロジェクトは失敗することが多かったのです。二烟村のように、条件のよくない村では、かならずとっていいほど、失敗しました。地元のカウンターパートが、疲れ切ってしまうので、「いいよ、もうちょっと条件のいいところを選んだら」といったら、でてきたのが、この東沙河村でした。1990年代終わりの、ツアー参加者は、何年かつづけて、この村の農家に、ホームステイしました。

そのときの果樹園が、大成功したのです。植えたのは、「大結杏」というアンズで、果肉を、生食する品種です。6個で1kgにもなり、こぶりのリンゴほどもあるそう。1kg14円で売れるので、1haで30万元の収穫がえられる。トウモロコシなどの穀物にくらべ、20倍にもなるそう。すぐには信じられなかったんですけど、北京の友人によると、おいしいアンズは、ほかの果物にくらべても、高いようです。地元の農民は、成功の味を知っているので、このプロジェクトにも、賛成したのだそうです。果樹園もみましたが、剪定ひとつとっても、行き届いていました。

そのあと、野菜づくりの現場をみました。いまは冬ですから、すべてビニール温室のなか。温室の北側は、レンガの壁です。南側は、カマボコ型に鉄筋が組まれ、ビニールフィルムが張られています。冷たい北風を、レンガの壁でさえぎり、南からの陽光をしっかりとりこんで、温度をあげるわけです。夜間は、ムシロのようなものを、ビニールのうえにかぶせれば、火の気がなくても、零度前後を維持することができます。それよりあげようと思えば、少しだけ、石炭を炊く。

私たちが訪れた温室では、メタンガス利用の準備をしていました。温室の一角に、ブタ小屋があり、コンクリート床のしたに、分解槽が、埋め込んであるのだそう。ブタの糞尿はじめ、いろんな生ゴミを投げ込み、メタンガスを発生させるそう。そのガスを、温室の暖房につかうのです。

先端的と思われるかもしれませんが、そうではありません。温室にはいつてすぐの土間に、3畳ほどの、オンドルがありました。その横には、煮炊きのための、カマドがあります。夫婦と、13歳を頭とする2人のこども、あわせて4人が、ここで暮らしているのです。夫婦は若いので、よけいな心配までしてしまいます。薄い壁ひとつ隔てたとなりが、さきほどのブタ小屋。つないであるイヌが、私たちにむかって、吠えつづけていました。ブタ小屋のつづきでは、チンゲンサイ、ホウレンソウなどの、葉菜がつくられていました。朝まだ暗いうちから、夕方暗くなるまで、職住完全一致で、野菜の手入れをするわけ。

温室の面積は、1棟あたり1畝=6.7aだそう。建設費は、4万元ほど。それぞれが、借金して建てます。主婦にきくと、1年間の収入は1万元ほどになるそう。だとすると、数年で、もとはとれる計算になります。この夫婦が耕しているのは、その他の畑をあわせても、3畝だそう。20a（2反）です。4人家族としては、少ないですね。それまでは集団所有、集団経済だったものが、80年代にはいつて、家族数に応じて、各農家に配分されました。それ以後、再分配がないので、こういうことがおこるのだそう。再分配しようにも、土地がないわけですね。ふつうの畑だったら、やっていけないでしょうが、ビニール温室で、生産性が高いから、それだけの収入がある。

収穫した野菜は、業者が買い集めて、北京などに出荷します。距離的に近いだけでなく、北京市長の、夫人の父親が、天鎮県の出身なんだそうです。そのほかに、中央政府の人事部が、扶貧工程で、この天鎮県と組んでいるはず。貧困地域を支援するために、中央の政府機関が国家クラスの貧困県と、人事を含めて、交流しているわけです。そういうつてを、じょうずにいかしたんでしょうね。

郷の安書記も、青年団のときより、ずっとしっかりしてきました。以前、べつの県で、私の知り合いが、ある郷の党書記になったので、そこの村の人に、「彼はどうか？」と尋ねたところ、言下に、「だめだ。こんな貧乏な郷には、いい幹部はこない」と答えました。そういう法則があるのなら、ここは県下一の、豊かな郷ですから、安書記はできる、ということになります。

「これから、この郷は、どうしたらいいのでしょうか？」と真剣に私にききますので、私は、「ビニールハウスは、これから困難になるかもしれない。石炭価格が急騰するなかで、標高が高く、気温の低い大同は、北京市場であらそっても、競争力がない。

むしろ、夏の涼しさを生かすのが、いいんじゃないか。野菜もいいけど、花もおもしろいんじゃないか。思い切って、高級な花をねらってみたら、どうだろうか」。私が、ずっと思いつづけていることです。ある程度の資金と、人材を集めることができれば、おもしろい道が開けると、思っているんですけど…。

## NO. 399 10年ぶりの李二烟村(1) 2007.02.13

ことしの1月、天鎮県の東沙河村を訪れました。そのことは、前回に書きました。自分の気持ちのなかで、少し葛藤し、そのあと、李二烟村に回りました。私にとって、思いの深い村です。

たいへん貧しい村です。この村のプロジェクトこそ、なんとか、成功してほしいと願ったのですが、なんと挑戦しても、連続して失敗しました。村人にも、責任がないとはいえませんが、主要な責任は、この県の林業局にあります。

自然の条件がきびしいのです。土地がやせているうえに、水がとぼしい。マツしかムリだな、と考えて、そのような計画を立て、時期になって、現場にいってみると、いつのまにか、アンズが植えてあります。そのつぎの年、マツすらむりだろうと考えて、灌木のヤナギハグミ(沙棘)を植える計画を立てると、こんどはマツが植えてあります。しかも、マツにとっては条件のよくない南斜面を、わざわざ選んで、大苗が植えてある。「こんな大苗が育つはずがない」と私がいうと、県の林業局の技術者は、「小さい苗を植えたのでは、ノウサギの害に対抗できない」といいます。「たしかに。枯れてしまったものは、ノウサギだっけ見向きもしないだろう」と皮肉をいうのが、私にはやっつ。本気でケンカをするには、エネルギーが必要です。継続する意志を固めないことには、ケンカはできません。

村の人たちは、ほんとに人がいいんですね。このうえなく、やさしいんです。3度ほど失敗して、もうこれでおしまいだと気持ちを固めて、話し合いの席で、私が立ちあがったら、通訳の王萍が、「みんな、泣いてますよ」と、耳打ちしました。で、もう一年、延長したんですけど、それも失敗しました。苦い思い出が、たくさんあります。

その一方で、なつかしい思いもあります。私は、この村で、たくさんの方のことを勉強しました。底無しの貧乏を知ったのも、この村でのことです。はじめてこの村を訪れた1994年、1人あたりの年間収入は、100~150元だと紹介されました。その翌年は、水害にみまわれ、土づくりのヤオトン(窯洞)が傾いて、村中の家が、つかい棒だらけになりました。

80歳をすぎた、村の長老に話をきくと、「いまの時代がいちばんいいんだよ。1960年ごろは、飢饉が何年もつづいて、だれもかれもが、乞食にでたよ。草や木の皮、根っこまで食べたんだから。いまはなんとか、食べていけるだろ」。でも、若い男たちの話では、「こんな村なんて、嫁のきてがありません。なんとか金をためようと出稼ぎにでるけど、40過ぎた光頭棍（単身男）がたくさんいますよ」ということでした。

1人の中年の女性が、いろんなことを私に教えてくれました。彼女には、息子2人と、娘2人がありました。「よかったじゃない。2人の嫁取りの結納金を、娘2人で取り戻せたでしょ」と私がいうと、なにもわからないやつだな、という顔をして、「娘たちは、ちょっとでも豊かな村に嫁がせたいのが人情でしょう。そうすると、結納金なんて、ほとんどありませんよ。逆に、まずしい村で、嫁をとろうとすると、結納金は2万円にもなるんです」ということでした。

この村で生まれ育って、この村のことしか知らない人の話は、あてにならないところがあります。なんども書いたり、話したりしてますけど、この村の人から、「この村には、すばらしい泉があって、どんな旱魃の年にも、涸れたことがない」と紹介されたことがあります。ところが、じっさいにみると、その泉とは、浸食谷の底にある、3畳ほどの、たまり水です。深さ2mほど掘ってあって、伏流水をためて、汲み上げるわけです。その水が、ぞうきんの絞り汁のような色。

その女性は、父親に軍歴があって、あちこちの地方を転々とした経験がありました。いちばん遠くまでいったのは、四川省だそう。こういうふうには、村の外での経験のある人の話は、信用できるし、わかりやすいんですね。自分の村のことを客観的にとらえ、話すことができるわけです。ずいぶんと教えられたんですよ。

このたび、村に着くなり、私は彼女を探そうとしました。名前はまったく覚えていません。父親が軍で働いていたこと、それから彼女が、豆腐をつくって、村で売っていたこと。小さな村ですから、これだけわかれば、十分でしょう。ところが、なかなかわからないんですね。若い人たちは、記憶にないんですよ。いま、若い人と書いたんですけど、比較的若い人で、村に残っているのは、女性にかぎられるんですね。やっと、情報をえられたんですけど、すでに亡くなったそうです。

## NO. 400 10年ぶりの李二烟村（2） 2007. 02. 19

谷底の、湧き水をみにいきました。10年まえと、すこしも変わりません。私たちが渡した植林の労賃で、ポンプを買い込み、給水設備をつくったことがあるんですけど、壊れてしまったんでしょうね。なくなっていました。村のなかの、コンクリート製の

水槽には、ゴミがたまっています。ここまでポンプアップすることで、谷底からの急な坂道を、天秤棒でかつぐ必要がなくなったんです。「老後の心配がなくなりました」とまで、話していたんですけど、自力では、維持できなかつたようです。

村のなかを回ってみました。10年前と、ほとんど変わりません。どういうわけか、この村は、浸食谷の両側の、急傾斜の斜面に、土づくりの家々が、無秩序に、へばりついています。村のなかの道は、たいへん狭いうえに、急な坂ですから、車は、村の入り口に停めておくしかありません。村よりうえには、平坦地もありますが、そこは畑になっていて、家はありません。水を担ぐ関係で、できるだけ谷底に近いところに、家を建てたんでしょうね。たいていの村で、出稼ぎでためたお金などで、家を新築するケースが、あるんですけど、この村には、それがありません。以前から、廃墟のような、干からびた村でしたけど、いまでも変わりません。

もう1軒、訪ねてみたい家があります。これほどの貧困のなかで、息子2人を大学に送り、娘2人を専門学校で勉強させた夫婦がいたのです。家畜や農具をすべてお金に換え、自分たちはもっぱらジャガイモを食べ、親戚中から借金をして、学資をつくりました。長男が、山西理工大学を卒業して、大同の電力会社に就職し、弟妹の学費を送ってくれだしてからは、ラクになりましたと、そのとき、話してくれました。事情を知っている近所の人を、やっとみつけましたが、この夫婦は、大同市内の息子のところに、移り住んだそう。会うことはできませんでした。

村の党支部書記や、村長を思い出そうとしたんですけど、それができないんですね。しょっちゅう人が変わっていたんですよ。大きな、豊かな村なら、村長なんかになると、多少は甘い汁を吸えるかもしれませんが、こんな貧乏な村では、それは100パーセントありませんし、あるのはやっかいごとだけ。だれもやりたくないんですね。日替わりとまではいかないでしょうけど、訪れるたびに、交替していました。

以前の小学校は、すでに閉鎖され、物置になっていました。訪れた日が、週末だったんですね。数人の女の子がいましたので、事情をきくと、村の子どもたちは、孫家店村の学校に寄宿して勉強しており、2週間に1度、週末に帰ってくるそう。高学年の子でしたからね、「寂しくなんてありません。家にいるより、ずっと楽しい」といっていました。

村の人口は70人だそうです。周囲の畑の面積は450haもある。土地がやせ、水のない村では、人口がすくないぶん、面積がひろいんですね。でも、生産高を決める要素は、土地の面積より、水なんですね。こういう黄土丘陵の畑は、生産性が低くて、収穫量は少ない。広い土地を人力で耕すのはたいへんですし、それでいて収入がすくないわけで、気のきいた人間ほど、離れたくなるのは当然でしょう。

ここまで書いて、突然、思い出しました。10年まえのことです。当時の村長が、私にいいました。「老高！（私のことです）日本は経済が発展しているそうだけど、この村を、丸ごと、日本につれてってくれないか」。で、私。「ああ、いいですよ。日本は雨は多いけど、土地は少ないから、土地ごときてくれるなら、歓迎するよ」。「そりゃあ、よかった！いわれるとおりにするから、置き場所を用意しといてくれるかい」。

現在の村長の家をきいて、訪ねてみました。新築の家は1軒もないと、書いたばかりですけど、この家は、土のヤオトンの前面だけに、ま新しいレンガを張っていましたよ。基本の構造は、日干しレンガを積んだヤオトン（窯洞）です。家のなかに、人影がみえたので、断りもしないで、はいりこみました。20歳まえの若い男2人でしたが、この家の人間ではないそう。村から遠くないところで、鉄鉱石の採掘がはじまっているそうです。彼ら2人は、村長の家に下宿しながら、そこで働いています。

それでわかりましたよ。李二烟村へは、天走線（天鎮と走馬駅をむすぶ道路）からわき道にはいります。以前は、村まで一本道だったんですけど、数か所で、ほかの道路と交わりました。あの道路が、鉱山への道なんでしょうね。その規模からいっても、鉱山の大きさはしれたものでしょう。

村でさがした人間は、外にでたり、亡くなっていたりで、1人もみつかりませんでした。若い人たちは、私たちのことも、日本人がこの村に通っていたことも、知りませんでした。たまたま、数人の中年女性と、であったんですよ。武春珍が、私を指さして、「この日本人を知っていますか？」ときいたところ、「知りません」と、彼女たちは答えましたが、「もう少し年配で、背の高い、やせた人がきていました」という答えが返ってきました。まちがいありません。遠田宏先生のことです。

知り合いにであわなくて、よかったのかもしれませんが。いま、この村のようすをみても、私たちが、協力事業を再開する条件は、ないでしょう。

その翌日の夜、総工会の陳金宝主席が、歓送会をもってくれました。従前の李世傑主席は、昨年8月から、副市長に栄転しました。以前のカウンターパートの責任者、祁学峰もその席にきました。「李二烟村にいつてきたよ」と、私が伝えると、「あのままだろう、変わるだけの条件がない」と答えました。都市部を中心に、大きく変化しつつありますが、取り残された村は、そのままです。

「三鷹寮での講演、だいじょうぶだろうね？」だしぬけに電話できかれて、なんのことか、わかりません。相手は、40年来の友人の、干場くん。2月上旬、東大の小宮山総長を迎えて、寮の同窓会があり、たまたま東京にいた私は、それに参加しました。2次会か、3次会かで、酔っぱらってしまった私が、安請け合いましたよう。完全に忘れていました。「だめじゃないか、そんな酔っぱらい方をしちゃあ」と、干場くんは、私に説教します。約束は、2月18日の日曜日だそう。たしかに、16日はNHK ラジオの収録があり、17日は、鳥取大学と学習院大学とで主催する黄土高原シンポジウムに出席することになっていました。そのつづき、ということで、気軽に引き受けたんでしょね。

私は、大学に入学したというよりは、三鷹寮に入寮した、というのが、いまでも実感です。1966年のこと。その後、寮委員会で、情報宣伝委員というのを半年やり、もう半年は、寮委員長でした。やっかいな問題の連続で、ほんとに疲れましたよ。私の本質は、科学少年なんですよ。たとえば、通信機を組んだり、ばらしたりしていれば、1人で熱中して、食べることを忘れるくらい。ところが、自治寮の寮委員ということで、いろんな問題にぶつかるわけです。寮は生活の場ですから、人間臭い問題が多いのですが、そういう問題が、私は大の苦手です。周囲のみなさんに、迷惑をかけたと思うんですよ。

寮にいる時間が長くなるのに反比例して、授業にでる時間は短くなり、やがて、大学を、中退してしまいました。学生運動のさなかにあって、高揚・蹉跌・挫折を体験し、思い出したくないことも、たくさんありますけど、それでも、「三鷹寮」ときくと、甘酸っぱい気持ちになります。そして、そのころの先輩・同期・後輩に、いまでも、たいへんお世話になっています。約束を破ったりしたら、申しわけが立ちません。

吉祥寺から、三鷹行きのバスに乗って、停留所の名前をきいているうちは、余裕がありました。けっこう覚えているものだ、と思ったのです。「新川通り」で、バスを降りました。とたんに、ギブアップ。まったく、わからないんですよ。先輩の辰紘さんに、電話でSOSを發しました。あのころの農地や空地は、まったくなくなり、新しい道路や、住宅ができて、方角すらわからないのです。以前の面影は、なにひとつない、とっていいくらい。

三鷹寮は、そうとう以前に廃止になり、いまは、三鷹国際学生宿舎というのだそう。あのころは300人でしたが、いまは600人。うち国外からの留学生が200人。女子学生も200人います。私たちのころは、男子寮でした。かつての建物は、ただの1つもありません。残っているのは、並木の、イチョウだけ。それをたよりに、ああ、あのころ私が住んでいたのは、あのあたり、このあたりと、見当をつけるのがやっとでした。

学生に、宿舎を案内してもらいました。以前は、7~8人が1室で暮らしていたのに、いまは完全に個室。シャワーが各部屋にあって、ビジネスホテルよりちょっと広いくらいの、13平米。廊下なんかの雰囲気も、よくにっています。「学生のあいだにコミュニケーションがなくなり、ア

パート化が問題です」と、案内の学生が話しました。それは、40年前もさかんにいわれたことですが、事態がいつそう進んでいることはまちがいない。学生が集まって、話しあったりすれば、よろしくないことをはじめる、という考えからでしょうか。共用スペースが貧弱なんですね。

あちこちのドアに、私の顔写真いりて、「高見邦雄さんが三鷹寮に戻ってくる」というビラが張ってあります。おお、はずかし！でも、記念に、1枚を持ち帰りました。パソコンでつくった、カラーコピーのこざれいなものです。私たちのころとは、これも、ずいぶんちがいます。

パワーポイントをつかって、私たちの緑化協力活動を紹介し、最後に、ジョーダンめかして、話しました。現在は環境省地球環境審議官の、小島敏郎さんは、私の1年あとの寮委員長でした。何年かまえ、大同のプロジェクトを視察したあと、レポートを書き、あらまし、つぎのように締めくくりました。

自分は3日間、農村を回っただけだったけど、ずっと緊張していた。ところが、このプロジェクトでは、農村の土づくりの家に泊まり、農民とおなじものを食べ、あのトイレで用をたす。それを10年以上もつづけて、信頼関係をつくってきている。いくらNGOの国際協力といっても、尋常なことではない。というものでした。

よくみていただいたんですね。それはかつて三鷹寮ですごしたおかげだ、と私は話をつづけました。第1に、汚いところが、平気になりました。そういうと、学生たちが大笑いしました。つぎに、どんなまずいものでも、食べることができます。あのころは、いつもお腹をすかせていて、寮食堂の残食にも、列ができましたからね。

そして、もうひとつ。ケンカのやり方を覚えた、ということです。よく議論をしました。明け方までつづけ、夜昼が逆転して、そのまま眠ってしまうことも、しばしばでした。激しく対立したり、揚げ足をとったりすることもありましたけど、なんとか理解しあいたい、という思いが、根底にあったと思います。いまの私の活動に、それが、ものすごく役立っています。

終わったあと、ビールと、OB差し入れのワインで、交流しました。国交正常化後に留学してきた中国人の、二世がいました。モンゴルからの、女性の留学生は、日本語がほんとにうまくて、そうきくまで、私は日本人と思ってましたよ。彼女がいうんですね。「日本人の学生はおとなしくて、病院のように静かです。そして、外国人の留学生がさわぐと、ひややかにみます。いい気持ちがしません」

周囲の風景も変わりました。建物の構造も一変しました。それよりなにより、大きく変わったのは、若い人たちの、おかれた環境と、生き方そのものなんですね。そのようななかで、数は少なかったんですけど、私なんかの話を、それなりに受け止めてくれる人たちがいたのは、

ほんとにうれしかったですね。

## NO. 402 高速道路その後 2007. 03. 01

北京―大同の高速道路が、全線開通したのは、2002年11月でした。北京―大同間は路程330kmほどですので、車を飛ばせば、3～4時間。高速道路ができるまでは、列車で最低でも5.5時間でしたから、だいぶ近くなりました。開通直後は、若い運転手たちが、記録づくりに挑戦し、「2時間半で着いたぞ！」という男がいれば、「おれは2時間15分だった！」というのがいたり、ちょっと恐ろしかったのです。

ところが、いまはもっとかかります。北京から、大同に行くときは、まだいいのです。渋滞も、ほとんど経験しません。トラックやトレーラーも、ほとんど空荷で、荷を積んでいるのは、めずらしいくらい。なかには、自分と同じ大きさのトラックを、荷台に積んで、走っているものもあります。燃料と、高速料金を、浮かすため。チェーンやワイヤで、いちおう固定してありますが、横にならんだりすると、こわいですね。

問題は、大同から北京にでるほうです。こちらの主役は、石炭を満載した、トラックやトレーラー。積載量60tのトラックに、100t以上積んでいるのがめずらしくない。あちこちに、積載量をチェックする(はずの)関門があるんですけど、どういうわけか、くぐりぬけています。石炭が安かったら、高速道路はワリにあわないでしょうけど、いま北京では、1tが800元以下ということはないでしょう。運転手としても、稼げるときに、稼がないといけないわけで、いかに回転をあげるかが勝負。みんな高速道に上がってきます。

道路の設計規格を、大きく超えていることでしょう。路面が、すぐに傷みます。あちこちで、舗装の若返り工事が、くりかえされます。

それほどの過積載ですから、登り坂になると、トラックは、つらいんですね。日本の高速道だと、登り坂には、登坂車線があって、遅い車は、そちらを走るでしょ。ところが、この高速道は、きちょうめに、どこも、片側2車線です。なかには、時速20km以下に落ちる車がでてきます。それを、時速25kmのトラックが、追い越そうとするわけですよ。私は、「目くそ鼻くそ追い越し」とネーミングしました。ノロノロのトラックが、2車線をふさぎますから、高性能車といえども、前にでることができません。

ついでに、大同で流通した小話をひとつ。「自動車は、汽車より速い。自転車は、自動車より強い」。汽車より、自動車が速くなったのは、高速道のおかげです。でも、数台の自転車が、横にならんで走ったら、自動車が、まえに出ることはできません。

積み荷の石炭を、いちおうは、シートでおおうようになりました。たまには、例外もありますけど。それでも、シートのすきまから、石炭が落ちます。バラバラッとまいている、トラックを追い抜くときなんて、ほんとに、恐怖ですよ。ガツンとくらったら、フロントガラスなんて、かんたんに、割れるでしょう。

落ちてきた石炭を、ひろうために、高速道に上がる人が、たくさんいます。高速道の両側には、いちおう、有刺鉄線やフェンスがありますけど、はいろいろと思えば、かんたんですものね。袋をもって、あちこちで、ひろっています。舗装がいたんで、段差ができていところなんて、絶好の場所なんですね。「小さな炭鉱」なんてネーミングができそう。石炭の値上がりで、そのような人たちが増えています。

そういえば、私は去年、山火事の多かったことを、書きました。石炭が値上がりすると、低所得の農民は、石炭を買えなくなるから、山には行って、燃料をとろうとします。火の始末になんか、気をつかわないから、山火事の原因になっている、ということです。世の中は、まさに、循環！

最近の何回か、大同から、北京に出るとき、河北省と、北京市の境界のあたりで、大渋滞を体験しました。友人たちが、バスで北京に帰るとき、私はべつのルートをすすめたんですけど、彼らは、まっ正直に、その道でいって、夕方に帰り着くはずが、翌朝になったそう。

あるとき私は、渋滞の場所で、車を降り、自分で歩いて、周囲を、しばらく観察しました。そのときの私の結論は、道路を管理している、中国の公安が、わざわざ、渋滞をつくりだしている、というものでした。で、私は、「これは温家宝総理の経済政策だ。過熱する経済にたいして、ブレーキをかけている」といったんです。ある中国の幹部は、そういう私に、「高見さん、そんなことをいっては、いけません」といいました。私の話もジョークですし、彼女の応答もジョークでしょう。

ことしの1月、大同から北京に帰るときは、あの、魔の渋滞地点で、トラックと、その他の車のレーンが、完全に、分けられていました。以前のように、高速道路上で、夜を明かさなそうですみそう。でも、事情が落ち着くまでは、大同→北京の高速道路は、帰国時間が切迫している人などにはおすすりできません。

#### NO. 403 水土流失 2007. 03. 08

最初に、おことわりです。この「黄土高原だより」も、400号を超えました。じつは、これまで、テーマが重複しないよう、心がけてきました。ときおり、そのルールを破ったのは、しくじりによるもの酔っぱらってから、書くことが多いので、以前に書いたことを、忘れてしまっ

ているのです。

でも、これから、同じ問題を、ふたたび書くことを、許してもらいたいのです。理由は、3つほどあります。

1) 中心的な問題は、すで書いてしまっていますから、話が、だんだん、周辺、枝葉末節にかたむくのは、しかたのないこと。

2) 読者が、だんだん増えています。大部分は、どこかで私との出会いがあって（名刺を交換して）、その後、私が、かつてに送りつけているんですから読者というより、受け手といったほうが正確でしょう。その人たちに、枝葉末節の情報しか、届かないとしたら、もうしわけのないことです。

3) ネタには、かぎりがあります。といいましたが、話題は、切れることはありません。中国を訪れると、退屈することは、まずありません。びっくりすることが、つきないのです。

というわけで、同じテーマの話を、再度書くことがあります。できるだけ新しい情報を加え、角度を変えるよう努めます。

講演する機会を、ことしもたくさんいただいています。最近、パワーポイントをつかうことが多く、会場が、いくぶん暗くなります。そのぶん、きいている人は、眠くなる。眠気覚ましに、クイズをだします。

黄土高原の直面する最大の問題は、沙漠化です。その仕組みが、ちょっと変わっているんですね。大同の年間降水量は 400mm ですが、その 6 割が、6 月半ばから 8 月くらいに集中します。降り方が、はんぱじゃないんですね。せまい範囲ですが、1 時間 70mm といい、すさまじい雨を、私もなんとか、体験しました。2006 年 7 月、となりの朔州市であった雨は、カミナリもものすごく、たくさんの車を、ボートみたいにしてみましたよ。そして、そのほかの季節には、ほとんど雨がありません。

樹木は少ないし、草もまばらですから、その激しい雨が、直接、地面をたたきわけです。黄土は、粒子がたいへん小さくて、平均で、100 分の 2mm くらい。ふだんは、固くしまっていて、スコップの刃も、たたないくらいなんですけど、いったん砕かれると、パウダーになって、風に舞います。日本まで飛んできたら、「黄砂」と呼ばれます。

そのうえ黄土は、ひじょうに水にもろいのです。少しでも水を含むと、どろどろの、グリス状になります。雨で、浸食されやすいんですね。黄土高原には、たくさんのガリ＝浸食谷があります。夏の雨がえぐったもので、深さ 100m 近いものもあります。ツアーで訪れる人たちは、「小型のグランドキャニオンみたい」といいます。谷ができるだけでなく、畑の表土も流されます。山の土も、なくなってしまう。それを中国では、「水土流失」といいます。

水と土は、すべての生命の源です。このばあいの土は、たんなる鉱物ではなく、腐植などを

ふくんだ土壌です。そういう表土が流され、土地が劣化すると、作物も、植物も、育たなくなります。それが、黄土高原における沙漠化。

前置きが、長くなりましたが、クイズです。中国政府の発表によると、1年間に黄河に流れ込む土の量は、16億トンだそうです。その90%が、黄土高原からのもの。そんなこといわれても、どれくらいの量か、見当もつきません。で、その16億トンの土で、幅1m×高さ1mの堤防をつくるとします。その長さは、どれほどになるか、というのがクイズ。

長いにきまっていますので、ひと目盛りを赤道一周にします。つぎのなかから、正解をえらんでください。0.5周、1周、3周、5周、10周、30周。

正解者が、ゼロのぼあいも、少なくありません。中国人を相手にやっても、それはほとんど変わりません。彼らも、知らないのですね。正解は、最後の30周です。どうです、あたりましたか？私の計算では、100万kmを超え、赤道27周ということになります。それが毎年のことですからね。大陸の問題は、島国の日本人の、想像を超えるんですよ。いや、ふつうの中国人の、知識と想像力をも、超えています。長江流域の水土流失は、さらにひどくて、年間24億トンという数字もあります。

雨で土が流れる、それが沙漠化の原因になる、なんていっても、ちょっと、実感ないでしょう。こんな大きな数字になるなんて、思いもしません。最近、Google Earthで、人工衛星からの画像をみると、現場に立ったとき以上に、水土流失のようすがよくわかります。山から土が流れ出ているようすを、鮮明にみることができます。

#### NO. 404 子だくさん 2007. 03. 20

大同の農村でも、以前に比べるとこどもの数が、だいぶ少なくなったと思います。収入がある水準までとどくと、確実にへるよう。そのいっぽう、貧しい村では、こどもの数が多い。こどもが多いために、より貧しくなる。そういうことも、いえると思います。

貧しい村で、こどもが多いのは、私のみるところ、男の子が、ほしいからなんですね。男の子が生まれるまで、こどもを生みつづけるから、そのぶん、こどもがふえます。

それには、現実的な理由があります。貧しい村は、たいてい山地や、黄土丘陵の、上のほうにあります。土がやせ、水が乏しい。村の規模は小さく、住民数も少なく、農家1戸あたりの耕地は、広いのです。生産性が低いので、広くなかったら、食べていけません。逆に、盆地なんかの、比較的恵まれた村は、人口が集中していて、農家1戸あたりの耕地は、狭いのです。

この地方の農村では、機械化はすすんでいません。皆無、とっていいくらい。豊かな村では、ウマ、ロバ、ラバ、ウシなどの大家畜がいて、スキをひいて、農耕に役立っています。貧しい村には、そのような大家畜はいません。ニワトリ、ヤギ、ヒツジといったものが大部分で、ブタだって少ないのです。農耕は、人手によるしかありません。広い畑を、クワだけで耕すのは、たいへんな作業。

水にも不自由します。たいていは、浸食谷の底なんかに、井戸があり、そこから急な坂道を、天秤棒で担いで、水を運びます。遠くの家は、往復に3時間かけることさえ、あるのです。私が、「えっ、水くみだけで3時間！」とって驚いたら、「生きていくために、もっともだいなことに時間をかけて、なにがおかしい？」とていわれました。ごもっとも。

家庭内では、女性の立場が、つよいと思います。オヤジ連中にむかって、「あなたたちは、かみさんが怖いのだろう。なにが怖いかというと、逃げられるのが怖い」なんて、私がいうと、「そんなこと、おまえだって、いっしょじゃないか」とていますから、「いや、おれが怖いのは、逃げられることじゃなくて、追い出されることだ」なんて答えます。

女の力が強いのは事実ですけど、農耕や水くみなどの力しごとは、やはり男のほうがむいています。そのような村では、男手がない家の生活は、たいへんなのです。男手がないと、やっていけません。だから、男の子が生まれるまで、こどもを生もうとするんですね。南方では、女性のほうがよく働くところが、少なくないようですけど、このあたりでは、だんぜん、男がよく働きます。

ニワトリが先か、タマゴが先か、とて議論になりますが、人間の観念の問題もあります。そのような農村では、人の人たるゆえんは、子孫を残して、先祖をまつことだ、とて観念がつよいのです。それができないのは、自分にとって不幸であるだけでなく、先祖にたいして、不孝なのですね。「孝」の字はもともと、両親の喪に服することの意味だそう。そういえば、農村では、喪中の人、「孝」の字のワッペンをつけたりしますね。

そのばあいの子孫は、男の子を意味します。女の子は、あとつぎではないわけです。農村を歩いていると、農家の土塀などに書いてある「女兒也是後代人！」(女兒もあとつぎだ!)とか、「生男生女都一样！」(男の子も、女の子もいっしょだ!)とていったスローガンによくてあいますが、こういうスローガンが多いことじたい、それに反する観念が強いことを、意味するわけですね。

このような例もあります。清明節(4月5日前後)は、中国では上墳(お墓参り)の日です。日本のお彼岸のようなものですね。都市では、家族そろって、お墓参りにいくそうですが、この地方の農村では、清明節にお墓参りにいくのは、男だけです。先祖のほうからすると、男の子孫がなければ、このだいじな日に、お墓参りにきてもらえないんですね。あちらの世界で、

寂しい思いをすることでしょう。そんなことは、できない、なんとしても、男の子を残さないといけない、ということになります。

でも、先ほど述べたように、男手がないとやっていけない、という現実があるかぎり、たくさんスローガンを書いて、宣伝をしても、観念のほうも、なかなかなくならないでしょうね。

それともうひとつ、中国の農村の人たちは、ほんとに、こどもがすきなのですよ。1992年秋のことですが、私が1人で農家を訪ねたとき、オンドルのうえで、白酒に酔っぱらって、男どもが、私にきくんですね。「日本でも、こどもを生むことに、政府が干渉するのか?」と。って。「そんなことはない。日本ではこどもの数が減って、困っている。政府だって、もっと生んでほしいんだ」と答えると、ほんとにふしぎそうにするんですね。「お金だって、ないわけじゃないのに。どうして?」と。って。こどもこそ、最大の宝物じゃないか、という感じです。

それがあるからこそ、敗戦後に、中国に取り残された、日本人のこどもたちが、あの地で、生き延びることができたんでしょうね。そう思います。

3月8日と9日と、朝4時05分から、NHKラジオのラジオ深夜便「こころの時代」に出演しました。そんな時間ですから、きいてる人は少ないだろうと思っていたのに、たくさんの反響があり、びっくりしました。会員になっていただいた人、4月のワーキングツアーに参加する人、カササギの森に寄付してくださった人、さまざまです。多いのは、私の年齢以上の男のかたですけど、子育てまっさいちゅうの、若い女性からのメールもありました。

3月22日から、また中国です。4月には、最低5グループを、迎える予定になっています。

## NO. 405 おだやかな春 2007. 03. 26

3月23日の夕刻、大同に到着しました。その前々日までは、寒かったそうですが、それ以後は、おだやかな、暖かい日がつづきます。全体としても、暖冬だったよう。ここ数日は風もなく、とても過ごしやすいのです。

ただ、3月3日ごろに、「大雪」が降ったそうです。最近も書きましたように、大同の冬はカラカラに乾いていて、雪が降ることは、めったにありません。ですから、大同事務所の武春珍所長が、電話で、「大雪が降りました」と伝えてきたときも、本気にはしていなかったのです。北京-大同、大同-太原の高速道路がストップしたそうですが、雨や雪にたいする備えはもともとないので、ああ、そうですか、といったところ。

大同としては、たしかに、大雪だったようです。これほどの雪は、57年ぶりだそう。広靈県のあたりがいちばん深く、平均で30cmとか。大同の市内でも、20cmほど積もったそう。場所

によっては、1mを超えるところもあったといえます。北海道や、日本海側の地方にとっては、なーんだ、ということでしょうが、これでもここでは大雪。

昨年夏まで、大同市総工会の主席だった、李世傑さんは、いまでは大同市の副市長です。忙しいでしょうに、私たちがきたことを知って、昼食に誘ってくれました。ことしは春から雪が降ったので、きっといいことがあると在席のみなさんがいうので、私はちょっと逆らって、「雪の多い年は早魃になると、農村ではいわれているよ」と口をはさみました。

私の知ったかぶりは、一撃ではね返されました。春節から15日めの、元宵節に降る雪は、豊収年を約束するものだ、というのです。陰暦では、昨年ほうるう年で、7月が2回あったため、春節がとても遅く、2月18日でした。3月3日が、元宵節にあたるんですね。奥がふかいというか、なんというか、中国のものの考え方が、一筋縄ではいかないことをこんなところでも、思い知らされますよ。でも、いい年になると、せっかくみんなが知っているのに、私が水を差すこともないでしょう。ここは言霊の世界ですから、いいことを考え、いいことを口にしていれば、それが現実になるのです。私も、そう願うことにしましょう。

3月24日は、白登苗圃と環境林センター、25日は実験林場「カササギの森」と、私たちの協力拠点を、回ってきました。例年とは、あきらかにちがいます。土が湿っています。いつもなら、風にあおられて、土はカラカラですからね。雨だったら、降ったとたんに、ほかに流れてしまうこともありますが、雪は、その場に積もって、じょじょに融けていきます。全体の量は多くないでしょうけれども、植物にとっては効果的なはず。

それぞれの拠点では、春の作業が、もうはじまっていました。白登苗圃には、地元の周土庄鎮の作業班がきて、アブラマツの2年生の苗を、掘り起こしていました。北京・天津風砂源治理工程の、国家プロジェクトとして、新しく、470haほどを、造成するのだそう。1ha3,300本ですから、155万本ほどになります。白登苗圃の苗だけでは、とうてい足りません。苗を出荷するときは、このように、現場で植える人たちが、自分で苗畑にきて、苗を掘り起こすのが、一般的です。栽植後に枯れたりしたばあい、責任がはっきりして、中国では、このほうがいいんでしょうね。

作業班のリーダーが、とても親しそうに、いろいろ教えてくれます。私は忘れていたんですけど、聚楽郷の張春書記の下で、采涼山の協力プロジェクトを手がけ、そのあと、カササギの森の整地作業を、取り仕切ってくれたんだそう。いまは、この周土庄鎮にきて、現場指揮をとっています。経験や技術が、このようにして、広がっていくわけですね。

昨年夏から整地をはじめ、ことしの春、はじめて植えつける、実験果樹園「かけはしの森」も、植栽準備がすっかり整い、新規に導入した、アンズ200本の植付けが、終わっていました。新しく開発された品種で、果肉がとてもおいしく、市場価値も、高いのだそう。アンズ、スモ

モ、ブドウを中心に、さまざまな果樹を植え、収穫できるようになれば、拠点プロジェクトを長期に維持する資金を捻出できます。この春に植えるのは10haですが、整然と、約5,000個の植え穴が準備されているのを見ると、ほんとに広いですね。白登苗圃の隣接地ですので、あそこを立ち上げた技術者たちが、同時に、ここも管理していきます。

きょう（26日）からは霊丘に行き、数日間、そちらで活動する予定です。霊丘では、インターネットの接続も不便ですので、数年前の通信環境に戻ることになります。

## NO. 406 太行山の村 2007. 03. 29

私たちの、霊丘自然植物園から、そう遠くないところに、一抱え以上もある、大きなナラの木が、何本かあると、以前から、きいていました。しかも、この一帯で一般的な、リョウトウナラ（遼東櫟）とは、ちがうというのです。3月27日の、一日をつかって、みにいくことにしました。植物園からは、徒歩なら山道を2時間、くるまだと、遠回りをしないといけないので、やはり2時間、とのこと。前日、植物園の周金からそのことをきいて、私は、往きはくるまにし、帰りは歩いて帰ってこようと、考えていました。

国道108号線で、上寨鎮までいき、そこから、わき道にはいります。舗装はしてありませんが、くるまは順調にすすみます。数年前にくらべ、ずっといいそう。そのわけは、回をあらためて書きましょう。

目的の村は、南降村といいます。以前は、霊丘県狼牙溝郷に属していましたが、数年前の区画変更で、狼牙溝郷が上寨鎮に統合されたため、いまは上寨鎮に属します。霊丘県の最南端にあり、河北省との省境から、わずかに、2kmのところす。

太行山のまっただなかです。たどりつくまでに、いくつ山を越えたか、わかりません。どういう歴史があつて、このようなところに、村ができたのかと、疑問をくりかえしました。村の三方も山です。一方に開けた谷をさかのぼって、私たちは村に着きました。およそ30軒ほどの小さな村です。現実には、その過半が廃屋になり、いま住んでいるのは、10戸たらず、30人ほどだそう。標高は、ちょうど1,000m。

黄土高原の農村の住居は、日干しレンガでつくったヤオトン（窑洞）です。あそこには、土はいくらでもありますが、石はめったにないのです。ところが、ここの住居は石組み。周囲に、さまざまなかたちの石が、いくらでもあります。それを積み上げ、泥で固めて、壁をつくります。屋根には、素焼きの、黒いカワラ。もちろん、平屋です。私の目には、どの家も等しく、貧しくみえますが、過去は、ここにも、地主制があつたのでしょうか。

平坦な土地は、まったくとっていいほど、ありません。谷底に近いところが、傾斜がゆるやかなので、そこを畑にしてあります。といっても、もともと石だらけ。取り除いた石を、石垣に積み上げ、ほかからも、土を運び込んで、畑にしています。なかには、数坪の、家庭菜園なみの畑もあります。下から上にカメラをむけると、ファインダーのなかには、石垣しか、はいりません。上から下をみると、石垣はみえず、まるで、細長い一枚の畑です。

3月末ですから、もちろん、作物はなにもありません。堆肥を運び込み、あちこちに、積んであります。どの畑にも、トウモロコシを植えるよう。仮に豊作であっても、これだけの畑でとれる量は、しれたもの。以前は、それを100人からで、分け合っていたわけですね。

唯一、恵まれているのは、水です。谷底に、小さな流れがあり、清らかな水が流れています。そこかしこに、小さな湧き水もあります。村の中年の男が、「水はいいし、空気もきれいだから、この村がいちばんだ」といいました。たしかに、それも生き方でしょう。しかし、若い人は、それでは満足できないでしょうね。

電気がはいったのは、1987年だといいますから、ちょうど20年になります。大きなパラボラアンテナをおいた家もありました。この地形だと、地上波は届かないでしょう。衛星放送が実現して、テレビが現実になりました。携帯電話の電波は、まったくありません。

目的の樹木は、たしかにありました。村の背後の小山に、大きな木が、3本。樹形の、いちばんすなおなもの、目測で、高さが20mはあります。太さは、いちばん太いものの胸高周囲が260cm。こちらはメジャーで、実測しました。直径にすると、80cmちょっと。

落葉樹ですが、枯れ残っている葉からみると、これはカシワです。

中国では、榲樹 (hushu) と呼ぶそうで、この地方の、植物リストにもあります。

大同でみるのははじめてですが、お隣の河北省では、なんどか、目にしました。

カササギの巣をいくつか背負っています。それからおびただしい数の寄生木 (やどりぎ) をつけて、なかなかの風格があります。ふつうのものとはちがう寄生木だといって、李向東は木にのぼり、種子をとりはじめました。持ち帰って、植物園の樹木に、植えつけるのだそう。

この3本より、多少、小ぶりなものが1本。胸高直径20cmくらいのものは、すこし離れたところを含め、数十本はあるようです。なかには伐られたものもあり、切り株からヒコバエがでています。萌芽更新も可能なようですから、この地方の条件に、合致しているのでしょう。ほかでみるのがないのが、ふしぎです。

植物園の李向東がいました。「こんなに成長がいいのです。しかもここは、陽坡 (ヤンポー) です。土の層は薄くて、すぐ下が岩盤。こんな条件でも育つのですから、とても期待できます」。

陽坡というのは、南むきの、日向斜面のことです。逆に日陰の斜面は、陰坡（インポー）といいます。このような乾燥地では、陽坡では、植物の生育が悪く、陰坡がいいのです。ほかの植物が育ちにくい、陽坡で育つ樹木は、貴重です。彼らは、方角を、直感的にするようですが、私は念のため、磁石でたしかめました。まちがいありません。

カシワのほかに、アブラマツも、大きなものが数本あります。枝葉は、はるか上のほうにあるだけで、下のほうの幹は、絵に描いたように、まっすぐ。それから、それほど太くはありませんが、コノテガシワが、10本ほど。すこし離れたところには、クリ（板栗）がありました。直径25cmほどの古い木で、上のほうは枯れ、途中から若い枝がでていました。

この斜面から、村をはさんで、むこうに見える山腹には、アブラマツと、カラムツが植林してあります。こちらは陰坡です。植えてから、十数年といったところ。そのあいだに、ナラが自生しているのがみえます。あとでいってみると、リョウトウナラでした。みるかぎりでは、カシワは1本もありません。

家々の周囲には、タキギが積んであります。周囲の山から、切ってきたものです。灌木が多いのですが、ナラやシラカンバなども、混じっています。苦勞して、種を集め、苗を育て、植え広げている身としては、悲しくなりますが、しかし、この村の人も生きていかななくては、ならないのです。

#### NO. 407 カシワのなぞ 2007. 04. 02

3月28日も、太行山のなかを歩きました。最初にいったのは、靈丘県下関郷上関村。くるまで直接、行くことができます。ここに、たくさんのカシワがあるというのですよ。村のすぐそば、道路からもよくみえる小山にその林がありました。たしかに、カシワです。中国では、榲樹といいます。日本では、柏とも、榲とも書くんだったそう。ほら、かしわもちの、あのカシワです。面積は2ha弱で、果樹園ほどの密度ですから、1,500本はあるでしょう。

カシ、ナラなど、ドンダリのなる木、そしてクリなどは、殼斗科に属します。種子のなかに、たくさんデンプンを蓄えています。中国でもおなじく、殼斗科といいます。カシ、ナラなど、ドンダリの木は、コナラ属に属します。これを中国では、櫟属というようです。「ようです」といったのは、先ほどから、インターネットで検索をかけたのですが、科名までは、たいてい載っているんですけど、属名はたった1か所、台湾のサイトでみただけでした。門外漢の私から見ると、属名がだいたいなように思うんですけど、それが載っていないんですね。どういうわけか？

目のまえの林は、胸高直径 20~30cm ほどで、そろっています。樹高は、十数メートルといったところでしょうか。それ以上、大きなものは、みられません。小さなものは、あります。たいていは、ギャップに。その多くは、いったん伐られたものから、萌芽更新したもの。実生とみられるものも、すこしはあります。

霊丘植物園の、周金が私に話しかけます。「人工的に、植えたものかもしれません」と。私には、判断がつきませんでした。大きさがそろっているのは、人工林の可能性を示すもの。その反面、この地方で、人工的に植えるときは、一直線に、等間隔に、植えようとするんですけど、その傾向がみられません。バラバラなんですね。

周金は、いいました。「下関に、こういう林があることは、こどものころから、きいていました。最低でも、50 年はたっているでしょう」。周金は、現在、55 歳です。伐られた株があるので、年輪を数えるのは可能でしょうけど、それには、カンナでもかける必要があります。

村のなかに、寺廟がありました。いってみると、中心の建物に、「大雄宝殿」の看板がありましたから、仏教の寺でしょう。建物の両わきに、コノテガシワ（側柏）がありました。カシワ（柏）の字に、ごまかされてはいけないんですね。「柏」の字は、中国では、ヒノキ科の植物をさします。針葉樹です。

かなりの年輪を、重ねた木のようにです。近くに、88 歳の老人がいました。コノテガシワは、自分がこどものころでも、現在の、半分の太さはあった、といいます。周囲にいた、老人たちも、口々に、紹介してくれました。

つづけて、あのカシワ林のことを、尋ねたんですよ。すると、88 歳の長老は、「もともと、あそこには、数本が生えていただけです。その後、だんだんとふえて、現在のようにになりました」。人が植えたものではない、というふうにとれます。でも、こういう話は、参考にはなりませんけど、そのまま信じるわけにはいきません。最終的に信じられるのは、自分の目と、判断力です。もちろん、まちがうこともあるでしょうけど。

その村を離れて、すこし、北に戻りました。舗装された公道を離れて、狭い、ガタガタ道にはいります。そこに、3 本のカシワの大木がありました。一見して、昨日（前号）のものより、大きいのです。樹高は、20m はあるでしょう。いちばん太い木の、胸高あたりで、李向東と、周金が、両手を広げて、抱きつきました。2 人がかりで、ぎりぎりで、届きました。直径が、1m を超えています。

その 3 本は、いかにも、人手によって、植えられたもののようです。3 本の距離、その他が、そう感じさせます。そして、周囲はお墓です。それも、最近のものではないよう。ここも陽坡です。李向東は、さかんにそのことを気にしています。

だれか人が、ここに植えたのでしょうか。しかも、よその地から、持ってきた可能性もあります。李向東によると、閻錫山の秘書が、この村の出身だそうです。3本のカシワは、もっと年代の古いものですが、人びとの行き来は、以前から、さかんだったかもしれません。あのカシワの林は、この3本の、子や孫にあたるかもしれません。

そんなふうを考えるもう1つの理由は、周囲の山に、カシワが、まったくみられないことです。私がみてないだけでなく、この地方の山を、これだけ歩き回っている、植物ずきの李向東たちが、まったく、みていないのです。それは、前日の、南降村のばあいも同様でした。

そして、いま1つのナゾは、この村のカシワの林が、いままで、守られてきていることです。なにか、理由がなければ、とっくに灰になっているはず。じっくり調べれば、なにかがわかるかもしれません。それはともかく、周金たちは、この林で、たくさんの種子を、昨年秋に、集めたそうです。

それと、前号で、カシワの木に、たくさんの寄生木（やどりぎ）がついていることを書きました。インターネットの情報によると、中国では「櫛寄生」と呼び、この木によくつくようです。薬材であり、抗ガン作用が注目される、とあります。

## NO. 408 太行山を歩く 2007. 04. 09

霊丘県の南山区は、この一帯では植物の多いところ。大同にある植物の大半は、ここにあり、大同のほかの地域にないものも、ここにはあります。ことしの夏に、植生調査をしたいと考えています。下見をかねて、あちこちを歩いてみました。ここは太行山脈のなかです。太行山は、山西省と河北省の省境に位置し、東西の幅が最大180km、南北の延長が、450kmもある大山脈です。さすが大陸！

最初は、前々回に書いた南降村から、植物園の入り口の南庄村まで、歩くことにしました。5kmほどの山道で、1時間半でだいじょうぶだと、地元の人はいいます。

そのまえに問題があります。「インスタントラーメンくらい、もってたらどうだ」と私がいったのに、「お湯がありませんから」といって、なにももってきませんでした。もうお昼です。彼らは農家に声をかけて、ニワトリのタマゴを買うんですね。50数個も。そしてそれを、一軒の農家で、ゆでてもらった。農山村の、地面を駆け回っているニワトリが生んだタマゴを柴鶏蛋（ツァイジータン）といって、珍重するんですね。「小さいのがおいしいです」と、選んで渡されたんですけど、6個も食べましたよ。黄身がオレンジがかっていて、おいしかった。

山歩きに備えて、車にストックを、積んであるんですけど、このかんじんのときに、ありません。たてかけてあったヒマワリの茎の両端を切って、杖にしました。これが調子いいんですね。まずは軽い。それから、手ごろな太さで握りやすく、まっすぐです。そして、意外とじょうぶなんですよ。2日間、ついて歩きましたけど、なんともなかった。愛着がわいてきて、2日目に山から戻ったとき、小郭が「捨てましょう」というのを、「だめだ、日本にもって帰るんだ」なんていいましたよ。

南降村と、南庄村は、1つの山をはさんで背中あわせです。南降村から、谷筋をさかのぼったんですけど、村に近いところは、谷がせまくて、畑はありません。山のうへのほうにいくと、傾斜がゆるやかになります。そうすると、そこを畑にするんですね。取り除いた石で石垣をつくり、ほかからも土を運んでくる。段々畑ができます。

南降村から、高低差にして200mちょっと、あがったところが、峠でした。それを越えると、反対側にすぐに畑がでてくるんですよ。こちらは、南庄村のものよう。くるまでいけば1時間半のところでも、村は地つづきです。植物園の孟さんのつれあいは、南降村から、私たちがたどるケモノ道を、ロバの背に乗って嫁いできたそうです。南庄村も、十分に貧しいんですけど、南降村はより貧しく、交通も不便です。けっきょく、私たちが歩いたのも1時間半でした。

3月28日は、2000年前後に調査した碓氷山の、西側にいきました。上関村のカシワの林をみたあとです。くるまのはいれる最後の村で、くるまを止め、歩きはじめました。石がごろごろ転がっている谷底を、さかのぼっていきます。西から東にむかって、歩いたんですね。すると、右側は、ずっとマツの緑なんですよ。毛沢東がだいすきな周金は、「60年代の毛沢東時代に植えたものです」と、大声でいうんですけど、フシを数えてみると、そこまではなく、25年ほどまえのものです。それにたいして、左側には、灌木も草も、ほとんどありません。みごとな対比です。

霊丘自然植物園でも、同じように、南むきの斜面（陽坡）は植物が少ないんですけど、それでも、灌木のトネリコ的一种とか、野生のモモとか、陽坡のすきなものが生えています。どういことでしょうか。

海拔1,300mを超えるころから、足もとに雪がでてきました。前日の夜から、その日の朝にかけて、少しだけ降ったんですね。陽坡は融けましたが、陰坡に残っています。ぎりぎりの環境で生育する植物にとっては、この差が大きいんでしょうね。

めざす自然林も、そのあたりの海拔からでてきました。やはり右側の、陰坡です。だいたいのところは、アブラマツ（油松）を植えているんですけど、傾斜がきつすぎて、人がはいれなかったのでしょうか。マツのないところがあります。そんなところに、数種類の落葉広葉樹が、再生しています。

マツを植えるのを、もう少し控えめにして、すきまを空けておいてほしかった、という気がします。でもまあ、村に近いところに、松林ができ、その下枝が燃料になりだしたから、上のほうまでタキギをとりに、人が上がってこなくなった。それで自然に、この自然林ができたというわけ。その証拠に、村に近いところのマツは、ずいぶん上まで枝打ちされ、上のほうのマツは、下枝が残っています。

自然林のなかに、あとで、はいつてみました。傾斜が40度以上あるうえに、5~10cmの雪が積もっていますから、立ち木につかまらなないと、立つことも、歩くこともできません。トレッキングシューズに、雪がはいつて、私は往生しました。ここでも、代表的なのは、リョウトウナラです。それから2種類のシナノキがあり、どちらも生育は良好でした。中国で黒樺と呼ばれるものもありました。カバ科のコオノオレといったのでしょうか？喬木では、そのほかに、カエデ、ポプラ、ヤナギがあるくらい。生えてから、せいぜい20年前後でしょう。

いちばん高く登ったところは、1,550mほどです。このような光景は、はじめてではありませんけど、やっぱり、驚きです。周金は、「中国大！ 太大！」と叫びました。中国は広い！ 広すぎる！ というわけです。本来なら、私が口にすべきセリフでしょう。山また山、どこまでいっても、山です。そして、注意してみると、ところどころが平らにならされて、畑になり、家があり、村ができているのがわかります。すごいですねえ！ 気が遠くなりそうです。

植生調査としては、おもしろいとはいえないけど、この風景は、ぜひ、みてもらいたいと思います。往復で4時間でしたから、このコースは距離的に遠くありません。

## NO. 409 風邪で点滴をうける 2007. 04. 13

「黄土高原だより」その他で、正直に、私は、弱気で、軟弱な自分をさらけだしてるのに、えらく、誤解されることも、あるんですね。肉体的にも、精神的にも、強い人間だと……。そんなことはありません、ほんとに。からだのほうも、かなり弱い。

日程がたてこんだりしていると、そのあいだは、自分なりに緊張しているようで、なんとかもっていたんですよ、若いころは。そして、ひと段落したところで、ばったり倒れる。たいていは、風邪をひきます。そして、発熱する。ほかの人にしてみれば、たいしたことじゃないんですよ、きっと。ところが、私のばあいは、そうとうに落ち込んで、ああ、もうこれでだめなんだ、再起不能じゃないか、なんて、思い込みます。で、ちょっとよくなると、もう、じっとしておれないで、なにかしたくなるわけ。ま、こどものようなものです。

私も、団塊まっただなかですから、もう、定年退職の年齢です。自分を奮い起こして、厳し

い局面を乗り切る、なんてことが、できなくなったようなんです。肉体的にも、精神的にも。こどものころから、ませてもらったから、老化もはやいのでしょう。

ことしの4月、大同での日程は、ラクになるはず、だったんですよ。なぜかといいますと、統一地方選挙があって、いくつかの労働組合が、ツアーを、ほかの時期にずらすことになりました。ですから、この機会に、おもしろいことを、大同で、いろいろ仕込んでおこうと思っていたんですね。そしたら、新しく、東芝と、ローソンの、CSR（企業の社会的責任）関係のツアーが、きまったんです。ありがたいことに。さらに、JICAから請け負ってきた事業の、最終評価もはいつてきました。結果として、4月5日から、4月末の帰国まで、2つのツアーが重なる日が、2回あっても、完全に空く日は、ゼロになってしまいました。そのあいだに、ほかのしごともいろいろありますし。

しょっぱなに、私は体調をくずしたんですね。風邪をひきました。ヤバイと思って、すぐに休んだんですよ。ところが、律儀というか、つきあいがいいというか、私はいったん風邪をひくと、かならずフルコースです。薬を飲もうと、休みをとろうと、途中から引き返すことがない。高熱をだして、それがしばらくつづき、大量の汗をかいて、少しずつよくなります。そのあいだ、人と顔をあわせたくないほど、落ち込みます。ただひとり、私のつれあいを例外として。今回も、そのパターンに、落ち込みかねない。

それでは、ちょっと困るので、中国名物の、点滴を受けることにしました。こちらの人たちは、熱でもだと、ふつうに、「消炎にいつてくるか」といった感じ。私もこれまで数度、体験しましたが、40度近い高熱が、受けてる数時間のあいだに、魔法のように、ひいたりするんですね。悪寒で、ガタガタ震えていたのに、途中で、からだがポカポカしてくる。一度なんか、効果がありすぎて、体温がさがりすぎ、逆に、動けなくなるなんてことも、ありましたけど。

このたびは、大同市第4人民病院の、お世話になりました。1995年の春くらい、王萍（ワンピン）が、私の通訳をしてくれています。彼女は、この病院の、看護婦さんでした。だんだん出世して、この1月からは、副院長！中国の社会に、私はたくさん問題を感じてますけど、こういうことだって、あるんですね。看護婦として、病院にはいった人が、副院長になるなんて、日本では、考えられないんじゃないですか。いくら、実力があつたとしても。職員数550人からの病院ですよ。でも、本人にたしかめると、看護婦から副院長になったのは、大同の病院全体でも、2人めだそうですし、彼女の病院では、女性の副院長じたいがはじめて。やっぱり、ただものじゃない！

最初に、血液と尿の検査と、医者診察をへて、いざ、点滴をうけました。250CC入りのブドウ糖液に、なにかが入れられ、茶色になっています。「清開靈」という、漢方薬だそう。以前は、途中で気持ちよくなって、寝入ってしまったんですけど、このたびは、多少の痛みを感じて、そうならなかった。医者と看護婦が、4~5回もきてくれて、「痛くはありませんか？ 気持ちわ

るくありませんか？」と親切にきいてくれるんですけど、ちょっとぐらい痛いのはあたりまえと、私は考えて、だまってました。それがまちがいだったんですね。この薬は、点滴のスピードが速いと、痛く感じるそう。もっとゆっくり、落としてもらわなければならないんですね。

やっと終わった、と思ったら、もう1本、運ばれてきました。ペニシリンのようなものが、はいっているのだそう。こっちのほうが、本番のようですね。

点滴の途中で、血圧をはかったんですよ。160-90もあった。年とともに、高くなる傾向では、あったんですね。でも、これは高すぎます。ここ数日、よく眠れませんでしたから、そのせいかもしれない。頭は痛くないか、フラフラしないか、ってきかれるんですけど、風邪にもかかわらず、それはありません。

そのつぎの日も、点滴をうけてるときに、血圧をはかりました。なんと、180-90もあったんですね。すぐに、男のお医者さんが、飛んできました。美人の若い看護婦に測らせたのが問題だと、気づいたんでしょうね。彼が測りなおすと、150-90でした。それでも、なお、高い。コレステロールはどうだと、きかれるんですけど、こちらは正常値の範囲で、しかも低いほう。自信があります。自覚症状をきかれるんですけど、なにもないんです。ここ数日、よく眠れないのが原因だろうと、私は主張しました。医者は、高血圧のために眠れないこともある、というんですよ。ニワトリが先か、タマゴが先か、といったところ。

ために、いちばんゆるい降圧剤を、1日2回、半錠だけ、飲んでみる、ということになりました。その場で、半錠を飲んで、1時間後に測ると、135-85でした。それでラクになった、という自覚もまるでないんですけど、とにかく、しばらくつづけてみることに。いろいろとガタがきてるんでしょうね。

ま、そんなことで、途中1回、点滴のために、ツアーのみなさんと、別行動をとった以外は、ふつうに活動できています。それにしても、あの点滴は、すごいですね。

あっ、そうそう。以前に書いた、ダイエットですけど、意志薄弱の私にはめずらしく、まだ、つづいています。70kgに限りなく近づいていたのを、何段階に分けて、63kgまでしぼり、いま水平飛行中です。でも、寒い時期に体重を落とすと、風邪をひきやすいそうですね。それが、よくなかったのかもしれない。

#### NO. 410 三寒四温 2007. 04. 16

大同も、ことしの冬は暖冬でした。3月23日に、大同にきていらい、暖かい日がつづきました。いつもだと、カササギの森あたりは、4月初旬になっても、土の凍結が融けないのに、こと

しは3月末から、植栽作業がはじまりました。そういうレポートを送ったので、みんな、そのように、信じられたと思います。

4月にはいって、寒波がやってきました。急に冷え込んだんですね。最低気温はマイナス5～6度、最高気温も7度くらい。東芝のツアーが、5日からやってくるようになっていましたから、あわてて、そのことを連絡しました。つぎのローソンのツアーも、寒さに備えてきたんですね。ところが、かれらがきたころは、また気温が上がって、日中の最高気温は、20度近くになりました。ローソンのツアーが帰るとき、私の部屋に、置き土産の、使い捨てカイロが、たくさん残されていました。

3月すえに、いちばん南の霊丘にいったときは、ヤナギはまだ、茶色だったのです。4月8日に、霊丘にいくと、もう緑色にみえました。その翌日になると、ずっと緑が濃くなります。

東芝のツアーは、霊丘県から、おとなりの河北省涿源にぬけ、東芝が河北省に建設した「希望学校」に立ち寄って、北京に帰ることになっていました。大同での最後の日程が、霊丘県上北泉村だったのです。ここの果樹園のアンズが、うえのほうはまだツボミですけど、下のほうは、3分から4分咲きといったところ。もう15回も、大同に通っているリピーターで、まだ、アンズの花をみてない人がいます。そのために、ことしの春の、私たちのツアーは、4月17日からという、おそい時期に、設定しました。ところが、東芝の人たちは、第1回目で、アンズの花を、みてしまった。

4月11日に、大同市内に戻ってくると、ここをでるまえは茶色だったヤナギが、すこし緑がかってみえます。ポプラは、雄花をたらしめています。確実に、春が深まっているんですね。しかし、北のほうでは、山桃が開花しはじめた段階で、アンズは、まだまだです。ひょっとすると、平年より、遅いかもしれません。

4月14日の早朝、イオン労働組合のツアーがやってきて、その夜は、陽高県の温泉ホテルに、宿泊しました。陽高県の招待所は、ツアー参加者に不評で、あそこには泊まりたくない、まるで幽霊屋敷だ、という人まであり、さらに以前の温泉宿も、いろいろ問題があって、頭が痛かったんですけど、このたびの温泉は、ずいぶんと改善されたんです。到着するなり、そのマネージャーが、私たちの顔を見て、「去年の団は、ものすごく、酒を飲みましたね！」とむこうから、いいだしましたよ。サントリー労働組合の、プロフェッショナル集団が残した新しい伝説ですね。

ところが、翌朝、カーテンをあけて、驚きましたよ。雪がチラチラしているのです。そして、北側の山は、真っ白に、雪化粧です。冬だって、雪はほとんど降らないのに、4月も15日になって、雪なのです。守口堡村の、万里の長城も、雪に覆われてましたので、登るのをあきらめました。もともとこのツアーは、15日は陽高県の農村で作業をし、その夜はホームステイのは

ずでした。ところが予定していた郷で、4日ほどまえに幹部の人事異動があり、そこまでの準備がとてもまにあいません。万が一のことを考えて、その予定をキャンセルし、大同市内に帰って、炭鉱（晋華宮鉱）の見学に急遽、切り換えていました。それがよかったんですね。これほどの雪だと、農村にいても、作業はむりですし、農家のホームステイでは、寒くて、どうにもならなかったでしょう。夕方になって、大同の市街地でも、雪がチラチラしました。坑道のなかを見学していれば、雪が降ろうと、槍が降ろうと、へっちゃらです。

三寒四温と、日本でもいいです。中国からきたことばでしょう。でも、本場のほうは、これくらい極端なんです。大同では、メーデー（5月1日）を過ぎてから、雪が降ったことがあるそうです。

#### NO. 411 アンズの花 2007. 04. 23

緑の地球ネットワークが派遣する2007年春のワーキングツアーが、4月17日から、大同にきました。到着前から、私は、気が気でなかったんですね。というのは、このツアーは、アンズの花見を、目的の1つにしていたからです。14回参加の石田和久さんはじめ、多くのリピーターがいて、たくさんのアンズを植えてきたのに、まだ、満開の花をみたことがありません。例年の春のツアーは3月25日ごろ出発ですが、ことしは時期をずらしました。目的地は渾源県呉城村で、これまでの開花実績をもとに、ツアーの時期を慎重に検討しました。

冬のあいだ、大同からは、例年以上の暖冬だと連絡がありました。3月の初めに、大雪が降った、という電話もありました。3月23日に、私たちが大同に着いてからも暖かい日がつづいたのです。大同市北部では、例年なら3月下旬は、土が凍結していて、穴を掘れないことが多いのに、ことしは、すでに植樹がはじまっていた。春の訪れが早い、という印象をもちました。

その後、4月にはいって、寒波が何回もやってきました。そのあいだをぬうように、4月9日、最南部の靈丘県上北泉村では、果樹園のうえのほうはツボミですが、下のほうではアンズが、3分咲きから4分咲きになりました。東芝の緑化協力団は、はじめてきて、アンズの花をみたのです。地元の人たちは、そのさい、「きのうまではチラホラ咲きだったのに、1日で、急に開花した」といいました。

そのころまで私は、ツアーが呉城村を訪れる予定の、4月21日までに、花が終わってしまわないか、心配だったんですね。昨年、4月22日に、この村を訪れたとき、花の盛りを、過ぎていたのです。

4月10日に、広靈県苑西庄村を訪れたときのことで。ローソンの緑化協力団といっしょで

した。私たちがアンズの苗を植えているとき、遠田顧問が、私に耳打ちしました。以前に植えたアンズの芽に、異常があるということです。示されて、びっくりしました。ツボミの数が、ほんとに少ないのです。葉芽も、枯れて乾いていて、手でさわると、ポロポロと、落ちてしまいます。

地元の人にきくと、3月初旬の大雪のときに、凍ってしまったといいます。本来なら、アンズは寒さに強いのですが、その前が、暖かかったために、春と勘違いして、そのような被害を受けたのかもしれませんが。せっかく育ってきたのに、昨年から、2年つづきでこの村は被害を受けました。でも、村の人たちは、それほど落胆しているようにみえません。まあ、この地方では、自然災害はめずらしくありませんからね。広霊県のすぐ東が、河北省の蔚県で、伝統のあるアンズ産地です。ここのアンズも、同じ時期に、ほぼ全滅したそう。

4月14日からは、イオン労働組合がやってきました。陽高県、大同県と、大同市の北部で活動しました。とくに陽高県は、以前からのアンズ産地です。ここのアンズのつぼみが、まだ固いんですね。すぐには、開きそうにありません。このあたりから、私の懸念は、変化しました。緑の地球ネットワークのツアーがくるまでに、花が咲いてくれるか、どうかです。

あいだを、省略いたします。4月21日に、呉城村にいきました。バスのフロントガラス越しに、アンズ畑がみえてきました。残念ですが、まだ咲いていません。冬の時期は、黒っぽくみえていたのですが、いまは、かなり赤みがかかっています。つぼみが、ふくらんでは、いるのでしょうか。

村の党支部書記の、王迎才が案内してくれました。あとになって考えると、最初から、ぎこちなかったんですね。いつもなら、こちらをみるなり、かけよって、握手をするのに、それがなかった。いつものように、あの深い浸食谷の、そばにいきました。アンズの木に近よって、すぐに気づきました。ツボミの数が、うんと少ないのです。葉芽を指でさわると、ポロポロと落ちてしまいます。苑西庄村できいたときは、呉城はだいじょうぶだと、いていたんですよ。それが、誤報だったのです。

王迎才の話では、凍結は3月初旬の、大雪のときだそうです。ここでは、雪が50cm以上も積もった。風もつよかった。気温は、マイナス10数度に、下がったそう。マイナス10数度というのは、冬ならふつうの気温です。アンズは十分に耐えられます。それまでが暖かかったために、発芽の準備がはじまっていて、耐寒性が落ちていたのでしょうか。

花芽の90%が、失われたといいます。花が咲いたあと、寒波がやってきて、幼果が凍り、落ちてしまうことは、これまでもありました。咲かんばかりにふくらんだ、ツボミが、寒波で凍ったこともありました。それが、ここでのアンズ栽培の、最大の問題点でもあったのです。

このたびは、そのうえに、葉芽まで、被害を受けました。これまでに、なかったことです。ツボミや幼果が落ちるだけなら、その年だけの被害ですけど、葉がでなかつたり、大きく遅れたりすると、木が弱って、翌年以降まで、影響しないかと、心配です。

大同の年平均気温は、この30年間で、約1度、上昇しています。夏の気温上昇は、それほどありません。いちばん寒い、1月の月平均気温は、2度も上昇しています。大同は、寒い地方です。ですから、冬が寒くなくなるのは、ありがたいことのように思えます。しかし、このような問題がおこります。温暖化は、日本では未来形でしか語られませんが、ここではまさに現在進行形です。花を楽しむはずが、とんだことになってしまいました。

温家宝総理の来日中だと思いますが、4月13日の『China Daily』（英字紙）に、私たちの活動が、長文で紹介されました。以下のウェブページにも、掲載されています。私はみても、わかりませんが……。

[http://www.chinadaily.com.cn/cndy/2007-04/13/content\\_849581.htm](http://www.chinadaily.com.cn/cndy/2007-04/13/content_849581.htm)

#### NO. 412 生態移民村 2007. 04. 26

この「黄土高原だより」の、第1号は、1999年4月26日に、送り出しています。それから、ちょうど、8年。これが412号ですから、平均すれば、ほぼ週刊。よく、つづいたものです。つきあっていただいたかたに、感謝いたします。いままた霊丘ですが、午後から北京にむかい、その後、4月28日に、帰国の予定です。

太行山の村は、ほとんど例外なく、貧しいのです。気象その他の条件に恵まれないうえ、土地がないのですから、あたりまえのこと。いまが貧しいだけでなく、将来にわたって、改善の可能性が、ほとんど感じられません。

近年、異なったようすも、みられます。たとえば、鉄鉱石の採掘がはじまったこと。5回ほどまえに、太行山中の、道路がよくなったと書きました。それは、採掘した鉄鉱石を、運び出すためのものです。開発しているのは、たいてい、外地の資本。地元は、それだけの資力はありません。なかには、モリブデンの鉱山もありました。出稼ぎの場がふえた、とはいえるでしょう。

こんな場面にも、遭遇しました。山のうへのほうで、さかんに鉄鉱石を、掘っています。地面に、露出しているんですね。近くの村の人たちが、三輪の農用車で、運び出します。道の途中でも、何台も、何台も、であいました。1トンが数十元とか、もう少しのお金になるよう。南降村のはずれにも、鉄鉱石が、積んでありました。私のみるところ、一時的なものにすぎないでしょう。そして、山中の村の、いちばんの宝であった、あの水を、汚染する可能性があります。

す。いや、それはすでに現実です。

黄土丘陵の村も、高所の村ほど、貧しいのです。ここは畑は広いのですが、土がやせ、水が乏しいために、生産性が低い。太行山の村より、しんどいかもしれません。

日本からきた人たちが、そうした村をみると、「なぜ、もっと豊かな、下のほうに、移住しないのか？」といます。日本人にかぎらず、都会からきた中国人も、おなじように、そういいます。

事情を知らない人が、考えることくらい、地元の人が、考えないことはないのです。考えるだけでなく、現実に行っているわけですね。大同市の政府は、該当する人びとの同意を前提に、200人未満の村の、移転をすすめています。貧しい村を、豊かな村が吸収する、小さな村を、大きな村がひっばる、というのが、原則だそう。

この「たより」に、しばしば登場する、広霊県苑西庄村も、その対象になりました。ほら、私たちが協力して、井戸を掘った、あの村です。より県城に近く、下のほうにある楊窰村が、ひっばることになっていました。ところが、苑西庄村の人たちは、それを拒みました。井戸ができ、アンズを植えて、将来への見通しが、やっとでてきた、それなのに、どうしてそれを捨てて、ほかの土地に移らないといけないのか、ということでしょう。

楊窰村の条件が、苑西庄村よりいいのは、たしかでした。畑の土もましですし、一部とはいえ、地下水をつかって、畑の灌漑もできました。ところが、ここは村が大きくて、人口が多いんですね。だから、1戸あたりの、耕地はせまい。よその村の人を、心から歓迎はしないでしょう。あたりまえのことです。そうこうしているうちに、楊窰村の、井戸が涸れてしまいました。大きな村ですから、その解決は、容易ではないでしょう。移転の話は、さたやみになったよう。

山中や、黄土丘陵の村の移転は、プラス面もあります。それらの村のなかには、どう考えても、人が住むべきでないところがあります。人が住み、村があるために、「環境破壊と貧困の悪循環」がおこります。たとえ小さな村でも、人が住んでいれば、道路や、電気を維持しないわけにはいかない。そのコストもばかになりません。村がなくなり、人が撤退することで、やがて自然が回復し、森林が再生します。霊丘の自然林や、私たちの自然植物園は、それを立証しています。

霊丘県の、県城のはずれに、大きな生態移民村ができました。小さな移民村は、あちこちで見ますが、これほど大きいのは、はじめて。一昨年あたりに、建設がはじまり、いまは人が住んでいます。

道路に面して「移民村」と大書した、中国ふうの牌楼。奥にむかって、まっすぐ、大通りが

あります。1km 近くもあるでしょう。その両側は、2 階建ての、商店街。1 階が商店、2 階が住宅。営業しているのは、数軒だけで、あとはシャッター街。

商店街のうしろに、レンガ建ての住宅が、立ち並んでいます。同じ構造で、同じ大きさ。住宅と住宅のあいだの路地が、せまいんですね。くるまは、とうていはいれません。自転車、荷車が、やっとなら。それにしても、ものすごい数の、住宅です。

一角に、全体をピンク色に塗った、小学校がありました。なかからは、こどもたちの、元気な声がきこえてきます。ふだんなら、無遠慮に、はいっていくんですけど、移動中で、時間がなかったの、やめました。

近くにいた、数人の、中年の男に話しかけました。最近になって、ここに移住してきたそう。それまで住んでいたのは、招柏村。私もいったことのある、山のなかの村です。そう伝えると、彼らは、たばこをさし出してきました。残念なことに、私は中国でも、タバコをやめています。ここには、500 軒はあるそう。だとすると、1,700 人くらい、ということでしょうか。私のみるところ、軒数はもっと多いようですし、現在、建築中の家もあります。

「しごとは？」ときくと、「しごとなんてない、出稼ぎだ」という返事が返ってきました。いちばんの問題が、そこなんでしょうね。住宅は、政府のお金で建てました。しかし、これだけの人びとが、農業で生きるための土地は、とても準備できないでしょう。商店のための建物も、建てはしましたが、周囲の住民に、安定的な収入があり、購買力が生じなければ、営業はむずかしいでしょう。

山中の村に残っていたのは、高齢者がほとんど。若い人たちは、早くに、でてしまいました。こどもの声もきこえましたが、移民村も、高齢者がおおいでしょう。それだけに、しごとをさがすのも、新しい生活になれるのも、困難が大きいですよね。画期的な試みだけに、今後を見守りたいと思います。

## NO. 413 交通渋滞 2007. 05. 02

緑化協力団ツアーといっしょに、4 月上旬、大同市内から、霊丘県にむかっていたときのことです。渾源の県城付近で、先導する小郭のくるまがスピードを落とし、やがて、停車しました。ようすがおかしい、というのです。たしかに、反対方向から、くるまが 1 台もきません。前方のどこかで、大渋滞しているおそれがあります。くるまを降りて、道端の人に話を聞いたり、携帯電話で、運転手なかまと、連絡をとったりしていました。小郭のネットワークは、ほんとに広いのです。

そうしているあいだも、反対方向からのくるまはありません。ここから先にすすむと、迂回路のない一本道です。いまなら、広霊まわりの道を選択できます。多少は遠回りですが、大渋滞に巻き込まれるよりは、ましでしょう。えられた情報を総合すると、渋滞はかなりの時間つづいているよう。広霊経由のルートを選びました。

大同の道路は、ここ数年で、急速によくなりました。市内から、霊丘の県城まで、バスなら、以前は、最低でも5時間は、かかっていましたが、いまなら、2.5~3時間です。つづら折りの峠道が、2か所あったのに、低いところの直線道路に、付け替えられました。それぞれ半時間以上も短縮したうえ、安全になりました。以前はよくそこで、トラックなどが、ダイビングしていたものです。舗装も、しっかりしたものに、やりかえられました。

ところがこの春、外にでるたびに、渋滞にあいます。長いくるまの列が、ピクリとも、動かなくなる。このたびのように、迂回路があれば、そちらにむかいますが、たいていは、逃れようのない、一本道です。ジッとしておれないたちの私ですから、そのたびに、くるまをおりて、事情をたしかめに、歩いていきます。渋滞のほんとうの原因は、わからないのがふつう。

仮に、1台の石炭トレーラーが、動けなくなったとします。積載能力の2~3倍積むのが、ふつうですから、トラブルや故障は、めずらしくありません。そのうしろに、渋滞がおこります。反対車線は、いつもどおりに流れています。ここまでは、私たちにも、理解できることです。そのうち、しんぼうできなくなったくるまが、反対車線の、くるまの切れ目をねらって、まえにでます。それをするのは、性能のいい、乗用車だけです。最初は、それをみているうちに、トラックの運転手も、やりたくなります。加速性能がありませんから、反対車線にいるうちに、前方からも、くるまがやってきて、動けなくなります。

渋滞のうしろでは、事情がわかりません。イライラします。そのうち、反対方向から、くるまがこなくなります。これさいわいと、反対車線をどんどんすすむんですね。一方向にすすむくるまが、両側の車線を、埋めてしまいます。反対側でも、もちろん、同じことがおこります。渋滞の先頭(?)では、反対方向にむかうくるまどうしが、角突き合わせているわけですよ。どちらも、たとえ50cmでも、自分が前にでることを考えて、ゆずろうとはしません。へたをすると、それが何時間もつづくんですね。そのころになると、もとの原因はわからなくなります。

大同事務所の副所長、魏生学がなんども活躍しましたよ。トラックなんかの運転手に、的確に指示をして、混乱をさばき、スペースをつくっては、車の流れを、取り戻していきます。地元の公安なんかより、よほどみごとなもの。所長の武春珍が、とても勝気で、しゃべりづくめなのにたいし、小魏は引っ込み思案で、人前では話そうともしません。意外な一面を発見して、ゆかいでした。

渋滞のあいだをぬって、歩いていて、感じました。あの石炭トレーラー。走っている車窓か

らみるのより、ずっと大きいんですよ。トレーラーヘッドがあり、まず1台のトレーラーを引いています。そのうしろに、さらに1台のトレーラーがつながっています。しかも、うしろのトレーラーの、大きなものは、前輪が2軸、後輪が3軸もあります。もちろんダブルタイヤですから、これだけでタイヤの数は20本。

運転手の小郭の話です。トレーラーの幅は、2.5m。前のトレーラーの長さは、9.6m。うしろのトレーラーのそれは、12m。積んでいる石炭の高さは、ふつうでも3mはあります。これを計算すると、162m<sup>3</sup>。大同の石炭は、ふつうのもので、1m<sup>3</sup>が0.85tだそう。これだけで、138tになりますね。それが、両側の車線に停まっているあいだを、歩くと、ひじょうな圧迫感がありますよ。ただし、トレーラー2台をひっばっているものは、高速道路には、はいれないそう。

あるとき、小郭が歓声をあげました。新型のトレーラーが、何台か、つらなってきたときです。ボルボ社のもので、最低でも、180tは積めるといふんですね。定格ではなくて、過積載したときでしょう。400馬力前後はあるそう。小郭は、以前は、石炭トラックの運転手でしたからね。血がさわぐようです。「あれを運転してみたい。お金にもなる」といいます。1台が60万円ほどだそうです。

以前、石炭トレーラーが、150t以上積んでいると書いたことに、疑問をもつたかがあったようです。納得いただけたでしょうか？それから、どうして、貨車輸送をしないのだ、という問い合わせもありました。国営の、大炭鉱は、専用の引き込み線をもっていて、たいてい列車輸送です。中小の、地方炭鉱は、トラック輸送のほうが、多いようです。買い手が分散している、といった事情もあるでしょうね。交通渋滞の話が、へんなところにいってしまいました。ごめんなさい。

#### NO. 414 オリンピック乗り切りのウルトラ C 2007. 05. 11

昨日、私は健康診断にいき、待ち時間に、みるともなく、テレビをみていると、ニュースがありました。北京市の幹部が、記者会見をし、オリンピック乗り切りのための、水対策を明らかにしたということです。あとでたしかめると、北京市水務局の副局長のようです。

やっぱりね、と思いました。北京の水需給は、下手をすると、年に、10億m<sup>3</sup>も、不足するそうですね。オリンピックとなると、水使用量も、急増するでしょう。で、河北省の、4つのダムから、水を引くことにしたそう。来年4月からで、年間3~4億m<sup>3</sup>だそうです。そうになると、そのしわ寄せは、河北省の農業用水にいくので、それを補うための、補助金をこれから検討するのだそう。

この4つのダムというのは、河北省石家荘市の、崗南ダム、黄壁庄ダム、保定市の、西大洋

ダム、王快ダムでしょう。いずれも太行山と、そのふもとにあります。私は、この「黄土高原だより」で、この問題についてなんか書いてきたんですけど、注目されなかったようです。あまりの突飛さに、信じてもらえなかったかもしれません。あるプロジェクトの関係で、大同にきた中国林業局の幹部に、その話をしたら、「デタラメを！」という顔をされたくらい。

これは、「南水北調」の北京－石家荘段、という名前で突貫工事がすすめられています。南水北調・中ルートというのは、長江支流の漢江にかかる、丹江口ダムをかさ上げし、そこから水路を建設して、水不足の深刻な、北京、天津に水を運びます。それだけでなく、同じように水不足が深刻な、河北省の石家荘などにも、水を運ぶことになっています。

その完成は、早くても、2010年。オリンピックには、まにあいません。黄河を横切るための、トンネル工事に手間取るようです。南から水がこないのに、どうして北京－石家荘間を急ぐのか、理解に苦しむ人も、多かったと思いますよ。私の友人にも、知らない人が多かったんです。そのヒミツが、これだったんですね。水不足が、北京以上に深刻な、石家荘や、保定の、なけなしの水を、北京に運ぶんですね。石家荘や、保定にとっては、南水北調で、南から水がくる話が、水をとられる話に、変わってしまった。でも、いまは、「オリンピック成功のために！」といわれれば、それに逆らうことは、だれにもできないでしょうね。

最初にその話をきいたときは、2006年末に竣工し、2007年の年頭から使用開始、ということでしたから、工事が遅れたようです。あいだでは、2008年の年初から、という情報もありました。それから、ずれこんだよう。オリンピックの開会は、2008年8月ですから、2008年4月というのは、ギリギリの線でしょうね。綱渡り状態といってもいいくらい。

この問題に、私が、関心をもち、比較的くわしくなったのには、理由があります。石家荘の崗南ダムと、黄壁庄ダムは、滹沱河をせきとめています。この河は、仏教聖地の五台山を南に回って、河北省にでてきますけど、水源を、ずーっとたどると、大同市渾源県の近くまでいきます。私は、2003年4月に、崗南ダムにいつているんですけど、そのときは、事情を知らなかったために、1枚の写真も、残していません。残念なことをしました。

それから保定市の、王快ダム。これは大沙河をせきとめているんですけど、この河の水源は、大同市靈丘県の、平型関のそばです。大西洋ダムは、唐河をせきとめたダムで、この河の水源は、渾源県南部にあり、その後、靈丘県を突ききって、河北省に流れていきます。というわけで、4つのダムの水源は、いずれも、私たちの緑化協力地の範囲内と、その周辺にあるわけ。

これまでも、私は、大同は北京の水源だと、いつもいつてきました。それは桑干河、壺流河、洋河といった、大同の域内を流れる河が、やがて合流して、永定河となって、北京の水ガメ、官庁ダムに流入するので、そのようにいつてきたのです。石家荘、保定の4つのダムの水が、北京で飲まれるようになれば、こんどは南回りの水系でも、大同は北京の水源になります。

いまあげた河川のなかでも、私になじみの深いのは、唐河です。渾源から、靈丘にむかう途中、この河に並行して、道路があります。靈丘の県城から、南部の上北泉村などに行くとき、道路の横を流れているのが、この唐河です。上北泉村の前を流れている、あの河。靈丘自然植物園の前の、上寨河は、すこし下手で唐河に合流します。

これらの河について、気になることがあります。私が、この地方にかようようになってからでも、水量が、激減しています。地元の人たちの記憶は、もっと鮮明で、それらの河で、水浴びしたことを話してくれたりします。いまの水量は、くるぶしくらいまでだったり、ですけど。

もうひとつは、汚染が、急速にすすんでいることです。太行山をぬって流れる、これらの河川が、鉄鉱石の洗浄などで、汚染されていることは、以前も書きました。ひどくなることはあっても、改善はかんたんにはすすみません。今回はふれません。

この春、靈丘で、地元のスタッフに、問いかけました。「この靈丘で、いちばん緑化がすすんでいるのはどこ?」。口々に、答えが、返ってきます。たいていは、自分たちがかかわっているプロジェクト。私が用意していた答えは、ちがいます。「それは唐河の水」というもの。みんな、あつけにとられた顔をします。ほんとに、急に、水が緑色になりました。富栄養化が、すすんでいるのでしょね。

こういう話題のときの、きまり文句で、締めくくりましょう。水を飲むときは、上流のことを、考えてほしいのです。なにかを流すときは、下流のことを、思いやってほしいのです。

#### NO. 415 狼煙台（のろしだい）の村 2007. 05. 18

このところ、事務所のメインのパソコンが、不調だったんですね。それが私のノートパソコンに伝染したようで? こちらもダウン。こういうことは、忙しいときをねらって、おこるようです。その修復やりに時間をとられ、いただいたメール等に対応できていません。もうしわけありません。それにしても、パソコンがなかったら、まったくしごとがすすまなくなっている現状に、あせんとしました。

最近は、通過しなくなったのですが、渾源県の三嶺村は、以前のツアーに参加した人には、印象深い村だと思います。大同市内から、渾源にいたる、峠道にありました。村のはずれに、明代の狼煙台（のろしだい）があり、私たちは「狼煙台の村」と呼んでいました。全戸が、日干しレンガを積んだ、窯洞（ヤオトン）です。数年前に、道路が付け替えになり、この村を通過しなくなりました。この春の私たちのツアーでは、運転手の李さんが、近くまでバスをあげ

てくれました。旧道のまんなかには、直径 4m もある、陥没ができ、もう、くるまは、通ることもできません。

村のすぐうえの、峠からの見晴らしが、絶品なんですね。遠くにみえる山には、樹木はもちろん、草もほとんどありません。黄土丘陵や、山腹は、かなりの急斜面まで耕され、段々畑に変わっています。「耕して天に至る」というのは、誇張ではありません。視界のあちこちに、村がありますが、農家はみな、土づくりの窯洞で、黄土の畑に溶け込んで、どこにあるのか、わからないくらい。そして、畑のあちらこちらに、夏の雨がえぐった深い浸食谷があります。そして、近景にある、狼煙台の村。黄土高原の農村を、1 枚の絵にしたようなものです。外国人を中心に、通りかかる旅行客は、かならずここで下車し、記念の写真を撮ったものです。

旅行客は、たちまち、男女のこどもや、おばちゃんに取り囲まれ、「マイガバ！ マイガバ！」の声に圧倒されます。

「買一個吧！」のつまったもので、買ってください、買ってください、というわけ。彼女ら、彼らが、手にしているのは、真鍮製の馬鈴や、手作りの馬や鶏の飾り物。1 個（1 組）一律に 5 元。素朴ではあっても、見栄えがいいとはいえ、手を出す人は、少ないのです。私たちのツアー参加者にも、こどもの物売りに、嫌悪感をもつ人がいました。私は、「物乞いならともかく、家計のために働くのが、なぜ悪いんですか。25 歳をすぎても、ブラブラしている日本のこどもより、ずっとましでしょう」などと話したものです。

それでも、年間を通せば、けっこうな稼ぎになったよう。住居の外観はみすぼらしいのですが、家のなかには、最新のカラーテレビがあったりしました。そのあたり、かしこいんですね。あの土づくりの窯洞だから、いいんですよ。背景と、狼煙台にマッチして、絵になる。中国（にかぎらず）の観光地で、観光開発と称して、かんじんの観光価値を、台無しにするところが少なくないでしょ。それに比べれば、りっぱなものです。

じつは、あそこの村の近辺で、私たちの役員の 1 人が、パスポートと、けっこうなお金のはいったサイフとを落としたんですね。村の人がそれをひろって、大同か渾源か、どちらに向かったか、どれくらい時間がたっているのか、わからないのに、とおりにかかったタクシーに飛び乗って、とりあえず、15km ほど離れた渾源に、追いかけてくれたんです。

たまたま、顔見知りの、大同の旅行社のガイドをみつけて、そのことを話し、そのガイドが、親しくしている私をみつけて、パスポートも、サイフも、返ってきたんですよ。本人は、落としたことにも気づいていなかったから、パスポート事故につきものの、あのパニックを、味わわないで、すんだんです。まさに奇跡ですよ。そして、その奇跡は、人の善意と、運とが結びついたもの。イオン労働組合のツアーが、そのつぎ、村をとおりかかったとき、私は、そのエピソードを紹介して、「できれば、買っていただきたい」とお願いしたものです。

このたび、JICA の大阪事務所と、中国事務所とから、数人による視察がありました。せっかくですから、道草をして、三嶺村にも寄ってみました。私たちのくるまをみて、1 人のおばちゃんが、走ってきました。いつもの、あのおばちゃん。彼女のつれあいが、パスポートとサイフを届けてくれたんですね。せっかくですから、馬鈴を 2 つ買いました。山歩きの、クマ避けにつかいます。ほんとは、もっと買ってもよかったんですけど、音のいいものがなかった。

この村は、不運がつづいているそうです。第 1 に、道路が付け替えになって、観光客がなくなり、ものを売ることができなくなりました。

第 2 に、水が涸れてしまいました。この村の関帝廟の、道士さんから、以前にきいた話では、50 年もまえには、村の周囲に、シラカンバ、カラマツなどの林があり、谷には水があったそう。林は、かつての存在を信じられないほど、完全に消滅し、水もなくなりました。3.5km も離れた谷底まで、天秤棒をかついで、通うしかありませんでした。ところが、その水まで、最近、涸れたというのです。しかたがないので、10km 離れた、下のほうの村まで、水を買いに通っているそう。おばちゃんは、さかんに 10 元、10 元をくりかえしました。ドラム缶 1 本がか？ と私が問い返すと、「そうだ」と答えました。いくらなんでも、高すぎる気がしますし、たしかなところはわかりません。

小学校も、10km 離れた、下の村に統合されました。ものを売りにきたこどもたちに、以前、きいたことがあります。「学習好不好？」(勉強はどうだい？)(声をそろえ、断固として)「不好！」(よくない！) どうして？「老師不教」(先生が教えてくれない) 先生はなにをしてるの？「打麻将」(麻雀をしてる) 先生は 1 人っきりの、小さな学校ですからね。これでは、こどもたちは救われない。大きな小学校に、統合されることで、プラスの面もあるでしょうね。

この村で、関帝廟の再建がはじまったのは、10 年ほどまえのこと。まつっているのは、三国志の関羽です。仁義ひとすじの関羽を、その後、中国人は、お金もうけの神さまに、変えてしまいました。ほんのすこし、余裕ができたとき、村の人たちは、その力を、廟の再建にむけたんですね。ところが、廟が完成したころ、道路の付け替えがあり、観光客が、村の峠道をとおらなくなってしまいました。中国の現在の急激な変化は、神さまにも見通せないようです。

## NO. 416 2 度目の認定をうける 2007. 05. 29

緑の地球ネットワークは 2005 年 6 月 1 日から、国税庁長官の認定をうけ、認定 NPO 法人になりました。それにより、緑の地球ネットワークへの寄付金は、一定の条件のもとで、税控除の対象になりました。個人からの寄付は、寄付金マイナス 5 千円を、所得から控除できます。企業のばあい、一定の範囲内で、損金扱いにすることができます。遺産相続や遺贈のばあい、寄付したものは、相続税の対象から、除外されます。NPO 法人にとって、この制度は大きな意味を

もちます。緑の地球ネットワークの場合も、認定を受けてから、個人からも、企業からも、寄付金が増えました。有効期間は、2年間ですので、ことしの5月末で、切れることになっていました。

で、私たちは、ことしの2月、2回目の申請をおこないました。5月末になって、認定の知らせが届きました。これから2年間、つづけて、税制上の優遇をうけることになったのです。ホッとしました。

しかし、この制度には、問題が少なくありません。制度発足から5年半たち、それからなんども改定され、ハードルが下げられたはずなのに、認定団体がまだ60（5月1日現在）しかないのが、その具体的な現れでしょう。私たちが最初に認定されたときは、34団体でしたから、2年間で増えてはいるものの、微々たるもの。これでは、制度が生きているとは、いえないでしょう。認定の条件が、きびしすぎるのが1つ。きびしいだけでなく、複雑すぎるために、手続きが、あまりにも煩雑なのが、大きな問題です。

最初のとくも、今回も、私たちが、こだわりつづけた問題があります。それは、提出書類のなかに、社員の名簿があること。私たちのばあい、会員すなわち社員で、650名ほどです。そしてそれは、所轄の税務署で、閲覧されます。会員の立場で考えると、いい気持ちはしないでしょう。個人の氏名、住所、所属法人（おもに職場）、他の会員との続柄、そして、緑の地球ネットワークという1個の団体への所属。これらはりっぱな個人情報ですけど、それが不特定多数の目にさらされる。

こんなことが、なぜ、必要なのでしょう。法令では、役員、社員のなかに、同一の法人に属するものの割合が、それぞれ、役員、社員の総数の、3分の1を超えないこと、という条件が、定められています。企業などが、認定NPO法人を支配したり、それを隠れ蓑にして、脱税したりすることを防止する、というのでしょうかね。

そのうえに、同一の親族にたいする、同様の条件もあります。しかも、最初は、親族の範囲が、六親等でした。六親等といえば、「またいとこ」つまり親どうしが「いとこ」の関係ですよ。最近だったら、親戚づきあいもないでしょう。そんなもの、入会にあたって、ひとりひとりに、戸籍謄本を提出してもらったって、わかりません。しかも、内縁関係まで、含めるということです。あまりにも、非常識だということに、なったのでしょうか。六親等は、その後、三親等に改められました。（内縁は残っています）さらに、社員数が100名以上のばあいは、親族関係についての条件は、はずされました。私たちのばあい、親族関係については、問題にされなくなったのです。

なにかが、存在することの証明は、可能であっても、なにかが、存在しないことの証明は、きわめて困難です。条件が複雑になったばあい、原理的には、不可能とっていいでしょう。

役員や、社員の名簿の提出を求められるのは、その証明のためだそうです。制度を認めるいじょう、役員については、納得できなくもありません。しかし、そんなことのために、650人の個人情報、危険にさらすことは、許されないことだと思います。いまは個人情報保護法が、存在しているのですから。

熟慮のすえ、私たちは、所属法人（主として企業）ごとの会員の人数を記載したものを提出し、それで十分であることを述べた文書をそえました。個人名はすべて伏せました。第1回目の申請のときは、大阪国税局の担当者と、何回も、何回も議論したんですけど、このたびは、最初から「この問題では議論をしません。確認できることを確認して、判断は国税庁にまかせます」とのことでした。実際は、大阪国税局による、2日間にわたる調査があり、会員の名簿も、担当者に、事務所でみせています。このような方法で、十分、足りていると思うんですね。

ほんとはね、会員の一覧を、チラッとみれば、一企業に支配されているかどうかなんて、わかるはずですよ。調査のプロなんですからね。ところが、それでは、役所の恣意的な判断がはいるというので、3分の1というふうに、数値化したのでしょーうすると、こんどは、めんどろなことが発生するんですね。チラッと、パッでは、だめなんですよ。まずは全会員数を確定し、そのなかで、最大の集団の人数を数え、所属が不明な会員の数を数え、最大集団に、所属の不明な会員の数をプラスし、（要するに、所属の不明な会員が全員、最大集団に属しているかもしれないので）その数が、全体の3分の1を超えないことを確認する、といったことをやるわけです。私たちは、個人名を伏せたかわりに、その計算がしやすいように、まとめたんですね。こちらにとっては、てまのかかることなんですよ。

結果がでるまで、それなりに心配しました。不認定になったりすると、印象がよくないでしょ。私たちのようなNGOにとって、共感と信頼が生命線ですからね。「信頼できないようだ」という、風評だけでも、つぶれますよ。多くの団体が、どんなにいやでも、名簿をだすことになるのは、よく理解できます。そんなとき、私たちの世話人のひとりが、「だいじょうぶです。心配いりません」と、アドバイスしてくれました。ありがたいことです。

その一方で、どうしても、名簿を提出できないために、申請を見送っている団体も、あるんですって。たとえば、DV（ドメスティック・バイオレンス）の被害者救援にとりくむ団体。そりゃ、そうでしょう。

なかには、名前や住所を、国税庁に提出して、それが閲覧されてもいいかどうか、アンケートをとって、それに同意する会員を正会員（社員）とし、そうでない人は賛助会員（非社員）になってもらう、という団体も、あるんだそう。でも、それでは、本来は、非営利活動法人を支援するはずの制度が、団体のあり方を、ゆがめることにならないでしょうか？

国税庁も、良識的な線で、判断してくれたと思います。今回は、名簿の件にだけふれました

が、制度の問題点は、まだまだたくさんあります。団体にとって、使いやすくないことには、この制度は、生きてこないと思うのですよ。またの機会に、べつの問題点をとりあげます。

#### NO. 417 楽観的 DNA 2007. 06. 06

6月10日（日）夜9時からの、NHKスペシャル「激流中国」で、オリンピックを迎える、北京の水問題が取りあげられます。「北京の水を確保せよ～しのびよる水危機～」というのが、その題。微妙な時期の、微妙な問題ですが、しっかり問題に迫ってほしい、というのが、私の願いです。みなさんも、ぜひ、ごらんになってください。

それから、いま、街頭で販売されている『THE BIG ISSUE』73号が、『『水』赤字国・日本—水危機を考える』という特集を組んでおり、そのなかに、私のインタビュー記事も、載っています。「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」とうたう、あの雑誌。前のページには、沖大幹さん（東大教授）のインタビューがありますが、それと、間合いよく、つながっているのも、おもしろいところ。ことしの春、大同でごいっしょした、東京のかたから、「11冊も買って、知り合いに配っています」と、メールがきました。1冊200円です。

さらに、中国で発行されている日本語雑誌『SUPER CITY CHINA ビジネス』6月号も「枯渴する水～13億の民を支える水はどこへ～」という特集をくみ、ここにも、私のインタビュー記事があります。

ご承知のように、私は、水問題の専門家でもなんでもありません。緑化協力をつづけている大同市が、たまたま北京の水源にあたり、また、そこで水のない村とであったことから、井戸掘りに協力し、水問題の重要性を、知るようになった、というだけのこと。それなのに、このように出しゃばっているのは、中国の水問題についての専門家が、日本に、少ないからなんです。こんなことをいっては、失礼ですけど、まともな研究者は、研究対象に、しないんじゃないですか。なぜかという、まったくといっていいほど、データがでてないからです。

その乏しいデータも、どこまでほんとうなのか、わからないところがあります。同一の人の、同一の報告のなかで、まったく矛盾する数字が、平気でならんでいたりしますから。将来予測の数字はならんでいても、実績の数字は、まったくでていなかったり。実績の数値であっても、なんと20年以上も前のものであったり。私の実感では、中国北部の水事情が、大きく変わったのは、1998年あたりからの、この10年だと思いますよ。20年もまえの数値では、役に立ちません。私が不勉強のため、発見できないだけなら、いいんですけど。

大同では、主要な地域では、地下水位が、毎年2～3mも、低下しているそうです。「2008年には、完全に涸渇する」と、地元の新聞は、報道しました。ごていねいに、「これは狼少年では

ない！」というトップ見出しをつけたこともあります。100 万人の水ガメである、趙家窩ダムは、ほとんど水がありません。湖底が乾き、草が生い茂って、ウシがそれを食べていたりする。引黄工程第 2 期というのがあって、黄河の水を、大同まで引いてくる、というプロジェクトです。世界銀行の借款をうけ、計画では、とっくに完成のはずなんですけど、最近では、話題にものぼりません。市の幹部にきいても、「そういえば、きかないな」といった感じ。

それでも、大同市は、石炭景気もあって、どんどん大きくなっています。新しい高層マンションも、たくさん建ちます。確信があって、そうしているのかと思って、見通しをきくと、ニコニコしながら、「水はたいへんだよね！」といった調子。北京の膨張ぶりは、大同の比ではありませんからね。にもかかわらず、水の実情がどうなっているか、だれも知らない。いや、知ってる人が、いないわけじゃないんでしょうけど、公表は、されません。それで節水を呼びかけても、市民にリアルには伝わらないでしょう。

こんなことで、妙にイライラしたり、悲観的になったりする自分のほうが、おかしいのではないか、と思えてきます。で、私は、いつか、北京での講演で、「中国では、杞の国の子孫は死に絶えて、楽観的 DNA だけが、選抜されて、残っています」と話したんですね。杞の国というのは、天が落ちてこないかと心配し、杞憂ということばを残した人たちがいるでしょ、あのことです。「これは批判してるんじゃないんですよ、ほめているんです」なんて、付け加えましてね。当時は大使館の公使だった、杉本信行さんが、ききにきてくれていて、とても気に入ってくれたようなんです。楽観的 DNA 選抜論」が。そののちに会ったとき、私と同じ表現をして、「しまった、これは高見さんの受け売りだったんだ」といいました。光栄なことです。

グジャグジャと書きましたけど、とにかく、どなたか、中国の水問題を、専門的に研究してほしいんですね。NHK あたりが、とりあげてくれることで、光があたれば、そういう人がでてくれるかもしれません。絶好のチャンスだと思います。期待しています。中国にとって、なにもまして、重要な問題ですし、日本にたいする影響も、大きいのですから。

#### NO. 418 螻蛄のなげき 2007. 06. 15

自分で自分を、虫にたとえると、「螻蛄」です。なんていいながら、漢字変換で、でてきた文字をみて、びっくり！自分のことだとは、とても思えません。こんな字があるんですね。カナにすると、「オ〇ラ」。下品なことを想像したかたは、「自己責任」。

オケラです。ケラがほんとうでしょうけど、一般には、「お」をつけて呼びます。それくらい、尊敬もしくは愛されているんですね（？）バツタ目ケラ科の昆虫で、コオロギに近いそう。なかなかかわいいんですけど、最近、日本で見たことがありません。中国で、ときどきみえます。日本のものは、体長 3cm くらいですが、中国は、さすが大陸で、その倍近くもありそう。体重

となると、何倍にもなるんでしょうね。

どうして私が、オケラかという、いつもカラッパで、ピーピーしてるからだろう、と思われるんでしょうね。それは事実です。しかし、それだけではありません。中国の友人たちによると、私の書いたものや話は、通訳にしろ、翻訳にしろ、むずかしいんだそう。皮肉、諧謔がやたら多く、しかも、私の本を翻訳してくれた李建華によると、その皮肉が、行間にあるんだそう。そんな私が、ストレートな理由で、オケラを自称するはずがない。

「螻蛄の五能」というのがあるんです。第一、螻蛄は走ることができます。第二、螻蛄は泳ぐことができます。第三、螻蛄は飛ぶことができます。第四、螻蛄は地をもぐることができます。そのうえに、第五、螻蛄は歌うことができます。これだけそろえば、オケラはまさにスーパーマン！

ところが、オケラは、走れるっていったって、よたよた。泳げるといったって、ちゃぷちゃぷ。飛べるといっても、あの羽ではしれたもの。地をもぐれるといっても、からだが見えるまでに、どれだけかかるか。歌えるというのは、ほら、夏の夜なんか、ツーン、ツーンという虫の音がきこえるでしょ。ミミズが鳴いてるといってたんですけど、あれがオケラなんだそう。いろんなことができるんだけど、そのどれもがたいしたことない。それが、「螻蛄の五能」。どうも、いまの私に、ぴったりなんです。まあ、私は、歌えも、飛べも、しませんけど。

それで満足できるわけ、ないですね。この年になると、さびしいものです。1つでいいから、なにか、究めたかったのです。いちばん、私にむいているのは、技術者なんでしょうね。理系の人間だと私がいうと、信じない人が多いんですけど、ほんとにそうなんです。ところが、私は、人生の岐路、岐路で、苦手なほうへ、苦手なほうへと、舵をきったんですね。へんな意地を張ったりして。避けたり、さっさと逃げたりすればいいのに、それができなくて。

かぎられた、せまい範囲のことなら、むずかしいことでも、なんとかブレイクスルーするのが、私が、技術者むきなところなんです。苦手なことでも、なんとかくふうして、それができるようになる。すると、周囲から、「なんだ、できるじゃないか」と思われて、そういう苦手なことが、集中してくるようになる。そういうことを、くりかえすうちに、自分が、自分でなくなるんですね。

私はひとりで、なにかのメカをいじっているのが好きで、それだったら、数日は、食べることも、寝ることも、忘れるくらい、没頭できます。周囲のことが、まったく気にならなくなります。生かしようによっては、長所にもなったはずなのに、いまやっているような活動では、欠点でしかないでしょう。人前で話したり、文章を書いたり、ガラじゃないんですね。だけど、学生運動にくわわった関係で、そういうことも、せざるをえなくなって、こんなことになったわけです。でも、好きでも、とくいでもないから、努力したところで、中途半端なところ

にとどまって、一線を越えられない。

それから、ずっと、職員数人の、小さなところばかりでしたからね。なんでもやらないと、いけないわけです。ひとつのことを、ずっと究めるだけの、余裕はない。これも、中途半端になった原因。

それからオケラって、みるからに臆病で小心。ちょっとした物音にも、びっくりして、逃げ回る。恥ずかしがり屋で、穴さえあれば、逃げ込みたいという感じ。それがまた、私の内心に、そっくりなんですね。でも、そういうことを含め、自分をつくりかえるって、いまさら、不可能でしょう。

でもまあ、オケラってというのは、かみついたり、悪いことをしたり、したとしても、たいしたことないでしょう。毒なんて、ありそうにないし、あったとしても、ちやちなものでしょう。ヒョット、てのひらに乗せて、走らせてみたいという感じ。私も似たようなものですので、てのひらで、あそばせてやろう、といったところで、ひきつづき、おつきあいをお願いいたします。

明日、6月16日（土）は、緑の地球ネットワークの第13回目の会員総会です。遠方の会員の割合が、だんだん高まってきて、出席のむずかしい人が、多くなっています。つごうのつくかたは、ぜひご出席ください。オブザーバーも大歓迎です。

記念講演は、顧問就任が決まっている小川眞さん（大阪工業大学リエゾンセンター長）で、「菌根と炭で地球温暖化にたちむかおう」というもの。小川さんが大同で指導してくださったマツの育苗への菌根菌の活用は、大きな成果をあげています。関心のあるかたは、ぜひおいでください。記念講演は、午後1時30分から3時までです。

## NO. 419 耕して天に至る 2007. 06. 26

前回、オケラについて書きました。いつもより、たくさん感想が返ってきました。会員総会のあとの懇親会で、松井浩さんに叱られました。万年昆虫少年です。「あなたはオケラを軽んじてるけど、なかなかすごいんです。あのへらのような前脚を、外に押し広げる力は、ものすごく強い」。その力で、土のなかに潜っていくんですね。そのようにいわれると、自分をオケラにたとえるなんて、僭越だったんでしょうね。なにかひとつ、人さまにないものを身につけるために、オケラを手本に、私もがんばらないといけません。

黄土高原との最初の出会いは、飛行機の窓からのものでした。北京から西安に飛ぶときです。1970年代の初めですから、もう35年にもなります。最初は、なにか、わかりませんでした。山

や丘陵に、ちょうど地図のように、等高線がはいっているんですよ。地上でみる光景と重ねて、段々畑であることがわかりました。

そのころも、中国の農村に、けっこう行っているのです。最初は1971年のおおみそか、河北省の沙石峪村の農家にホームステイしました。いま地図でたしかめると、唐山市遵化市にあります。石山を切り開き、麓から少しずつ土を運んできて、畑をつくっていました。当時はよく知られた、刻苦奮闘のモデル村でした。

中国の年越しは、旧暦で祝うのですが、私たちのために、餃子（ギョウザ）をつくってくれました。私たちも、包むのに参加したのですが、年越しの餃子を破裂させると、破産するとかいうことで、えらく緊張したものです。水餃子だけを、どんぶりで一杯食べました。ほかにはありません。当時は、餃子が、大のごちそうだったんですね。

「農業は大寨に学べ」といわれた山西省の大寨にも、そのころ何度もいきました。大寨の刻苦奮闘の意味が、それなりにわかったのは、大同の農村に通いだしてからです。あそこも、水土流失とのたたかいなんですね。局地集中的な、夏の豪雨によって、畑の土が浸食される。なんかと、それを軽減しようと、傾斜していた畑を、水平な段々畑に、基盤整備します。そのために、徹底的に、労力をつぎこむわけです。しかし、せっかくつくった段々畑が、あぜごと、雨で流されてしまう。あきらめないで、くふうを加えて、それをまたつくりなおす。その繰り返しです。そのような映画も、みせてもらいました。

私は、その刻苦奮闘ぶりに、すっかり感動しました。ほんとに偉大な人たちだと思ったのです。大寨生産大隊の副主任だった、賈来恒さんから、いろいろと紹介を受けました。彼は、激しい労働で腰を傷めたので、座るのより、立っているほうがラクだといって、いつも立ったまま、説明してくれました。

同じ時期に、大寨を訪れたひとりの友人が、帰国後、私に話したことがあります。「大寨では小鳥の声をきけなかった」というのです。恥ずかしいことに、私は当時、彼がなにをいっているのか、理解できませんでした。しかし、そのことばは、記憶から消えないで、ずっと残っていました。彼が指摘したのは、大寨には森林がない、ということです。土壌浸食を止めるのを、土木工事でやろうとしたんですね。

「農業は大寨に学べ」は、毛沢東の呼びかけでした。傾斜した畑を、段々畑につくりかえる作業は、多くの農村で展開されたようです。なかには行き過ぎもあったようで、東北の平原では、もとは平らな畑を、わざわざ段々畑につくりかえるという、笑い話のようなことも、あったそうです。

その後、私は日本国内で、環境問題に関心をもつようになりました。同じ光景でも、みる人

の目線しだいで、まったくちがうものに、みえるものです。緑化協力を計画して、1992年に大同の農村を訪れたとき、かつて英雄的な刻苦奮闘の成果にみえた、耕して天に至る段々畑が、自然の大破壊と、貧困の象徴に思えてならなかったのです。

とにかく、徹底してますからね。人の手の届くところは、どこも畑になっています。政府は、傾斜角25度以上の急斜面は、農耕を禁じているそうですが、すでに畑になり、それに頼って生きている人がいるいじょう、簡単にやめさせることはできません。大同では、渾源から靈丘に行く途中が、すごいですね。北岳恒山から、望めるところです。

ここは、かぶっている黄土が、薄いんです。そのために、段々畑に改造することができません。急角度に、傾いたままの畑です。なにかにつかまっていないと、転げ落ちそう。長時間、同じ方向をむいて、作業していたら、左右の脚の長さが、ちがってこないか、心配なくらい。

そういう畑のかなりの部分が、「退耕還林」の対象になりました。耕作をやめて、森林に還す、というわけです。政策的、意識的にそのようなことがなされるのは、中国の歴史のなかでも、画期的なことでしょう。理念からいえば、諸手をあげて、賛成したいところです。もともと、人間がはいるべきでないところまで、深入りしていますからね。そういうところに、森林が再生すれば、全体としての環境が、改善されるでしょう。

そのような村では、最近、急速に過疎化がすすんでいます。若者が村を離れ、年寄りだけが残るばあいが多いのです。ですから、退耕還林にもあまり抵抗がなく、食糧や金銭による補償が、十分かつ確実であれば、賛成する農民も少なくないと思います。これからの推移を、見守りたいものです。

6月28日から7月9日まで、私は中国です。今回は、JICAと中国林業局が共同実施する日中林業生態研修センターのプロジェクトで、太原、銀川、内モンゴのアラシャン、ウルムチなどを回ります。大同で緑化協力をスタートさせてから、私は、大同と往復の北京以外に、行ったことがありません。他のプロジェクトをみるのも、はじめてのようなもの。

いろいろみて、見聞を広めるのがいいと、以前もすすめられたんですけど、へそ曲がりの私のことですから、問題があります。人と同じことをやりたくない、人のやっていることをやりたくない、そういう思いが、強烈なんです。ほかのすぐれたプロジェクトをみれば、そのぶん、自分のやれることが、狭まります。それが、こまる。個人としてはそれでよくても、組織の人間としてそれでいいんですか、と人さまから、叱られることもあったんですけど、「いいわけはないんですね、損をしているでしょう」と答えながらも、やっぱり、そうするしかなかった。このたびは、どういう結果になるんでしょう？

NO. 420 十数年ぶりの太原 2007. 07. 02

6月28日の夕刻、太原に着きました。なんと、10年ぶりです。といっても、1997年夏のそのときは、祁学峰といっしょに、ひとりの省の幹部と会い、その夜は、祁学峰と語り明かしました。それだけで、市中を歩くこともなかった。それなりに街中を歩いたのは、1994年ですから、もう13年もたっています。

29日、30日は、日中林業生態研修センターの活動に参加し、1人で歩く時間はありませんでした。7月1日の午前、半日の時間が空いたので、歩いてみました。ものすごい変わりようですね。こっちの記憶が消えていることもあるんですけど、最初は、思い出すことが、まったくなかった。

というのは、泊まった宿が、市内の南のほうにあったんですね。ホテルの窓のすぐ外に、30階以上のビルがあります。その先に、高層ビルが建ち並んでいるのがみえます。それだけじゃない。いまもつぎつぎ建設中で、大型クレーンがいくつもみえます。以前に私がきたときは、高層ビルなんて、1棟もありませんでしたからね。いま建設の中心は、市の外縁部にあるようですね。外へ、外へと、大きくなっているのでしょう。

武春珍が、大同から会いにきてくれたんですけど、彼女もいっていました。「1980年代、90年代に、大同から太原にきたときは、ただ、用事をすますだけで、買い物をしたり、市内観光をしたりといったことは、まったくしませんでした。そのころは、大同と同じくらいの街だったのです。太原にあるものは、みな、大同にありますから、わざわざ太原でさがそうとは思わなかったのです。でも、最近の太原の変化はほんとに速い。それに比べると、大同の停滞がきわだっています」。

そのうえ、太原は、どこもかしこも工事中です。市内の道路を、いっせいに引っかき回して、くるまで移動するにしろ、歩くにしろ、不便でしかたがありません。以前、私は、「中華全国総工事現場」なんて書きましたけど、いまの太原のために、残しておけばよかった、と思うくらい。

ちょっとでも、記憶に残っている、市の中心部に向かいました。こちらも再開発がすすんでいます。それは部分的で、古い建物も残っています。街路樹のポプラなどが、大きく繁って、緑陰をつくっています。雨量も、大同よりは、多いんですね。大同では、ここまで大きくなり、緑もずっと薄いのです。

中心部にある、迎沢公園にしてみました。そうそう。迎沢の「沢」は毛沢東のことで、たしか、1950年代に、毛沢東が太原にくることになったんだそうです。それで、迎沢と名のつくものが、たくさんできました。迎沢区、迎沢大街、迎沢公園、迎沢賓館……ところが、毛沢東

はこなかった。建国前に、毛沢東は、山西省をかすってますけど、建国後は、きていないようです。あの旅好きの毛沢東が。

引退直前の江沢民が、大同と太原にやってきました。彼にも、「沢」の字があります。「やっと迎沢の悲願が果たされた」といった人もいました。でも、江沢民に、毛沢東の代わりができたでしょうか。

とんだわき道にはいりました。公園です。樹木も大きくなって、しっとりして、なかなかいいんですね。それにしても、この公園の人口密度って、すごいもの。たくさんの人が、集まっているんですよ。目についたのが、いくつものダンスのグループです。中高年の女性たち。まっ赤な、派手派手の衣装をまとった、年配の人もいます。朝早く、練習をしているグループの、きょうは発表の日なのだそうです。なかなかりっぱな舞台がありました。賛美歌をうたっている、グループもいました。中高年が多いのですが、若い人もチラホラ。

公園のなかには、比較的大きな池があり、ボートが浮かんでいます。遠くからみると、なかなかいい光景なのです。その水を見て、びっくりしました。濃い緑色なのです。アオコが大発生しているんですね。

カメラをかまえて、それらのようすを撮影しながら、ああ、中国でこんなにのんびりしたのは、いったい、いつ以来だろうと、考えました。だいたい、大同なんかでは、1人にされることすらないんですから。

公園のまん前にある「迎沢賓館」がすっかり明るくなっていました。以前は、重厚ではあっても、暗かったのです。このホテルにも、思い出があります。1993年の秋、45日間ほど、大同の農村を回って、まっ黒になって、太原にたどりついた私は、このホテルのお医者さんと親しくなりました。そのころは、いまよりはずっと、中国語を話せたんですよ。ひどいなまりだったでしょうけど。どこからきたかときかれて、私は「日本です」と答えたのですが、いろいろ発音を変えて、なんと話しても、通じないのです。しかたがないので、紙に「日本」と書いたら、「日本村って、どこにあるんだ？」といわれたんですね。

それから工事現場のなかを、また歩きはじめて、新建南路の「山西大酒店」にいきました。1992年1月、渾源県の農村を回ったあと、私たち5人は、このホテルに投宿し、山西省青年連合会との協議も、ここでおこないました。その当時は、りっぱな、大きなホテルだと思ったんですよ。いまは周囲の大きな建物に押されて、ずいぶんと小さく、貧弱にみえます。

まあ、全国でも貧しい部類の山西省ですから、その省都が、このように変わっていくのは、悪いことではないでしょう。でも、手放しで、喜べない事情もあります。それについては、次回に書きましょう。

## NO. 421 信じるのは自分の目だけ！ 2007. 07. 05

銀川経由で、内蒙古の阿拉善（アラシャン）を回って、7月4日の午後、ウルムチに着きました。ここ3日ほど、みることのできなかつたEメールが、たまっており、そのなかに、私にとって、うれしい知らせがありました。『ぼくらの村にアンズが実った』の韓国版が出版され、事務所に届いたそうです。中国版より先になるかな、と思っていたのに、その後、なんの連絡もなかったのので、ひょっとすると立ち消えかと、半分、あきらめていました。中国版とちがう意味で、すごくうれしいのです。事務所からは、「だれも読めません」といつてきています。「日本語版、中国語版と、同じ本とは思えないくらい」とも。私がみても、いっしょでしょう。

自分では、認めたくないのですが、人さまからみて、私はけっこう偏屈な人間のようなのです。たしかに。関心のもちようや、感じかたが、人さまとはちがうのは、認めざるをえません。しかも、年齢とともに、関心のはばが狭まっていることも、自分で、実感しています。その私が、今回の表題のようなことをいえば、いよいよ危ない、と思われても、しかたがないでしょう。さて……。

汾河は、黄河の第2の支流です。山西省北部の寧武県に「源頭」があり、山西省を南北に縦断して、山西省南部の河津市で、黄河に合流します。私は、寧武県の「源頭」に、いったことがあります。とてもきれいな水が、湧きだしていました。ところが、最近、汾河についてきくのは、汚染のひどさ。さらに、「断流」の情報すら、あります。流れが消えた、というのです。

汾河は、太原の市街地を流れていますから、太原に着いたら、かならずみたいと、考えていました。さいわい、私たちが投宿した水利賓館は、汾河から、そう遠くないところにあります。6月30日の朝早く、見にいきました。

じつはその前、大同から会いにきてくれた武春珍に、「汾河はどうなっているの？」ときいたのです。すると、「水があります。汾河の両側は、公園になっていて、とてもすてきですから、いってみましょうか」と答えました。ところが、運転手の小郭の話では、あのあたりも、道路工事がさかんで、とても近づけない、ということです。で、そのときはとりやめて、30日の朝、1人でいきました。

南内環橋という橋がありました。私は橋の右側、上流側を、西に向かって、歩いたんですね。なるほど、ここを始点に、河の両側が公園になっていますが、大規模な工事が進行中で、近づくことができません。橋の下に、水は、たっぷりあります。しかし、あまりきれいではありません。汚いのです。驚いたことに、泳いでいる人がいるんですね。傷でもあったら、化膿しそう。しばらくは、そのようすをみていました。

なにげなく、橋のランカン越しに、下流側に目をやって、自分の目を疑いました。水がないんですよ。草ぼうぼうで、一部は畑になっているよう。くるまを躲しながら、あわてて、橋を横断し、下流の南がわをみると、なんと、橋のすぐ下手に、青色の、堰をつくって、水を止めています。大同の、御河にあるのと、同じです。河ではなく、プールになっているんですね。動かない水ですから、死んで、当然ですよ。

完全にせき止めているのかと思ったら、ほんのちょっと流れています。堰の長さ、つまり川幅は、240mほどですけど、そこからのオーバーフローが、幅2mくらいの小川になっています。この2日ほど、雨が降ったり、やんだりし、ときには雨足が強かったので、ふだんよりは多いでしょう。でも、そんなもの。

大同の王萍に、橋のうえから、電話をいれました。「小武にウソをつかれた」と私がいうと、笑って、相手にしてくれません。「汾河に水があると、彼女はいったのに、ほんとはないじゃないか」と私がいうと、「えっ、そんなことないでしょう。水はあるでしょう。太原の知りあいにきいてみます」と、王萍はいいます。「きかなくてもいいよ。いま、目の前に、実物があるんだから」と、私はいいました。

ホテルに帰って、サービス員に、「汾河は水がありますか？」ときくと、2人とも、「たくさん、あります！」と即答しました。

太原での研修を主催した、山西省の林業関係の幹部に、昼食のとき、「汾河の水がなくなったのは、いつですか？」ときくと、「そんなことはありません。水はありますよ」と、答えました。みんな、知らないんですね。関心も、もってないみたい。

まあ、私のばあい、ウンもよかったんですね。せき止めている、その現場にいったわけですから。もし、上流の迎沢橋なんかにいっていたら、橋の両側に水があるのを見て、「なんだ、水はあるじゃないか。断流の話は、デマだったんだな」と、思わないでも、なかったでしょう。

太原も水不足がずっと深刻でした。たしか、2000年の前後から、黄河の水を使うようになりました。それで一息ついたのでしょうか。しかし、それでも、いまのような大膨張をつづけていて、水は、だいじょうぶなののでしょうか。どうも、いまの拡張ぶりは、楽観的DNAの働きのほかに、無知に支えられていると、思えてなりません。それにしても、第2の支流がこうですからね。黄河に水がなくなっても、しかたないでしょう。

7月9日に帰国しました。最後のウルムチでは乾燥地の緑化にかんするシンポジウムがあり、私も30分の話をしました。ちょっと長いのですが、2回に分けて、お送りします。

私たち緑の地球ネットワークは1992年1月から、山西省大同市の農村で緑化協力事業を継続しております。すでに16年目にはいっていますが、そのなかで多くの失敗や困難を経験しましたし、ほんの少し成果もあげてきました。そのなかでの教訓をお話ししたいと思います。

### ●3つの条件●

これまでの経験をふり返って思うのは、緑化プロジェクトを成功させるためには、3つの条件があるということです。第1に、自然条件があります。たとえば、水のないところに森林を再生させようと願っても、それは無理な話です。苗の小さいあいだは水の要求量も少ないので、なんとか育つかも知れません。面積がそう大きくなければ、人工的に灌水することも可能でしょう。しかし、樹木が育つにしたがって、水の要求量は増えます。人工的な灌水も、かならず限界がくるでしょう。

大同の中央部を流れる桑干河の流域では、ポプラ（小葉楊）による緑化が大面積ですすめられました。桑干河は北京の水源であるため、早くも1950年代から開始されました。地元の人の話では、しばらくのあいだはよく育ったようです。年輪解析の結果、そのことが裏付けられました。ところが植栽後10年から15年で、だんだんと伸び悩んでしまいます。

大きくなればなるほど水の必要量は増えますが、ここの年間降水量は平均400mmしかありません。平面に密植してあるので、隣同士で水を争うようになります。そんなところに旱魃がくると、先端が枯れてしまいます。それでも下部は生き残って、枝の一本が幹に変わって、また伸び始める。そこにまた旱魃がやってくる。その繰り返しで、グニャグニャにねじ曲がってしまいました。地元の人は「小老樹」と呼んでいます。自然の条件を踏み越えたプロジェクトは、短期的には成功したようにみえても、長続きはしません。

第2に、社会的な関係が大事です。中国は政府の力が強いので（民の力が弱いのでといってもいいんですけど）、各級政府の支持を得ることはとても大切なことです。それから、10人のうち9人が賛成しても、大声で反対する1人がいれば、そのプロジェクトはうまくいきません。現場でしばしば起こる問題です。また、果樹を植えるばあいなんかは、市場と流通の見通しも必要でしょう。社会的な関係をじょうずに処理しないと、うまく運びません。

第3は、人的な要素です。しっかりしたリーダーがいるかどうか、といってもいいでしょう。緑化というのはわりの悪いしごとで、悪い結果はすぐでます。春に植えて、夏に行ってみると全滅といったことも、初期にはしばしばありました。その逆に、いい結果がでるまでには長い時間を要します。アンズのような果樹はその期間が比較的短いのですが、それでも最低4年かかります。その期間を持ちこたえるのが、たいへんなんですね。とくに重要なのはリーダー

です。村の人たちをまとめあげ、しっかりひっばってこれないと、うまくいきません。

この3つの条件は、たがいに独立してはいません。たとえば交通が不便で、水のないような村。自然条件に恵まれず、社会関係も困難なわけです。そういう村はだんだんに過疎化します。そのときに、才覚が働き、腕力・体力に恵まれ、度胸もある、こういう人が真っ先に村をでていきます。本来なら村のリーダーになるはずの人ですね。そのような村に残っても、嫁のきてがないし、子供が生まれても教育をつけることができない。向上心の強い人ほど、先に村をでるわけです。すると、3つとも条件がなくなってしまう。

条件が3つともそろっている村は、自分たちでしっかりやっていますから、私たちの出番はありません。逆に3つとも欠けている村は成功の可能性はほとんどありません。最初は私たちも勇ましかったので、そのような村に挑戦しました。ところが何度やっても失敗します。そうすると私たちのカウンターパートも、私たちも、へとへとに疲れきってしまいます。いずれにしろ、協力対象の村は、なにかの条件が欠けていますから、困難は避けられないのです。

では、この3つの条件のうち、いちばん重要なのはなんでしょう？私は人的な要素だと思います。多少、自然条件に欠ける場所があっても、人さえしっかりしていれば、それを補うことができます。成功したところは例外なく、しっかりしたリーダーのいる村でした。逆に失敗するのは、人に問題があるばあいがほとんどです。

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」といったのは孟子だそうです。地の利というのは自然条件ですね。天の時は社会関係と言い換えることができるでしょう。私が人的要素といったのは、人の和です。先人の教えにたどりつくまでに、私はたいへんな回り道をしたわけです。

最近になって、条件のあるところ、ないところを、簡単に見分ける方法をみつけました。村の学校をみることです。村の規模や経済状態にくらべ、学校がしっかりし、先生が熱心な村は、成功する可能性が大です。逆に学校がボロボロだったり、先生がいい加減だったりする村は、まずまちがいなく失敗します。教育に力をいれているということは、リーダーが村の将来を真剣に考えているということです。そういうところからはじめるのがいいと思います。

#### ● 沙漠化には原因がある ●

最初に私がこの活動を思い立ったときの考えは、沙漠化防止イコール植樹でした。木を植えて育てれば、沙漠化は止まると思ったのです。長くつづけるうちに、そう単純でないことに気づきました。沙漠が沙漠であるのには原因があります。沙漠化がすすむのにも原因があります。たとえば、私たちが大同の農村をみて理解したのは、環境破壊と貧困の悪循環が長くつづいていることです。私はそれを図にしてみました。

根本の原因は、水と土のキャパシティを超えた人が暮らしていることです。不足する食糧をまかなうために、本来なら耕してはいけないところまで畑にしました。森林や草地在破壊され、植生が貧弱になります。すると局地集中的な夏の豪雨によって水土流失が深刻化します。土がやせ、水を蓄える力も失われて、作物や植物が育たなくなります。これがこの地方における沙漠化です。

それから、農耕で不足する収入を、ヒツジ、ヤギなどの放牧で補おうとします。とくにエサの不足する春先、これらの家畜は伸び始めた草や木の芽、若苗を徹底して食い荒らします。私たちの中国人スタッフは、100人が植えた木を、100頭のヤギが台無しにするといっていますが、それ以上かもしれません。

それらの結果、環境はますます悪化し、農業条件が悪くなり、貧困も深まります。よくご承知でしょうから説明を省きますが、貧困な村ほど子供の数が多いんですね。それがさらなる人口増加を招きます。

この悪循環から抜け出すのは容易ではありません。簡単に解決できるようなら、そもそも悪循環は成立しません。注意してほしいのは、この悪循環の内部の人が、貧困から脱出しようと努力すればするほど、悪循環が強まることです。耕地拡大の試みや、放牧の家畜の数を増やすことがどういう結果を招くか、みなさんはよくご存じでしょう。

最近では、退耕還林とか、放牧の禁止・制限が実施され、事態は改善されつつあります。

外部からの十分な支援があってはじめて可能になることです。全体として緑も濃くなってきたように思います。しかし、以前は300頭だったヤギを1,000頭以上に増やした村もあり、改善の動きは一直線ではありません。

私たちの成功したプロジェクトのひとつに、小学校付属果樹園があります。主に、乾燥に強いアンズを植え、収穫があがるようになったら、そのうちの7~8割は管理した農家の取り分とし、残りの2~3割を小学校に寄付してもらいます。それによって失学児童の就学保障をはじめ、教育条件の改善にあてるわけです。

大きく成功した村では、従来のアワ、キビ、ジャガイモなどに比べ、5~20倍の収入をえられるようになりました。小学校を卒業するのさえ困難だったのに、いまでは毎年数人の大学生を送り出しています。

アンズが育つと、これも林といっしょで、はげしい雨が降っても、雨水は枝葉で受け止められ、幹を伝って地面におり、根を伝わって土中に浸透するようになります。雨が直接、土をたたくことがなくなり、水土流失が軽減され、水が土中に蓄えられるようになります。

さらに、アンズは毎年、剪定をしますが、切った枝が燃料になります。周囲の山を荒らすことがなくなり、ゆっくりとですが、山に植生が回復します。また、これまでは燃料にしていたトウモロコシの茎、アワやキビの藁などが堆肥として畑に還され、土を肥やしていきます。いほうの循環がはじまるわけですね。環境破壊もひとつの循環でしたが、環境を再生する過程もひとつの循環なのでしょう。

沙漠化や環境破壊の原因は、それぞれの地方で異なると思います。要は、その地方の問題点と原因をみきわめ、その解決、もしくは軽減に努力を集中することでしょう。

## NO. 423 黄土高原における緑化活動の経験 (2) 2007. 07. 18

新潟県柏崎市を中心に、また地震です。被災体験者として、心が痛みます。この7月、ウルムチでのシンポジウムでおこなった講演のつづきをお送りします。

### ●なんのために、誰のために●

ところで、環境問題とはなんなのでしょう。私は最近、「環境問題というのは省略した表現で、フルネームは『環境にとっての人間問題』です」などという話を、あちこちでします。地球環境問題というのは、地球環境にとっての人間問題ですね。なぜ、そんなことをいうのでしょうか。

ここ数年、黄砂現象が日本でも大問題になっています。オリンピックを控えた北京でも環境改善の大きな課題になっているようです。日中韓三か国の環境協力の中心課題になりつつあります。

これは、率直なところをお聞かせ願いたいのですが、砂嵐（沙塵暴）や風砂は歴史的にみてほんとうに増えているのでしょうか。それを止めたり、軽減したりすることが可能なのでしょうか。また、そうする必要があるのでしょいか。

私はこの16年間、黄土高原の東北端の大同で年間の3分の1近くを過ごしてきました。もちろん黄土が厚く堆積しています。黄土が堆積している黄土地帯となると、華北平原はもとより、東北と江南の一部まで含まれ、その範囲はずっと広がります。これらの土は西方の砂漠地帯から風によって東へ東へと運ばれてきたもので、第四紀がはじまってから、およそ175万年くらい前から、現在までつづいているといわれます。砂嵐があり、風砂があり、黄砂があったおかげで、現在のような大地が形成されたわけです。それは地球規模の、地球の歴史の大きな部分を占める自然現象です。人間活動に起因する沙漠化によって、それが増加しているとすれば、どれほどの割合を占めているのでしょうか。

日本人のなかには、黄砂を最近の現象だと思っている人も少なくありません。しかし、ずっ

と昔からあったものです。いまから 1200 年以上前にできた日本の『万葉集』のなかに、春霞を詠んだ和歌がたくさんあるんですけど、それは黄砂を指すというのが通説です。

最近になって、黄砂をつよく意識するようになったのは、日本の都会の生活が土から離れたことも原因でしょうね。それは北京も同じでしょう。以前は周囲からも土埃が舞い上がっていたのに、みんな舗装されてしまった。くるまをもつようになると、その汚れが気になります。生活が土から離れたことで、土を汚れとして意識するようになったのです。そして、テレビニュースに取りあげられるようになれば、みんなが注目するのは当然でしょう。

ついでに申しますと、「汚れ」という実体があるわけではないんですね。それは 1 つの関係性を指すものです。たとえば土は畑にあるときは汚れではありませんが、この部屋に存在すれば、それは汚れであるわけですね。

日本では最近、黄砂は飛んでくる途中で、SO<sub>x</sub>、NO<sub>x</sub>をはじめとする有害物質を吸着してくる、それがよくないのだ、呼吸器障害をはじめさまざまな健康被害をもたらす、といわれています。そういう見方は韓国のほうが厳しいようですね。なるほど、それはありうることでしょう。

見方を変えれば、黄砂が SO<sub>x</sub>、NO<sub>x</sub> などの酸性物質を空中で中和している、ともいえるのです。黄砂の中心成分はカルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウムなどの炭酸塩で、つよいアルカリ性ですから、当然のことです。そのようにみると、黄砂は酸性雨を防いでいるのであり、いいことをしていることになります。中国の南部で大きな問題になっている酸性雨が、より多くの石炭を燃やしている北部でそう大きな問題にならないのは、この黄土のためだと考えられます。

大勢にしたがって、黄砂が悪いものを吸着して運んでくるという立場に立つとしても、悪いのは黄砂ではなく、そのような有害物質を人間が排出していることでしょう。一般的に環境問題というのではなく、「環境にとっての人間問題」というふうに考えると、防止すべきはなんであるか、このように基準がはっきりいたします。

日本には秋に台風がやってきます。かなりの経済被害をもたらしますし、人命が失われることもあります。それでも台風を止めようという人はいないでしょう。自然現象だからです。私がこどものころは、台風の鼻先に水爆を落として、それで台風の進路を変えればいいという乱暴な議論がありましたけど、いかにバカげたことか、いうまでもありません。

その台風やハリケーンが、このところ、ずいぶんと激しくなっています。温暖化防止に不熱心なアメリカで、大きな被害が連続したことから、アメリカ政府も徐々に姿勢を変えつつあります。地球温暖化がすすめば、自然災害が激発するという予測が以前からあり、その予測どおりになってきたからです。もし砂嵐や風砂が激しくなっているとすれば、温暖化の影響を否定

できません。だとすると、必要な対策は温室効果ガスの排出抑制といったことでしょう。

オランダの政府系研究機関が最近明らかにしたところでは、中国の2006年の二酸化炭素排出量はアメリカを超え、世界最大になったそうです。予想を上回る伸びだといいます。1人あたり排出量ではアメリカの数分の一ですが、北京、上海などの都市にかぎれば、すでに発展途上国のレベルではありません。今後はその抑制、削減が中国にとっても重要な課題になることでしょう。

そういうことを含め、風砂対策のために、発生源に木や草を植えよう、緑化をしよう、ということではないように思うのです。植林や緑化にとって、なんのために、誰のために、というのは、きわめて重要なことだと私は考えています。乾燥地での緑化はたいへんに困難なことですし、そこでの生活も困難なことです。植えさえすれば、それで成功、というわけにはいきません。大同での緑化でも「植樹三分・管理七分」といっていますね。私たちの協力プロジェクトを成功させたある郷の党書記は「植樹一分・管理九分」といっていました。植えることより、そのあとの管理のほうがずっとだいじだ、というわけです。

植えるにしろ、あとの管理にしろ、その主体は地元の農民以外にないでしょう。もし緑化が必要であるとすれば、なによりも地元の農民の役に立ち、地元の農民のみなさんが喜んで育て、すすんで管理にあたる、そのような緑化しかないと思うのです。植える場所、植える樹種、すべてにわたって、地元の人たちのことを第一に考えるべきでしょう。そのような緑化が成功し、結果として風砂の軽減につながり、北京の市民や、日本の人びとにとってもいい結果をもたらすとしたら、それはいいことでしょう。

その逆に、北京のために、あるいは日本や世界のために、風砂防止が必要であり、発生源の緑化が必要だから、そのようにすべきだといっても、それはむずかしいでしょうね。そのような考えから出発すると、かならずといっていいほど、現地の実情からかけ離れた無理な計画になります。植物種の選択を過ったり、むやみに水を使ったりするだけで、成功はおぼつかないと思います。それは、たんに可能性の問題として語っているのではありません。そのような実例をたくさん現場でみてきました。

きょう、私はこの壇上でも眠くてしかたがないんですね。時差のためです。このウルムチは北京からずいぶん離れていて、本来なら2時間くらいは時差があるはずですが、それなのに北京時間を使っているためです。それと同じように、遠いところのイニシアチブですすめられる緑化には問題が発生すると思います。

最後になって開き直るわけではありませんが、私は緑化については門外漢です。たまたま大同で緑化協力に従事するようになり、いろいろと経験し、人からも教わってきました。私の経験は狭い地域のもので、どこにもあてはまるというわけにはいかないでしょう。言わずもがな

のところもあったと思います。このシンポジウムで活発な意見が交わされることをこころから期待して、私の話を終わります。ありがとうございました。

#### NO. 424 流動砂丘 2007. 07. 23

JICA 派遣の短期専門家ということで、7月初めに、内蒙古自治区の阿拉善（アラシャン）盟を訪れました。この地域で活動している3つのNGOの現場を見学し、交流することになったのです。寧夏回族自治区の銀川から、くるまで2時間弱のところ。といっても、阿拉善盟の面積は、日本の国土の3分の2もあります。2日や3日、みてまわったところで、なにほどのことが、わかるはずもない。「話をきくなら、たくさんの人からきくべきで、1人2人だったら、きかないほうがいい」なんて、いつもは知っているんですけど、この条件では、そんなことが、かなうはずがない。ですから、これから書くのは、まちがい含み。

沙漠化と一言でいっても、現象形態も、原因も、ずいぶんちがうな、と感じました。私たちの本拠、大同の農村の最大の問題は、「環境破壊と貧困の悪循環」です。その根本にあるのは、人口問題。いきなり、わき道にそれますが、このたび、あちこちをみてまわっても、大同の農村より、貧しい村には、出会いませんでした。自然の環境は、ずっと、こちらが厳しいんですよ。たとえば、年間降水量は、150mmくらい。草や灌木がまばらに生えているだけで、緑もずっと少ないのです。トウモロコシなどが栽培されているところは、みな、地下水による灌漑にたよっています。ところが、村にはいり、農家のたたずまいをみると、こちらのほうが、ずっと余裕があります。このギャップをつくりだしているのが、人口問題ですね。

阿拉善の沙漠化は、流動砂丘の東進によるもの、のようです。植生が乏しいところに、つよい風が吹くと、砂が移動します。流動砂丘が出現し、なにもかも飲み込んでいきます。そうになると、草も灌木も、砂に埋もれてしまう。植物の種があっても、砂がしょっちゅう動くために、根付くことができません。東進のスピードは、年に20mにもなるそう。見た目にも、わかりやすい、沙漠化です。

砂丘が押し寄せる最前線に、ランドクルーザーで、案内してもらいました。既視感があるんですね。見た目には、鳥取の砂丘と似てますね。私は、こどものころ、あのそばですごしたことがあります。もちろん、規模は大ちがいですけど。やわらかい砂で、ランドクルーザーがスタックしてしまい、みんなで悪戦苦闘のすえ、やっと脱出しました。

意外だったのは、空転するタイヤが掘った穴のなかの、砂が湿りけをもっていることです。年間降水量の150mmにたいして、蒸発量は3000mmもあるそう。にもかかわらず、砂が湿っているのは、砂のばあい、毛細管現象が、途中で切られているのが原因なんでしょうね。土中の水分が、表面までいかないで、守られるよう。

砂丘のほうには、ほとんど植生がありません。凹んだところに、ところどころ、青いものが見えるだけ。砂丘の及んでいない、東のほうには、草や灌木が、まばらに生えています。ところどころ、こぶのように、盛り上がっているところがあります。草や灌木が生えていると、風下側が守られ、土が残ります。それ以外のところは、土が飛ばされてしまいます。それで、こぶができます。風による浸食と、流動砂丘の出現は、1つのことの両面のようなのです。

現地の NGO からきいた話では、以前は、草原のなかに、いくつかの大きな沙漠があったのだそうです。それがいまは、沙漠化の進行・拡大で、沙漠と沙漠とがつながってしまい、草原が、沙漠に包囲される関係に、変わったそう。

阿拉善は、砂嵐（沙塵暴）の発生源でもあります。私たちも、その荒っぽい歓迎を受けました。最初は、遠くの空の一角が、黒くみえるだけでした。くるまがその圏内にはいると、うす暗くなります。そのうちに、風が激しくなり、泥の雨まで、降ってきました。私たちの事務所に行ったことのある富樫智さんは、いまオイスカの一員として、この阿拉善に駐在しています。彼のところのビニール温室は、この砂嵐にあおられてしまいました。

沙漠化の原因には、共通点もあります。阿拉善のばあいも、引き金になったのは「開発」だったようです。自然条件を無視した農耕や、過剰な放牧、生活燃料のための灌木の伐採、などです。そのような開発は、自然の力で押し返されます。ただ、押し返されるだけでなく、流動砂丘に象徴される、深刻な沙漠化を引き起こしたわけです。明日、7月24日から、また中国です。

## NO. 425 ことしも早魃 2007. 07. 31

7月24日に大同にきてから、忙しくしていました。以前は、そのあいまに、滞在日記を書いたり、この黄土高原だよりを書いたりしていたのですが、今回は、さぼっていました。まもなく60歳ですけど、年齢相応に気力・体力が、衰えているのかもしれない。

農村をまわって、ほんとに意外でした。ことしは雨が多いと、かつてに思いこんでいたのです。7月初めに、内蒙古の阿拉善、新疆の烏魯木齊をまわりましたが、そこで、ことしは雨が多いと、きいていました。それから北京の友人、何人もから、雨が多いと連絡がありました。大同事務所のメンバーに、連絡のたびに、ようすをきいているのですが、そのときも、「雨が降ってる」という答えが返ってきたのです。

ところが実際は、天鎮県の農村でホームステイしましたが、かなり深刻な早魃でした。東沙河村は、盆地にある、かなり豊かな村で、井戸による灌漑が行き届いており、畑の作物も、

順調に育っていましたが、灌漑ができない畑のトウモロコシは、すっかりしおれて、枯れそうになっていました。べつの用事で私はいけなかったのですが、陽高県の大泉山村では、ことしは収穫が見込めないの、出稼ぎするしかない、と話していたそうです。

短時間でしたが、一昨日（7月29日）は、広霊県の、苑西庄村にいつてきました。ここでも、トウモロコシが育っていません。すでに50日、雨がないと、いつていました。私たちが協力した井戸の周囲に、マツを植えました。1999年のことです。ずいぶん大きくなって、私の背を超えました。ここ数年は、毎年40cmは伸びていたのに、ことしはその半分の、20cmくらいしか伸びていません。マツの伸長量は、雨量に比例しますので、まちがいなく、雨が少ないのです。以前にも書いたことですが、西暦の奇数の年は、いい年がないのです。ことしは、2007年で、奇数年です。

苑西庄村からの帰り道で、白登苗圃に連絡したところ、かなりの雨が降っている、ということです。大同県です。夕暮れ時、私たちが大同県にはいると、すでに雨はやんでいましたが、道路わきの土は湿っていました。カササギの森は、そこからくるまで10分ほどですが、ここは降らなかったそうです。

7月30日は、夜明け前から雨でした。2時くらいから降り始めたそうです。30日の夕方まで、降ったり、やんだりしていました。午後になって、カササギの森を訪ねると、ここでも、雨が降ったそうです。ことしのなかで、いちばん多い雨だったといいます。でも、土を掘ってみると、湿っているのは、地表から10cmほどでした。それでも、降らないよりは、ずっとましです。

まとまりのないことを書いてきましたが、この地方では、雨の範囲が、ひじょうに狭いのです。たいていのばあい、短時間に、激しく降ります。そして、意図せざる人工降雨が、多くなっているようですね。自動車その他の廃棄物が、雨の核になるわけです。日本でも、高速道路の上だけ、雲ができたりしますね。当然、それは都市部が多いのです。都市にだけ雨が降って、いちばん雨がほしい農村には降らない。そういうことが起こります。

## NO. 426 浸食谷 2007. 08. 10

7月末の自治労大阪府本部のツアーとクロスして、ニューヨーク在住のカメラマン、太田さんがやってきました。黄土高原の農村を、写真で表現しようと思えば、どうしても、浸食谷が必要でしょう。少なくとも、背景にはいれたいのです。大同から比較的近いところでは、やはり、渾源県の二嶺村付近です。

私も、この事業の初期には、浸食谷をずいぶん撮りました。でも、最近、撮影していません。ここ数年は、デジタル一眼レフに変わっていますから、取り直しておくのに、絶好の機会

です。

二嶺村の西側にある浸食谷は、ほんとに深いのです。100m近くあるでしょう。その底が、平らになっているところは、なんと、トウモロコシ畑になっています。したたかなものです。この地方では、いちばんいい土地にトウモロコシを植えるんですけど、谷の底は、たしかに、土もうえから流れてきた表土がたまっているでしょうし、水分も、多いでしょう。遠目ですが、青々と繁っているようにみえます。それにたいして、谷の上の畑は、旱魃で、アワもキビも、生育していないどころか、しおれて、枯れそうな状態です。

この浸食谷は、夏の雨が作りだすものです。黄土は、粒子がひじょうに小さくて、乾いているときは、固くつまっていて、スコップの刃もたたないくらいですが、ちょっとでも、水を含むと、トロトロのグリスのようになります。激しい雨が降って、谷底を水が流れると、谷の崖面の下部の土が流されてしまいます。しだいに、オーバーハングの状態になるんですね。そしてあるとき、ドサッと土の壁がくずれる。ほぼ垂直の、あの崖ができるわけです。

浸食谷のエッジ、肩にあたるところが、すこし、くずれ落ちています。そこが畑になっているんですね。大きいものでも、せいぜい、10坪ほど。小さいものは、1坪もありません。一歩まちがうと、100m近い谷底にまっさかさまですから、危険きわまりない。近寄るだけで、足がふるえそう。そんなところに、作物を植えているのです。

日本からきた人や、中国の都市の人は、いったいなぜ？　と思うでしょうけど、中国は広大なようにみえても、人が生活できる場所は少ないんですね。耕地面積も少ないんです。世界人口の22%ほどを、世界の耕地の7%ほどで養っているんだそうです。大同のなかでも、渾源県はとくに人口密度が高いので、そのようなところまで畑にしている。

その一方、退耕還林ということで、道路の両側に、ポプラの緑化帯がつけられたりしています。幅のせまいものでも、両側にそれぞれ、20mはあります。なかには50m以上のものさえある。山西省では、新しい省長が就任してから、いっそう拍車がかかりました。そのような緑化帯の建設を、各県が競っているのだそうです。

でも、道路わきというのは、その一帯のなかでは、上等の畑であることが多いんですね。退耕還林というのは、急傾斜地など、条件の悪い畑の耕作をやめ、森林に還す、という政策です。「環境破壊と貧困の悪循環」を抜け出すためには、必要な措置だと、私は考えています。しかし、その政策が、現場におりてくる過程で、ちょっと変質しているわけですね。農民にどのように受け止められるか、心配な点です。

またまた、話を浸食谷にもどして、私の、「ぼくらの村にアンズが実った」の本、カバー写真が、浸食谷のうえに咲く満開のアンズです。あれは渾源県の呉城村。ことしの春、あそこのア

ンズのツボミは、寒波で全滅し、葉の芽も黒くなって枯れており、被害が1年で治まるか、心配だと、以前の号で、書きました。

この夏にしてみると、場所によっては、収穫できており、全体として、今年の3分の1強は、あったよう。杏仁も、いつもよりは小さめですが、サンプルをすこし買いました。主要産地の河北省はじめ、だめだったところが多いので、値段はいつもよりいいようです。

葉っぱのほうは、回復していました。いつもより、緑が薄いところもありますが、意識してみれば、という程度ですので、影響を持ち越すことはないと思います。ホッとしました。

#### NO. 427 資源があるがために… 2007. 08. 20

霊丘の県城から、周囲を見わたすと、どこをみても、山です。高いところが2,000m前後。県城のあたりが900~950mですから、差し引き1,000m前後の壁に、取り囲まれているわけです。盆地になっているんですね。

山がいちばん近いのは南側です。シルエットが、観音菩薩が寝ているようにみえるそう。たしかに、左側に頭があり、右側からからだがある。でも、おっばいのところと、お〇ん〇んのところ、両方ともふくらんでいる。で、私が「おかしいじゃないか」というと、地元の青年は、「だから、観音菩薩なんだ。観音は、男でもなければ、女でもない」といいました。

山の名を、太白維山といいます。標高2,234m。地元では、太白山と呼ぶことのほうが多いよう。太白山という名山が、たしか陝西省にありましたが、もちろん、それとはべつです。でも、この山もなかなかの名山。日本にもっていけば、名所になること、まちがちなし。

植生調査を予定していて、急な雨にであい、行き先を変更して、この山に行く、といったことが、過去に、何回かありました。8月10日、河北省との境にある、礪寺山をみることにしていました。朝、出発に備えていると、その近所に住んでいる李向東から電話があり、「一晩中、雨でした。まだ降っています」とのこと。急遽、行き先を変更して、太白維山にしました。

じつは、今回もずっといっしょにいる、遠田宏さんのほかに、桜井尚武さん、前中久行さん、吉川賢さんといった専門家が、8月11日夜に、霊丘に到着することになっています。植生調査の計画は、べつの場所ですが、予備の場所も必要でしょう。下見にちょうどいい。

沢筋にそって道があり、途中まではくるまでいけます。いちばん高くのぼったときは、1,800m前後までいきました。ところが、同じような沢がたくさんあり、どれだったか、思い出せない。運転手の小郭は、ほんとはよく道を覚えますが、そのとき、運転したのは、彼ではなかった。

いや、覚えていても、役にたたないでしょう。いま、この山は、ふもとでさかんに採石がおこなわれ、痛々しいまでに、傷つけられています。以前の道に、はいれない可能性が高いのです。

途中で、なんども道を尋ね、行き止まりになっては、また引き返しました。この地方の人たちは、たいへん親切で、自分で知らないことも、教えてくれます。

鉱石採石現場らしいところに着きましたセメントで舗装した道路が、沢筋に伸びています。どれくらいいけるか、きいたところ、「ずーっと遠い」とのこと。それなら、見込みがあります。途中で、舗装は切れましたけど、くるまでまだ登れます。高圧線の架線工事をしている人たちにであいました。直径 2cm はある、太い、アルミのワイヤーです。この奥で、なにか、ものすごいことがはじまっているよう。不安と、まだまだいけると期待とが、交差しました。

この山に以前、登ったときも、マンガンの採掘現場にでくわしました。道路のすぐそばに、タヌキ掘りの穴があり、ちょうど昼時だったので、その周囲に、顔も体も、まっ黒の男たちが、たむろしていました。安全設備なんか、なにひとつみられない、きわめて原始的なものでした。

ところが今回は、まったくちがいます。いいほうにじゃない。規模と野蛮さにおいて、前回の比ではないのです。おそらくスーパーショベルが活躍したのでしょう。山肌を削り取って、道がつけられました。残土で谷を埋め、平らにならして、そこにプレハブやテントが建てられ、人がくらしています。女性もいますし、驚いたことに、こどもまでいるのです。岩壁に穴を掘って、ダイナマイトの貯蔵庫がつけられています。そういう光景が、くりかえしでてきます。

急ごしらえの道路は、未舗装で、きわめて急です。小郭が運転する乗用車は、途中で登れなくなりしました。鉱山用の、大型ダンプは、鉱石を満載して、そのような坂道を、ゆっくりと下っていきます。掘られているのは、マンガンが主だそう。そのほかに、鉄、金、銀、モリブデンといったところ。

太白維山の不幸は、地下資源に恵まれたことです。そうでなかったら、これほど傷つけられることはなかった。その思いを、私はなんどもなんども、口にしました。私たちは 7 合目といったところで、引き返しましたが、開発はさらに上までつづいており、山頂に迫っているようです。

投資しているのは、主として南方の人間だそう。働いている人も、四川省、陝西省からきている人が多く、地元の人はいないそう。たしかに、聞き慣れない音が、飛び交っています。

それにしても、大雨がふったら、どうなるのでしょうか。この地方では、局地集中的な豪雨は珍しくありません。げんに、7 月末にも、山西省の中部で、3 時間で 180mm の雨がいったそう。ひとたび土石流が発生すれば、ふもとの村まで一直線でしょう。そういったことへの備えは、

ないに等しいのです。長期に維持するつもりなら、もっとインフラを整備するでしょう。地元の人なら、ここまでのムチャはしないでしょう。

## NO. 428 崖っぷちに生きる 2007. 08. 24

9月に中国でお話することになりました。ご出席いただけるとうれしいです。学外のかたもOKです。同時通訳つきですので、中国のかたもお誘いください。念のために、出席の連絡をいただけますでしょうか。

### ■第2回 SGRA チャイナ・フォーラム

2007年9月14日（金）午後2時～5時 北京大学生命科学学院

2007年9月17日（月）午後2時～5時 新疆大学大学院報告庁

講演：高見邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」

主催：関口グローバル研究会（SGRA）

SGRA <http://www.aisf.or.jp/sgra>

大同市最南部の靈丘県を除けば、大同はことし、そうとうに深刻な旱魃です。サントリー労働組合のみなさんといっしょに、広霊県苑西庄村で、農家にホームステイしましたが、トウモロコシは、穂のでる時期になっても、ヒザとか腰の高さしかないものが、少なくありません。葉がしおれてきています。

私たちの「カササギの森」では、ことし雨らしい雨は、1回しか降っていない、というのです。それが7月30日で、たまたまその日、私は現場にいましたが、表面から5cmほど、土が湿っただけでした。ここの雑草は、乾燥につよいものしかありませんが、それすら枯れてきています。ヨモギや、ジャコウソウを、踏むと、シャリシャリと、乾いた音がします。もう、半分、干からびているんですね。ひどいものです。

大同市の中央部を流れる桑干河も、完全に干上がりました。1滴の水もありません。ここ数年は、ここまで水がなくなることはなかったのです。私にいわせれば、「純度100%の汚水」ですが、それでも、小さな流れをつくっていたのです。ことしは、それもなくなりました。でも、橋のうえまでくる、あの悪臭は変わりません。

こんな話ばかりだと、芸がなさすぎるので、ちょっと、話題を変えます。黄土丘陵のめずらしい植物に、マオウ（麻黄）があります。化石植物といってもいいような、古い植物だそう。スギナを大きくしたような、トクサを小さくしたような、植物です。この地方にも、数種類あるよう。ちょうどいまの時期に、赤い実をつけます。イチゴのようで、おいしそうです。もっとも、ことしは、あまりに旱魃がひどいせいでしょう、ちゃんと実がついているものは、まっ

たくみられません。

あれは1994年夏のことでした。地元の子供が、「食べれるよ！」とあって、自分で食べてみせるので、それがなにか知らなかった私も、食べてみました。甘くて、おいしかったのです。でも、いまは、そんなことをしてはいけません。国際的に、麻薬取り締まりの対象になったそうです。覚醒剤の成分が含まれており、興奮作用があります。中国では、幅広く、薬材として利用されてきました。

このマオウが生えているのは、崖っぷちです。浸食谷のエッジとか、畑の畦とかですが、ほとんど、崖っぷちから、1m以内のところにはありません。陽高県の守口堡にある、万里の長城ののろし台にも、垂直の面に、大きな株があります。そんなところにだけあって、平らなところでは、みつからないのです。どういうわけなのでしょう？

カササギの森の、浸食谷のエッジに、「桜桃」と呼ばれる、バラ科の木があります。「桜桃」と書けば、日本ではサクランボのことですが、まったく別のものです。実はなるものの、小さくて、うまくありません。濃いピンクの、とても美しい花をつけます。これがやっぱり、崖っぷちなんですね。ほぼ垂直に近いような、浸食谷の崖にも、へばりついています。浸食谷の底でもみかけましたが、数はすくない。上のほうの平地では、まったくみません。

それから、文冠果。これは、ムクロジ科の小喬木です。いや、私がみたのは、小さなものばかりですが、木質がよくて、いい家具がつかれる、ときいたこともあるので、ひよっとすると、大きくなるかもしれません。

1992年5月の、最初の協力団が大同にきたとき、浸食谷の崖面で咲いているのを、みました。とても、きれいな花だった、という印象だけが残っています。花色も、忘れてしまいました。その印象をたよりに、種子を集めてもらって、育苗し、環境林センターの、見本園で育てています。かなり大きくなり、花を咲かせています。でも、私はみたことがない。4月いっぱい、春のボランティアツアーの案内を終え、ゴールデン・ウィークの休みを楽しみに、日本に帰ってくるからです。そのころに、花を咲かせるよう。

花を咲かせている証拠に、毎年、実をつけています。直径6cmほどの、わりと大きな実です。そのために、この地方では「木瓜」と呼ぶよう。熟すると、4つに割れ、大粒の、黒い実が落ちます。ところが、そこまで育つのは、まれなんですね。こどもたちが、まだ青い実を、食べてしまうからです。いや、こどもだけじゃない、大人も食べるよう。

めずらしく今年は、熟していました。種を採って、霊丘自然植物園の李向東に届けてもらおうと、思っていたのです。そしたら、つい先日みたら、だれかが種を採って、殻だけが残っていました。どうも、近くの苗圃の人間が、採っていったよう。くやしいんだけど、おたがいさ

まのところもあるから、強いこともいえない。そしたら、きょう、陰になっているところの1本に、けっこう実がついていました。やったあ！

自然のなかでみる文冠果は、どれも崖っぷちにありました。ところが、栽培してみると、このように平地でも育ちます。平地でみかけなかったというのは、私の錯覚だったかな、と思っただら、この文冠果の別名に、「崖木瓜」というのがあります。やっぱり崖に多い、ということなんでしょうね。どういう理由からでしょう？いろいろ想像するのも、楽しいものです。それにしても、こういう崖っぷちで育っているものが、私には、とても親しく感じられます。私じしんが、崖っぷちのようなところで、生きているからなんでしょうね。

## NO. 429 カメラに泣く 2007. 09. 04

私は、カメラをもつのは、あまり好きではありません。でも、半分はしごとで、しかたがない。一眼レフも、つかいだしてから、40年になります。黄土高原は、カメラにとって、厳しい条件です。黄土の粒子は、ほんとに小さいんですね。つねに空中をただよっていて、どんなすきまにも入りこみます。レンズのフィルターの内側なんて、お手の物。ときには、レンズのあわせガラスの内側まで、入り込みます。最新のカメラほど、精密になっていて、この条件には、弱いのです。春先は、とくにしんどい。新品のカメラを、初日でだめにする、といったことさえあります。

7月24日から、中国でした。今回は、デジタル一眼レフを、新調しました。D社のA80、ということに、しておきましょう。出発の数日前に購入し、テスト撮影をしました。問題ありません。機能面では、けっこう満足しました。

ところが、中国にはいって2日目に、早くもトラブル。本体でも、レンズでも、ありません。じゃあ、なに？バッテリーが、充電できなくなったのです。バッテリーの機能向上と、機器の省エネのおかげでしょう。撮影可能枚数が飛躍的に伸びています。で、今回は、予備バッテリーを買わず、1本だけ。途中で切れると困るので、充電しようと思いました。チャージャーのランプが数回点滅し、消えてしまいます。そこで、終了。充電できないのです。

でも、故障とは考えませんでした。最近、バッテリーも進化していて、カメラ本体と通信し、消耗状態、残りの撮影可能枚数なども、わかります。私がつけているノートパソコンは、満充電の90%未満にならないと、充電がはじまらない仕組みです。そういう仕組みかもしれないと、考えました。でも、翌日も、翌々日も、事態は変わりません。

せっぱつまってきました。メーカーのホームページに、なにかの情報があるかもしれないと考え、検索してみました。参考になる情報はないんですけど、Q&Aのコーナーがあります。そ

こで、カメラの型番その他を入力したあと、つぎの質問を、書き送りました。ワラにすぎる心境です。

#### 【高見の質問】

購入してすぐ中国にきました。日本で最初の充電はできたのですが、こちらで充電しようとすると、最初数回、表示ランプが点滅しますが、すぐに消えて、充電できません。困っています。どうしたらいいでしょう？

メーカーの回答のまえに、ちょっとはさみます。カメラの充電器にしる、ノートパソコンのACアダプターにしる、最近はユニバーサル電源です。100～240 ボルトあたりに対応し、電圧を気にする必要がありません。でも、それは、変圧・整流の本体だけで、電源プラグから本体までの、電源ケーブルは、100 ボルト対応だそう。なかには、「日本国内専用」と、うたっているものもあります。どうして、こんなことがまかりとおっているんでしょう？事情をご存じのかたはお知らせください。220 ボルト対応のケーブルに変えても、原価はしれたもので、メーカーにその動機はないでしょう。だとすると、どこかの、時代後れの規制？それに、よほどの大電力を、長時間つかわないかぎり、付属の電源ケーブルを、そのままつかっても、問題はないでしょう。わざわざ買い換えている人は、そうはいないと思います。さて……。

#### 【メーカーの回答】

日頃より D 社製品をご愛用いただき、誠にありがとうございます。お問い合わせいただいた件についてご回答申し上げます。A80 に付属電池 E3 の充電ができないとのことで、お手数をお掛けし申し訳ございません。現在も、中国に滞在中でございますでしょうか。誠に恐縮ではございますが、A80 付属の充電用電源コードは日本国内の電圧にしか対応しておらず、海外で充電を行うためには、別途、海外向け電源コード、もしくは、変圧器などのご使用をお願いしております。海外向け電源コードや、変圧器を使用していない場合には、可能でございますら、D 社製品を取り扱っている販売店様で、弊社製品に対応した中国向け電源コードか、変圧器をご用意いただいてから、あらためて充電をお試しいただければと存じます。

#### 【電源プラグ形状についての一般情報を省略～高見】

専用の電源コードや変圧器を用いても充電が行えない場合は、ご購入いただいたばかりで誠に申し訳ございませんが、E3 と、バッテリーチャージャーの点検修理をご検討いただきたく存じます。

#### 【海外修理と国内修理の一般情報を省略～高見】

#### 【高見の再質問】

回答ありがとうございます。しかし期待したものではありません。電源コードが原因でこのような問題が過去に発生したことがありますか？その可能性がほんとにありますか？そして、この充電器とバッテリーの組み合わせで同じような問題が発生したことがないのでしょうか？私は今回は 8 月 24 日に帰国いたします。販売店には、点検修理ではなく、初期故障として、交

換を要求したいと思っています。というのは、つぎの旅行まで日にちがないからです。予期せぬトラブルで、ほんとに困りました。そちらのアドバイスにしたがって、こちらの電圧にあわせた電源コードを探し回ったりしていたら、さらに傷口を広げるところです。こういう紋切り型の回答はしてほしくないものです。

#### 【メーカーの回答】

あらためてご連絡いただき、ありがとうございます。前回のご案内内容では了承し難いとのことで、大変恐れ入ります。申し訳ございませんが、弊社では、付属の日本国内向け電源コードを海外でそのまま使用した場合の動作については保証しておらず、充電の可否についても確実なご案内ができかねる状態でございます。そのため、弊社で使用を推奨している海外向け電源コード、もしくは、変圧器の使用をご提案させていただいた次第でございます。恐れ入りますが、何とぞご理解のほどたまわりたく存じます。

※国外での充電につきましては、A80の使用説明書15ページにも記載がございます。

この度の症状については日本へ帰国した折りに、販売店様へご相談する予定とのことで、大変お手数をおかけしますこととお詫び申し上げます。以上、ご回答申し上げます。今後ともD社製品をご愛顧いただきますようお願い申し上げます。

#### 【高見の再再度の連絡】

WEB上のことですから、どうしても人間味がかけてしまうのでしょうけど、一昔まえの社会保険庁なみの対応で驚きました。でも、D社全体がそうではないですよ？そうだとすることなら、今後はD社製品を絶対に購入しません。8月24日に帰国し、昨日、販売店に行きました。そこでのテストの結果、バッテリーではなく、充電器に問題のあることがわかりました。こちらでなにもいうまえに、たいへん申しわけありませんと、平謝りのあと、新品と交換でよろしいでしょうか、と先方から話されました。また、バッテリーには問題ないと思いますが、念のためにも新品と交換します、とのことでした。ウェブ上でのそちらの対応を話したら、とても信じられないとあって驚いていました。でもね、けっして安くはない買い物をして、重たい一眼レフを下げて行って、充電器が故障したら、ただの余計な重たい荷物になってしまうのに、そういうことに気持が回らないんですかね、あなたがたは。保証規定がどうのこうのいうまえに、ユーザーのおかれた立場と気持を少しは考えることができないものではないでしょうか。

#### 【メーカーの回答】

あらためてご連絡いただき、誠に恐縮でございます。A80付属のチャージャーにて、バッテリーE3が充電できない件について、ご迷惑をお掛けいたしましたことを、あらためて深くお詫び申し上げます。お客様より頂戴いたしましたご意見につきましては、当窓口をはじめ、各担当窓口にてフィードバックさせていただき、お客様サービスの向上に努めてまいります。以上、ご回答申し上げます。今後ともD社製品をご愛顧いただけますようお願い申し上げます。

きくところによると、こういうトラブルは、めったにあるものじゃないそうです。あっても、

多くはバッテリーが問題で、チャージャーの故障なんて、あるものじゃないそう。不運と思って、あきらめるしかないんでしょうね。バックアップの必要性をあらためて痛感しました。といっても、限度のある話ですけど…。

## NO. 430 「おおもの」 2007. 09. 11

大同市総工会が、日本大使館に要請していた、外務省草の根無償資金協力のプロジェクトが決まりました。大同市周士庄鎮の三十里鋪村に小学校を建て、遇駕山村で井戸を掘ります。この鎮には、私たちの協力拠点、白登苗圃と、かけはしの森があり、なじみのところ。8月の大同滞在中に、三十里鋪村を、のぞいてきました。すでに着工しており、レンガ建ての教室が形を現していました。遇駕山村の井戸も、すでに着工しているはずですが、こちらは途中の道路が工事中で、近づけませんでした。

それに先立ち、7月25日、山西省の省都・太原で開催された調印式に、私も出席しました。日本大使館から経済部参事官の石川浩司さんがこられ、大同市総工会を代表して、陳金宝主席が出席しました。山西省南部での、もう1つの草の根プロジェクトとあわせて調印式が実施されたため、太原での開催になったのです。

式が終わり、会食の席に移るとき、北京からきた若い人が、達者な日本語で、私にささやきました。「このあと、おおものが、参加します」私には、なんのことか、わかりませんでした。そのあとの立ち話でわかったことですが、その人は、中国国家発展改革委員会・対外経済研究所所長助理の劉錦明さんで、私の古くからの友人、中華全国青年連合会の湯本淵さんや、共産党中央対外連絡部の李軍さんと、大学で同級生だったそう。中国はせまいし、人も少ないので、こういうことが、しょっちゅう、おこります。

「おおもの」とは、山西省発展改革委員会の主任、令政策さんのことでした。昼食の席には、山西省外事辦公室の主任、副主任も出席していましたが、実際の中心は、令さんでした。とても要領よく、山西省の概況を説明されたので、シャープな人だな、という印象を、私はもちました。

ところが、そのあと、令さんの口調に、いらだちがでました。これまで50社以上の、日本企業の人に会ったけど、彼らはヒアリング調査をするだけで、その後はなしのつづて。決定権をもつような人はやってこない。欧米の企業からくるのは、トップクラスで、ほぼ即決のようにして、事業が決まる。自分は、日本にたいして、関心があるし、日本企業に、山西省にきてほしいけど、そうならない、残念なことだ、というのです。

それから、つぎのような話もありました。日本側は、10万トンの規模ならOKだというけど、

中国の実際には、それはあわない、最低でも、50万トンなければ、合理的でない。そういうばあいに、話がストップしてしまう、というのです。ほかならぬ山西省が、対象になるわけですから、石炭をはじめとする、エネルギー資源に関する件です。

くわしい内容は、私にわかるはずもありませんが、雰囲気は、わかるような気がします。まずは、日本側。企業でも、その他の分野でも、いまは、大きな成功を追求するより、失敗を避けたい、という気持ちのほうが、ずっと強いでしょう。きっちりと、数字でつめて、安全を確保しないことには、動きようがない、と思います。積極的に打って出ようという動きも、ないわけではないけど、それはもっと軽い分野の産業で、エネルギー資源とかではないでしょう。

それにたいして中国側は…、これは私も経験があります。規模は大きければ大きいほどいい、投資は多ければ多いほどいい、と中国側は主張するんですね。でも、具体的な根拠は、あまり示されない。山西省は、対外的な関係は、弱いですからね。私が経験したのは、10年以上まえですけど、その後も、たとえば誘致した外資は、ほんのわずかでしょう。対外的な接触で、もまれる機会も、多くはなかった。そして、いま中国は、経済面では大膨張ですからね。自信をもって、自分の考えを、主張するでしょう。そうすると、日本側は、また一步、退く、ことになる。

だまっていれば、それでいいのに、私は手をあげて、いま述べたような、自分の意見を、その席で話したんですよ。

令さんは、欧米の企業の積極性を強調したんですけど、やはり風土の違いが、大きいと思います。大同のとなりの朔州市に、露天掘りの、大きな炭鉱があります。去年の夏、そこを見学することになっていたんですけど、あいにく、朝からの雨で、いくことができなかった。これは、アメリカ企業が、開発・経営するものです。でも、仮に日本の企業なら、どこがそんなことをするか、イメージしにくいですね。

山西省は、対外開放が、ほかの省より、おそらく10年はおくれてスタートしました。あせってるんですけど、この差は、なかなか、取り戻せないですね。地元のほうでも、相手国のことを理解しないと、うまくすすまないでしょうけど、それができない。そんなことを、私は考えていたのです。

私は、私の本の中国語版を、手渡したんですけど、令さんは、「あなたたちの活動は知っています。困ったことがあったら、なんでも言ってください」と話されました。そのあと、出席者から、聞かされました。令政策さんは、数年前、大同市の市長就任が、決まったのだそう。それが、現在の職に転じたため、代わりに郭良孝さんが大同にきました。現在、郭さんは共産党大同市委員会書記で、トップです。

令政策さんは、4人きょうだいの1人で、弟の、令計画という人が、さらに有名なのだそう。この人はいま、共産党中央弁公庁常務副主任で、胡錦濤さんの、秘書なんだそうです。ことしの秋の、第17回共産党大会で、どういう職につくか、注目されています。きょうだい2人と、この秋の第17回共産党大会の代表に選出されています。そんなことまで含めて、「おおもの」といったんでしょうね。

残念ながら、そんなことは、あとで教わったことです。「困ったこと」は、いくらでもありますから、もう少し、親しくなるように努め、頼みごとに、いけるようにすれば、よかったのに……。

前回の「たより」を発信したあと、昼時に、新聞をみると、週刊誌の広告が掲載されており、それに「身に覚えはありませんか 団塊世代が『クレーマー』に変身する瞬間」とありました。やばっ！私のことじゃないでしょうね。

#### NO. 431 おしっこが横に飛ぶ！ 2007. 09. 21

北京大学と、新疆大学での講演は、ぶじに終わりました。主催者の熱心さには、頭がさがります。若い人たちに、とても熱心にきいてもらい、また、たくさんの質問をつうじて、交流することができ、行ったかいがありました。これについては、機会をあらためて、書きます。

土曜から日曜にかけて、新疆で、1日半ほど時間ができたので、主催者の好意で、トルファン（吐魯番）に行くことができました。とても印象的だったので、すこし報告しましょう。

北京からウルムチ（烏魯木齊）までは、直線距離で2,300kmほどです。資料が、すぐにはみつからないので、Google Earthで測りました（以下同じ）。飛行機（ボーイング737-800）で、4時間ほどかかります。東京-北京（2,100km）より、遠いのです。新疆ウイグル自治区の面積は、166万平方kmで、中国の面積の6分の1強。日本の国土の、4.5倍近くあります。広いんですね。広いだけでなく、ずいぶん多様なところのようです。ですから、1日や2日、滞在したって、なにかがわかるはずがない。漠然とした、印象にすぎません。

ウルムチからトルファンへは、ワゴン車で移動しました。東南方向に、直線距離でおよそ160km。道路は高速道路か、そうでなくても、よく整備されていました。ウルムチの市街地は、緑化がすすんでいます。めだつのは、トネリコ（白蠟樹）でした。トネリコも、北京や大同に多いのはAmericanaですが、ここのは、表示によると、Chinensisです。よく似ていますが、このもののほうが、葉が大きい感じ。市街地を離れると、だんだん緑が薄くなります。それでも、道路のすぐ横を流れる河川（人工的な水路の可能性もあります）に沿って、ヤナギなどの樹木が生えています。車窓からの風景ですので、くわしいことはわかりません。

河川から遠ざかり、植生もまばらになってきたな、と思ううちに、遠くに山脈がみえてきました。稜線に雪が積もっていて、そこだけ白く、浮きあがって見えます。天山山脈です。左側に、最高峰、博格達峰(5,445m)が、あるはずですが、曇っているのと、霞んでいるのとで、写真はちょっとムリ。(帰りは晴れていたなので、写真を撮りました)

風が強くなってきました。ワゴン車が、左右に、揺さぶられるのを感じます。自分でハンドルを握れば、おそらく恐怖を感じるでしょう。「横風注意」の看板も、目につきます。

そのうちに、風力発電の風車がみえてきました。その数が、どんどん増えていきます。ええっ、なに、この数！最初はデンマークから贈られ、つぎにドイツ製がきて、いまでは国産化しているそう。ぜんぶで、500基あるとのガイドの説明。この風の強さは、風力発電には、もってこいでしょうね。1基の発電能力は、600kwだそう。単純計算で、30万kwになります。しかし、回っていないもの、建設中のものなどもあり、はっきりした数字は、わかりません。その他のばめんでも、この人にかぎらず、ガイドの説明には、納得できないところがありました。

写真を撮りたかったのです。くるまが停まったのは、道路わきの小さなサービスエリア。

公衆トイレのほかは、なにもありません。風車は、けっこうな速さで、回っているんですけど、デジカメのディスプレイでみたのでは、風の強さは、伝わりません。風車を支えている柱に、「達坂城風電」と書いてあります。ここは烏魯木齊市政区のなかの、達坂城区に属するよう。近くに、柴窩堡という町がありました。

北京大学日本語言文科系の副教授、丁莉さんは、才色兼備の若い人で、日本語がものすごくたっしや。北京大学につづいて、新疆大学でも同時通訳をしてくれるんですけど、いまは、もっと役にたってくれます。長い髪が、強風にあおられて、ものすごい状態。ナイショで、何枚か、撮らせてもらいました。あとでみせると、「消してください！」というんだけど、中国では、著作権は認められても、肖像権はないはず(笑)。

私は、トイレにいきました。レンガ建ての小さなもの。大のほうは、入り口を除いて、壁で囲まれているんですけど、小のほうは、三方に壁はあっても、屋根がなく、風が吹き抜けます。はじめたとたんに、びっくりしました。おしっこが、真横に飛ぶんですよ。あわてて、からだをひねって、風上を背にしました。なんとか、セーフ！それにしても、私ひとりではよかったあ。人さまに、まともにあびせても、お気の毒だし、人さまのものを、私があびても、いい気はしない。

地元の方は、「きょうの風は、強いほうではありません。まあ、ふつうです」といいます。強いときは、列車が脱線・転覆することもあったし、ニワトリの卵くらいの、石が飛ぶ、ということですよ。そんなときは、外にはでることはできないけど、どうしても出る必要があるなら、

バケツを頭にかぶります、なんてね。

ここの地面をみると、土というものがありません。砂利の小さなものも、表面にはみられません。小石以上なんですね。小さなものは、吹き飛ばされてしまったよう。石沙漠、石漠というのがある、ときいてましたけど、こういうところを指すのでしょうか。そんな状態が、しばらくはつづいたんですけど、どこまでも、ずっと、風が強かったわけじゃない。地形その他の関係で、とくに風が強まるところが、あるようです。大同でも「1年に1度だけ風が吹く。春に吹きはじめて、冬まで吹きつづける」などと言うんですけど、上には上があるものです。

というわけで、ここは、風は強くても、風砂の発生源には、なりにくいでしょう。舞い上がるものが、すでになくなっているからです。

## NO. 432 北京と新疆での講演会 2007. 09. 26

北京大学と新疆大学での講演について、べつの機会に報告すると、前号に書きましたが、じつは、気が重くて、先送りにしたのです。必要なことだと思いますけど、やっぱり、自分では書きにくい。主催者の報告をあてにしていたら、さすがです、もう届きました。許しをえて、みなさんに転送いたします。私の話は、ふだん日本でしているのと同じです。中国人をあいて、こんな話をして、と思ったとたんに、舌がもつれましたよ。聞いてくださる人たちは、とても熱心でした。なにせ、質疑応答をいれると、3時間以上ですからね。主催者の「かわらばん100号」のほかに、多少はそれと重なりますが、そのまえに送っていただいた、参加者のナマの感想文をつけます。北京大学のぶんです。自分たちでは、なかなかできませんけど、こういうことも、だいじなことだと、心底、感じました。

\*\*\*\*\*

SGRAかわらばん 100号 (2007年9月25日)

【1】 第2回SGRAチャイナフォーラム報告

【2】 ミャンマー連邦、ヤンゴンより

\*\*\*\*\*

【1】 第2回SGRAチャイナフォーラム報告

■ 講演：高見邦雄（緑の地球ネットワーク）

「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」

中国における第2回SGRAフォーラムは、2007年9月14日（金）に北京大学生命科学院報告庁にて、9月17日（月）に新疆大学図書館二樓報告庁にて開催されました。昨年10月、「若者の未来と日本語」というフォーラムを、中国で初めて、北京大学の同じ会場で開催

しましたが、今回からは、NPOやNGO等の市民活動を紹介するフォーラムを中国で開催することにしました。今年は、まず、中国で緑化協力の活動をしている日本のNPO法人「緑の地球ネットワーク」事務局長の高見邦雄さんに講演をお願いしました。朝日新聞で見つけた高見さんの文章がとても面白かったので、是非お話を伺いたいと思ったのがきっかけですが、その後、SGRA会員の中村まり子さんにご紹介いただき、このように北京とウルムチで実現できたのは、大変嬉しく思います。また、日本語学習者ではない中国の学生さんたちにも聞いていただくために、北京大学日本語文化学部を通じて最高水準の同時通訳をお願いしました。

緑の地球ネットワーク（GEN）は1992年以来、山西省大同市の農村で緑化協力を継続しています。大同市は北京の西300kmほどのところにあり、北京の水源、風砂の吹き出し口でもあります。そこでは深刻な沙漠化と水危機が進行しています。高見さんはパワーポイントで写真をたくさん見せながら1) 沙漠化防止のための植林、2) 小学校での果樹園作り、3) 自然林の保護という大同で展開する事業を紹介してくださいました。また、非常に厳しい自然条件の上、歴史問題をかかえた大同で活動することの難しさを話してくださいました。初期は失敗つづきでしたが、その後、日本側の専門家や中国のベテラン技術者の参加をえて、だんだんと軌道に乗ってきたということです。また、日本側も中国側も失敗と苦勞を通じ、お互いを理解し、信頼しあうようになり、いまでは「国際協力の貴重な成功例」とまで評価されるようになっていきます。高見さんのお話は、参加者を引き込み「3時間があっという間にたってしまった」というコメントをいただいたほどでした。

その他にも、「黄土高原の厳しさを再認識、日本を再認識できた」「民間協力の実態を知った。一般の日本人の友好的な心がわかった。緑化に関する国際協力の大切さを知った」「高原の水不足の実態を知った。水を節約しなかったことを恥ずかしく思う。今までそのような土地があることすら知らなかった。今後何かしてあげたい」「環境問題はどんどん深刻化している。フォーラムを通じてハイレベルの教育者たちが努力されていることを知り、希望が見えた」などの感想が寄せられており、参加した北京大学と新疆大学の学生さんに対して、大きなインパクトを与えたと思います。

北京では、珍しい大雨にもかかわらず、協賛をいただきました国際交流基金北京事務所の小島寛之副所長はじめ、中国で植林活動をされているJICAのみなさん、GEN大同事務所所長、渥美財団理事長、そして北京大学の学生さん等、100名を超える参加者が集まりました。また、ウルムチでは、新疆大学化学学院長をはじめ、教員の皆さん、そして大勢の学生さんが集まり、300用意した同時通訳用のヘッドセットが足りなくなりました。ふたつのフォーラムを実現してくださったお二人のSGRA会員、北京大学の孫建軍さんと、新疆大学のアブリズさんに感謝いたします。（今西淳子）

○「土地の行政を超えた協力はあり得ない」と講師の高見さんは言いました。せつかくはるばる外国から協力に来たのに、現地の人々の心だけでなく、行政の「心」も捕まえなければなら

ないという心労は並大抵のものではなかったでしょう。村民と寝食をともにし、心と心のふれ合いができて、いわゆる政府の幹部の妨害に会っては、堪らないものです。初期の失敗はこのような「無理解」から来たものが多かったかもしれません。行政との付き合いは、中国人ですら難しいのに、外国人の高見さんの努力に頭が下がります。

「賢い順に消えていく」日本のパートナー。事の始まりは簡単なものだったようですが、持続の難しさを語る高見さんは、実は持続の大切さを教えてくださいました。事を成功させるには、困難に向かって、一步一步、続けなければなりません。言葉の勉強はさることながら、人生そのものに生かしたいものです。北京会場には、多くの日本語学科の学生が来ていました。日本語そのもの、或いは小説、ドラマ、アニメ、ゲームのような日本文化にしか触れていない学生にとって、高見さんの講演、高見さんの行動は異様なものだったかもしれません。日ごろほとんど接する機会がないからです。でも、質疑応答の時に出た質問から見れば、彼らの心に相当な衝撃を与えたように思えます。「大同から脱出した人をどうすれば大同に呼び戻せるのか」という質問は、実は自分に言い聞かしているように思えました。少し離れたところから見ることによって、改めて自己を認識できるという意識の芽生えにつながると思います。(孫 建軍)

○今回のフォーラムを通して感じたことは多いですが、それを読み易い文章にすることは理科系の研究ばかりやっている私にとって難しすぎます。3日間同行させて頂き、講師の高見さんは、植物を研究する大学教授のように思えました。緑化は自然環境を取り戻すための唯一の手段です。高見さんが15年間続けて来た緑化運動の貴重な経験は元々乾燥地域で砂漠化が段々酷くなっている新疆ウイグル自治区に取っても宝ものであると強く感じました。

フォーラムが開くまでは、会場がいっぱいになるか、最後までどのぐらい人が残るかなど色々心配していました。今日、院生から受け取った参加者名簿を見てびっくりしました。なんと391名のサイン！そのなかには新疆大学化学学院、資源環境学院、人文学院、新聞学院、生命学院、物理学院などの教官と学生、日本人留学生、新疆教育学院で研修している高校の先生などがいました。この講演を通して、若い学生が中日両国の民間人の相互理解、国際交流と国際協力に深い関心を持っていることがわかりました。

高見さんの講演は、新疆大学の学生にとって、非常に強い印象を与えたと感じました。フォーラムの後で学生や教官たちが講演内容も通訳も素晴らしかったと私に語ってくれました。今回のフォーラムは新疆大学の歴史では初めて同時通訳で行われたフォーラムとなりました。またSGRAフォーラムでも参加者が一番多いフォーラムになりました。またこの交流活動を続けていくことを願っています(疲れますが)。(アブリズ)

ふたつのフォーラムの写真は、下記URLよりご覧いただけます。

[http://www.aisf.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=2nd\\_SGRA\\_China\\_Forum\\_2007](http://www.aisf.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=2nd_SGRA_China_Forum_2007)

7

新疆日報の記事は、下記URLよりご覧いただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=ChinaNews>

また高見さんが「黄土高原だより」にトルファン旅行記を書いています。

[http://blogs.dion.ne.jp/koko\\_tayori/](http://blogs.dion.ne.jp/koko_tayori/)

#### 【北京大学での参加者の感想】

- ・環境保護活動の実行可能性を知った。
- ・黄土高原の厳しさを再認識、日本を再認識できた。
- ・民間協力の実態を知った。一般の日本人の友好的な心があった。緑化に関する国際協力の大切さを知った。
- ・わかりやすかった。具体的な例があって、衝撃的だった。
- ・民間団体も実績が残せることがわかった。高見さんのような邪念のない方が中国の緑化・地球の緑化に貢献している。感動させられました。この感動をもって行動に移したい。
- ・中日交流活動をたくさん知った。
- ・専攻の関係で環境問題に関心は無かったが、講演を通じて中国に存在する問題をたくさん知った。
- ・大同のことをたくさん知った。NPOの活動の実態や考えなどを知った。
- ・砂漠化の深刻さを知ることができ、みんなの努力で現状を変えることができると信じる。
- ・中国にはこんなに遅れているところがあることを知って、今勉強できることを大切にしなければと思った。
- ・今後何をすべきかということをはっきりとわかってもらった。ありがとう。
- ・環境や緑化関連の国際機関や国内外の環境事情を知ることができ、今後就職するときにも参考になる。
- ・環境破壊をこれ以上続けてはいけない。すべての人は「木+土+水」の漢字の意味を知る必要がある。
- ・恥ずかしく思った。中国人としても、中国の自然環境について知らなかった。大変大きな衝撃を受けた。
- ・高原の水不足の実態を知った。水を節約しなかったことを恥ずかしく思う。今までそのような土地があることすら知らなかった。今後何かしてあげたい。
- ・外国人の本当の考えを知った。
- ・フォーラムの形で、日本の方のお話で、中国の直面している問題をあらためて認識した。中国で注目すべき。
- ・中国の実情をもっとよく知り、いろいろと考えさせられた。日中友好を深め、環境保護を宣伝すべき。
- ・中国人の意識の希薄に心寒く感じる。8万株の杏の木も。
- ・環境問題はどんどん深刻化している。フォーラムを通じてハイレベルの教育者たちが努力されていることを知り、希望が見えた。

\*\*\*\*\*

●「SGRAかわらばん」は、SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA

会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで発信しています。どなたにも無料でご購読いただけますので、是非お友達をお誘いください。配信登録・解除をご希望の方は、お手数ですがSGRA事務局までご連絡ください。（システムの変更により、現在自動登録は中止しています。）

●転載は歓迎ですが、ご一報いただければ幸いです。

●配信されたエッセイへのご質問やご意見は、SGRA事務局にお送りください。事務局より転送いたします。

●皆様のエッセイを募集しています。SGRA事務局へご連絡ください。

●SGRA エッセイやSGRA レポートのバックナンバーはSGRAホームページでご覧いただけます。

関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）事務局

〒112-0014

東京都文京区関口3-5-8

渥美国際交流奨学財団事務局内

電話： 03-3943-7612

FAX： 03-3943-1512

E m a i l： sgra.office@aisf.or.jp

Homepage： <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

\*\*\*\*\*

## NO. 433 トルファンの緑化 2007. 10. 05

9月27日から、北京で「第2回日中省エネ・環境総合フォーラム」が開催され、人民大会堂での開幕式冒頭で、中国の曾培炎副総理が挨拶し、日本の政府や民間の支援の事例として、私たちのことをとりあげたそう。出席した日本のかたから、教えていただきました。

インターネットで検索すると、国家発展改革委員会／資源節約環境保護司のウェブページに、全文が掲載されています。

[http://hzs.ndrc.gov.cn/newgzdt/t20070929\\_162746.htm](http://hzs.ndrc.gov.cn/newgzdt/t20070929_162746.htm)

たくさんサイトに転載されているようです。

該当のところを訳すと、「長期にわたって、中日両国は省エネと環境保護の領域でたくさんの協力をおこない、成果をあげてきました。日本政府は無償援助や円借款などの方式で、中国のたくさんの省エネ・環境保護プロジェクトを支持してきました。貴国のボランティアたちは、すすんで中国で植樹造林をつづけています。高見邦雄さんは14年間もたゆまず堅持し、2500人の人を組織して、山西省大同市で植樹をおこないましたが、その最高齢者は84歳です。中国政府と中国人民は、これを高く賞賛し、心からの感謝を表します」というものです。

私としては、ちょっと恥ずかしいのですが、会員のみなさんや、ボランティアツアーに参加されたみなさんには、ご報告すべきだと考えました。

さて、前回につづいて、新疆ウイグル自治区での体験です。新疆大学での講演の直前、副学長との懇談の機会がありました。新疆は広いだけでなく、たいへん多様なのだという紹介。その人の専攻は地理で、沙漠化防止などがテーマだそう。

「新疆で、いちばん雨の少ないところの、年間降水量は、どれくらいだとお思いですか？」と、むこうから質問。前日まで、といっても、1晩泊まりですが、私たちはトルファン（吐魯番）におもむき、その降水量が、年間平均18mmだと、聞いてきたばかり。私は、「5mm」と答えました。「近い」という感触を、相手のことばより前に、その表情からえました。正解は、4.6mmだそう。

つづけて、いちばん多いところは？思わず私は、「600mm！」、まったくのヤマカン。そしたら、「1,060mmです」とのこと。ザンネン！「それは山の上ですね？」といったら、「そのとおりです」

新疆ウイグル自治区の、いちばん高い山は、かのK2こと、チョゴリ（喬戈里峰）の8,611mだそう。では、その逆に、いちばん低いところは？その答えは、私も知っていました。というのは……。

私が、中国でつけている腕時計は、時計機能のほか、気圧、高度、方位が、表示されます。ウルムチから、トルファンにむかうルートで、高度表示が、どんどん下がっていきます。そして、トルファンの宿では、20mが表示されました。ええっ？気圧式ですから、正確な基準点で、あわせておかないことには、あてになりません。おなじところで、翌朝みると、なんとマイナス20mになっていました。気圧の変動、機器の精度などで、100mくらいの誤差はしかたありません。

でもね、低いのは事実なのです。トルファンで、いちばん低いところは、アイディン（艾丁）湖で、海拔が、マイナス154mだそうです。それが先ほどの質問への答え。

そのあたりのことを、たしかめたくて、帰国後、Google Earthに、つないでみたのです。そしたら、マイナスの表示がでないんですね。トルファンの南のほうの、海拔以下と思われるところは、すべて、ゼロメートル表示になります。その範囲が、ひろい、ひろい。中国で購入した地図と照合して、アイディン湖は、たぶん、ここだろうな、という見当はつきますが、正確なことはわかりませんでした。

先ほど、トルファンの年間降水量は、平均 18mm と書きました。そんなところに都市が成立し、中心はブドウ栽培のようですが、そのほかに、綿花栽培もあります。そういう農業が成立しているなんて、信じられますか？そのヒミツが、先ほどの問答のなかに、隠されています。

トルファンの北に、天山山脈があります。ウルムチからトルファンにくるとき、私たちがとおったのは、地図でみると、山脈の切れ目の、峠道です。でも、右をみても、左をみても、山は遠かったから、そんなふうには感じませんでした。この天山山脈には、たくさん雪が降るんですね。帰り道では、雪化粧した博格達峰が、きれいにみえました。その雪解け水によって、トルファンは成り立っているわけです。

1つは、地表を流れる川です。自然のものもありますし、人工的に整備したものもあるよう。ちょっと白濁した水が、流れているのを、いくつもみました。ウルムチの近辺でもそうでした。川のそばに、一列に樹木がならんでいます。たいていは車窓の光景でしたので、樹種まではわかりません。

もうひとつが、有名なカレーズです。これについては、書く材料が多いので、独立して、1回にします。

樹種は、いろんなものがあります。代表的なものは、沙棗です。「棗」の字をつかいますけど、これはグミ科の樹木。大同の雲崗石窟に、大きな、古木があり、その種をひろってきて、環境林センターで育苗しました。水条件のいいところでは、みるみるうちに、大きくなりますが、乾燥している、カササギの森では、さっぱり育ちません。乾燥地の樹木、といっても、オアシスのもののようです。

それから、ポプラがあります。すべて新疆ポプラかという、そんなことはない。むしろ、別種のほうがおおかったんですね。ナシもありました。果実は、洋梨のようなかたちをしています。

意外だったのは、クワが多いことです。大きな葉です。一抱え以上の、大きなものを、あちこちでみました。これも水のあるところ。「カイコを飼うのですか？」とガイドに聞いたら、「飼います、シルクロードですから」という返事が返ってきたんですけど、それは、ちょっと、あやしい。ほかの人は、「この実がおいしいのです」といって、小さなものは小指の先くらい、大きいものは、親指の全体くらいだと、示してくれました。ここにあったものではない、というのが、私の印象です。シルクロードをとおって、ここまで導入されたのでしょうか。

トルファンと、ハミ（哈密）を結ぶ、りっぱな道路があります。その両側に、3列くらいの、緑化帯を、建設中でした。おそらく、この春あたりに植えたのでしょう。しっかりと、まだ、着いていません。葉の色も、薄くて、がんばっている最中、といったところ。くるまを停めて

もらって、みてきました。

さきほどの沙囊、クワのほかに、ギョリュウ（紅柳）といったものが、かなりの密度で植えられ、何種類かの草もはいつています。たいていは、樹高1m以上の、わりと大きな苗です。

それにしても、年間降水量が平均18mmですからね。これらの樹木や草が、育つわけがありません。道路のそばであって、川のそばではありませんから。なかにはいつてみて、わかりました。直径2cmほどの、黒い、プラスチックパイプが配置され、ところどころに、穴があいていて、点滴灌漑がなされています。う〜ん、すごい！いつたい、このグリーンベルトは、どれだけの長さがあるのでしょうか。どれほどのお金をかけたのでしょうか。

小さい苗のあいだは、水の要求量も大きくないでしょうけど、育つにしたがって、必要量はふえます。そうになると、この太さのパイプでは、まにあわないでしょう。もっと太いものに、換えるんでしょうね。いずれにしろ、天山山脈の雪解け水があるから、このようなことが、可能なのです。

#### NO. 434 カレーズ 2007. 10. 15

天山山脈の雪解け水を、人工的、効率的に利用しているのが、有名なカレーズです。カレーズの語源は、ペルシャ語だそう。アラビア語では、カナート。漢字では、坎兒井（カルジン）と書きます。話にはきいていましたが、その規模の大きさを目にして、ほんとうに驚きました。

トルファンからみると、天山山脈の手前に、火焰山があります。天山山脈の雪解け水を、この火焰山が、蓄えるのだそう。天然のダムです。その水を、地下水路で引くのが、カレーズ。

カレーズは、4つの要素でなりたっています。まずは、豎（たて）井戸。直径1mほどの井戸を、垂直に掘ります。水源近くは標高が高くなっており、豎井戸も深くなります。もっとも深いもので、100m前後だそう。浅いものは、数メートル。だいたい30mから、50mの間隔で、一直線に並べて掘ります。

トルファンから、火焰山にむかう途中で、この豎井戸が、ならんでいるところを、みました。掘り出した土が、周囲に盛られ、クレーターのようによえます。それが、直線上に、ズラッとならんだものが、何本も何本もあるのをみると、規模の大きさに圧倒されます。のぞきこんで、写真を撮りたいと考え、1本に、近づきました。まるで蟻地獄のようになっていて、落ち込んだら、外にはでれないでしょう。あきらめざるをえませんでした。

第2の要素は、暗渠（あんきょ）、つまり地下トンネルです。豎井戸の底から、となりの豎井

戸にむかって、同時に、掘りすすめます。掘り出した土は、堅井戸をつうじて、地上に運び出します。トンネルを掘る作業は、すべて人力。用具も簡単なもの。土を運び出すときに、若干の家畜をつかったようです。

となりどおしの堅井戸からスタートしたトンネルが、ちゃんとながらるためには、測量技術が必要でしょう。まず地上で、まっすぐな棒を用意し、銃で照準をつけるようにして、目的の場所にあわせます。その棒の先後から2本のヒモを、堅井戸のなかに、たらしめます。2本のヒモの先には、同じように、まっすぐな棒が結ばれています。地上と、地下の、2本の棒は、完全に平行になっているわけですね。地下では、その棒の示す方向に、トンネルを掘ります。簡単な仕組みですので、それだけ、熟練が要求されたでしょうね。方向がくいちがうと、労力を無駄にしますから。

この暗渠が、カレーズの本体でしょう。トルファンでは、年間降水量は18mmですが、蒸発量は、3,000mmにもたっします。なにせ、夏の最高気温は50度近くになり、太陽にあぶられる、地表面の温度は、70度にもなるそう。それでも、地下には、あまり影響がないのです。

第3の要素は、明渠です。ようするに、上がオープンになっている溝。当然、浅いところに、かぎられます。

第4は、ため池のようなもの。地下を通ってきた雪解け水の、水温はとても低いのです。そのまま、灌漑につかたりすると、作物によくありません。太陽熱であたためて、常温に近づけてから、つかいます。

さきほど、圧倒される規模だと書きましたが、長いものは、なんと、30kmもあるといいます。そして、その総数は千本以上もあり、総延長は、3,000kmとも、5,000kmともいわれます。早いものは、いまから2000年前につくられたのだそう。万里の長城、大運河とならぶ、3大建造物で、ユネスコの世界遺産に登録申請するそう。

トルファンには、地下トンネルの一部を拡張し、観光用に、公開しているところがあります。人形などをつかって、掘削のようすを、再現しています。実際に水が流れており、さすが雪解け水、かなり冷たかったのです。清冽な、といたいところですが、ゴミなんかも、下にたまっていて、やっぱりここは中国。小さな魚も、泳いでいました。私たちは、そこのホテルに、宿泊しました。

では、カレーズの水源を、どうやってさがすのでしょうか。ガイドの説明が、とてもおもしろかった。ラクダに、たくさん塩をなめさせるのだそうです。これは、うなずけます。家畜は、砂糖のように甘いものも大好きですけど、塩も、ほんとうにすきです。すると、ノドが渴きますね。けんめいに、水のあるところをさがします。そのあとをつけていけば、水源が見つかる

というのです。いろんな面で、動物は、ヒトより感覚がするどいので、そういうことがあるかもしれません。

カレーズを1本もつと、ずいぶんお金になったそうです。金持ちがグループで掘ったそうですが、そのあとは水を売って、収入にすることができます。そのような説明の場に、林則徐の銅像が立っていました。イギリスのアヘン持ち込みとたたかった、民族の英雄です。どうしてこんなところに？そうでした。阿片戦争の敗戦で、林則徐は、新疆のイリ（伊犁）に左遷されました。その途中で、このトルファンを通過し、カレーズをみて感心し、自分でも、何本か、掘ったのだそう。

そのカレーズも、水の涸れるものが、急速にふえているそう。主たる原因は、人口増加で、水使用量がふえ、カレーズの水源を、奪っているのだそうです。どこでも、同じ問題が、起きているんですね。

このカレーズのことを、だれかが研究していたな、だれだったかな？トルファンにいたときから、ずっと気になっていたのですが、やっと思い出しました。京大に留学中の、馮艶さんでした。どうしてるかな？

#### NO. 435 チョウとソテツ 2007. 10. 29

ここしばらく、町内を、あやしい人たちが、徘徊するのだそうです。数人のグループもあれば、単独もある。たいていは中高年の男。背中にザックを背負い、一眼レフカメラと三脚。なかには昆虫採集の網を、すばやく取り出す男もいる。

その人たちのターゲットの1つが、わが家のようなようです。かなりの時間、立ち止まって、フェンス越しに、庭を覗き込みます。なかには、許しをこうて、なかに入ってくるものもいれば、無断で立ち入るものもいるそう。安っぽい門扉を、開けっ放しのことが多いから、気軽にはいるのでしょう。

つれあいの母親が、何日もつづけて、そんなことを話していました。そう遠くないところに、昆陽池公園があり、その昆虫館に、たくさんチョウを飛ばせているから、そこからつかまえてきているのかもしれない、とも。

一昨日は土曜日で、私も家にいました。ほんとに、やってきました。4人のグループです。小雨のなか、傘もささず、庭をみています。私の姿をみて、あわてていいました。「庭のチョウをみせてもらっています」と。

前庭が、ネズミの額ほどの、家庭菜園になっており、チョウチョが飛び回っています。こないだまでは、ブロッコリやダイコンをめあてに、モンシロチョウが多かったのですが、いまそれは減り、小さなシジミが飛び交っています。アオジソに遅い花があり、止まって、蜜を吸います。そのなかに貴重種がいるというのです。

「いま全国から、マニアがここに集っていますよ」。ええっ、知らなかった！「あなたはどこからですか？」ときくと、「私はすぐそこです」とのこと。まあ、町内です。ほかの3人は、その人に案内されているよう。みんな、関東の人でした。

きのうは日曜日でした。しかも天気がいい。山歩きでもしたいところですが、残念なことに用事がある。一日中、出たり入ったりしていました。きょうも、きました、きました。ずっと見張っていたわけではありませんが、私がみただけでも、10人を超えます。おそらく、その何倍にもなるでしょう。

貴重種といわれるチョウは、クロマダラソテツシジミというのだそうです。耳にしたいくつかのキーワードで、ネットを検索すると、ずいぶんたくさんの情報がヒットしました。本来の棲息値は、台湾以南の暖かいところだそう。日本で見つかったの、従来は沖縄県だけで、しかも、1990年代はじめと、2000年との2回だけだったとか。だから、貴重種なんですね。ところが、ことしは、沖縄では、あちこちで発生したとか。

種名のなかに、「ソテツ」がはいっていますが、それはこのチョウの幼虫が、ソテツの新芽を食べて育つからです。ほかのものは、食べないそう。チョウのなかまは、チョウの種と、エサになっている植物の種とが、一対一対応になっているものが、けっこうありますね。種ではなく、属のレベルといったほうがいいかもしれない。

インターネットの情報では、兵庫県宝塚市と大阪府池田市の北部で、たくさん発見され、補足されているそう。どちらも植木や園芸の産地として、知られています。うちの近所にも、ソテツはたくさんあります。

わが家の、コンクリート製の、小さな門柱のうしろに、ソテツがあります。もとは鉢植えでしたが、鉢底から根をだして、しっかり根付いてしまいました。今年は異変がありました。春に新しい芽をだし、きれいな若葉になりました。それはいつものことです。9月になって、また新芽をだし、新しい葉を広げました。ことしの夏、とくべつに暑かったことと、関係があるかもしれません。

つれあいにいわれて、みたときは手遅れでした。その新しい、やわらかい葉に、灰色の虫がわき、すっかり食い荒らしてしまいました。チョウの狩人たちは、それをみて、わが家をターゲットにしたよう。近所のソテツは、私がみるかぎりでは、秋に新芽をだしたものは、みつか

りませんでした。わが家のソテツほど、無残に荒らされてもいません。

何人もの人が、そのソテツをのぞきこみます。幼虫か、サナギをさがしているのでしょうか。「いないでしょうよ。このあいだ、殺虫剤を撒きましたからね」。私がそう言うと、「そうですね、害虫ですから……」といいながらも、いかにも残念そう。私がクスリを撒いたときは、やわらかい葉は、すでに全滅でしたからね。こういう事情がわかっていたら、殺すか、殺さないか、ちょっと悩んだでしょうね。

小学校のころは、私も、昆虫少年だったのです。めずらしいチョウをさがして、大山にもよく通いました。絹の捕虫網なんかをもって。使わないとき、樟脳をいれわすれると、たちまち穴だらけになりました。ナイロン製もあり、手入れは簡単だったけど、絹製のほうが、チョウの羽を傷つけなくて、よかったです。

そういえば、わが家の近辺に出没しているのは、たいてい、その時代の昆虫少年が、その後の年輪を重ねたという感じ。でも、もう少し若い世代もいるし、そのジュニア世代もみました。全員が男です。興味のない人からみれば、へんな連中だよな。

せめて写真でも、撮ってやろうと、考えました。そうやって、かまえてみると、いろんな種類のチョウがきます。シジミに注目すると、たしかに2種類います。1種類は、ヤマトのふつうのもので、もう1種類がそうなのでしょう。ちょっと黒っぽい。でも、そちらのほうが動きが速いんですね。なかなか止まらない。

自分の家の庭で、待ち構えてさえいればいいんだから、ほかの人より、ずっと条件がいいと考えました。しかし、決定的に、不足したものがあります。それは、情熱と根気。すぐに飽きてしまいましたよ。

それにしても、台湾以南のチョウが、こんなところで、育っているんですからね。温暖化を、身近に実感させられました。

#### NO. 436 韓国版の訳者あとがき 2007. 11. 05

ことしの6月、私の本『ぼくらの村にアンズが実った』の韓国版が手元に送られてきました。残念なことに、ハングルを私はまったく解しません。これで日本版、中国版、韓国版と3冊がそろいましたが、その装丁も、表題も、まったくちがって、同一の内容とは思えないくらい。韓国版のばあい、気になるのは、どんな人が、どんな思いで訳してくれたか、ということ。で、北京の友人の呉英愛さんにたのんで、訳者のあとがきを、日本語に訳してもらいました。調子をととのえるために、私がちょっと手をいれました。まちがってたら、ごめんなさい。韓国版

の表題を日本語に訳すと、「砂漠に蒔いた緑の希望」となるそうです。

【訳者あとがき】

私は土の色がすきだ。といっても土には白いものから赤っぽい黄土、黒い粘土などいろんなものがある。これらの色のなかでも、私は特に赤っぽい黄土がすきだ。生まれて最初に私の心に刻まれた色がそれだからだ。私の記憶にある最初の土の色は、部屋に差し込む日の光に照らされた壁の黄土色である。

稲藁を混ぜ込んだ壁土に囲まれた部屋のなかで、母の乳を待つ赤ん坊の瞳孔にその色が映り、脳の深いところに刻みつけられたのである。また黄土の色は私にとってもっとも根源的で、肌の色のようなものでもある。草や森などに覆われているはずなのに、それがなく、むき出しになっている黄土は私を不安にさせるし、工事などで露出した黄土はまるで傷のように私に痛みを感じさせる。

あるいは黄土の色は、誰にたいしてもある種の空腹感や、深く切られた傷のように感じさせるかもしれない。飢餓が深刻化する端境期のあの色は本当に寂しく、貧しい色であり、それは春の雨によってだんだん濃くなる緑と悲しい対照をなす色でもある。

黄土高原の風景にも、文明がもたらした傷と飢餓感が染みついているように思う。本書「砂漠に蒔いた緑の希望」はこのように没落し、肌を露出しているやせた黄土の砂漠で、緑の希望を植えつづけている環境活動家の生の体験記である。

高見邦雄さんは中国の内陸、大同地域の黄土高原で十数年にわたって緑化活動をつづけながら、そのなかでの経験とノウハウをおもしろいエピソードを交えて伝えている。著者の生き方、考え方をすなおに表現した、淡々とした文章のなかに、個人の体験記を超えた NGO の国際協力の貴重な成果と活動の指針が示されていると思う。

環境問題というのは目にみえるものだけではない。そのなかには科学的に扱わないかぎり認識できない地球温暖化の問題とか、国境を越えて深刻化している砂漠化の問題などがあり、私たちはなかなか観念のレベルから脱けだすことができない。

砂漠化の問題は国境を越えて皆が手を携えて解決しないといけない課題であることは誰でも知っている。このようなグローバルな課題を解決するための命題として「シンクグローバリー・アクトローカリー」（地球規模で考え、足もとから行動しよう）が提唱されてからでも、かなり長い年月がたった。

結局のところ、地球環境問題を解決するためには政府・企業・NGO・個人などそれぞれのセクターが国際的な、民際的な連帯による協力を持続していくしかないだろう。

2006年は国連が制定した「砂漠と砂漠化の国際年」であり、「砂漠化対処条約」の締結から10年の年でもあった。砂漠化への対処はまた、2015年までに世界の貧困問題を解決するために国連が提起したミレニアム開発目標（MDGs）の達成にとっても重要な課題である。

ドイツ、日本などの先進国は長期にわたって、政府援助や企業・NGO・個人などの活動による砂漠化防止のプロジェクトを進めてきている。スタートは遅かったが、私たちも中国の内モンゴル地域を対象に植林などの環境支援プロジェクトをスタートさせている。

スタートしたばかりの私たちにとって、十数年間の緑化協力活動を牽引してきた高見邦雄さんの失敗と成功の経験は、私たちの活動にとっての貴重な秘訣であり、元肥ともなるものである。

本書の著者と日本の環境団体が中国における緑化事業で経験した専門性の欠如や国際協力への認識不足などによる失敗と苦悩を乗り越える過程は、これから私たちが経験することなのかもしれない。

緑化事業を成功させるために必要な条件として、著者は三項目をあげている。まずは自然条件。二番目に社会関係。そして三つ目は人的要素である。そしてそのなかでも、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」という孟子のことばを引用しつつ、人的な要素が最重要だと述べている。自然条件を地の利、社会関係を天の時、人的要素を人の和とみているのである。

森林が今日もつ意味は、大地を緑で覆う「山林被覆」としての林学・環境工学的な意味にとどまらず、生命の連鎖を認識し、人類を支えている植物・動物のネットワークを理解するための媒介として大きな意味をもっている。

生態系として結びつけられているネットワークを理解しないことを、アルド・レオポルドは「生態系の文盲」と名づけた。空気浄化装置としての森林の価値換算より、生態系の巨大な深いネットワークを理解し、社会と自然の関係を正しく、平和的に組み付ける知恵をうることで、現在、森林に学ぶことの意味であろう。

人類を救済することのできる森の思想はそのようなものではないだろうか。この本は当然ながら中国緑化事業の技術マニュアルでも、単純な活動の記録でもない。十数年間という短くない歳月をかけて著者が覚った文明と社会への考察が溶け込んでいる。まるで黄金を採掘するかのように、現場で知恵を発掘してきた彼の感覚と生活にたいする楽観的な姿勢はもっとも貴重ななかがやきだと思う。

春、スマイルが咲くころの黄土の色ほど、私に生きるエネルギーを与えてくれる色は珍しい。黄土高原で緑の希望を植え、育てていくこの本に出会ったのは私の幸運である。翻訳を助けてくれた後輩たちと、さまざまな困難を乗り越え、読者に良書を送り届けるために尽力されたユーナ キョン代表に心から感謝を表す。

ユーナ キョン ヨンチョ 2007.5

(訳：呉英愛)

## NO. 437 環境林センター (1) 2007. 11. 13

大同市南郊区平旺郷の、私たちの拠点「環境林センター」は、1995年春から、建設がスタートしました。でも、最初から、いまの規模があったわけではありません。それなりの曲折がありました。

1992年に、緑の地球ネットワークがスタートしたとき、メンバーは、しろうとばかりでした。まあ、緑化くらいなら、しろうとでもできるだろうと甘い考えがあったのも事実です。緑化の経験は現地にもあるのだから、その技術者に頼ればいい、という目論見もありました。ところが、実際に動き出してみると、失敗つづき。現地の方は、「大早魃だったから、しかたがない」というばかり。没法子（メイファーズ）ですね。

なんとか、日本でも、専門家に加わってほしいと思いました。立花吉茂現代表を紹介し、いっしょに訪ねてくれたのは、いまは副代表の川島和義さんでした。それから、東北大学植物園長の遠田宏さん、当時は名城大学におられた前中久行さん（いまは大阪府立大学教授です）などが、加わっていただきました。この2人は、現在は緑の地球ネットワークの顧問です。

立花吉茂さんの考えは、「そういう活動を海外でやるには、パイロットファームのようなものが、絶対に必要です」とのことでした。いいモデルを現地につくり、実際の姿をみてもらって、ほかにも広げていく、というやり方です。

ちょうどそのころ、大同の現地でも、共青团大同市委員会の人事異動があり、副書記の祁学峰が、この事業を担当することになりました。すでに、渾源县、大同県、靈丘県、陽高県といったところにプロジェクトができていました。彼の考えは、「数多くのプロジェクトが、あちこちに分散しているだけでは、とても管理ができない。それらを統合し、牽引する拠点が必要」というものでした。同じ時期に、日中の双方からでてきた提案は、1つのこととして実現できます。大同からの提案を、一回り大きくして、投げ返しました。

1994年夏に、最初の専門家の調査団が、大同を訪れたとき、その候補地に案内されました。それ以前の連絡では、候補地は、大同県だったのに、実際に訪れたのは、南郊区平旺郷でした。

そのとき、おかしいな、と思いましたが、それは一瞬で、あとは、流れに乗ったのです。立花さん、遠田さん、前中さんたちも、気に入ってくれたようです。ここは市街地から近く、交通が便利なおかげに、電気、水などの条件も、整っていましたが、おおらかというか、なんというか、枯れてスペースになっているところも多く、そこには野菜その他がつくられていました。土はそうとうに肥えているようで、そのときみた巨大なキャベツを、いまでも思い出します。

しろうとの私に心配だったのは、この施設の中心は、苗畑になるんですけど、このように水と土の条件に恵まれたところで苗をつくり、それと正反対の条件の現場に植えたら、苗がショック死してしまわないか、というものでした。答えてくれたのは、前中さんでした。「できるだけ条件の整ったところがいいのです。そこでできるだけいいモデルをつくり、他に広げるときは、その不足するところをどう補うか、工夫すればいいのです。いい条件のところを、そうでない条件にするのは簡単です。あなたがそういう心配をするのなら、苗を動かすまえに、灌漑をストップするなり、方法はいくらでもあるでしょう」というものでした。なるほどね。

計画を組み立てられたのは、立花さんでした。管理部、育苗部、研究部、花卉部といった、現在もつづく部門構成も、立花さんの提案でした。でも、そのころ、資金的はとても窮屈でしたから、もっとも必要なものから、少しずつ建設するしかありません。

具体的な着工は、1995年4月です。少なくともこれから数年、現地のプロジェクト建設の中心はここです。そんなことがほんとうにできるものか、心配もありました。それまで現地ですすめてきたプロジェクトは、うまくいきそうなものもあるけど、失敗したものも少なくありません。これまでのプロジェクトは、失敗すれば、場所を変えればよかったけど、このようなプロジェクトは、そうはいきません。地元との関係、人材の確保、経験したことのない複雑な問題もでてくるでしょう。

日本国内でも、たいへんだったんですね。緑の地球ネットワークを立ち上げたあと、内部にも、いろんな考えのちがいがでてきました。始めるまでは、360度、どの方向にも無限の可能性がありますが、実際に1つの活動を始めると、他の可能性を切り詰めるしかありません。当然、こんなはずではなかった、と思う人もでてきます。ヨチヨチ歩きの緑の地球ネットワークは、存亡の危機だったと思うんですよ。そんななかで、立花吉茂さんに代表を引き受けてもらい、第2回会員総会を準備して、立て直しに努めていました。

そこに、思いがけない事件がありました。1995年1月17日の、阪神淡路大震災です。当時の事務局員3人は、いずれも震度7の地域に居住し、半壊になってしまいました。直後から、救援活動に走り回ったのです。あとでわかったことですが、世話人の多くが、いろんなところで、救援活動に取り組んでいたんですね。そのことで、おたがいの信頼感が強まったと思います。でも、私の意識からは、会員総会も、大同での協力事業も、遠のいていました。そんな

ときに、大同から、見舞いのメッセージが届きました。だいじょうぶか？ 困ったことはないか？農村の人たちから、問い合わせがつづいている。必要なものがあれば、言ってくれば送るから、ともありました。それで、やっと、思い出したんですね。

1995年春には、2つの協力ツアーを予定していました。でも、そんなことが可能でしょうか？迷った末に、計画どおり、そのまま派遣することにしました。懸命でしたね。参加者も多くはありませんでしたが、なんとか実現できたのです。いまから考えると、あのあたりが大きな転機でしたね。2つ目のツアーの滞在中に、メインイベントとして、環境林センターの起工式をもちました。現在の管理棟があるあたりに、少しだけレンガをしいて、そこを舞台にし、中国側と日本側、双方から代表があいさつしました。日本側の代表は現副代表の有元幹明さんでした。中国側では、当時の副市長も参加してくれました。(つづく)

#### NO. 438 木登り 2007. 11. 20

大同で緑化関係の技術者とずいぶん知り合いになったんですけど、彼らはたいがい、木登りが苦手です。若い何人かは、山西農業大学の林業学科を卒業したというのに、木登りができませんでした。で、私は、「林学科というのは、入学して最初の半年は木登りの練習ばかりやるんじゃないの？」などといって……。登るような木がないから、しかたがないのかも。

もう10年にもなりますが、立花先生が、環境林センターで挿し木の指導をされたとき、サンプルとして、何種類かの枝を集めたんですけど、そのときも、私が木に登りました。バカと煙は高いところに登りたがる、といいますけど、高いところに登るのが、こどものころから私は好きです。名前のせいじゃないかと思うくらい。

ことしの夏は、これはまったくのお遊びですけど、環境林センターの中庭で育っている、シダレニレ（枝垂れ榆）の木に、交替で登りました。いくつものツアーの参加者が、けっこう熱中して、とりくんだんですね。女性たちもがんばりました。やればできるものです。

私の木登りも、たまには役立つことがあります。ことしの夏に、専門家たちが大同にきたとき、日程の最後に、乾燥地のポプラ、胡楊を見に行きました。8月16日のことです。ちょうどこのころが、胡楊の種子が熟し、柳絮が、飛びはじめる時期です。ことしも絶好のタイミングでした。

胡楊は雌雄異株で、種子のつく木と、そうでない木とがあります。1960年代あたりに、西のほうから導入されたもののようで、直径は30~40cmあります。できるだけ上のほうについている種をとりたいんですけど、地上からでは、高枝切りをつかっても、いちばん下の種にも届きません。どうしても、登らないわけにはいきません。

最初、運転手の小郭が、武春珍所長の命で、木にとりつきました。ちょっと危なっかしいんですね。登ってから、高枝切りを使おうとしましたが、調子が悪い。壊れてしまって、使えません。ここまでのどこかの段階で、チェックしておくべきなのに、準備の悪いことです。

しかたがないので、手を伸ばしてとろうとしますが、おっかなびっくりなんですね。彼も、木登りの経験は、まずないのでしょう。魏生学副所長は、こどものころはよく木に登ったとジマンしますが、いまはでっぷり太って、とても登れそうにない。桜井尚武さんは、こないだまで日本森林学会の会長だったんですけど、「自分の背より高いところには登りません」などといって、すましています。まあ、私よりは先輩ですしね。

となると、私が登るしかありません。このような機会に、まだやれるぞ、ということをアピールする必要もある。木登りのコツは、からだのさばき方であって、力じゃないですからね。それはからだ覚えていて、ちゃんと登れたんですよ。十分なだけの種をとりました。

この種は、環境林センターで、王君軍が蒔きました。老王は、これまで3年つづけて、胡楊を育てています。最初の2年は温室に蒔いたんですけど、去年からは、露地で栽培しています。いろいろくふうがあって、技術はたしかなんですけど、話し下手なんですね。どうやって育てるか、吉川賢さんに聞かれて、「去年のいまごろ、種を採ってきて、ここに蒔きました」お終い。おいおい、いくらなんでも、それはないだろう。それでやっと、ポツリポツリと話したんですね。8月下旬、私が帰る前には、ことしも小さな芽がでていました。

小さな種を流さないように、どうやって水をやるか。種を蒔くと、数日で発芽しますが、冬までには1cmほどにしか育ちません。零下30度近くにもなる、厳寒の冬を越させるためには、くふうがいろいろあります。厚さ数センチに、砂をかぶせるんですね。ひとつおりの栽培法を確立したとみていいでしょう。

昨日、通勤の電車でつり革につかまっていると、左肩に激痛がはしり、思わず手を離してしまいました。五十肩？その瞬間に、木登りのことを思い出したんですね。木の上にいるとき、こんなことになったら、危ないですね。私も、もう還暦ですから。木登りは、あれを最後にするのがよさそう。バカもほどほどにしないとね。

#### NO. 439 水俣で植生調査 2007. 11. 29

このあいだの連休に、水俣に行ってきました。鹿児島県との県境にあるりっぱな照葉樹林の、植生調査です。もともとは1966年に開催された国際生物学事業計画（IBP）の調査対象地だったのだそう。その事業が終わったあとも、いろんな大学の研究者に、在野の人たちも加わって、

もう 40 年以上も調査がつづいています。それについては、大阪府立大学の前中久行先生のホームページに紹介があります。

<http://rosa.envi.osakafu-u.ac.jp/members/maenaka/nhkmina.htm>

「IBP」「水俣」などのキーワードで検索すると、その他の情報もたくさん得られるはずです。

ことしの 8 月、大同の霊丘自然植物園に、日本の植物の研究者、4 人にきていただきました。最初の日は、太行山中の、再生しつつある自然林をみていただきました。これまで数年のあいだに探しだしたところと、今回の調査の直前の 2 日間に下見をして、アクセスがいちばん容易なところを選びました。それでも、けっこうたいへんだったんですね。距離を歩かないといけないし、でてきた自然林も傾斜が急で、立ち木につかまらなないと、歩けないくらい。

その翌日、私たちの霊丘自然植物園をみてもらいました。敷地面積は 86ha ですが、低いところは海拔 900m、高いところは 1,300m 余りです。いちばん高いところは「南天門」といいます。どこかで聞いたな、と思ったら、中国の皇帝が封禅の儀式をおこなう、泰山の山頂の名です。私たちの南天門も、かつてにつけたんじゃないありません。ちゃんと、中国の地図にも、そのように記載されています。

ふもとの管理棟から、南天門まで登る作業・観察道を最初につけました。それから、海拔 1,100m ほどのところを、水平にすすむ道をつけました。この道をつけたことで、樹木が成長しつつあるようすを、手近で観察できるようになりました。でも、お金をかけられなかったので、あちこちで崩れています。それでも、研究者たちは、「よくぞ、このような道をつくられた。おかげで、いろんなものを見ることができます」といって、感心してくれました。

そのつづきで、言われたんです。「きょう、ここにくるんだったら、きのうの山は、行かなくてもよかったですよ」。ええっ！このプロジェクトがスタートしたのは、1999 年 4 月です。ですから 8 年ちょっと。育ちぶりには、私も驚いていたんですけど、専門の人から、そこまで評価されるとは、思いませんでした。そうなると、欲がでるんですね。その状況をきちんと調査・記録して、なんらかのかたちで、発表したくなったんです。最初の段階から、きちんとやっていたら、ベストだったんでしょうけど、変化がでてから、そのことに気づきました。

そのときもきていただいていた、前中さんに話したら、水俣の調査活動を紹介して、いちど体験したらいいと、誘われたのです。前中さんも、30 年ほど前に調査方法の勉強として参加し、その楽しさで毎回引き続いて参加するようになり、いまでは調査組長代理代行心得だそう。(この「職名」で、学生時代が想像できて、おもしろいですね)。ただ今回は、ケガをして入院中で、「遠隔部長」でした。

緑の地球ネットワーク副代表の川島和義さんに、車の運転をお願いし、事務所の 4 人全員、合計 5 人で参加しました。22 日の夜、宮崎行きのフェリーで出発し、26 日の早朝、大阪に帰り

着きました。調査の本隊は、その前日から開始しており、私たちは1日遅れ。全員では26人の大世帯。水俣市内の古い旅館に寝泊まりし、合宿気分を味わいました。さいわい、天候に恵まれ、調査も順調にすすみました。

調査地には、40m×40mの調査枠が5つ、ロープで囲ってあり、それがさらに、10m×10mの小区画、16個に区切られています。そのなかの胸高周囲14cm以上の樹木には、すべて番号札がつけられ、樹種、胸高（根元から130cm）の幹直径、樹冠に陽光が届くかどうかを調査し、記録しています。さらに、16の小区画のうちの4区画については、胸高直径1cm以上のものの、根元から30cmのところと、胸高の、直径を測って記録します。さらに、2つの小区画では、根元から30cmのところの直径が5mm以上のミニサイズも、対象になります。大きいものの胸高周囲はメジャーで測定し、小さなものは、ノギスで2方向を測ります。

調査の対象は、しばらく前は6,000本ほどだったそう。でも、森林の成長とともに、数はだんだん減るそうです。それら1本1本について、調査枠のなかでの座標まで記録されていることに、ほんとにびっくり！これだけの調査を、2年に1度ずつ、積み上げてきているんですね。

私は、すっかり感心しました。まずは、なんといっても、40年もつづいていることです。国際調査という、きっかけはあったにしても、これだけの期間、継続するうちには、おそらく何度もの、中断の危機があったことでしょう。それを乗り切ってきた人たちに、心から尊敬の念をもちました。

それから、世代交代が、順調にすすんでいることです。開始時に学生だった、永野正弘さん、鈴木英治さん、それに前中さんといった方たちが、いまはリーダーのようですが、もう少し若い研究者が、学生をつれて参加しておられるのを、とてもうらやましく思いました。

3番目には、学生のみなさんの熱心さに驚きました。現場の調査では、ほんとに厳密に調査していました。私も、メジャーの使い方がまずいといって、注意されました。現場でとるデータに信頼がおけなかったら、このような調査は、なんの意味もなくなるでしょうからね。その回だけでなく、前のものも、後のものも。それから、樹木の名前を覚えるために、標本を採取して、夜中まで、熱心に調べていました。私もここ数年、いろんな大学で、学生相手に話すことがあります。今回は、びっくりしましたね。私たちの同行者、全員が感心していました。やっぱり、フィールドにでて、それぞれが責任をもってことにあたっているのがいいんでしょうね。

調査結果について、永野さんに、尋ねました。「2年前と比べて、変化がありますか?」「変わりませんね、2年では。でも、10年をとってみると、はっきり変わっていきます」。そういうものなんでしょうね。私にとっても、貴重な経験でした。2年後に、またお世話になるかもしれません。

## NO. 440 環境林センター (2) 2007. 12. 04

あとになって冷静に考えると、よくも無謀なことをしたものだ、冷や汗ものですが、とにかくにも、環境林センターはスタートしました。妙な名前だと思いますが、こんなわけがあります。1992年から、私たちはあちこちに防護林をつくりはじめましたが、その名称を「地球環境林」としたのです。で、それを統括するという意味で「センター」をつけました。中国語では「環境林中心」です。

ついでに、一足先に発足した「緑色地球ネットワーク大同事務所」にも、触れておきましょう。このような協力事業を継続し、発展させるには、中国側にも、このことだけを朝から晩まで考える人が、最低1人は必要だと、私は考えました。片手間ではやれないのです。当時のカウンターパートの共産主義青年団は、人の異動が激しく、担当者が次々に替わりました。緑化という事業は、ほかのことに比べても、長い時間を要するものです。こんなに人事異動が頻繁だと、やっていけるはずがない。その点から、専門の事務所をつくって、人事を固定してもらおうよう、頼み込みました。これまでに私がやったうちで、いちばんよかったのは、このことだろうと思います。

さて、専門の組織の名前です。私は「環境林センター」を提案したのですが、先方の責任者、邢学峰がだしてきたのは、「緑色地球ネットワーク大同事務所」でした。前半分は、緑の地球ネットワークの中国語訳ですね。それだと、私たちの現地事務所と誤解される恐れがあります。私はそれが心配でしたが、先方が気に入って、自分の名前にしようとするのを、だめだというわけにはいかないでしょう。むしろ、喜ぶべきことではあるんですね。

環境林センターが、軌道に乗った最大の理由は、人を得たことです。初代の経理（マネージャ）は、邢雁俐です。それ以前は、大同青年旅行社の副経理、つまり副社長でした。この人が、個人として有能であるだけでなく、あとになってわかったことですが、大きな人脈をもっていたんです。彼女のお姉さんの夫が、支樹平という人です。私たちが1992年、太原でこの協力事業を決めたとき、共青团山西省委員会の書記で、中国側のトップでした。「共青团がはじめてえた国外からの協力です」といって、歓迎してくれたものです。まもなく、彼は、共産党山西省委員会の組織部長になり、何年か後に、共産党河南省委員会組織部長→副書記へと異動しました。5年前の第16回共産党全国大会で中央委員候補に選出され、先日の第17回大会では、中央規律検査委員に選ばれたよう。

まだ彼が、山西省の組織部長をしていたころ、環境林センターを視察したことがあります。そのときは、党書記、市長をはじめ、市の幹部が勢ぞろいしました。私たちのしごとがやりやすいよう、配慮してくれたんです。市内に帰る車に、いっしょに乗ったとき、彼が「この村は、

私の出身地です」といいました。私が「じゃあ、あなたが……」というと、「ええ、生まれ育った村にも、1つくらいは、いいことをしたいと思いました」といいました。もともとは大同県になるはずだったのが、南郊区平旺郷にきたのには、そのような理由があったわけです。「いいことをしたかった」と言われても、私たちは、いつつぶれてもおかしくない状態でしたからね。よくもそんな評価をしてくれたもの、というのが正直なところ。

支樹平さんは、大同の青年たちのあいだでも、評判のいい人でした。早くに父親を亡くし、6人の弟妹を父親がわりになって育てたそう。最初は小学校の先生だったのが、中学校の先生に格上げされ、そして、青年団の幹部に抜擢されたのだそう。その後は、書いたとおりの出世です。私も4~5回、会ったことがあります。みるからに苦労人で、私より若いのに、ずっと老成した印象でした。その人が、場所を決め、義理の妹を經理にしたんですからね。村の人たちが、最初から、たいへん協力的であった理由も、それでわかりました。

最初は50畝(ムー)の土地を、無償で借りました。ムーは中国の面積単位で、15ムー=1haです。ですから、50ムーは、3.33ha。トラクターは、運転手、燃料つきで、村からきてくれました。電気も、水も、料金を払いませんでした。

そういう関係も、もちろんあったんですけど、邢雁俐さんの奮闘ぶりが大きかったでしょうね。旅行社の副經理だった人が、まっ黒になって働きましたからね。とにかくこの場所は、黄土高原とは思えないくらい、土が肥えていて、雑草もよく伸びます。ちょっと油断すると、人の背丈を超えてしまいます。つぎの機会にでも、私の失敗談を書きたいところ。それを、トラクターで掘り返し、經理を先頭に、センターの従業員が、そのあとについて、草を集めて回ったのです。私たちがかかわったプロジェクトで、成功しているのは、その責任者が、陣頭指揮をとっているものだけです。

書き落とすことができないのは、徐尚紅です。彼女は、その当時、共青团南郊区委員会の書記でした。4つの区と、7つの県のなかで、女性の書記は彼女1人。この人が、邢さんと組んで、よくやってくれたんですね。私は、彼女を大同事務所にはしょくて、けんめいに口説きましたよ。結果は、みごとにふられました。そのとき邢学峰は、「和尚を呼ぶには、寺が小さすぎる」といいました。まさしく。その直後に、彼女は、城区の副区長になり、いまでは、天鎮県の県長で、何年かあとの、副市長の有力候補のようです。

やがて、邢さんも、環境林センターを去ることになりました。つぎの職場は、雲崗賓館の副經理でした。いまでは、りっぱなホテルが増えましたけど、そのころ、雲崗賓館は、大同一のホテルでしたからね。彼女は、「どこに行っても、この事業を全力で支持するから」といって、私の手を握って、泣きました。いや、先に泣いたのは、私のほうだったかな。こう振り返ってみても、私は、みんなによくしてもらったんですね。

## NO. 441 3か所のナラ 2007. 12. 07

私たちの霊丘自然植物園で、樹木が急速に育っています。その中心が、リョウトウナラ（遼東櫟）。コナラやミズナラのなかまで、ドングリの木です。自生しているのは、海拔1,000m以上のところですが、それ以下のところにも、よく育っているものがあります。自然に再生してきたもののほかに、自然林から集めた種で苗を育て、敷地内に植え広げています。

大きなものは、樹高10mを超え、胸高直径も20cm近くあります。このころの年輪幅は、5mmはありますので、直径では、年に1cmも太ります。樹高のほうも、50~70cm、ばあいによっては、それ以上伸びます。たとえば、管理棟の近くの苗畑に、2000年春に種を蒔いたものが、1本、残されています。すでに3mを超えています。毎年、ものすごい数の、丸い塊がついて、種かと思う人もあるようですが、あれは虫こぶ=虫えいです。種から育ったものでは、おそらくこれが育ち頭でしょう。

大同県聚楽郷に、600haの土地を借りて、実験林場「カササギの森」を建設中です。実験林場と名づけたのは、できるだけ多くの樹種を、試したかったからです。

いま大同には、緑化にかかわる国家プロジェクトが目白押しです。古いものから順に、三北防護林（大同市北部）、太行山緑化工程（大同市南部）、北京天津風砂源治理工程（主に大同市北部）、首都水資源保護21世紀計画、そして、全国的なプロジェクトでもある「退耕還林」。最後のものは、急傾斜地など、条件の悪いところでの耕作をやめ、森林や草地に返そうという政策です。ところが、一方で、食料の供給に問題がでそうなため、いま、揺れているようですね。

私たちが中国で緑化に協力しているというと、「中国政府が不熱心なのに、どうして？」という人がいるんですけど、それは、誤解です。環境問題全体でみると、危機的な場面をみまですけど、こと緑化に関しては、ちょっとしたものです。ここまで無理する必要はないんじゃないか」と私なんか、思うくらい。世界の人工林のほぼ4分の1が、中国にあるそう。

そのなかで、問題を感じるのは、植えている樹種が、きわめて少ないことです。防護林として植えているのは、最近では3種類のマツが主体。あいだに灌木を混植しますけど、それも、ヤナギハグミ（沙棘=サージ）と、ムレスズメくらい。多様性という問題意識が、ないわけじゃないけど、現実に、育つものが多くないのです。まずは緑で覆って、というときに、ムレスズメだけの、単一植栽も少なくありません。

大同市南部の霊丘県では、マツなどを植えても、そのあいだに、いろんな樹木が、育ってきます。人工植栽のカラマツ林に、シラカンバがはいり、カラマツを追い越した、といったケースもあります。アブラマツの林に、リョウトウナラなどが入り込んでいる場面もみたことがあ

ります。しかし、大同市の北部では、そうしたことが望めません。恒山山脈をはさんで、南と北とではずいぶんちがいます。北にも拠点があればいいと考えて、カササギの森のプランに、行き着きました。

リョウトウナラも、カササギの森に、植えました。

霊丘自然植物園で育てた苗を、2002年春に植えました。もう少し大きくしてからと、私は考えましたが、技術顧問の侯喜さんが、「大同では誰もやったことがないから」といって、早く植えたがりました。枯れはしないで、ちゃんと越冬します。気候には、なんとか耐えられそう。ところが伸びません。植えてから、5年以上になるのに、せいぜい50cmくらいで、低迷しています。それは、ハギ、モクゲンジ、シンジュ、クルミなど、その他の広葉樹もおなじです。どうも、土がやせすぎているんですね。ただ、ハシバミだけは、ちょっと伸びて、今年は実をつけたものがあります。

北部でもう一か所、環境林センターのなかの見本園に、これらの樹種を植えています。ここでも、最初は伸びが悪かったのですが、去年あたりから、急に伸びてきました。リョウトウナラも、大きなものは2.5mくらいに育ってきました。ここはもともと果樹園だったところ。そして、付近の砒務局の職員住宅の生活汚水を、灌漑に用い、富栄養化がすすんでいます。

前号でチラッとふれたように、私の失敗談を書きましょう。どこかでいっしょに飲んだとき、桜井尚武さんから話をききました。農業にとって、雑草は仇のように扱われるけど、森林のばあいは裸地をつくらないのが大事だ、というのです。私は、それを受け売りしました。環境林センターの従業員は、みんな雑草とのたたかいに明け暮れ、夏なんか、女性たちも、まっ黒になります。「苗をおおうようになったら問題だけど、小さい草まで抜く必要はない」といったんですね。「草が生えていたら、上から指導者がきたとき、管理が悪いといって批判されます」というのを、『自然育苗実験区』とでも書いた立て札を立てておけばいい」なんて、説得したんですよ。

少したって、訪れたとき、「高見のせいで、ひどい目にあった」と、みなが声をそろえます。なにごとかと思ったら、あっというまに、草が人の背丈を超え、抜こうにも、抜けないというのです。現場に行ってみると、アカザ、シロザ、ヒユといったものが、ものすごい勢いで茂っています。私が、両手両足で踏ん張っても、抜けないのです。それくらい、あそこの土は肥えています。

というわけで、リョウトウナラの同期生といっても、植えられた場所で、育ちぐあいは、大きく異なります。

明日から1週間ほど、大同です。電話で尋ねると、最高気温7度、最低気温19度、いずれもマイナスです。北緯40度で、市街地でも海拔が1,000mを超えていますので。今回は、現地から、ホットな、じゃない、ブルブルの話題をお送りすることにして、今回は、また、旧聞です。

妙なことですけど、私たちのプロジェクトで、盛大な起工式をもち、りっぱな記念碑を建てたところほど、無残に失敗しました。環境林センターは、大同市の副市長も参加して、起工式こそ、盛大にやりましたけど、記念碑も、看板も、ありませんでした。日本からのツアーがくるときだけ、管理棟の門の上に、「環境林中心」の表示をするのです。それがなんと、色紙を切り抜いて、糊で貼っていました。だから、すぐにダメになります。いまでこそ、シンチュウ板を切り抜いたものを、貼ってますけど。

そのおかげかどうか、わりと順調に発展しました。育てる苗の、種類と数が増えるにしたがって、手狭になってきましたので、数年後に、村にたのんで、6haあまりまで、拡張しました。あいかわらず、無償です。

事件が起こったのは、2000年春です。忘れもしません、3月18日の朝。大同駅から、直接、環境林センターに向かいました。そこに主要メンバーが集まっていて、「たいへんなことが起きている。すぐに結論をださないといけない」というのです。

私たちが借りている以外のところは、依然として、リンゴナシの果樹園でした。ところが品種が古くなって、お金にならないんです。ジャガイモより、値段が安い。そのために、管理もよくない。そこに目をつけて、この土地に買収の話がきたそう。中国では、土地は国有ですが、使用权は売買の対象になります。そのことで、村長はいま太原にでかけており、昼には契約の運び、という話です。

最初は、環境保護施設がくるということだったそうです。調べてわかったのは、コークス工場だったよう。そんなものがきたのでは、5年間かけて整備してきた環境林センターも、水泡に帰します。それだけでなく、この一帯は大同市の近郊農業地帯で、農家は主に野菜を生産しています。そのど真ん中に、コークス工場がきたら、困ったことになります。村の希望としては、代わりに私たちに、使用权を買ってほしい、というものでした。そうすれば、万事まるく治まる、というのです。私がすぐ思い浮かべたのは、前の回でふれた、支樹平さんのことです。私たちには、強力なバックがある、ということでしょう。

とにかく、即断しないといけないのです。いっしょにきていた遠田さんに相談して、「買うしかないだろうな」と思いました。しかし、私たちだけで決めるわけにもいきません。立花吉茂代表のお宅に電話をしたら、たまたま先生がいて、「いまは金利が安いですから、私が借金してもいいですよ」ということでした。うれしかったですね。

この問題で活躍したのは、共青团大同市委員会の副書記だった、郝軍生です。彼の兄が、南郊区の党書記で、トップでしたからね。村のほうにも、そういう事情がありましたから、ほんとに安くしてくれました。20ha の一等地の、20 年間の使用料が、26 万元でした。当時のレートで、340 万円ほど。年で割ると、17 万円です。相場の 10 分の 1 以下でした。

心配だったのは、購入の費用より、それだけの土地を、有効に利用できるかどうか、ということです。一言で 20ha といっても、広いですからね。南北の奥行きは 820m、東西の間口は平均 250m もあります。周囲を一周すると、2km を超えます。施設が大きくなれば、維持費も多くかかりますし……。

そのとき思ったのは、ああ、内的なダイナミズムが働いて、事業が勝手に動き始めたんだな、ということでした。前に立ちふさがって、それを止めることもできるでしょうけど、そうすると、事業の生命力がなくなるかもしれません。ここは、乗るしかないだろうな、と思ったのです。

プラスの面と、マイナスの面が、でてきました。プラスの面は、ここで働く人たちの自覚が高まったことです。それまでは、借地のうえ、しかも、地代を払っていない借地のうえですからね。いつ、終わらないとも、かぎりません。そんなところで、ものごとを長期に考えるのは無理でしょう。

日本から専門家がいて、堆肥をつくるように、口を酸っぱくして注意しました。土を肥やすことをしないで、苗木をつくって外にだしたら、土地にたいして、掠奪的になる、といって。すると、専門家がいるあいだは、そのようにするのです。しかし、帰ってしまうと、途絶えてしまう。無理はないんですね。

ところが、これだけの土地の、20 年間の使用権がつくと、少なくとも、そのあいだは、生活の基盤になりうるわけです。働く姿勢が、うんと積極的なものになりました。堆肥も、近くの乳牛の飼育場から、牛糞を、ダンプで十数台も運んできて、大量につくりました。「自分で自分を養う」といったスローガンが、でてきたほどです。「恒産なきものは恒心なし」といったのは、孟子だそうですね。

いま、日本では非正規雇用が、やたらふえています。とくに、若い世代が、ひどい目にあっていると思います。個々の企業にとっては、生き残りのために、しかたがないように思えるのでしょうけど、日本の今後を考えると、あってはならないことでしょう。

マイナスの面というのは、いうまでもなく、負担が増えたことです。まずは、経済的な負担。村にオンブに抱っここのときは、電気代、水代すら払っていませんでした。しかし、これだけの

土地を占有するとなると、そういうわけにはいきません。電気の変圧器まで、自分で取り付けないといけないんです。

さらに、いろいろと面倒なことがありました。環境林センターの西隣りに、墓地があります。ほんとは墓地ではありません。そこもアンズの果樹園だったのですが、管理が行き届かないあいだに、どんどん墓が侵入したのです。葬列が、敷地内をとおります。時期になると、墓参りの人が、列をつくります。そこまではいいんですけど、以前に紹介したとおり、中国では、お墓参りに、火をつかいます。春先なんか、西の風がきついで、危なくてしかたがありません。門をはさんで対峙することだって、あったんですよ。

で、大同事務所の武春珍所長は、「お金をだして、面倒を買ったようなものです」といって、こぼすこと、こぼすこと。まあ、それまでは、全部、村に頼っていたわけですね。半人前でしたから。一人前になるために、越えなければならないハードルだったのでしょうか。

#### NO. 443 大同冬景色 (1) 2007. 12. 19

北京を経由して、14日の夕刻、大同に着きました。朝10時に関空を発って、その日のうちに、着くのですからずいぶん便利になったものです。北京空港に、くるまで迎えにきてくれた大同事務所の小郭は、ふつうのシャツに、薄いジャケットという、気軽な服装でした。そして、「北京は暖かい！」を連発します。それでも、空港の周囲の、日陰側には、雪があります。数日前に、降ったそう。

それにたいして、私はといえば、山歩き用の、あったか下着に、フリースの中着、上着は、ふとんと見紛うばかりの、ダウンジャケット。まだ、はいていませんけど、スーツケースのなかには、大同で買った、かなりぶ厚い、毛糸のズボン下。足もとは、人工皮革の大きめのブーツに、二重の靴下。とにかく、足が冷たくて困る、というのが、私のトラウマ。同行の事務所の2人も、似たようなもの。

くるまのなかは、暖房がききますから、上着も、靴も脱いで、リラックス。外は、そうとうに寒いのでしょう。フロントガラスはべつですが、助手席の窓は、すぐにくもります。小郭の携帯電話が、なんどもなんども、鳴ります。大同事務所のメンバーから、いまどこかという、問い合わせ。空港から直行しないで、北京の友人のところで、ちょっと打ち合わせをしたから、遅れ気味なんですね。

河北省との境界にある、官庁ダムのあたりで、大きな変化がありました。風力発電の風車が、数多く建っています。最低でも、30基はあるでしょう。同じ道を、逆に通ったのは、ことしの8月下旬でした。そのときは、まったく目につきませんでした。私は、水問題には、関心が強い

ので、官庁ダム付近で、居眠りすることは、まずありません。小郭に確かめると、最近になって、建設されたものだといいます。桑干河—永定河は、太行山脈、大馬群山脈、燕山山脈といった、大きな山脈の、すきまを流れます。いわば、屏風の切れ目。

大同もそうですけど、ここは風口です。すなわち、中国の西北の、砂漠地帯からの、風の吹き出し口。風砂が北京に押し寄せるのをきらって、緑化プロジェクトも、集中してますけど、それよりは、「風力発電をやったほうが、環境にはいいんじゃないの」というのが、私の持論でした。風の強いところは、樹木は成長しにくいけど、風は使い道があるはずです。ことしの9月に訪れた、ウルムチートルファンをあいだには、500基以上の風車がありましたからね。風力発電は、これからも、ふえるでしょう。

その反面、この一帯は、中国でも有数の、石炭産地です。ですから、その石炭をつかって、たくさんの火力発電があります。大同でも、北京・天津に電気を送る、火力発電所を増設中です。そのぶん、風力発電が登板する可能性は、低いと考えていました。ところが、この光景です。中国も、それくらい、環境問題に、気を配り始めたのでしょうか。逆にいえば、石炭による発電に、いろんな原因で、先が見えてきたといっても、いいかもしれません。太陽光利用も、日本より、ずっと積極的ですからね。泊まっているホテルの窓からみえる、周囲の住宅の屋上には、太陽光による温水器が、ズラッと、ならんでいます。へたをすると、この方面で、日本は遅れをとるかもしれません。

最初に休憩をとったのは、河北省張家口市のサービスエリア。夕暮れ時です。まだ半分もいかないし、海拔も600mほどですけど、ほんとに寒い。あわてて、くるまに、もぐりこみました。大同に着いたのは、7時すぎ。総工会の柴京雲副主席と、大同事務所の面々に迎えてもらいました。

翌朝、目を覚まして、外はまっ暗。日の出は、7時50分前後でした。日本と中国との時差は1時間ですが、ここは北京より、西にあるため、よけいに遅れるのです。数日で冬至ですから、いまがいちばん日が短い。

最初に、環境林センターを訪れることにしました。その途中で、文具店に寄り、寒暖計を買いました。何種類もあつかつてますけど、どの2つとして、同じ温度を示しているものはなく、最大で、3度近くも、差があります。私が、「どれが正確だろうか？」というと、大同事務所の魏生学が、「どれも正確ではない」と断言しました。私は、中庸の精神で、もっとも中間的なものを選びました。円形のちょっとしゃれたデザインで、湿度計もついています。28元。

環境林センターには、うっすらと雪がありました。北京と同じ時期に、降ったそう。中庭には、はき集められた雪が、固まっています。少なくとも表面は、凍りついているだろうと、私は考えて、思いっきり、靴で、蹴りつけてみました。ガツン！そういう反作用を、予想してい

たのです。ところが、なんの抵抗もなく、雪は粉になって、舞い散りました。へんな言い方ですけど、水分がぜんぶ飛んでしまったサラサラの乾燥雪という感じ。手で握って、雪の玉をつくらうとしても、すぐに粉になって、玉になりません。

寒暖計を日陰において、気温をはかると、マイナス9度でした。しかし、そんなに寒くは感じません。おそらく、乾燥しているせいでしょう。風がなく、日が照っていれば、おだやかなものです。寒暖計を日向においたら、たちまち、2度になりました。こちらはプラスです。

環境林センターの大きな変化は、温室1棟を閉鎖したことです。石炭価格の高騰に、ついに耐えかねました。昨年、くわしく書きましたが、2000年に1トン60元だったものが、昨年冬には450元になりました。なんと、6年で7.5倍。ことしの冬は550元ほどになっています。つられるように、たいていの物価が、うなぎのぼりです。それについては、機会を改めましょう。

温室は新旧2棟があり、古い方は、石炭をナマ焚きし、その煙を、ほぼ水平につないだ、土管にとおして、暖房していました。煙突を横にしてものを、イメージしてください。新しいほうは、石炭ボイラーでお湯をわかし、それを温室に送って、暖房していました。熱効率も、前者がはるかに上です。で、新しい温室にあったものも、ぜんぶ古い方に集中し、最低限の石炭を炊いて、冬を越えようというのです。

#### NO. 444 大同冬景色 (2) 2007. 12. 25

21日の夜、帰国しました。自宅近くの、JRの駅を降りたとたん、呼吸がラクになった気がしました。空気がきれいなのはもちろん、湿度がとてもありがたい。翌22日は、朝から雨です。中国から帰ってくると、雨にたいする思いがすっかり変わります。正直なところ、冬の大同には、行きたくありません。

困るのは、寒さ以上に、空気のこと。私は、呼吸器系が弱いので、なおさらです。あそこでは、10月から翌年3月まで、雨も雪も、ほとんど降らなくて、すごく乾燥しています。大同で買った湿度計では、屋外も、室内も、30~40%でした。精度の保証はありませんが、いま自宅でみると、湿度は70%以上を示していますので、あたらずとも、遠からず、といったところでしょう。大同で一夜明けると、くちびるがパサパサになりました。この状態が、数日つづくと、ひびが入ります。たばこを吸っていたころは、フィルターが、点々と赤くなったものです。

乾燥のために、静電気もすごいのです。ちょっとしたホテルは、廊下が、じゅうたん敷きです。そのうえを歩いて、ドアのノブに手を伸ばすと、触るまえから、パチッ！ ときますところだと、青白い火花がみえます。肩のあたりまで、痛みが走る。くるまを降りるときもいっ

しょ。いつも通訳をしてくれる、王萍さんと私は、相性がいいのか、そばに寄ったり、握手をしようとしたとたんに、バチッときて、このときは、彼女の痛みのほうがひどいよう。ほかの人とでは、ここまでのことはありません。

ことしの冬は、どういうわけか、静電気は、いつもほどではありませんでした。着ているものは、ことしもいっしょ。そういえば、ホテルの部屋の乾燥が、これまでよりは、和らいでいるよう。なによりの証拠が、洗濯物の乾きが悪いこと。以前は、寝る前に洗濯をして、ろくすっぽ絞らないで、そこらに、ひっかけておけば、かなり厚いものでも、翌朝までに乾きました。ところが今回は、なかなか乾きません。

部屋の乾燥の、最大の原因は、暖房でしょう。屋外の最低気温は、マイナス 20 度前後です。それにたいして、室内の温度は、空調で 20 度前後。湿度が下がるのは、あたりまえです。このたび、乾燥がひどくなかったのは、暖房に、くふうがあるのかもしれませんが、くわしいことは、わかりませんでした。

乾燥以上に困るのは、大気の汚染です。これも、冬がいちばん深刻。第一に、暖房などのために、たくさん火をつかいます。従来は、それも石炭でした。第二に、逆転層ができるのも、大きな原因。地表付近の温度が、上層の気温より、低くなります。そのために、煙が拡散しません。早朝は、そのことが、はっきり目にみえます。煙突からでた煙が、上空に向かわず、むしろ、下のほうに降りてきます。地表付近に、どんよりと、たまるわけです。

大同の市街地は、数年前にくらべ、よくなったと思います。以前ほど、ひどくない。地元の人も、そういいます。石炭のナマ炊きを、やめたおかげでしょう。個人の住宅では、ガスが利用されるようになりました。かなりの割合で、電磁調理器も、使われています。電圧が 220 ボルトですから、効果も悪くないよう。かわりに、くるまによる汚染は深刻化しましたが。

郊外や、農村部の県城は、ひどくなるいっぽう。人口がふえ、1 人あたりのエネルギー使用量もふえ、対策は、まだ追いつきません。石炭輸送をはじめとする、大型トラック、トレーラーの排気ガスも、もちろん関係します。今回は、霊丘県城を、朝早く、少し歩きましたが、8 時前はまだしも、それを過ぎると、まさに、オンドルか煙突のなか、という感じでした。同行の会田さんは、喉だけじゃなく、涙目をして、目を開けていられませんといって、嘆きます。

12 月 19 日、ちょっとの時間をつかって、南郊区の、七峰山に登ることにしました。以前から知っていましたが、行ったことはありません。私は、登山のつもりだったんですけど、この山頂には、テレビ放送用のアンテナが集中しており、くるまで、そこまで上がれました。その途中の変化が、典型的だったのです。市内はそれほどではなかったのに、郊外に向かうほど、大気汚染がひどくなります。霧も発生しているようで、前方の視界が悪くなります。スモッグですね。

会田さんが、一眼レフのシャッターを切りつづけると、運転手の小郭が、口をはさみます。「あなたが、その写真をブログに載せると、大同市の印象が、悪くなるって、公安が、逮捕するかもしれませんよ」。もちろん、冗談です。でも、ホントに逮捕されたら、彼女のことですから、「事務局会田の中国獄中日記」といったブログをはじめ、読者は、ずっとふえるかもしれません。

七峰山に近づくにつれて、空気はいくらか、よくなりましたけど、モクモクと煙をあげる、工場もめだってきました。大部分が、セメント工場です。セメントを、中国語では、「水泥」といいます。七峰山は、大同盆地の西にあります。基盤は、石灰岩なんですね。それと、大同の石炭をつかって、水泥を生産しています。現在の中国は、膨大な量の水泥が必要です。水泥工場の周囲には、ブドウ畑が多いんです。ここの特産は、白ブドウだと、いわれます。新疆の白ブドウと、混線してはだめですよ。水泥の粉がくっついて、ブドウが白くなるというのです。

七峰山に登ったのは、大同盆地のほうからではありません。七峰山に、トンネルができました。数年前のことで、長さが 2200m ほどあります。それを抜けて、山の西側にでると、山頂まで、くるまで行ける道がありました。ただし、トンネルを抜けると、雪国ならぬ、農村地帯になり、空気は、クリアになりました。そこの光景がすごかったんですけど、それはべつの機会に。

#### NO. 445 消えた過積載トレーラー 2007. 12. 28

世話人の巽良生さんが、11月中旬に、知らせてくれました。北京市、天津市、河北省、山西省、内蒙古自治区の交通部門が、この地区内の、すべての道路で、55 トン以上の貨物車の通行禁止を決定し、即日、施行したということです。

違反がみつかると、車両の持ち主には罰金 3 万元。運転手は 30%未満の過積載で 2 点、30%以上は 6 点の違反点数がつき、12 点を超えると、免許停止になります。そのほかに、積載量を増やすための改造をおこなった企業なども、処罰の対象となるそう。

大同に電話したついでに、聞いてみると、決定は事実だけど、取り締まりはそんなに厳重ではない、という返事でした。私の印象は、ああ、まただな、というもの。過積載禁止のおふれは、しょっちゅう出ていますが、守られたためしが無い。巽さんにも、そのように率直に伝えました。

この地域での石炭トレーラーは、すさまじいですからね。北欧を拠点とする企業グループと中国のトラックメーカーが合弁でつくった大型トレーラーは、2 両連結で、180 トンは積めると

いうのです。みるたびに私が、「あれが 180 トンか？」ときくと、運転手の小郭は、「最低でも……」とつけたして、「実際は 200 トンはつんでるだろう」といいます。

60 万円ほどするんだそうですけど、小郭は、「自分の手にはいたら、半年でもとをとる」。彼は以前、石炭トラックの運転手をしていました。そのころは、こんな大きいものはなかったのです。これほどのものは、そうたくさん走ってはいませんが、130～150 トンのものは、ざらです。

そのために、何度修理をしても、道路はたちまち壊れてしまいますし、橋が落ちて、通行不能になることも、しょっちゅうだったのです。この状態を野放しにすることはできませんが、しかし、いきなり、55 トン以下にかぎるといっても、そんなことが可能でしょうか。ちょっと信じられません。

この 12 月に大同に行って、ほんとにびっくりしましたよ。大型の石炭トレーラーが、消えたんですよ。たまには、180 トンクラスのものにであいましたけど、ほんとに、たまにです。1 週間の滞在中に、数台をみたくらい。それ以下のトレーラー、トラックも、積み荷の量が、うんと少ないのです。以前は荷台のうえに、山盛りに盛り上げていたのに、いまは荷台のうえの線まで、かなり余裕があります。おそらく半分以下でしょう。高速道路なんかにはこぼれ落ちていた石炭も、ほとんどなくなってしまいました。あちこちに、「55 トン以下」のスローガンがみられます。

やれば、できるんですね。やるときは、やるんですね。ほんとに、びっくりしましたよ。完全に、とはいえません。ぶり返さないとも、かぎりません。いまでも、「夜になるとでてくるよ」という人もいます。たとえそうでも、やればできることが明らかになっただけでも、私はすごいと思います。

ふしぎなことがあります。では、あのトレーラーは、どこにいったのでしょうか？これは私の推測ですが、おそらく、前掲の 5 つの市・省・自治区以外のところにいったんでしょうね。いまは、陝西省、四川省あたりを、爆走しているかもしれません。

日本アイ・ビー・エムの広報誌「無限大」の 2007 年冬号が、「水飢饉の世紀」を特集しています。中国の水と緑の問題について、私のインタビュー記事も載っています。そのほかの記事も力作が多いので、読んでください。ウェブページでもみることができます。

<http://www-06.ibm.com/jp/ibm/mugendai/no122/index.html>

ことしはこの号でおしまいです。みなさま、よいお年を！

正月そうそう、こんな題をみて、ギョッとされたかたもあるかもしれません。振りかぶった議論をしないのが、この「黄土高原だより」の、主旨なんですけどね。

昨年10月、大同から、大同市総工会の訪日研修を受け入れました。会員をはじめ、たくさんのかたのご協力をいただきました。遅ればせながら、心より、感謝いたします。昨年末、事務局の3人で、大同を訪れたとき、そのメンバーに、感想をききました。おもしろかったのは、やっぱり、柴京雲副主席でした。地元では、名のおった芸術家で、観察の視点がユニークで、鋭敏ですし、表現力もあります。

いちばんの印象は、日本のインフラの先進性だそう。それをとくに感じたのは、大阪市で見学した清掃工場と、汚水処理施設だったそうです。中国の発展も、最近はめざましくて、ずいぶんと日本に接近したと思っていたけど、とんでもない、その隔たりは大きい、というのです。すぐに目につくところより、陰のところに、大きな違いを発見したようです。

緑化にかんする印象は、残念ながら、順位がずっとあと。無理ないのは、彼の来日は、2日あまり遅れたんですね。芸能の全国コンテストに、彼がノミネートされ、それに参加したためです。結果として、グランプリを獲得したそうですから、ここは、お祝いすべきでしょう。彼が不在のあいだに、緑化関係の視察が、集中していました。でも、それだけではありません。以前に比べると、よくなったんですけど、緑化や、環境の分野は、意識のうえでも、後回しだと思います。

それから、日本人のまじめさ、勤勉性、人の素質、民族の底力……。日本にきて感じた優点を、いくつもいくつも彼はあげました。それはどうかな？ と思うところもあるんですけど、まあ、よその国に最初にいって、そこの優点を発見するのは、実りのあることですし、いい性格だといっているでしょう。

そのあとで、はじまりました。日本では、不自由なことが、多すぎる、といいます。たとえば、といって最初に例をあげたのは、禁煙のことでしたけど、彼は、酒もタバコもやりませんので、個人的な不便さではありません。彼らが来日したころは、実施前でしたけど、入国のさいに、指紋を採られる、なんてことを体験してたら、その印象は、もっと、深かったでしょうね。私も、報道では知ってましたけど、帰国のさいに、入国審査のところで、装置を目にして、日本はこれでまた、印象を悪くするな、と思いましたよ。

総工会の幹部数人は、日本のあと、韓国経由で帰りました。柴京雲の印象は、韓国は、日本と中国の中間、というものでした。不自由さからいうと、日本ほどではないけど、それに次ぐ、ということです。そして「中国がいちばん自由だ」というんですよ。おそらくそうでしょうね、それには私も、同意します。一定の地位と、お金があれば、という条件つきですけど。

なんてことをいえば、じゃあ、人権活動家が逮捕されたとか、拘禁されたとか、それはどうなんだ！という反論が、当然あるでしょう。そうなんですけど、不幸か幸か、そういうことでがんばる人は、数からいえば、多くないですからね。大多数の中国人は、不自由と感じていないかもしれない。職場や街頭で、ガンガン主張しあっている光景は、日本では、ちょっとみられないほどです。

日本の不自由さについても、私は同意せざるをえません。中国と日本とを、往復しながら、日本の窮屈さを、身をもって、実感しています。息苦しいまでに、といってもいいでしょう。すみから、すみまで、網の目が張りめぐらされていて、そこから脱げだせない。私が、そう感じるだけじゃないですよ。話題をここにもっていくと、地位もお金もある人も、たいていが同意してくれます。海外から帰ってくると、とくに、そのことを実感するといつて。

ニセ表示とか、不正とかが、どこかであると、マスコミと同調して、おおいにそれを罵りますけど、つぎに、それが自分（ないしは自分の属する企業・団体）に回ってこないか、心配している。そんなものでしょうね。良い子・悪い子の判断基準を、もうちょっと甘くすれば、みんな良い子になって、気持ちよく暮らせるんでしょにね。そここのところの「あそび」「よゆう」が、なくなってしまった。

グローバル化がもてはやされ、成果主義が取り入れられました。成果主義といえば、成果を評価するものだと思ったら、それより先に、しくじりや、まちがいが、やりだまにあげられるんですね。とにかく、みんな、失敗が怖い。日本国内にあって、環境分野の研究機関で、英語だけをつかうことにし、雑談のときも日本語は禁止、なんてところもあるそうですし。ジョーダンだと思われるでしょうけど、ほんとだそうです。またまた、新年にふさわしくない、グチになってしまいました。

それにしても、自由こそ価値であるはずの、資本主義の日本が、いつのまにか、中国人の目からみても、不自由な国に、なってしまったんですね。逆に、平等を優先するはずの、社会主義・中国が、とんでもない、格差社会になってしまった。勝ち組、負け組に分裂し、最近では格差が開きつつあるといつても、まだまだ、日本のほうが、ずっと平等ですものね。

#### NO. 447 信頼 2008. 01. 16

昨年12月に、大同にいったときのことで。夕刻、私たちがホテルに着くと、出迎えの武春珍所長が、「明日の朝から、すぐに相談したいことがあります」と、せかしました。「それはだめです。プロジェクトの現場をみるのが先。あしたは、いくつかの拠点をみて回ります」と、私は答えました。現場をみないことには、私の頭は、中国モードになりません。

それに、こういうときの話は、ろくなことではありません。私が大同にいるときは、どんな問題でも、こと細かに話してくれます。そんなこと、どうでもいいよ、と私が思っても、彼女は、熱心に話しかけます。私を、教育するつもりなんでしょうね。ところが、私が日本にいるときは、困ったことが起きて、私たちには知らさないで、自分たちで、解決しようとしています。心配をかけたくない、と思うのでしょうか。遠くにいて、なにもできないのに、やきもきするのは、たしかに、つらいものがあります。それに、なにかあると、すぐに駆けつけた前科がありますから、そこまでさせたくない、とも思うのでしょうか。

その翌々日、大同事務所できいた話は、たいへんなこと、でした。日本の外務省草の根無償資金協力のプロジェクトを、大同市総工会の名義で、北京の日本大使館に申請しました。実際のしごとは、緑色地球ネットワーク大同事務所が担当します。大同事務所は、大同市総工会に属しており、もちろん、こういうことに経験があります。事業の内容は、大同県周士庄鎮の、三十里鋪村に、中心小学校を、ひとつ建てます。この村だけでなく、周囲の小さな村からも、こどもたちが集まって、勉強するわけです。教室のほかに、寄宿舎も必要です。小さな問題はありましたが、外壁の塗装を残して、ほとんど完成。

もうひとつは、同じ鎮の、遇駕山村に、井戸を掘ります。この村は、2000年に、7県の21の村で、私たちが調査をしたとき、1人1日の水使用量が、わずか15.6Lで、最低の村でした。日本大使館の公使だった、杉本信行さんが視察し、中国の水問題に、つよい印象をもったのも、ここの村です。彼は帰ってからすぐに、中国の水にかんするレポートをまとめました。杉本さんの遺著『大地の咆哮』（PHP 研究所）にも、このレポートのことが、書かれています。そんな事情で、私たちは、井戸を掘りたかったのです。杉本さんが大同にきたのは、夜行列車できて、その晩の夜行で帰るほんとの強行軍で、1日たらずの滞在でしたけど、大同の人たちは、彼の手柄を、懐かしんでいます。

着工前の探査では、地下130mのところに、水脈があるようです。これくらいの深さなら、機械式の「上総掘り」のようなやり方で、井戸を掘ります。ワイヤーでつり下げた、直径30cm、長さ2.5mくらいの、鉄製の大きなモリを上下させて、少しずつ、掘りすすむわけです。掘った穴に、水を注ぎこみ、ドロドロの状態にして、細長いバケツで、泥を汲み出します。それを、交互に、繰り返すわけです。単純で、原始的なやり方ですけど、安価ですみます。

ところが、想定外のことが、連続しました。まずは、60mほどのところに、固い岩盤がありました。苦勞して、それを突破したんですよ。すると、こんどは、やわらかい砂の層があって、すぐに崩れ落ちるので、それ以上、掘れなくなってしまった。スチールの太いパイプをいれて、そこは越えたんですけど、100mほどのところで、にっちもさっちもいかなかった。水脈には、遠いわけです。

簡単には、退却もできません。技術者たちは、水は確実にある、といました。村の人たち

の、期待は高まります。水道用に、圧をあげるため、水道塔（タンク）が必要ですけど、冬になって、凍結すると、レンガを積む、セメントを練れません。確実に水はでるんだから、水道塔を先に建てておこう、そういうことになったんですね。それも含めて、かなりのお金をつかいました。

そのうえ、日本大使館との契約では、井戸を掘って、仮に水がでなかったときは、でるまで掘るといふ、誓約書を求められたそう。誰もサインしたくありませんから、けっきょく、武春珍がしました。彼女は、夜も眠れなくなった、というんですけど、その気持ちはわかりますよ。

関係者に集まってもらって、進退を協議したそうです。鎮の党書記は、大同県の青年団書記だった謝志海で、古くからの友人ですけど、一部の費用負担を承諾したそう。県の水務局長は、私たちの采涼山プロジェクトやカササギの森のある聚楽郷の、こないだまで党書記だった張春さんで、彼も協力を約束しました。それから、ボーリングによる、井戸掘りの設備をもつ、「打井隊」の幹部のひとりが、その遇駕山村の出身で、母親は、いまも村で暮らしているそう。それで、打井隊の協力もえられることになって、工事再開が、決まりました。

失敗した井戸穴から、数メートル離れたところで、こんどは、ボーリングによる井戸掘りが、はじまりました。特殊鋼のドリルを回転させて、掘っていくわけです。私たちが大同に着いたのは、そんなときでした。武春珍はまだ、心配で、心配で、たまらなかったのです。責任が、自分にかかっていますし、さらに、周囲の人を、巻き込んだわけですから。「タカミサンに話したら、タカミサンの問題に変わるから」と、彼女はいうんですけど、解決まで私に期待してるわけじゃありません。苦悩を共有する人間がいたら、ラクになるのでしょう。それくらいの信頼は、私に寄せているんでしょうね。何度も何度も、困難にあいましたけど、逃げないで、私も、留まっているわけですから。

これで水がでたら、一編の小説になるな、と私は思いました。ビデオカメラを回していたら、いいドキュメンタリーになったでしょう。

その日の午後、現場の村に行きました。鎮の党書記も、駆けつけてきました。146mまで掘っていて、すでに、水脈にあたったそうです。ホッとしました。でも、最後の結果がでるまで、安心できないのが、ここでのしごと。「地下のことは、ほんとにわからないんですから、今後は、井戸に手をだすのは、やめましょう」と、彼女はいいます。その気持ちは、よくわかりますよ。村の人の歓喜をみたら、また変わるかもしれませんけど。

それから、順調とはいかなかったようです。もう少し、掘っておこうとしたところ、機械が故障したんだそう。気になって、1月9日に電話で問い合わせると、「おそらく、だいじょうぶでしょう」といっていました。夕方になって、むこうから電話がかかってきて、「水がでました！」とのこと。うれしいというより、ホッとしたり、というところでしょうね。こういうこと

を乗り越えて、人は強くなります。

## NO. 448 交通事情の変遷 2008. 01. 23

【おことわり】この原稿は大阪府日中経済交流協会の機関誌『上海経済交流』の NO. 89 のために書いたものです。

大同に私が通いだしてから 16 年が過ぎました。変わったこと変わらないことさまざまですが、変わったことの最たるものが交通と通信です。今回は交通事情を振り返ってみましょう。

### ■自動車は汽車より速い

まずは北京から大同への交通。以前は主として列車で、たいていは夜行でした。夜の 11 時前に北京駅を出発し、大同到着は翌朝の 7 時前。鉄道距離は 370km ほどですからゆっくりです。北京の海拔が 50m 前後なのに、大同のそれは 1,040m ほど。途中の山越えにはスイッチバックもあり、夜中に目を覚ますと逆方向に走っていて驚いたことがあります。

冬の夜は冷えこみ、外気はマイナス 30 度近く。それなのに暖房の効きが悪いうえに窓がきちんと閉まらず、タオルをはさんで風を防いだことがあります。首から肩にかけてカチンカチンに凍りました。その後、車両は新しくなり、シーツや毛布もきれいになって快適です。

鉄道は京包線(北京－包頭)と大秦線(大同－秦皇島)があります。後者はもともと石炭輸送の専用線でしたが、客運にも使われるようになり、両方の最短路線をつなぐことで時間が短縮されました。昼間の列車なら 5 時間ちょっと。

大きな変化が北京西駅の開業でした。それまでの北京駅は手狭なうえに、通路に寝ている人、人でたいへんでした。踏んづけちゃいけない、迷子をだしちゃいけないと緊張しました。

北京 - 大同の高速道路が全線開通したのは 2001 年の年末です。開通当初は快適で運転手たちは「2 時間半だった」「おれは 2 時間 15 分だ」といって記録作りに挑戦しました。危なかつしくて、年配の運転手を探してもらったものです。

北京市内から八達嶺までの高速道路は早くからありましたが、その先は国道 110 号線と 109 号線を行くしかなく、渋滞も多くて使えなかったのです。最近の高速道路は 100 t も積んだ石炭トラックが増え、とくに大同→北京方向は路面が荒れ、渋滞がひどくて、時間の計算ができなくなりました。

昨年、大同空港が完成しました。いまのところ北京、上海、広州とのあいだで週 3 往復。上

海、広州は時間短縮効果が大きいのですが、北京はさほどでもありません。乗客も少なく、いつまでつづくか心配です。

#### ■道路を拡幅しても朝夕は渋滞

市内の交通も大きく変化しました。1992年ごろは目抜き通りの迎賓路を馬車が通っていました。車も少なく、タクシーとなると2つほどのホテルで数台が客待ちするだけ。ノーメーターで料金は交渉しだい、言い値は20元です。「高すぎる」というと「じゃあ、乗るな」。古い車が多く、カーブで突然ドアが開いて振り落とされそうになったことも。

ところがいまや朝夕の通勤時間は大渋滞です。数年をかけて中心部の道路をすべて拡幅しました。日本ではムリでしょうけど、土地は国有の中国ですから、両側の建物をあつというまに壊して、道を広げたのです。それでも渋滞は解消しません。

大同ではこんな小話がありました。「自動車は汽車より速い。自転車は自動車より強い」前半についてはすでに書きました。後半は、自転車が何台か横に並んで走っていると自動車は前に出ることができないという意味。自転車だけじゃない、歩行者も悠然と車道を歩きますからね。私たちの運転手はそれをみながら「中国人不怕死」（中国人は死を恐れない）と言いますので、それを受けて私は「排除万難一定要死！」（万難を排して必ず死んでやる）と叫びます。

#### ■新農村建設で村の道まで舗装

農村の道路もずいぶん変わりました。最初のころは大同市内から渾源の県城に行くのさえたいへんでした。この道路は大同一五台山―太原を結ぶ幹線道路ですが、基礎はいいかげん、舗装も薄いためにすぐ壊れます。雨が降るとぬかるんでバスは動けなくなります。ボランティアツアー参加者も降りてバスを押ししましたよ。70kmほどの行程に何か所もありました。

龍首山の峠越えが難所で、つづらおりの急な坂道を上り下りします。エンジンやブレーキを焼いたトラックが道端に連なり、ハンドルを誤って谷にダイブした車が名物でした。しかし、この峠からみる黄土高原の典型的な農村がまさに絶景！外国人は必ずバスを止め、「これをみただけで来た甲斐がありましたよ」と話す人がいたくらい。

ところが数年前、この道はつけ替えられました。山を削り谷を埋めて距離も時間も大幅に短縮されました。全線が拡幅され、舗装もしっかりしたものに改められました。へたをすると3～4時間もかかった行程が1時間ちょっとになったのです。

でも「修路」のあいだは地獄です。日本のように片側ずつ補修するなんて面倒なことはやりません。工事の予告や迂回路の設定もなし。突然に土盛りで道路がブロックされます。それも複数の道路が一斉に。2004年の夏、靈丘県は陸の孤島になりました。

大きな道路から順々に良くなりましたが、村への道路は取り残されました。貧しい小さな村へ通う道ほど。私たちの協力対象はそういう村ですので、ほんとに困りました。雨が降ると黄土の道はグリスを流したよう。横に深さ 100m の浸食谷が口を開けていたら、ツアーを乗せたバスは通れません。それが最終的に変わったのは数年前からの新農村建設です。村までの道がコンクリートで固められ、村のなかの道路も舗装されました。「公路暢通加快發展！」といったスローガンがあちこちで見られます。

#### ■石炭トレーラーの大渋滞

それで万々歳かというところはいきません。大同は中国最大の石炭の街です。国有の大炭鉱は鉄道の引き込み線があって貨車輸送中心ですが、地方炭鉱はトレーラーによる輸送が多いのです。これがすごいんですね。私が数字をあげても日本人には信じてもらえないんですけど、2両連結で 150 t 以上積みます。なかには 180 t 以上のものさえも。

車の能力を絶対的に超えていますから、上り坂ではエンジンがあえぎ、下り坂ではブレーキを焼きます。故障がすごく多くて道路の片側をふさぎます。譲り合いなんて別世界のこと、運転手としては 50cm でも前進あるのみ。前方が渋滞していると車は前に進めませんが、幸い反対車線に車がきません。先を争ってそこに乗り入れます。渋滞の反対側でも同じことが起こります。両側の車線で車同士が角突き合わせるんですけど、そのころにはなにが原因だったかわからなくなります。公安もやってきますけど、たいていはあきらめ顔。

渋滞が本格化すると以前は何日もつづいたそうですけど、最近は進歩してせいぜい半日です。渋滞になると付近の農民なんかがインスタントラーメンとポットのお湯、ゆで卵などをもって売りにきます。通常の何倍もしますけど、腹が減るとよけいにイライラしますしね。路肩を歩いてようすを見に行く人がいますが、私はお薦めしません。渋滞が長くなると、お腹もすくけど、反対の現象も起こります。路肩にウ〇コが並んでいることがよくあります。

「道路をよくするのもいいけど、交通マナーの向上がもっと大事じゃないか」なんて私がいうと、「人をぜんぶ入れ換えないとだめだよ」なんて答えが返ってきます。

2007 年の 11 月中旬、「北京・天津・河北・山西・内蒙古の 5 省市区の交通部門は同地域内における 55 t を超えるトラックの走行を禁止する通知を連名で発表、即日施行した」というニュースが入りました。違反した車の持ち主には 3 万元の罰金、運転手には違反点数がつき、12 点になると免許停止になるそう。検問所をたくさんつくったそうです。事故が多いし、橋が落ちることも少なくないからです。私もよくみました。

一挙にこんなことが可能でしょうか。私はちょっと信じられません。大同の友人に電話できくと、「通知があったのは事実だけど、いまのところ取り締まりは厳しくない」ということです。

【注】最後のところ、55 t 以下への制限について、私は懐疑的に書いていますが、昨年 12 月に大同を訪れたとき、かなりの程度にそれが実現していて、私は驚きました。それについてはこの通信の第 445 号で報告しているとおりです。

#### NO. 449 耕して天に至る 2008. 01. 28

この正月に、飛鳥の石舞台を訪れました。蘇我馬子の墓、というのが有力な説だそう。この季節ですから、訪れる人は多くないのですが、それでも「すごーい！」という声が、飛び交います。それで、こちらは、だんだん白ける。中国で、類似の陵墓をみてしまったら、しかたがありません。歴史、規模、権力の迫力、ケタがちがいます。

話は変わって。私の友人に、棚田の魅力にとりつかれた人がいます。イネ作りに挑戦し、四季をとおして、撮影に通います。でも、これも、スケールからいうと、中国のほうが、圧倒的にすごいですね。

昨年 12 月、大同を訪れたとき、七峰山を訪れました。大同市街地の南西にあり、標高 1, 714m。この通信の、NO. 444「大同冬景色 (2)」で、「トンネルを抜けると……そこからの景色がすごかった」と書きました。文字どおり「耕して天に至る」なんですよ。そのような光景は、黄土高原では、ふつうにみられますが、ここは、そのなかでも、特別でした。今回は、ぜひとも、写真を見てもらいたいので、この通信の、ブログ版に、写真をつけます。

このような光景をみると、日本からきた人や、中国の都会からきた人は、みな、「中国は広いのに、どうしてここまで？」といます。そのとおり、中国は広いのです。面積は 960 万平方キロもあって、日本の国土の 26 倍です。でも、中国では、海拔 500m 以下のところが、国土の 17% であるのにたいし、海拔 5, 000m 以上のところが、19% もあるのだそう。人の住めないところ、耕作に適さないところも、砂漠をはじめ、広大にあるわけです。

その結果、中国の耕地面積は、世界の 7% しかないそうです。人口は世界の 22%。世界の耕地の 7% で、世界の人口の 22% を養っているわけです。少し古い数字ですが、大きくは変わっていないでしょう。そこから、このような光景も生まれるわけです。

でも、このような農村も、一様ではありません。さまざまな農村を、くりかえし訪れるなかで、私は、「お皿の構造」なんてことに、思い至りました。黄土高原は、平たい土地ではありません。高いところもあれば、比較的、低いところもあります。そういうところに、雨がふると、水は、下へ下へ、皿の底へと、流れ下ります。地下水も、皿の底に、集まっています。ここでは、井戸を掘って、灌漑することも可能なわけです。また、雨水は、土をも、お皿の底に運びます。お皿の底では、水と土に、相対的に恵まれるわけです。

逆に、お皿の縁にあたる、高所の村では、降った雨も、そこに留まることがありません。井戸を掘ろうと思っても、水脈まで最低百メートルはあります。資金をつくるのは、容易ではありません。仮に井戸を掘っても、生活用水がせいっぱいで、灌漑までは、とても回りません。

畑の土も、流されるばかりです。そのような畑を、「三跑田」といいます。跑（パオ）は、「逃げる」という意味。田は、日本でいう「畑」。「畑」は日本で作られた和字で、中国にはありません。つまり、3つが逃げる畑ということで、雨のたびに、水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げる、というわけです。

水と土の多寡が、人間活動の限界を決めます。ものすごく、わかりやすい原理ですね。水が乏しく、土のやせた、高所の村ほど、貧しくなります。こちらは、絶対的に、貧しいのです。そして、村の規模が小さく、人が少ないのがふつうです。近年は、若い人はみな、外に出てしまっ、老人だけが残されていることも、少なくありません。農家一戸あたりの耕地面積は、その結果、広いのです。生産性が低いので、広くなければ、生きていけません。

その一方、高所の村では、ウマやウシ、ロバ、ラバなど、大家畜を飼うのが困難です。資金がありませんし、それを解決したとしても、飼料が不足します。ここでの家畜は、ヒツジやヤギ、ニワトリといったところで、せいぜいがブタ。農耕につかうことはできません。ですから、農作業は、すべて人力に頼ります。広い畑を、クワ一本で、耕すわけです。畑が広いぶん、作業がたいへんで、しかも、収穫は少ない。

そのような村の現実にあふれると、たいていの人、「条件のいい、低いところの村に移ればいい」といいます。私もそう考えていました。ところが、低いところの村は、人口が集中していて、農家1戸あたりの耕地面積は、多くありません。ほかからの「移民」を受け入れようにも、土地の余裕がありません。大同の農村でも、「生態移民」がとりくまれています。必ずしも順調にすすんでいないのは、根本に、そのような問題が、存在するからでしょう。

それにしても、この段々畑、きれいですね。どこまでいっても、段々畑がつづきます。私はいま、自分のパソコンの、デスクトップにしています。よそからきた人が、その光景に感動するようなところは、住んでいる人の、暮らしにとっては、過酷な環境でしょうね。程度の差こそあれ、日本の棚田も、同じでしょう。

#### NO. 450 大同市北部の自然林 2008. 02. 04

中国の南部が、凍りついているようです。ふだん暖かいところで、備えがないだけに、ほんとに、たいへんでしょう。かなりの死者もでたようです。ことしは2月7日が春節（旧正月）

で、地方から出稼ぎにきている人たちの、帰郷シーズンなのに、足止めをくらっているそう。それが千万人単位であることに、中国を感じます。

大同への電話のついでに、きいてみると、最低気温が、氷点下 30 度前後、最高気温が、氷点下 16 度、ということでした。歴史上の最低気温に、迫っているようです。こちらは、寒さには慣れっこですが、石炭価格の急上昇で、暖房の温度も、低めになっていて、そのために、寒いのだそうです。

この「黄土高原だより」でも、大同市最南部の靈丘県に、いくつもの自然林があることを、紹介してきました。ナラ、カエデ、カバノキ、シナノキ、トネリコ、クルミなど、落葉広葉樹が中心です。原生林ではもちろんなく、人による破壊のあとに、再生してきたものです。

ところが、大同市の北部では、このような自然林は、なかなか、みつかりませんでした。ほとんど、あきらめかけていたところ、大同事務所の技術顧問、いまは亡き、侯喜さんが、大同県、陽高県、渾源県、広靈県という、4つの県の境界のところで、森林が再生しつつあることを教えてくれました。六稜山という山で、山頂は 2,375m、その北面です。「樺林背林場」として、保護されていることもわかりました。靈丘の自然林は、みな、くるまの入れる道路から、遠く離れているために、アクセスがたいへんですが、ここは、道路のすぐそばで、便利です。

森林が再生しつつあるところは、海拔が 1,600m 以上のところ。靈丘で中心になっているリョウトウナラは、ここにはあまりありません。中心は、名前のとおり、シラカンバです。それから、カラマツや、トウヒもはいています。最終的には、トウヒ林になるであろうことを、以前に、書いたことがあります。

ところが、ていねいにみると、そのほかに、ミズキ、ナナカマド、ヤマナラシをはじめ、けっこういろんな樹種が生えています。そして、林縁には、高山植物が花を咲かせます。めだつのは、レイジンソウ、オダマキ、マイヅルソウなど。ギョウジャニンニクもあったので、靈丘自然植物園まで持ち帰ったところ、「山蒜だ。ここにもたくさんある」と言われました。樹木や草の種類は、ひよっとすると、靈丘の自然林より、多いかもしれません。昨年夏、遠田宏さん、桜井尚武さん、前中久行さんといった専門家といっしょに訪れたんですけど、この数年で、ずっと育ってきた印象でした。

実験林場「カササギの森」の中央部に、谷があり、くるまの走れる道になっています。というより、雨が降って、水が流れるときは川、人やくるまが通るときは、道です。

よけいなことですが、この正月に、NHK の「関口知宏の中国鉄道旅行」という番組が、大同周辺のことをとりあげました。石炭トラックの大渋滞があり、その一部が、河底を歩いていくようすがありました。私の友人が、びっくりしたようすで、知らせてくれましたけど、しばら

くまえまでは、しょっちゅう体験したことです。黄土の地道は、水を含んだら、グリスのようになって、とても走れませんけど、河底は、砂利分が多いので、むしろ安全なのです。

谷底の道を、8kmほど、さかのぼると、麻地溝という、村があります。途中にも、いくつか、村の跡がありますが、人は住んでいないよう。麻地溝の名は、大同では、よく知られています。このヒツジが、いちばんおいしいというのです。谷には、たくさん薬草が生えていて、それを食べているからだといえます。シロネをはじめ、ハーブが多いのは事実です。

数軒の家があり、ヒツジの放牧で暮らしています。現在では、春から秋まではここに住み、冬は、下の村におりるのだそうです。村に近づくと、ヒツジの糞がぶ厚くたまっていて、臭いが、強烈です。実験果樹園「かけはしの森」の建設にあたって、ここから、ヒツジの糞を買って、運んだそう。エサがエサですから、効果も大きいかもしれない？

話を、本筋に戻します。その麻地溝村から、少し下ったところに、シラカンバが自生していることは、以前から、知っていました。樹高2mほどのものを、抜いて帰って、カササギの森に植えたことがあります。ところが、昨年夏、さらに奥には行って、びっくりしました。かなりの勢いで、シラカンバが、広がっているのです。そろそろ、林とっていいだけの、樹木の大きさと、広さを、もってきています。川筋を中心にポプラも混じっていますが、大部分はシラカンバ。その近くに、村の跡がありますが、いつのころかに、なくなったようです。人がいなくなって、森林が再生するのは、ここも同じです。

霊丘で育てた、リョウトウナラの苗を、カササギの森に植えても、枯れはしませんが、育ちもしません。植えてから5年もたつのに、50cmほど。土がやせているためでしょう。このシラカンバの林床は、土が黒くなり、かなり肥えてきています。春になったら、試しに、リョウトウナラを植えてみたいものです。

昨年の12月、大同に行ったとき、大同の市街地の南西にある、七峰山に登りました。登山のつもりで、靴まで用意したのに、実際は、山頂まで、自動車道がありました。山頂に、テレビ放送の、アンテナ設備があるためです。その周囲で、やはり植生が、再生しつつあります。喬木は、リョウトウナラです。でも、まだ、大きいものでも、3~4mくらい。風が強いせいか、樹形は、あまりよくありません。何種類かの、灌木もはえていますが、冬枯れしていることもあって、樹種はわかりません。この山の標高は、1,714mです。緑の時期に、調査したいと思いません。

まだまだ、点でしかありませんが、大同市の北部でも、このように、森林が再生しつつあるところがあります。これが、つながっていくと、おもしろいんですけどね。

いま、心配なのは、石炭の値上がりが、つづいていることです。1tあたり500元を超え、所

によっては600元にもなっています。2000年には60元だったそうですから、7年で10倍近く。これ以上高くなると、農村では、買えなくなりそうです。そうすると、山にはいる人が、ふえるでしょうね。木を伐って、燃料にするわけ。タバコの火の不始末、といった問題もあり、林業関係者は、心配しています。国際的な原油高とかけて、山火事の心配、と解く。「風が吹けば桶屋がもうかる」ような話です。

## NO. 451 腐葉土をつくる 2008. 2. 12

昨年、「環境を考える経済人の会」の寄付講座が、法政大学で実施されました。著名な方たちにまじって、私も11月にお話をしました。「NGOの草の根環境協力：中国黄土高原で木を植え続けて」というテーマ。そのあと、受講生の感想文が、250枚近くもとどいて、びっくり！みんな、熱心にきいてくれてるんですね。ありがたいことです。そのときのお話が、文章になって、主催者のウェブページに掲載されました。

<http://www.zeroemission.co.jp/B-LIFE/SFC/index07.html>

スライドの写真も、かなりの数、使われていますので、読みやすいと思います。ごらんになっていただくと、うれしいです。

神戸市立六甲山森林植物園は、訪れる人たちの人気が高いようです。私も気に入っています。熱心な人がいるんですよ。なんでも、けっきょく、人しだい。

立花吉茂代表に言いつかって、何本かの苗木を、届けたことがあります。福本市好さんが、「よく育ってますね！」と言われますので、「そりゃあ、プロですもの」と答えたら、「えっ、立花先生ですか？」と聞いて、口より先に、手が伸びていました。ポットの土に。そして、「腐葉土と砂だけじゃないですか」と言われました。「これだったら、お金がかかりませんね」とも。

植物を育てる、というのは、土をつくることですね。私はといえば、植物の世界の門外漢です。でも、多少は、かわりがあります。自宅で、ちょっとは育てていますし、ネズミのひたいほどの、菜園もあります。近所は、植木屋さんが多くて、その人たちが、覗き込みます。そして、「いつも、よくできてますね」と、言ってくれます。やっぱり、プロの人たちですから、目のつけどころがちがって、「こんなに狭いところで、同じようなものを作りつづけて、連作障害をおこさないで……」ということなんだそう。

そう言われて、あらためて、土のことが、気になりはじめました。これまでも、台所の生ゴミを、1~2年寝かせてから、土に戻すなど、努めて、有機質を投入してきましたが、思い切って、ふやしてみましようか。いいのは、やっぱり腐葉土でしょう。なかでも、ナラのものがいちばんいいと、立花先生が言われていました。

昨年末、近所の山道を、くるまで走ったら、道路わきの側溝に、落ち葉がたまって、あふれかえています。雨で流されて、ここに集まったんですね。発酵・分解の終わったものを、持ち帰れば、効率的ですけど、いまだったら、苦勞せずに、集めることができます。正直に申しますと、これまで書いたことは、時間軸が逆で、このようすをみて、腐葉土づくりを思い立ちました。ホームセンターで、ガラ袋を購入し、それに詰めて、持ち帰ることにしました。

大部分は、コナラ、クヌギ、クリなどの、落葉広葉樹です。特大の葉っぱは、ホウです。あつ、痛つ。クリのイガが、まじっていました。数日前に雨がふりましたから、適当な湿りけがあります。30分もかけないで、10袋の落ち葉が集まりました。ギュウギュウ詰めで、ほぼ200Lあります。

最初は、そのまま置いてましたが、狭い庭ですから、ジャマになります。早く分解させるのがいいでしょう。発酵促進剤のコーラン、尿素、油粕を、少量まぜ、つみ込みました。そのために、木枠をつくりました。厚さ2cm弱、幅20cmほどの板を買ってきて、それで長方形の枠をつくり、そのなかに落ち葉を踏み込んで、木枠を、少しずつ引き上げます。板代が安くてすむし、切り返しの際は、この木枠を、すぐ隣において、同じことを繰り返せば、かんたんです。

発酵促進剤のおかげでしょう。ちょうど寒波がきてたんですけど、温度計を差し込んでみると、最初は5度くらいだったのが、3日後には20度になり、5日後には38度、7日後には50度になり、それが4日つづいたあと、だんだん下がりはじめました。もうちょっと、高温がつづくかと思ったんですけど、それほどでもなかった。

2週間後、35度まで温度が下がったので、切り返しをしました。空気をいれながら、かき混ぜていきます。白いカビのようなものが、たくさん生え、臭いも悪くはありません。最初は茶色っぽかった葉が、黒くなっています。でも、形は、ほぼそのまま。寒い季節ですから、分解には時間がかかるでしょう。

もう一度、温度が上がることを期待したのですが、そうはなりません。35度前後が8日間つづき、切り返しから2週間後には、12度まで下がりました。ここで、2度目の切り返し。それが、一昨日のことです。

じつは、一回目が、わりとうまくいきそうなので、また、落ち葉を取りにいきました。こんどは、250Lほど。つい、フラフラッと始めて、だんだんエスカレートするのが、私の性格です。

大同市南郊区の環境林センターにいと、ときおり、ドーン、ドーンという爆発音に、びっくりさせられます。でも、さほど近くはない。「大砲ですか？」と、きかれるんですけど、そうではありません。発破・ダイナマイトの音でしょう。大同には炭鉱がたくさんあるので、それかと思う人もあるようですが、石炭は、地下 100m以上の深いところで、掘りますので、音がきこえるはずがない。たいていは、採石の発破の音です。

昨年末にいったのですが、南郊区の西のほうに、七峰山があります。この山もそうですが、大同の周囲には、石灰岩の山が多いのです。石灰岩と、これも大同で産出する石炭を原材料として、セメントを生産します。中国では「水泥」(シュイニー)といいます。「中華全国総工事現場」なんて、私は行ってますけど、中国はいま、どこもかしこも工事中で、鉄やセメントが、大量に必要です。セメント工場も、フル稼働。

石炭を炊いて、煙突から黒煙をはきだします。しかも、その工場が、石灰岩と石炭の多い市街地の西側に集中していますので、西風に乗って、市内を襲うわけですよ。ひどすぎて、閉鎖された工場もありますけど、残っているものも、かなりひどい。現在も、建設中の工場が、いくつもあります。これまでのものとは、ケタ違いに規模が大きいのです。設備は改善されているんですけど、総量として、改善されるかどうかは、疑問です。

事務局の会田さんは、くるまのなかでも涙ポロポロ。私は、ここに対応できるように、もともと目が小さい。七峰山の山頂から、東をみると、大同の市街地のはずですが、スモッグのドームにおおわれて、視界はほとんどききません。西側は、「耕して天に至る」、あの景色です。

セメントの粉も問題ですね。工場の周囲は、いたるところ、白っぽい粉が、降り積もっています。なぜか、南郊区のセメント工場の周囲は、ブドウ畑がおおいんですね。ここのブドウは、白いことで知られています。トゥルフアン(吐魯番)の白いブドウは、真珠のように素敵でしたけど、ここの白いブドウは、歓迎できません。

もう 10 年近くたちますが、この一帯で、瞬間的な豪雨がありました。工場の構内から、雨水があふれ出ました。それが、周囲の畑に、流れ込んだんですね。水不足が深刻で、灌漑のために、生活汚水まで、奪いあっているくらいですけど、セメントの混じった水なんて、畑にはいったら、たまりません。農民が、はげしい抗議行動を展開したと、きいたことがあります。

セメント工場は、山すそに建てられています。たいていは、谷の入口。原料の石灰岩を、掘りやすいからでしょう。7~8 年まえに、大阪市立大学の植物園長、岡田博さんに誘われて、セメント工場の、裏手の山に行ったことがあります。意外なことに、ここに、植生が再生してきました。ピラカンサのなかまが多いんですけど、それにまじって、リョウトウナラも育っ

ていました。森林土壌ができて、肥えた黒い土が、かなり厚くなっているのが、印象的でした。工場が、門番の代わりにして、ヒツジ、ヤギの放牧や、タキギ取りを防いでいるんですね。人を排除しさえすれば、森林が再生することの見本です。といっても、そこで石灰岩の採石がはじまれば、表層の植生なんて、あつというまに、無に帰しますけど。

中国の企業家が、こんなことを書いていました。北京オリンピックが終われば、中国の景気は後退するのではないか、という説があるけれども、そんなことはない。東京も、ソウルも、そうなったというのが根拠だけど、中国にあてはめても意味がない。中国経済の発展は、もっと全面的なもので、オリンピックや上海万博は、エピソードの1つにすぎない。というのです。

たしかに、北京や上海だけではありません。もっと全国的なものです。だけど、この大陸改造は、いったいどこまでつづくのでしょうか？中国は大きいけど、その環境は脆弱です。

#### NO. 453 決断について 2008. 03. 04

共青团大同市委員会の副書記で、初代の緑色地球ネットワーク大同事務所長だった祁学峰とは、4年あまり、兄弟のようにして、活動しました。私の大同滞在は、年に100～120日はありましたが、そのあいだ、ほとんど24時間、いっしょにいたのです。農村部では、いちばん条件のいい宿泊施設が、県の招待所。それでも、お湯は短時間しかでませんし、夜間は、水もストップしました。そのほかに、農家にも泊まりましたし、郷政府などに泊まることも、多かったのです。

その間、よく議論をしましたし、口論になることも、少なくなかったのです。現場で、それを長くつづけていると、考え方まで、似てきます。王萍がまん中で、通訳するんですけど、2人がなにかを同時に話したときに、「2人とも、同じことを言っています」といって、すませますので、「ああ、この通訳はラクでいいな」といって、笑ったものです。

彼らの奮闘があって、私たちの協力事業は、中国国内でも、しだいに評価されるようになりました。日中緑化交流基金（いわゆる小淵基金）ができて、緑化協力のプロジェクトが急増しました。どうやったらいいか、中国側でも、手さぐりだったので、大同のプロジェクトは、ひっぱりだこになりました。あちこちの中国側の会議で、祁学峰が経験を発表したのです。

日本人と、どのようにつきあうのがいいか、彼は、つぎの4点にまとめたといっています。

1) 誠実につきあう。

双方の関係は平等であるべきだし、自分の本当の気持ちでつき合わないといけない。形式的なつきあいをしているだけでは、いつまでたっても相互の理解が進まない。誠実につきあうことは協力関係全体の基礎である。

2) バランスをとる。

協力する双方は車の両輪の関係である。置かれている立場がちがうのだから、当然、自分の主張はすべきである。場合によっては激突、ケンカも必要になる。しかし最後には、相手の立場をも理解しあい、バランスをとる必要がある。いい関係をつくるカギはバランスにある。

3) まじめに仕事をする。

仕事はまじめにしないといけない。馬馬虎虎（マーマーフーフー・いいかげん）ではいけない。これは態度の問題である。

4) 苦勞を厭わない。

苦勞を厭わず、農村の現場に行く必要がある。事務所の机の上、紙の上だけで仕事をしてはいけない。これは精神の問題である。この4つを実現できたら、合作（協力）は成功できると思う。

この発言は、私とのつきあいを意識していると思うんですけど、まったくそのとおりだったと、私も思います。背景も、文化もちがいますから、日本でのように、阿吽の呼吸とか、以心伝心なんてことは、通じっこないのです。とにかく、自分の意見を主張し、少なくとも、何を考えているか、理解してもらうことがたいせつなんですね。

その禰学峰が、あるとき、私のことを、「決断するのが、驚くほど早く、また、決めたことに、責任をもつ」と、ほめました。私とつきあって、それがいちばんよかった、というのです。後段は、そのとおりだと、自分でも思います。口にしたこと、決めたことを、実現するために、綱渡りをつづけてきました。

しかし、前半は、そうではないはずです。私は、なにか目標を決めて、そのために努力するとか、そういうタイプではありません。はっきりいって、優柔不断です。明日できることは、きょうはするな、というタイプ。

禰学峰のことばを契機に、考え直してみると、なるほど、私は、日本では優柔不断にしているのに、大同では、かなり早く、決断することが多いようです。自分のことながら、その理由が、長いあいだ、疑問のままだったんですけど、最近、あることばを契機に、そのナゾが解けました。やっぱり、風土に関係があるのでしょうか。日本は恵まれすぎていて、決断しにくいんですよ。なにかを決めるのは、ほかの可能性を捨てることなのに、あれもほしい、これもほしい。

たとえば、なにかを実現するには、当然、リスクをとまいません。なにかの巨大技術を立ち上げれば、事故の危険を背負わざるをえないわけです。周囲の住民などは、経済的利益をうるかわりに、危険を覚悟する必要がある。建設するがわは、本来なら、そのことをきちんと説明

して、了解を求めないといけないのに、「絶対に安全です」などといってしまう。具体的な現場では、私は住民の立場に立つんでしょけど、考え方としては、「どっちもどっち」と思いますよ。

大同では、自然環境も、社会的な環境も、日本では考えられないくらい、きびしかったですからね。なにか1つでもえられたら、それで御の字なんですよ。その他のことは、一瞬にしてあきらめるわけです。それどころじゃない。ある意味では、協力事業じたい、いつやめることになっても、それはしかたがないと、最初から、覚悟を決めていました。いつも辞表を懐にいれているようなものです。その覚悟がないと、振り回されちゃいますからね。

こんなことを考える契機になったのは、『日中戦争見聞記－1939年のアジア』（コリン・ロス著、講談社学術文庫、2003年）の一節です。「日本人は他にいろいろのすぐれた特性をもっているが、一つだけ大きな欠点がある。日本人は何事も決定できず、常にすべてをしかも同時に望んでいるということだ。」

なんということでしょう。みながサラリーマン化した最近の現象かと思ったら、昔から、そうだったというんですね。根が深い。それにつづけて、こうあります。「このことは経済面と同様、政治面、軍事面でもあてはまる。私の見解によれば、こうした欠点があるがために、終局的に成果をあげつつ日中戦争を終わらせることにこれまで失敗してきた。」

最近おこる事件や問題、まったく同じ構造があるようです。このような通信が長くつづけばつづくほど、自戒しないとイケないのは、へたな時事評論に流れることだそうですから、これから先は、やめておきます。

#### NO. 454 カウンターパート 2008. 03. 11

前号で、祁学峰のことを書いたら、多くのかたから、反響がありました。こういう話題が、最近はすくなくなかったようです。で、それに連なる話題を書きます。

1992年から、この協力事業をはじめ、私が現地に通って、直接の担当者になりました。でも、なかなか、状況をつかめません。地元の人に話をきくと、たいていは、いいことばかりなんです。ね。「活着率は90%以上だ」というふうに。で、現場にしてみると、せいぜいで20%くらい、といったぐあい。

悪意があって、ウソをいっているとは、思えないんですよ。知らないのでも、なさそう。実際には、すぐにわかって、悔しい思いをするだろうから、いま、自分が相手をしてやっているあいだだけでも、楽しい思いを、させてやろうじゃないか。ひよっとすると、そのような

親切心かもしれないな、と私は考えましたよ。それくらい、やさしい。

さらに悩まされたのは、なにかの計画を立てるとき、「没問題！」（メイウエンティ！）という答えが、即座に、返ってくることです。ノープロブレム！それで動き出すと、たちまち頓挫するわけですね。つぎにいてみると、なにもすすんでいないで、「ガオジェン！ シアツー」なんていう。「高見、つぎにだ！」というわけです。

会う人、会う人によって、話がちがうわけですね。いったい、誰の話をきいたらいいのか、最初のうちは、まったくわからない。目にみえることなら、自分の目を信じます。「信じるのは自分の目だけ」なんて、いっていました。ついでにいうと、私は中国語が皆目だめなので、そのおかげで、「ことばでだまされないですんだ」などと、へんなジマンをしていたものです。でも、目にみえないことも、たくさんあるわけですよ。むしろ、そちらのほうが多いでしょう。

最初に、祁学峰にあったのは、1994年3月でした。2人ではじめて、農村を回りました。ピーンときたのです。私が納得できる話を、してくれます。たとえば、私が新しいプロジェクトを提案すると、彼はけっして、即答はしません。ずいぶん考えたうえで、これを実現するためには、どの問題と、どの問題を解決する必要がある。そのためには、これくらい時間がかかるから、着手できるのは、いつだ、といったぐあいです。自分のなかで、ちゃんとシミュレーションをしているわけですよ。

ここの社会を理解するための、座標軸が、やっと定まった、という気がしました。うれしかったですね。青年団は、人事の異動が速いので、なんとか、彼を、つなぎとめたかったのです。それで、この事業を専門的に扱う組織を立ち上げてもらい、その責任者になるよう、彼を、かき口説きました。

そうやって、できたのが、緑色地球ネットワーク大同事務所です。私たちの協力事業が、多少なりとも、成果をあげてきたことと、事務所の成立を、切り離すことはできません。発端は、いま述べたようなことです。

その後、私たちの活動は、中国でも注目されるようになり、共青团中央の書記2人が、相次いで、私たちのプロジェクトを訪れました。そのあとで、知り合いの幹部が、私に話しました。「高見さん、あなたは運がよかったですよ。祁学峰のような幹部は、全国を探しても、そうはいません」。そうだろうと、私も思います。

国際協力の成否は、カウンターパートによって決まります。中国の現場で、私たちにできることは、多くはないのです。私としては、彼らが動きやすい条件をつくることを、すべてに優先してきました。中国側は、中国側で、私たちが日本で動きやすくなるよう、私たちを、ほんとに尊重してくれたと思います。まさに、車の両輪の関係です。

1997年夏のことです。祁学峰と私と、太原のホテルの一室ですごしました。白酒をチビリチビリやりながら、いろいろ話しました。こんな飲み方を、中国人はふつうしませんが、彼は、私につきあってくれたのです。私は、私がなぜ、中国の環境問題に取り組むことになったか、思想遍歴を含めて、かなりくわしく話しました。ふしぎなのですが、そのとき、通訳はいませんでした。祁学峰は、日本語はまったくわかりませんので、私が、知っている中国語の単語を、たどたどしく、ならべただけです。でも、ほんとに通じたんですね。この一晩で、私たちは深いところで、理解しあったと思います。祁学峰は、「靈感のせいだ」といっています。うん、たしかに、スピリッツの力です。

祁学峰は、その後、共青团を卒業して、大同市南郊区の副書記に就任しました。親しくしていた、共産党大同市委員会の副書記が、わざわざ私のところまできてくれて、「あなたの気持ちはよく理解できるけれども、今回は、祁学峰にとって、最後のチャンスだから、どうか、気持ちよく、送り出してください」と話しました。それより前に、祁学峰を引き止めるために、私が、けんめいに動いたことが、あったからです。

何年か前、祁学峰は、城区の区長に昇進しました。激務のようです。祁学峰と私とで手がけたプロジェクトのなかに、その後、成果をあげてきたものがあります。私が「あんたが父親のようなものなんだから、絶対に、みにいくべきだ」というと、彼は、「つぎの機会にはかならず時間をとって、あなたといっしょにいきます」というのですが、こんどは彼が、「シアツー」（つぎにね）です。とても、その時間がとれない。年に数回、いっしょに飲むのが、せいっぱい。さびしいことです。

祁学峰は、大同事務所に、後継者を残しました。2代目の所長の武春珍は、実務面でいえば、祁学峰より、いいしごとをしているのかもしれませんが。成果がみえるようになったのは、彼女が担当するようになってからです。

## NO. 455 北京大学、新疆大学での講演（1／2） 2008. 03. 19

昨年9月に北京大学と新疆大学で講演をおこないました。関口グローバル研究会の主催です。事前に原稿も書いたのですが、私は自分の原稿でも、それを読むのでは、気持ちが伝わらないように感じて、聞く人たちをみながら、勝手に話してしまいます。同時通訳のかたには、ご迷惑をかけました。主催者は、北京大学での発言を、わざわざ文章にしてくださいました。2回に分けますが、それでも長文です。司会は北京大学日本語文化学部准教授の孫建軍さんです。

主催者のウェブページには、写真と質疑応答のはいったものが、置かれています。ほんとは、その部分がおもしろい。ただし、閲覧には、ID とパスワードが必要です。ご希望のかたは、

緑の地球ネットワーク事務所までご連絡ください。私は明日から、4月いっぱい、大同です。

(孫) これからご講演をいただきますが、お手元の講師略歴をお読みいただければと思います。高見事務局長、よろしくお願いします。

(高見) 「緑の地球ネットワーク」が山西省大同市の農村で緑化協力をスタートさせたのは1992年1月ですので、まもなく満16年になります。最初にこの地方の砂漠化や水不足の現状、それから私たちがどういうことをやってきたかについて、スライドを使って簡単にご紹介したいと思います。(以下スライド併用)

○大同市北部の陽高県にこういう民謡があります。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば九年は早(ひでり)で一年は大水」というんですけれども、私も16年間通ってきまして、全くの実感です。毎年のように早魃になります。今年も私は8月24日まで大同にいたのですけれども、ほんとに雨が降らないのです。

○私たちの代表的なプロジェクトの一つに実験林場「カササギの森」がありますが、ここでは雨らしい雨は7月30日に1回だけ降りました。私もその日ここにいたのですが、土の表面から5センチぐらい湿っただけです。大同から来たカウンターパートに聞きますと、その後も長く降りませんでした。昨日やっと降ったそうですけれども、もう遅すぎて役に立ちません。今年も大変な早魃のようです。

○これは私が今年の8月にホームステイした農家のおじいちゃんです。アワ(粟)もキビ(黍)も早魃でほとんど育っていません。地面が見えなくなるぐらいに茂らないといけないのに、こういう状態です。恐らく今年の収穫はゼロでしょう。それでもあきらめないで、こうやって中耕をして、毛細管を切って、水の蒸発を少しでも抑えようとしているわけです。

○最近でいえば、1999年、2001年が記録的な大早魃でした。1999年は建国以来最悪の早魃だと言っていました。中華人民共和国成立からちょうど50年の年ですから、50年に一度の早魃と言ってもいいと思います。その翌々年の2001年がそれに輪をかけた大早魃で100年に1度の早魃だと言っていました。今年もそれに並ぶんじゃないかと思って心配しております。私は1992年から大同に通っていますが、振り返ってみると早魃の年が93年、95年、97年、99年、2001年、そして2007年。奇数年でいい年はありません。今年も奇数年です。

大早魃の年の冬に農村を回って、こういう光景にであいました。女性が左手に持っているものはジャガイモからでんぷんを搾った搾りかすですけれども、これをお粥に混ぜて食べるといいます。栄養は残っていないでしょうけれども、ひもじさを抑えるために食べるということです。

それから井戸が枯れる、湧き水が枯れる村が続出しています。1997年の夏、テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」という番組の取材クルーがやってきたので、私も一緒に農家に泊まりました。朝、洗面器の底にワンフィンガーぐらいの水が用意され、私たち4人が交替で顔を洗いました。洗うというより顔を湿らせるぐらいのものですね。私が最後に顔を湿らせて、残った水を庭に撒こうと思って玄関を出たら、その家の主が慌てて飛んできました。撒いちゃいけないというのです。でも、止められなくても分かりましたよ。その家で飼っているヒツジやニワトリが駆け寄ってきたからです。洗い物をした最後の水が家畜の飲み水になるのは水の乏しい農村では普通のことです。

そのような状態を見過ごすことができなくて、私たちはその村ともう一つの村で井戸を掘るのに協力しました。この村は176メートル、もう一つの村は183メートルで、幸い水ができました。通水式のときに老人が私の手を握って離さないのです。「見てくれ。こんなきれいな水は飲んだことはもちろん見たこともない。もらい水に通う村の歴史に終止符が打たれた」と言って、おじいちゃんが大泣きするのです。私もついもらい泣きしてしまいました。

農村はそれくらい干上がっているのです。そういうなかで井戸掘りに協力したことは、私自身にとって大きな教訓をもたらしました。黙って通り過ぎるだけだったら問題の深刻さに気付かなかっただしょうけど、井戸を掘ることで「水問題が大事だ。水がキーワードだ」という感覚を持ちました。そうやって注意して見ますと、大同中の河という河、ダムというダムが干上がっているのです。

○これは大同の中央部を流れる桑干河の今年の夏の様子です。一滴の水もありません。

○その少し上流の応県の光景です。数年前のものですが、実に衝撃的な写真なのです。遠くに見えるのは橋で、トウモロコシが生えているところはみな桑干河の河底です。その全面にトウモロコシが植えられて水の流れる余地がない。付近の農民は河に水が流れてくることを期待もしていなければ恐れてもいないわけです。そして実際に収穫まで水が流れてこなかったのです。河底ですから普通の畑に比べ土が肥えていますし、水分にも恵まれているので、普通の畑よりできが良いのです。

○そしてこれは同じ場所の反対側の岸です。1992年のもので10年少し前の写真です。このときにはちゃんと水がありました。河の岸にポプラを植えるのに私たちも協力したのですけれども、植えた木の根元が洗われるくらい水が流れていたのです。かなり急速に水がなくなっています。

○これは大同の市街地の東の外れにある御河で、先ほどの桑干河の最大の支流です。でもよく見てください。堰を作って人工的に水を貯めているわけです。だから橋の両側には水がありますが、ほかのところは干上がっています。せき止められて動かない水ですから腐ってしまって、

今年の夏は橋の上まで悪臭がありました。最大の支流に水がないんですから、本流の桑干河が干上がるのも不思議ではありません。

広い中国ですから、そういう地方があっても不思議ではないし、気に留める必要もないかもしれないですね。でも、そうはいかないのはこの大同が北京の水源地だからです。桑干河は東に流れて河北省に入り、洋河、壺流河と合流して永定河と名前を変えます。その永定河をせき止めているのが官庁ダムです。この官庁ダムと密雲ダムは北京に二つしかない水がめです。ですから大同は北京の水源地と言ってもいいですね。

○これは永定河が官庁ダムに流れ込む直前の写真です。2年ほど前のものですが、この鉄橋の長さは1.5キロ近くあります。実際に水が流れているのは10メートルほどで、底が見えていますね。その他のところはトウモロコシ畑になっています。丁玲という女流作家が『太陽は桑干河を照らす』という有名な小説を残しましたが、もし彼女が生きていたら『太陽はトウモロコシ畑を照らす』になるでしょう。

○これは官庁ダムの北側ですが、北側の方が傾斜は緩やかです。1950年代には一番手前のところまでダムの底で、水があったそうです。ところが今、水際は1キロ以上後退しており、干上がった湖底はブドウ畑やリンゴ畑になっています。

○これは北京のビルの屋上の看板ですけれども、「水…明日もあるだろうか」と書いてあります。

○それからもう一つ新しい事情が発生しています。今年の5月10日に北京市水務局の副局長が記者会見をして、オリンピックを迎えるための北京の水対策を発表し、日本のテレビや新聞でも報道されました。河北省の石家荘と北京との間の南水北調の工事を急いでやって、太行山のふもとにある四つのダムの水を北京に運んで、それでオリンピックを乗り切るといいます。来年4月のスタートだそうですけど、オリンピックは8月ですからギリギリのタイミングです。年間に3億トンから4億トンの水を運ぶ予定で、影響を受ける農村への補償などをこれから検討するそうです。

○大同市の南部に渾源县、靈丘県があり、そこを唐河が流れています。この河は太行山を抜け河北省に流れ出ますが、そこに西大洋ダムがあります。このダムは先ほどの四つのダムの一つです。それ以外の三つのダムの集水域も大同と近いところにあります。ですから、これまでは大同の北部は桑干河を通じて北京の水源地だったんですけれども、来年4月以降は大同の南部も北京の水源地になるわけです。ですから決して水の乏しい気の毒な一地方の話ではなく、この北京とも密接な関係を持つことを最初に理解していただきたいのです。

そのことと関連して今大変なことが起こっていると思います。私たちは今年の夏、日本から来た植物の専門家と一緒に太行山の植生調査をしました。私は四日連続で歩いたんですけど、

その四日とも山で重機の音を聞きました。そしてどこでも鉱山用の大型ダンプとすれ違いました。

○これは礪石山の近くの一つの峰で太行山に属しています。山頂をスーパーショベルで削り取っていますが、これは鉄鉱石の鉱山です。

○これは太白維山ですが、ここにはマンガン鉱があります。太行山に地下資源があることは従来から知られていたのですけれども、個々の規模が小さく分散していること、交通が不便なこと、開発資金がないということで手つかずでした。ところが最近の中国経済の大膨張で鉄が足りない、セメントが足りない、何もかも足りなくなってきました。小規模でも採算ベースに乗るということで、一斉に開発が始まったのです。霊丘県はこれまで国家級の貧困県でしたが、最近は資源開発で沸き立っています。まさに千載一遇のチャンスで、このチャンスを逃すわけにはいかないという気持ちは分かります。

開発の資本は浙江省、江蘇省など南方からきているようです。実際に働いている人も四川省とか陝西省とか外から来た人が多くて、地元の人はい少ないそうです。太行山にとっては地下資源があったことが不幸なんですね。そうでなかったらここまで傷つけられることはなかったでしょう。また長い目で計画的にやられたら、インフラの整備ももっと丁寧だったでしょう。この夏も山西省の中部では2時間で180ミリといった豪雨が降ったんですけれども、そんな雨が降ったらこのマンガン鉱山はひとたまりもありません。ふもとの村まで土石流が一直線でしょう。また開発しているのが地元の人間だったらここまでの無茶はしないでしょう。

そしてマンガンは人体にとって有毒です。地下深くにあるときは問題なかったとしても、こうして地上に掘り出すと雨のたびに毒を流すことになります。その水は最終的には先ほどの唐河に流れ込む。そういう関係です。

随分脇道に逸れましたので話を元に戻します。先ほどの民謡に「十の年を重ねれば九年は旱で一年は大水」とありましたが、この大水とはなんでしょう。1995年が典型的な年です。この年も春は大旱魃だったのですが、7月末から降り出してなかなか止みませんでした。その雨水が土造りの窯洞（やおとん）の屋根や壁にしみ込んでどンドン潰れたんです。大同の農村では6万世帯24万人が被災したと言われます。

これほどのことが10年に1度もあったらたまりませんが、大同の場合、雨は6月中旬から8月中旬くらいに集中します。年間降水量は平均400ミリほどですが、その3分の2がそこに集中します。先ほどの民謡に「山は近くにあるけれど煮炊きに使う柴はなし」とあったように山に木はほとんどありませんし草もまばらです。

先ほどの民謡はたった16文字の漢字で表されています。すごいことですね。中国のご先祖の

偉大なる発明だと思います。私たち日本人も随分お世話になっていますが、できの悪い学生の私としては、あんなに複雑なものが入ってこなければ良かったと思うこともないわけではありません。ところが最近、徳村彰さんという日本人が一つの字を作りました。森の字は木が三つですが、上の木はそのままで、左下に水、右下に土を書き、これで「もり」と読ませるわけです。その意味を考えますと、木があるから水と土が守られ育まれる、そして木は水と土の上に成立するということです。黄土高原の場合は、この木が早くに失われ、そのために水と土が失われ、水と土が失われたところに木を育てようとするのですから困難があって当然なのです。そういうことから言いますと「環境は壊してしまったら大変だよ、一旦壊したところを修復するのは至難の業だから決して壊してはいけない」ということを、この一つの文字で表していると私は思います。

○これは Google Earth による人工衛星からの画像で、私たちの実験林場の周囲を見ていますが、現場で見るとこういうことです。夏の雨によって土壌が侵食されて、谷ができ、畑や山から土が流れ出る。その様子が現場で見る以上に人工衛星の画像にはっきり見えていることが私には驚きです。中国では水土流失といいますね。

なぜこんなことが起こるかと言いますと、先ほど2時間で180ミリというようなお話をしましたし、私も1時間に70ミリの雨を何度か体験したことがあります。これは狭い範囲に短時間集中的に降る雨です。そしてここは木も草も乏しいので、雨が直に土の表面を叩き土を流してしまうわけです。するとだんだん土地が劣化し、作物が育たなくなる、植物が育たなくなるわけで、これが黄土高原の砂漠化です。雨が砂漠化を加速するという皮肉な現象が黄土高原では起こっています。

こんな話をしても島国の日本人には実感がないんですね。「雨が土を流すなんて、たいしたことにはなかりょう」という感じです。そして、こうやってパワーポイントのスライドを見てもらうために会場を暗くすると眠くなるわけですね。そこで眠気覚ましのために私は毎回これぐらいのところでクイズを出します。

中国政府の発表によると1年間に黄河に流れ込む土の量は16億トンで、その80パーセント以上が黄土高原の土だといいます。この16億トンの土で幅1メートル、高さ1メートルの堤防を築くとその長さはどれぐらいになるかというのがクイズです。大陸のことでスケールが大きいに決まっていますから、物差しが目盛りは赤道1周です。次の六つの中から正解を選んでください。意味はお分かりですよ。それではいきます。0.5周と思う人手を挙げてください。1周と思う人は手を挙げてください。3周と思う人。5周と思う人、10周と思う人。それでは手を挙げている武隈さん、赤道の周囲はいくらですか？

(武隈) 4万キロです。

(高見) さすがですね。それを知らないで手をあげる人が多いんですけど、武隈さんはよくご存じでした。それでは最後に 30 周と思う人。さすが北京大学ですね。この春に東京大学で 50 人ぐらいの参加者に同じ問題を出したら正解者はゼロでした。東大がいかになめかが分かります。しかし、その中には中国からの留学生も 10 人以上混じていたのですけれども正解者がいませんでした。今日の正解者は一人です。110 万キロ弱で、赤道の周囲を 27 周することになります。今日の結果をみると島国の日本人が分からないだけでなく、中国人もあまり実感がないうちですね。

○それでは黄土高原はずっと前から砂漠化の進むひどいところだったかということ、そうではないのです。黄河流域はご承知のように中国で最も早くから文明が発達したところです。山西省の一番南の河東地区は華夏文明の発祥地として有名ですし、一番北の大同も 4 世紀末からほぼ 1 世紀、北魏の都が置かれました。ちょっと信じられませんが、その証拠が例えば雲崗の石窟で 1500 年前に作られたものです。それから懸空寺、これも 5 世紀後半の創建です。

○これは少し時代が下ってますけど、応県の木塔です。去年、創建 950 年の式典が開かれたそうで、千年近い年輪を重ねています。世界最大規模の木造建築物で高さは 67 メートルあります。すべて木組みで建てられており、釘は使われていません。そのような高い技術が単独で成立するはずはありません。この辺りにもたくさん木造建築があり、その材を集めてこの塔が建てられたということでしょう。森林が存在したことの証明ですね。

そういうことから言っても大同は決して後れたところではないのです。5 世紀には人口が 100 万人を超えて中国最大の都市だったそうですし、恐らく世界でも最大の都市で、文化的にも先進地域だったのです。それでは今は後れているのか。そうではないと思います。砂漠化問題に関係する人たちの常套句に「文明の前には森林があり、文明の後には砂漠が残る」というものがあります。大同もその一つの典型なのでしょう。それが事実だとすると、ひょっとすると今も最先頭を走っているのかもしれない。そうでない道を見つけないと、人類の文明には前途がないんじゃないかと思うわけです。

○大きな文明が過去に栄えたことと無縁ではないでしょうけど、大同の砂漠化ないし環境悪化の最大の原因は水と土のキャパシティを超えた人間がここに住んでいることだと思います。ここで起こっている問題は人口問題と切り離すことができません。人口が多いために本来畑にしてはいけないところまで畑にしてしまいました。このような急斜面に造られた畑を「三つが逃げる畑」と呼びます。水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げるといいます。そのような畑を作るために、森林が破壊され草場が壊されてしまったのです。

それから農耕だけでは食べられませんのでヒツジやヤギの放牧をします。ヤギはどんなに急な岩場でもよじ登って、草や木を食べますね。大同と一緒に仕事をしているカウンターパートの技術者は「100 人の人間が植えた木を 100 頭のヤギが台無しにする」と言っていますが、ひ

よっとするとそれ以上の害をもたらしているかもしれません。

それから先ほどの歌に「煮炊きに使う柴はなし」とありましたが、大同は石炭の産地ですので農村でも割と石炭を使っているのですけれども、交通の不便な山の中の村ではやはり山の木を使います。それが植生を貧しくさせ、環境を破壊してきたわけです。この十数年を振り返りますと、先ほどの放牧にしても従来よりは少なくなり、柴刈りもだんだん少なくなってきました。それに伴って緑がだんだん濃くなってきて喜んでいたのですけれども、最近の問題は石炭が急激に値上がりしたことです。2000年ごろに1トン60元だったものが、去年の年末は1トン450元です。6年で7.5倍にもなりました。そうすると山に入って木を切る人が増える。たばこの火の問題もあるので、林業関係者は随分そのことを心配しています。石炭の値段が上がることで環境に対する負荷が強まるわけですね。問題がすべて連関していると感じます。

それから貧しい農村ほど子供の数が増えます。日本から来た人たちは「えっ、中国は一人っ子じゃないの？」と言って驚きますけれども、農村では実質的には二人っ子政策ですね。それでもそれ以上の子供がいます。なぜかという、黄土丘陵の上の方にある村は農家一戸当たりの耕地が広いのです。生産性が低いので広くなかったら生きていけません。下の方の盆地の村であれば、ウマ、ウシ、ロバ、ラバといった大家畜を飼って農耕に使うこともできるわけです。しかし上の方の村ではそういう大家畜を飼うことができなくて、全部人力で耕します。

○それから水くみ。井戸は大体、侵食谷の底にありまして、それを遠い家は2~3時間もかけて水を運びます。私が「えっ、水くみにそんなに時間をかけるの？」と驚くと、その家の人に「生きていく上で一番大事なことに時間をかけるのが何がおかしい」と言われました。まさにそのとおりでございます。「忙しい、忙しい」と言いながら、私たちが生きるうえで不可欠とはいえないことをやっているのに比べると、大変正しいことだと思います。

ついでに話しますと、農家のオンドルに上がって白酒で乾杯を繰り返しながら「あんたたちは何が怖いってカミさんが一番怖いだろう。逃げられるのが怖いんだ」なんて言いますと、「おまえだって一緒じゃないか」と逆襲してきますので、「いや俺は違う。逃げられるのなんか怖くない。怖いのは追い出されることだけだ。だから俺の方がずっと勇敢だ」などとばかなことを言い合っていますけど、家庭内ではそのように女性が強くなっていると思います。しかし筋肉労働となると男の方が強いのです。広大な面積を人力だけで耕さなければいけない、水を担がなければいけないとなると、男手がないと家庭が成り立ちません。どうしても男の子が欲しいから男の子が生まれるまで子供を生み続けようとしみます。そのために子供の数が増える。こういう構造が続く限りは、「男の子が欲しい」という観念もなくなりません。

○中国では清明節（4月5日前後）にお墓参りをします。都市は違うそうですけど、この地方の農村では清明節にお墓に参るのは男だけです。女性は参りません。そうすると男の子がいなければご先祖様はお墓参りをしてもらうことができません。

○農村の土塀なんかにはスローガンがたくさん書かれていますね。計画生育に関するものが多く、「生男生女都一样！」（男も女も一緒だ）とか「女兒也是後代人！」（女の子も後継ぎだ）といったものが実にたくさん書かれています。これだけたくさん書かれているということは、そうでない観念が強いということですね。このような貧しさ、生活の厳しさといった実体を残したまま、スローガンと教育で解決しようとしても、できないことだろうと思います。

私は10年ほど農村に通うなかで、こういうことを考えるようになりました。ここでの一番の問題は人口問題であって、それが環境破壊と貧困の悪循環を作り出しているということです。人口が増えるから食糧が不足する。条件の悪いところまで耕地を拡大し、森林を壊し草地を壊す。そうすると土壌の侵食がひどくなって土地が劣化する。生産力が低下して貧乏になる。貧乏になると人口が増える。そして農耕だけで食べられないから過剰な放牧を行う。すると燃料や餌も不足する。有機物が不足する。畑が痩せる。こういう悪循環が長く続いてきたということです。ですから、こういうところで砂漠化を止めるためには、その原因を解決しないとけないわけです。その原因をなくすか、なくさないまでも軽減しないことには、砂漠化を止めることはできないと思うのです。

○この問題で注意していただきたいのは、悪循環の内部の人が頑張ってもその悪循環から抜け出せないことです。簡単に抜け出せるようなら悪循環は最初から成立しません。抜け出せないから悪循環になるわけです。一人の農民が「よし、俺はこの貧乏から抜け出してやる」と決意して何をするかというと、「山の裾の土地が使えるから、あれを開墾しよう」となる。その人がそれによって貧困から抜け出すことはあると思います。だけどそれを村中の人が行ったらどうなりますか。結果は見えています。それから先ほど放牧が少なくなったと言いましたが、私が知っているところでも300頭だったヤギを1000頭に増やした村もあります。一直線にはいかないんですね。循環の内部の人たちが頑張って、自分の努力によって悪循環から抜け出そうとすると、かえって悪循環を強める結果になりかねません。

ですからどうしても外部からの支援が必要だと私は思っています。それは何も外国からである必要はありません。北京にとって大同の農村は水源でありますし、風砂の吹き出し口でもあります。この環境が良くなれば北京の人たちもその恩恵を受けます。逆にこの環境が今以上に悪化すると飲む水が危なくなるわけです。ですからもう少しこういう農村に関心を持って、支援をしていただきたいと思います。（つづく）

## NO. 456 北京大学、新疆大学での講演（2/2） 2008. 03. 25

前号につづいて、北京大学での講演です。

○次にどんな協力事業を続けてきたかということですが、一つは水土流失の防止と風砂の軽減のために、山や黄土丘陵の上の方に防護林づくりを進めてきました。

○采涼山プロジェクトは1999年から開始しました。起工式の写真ですが、その背景を見てください。木は全くありませんし草もまばらです。日本からのボランティアツアーを迎えて1999年春に起工式を持ちましたが、実際の整地作業は前年の夏に実施しました。夏の雨が降る7月、8月です。雨の後であれば土が軟らかくて作業が楽ですし、降った雨が整地した溝に溜まり、秋になって気温が下がると蒸発が抑えられ、さらに冬になると土の中に凍結して保存されます。それが翌春、苗が植えられてから気温の上昇とともに融けだして苗を育てるわけです。前年の夏にしっかり整地しておくことが、ここで緑化を成功させるための鉄則です。

○そして植えます。日本からもボランティアツアーがやってきて、地元の人や子供たちと一緒に植えております。

○苗は2~3年生の小さなもので、地上部は10~15センチしかありません。日本からのツアー参加者は「えーっ！こんな草のように頼りないもので本当に大きくなるの？」と疑問を隠しません。しかし、この苗には秘密があります。写真の中央にいるのは小川真さんという私たちの顧問ですが、マツの育苗に菌根菌を活用する実験を指導しているところです。菌根菌はキノコやカビの仲間の微生物で、それが植物の根と共生すると生育が良くなり、強くなります。たった4か月でこれぐらいの違いができました。

○実際に使ったのは現地のマツ林に生えるアマタケで、胞子の入った土を混ぜて育てたものが右側の2本、左側の2本は普通の苗です。これはすごいというので、翌春から実用化して100万本単位で苗を育てました。この腰の軽さがNGOの強みだと思います。そうやって育てた苗を最初に使ったのがこのプロジェクトです。

○最初の数年間は生育が遅くてやきもきさせられますけど、5年をすぎるところから生長が速くなります。今年の夏はこれぐらいになりました。今日もこの会場に来ている緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長が最初に手がけたのがこのプロジェクトです。私は92年から事業に関わりましたが、最初の数年間のプロジェクトはほとんど失敗ばかりです。ところが彼女は最初から成功です。単に運の良し悪しではなく、こういうところ人間性が表れるんでしょうね（笑い）。

○二番目の協力内容は小学校に付属果樹園を作ることです。地元では「希望果園」と呼んでいます。最初に取り組んだのは霊丘県の農村でした。下寨北という村をたまたま訪ねたんですけど、学校のある時間なのに弟や妹の子守をしたり、両親と一緒に畑に出ている子がいます。そばに寄って「どうして学校にいかないんだ？ 行きたくないのか？」と聞くと、「行きたい！」と一言答えて走って逃げる子、何も答えないで下を向いて涙ぐむ子、反応はいろいろですけど、

みんな学校に行きたいんですね。日本やこの北京であれば学校になんか行かなくても勉強の手段はいくらでもあります。やる気さえあればいくらでも勉強できます。ところがこれらの農村では農家に本なんてありませんよ。最近まではテレビもなかった。そうすると学校に行かなければ文字を覚える機会もないし、足し算・引き算を覚える機会もありません。友達と遊ぶことさえできないのです。ですから行きたいのです。

学校に行けないのは主として家庭の経済的原因によるものです。失学するのは特に女の子に多いのです。例えば3人の子供がいて下が第2人だとなると、お姉ちゃんに「もう学校なんて行かなくていい。家にいて手伝いをしなさい」ということになります。全部の子を学校にやるのが難しかったら、男の子が優先されるわけです。農村を歩いていると「文盲は娶るな！」といったスローガンが目につきます。文字の読めない女性は嫁にするなというわけです。勝手なことを言ってるようですが、これはちょっとひねった表現で、女の子もちゃんと学校にやらないとだめだと書いているんですね。

私たちは緑化を看板にした NGO です。いいことだったら何でもいいというわけにはいきません。ない知恵を絞って考え出したのが小学校に付属果樹園を造ることです。そこから得られる収入の一部を学校に回すようにすればお金が回っていくんじゃないかと考えました。青年団の人たちは即座に賛成してくれましたが、村に行ってもその提案を説明したら、長老たちの猛反対にあったそうです。「あの憎き日本人からどうして施しを受けなきゃいかんのだ」という気持ちで非常に強かったのです。そのことについてはまた後でお話しします。

○このように日本からボランティアツアーが訪れまして一緒に果樹園づくりをやっています。若い人たちもいますけれども、スコップなんか日本で持ったことはありません。家族からは「自分の家では植木鉢の花にも水をやらない子がどうしてよその国まで出かけて木を植えるなんてバカなことを考えるんだ」と言われたというんですよ。実際にスコップを持っても力のいれ方がわからないんですね。でも一週間くらい続けると、だんだん腰も入ってきます。「ああ、少しはやれるようになったな」と思うころには帰ってしまいます。ですから労働力としてはあまり期待はできません。しかしとても大きな仕事をしてくれたと思います。

○アンズは植えて7~8年で、これくらいに育ち、満開の花を咲かせます。この写真の背景にみえているのは万里の長城で、その向こうは内蒙古自治区です。

○これは渾源県の呉城村で、私たちが関係したなかで最も成功した一つです。これくらいに育って隣の木同士で枝葉が重なるようになると、大雨が降っても直接地面を叩くことはなくなります。雨は枝や葉で受け止められ、幹を伝って地面に降り、根を伝わって地中に浸透していきます。ここまで育てばこの地方の最大の問題である水土流失が基本的に防止されるわけです。

ここで植えているアンズの大部分は果肉を食用にするものではなく、種のなかの杏仁を目的

にしたものです。杏仁はナッツとして食用になりますし、薬や化粧品の原材料としても使われます。植えて7~8年もするとたくさんの実をつけるようになり、従来のアワ、キビ、ジャガイモなどに比べ5倍から10倍の収入をもたらすようになります。農村の経済的な自立を助けるわけですね。そしてこの村では以前は子供を大学にやるなんて考えもしなかったですけど、2000年に初めて大学生がでて、その後どんどん増えています。そういう意味でも成功例ですね。

○それから、これは私も計算外だったのですが、アンズは毎年枝を剪定します。その枝が燃料になります。これで生活燃料をまかなえれば周りの山を荒らさなくてもすむわけで、周囲の環境もよくなります。これまで燃やしていたトウモロコシの茎、アワ、キビの藁、こういったものが堆肥として畑に戻りますので、痩せる一方だった畑の土がちょっとずつでも肥えていきます。アンズを植えることで悪循環が良性の循環に変わるわけですね。

このチャートはまだまだ不十分なもので、可能性の一部を示すものですが、こうしてアンズを植えることで水土流失が軽減されます。それから農家の収入が増えると人口増加にストップがかかります。学校に行くのが当たり前になると子供の数が減るのです。学生の皆さんでそのことの意味がわからなかったら、家に帰って両親に聞いてください。あなたたちのためにいかに苦労しているか話してくれると思います。そしてアンズの枝が燃料になることで畑の土や周囲の植生が再生していくわけです。その効果は工業のように劇的ではなく、ゆっくりとではありますが、全体としての環境が再生していきます。環境を壊していくのも循環だったんですけども、修復の過程も循環のようですね。いま中国政府も環境改善に力を入れており、大同でも様々なプロジェクトを実施中ですから、それらが前進していくなかでどういふ変化が表れるか、楽しみでもあります。

○第3の事業内容としては、育苗や栽植などの技術的な改善や人材の育成といったソフト面の協力を重視するようになりました。最初に話しましたように1992年にスタートしたときは私たちは素人ばかりでした。それはそれでいい面もあって、有名な先生からは「黄土高原なんてやっかいなところだから自分は近づかないようにしてきたのに、君達素人はほんとに勇敢だ。しかしあそこでは木は育たないよ」などと言われたものです。勇敢なのはいいとしても、やはりうまくいかないものですから、日本の専門家の方たちにもお願いして加わってもらったのです。

○1995年から代表になってくださっている立花吉茂さんです。後ろに見えるのは霊丘県の自然林です。中国側でも大同市林業局を定年退職したベテラン技術者に加わってもらいました。それから樹木が大好きで、こと植物のこととなると夢中になって働く地元の農民も加わってくれました。おもしろい結合ができたんですね。それによってだんだんと仕事ははかどるようになりました。拠点としては大同市南郊区の環境林センター、霊丘県の自然植物園、大同県の実験林場「カササギの森」、「白登苗圃」、実験果樹園「かけはしの森」を建設中です。少しずつ拡大し、充実させてきました。

時間の関係でそのうちの一つだけお話しします。1998年の夏に大同市の一番南の靈丘県の技術者が「自然林がある。こんな木がある」と言って、一抱え以上のジェスチャーをしました。それだけでは私は信じません。大同に何年も通うなかで「信じるのは自分の目だけ。話だけなら信じてはいけない」と学んできたわけです。「近いか？」と聞くと「すぐそばだ。二里だ」と答えます。中国の一里は500メートルですから、二里は1キロです。「じゃあこれから行こう」と言って出かけました。歩いても歩いても着きません。通りかかった村の人に聞くと「遠くない。二里だ」といいますから、気を取り直して歩くんだけどやはり着きません。この二里が何度も繰り返されるんですね。でも森林があるのは確かなようです。というのは薪を背負って山から下りてきた人に出会ったんですよ。そのなかにナラとかシラカンバとかの枝が入っていました。でもそれがあるのは山を2つ越えた先だと言いますから、その時は諦めて帰りました。そういう空振りを2~3回繰り返したんです。

覚悟を決めてかからないといけないと思って、お弁当を用意して朝早くから出かけました。車で行ける最後の村まで車で行って、そこから片道4~5時間歩いてやっとその自然林に着きました。山の上は道もなく、藪こぎをしました。たしかに自然林があり、なかには一抱え以上の木もあります。あるところにはあるんですね。今年の夏には胸高周囲が264センチ、直径にして80センチ以上もあるカシワの木を見ましたよ。

最初にみた森林はまだ若いもので、一番太いものでも直径20センチほど、樹高は12メートルほどでした。生えているのは、ナラ、カンバ、カエデ、トネリコ、シナノキ、クルミなどの落葉広葉樹です。種は違うけど、属のレベルでは日本の北海道、東北などの森林と共通しています。

どういうわけでこのような森林ができたのでしょうか。何本か伐って年輪を解析し、周囲を観察した結果、事情がわかりました。1960年代の毛沢東時代ですけど、ふもとの村に近いところにアブラマツ（油松）を植えたのです。それが20年くらいたつと、下枝が燃料として使えるようになります。村に近いところのマツは見事に枝打ちされているんですね。それを背負って持ち帰るわけですね。村の近くで燃料をまかなえるようになれば、山の上まで木を伐りに上がる人はいなくなります。そうすると、そこに自然に森林が成立するわけですね。

私はこの事業に取り組んだころから、黄土高原には昔は森林があった、それを人間が丸裸にしてしまった、だから森林が成立する自然の条件はある、といったことをあちこちで話し、書いてもきました。中国の本にそう書いてあったからです。しかし内心では疑問もありました。これだけ広大なところを人間が丸裸にできるだろうか、森林が成立するだけの条件はもともとないのではないかと、中国の本はそう書いてあるけどウソも多いしね、というような疑問です。この森林を見ることでその疑問が解決しました。どこでもとはいかなくても、森林が成立する条件はあるところにはあるということです。

この自然林からそう遠くないところで 86 ヘクタールほどの山の 100 年間の使用権を購入しました。近くの村と協定して、放牧をしない、薪を取りに入らないと約束してもらいました。約束だけでは安心できませんので、小さな平屋の管理棟を建てて人が常駐するようにしています。そして自然植物園と名づけ、先ほどの自然林や周囲の山から植物の種子を集め、苗に育てて植え広げています。

○丸 9 年たったところですが、こういう変化が起こりました。写真の左側はリョウトウナラで、この地方の森林の主人公のようです。一番大きなものは既に樹高 10 メートルを超え、胸高直径が 15 センチになりました。このくらいのときの年輪幅は 5 ミリですので、直径は 1 年に 1 センチ太ります。右側はシラカンバです。既に種をつけて天然更新を始めています。

○これらの木は毎年葉っぱや枯れ枝を落とします。それが腐葉土になって土を肥やし、土が肥えるから木も大きくなります。木が大きくなると落ち葉の量も増えますから、より速く土が豊かになります。土が豊かになるとそれだけ速く木が大きくなる。あるところまで行くと良性の循環に転換します。

今年の夏、東北大学の元植物園長の遠田宏さん、日本森林学会の前会長の桜井尚武さん、岡山大学の吉川賢さん、大阪府立大学の前中久行さんなど名だたる専門家がやってきました。太行山脈のなかの碣寺山に苦勞して登ってもらったのです。私たちが 98 年に登った山の続きです。その翌日にこの自然植物園を見てもらったら、「今日これを見るんだったら、あんなに苦勞して昨日のところに行く必要はなかったよ。ここを見れば十分じゃない」と言われました。以前は何もなかったところですよ。たった 9 年ですっかり変わってきました。こういう経験からいうと、森林の成立する条件はあるところにはある、そこで森林がなくなり再生できないのは人間のためだ、人間の影響を取り除けば森林は成立するということと言えらると思います。

そして、このように自然に成立する森林には良いことがあります。この地方の最大の課題は水土の保持です。いま大同でたくさん植えているのはマツですが、水土の保持という点からいうと、マツなどの針葉樹よりここに自生している広葉樹のほうが働きが大きいのです。それに、人工的な植林は 1~2 種類の木しか植えません。多くても数種類ですね。ところがこうやって自然に再生する森林にはたくさんの樹種が混じっています。多様性に富み、病虫害や自然災害に対しても抵抗力があるわけですね。

それから、人工的に植えた樹木はずっと人工的に管理する必要があります。たとえば今植えているマツはこれから何十年も下枝を切ったり、込み入ってきたら間伐したりしないといけません。それは植えるのよりずっと大変で、人手もかかるし資金も要するでしょう。それに対して、こうやって自然に再生する森林は人手をかけて管理する必要がありません。弱いものは自然に淘汰され、落ち葉と同じように分解され、ほかの木を育てるわけですね。そういうことから言ってもいいモデルができつつあるわけです。

さて、ここまでが実は前置きで、今日のテーマの話はこれからなのですが、もうほとんど時間が残っていません。それぐらい話が下手で、申し訳ありません。(スライド終了)

1992年1月から山西省の大同で活動を始めることになったのですが、誰からも「どういう理由で大同を選んだのですか」と聞かれます。選んだのは私たちではないのです。私たちが最初に紹介した人は当時共青团中央の幹部だった曹衛洲という人です。今では全国人民代表大会常務委員会の副秘書長で、党内序列二位の呉邦国さんの側近として活躍中です。最初に大同に行く前に北京で、「緑化に大変熱心です。美人の産地として歴史的に有名ですし、良い酒もあります」と言われました。それでその気になったわけです。笑いながら聞いている人は冗談だと思っているでしょう。たしかに私の話には冗談が多いんですけど、少なくともこのことだけは事実です。

厳冬の1月に大同市の渾源県に着いて、最初に思ったのは「だまされた!」。美人がいないという意味ではありませんよ。大同のカウンターパートは女性中心ですから、そんなことを口にしたら大同に行けなくなります。何をだまされたかという、一つは環境です。先ほどの歌にありましたように雨が降らない。降るとなったらでたらめな降り方をする。こんなところで木を植えるのはいかに大変か。本当にだまされたと思いました。

もう一つは、日中戦争で大変な犠牲を出したところなのに、そのことを教えてくれませんでした。歴史問題がものすごく深刻なところだったのです。最近になって聞いたのですが、最初のころ私が村を歩いていると、小学生の男の子が後をつけ、節をつけて歌っていたのです。「ダーダオリーベン、ダーダオリーベン」。打倒日本、打倒日本ですね。そして小石を拾っては私にぶつけるまねをする。私は気付かなかったのですが、気付いたとしても中国語は分からなかったの、意味は分からなかったでしょう。

1992年の秋、私は一人で大同の農村に行きましたが、そのとき話せる中国語は「ニイハオ」「シェシェ」「ツァイチェン」「ツースオザイナーリ?」の4つだけでした。最後は「トイレはどこですか?」ですね。それから16年もたって、中国語を話せないのは今も同じですけど……。しかし、初期に失敗が多かったのは、その点でもやむを得なかったと思います。そういう関係でうまくいくはずがありません。

それからいろいろなことがありました。橋本紘二さんというカメラマンについて少しお話ししたいのです。1996年のことですが、私たちのツアーが天鎮県を訪れました。昼食を食べた後、彼は一眼レフを4台、首と肩にぶらさげて県城の撮影にでかけました。カメラで日本人だと知れたんでしょうね。一人の老人に呼び止められました。最初は穏やかに話していたそうです。橋本さんも私以上に中国語が分からないのです。そのうちにおじいさんは興奮し激してくる。言葉がきつくなる。それとともに周囲を何十人もの人を取り巻いてきました。その中

でおじいさんはだんだん興奮し、ついには橋本さんの鼻先に指をつきつけて罵る。興奮の余り口から泡を吹きだしたそうです。周囲を取り囲んでいる人たちも興奮してくるし、おじいさんはそれによってまたエキサイトする。

言葉は全然分からないけれども、「戦争の時のことだな」ということだけ橋本さんは分かったそうです。そして「本当に怖かったんだ」と私に言いました。おじいさんはそれほどでもなかったけど、周囲を取り巻いた数十人に恐怖を感じたそうです。彼はプロのカメラマンで、世界中あちこちにカメラを持って一人で出かけるのに、大同に来るときだけは「高見さん、悪いけど空港まで誰か迎えを寄こして北京駅まで送ってくれ」と言いました。それぐらい骨身にしみて怖かったらしいのです。そのとき、私たちの世話をしてくれていた大同の青年旅行社の張紅兵というガイドが、人だかりがしているのをみて、ツアーのメンバーが関係していないか心配して覗き込んだんですね。すると人の輪のまん中に橋本さんが立たされていた。それでおじいさんの話を彼が通訳したのです。

おじいさんが話したのは簡単に言うと「自分の両親も兄弟も日本軍に殺されてしまった。そのとき3歳だった自分は父親の死体の下で生き残った。そういう事実があったのをお前は知っているか？ たった3歳で一人きりになった自分がその後どうやって生きてきたかお前に想像できるか」ということでした。橋本さんはそれに対して「済まないことだった」と謝ったんですね。

すると通訳の張紅兵が「おじいさん、最近日本から緑化の協力に来ている人たちがおり、この県にもきています。あなたはそれを知っていますか？」と聞いたそうです。おじいさんは「知っている」と答えたそうです。張さんが「この人はその一人なのです」と話すと、おじいさんは「それは悪いことをした。自分はなんということをしたんだ」といって、橋本さんのカメラマンジャケットのポケットというポケットに、ヒマワリやカボチャの種を詰め込みました。ほら、中国の人たちはあれをおやつとしてよく食べますでしょ。そのおじいさんは街角であれを売って暮らしを立てていたのです。私はそのお相伴に預かりながら、今のような話を聞きました。

話はそれで終わりません。橋本さんはその後もよく天鎮県に撮影にでかけましたが、そのたびにそのおじいさんが元気であるか探しに出かけました。おじいさんはおじいさんで、日本人が来ていると聞くと、そこに橋本さんが交じっていないか探しにきました。あるとき橋本さんは昼食の席にそのおじいさんを連れてきたのです。何度か乾杯を繰り返したあとで、私は橋本さんのカメラを借りて彼ら2人が肩を組んでいる写真を撮りました。橋本さんの家に行ってみると、彼はそれを大きく引き伸ばして額に入れて自分の部屋に掛けていました。

大同でボランティアツアーの人たちを案内しながら、私はよくこの話をしました。こういう事件があったけど、理解し合えるものだし、理解し合わないといけないんだと話したんです。

それを橋本さんが聞きつけたんですね。私のところに来て「高見さん、俺のことを話しているらしいな」と言うのです。橋本さんは私と同じですごく口が悪いので、私もちょっと身構えました。すると彼は一言、「だけどいい話だよな」と静かに言いました。それで解禁されたんだと理解して、その後もこの話をしてきたのです。橋本さんも自分で写真集を発刊したとき、あとがきにこの経験を書いています。

その頃は全く知りませんでしたが、事件があったのは盧溝橋事件の2か月後のことで、日本軍が発動した察哈爾作戦とか山西作戦の最中のことでした。中国では天鎮惨案として有名な虐殺事件で、そのおじいさんは生き残りの1人だったんですね。

日本人として普通ならあまり来たくないところでこの事業をスタートしたんですけど、だんだんいい関係ができてきたのは一緒に汗を流したのがよかったと思います。最近は毎年250人くらい、この16年では延べ2600人ほどの人が大同に足を運んでおり、最年少者は1歳半、最高齢者は84歳です。農家にも1晩泊めていただいて、農村の生活を体験し、交流を深めてきました。

何年前かに私は共青团中央と中華全国青年連合会が主催したシンポジウムで報告したことがあります。その題は「恋愛と結婚・子育て」というものでした。内容は日中友好というのは恋愛のようなもので、お互いの理解が浅いうちが燃え上がるものだ、自分の彼女はトイレなんか行かないし、おならなんて絶対にしないと思っている方が燃え上がるに決まっているわけです。それに対して木を植えて育てるのは、長い結婚生活を維持しながら子育てするようなもので、相手の欠点や弱点も理解してお互いに助け合うことが大事なんです。恋愛のときはお互いに気持ちのいい時だけ会ってお互いに向き合い、相手の顔を見つめ合っていればそれで幸せです。でも子供を育てるとなると、困難に遭遇したときほど身を寄せ合い肩を並べて助け合っていくことが大事です。そういう話をしました。

それから何年もたって、今振り返ってみてもそのとおりだと思います。私たちの場合、初期に失敗や困難にたくさん出会いましたが、そのことがお互いの理解と信頼関係を深めるのにむしろ役立ったと思います。あれがスラスラと成功から成功へときていたら、こんな関係には恐らくならなかったでしょう。

先ほどスライドで木が育ち始めた様子を見ていただきましたが、10年、15年をへて、初期のような苦労は確かに少なくなりました。では、それですべて順調かというと、決してそうではありません。大同のスタッフたちはこの間にもものすごく経験を積んだと思います。飛躍的に能力を伸ばしました。私も少しは学習しまして、初期のような無謀な願望を抱かなくなりました。その状況に合わせて一歩ずつしか前進できないということです。あまり欲張って無理な目標を立てても、できないことはできないのです。そのあたりで呼吸が合ってきました。

ではそれで楽になったか、うまく行くようになったか、すべて安心かといえば、そうはいきません。事業の内容が複雑になり、高度になってきました。以前とは比較にならないくらいたくさんのお金を稼いでいます。これも子育てと同じですね。子供が小さいときは小さいなりの苦労があり、大きくなれば大きくなつたで、以前とは違う苦労や心配事がでてくる。武春珍所長なんか、息子さんの方が背丈もずっと大きくなりましたけど、心配事は絶えないんです（笑い）。

もう少し具体的に申しますと、私は何度も言いますように中国語も分からないので誤解していることもあるかも知れませんが、中国社会もいま大きな転換点に差しかかっているように思えてならないのです。欧米や日本などが4世代、5世代かけてやってきたことを、今の中国は1世代のうちに凝縮してやっていますね。それで問題が顕在化しないはずがありません。その一つが環境問題の深刻化です。それについては水問題を中心に最初にお話ししましたので、これ以上は触れません。

もう一つは格差の拡大です。東部沿海地方と内陸部との地域間格差は巨大なものです。そして私が通っているのは山西省なのです。山西省のトップリーダーが「山西省不是東西」と言ったそうですね。「東西」というのは中国語で物のことですから、「山西省は物じゃないんだ」と言ったんですね。そこには「山西省は東でも西でもない」という意味も込められています。山西省は東部沿海地方の大発展から大きく取り残されました。それから西部大開発が戦略化されたとき、山西省は西部に入っていないでした。税制その他の面で不利になったようです。現に山西省には外資はほとんど入っていません。

それから都市と農村の格差拡大も深刻です。大同は中国最大の石炭の街です。石炭は庶民の生活燃料ですから、その価格は政策的に低く抑えられてきました。1980年代から90年代にかけて中国経済が離陸するなかで、建築用の砂利より石炭が安いということすらあったわけです。その一方で石油の役割が大きくなったり、内蒙古や陝西省で天然ガスの開発が始まると、石炭は過去のものになったのではないかという雰囲気も一時は広がりました。そのころの大同は暗かったんですね。

ところが近年の中国経済の大発展、大膨張のなかで石炭も不足するようになりました。掘っても掘っても足りません。その結果、先ほど話しましたように、たった6年間で石炭価格は7.5倍にもなりました。大同市のGDPの60パーセント以上を石炭関連が占めると言われますが、その基幹のところでもそのような巨大な変化が起これば、いったいどうなるでしょう。まったく分からないというのが私の率直な気持ちです。まずは物価が急上昇しています。特に肉、野菜といった食料品が値上がりしています。豚肉はこの1年で3倍以上に上がりました。住宅も2年で2倍に上がっています。衣食住の全てと言いたいところですが、衣類は横ばいのようなようです。自動車や家電製品はむしろ安くなっているそう。そういうバラツキもあります。

食料品が上がっているし、農業税も廃止されたから、農村は良くなっているんじゃないかと

思われるかもしれませんが、そうではないですね。最初に申しましたように、今年は深刻な旱魃で収穫が望めません。取れたとしても自家消費分が精一杯です。平年だって売るだけの余剰はそうあるわけではありませんから、食糧の価格が上がっても大幅に収入が増えるわけではないのです。その一方で石油などの素材にかかわるものの価格上昇が急ですから、化学肥料は高くなる、農薬も高くなる、ガソリンは高くなる、農器具も高くなる。むしろ苦しくなる要素のほうが大きいんじゃないですか。

石炭で大儲けをしている人の話とか、株で大儲けをしている人の話とか、それは彼らの耳にも入るでしょう。通信は便利になりましたからね。農村にいても、心は落ち着かないと思いますよ。「どうして自分たちだけが置き去りにされているんだ」とね。その焦りや苛立ちを、いろんな場面で私も感じるようになりました。農村がいつまでも大人しいと思ったらまちがうでしょう。

そんななかで、現地の活動を推進しているのは私たちのカウンターパートなんですね。彼女たち彼たちの活動ぶりを見ながら、ほんとに大変だなと思います。「以前は良いことはやり易かったけど、今は良いこともやりにくい」というんですよ。そう言いながらも、ほんとによくやっています。私は完全に脱帽で、マネのできることはありません。でも人間はこのような困難のなかでこそ鍛えられ、能力を向上させるんでしょうね。この事業を継続しながら、この事業を支えてきた人たちが今後どのように成長し伸びていくのか。それを見ることは、ある意味では樹木が育つを見るのより、もっと楽しいことですね。なにか無責任な感じがしないでもありませんが、ほんとにそれは楽しみです。

とりとめのない話で恐縮ですけれども、私の話をこれで終わります。どうもありがとうございました。

(孫) 高見先生どうもありがとうございます。続きまして、コメンテーターの方をお願いしたいと思います。北京大学環境学院副院長の劉先生に来ていただいております。

## NO. 457 植生調査 2008. 03. 31

3月27日から、29日の夕方、私たちのワーキングツアーが到着するまで、大同市最南部の、靈丘県に滞在しました。大きな目的は、靈丘自然植物園で、植生調査を継続するための、基礎づくりです。遠田宏先生、前中久行先生に同行しています。ふたりとも、私たちの顧問です。

3月27日は、昼の1時半すぎに着きました。自然植物園のスタッフと、かんたんに打ち合わせたと、現場に向かいました。20m×20mの、調査区を設定し、そのなかの樹木の生育ぶりを、継続的に調査します。乾燥地では、陰坡（日陰斜面）と、陽坡（日向斜面）とで、植物の種類も、生育ぶりも、極端にちがいますので、最低でも、2か所は設ける必要があります。

しかし、このように書くのはかんたんですが、じっさいは、かなりめんどろです。管理棟があるのは、標高 900m ほどの地点ですが、森林の再生が、急速にすすんでいるのは、海拔 1,200m 前後の地点です。急な坂道を、登っていかないといけません。敷地内のいちばん高いところを、南天門といいます。泰山の山頂が、この名前で有名ですが、もちろん、そこはちがいます。でも、私たちがかってにつけたものではありません。地図にも、ちゃんと、記載されています。管理棟から、南天門までは、道をつけました。雨のたびに、流されてしまうので、一部は、コンクリートで舗装してあります。

この道の途中から、等高線に沿って、枝道を伸ばしました。海拔 1,200m のところです。そのおかげで、樹木が生育しているようすを、手軽に、観察できるようになりました。昨年夏、ここを視察した、日本の専門家たちは、「この道は値打ちですよ。それにしても、よくこれだけのことをしましたね！」と、感心してくれました。敷地内の道路によって、ここの意味が倍増しています。

陰坡のほうは、この道沿いに、プロットをとりました。等高線に沿って、巻き尺で、20m をはかって、その両端に、杭をうち、ロープをはりました。これがたいへんなんですね。ここは陰坡で、日当たりが悪いので、土の凍結がとけていません。李向東が、杭の頭をガンガンたたきますが、はいつていきません。しかたなく、1 本は、立ち木にくくりつけました。そのあと、両端から直角に、20m をはかり、ロープをはります。残った 1 辺が、ちゃんと 20m になるか、不安でしたが、ほぼ正確でした。ちょっとぐらい、ちがっても、かまわないんでしょうけど、これから、長く継続することを思うと、できるだけ正確にしておきたいのです。経験の豊富な、前中さんが、指揮してくれました。

それから、区域内の、胸高周囲が、13 センチ以上のすべての樹木をマークし、ナンバリングしました。120cm の木の棒を、私がもち、その高さに印をつけていきます。この直後に、白いペンキで塗っておきます。順序をそのようにしたのは、ペンキ塗り立てでは、測れないからです。スタッフの孟さんが、番号札を打ちつけていきます。3cm×4cm の白いプラスチック札に、ヒモをとおしたものを、電気ケーブル固定用の、ステーブルで打ちつけます。札の両面に、マジックインキで、数字を書き込んであります。通訳の任さんが、臨時に担当してくれました。水俣の照葉樹林で、長く実施されてきたノウハウを、そっくりいただきました。

李向東が、スチールメジャーをあてて、胸高周囲を、読み上げていきます。それを、前中さんが記録しました。樹高もはかりたいところですが、その器具は、3 月 29 日に到着するツアーの人たちが、運んできてくれます。前中さんによると、樹高は 4m ほどだそう。まだ若い林です。400 平米のなかに、胸高周囲 13cm 以上の樹木は、ちょうど 80 本ありました。大部分はリュウトウナラです。その最大のものの胸高直径は、11cm ほどです。シナノキも、7 本ありました。おそらくマンシュウボダイジュですが、葉のない状態では、正確なことはわかりません。ほか

に、シラカンバと、アブラマツが、2本ずつありました。シラカンバは、ほんとは1本ですが、胸高より下で、幹が2本になっているため、そのように記録しました。アブラマツは、1960年代に、飛行機で播種されたものです。

林床には、腐葉土が厚くたまっています。土ができれば、樹木の生長も速まります。いい循環ができていくでしょう。この林が若いこともあって、これからの変化は急速でしょう。おもしろいデータをえられると思います。

それにしても、日本と中国の混成グループで、わずか半日足らずで、よくこれだけのことができたものです。じつは、2000年を最初に、同様の調査を、数回やったことがあります。今回は、長期の継続を前提に、調査区域を固定し、一本一本の樹木を、ナンバリングしたのです。  
(つづく)

#### NO. 458 植生調査（陽坡） 2008. 04. 07

陰坡（日陰斜面）は、わりとラクに調査をすすめられました。陽坡（日向斜面）はたいへんです。まずは、対象となる場所を、みつけにくい。こちらは、植物が育ちにくいのです。日向斜面は、乾燥がひどいためです。そのことについて、私は何度も書いてきました。でも、うかつにも、大事なことに、気づいていませんでした。植物がないということは、土地がむきだしになるということです。すると、雨のたびに、土が流されます。岩盤が、むき出しになっているところも、少なくありません。こうなってしまうと、おそらく半永久的に、植物は、育ってこないでしょう。だとすると、調査・記録する意味もない。

そのうえ、ここの敷地は傾斜が急で、地形も複雑なのです。陽坡は、とくにそうです。20m四方を、連続してとれるところが、なかなかありません。あんまり急なところは、身が危険です。測定どころではありません。27日の夕方、暗くなるころに、陰坡の調査を終え、陽坡にも、目星をつけて、下山しました。

翌28日は、朝から現場にむかいました。ホテルをでるところから、チラチラ、小雪が舞ってきました。山に登りはじめのころは、吹雪です。南南西の方角から、雪がまよこに飛んできます。陰坡の調査地からは、あいだに1つ尾根をおいた尾根筋ですが、陰坡とほぼ同じ標高(1,200m)で、適当な場所がみつかりました。傾斜は、こちらが急です。生えている樹木は、トネリコ（おそらく中国名で小葉白蠟樹）と、ニンジンボク（中国名・荊条）です。トネリコは、多いところは100本以上が、群生しています。李向東によると、大きいものは、樹高7~8m、胸高直径10cm近くになるようですが、それほどのものは、ここにはなく、大きくても2mちょっと。胸高直径は、3cm以下です。ニンジンボクは、それより小さい。

ここでも、ロープを張りました。傾斜は急ですが、樹木が少ないぶん、見通しがきくので、陰坡の作業より、ラクでした。陰坡は土が凍っていましたが、ここはラクに杭がはいりました。日向斜面は、すでに凍結がとけています。胸高直径が 1.5cm 以上のものを、測定対象に決めました。基準を甘くすると、対象の数がふえ、作業がたいへんになるのに、調査の効果はともないません。少なすぎると、統計上の価値がありません。現場の状態をみて、前中さんが基準を決めたのです。陰坡のプロットにある小さな木にも、この基準を適用することにしました。

ナンバリングをしようとしたら、プラスチック板が、雪で濡れて、数字が書けないのです。通訳の小任が、乾いた布で拭いては、書いていきました。幹の太さが細いので、番号札を、ステーブルで止めることはできません。ヒモで枝にくくりつけました。スチールメジャーでは、正確には測れませんので、ノギスで、直径をはかって、記録します。私の知っているノギスは、バーニヤダイヤル付きの、アナログでしたが、これはデジタルで、小数点以下 2 桁が、mm の単位で表示されます。はじめてすぐに、フィールドノートを手にした前中さんが、「記録ができない」と、悲鳴をあげました。吹雪で、濡れてしまうのです。

しかたがないので、下山しました。県城のホテルに引き返す途中で、雪はだんだんひどくなり、すっかり雪景色に変わりました。大同市内は、15cm も積もったそうです。もう 3 月も末、この時期、これほどの雪はめずらしいのです。私は、はじめての体験です。

心配しながら、29 日を迎えました。夕方には私たちのワーキングツアーがやってきますので、とりあえず、残されているのは、きょうだけです。くもりで、雪はやんでいます。問題は、雪がどれだけ積もっているか。県城を抜けたあたりでは、畑が白くなっています。平地でこれだけあると、山はちょっとつらいかな。

幸いなことに、私たちの自然植物園は、県城より南にあります。南にくだるにしたがって、雪がすくなくなっていきました。自然植物園は、その全景を、国道 108 号線からみることができます。目的の場所は白くなっています。運転手の小郭は「とても登れない」といいました。

管理棟で、調査用具を整え、登ることにしました。下からみると、まっ白にみえて、よほど雪が深いようにみえたのに、じっさいに歩くと、それほどでもありません。しかし、私は、履き替えてきた登山靴に、雪がはいってしまいました。スパッツがあれば問題ないんですけど、よもや、こんなことがあるとは思っていませんでした。

現場につくなり、調査をはじめました。小さい木で、数が多いので、時間がかかるでしょう。私が、直径 1.5cm 以上の木の、胸高位置に、マジックインキでマークしていきます。それに、周金が、番号札をくくりつけます。李向東と、老孟が、ノギスで、2 方向から直径を測定して、読み上げ、前中さんが、記録していきます。なかなかいいテンポですすみました。途中で、前中さんから指摘されました。「べつに問題じゃないけど、高見さん、直径 1.5cm 未満の、小さい

ものも含めてきているよ」。このあたりに、人間の甘さがでるんでしょうね。

20m 四方のプロットを、はかり終えたあと、前中さんは、胸高直径 1cm 未満の小さなものも、ランダムに 25 本ほど、はかっておくよう、指示しました。若いもののほうが、変化が大きいので、中国側スタッフが、この調査を引き継いだとき、楽しみがふえると、考えたんでしょうね。さすが！李向東や、周金も、すぐにその意図をさっしたようで、ただ小さいだけでなく、若い木をみつければ、私に、それをマークするよう、指し示します。

1 時前になって、やっと終わりました。天候は回復して、薄日がさしています。ここは陽坡です、いつのまにか、雪はとけて、なくなりました。この位置からは、私たちの敷地のかなりの部分がみえます。ハッと気づきました。いま、雪が残っているところと、樹木の多いところが、みごとに重なり合っています。山の下はすでにとけていますが、そこは樹木がすくない。山のうえの方でも、陽坡は雪がとけており、そこには樹木がすくない。そのようすを、写真に撮りました。

管理棟にもどって、インスタントラーメンを食べたあと、その近くの代表的な樹木を、同じようにして、測定しました。このスタッフたちは、周金が私たちにつきあい、ほかは、明日やってくる、ワーキングツアーの植樹のための、苗木を掘り起こす作業をはじめました。

#### NO. 459 通水式 2008. 04. 18

大同市総工会の名義で、日本の外務省草の根無償資金協力を申請し、大同県の三十里鋪村に、小学校を建て、遇駕山村で、井戸を掘りました。じっさいのしごとは、総工会に所属する緑色地球ネットワーク大同事務所が担当しました。緑色地球ネットワーク大同事務所を、私たちの現地事務所と誤解されることがありますが、そうではありません。また総工会を日本風に労働組合と考えると、それも誤解のもとです。大衆組織という建前で、そうした要素もなくはないのですが、政府機関と考えたほうがいいでしょう。

小学校のほうは、わりと順調にすすみました。井戸のほうは難航したのです。大同事務所の武春珍所長は、夜も眠れなくなった、といました。このたよりの 447 号で、くわしく書いています。

この春は、BS 朝日のクルーが、撮影にきています。これから何回かきて、すこし長い番組をつくりたいとのこと。黄土高原のキーワードは水不足ですから、水のない村を取材したいのだそう。それだったら、文句なしに遇駕山村でしょう。2000 年に、私たちはこの地方の農村の調査を実施しました。メインのテーマは緑化ですが、水についての項目もいくつか入れていました。1 人 1 日の水使用量を尋ねたところ、7 つの県の、21 の村の平均が、23.8L でした。トイレ

の大を2回流すくらいの量です。遇駕山村が最低で、15.6Lでした。印象がふかかったので、私は、数字をちゃんと覚えています。

井戸掘りは成功しましたが、冬のため、パイプの接続ができません。ですから、実際の生活は、水不足のままです。これまでは、村のはずれの谷の、伏流水を利用していました。冬はそれでも水があり、夏になるとたりなくなるそう。そのときは、となりの村まで、もらい水に通うそうです。夏ほどではないでしょうが、水不足の生活を撮影できるでしょう。この村をすすめました。

せっかく撮影に行くんだったら、その機会に、井戸掘りのことも、とりあげてもらいましょう。その日にあわせて、通水式を設定しました。日本側からも、たくさん出席したほうがいいので、この時期にきている、イオン労働組合と、サントリー労働組合の合同ツアーの日程を、すこし調整することにしました。そんな関係で、4月15日の午後4時からという、異例の時間設定になりました。

取材クルーは、午後いちばんから村内の撮影をしています。ツアーは、カササギの森の活動を早めに切り上げて、マイクロバスで、村に到着しました。それにあわせて、花火と爆竹がたかれました。トラックの荷台で、太鼓と銅鑼が、にぎやかに鳴らされています。レンガづくりの、水道塔のまえに、机がならべられ、ちいさな舞台がつくられました。ヤンゴーといったかな？ 農村の伝統的な踊りの服装のきれいどころが、順番待ちをしています。

周土庄鎮の解志海書記が司会をし、鎮長が経過報告をしました。飲み水に困る村の歴史に、きょう、終止符が打たれることが、なんととなく繰り返されました。この村では、以前にも井戸掘りを試みましたが、途中で、頓挫したのです。このたびも、最初に掘ったものは、水がでるまえに、100mのところ、それ以上、掘れなくなりました。苦悩と逡巡の末、各方面の協力を結集して、やっと水脈にたどりついたのです。

日本側から、私がいさつしました。恥ずかしいことに、途中で、声をつまらせてしまいました。袁さん夫婦の顔が、目にはいり、ここにいたる経過が、パッと頭に浮かんだからです。この村の背後には、遇駕山があります。この山は、1985年に、ほぼ1,000haの造林がなされました。植えたのは、アブラマツと、モンゴリマツ。袁さんは、74歳のいまも、山頂にある見張り小屋に住み着いて、この山の管理をしています。私たちは、1994年を最初に、この山をしばしば訪れました。袁さん夫婦とも、10年以上のつきあいで、いつも、親切にしてもらいました。

テープカット（じっさいは赤い布を切りました）のあと、ポンプのスイッチをいれました。花火と爆竹が、ふたたびはじけました。数十秒のあと、鉄のパイプから、水が勢いよく吹き出しました。最初は、黄緑っぽい色がついていましたが、そのうちに、透明の、きれいな水になりました。何人もの人がかけよって、バケツで、その水を受けます。誰かが、コップをもって

きて、回し飲みをはじめました。私も、飲みました。中国では、生水はぜったいに飲まないと決めています、このときばかりは、そうはいきません。

何人もの、年配の女性に、とりかこまれました。彼女たちは、最初は笑顔でしたが、そのうちに、涙ぐんでしまいました。水をつづるのが、どんなにたいへんだったか、その苦勞がなくなったことが、どんなにうれしいか、口々に、私に話しかけるのです。袁さん夫婦も、だきついてきました。

着飾った女性たちが、踊っているなかに、ツアー参加者たちが、入り込んで、いっしょに踊っています。エンドレスかと思えるくらい、いつまでも、いつまでも、つづきました。踊りが終わったあとも、村の人は、帰ろうとしません。ツアーの参加者たちは、「こんなすてきな笑顔を見せてもらって、最高ですよ。いつまでも、忘れないと思います」と話していました。

このしごとの立役者は、大同事務所の武春珍所長です。もしも、私が彼女の立場におかれたら、きっと、途中で、投げ出していたでしょう。それくらい、困難な立場に、追い詰められたのです。その彼女が、私に話しました。「農民たちの、あの笑顔をご覧ください。泣いている人もいます。生活にとって、水ほど、たいせつなものはないのです。果樹を植えたり、学校を建てたりするのも、よろこばれますけど、それとはレベルがちがうようです」。そのとおりでしょう。

昨年12月、私たちがこの村を訪れたとき、ほぼ、水脈に、到達していました。それでも、彼女は、「井戸を掘るのは、もうやめましょう。地下のことは、だれにもわかりません。大きなリスクを背負うことになりますから」といって、疲れ切っていたのです。

大同県の水務局長が、彼女に話したそうです。「あの村の井戸掘りが、とてもむずかしいことは、関係者のあいだでは、よく知られていた。あんたたちは、門外漢だったから、そんなことができたのだ」と。そういえば、私たちが黄土高原での、緑化協力を開始してすぐ、高名な専門家から、言われたことがあります。「きみたち素人は勇敢だ。あのむずかしい黄土高原で、協力をはじめるとはなんて…」。

## NO. 460 雨には恵まれたけど 2008. 04. 24

ことしの春は、雨が多いのです。黄土高原では、春に雨がなく、「春の雨は油より貴重だ」とさえ言われます。なのに、雨がおおい。私が大同に到着したのは、3月20日でしたが、この日も雨でした。

土地が湿っていれば、土は舞い上がりません。雨は、土ぼこりを落としますから、黄砂でか

すむことも、ほとんどありません。そのかわりに、朝方、濃霧が発生して、北京→大同の飛行機が、4.5時間も延着したことがありました。乾ききっている大同では、めずらしいことです。

ことしのボランティアツアーは、春に集中しました。オリンピックのためです。一度に、数グループが滞在したこともあったのに、ふしぎと、作業への支障は、少なかったのです。土が湿っているために、穴も掘りやすかった。

そんなことを話題にしていると、4月22日の大同晩報が、一面トップで、雨のことを書きました。とにかく雨が多く、3月初旬から、4月21日までの降水量は、大同市の平均で、52.4mmにもなり、同時期の歴年平均の、1.91倍にもなるということです。いちばん多いのは、左雲県で、89.4mm、この県の歴年平均の、3.3倍にもなるそう。近いところでは、4月19日に降り始め、20日朝まで雨が降り、おおいところは16.7mm、少ないところで6.4mm、平均は11.65mmだったそうです。气象台の話では、南の温暖で湿った空気が、ひんぱんに流れ込んできているためだそうです。

雨には、3つのいいことがあると、その新聞は書いています。第1に、春の農耕作業にとって、たいへんいい。そのとおりです。雨が降らないために、種をまけず、イライラしている農民をみるのは、つらいことでした。

第2のいいことは、山火事の危険を減少させることだといいます。たしかにそうですね。一昨年の春は、雨がないうえに、風がつよく、山火事が、あちこちで発生しました。最近、大興安嶺で、大きな森林火災が発生したとききましたが、あちらは、雨がすくないのでしょうか。

第3は、すでに私がかいたように、土の表面がしめると、土が舞い上がることがない、というのです。

春に雨が多いのは、16年ぶりだと、新聞は書いています。前回は、1992年。テーブルで、そのことが話題になったとき、私は、すぐに思い出せなかったんですけど、だんだんと、記憶がはっきりしてきました。石原忠一団長をはじめとする、最初の協力団が山西省にきたとき、雨がおおかったのです。春には雨がないうえに、ときくと、「みなさんが雨をつれてきたんだ」といわれました。毎日のように、くもったり、雨がふったりしていました。

北京にでて、私はべつの用事をし、協力団のメンバーは、万里の長城を見学しました。そのとき、きれいに晴れ上がり、ガイドが、「こんなにきれいに晴れるのはめずらしいことです」と語ったそうです。天気のことだけじゃなく、黄砂のこともいったんでしょうね。で、帰ってから、「高見さんが雨男なんだ。あなたがいなかったから、きれいに晴れた」といわれました。そんなことはありませんね。それから毎年の春、私は大同に滞在してますけど、雨がふることは、ほんとに少ない。雨男だったら、どんなにいいことか。

この新聞のでた、4月22日も、雨がふったり、雪がまったりしました。ですから、降水量は、もっと増えているはずです。ありがたいことです。

三寒四温といいますけど、ことしの春は、それが極端すぎます。寒くて長い、冬だったのですね。大同では、これまでの最低気温を2度更新し、零下30度を記録したそう。山では、もっと寒かったでしょう。

土地が凍結しているために、穴を掘れませんでした。ですから、木を植えることができません。4月中旬になって、急に気温があがり、植物の芽が、動きはじめました。芽が動いてから植えたのでは、活着率が下がります。緑色地球ネットワーク大同事務所の、武春珍所長も、いらだっていました。ツアーに、ともなうことはあまりなく、作業全体の、指揮をとるのに忙しかった。

最高気温が、30度に近づくこともあったんですよ。3月末までは、死んだように茶色だったヤナギが、だんだんと黄緑色に変わり、最近は、小さな葉がめだってきています。4月19日から、天鎮県にでかけたときは、あちこちで、アンズの花が、満開になっていました。もう、これで、寒さがぶり返すことはないかな、と考えていました。

それが、あまい、あまい！4月22日は、最高気温が6度、最低気温にいたっては、-5度だということです。そして、雪がまう。高いところにあつて、開花のおそい、渾源県呉城村のアンズも、21日の時点で、八分咲きだったそうです。花が咲いてから、寒波にあうと、落ちてしまうことが、おおいのです。党書記の、王迎才さんは、遅霜をふせぐための、おそらく発煙筒のようなものを、西安から買ってきて、ことしの春は、試験してみると、語っていましたが、まにあつたでしょうか？アンズのことが、いま、いちばん気になります。

#### NO. 461 評判の市長 2008. 04. 28

3月下旬のことです。私たちが泊まっているホテルのまえの歩道にコンクリートのかたまりがありました。以前の工事で、取り残されたよう。ちゃんとしたホテルで、あつてはいけないことだと、ひとりの男が、注意したそうです。時間をおかずに、処理されました。その男は、大同市の市長でした。

今回の滞在中、周囲の人たちが、新しい市長のことを、何度も話題にしました。これまでに、なかったことです。「いまの市長が、3年も大同にいてくれたら、大同は根本的に変わるのに…」といった人もいます。前職は、太原市の副市長で、そこでも成績をあげたのだそう。

「みたらわかるでしょう。大同の街が、ずいぶんと衛生的になりました」といった人もいま

す。たしかにそうですね。以前は、いたるところに、ゴミの山ができていたのに、それが、なくなりしました。「今度の市長がやったことは、いままでの人が、やれなかったことばかりです」というのです。

ゴミの焼却場を建設する計画もすすんでいるようですが、いまはまだありません。くるまで走っていると、大同県のところに、ゴミ埋め立て場の看板がでてましたから、農村部の荒地に、埋め立てているよう。ほかにもあるのでしょうか。

衛生関係のしごとに、失業者を生かして使っているようです。賃金は、ふつうより安いようですが、物価上昇がすさまじいなかで、しごとがないのより、ずっといいでしょう。警官の補助のようなかたちで、失業者をやとい、交通整理もやられています。そういえば、以前より、交通秩序もちょっとはましのよう。

道路が拡幅され、舗装もよくなりました。そして、いまも拡幅工事中です。道路に面した建物に、「拆」(チャイ)とか、「后退6米」とか、ペンキで殴り書きされています。前者は、取り壊し。後者は、「6メートル後退」ということです。くるまなら、後退もかんたんですけど、建物のばあいには、どうするんでしょうね。私らの目でみると、ずいぶん乱暴なことですけど、それをやってしまうんですね。対価をはらうか、同面積の部屋が提供されるので、問題はない、とっています。

すでに取り壊されている建物も、あちこちにありますし、大型のパワーショベルで、現在進行形のところもあります。いい悪いの評価は、分かれるでしょうけど、このスピード感は、日本人には理解できないでしょう。

街路樹も、どんどん植えられています。驚くのは、胸高直径が20cm、高さが5~6mもあるようなポプラが植えられたりしていることです。これなんか、苗とはいえないですね。どこかの林場から、抜いてきたんでしょうけど、モンゴリマツや、アブラマツの大きなものも、植えられています。胸高直径が20cmもあり、なかには樹高4mといったものもあります。1本植えるのに、1,500元はかかる、といます。

市内の道路は、くるまが激増して、大気汚染も深刻です。マツは、大気汚染に弱いですからね。以前に植えられたマツに、枯れるものがでていますし、成長をまったく停止して、古木のような姿になっているものも、すくなくありません。マツカサもたくさんついています。弱っている証拠です。

大同の冬は、寒くて、長いのです。冬でも青いものがほしい、という気持ちは、わからないではありません。常緑の広葉樹は育ちませんから、マツしかないのです。でも、枯れてしまったら、夏でも青くはありませんからね。あれだけ育ったマツの、使い捨てをつづける結果にな

らないでしょうか。

大同を離れ、北京まで帰ってきました。ことしの春は、かなり無理な日程で、疲れています。やっと、終わりました！

## NO. 462 四川省の大地震 2008. 05. 21

ほぼ週刊のペースで発行している、このたより、3週間も、あいだがあきました。私のことを心配して、「だいじょうぶですか？」と連絡をいただいた方もあります。私の体調は、絶好調とはいえませんが、それほど悪くありません。

四川省の、あの大地震のニュースで、めいっちゃったんですね。どうしたらいいか、なにができるか、自分の腹がきまらないし、これから、どういうふうに進展していくのか、見当もつかないで、イライラしていました。当然、書くことなんて、できはしません。テレビや新聞でみるかぎりですけど、今回も自然災害は、貧しい地方の、貧しい人びとを、狙い撃ちしているようです。痛ましいことです。

そして、とにかく地震エネルギーが強烈で、被害の規模が、信じられないくらい、大きかった。18日になって、マグニチュードは8.0に、訂正されました。この数値は、モーメントマグニチュードというんだそう。阪神大震災の7.3といわれているのは、気象庁マグニチュードだそうで、計算のしかたがちがいで、モーメントマグニチュードにすると、6.9なんだそう。ですから、50倍も強烈だったようです。

犠牲者は、推定5万人にもなるよう。被災者数は、1,000万人を超え、避難生活を送る人が、5百万人にもなるそう。被災面積は、日本の国土を超えるそうですから、すさまじいものです。そのうえ、死者が出るほどの、余震もつづいています。地震湖がたくさんでき、亀裂のはいったダムも数百にのぼるそう。決壊の危険が、高まっています。感染症なども、懸念されます。これからは、二次災害が心配です。

私は、地震発生の翌日、さる大学での報告で、「こういう自然災害のとき、世界のなかで、もっとも効果的な対応ができるのは、中国政府でしょう。また、中国の農村の人たちは、ほんとうに強い」などと話したんですね。というのは、経験しているからです。1998年1月、河北省張家口市で、地震があったとき、私は、その翌日に震源地を訪れ、被災地を見舞った、最初の外国人、ということになりました。そのときの救援活動が、軍を中心に、あまりにもあざやかで、印象に残ったのです。その翌年には、大同で地震がありました。このときも、直後に被災地をまわり、同じような印象をもちました。とにかくトップが、すぐに現地にはいり、その場の空気を呼吸しながら、対策を打ち出していく。今回も、温家宝総理が、そのようにしました。

それでも、救援は、思うようにすすみませんでした。破壊の力が、あまりにも強かったのです。もう1つは、インフラの弱さです。建物も、道路も、強度がない。とくに、多くの学校が倒壊し、子どもたちが犠牲になったのは、痛ましいことです。新聞などでは、違法建築や、手抜きの手抜き、という指摘がなされていますが、たしかに、それもあるでしょう。

ただ、それだけではないと思います。大同の農村で知るかぎり、学校の校舎も、あるだけでもましじゃないか、ないよりは、といったところがありますからね。農村が、自分でつくった日干しレンガの校舎、明代に建てられ、5百年以上もたっている道教の廟が教室として使われているもの、などなど。かなりガタがきて、「拆」（チャイ）と書きなぐられた教室を何度も見たことがあります。「取り壊し」のことですね。数千もつぶれた、といわれる校舎のなかにはそんなものもあるでしょう。

それから、背伸びのところが、あると思います。大きければ大きいほどいい、高ければ高いほどいい、という考え方が、中国では強いのです。北京あたりで、奇をてらった高層ビルがはやると、地方都市では、そこまではいかないけど、やはり、高さをめざす。農村でも、平屋よりは、4階建て校舎のほうが、りっぱだとみる。材質や技術が、それにとまなわれないため、被害を大きくしています。

しかし、いまは、そうしたことを取りあげるより、救援がすすむことを、願うばかりです。そして、つぎの段階で、被害を、ここまで大きくした原因を掘り下げて、反省すべきを反省すべきだと思うのです。

私たちも、義援金の募集をはじめました。被災者が、衝撃から立ち直り、生活を再建するまでには、長い時間がかかるでしょう。中国の団体とも協力して、できるだけ効果的な方法を考えたいと思います。さっそく、協力をいただき、勇気づけられております。よろしく願いいたします。

## NO. 463 義援金を届ける 2008. 06. 10

四川省大地震の被災地救援のため、私たちが呼びかけた義援金が、短期間で5百万円を超えました。5年あまり、ずっと連携してきた中華全国总工会と、中国職工対外交流中心に連絡したところ、贈呈式をもちたいので、北京にくるように、ということです。儀式が大きらいな私も、協力してくださった方の思いは、伝えたい。6月2日にでかけました。今回は、北京だけです。

それでも、いくつもの気づきがありました。あれほど目についた、オリンピック関係の広告やポスターが、空港や市内で、ほとんどみつきりません。それに換わって、「抗震救災 衆志成

城」という、中国のテレビ画面の片隅でおなじみの、あのスローガン。

義援金の目録を、中華全国総工会書記処書記、中国職工対外交流中心副会長の、陳栄書さんに手渡しました。それに先立って、こころのこもった、あいさつをいただきました。私たちがこれまでつづけてきた協力の内容を、よくご存じのようです。私も、私たちの会員や協力団体が、どんな思いで協力してくれているか、伝えました。また、日本のいたるところで、募金活動などがおこなわれていることも話しました。

日本をでるまえに、私たちの古い会報を、ひっぱりだしてみました。阪神大震災のさいに、全力で、救援活動にとりくみました。そのさいに、1か月半ほどで集まった義援金が、267万円でした。わずかな期間に、その倍近い義援金が、このたびは寄せられたわけです。中国人の反日と、日本人の嫌中は、たがいに刺激し、こだましあい、おたがいの感情は、いいとはいえませんでした。私たちの活動にも、障害になっています。このたび、そこに穴があき、こころが通いあったことに、私じしんが、感動しました。

中国の人たちの、日本人にたいする感情も、大きく変化しています。とくに、反日の噴出の場であったネット上で、変わっているよう。

古くからの友人とあう一方、ホテルでテレビにしがみつきました。最初の訪中以来、37年にもなるのに、初めてのことです。ニュース番組では、3分の2くらいが、地震関連です。衛星放送でみる四川テレビは、専門の局とっていいくらい。そればかりです。大同からきてくれた、大同事務所の運転手の小郭は、毎晩、遅くまでみないではおれない、とっていました。

大阪市立大学名誉教授の、高田直俊さんが、Eメールで、連絡してくださいました。土木が、ご専門です。私は、そのことばの一部をお借りして、「阪神大震災に、中越地震の山古志村をたして、それに10をかけたようなもの」といっているんですけど、ほんとにそういう状態です。

ガレキの下に、犠牲者がまだ眠っているところがあります。山崩れが、道路をふさいでいるところがあります。地震がなくても、よく山崩れがあったそう。気象が不安定で、ヘリコプターも使えません。遭難事故もありました。仮設住宅が建ったばかりで、笑顔をみせる人もいます。地震による堰止め湖の決壊が心配されますが、その下流には、130万人もの住民がいるそう。雨期を迎え、医療・衛生などが、重要になっています。でも、その全体像なんか、わかりっこない。

前号でも書きましたが、私は、1998年の張家口地震、1999年の大同の地震の、救援の現場をみたことがあります。最高責任者が、現場で陣頭指揮し、餓死させない、凍死させない、というレベルでは、ほんとうに鮮やかなものでした。今回も、温家宝総理をはじめ、最高指導部がつぎつぎに訪れましたが、初期の救援は、思うようにすすまなかった。それくらい、激しかっ

たわけです。

そのぶん、国民の活動は、活発なようです。義援金も、集まっています。中華全国総工会では、31 億元を超えたと、紹介されました。献血の呼びかけにも、順番を待つ列ができています。震源近くから、道なき道を、徒歩で数十キロも逃げてきた人がいますね。老人や、子供も少なくないませんけど、それを助けてきた、りっぱな人もいます。私なんかには、最初から、できそうにない。

その逆も、もちろんありますよ。義援金を装った、詐欺もあるようですし、窃盗団も、現地にはいったそう。それが、山西省の人間だったりして…。日本では、ちょっとみられないような、人物がいるかわりに、箸にも棒にもかからない人間もおおいと、いつも私はいってますけど、こういうときにも、それが表にでるわけです。

学校が集中的に壊れ、たくさんの子どもが犠牲になりました。痛ましいことです。手抜き工事や、農村が取り残されている問題も、あらわになりました。中国の発展は、そういうことを、置き去りにしてきたわけです。

それらを含め、今回はわりとオープンに報道されました。自然災害における、犠牲者数も、ちょっと前まで、機密扱いだったんですね。SARS の不手際の反省から、それが解除されました。こういうことが、だんだん、ふつうになっていくんでしょうね。犠牲者にはお気の毒ですが、こういった経験から、いいほうに、転換してほしいと思います。

義援金では、私たちにとって、困った問題があります。緑の地球ネットワークは、国税庁長官の認定を受けてますから、私たちへの寄附金は、税控除の対象になります。今回の義援金も、その対象になるかどうか、大阪国税局に、電話で問い合わせたら、対象にならないどころか、認定取り消しの恐れもある、とのこと。びっくりして、翌日、担当者に会いにいきました。

緑の地球ネットワークの定款は、緊急時の救援を定めていないので、義援金を募るのも、それを被災者に送るのも、私たちの特定非営利活動とは、認められないとのこと。私は、「定款にない活動をするのは違法だ」とまでいわれることを、とっさに覚悟したんですけど、さすがに、それはありませんでした。「そういう活動をするのを、止めはしません。しかし、ひきつづき認定を受けようとするなら、注意すべき点があることを、伝えておきます」ということでした。

細かなことは省いて、ザクッと書くと、こういうことです。特定非営利活動に係る事業費は、総事業費の 80%以上でなければなりません。受け入れた寄附金総額のうち、特定非営利活動に係る事業に充てた額が、70%以上でなければなりません。ほかにも、いくつか、ひっかかる項目があります。今回の義援金が、特定非営利活動にあたらなくなると、その額が大きければ大きいほど、認定にとって、不利になります。要件からはずれば、認定取り消しです。

「集めはじめているんですか？」との問い。「ええ、集まっています」「いくらくらい?」「440万円ほどです」「えっ、そんなに集めてしまったんですか」

私は、疲れ切って、事務所に帰りました。気持ちも、ことばも、うまく伝わらないんですね。もともと、NGOやNPOの活動を、促進するための、制度のはずなんですけど、運用しただけでは、逆に、規制の作用をするんですね。認定制度は、今年度から、大きく改善されました。私は、そう考えていました。でも、まだまだ、問題は多いようです。

#### NO. 464 アンズを襲った寒波 2008. 06. 17

日本の東北で、また地震です。過疎と過密への日本の分裂、その深刻さを痛感します。

前号の、最後に書いたことに、たくさんの反響がありました。大阪国税局の担当者によると、四川省地震への義援金は、特定非営利活動とは認められず、寄附金控除の対象にならない、とのこと。この点について、義援金を送っていただいた方々に、ご了解をお願いいたします。

それだけでなく、特定非営利活動とは認められない今回の義援金のような収入と、それにみあう支出の割合が、高くなりすぎると、認定NPO法人の要件からはずれ、最悪のばあい、認定取り消しになる、ということです。本末転倒した運用で、あまりに形式的すぎる、といった指摘と、取り消しになる可能性は高いのかと、ご心配をいただきました。

結論から申しますと、実際の可能性は高くない、と思っています。私たちのばあい、次回の認定申請は、2008年秋です。そのさいの実績判定期間は、2003年度から2007年度までの、5年度です。今回の義援金が属する2008年度は、対象ではありません。今年度から、認定の有効期間は5年間になり、それにもなって実績判定期間も5年間になりましたので、2008年度が実績判定の対象になるのは、2013年に認定申請するときのことです。5年半も先ですから、そのころには、この制度も変わっているでしょう。それから、5年間をつうじての実績が対象になりますので、こんなことが、今後もくりかえされることがなければ、5年のなかで薄められて、要件をはずれることはないはずで。

大阪国税局担当者の、木で鼻をくくったような対応に、私はつい、カッとなってしまいましたが、彼女に悪気はなく、そういう問題もありますよ、と、善意で注意を促してくれたんだと、思うことにしました。実際、そうだったのかもしれませんが。いいほうに考えていかないことには、最近の日本も、中国も、しんどいことが多すぎます。

さて、大同のことです。電話でだって、なんだって、問い合わせる機会は、いくらもあった

のに、結果がこわくて、聞けなかったことがあります。渾源県呉城村などのアンズが、どうなったか、です。ことしの春は、天候不順が、極端でした。雨が多かったのは、いいことですが、全体として温度が低く、急に暖かくなったかと思うと、そのあとに寒波がやってくる。その繰り返しでした。4月20日ごろには、最高気温が29度にもなり、アンズの花が開いたのに、23日には、最高気温が6度、最低気温は零下5度にもなりました。市内ですうですから、山や丘陵では、さらに下がったはず。これが、こわいんですね。花が咲いたあとに、凍ってしまうと、せっかくついた実が、落ちます。4月下旬に、私は北京で用事があり、時間がなくてアンズの村を訪れることは、できませんでした。遠田宏先生と、会田さんが、4月25日に、呉城村を訪れましたが、遠田先生の観察では、被害は大きくなかったようです。

大同の農村に通いはじめてからの、私の経験では、私が悪いことを考えたり、悪いことを口にしたりすると、すぐに、現実になることが多いのです。私がなにか話しはじめると、通訳をしてくれる王萍が、「高見さん、やめてください！」といて、制止するくらい。ここは、言霊の世界なのです。よくないことが、それほど多い、ともいえるでしょう。だまっているに、かぎります。

でも、6月初めに、北京を訪れたさい、緑色地球ネットワーク大同事務所の、武春珍所長が、わざわざ、北京まで、きてくれました。となると、尋ねないわけにはいきません。彼女も、結果を知るのが、恐ろしかったんでしょうね。私から、そう言われて、その場で、呉城村の責任者の王迎才さんに、電話をかけました。結果は、最悪だったのです。4月下旬の寒波には、まだなんとか耐えたそう。遠田先生の見立てといっしょです。その後、5月9日と、10日と、2日間にわたって寒波がきて、幼果が凍って、落ちてしまったそう。ことしの収穫は、絶望的だそうです。それにしても、メーデーをすぎてから、雪が降ったりするんですからね。

ついでに、靈丘県上北泉村に連絡をとってもらおうと、こちらは、凍害もでるにはでたけど、全滅とまでは、いかなかったそう。ほかに、いくつも気になる村がありますけど……。

地球温暖化というと、だんだんと気温が上がって、寒い地方にとっては、いいことのように考えられたりしますが、実際は、気象攪乱なんですね。ことしの中国南部が、大雪に見舞われたように、とんでもない寒さがやってくることもあるわけです。日本のように、自然の条件に恵まれたところでは、温暖化も、気象変動も、未来形でしか語られませんが、もともと限界的な自然条件のところでは、まさに現在進行形。ちょっとした変化も、致命的な打撃になりかねません。

産経新聞が、私たちの活動を、4回の連載で紹介しました。論説委員兼編集委員の山本勲さんが、この4月に大同にきて、取材しました。最初の回は、東京本社版では、1面の掲載で、呉城村の、満開のアンズの大きな写真が、カラーで載りました。そのアンズが、このような結末になったのは、残念なことです。山本さんの報告は、みなさんにも、ぜひ読んでいただきたいと

思います。私が表にですぎていて、きまりが悪いんですけど。

連載は、産経新聞の、ウェブページでも、みることができます。

第1回

<http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080613/env0806130825000-n1.htm>

第2回

<http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080614/env0806140824001-n1.htm>

第3回

<http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080616/env0806160800001-n1.htm>

第4回

<http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080617/env0806170807001-n1.htm>

## NO. 465 野草を育てる 2008. 06. 24

わが家の小さな庭の大部分は、ネズミのひたいほどの、菜園になっています。でも、種類だけは、一人前。トマト、ミニトマト、シシトウ、キュウリ、オクラ、アスパラガス、インゲンマメ、モロヘイヤ、といったところ。人と同じことをしたくない私は、以前は、変わったものばかりつくって、近所の農家から、「農事試験所みたい」と言われたのですが、家族の不評に耐えかねて、いまは平凡なものばかり。

もっとせまいところに、ちょっとだけ花。以前は、園芸ものを植えていましたが、年齢のせいでしょうか、だんだん野草がすきになりました。この季節が、花のピークです。こっているのが、ヤマオダマキ、何年かまえ、信州の山にいったとき、ほんの少し、種を失敬してきました。薄いクリーム色の花が、繊細で、きれいです。緑っぽい、もっと地味な色もありますし、花のかたちも、葉のかたちも、微妙にちがいます。そんなところが、おもしろい。ここ数年、毎年、花を咲かせますけど、大阪近郊の、宝塚は、ヤマオダマキにとっては、夏が、暑すぎるよう。小さいときは元気がよくても、花を咲かせるようになると、枯れるものがでできます。毎年、採種しては、苗をつくり、植えたしています。

そこが、だんだん雑草園になります。オダマキのなかに、カタバミがはいると、葉のかたちが似ていて、草取りもめんどろ。へたをすると、ヤマオダマキが負けてしまうので、先々週の日曜日は、いやいや、草取りをしました。すぐ横に、フジの鉢植えをおいてるんですけど、鉢底の穴から、根が抜け出して、動かせなくなりました。そのせいで、枝も葉も、よく茂っています。その陰の、まっ暗なところに、ひっそりと、ヤマオダマキが咲いてたんですね。ほかのものよりずっと早くて、育ちもいい。こんなまっ暗なところで、花まで咲かすの？

立花吉茂先生にきくと、オダマキのたぐいは、北のほうのもので、だいたい、落葉広葉樹

の下に、育つものだそう。そのなかまには、春先の短い期間、日があたれば、そのあとは、日陰でもだいじょうぶなものが、あるのだそう。でも、常緑樹の下では、だめだそうです。奥が深いですね。

私の故郷の大山で、種を失敬してきた、ミヤマオダマキは、もっと早い時期に、花を咲かせ、すでに種になりました。その後、大山寺の旅館で、鉢栽培をみましたので、栽培種の、エスケープかもしれません。こちらの花は紫色で、きれいですけど、ヤマオダマキほど、変化がありません。

やはり信州からきた、オキナグサも住み着きましたが、ことしは、花がありません。春先に花が咲き、種ができたなら、その種で、苗をつくります。つぎの春は、まだ小さくて、花は咲きません。花が咲くのは、その翌年の春。花を咲かせる大きさにになると、暑さにまけて、夏を越せません。この繰り返しで、わが家のオキナグサが、花をつけるのは、一年おきです。

去年から、中国オキナグサが、やってきました。まだ、鉢植えです。これが元気なんですね。葉も、日本のものより、ずっと大きい。

葉柄が 25cm 以上も伸び、1 枚の葉が、20×20cm もあります。猛々しい、とっていいくらい。来年の春は、種をとって、ふやしたいものです。今西錦司編『大興安嶺探検』のなかに、「地面が紫色にみえる」ほどの、群生が登場しますが、あのオキナグサが、これだと思います。中国では、白頭翁といいます。

それから、ネジバナ。数日前から、ピンクの花が、開いてきました。ひとむかしまえ、なにかの本に、「ラン科のなかで、絶滅の恐れがないのはネジバナくらい」とありましたが、そのネジバナすら、野っばらでは、めったにみられません。

この季節は、影も形もありませんが、アマナがあります。チューリップのなかまで、小さな花が、とてもかわいい。近所のたんぼのあぜが、コンクリートに変わるときいて、つれあいが、何本か、避難させてきました。10 年近くもまえのことです。春先、早くに、葉をだします。私にとって、アマナは観葉植物！毎日数本ずつ、ふえていくのが楽しみで、しゃがみこんで、数をかぞえます。ことしの春は、50 本の大台にのりました。アマナは、葉が 2 枚にならないと、花は咲きません。ところが、わが家のものは、すべて葉は 1 枚。まだ、花をみたことがありません。

いま花盛りなのが、もう 1 つ。中国で、黄花（黄花菜、金針菜）といわれるもの。学名は、*Hemerocallis citrina* Baroni。ユリ科ワスレグサ属で、ユウスゲにそっくり。レモン色の花が、とてもきれいで、香りもいい。ふしぎなのは、大同では早朝、花が開くのに、わが家では、夕方に咲くことです。中国では、野菜あつかいなんですね。花が咲く直前の、ツボミを食用にします。生のものを、炒めて食べると、おいしいんですけど、それは、産地ならでのぜいたく。

蒸したあと、天日で乾燥したものが、商品になっています。日本でも、「百合の花」としてスーパーにならんでいるのを、みたことがあります。野菜として、栽培されるくらいですから、花のつきは、すごくいいのです。わが家にあるのは、いま2株ですが、そこから47本のトウが立っています。1本のトウに、15~20のツボミがついてますから、700~800の花が咲きます。少しは、食べさせていただきましょう。

## NO. 466 アブラマツ（油松） 2008. 07. 03

この「黄土高原だより」、私の本業から脱線してばかりで、緑化について、書いていることは、少ないですね。本人の散漫さを、そのまま表しているよう。で、今回は、数のうえでは、いちばん多く植えている、アブラマツについて。

中国では、油松。別名を、紅皮松、短葉松というそうです。学名は、*Pinus tabulaeformis* Carr. マンシュウクロマツという和名もあったよう。ところが、皮の色は、いろいろなんですね。でも、日本のクロマツより、はるかに赤い。なにせ、中国で、紅皮松というくらいですから。

いつもお世話になる、神戸市立森林植物園に、かなり大きな、「油松」があるんですよ。それも、黒っぽいのと、赤っぽいのが、あったそう。で、黒っぽいのは、「マンシュウクロマツ」、赤っぽいのは、「マンシュウアカマツ」のネームプレートがついていたけど、それもおかしいので、マンシュウアカマツは取り外した、ということでした（ひょっとして、逆かな?）。というような事情で、私はこれを、アブラマツと、勝手に呼ぶことにします。植物のなまえ、とくに日本にもともとない植物の和名なんて、先にいった人、声の大きい人が勝ち、とといったところがあります。そこまでの力はないので、とりあえず、こう呼びます、と断っておきます。

原生地は中国北部で、かなり広いようです。遼寧、吉林、内蒙古、河北、河南、山西、陝西、山東、甘肅、寧夏、青海、四川の北部、そして、朝鮮半島にも広がっています。現在、人工的にも、大面積に植えていますが、山の奥や、仏教・道教の寺廟などで、古木にでています。たとえば、渾源県の北岳恒山に、樹齢数百年の、古木があります。縦方向への成長をとっくに止めていて、枝葉が、コウモリ傘のように、広がっています。

その逆に、若くて、生育のいいものは、三角形というか、円錐形というか、とがってみえます。マツにかぎらず、針葉樹は、とがってみえるものが、健康で、生育がいいのです。大同のような乾燥地でも、谷筋なんかの、水条件のいいところでは、アブラマツは、1年に、70~100cmも伸びます。

乾燥にも、寒さにも、いたって強いようです。モンゴリマツ（樟子松）は、苗畑で3年くらい育てるときも、その後、造林地に植えたあとも、だいたい2年は、冬のあいだ、土をかぶせ

て、保護します。そうしないと、寒さと乾いた寒風の害とで、枯れてしまいます。アブラマツのほうは、そんなことをしなくても、平気で、冬を越します。

痩せ地にも、強いのです。大同県聚楽郷に建設中の、采涼山プロジェクトや、実験林場「カササギの森」の土は、ひどく痩せています。手っとり早く、わかっていたくには、Google Earth でみてください。カササギの森の管理棟は、北緯 40 度 11 分 00 秒、東経 113 度 32 分 50 秒。采涼山の「あずまや」は、北緯 40 度 10 分 07 秒、東経 113 度 32 分 46 秒。その周囲をみると、山の土壌は流されて、骨だけが残っているのを、わかっていたでしょう。

長年の観察の結果、この緯度の、この標高（1000～1400m）の山の、主人公になる木は、リュウウナラ（遼東櫟）を中心とする、落葉広葉樹だと考えています。そこで、大同市最南部にある、霊丘自然植物園で育てた数種類の落葉広葉樹を、カササギの森に植えてみました。枯れはしません。緯度が高いぶん、寒いんでしょうけど、ちゃんと越冬します。しかし、伸びません。植えて、6 年になるのに、50～60cm に止まっている。セオリー通りといえば、そうなんです（去年あたりから、ちょっと伸びるものも、できました）。

同級生を、同じ年に、環境林センターの見本園に植えたところ、こちらは 3m 近くに育っています。その差は、土にあるよう。環境林センターは、以前は果樹園で、長いあいだ、灌漑に、生活汚水をつかっていました。土が富栄養化しています。カササギの森は、痩せきっています。根に根粒菌がついていて、自分でチッソ固定をし、どんな痩せ地でも、育っていくはずの、ハギさえ、カササギの森では、ほとんど伸びません。

そんなところでも、アブラマツは、ちゃんと育ちます。この地方の裸地の植林にとって、欠かせない存在です。植える目的は、主として防護林建設です。水土の流失と、砂漠化を防止します。風砂の軽減にも、役立ちます。将来的には、用材林として、経済効果もねらいます。中国でも、紙パルプの需要は、急膨張していますから、その原料としても、意味をもつでしょう。

私たちが、マツをたくさん植えているのを知って、「マツヤニは、きわめて重要ですよ」と、連絡してくれた人があります。再生紙の強化剤、印刷インク、塗料、IT 機器、香料、薬品、粘着・接着剤……。現代の私たちの生活に、欠かせないそう。これを集めるには、たくさんの人手が必要ですから、「雇用の創出にもつながりますよ」ということでした。それが現実になれば、うれしいですね。

## NO. 467 モンゴリマツ（樟子松） 2008. 07. 14

前回、アブラマツについて書きましたから、今回は、モンゴリマツ（樟子松）。ただ、それだ

けではありません。

7月11日の早朝8時に、大同に着きました。いつも、調査器具など、けっこうな荷物がありますので、最近、大同から、くるまが迎えにくることが多かったのです。ところが、8月8日のオリンピック開幕まで、1か月を切り、外地のくるまは、北京市内にはいません。で、北京から、大同まで、飛行機にしました。北京空港発が7時10分、大同着が8時。

北京空港では、チェックインは、出発時刻の45分前に、締め切られます。国内線で、そんなのです。余裕をもって、5時40分には、空港に着きました。驚いたことに、J1から、J34までのカウンターの前には、それぞれ10人以上の列ができ、ごった返しています。こんな時間に、ですよ。

運の悪いことに、私の前に並んだ男が、トラブルメーカーなんですね。最初にカンが働いたとき、サッと列を移ればよかったですけど、ぐずぐずしているうちに、どこも列が伸びていて、そうすると、移るわけにもいかない。その男の番になって、10分以上も、ゴタゴタやりまです。担当者も、担当者ですよ。列から離して処理すればいいのに、それをしない。

チェックインがすんでも、安心できないことはわかっています。搭乗口まで遠いですからね。でも、おなががすきました。早くでたおかげで、時間に多少の余裕があります。「味千ラーメン」の店が、目にはいりました。熊本から出発した、日本のチェーン店なんだそう。野菜ラーメンを頼みました。最初にも、途中でも、なんども催促するのに、待っても、待っても、でてこない。25分もたって、しかたがない、立ち上がろうとしたら、やっと、でてきました。一口だけでも、食べないわけにはいかない。それが、二口になり、三口になり。半分以上を食べ残して、搭乗口に急いだんですけど、ちょうどファイナルコールがありました。今回は、完全に満席です。私が乗ってすぐに、飛行機は動き出し、定刻まえに、離陸しました。あぶない、あぶない。

くるまが北京市内にはいませんから、そのぶんが、飛行機にもまわっているよう。しばらくくまえまで、週5便でしたけど、いまは毎日です。大同に着き、日程などの打ち合わせをし、午後から、近場に行くことにしました。いちばん気になっているのは、今春のマツの伸びがどうだったかです。采涼山と、カササギの森に、行くことにしました。

公道を離れて、采涼山の造林地にはいります。ワクワクしますね。ことしの春は、雨に恵まれたので、マツはよく伸びているはずですよ。予想はしてましたけど、これほどとは思わなかった。春にくらべ、平均でも、30~40cmは、伸びています。いいものは、50センチ以上も伸びています。マツは、1年ごとの伸長が、わかりやすいですね。1年に、1節だけ伸びます。この地方では、4月末から、6月にかけて。

武春珍所長は、大きなマツのそばに立って、「私の2人分はある！」とっていますが、そこ

まではないでしょう。でも、大きなものは、3m 近くになってきました。上に伸びるだけじゃないですからね。枝が横にもはります。以前に、現場で、そのことを説明すると、東北電力総連のメンバーが、「風船をふくらませるのといっしょですね」といいました。そのとおりなんですね。倍々で、緑が濃くなります。

伊豆の高校の先生の、藤原國雄さんが、毎年、ここにきていて、何年か前に、「鳥肌が立つほど、感動しましたよ。こんな成功例があるのに、どうして宣伝しないんですか」と、私は、叱られました。あのときと、いまとでは、また、大違いですから、この光景をみたら、彼はなんというんでしょう。でも、ことしの夏は、ツアーを実施しないので、彼は、くることができません。来年の夏を、いっそう、楽しみにするでしょう。

でも、ちょっと、気になることがあります。マツの先端や、ことし伸びた枝が、折れて、枯れているものがあります。そんなに多くもないけど、珍しいほどでもない。はじめてみる現象です。以前に、ヒョウ（雹）が降って、マツを痛めつけたことがありましたが、あのときは、枝も折れたけど、葉にも被害があった。今回は、葉には、変わったところがありません。答えは、カササギの森の管理人が、教えてくれました。風で折れた、というのです。なるほどね、あの伸びはじめを、「ローソク」と呼ぶようですけど、やわらかいですからね。

このマツの大部分が、モンゴリマツです。学名は、*Pinus sylvestris* L. var. *mongolica* Litvin 中国では、樟子松といいます。もともと「樟」の字は、「けものへん」だったようですが、いまはふつう「きへん」をつかいます。けものへんの字は、ノロジカのことだそう。オウシュウアカマツの変種で、大興安嶺あたりに、自生するマツです。初期の生育は遅いんですけど、あるところから、急に生育がよくなるのは、いまみてきたとおりです。

そして、とてもまっすぐに伸びます。まるで、スギかトウヒのようです。そのあたりのことを書こうと思って、「樟子松」で検索してみたら、けっこうヒットしました。フローリング材とか、ログハウスの材、集成材などで、日本に輸入されているようですね。

大興安嶺は、大同からいえば、緯度にして10度も北ですから、はたして、夏の暑さに耐えられるか、私は心配でした。この地方に最初に導入されたものは、40年はたっているようです。いまのところは、だいじょうぶのよう。大同では、北部ではたくさん植えてますけど、南部の靈丘県では、アブラマツしか植えません。そのほうがいいでしょうね。

## NO. 468 落ちたアンズ 2008. 07. 24

7月14日に、大同市渾源県呉城村を訪れました。あのアンズの村です。ことしの春は、テレビのクルーが訪れて、この村を取材しました。そのつづきの撮影が、7月におこなわれるはずで

した。でも、オリンピックを控え、取材ビザがでなかったんですね。で、急遽、中国側のスタッフだけの撮影になりました。

そうはならなくても、春に期待していた場面は、撮れませんでした。花が咲いたあとの寒波襲来で、ついたばかりの幼果が、落ちてしまったことを、数号前に書きました。大同事務所の、武春珍所長から、そのような連絡があったのです。しかし、取材チームが、呉城村に直接、電話で問い合わせたら、「少しはなっている」とのことです。私は、全滅だと思っていましたからね。「少しは……」ときいても、だんだん期待が膨らんだんですね。

7月14日は、朝から雨でした。3~4月は、例年になく、雨が降ったんですけど、最近の40日ほど、雨がなかったのだそう。テレビのクルーは、晴天を期待するでしょうけど、雨を待つ農民の気持ちは、その何倍も強いでしょう。数からいっても、問題にならない。そう激しい雨ではありませんが、午前中は降りつづけました。おかげで、気温は18度ほど。Tシャツのうえに、ウインドブレーカをはおっても、まだ寒いくらい。

ついでにいいますと、ことしの冬は寒かったんですね。冬のあいだ、土は凍結してますけど、その後も、なかなか地温が上がらないようです。アンズも、その他の作物も、生育が遅れています。通常なら、7月15日ごろにはアンズは熟して、収穫シーズンにはいるんですけど、ことしは、残ったものも、まだ青くて、熟するには、あと1週間はかかる、ということでした。

呉城村を訪れるときは、たいてい、村にむかう途中にあるアンズ畑を最初にみるんですけど、このときは、直接、村にはいりました。そして、私が、久しぶりに村にきて、旧知の王迎才書記とあいさつを交わす、といった設定で、撮影開始。まあ、事実が、そのとおりなんですけどね。そのあと、村のうしろのアンズ畑に向かいました。

私の最初の印象は、けっこう、なっているじゃないか、というもの。豊作の年のように、枝もたわわ、というわけにはいきませんが、木によっては、びっしりとついているものもあります。でも、これは、ぬか喜びだったんですね。ここの木は、実がつきはじめて数年の若い木なんですけど、若い木にはすこしは残って、初期に植えた大きな木は、実が凍って、全滅だといえます。

前回の報告と、すこし重なりますけど、4月20日ごろに、気温は30度近くまであがり、アンズの花が、咲きほこりました。ところが、4月23日になって、零下7度くらいまで気温が、下がったのです。でも、このときは、それほど被害を受けなかったようです。遠田先生たちが、4月25日に現場にいて、それを確認しています。

ところが、5月9日、10日になって、またもや、零下7度まで、気温が下がってしまいました。王迎才書記の自宅の中庭に、最高最低温度計がおいてあり、彼は、その時期の気温を、注

意深く測っているようです。それで、実が凍って、落ちたんですね。この時期になって、これほどの寒波がくるのは、アンズ栽培をはじめてからの15年では、はじめてのことだそう。

王迎才さんは、話のなかで、「没法子！」(メイファーズ)をくりかえします。どうしようもない、しかたがない、という意味ですね。またまた横道ですけど、大同の農村にひとりで行った1992年秋、私の話せた中国語は、ニイハオ！シェシェ！ツァイチェン！ツースオザイナーリ？の4つでした。最後のものは、「トイレはどこですか？」というもの。5つ目に、つまり現地ですべて覚えたのが、この「メイファーズ」ですね。それくらい、農民の口に、よくのぼる。

取材チームは、ある一家の暮らしを追っかけているんですけど、この家のアンズの収入は、去年は4千元あったのに、ことしは百元も見込めないそうです。たしかに、村からの帰りにみた、植えて14年ほどのアンズの木には、まったく、実がついていませんでした。そのうえ、長女は進学の時を迎えています。ある日はさかんに、「メイファーズ」をくりかえします。ディレクターの張森さんが、私に話しかけてきました。「でも、悲惨さといったものが表情にでてませんね」というのです。

ほんとにそうなんです。私も以前、ビデオカメラをまわしたとき、それを痛感しました。旱魃で、ほぼ全滅したジャガイモ畑を中耕している老人(?)を撮影したんですけど、彼は、どんなに雨が降らなかったか、ということ、孫の自慢話でもするように、陽気に話したんですね。老人のあとに、(?)をつけたのは、ひょっとすると、私より若いかもしれないからです。

こんどの番組は、2時間ものなんだそうです。それだけの時間があったら、あの自然災害のなかでも、悲惨さが感じられない。そのあたりの秘密を、描き出して、ほしいものです。

あ、そうそう。「没法子！」(メイファーズ)のなかには、「なんとかなるさ」というニュアンスも、含まれているんだそう。そのことについては、この黄土高原だよりの、394号で書きました。農村の生活も、中国語の世界も、ほんとに奥が深い！

## NO. 469 錬金術？ 2008. 08. 04

北京オリンピックまで、あと4日。開会前から、こんなに話題になるオリンピックも珍しいでしょう。北京の友人たちのなかには、「期間中は、どこかよそに行きたいですよ。騒ぎに巻き込まれたくないし……」という人がいます。そして、たいていの人が、「早く終わってほしいですよ」とこぼします。「メダル数をかぞえるようになれば、雰囲気も変わるよ」と、私がなぐさめると、「とれればいいですけど、もし、とれなかったら？」と答えます。無事に終わってほしいものです。

毎年実施している、夏のボランティアツアーを、ことしの夏は、すべて中止しました。前倒しして、春に実施したものもあります。オリンピック開催中の、北京を避けるためだったんですけど、大同の事情からいっても、それが正解でした。大同の道路交通が、マヒ状態なのです。

この春の黄土高原だよりも、書きました。道路わきの、たくさんの建物に、ペンキで、「拆」（チャイ）と、書きなぐられています。取り壊し、です。「後退6米」などと、書かれているものもあります。自動車の後退はかんたんでも、建物はそうはいかない？そうやって、まずは道路を拡幅します。

日本で、これだけのことをやるとしたら、たいへんでしょうね。「計画10年、反対10年、買収10年、建設10年」などともいわれました。土地はすべて国有、が建前の中国ですから7月にいくと、どこもかしこも、工事中でした。スーパーショベルがあちこちで働き、建物を崩しています。レンガ建てが多いですね。もうもうたる土ぼこり。

この機会に、上下水道や、電気や電話のケーブルの地下埋設もすすめるようです。深い溝が掘られています。ケーブルが地下に移れば、街の風景は、すっきりするでしょう。ある時期に、日本も、そうしておけばよかったでしょうに。

日本のように、道路の片側ずつ、などという面倒なことはしません。工事中の道路は、土を盛りあげて、全面封鎖。しかも、4本の幹線道路で、同時進行です。すべてのくるまは、残っている道路に集中しますから、そこも大渋滞。少なくとも、市街地の東半分は、マヒ状態です。西の郊外にある、雲崗石窟方向へは、流れているよう。私たちのプロジェクトを、見学したいという話が、北京からもあったのですが、おことわりして正解でした。

それから、城壁の復原工事が、はじまっています。以前の大同は、「呂」の字のように、2つの、四角の城郭できていました。北側は、「操場」といい、軍隊が駐屯し、訓練するところ。南側が大きく、一般の都市機能は、こちらにあったようです。城壁の表面には、高温で焼いた、灰色の大きなレンガが貼られていましたが、いつしか、持ち去られ、黄土の版築だけが、残っていました。それを、もとに戻す、というのです。善化寺のそばで、レンガ積みは、はじまっています。

城壁を復原したとしても、いまのように、城壁のきわまで、住居や、その他の建造物があつたら、意味はないでしょう。城壁の内も、外も、50mは建造物を撤去、後退させ、公園ふうに、整備するそうです。

小さいほうの、操場でも、一辺が約1km、南の大きいほうの城郭は、一辺が1.8kmあります。そして、城壁の高さは、15~16m。使われるレンガだけでも、膨大な量です。東西南北の門も、

何年かかけてつくるそう。

「地下の文物をみたければ、西安にいけ、地上の文物をみたければ、大同にいけ」というそうです。大同といえば雲崗石窟ですけど、それだけではありません。上下の華嚴寺、善化寺は、それについて有名ですけど、ほかにも、お寺や、楼閣がたくさんあります。たいていはゴミゴミした下町にあって、観光の対象になりません。トイレや汚水の臭いがプンプン、といった状態ですので。それらを整備します。雲崗石窟が世界遺産になっても、1か所では、観光客はサッとみるだけ。泊まったとしても、1泊。2泊に延ばせれば、落ちる金も、ちがってくるでしょう。

それにしても、これだけのことをやる元手が、どこからくるのでしょうか？2000年に1t60元だった石炭が、いまや750元。8年で12.5倍にもなりますから、それによる税収増だろうと、私は考えていました。じゃ、ないんですね。石炭は、価格は高騰してても、事故防止、安全確保などで、生産量は、落ちているそう。税収は増えていない。

土地の使用権を、お金に変えているそうです。たとえば、迎賓東路のあたりは、市政府や、大同賓館、雲崗賓館などのある、一等地ですけど、1ムー（667平方m=200坪）あたり、570万円の値がつくそう。日本円にすると、1坪45万円です。工業用地は50年、その他は70年の期限付き。ディベロッパーがそれを買って、高層ビルなどを建てて、売りにだします。いまのところ、住宅なども、2年で2倍のペースで値上がりしてますから、先を争って、買う人がいるんですね。投機目的もあるでしょう。その先に、なにがくるのでしょうか？

この話題、私のもうひとつのブログ、「続・黄土高原レポート」には、写真つきで、3回連載しました。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

## NO.470 北京の青空 2008.09.02

9月1日のお昼に、北京空港に到着しました。気温は30度を超えていますが、湿度が低く、サラッとしていて、わりと快適です。最初に気づいたのは、空気が澄んでいて、空が青いこと。最近の北京は、いつもどんよりと霞んでいて、見通しも、きかなかったですからね。

2日早朝の飛行機で、大同にむかいますので、空港の近くに、宿をとりました。市内で用事をすますため、タクシーをさがしました。すると、「往復で250元。何時間でも待ちます。代金は、ホテルに帰り着いてからで、けっこう」という運転手が出たんですね。高速料金込みです。前回の7月も、このホテルに泊まったんですけど、夜になって、市内から帰るとき、運転手が、このホテルをみつけられなくて、苦労しました。これを頼んだほうが、安心なようです。それにしても、料金後払いというのも、めずらしいですね。一見の外国人が、不払いで逃げるのを、

心配しないのかな。いや、外国人だから、安心したのかもしれない。私は、携帯の番号も、名前すらも、告げなかったんですけど、3時間半も、律儀に、待っていてくれました。

そのくるまで、市内に入りました。市内でも、見通しがきくんですね。遠くの山影まで、くっきり、みえます。そして、空が青い。こんな空を、北京市内でみるのは、いったい何年ぶりでしょう。

私が最初に北京にきたのは、1971年の12月です。寒い時期ですから、暖房などに石炭を焚き、空気がきれいなはずはありません。しかし、その他の季節の北京は、空が青かったですね。とくに秋の、国慶節のころ。「北京好日」ということばと、あの抜けるような青空が、私のなかでは、一体化していました。

ところが、改革開放がすすみ、経済が発展し、くるまの数がふえるにしたがって、汚染がひどくなりました。以前の北京は、自転車の波でしたが、いつのまにか、くるまの渋滞が、とって代わりました。渋滞すると、汚染はいつそうひどくなります。そんなわけで、青空をみることも、なくなりました。しかし、いつからそうなったか、はっきりしません。気がついてみると、いつのまにか、青空がなくなっていた。北京に住んでいる人も、おそらく、そうじゃないかな。なくなっていくものは、自覚しにくいものです。

青空が復活したのは、オリンピックのおかげです。北京市以外のくるまは、よほどの例外を除いて、9月20日まで、北京市内に、はいれません。外地のナンバーを、今回は、まったくみませんでした。奇数日、偶数日にあわせて、運行できる車両を制限しています。奇数日には、奇数ナンバーのくるましか、走れません。偶数日は、偶数ナンバーのくるまだけです。北京名物ともなった、あの渋滞がまったくありません。それから、北京市内と、その周辺の、工場も閉鎖したり、休業したりしました。

パラリンピック終了後も、この青空がつづくのは、むずかしいでしょうね。中国だから、これほどのことが、できたのでしょうか、長くつづけるのは、無理でしょう。たとえば、余裕のある人は、奇数と偶数と、くるまを2台もったりするでしょう。

友人のひとりが、モモをふるまってくれました。「自分で、もいできたものですよ」という、注釈つきで。「平谷大桃」といって、有名なのだそう。北京市の北のほうにあります。それが、とっても安かった、といます。モモの収穫シーズンですが、交通規制のために北京に、売りにいけないんですね。そういう不便は、大同もおなじこと。北京のくるまは、外地にでることができませんけど、奇数、偶数の規制がありますから、出る日、帰る日を、それにあわせないといけない。不便を感じた人は、多いでしょうね。長くつづくと、暮らしにも差し障ります。

でも、いったん取り戻された青空が、なくなっていく過程を、このたびは自覚的に、とらえ

るんじゃないでしょうか。得るものと、失うものとを、はっきりと対比するでしょう。急な変化のはずで、わかりやすい。その意味では、意義があったと思いますし、そうあってほしいものだと思います。

オリンピックでの、中国の獲得メダル数。金 51 個、銀 22 個、銅 28 個。この数字を並べて、適当に区切ります。5 12 2 28。5 月 12 日午後 2 時 28 分、四川の大地震の発生時刻です。「インターネットで流れている」というんですけど、こういうウワサが飛び交うことじたい、すべてハッピーとはいかない、庶民の気持ちの表れでしょうね。でも、ほんとは、銀メダルは 21 個。

#### NO. 471 またも人災 2008. 09. 16

中国国内でも、問題が多いのは、私が通う山西省と、その南の、河南省だと、されています。どちらも農山村が広く、貧しいのです。今回の惨事は、山西省臨汾市襄汾県陶寺郷で、9 月 8 日におこりました。土石流です。13 日夜までに、死者 254 人、負傷者 36 人。2 つの村が埋まりましたから、死者はさらにふえるでしょう。

これには、鉄鉱山の開発がからんでいます。掘り出した土を、乱雑に積み上げていました。そこに集中豪雨があり、土石流が発生したわけです。あきらかな人災です。経営にかかわっていた人びとが拘束され、襄汾県の党委員会書記と、県長の停職が決まり、さらに山西省の省長と、担当の副省長も辞任しました。

私は、この事態を予想していました。どこかで必ずおこると、むしろ確信していました。同様の現場を、なんども目にしていますからね。山西省と、河北省との、省境にあたる太行山脈には、鉄鉱石をはじめ、各種の地下資源の採掘現場が、無数にあります。中国経済が急膨張する、このえがたい機会に、いかに金を稼ぐかが、最優先され、安全対策は考慮の外です。

長くなりますが、昨年 10 月に、(社) 日中友好協会の機関紙「日本と中国」に掲載したものの、2 回分を引用しましょう。「ことし」とあるのは、昨年のことです。

ことしの夏、日本の植物の専門家と太行山脈を歩きました。私は 4 日連続になりましたが、驚いたことにその 4 日とも山中で重機の音を聞きました。

太白維山は靈丘県城のすぐ南にみえる山で、稜線のシルエットが観音菩薩が寝ているようにみえるそう。なるほど、左を頭に目や鼻がいかにもそのよう。「でも、おっばいも、おちんちんもふくらんでいるじゃないか」と私がいうと、「だから観音様なんだ。観音菩薩は男でも女でもない」との答え。

山のふもとは以前から削られており、石灰石を掘って近くの工場でセメントを焼いています。このたびは谷筋をさかのぼって中腹をめざしました。入口に工場のようなものができて、「保護環境、安全第一」の大きな看板。舗装道路がずっと延びており、警備員の話では「遠くまで行ける」とのことです。

坂道はだんだん急になり、舗装は切れて土の道に。私たちの乗用車ではもうムリです。その道を黄色く塗った鉱山用大型ダンプが鉱石をこぼしながら何台も何台もゆっくり下ってきます。現れたのはマンガンの採掘現場でした。

スーパーショベルで山を削って道をつくった残土や鉱石のボタで谷を埋めて平らな土地を造成し、レンガ建て、コンテナハウス、テントなどのキャンプができています。驚いたことに若い女性や小さなこどもの姿も。そういう現場が何段にもできて、山頂に迫っているのです。

太行山に地下資源が多いことは知られていました。靈丘県の資料でも、鉄をはじめ金、銀、銅、亜鉛、鉛、モリブデンなどの金属と石炭、石灰石、花崗岩、方解石、沸石、長石、硫黄などで、40種以上を数えるそう。でも小規模に分散し、交通が不便で、開発資金も不足したため、多くは手つかずでした。

それが最近の中国経済の大発展で鉄もセメントも足りません。価格が高騰しただけでなく絶対量も不足しました。地元にとっては千載一遇の発展のチャンスです。資本は南方のものどとききます。現場で働いているのは四川省や陝西省からの出稼ぎで、地元の人はいません。耳慣れない音声飛び交っています。

これらの山にとって資源があったことが不幸ですね。でなかったら、こんなに傷つけられずにすんだ。もし長期の見通しにたつ開発なら、インフラ整備にもっと手間をかけるでしょう。地元による開発なら、これほどのムチャはしないでしょう。

この地方に多い局地的な集中豪雨が襲いでもすれば、土石流となって、ふもとの村までひと呑みでしょう。そうでなくても野積みの鉱石からは有害物質が流れだすでしょう。

汚染された水は最終的には唐河に流れ込み、河北省にぬけて西大洋ダムに至ります。このダムの水は南水北調の石家荘―北京区間の完成を待って、来年4月から北京市民の飲み水になります。

(引用おわり)

同じようなことを、この「たより」にも、くりかえし書いています。中国での講演その他でも、たびたび、警告してきました。私が悪いことを口にする、大同の友人たちは、あわてて

制止します。「高見が悪いことを話すと、そのまま現実になる」といって。そういわれても、私のせいではないでしょう。

大同のなかでも、経済成長がめざましい県は、たいてい資源開発によるものです。それらの県では、役所や学校の建物が一新されつつあります。つい最近までの全国クラスの貧困県が、生まれ変わりつつあるのです。支えるのは、資源開発にともなう税収増ではなく、鉱山の開発権の売却によるもののよう。大同市内の土地所有権の売却による「錬金術」については、すでに書きましたが、よく似た構造です。そして、それらの県では、水の汚染などが、深刻化していました。

しばらく前から、大同市の県で、あのような資源開発を禁止し、売却価額の70%で、買い戻している、とききました。それが本当なら、けっこうなことでしょう。落ち着きを、とりもどす必要があります。

#### NO. 472 あまくみた中国の連休 2008. 09. 19

9月13日から、日本も3連休でしたよね。まったく同じ日付けで、中国も3連休。9月14日が中秋節です。日本では、月見の日、といったところですが、中国では、春節とならんで、家族そろって祝う日です。連休になるのが、遅すぎた、という気がしないでもありません。しかし、その徹底ぶりは、日本の比ではありません。

私は9月11日に、大同から北京にでて、13日に、1人で、大同に戻りました。「連休ですから、たいへんですよ」とは、きいていたんです。あまくみていました。バスだったら、どうせ、予約制がなく、当日売りだから、並びさえすれば、なんとかなる、と考えたのです。荷物を少なくして、デイバッグひとつにおさめました。

六里橋の長途汽車站に、朝早くからでかけました。「汽車」は自動車、「站」はステーションです。ところが、切符売り場が、すでに、長蛇の列。デジタルのディスプレイには、これから大同行きは、18時20分発、となっています。しかし、これはあてになりません。窓口できこうにも、どの窓口も長蛇の列。そのうちに、うわさ話が耳にはいりました。午後2時までの大同行きは、すでに売り切れた、というのです。これから、汽車に変えようとしても、とてもむりでしょう。飛行機なら、あしたの朝まで便はありません。絶望的になっていました。

すると、雑踏のなかを泳ぎながら、つぶやくように、小声で「ダートン、ダートン」と、連呼する男がいました。ダフ屋かな、と思って、その男をみたのです。目があつたとたんに、「どこに行くんだ？」ときくんですね。「ダートン（大同）」と答えると、「150円で、小さくなるまだ」といって、あとについてこい、と身振り以示します。こういうのって、危ないことが多い

のを、体験的に知ってますけど、今回は、せっぱつまってますからね。男は、早足で歩いては、なんども、ふり返って、私をみます。逃げ出さないか、見張っているよう。私は、よけいに不安になります。

長途汽車站から遠くない、小さな商店の店先につれていかれました。パソコンをおいてますが、どうもお飾りのよう。クリップで束にした、細長い紙札が、チケット兼領収書。ちゃんと、あるんですね。「北京市公路長途客運統一客票」と印刷され、「北京市地方交通局監制」という、赤い楕円形の印影が、印刷されています。150元をはらうと、行き先に「大同」と書き込んで、渡してくれました。「平時は100元だけど、きょうは特別で150元だ」といって。

最初は、私1人でしたが、不安顔の客が、つぎつぎにつれられてきます。大部分が、大同に帰る人のようで、そのひとりが、「手配師」の1人のことばをきいて、「あんたは大同の人だな、だったら安心だ」といいました。たいていの人は、北京人より、大同人のほうを、怖いと思うんでしょうけどね。10分も待たないうちに、8人になり、韓国のヒュンダイ（現代）製の、ワンボックスカーに詰め込まれました。ナンバーは、「晋 B……」ですから、大同のくるまです。

そのまま、大同にむかうかと思うと、中層階のアパートがならぶ、住宅街に入り込みました。同じようなくるまが、もう1台、泊まっており、それとのあいだで、乗客の再配分がおこなわれました。運転手と、けんかごしでもめていた乗客が、そこで1人、くるまを降りました。私たちのくるまは、定員いっぱいになって、再出発。ところが、八達嶺高速の入口で、手を振って、このくるまを停めた男がいます。そして、乗り込んでくる。私は最後部の座席にすわっていたら、3人がけの席が4人に。

いま、オリンピック、パラリンピックの関係で、北京市内へは外地のくるまはいれません。そして、奇数日は奇数ナンバーだけ、偶数日は偶数ナンバー、というふうに、規制されています。ですから、北京名物の渋滞は、すっかり解消されています。

ところが、大同への途中には、万里の長城の観光スポット、八達嶺があります。そして、秋の3連休の初日ですからね。さすがにここは大渋滞で、ふつうなら1時間のところが、2時間以上も、かかりました。河北省との境界を超えたところで、フロントガラスに張っていた「入京客運」と赤字で印刷した紙を、運転手は窓の外に捨てました。それからあとは渋滞もなく、順調に、午後2時前に、大同に着きました。一時は、どうなることかと思いましたが、セーフ！

今回は、雲崗国際酒店に泊まっています。13日は平常どおりでしたが、中秋節本番の14日は、昼食、夕食は、ホテルのレストランは休むので、食事が必要なばあいは、ルームサービスを予約しないとイケません。すごいね、ホテルのレストランまで、休業するのです。連続2食がルームサービスでは、かわいそうだといって、大同事務所の魏副所長が、昼食を招待してくれました。彼の一家3人も、すぐ上の兄の家で祝うので、それに誘ってくれました。

城区と南郊区の境界にある、農村ふうの平屋の家で、手作り料理と、最高級の白酒・五糧液で、歓迎されました。散財させちゃったなあ。小魏は、ほんとに実直な人ですが、彼の兄貴は、それに輪をかけた人で、それをつうじて私は、小魏の性格を、より深く理解できたと思います。夜まで残れと、つよくすすめられました。そこまではいけないでしょう。

行きの道路の両側では、まだ商店が開いていましたが、帰りは、かなり閉まっています。ほとんどの商店は、3時までに閉店するそう。くるまも、どんどん少なくなっています。13日と、15日の休日出勤には、200%の賃金加算、14日は、300%の加算が決まっているそうで、そうなると、4倍の賃金ということになりますから、レストランも、商店も、休業するわけです。

14日夜は、まだ日のあるうちから、市内のあちこちで、花火があがりはじめました。暗くなると、もうすごいものです。窓をあけると、にぎやかな破裂音が、四方八方からきこえます。おだんごで、お月見などといった風情ではありません。祝い事も、だんだん、ハデになっているようです。

#### NO. 473 太行山脈の水、北京へ 2008. 09. 22

中国の大型プロジェクトは、10月1日の国慶節を、完成目標にすることが多いのです。中華人民共和国が成立した日ですね。水不足が深刻な北京を救うために、河北省の水が送られることになりました。9月18日午前10時、石家荘市にある黄壁庄ダムの水門が開かれ、放水がはじまりました。ここから、307.5kmのオープン水路を流れ、北京の頤和園にある団城湖に、9月28日に、到着する予定だそうです。

最初に放水するのが黄壁庄ダムで、9月18日から2009年1月13日まで。つぎに、保定市の王快ダムの水門が、1月13日から3月10日まで、開かれます。崗南ダムは、黄壁庄ダムの上流に位置し、その前日から水門を開いて、黄壁庄ダムに水を送りました。今後も、黄壁庄ダムをバックアップするのでしょうか。2009年3月10日までの174日間に、合計で3億立方mの水が送られるそう。長距離の輸送ですから、かなりのロスがみこまれ、最終的に北京で使えるのは、2.25億立方mくらいになるよう。

これは南水北調プロジェクト最終区間として、実施されるものです。そのために、中国の報道のなかにも、「豊かな南部の水を、水の乏しい北京に送る……」とマクラをつけているものもありますが、実際は、石家荘市も、保定市も、北京以上に水不足が深刻なのです。この地方の住民からみれば、北京の水の使い方は、ぜいたくですよ。もともとは、南水北調で、南の水がくるはずだったのに、いつのまにか、一時的にせよ、北京に水を送る話に、変わってしまった。

ことしの7月、これらのダム取材を試みた日本の記者は、ダム近くに設けられた検問によって、アクセスを拒否されました。近くの農民からは、「灌漑に水をつかえなくなった」と訴えられたそう。河北省の負担は、軽くないんですね。

北京の将来にとって、きわめて重要なプロジェクトであるにもかかわらず、今回の扱いは、地味です。中央テレビの報道も、45秒ほどのよう。それには、そのような事情があるからでしょう。

この区間の工事は、2007年末までに完成し、オリンピック前の4月から、供水が開始されることになっていました。そのように、なんども報道されていたのです。ところが、実際は、オリンピック・パラリンピックの終了後になりました。技術上の問題もあったかもしれませんが、河北省側の報道をみると、かなりシビアな、交渉過程があったようですね。表面にはでていませんけど、そう読むことができます。

それともうひとつ、従来は4つのダムから、といわれていたのですが、今回の供水からは、保定市の西大洋ダムが、落ちています。ほかの3つと同様、太行山のふもとにあるダムで、唐河の水を、せき止めています。どういう事情があったのでしょうか。

水質を維持するために、たいへんな努力がなされているようです。3つのダムの水質は、悪くはないようですが、輸送距離が長いので、その間に汚染されるのを防ぐため、排水口の封鎖など、たくさんのがやられたよう。30項目にわたる水質検査が、輸送の途中でも実施されるそうです。

これまでに、なんども書いたり、話したりしたことですが、みなさん、水を飲むときは、上流のことを思い出してほしいですね。逆に、なにかを流すときは、下流の人びとのことを思い出してほしいものです。

#### NO. 474 モンゴリナラ（蒙櫟） 2008. 09. 25

9月4日から12日にかけて、日本の専門家が、大同の私たちのプロジェクトにきてくれました。全体の成果については、それぞれのかたからもうちよつと意見をきいてから。とりあえず、私にとって、勉強になったことのいくつかを。

私たちの「自然植物園」は、大同市最南部の、靈丘県上寨鎮にあります。1999年4月から、建設をはじめました。そのころは、まったくのハゲ山でした。今回、ひとりの研究者が、「大阪市立大学の植物園も、ハゲ山につくられました」といわれたので、「ここの発案者は、それにかかわった人です」と答えると、「なるほど、そういう経験があるから、こういうことができるん

ですね」と、感心しておられました。発案者は、いうまでもなく、立花吉茂代表です。

敷地内のうえのほうで、森林が急速に再生しつつあります。その主役が、リョウトウナラ（遼東櫟 *Quercus liaotungensis* Koidz.）です。そう思っていました。そう書きつけてきました。中国の東北地方から、黄河流域にかけて、広く分布するそう。日本式にいうと、ブナ科コナラ属、中国の分類では、山毛櫟科櫟属に属する俗にいう、ドングリの木です。

近いなかまに、モンゴリナラ（蒙櫟 *Quercus mongolicus* Fisch.）があります。どちらかという、こちらの分布域が、すこし北にかたよっているよう。なんとか、こちらにも手にいれたかったんですね。というのは、リョウトウナラの樹高が、最大 15m であるのにたいし、モンゴリナラは、樹高 30m、胸高直径 60cm になるそう。やっぱり、大きくなるものも、ほしいじゃないですか。

でも、よく似ているようなんです。私のようなシロウトが、たよりにするのは葉のかたちなんですけど、図鑑などでみても、私には区別が付きません。葉の長さも、リョウトウナラが 5~14cm、モンゴリナラが 7~20cm。ひとりの専門家から、ずっと以前に、「いちばんわかりやすいのは、葉脈の数のちがいで、リョウトウナラは 5~7 対、モンゴリナラは 7~15 対」ときいたんですけど、実際にかぞえると、7 対のものが多いんですね。それより少ないものは、リョウトウナラとすぐわかるんですけど、7 対のものは、区別が付きません。（モンゴリナラを 8~15 対とするものもありました。これだと、区別がしやすいんだけど。）

河北省の野三坡自然保護区を訪れたときのことです。ナラの木がたくさん生えていて、それに「蒙櫟」の表示がありました。その下に、学名も書かれています。これなら、まちがいなさそうです。葉脈の数も、たいていは 8 対以上でした。時期がよかったので、霊丘植物園のスタッフといっしょに、たくさん種子を集めました。それくらい、あこがれの木であったんです。

このたびの、専門家による調査を、植物園の敷地内で、実施しました。そのさいに、何本かの「リョウトウナラ」を伐って、生育状況を、詳細に、調べることになったのです。6~7m クラスを、最初に、2 本伐ったんですけど、2 本めのときに、なんとなく、私には違和感がありました。そう大きな木ではないのに、実測すると、樹高が 7m もありました。見た目の印象より、高いんですね。

ほかの木といっしょに、管理棟まで持ち帰って、幹、枝、葉と分けて、それぞれの重量を測りました。いまは、ナマの状態ですが、サンプルをとって、乾燥重量をはかり、全体の乾燥重量を、推定することになっています。前中久行顧問の手を、わずらわせています。

そのとき、私は葉をむしりながら、葉脈の数をかぞえていました。ほとんど無意識だったんですけど、10 対以上あったんです。だったら、これは、モンゴリナラ！私は、ちょっと、興奮

していました。遠くまで、わざわざさがしにいったのに、なんと、足元にありました！

植物をさがして、なかなかみつからなくても、1本みつかり、つぎつぎに、でてくるものです。あれは、ふしぎですね。このたびも、最初にみつけた周囲をさがすと、ありました、ありました、つぎつぎに。スタッフの周金に、「これもモンゴリナラだ」と私がいうと、「そうだ、モンゴリナラのほうが、生育がいい。野三坡から持ち帰った種で育てたモンゴリナラは、リョウトウナラより、ずっと育ちがいい」と、答えました。彼らは、私より早く、そのことに気づいていたようです。

管理棟のすぐ下に、小さな苗畑がならんでいますが、そのなかに、スラッと伸びたナラがあります。1999年に、ここをスタートさせて、最初に育てたナラの1本です。スタッフの誰かが、気に入ったのでしょう。山に移さないで、ここに残しています。すでに5mを超えており、やがてこの、シンボルツリーになるでしょう。その姿で、思い至ったんですね。きっと、これも、モンゴリナラだろうと。葉脈を数えると、そのとおりです。こういうときの、全体の印象って、だいじですね。もとになる種子は、礪波山の自然林から、集めてきました。だとすると、あそこにも、モンゴリナラがあります。

それにしても、スタートいらい、まもなく10年ですよ。これまで、ずっと、リョウトウナラだと、私は、思いこんでいましたからね。いまになって、モンゴリナラと区分けしないとイケないのです。恥ずかしいことです。

言い訳をすると、中国の分類学のなかでも、リョウトウナラと、モンゴリナラとを、区別しない説もあるそう。このなかまは、容易に、交雑するようですから、このように混じって生えていたら、それぞれの純粋種って、ないかもしれません。

ついでにいうと、日本のミズナラの学名は、*Quercus mongolica* var. *crispula* だそうです。モンゴリナラの変種としてのあつかいです。でも、葉のかたちも、木の姿も、まったく似てないですね。別名に、*Quercus crispula* Blume があるようです。こちらは、別の種、としての扱いなのでしょう。

## NO. 475 日向斜面のトネリコ 2008. 10. 07

霊丘自然植物園は、霊丘県上寨鎮にあります。この一帯は、南山区と呼ばれます。県の北部には、黄土丘陵もありますが、県の南部は、山ばかり。太行山のどまんなかです。

昨年8月、太行山のなかを、よく歩きました。山の奥にいくと、自然に再生した森林があることを、これまで、なんども書いています。しかし、それは北向きの、日陰斜面（陰坡）に

かぎられます。南向きの日向斜面（陽坡）には、森林はもとより、灌木もほとんどなく、草さえまばら。乾燥がひどいため、植物が育たず、植物がないと、夏の、局所集中的な豪雨によって、土が流されてしまいます。植物は育ちようがない。悪循環。

1999年春から、建設にとりかかった、霊丘自然植物園で、森林が再生しつつあります。前号で書いたのは、そのうちの陰坡のこと。急速に再生している、とはいっても、太行山の奥にある自然林とくらべると、見劣りがするの、事実です。まだ、10年もたっていませんから、しかたがない。ただ、ほかの自然林は、交通がきわめて不便で、たどりつくのが、容易ではありませんが、私たちの自然植物園は、国道108号線のすぐそば。国道からみても、周囲とのちがいが一目瞭然。

それにくらべ、陽坡の状態は、ほかでみられないくらい、いいのです。10年まえとは、くらべものになりません。といっても、想像をたくましくしてもらっては、困りますよ。貧弱なものです。でも、ほかのところは、陽坡にはほとんど植物がありませんからね。

植物園の陽坡の主演は、トネリコのなかまです。中国名を「小葉白蠟樹」というよう。学名は、*Fraxinus bungeana* DC. 白蠟樹は、トネリコのことですから、そのままでは、コバノトネリコとなりますが、それは日本ではアオダモのこと。べつの種です。これが、どんどん増えています。たくさん実をつけますので、実生苗もあるでしょうけど、大部分は、例によって、萌芽更新したものです。数の多いものは、1株で、200本も群生しています。中国の植物図鑑には、「小喬木、高さは5mに達する」「灌木状になることもある」とあります。

ヒコバエがどんどんでて、そういうブッシュ状になると、私は考えていたんですけど、そうともかぎらないよう。植物園の下のほうにはえていた、実生の苗を、何本か、大同市北部にある環境林センターの見本園に、移植しました。もう5年以上になるのに、1本は、1本のまま。地上部を、伐採すると、株本からたくさん萌芽して、数がふえるのでしょう。それを繰り返すうちに、200本の株になる。まだ試したわけではありません。

成長は、きわめて遅いようです。センターの見本園は、土はとても肥えているのに、ここに来てからでも、5年以上たっているのに、樹高1.2mほど。生育調査のために、このあいだ、植物園で、各種サイズのを、伐ったんですけど、3m級の2本をさがすために、ずいぶん歩き回りました。胸高直径は3cmまでです。10年近くもたって、そんなものですからね。

なんの役にたつか、といわれそうですが、陽坡で育つものは、それだけで、貴重なんです。そして、材は、ものすごく硬く、締まっています。ほら、トネリコといえば、野球のバットや、スキー板をつくっていた、あれですからね。中国では、伝統武術に「白蠟棍」というのがあって、要するに、棒術ですね。バンバン、床をたたいても、グニャーと曲がるだけで、折れることがない。

バットといえば、ユニホームを脱ぐことになった、王貞治さんが、ホームランを量産した、圧縮バットを思い出します。たしか、樹脂を注入し、型にはめて、圧縮成型したんです。その後、飛びすぎるんじゃないか、と問題になって、禁止されてしまった。この小葉白蠟樹だったら、わざわざ圧縮しないでも育ちの過程で、圧縮されているようなものです。李向東によると、バットくらいの太さのものがあるそうですが、それがそのまま、バットになるでしょうか？

陽坡には、そのほかに、ニンジンボクのなかまが生えています。これは、霊丘県にはたくさんありますが、北隣の、広霊県や、渾源県に行くと、まったくみあたりません。それから、背丈の低い、ウツギのなかまがあります。樹高 50cm くらいかな。きれいな白い花が咲きます。かなりの面積の、陽坡の 1 つを、このウツギが広がりました。「5 月のころ、花でまっ白になって、ほんとにきれいだ」と、スタッフの周金がいいました。でも、毎年、そのころまでに、日本に帰るので、私は、みたことはありません。

#### NO. 476 辺境こそ、ものごとが見える 2008. 10. 21

大同における私たちの協力拠点、環境林センターは、北側に正門があり、南側は閉ざされています。用もなく、ふだんは行くことはありませんが、じつは、ここですぐ外が、ごみ捨て場になっており、ありとあらゆるゴミが、何メートルも積み上げられています。正規の処分場では、ありません。管理が行き届かないところに、誰も彼もが、捨てにきた。

管理が行き届かない理由は、そこが南郊区と、砒区の境界だからです。境界というのは、いろんな問題が、集まるものです。このゴミのケースは、かなり社会的な問題ですが、自然の要素がからむことも、少なくありません。

たとえば、大同は、全体としても、境界にあたります。なぜかというと、山西省の北端に位置し、河北省、内蒙古自治区と、接するところだからです。現在の自然環境は、かなり厳しいですね。山西省で、2 番目の都市になっているのは、石炭が産出するためです。それでなかったら、もっと貧しく、人口も少ないでしょう。

その大同のなかでも、境界付近に、矛盾が集中します。河北省との境は、太行山脈で、平地が少なく（畑がなく）、貧しくて、村も小さいのです。標高が高く、自然条件も厳しい。内蒙古自治区との境界は、万里の長城と重なります。ここも、やはり山。

そういうところは、ふつうは無視されます。でも、私たちは、なぜか、そこに、こだわってきました。しろうと、だったからでしょうね。事業の将来性とか、そういうことを、あまり考えないで、困難なところの、貧しい人たちに協力したいと、それだけを考えて。

途中から、それに、べつの性格が、加わったように思います。なぜかという、この境目は、人の意志によるもの、人の意志によらないもの、さまざまですが、いずれにしろ、矛盾が集中してしまいます。いわば、吹き溜まり。たいていの問題は、こういうところで、最初に顕在化します。それは、日本のばあいも、いっしょですね。水俣病、イタイイタイ病、そういうところで発生し、日本の、大きな転換点になった、と思うのです。

私たちが、水不足の、危機的な深刻さに気づいたのも、そのような村との、つきあいからです。最初に井戸を掘るのに協力した、広霊県苑西庄村は、河北省との境界に近い、山の村です。2番目に井戸を掘った、霊丘県石瓮村は、霊丘県と広霊県の県境近くの、山奥の村です。そして、親しくなった、井戸掘り隊の隊長から、「県境付近の村は、どこも、井戸や湧き水が涸れている」というショッキングな話を聞きました。井戸を掘るのに、協力したからこそ、水にたいする関心が、これほどまでに、強まったと思います。いつも、水を気にかけていたから、河川という河川、ダムというダムから、水が消えているのに、気づくことができました。ただ、通りすぎていたら、こうはならなかったと思います。

最近では、山中における、地下資源の乱開発が、大問題です。この9月、鉄鉱石の採掘現場で、大きな土石流が発生し、2つの村が埋もれて、たくさんの犠牲者をだしました。その責任を問われて、山西省の省長が、解任されました。私は、いくつもの、そういう現場をみるなかで、いつか、どこかで、かならず起こることだと、確信していました。これからも、その可能性が高いでしょう。そういう開発の現場には、なぜか、赤旗が立っています。こういうことをいうと、中国の人にはきられるでしょうけど、赤旗は、いまや、乱開発のシンボルのよう。

そのような開発による、水の汚染も深刻ですね。掘り出した鉱石を、谷川の水で洗う。数号前に書いたように、この10月から、太行山の水が、北京の飲み水になりました。汚染されて、まっ茶色になった水を、春先、畑に引き込んで、灌漑につかっていますよ。となると、土壌の汚染も、大問題です。

そういうところに、社会の関心がむかえば、いいですね。為政者や、報道関係者が、境目のところに、意識的に目をむける。それから、辺境の村に、発信力があればいいですね。「たいへんなことが起こっている」ということになって、社会全体が、問題に気づくことができるし、方向転換が早くでき、そのためのコストも少なくてすむ。

なかなか、そうはいかないですね。いまの中国では、都市の人たちは、農村に関心をもたないし、農村の人も、自分より貧しい村のことには、関心をもたない。人びとがそうであれば、ニーズがないから、報道関係者の関心も、そこにむかわない。為政者も、知ることがない。辺境の村に、発信力を求めても、それはムリでしょう。

山頂に立っていても、山の姿はわかりません。北京にいては、北京のこともわかりません。山のかたちを知ろうと思えば、ふもとに降りるだけでは、まだ足りないのです。もう少し離れると、山のかたちが見えてきます。ちょうど、それが、大同の農村のあたり。

#### NO. 477 「住民をにくむ」 2008. 11. 04

10月25日に、東京の立教大学で、セミナーを開催しました。300人のかたに、参加していただきました。私が驚いたのは、数よりも、その顔ぶれの多彩さ。会のあとの懇親会にも、80名近くが残ってくださいました。予約していた席が、早々と満席になり、数日前から、お断りせざるをえませんでした。ごめんなさい。

私が、最初の報告の後半で、霊丘自然植物園の植生の回復ぐあいを、写真でみてもらい「放牧や柴刈りを排除した結果……」と述べたのを、聞きとがめて、「排除という言葉の表現で適切なのでしょうか？もし放牧を排除し、木の伐採を禁じたのであれば、それまでそれで生活をしていただろう人びとはどうなったのでしょうか？」という文書による質問をいただきました。

その疑問は、もっともなことです。実態からいいますと、私のことばどおり、「排除」です。いちおうは、付近の村と、協議の場をもち、この区域については、柴刈りと放牧をしないよう、約束してもらいました。でも、言葉の約束だけでは、信じられません。つぎにしたのは、敷地の境界に、トゲのある植物を、植えることでした。ヒツジやヤギを、防ぐのがねらい。有刺鉄線を張ったらどうか、と考えたのですが、地元の人から、「すぐに盗まれてしまう」といわれました。それから、管理棟を建て、人を配置し、より徹底しています。

ほかのプロジェクトでは、ここまでのことをしませんが、ここには、かなりの労力とお金をかけて、周囲の一带や、隣接地域から、いろんな植物を集めて植えていますので、それがなくなったら、損失が大きすぎます。調査区を荒らされたら、継続調査の意味がなくなります。

私たちが確保した山は、86ヘクタールです。日本の感覚では、広く感じられるかもしれませんが、現地では、村の周囲の山の、ほんの一部です。中央政府も、地方政府も、ずっと以前から、放牧も、柴刈りも禁止しています。でも、お考えのように、有効な代替措置がなかったので、闇の放牧や柴刈りが、なかなかなくなりませんでした。生態移民や、退耕還林によって、農民への補償がなされるようになって、状況は多少、変わりつつあります。ただ、この付近では、従来は300頭だったヤギを、1,000頭までふやした村もあります。私たちが、86haを守ったために、その他の土地への圧力が高まることは、当然、ありうることです。

霊丘自然植物園のスタッフたちは、「100人が植えた樹木を、100頭のヤギが台無しにする」といっています。実際の影響は、それ以上でしょう。ですから、霊丘自然植物園の植生回復も、

まさに綱渡りです。

もう10年も前、さるシンポジウムで、渡辺桂さんというかたと、同席しました。もとは林野庁のかたで、その後、海外の国際機関や、JICAの専門家として、ネパールでの植林などで、活躍されました。私はたった一度、お目にかかっただけですが、すてきな印象が残っています。早くに亡くなられたことが、ほんとに残念です。遺された言葉に、「散る桜、残る桜も散る桜」。

「フォレスターズ・シンドローム」という、小話をされました。内容からして、壇上ではなく、楽屋での話だったと思います。「フォレスターは、ひそひそ話をしない。大声でどなりあう」。なるほど、なるほど。その一事をもってしても、大きな声のでない私が、門外漢であることを、証明できます。

「フォレスターは、ちびちびと飲まない。ガバツと飲む」。シンポジウムのあとで、ごいっしょするのが楽しみでしたが、先に帰ってしまわれたので、渡辺さんが、正統のフォレスターであるかどうか、たしかめることはできませんでした。

「フォレスターは、大きなまっすぐな木をみると、うれしくなる。大きなまっすぐな木が、たくさんあるのをみると、もっとうれしくなる」。これは、ほんとうです！晩年、大同のプロジェクトに入り浸っておられた相馬昭男さんも、林野庁OBでした。大同の西南の、芦芽山に、トウヒとカラマツの森林をみにいったときのことです。くるまがまだ完全に止まっていないのに、ドアをあけ、それらの木にむかって、走り出しました。

そして、最後が、「フォレスターは、樹木を愛するけれども、住民をにくむ」。ほかにもあったかもしれませんが、私が覚えているのは、これだけです。最後のこれ、きいた当時は、私はよく理解できませんでしたけど、現場での体験をくりかえすなかで、ことばの深い意味を、すこしはわかるようになった気がします。たいていの頭痛のタネは、住民とのあいだで起こるんですね。NGOなんだから、住民に愛されるプロジェクトをやればいい、ということなんでしょうけど、現場ではそう絵に描いたようにはなりません。

経済の混乱で、今後どう推移するか、わかりませんが、ここ数年は、国際的な原油高騰がつづき、それも石炭価格を押し上げる、大きな原因でした。大同では、2000年当時、1t60元だった石炭が、ことしの冬は、炭砒の出荷値が、1t800元、霊丘県あたりでは、運賃を加えて、1,000元を超えています。農民は、ちょっと、買えません。山にたいする圧力は、いっそう強まります。

大同県に建設中の白登苗圃や、実験果樹園・かけはしの森は、もともと、小老樹の林でした。桑干河流域の環境改善のために、1950年代から、政府の指揮で、ポプラ（小葉楊）を大面積に植えたんですけど、水不足その他のために、伸び悩んでしまいました。その小老樹が、最近、

盗伐されるんですね。鋭利なノコなんて、ありませんから、オノなどで、乱暴に、殴り切りされて、持ち去られる。

この9月に現地を訪れた、日本の専門家の小川眞さんが、「村の近くに、薪炭林をつくる必要があります。適当な樹種はありませんでしょうか？」といわれます。そのとおりだと思います。それだったら、バイオマスの利用ですしね。

霊丘自然植物園で、自然に再生しているのは、リョウトウナラ、モンゴリナラなどの、ナラが主体です。切られたあと、株元から、萌芽更新してきます。ある大きさまで、育つのを待って、一定の間隔で、利用できるようなら、いいんですけどね。これまでは、伸びるのを待ちかねて、10年に1度くらい、小さいうちに、どんどん切られていました。

いずれにしろ、私たちは「処方箋を書くのがやっと」でしょう。あそこで、ちゃんと、森林が再生するのをみてもらって、どうやったら、森林を再生させられるか、それと人間がどう両立できるか、地元の人に、考えてもらうしかないようです。

#### NO. 478 バカになりきれぬ？ 2008. 11. 20

前号の「住民をにくむ」に、いろんな反響がありました。渡辺桂さんの「フォレストーズ・シンδροーム」について、追加して下さったかたがあります。「フォレスターにとっての長期は、5年や10年ではない。100年だ」というのです。そういえば、渡辺さんの話のなかに、それがあつたような気もしてきました。でも、そのメールをみながら、私は気の遠くなる思い。

私たちが、大同での緑化協力事業を思い立ち、最初の協力ツアーを、派遣したときのことで、団長は、石原忠一さんでした。その後、ずっと、私たちの顧問です。いくところ、いくところ、「この協力事業は、最低でも20年はつづけます」とあいさつされました。そのそばで、私は、縮みあがっていました。あした、つぶれても、おかしくないのに、なんと、20年ですよ。でも、団長のあいさつに、横から私が口をはさめるわけがない。

いろんなことがありながらも、まもなく満17年です。ずっと、綱渡りでしたからね。よくつづいたものだ、と思います。ところが、渡辺さんは、100年だというんですよ。気が遠くなります。私たちの代表の立花吉茂さんとなると、もっと長いモノサシを、示されるんですね。「植物園の『園』は、囲うという意味です。壊されないように、なにかで囲っておけば、300年もすれば、どこでも、本来の植生が回復します。それでは、ちょっと長すぎるので、人の手をかけることで、すこし時間を短縮しようということです」

それがほんとうだと思います。ところが、いまの時代、このような尺度は、とても受け入れ

てもらえない。成果主義、とかが横行して、よりひどくなりました。3年で成果をだせ、長くて5年だ、という調子。それにあわせることで、コトもヒトも小粒になる。植林や緑化の分野まで、そういう波が押し寄せています。私なんかは、よくわからないままに悪戦苦闘。

この9月、大同にきていただいた、小川眞さんが、「木を植えて、育てるなんてことは、バカになりきらなかったら、できることじゃありません」「ここまでにしてしまったら、簡単にはやめられないでしょう」といわれたんですよ。以前から、たくさんのことを教わり、尊敬しているかたですからね。今回も、ほんとに強い印象が、私に残りました。

もう何年もまえのことですが、地元紙『大同晩報』の記者が、取材にきたとき、私はかなり酔っぱらっていました。「こんなに長く、つづけてこられたのは、どうしてですか？」ときかれて、「バカだからよ」と答えたんですね。するとその記者は、「いえ、そんなことはありません。あなたは聡明です」といったんですけど、「賢い人がこういうことをするかい？」と私がきくと、絶句しちゃったんですね。

それで、その新聞に、一面をつかって、カラー写真つきで、「私はバカで呑んべ〜高見邦雄との対話」という記事が、掲載されました。みなさん、読んで、おもしろかったんでしょうね。年末の「一年の紙面をかざった十大人物」に、私が選ばれました。それから何年かあと、その新聞の発刊10周年にさいして、「十年の紙面をかざった十大人物」という特集があって、また私が選ばれたんですよ。もちろん「バカで呑んべ」という見出しつき。光栄なことです！なんと不名誉な、とって、先祖は怒っているかもしれません。

以来、私のバカは、折り紙つきだと思ってきたんですけど、おもしろがってくれる人は、多いようです。会員のかたから、「米長邦雄さんが、講演で、あなたのことを話しているよ」という連絡をもらいました。それから、「米長さんの本に、あなたのことが書かれているよ」と知らせてくれた人がいます。将棋のかたですね。なるほど、『六十歳以後』という本に、私のことが書かれていました。NHKのラジオ深夜便「こころの時代」で、私が話しているのを、きいたんだそう。非常に心に残ったのは、「それは私がバカだからです。バカでないこんなことは続けられません」と話したことだそう。

考え方の異なる人を含めて、私は、バカとして、りっぱに、市民権をえつつあるようです。私の理解では、バカにとって、だいじなのは、小賢しさを捨て、欲をうすめる、ということです。欲望を捨てられればすごいんですけど、私のような俗物にできることではありません。でも、薄めるように努力することは、できるはず。そのように、努めてきました。

でも、いまのように、大同のプロジェクトが、それなりに発展し、人から認められるようになると、つぶしちゃいけない、失敗しちゃいけない、といった思いがでてくるのも、これまた事実。それも、欲なんでしょうね。いまは、そのはざままで、しんどい。そんなときに、小川さ

んは、「バカになりきらなくちゃあ」とおっしゃる。なんでも、なりきるのは、むずかしいですね。つくづく、そのことを感じています。

この「黄土高原だより」、最近、発行のペースが落ちています。以前は、夜、ショウチューか、ウイスキーをやりながら、パソコンに、むかっていました。で、翌朝、ファイルを開いて、えっ、だれが、いつのまに書いたんだ！といった調子。ところが最近、アルコールがはいると、書けなくなっちゃったんですね。あたまがしびれすぎて、書けない。しらふで書くしかない。

そのことを、私がうちあげたら、「そうじゃないかと、思っていました」と、町田良太さんに、言われてしまいました。ちゃんと、わかっちゃうんですね。きっと、おもしろくなくなったんでしょう。

アントニオ・グラムシの、有名なことばに、(自分は)「知性の故に悲観主義者だけれども、意志の力で楽観主義者でもある」というのがあります。環境問題にとりくむとき、その必要性をつよく感じます。でも、薄志弱行の私は、それだけの意志力がありません。「スピリッツの力で、楽観主義者でもある」だったんですよ。この通信を書くとき、そのスピリッツが抜けちゃったんですからね。おもしろくないわけです。今回は、ひさしぶりに、頼ってみました。ただし、2晩に分けてですけど。

#### NO. 479 栽培する穀物 2008. 11. 26

黄土丘陵の農村では、井戸があっても、灌漑にまでは水を使えず、天水農業ですから、野菜は、ほとんどつくれませんでした。農業でありながら、野菜を買っていました。行商のトラックが、巡回してきます。お金による売り買いもありますが、ほんのすこし前までは、アワ、キビなどの穀物と 物々交換しているのを、よく見たものです。ハードカレンシーは、アワだったかな？

この数年、貧困農村を街の人たちが支援する「扶貧工程」によって、多くの村で井戸が掘られ、それから庭先など、わずかな面積に、夏野菜をつくるようになりました。家庭菜園です。タネや苗を、隣家と交換しあい、できたものも、おたがいにやりとりして、いろいろな種類のものを、食べられるようになりました。井戸ができることによって、生活は便利になりますが、経済的に、急に豊かになるわけではありません。最大の変化は、野菜を食べられる、ということでしょうか。

日本の外務省草の根資金協力の支援で、大同県遇駕山村にも、井戸を掘りました。最後まで、水に苦しんでいた村です。地層の構造が、よくなかったのです。これまでに、失敗したことがあります。今回も、最初に掘った井戸は、何回も何回も、困難に遭遇し、途中で、あきらめざ

るをえませんでした。場所を少し移して、方法をボーリングに切り換えて、やっと成功したのです。くわしい経過は、1年前に書きました。

水務専門の人からは、「門外漢だから、できたんだ!」とあって、大同事務所の武春珍所長は、ひやかされたそう。わかっている人たちは、手をださない。11月29日に放映される、BS朝日の番組にも、通水式の感動の場面や、家々の庭で、野菜づくりをはじめたようすが、登場するはずです。

前置きが、長くなってしまいました。天水農業というのは、雨だけが頼りの農業です。この年間降水量は、平均400mm弱。年ごとの変動が大きく、最近では多い年で600mm強、少ない年は250mmほど。250mmになると、ひどい旱魃で、収穫はゼロに近づきます。そんな環境で、栽培できるのは穀物と、ジャガイモです。

1992年秋、はじめて1人で農村を回ったとき、「トウモロコシをつくっているのが、いい畑だ」といわれました。トウモロコシ、コーリヤン、といった背の高くなる穀物は、収穫量が多いんですけど、そのぶん、水が必要です。水条件のいい畑でしか、つくれません。トウモロコシは、食味は、好まれないですよ。農家の人たちが私に話します。「ずっと豊かになったんだよ。以前はトウモロコシばかり食べていたのに、いまはアワやキビだ」。トウモロコシは、飼料用その他に、販売するわけですね。

それより水条件が悪くなると、主たる作物は、アワ、キビ。アワは、おもにおかゆにして食べます。キビは、粉にひいて、糕（ガオ）にする。キビモチですね。そのほかに、いろんな食べかたがありますが、いずれにしろ、農村の主食です。

忘れてならないのが、ジャガイモです。そのままふかしたり、焼いたりすることもあります。ゆでたものをつぶして、アワといっしょに、おかゆにすることも多い。中国で「糧食」というばあいには、イモが含まれ、統計では、イモ5kgを、穀物1kgに換算するのが一般的です。

無霜期の短い山地の村では、ハダカエンバク（莜麦）をつくります。カラスムギのなかまです。腹持ちがいいとあって、農村では喜ばれます。たとえば、こんな言い回しがある。「三十里的莜麵、四十里的糕、十里的蕎麦餓断腰」。それぞれの主食を食べて、どれだけ距離を歩くだけ、腹持ちがするか、というもの。中国の一里は、5百メートルです。ハダカエンバクは三十里=15キロ、キビモチは四十里=20キロ、ソバは、たった5キロで、腹が減って、腰が抜ける、というわけです。

ソバは、霊丘県以外では、あまりつくりません。生育期間が短いので、アワやキビを蒔いて、芽がでなかったとき、あわてて、種をまくんだそう。でも、収穫量が少ないから、できることならつくりにたくない。収穫量が、最優先されるのです。霊丘でつくるソバは、苦蕎麦です。最

近、日本にもはいつてきた、韃靼（ダツタン）蕎麦ですね。それにたいして、日本で一般的な蕎麦は、甜蕎麦（アマソバ）です。ソバに加工して食べるほかに、お茶や、酒や酢の原料になります。

種類の多いのが、マメですね。日本でふつうにつくる、ダイズ、アズキ、リョクズがあります。ソラマメは、草が小さく、実も小さいものを、山地でつくります。エンドウは、サヤエンドウを野菜としてつくるほかに、実を熟させ、粉にひいて、麺にして食べるものもあります。草丈が30cmほどしかなく、実も小さい。マメの麺のなかで、とくに珍重されるのが、扁豆麺で、私の知るかぎり、大同では、新栄区だけでつくられます。私も一回だけ、ごちそうになりましたが、感動的に美味！カラスノエンドウを、一回り大きくしたくらいの、平たいマメで、収量が、ほんとに少ない。いい土地では、もったいなくて、とてもつukれないのだそう。

農村で「トウモロコシ→アワ・キビ」が、豊かさへのシンボルなら、都市部では、「アワ・キビ→白麵」、つまり小麦粉への変化です。といっても、大同では、コムギはほとんど作りません。1996年がまれにみる豊作の年で、トウモロコシとジャガイモがとれすぎ、値が暴落しました。その翌年、あちこちでコムギが栽培されたんですけど、1997年がひどい旱魃で、コムギは収穫できませんでした。トウモロコシにくらべ、コムギは、より多くの水が必要です。それくらい、コムギをつくっているのを、みたことがありません。

コメも食べますけど、基本的に、外地から運んできたもの。大同では、水田は、靈丘県の、唐河の河川敷に、ネコの額ほど。温度の面では、米作も可能なんでしょうけど、なにせ水がない。

でも、食べているものの、種類からいえば、日本よりずっと豊富ですね。「民は食を以て天と為す」といった標語が、いまでもあるくらいで、食べることへの、情熱がちがいます。そして、最近、大同の市街地に、「粗粮館」がふえてきました。雑穀を売りにするレストランです。その壁に、堂々と、かかげられています。「過去は貧困のゆえに粗粮を食べたが、いまは健康のために粗粮を食べる」。

#### NO. 480 中国産がいちばん安全？ 2008. 11. 28

ここ数年、中国産食品の安全性が、大きな問題です。とにかく、事件がつづきますからね。それは事実です。周囲にも、中国産はゼツタイに避ける、という人が、めずらしくありません。安くても、買わないといって。そういうことになると、1年の3分の1近くを中国ですごく、私は、かなりあぶない。来週の月曜日から、また中国なんですけど。

その一方、なにかの問題があったときに、中国の役人は、日本にたいしては、強腰にでます。

役人にかぎりません。中国人は、一般的に、日本人は、強いものに弱い、弱いものには強い、と信じていますから。だから、最初に、ガツンとくる。それにたいして、当然、日本人も反発する。どちらも、感情的に、なりやすいんですね。

11月26日朝刊の朝日新聞の生活面、「あなたの安心」「食の安全」って、何だ(3)という記事が掲載され、「国産なら安全なのか、天然なら安心なのだろうか」という問いかけが、なされています。今回は、前半の問いかけに、からませてもらいます。記事によると、厚生労働省が先月発表した、農産物の残留農薬検査結果(2003年度分)では、国産、輸入あわせて約212万件について、残留農薬基準を上回ったのは、国産も、輸入品も、0.01%で、差がなかったそう。

そうであっても、中国産は、例外的にあぶない、と思われるでしょうね。目安として、厚労省の、輸入食品監視統計を抜粋したものが、表にして、掲載されています。2007年度のもので。テキストでおおくりするので、読みやすさのために、その表を、縦横、転換して引用しました。( )の数字は、以後の注釈のために、私が追加しました。

国名	韓国	中国	タイ	米国	豪州
輸入届け出件数 (1)	91377	537858	116592	202255	68538
検査件数 (2)	8083	91934	16507	18929	1934
違反件数 (3)	37	376	113	117	14
違反率 (%) (4)	0.04	0.07	0.10	0.06	0.02

違反件数というのは、残留農薬が基準を超えていたり、使用できない添加物が使われていたり、そういうことです。これをみると、違反件数は、中国が群を抜いていますね。そもそも輸入届け出件数が圧倒的だから、それは当然でしょう。でも、違反率は、だいたい横並びで、そう突出しているわけではありません。この記事が指摘するとおり。

この表をみながら、私は、みょうなことが気になったのです。それは、ここでの違反率が、違反件数(3)÷輸入届け出件数(1)、になっていること。これは、どう考えても、おかしい。分子と分母の関係が、でたらめです。ここはやはり、違反件数(3)÷検査件数(2)と、すべきでしょう。それを、仮に「発見率」としておきましょう。ついでに、検査件数(2)÷輸入届け出件数(1)を「検査実施率」としてみます。

国別にならべると、つぎのようになります。

単位は、%です。

国名	韓国	中国	タイ	米国	豪州
検査実施率	8.8	17.1	14.2	9.4	2.8
発見率	0.46	0.41	0.68	0.62	0.72

発見率のほうも、大差がありません。といっても、危なかったはずの中国が、いちばん低いのです。そして、いちばん安全だったはずの豪州が、いちばん高い。逆転しています。検査率は、中国が高く、豪州が低い。

こういう検査って、対象を、無作為に選ぶのではないと思います。現場の担当者の直感を含めて、危険だな、とめぼしをつけて、検査するものもあるでしょう。そのばあい、検査対象が、中国のように、17パーセントにもなれば、発見率が、逆に、下がって当然です。ですから、発見率が低いからといって、中国産がいちばん安心、とまではいえません。

豪州産は、新聞の「違反率」は、いちばん低いんですけど、発見率は、いちばん高い。そのような傾向は、米国产についてもいえます。以前に私は、日本の有機農業関係者から、残留農薬は、中国産より、米国产のほうがおおい、ときいたことがあります。それはほんとうのよう。発見率が高いのに、検査率が低いのはなぜでしょう。日本が強いものには弱い、弱いものには強い、といったことが、こういうところに現れている、というのでなければ、いいんですけども。

数字というのは、こういうものだと思いますよ。だいたい、ボーダーライン近くのを、どう判断するかで、コロッと変わりますでしょ。

朝日新聞のこの記事は、「まずは風評に流されず、事実を知る努力をしてみませんか。知ることと解消できる不安もあります」と、締めくくっています。でも、知る努力って、たいへんですね。残念ながら、新聞だって、あてにならないところがありますし。

## NO. 481 寒波到来！ 2008. 12. 05

12月1日に北京に着いて1泊し、翌朝の飛行機で大同にきました。環境を口にしながら、なぜ飛行機？正直にもうしまして、列車のひとり旅が、辛くなったんですね。年のせい。いつものことながら、荷物が重い。スーツケースはかならず20kgを超え、ときには、追加料金の必要な25kgオーバーになります。背中のザックも、ノートパソコン、一眼レフで、かなりの重さ。そのうえ、ちょっと目を離すと、荷物が消えますでしょ。日本国内の旅とは、意味合いがちがいます。

大同のなかまたちが気をつかって、送り迎えに、だれかをつけようといってくれるんだけど、「ひとり旅ができなくなったとき、この活動から離れるとき」と宣言してきました。年をとって、周囲に迷惑をかけているのに、私だけ自覚がない、というのは、困りますからね。そのあたりを基準にしたいわけです。といっても、すぐにやめられるわけじゃない。といったところで、飛行機は、ありがたい。荷物をあずけられるのが、いい。

大同に着くと、みんなが心配していました。12月3日に、日本大使館の梅田邦夫公使がくるんだけど、寒波といっしょになりそうだと、いうのです。12月2日はね、暖かかったんですよ。最高気温8度、最低気温-6度。この時期としては、めずらしい。天気予報どおりに、十数度も下がるとなると、これはたいへん。

公使がくるのは、もちろん、目的があつてのこと。草の根無償資金協力で実現した、遇駕山村の井戸掘りと、三十里鋪村の小学校建設の竣工式です。問題は遇駕山村。あそこは、市内にくらべ、300m近く高いのです。そのうえに、風口。風の通り道ですね。

大同は、乾燥しているので、数字ほどには、寒くないのです。風がなく、日が照っていれば、-10度でも、セーターで外に出られますし、老人たちは日向ぼっこ。ちょっとでも、風があれば、話はべつですよ。切れるように耳が痛く、やがて感覚がなくなります。手元の、山歩き用の温度計の表をみると、気温が-4度でも、5mの風があれば、体感温度は-14度、11mの風だと、-23度にもなるんです。

簡単なものとはいえ、式典となると、屋外です。農村には、広い部屋なんてない。しかも、掘った井戸は、村はずれにあつて、風をさえぎるものが、なにもないんです。ふきっさらしのなかで、30分も立ってたら、へたをすると、死人がでますよ。もっとも、そのまえに、村の人が集まってくれるかどうか。

12月3日になったんですけど、寒波の到来は、ちょっと遅れたよう。曇ってはいますけど、心配したほどではありません。朝の予報では、最高気温7度、最低気温-7度。

公使を空港に迎え、その足で直接、遇駕山村にいきました。寒いことは、寒いんですね。準備のために、早くいった、大同事務所の魏生学副所長は、耳たぶが、霜焼けになりましたからね。日中双方のあいさつを、手短にすませ、2軒の農家を訪問しました。

じつはこの井戸、4月に水がでたとき、通水式をやったんですね。BS朝日の番組になった、あれ。あのときは、まだ水道になってなかったんですけど、いまは各戸に、水がとどいています。中国では、自来水といいます。たいてい、家のなかには、引き込まないですよ。中庭に、蛇口をおきます。冬の最低気温は、零下30度近くになりますから、そのままでは、凍ってしまう。ですから、庭に、直径80cm、深さ1.5mくらいの穴を掘って、冬は蛇口を、そのなかにしめておくんですね。水がいたるときは、ロープでそれを引き上げてつかう。冷たい外気がはいりこまないよう、ちゃんとフタをしておきます。土も、地表から1.2mくらいまで、凍結しますから、水道管は、1.5mくらい、埋設してあります。

村の人たちは、ほんとに喜んでくれています。ことばはもちろんですけど、表情にそれがで

ています。2軒目に、たまたま飛び込んだ家が、遇駕山の松林の管理人、袁さんの息子の家でした。もう、しゃべる、しゃべる。この村は、以前にも、井戸掘りに挑戦し、失敗していますからね。今回も、1回目は失敗し、場所を移して、掘り直し、やっと水がでました。よろこびも、ひとしおなんです。

三十里鋪村の小学校は、完成はしてますけど、まだつかっていません。セメントが完全に乾くの待って、まもなく移ってくるそう。おおぜいの小学生が、私たちを待っていて、大歓迎してくれました。教室にはいって、みんなで記念撮影したんですけど、1回では全員がはいれないので、3回に分けて。梅田公使も、もみくちゃになりました。

司会進行を、大同市総工会の柴京雲副主席がつとめました。彼のもうひとつの顔は、人気タレントですからね。12月2日の夜も、中央テレビの番組に、出演してたくらい。地元のテレビでは常連ですからね。どこの農村にいても、彼を知らない人はいません。そして、天才的ですよ。遇駕山村では、村の人たちは、集まってはきても、遠巻きにして、みている人が多い。地元の幹部が、前のほうに集まるようにいっても、動こうとしません。柴京雲が、「さあ、集まって。固まったほうが寒くないよ！」と呼びかけると、「あっ、柴京雲だ」といって、みんな寄ってくる。三十里鋪村の小学校でも、こどもたちをたちまち、引き込んでしまった。私なんか、しゃがれ声で、なにをいっても、陰々滅々。ほんとに、うらやましいと思いました。

遇駕山村から、三十里鋪村への移動のあいだに、私たちの采涼山村プロジェクトを訪れ、育てているマツをみてもらいました。午後からは、雲崗石窟に行くまえに、私たちの環境林センターを案内。私たちも、そのあたりは、抜け目がない。でも、私の説明が長くなると、柴京雲がストップをかけます。そして夜は、冀明德副市長との会見と会食。1日に、よく収まったものです。翌日の大同日報は、1面で、大きく報道しました。

こんなことを書くと、梅田公使にはもうしわけないけど、じつは、ここまでは、前置きです。12月4日の朝、目を覚ますと、暖房はもちろんきてますけど、それでもうすら寒い。寒気が、窓から伝わってきます。カーテンをひいて、びっくりしました。外は雪景色。くるまはノロノロ運転です。出発時間を早めて、梅田公使を空港まで見送りました。

よかった、よかった。もしも、4日だったら、竣工式はもちろん、遇駕山村には、近づくこともできなかったでしょう。日本大使館の当初の計画は、12月4日だったんですよ。私がワガママをいって、3日にしてもらった。4日の最高気温は-12度、最低気温は-19度です。たった1日で、20度近く、下がってしまった。ブルブル！

いま、よかった、よかったと、書いたばかりですが、今後の私の予定を考えると、いやになります。霊丘自然植物園の写真を撮って回ることにしていたのに、霊丘に行くまでの峠道を、くるまが越えられそうにない。でも、天候とだけは、ケンカのしようがない。

NO. 482 除雪 2008. 12. 09

12月3日の夜から、大同には、寒波がやってきて、この地方にはめずらしく、4日早朝まで、雪が降りました。市街地では、降水量にして2.5mm。たいした量ではありませんが、新聞は「大雪」と書いています。それくらい、雪はめずらしい。

ただ、気温が低いですからね。最低気温は、-20度前後まで下がりました。いったん凍ってしまうと、根雪になります。これまでだと、1か月とか、3か月とか、融けないで、残ったことがあったそう。

今回は、ちがいます。けんめいの除雪作業が、とりくまれました。新しく購入した除雪車6台が、フル回転しました。しかし、決定的に不足したそう。道路清掃員など、1,000名が出動しました。そのほかに、大同市や城区の職員など、2,000名が、朝暗いうちから、スコップや竹ぼうきをもって、雪かきにでたのです。

その先頭に、耿彦波市長が立ち、私のなじみの、李世傑、馬斌、郜向華といった副市長や、城区の区長の祁学峰も参加したそう。幹部総出だったんですね。というふうにくくと、ああ、あの、写真を撮ったら、それで終わり、と思われるかもしれませんが、そうじゃなかったよう。

祁学峰が、「ほんとにたいへんだったんだよ。朝の5時には起きて、現場に行ったんだ。各所に連絡をとるのに、携帯電話をいったい何本かけたか。市長は『雪が降り出したら、ただちに除雪にとりくみ、雪がやんだときには、雪がないようにする』といったんだ」といっていました。凍らないうちだったら、除雪も簡単だけど、凍ってしまったら、なかなか除けないので、スピードがカギのようです。融雪剤も、240トン散布したそう。

4日の明け方には、雪はやんでいましたので、雪がやんだときには雪がないようにする、というわけには、さすがに、いきませんでした。でも、夕方、暗くなっても、ザッザッ、ガリガリと、凍りついた雪を削り取る音が、ホテルの7階の窓まで聞こえていましたよ。そして、5日には、市街地の大部分から、みごとに、雪が消えていました。

市民の評判は、いいですね。以前は、何か月も雪が残って、交通が渋滞したり、ころんでケガをしたり、ほんとにたいへんだった。それが今回は、たった1日で雪がなくなった。老耿は、ほんとにいい。建国後、来年で60年だけど、こんないい市長ははじめてだ。老耿が市長を3年、党書記を2年、大同に5年いてくれば、大同は生まれ変わる。そんな評判を、いろんなところで、ききました。トップしだいで、こんなふうになるんですね。私も、ちょっと、驚きです。

いま大同は、きわめて大規模な再開発、改造にとりかかっています。それについては、号をあらためて書くことにしますが、私なんかみて、「だいじょうぶかな？」と思うことも、少なくありません。あまりにも、大胆すぎるんですね。そして、市民のなかには、不利益をこうむる人もあるでしょうよ。にもかかわらず、いまは圧倒的に、期待が大きいようです。

## NO. 483 空気がきれいになった！ 2008. 12. 15

冬に大同を訪れるとき、気になるのは、空気が汚いことです。私は、呼吸器系統が弱いので、とくに困ります。日中の最高気温でも-15度以下、夜間の最低気温は、-30度近いこともあります。煮炊きや、暖房に、石炭をナマ炊きしましたからね。ホテルの窓からみると、家々の煙突から、黒い煙が、モクモクとでていました。

しかも、その煙が、うえに上がっていきません。横にたなびいたり、下に下がったりします。逆転層ができていますね。地表近くの気温が、上空の気温より、低いために、煙が拡散しない。

大同は、中国一の石炭の街です。豊富な石炭を燃やして、火力発電をおこなっています。自分のところの電力をまかなうだけでなく、それ以上に、北京のための発電をおこなっています。電気は北京にいくけど、汚染は残ります。それから、セメント工場は、より深刻な汚染源。

農村のほうを回って、市街地に近づくと、黒っぽいドームが、大同を覆っているように、みえました。そして、そのなかにはいると、臭いだけでなく、目が、ショボショボしたものです。まるで、煙突のなかか、オンドルのなか。

ところが、この冬、大同を訪れたら、青空がみえるんですよ。去年あたりも、市内はずいぶんよくなったと、思っていたのですが、ことしは、それが、もっとはっきりしました。

オリンピック期間は、あれほどきれいだった北京にも、大気汚染は、ちゃんと、戻ってきました。プレートナンバーによる、くるまの規制は、期間中よりは緩和されて、いまも継続されているようです。でも、渋滞も、もどってきました。ひょっとすると、今冬の大同の空気は、北京よりきれいかもしれません。最大の原因は、生活燃料の、天然ガスへの、切り替えがすすんだことです。それによって、ここまできれいになるんですね。

大同の市街地は、汚染が軽減されましたが、一步、郊外にでると、以前よりひどいのです。そして、農村部の県城にいくと、もっとひどい。といっても、ことしは、寒波の関係で、ほかの県城にでかけることは、できませんでした。県城というのは、県の中心になっている町で、

県政府の所在地です。去年は、渾源県と靈丘県の、県城にいきましたが、朝なんて、見通しがきかないのです。臭いし、ほんとに目がショボショボ。

全体としてみれば、中国の環境問題は、深刻していると思います。その一方で、こうやって、改善されている面もあるんですね。その両方を、きちんとみていくことが、たいせつだと思っています。

#### NO. 484 牛の角 2008. 12. 25

私の友人・知人に、大学や研究所の研究者が、けっこう多いのです。シンポジウムのあとの、懇親会で、「どうして、そんなに忙しいの？」ときくと、「雑用だよ。本来の研究の時間なんて、ない」と、自嘲げみ。重ねて尋ねると、「伝票の整理、報告書の作成、その他」とのこと。こまったことです。

私たちはいま、認定 NPO 法人の、3 度目の申請中です。12 月 16 日と、19 日に、大阪国税局による、調査がありました。朝の 9 時半から、夕方 5 時すぎまで、2 人の担当者が、事務所にやってきて、帳簿その他を、調べあげました。大きなところでは、問題はなかったと思います。なんてことは、私たちにはわかりません。国税局の担当者たちも、調査をするだけで、その結果を判断するのは、国税庁でしょう。

この制度が、そうとうにしんどいのです。認定 NPO 法人の制度がはじまったのは、2001 年秋ですから、まる 7 年がすぎました。それなのに、認定団体は 89 団体（12 月 1 日現在）。一般の NPO 法人は、3.6 万団体にもなるそうですから、その 0.25%。千に三つも無いという、「せんみつ」にも及びません。

制度の特徴は、パブリックサポートテストの導入です。総収入に占める、寄附金等の割合が、5 分の 1 以上なければいけません。寄附金の割合が高いのは、広く支持されているあかし、というわけですね。お役所の忝意で認定されるのはよくない、認定の条件を、客観的な数値であらわそう、そのような意図があった、と思います。社団法人、財団法人などの公益法人が、おもに、その支出面で、性格を判断されるのにたいし、認定 NPO 法人のばあいは、収入面が判断の基準、とされました。

その後、毎年、改正されました。こまかい計算にはふれませんが、改正のたびに、ハードルは低くなりました。今回の申請にあたって、私たちのばあいは、寄附金等の割合が、5 分の 4 前後です。クリアできる団体は、かなりあるはず。にもかかわらず、申請する団体が少ない。認定団体の数は、ここ数か月、動いていません。

調査初日の翌日、東京の未知の女性から、電話がありました。私たちへの寄附金が、税控除の対象になることを確認したあと、「おたくの人件費の割合は、どれだけですか？認定されるのは、天下り役人を受け入れている団体だけ、というのは、ほんとうですか？」と、いやに率直な質問です。えーっ、そんなふうにみられることも、あるの！残念ながら私たちにはいません、と答えました。私が知っている認定団体にも、そんなところはありません。「ホームページで、会計を公開しています」と答えると、しばらくして電話があり、もう1人のかたを誘って、まとまった寄附をしてくださいました。ウソのような話ですけど、ほんとうです。

国税庁、国税局というのは、私が接したかぎり、日本のお役所のなかで、もっともまじめなところだと思います。今回の調査も、お昼の1時間の休憩以外は、片時も休むことなく、つづけられましたし。前々回と、前回の申請では、社員（私たちのばあいは会員）全員の名簿提出を求められましたが、私たちは、それに応じませんでした。それについての応酬で、けっこう時間をとられたんですね。ところが、社員の名簿提出は、今春の改正で、不要になりました。今回は、まるまる2日の時間が、会計書類の調査にあてられたのです。

小さな団体ですからね、2人のプロが、2日もかければ、突き抜けてしまいそう。時間をかければかけるほど、小さいところに、はいりこみます。私たちの事務所は、たった4人で、毎日、顔をあわせていますから、毎月の賃金は、銀行振込ではなく、現金の手渡しです。受け取るたびに、領収書をいれないといけないんだそう。そんなことは、していませんでした。また、短距離の交通費は、領収書がとれませんが、そのばあいは、本人が領収書を、書かないといけないそう。出金伝票は書いてますけど、それじゃだめというのです。回数カードや、ICカードをつかうことも、ふえてますけど、そのばあいは、履歴記録を残すよう、注意されました。思いついたとき、やるのは簡単ですけど、遺漏のないよう継続するのは、負担が大きいですよ。

そして、帳簿の収入と支出、領収書などを、1つずつ突き合わせ。領収書が抜けていたりすると、小さな金額でも、しつこくきかれます。税務調査の手法なんでしょうけど、それがまじめであればあるほど、NPOの自発的な活動を支援する、という制度本来の目的と、離れていきそう。2008年11月の申請件数は7団体だったそうです。うち1団体が私たち。認定も、不認定も、ゼロです。そして、申請後の取り下げが、3団体。取り下げの累計は、90団体にもなり、現在の認定団体数に、匹敵するんですね。事前の相談で、条件を満たしていると思うところ以外は、申請してないと思うんですよ。それなのに、途中で取り下げる団体が、これだけだ。

どんなに小さなところまでも、キチンとできるなら、そうするのが、いいのでしょうか。でも、そうしたことを、どこまで徹底しても、それで、私たちの活動が、うまくいくわけではありません。経済的な危機が、世界規模ですすむなか、これからどうなるか、ひじょうな不安を感じています。どうするのがいいか、正直なところ、わからないのです。そういう状態だからこそ、本来の活動を強化するために、やらないといけないことが、たくさんあります。もっている力は、そこに集中したいんですね。

頭に浮かんできたのが、「角を矯めて牛を殺す」ということばです。牛の角のまがりぐあい、気に食わないので、それを直そうと、いじっているあいだに、牛が死んでしまう、というんですね。冒頭の研究者の例もそうですけど、いまの日本って、そういうことが多すぎるように思うのですが、いかがでしょう？

#### NO. 485 ピンチはチャンス 2009. 01. 06

あけまして あとがつづかぬ 年始め。たいへんな年になりそうですね。でもまあ、私たちは、ずっと低空飛行と、綱渡りをつづけていますから、こういうことには、慣れているともいえるはず。

山西省大同市での緑化協力事業は、1992年1月のスタートですから、満17年に迎えました。失敗や困難に、なんどとなく直面しました。最初は、中国側のメンバーとも、おたがいに理解がなく、信頼関係もなかったのです。外国人で、ことばがつうじず、文化も習慣もちがいます。そのうえ、大同は、日中戦争にさいして、大きな被害を受けたところなんですね。その記憶は、鮮明に、残っています。

私たちを、いつもにこやかに迎えてくれる緑色地球ネットワーク大同事務所の、武春珍所長も、こんな話をしてくれたことがあります。彼女じしんは、まだ生まれていませんから、当時の記憶があるはずがありません。母親から、くりかえし、きいたんだそう。その内容からいって、1930年代の末なんでしょうけど、春節の直前だったといえます。旧正月ですね。家の飾りつけなどもすませ、迎春の準備をしていたんだそうです。そこに、日本軍がやってきて、有無をいわさず、追い出した。そういう例は、無数にあったんでしょうね。

だから彼女は、しごととして、この事業を担当するようになったときも、最初は、気がすすまなかったそう。それが、いまや、あの張り切りぶりですよ。彼女がいなかったら、大同での事業は、いまのように、発展していませんからね。どのような気持ちの変化があったのか、機会があれば、彼女にきいてみてください。いま、私たちといっしょにしごとをしている人たちは、大なり小なり、同じような経過をたどっているはずですよ。

そういうなかでは、最初から、完全を求めるわけにはいかないんですね。そんなことをすれば、疲れ切ってしまうだけです。あるいは、相手にされず、孤立するだけ。それに、私たちは、しろうと集団でした。試行錯誤が、避けられなかったわけです。

そのなかで、失敗じょうずになった、と思うのですよ。第1は、失敗するにしても、致命的にならないようにする。フェイル・セーフですね。たとえば、私たちは、一か所に大きなプロ

プロジェクトをつくらず、小さなプロジェクトに、分散してきました。

最初は、そうともかぎらなかつたのです。中国では、なんでも、越大越好（ユエダーユエハオ）ですからね。大きければ大きいほどいい、という考えが、根強いのです。投資は多いほどいい、面積は広いほどいい、となる。ところが、どちらかというところ、植えるのはかんたんで、むずかしいのは、そのあとの管理です。なにも問題がなければいいんですけど、気象をはじめ、あの地方は、問題だらけですよ。規模が大きいと、問題がおきたときに、完全に受け身におちいって、手を打てなくなるんですね。地元の管理能力を越えたプロジェクトは、100 パーセント、失敗します。

分散しておくのは、リスクを軽減するためです。どこかが失敗しても、うまくいっているところがあれば、希望を失わないですみます。それだけじゃないんですね。いくつか同時並行で、プロジェクトをつくっておくと、いいところ、わるいところが、でてきます。それを比較することで、いろんなことがわかります。

失敗しようずになる第2の条件は、失敗から学ぶことです。でも、これはむずかしいですね。失敗をなんとか克服できてからは、私も、失敗の経験を、自慢話のようにしてますけど、当座は、ほんとに、つらいんです。私なんか、小心で、おくびょうですから、ほんとに、全身に鳥肌がたって、血の気がひいていくのが、自分でもわかるんですよ。立っているのが、つらくらい。できることなら、枯れた木なんて、みたくないのです。なにも、考えたくありません。

でも、そのときが、チャンスなんですね。「越大越好」という地元の幹部に、なにもないとき、理屈だけで、それに勝つことは、むずかしいですよ。へんに理屈で勝つと、逆に、しこりが残ったりする。でも、現実の失敗をまえにすると、理屈じゃないですからね。原因がなんであったのか、失敗をどうやって乗り越えるのか、真剣に考え、真剣に話し合う、絶好のチャンスです。小さなプロジェクトに分散する、といったことをはじめ、いろんな知恵が、失敗のなかで生まれてきました。そんなときに、「失敗したのは、おまえたちのせいで、自分には関係ない」なんて顔をするのは、愚の骨頂。

それに、そういう失敗や困難にであったときほど、人間の真価が、ためされているわけです。それに耐えられる人間こそ、信じられるわけです。自分自身も、試されています。その自覚が、いちばん重要だと思います。

そして、失敗し、それを乗り越える経験をもつと、人は、成長するわけですね。順調ひとすじにきた人間よりは、困難にぶつかり、もまれてきた人間のほうが、最後のところで安心できますよ。困難を乗り越える、共通の体験をすれば、おたがいに、深いところで、信頼しあえると思います。それをつくり、支えあってきた、17年だったと思います。今回は、もういちど、自分自身に言い聞かせ、激励するつもりで、これを書きました。

NO. 486 馮艶が、監督だってえ！ 2009. 01. 09

正月 4 日、馮艶から、びっくりメールがきました。彼女が、ビデオで撮りつづけた作品が、山形国際ドキュメンタリー映画祭 (2007 年) アジア千波万波部門で、小川紳介賞 (グランプリ) & コミュニティシネマ賞を受賞し、そのほかにも、いっぱい賞をとってるんですって。そして、この春から東京、大阪はじめ各地で、劇場公開されるそう。タイトルは「長江にいきる - 乗愛 (びんあい) の物語」(117 分)。詳しいことは、以下でどうぞ。

[www.bingai.net](http://www.bingai.net)

フォン・イェン監督、とあります。彼女が、監督ねえ！

ことしは、なにかがありそうだ、と思っていましたよ。でも、どちらかという、わるい予感。ところが、第一発目に、いいことがあったんですね。この年齢になると、友人の成功以上のよろこびはありませんからね。もう、うれしくて、うれしくて。

2 月からのロードショーをまえに、先行レートショー。

ザンネンながら、私はいけませんので、代わりに、みてください！

●日時：2009 年 1 月 28 日 (水)・1 月 29 日 (木)

両日とも 21:00～ (23:00 終映予定)

●場所：渋谷・ユーロスペース

渋谷区円山町 1-5 TEL:03-3461-0211

<http://www.eurospace.co.jp>

当日一般：¥1700、大学・専門学校生 ¥1400、シニア・会員 ¥1200

三峡ダム建設で、移住させられようとしている人たちを、彼女が、追っかけていることは、きいていました。それも 10 年以上。「自分で編集しているんですけど、8 時間まで切り詰めるのがやっと。それ以上、短くできないのです」とも、いっていました。自分で撮ったものって、そんなものかもしれない。

彼女が、ビデオカメラを買いたいというので、大阪日本橋の電器店に、私が、おともをしました。1994 年の冬だったかな。私のほうが、ちょっと早くから、ビデオを回していたので、相談にのったんですね。もう、びっくりしたんですよ。ものすごい勢いで、彼女が、値切るから。店員は完全に押されてましたし、私も口をはさむ余地がなかった。あの早口ですからね。おそろしく貧乏だったから、必死だったのでしょう。それが、ビデオと彼女との、最初のであいだったのです。

同じ年の春 3 月、彼女が大同にきてくれました。いまは城区の区長になっている祁学峰が、

私たちとの協力事業を担当することになって、私といっしょに、農村にいったときのことで。大同で、生まれ育ちながら、そのときが、祁学峰の、はじめての農村体験でした。訪れたのは、広霊県苑西庄村。のちになって、井戸を掘るのに協力し、私にとっても、もっとも親しくなった、あの村です。

県の幹部は、私たちを、その村にやりたくなかったのです。貧乏な村を、外国人にみせたくなかった。それを祁学峰が、やっと説き伏せて、夕方、薄暗くなって、村に着きました。チラチラと小雪が舞って、よけいに寒々しく、貧しく感じましたよ。一軒の農家をのぞくと、老人夫婦と、まだ幼い孫が、食卓を囲んでいました。なんて、つい書いたけど、テーブルなんてなくて、オンドルのうえに、じかに食器がおかれていました。洗面器の底に、薄々のおかゆが少々。副食らしきものは、トウガラシミソのビンが、ひとつあるだけ。若夫婦は、出稼ぎにでているとのこと。

家のなかは、ガランとして、家具なんか、なにもありません。土間に、焼き物のカメが2つと、麻袋が1つ。袋のなかはトウモロコシで、政府が配った救済食糧だそう。つぎの収穫まで、それで食いつなぐというのです。家じたいが、翌年の長雨で、崩れ落ちてしまったほどの、あばら家。私が、そのようなすを、カメラとビデオで撮影しようとしたら、同行していた県の幹部が、制止しました。「くるだけでも問題なのに、外国人に撮らせるわけにはいかない」といって。間髪をいれずに、祁学峰が、「問題が起きたら、自分が責任をとる」といいました。そこにいるメンバーでは、彼がいちばん高位だったんですね。で、私は撮影することができた。

そのことが、祁学峰と私とを、運命的に結びつけたんですね。私は、祁学峰を信頼しました。この信頼する、信頼できる、というのが、ものすごく、だいじなことなんです。信頼する、ということがなかったら、信頼されることもありません。私たちの協力事業にとって、このときが、決定的な転機になったのです。そのとき、通訳をしたのが、馮艶さんでした。

彼女は、こわいもの知らず、ですからね。というか、日本滞在が長くなって、中国のことが、わからなくなっていたんでしょうね。大同の市内に帰ってから、彼女ひとりで、街にでました。職にあぶれた人たちが、街角にたくさんしゃがんでいます。自分のできる職種を、段ボールに墨で書いて、ひざの前において。失業者がそんなにいる時期ですから、治安もよくなかった。地元の人も、買い物に行くとき、ポケットのなかでお金を握っている、とっていましたよ。その人たちと、馮艶は、約束してきたというのです。翌日、会って、話をきくことを。

青年団の常健民が、止めるんですね。そんなことをしたら、へたをすると、誘拐され、袋に詰められて、太行山の山中で売り飛ばされるぞ、というのです。そんな報道番組を、テレビがやってましたから、100パーセントのジョーダンではないのです。で、私が、「馮艶はいくらだ？」というと、常健民が「アルバイウー（二百五十）」と答えました。とたんに、彼に向かって、灰皿が飛びましたよ。アルバイウーというのは、ウスノロといった、最悪のののしり言葉です。

その席のだれかが、「人民元か、米ドルか、日本円か？」といったので、私が「韓国ウォンだ」というと、こんどは私に、なにかが飛んできました。紙ナプキンをまるめたもので、彼女は、私には、手かげんしてくれたんですね。とにかく、馮艶の思い出って、そのまま、笑い話ですよ。その彼女が、カントク！ですものね。しかも、尊敬する小川紳介の名を冠した、賞までもらった。

そのとき彼女は、ビデオではありませんでした。スチルの一眼レフに、モノクロフィルム。単焦点の広角レンズで、人物のアップをねらいます。被写体に、どこまでも接近するわけですよ。息がかかるといけないかと、思うくらい。若い女性だから、あんな撮り方が許されたんですね。いや、艶っぽい女性だったら、相手はより緊張するでしょうけど、そのころの馮艶は、やせっぽち、短髪の、中性ふう。

それが、どんな写真になっていたか、私はみていません。みたかもしれないけど、覚えていません。ビデオは、いちども、みていません。このたびの上映を推進されている藤岡朝子さんが、DVDを送ってくださるそうですが、届くまえに、これを書いて、送ってしまうことにしました。みなくても、わかりますよ。馮艶の真骨頂は、被写体への、あの接近です。ときには被写体と一体化し、その内面にまで入りこんでいるにちがいありません。

#### NO. 487 不足する有機質 2009. 01. 21

2008年11月に放映された、BS朝日開局8周年記念番組「よみがえれ！緑の大地—中国黄土植林プロジェクト17年目の挑戦」（ナビゲーター・宍戸開）の再放送が決まりました。

2月1日（日）21:00～22:55（約2時間）

BS朝日（衛星デジタル5チャンネル）

「あれをみたら、高見さんがりっぱな人に思えてきたよ」などと、からかわれたりするのですが、私は私。

会員のかたから、緑化につかう肥料はどうしていますか、という質問がきました。今回は、その質問に便乗して、書きます。山に植える木には、肥料はほとんどつかいません。発根促進のために、化成肥料をほんのすこし、やることがあるくらい。その後、施肥することはありません。光合成して、葉を繁らせ、その葉を落として、土を肥やしますから、その循環を期待するだけ。マメ科やグミ科、カバノキ科の植物は、根に共生する微生物の力で、空気中のチッソを、地中に固定する作用がありますから、これを混植することもいたします。日本では、肥料木と呼びますね。それから、育苗や果樹では、あいだにマメ科の作物を混植することもあります。おもに大豆と緑豆。

育苗と、果樹には、肥料をつかいます。もちろん、穀物や、野菜栽培でも。作物や果樹は、実や葉を収穫しますし、育苗のばあいは、苗を畑の外にだしますので、肥料分を補わなかったら、略奪的になります。

中心になるのは、現地で「農家肥」と呼ばれるものです。めんどくさいので、私は、「堆肥」と訳してますけど、日本のそれとは、かなりちがいます。人糞尿や、家畜の糞尿を、土と混ぜたもの。日本では、以前、人糞尿は、液体の状態で、肥えたごにに入れて、運びましたけど、むこうは乾燥していますので、土と混ぜて、固体の状態で、運搬します。糞土ともいいますね。寒いうちに、畑のあちこちに、積み上げておき、春の耕耘のまえに、ばらまいて、土にすきこみます。

私は以前、黄土丘陵の貧しい農村で、年間の農作業の手順を、聞き取り調査したことがあります。立春後、最初におこなう農作業は、道に落ちている家畜の糞集め、ということでした。道路にちらばっているヒツジの糞を、ほうきで集めているのは、その他の季節でも、しばしば目にする光景です。

「糞土」は、汚らわしいという意味でも、つかわれますね。ネットで検索したら、そういう使い方の、毛沢東の詞もでてきました。でも、汚れという実体はなく、それは関係をさす言葉です。糞尿を、結婚式場にまき散らせば、それは汚れですけど、畑にあったら、宝物でしょう。ちょっと脇道にそれますが、昨年末、北京で開催された汚水処理についてのセミナーに出席しました。議論されるのは、農村部の汚水処理です。新農村建設で、農村にも、6階建てくらいの、集合住宅が、ふえています。そうすると、トイレは、水洗にするしかないですね。糞尿が、水とまじったら、それは確実に汚染です。その処理が問題になる。新農村建設は、農業離れの政策かもしれません。

とにかく、有機質は、ひじょうに不足しています。なんでも、値段がついて、売買の対象です。たとえば、トウモロコシの茎も、冬季の家畜の飼料として、とても重要です。呉城村では、アンズの落ち葉を集めて、家畜の飼料につかいます。トウモロコシの茎より、栄養豊富だそう。都市の食生活が変化し、肉や乳製品の消費がふえました。大同の農村でも、牛の飼育がふえてきました。トウモロコシの茎の値段も、急速に上がりました。よほど収益率のいい作物でないと、日本のように、堆肥の材料としてつかうことはできません。いったん、家畜のお腹を経由するしかないのです。

環境林センターや、白登苗圃では、家畜の糞を買ってきて、積み上げて、発酵させ、肥料としてつかっています。近くに乳牛の牛舎があるので、多いのは、牛糞です。それから、ヒツジや、ブタの糞もつかいます。もちろん、すべて有料。鶏糞は効果がいいんですけど、高価なため、めったにつかえません。

環境林センターを建設してすぐのころ、油かすを買ってきて、発酵させ、鉢物の肥料につかったことがあります。油かすは、菜種のものではなく、亜麻油の、搾りかすでした。山西省では、亜麻のことを、胡麻と呼んでいます。でも、これは事情がわかっていなかった、私の勇み足で、油かすも、貴重な家畜飼料だったのです。

化成肥料も使用します。おもに、硫安、尿素といったチッソ肥料と、リン肥です。近年、これらも急速に値上がりし、経営を圧迫してきました。日本では、硫安は土の酸性度を強めるので、敬遠されますが、黄土高原の土は、アルカリ性が強いので、ペーハー調整のためにも、有効です。

無農薬・有機栽培のものしか、絶対に食べたくない、という人は、黄土丘陵の、天水農業の村にいてください。ここでは、化学肥料も、農薬も、まずつかいません。収穫量をきめるのは、雨の量です。旱魃の年、収穫はゼロに近づきます。そんなところで、化学肥料をつかうと、そのぶんが、赤字になります。そして、乾いた畑に、化学肥料をやっても、効果はでないのだそう。

有機物は、家畜の飼料とで取り合いになるほか、燃料とも、競合関係にあります。近年は、石炭価格が急騰しましたので、より深刻になりました。白登苗圃の近くの、小老樹は、ずいぶんと切られ、持ち去られてしまいました。小老樹というのは、水不足のために、伸び悩んだ、ポプラのこと。トウモロコシの芯、ヒマワリの茎……これらは貴重な燃料です。

石炭を砕いて、それに有機質を加え、バイオブリケットにすると、いい燃料になるよ、必要なバイオマスは、トウモロコシの茎などが、無料で、いくらでも手に入る、と書いている本もあります。大同では、有機質の入手は、そのように困難です。

## NO. 488 大寨再訪 (1) 2009. 01. 29

私が黄土高原をはじめて目にしたのは、北京から西安に飛ぶ、飛行機の窓からでした。1970年代前半のことで、私もまだ20歳代半ば。山という山が茶色なんですけど、それにしまもようがついて、まるで、地図の等高線。そのときは、それがなにか、わかりませんでした。

現場に立って、はじめて理解できました。山のうへまで、段々畑になっているんですよ。飛行機からみると、それが等高線にみえた。印象的だったのは、大寨です。「農業は大寨に学ぶ」という、毛沢東の号令によって、大寨は、社会主義農村の、モデルでした。私は、1975年ごろ、最初に大寨を訪れ、最後にいったのが、たしか1980年代のはじめ。そのあいだに、あと1～2回、訪れています。

案内してくれたのは、いつも、生産大隊の副隊長だった賈来恒さんです。腰痛があるので、立っているほうがラクだといって、いつも立ちつづけて、話をしてくれました。私たちは、イスにすわって、それをききました。村のなかで、2泊はしましたので、ゆっくりと、あちこちを参観しました。記録映画も、みせてもらいました。内容からいって、一部は再現劇だったのでしょう。

大寨は、山西省の昔陽県にあり、無煙炭で有名な、陽泉のちょっと南。当時は、列車で陽泉に行き、そこからくるまででした。黄土高原と、太行山脈とが、重なる地域です。私たちがいま活動する、大同市の、たとえば靈丘県からだ、と、ほぼ真南に、直線距離で200km。風景や環境、問題点も、よく似ています。よもや20年後に、私じしんが、よく似た問題と苦闘するとは、思いもしませんでした。

大寨が脚光をあびるようになったのは、あの段々畑によります。黄土高原の、最大の課題として、水土流失があります。夏のゲリラ的な豪雨によって、畑の土が流される。水もそこにとどまることがない。土はやせ、作物や植物が、育たなくなります。それが、黄土高原における砂漠化。水土流失を、少しでも軽減するために、傾斜した畑を、水平の、段々畑に改造します。大寨の人びとは、それを2本の手と、2本の足とで、やりとげたといいます。それが、自力更生・刻苦奮闘のモデルとなった。

せっかく、そのようにして、水平の段々畑に変えても、強い雨によって、また畑が流されます。あきらめないで、また挑戦し、技術的にも改善する。たとえば、土づくりの住居、ヤオトン（窑洞）の屋根が、圧力に耐えて、じょうぶなのをみて、あぜの形をアーチ状に作り替える、といったふうです。アーチダムのようなかたちですね。そのスローガンが、「人定勝天」（人は天に勝つ）。

それから山の中腹に、ため池を掘り、水道橋をつくって、灌漑につかう、といったこともやっていました。現場をみて、映画をみて、私はすっかり感動しました。決意を固め、がんばることで、これほどのことができるのだと。「鉄の娘」と呼ばれる女性たちの、体験談もききました。

私と同じころ、大寨を訪れた友人がいます。彼は、私に話しました。「だけど、大寨では、小鳥の声をきかなかった」と。大寨に、樹木と、森林がないことを、彼は、そう表現したんですね。当時の私は、そのことをよく理解できませんでした。ただ、そのことばが、記憶に残っただけです。

本家の大寨は、ひとまずおいて、それに学ぶ運動は、うまくいかないことも、多かったようです。たとえば、渾源県の呉城村や、大同県のカササギの森には、直径50m以上もある、大きな、まるい穴が掘られています。きいてみると、大寨に学ぶ運動でつくった貯水池だ、いちど

もつかうことなく、だめになった、といます。大同県徐町郷には、石積みの、りっぱな水道橋があり、まるでローマの遺跡のようにみえました。これも、役にはたたなかつたよう。なぜかと問うと、灌漑につかうだけの水は、そもそもなかつた、という答えが、返ってきたこともあります。

さらに、東北地方の平野部で、土を盛り上げて、わざわざ、段々畑をつくったところまであるそう。それは極端な例でしょうけど、地方の実情を無視したり、穀物生産一本槍になったり、環境破壊につながったりといった、負の面も、少なくなかつたようです。でも、それは、大寨の責任ではないでしょう。

それから、大寨は、中国共産党の、路線闘争の焦点でもありました。労働意欲を引き出すのに、革命的な精神にたよるか、物質的な刺激にたよるか、といったことは、長いあいだ、論争のテーマでした。大寨は、前者の革命路線の典型とされ、当時の主流からの、支援もえていたわけです。そして、大寨のリーダー、陳永貴は、中央政府の、副総理に抜擢されました。そんな時代があつたなんて、日本の若い人には、想像もできないでしょうね。

1970年代末からの、改革開放への、路線転換によって、大寨の位置は、微妙になりました。むしろ、否定された、とっていいでしょう。自力更生をうたいながら、そのじつ、政府からのバックアップが大きかつた、とつたことが、暴露されたりもしたので。親しい中国人の友人は、通訳として大寨にいったとき、大型の重機が働いているのを見て、「コスト的にあわないのではないかとつぶやいたら、現地の幹部の怒りをかい、通訳からはずされたそう。そんなこともあつたんですね。

その後、大寨はどうなつたのか。ときどき、報道を目にしていたのですが、最後の訪問から30年近く、私は、足を向けることはありませんでした。大同から、そう遠くないにもかかわらず。自分のなかで、そつとしておきたい、そんな思ひがあつたのです。(つづく)

## NO. 489 大寨再訪 (2) 2009. 02. 04

大同に6年間かよつた、橋本紘二さんの写真集『中国黄土高原 - 砂漠化する大地と人びと』(2001年、東方出版、A4版変形206ページ、6,000円)が、版元でも、残部僅少です。お求めになりたいかたは、早めにGEN事務所までご連絡ください。

前号の末尾に、30年近くも、大寨に行こうとしなかつたのは、以前の記憶を、自分のなかで、そつとしておきたかつたから、というようなことを、書きました。にもかかわらず、昨年12月、私は大寨を再訪しました。となると、なにか、理由があるはず。

日本大使館の梅田邦夫公使を迎えて、大同県周土庄鎮の遇駕山村では、水道プロジェクト、三十里鋪村では、小学校の新校舎建設の竣工式が開かれたのは、12月3日です。タッチの差で、実現できたんですね。その晩から、寒波がやってきて、雪まで降りました。最高気温-12度、最低気温-24度まで下がって、強風が吹きました。大同での活動が、ムリになったのです。で、しかたなく、5日の朝から、雁門関を越えて、太原をはじめ、山西省の中部にいきました。それまで、考えてもいなかったのに、突然、大寨をみたくなったんですね。たった、それだけのこと。

大寨村の入り口に、くるまで着いたら、小さな建物から、女性が、飛び出してきました。ガイドの売り込みです。40元とのこと。案内なしでは、どうにもなりませんので、たのんで、くるまに乗ってもらいました。

以前に、村の人たちが、段々畑づくりに挑んだのは、虎頭山という山です。ガイドさんが、最初に案内してくれたのは、その山。そこが、なんと、大寨森林公園になっているのです。山のふもとに、料金所があり、森林公園と、展覧館とで、門票（入場料）が、1人40元とのこと。

30年まえの、あの面影は、どこにもありません。私が思い出せたのは、山の中腹に掘られた、ため池だけ。それも、そういえば、池があったな、と思い出せただけ。とにかく緑が多いんですよ。山のうへまで、畑になっていたのが、信じられないくらい。樹高も、かなり高くなっています。きのう、きょうに植えたものではないのは、たしか。きいてみました。

「ここの退耕還林は1992年にはじまりました」との説明。退耕還林は、1999年に、四川、甘肅、陝西の3省で、試験的にはじまり、2000年から、長江上流および黄河中・上流域の13省174県に、拡大されました。長江などの大水害が、1998年ですから、それがただちに、政策に反映していることが、これでわかりますね。それとくらべても、大寨は、ずいぶん早いんですよ。ほんとうだとしたら、「退耕還林」という言葉もなかったはず。

大寨で、独自に、そんなことを可能にしたのは、企業の誘致と、起業に、成功したからのよう。鉄の娘隊の隊長として活躍し、陳永貴の北京転出で、党書記を継いだ郭鳳蓮は、一時、党の指示で大寨を離れさせられ、ほかでしごとをしてたそう。1991年に、大寨に帰ってきて、党の書記に復帰したんですけど、以前とは、まったく行き方を変えたんですね。農業以外のところに、道を求めた。

現在では、180世帯、580人の村で、年間の総売り上げが、1.3億元にもなり、1人あたりの収入は7000元だそう。その大部分は、農業以外の収入です。郭鳳蓮は、いまは有能な、経営者なんですね。最近の大寨についての記事が、以下にあります。

[http://peopleschina.com/zhuanti/2008-12/08/content\\_170612.htm](http://peopleschina.com/zhuanti/2008-12/08/content_170612.htm)

大寨の知名度も、十分に利用しました。年間 30 万人もの観光客がきて、そこからの収入が 1,000 万円にもなるそう。私たちがいったとき、ほんとに寒かったんですけど、山のうえでも、展覧館でも、たくさんの人に出会いました。みやげものを売る店も、しっかりとあって、たとえば、クルミや、アワ、キビなどの雑穀も、きれいな小袋に詰めて、販売していました。村でとれるものも、こうやって売ることができれば、それに越したことはないですよ。「大寨春」というパイヂウ（白酒）もあって、1 斤が 36 元。「世界馳名」とうたっているんですけど、大寨の名があそこ、広く知られたのは事実ですけど、酒の名前が知られているわけじゃないですよ。ご想像のとおり、私は買って帰りましたが、率直に言って、不好湯！うまくはなかった。

虎頭山のふもとは、陳永貴の巨大な石の頭像があり、写真でみた彼と、そっくり。そして、山の中腹に、彼のお墓がありました。中央の副総理になり、その後、解任され、北京で死去したあと、遺骨が故郷に帰ってきました。

30 数年前に、大寨を訪れたとき、私はすっかり感動した、と前号で書きました。そのときの感じ方の根底には、「こんな厳しい環境でよくも……」という思いがあったのです。それはそのとおりですけど、大同の農村を知ったあとで、大寨をみると、「まあまあじゃないか」というのが、本音です。すべては、相対的なものですね。大寨の最低気温は、-17 度くらいだそうですけど、大同は、それより 10 度は低いんです。霊丘自然植物園で、ヒマラヤスギの栽培に挑戦したんですけど、越冬に失敗しました。虎頭山の森林公園では、それがりっぱに育っています。大同の年間降水量は 400mm ですけど、大寨のそれは、500~600mm だそうです。この差が大きいんですね。

森林公園を歩きながら、いっしょにきている王萍が、「あと 10 年たったら、霊丘の植物園もこうなりますか？」というから、私は「いまだって、あっちのほうがずっといい！」。ここの森林公園は、樹種が 100 種はあるといいますけど、私のみるところ、ありきたりの人工林で、本来の植生は、考慮されていません。それにたいして、霊丘は、自生樹種を中心に、あの一帯と、隣接地のものを、意識的に集めていますからね。わかる人がみたら、ぜったいに、おもしろいはず。

## NO. 490 深刻な干ばつ 2009. 02. 13

去年のいまごろ、中国南部は、雪害でたいへんでした。ことしは、中国北部が、大干ばつです。河南省、河北省、山西省、山東省、安徽省などで、昨年 11 月らしいの降水量は、平年の 10 分の 1 以下で、被害地域は、7 省に広がっているそう。12 の省という報道もあります。各地で、「30 年に 1 度」とか、「50 年に 1 度」といわれ、中国政府は、1949 年の建国らしい初となる、「第 1 級」（最高レベル）の、緊急干ばつ警報（対策）をだしました。400 万人以上が、飲み水にも困る状態とも、いわれています。影響を受ける家畜も、200 万頭以上とか。

テレビや新聞のニュースをみて、心配して、連絡してくださったかたがあります。大同に問い合わせると、このところ、雨も雪も、まったく降らないそう。そのうえ、気温が高いのです。ここ数日、最高気温は12度にもなり、最低気温も-2度だそう。信じられないくらいの、高温ですね。

2月11日には、日本にも、ことし初の黄砂が飛んできました。私は、姫路を電車で往復しましたが、窓の外が、ぼんやり霞んでいました。去年は、3月2日が最初だったそう。雨が降らないうえに、高温となったら、乾燥するに決まっています。黄砂も、飛びやすいのでしょうか。

大同の陽高県には、「高山高」という民謡があります。その二番は、「靠着山呀，没柴烧。十箇年頭，九年早一年涝」。上田信さんの訳では、「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年はひでりで一年は大水」。大同の農村に、私は17年通いましたが、まさに、それが実感です。

10年のうち9年は干ばつ、というくらいですから、大同では、干ばつは、めずらしくありません。そして、なぜか、西暦の奇数年に、いい年はないのです。ことしは、奇数年ですから、心配ではあります。そんなことを私がいうと、大同の友人たちは、止めるでしょう。「高見が悪いことをいうと、それが現実になる」といって。ただ、この季節、もともと役にたつほど、雨は降りませんし、いまの時期は、どこの畑も、作物はありませんので、大同では、影響は大きくないと、私は思います。3月、4月までつづくようだと、深刻ですけど。

今回の干ばつ被害が深刻なのは、中国最大の穀倉地帯の広い範囲をおおっているからです。たとえば、河南省は、人口が約1億の、中国最大の農業省で、小麦の生産高は、全国の4分の1を占めるそう。そこで、冬小麦に枯れるものが、でてきています。温家宝総理が、かけつけたことでも、危機感の強さがわかります。全体では、1000万haに被害がでていますが、日本の耕地面積・465万haの、2倍以上ですからね。

中国の友人に、電話で問い合わせると、北京でも、2月11日には、すこし雨が降り、西安でも、何日かまえに、降ったそうです。たいていは、人工降雨のようですね。雨雲がかかるのを待って、ロケット弾や、砲弾を打ち上げたり、飛行機を飛ばしたりして、沃化銀など、氷の核になる物質を散布します。河南省では、そのおかげで、2月7日から8日にかけて かなり広い範囲で、0.1mmから19mmの雨が降ったそう。人工降雨といっても、雲じたいをつくるのではありませんから、限界があります。

問題は、これからでしょうね。なんとか、早く降ってほしいものです 私たちにとっては、春の植樹に、直接かかわります。日本だって、対岸の火事視することはできませんからね。中国の食糧輸入量がふえでもしたら、ただでさえ狭い、国際市場で、穀物価格の急騰は、避けら

れないでしょう。

## NO. 491 家庭菜園ノート 2009. 02. 20

私はこの3月で、61歳になります。この年代を中心に、家庭菜園にとりくんでいる人が、周囲にも、びっくりするほど、多いんですね。あんまりお金をかけないで、時間をつぶせるし？安全かつ新鮮な野菜を、食べることのできる、実益もありますしね。これ以上、素性のはっきりしたものは、ありませんから。

私をはじめたのは、25歳のときでしたから、35年になります。もともと農家の二男坊で、子どもとしての、毎日の役割分担がありましたし、農繁期などには、けっこう手伝いもしました。でも、どうせ家をでるのだし、土から離れることが、いわばテーマでしたから、土をいじることに、関心はなかったのです。

ところが、長男が生まれるとき、つれあいが実家に帰って、手持ち無沙汰の、時間があつたんですね。で、ちょっとしたスペースに、ニラを植えたんですよ。雑草のなかに、半分、野生化した古株をみつけてきて。それが育つのが、けっこうおもしろくて、ズルズルと、いろいろなものを、やりだしたのです。あのとき、そういうことをやっていなかったら、いまの活動は、していないかもしれませんから、人生って、なにがどうつながるか、わからないものです。

いまは、前庭に、20平米あまりのスペースがあります。植わっている野菜は、ホウレンソウ、コウサイタイ（紅菜苔）、ブロッコリー、ワケギ、中国ダイコン、といったところ。このあいだまで、青首ダイコンがあつたんですけど、食べつくしました。春から夏にかけては、キュウリ、トマト、ミニトマト、シシトウ、オクラ、インゲン、モロヘイヤなどが、それに換わります。そして、すみっこでは、アスパラガスが、がんばっています。人がやっていることは、やりたくない、というタイプの人間としては、平凡なものばかり。

以前は、変わったものばかり、つくっていました。種苗会社の、カタログを取り寄せ、みたこともないものに、つぎつぎと、挑戦したのです。私が住んでいるのは、宝塚の園芸地帯ですけど、近くの農家の人たちが、のぞきこんで、「農事試験場みたいですね」と、いっていました。これが、家族からは、きわめて不評なのです。食べてくれないし、調理もされなくなる。で、だんだんと、植えるものが、一般的になってきました。

ほかであまりみないのは、コウサイタイ（紅菜苔）くらい。中国野菜ですけど、日本の種苗会社から、種がでています。もう20年以上、毎年つくって、わが家では定着しました。ほんとに、おいしい！肥料を多めにして、大きな株に育てると、つぎつぎと、苔が立ちます。下部の直径は1.5cm、長さは50cm近くになります。それを折って収穫し、いためたり、ゆでたりする

と、甘みがあって、おいしいのです。ナマのときは、赤紫ですけど、熱を加えると、緑色になります。1月末から、3月初めにかけての端境期に、毎日、収穫できます。

ホウレンソウは、東洋種の、針種の、古い品種をつくります。根元がまっ赤で、葉の切れ込みが深い。最初はかなり密植にし、その後、だんだんと間引いて、間引いたものも、食べていきます。そして、最後は、苔立ちさせて、それを食べます。ホウレンソウなんて、いかに、苔立ちさせないかで、くふうされているんですけど、その逆。泥臭さがまったくなくて、おいしいですよ。中国から引き上げてきた人に、教わりました。ホウレンソウというより、ホウレンボクですね。

ブロッコリーは、晩生もしくは中晩生の品種を選びます。最初の、大きなツボミをとったあとも、わきのツボミを、つぎつぎにとることができます。3月いっぱい、楽しめます。ヒヨドリが毎日やってきて、葉をついばんでいますけど、どういうわけか、ツボミにはむかいません。鳥インフルエンザが心配ですけど、食べるまえに加熱しますから、まあ、だいじょうぶでしょう。

以前にも書きましたが、家庭菜園のテーマは、プロの農家の逆になることが、たくさんあります。商品にするためには、均一でないといけません。ですから、同じ大きさのものを、一斉に収穫するのが、農家の基本です。家庭菜園では、その逆に、バラツキがだいじです。大きいものから順にとれば、長いあいだ、収穫できます。ダイコンなんかは、何回かに分けて蒔き、株の間隔も、まちまちにします。大きいものを抜いて、間隔が広がると、小さかったものも、太ります。

なんでも、健康に育てるのがいいかといえば、そうともかぎりません。たとえば、暑いさかりに、ぐんぐん伸びるオクラ。花もきれいですね。これなんか、1か所に2~3本ずつ植えて、密植するほうがいいのです。間隔を十分にとって植えると、茎は太くてりっぱになりますが、サヤも早く太って、すぐに硬くなります。なんでも、長く、ダラダラと収穫できるのがいいのです。

去年の春から、不耕起栽培を、試んでいます。主張があつたのではなく、おうちやくごころから。最初は、おっかなびっくりだったんですよ。でも、夏野菜も、秋冬野菜も、問題なく、よくできました。ダイコンなんて、深く耕し、異物を取り除く、といわれていますけど、少なくとも、青首ダイコンは、変わりがありませんでした。そうすると、以前の汗水はなんだったんだ、と思いますけど、つれあいは、「たった1年では、わかりませんよ」といいます。しばらく、このまま、つづけてみましょう。

以前にも、この話題で、書いたことがあったかもしれません。あちこちで話をしていると、最近も「どうして中国で植林を？中国じたいが不熱心なのに……」という疑問の声に、であることが多いのです。だけど、それは誤解ですよ。その逆に、最近、私は、「えっ、どうしてここまで、ムリをする必要があるの？」と感ずることのほうが、多いのです。

たとえば、幹線道路の両側では、とくに緑化に熱心です。これはまあ、宣伝効果が、ねらいでしょう。地方のリーダーが、上にアピールしたいのです。急な斜面に、魚鱗坑をたくさんつくって、マツやコノテガシワの、比較的大きな苗を、植えています。以前は、枯れるものが、めだっていましたが、熟練してきたためでしょうか、活着するものがふえています。

傾斜が急で、植生の乏しいところでは、土が流されてしまっていますから、いくら魚鱗坑をつくっても、育つのはむりだろうな、と思うことも、少なくありません。それを目にしながら、日本の専門家から「魚鱗坑で植えて、育っているのをみたことがありますか？」ときかれて、答えに窮したことがあります。陽高県の大泉山村のような、成功例もあって、まったくないわけではありませんけど、失敗しているところも、少なくないからです。なんの関係もないのに、自分にも責任があるように感じてしまうのは、どういうことでしょうか？

柴刈りや、放牧は、以前から禁止されたり、制限されたりしていたのですが、なかなか、実効をともしませんでした。プロジェクト植林や、退耕還林などで、政府が、真剣さをアピールしたおかげでしょう。ずいぶんと、柴刈りや、放牧が減ってきたのです。なかには、コンクリートの柱を立て、有刺鉄線を、張りめぐらしたところもあります。

完全になくなったわけではありませんよ。この通信でも書いたことですが、国際的な原油高にひきずられて、石炭価格が高騰し、農村では、石炭を買えなくなったために、山への圧力が、つよまる傾向もでています。それから、私の知っている村のなかにも、300頭だったヤギを、1,000頭までふやしたところもあります。一筋縄ではいきませんが、全体としてみれば、柴刈りも、放牧も、減っているのは、確実です。そうすると、草や、灌木がふえて、緑が濃くなってきたのです。正直なものですね。

こうしたことは、大同だけのことでは、ないようです。私が感じているだけでもありません。各地を回って、植生や緑化について調査している日本の専門家が、同じように感じているようです。私たちの顧問の前中久行さん（大阪府立大学大学院教授）は、1979年くらい、内蒙古、雲南、山西などを、たびたび訪れ、そう感じているそうです。経済発展によって、燃料採取や放牧などの負荷が低減した結果ではないか、と。

そのようななかで、目につくのは、先ほど述べたように、ムリのしすぎであったり、植林の多くが、単一樹種の一斉造林であったり、形式主義に流れていたり、といった問題です。緑化

の質の問題、といたらいいでしょうか。

JICA と、中国林業局とが、共同実施する日中林業生態研修プロジェクトの事業で、太行山緑化についての研修がおこなわれたさい、私も、1 コマの時間をもらいました。そのさいに、「植えすぎはよくないのではないか、植えるのは、村の近くにかぎるようにして、遠いところは、自然の再生にまかせたらいいんじゃないか」と、話をさせてもらったほど。

いま、中国の人工造林面積は、世界の 4 分の 1 を超えています。世界中で、森林が急減するなかで、アジアで、そうっていないのは、中国で、増えているからだそう。

世界的に、経済に急ブレーキがかかるなか、内需拡大のためにも、中国政府は環境部門に、投資をふやすようです。緑化にも、さらに力があるのでしょう。そういうときに、張り切りすぎるのは、よくないですね。多少の余裕と、遊び心が、あったほうがいい。外からの、技術面の協力も、生きるはずです。

#### NO. 493 悲惨さが感じられないのは？ 2009. 03. 06

大同の農村は、言霊の世界。悪いことを考えたり、悪いことを口にしたりすると、それが現実になる、といます。干ばつで、アワやキビに、まったく実がはいっていないのに、農民は、「いや、だいじょうぶ！これから雨が降るから、平年なみにはなる」といます。徹底したプラス思考！私が大同に通いだしてから、西暦の奇数年には、いい年がありません。ことしは奇数年で、早くも大旱魃のニュース。私も、悪いことを書かないほうがいいんでしょうけど、ここは日本。政治の世界をみても、ことばに力がなくなっていますから、だいじょうぶでしょう。

ちょっと前にも紹介したのですが、陽高県に、「高山高」という、民謡があります。その 2 番に、「靠着山呀，没柴烧。十箇年頭，九年早一年涝…」。上田信さんの訳を借りますと、「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年はひでりで一年は大水…」。私も、あそこに 17 年通ってきて、まさに実感ですね。ほんとに災害が多い。

1995 年は、春から 7 月にかけて、ほとんど雨が降らず、深刻な干ばつでした。7 月 23 日に、最初とっていい雨が降り、ふだんの年は、8 月で降りやむのに、9 月になっても、10 月になっても、降りつづきました。

農村の住居は、基本的には、土窯でした。日干しレンガを積んで、建てられたもの。ここの風土には、適しているんですね。屋根も、壁も厚くて、断熱効果が高いから、冬は暖かいし、夏は涼しい。日本だったら、風通しが悪いうえに、湿っぽくて、どうしようもないんでしょうけど、あそこは雨が少なく、乾燥していますから、それはだいじょうぶ。同じ理由で、長く

もつんですね。なかには、明代のものもありました。築後、数百年！

ところが、この年の長雨には、耐えられなかったのです。屋根や壁に、雨水が浸透して、あちこちで、倒壊しました。大同だけでも、6万世帯、24万人が被災したといえます。その知らせを受けて、私はすぐに、いって見たんです。民家だけでなく、村の学校まで、つぶれていました。で、きいて見たんですよ。「こういう水の害と、干ばつと、どちらが怖いですか?」。帰ってきた答えは、「干ばつだ」というもの。

みたところでは、水の害のほうが、ずっとひどいんですね。その後も、たとえば2003年7月に、カササギの森の近くの村で、土石流のために、4人が犠牲になりました。干ばつの被害は、見た目には、はっきりしません。でも、干ばつのほうが、頻度が高いし、範囲がずっと広いといえます。深刻な被害がでて、範囲が広いので、救援も追いつかなくなります。

1999年が、ひどい干ばつでした。お年寄りに話をきくと、「こんなひどい年は、経験したことがない。建国 이래、最悪の干ばつだ!」といっていました。1949年の、中華人民共和国成立から、50年の年です。ですから、50年に1度の干ばつ、といってもいいでしょう。

2001年は、それに輪をかけた、大干ばつでした。その年の8月、遠田先生と2人、昼間の列車で、大同から北京にでたんですけど、この時期にもかかわらず、山が茶色のままでしたからね。100年に1度の干ばつ、といわれていました。山や丘陵の村では、種を蒔くさえ、あきらめたところが多かったのです。この年の、大同の農村の収穫高は、平年の82%減、といわれていました。平年の5分の1も、とれなかったのです。

地元の新聞に、「自力自救」という見出しを見つけました。なんのことかと思ったら、ある村で、最初に数人が、打工（出稼ぎ）にでて、ルートを切り開き、そのあと村中の人が、そうした、という記事でした。

林野庁OBの、相馬昭男さんが、晩年、大同の私たちのプロジェクトに、入り浸っておられました。環境林センターで、寝泊まりし、毎朝、朝食前に苗畑にでて、帰ってきては、ジマンします。「きょうは、40匹も踏みつぶしたよ」ネグンドカエデの樹液が、甘いんでしょう。それにカミキリムシがたくさん集まるんですね。

相馬さんは、津軽の生まれ育ちでした。戦前の東北の大冷害を、身近に知っているそうです。娘の身売りなどもあって、それはそれは、悲惨なものだったそう。「でも、客観的にみて、この自然災害のほうが、ずっとひどい。それにしても、悲惨さが感じられないんだけど、どうしてでしょう?」

私も、そう思います。作物が、まったくといっていいほど、育っていない畑を、老人が、中

耕しています。ビデオカメラをむけながら、「どうですか？ ことしの天候は……」と尋ねると、「もう何か月も、まったく降ってないよ。こまったものだね」などと答え、そのつづきが冒頭の話なんですね。にこにこ顔で、両手をふりまわし、まるで、できのいい孫の、自慢話でもしているよう。

どうして、と尋ねられても、私も答えようがないんですけど、ただひとつ、いえるのは、借金がないことかもしれません。ふつうには、借金をさせてもらえない。転げ落ちて、そこは地面なんですね。だから、やりなおしがききます。借金があると、地面より下まで、落ち込んでしまいます。やりなおしがむずかしくて、絶望するしかなくなる。

経済的には、日本のほうがずっと豊かで、ものがあふれかえっています。100年に1度の経済危機だ、といわれ、それは事実でしょうけど、この暗さは、なんなのでしょうね。黄土高原の、あの厳しい環境では、人間はずっと強くなります。そうでなかったら、生きていけません。

#### NO. 494 「越大越好！」 2009. 03. 12

中国の都市を歩いたり、中国の友人とつきあっていて、感じる違和感が、この「越大越好！」(ユエターユエハオ)。大きければ大きいほど、いい！

この緑化協力を最初にはじめたころ、プロジェクトについて相談すると、「面積は、大きければ大きいほどいい、投資も、大きければ大きいほどいい」という答えが、返ってきたものです。でも、その人たちの頭には、整地をして、植えるところまでしか、ないんです。村の人たちを、総動員して、ワーッと、かたづける。そこまではいいですよ。でも、たいへんなのは、そのあとの管理なのです。

順調にいけば、さほど、問題はないかもしれません。だけど、そんな幸運は、ほとんど期待できません。自然条件が、厳しいですからね。干ばつがしょっちゅうですし、土もやせています。そのうえ、ノウサギの食害、アブラムシなどの虫害。干ばつの年は、かならずといっていいほど、バッタが、大発生します。おまけに、農村の人たちは、都市の人とは、まったくべつの行動様式をもっていますからね。奇想天外なことが、しばしば起こります。一言でいえば、地元の管理能力を超えたプロジェクトは、かならず失敗します。

北京などの都市建設をみても、越大越好なのでしょうね。ビルだって、道路だって、どうして、あれほど大きくないといけないのですか。エネルギー効率だって、悪いに決まっていますよ。山西省の省都、太原を訪れたときのことを、書きましたよね。道路が、片側6車線もあります。そのうえ、グリーンベルトをはさんで、側道がもう1本ありますから、じっさいは、片側7車線。「ランフェイ(浪費)！」(もったいない)と、私が独り言をいったら、運転手の小郭が、

すかさず「不浪費！」。ブルータス、おまえもか！

1990年代の後半までは、北京の街にも、「小麵包」といわれる、ミニバンのタクシーが走っていました。1キロ1元、初乗り10円で、市民の足として、便利だったんですね。なかには、自転車ごと、乗り込んだりして。ずいぶんと、私も、お世話になったものです。ところが、これが、追放されちゃったのです。いろんな理由があるんでしょうけど、大国の首都に、ふさわしくない、といったこともあったでしょう。

「越大越好！」からいえば、小さいものは、軽蔑や嫌悪の対象ですからね。「小日本！」もそれです。日本と日本人とを、バカにするとき、よく使われます。私は、先回りして、自分で言っちゃいますからね。スモール・イズ・ビューティフルですよ。それが、環境への取り組みの、原点でしょう。

小さいものは、なんでも、リーベン（日本）です。まずは、日本豆腐。これって、直径4cm、厚さ2.5cmほどの玉子豆腐ですね。たくさんの中国人が、これを日本の豆腐だと思っているんですけど、日本で私はみたことがない。そう話すと、びっくりしてますよね。日本油菜、というのもあります。小さいけど、チンゲンサイで、あきらかに、中国野菜です。小さいから、日本がついてるだけ。

もう何年もまえ、大同にも日本料理店が、できたことがあります。行こう、行こうって誘われて、いってみたんですよ。メニューから、オデンを選んだんですけど、そしたら、材料が小さく刻まれて、オデンらしさは、どこにもなかった。日本酒の、一升瓶がズラッとならんでいたので、そのなかの一種類を頼んだら、あれはインテリアで、みんな空ビンなんですよ。ま、まずいうえに、高かったんで、まもなくつぶれました。

大同の市街地に、「日式浴場」の、大きな看板がでていました。私は、興味しんしんですけど、なかなか、機会がなかった。「どんなんだ？」ときいても、周囲は、だれも行っただけがない。だれかが「混浴なんだろう」と、いったんですね。中国では、日本の温泉には、混浴が多いと思われています。まあ、たしかに、なくはないけど、それが日本式と思われても困る。期待して、わざわざ日本まできたら、がっかりするよ。ひょっとすると、タライによる行水かな？一度は、ぜひいって見たかったんですけど、ダメになりました。再開発で、ビルごと、取り壊されたのです。

中国には、「地大物博」という表現があります。たしかに、国土は大きいんです。日本の26倍もあります。でも、海拔の分布は、0~500mが16%、500~1,000mが19%、1,000~2,000mが28%、2,000~5,000mが18%、5,000m以上が19%だそうです。富士山より高いところが、たくさんあります。人の暮らせないようなところが、少なくないんですね。砂漠や、砂漠化地域も、広いですし。

物資や、資源が豊富、というのも、ほんとうでしょう。しかし、人口も多いですからね。日本の10倍以上、世界人口の5分の1以上が、ひしめいています。1人あたりにすれば、どんな資源だって、けっして多くはないのです。その最たるものが、水資源。環境問題を重視する立場から、この「地大物博」ということばを、教育の場で、使わないようにしよう、中国の現状にたいする認識を誤らせる、といった取り組みもあるようです。越大越好といった感覚も、じょじょに変わっていくのでしょうか。そうあって、ほしいものです。

#### NO. 495 中国は中国だあ！ (1) 2009. 03. 23

3月20日、北京から大同に、飛行機で、移動することにしていました。朝8時20分の出発です。遠田宏さんと2人で、空港近くのホテルに、泊まりました。ホテルのフロントでは、出発の2時間まえには、空港につくようアドバイスされましたが、国内線ですから、そこまでは必要ないでしょう。マイクロバスの送迎があります 6時30分発を予約しました。

チェックアウトに、手間取ることもありますから、翌朝、6時15分には、カウンターにいったのです。それが正解。私あての領収書が、ないんですよ。あちこち探し回って、やっとみつけてくれました。これが、この日の、つまづきの始まりだったんですね。でも、そのときは、こんな一日になるとは、思いもしませんでした。まあ、きいてください。

空港にむかう途中、マイクロバスが、Uターンしました。あれあれっ、ホテルに戻ります。出発時刻に遅れた客が、2人いて、それを、ひろいに戻ったのです。さっき、運転手が、携帯電話を受けてたのは、その連絡だったよう。しかも、この客が、第2ターミナルからの出発。そちらに先にいきましたので、私たちが、第3ターミナルに着いたのは、私の計算よりは、かなり遅れました。

北京－大同は、日に1便の、地方路線ですが、なぜか、中国国際航空(CA)の運航です。使用機材は、ボーイング737で、関空－北京と同じ。チェックインカウンターで、荷物を載せると、重量オーバーだと、告げられました。3kgオーバーで、1kg6元だから、18元を向かいのカウンターで払って、それから、搭乗券を、取りにこい、とのこと。10kg以上のオーバーだって、これまではパスだったんだけど、シビアになったのか、たまたまそういう担当者にあたったのか。支払いにいくと、ここも列ができてるんですね。並んでみると、中国名物の、横からの割り込み。いまや私も、中国モードに、切り換わっていますから、断固として、押し退けます。でも、これでまた、時間を失ったんですよ。

朝食が、まだなのです。安全検査をとおりすぎたところに、日本発のラーメン・チェーン、味千拉麵の店があります。入口で尋ねると、「10分左右」とのこと。左右は、日本語に訳すと、

前後です。だったら、まにあうでしょう。席について、注文しました。ところが、こないんですね。時計を気にしながら、待っていて、20分たっても、こないから、ムダとは知りつつ、催促しました。そのせいではないでしょうが、やっときました。半分くらい、食べたんですけど、そこでタイムアップ。ラーメンを食べて、飛行機に乗り遅れたのでは、シヤレにもなりません。そのばあいに、どうやって大同にたどりつくかを考えると、やっぱり、ここは、ラーメンをあきらめるべき。搭乗口について、まもなく、バスへの乗車がはじまりました。

指定された席についたのは、出発時刻の10分前。それから、乗ってくる人が、つづくんですね。満席まではいきませんが、7分は席が埋まりました。直前の列の、窓際が空いていたので、ドアが閉まるのを待って、移動しました。天気恵まれれば、窓からみる、黄土高原の景色は、なかなかのもの。大同に近づくと、大同火山群を、空からみることができます。地上でみたのでは、変哲のない小山ですが、空からみると、噴火口のあとが、はっきりみえます。

ベルト着用のサインが点灯して、スチュワーデスが、通路に立って、シートベルトの着用方法を説明しました。さあ、飛行機は、移動をはじめるといでしょう。と思っていたら、突然、機長のアナウンスがはじまりました。中国語も、英語も、早口で、ききとれません。わずかにわかったのは、離陸が延期されること、出発は、12時以降になる、とのこと。周囲の中国人の会話に、耳をすませていると、原因は、空軍の演習らしいのです。困ったことになったよう。このゴタゴタに、もう1回、つきあってください。(つづく)

## NO. 496 中国は中国だあ！ (2) 2009. 03. 26

手荷物を、ぜんぶ持って、飛行機を降りました。バスに乗って、もとの搭乗口 C57 まで戻ります。地上の係員が、名前を読み上げては、先ほどの、搭乗券の半分の、返していきます。そして、「12時の出発になるので、この場所に、12時に集まってください」といいました。大同の近くで、演武(軍の演習)があり、飛行禁止の連絡を、直前に受けた、というのです。以前の中国だったら、誰もが、すなおに、それにしたがったでしょう。

最初から、最後まで、くらいついたのは、上海人の男女でした。「その理由はウソだろう。軍の演習なら、少なくとも2日前には、連絡があるはずだ。べつの、ほんとうの理由を隠しているんだろう」というのです。係員は、「いや、ほんとに、ついさっき、連絡があったばかりだ」と答えます。それを、何回くりかえしても、水かけ論。上海側は、「自分たち南方人には、ここは寒すぎる。部屋を準備しないのか。昼食はどうするのか?」。

すると、航空会社は、「遅れるのは、自分たちの会社の責任ではない。4時間以上の遅延は、食事を準備するけど、今回は、それにはあたらぬ。たしかにここは寒いけど、3階にいけば、寒くはない」といって、突っぱねます。このやりとりは、けっこう見物だったですねえ。でも、

やっぱり、会社側の、粘り勝ち。このときばかりは、上海人に勝ってもらい、おこぼれにあずかりたかったけど、そうはなりませんでした。私はといえば、とても相手になれそうにない。

遠田先生と私は、早めの昼食をとることにしました。モタモタしていると、また食べ損ねることにも、なりかねません。朝食で、ラーメンを半分残したのが、いまとなってはちょうどいい。

12時近くなって、朝と同じ、C57 搭乗口に行くと、照明を落して、薄暗いんですね。もちろん（というか、意外なことというか）人は、だれもいない。フライトスケジュールの、ディスプレイをみても、大同行きは、存在しません。不安になって、インフォメーションにいったら、「この人たちといっしょに、ホテルにいったら、休憩しなさい」とのこと。「何時の出発予定なのか？ほんとにきょう、飛べるのか？」と尋ねても、「不好説！」（言えない）の一点張り。ホテルにむかう「なかま」のなかからは、「いや、この演習は、何日もつづいていて、きのうも、おととも、同じような状況だったんだ」。えっ、だったら、航空会社も、もっと適切な対応ができたはずだし、しなかったら、いけないじゃないの！

マイクロバスで案内されたのは、昨晚も泊まったホテルでした。玄関に、顔見知りの運転手がいて、「どうしたんだ。もう帰ってきたのか？」と聞いて、びっくりしています。「飛行機が飛ばないんだ」と、私が答えると、「演武か？」と、即座に、返ってきましたので、けっこう、みんな、知ってることのように。

部屋を配分され、お湯をわかして、お茶をいれ、それを飲んでいたら、部屋の電話が鳴り、「これからすぐに、空港に出発だ」とのこと。2階のレストランで、昼食が提供されているのですが、それを、あてにしていたら、また食いつぶぐれるところ。空港へのマイクロバスで、いっしょになった人の話では、11時すぎから、2度ほど、空港アナウンスがあり、それをきいて、ホテルに移動してきたのだそう。私たちは、昼食をとって、それをきけなかった。

空港にもどってきて、だれも、案内する人がいないんだね。インフォメーションでも、ずいぶん待たされたあと、「K16のカウンターに行け」とのこと。すると、そこで、2枚に分かれた搭乗券を、ホッチキスで、1枚につなぎ、新しい搭乗口、「C27」を書き込んでくれる。

それから、再度の安全検査。この搭乗券をさしだすと、「この時間には、大同行きはないはずだ」といって、奥に、たしかめにいく始末。連絡が、いっていないんだよね。どこの国でも、事件や事故はあるんだけど、そのあとの処理が、ほんとにひどい。

やっと C27 にいって、飛行機に乗り込み、「何時の出発だ？」ときくと、「乗客がそろったら、すぐにでる」とのこと。このときの時刻が、14時。だけど、乗客はバラバラになっちゃったからね。機内をみても、朝の3分の1もいない。それでも、パラパラと、もどってくる人がいて、

スチュワーデスにきくと、「あと2人」。その2人は、ついに帰ってこないまま、飛行機は、離陸しました。その時刻は、14時55分。ほんらいの時刻から、6時間半の遅れです。乗客は、ぜんぶで21人になってしまったので、かなりの人が、キャンセルしたよう。あずけた荷物は、どうしたのでしょうか。

そのあとは、無事に大同につき、大同事務所のスタッフと、合流しました。この軍事演習、もう1週間も、つづいているのだそう。そして、私たちの前日の、大同到着は、20時を回っていたそう。それに比べれば、私たちはラッキーだったんだ。撃墜されなかったことを、よろこばないと、いけないんだ。中国も、ずいぶんと変わって、最近は、アクシデントや、トラブルが、減っていたんだけど、やっぱり、中国は、中国だあ。

緑の地球ネットワークのホームページに、アクセスできない、と中国の友人たちから、何人も連絡がありました。中国にきてから、私もこころみていますが、やっぱりアクセスできない。どこかで、ブロックしているんですね。私が、こんなことばかり、書いているからでしょうか？

#### NO. 497 清明節 2009. 04. 02

二十四節気のひとつに、清明節があります。ことしは、4月4日のよう。中国では、この日に、先祖のお墓参りをいたします。そして、昨年から、3日間の連休になりました。林業や、緑化の関係者は、とても緊張しています。なぜかという、中国の農村では、お墓参りに、火をつかうからです。

この時期になると、市街地のはずれとか、県城のはずれとかで、紙銭が売られています。いまの中国の人民幣は、毛沢東の肖像がつかわれていますが、あそこに、冥界の皇帝の絵が描かれ、「冥国銀行券」などと、印刷されています。紙質も、印刷もよくなく、なんとなく不気味な感じ。高額「紙幣」には100億元があり、それからだんだんと少額になり、なかには1角(0.1元)もあります。私が、「どうして、こんなちっちゃいのが、あるんだ？」ときくと、「あの世でも、釣り銭は必要だ」といいます。それを、お墓のまえで燃やして、煙にして、ご先祖さまに、とどけるのですね。

ところが、この時期は、雨がとても少ないのです。「春の雨は油より貴重だ」と、いわれるくらい。ことしはとくにひどくて、大同では去年の秋から、まったく、雨がありません。そして、風がつよい。思いっきり、乾燥します。以前だったら、燃えるものは、さして、ありませんでした。せいぜい、枯れた草くらい。近年になって、緑化が熱心にすすめられ、木も育ってきました。10年、20年かけて、育ててきた林でも、火がはいたら、一瞬で、灰になります。そういう光景を、私も、みてきました。こわいですねえ。

4月1日に、大同県の采涼山プロジェクトを、ツアーの人たちといっしょに、訪れました。カササギの森の、入口です。道路際に、赤い布に白地で、「厳禁上墳焼紙」と書かれた横幕が張られています。一昨年も、去年も、そうでした。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

それだけでなく、この時期になると、県や郷の、幹部たちが、双眼鏡をもって、造林地を見回るんですよ。墓参りの人がきたら、火をださないかどうか、警戒するために。

大同県の、ある鎮の共産党書記が、長いつきあいです。気がおけません。で、こう話したんですよ。「なあ、あんたのところで、こんなふう宣伝してよ。ご先祖さまの属する組織から、共産党のほうに連絡がきた。いまの中国の下界といっしょで、冥界のほうも経済は大発展だ。お金に困ることはなくなった。だから、お金を送ってくれる必要はない。そのかわり、これも下界といっしょで、水不足が、とても深刻だ。これからは、お墓参りには、お金ではなく、水をもってきてほしい。そういう連絡があった。というような宣伝を、してちょうだいよ」

そしたら、彼の答えは、「そんなやりかたは、自分でもできない」というもの。えーっ？  
共産党員は、唯物論じゃないの？それくらい、慣習や、宗教の力は、つよいんですね。

一昨年の夏あたり、だったと思います。JICAと、中国林業局が、共同実施する日中森林生態研修プロジェクトで、私も、お話しする機会をいただきました。山西省の省都、太原でした。出席しているのは、太行山がかかっている北京市、河北省、山西省、河南省などの、林業局の幹部たち。

私は、報告のなかに、さっきの、お墓まいりには、火ではなく、水を、という話を、織り込んだんですよ。そしたら、話の途中で、大きな拍手があったんですよ。林業関係者にとっては、それくらい、この問題が、深刻だということです。

清明節のころには、その年の、最初の雨が降ることがおおいのです。その確率は、かなりのもの。黄土高原の農民にとって、雨は、いちばんの恵みですからね。先祖への、感謝の思いも深まるのでしょ。

清明節が、連休になったことで、林業関係者の不安は、高まりました。これまで以上に、お墓参りが増えるのじゃないか、と。とくに、都会から、故郷に帰ってくる人たちは、山火事のこわさを、知らないかもしれません。

4月3日は、大同県・陽高県・新栄区と、回ってきました。それぞれに、見たいところがあります。遠田、前中の両顧問といっしょです。見たくないものを、新栄区で、みてしまいました。国道208号線を、大同に向かって、南下してくると、道路の西側のマツが、黒こげになっています。写真を撮ろうと考えて、くるまを停めてもらい、窓をあけると、プーンと、炭の焼けるような臭い。火も煙も残っていませんが、消火して、すぐのようです。すぐそばの道路わきで、数人の男が、話し込んでいました。手には竹ぼうき。

炭になった、マツの背丈は、1m前後。植えてから、5年ほどたっているのでしょうか。地面を、枯れ草がおおっていますから、ほんとに危ない状態。焼けた面積は、私の目見当で、2~3haとあったところ。ここまでで、よく、消し止めたものです。近くに、水はありません。あっても、水汲みに通っていたのでは、消火はできません。ホウキでたたいたり、スコップで土をかけたりのしかありません。風向きによっては、危険さあまりない作業です。それほど風が強くないのが、幸いしたのでしょうか。

清明節の、墓参りによるものに、ちがいません。前号の「黄土高原だより」で、ことしの清明節を、4月4日としたものと、5日としたものと、2種類、でてしまいました。ごめんなさい。正しくは、4月4日です。春分の日から数えて、15日めが、清明節です。日本のカレンダーのなかには、ことしも4月5日になっているものがあるそうですが、それはまちがい。二十四節気のなかでも、清明節は、日本人には関係が薄いので、ムリもありません。「厳禁上墳焼紙」の横幕が、新栄区にも、たくさんありますし、なかには「責任を徹底追究する」と、付加したものもあります。あちこちで、腕章をした男たちが、見張りをしています。それでも、火事になったんですね。

緑の地球ネットワークが、独自に派遣する、春のワーキングツアーは、およそ1週間の予定を終えて、4月2日の夜行列車で、大同を発ちました。天候にも、比較的にめぐまれて、よく働いたんですよ。中国側も、びっくりしていました。みなさんに、私も引きずられて、よく働きましたので 2日の晩は、ベッドのなかで、手足がケイレンしたくらい。

2日夜の、大同市総工会主催の歓送会に、柴京雲副主席が出席しました。以前にも書いたことがあります。彼はマルチタレントなんですね。楽器は、30数種類扱えるそうですが、なかでも二胡はすごい。中央音楽学院の大学院で、二胡を学ぶ、娘さんとの共演はたいしたものでした。それから、作詩・作曲ができます。加藤登紀子さんが、大同にきたとき、「知床旅情」を歌ったら、1回きいだけで、採譜をし、正確にハミングしました。そのあと、中国の歌を、加藤さんに、歌唱指導したのです。それくらい歌もうまいし、イラストも、書もかける。

でも、彼の名がいちばん通っているのは、弟の柴京海と2人で演ずる大同数来宝です。漫才のようなもので、大同の方言で、時事問題などをとりあげます。ユーモアのなかに、庶民の心情を、織りこんでいるんですね。地元のテレビはもちろん、中央テレビにも出演し、大同中の

人気者です。全国規模のコンテストで、グランプリをとったこともあります。大同の宝だ、といった人もあります。彼といっしょに、レストランにはいると、用がなくても、従業員の女性たちが、私たちのテーブルに集まりますよ。たとえば、つぎをごらんください。

<http://ent.163.com/09/0320/10/54RFL77E00032DGD.html>

その彼に、清明節のお墓参りのことを、話したんですね。火をやめて、水にしたらいい、と。(前号のあと、「高見さんには、酒のほうがいいでしょう」というメールを、いくつもいただきましたよ)。そしたら、それを、数来宝につくりたいというのです。王萍さんに、私の文章の、翻訳をたのんでいました。彼じしん、紙銭を焼くことには、もともと反対だといいます。もってこいの人が、私たちの身近にいたんですよ。テレビをはじめ、いろんな場所で、それをやってほしいですね。ザンネンなことは、ことしの清明節に、まにあわなかったことです。

何号かまえに、飛行機のトラブルについて書きました。筆名「土八路」という人が、中国語に訳して、ブログにしているんですけど、それへのコメントに「いったい、いつのことだ、まさかいまじゃないだろう」とありました。もちろん、いまのことです。軍事演習はつづいて、飛行機は予定がたちませんので、4月5日、北京経由で帰国する、前中久行さんは、朝8時に、くるまで、北京に向かいました。彼は、3月26日に、北京から大同にくるとき、大同付近まで飛んできながら、北京に引き返させられ、その後も、私たち以上の、ひどい扱いをうけ、16時20分にもなって、大同空港に着きました。でも、こういうトラブルがすべてなくなったら、中国のおもしろみは、なくなるでしょうね。その点で、前中さんと、意見が一致しました。

#### NO. 499 環境林センターに道路 2009. 04. 10

私たちが大同にきてから、3週間がすぎました。そのずっと前から雨はなかったのです。それが、きょうは朝から雨で、天気予報では、午後も雨。うれしいはずですが、事情はもっと複雑です。雨が降ると、苗畑にはいれません。そのぶん、作業が遅れます。武春珍所長は、天を見上げながら、「だんだん雨が、大きくなってきた」と、困ったような顔をしています。

ことしは春の到来が、いつもより遅いようです。モモやアズキの開花も遅い。土の凍結が融けるのが、遅かったのです。植樹の作業ができませんでした。そこにきて、4月5日ごろから、20度を超す日がつづきます。苗の芽が動きはじめます。早く植えないと、活着率が下がります。みんな、顔つきが、変わってきています。

そのうえに、やっかいな問題がおこったのです。環境林センターの、南の端が、新しい道路にかかることになりました。大同空港と、砒務局を結ぶ、快速道路で、幅50m、緑化帯が両方に3mずつで、計56m。片側3車線プラス側道、という規模でしょうか。

とにかく、決まったら、そのあとは速いですからね。4月8日は、耿彦波市長本人が、ここにやってきて、3日以内に、立ち木や塀を片づけるように、指示したそう。評判のこの市長、ほんとに、どこにでもあらわれるようです。

ここで育っていた、枝垂れニレの苗木は、4月初めにやってきた、緑の地球ネットワークのツアーが、移植しました。ほんとによく働きました。中国側も、感心していました。みなさん、おそらく、筋肉痛だったでしょう。私はあの晩、手足がケイレンを、くりかえしましたよ。

残っているのは、レンガ塀ぎりぎりに、植えてある街路樹です。もう7年くらいたっている、新疆ポプラ39本と、ニワウルシ9本。樹高は12mにもなり、胸高直径も、20cmはあります。私は、伐るしかない、と思っていました。ところが、こんな大きな木が、苗として、売れるというのです。買い手は、すぐにはみつかりませんから、苗畑に仮植えしておきます。ところが、これが8人がかりでも、持ち上がらないというのです。日立建機の中国法人からいただいた、パワーショベルの出番になりました。ロープで玉かけし、5本ずつ運んでは、植えていきます。大同事務所の運転手、小郭が、器用に運転しています。そして、このあと、東側のレンガ塀を、取り除きます。これも、ショベルの出番。

失われる面積は、56m×110mで、0.6haほどです。ここは、塩害地だったので、影響は、そう大きくありません。そのほかに、16m×110mが、道路の反対側に、取り残されます。私は、それがムダになると、考えたのです。ところが、小武はちがいます。それだけあれば、店舗などに、十分使えるというのです。貸し出すことができます。それから、直販の店をつくることも、できるといいます。ここでつくる野菜や、草花、そして果樹園で、アンズなどが実るようになれば、それを売ることもできます。このすぐそばには、磁務局の職員住宅がありますからね。磁務局というのは、大同最大の石炭会社ですからね。車で通りすぎる客だけでなく、固定客をつくるのが、可能かもしれません。センター本体に属する、道路の北側についても、同じことがいえます。

いまの計画では、正門を、この道路にむけて、敷地の南側につくります。この道路が完成すれば、どの県に苗を運ぶにしても、市街地を通らないですみます。市内との交通も、たいへん便利になります。私は、道路がかかることを、マイナスとばかり思っていたましたが、よくよく考えると、プラスの面が大きいようです。

書き終わって、気づきました。この号で、499号です。次号は、500号。スタートから、ちょうど10年です。なにか、明るい話題を、さがしたいものです。

**NO. 500** ころころから感謝いたします。 2009. 04. 16

黄土高原だよりも、500号になりました。第1号は、1999年4月26日の「水が潤れる」でした。ですから、10周年でもあります。年に50号ですから、平均すれば、週刊。500号の総文字数は、121万字にもなります。400字詰め原稿用紙に換算すると、なんと、3025枚。つい、フラフラッと、はじめたんですよ。こんなにつづくとは、思いもしませんでした。感想や返事をくださるかたがあったり、たくさん転送してくださるかたがあったりしました。みなさんのおかげです。

200号がでたころに、それまでのものをまとめて、出版しました。『ぼくらの村にアンズが実った』（日本経済新聞社、2003年）です。中国版『雁棲塞北』（李建華・王黎傑訳、国際文化出版公司、2005年）と、韓国版も翻訳出版されました。（韓国版は全文ハングルで、題名すら私には読めません）。予想もしなかった、うれしいことです。前号で、「明るい話題を」などと予告し、改まって、書こうとしたのですが、途中で頓挫しました。そういう文章は、私にはむかないようです。

この17年間の、さまざまなことが頭をよぎります。でも、よかったことを、ひとことでいえば、いい人たちに、集まっていた、ということにつきます。まずは、大同側のスタッフ。ほんとに、いいメンバーですよ。だれもが、自分にできることを、いっしょうけんめいやっています。こういう人たちと、いっしょにしごとができたことは、私にとって、とても幸せなことです。

3月下旬に、樹木医さんのグループがこられたとき、複数のかたから、「こんないい人たちを、どうやって集めたんですか？」と質問されました。1週間たらずの滞在でしたが、それくらい、印象的だったようです。

たとえば、運転手の郭宝青のことを、ちょっとだけ書きましょう。小郭は、大同事務所にくるまえ、石炭輸送の大型トラックを、運転していました。技術のたしかさは、安心できます。それだけじゃないんですね。いま、植栽の時期で、どこもかしこも、大忙しです。トラックを運転できる人間が、不足しているので、彼はトラックに乗って、苗木の輸送をしています。と思ったら、つぎは日立建機からいただいた、ショベルカーを運転しています。ときには、白登苗圃のスチールベッドで、何日も泊まり込み。土日なんて、関係ありません。私の目からみても、使い方が、荒すぎますよ。いくら若いといっても、機械をつかうのがすきだといっても、ひどく疲れるでしょうよ。それなのに、いやな顔ひとつ、したことがありません。大同事務所が、とてもうまく、回転しているからでしょう。

それから、日本側の人たち。専門家の人たちも、従来は手弁当でした。旅費や滞在費も、ずっと個人で負担されていたのです。「このかたたちは、撒き餌もしないし、餌もつけないし、釣り針もついていない、ただ道糸にくいついてきた人たちです」なんて、ひどいことを、私はいっていたんですね。すると、遠田先生が、「じゃあ、私はだまされてきたんですか？」とおっし

やったんですけど、そのとおりなんです。日本の常識からいえば、自分からだまされて、通ってくださったんですよ。ここまでの前進があったのは、そのおかげです。

ツアー参加者も、そうなんです。大同事務所の、武春珍所長がいいです。「大同にくる日本人は、どうしていい人たちばかりなんですか？」私も、そう思います。安くもない旅費を払って、汗みずくになって働く。農村に泊まったら、シャワーすら、ないんですからね。それなのに、石田和久さんなんて、この春で16回めでした。奇人変人ばかりですよ。私にとって、ほんとに、すてきな人たちです。

失敗や、困難にも、なんども出会いました。もう、これまでだ、と思ったことが、何度あったか、わかりません。たとえば、1995年は、私たちにとって、とても困難な時期でした。代表不在の状態といえば、死に体なんですけど、そのときに、立花吉茂先生が、代表を引き受けてくださいました。私は、夜道を、泣きながら、帰ったものです。ああ、これで、なんとかつづけられる、と。思。っ。て。

その直後に、あの阪神大震災です。当時の専従職員は、震度7の地域に住んでいて、全員が、被災しましたからね。それでいて、救援活動に走り回った。この時期は、成果はなかなかでないし、最初いた人もいなくなるような、危機的な状況だったのですよ。そのとき、当時の全ジャスコ労働組合の、書記長が私たちの事務所を訪ねてきて、支援を約束してくださったのです。たくさんの労働組合や企業が、この活動に参加してくれる最初の道を開いてくれました。絶体絶命と思えるときに、どこかから助けがでてくる。できることなら、もう少し早くでてきてほしかった。

いまもまた、むずかしい局面です。中国は、大変動しています。大同も、大変動しています。中国の環境問題は、いまや世界の大問題です。私は、私たちの活動の、重要な意義を感じています。しかし、いまの変動の、圧倒的な大きさと、圧倒的なスピードを、目の前にするとき、私は、自分の非力さに、沈み込まざるをえないのです。どうか、また、助けがあらわれてほしいのです。おそくならないうちに。みなさんのご参加、ご協力に、こころから感謝いたします。

## NO. 501 10年間の変化をカメラで追う 2009. 04. 23

霊丘自然植物園の起工式は、1999年4月でした。ですから、ちょうど10年。ここの変化は、ほんとにダイナミックです。なんてことを、口でいっても、はじまりません。なにか、かたちであらわす必要があります。

調査枠を固定して、そのなかでの毎木調査を実施しました。1本1本にナンバーをつけます。地表から120cmのところを、白ペンキでマークしました。胸高直径を、毎年、同じ位置で、測

定するためです。樹高も、測定します。でも、これは、去年と、今年と、いまのところ、2回だけ。

私としては、意気込んでいたんでしょうね。1998年9月、1998年12月、1999年4月に、かなりの数の写真を撮っています。それと同じ位置、同じアングルの写真を撮れば、10年まえとの比較ができるでしょう。

ことし6月の会員総会で、立花吉茂代表、前中久行顧問に、私がまじって、「霊丘自然植物園の10年～その構想とこれまでの成果」と題して、話し合うことになっています。私にできるのは、10年の変化を、写真でみてもらうことぐらいでしょう。何十枚かの写真を、プリントアウトして、昨年12月にもってきました。ほんとうなら、そのときに、撮影したかったのです。ところが、寒波襲来で、霊丘に近づくこともできませんでした。

やっと今回は、4月21日と22日に、そのための時間ができました。李向東は、たいていの場所の、見当をつけていました。それどころではありません。去年のうちに、同じ場所で、すでに写真を撮影したといいます。魏生学は、その写真を持ち帰ればいいので、わざわざ撮らなくてもいいじゃないか、とといいますけど、ジョーダンじゃない、私は自分の目で、確認したいのです。

と、いいながらも、撮影した場所も、その状況も、私には、まったく記憶がありません。李向東が先に立って、だいたい位置を示してくれます。だいたい位置がわかると、それでいいでしょうね。私の、名字どおりですよ。周囲のなかで、ちょっと高いところに立って、そこでシャッターを切っています。その習慣は、いまも変わっていません。

それにしても、こういうばあいの、李向東のセンスには、感心しました。よくぞ、ここまで、敷地内を、把握してくれたものです。背景の山の、ちょっとした見え方の変化で、位置を修正してくれます。

21日は午後からスタートしたのですが、稜線にたどりつき、南天門に立ったころから、継続をあきらめました。風がつよすぎ、吹き飛ばされそう。足もとがよくありませんし、ここから落ちたら、ただごとではすみません。下までおりて、低いところのものを、撮影しました。

翌22日の午前、また稜線まで、登りました。その途中で、収穫があったんですね。敷地内の、海拔1,100m以上のところには、たくさんのナラが茂っています。大きいものは、すでに10数メートルに達します。7~8mクラスは、無数といってもいいくらい、たくさんあります。以前は、すべて、リョウトウナラ（遼東櫟）だと、思っていました。昨年9月の調査で、モンゴリナラ（蒙櫟）が混じっていることを、発見しました。1本みつかると、つぎつぎにみつかるとのことですね。いまの時期は、葉が落ちて、樹形がよくわかります。そうとうの割合で、モンゴリナ

ラのようにです。こちらのほうが、スラーッとよく伸びています。

またまた、発見があったのですよ。カシワ（榎樹）の、落ち葉が見つかったのです。それも、あちこちで。犬も歩けば棒にあたる、ですよ。この地方の、ほかの場所では、カシワを何回もみています。胸高直径が80センチを超えた、巨木もあります。しかし、この敷地内では、みたことはありません。私がないだけでなく、李向東たちも、知らなかったといいます。エヘン！第一発見者は、わたし。といっても、みつけたのは落ち葉だけで、樹木自体は、どれがそれか、いまはわかりません。継続調査のための、枠のすぐ下でも、落ち葉が見つかりました。調査枠のなかにも、カシワが混じっている可能性が、高くなりました。

21日も、風はきつかったのです。でも、気温は前日より、高くなりました。まったく同じ場所で、というのは、ムリなことがわかりました。10年まえの写真では、足もとにブッシュがあるだけのところが、いまや、ナラの林になっていて、はいることもできません。ムリにはいっても、眼前に樹木が立ちはだかって、写真になりません。まあ、だいたいの雰囲気ができるように、写真を撮りました。

変化の1つは、アブラマツがよく伸びていることです。ここの広葉樹は、すべて落葉で、まだ緑になっていません。といいましたが、シクナゲの1種が半常緑です。冬も葉が落ちませんが、茶色になります。青いのは、アブラマツだけなんですね。それが5~7mになっています。年齢を数えると、だいたい25年クラスのように。地元の話では、飛行機で播種したとのことですが、はっきりしたことは、わかりません。天然更新も、はじまっています。

10年まえの写真では、このアブラマツも、ちいさいんですね。小さな青い点が、あるだけ。いまでは、写真に撮っても、マツだとはっきりわかります。近寄って、上から10年を、数えてみました。樹高が、いまの半分もありません。見た目には、いまの4分の1以下。重さにしたら、10分の1もないでしょう。

稜線のなかに、ちょっと低くなっているところがあります。地元では、ここを南天門と呼んでいます。奇怪なかたちの、岩でできています。中華全国総工会の、徐錫澄副主席（当時）がここにきたとき、李向東がせがんで、「南天門」と揮毫してもらいました。徐さんは、書家としても著名です。李向東はその「南天門」を、大理石の板に彫刻してもらい、南天門の記念碑にしました。コンクリートの記念碑に、張りつけたんですけど、大理石の板だけでも、60kg以上あるそう。どうやって運び上げたかときくと、カジマンの男に、100元を払い、背負いあげてもらったそう。で、これからはここを、「南天門自然植物園」と呼ぶのだそうです。

10年まえに写真を撮ったとき、10年後の変化を見越して、撮っていれば、いまとの、いい比較ができたと思いますよ。でも、そんな力が、私にあらうはずがない。いま、大きく育っているところの、10年前の写真を、取り直すことができれば、それは、いい比較になるでしょうけ

ど、それは不可能なこと。というわけで、写真だけで、この10年のダイナミックな変化を、わかってもらえるのは、むずかしいことです。

## NO. 502 コー○ンの苗 2009. 05. 11

昨年11月に放映された、「よみがえれ！緑の大地～中国・黄土植林プロジェクト17年目の挑戦」の再々放送があります。

5月16日（土）19:00～20:55、BS朝日です。

<http://www.bs-asahi.co.jp/daichi/>

ごらんになったかたから、いろいろとご支援をいただきました。ありがとうございます。

ゴールデンウィークの前後は、家庭菜園にとって、忙しい時期です。まずは、種蒔きをしないといけない。私は、種を蒔いて、芽が出るのをみるのが、好きです。そのために、野菜をつくっている、とっていいくらい。ですから、たいていのは、自分で苗を育てます。5月はじめに蒔いた、オクラや、モロヘイヤが、芽生えてきました。オクラは去年、発芽があまりよくなかったのです。ことしは、モルタルのうえにこすりつけて、傷をつけ、1晩吸水させてから蒔くと、きれいに発芽がそろいました。キュウリと、インゲンマメは、ルスのあいだに、種を蒔いてもらいました。

毎年3月中旬から、4月いっぱい、私は中国です。トマト、ピーマンなどを、種から育てようと思うと、これは致命的。苗になったものを、買うしかありません。秋作の、ブロッコリーもそう。たいていは、コー○ンで買います。関西発の、ホームセンターです。知り合いのあいだでは、コー○ンの苗といえば、ボロクソなんですね。とにかく、管理がわるい。生き物を相手にしている、という感覚が、欠如している。水が切れて、葉が落ちたり、枯れてしまったり、虫がわいていたりで、さんざん。

でも、私は、コー○ンで買うことが、多いのです。安いんですね、これが第一。それから、自転車圏に、3軒も店があります。品種や種子は、いいものがつかわれています。入荷したての苗なら、その後の管理は、関係ありません。それに、以前にくらべると、多少はよくなった。最後のひとつは、いかにも私らしい理由。そうとうに傷んだもののなかで、生き残ったものを買うのです。

大同の技術者たちは、つい最近まで、トマト、ナス、キュウリなど、果菜の苗に、ハードニングをかけていました。徹底して、イジメるんですね。ポットをつかわず、温室の苗床に、種を蒔きます。植え替えの時期になると、苗の植わった土を、トウフのように、四角に切ります。すぐには植えないで、転がしておく。水をやりません。弱いものは、枯れていきます。

追い込むことで、苗の活力が引き出される、といます。その後の生育がよくなるし、実のつきもいい、といます。強いものだけを残す、という効果も、もちろん期待できるでしょう。こういう苗づくりは、しばらくまえまで、日本でもやられていました。人の子育てにも、そういう考えがあったと思います。獅子は、わが子を、千仞の谷に突き落とす、といます。かわい子には旅をさせよ、というのも同じ意味でしょう。いまは、こういうのは、はやらないよう。そんなことをして、トラウマが残ったら、どうなる！

私の苗の育て方も、いまふうです。ポットに種を蒔いて、水を切らさないように、いい条件を維持し、できるだけ根を切らないように、そーっと植えつける。ハードニングなんて、こわくて、自分では、もうできません。まして、買って来た苗で、そんなこと、できませんよ。半分も枯らしてしまったら、金銭的な損失も少なくない。そのいっぽうで、あの厳しい育苗法への、あこがれもあります。自分のできないことを、コーオンさんが、やったださる、と考える。厳しい条件を、生き抜いてきた苗を、いただいてきて、だいに育てるんですね。苗は、しっかり応えてくれます。やったあ、という感じ。

ことは、新しいことに、挑戦しています。つれあいの友人が、北海道で農業をしています。芽が出てきたら、それをちょんぎって、土に挿して育てると、強い苗ができ、長く収穫できる、というのです。えっ、それって、なにっ！もう少し、くわしくきいてよ、と頼んだんですけど、その直後に、タキイのカatalogに、同じ方法が紹介されているのをたまたま、みたんですね。くわしくは、インターネットで、「胚軸切断挿し木」あたりで、検索してみてください。複数の方角から、同じ話がくれば、それには乗る、というのが、私の流儀です。

で、まずはインゲンマメで、5月2日にやってみました。もうちゃんと、根が伸びているようです。5月9日は、キュウリで、同じようにしてみました。さあ、どうなるでしょう。これがうまくいけば、私の育苗方法は変わります。

## NO. 503 事務局スタッフを募集します！ (2009. 05. 19)

事務局で4年半、いっしょに活動してきた会田伸子さんが結婚し、パートナーの転勤にともなって、事務局を離れることになりました。ほかの理由だったら、なんとしても引き止めますが、こればかりはどうにもなりません。でも、まあ、活動の実態を、深く理解している人が、事務局の外にいるのも、大きな力になると思います。それも含めて、今後の活動にとって、プラスに転じるよう、新たなスタッフを募集いたします。具体的な内容は、私たちのウェブページをごらんください。

<http://homepage3.nifty.com/gentree/temp.html>

正直なところ、とても困難な時期だと思っています。経済の落ち込みは、ほんとに広範です。

ただでさえ基盤のぜいじゃくな、私たちのような零細 NGO が、このなかで、生き残っていけるものか、不安もあります。そのうえに、新型インフルエンザの流行。ただでさえ、縮み指向の、いまの日本ですから、社会全体が、内向きになる可能性も高いでしょう。

中国の変化も急激です。私たちが協力を継続している大同をみても、市街地では大きな変化がつづいています。17年まえ、私たちがこの協力事業をはじめたころとは、さまがわりしました。その変動の規模の大きさ、そして圧倒的なスピードを目にするとき、私たちのような民間団体に、なにができるでしょう（もともと、農村の変化は、そう大きくないのですが）。

中国の環境問題がもつ意味は、これからいっそう大きくなります。中国自身にとって、重たい課題であるだけでなく、地球の環境に占める位置も、急激に大きくなるでしょう。隣国の私たちにとっては、なおさら大きな課題です。いまから17年まえに、このような活動をスタートさせたのは、まさに正解だったと思います。

そして、やってきたことには、自信をもっています。この17年間に植えてきた樹木は、だんだんと大きくなります。成長期を迎えたものが多いので、1年ごとの変化は巨大とっていいくらいです。霊丘県の南天門自然植物園などは、これから10年、20年とたつなかで、その意義がいっそう鮮明になることでしょう。それを長期に維持していくための、仕組みをつくることは、これからの大きな課題です。

と同時に、いまの中国の変動を目にするとき、私たちの活動に、いまひとつ、しっくりしないものも感じています。新しい情勢のもとで、新しいあり方を実現することが、どうしても必要だと思えます。ですので、緑の地球ネットワークを固定したイメージで見るのではなく、自分も参加することで、変えていこう、発展させていこう、そう考える新しい力に、ぜひ加わってほしいのです。

私は以前、こういうしごとについて、書いたことがあります。やるべきこと、やりたいこと、やれること、という3つが重なるところが、いいしごとです。ところが、事務局の専従スタッフとして働くとなると、やりたくなくても、やらないといけないことが、しばしばなんですね。自分の能力を超えることにも、挑戦しないとイケません。それは、しんどいことですし、プレッシャーもつよい。でも、数年間、がんばってみると、できるはずがなかったことを、平気でこなしている。そういう自分に気づくはずです。

事業を発展させることは、もちろんたいせつですけれども、自分たちの働く環境も、できるだけ、よくはしたいのです。経済面で、十分な待遇はできないんですけど、気持ちよく働ける場には、してきたつもりですし、これからも、そうしたいのです。たとえば、いまの事務局員4人は、同僚全員の賃金を、知っています。自分と、まったく同じだからです。最初の数年は、ちょっとしんぼうしてもらいますけど。意欲ある人の、応募をお待ちしています。

もうひとつ、ご案内です。5月24日(日)に、「自然と親しむ会」を開催します。琵琶湖のそばの、比良山馬が背山国有林で、山の手入れです。スギやヒノキの間伐と皮むき、下草刈りなどで、参加者の体力にあった作業があります。長年取り組んでおられるNPO 自然と緑のみなさんのお世話になります。JR 湖西線「北小松」駅に朝の10時集合です。大阪駅発 08:45分→京都駅発 09:16分→山科駅発 09:21分の新快速に乗ると、乗り換えなしです。昼食、飲み物、敷物、雨具、タオル、軍手、作業のできる服と靴。参加費:700円(保険料を含みます。交通費は各自負担です) 小雨決行です。参加希望者は緑の地球ネットワーク事務所まで。

## NO. 504 アンズは無事！ 2009. 05. 26

4月の大同滞在中も、大阪に帰ってからも、私は毎朝のように、インターネットで、大同の天気予報をみていました。祈るような気持ちです。日本のサイトでも、10日先まで、予報をみることができるのに、過ぎ去った日のデータは、みつかりません。ご存じのかたは教えてください。

アンズのことが、気がかりなんですね。ここ何年も、暖冬つづきです。北緯40度で、標高が1,000m以上ですから、寒いことは、寒いんですよ。3年くらいまえに、市内の観測でも、マイナス30度を記録し、歴史上の最低気温を、更新しました。山や丘陵では、もっと下がります。それでも、以前にくらべると、気温が上昇しているよう。1970年くらいに比べ、2000年ごろは、1月の月平均気温が、2度ほど上昇しています。7月の月平均気温に、大きな変化はありません。

地元の農村住民の、体感ではどうなっているか、10年まえに、アンケート調査をしました。21の村の、900人が対象ですけど、その全体では、10年前にくらべ、

夏が暑くなった	51.6%
夏が涼しくなった	27.8%
冬に寒い日がなくなった	77.8%
冬が寒くなった	10.9%
変化はない	2.8%

暖冬つづきは、自覚されているようです。寒い地方ですから、暖かくなるのは、悪いことではないと、思われるかもしれません。でも、そうじゃないんですね。たとえば、害虫や病気がふえます。

私たちが、小学校付属果樹園で植え広げてきたアンズも、害を受けるのです。アンズは、乾燥にも、寒さにも、とても強い木です。細胞のなかの、糖分の濃度をあげることで、寒さにあたって、枯れないですむ。春になると、ちゃんと、花を咲かせます。といっても、それは、ツボミが固いときの話。ツボミがふくらんだり、花が咲いてから、凍ってしまうと、それはだ

めです。

暖冬にともなって、開花時期が、早まっているようです。昨年も、ことしも、4月20日前に、開花しました。そのまま、暖かくなってくれば、問題ないんですけど、そうともかぎりません。というのは、春先の、大同の気温は、ちょっと信じられないくらいなんです。4月上旬に、すでに最高気温は20度を超え、ときには27度にもなるんですよ。それなのに、最低気温が-5度なんてことも、めずらしくないのです。日較差が、大きすぎるんです。そして、アンズを大成功させた、渾源県の呉城村は、大同市内に比べ、高いところにあります。

アンズは、開花・受粉したあとは、-2度までは、大丈夫だけど、-4度になると、被害がでるそう。あの村の、王迎才書記は、自宅の庭に、最高最低温時計をおいて、いつも、気温を気にかけています。去年は、5月9日、10日になってから、-7度にまで下がり、幼果が、落ちてしまいました。まだ若い木には、多少、実のついているものがありましたが、10年以上たった成木は、全滅でした。去年10月に放映された、BS朝日の番組「よみがえれ！緑の大地」は、アンズの豊作で、ハッピーエンドになるはずだったのに、全滅だったんですけど、あれが呉城村です。

アワ、キビ、ジャガイモなどから、アンズに切り換えることで、豊作の年は、面積あたり、5~10倍に、収入はふえたのですよ。でも、全滅の年が、連続するようだと、どうにもなりません。日本では、霜の害にたいする方策が、いろいろありますが、費用のかかるものは、ムリです。しかも、面積が300ha以上ありますから、気軽には、とりくめないのです。

ことしは、ほんとに心配でした。樹木は、大きくなるにしたがって、乾燥や寒さに強くなる、と私は考えてましたけど、このケースでは、かならずしもそうでないことが、去年の例でわかりました。そのために、よけいに気がかりです。

ことしは、4月26日の最低気温が、0度の予報だったんです。呉城村は高いところにありますので、ちょっと危なかった。でも、それ以後は、順調に、気温があがったようです。大同事務所に問い合わせると、無事だったそう。ああ、よかった！去年、テレビ取材で、なんども呉城村を訪れた、張森さんにそう伝えると、彼も「よかった！心配してましたよ」といっていました。なにか、いい対策があれば、教えてください。

## NO. 505 3度めの認定が決まる 2009.06.01

心待ちにしていた通知が、配達証明郵便で、先週金曜日に届きました。国税庁からのもので、3度目の認定が決まった、というもの。今回から、有効期間は5年間で、2009年6月1日から、2014年5月31日までです。どういう意味があるかといえば、税制上の優遇を受けることがで

きます。緑の地球ネットワークへの寄付金は、個人でも、企業等でも、税控除の対象になります。そのおかげで、やはり寄付金がふえます。

申請は、昨年 11 月 26 日におこないました。その直後、大阪国税局から、2 人の担当者が事務所に来て、調査がおこなわれました。2 日間。これが、細かいんですね。認定の要件は、もちろん決まっています。中心は、パブリック・サポート・テストで、大雑把に言えば、寄付金等の収入が、総収入の 5 分の 1 以上ある、ということです。広範な人たちから支持されていることの証、というわけですね。

ところが、実際の調査は、それにかぎりません。支出のほうも、領収書とつきあわせて、1 件 1 件チェックされました。まあ、認定の条件のなかには、不適正な経理がおこなわれていないこと、というのもありますから、なんだって、対象にはなるんですね。そして、国税庁、国税局というのは、日本の役所のなかでは、まじめな役所だと思いますよ。税務調査の手法なんですよけど、とにかくジクジクとやられる。

そのたびに思うんですけど、裁判官と検察官を兼ねた人のまえで、弁護人なしで、自分の無実を証明しないといけない被告人、といったところでしょうか。気分的には、ほんとにイヤで、ユウウツです。まるで、犯罪者あつかいですからね。あんまり、ロコツにそれがでてくると、私なんか、つい、カッとなって、「申請を取り下げます」なんて、いいかねません。世話人会で、「そんなことになっても、許してくださいね」などと、ことわっていたくらい。発表されている数字をみても、申請後の取り下げが、ほんとに多いですからね。

そんな思いまでして、なぜ、と思われるかもしれませんが、それだけの意味はあります。私は、毎年の会員総会で、「優秀な外部監査を、ただで雇っているようなものです」といっています。「ただで」というところが、ミソなんですね。癒着のおきようがない。会計がキチツとなされていることには、自信をもてます。

それから、現実に寄付金がふえます。ことしの会員総会は、6 月 13 日（土）ですけど、事業報告（案）を作成する過程で、収入と支出の推移をみってみました。1997 年度から 2004 年度まで、私たちに寄せられた寄付金は、年間 500 万円から 1200 万円だったんですけど、2005 年度には 1800 万円弱と、それまでの最高額の 1.5 倍になりました。この年に、最初の認定を受けています。それ以後は、それほど劇的ではありませんけど、ふえつづけているのは、事実です。

NPO 法人に関係している人たちに、ぜひ、認定をとってください、といって、私は、すすめています。とくに今年度は、実績判定期間が 2 年間で、有効期間が 5 年間という、特例があります。

そして、以前は、たしかに、ハードルが高かったんですけど、なんどかの改正をへて、パブ

リック・サポート・テストも、ずいぶん、ゆるやかになりました。私たちのばあいでは、総収入にたいする寄付金等の割合は、

2004年の1回目申請のときは、36%。

2006年の2回目申請のときは、49%。

2008年の3回目申請のときは、72%。

20%以上であればいいんですからね。最近はかるがる、といったところ。それだけ、通りやすくなったということです。

2009年3月末の、一般のNPO法人は、37198団体なんですけど、同じ時期の認定NPO法人は、わずかに93団体。たったの0.25%で、千三つにも及びません。とにかく、もっとふえてもらわないことには、この制度が、認知されません。制度として、死んでいる、もしくは、休眠している、とっていいでしょう。もっとふえてもらわないことには、制度改善の要求の声も、大きくなりませんよ。ぜひ、よろしく願いいたします。

#### NO. 506 「南天門」自然植物園へのお誘い 2009. 06. 10

ことしの春、霊丘自然植物園を、ボランティアツアーが訪れたときのことで。責任者の李向東が、突然、宣言しました。「今後、ここは南天門自然植物園と称します」と。南天門というのは、由緒のある名ようです。私にすぐ思い浮かぶのは、中国五岳の筆頭、東岳泰山の山頂にある南天門です。それ以外にも、名山といわれるほどの山には、「南天門」と呼ばれるところがあるようですね。霊丘自然植物園の、いちばん高いところも、南天門と呼ばれます。私たちが、勝手に、そう呼んでいるのではないんですよ。大同市の地図でも、ひととき大きな活字で「南天門 1316.8m」と記載されています。たしかに、この名称をつかわない手はないでしょう。

それに、あそこはたった86haの一山です。しばらく前までは、たんなる荒れ山でした。そこに、「霊丘」という名をつけるのは、地元の人たちには、ちょっと荷が重いんでしょうね。でも、私たちはこれまで、霊丘自然植物園と呼んできました。それとの整合性を、どうとるか？前中久行顧問は、「愛称としてつかったらいいじゃないですか」。なるほど、なるほど。

その南天門自然植物園で、森林が急速に再生しつつあります。中心になっているのは、ナラ、シナノキ、シラカンバ、トネリコなどの落葉広葉樹です。これらは、ここの自生樹種。従来は、10年に1回くらいのペースで、村人によって伐られ、燃料として燃やされていたようです。私たちが、10年前から保護すると、急激に成長をはじめました。アブラマツ、モンゴリマツ、トウヒ、コノテガシワなどの針葉樹もありますが、これらは近年に人が植えたもの。

常緑の広葉樹は、ありません。いえ、半常緑樹が、1種類だけあります。ツツジ・シクナゲ

のなかまで、小さな白い集合花をつけます。冬になっても、葉は落ちませんが、茶色く枯れたようになります。春になると、また緑が回復します。それがあつ一角で、ものすごい勢いでふえています。やがて、そこの一帯は、これだけになるかもしれません。

ナラは、リョウトウナラ、モンゴリナラ、カシワの3種があります。最大のもの、12~13mはあるでしょう。この春にみると、7~8mのものはザラにあります。シナノキも、大きなものは、それと同じくらい。シラカンバも、数年前までは、数本しかないように思っていました。小さいうちは、樹幹が白くないので、めだたなかったんですね。それがいまでは、あちこちにあるのがわかります。とても伸びの速い木です。

変化のようすを、きちんと記録に残そうと考えて、昨年3月から、20m×20mの調査枠を、2か所につくり、毎木調査をはじめました。1本1本の樹木に、番号札をつけ、地表から120cmのところに、白ペンキで印をつけました。毎年、同じところの直径を測定するためです。そして、樹高もはかって、記録しました。2か所にしたのは、北向きの日陰斜面（陰坡）と、南向きの日向斜面（陽坡）とでは、樹木や植物の生長ぐあいが、まったくちがうからです。調査枠の外でも、代表的な樹種について、同じように、測定・記録しています。

ことしの3月も、測定しました。それによって、1年間で、どれだけ成長したか、わかります。その結果を、今週土曜日の、第15回会員総会の前段で、前中久行顧問（大阪府立大学大学院教授）が報告します。ご期待ください。このメールの末尾にご案内があります。

表題を「……へのお誘い」としたのは、もうひとつの意味があります。いったい何種類くらいの植物が、ここにあるか、気になります。あそこのスタートにあたって、経団連自然保護基金の支援を受けました。その大きなテーマが、生物多様性の保護でした。そこの集まりで、先週の金曜日、私たちの活動を報告することになっていましたので、「何種類くらいありますかね？」と私が、前中顧問に気楽に尋ねたら、「標本をつくってみたら！」との答え。地元の李向東たちも、自分たちで、標本づくりをはじめていますが、それを応援しましょう。

というわけで、この夏のワーキングツアーは、南天門自然植物園に、2日間、滞在することにし、標本づくりを、メインの活動にします。これは、楽しいと思いますよ。樹木もそうですが、その周囲には、高山植物の花がたくさんあります。時期的には、もうちょっとあとのほうが、花の盛りですけど、それでも、けっこう咲いていると思います。日本の高山植物とくらべ、花が大きく、色があざやかです。ぜひ、ご参加ください。

\*\*\*\*\*

GEN 会員総会記念シンポジウム

『霊丘自然植物園の10年~構想とこれまでの成果』

☆6月13日（土）13時30分~15時

☆大阪市立弁天町市民学習センター

(JR 環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ)

☆立花吉茂さん (GEN 代表・花園大学客員教授)

前中久行さん (GEN 顧問・大阪府立大学大学院教授)

高見邦雄 (GEN 事務局長)

☆参加費 500 円 (GEN 会員無料)

## NO. 507 ユウレイバナ 2009. 06. 23

年齢のせいでしょうか？園芸種の花ではなく、野草がすきになります。なかでもお気に入りが、ヤマオダマキ。クリーム色の、すてきな花です。数日前から、わが家の庭で、咲きはじめてました。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/e/c648e1cc66962f8973d64b4371294b98>

最初は、信州の山のなかから、ちょっとだけ種をいただいてきました。その後は、自宅の種で、苗を育てて、絶やさないようにしています。10年近くになります。

オダマキはもう1種、ミヤマオダマキがあります。濃い紫色の花で、開花の時期は、こちらがずっと早い。私の故郷、鳥取県の大山の山中で、種を採ったんですけど、大山寺のみやげもの屋さんが、たくさん栽培していますので、園芸種の、エスケープの可能性も、捨てきれません。

大同にも、オダマキがあります。図鑑で調べると、華北稜斗菜と呼ぶよう。花のかたちは、日本のヤマオダマキと似てますが、色変わりが、たくさんあり、日本では、ちょっとみかけない色もあります。そういえば、オダマキも、最近では園芸種がたくさんでて、奇抜なかたちのものも、多いですね。

渾源県の北岳恒山は、中国五岳の1つで、道教の聖山です。この機会に、五岳をならべておきましょう。東岳・泰山 (山東省泰安市、1,532.7m)、西岳・華山 (陝西省華陽市、2,154.9m)、南岳・衡山 (湖南省衡陽市、1,300.2m)、北岳・恒山 (山西省渾源県、2,016.1m)、中岳・崇山 (河南省登封市、1,491.7m)。中国のネットサイトで、データをとったんですけど、念のために、べつのサイトをみると、山の高さはまったくべつの数値がありました。参考までに、とどめてください。

恒山の南面の山腹には、たくさんの道観や、廟が建っています。そして、ものすごい数の参拝客が、中国の全国はもとより、海外の華人圏からもやってきます。ここのおみくじは、よくあたるので、有名だそう。その参道で、オダマキを見つけました。ちょうど、種子をつけていました。かがみこんで、それを採りはじめたんですよ。環境林センターでも、南天門自然植物園でもいい、どこかで、栽培してもらおう、と思ったのです。

そしたら、1人の男が、それをみとがめたんですね。「とっちゃ、いけない！」と。その理由が、変わっているんですよ。「その花は、悪い花だから、とっちゃいけない。あっちの花の種をとりなさい！」とって示したのは、あのヤマユリ、山丹丹でした。そして、オダマキのことを、「鬼灯籠」と呼びました。「鬼」というのは、赤鬼、青鬼の、あの勇ましい鬼ではなく、亡者とか、幽霊とか、そういう意味でしょうから、日本語に訳すなら、ユウレイバナでしょうね。

ユウレイバナと日本でいえば、ヒガンバナです。きらう人が多いですね。田んぼのあぜが真っ赤にみえるほど、群生するところがあるんですけど、カマヤ棒で、なぎ払われているのを、よくみかけます。あの花って、じっくり観察すると、ほんとにきれいですよね。はなやかでありながら、ほんとに繊細。うちの庭には、赤花が自生していますし、白花も、どこからか、持ち込まれています。つれあいが、すきなんですね。どうも、西日本の人がきらって、東日本の人はそれほどでもない。いかがでしょうか？

ずっと以前ですけど、ヒガンバナの球根を、大同に持ち込んだことがあります。あれって、中国原産で、石蒜というんですね。中国の南にはたくさんあるようですけど、大同にはありません。だいに温室で育てて、開花させました。「ほんとにきれいだ！だけど、咲いている期間が短いのがザンネン！」といます。先入観なしにみたら、そのはずですよ。

オダマキをきれいな中国人が、どれくらいいるか、私は知りません。あの男、ひとりの可能性だって、なくはないでしょう。ですので、オダマキのことは、ひとまずおきましょう。ヒガンバナにたいする、日本人の感覚ですけど、あれをきらうのに、しっかりした根拠があるとは思えません。なにかの偶然で決まったことでも、それが社会に広がると、だれもがそう思わされてしまう、ということなんでしょうね。そういうことから、できるだけ自由でありたいと、私は思っています。

## NO. 508 悪い予感があたりまして…… 2009. 07. 14

2009 年度を迎えるにあたって、なんとなく、よくない予感があつたんですね。6月の会員総会にむけての「事業計画」のなかに、「そして鳥インフルエンザや新型インフルエンザの流行の不安も広がっています。私たちの運営にも直接に大きな影響を与えるでしょう……そうした問題を予測した計画が必要です」などと、書いたのも、その予感のなせるわざです。

ところが、大同の農村あたりは、言霊の世界ですからね。悪いことを口にしたり、考えたりしたら、それが現実になります。いいことだけを言葉にし、いいことだけを思い浮かべないと、いけないのです。そのことを、いやというほど体験してきているのに、考えたり、口にしたりするだけでなく、文字にまでしてしまいました。その結果、悪いことを、呼び寄せてしまった

のです。

7月中旬には、JICAと中国の国家林業局が共同実施している日中林業生態研修センター計画の主催で、日中の林業協力に関わっている人たちが、大同に集まり、私たちの協力プロジェクトで、交流することになっていました。私は、これにずいぶん期待していたんですね。とくに、霊丘自然植物園における、森林の再生ぶりをみてもらい、評価してほしいと願っていたんですよ。私たちの経験を広めるための、絶好の機会でした。

ところが、これが中止になってしまいました。新型インフルエンザのためです。中国では「甲型流感」というそう。山西省の外事弁公室あたりから、多人数が接触するような活動は、延期してほしいという要請があったようです。山西省の感染者は、いまでも1名だけなんですけどね。ほかのところでも、予定の活動を中止したり、縮小したり、といったことが、あいついでいるよう。私たちのカウンターパートの大同市総工会は、労働組合の連合体のようなもの、ということになっていますが、実際には政府機関ですから、「要請」とはいつても、上からの方針に、逆らうことはできません。かえすがえすも、ザンネンなことです。

つぎに、私たち緑の地球ネットワークは、8月1日から8月8日までの予定で、ワーキングツアーの派遣を計画していました。これも霊丘自然植物園で、2日間活動して、植物標本をつくりたいと思っていたのです。ところが、これにも延期要請がきてしまいました。延期といっても、お終いがはっきりしているわけではありませんから、私たちとしては、中止する以外ありません。

ほんとに痛いですね。20名を超す参加申し込みがあり、多忙ななか、やっと休みがとれたから、といわれる人がいます。勤続〇周年で休みをもらって、という人もいます。はじめて参加する人や、若い人の申し込みもありました。楽しみにしていただけいた人には、ほんとに申しわけありませんし、ザンネンなことです。昨年夏はオリンピックのため、見送りましたので、これで、2年連続で、夏のツアーがありません。

新型インフルエンザにたいして、中国政府は、徹底した水際作戦を、現在も継続しているようです。中国の飛行機で中国に向かうと、乗る前と機内とで、3回も、体温測定があるそう。そして、37度を超えていると、その周囲の人も、密接接触者として、ホテルなどに、隔離されるのだそう。中国人にたいしても、感染国から帰国したら、1週間から10日間は、自宅待機するように指示があるそうです。重大な過失や、対策が不十分なために、感染者をだしたら、5万元から、20万元の罰金を課せられたり、営業停止処分まであるのだそう。いろんな活動が制約されるのも、無理はないですね。

この秋に迎える建国60周年が、大きなプレッシャーになっているようです。そして、来年のいまごろは、上海万国博ですからね。こういう事態が、昨年発生していたら、北京オリンピッ

クは、成立しなかったかもしれません。敏感になるのも、わからないわけではありません。

私じしんは、これからの計画をすすめるためにも、この夏に、いかないわけにはいきません。いまのところ、7月16日出発の予定です。そこで、こまった問題がでてきました。私は平熱が、36.7度~36.9度くらいあります。これまで意識したことはなかったんですけど、人さまにくらべ、高いようですね。朝いちばんに測って、これですから、日中は、もっと上がっている可能性があります。

そんな問題で、ひっかかるのは、イヤですね。私がイヤだけでなく、周囲の人にも迷惑ですし、活動に、支障をきたします。でも、いくら平熱が高いと説明しても、納得してくれる人たちがでないことは、よく知っています。解熱剤って、健康状態で飲んでも、体温を下げる効果って、あるんでしょうか？

ここまで書いたところで、大同の王萍さんと、連絡がつきました。大同市第四人民病院の副院長さんです。彼女の話では、基準になるのは、37度ではなく、37.5度だそう。それだったら、問題なさそうですけど、どちらがほんとうでしょうか？

#### NO. 509 ひどい早魘です 2009. 07. 22

7月16日、上海経由で、大同に無事に着きました。上海空港では、ちょっと緊張しました。前号で書いたように、着陸時に、機内で検疫があり、体温が37度（あるいは37.5度）以上あると、周囲の人を含めて、隔離される、ときいていたからです。私は平熱が、36.7~36.9度あり、すれすれ。着陸し、地上滑走をやめてから、機内アナウンスがありました。「検疫のため、係官が機内で体温測定をするので、このまま待機します」とのこと。しばらく待ってから、「検疫の方法が変更になり、機内での測定はなくなりました」と訂正のアナウンス。私もセーフです。

国際線の上海浦東空港から、国内線の虹橋空港へ、バスで移動しました。およそ1時間。同行している事務局のニューフェイス・河本公子さんは、6月末まで、上海にいましたが、私が、上海をみるのは、なんと、1996年以來のこと。しかもそのときは、夜遅くに上海に着き、そのころ上海で働いていた、城野さんと、朝まで飲み明かし、午前の飛行機で帰国しましたので、上海の街をまったくみていません。そのまえが、いつだったか、思い出せないくらい。

記憶を呼び覚まそうと、けんめいに窓の外をみるんですけど、なにも浮かんできません。まったく知らない街です。道路の両側に、さまざまな樹木や草花の、緑化帯がつくられており、それも、私の記憶がよみがえるのを、さまたげます。その先が、どんよりと霞んでいるのは、汚染のためでしょうか、それともべつの原因でしょうか。たまにでてくる、川の水は、ものす

ごい色をしています。水の汚染は確実です。期待していた、高層ビルの立ち並ぶ姿は、このバスの路線では、みることはできませんでした。

大同に着いて、出迎いのなかまたちから、最初にいわれました。「あなたたちが、雨をつれてきてくれました！」と。きのうまで、ずっと雨が降らなかったのだそう。そして、気温が34～36度もあり、ものすごく暑かったのだそう。雨で、気温が一気に下がったようで、外にでると、寒いくらいだな、と思いました。

翌17日は、大同の近くの、私たちの拠点をみてまわりましたが、雨が、降ったり、やんだりの日。最高気温が、21度でした。かなりひどい旱魃ですね。いまの時期、トウモロコシは、1.5～2mに育っているはずなのに、地下水で灌漑可能な畑を除けば、その半分もありません。収穫は、かぎりなくゼロに近いだろう、とっています。西暦の奇数年は、いい年がないのです。というより、悪い年ばかり。そして、末尾が9の年は、とくにひどいよう。1999年は、「建国後最悪の大旱魃」といわれていましたし、その翌々年の2001年は、「100年に1度の旱魃」といわれていました。ことしは、いまのところ、そこまでではないようですが、これからが心配です。

旱魃の年は、水に困るだけではありません。たとえば、毛虫やバッタなどの、虫害をともないます。これは、かならず、といていいくらい。きくところによると、毛虫やバッタのタマゴは、乾燥には、いたって強いそう。その逆に、雨にあたったり、湿気がおおかったりすると、カビが生えたり、腐ったりして、死んでしまうそうです。

いつかの年の旱魃では、バッタが大発生しました。バッタは集団発生すると、色も形も、変異するそうです。黒っぽくなり、羽根も姿も大きくなる。「飛蝗」というそうですね。そうして、長距離移動をくりかえすわけです。市内のアパートの、4階の窓にも飛び込んできたと、そのとき、ききました。

ことしは、そこまでのことはないので、大同県では、道路の両側の、ポプラの葉が、きれいになくなっていました。状態からみて、毛虫が発生したのでしょう。まあ、ポプラのばあいは、こうやって葉がなくなっても、すぐに枯れることはありませんし、葉を食いつくした毛虫は、死ぬしかありませんから、被害は、そう大きくないでしょう。

私たちの環境林センターの、南のすみでは、シダレニレ（垂榆）の苗が、枯れていました。葉を虫がくい、幹にも、虫がはいったのです。農薬を散布したけど、まにあわなかった、とっています。健康状態の樹木には、虫にたいする備えがありますが、これらのニレは、弱っていたために、被害が大きかった。というのは、敷地の南の端が、新しい道路にかかりました。3日以内にすべてを取り除け、という命をうけ、あわてて、移植しました。根を切りますから、人間にたとえれば、大手術です。そのあと、雨がありませんでした。苗圃のすみにあるために、

灌水もいきとどきません。弱っていたために、虫の害をまともに受けたんですね。でも、全体からみれば、数は多くありませんので、ご心配なく。

## NO. 510 南天門植物園のナラ 2009. 07. 27

霊丘上寨鎮の“南天門”自然植物園で、植生が急速に回復しています。海拔 1,100m 以上のところが、とくにいいのですが、その主役はナラ。これまでは、リョウトウナラ（遼東櫟 *Quercus liaotungensis*）だと、思っていました。ところが、昨年 9 月の植生調査の過程で、モンゴリナラ（蒙櫟 *Q. mongolica*）がみつかったのです。あれは、ふしぎなものです。なにかの植物をさがしているとき、最初はなかなかみつからなくても、1 本みつかると、つぎつぎにみつかるものです。このときも、そうでした。まんぜんとさがすのと、存在を確信してさがすのと、ちがいでしょうか。

ことしの春のことです。山のうへのほうで、リョウトウナラ、モンゴリナラにくらべて、ずっと大きな、落ち葉をみつけました。ふつうなら、見逃すところですが、その直前に、管理棟の下の苗圃で、ほかから導入したカシワ（柞櫟 *Q. dentata*）の葉を、みていたのです。それとそっくり。

モンゴリナラにしろ、カシワにしろ、あちこちを回って、さがしたのですよ。「植物園」を名乗る以上、植物種をふやしたい思いは、当然あります。そのうえ、モンゴリナラや、カシワのほうが、一般的に成長がよく、最終的な大きさも、ずっと大きいようです。大きいものがほしい、という思いは、私にもありますよ。そしてここは中国で、「越大越好!」、大きければ大きいほどいい、の世界ですからね。それが、足もとにあったのです!

2008 年の春から、日陰斜面（中国語で陰坡）と、日向斜面（陽坡）に、それぞれ 1 つずつ、20m×20m の、調査枠をつくりました。個体識別用の番号札をつけ、地上 120cm のところに、白ペンキを塗って、毎年、同じところの胸高直径と、樹高を測ることにしています。といっても、2009 年の春で、まだ 2 回目。けっこうたいへんな作業なんですけど、なんとかつづけたいと思います。

ナラが育っているのは、そのうちの陰坡の調査枠です。これまで述べた事情から、ナラはすべて、リョウトウナラとして、扱ってきました。樹高の測定は、葉のない時期しかできません。葉がないことには、樹種の区別はむずかしいのです。葉のある夏の時期に、区分けをするのを、宿題にしてきました。7 月 20 日に、李向東といっしょに、その作業に取り組みました。新来の事務局員、河本さんが記録してくれました。

この区画に、胸高直径 4.5cm 以上の樹木は、合計 71 本あります。そのうち、ナラは、59 本で

す。残りは、マンシュウボダイジュ（シナノキ属）、シラカンバ、アブラマツです。見直した結果は、モンゴリナラ 28 本、リョウトウナラ 25 本、カシワ 5 本でした。見落として、なにかわからないのが、ほかに 1 本。しろうとが、短い時間に調べた結果ですから、訂正の可能性があります。それにしても、モンゴリナラがこんなにあるとは、思いませんでした。リョウトウナラをしのいでいます。

管理棟のところから、いちばんうへの稜線まで、コンクリートの階段をつくりました。南天門、までです。私としては、コンクリートではなく、木の棒杭で、日本の散歩道にあるような、ああいう道にしてほしかったのですよ。ところが、それだと、たいへんに高くつくんですって。なにせ、木のないところですからね。コンクリートが、いちばん安いのだそう。そして、海拔 1,100m ほどのところで、水平な道を、南に伸ばしています。ここは斜面を削ってつくっただけの、1 人がやっと歩ける、細い道です。陰坡の調査枠は、それをかなり長く、歩きつめたところ。

李向東によると、コンクリートの道に近いところは、リョウトウナラが多いのだそう。南にいくにしたがって、モンゴリナラの割合が、高くなるそうです。でも、こんなふうに混じり合っていて、生えていますから、交雑している可能性も、あるでしょうね。モンゴリナラだけが生えているところからも、種子をとってきて、苗を育てていますので、将来、それとくらべてみるのも、おもしろいと思います。

## NO. 511 アンズはなんとか無事でした！ 2009. 08. 04

ことし 4 月末に、日本に帰国してからも、インターネットで、大同の天気予報を、ずっとみていました。日本のサイトでも、中国のサイトでも、2 週間くらい先まで、みることができます。気になっていたのは、最低気温。

昨年は、5 月も中旬になってから、-7 度にもなる日があって、渾源县呉城村のアンズは、壊滅的な打撃を受けました。4 月 20 日前後に、開花・受粉したあと、最低気温が、-4 度になると、凍って、実が落ちてしまいます。-2 度までなら、影響は大きくないそう。その時期の、気候の問題点は、日較差が大きいことです。4 月中旬以降、最高気温は 20 度以上になり、25 度を超えることもあります。アンズは開花します。そして、最低気温は、0 度近くまで下がる。呉城村は、大同市内よりは、海拔がかなり高いのです。市内が 0 度でも、あそこの気温はもっと下がります。

同じように、そのことを心配してくださったかたがあります。ありがとうございました。ところが、あれって、天気予報はあっても、実績の数字は、でないんですよ。最終的に、どうなったかが、わかりません。そして、大同の天気予報は、2 週間も先の日には雨のマークがつく

のに、近づくにつれて、晴のマークに変わり、実際に雨がふりません。そういうこともあるので、不安をぬぐうことはできません。大同事務所からの連絡では、だいじょうぶです、ことしはなんとかあったようです、ということでした。でも、そのあと、大同は深刻な早魃でしたからね。自分の目でたしかめないことには、安心できません。

7月25日、霊丘からの帰りに、短時間でしたが、呉城村に立ち寄りました。最初に、アンズ畑をみました。雨が降っていませんからね。葉の色に、ややムラがあります。でも、もちろん枯れてはいませんし、そう弱っているわけでもありません。アンズは、乾燥には、いたって強いのです。アンズの収穫期は7月15日前後ですから、収穫はすでに終わっています。どの木にも実はありません。しつこく探して、枝のかげに、数個を見つけました。ここのアンズは、種のなかの杏仁を目的とした仁用杏ですから、果肉はたいしたものではありません。実が小さくて、たくさんなり、種子が大きい。そのぶん果肉が薄くて、味もよくありません。商品作物でするので、目的によって、品種が特化しているわけです。

村の幹部が、アンズ畑まで、かけつけてくれました。話をききました。4月末から5月初旬にかけて、凍って実が落下したところも、やはりあったそうです。でも、1994年春に植えて、成木になっているところは、大きな被害はなかったそう。1畝（15畝が1ヘクタール）あたり、800元くらいの収入が確保できたそう。よかったですねえ、ホッとしました。

その反面で、トウモロコシ、アワ、キビなどは、早魃のために、収穫を期待できないそうです。大同の農村を回るなかで、あの「建国いらい最悪」と呼ばれた1999年や「百年に一度」といわれた2001年の大早魃と、ついつい比較して、みておりました。そして、あれほどひどくないな、と思っていたのです。ところが、その人によると、そうではないそう。2001年は、たしかに大早魃だったけど、あの年は、春に雨がふらなかったために、種を蒔くことができなかった。ことしは、春には雨がいったから、畑をたがやし、種を蒔いた。その後も、いろいろと手間をかけた。そして、夏になっても、雨がなく、収穫が期待できない。そのために、被害は、ことしのほうが大きい、ということです。

なるほど、私は、見た目の印象だけで、ものを言っておりました。じっさいに、農業にとりくんでいる人からすると、また、べつの見方があるわけです。私はいつも、「信じるのは自分の目だけ」などと言っていますが、それだけでは、だめなことは、いうまでもありません。多少でも、収穫がありそうなのは、ジャガイモ、マメだそう。

去年は、アンズがだめで、穀物の収穫はわりと順調でした。しかも食糧の生産には、政府の補助があるそう。アンズのばあいは、それがありません。だから、アンズの作付けをふやしてきた村の幹部は、頭が痛かったんですね。ことしはアンズがよかったので、ホッとしている度合いは、私の比ではないでしょう。

道路わきの農家の入口で、若い女性が、アンズからタネを取り出していました。そして、果肉のほうは道路の舗装面にならべて、干しています。これも売れるのだそう。「去年よりは、ずっといい！」とっていました。豊作がつづいてくれると、いいんですけどね。

## NO. 512 シラカンバの林 2009. 08. 18

ことし7月の中国滞在中に、河北省と山西省との省境付近、太行山のなかを見て回りました。同じようなルートを、何回も通っていますが、以前にくらべ、緑が濃くなっているのが、強い印象です。だいたいにおいて、河北省がわ、つまり太行山の東側は、以前から、緑が濃いですね。1つには、降水量が多いためでしょう。雨をもたらず雲は、海洋起源のものが多いようです。河北省がわで雨を降らせると、それで終わることが多い。山脈を越えて、山西省にくるのは、そのお余りで、ずっと少ない。

もう1つは、河北省のほうで、山西省にくらべ、経済的に、豊かなことです。山で緑が失われることの、最大の原因は、環境破壊と貧困の悪循環です。河北省のほうで、経済的に、早く離陸しています。そのぶん、緑が濃い、という面もあるでしょう。

人工的に植えたものもありますけど、自然に再生してきた森林もあります。自然林の中心になっているのは、シラカンバ（白樺 *Betula platyphylla*）です。地元の話では、そのほかにカバノキ科の喬木が、2種あるそう。ヤエガワカンバ（棘皮樺・黒樺 *B. davurica*）と、和名はわかりませんが、（紅樺 *B. albo-sinensis*）です。地元の話は、白樺、黒樺、紅樺と、呼んでいます。

チョウセンヤマナラシ（山楊 *Populus davidiana*）がいくらか、混じっています。こういう光景をみて、思い出しました。私たちがこの協力事業を開始したころ、内蒙古林業大学の先生から、「大同のあたりでは、パイオニアになるのは、白樺と山楊です」と、きいていたのです。でも、実際にそういう光景をみたのは、ずっとあとになってからのことでした。なにせ、自然に再生している森林なんて、みる機会が、ほんとになかったのです。

ちょっと離れたところからみると、うっそうと茂っているようにみえます。たとえば、谷をはさんだ反対側の斜面とか。ところが、林のなかにはいってみると、それほどでもありません。3~5mから、離れているばあいは10mもの、間隔があります。上をみると、どこでも空がみえます。シラカンバなんか、発芽したときは、ものすごい数でしょうから、その後、自然の力で、淘汰されていくのでしょうか。以下のブログに写真をおいています。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/e/147700ae5a8179cee91ea6a0879b9d96>

シラカンバの下に、灌木や草もけっこう生えています。代表的な灌木は、シモツケのなかま、

ウツギのなかま、といったところ。林床は、この時期でも落ち葉がけっこうたまり、その下は、まっ黒の森林土壌になっています。土をつくる、ということからいえば、やはり広葉樹だと、痛感します。

ふしぎなことに、ナラは、ほとんどみられませんでした。道路のすぐそばに、リョウトウナラの小さいものを、ほんの少し、みたくらい。

なんどもご紹介しているように、私たちの、南天門自然植物園の主役は、ナラです。それも3種類がありました。シナノキ、カエデなども、混じっています。そして、霊丘県の太行山のなかをみて回ったときも、ナラが主体のところ、多かったです。このちがいは、いったいなんでしょう？

思い当たったのは、標高のちがいです。今回、みてまわったところの標高は、たいてい1,600mを超えています。そのために、再生林の中心が、シラカンバになります。ナラが中心になっているのは、あくまで目見当ですが、1,100mから1,600mまでのところのよう。この地方では、シラカンバなどが高いところにあり、その下にナラが分布する、という関係でしょう。シラカンバと同じか、それより高いところには、カラマツ、トウヒなど、針葉樹があります。

1,000mから、2,000mくらいまで、連続的に森林が成立しているところがあれば、そこらの関係が、わかりやすいのしょうけど、なぜか、そういうところがみつかりません。私たちにとってもなじみの、大同県・陽高県・渾源県・広霊県の接するところにある、樺林背林場も、1,600m以上のところにあり、シラカンバを中心に、カラマツ、トウヒなどが混じっていますが、その下に、ナラがでてくるかといえ、それが、ないのです。低いところは、村から近いぶん、人による破壊が嚴重で、なかなか回復できない、ということなのでしょう。

そういうことからいっても、ナラが主体の自然林は、貴重だと思います。シラカンバの再生林よりも、ナラの林のほうが、ずっとすてきですよ。これまでみてきたように、標高による分布の違いでしょうから、ナラのほうがカンバよりいい、などといっても、意味はないのですが、それでも、私は、そういいたいのです。もちろん身びいきです。そして、シラカンバは、やはりパイオニアでしょ。その寿命は、そう長くありません。それにたいして、ナラは、極相林を構成する樹種で、主人公としての、風格がありますよ。バタバタしているだけで、パイオニアにもなれない私が、ナラに身を寄せたい気持ちを、わかってください。

## NO. 513 トネリコ物語 2009. 08. 27

大同で緑化をすすめるうえでの問題点のひとつは、ここの気候と土壌に適応する樹種が、とても少ないことです。なにせ、冬は零下30度、夏は35度以上、そして雨が少ない、といった

ふうに、植物にとって過酷な環境です。1種類でも増やすことを、こころがけてきました。

あるとき、雲崗石窟で、それまでみたことのない木を見つけました。といっても、もともと私は植物の門外漢で、知っている木が、そんなにあったわけではありません。大同の現場で最初にみて、中国名を、和名より先に覚えたもののほうが、多いくらいなのです。それは、白蠟樹と呼ばれていました。トネリコのなかまです。

北京にでたとき、この木が、たくさん街路樹になっていました。日本の街路樹は、無残なほど刈り込みますが、中国では、かなりの程度に、伸ばしっぱなしです。枝が大きく垂れ下がって、なかなかの風格。もうちょっと若い木は、丸く枝を広げて、姿が悪くありません。しめた！と思いました。大同で育つ木が、北京にたくさんあります。「北京でたくさん植えられている木だ」といえば、抵抗感なく、受け入れてくれるはずです。

そしたら、意外なことに、大同の街路樹の一部にも植えられていることがわかったのです。とても元気がよかった。しかし、その後、そのトネリコはほかの樹種に換えられましたが、理由は、わかりません。「とてもいい木だから、苗を育ててみよう」と私が行って、種を集めてもらいました。「試験的に」と、私はいったんですけど、いきなり何万本にもなってしまったんですね。発芽率がとても高いこともあって。

ところがこのトネリコ、育ちが早くありません。私の感覚では、そうでもないんですけど、大同で、それまで育てている広葉樹といえば、ポプラ、ヤナギ中心ですから、それに比べると、はるかに遅い。長いあいだ、苗畑を占領するわけです。そして、トネリコを育てているのは、大同では、私たちだけです。なにか、新しいものに挑戦することが、ぜひとも必要だと思うんですけど、それは、地元では知られていない、ということです。苗を買ってくれる人がいないんですね。自分たちの協力プロジェクトに植えるんですけど、量的に限界があります。

ボランティアツアーの人たちが環境林センターを訪れるとき、私は、トネリコの一本をつかんで、グニャーと弓なりに曲げます。弓なりどころか、先端が地面につかんばかりです。そして、手をはなす。ビューンと、もとに戻ります。まるでグラスファイバーのように、よくしないます。みんな、びっくりしますよ。日本では、以前はスキー板をつくっていました。野球のバットは、このトネリコのなかまです。中国では、「白蠟棍」といって、伝統武術の種目になっています。

そのようすをみたあと、大同事務所のスタッフが、「トネリコは高見がすすめたから植えたんだ」と、私にいいます。毎回のように。その声と表情が、非難がましいんですね。私は試験的に、といったんですけど、それでも、すすめたのは事実です。そういうわけで、私は、肩身がせまかったんですよ。

去年あたりから、ちがう風が吹いてきました。やり手の市長がやってきて、大同の市街地の  
大改造にとりこんでいます。道路を拡幅し、大きな街路樹を、たくさん植えたのです。マツも  
ありますが、めだつのはトネリコです。樹高 7~8m、胸高直径 20cm 以上という、大きな木  
を、東北から運んできたそう。私たちの苗圃のトネリコは、サイズがたりないんですね。とに  
かく、「越大越好!」、大きければ大きいほどいい、の世界ですから。

でも、そのおかげで、「トネリコはいい木だ」という評価が確定したのです。それにともなっ  
て、私たちの苗圃の苗が大きなものから、売れていったり、引き合いがあったりするようにな  
りました。あのトネリコが、どんどんでていってくれると環境林センターの経営もラクになる  
んですけど。

北京あたりで植えられているトネリコは、なぜか、アメリカナです。美国白蠟樹 (*Fraxinus  
americana* L.) 私たちが育てているのも、それです。それじゃあ、あんまりおもしろくない。  
シネンシスもあるんですよ。

○ (*Fraxinus chinensis* Roxb.) ものの本には、中国種のほうが、生育はいいけれども、米  
国種のほうが、乾燥にはつよい、と書かれています。

北京の苗圃で、その中国種をみつけたんですけど、運搬のつごうで、たった3本だけ買って、  
南天門自然植物園に植えました。そして一昨年、新疆ウイグル自治区のウルムチにいきました。  
街路樹に、トネリコがたくさん植えられています。ほとんどそう、とっていいくらい。  
新疆大学で講演したんですけど、キャンパスにもたくさん植えられ、シネンシスの表示があり  
ました。で、先生に、種を送ってくれるよう頼んだところ、きちんと送っていただいたんです  
ね。環境林センターで育てて、いま2年目になっています。

## NO. 514 木炭を活かしてつかう 2009. 09. 25

前後の関係からして、1996年の春か夏のことだと思います。写真撮影のために、大同に通っ  
ていたカメラマンの橋本紘二さんが、農村から帰ってきて、私にいいました。「炭があったよ、  
あれはつかえるよ!」「えっ、炭? 石炭じゃないの?」「いや、そうじゃない。木炭だよ。炭  
焼きの窯が、ズラッとやらんでた」。そんなこといわれたって、木のないところで、どうして  
木炭を焼けるのよ?

にわかには信じられなかったんですけど、日本でも、農業と農村を専門に撮影し、『現代農業』  
の表紙やグラビアページで写真を発表しているカメラマンですからね。自分でも、炭焼きにあ  
こがれてる人なんですよ。木炭と石炭を、まちがえるはずがない。大同県の、工場だというの  
です。

何日かおいて、そこの工場にでかけました。大同県周土庄鎮にある、シリコン精製工場です。いまからいうと、白登苗圃とか、実験果樹園・かけはしの森を建設している、あそこの鎮です。工場の責任者が、たいへん親切にしてくれました。というのも、日本の商社をつうじて、製品のシリコンを、日本に輸出したい目論見があったのです。工場を訪れたという、商社マンの名刺を、何枚もみせてくれました。日本人と関係をつくるのが、なにかしら、有利に働く、かもしれない、と考えてくれたんですね。

たしかに、炭焼き窯でした。原料は、この鎮にもたくさんある、あの小老樹のポプラです。1950年代から、桑干河の流域を中心に、大緑化運動が展開され、たくさんの小葉楊（*Populus simonii Carr.*）を植えたのです。ところが、水不足その他のために、育ちませんでした。そのポプラを伐って、木炭に焼いています。ポプラなんて、成長が速く、やわらかい木ですから、ろくな炭になりそうにありません。そこは伸び悩んで、小老樹になったくらいで、年輪幅もすごく狭いので、木炭にするには、よかったのかもしれない。

工場のかたすみの、炭焼き窯の横に、粉状の炭が、小山をなしています。「役に立たない、不要のごみだから、勝手にもって行ってくれ！」と工場の責任者はいいます。私たちにとっては、宝の山です。でも、なにせ、ここは工場ですからね。どういうつかわれ方をした炭かが、気になります。化学的、その他の汚染をされていたら、つかうわけにはいきません。

木炭そのものは、シリコン精製の最終工程で、還元剤としてつかうのだそうです。「宝の山」をなしているのは、樹皮の部分の炭で、役に立たないので、捨ておいているそう。ということは、まったく未使用の木炭ですから、安心です。しかも、極端な水不足で育ったポプラのために、コルク層が、ずいぶん厚くなっています。不要な、樹皮の割合が、大きいわけですよ。やったあ！

その直後から、環境林センターのトラックが、工場とのあいだを往復しました。場所が、比較的になかったのも、幸いでした。そのころは、石炭輸送だってなんだって、積み荷にシートをかけるなんて、しませんでしたからね。石炭とちがって、木炭（しかも、そのクズの粉炭）は、軽いでしょ。荷台に、山積みしてくるわけですよ。でも、重量的には、過積載になるわけがない。黒煙のように、もくもくと、黒い炭をまき散らしながら帰ってくるのには、ぎょうてんしましたよ。

これが、ものすごく役に立ちました。黄土高原は、年間平均 400mm と、雨が少ないのです。旱魃の年は、ずっと少なくなりますし、このあいだも書いたように、西暦の奇数年は、いい年がありません。技術者も、農民も、水不足が頭を離れません。苗木を植えるとき、土をかけて、水をやってから、足で、しっかり踏み固めるんですね。根と土とを密着させ、水の蒸発を抑えるというのです。

私が撮影したビデオで、そのようすをみて、立花吉茂先生は、「高見さん、これじゃあ、着かないよ。日干しレンガに苗を植えているようなもので、根が窒息して枯れているんだよ」と、いいました。黄土は粒子がきわめて小さいので、その土を水で練ったら、空気がまったくなくなるんですね。それは、環境林センターの、鉢植えの植物もいっしょです。あの土をつめて、花や観葉植物の苗を植えて、手で、ギュウギュウ、押しかためる。

1996年夏のことです。くわしい事情は省きますけど、地元の技術者の要請で、サクラの種が、大同に届きました。たまたま、そのとき、立花先生が、大同にきたんですね。自分で土を配合して、その種を蒔いてくれました。あの粉炭や、軽石を、配合してくれたのです。

翌年の春、そのサクラが発芽し、かなり伸びていました。混み合ってきますから、ポットに分けないといけません。作業をはじめてすぐ、私はびっくりして、技術者たちを、呼び集めました。彼らは、もっとびっくりしました。「根の発達がとてもいい」というのです。そして、その根が、粉炭や軽石をつかんで、離さないんですね。根は、自分が必要なものところに、伸びていくんですよ。このことがきっかけで、技術をめぐる問題について、私たちと中国側とで、共通の理解がはじめて生まれたと思います。

それから、せっせと、あの木炭クズを運んでは、温室や、ビニールハウス、そして苗畑に投入しました。その効果は、じっさいにそれをやった人たちが、熟知しています。なにせ、植物の根は、木炭にむかって、まっすぐに伸びますからね。

工場のほうでは、最初は、不要なごみを持ち去ってくれて、ありがたい、ということでした。でも、くりかえし、こちらが通ううちに、なにか、価値あるものじゃないか、と思いはじめたようです。で、お返しに、環境林センターでとれる野菜などを、届けるようにしました。そのうちに、私たち以外の人も、取りにいくようになったようです。すると、トラック一台についていくら、というふうに値段がつくようになりました。まあ、これはしかたがありません。やがて、あの工場が、閉鎖されてしまいました。有用なことはわかっているけど、木炭をつかうことは、あきらめざるをえなかったのです。

## NO. 515 花眼 2009. 09. 30

木炭の話はつづきますけど、それはちょっと待ってください。前号の 514 号と、そのまえの 513 号とのあいだが、およそ 1 か月あきました。このメルマガをはじめて、10 年半ですけど、なかったことです。親しい友人からは、「届かないけど、アドレス帳を整理したの？」といわれました。いろいろ理由がないわけじゃないけど、ようするに、書けなかった、ということです。

「なにかをはじめると、周囲のことが、まったく気にならないんだから…」と、つれあいが、

いつも私を非難します。自分では、そうでもないと思っているんですけど、自分で自覚がないくらい、ひどい、ともいえるよう。集中力がある、と言い換えると、いいことのように思えてきます。でも、こういう活動には、むかない性格だと思いますよ。

その集中力が、切れたのです。この黄土高原だより、平均で2000字くらいですけど、たいていは30分以内で書いて、そのあとちょっと手直し。その30分、集中力を持続できなくなったのです。途中でほっぽりだす。そうすると、生煮えの飯といっしょで、炊きなおしたって、読んでもらえるものには、なりません。じゃあ、集中力がなくなって、気配りの人になれたかという、そんなつごうのいいことは、ありっこない。

大同滞在中、カウンターパートの武春珍所長の外交辞令。「高見さんは、最近ますます元気です。毎日、外に出て活動しています。以前は、部屋にこもることもあったのに」。いえ、そうじゃないのです。ものを書くしごとができないから、外にでている。

年齢のせい？ つかれ？ 飲みすぎ？ うつ？ そのどれでもありえます。いずれにしろ、こまったこと。先週になって、ふ、と気づいたんですよ。パソコンにむかっているとき、本を読んでいるとき、それがとくにひどい。ひょっとして、眼じゃないかと。

高校卒業まで、私の視力には問題がなかったのです。大学にはいって、学生寮の委員なんかをやって、暗いところで、ガリ版を切っているうちに、近視になりました。それくらい、メガネをかけるようになったんですけど、パソコンのディスプレイあたりが、むずかしい距離です。ふつうの近視用のメガネではみえない。裸眼では、やっぱりみにくい。で、中近用のメガネのお世話になりだしました。度のゆるい、近視用のメガネ。

何年かまえから、その中近用のメガネが、必要なくなりました。裸眼で、みえるのです。老眼がすすんできた、ということなんでしょうけど、メガネがいなくなったのは、ありがたいこと、そう思っていました。地図なんかの、特別小さな文字、それからデザイン主体の、名刺の特別小さな文字は、困りますけど、一般の書籍も、新聞も、メガネをはずしさえすれば、裸眼でちゃんと読めたのです。

読める、というのがクセモノだったようです。読めなければ、もっと早く、気がついたでしょう。先週末、そのことに気づいて、眼科に走りました。老眼がすすんでおり、乱視もかなりきついそう。翌日、できあがったメガネをつかうと、なるほど、ディスプレイの文字も、はっきりみえます。ためしに、メガネをはずすと、チラチラ、チラチラ。そのちがいがはっきりわかります。これまでは、無意識のうちに、ムリをしていたのでしょうか。それを、集中力の問題、と自分で思い込んでいた。

みえるのはいいんですけど、2つのメガネを、そのたびにかけ替えるのは、不便なことです。

いっそこれからは、老眼用のメガネを主体にして、外を歩くときは、メガネなしにいたしましょうか。くるまの運転は、もちろんかけますけど。そうすると、周囲のことが、いっそう気にならなくなるでしょうね。知り合いのかたと、道ですれちがって、気がつかなくても、そういう事情ですので、ごかんべんください。

私も、まもなく 62 歳。なぜそういうかは知りませんが、老眼を中国語で花眼といいます。同世代のかたは、ご用心ください。

つくば大学の同窓会を母体とする社団法人「茗溪会」から、昨年、なぜか、この私が表彰を受けました。その縁で、東京でお話する機会をいただきました。大同での緑化協力の経過と最近のようす、これからの計画などをお話ししたいと思います。ご参加いただけると、さいわいです。

#### 茗溪会の公開講座

「黄色い大地に緑を」(高見邦雄)

2009 年 10 月 10 日 (土) 14 時~15 時 30 分 茗溪会館 (東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」下車 3 分) <http://www.meikei.or.jp/>

参加いただけるかたは、上記 HP から茗溪会事務局もしくは GEN 事務所までご連絡ください。

### NO. 516 木炭を活かしてつかう (2) 2009. 10. 07

植物を育てるうえでの、木炭の効用は自分で体験しましたが、大同では、そもそも材料がありません。山に木がないんですから。あきらめていました。ところが、昨年のことですけど、環境林センターの中央の道路の西側に、ヤナギの街路樹がありました。これが伸びすぎて、高圧線にかかって、危なくなりました。これまで何度も切っていますが、すぐに伸びます。思い切って、高さ 1m くらいのところまで、切り詰めることになりました。なんだ、苗畑の道路の並木なんか……とお思いでしょうけど、あの道は 820m もありますから、200 本近くあるでしょう。切った幹や枝を、2 つの温室のあいだに、積み上げていました。かなりの量です。

そのほかにも、たとえば、アズの苗づくりをするときに、接ぎ木をします。地表から 5cm ほどのところで切って、優良品種の枝を 1 芽、割り接ぎするんですけど、切り取った幹もかなりの量になります。そんなふうに、苗畑で、材料がでできます。これを利用しないのは、もったいない。

ことしの春、樹木医のみなさんが、大同にこられたんですけど、そのなかに、小川眞さん (大阪工業大学客員教授、GEN 顧問) など、炭焼きと、その利用につうじた人がいらっしやるんですね。で、炭焼きを指導してもらうことにしたのです。とりあえず、伏せ焼きをすることになり

ました。設備と技術を、さほど必要としません。

3月末は、まだ土が凍結していて、穴を掘るのもたいへん。このときも、日立建機の中国法人から提供されたパワーショベルが大活躍しました。ところが、みなさん、慣れない土地でしょ。それから、パワーショベルを運転するスペースの関係で、空気の取り入れ口が、風向きと逆になっちゃったのです。それから、煙突も、小さすぎた。そのために、第1回の炭焼きは、火が途中で消えてしまったそう。そのころ、私たちは、べつの場所に移動していました。

そのあと、地元の人たちが、いろいろ工夫して、焼き直したんですよ。そしたら、こんどは燃やしすぎて、灰になってしまった。また挑戦して、3度目の正直で、炭が焼けたんですけど、やはり、めんどうではあります。小川さんの話では、日本に無煙炭化器というかんたんな装置があって、シロウトでも失敗なく、炭が焼けるということです。

私は、自分でも、乗せられやすい性格だと思います。中国から帰ってすぐに、いちばん小さいサイズのものを、自分で1台、購入しました。そのあとわかったことは、私が乗せられやすいだけでなく、小川さんが、乗せることの名人だということです。小川さんのすすめで、それを買ったという人が、何人もいたのです。そして、「ものすごく高温になるから、家のそばで焼いたりしたら、家まで炭になるよ」と注意されました。

ことしの8月末、専門家のみなさんが大同を訪れるときに、この無煙炭化器を持ち込みました。フライパンから、柄と底を取り除いたようなかたちの、ステンレス製。直径1mのものにしたので、飛行機の積み込みサイズを超えているため、いろんなかたの協力を求めました。環境林センターで、あのヤナギを炭にすることにしたのです。私のものはまだ未使用で、このときが初体験。

つごう3回、炭を焼きました。最初は小さい枝などを燃やし、だんだん太い木をいれていきます。すごい勢いで燃えるんですね。そばにいても熱い、熱い！こんなに勢いよく燃やして、ほんとに炭が残るのでしょうか？おもしろかったのは、私を含めて、高齢の人がはりきるんですね。こどものころの火遊びの経験が、よみがえるのでしょうか。いささか興奮ぎみです。まあ、この年になれば、オネショの心配はないでしょうけど。

直径1mの炭化器は、説明書によると容量が144リットルですけど、それだけの炭を焼くのに、およそ1時間かかりました。水をかけて火を消せば、すぐにまた焼けますので、うまくすると、1日に5回は焼けそう。ただ、夏の時期は、熱くて、たいへんです。冬の農閑期に焼くのがいいでしょう。なかなかいい炭です。ヤナギの枝など、約80kgを材料にして、27.2kgの炭が焼けましたので、歩留まりは34%。できすぎのようにも思えますけど、ヤナギの材が完全に乾いていましたから、そのせいでしょう。

話はさかのぼりますけど、マツの育苗に菌根菌をつかう方法を、小川さんに大同で指導してもらったのは、1997年4月のことです。マツと共生する菌根菌は、キノコのなかまです。地元の松林に生える、アマタケやチチアワタケ、ヌメリイグチなどを利用しました。そうすると、ふつうに育てたものにくらべ、乾燥重量で2倍に育ちました。4月末に仕込んで、9月初めには結果がでましたので、わずか4か月です。その翌春から、実用化にとりくみました。采涼山プロジェクトの成功には、苗木にも秘密があったのです。

2007年6月の会員総会で、小川さんに記念講演をたのみました。「菌根と炭で地球温暖化に立ち向かおう」というテーマでした。菌根菌と木炭の効用について、認識を深めたんですけど、いかんせん、大同では、炭の材料がネックだったのです。ところが、こうやって、材料がみつかりはじめました。地元の人たちも、ずいぶん努力して、緑化をすすめたんですけど、やがて、枝打ちや、間伐が必要になります。それをしなかったら、山は、また荒れます。枝打ち、間伐などの作業を、無理なくすすめるには、枝打ち材や間伐材を、価値あるものにするのがいいでしょう。そこから、新たなテーマが浮かんできたのです。(つづく)

#### NO. 517 木炭を活かしてつかう (3) 2009. 10. 22

木炭ではないんですけど、こういう経験があります。1997年夏だったと思います。渾源县照壁村で、アンズを植えるときのこと。立花吉茂代表が、そのとき参加していました。粒子の小さな黄土に、苗を植えるとき、土をかけ、水をやってから、足で踏み固めたりしたら、日干しレンガに苗を植えるようなもので、根が窒息して、枯れてしまう、ということです。その逆に、砂などをいれて、通気性を改善するのがいい、というのが立花さんの意見でした。

現場の技術者に、そのことを何度いっても、きいてくれません。よく踏んで、根と土とを密着させないといけないし、砂をいれたりしたら、すぐに水が蒸発して、苗は枯れてしまう、と彼らは信じているんですよ。とにかく、水、水、水です。アンズを植える場所のすぐ近くに、石炭を燃やしたあとのカスが捨ててありました。木炭を燃やすと、灰になりますけど、石炭のばあいは、多孔質の固形のカスが残ります。立花先生がそれをみつけて、1本につき、スコップ1杯ずつ、植え穴に加えるように、指示しました。土と混ぜるのではなく、穴の一か所に、かためていれました。そして、けっして足で踏まないように、注意したのです。比較のために、半分はそのようにし、半分は在来のやりかたにしました。

踏まないで、といったんですけど、習慣になってますから、踏むんですね。で、私は、「しっかり踏んでくれ！そのかわり、苗木から1m以上離れたところを」といったのです。通訳されたとたんに、中国人のあいだで、笑い声があがりました。表現は、ちょっとひねって、刺激があるほうが、よく伝わるものです。立花代表は、「高見さん、ほんとにうまいな」といって、ほめてくれました。

1年後に、その現場を訪れたとき、私は、くるまが止まらないうちに、ドアをあけ、走り出していました。結果を、早く知りたかったからです。活着率が、まるでちがいます。伸びも、葉の数も、ずっといいのです。それぞれから、1本ずつ掘りおこして、根のようすを観察しました。石炭ガラをいれたものは、太い根が、まっすぐに石炭ガラに伸び、それ以外の方向にも、たくさんでています。従来のやりかたで植えたものは、枯れるものも多いし、根の出方がよくありません。

ここまで差がつくとは、私も、思っていませんでした。大同事務所にきたばかりの武春珍は、「ミンシェン！ ミンシェン！」と、くりかえしました。「明顕！ 明顕！」ですね。あきらかにちがう、というわけですよ。でも、技術者たちは、まだ、「石炭ガラには、肥料分があるのかもしれない」といっていました。知識や経験があるほうが、認識が遅れるのはよくあることです。砂をつかって、同じ実験をし、やっと納得してもらいました。それにしても、時間のかかることです。

小川真さんは、木炭と尿尿、あるいは木炭と化学肥料とを混合した「炭肥」を利用することで、肥料効果を高め、持続させる、省肥料・多収穫の栽培法を提唱しています。バイオチャーといって、国際的に、効果がたしかめられてきたそう。大同では、実験を開始したばかりで、結果をみてみせんけれども、成功するものと、私は信じています。いま述べた経験があるからです。アンズの太い根が、まっすぐに石炭ガラに伸びていました。根は、自分のほしいものを求めて、伸びるんですね。あの環境では、酸素です。そして、必要なものを手に入れると、その力で生き、ほかの根の生育を促すわけです。

アンズであれ、その他の作物、植物であれ、根は木炭にむかって、伸びるでしょう。そして、そこに肥料分があれば、吸収効率がいいはず。炭は、肥料分を吸着して、長くその場にとどめるでしょう。

それにしても、小川さんのやりかたには、驚きました。アンズの根元に穴を掘り、細かく砕いた木炭を埋めます。根の先端がくるあたりに2か所。このときは、化学肥料の磷肥を与えたんですけど、1か所にひとつまみ、1本あたり10gほど。これで効果があれば、たしかにすごい！ 来年夏には、その結果をみることができるようでしょう。それ以上に重要なのが、木炭と菌根菌の関係なんですけど、それについては、機会をあらためます。

## NO. 518 ヒツジ飼いの話を聞く 2009. 11. 05

黄土高原や太行山の植生が貧しくなっている原因の1つに、ヒツジやヤギの放牧があります。とくに春先、草の芽がでるかでないかのときから、かじりますので、草もだんだんと貧弱にな

るんですね。もうちょっと待って、草がちゃんと伸びてから食べるのなら、問題も少ないはず  
です。あるていど、森林がそだって、林間放牧ができるようになればいいんですけどね。これ  
も悪循環のひとつでしょう。

ですから、いつもは、ヤギやヒツジの放牧をみるたびに、カリカリしてしまいます。陽高県  
のある村で、せっかく植えたアンズに、ウシがとりついているのをみて、小石をもって走った  
こともありました。

ところで、大同の名物に、ヒツジのシャブシャブがあります。寒くなると、とくにおいしい。  
緑化を考えると、ヒツジはほんとに憎らしいんですけど、食べる時は、大歓迎なんです  
ね。私なんか、ほんとにいいかげんなものです。

ことしの7月、さる山中で、ヒツジ飼いの一家に話をききました。生態移民ということで、  
ふもとの村に引っ越しをしたんですけど、春から夏にかけては、もとの村に戻って、ヒツジを  
飼っています。電気はありませんし、水も谷川の水。家はかなりのあばら家で、夏だから過ご  
せます。あたりじゅうに、分厚くヒツジの糞がたまり、きついアンモニア臭がして、慣れない  
私は、目がショボショボしてきます。歩きだしたばかりの、小さなこどももいました。

3軒ほどがそうしていて、飼っているヒツジはぜんぶで200頭ほど。ここの草はハーブが多  
いので、それをエサにしているヒツジは、肉に臭みがなく、うまいので有名だそう。一般のヒ  
ツジより、ずっといい値で売れるといいます。そのために、ここで飼われているのは200頭ほ  
どなのに、売られているのは、その何倍もあるそう。

冬になると、移った村の家に戻ります。そこでは、それだけのヒツジを飼うことはできませ  
ん。冬までに大半のヒツジを売って、40頭ほどを残すそう。それを親にして、春に子を生まれ  
させます。それだけではもとの数になりませんから、子ヒツジを買うこともするのでしょ  
う。

難儀なのは、冬のあいだのエサです。たいていは、トウモロコシの葉と茎を食べさせるそう。  
トウモロコシのできがよかった年は、それをタダでもらうことができるそう。早魃などで、  
できの悪かった年は、お金をだして買わないといけない。ことしのように、厳しい早魃の年にな  
ると、トウモロコシの茎や葉の値段も、安くはないそう。乳牛を買われるようになったので、  
それとの競合もあります。夏のころから、そのことを心配していました。

そういう話をきくと、私はすぐにぐらついてしまいます。ヒツジ飼いはほんとうにたいへん  
なんですよ。つい同情してしまいます。なんとか、この人たちも、安定した生活が実現するよ  
う願わずにはいられません。

NO. 519 李向東の話 (1) 2009. 12. 17

靈丘県の“南天門”自然植物園のヌシが李向東だ。私の目には、とても変わった人物にみえる。どういう生い立ちで、このような人間ができたのか、興味しんしんだった。この12月、大同を訪れたとき、李向東が訪ねてきてくれたので、突然のインタビューをはじめた。通訳は王萍に頼んだ。

私が生まれたのは1953年、農曆（旧暦）の12月6日です。陽暦の何月何日になるか、私は知りません（注・換算表で調べると1954年1月10日だった）。生まれたのは、靈丘県下関郷楊庄村です。遠田先生、高見さんとナラを探しにいったことがあるでしょ、あの村です。

両親は農民で、私は5人きょうだいの長男です。弟は靈丘の県城で教師をしています。妹が3人いて、上の妹は、大同の燕子山炭鉱にいます。主婦です。2番目の妹は県城で教師をしています。高見さんにあげた、あの本を書いた妹です。下の妹も県城にいて、自営業です。

8歳のときに、小学校にはいり、小学校を卒業するまで、ずっと村にいました。そのころの小学校は4年生まででした。小学校の卒業が、プロレタリア文化大革命がはじまった年で、その4年間だけが、勉強らしい勉強をしたときです。国語と数学だけを勉強しました。ですから、いまのしごとをするうえで、とても困難を感じています。やんちゃだった、と思います。でも、それほど極端じゃなかった。

郷政府のある下関村で初級中学に進みましたが、文革のために、授業はありませんでした。3年で卒業し、その後、高級中学に進みました。入学試験はありましたが、形ばかりです。同級生のなかには、大学に進学したものもいますけど、このときも私はあまり勉強をしませんでした。学校は教科書は配っただけで、教えてはくれません。教科書を自習しました。物理、歴史、地理、数学、漢語などです。2年間ですから、1974年に卒業したことになります。

そのあと、2年ほど、蚕の関係のアルバイトをしました。靈丘県には、解放後、優良品種の蚕の種（卵）を生産する工場があり、養蚕の歴史は長かったのです。でも、やり方はよくありませんでした。リョウトウナラなんかの木を1メートルほどの高さで切り、そこから若い枝を萌芽させ、その葉を蚕のエサにしました。こういうやり方が、木にとっていいわけがありません。長続きはしませんでした。このときが、私にとって、樹木との最初の出会いです。

1976年に、靈丘、大同、陽高の各県で、果樹技術者養成の制度ができ、それぞれ10名の募集がありました。私もその試験を受け、靈丘県蚕桑果樹工作ステーションに採用されました。賃金は月に36円で、高くはありません。大卒の専門の技術者と組んで、現場で勉強しながら、果樹農家を指導するわけです。専門の技術者を補助する、農民技術者です。

そのころの霊丘県には 19 の郷があり、農民技術者は 10 人ですから、1 人が 2 つの郷を担当しました。私が受け持ったのは、紅石楞と上寨です。農民技術者は、そのように郷に固定されますが、専門の技術者は、ときどき交替していました。

私の上の娘は 29 歳ですから、結婚して 30 年以上になります。そのしごとについては、もう結婚していました。相手は、同じ村の幼なじみで、1 歳年下です。結婚してからも、生まれ故郷の楊庄村に家がありました。

農民技術者になったあと、私には理想がありました。ちゃんとしたモデルになる村をつくることです。最初にいった村は、上寨鎮の劉庄村です。村の幹部とうまくいかなかったのが、ここはあきらめました。つぎにいったのが、紅石楞郷の上北泉村です。1978 年よりあとです。農家に泊り込んで、果樹の指導をするわけですね。各家を転々として。農民と同じものを食べ、同じ家に住んでいました。つれあいは楊庄村で暮らしており、私は 1 か月に 1 回くらい、帰っていました。自転車です。「環球」という自転車を買ったんですね。(注・地図で距離を調べると、片道 40km 前後になる)。

その当時、この一帯で、クルミを栽培できるのは、霊丘県の南山区だけでした。クルミを栽培しようということで、上北泉村を選んだわけです。クルミは生育が速く、3 年目には実がなりますので、みんな積極的にとりくみました。その後、樹種をふやし、最終的には 14 種類になりました。クルミ、モモ、リンゴ、ナシ、カキ、アンズ、スモモ、サンザシ、ナツメ、ブドウ、サンショウなどです。いちばん成功したのはモモでしょう。リンゴは腐爛病が発生してだめでした。この地方では、この病気を抑えられません。農民の積極性もなくなります。

上北泉村に鄭海水という党書記がいました。いまも彼は党書記です。年齢が同じくらいで、なかよくなりました。親しい関係になったので、「おくさんと呼び寄せ、自分たちの村に住んだらどうか、戸籍も移せ」と言ってくれました。家は自分で設計し、この村に建てました。そして、1998 年に住居を上寨に移すまで、上北泉村で暮らしたのです。

村の青年たちで、林業科技小組がつくられました。最初に果樹を植えたのは、いまはポプラが植わっているところで、唐河の川岸です。それから、あの村には水力発電用の水路がありますけど、水路のうしろの谷に、少しだけサンザシをうえました。水路の手前には、平らな台地が 2 つあります。西側の台地は、主にモモです。東の台地には、ナシ、ナツメ、スモモ、リンゴなどを植えました。村の指導者や私なんか、いい成績をあげたので、郷の人たち、県の人たちから、高い評価をもらいました。

私の戸籍は、農村戸籍です。都市戸籍を買わないかという話もあったのですが、そうしませんでした。上北泉村に戸籍を移したので、5 畝 (33 a) の畑をもらいました。そこでブドウ、ナ

シ、リンゴ、モモなどを栽培して、収入をえるようになりました。1年に2万元を超えましたので、国からもらっている賃金を大幅に上回ったのです。村からはもらっていません。县城の市場で売ったり、道路のわきで売ったりしました。私は栽培するだけで、販売の任務は妻がおいました。わりと上手に売ったのです。美人だから？関係ないとはいえないでしょうけど(笑い)。

ほかの村も回っていたんですよ。上寨鎮では、24か所の果樹園を担当していました。大きな村には、たいいて果樹園があります。自転車で回っていました。環境林センターの技術者、王君祥とは、そのころ知り合ったのです。彼は、上寨から2里(1km)ほどの新建村の出身です。

8年前に、私は内部退職になりました。農民技術者は、みなそうだったのです。組織の人数が多すぎるので、一部の人が早めに退職し、そのかわりに賃金は保障されるのです。最初は36元でしたが、その後、だんだんと昇給し、いまでは2000元近くになっています。定年になるまで、それはつづきます。(つづく)

## NO. 520 李向東の話 (2) 2009. 12. 24

前回につづいて李向東の話です。今回は、私たちと知り合った経緯、植物園づくりのことなどです。

日本の緑の地球ネットワークと関係をもつようになったのは、共産主義青年団の活動を通じてです。そのころ、私もまだ若かったので、共青团の活動に参加していました。靈丘県の共青团書記に、葛徳軍がいました。彼が、緑の地球ネットワークの活動に関係していたんですね。

高見さんに最初にあったのは、1994年の秋だったでしょうか。ブドウのなる季節だったのを、覚えています。葛徳軍に呼ばれて、上北泉村にいったのです。高見さんと、もう1人の日本人がきました(注・竹中隆さんのことです)。葛徳軍が私を呼んだのは、みなさんに紹介するためでした。

思い出したのですが、1994年春に、みなさんが下寨北村で最初に果樹園をつくる時、あそこに私もいました。ですから、あったのは、そのときが最初ですね。その翌年でしたが、三山村でも果樹園をつくることになったとき、手伝ってくれと、葛徳軍に言われました。協力団の人たちもきており、植え方などを指導したのです。この活動に実質的に参加したのは、そのときが最初です。

祁学峰書記とも、そのときに知り合いました。彼はみなさんといっしょに毎回、きていたので、親しくなりました。1997年だったと思いますが、祁書記が、植物園をつくりたいので、あなたがそれをやってくれ、と私に話しました(注・祁学峰はそのとき共青团大同市委員会の

書記でした。いまは城区の区長です)。

(いくらか長い注)

1996年夏のこと、立花吉茂代表がワーキングツアーに参加して、霊丘県にもやってきた。上北泉村の果樹園をみて、私に「これをやっている男はできるよ。植物のことをわかっている。このプロジェクトのために、引き抜いたらいい」と言われた。人物をみないで、その作品をみて、判断されたのだ。そのことを私は覚えていて、立花代表の発案ではじまる“植物園”を霊丘にもっていこうと考えたのだった。

それから候補地探しをはじめたのです。十数か所を探し、7か所に絞り込みました。その7か所は、遠田先生、高見さんもいっしょに見ました。そのうちの数か所には立花先生もいきました。

碓氷山の自然林も、そのときにみつけたのです。この山のふもとは、いったことがあります。高いところはいったことがありません。関心もなかったのです。ふもとに寺があり、水もあります。ここに植物園をつくれれば、水をつかって灌水できるので、いいんじゃないかと思ったのです。アブラマツ、カラマツ、そしていくつかの灌木が生えていました。でも、その山のうえに、あのようにいい森林があるとは思っていませんでした。

山の中ほどに、農家があります。そこで話をしていたら、上のほうにもっといい森林があるというので、いってみて、あの自然林にであいました。翌年、高見さんがきたとき、その話をしました。いっしょに行くことにしたのですが、あのルートでいくのは私もはじめてで、距離がわからなかったのです(注・そのとき私たちはえんえんと引き回され、目的地にたどりついたのは、3回目の挑戦のときだった)。最初からあの森林を知っていたら、ほかの場所を探さなかったでしょう。

私たちの南天門自然植物園も、遠くない将来、あの碓氷山に追いつきますよ。あそこのものより、ずっと成長が速いのです。植物園にたいする感情は、だんだん深まっています。木を植えて育てるのは、子供を育てるのといっしょですよ。夏は緑におおわれていますから、上のほうははっきりみえませんが、いまの時期は、葉がないので、木の姿がはっきりみえます。下からみてわかるのは、高さ1メートル以上の木です。あるものは4メートルを超えています。アブラマツ、リョウトウナラ、シラカンバなど、いろいろです(私「えっ、4m? 10m以上の木があるじゃない」)。4メートルというのは、自分で苗をつくって、植えたものことです。そりゃあ、やっぱり、自分で植えたもののほうが、かわいいですね。

面積は1,300 ムー(86ha)ですけど、ちょっと小さかったですね。そのなかでも、利用できる土地が少ない。とくに苗を育てる場所が足りない。たくさん苗をつくりたいんですけど、それだけの面積がないんです。なんとか、1,000種類を育てたいと思います。努力すれば、ぜっ

たいにふやせると思います。ことしは 60 種類、去年は 115 種類の種を集めました。去年は北京、内蒙古、河北省などで種を集めました。ことしは赤峰と承德にいきました。赤峰は小さいんですけど、植物園がありました。ここにはシナノキの種類が多く、自分たちのところのないシナノキを 7 種類集めました。承德はあまりありませんでした。合計で 60 種類です。

ことしの秋、日本の専門家がきて、植物園でキノコを集めました。あとき 38 種類がみつかりました。その後、私は 7 種類の新しいものをみつけました。ていねいに調べると、50 種類を超えたいと思います。キノコから胞子液をつくり、苗にかけました。

樹木に名前をつけるなど、これからの仕事もたくさんあります。あるものは植え終えました。灌木性のトネリコ（小葉白蠟樹）、野生のモモ（山桃）などはもういりません。ナラの苗は 6～7 千本ありますが、これはみんな植えます。ナラは 10 種類以上になりました。イチヨウもありますけど、生育ぶりはよくありません。直径 5 cm ほどです。周金の家にも 1 本植えましたし、上北泉の党書記の家にも 1 本植えたんですけど、それらは直径 10cm くらいになっています。彼らの家は海拔が低いので、その分、気温が高くて、育ちがいいのでしょう。

ナラの生育がいいのは、靈丘県の南山区ですね。植物園のあるあたりが中心です。私たちが回ったなかでは、内蒙古の赤峰市の南にナラの林がありました。海拔は 1,000m 以上のところで、リョウトウナラが多い。

ナラの太いものは多くないですね。下関には太いカシワがあります。去年の夏、専門家のみなさんにみてもらいました。あれは、個人のお墓のものです。そうでなかったら、伐られてしまってますよ。カシワはいい木ですから、名のある人やお金持ちが、お墓に植えたのです。

牛帮口村の入口に、大きなカシワがありますが、あれを植えたのは、地元の名家です。下関郷の岸底村からは、李冠洋という閻錫山の秘書がでていますしね。高見さんといっしょに、カシワの林をみたことがありますね。あれも、墓地をつくるときに、最初に植えたものだと思います。お墓だと、切りにいく人がいけませんから、そのまま残ります。

## NO. 521 大同の寒さ 2010. 01. 05

去年の 12 月 7 日から 13 日まで、大同を訪れました。月平均気温のいちばん低いのは 1 月ですが、12 月もかなり寒いのです。北緯 40 度と、緯度は北京とほぼ同じですが、大同の中心部でも、海拔が 1,040m ほど。それにたいして北京は、天安門のあたりで 50m 弱。海拔の上昇 100m につき、0.6 度ほど気温が下がりますから、大同の気温は、北京にくらべ、6 度ほど低くなるはずですが、いつもそうとはかぎりませんが。

私たちが到着する 1 週間ほどまえは、記録的な寒さで、雪もかなり降ったそう。でも、市内

には、街路樹の根元に、集めてあるだけで、道路に、雪はみられませんでした。人気の市長の号令は、「雪が降り出したら、除雪作業を開始し、降りやんだときには、雪がないようにする」というものだそうですから、そのようにしたのでしょう。

私たちの滞在中は、おだやかな日がつづきました。天気予報によると、大同を離れる翌日の、14日から、また寒波がくることになっていました。同行の川島和義副代表は、冬にくるのははじめてですから、ちょっとは、寒さを味わってもらいたかったのですが。

おだやかといっても、日中の最高気温が、0度を超すことはありません。たいていは、-3~-4度といったところ。最低気温は、-15度あたり。数字だけみると、すごく寒いようですが、じつは、それほどでもありません。湿度が低いからでしょうね。サウナで、湿度が低ければ、100度以上でも、耐えられますけど、湿度が高くなると、50度でもたまりません。その逆に、数字のうえの気温が低くても、湿度が低ければ、そう寒くは感じないようです。私は、かつてにそう推測していたんですけど、「ミスナールの体感温度」という、計算式があって、摂氏10度を境にして、それより上では、湿度が高いと暑く感じ、それより下では、湿度が高いと、寒く感じるのだそう。

今回は、そういう機会はありませんでしたけど、日中、気温は-15度くらいになっても、日が照っていて（大同の冬は、たいていそうです）、風さえなければ（そういう日はめったにありません）、なんということは、ありませんよ。農村の、おじいちゃんたちは、外にでて、土塀によりかかり、日向ぼっこをしています。私の出身地の、鳥取県なんかの、あの底冷えのほうが、ずっと寒く感じます。

半日をつかって、実験林場・カササギの森にアガりました。大同事務所のメンバーは、「大雪で、とてもあがれない」と、止めたんです。でも、彼らのいう「大雪」は、たいてい、たいしたことはありません。雪は、もともと、まったくとっていいほど、降りませんからね。20cmも積もったら、それが大雪です。で、私は、「ほかにいくところはないから、会議でもしようか」と、いいました。そしたら、「じゃあ、カササギの森にいこう！」ということになったのです。今回は、解決しないとイケない問題が山積みで、会議の連続だったのです。彼らも、ウンザリしてたんですよ。

降雪の直後は、40cmくらいは、積もっていたそうです。日のあたる南面は、地肌のみえるところもありますが、日陰は、まだ20cmは、雪が残っています。ムリをしなくていいのに、運転手の小郭は、カササギの森の管理棟まで、くるまで行ってしまいました。乗っている、私たちのほうが、恐怖だったんですね。いかにも危なそうな、坂道が、けっこうありますので。

管理棟のところで、海拔は1,450mです。日中の、いちばん暖かい時刻に、手元の温度計で、-7度でした。でも、それほど寒くは感じません。カササギの森は、いつも風が強いんですね。

「風口」と呼ばれます。そのために、真夏でも、涼しいのです。市内が暑くても、ここにくると涼しいから、私は「涼快！」と叫び、それにみんながうなづくと、「冬天更涼快！」と、へたなジョーダンを繰り返します。「冬はもっと涼しい！」というわけですね。みなさん、そのたびに律義に、大笑いしてくれます。

もし、いつものように、風が吹いていたら、とても、外では、活動できなかつたでしょう。大同事務所のメンバーが、ここにくるまえ、「とてもいけません。いけたとしても、なにもできませんから、やめましょう！」とあって、止めたのも、常識的にいえば、そちらのほうが正解なのです。ところが、この日、まったくの無風でした。こういうことも、あるものなのです。おかげで、あちこちを回って、写真を撮ることができました。

もし、風が吹いたら、たいへんですよ。-7度のところに、秒速5mの風があったら、体感温度は-10度以下です。10mの風だったら、-20度近いでしょう。体感気温と風との関係には、「リンケの体感温度」という式があるそう。おおざっぱにいえば、風速1mの風があれば、体感気温は1度さがります。

ころみに、1月5日の大同の天気予報をみたら、最高気温-15度、最低気温-27度です。風は、北の風、「2~3級」とあります。この「級」は、ビューフォート風力階級なのでしょう。だとすると、2級は、秒速1.6~3.3m、3級は、秒速3.4~5.4m。あいだをとって、風速3mとしても、えっ、何度？ブルブル！

もうひとつ、ふしぎなことがあります。そのような低温ですから、ちょっとした湿りけがあっても、道路の表面は、凍るはずですよ。ところが、その道路を、くるまが平気で走っています。ノーマルタイヤで、もちろん、チェーンなし。運転手の小郭にたしかめました。冬になって、タイヤを交換することはないそう。そして、ツルツルのタイヤが少なくありません。私は日本で、危ない経験をしていますので、その点には注意はしますが、大同では、ほとんど滑ることはありません。 どうしてなのでしょう？

## NO. 522 大きく変わる大同 2010. 01. 13

大同に、私が最初にいったのは、1992年1月ですから、満18年が過ぎました。あのころを思い出し、いまとくらべると、夢のようです。あのころの思い出が夢なのか、いまみる大同が夢なのか、判然としないくらい。

1992年9月、事情を知るために、1人で大同を訪れました。中国語なんて、まるでだめなのに、通訳もなし。大同賓館の多人房（ドミトリ）に、宿をとったんですけど、あのまえの通りが、迎賓路です。大同市政府、雲崗賓館などが、ならびにあり、市内一の目抜き通り。そこ

を早朝、馬車が歩いているんですね。くるまも通りますけど、トラックのほうが多くて、乗用車は、ほんとに少なかった。タクシーは、流しはありません。外国人の泊まれるホテルは、2つくらいで、その門前に、2~3台、停まっているだけ。ノーメーター。相対で交渉するんですけど、どこにいくにも、「20元」「高すぎる！」と私がいうと、そっぽをむかれます。

だんだんとくるまがふえ、朝夕の通勤時には、渋滞がはじまりました。道路の拡幅もはじまったんですけど、本格化したのは、いまの耿彦波市長が就任してから。とにかく変化の規模が大きく、速いんですよ。片側3車線+緑化帯+側道の規模はざらで、なかには片側4車線、といった道もできました。大きなものは高さ10m近い、街路樹が植えられる。2年ほどで、すっかり変わりました。道路の両側の建物が建て変わったために、私なんか、どこにいるか、わからなくなるくらい。地元の間人でも、迷ってしまうといいます。

とくに変化が急なのは、城壁とその内側です。大同には、漢字の「呂」のように、2つの城壁がありました。北側は、「操場」といい、軍隊が訓練するところ。それでも、1辺が1km近い。南側は、一般の市街地で、1辺が1.75kmほどあります。もとはレンガ張りでしたが、歴史のなかで失われ、土の壁が残っているだけ。それも風化がすすんでいました。この城壁を、すべて復原するといいます。東側の1辺は、昨年5月に着工し、12月にはほぼ完成。近くの道路も工事中で、しばらく近づかないうちに、突然、大きな城壁があらわれたのです。高さ15~16mもあるのでしょうか。青みがかかった灰色の、大きなレンガでおおわれています。そのうえに、これまた巨大な木造の楼閣が、10以上も、ならんでいます。そして、何か所かに、くるまも通れる大きな門がある。2010年は、つづけて、南側と、北側の城壁を復原し、2011年には、西側の城壁を修復するそう。

あわせて、仏教の寺や、道教・儒教の廟も、再建がすすんでいます。いちばん大規模なのは、上下の華嚴寺でしょうか。上華嚴寺で、残っている主な建物は、大雄宝殿だけでした。周囲には、レンガ建ての建物が、たて込んでいました。2008年の秋に、その取り壊しがはじまり、その年の12月にいってみると、いくつもの木造の堂宇が上棟していました。とにかく、スピードに圧倒されます。テントでおおわれた塔、建築中の建物などもあり、どれほどの規模になるか、私の想像力を超えています。

そのほか、復元中の建物に、文廟（孔子をまつたもので、別名・孔子廟）、関帝廟（三国志の関羽をまつたもの）、法華寺（白塔寺ともいわれる）、大清真寺（イスラム寺院）などがあります。どれもこれも、広大なものですが、それらが、いっせいに復原されつつあります。工事中の写真を、私のもう1本のブログに載せています。412話以降をごらんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

それらを核に、城壁のなかは、「倣古街」といって、古代都市ふうの街を再現し、2階建てくらいに、統一するそう。モデルは、明代の大同府。平遥古城は、同じ山西省にある古代ふうの

都市で、世界遺産にも登録されていますが、「ああいうふうになるのかな？」と、私がきいたら、「いや、規模がまったくちがうよ。明代に、ここは大同府だったのにたいし、平遥は皇城にすぎない」と、いわれました。平遥も、1982年に整備したのだそう。

なぜ明代かという、その時代の記録は残っているけど、それ以前は、わからないから、とのこと。さらに、大同の近代のようすも、記録がたくさんあるそう。「梁思成さんは、大同のために、たくさんのものを残してくれました」と、きかされました。びっくりしましたね。こういう場面で、この名前をきくとは！

梁思成さんの父親は、清末の改革派知識人、梁啓超です。戊戌の変のあと、父親が日本に亡命したため、梁思成さんは、東京で生まれました。ペンシルバニア大、ハーバード大など、アメリカの大学で建築学を学び、中国の代表的な建築学者として、活躍しました。代表作のなかに『大同古建築調査報告』（4巻、1933年）もあります。くわしくは、「梁思成」をキーワードに、インターネットで検索してみてください。日本にとっても、たいへんいいことをしていただいたのです。

あまりにも急激な変化に不安を感じるのも事実です。しかし、動きはじめた以上は、いいものになってほしいと、願わずにはられません。

## NO. 523 春の雨は油より貴重 2010. 02. 10

これから数回、黄土高原のかかえる基本的な問題を、おさらいさせていただきます。大同の、平均の年間降水量は、およそ 400mm です。ところが、平均の数字は、中国では、なにごとにつけ、あまり役にたちません。このばあいは、年ごとの変動が大きすぎるからです。多い年は、650mm ほどになりますが、旱魃の年は、200～250mm ほどに落ち込みます。昨年も、深刻な旱魃でした。西暦の奇数年に、いい年があったためしはありません。

もう 1 つの問題は、季節的な偏りが大きいことです。年間降水量の 3 分の 2 近くが、6 月～8 月に集中します。その他の季節は、あまり降りません。いちばん困るのは、春の雨が極端に少ないこと。農村では「春の雨は油より貴重だ」とか、「春の雨の貴重なこと油のごとし」といって、雨を待ち望みますが、降ってくれません。

ここでいう「油」は、石油ではありません。食用の油です。旱魃の年は、蒔いた種ほどもとれませんから、カロリーが、つねに不足しています。そして、寒いでしょ。こころみに、インターネットで大同の天気予報をみると、2 月も中旬になれば、すこしは暖かくなっているはずなのに、この週末は、最高気温が－10 度前後、最低気温は－20 度前後です。からだは油をほしがらるわけですね。

私が、大同の農村を、最初に歩きまわった 1992 年ごろ、農家で、食事をごちそうになると、ヒツジの脂身が、私のお皿に集められて、閉口したものです。いやがらせじゃないんですよ。遠来の客を、歓迎してくれるわけ。赤身より、脂身のほうが、ごちそうなんです。スープなんかでも、たっぷり油をいれたものが、歓迎されるんですよ。

農家の重要な主食のひとつに、キビモチがあります。キビの粉を、熱湯で練って、もちのようにして食べます。黄米糕といいます。日常的には、ほかのおかずといっしょに、そのまま食べますが、いいお客があったりすると、油であげるんですね。なかに、マメの餡や、野菜の餡をいれます。油がつかわれているのが、高級なんです。その油より、春の雨は貴重だというのです。

大同では、春の訪れが遅いのです。冬の時期、緑をたもつ樹木は、マツなどの針葉樹だけで、常緑の広葉樹は、まったくありません。冬はみな、葉を落してしまいます。春になって、最初に芽吹くのは、ヤナギです。それまで茶色一色だったものが、うっすらと、黄緑色に変わっていくんですね。それが、北京では 3 月下旬ですけど、大同では、それより 1 か月近く、遅れます。なにかの機会に北京にでると、街路樹の緑が、目にまぶしいくらいなのに、大同に戻ると、ヤナギがやっと葉を広げつつある、というぐあいです。

大同の春は、遅いだけでなく、唐突にやってきます。4 月中旬になると、日によっては、日中の気温が 20 度を超えます。日が照っていると、その温度は、ずっと高くなります。日本からのボランティアも、若い人たちは、半袖シャツ 1 枚で、作業するくらい。先行するのはヤナギですけど、その他の植物も、いっせいにそれを追いかけます。そのころはまた、農耕のスタートの時期です。畑をたがやし、種をまかないといけない。

中国の農村では、いまでも農曆（陰暦）がつかわれます。でも、これは、3 年に 1 度、うるう（閏）月がはいり、たとえば春節（旧正月）も、かなり大幅に前後しますから、農作業の実際には、役にたちません。かわりを務めるのが、二十四節気です。立春にはじまり、雨水、啓蟄、春分……とつづく、あれですね。4 月 20 日前後に、「穀雨」があるんですけど、その意味は、「曆便覽」という注釈書のなかで、「春雨降りて百穀を生化すればなり」とあるそう。まさに、それですね。まあ、これは日本の解説書ですけど。

このころに、雨がほしいんですよ。雨が降らないと、種をまく時期を、逃してしまいます。大同の農村で、多く栽培される穀物に、トウモロコシがあります。食味は好まれません、収穫量が多いので、水と土の条件さえそろえば、トウモロコシを栽培します。そして、各農家では、できることなら、晩生（おくて）の品種を栽培したい。生育期間は長いけど、そのぶん収量が多いのです。晩生品種を、蒔くことのできる限界が、このころです。これより遅くなると、秋に霜がおきるまでのあいだに、生育期間を確保できません。

だからといって、早生（わせ）の品種に、種子を買い換えるのも、かんたんにはいきませんからね。種子は、けっこう高いのです。一代雑種の種を購入することで、収穫量はふえたんですけど、こういうリスクもでてきました。ことしの春、雨に恵まれることを、祈らないではおれません。

## NO. 524 ゲリラ豪雨 2010. 02. 17

私たちの緑化協力地＝大同では、秋から春に、雨が少ないのです。農業にとって、緑化にとって、それが最大の問題です。そのことについては、前回にくわしく書きました。そのいっぽう、雨は、降れば降ったで、問題を引き起こします。年間降水量の3分の2近くが、6～8月に集中します。植物にとって、この時期は成長期ですので、本来なら、ありがたいんですよ。昨年、春の雨はそれなりにあったのに、夏から秋にかけての、この時期の雨がなかったため、深刻な旱魃になりました。

「6～8月」と書きながら、そのあとで、「夏から秋にかけての」と、重ねたのですが、日本でこういわれると、違和感がありますね。でも、大同では、8月も中旬になると、涼風が吹き、気温がさがり、まさに秋なのです。二十四節気でいえば、8月8日前後が「立秋」ですけど、立秋をすぎると、そのとおりに涼しくなります。話をもとにもどします。

問題は、このときの雨の降り方が、乱暴なことです。カササギの森の建設がスタートして、まがないころの夏です。ツアー参加者といっしょに、活動していました。ずっと遠くに、黒い雲がみえましたが、空をおおうような大きなものではありません。その雲の下に、カーテンのような、灰色のものが、斜めに垂れ下がっています。雨なのですね。それが、だんだんと、近づいてくる。

そのとき私たちは、管理棟の周囲で、昼食に、カップラーメンを食べていました。ほんとに、あっというまのことです。暗くなったと思ったら、大粒の雨が、降ってきました。最初はバチッ、バチッという感じで、コンクリートの上に、直径5cm以上の、雨の跡がくっきりとつきましたが、たちまち、大降りになりました。というふうに、文章では順を追って書くしかありませんけど、雲が近づいてくるのがみえた時点で、至急にバスに乗り込むように呼びかけ、脱出をはかりました。黄土の道が、雨で濡れると、グリスのようになって、くるまは動きがつかません。まさに危機一髪の脱出でした。

日本でも、最近「ゲリラ豪雨」と表現されますが、大同の雨にこそ、その名称をあげたいものです。そのような雨の範囲は、そう広くありません。激しいカミナリと、強風や、ヒョウをとともなうことが、少なくありません。かなり速く移動しますので、雨が降っている時間は、

そう長くはありません。たいていは1時間以内。

去年の夏は、大同市と河北省との境界付近で、そのような雨に、何度もであいました。1度は車中でしたが、ワイパーを最高速で振っても、雨をはらえません。路面には、かなり厚い、水の膜ができました。走るのは危険ですから、くるまを路肩に停めて、小降りになるのを待ちました。このときは、40分くらいだったでしょうか。

そこからちょっと東の、小五台山にいったときは、山のなかを歩いている最中に、激しい雨に遭遇しました。道の修理をしている、地元の人たちに、あわてるようすがなかったのも、私たちも油断したんですね。このときも、急に暗くなり、雨足が強くなりました。岩の陰にかくれたんですけど、カミナリがとどろき、風が強くなって、岩陰にいる私たちにも、降りかかってきました。岩の割れ目からも、遠慮なく、水が吹き出してきます。このときは、1時間をかなり超えました。寒くて、寒くて、ふるえがきますので、意をけっして、その岩陰を捨て、もうちょっとましなところに避難したのです。そんな経験をして、大同に帰ってみると、大同ではまったく雨がなく、カラカラの旱魃でした。

大同で活動するようになってから、何度も読み返している本があります。『中国生活誌—黄土高原の衣食住』（大修館書店・1984年）で、竹内実さんと、羅漾明さんの対談です。羅漾明さんは、1920年、山西省の朔県生まれ。現在の朔州市朔城区で、大同から近く、よく似た環境です。その本のなかに、谷底の道を歩いていたら、雨になり、黄土色の水がおしよせてきて、「ちょうど二、三階だての建物が前進してくるみたいにしてやってくる」と話されているんですよ。この本から、私は、多くのことを学ばせてもらったんですけど、このくだりだけは、読み返すたびに、「いくらなんでも…」とっていました。

ところが、2003年7月のことです。私たちのカササギの森にある谷で、土石流が発生しました。その上流で、ゲリラ豪雨が降ったのです。その直後に、私は訪れたんですけど、すごいものです。ひと抱え以上のポプラが、なぎ倒されています。ポンプアップ用の貯水槽が、土石流に襲われて、ポンプごと、どこにいったか、わからなくなりました。武春珍所長が、かなり大きな岩をみつけてきて、それに「喜鵲林」と、赤ペンキで書き、看板がわりにしていたんですけど、それも行方不明になりました。もっとも深いところでは、土石流の深さは4mを超えたそう。すぐ下の聚楽村に、濁流が襲いかかり、4人もの犠牲者がでたのです。

恐ろしいのは、その場所では、たいした雨でなくても、上流でゲリラ豪雨があると、突然に、土石流がやってくることです。羅漾明さんの発言を、そのまま信じるようになりました。谷底を歩いていて、天候が変わったら、できるだけ早く、高いところに逃げないと、生命にかかります。

夏から秋にかけてのゲリラ豪雨が、ときに人命を奪うことを、前回は書きました。そういういわば劇症型の被害のほかに、広い範囲で、じんわりとすすむ災害を、この雨はもたらします。被害としては、むしろそちらが深刻だともいえます。

黄土高原は、全体として、植生が貧弱です。1時間70mmといった豪雨があると、雨は直接に大地をたたき、土を押し流します。

黄土というのは、変わった土です。西域の砂漠地帯で、強風によって巻き上げられた土が、偏西風に乗って、東へ、東へと運ばれます。それが降り積もっているのが、黄土地帯であり、そのうちの、おおざっぱに、標高1,000m以上のところが、黄土高原です。風で運ばれるくらいですから、粒子がとても小さいのです。直径0.004~0.06mmで、シルトと呼ばれます。

この土、すごく詰まっていて、100mlの重さが、150~160gもあります。日本の土は、水を含んだ状態で、100gほどだそうですから、それより、ずっと重い。そして、乾燥状態では、とても硬い。春先なんか、スコップの刃がたたないくらいです。

思い出したことがあります。十数年もまえのこと。ワーキングツアー参加者が、アンズを植えるための穴を掘っていると、顧問の遠田宏先生が、その穴に入り込んで、なにかをしています。穴の断面の、いろんな深さのところに、硬度計をあてて、土の硬さをはかっていたのです。こういう硬い土に、植物の根が入り込めるかどうか、と。何度か何度かはかかって、最後になって、「結局はムダでした。この土は、乾いているときと、水を含んだときとで、極端に、硬さがちがいます」といって、苦笑い。

そうなんですね。この黄土、カチンカチンのものを、耕したり、砕いたりすると、フワフワのパウダーになって、風に舞います。そして、カチンカチンの石のような固まりに、ちょっとでも水をかけると、たちまちトロトロにとけ、グリスのようになります。ですから、運転手は、動けなくなったり、事故になったりするのを恐れて、ちょっとした雨でも、未舗装の土路に、行こうとしません。

黄土は、きわめて水にもろいために、雨によって、容易に浸食されます。雨が降っても、水はそこにとどまることはありません。土もいっしょに、連れ去ってしまいます。とくに、腐植を含んだ、表土が流されるのが痛い。黄土高原では、それを水土流失といいます。水土流失がくりかえされるうちに、土はやせていきます。作物が育たなくなる、植物が育たなくなる、それが黄土高原の砂漠化です。

えっ、雨による砂漠化？おかしいと考えられかもしれませんが、私はそうだと思います。1992

年の地球サミットで採択された「アジェンダ 21」で、砂漠化の再定義がおこなわれ、その後の砂漠化対処条約でも、踏襲されました。砂漠化とは、「乾燥、半乾燥及び乾燥半湿潤地域における様々な要因（気候変動及び人間活動）に起因する土地の劣化」だということです。ねっ、ピッタリでしょ。土の劣化、です。黄土高原では、皮肉なことに、雨が、砂漠化を加速しているわけです。

Google Earth をみることができる方は、北緯 40 度 11 分 02 秒、東経 113 度 32 分 46 秒、のあたりをみてください。ここは、私たちの協力プロジェクト「カササギの森」の中心部です。土が流されて、まるで骨だけ残っているよう。現場に立ってみる以上に、生々しく感じます。そして、大小、無数のガリ＝浸食谷が、刻まれているようすもわかります。これも、あのゲリラ豪雨が、土を流してできたもの。

雨が土を流す、といっても、たかがしれてる、と思われるでしょう。でも、河南省の三門峡における、黄河の観測では、1 立方 m の黄河の水に含まれる土の量は、35kg にもなり、1 年間に通過する土の量は、16 億トンにもなったそう。その 80%以上が、黄土高原の土だといいます。（すこし古いデータで、最近は減っている、という説もあります）。

16 億トンの土って、どれくらいか、見当がつかますか？講演のたびに、私はこれをクイズにします。「この 16 億トンの土で、高さ 1m×幅 1m の堤防をつくとすれば、その延長は、どれくらいになるでしょうか？」「大陸のことで、なんでもスケールが大きいので、モノサシの目盛りを、赤道 1 周にします。0.5 周、1 周、3 周、5 周、10 周、30 周。このなかから、正解に近いものを選んでください」といって。

みなさんの手は、10 周あたりで、あがりきってしまいます。黄土 100ml の重量を 150g とし、計算すると、延長は、107 万 km 弱で、赤道 27 周に近い。「大陸の問題は、すべてこういうスケールで、島国の日本人の想像力を超えています」と、締めくくるのですが、大陸の中国人にとっても、想像外の規模のようで、数年前、北京大学で、このクイズをだしたところ、100 人を超える学生と先生のなかで、正解者は 1 人でした。で、私は、ほめたんですよ。「さすが、北京大学！正解者が 1 人、ありました。この春、東大で話をしたときは、正解者はゼロだったので」といって。東大のときも、中国からの留学生や、中国人学生もいたんですけど、正解者がいませんでした。

## NO. 526 薄志弱行のなげき 2010. 03. 18

大同での緑化協力が、19 年目にはいっています。平坦で、まっすぐな道では、ありませんでした。各時期、各時期で、問題が発生しました。自然条件の厳しいところですから、しかたがありません。貧困から派生する、さまざまな困難もあります。いまでも、頭の痛い問題に、直面

しています。外国の民間人には、手のだせない問題もあります。

そういうときに、大同の友人たちが、「ガオジェン（高見）は、困難に挑戦するのが好きです。問題がおきたときのほうが、元気になります」と、いうんですね。ついこのあいだ、北京でも、そういわれました。中国の友人だけじゃない。日本人、しかも私の周囲にも、そういうふうに私をみている人がいます。

パルシステム生活協同組合連合会が発行している「のんびる」3月号に、私のインタビュー記事が載りました。その最後の、「編集長からひとこと」という欄に、前田和男さんが、つぎのように書いています。「嗚呼！快男児 高見邦雄さんの顔には、最近の日本人からは失われた、えもいわれぬ迫力がある。黄土に植えては枯れ、枯れては植えて18年。その星霜と風雪によって作られたものだが、刻苦の片鱗も感じさせない。何とも頼もしい。彼の著作が中国語に翻訳され、北京で出版記念会が催され、日本のそれよりも盛会だったのも、むべなるかな、だ。」

カッコいいですねえ。意志堅固な、とてもりっぱな人！それがほんとなら、どんなにうれしいことか。ところが、実際の私は、その対極にあるよう。ことがうまくいかなくなると、ウジウジ、ウジウジ、悩みます。投げ出したくなる、逃げ出したくなる。そこを、かろうじて踏みとどまる。全体として、うまくいっているときでも（そんなことは、めったにありはしないんですけど）、そううまくいくはずがない、どこでこわれるんだろうか、と心配しています。

もろいのは、精神面だけではありません。肉体も、弱いのですね。なぜか、このシーズンは1回もなかったんですけど、毎年、何回か、風邪をひきます。39度以上発熱し、1週間も寝込みます。そして、ああ、このまま再起不能なんじゃないかと、しっかりと、落ち込みます。そういうときは、だれにもあいたくない。だれにも、顔をみられたくない。

私に責任のある協力プロジェクトも、はっきりした目標があって、そこにむかって、まっしぐら、というのとは、ちがいます。なにかのプロジェクトをつくって、しばらくたつと、止まってしまう枝、伸びそうな枝、それがみえてきます。期待していた枝が枯れるかわりに、予想外のところから、元気な芽がでることもあります。その段階で、じゃあ、この枝を伸ばそう、この枝はすてようというふうですから、だんだんと、姿かたちが変わってきます。現場でよく観察し、人の意見をきくよう、心がけてきました。よくいえば、柔軟で、融通無碍。わるくいえば、いいかげん。成果主義がもてはやされる時期には、やりづらいのです。

それでも、18年もつづいて、失敗もあるかわりに、多少の成果も、みえてきました。そこはやっぱり、人に恵まれたんですね。中国側のカウンターパートや、支持者たちが、この活動をしっかりと支え、守ってくれたんですよ。彼らのしごとぶりをみていて、「よくもあそこまで、がんばれるものだ」と、私は感心しています。それから、日本側でも、たくさんの人に支えてもらいました。現地に通ってくださる、専門家の顔ぶれをみても、ほんとうに恵まれていると

思います。

もうダメかなと思うことも、何度もあったんですけど、そのたびに、どこからか助けがあって、生き延びることができました。そのぎりぎりのタイミングは、ふしぎなくらい。願わくば、もうすこし早くでてきてほしい！いまも、切実な願いです。

3月18日の早朝、大阪を発って、夕刻には、大同に着きます。今回の滞在は、45日ほど。そろそろ、テンションをあげて、中国モードに切り換えないと、いまの中国では、やっていけません。

## NO. 527 低温、強風、沙塵暴 2010. 03. 26

3月18日から、大同にきています。頭の痛い問題が重なっておりまして、遠出をすることができません。きのう(25日)の昼、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長が、「どうも運気が悪いようです。やっかいごとが多すぎます」と話しますので、「あなたが、やっかいごとがすきだからだよ」と、私がちゃちゃをいれると、「やっかいごとのすきなのは、高見さんでしょ」といいます。「いや、私はやっかいごとは、大きらいなんだけど、やっかいごとが、私をすきなのもかもしれない」。みんなで笑うんですけど、いい笑いじゃないですね。なんとか解決して、つぎのステップアップにつなげたいものです。

そのあと、大阪の事務所に電話をかけました。「ことしの春のツアーの時期を遅らせたのは、どうしてだったっけ？」電話のむこうで、東川さんが困っています。私の口調が、おかしかったのかもしれませんが。すこし、じらします。そして、「それが大正解だったんだよ！」。東川さんの、ホッとしたようすが伝わってきます。例年だと、緑の地球ネットワークが派遣するワーキングツアーは、3月26日ごろに、大同に着きます。ちょうど、きょうですね。ことしは、1週間ほど遅らせて、4月3日です。

それが、なぜよかったかという、とても寒いからです。3月18日に、北京空港から、大同にむかう、高速道路の両側が、雪化粧していました。西にむかいますから、右手に見える山の斜面は南向きの日向斜面で、かなり土がみえていますけど、左手に見える山は、北向き斜面の日陰斜面で、まっ白です。居庸関のあたりから、ずーっとそれがつづきますから、かなり広い範囲です。

運転手の小郭によると、3月にはいって、これが2回目の雪。「大雪でした！」と彼はいいますが、秋から翌春にかけて、大同ではほとんど降水がなく、雪もほとんど降らないので、大雪といってもしれたもの。10cm ちょっと、だったようです。

3月19日の夜から20日にかけて、風がつよかったのです。私はよく眠れませんでした。ホテルの8階の部屋ですけど、ピューピュー、ピューピューと、風のうなりがひどかったのです。気圧の異常なども、あったかもしれません。

3月20日、大同県の白登苗圃に、いってきました。寒い、寒いといわれていたので、着込めるだけ、着込みました。それでもまだ寒い。長くは外にいられません。手元の温度計で測ってみると、昼の11時すぎで、マイナス10度でした。風がすごいですね。天気予報によると、5～6級の風だそうです。ビューフォート風力階級と呼ばれるもので、風速0～0.2m/秒の「平穏」から、最大の12級まであります。5級（疾風 8.0～10.7m/秒）、6級（雄風 10.8～13.8m/秒）ですので、仮に、風速を11mとすると、体感温度はマイナス30度以下です。寒いはずですよ。気温以上に、風の影響がつよいのです。

大同県からの帰り道で、沙塵暴（砂塵の嵐）をみました。「塵」の字は、中国の簡体字は、「小」のしたに「土」です。そのままですね。内蒙古との省境の山を越えて、茶色の土ぼこりの固まりが、ゆっくりとやってきます。境目が、写真に撮っても、はっきりわかります。私のもう1本のブログに掲載していますので、ごらんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/d/20100320>

沙塵暴の外にいるから、こんなふうに見えるんですけど、なかにはいったら、周囲をすべて土ぼこりに囲まれ、視界が、きかなくなります。

3月21日の山西晩報に、風と沙塵暴のことが載っていました。あの風は、すごかったようです。山西省の81の県（市）で、瞬間風速7～12級の強風が吹き、多くの地方で沙塵暴が発生し、冷気の活動が活発になって、多くの被害をもたらした、というのです。12級というのは、前述の風力階級の最大のもので、日本語では颶風（読み方もしりません）、英語ではHurricaneで、秒速32.7m以上の風だそうです。

11～12級を記録したのは、大同市のとなりの朔州市右玉県と、忻州市五台县です。20日の未明2時ごろのこと。大同市の各県でも、同じころ、9～10級を記録したそう。9級（大強風、20.8～24.4/秒）、10級（全強風、24.5～28.4m/秒）もそうとうにつよい風です。私が眠れなかったのも、ムリはありません。新聞には、陶磁器の壺が割れたり、道路の鉄柵が倒れたりしている写真が掲載されていました。大同の友人によると、河北省では、電柱が倒れる例もあったそう。

また、新聞には、大同では20日の午後2時50分に、沙塵暴がやってきて、そこでの視界は、わずか50mだったそう。そのなかにいたら、なにも見えなかったでしょう。

きのう（25日）も寒くて、陽高県で昼前に、マイナス1度でした。この日の天気予報は、マイナス8度～3度です。風がつよい。ときおり、沙塵暴が通過します。そして、山のうへのほう

では、雪がまだ融けず、融けたとしても、土がグリス状になっていて、登ることはできません。御河のところには、まだ氷があります。私は、19回目の大同の春ですが、こんなことは、ちょっと記憶にありません。4~5月になってから、突然寒くなるのはありますが、こんなにずっと、寒さがつづくことは、ありませんでした。というわけで、ツアーをおそくしたのは、大正解だったのです。と私がいうと、「その風と、沙塵暴をぜひ体験したかった！」という人が、ツアー参加者のなかには、かならずいるはずですよ。どうですか？

## NO. 528 ラクダ 2010. 04. 02

3月27日の土曜日、内蒙古自治区まで、足を延ばしました。といっても、大同からいちばん近い、烏蘭察布（ウランチャープ）市まで。市の中心は、このあいだまで、集寧市と呼んでいたんですけど、いまは名が変わり、以前の名は、新しい市の中心の集寧区として残っています。前回、集寧を訪れたのは、2002年のいまごろでしたから、8年たっています。

変わったのは、名前だけではありません。街のようすが、大きく変わっています。市政府をはじめとする行政機関は、以前の街をでて、郊外に移りました。広～い、まっすぐな大通りがあり、その両側に、これまた大きな建物が建っています。そして、時間の関係もあったかもしれませんが、人通りが、あまりありません。旧市街は、以前と同じで、いろんな高さ、いろんな肌合いの建物が、ゴチャゴチャに立ち並んでいます。たくさんの人が行き来して、活気がある。

こういう開発、再開発は全国的なものようで、大同で、いますすめられているのも、よく似ています。御河の東側に、あたらしく市街地をつくり、市政府をはじめ、主だった行政機関はこちらに移るようです。いま、ものすごい勢いで、道路の整備、建物の建設がはじまっています。これらのことについては、機会を改めましょう。

書きたいのは、その帰り道で、あったことです。くるまの後部座席で、私はウツラウツラしていました。するとだれかが、「駱駝（ラクダ）だ！」と叫んだんですね。それからの、私の反応は速かった。すぐに、くるまを停めてもらい、カメラをもって、飛び出しました。1軒の農家があり、そこでラクダを、飼っています。

ラクダには、新疆ウイグル自治区で、なんども出会っています。でも、たいていは遠くでみるか、近くでも柵越しだったのです。ところが、ここではまさに目の前。私が近づいただけではありません。ラクダも、私に寄ってきました。すると、その家のおかみさんがでてきて、「そのラクダは性悪で、人にかみつくよ」と、教えてくれました。私は、飛びのいたのです。

でも、難なくセーフ。そのラクダは、機敏には動けません。ウマやウシは、馬銜（はみ）や

鼻輪でつないで、制御しますけど、このラクダには、それがみられません。そのかわりに、前脚2本と後足1本の合計3本を、縄でつないであるんですよ。そのために、ラクダは、小股でしか、歩けない。遠くへ逃げることも、できないでしょう。このラクダ、オスのようですが、あとで写真をみても、なかなか悪そうな顔をしています。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/e/7c76017ee8ad75dfa22e8babf635dda3>

そのすぐ横に2頭、道の反対側にもう1頭がいました。柵の外です。同じように、足がむすばれています。このラクダ、フタコブラクダですけど、新疆のものにくらべると、ずっと小さいのです。ウマだとしても、小型の部類です。

その家のあるじもでてきて、「こどもが生まれたばかりだけど、みるかい？」といって、柵のなかを示しました。いました！まだ、地べたに、座り込んでいます。私がカメラをむけると、あるじが「自分が追って、立たせようか？」といましたが、そのことばが伝わったかのように、子ラクダは立とうとしました。しかし、まだ3日めだそうで、かんたんにはいきません。前脚を先に立てたり、後ろ脚を先に立てたり、いろいろやっていましたが、やがてちゃんと立って、母ラクダのところにいき、乳を飲みはじめました。

うしろの柵のなかに、もう1頭いるそうです。ここの母ラクダは、ほかのラクダにくらべ、ずっと白いのです。そのお腹の下に、いました、いました！こちらに興味をもったらしく、自分で近づいてきました。1週間ほどたっているらしく、ずっとしっかりしています。かわいいですねえ！つい、何枚も、何枚も、連写してしまいました。(先ほどのブログのつづきにあります)

この文章に、これまでにでてきたラクダを数えると、8頭です。あるじの答えも、8頭でした。でも、なんのために、飼っているのでしょうか？「繁殖したあと、育てて、売るんだ。1歳になると、1万円で売れる」とのこと。あの性悪の近くにいた2頭は、昨年3月末に生まれたもので、ほかの大人と遜色ないくらいに、育っています。でも、それを買う人は、なんのために飼うのでしょうか？その疑問が浮かんだのは、その場を離れてからのことで、まだ解答をえていません。

## NO. 529 環境林センターとの別れ 2010. 04. 20

なんども書こうとしながら、文字にすることができませんでした。いろんなことが、からまわっていて、ことばになりません。つい、涙ぐんだりもしています。

私たちの環境林センターが、4月18日で閉鎖になりました。いっしょに活動してきた人たちとお別れをしたかったんですけど、武春珍所長から、止められました。突然に職を失うことになったのに、だれひとり、不満をいう人はいなかった、といます。そして、最後の一日まで、規律を守って、きちんと作業をつづけてくれました。「でも、あなたの顔をみたら、気持ち

が乱れるでしょう」と、彼女はいいます。まあ、私がまっ先に、気持ちを乱しそうです。ひょっとすると、甘ちゃんの私が、なにか口約束でもして、あとで苦勞する、と思ったのかもしれませんが。

環境林センターがスタートしたのは、1995年春でした。最初は3.5haほどで、細々としたものだったのです。平旺村からの、借地でした。2000年に、20haまで、拡大したのです。それぞれ、20年の期限でしたから、中心部は、あと5年を残すだけでした。

常勤者はもちろん、臨時工の人たちも、誇りをもって、働いてくれました。日本からくる人たちも、1人残らず、ここを訪れ作業に参加しましたから、双方の、心血をそそいだ結晶、といっても過言ではありません。苗圃などの経営の経験のある人ほど、「ひと目みるだけで、モチベーションの高さがわかりますよ」と評価してくれたものです。

そもそも期限のある、借地でしたから、その後のことは、私も気になっていました。せっかく土地を肥やし、樹木も育ててきたのだから、公園にでもなって、市民に公開されたら、最高だな、と私は思っていました。

それが、思わぬかたちで、現実になったのです。昨年末、突然に知らされました。これまで、なんども書いてきたように、大同市はいま、急速に変貌しつつあります。その規模、そのスピード、私は圧倒されています。環境林センターの一带は、これまでは郊外だったのですけれども、市街地になりつつあります。すぐ近くで、炭鉱住宅の改善工事がなされ、いまはまだ10万人ですけど、2年後には30万人の大団地になります。その憩いの場所として、生態公園が計画され、環境林センターが、すっぽりとはいつてしまったのです。全体では、1,000ムーといいますが、67haほどの広大なものです。

4月14日に、耿彦波市長と面会しました。「あなたたちの事業の発展だと思ってほしい」と、いわれました。あそこで作っていた苗を、そのまま活用するそう。たしかに、あれだけの樹種を備えているところは、ほかにないでしょう。「樹木がよく育っているのをみて、あそこの場所を選びました」とも、市長は語りました。この場所に、15年間にわたる日中協力があつたことのモニュメントをつくる、ということです。大同市総工会の柴京雲副主席は、才をいかして、その基本的なデザインまで考えてくれています。

市長はその場で、代替地の提供を決めてくれました。私たちの2つ目の苗圃、白登苗圃や、実験果樹園から、直線距離で2kmほどの、とても便利なところですよ。植栽後40年以上たったポプラの林です。ふつうは「小老樹」といわれますが、胸高直径が、20cm以上のものもありますから、よくがんばってきた、といつていいでしょう。土壌と水の条件が、比較的いいことを示しています。同席した遠田宏、前中久行の両顧問も、この内容に積極的に賛成してくれました。

いまのところ、面積は 20ha ほどですが、市長は、さらに拡大してもいい、と約束しました。無償です。将来的には、馬鋪山森林公園の一角に含まれるそう。私たちが植える木が、将来的にも保護されることとなります。日本からも、たくさんの専門家がきてくれていますので、地元の関係者とよく相談して、今後の発展のために役立つよう、しっかりした計画を立てたいと思います。

どこの角度から考えても、いいところに落ち着いた、とっていいでしょう。私たちの世話人のなかから、「ぜひ、乾杯しましょう！」というメールも届いています。でも、胸に穴があいたような、さみしさを感じています。ここまでは 4 月 18 日に書きました。

4 月 19 日の午前、砒区の区長、大同市園林局長、大同市総工会の柴京雲副主席などが参加して、現場で、引き渡しがおこなわれました。私も、参加してきました。こういうときには、なにかと混乱がおこりやすいものですが、最後までしっかりと管理されており、無事に引き渡すことができ、ホッとしています。大部分の職員とは、この機会にお別れをすることができました。

#### NO. 530 小老樹・再説 2010. 04. 22

大同市が私たちに提供してくれる代替地は、馬鋪山のふもとにある小老樹の林です。これまでは長城山林場に属しており、地権者は大同市林業局でした。今週の金曜日か、来週の月曜日、両者の立ち会いのもとに、杭打ちがおこなわれ、それ以後は、私たちがつかえることとなります。決定までに、二転三転したので、ホッとしています。

これまでのどのプロジェクトにも勝るとも劣らない大プロジェクトですので、その一方で、緊張しているのも事実です。私は、けっこう大胆な人間と、誤解されやすいんですけど、この通信を読んでくださっているかたは、よくご存じのように、気が弱くて、小心な人間です。こういうふうに、なにかをスタートさせるときは、ほんとに、ビクビクものです。

現状は、小老樹（シャオラオシュー）の林です。それについて、いくらか説明する必要があるでしょう。私が最初に、その林に意識を止めたのは、1992 年の秋、懐仁県でのことです。懐仁県はその後、となりの朔州市に属することになりました。

大きなものでも、せいぜい 3~4m。なかには、伐られるか、枯れるかしたものの株元から、ひこばえが生え、ブッシュ状に茂っているものもあります。私は最初、自然のものと思っていたのですが、1 人の老人が、「建国直後に村中総出で植えたものだ」と教えてくれました。こんな小さな木が、そのときでも、30~40 年もたっていたのです。

建国というのは、1949 年の中華人民共和国の成立です。首都が北京に決まりました。大同は

北京の水源であり、風砂の吹き出し口でもあります。首都のための、水源涵養と、風砂の防止という2つの目的で、大緑化運動がはじまったわけです。

植えられたのは、小葉楊 (*Populus simonii* Carr.) で、この地方在来のポプラです。苗を育てるのがまにあわず、ポプラの枝を切ってきては、現場で挿し木するという、かんたんな方法が採用されたそう。桑干河流域の県では、県の面積の4分の1から3分の1もありますから、大プロジェクトであるのは、まちがいないでしょう。中国お得意の、人海戦術でした。

私たちのボランティアツアーを世話してくださったバスの運転手、馬瑞さんが、実家近くの小老樹の林で、話してくれました。「私はまだ少年でしたが、父親のあとについて、この木を植えました。最初はスクスクとよく育ち、たいへんうれしかったのです。ところがその後、だんだん背が低くなり、太さも縮んでしまいました」

遠田宏先生が、何本かこの木を伐って、年輪などを調査したことがあります。その結果は、馬さんの話を裏付けるものでした。最初の10～15年は、年輪幅が広く、この木が順調に育ったことを示しています。暗転したのはその後です。年輪が乱れはじめ、ほとんど成長しない年もあります。

小さな苗のあいだは、水の必要量も大きくないので、順調に生育できます。大きくなればなるほど、水の必要量はふえます。水が不足します。平面に密植されているので、となりの木と根が重なりあい、水を奪いあうようになります。早魃の年がくると、ポプラは先端が枯れます。まるで、生命を守るために、わざと先端を枯らすようにみえます。下部は生きていますから、枝の1本が幹に替わり、また伸びはじめます。そして、早魃の年がくると、同じことが繰り返される。その結果、あのグニャグニャの姿になりました。カミキリムシの幼虫まで、悪さをしたのです。

この過程を、私は自分の目でもみました。大同や内蒙古で、スラーとよく育っていたポプラが、早魃の年に、先端を枯らしてしまいます。だんだんと、背が小さくなり、樹形も崩れます。馬さんの話したとおりです。太さが縮むことはないのですが、大きな期待をもって植えた人が、そう感じても、無理はないでしょう。

ポプラは、生育の速い木です。そのぶん、多くの水を必要とします。このような乾燥地で、ポプラを密植することに、そもそも無理があったのです。苗が小さいあいだは、うまくいくようにみえますし、人工的に、灌水することもできます。しかし、いつまでも、そうはいきません。けっきょくは、自然の法則を、超えることはできないのです。

暗澹とした思いで、その林にはいった私は、びっくりしました。最初に気づいたのは、足の裏でした。土がやわらかいのです。スコップで掘ってみると、かなりの深さまで、黒い土です。

この小老樹は、毎年、枯れ葉や枯れ枝を落して、土を肥やしてきたのです。

今回、代替地として、提供されることになった土地も、そういう林です。環境林センターも、白登苗圃も、もとは小老樹の林でした。実験果樹園・かけはしの森も、そうです。小老樹が土を肥やしてくれたから、そういう利用ができるんですね。

ボランティアツアー参加者などに、私はこの話をよくします。「小老樹はえらい！日本でも、中国でも、いまはみんな勝手な買い物をして、無駄遣いをしているようなものです。そして、クレジットカードには、孫の名前が書いてある。負担を、あとの世代に押しつけているのです。それに比べると、小老樹は、自分は育たなかったけれども、あとの世代のために、土を肥やしています」。そんなことをいっていると、大同の仲間たちは私のことを、「小老樹主義だ」というようになりました。

代替地のポプラの林は、小老樹と呼ぶには、りっぱすぎるかもしれません。これほどよく育っているのを、私はみたことがありません。土壌条件、水条件が、それなりにいいのでしょう。いっせいに伐ってしまうのは、惜しい気がします。もう一度、役にたってもらうことはできないのでしょうか？日本からの専門家や、中国側の関係者と、しっかり相談して利用計画を立てたいと思います。

#### NO. 531 南天門自然植物園の吹雪！ 2010. 04. 27

日本も寒いのだそうですけど、ことしの大同は、まさに異常です。春の訪れが、ずっと遅れています。大同の市街地は、大同市全体のなかでは、北部に属します。春先、まっ先に緑になるのは、ヤナギですが、枝先が、すこし緑っぽくなったかな、と思えるくらいで、葉を広げるのには、まだ時間がかかりそう。

街路樹や、緑化帯で、緑の葉を広げているものもありますが、あれは、大同より南の苗畑で育てた苗を、ことしの春、市内に植えたものです。葉の開きかけか、開いたものを植えたのでしょう。

ことしの春、大同で私は、緑の地球ネットワークが派遣したツアーを皮切りに、イオンリテール労働組合とサントリー労働組合の合同ツアー、東北電力総連の緑の協力隊、自治労大阪府本部の協カツアと、100 人を超すボランティアのみなさんを迎え、いまは専門家のみなさんといっしょに活動しています。

4 月になってからも、寒かったり、暖かくなったりをくりかえしてたんですけど、全体として、ツアーの人たちがいるあいだは、暖かく、いないときに、寒かったのです。ですから、ツ

ア参加者のみなさんは、本格的な寒さを、知らないですみました。作業ができない、といった日も少なかったのです。

4月25日の朝、大同の市内から、霊丘県に移動しました。恒山トンネルを抜けたとたん、まだ昼前なのに、夕刻のように、まっ暗になりました。そして突風が吹き、土が巻き上げられたと思っていたら、泥の雨が降ってきて、バスの窓が泥だらけ。気温も急に下がりました。26日の大同の天気予報は、最低気温 $-5^{\circ}\text{C}$ 、最高気温 $2^{\circ}\text{C}$ です。

26日は南天門自然植物園で、活動しました。10日ほどまえに、ここに来た前中さんが、南庄村のところで、「あのときと、変わっていませんよ」と話します。植物の動きが、止まったままだということです。でも、南庄村から、植物園にむかう道で、オキナグサが咲いているのをみつけて、写真をとりました。青紫の花弁と、黄色いおしべの対比が、とてもきれいです。花の大きさも、日本のそれより、ずっと大きい。一昨年、昨年と、たくさん咲いていたのですが、ことは、なかなかみつきません。

南天門自然植物園で、私は、海拔1,100mのラインの、ナラの林にむかいました。途中で、野生のモモ(山桃)が、きれいに咲いています。満開のちょっと手前、8分咲きといったところ。4月初めに、ここに来たとき、李向東がこのモモの花を例に、「例年より、3週間は遅れています」といったのですが、ほんとに、それくらい、遅れているよう。せっかくだから、前中さんの携帯に電話をかけ、登ってくるように、誘いました。

大同事務所の李海静があがってきたので、モモの花をバックに、彼女の写真を撮りました。そしたら、彼女が、携帯電話を手に、「大同の市内は大雪だそうです。この雪が、霊丘にいったらたいへんだから、できるだけ早く、山から下りるように、という連絡です」といいますが、私は、「霊丘にきてよかったね。大同にいたら、なにもできなかつたろうに」とだけ、考えていました。大同では、雪はめったに降らないので、ちょっとの雪でも、大げさに騒ぎます。

午前中は、風もなく、わりと暖かかったのです。最高気温 $2^{\circ}\text{C}$ の天気予報は、完全にまちがいだ、と思っていました。昼食は、いつものようにカップ麺を食べました。午後から、作業のつづきをすることにしていました。ところが、停電で、機械がつかえないんですね。手順を変えてやっていたら、1時半すぎから、風がでて、雪が降り出しました。

最初はたいしたことなかったんですけど、粉雪がだんだん強くなり、土の道路を白く変えていきます。手元の温度計ではかると、 $-6^{\circ}\text{C}$ まで下がっていました。地元の人たちが、あわてだしました。雪が積もったら、くるまが動けなくなる、ということです。すぐに引き返すことにしましたが、大きくなるまは、ここまでこれませんので、若いほうから7人は、走って帰るしかありません。

ものすごい吹雪になりました。雪は上から降るのではなく、横から、下から、顔をねらってきます。雪の粒が、冷たいのではなく、痛いのです。痛い！ 痛い！私が小さいころは、雪もたくさん降りましし、寒い思いも経験しているはずですけど、これほどのことは、ちょっと思い出せません。気温をはかると、なんと、 $-9^{\circ}\text{C}$ にもなっています。体感温度はそうとうなものでしょう。

やっとの思いでバスにたどりつくと、くるまできた人たちが、「無事の生還、おめでとう！」といって、拍手してくれました。バスで、霊丘県城に帰るあいだも、吹雪がつづいています。太行山の山々は、雪景色に変わっています。こんな光景をみるのは、私ははじめてです。へたをすると、さまざまな作物に、被害がでるかもしれません。でも、ここは言霊の世界ですから、これ以上、悪いことは書かないことにします。

## NO. 532 ビニールハウスの怪 2010. 05. 11

このメルマガ、たまには実益のあることを、書かないといけません。今回は、それをねらいます！

この20年近く、3月半ばから4月いっぱい、私は日本にいたことがありません。自宅の庭で、小さな菜園をやっています。なかには、4月のうちに、苗づくりしたいものがあります。そのため、何年かまえ、ホームセンターで、「ビニール温室」を買いました。といっても、本格的なものではありません。細い鉄製パイプを、自分で組み立て、成型されたビニールをかぶせて、完成！15分もあれば、簡単に組み立てられます。

天気の良い日、このなかは熱すぎるくらい、温度があがります。目的は、それではありません。夜間、とりわけ未明の、最低気温が記録されるあたりで、温度が下がらないで、ほしいのです。そのために、役立ってくれるものと、私は信じていました。

5月2日の早朝、このビニール温室のなかの気温は $3^{\circ}\text{C}$ でした。あとで気づいたのですが、新聞によると、その日の大阪の最低気温は $13^{\circ}\text{C}$ 。私が住んでいるあたりは、もっと低いのでしょうけど、でも、差がありすぎます。ビニール温室のなかで、外より、寒い！残念なことに、私はそのときの外気の温度をはかっていません。

5月4日の夜から、翌朝にかけて、それを調べました。この日も、晴天でした。

5月4日	外気の温度	温室内
17時00分	$21^{\circ}\text{C}$	$22^{\circ}\text{C}$
18時30分	$19^{\circ}\text{C}$	$18^{\circ}\text{C}$
21時25分	$19^{\circ}\text{C}$	$14^{\circ}\text{C}$

5月5日

03時30分	14℃	10℃
05時00分	12.5℃	9℃
06時00分	13℃	11℃
06時40分	17℃	16.5℃

測った時刻は気ままなものです。目が覚めたとき。気温も、小数点1ケタまで読むべきでしょうけど、懐中電灯の光で、老眼にはつらいので、大雑把にいきました。なんと、最大5℃も、温室内のほうが低いのです。最低気温（に近いところ）では、3.5℃ほど開きがあります。温度を保つという、私の目的からすれば、完全に逆効果！

この時期は、日中は温度があがりすぎるので、入口のところを開いています。そして夕刻以降は、閉じていました。たいていの人が、そうしているのではないのでしょうか。でも、それはまちがい！夜も開いたままのほうが、これで見ると、いいのです。

私がこだわったのは、あることを思い出したからです。もう10年ちかくまえ。大同の、環境林センターの技術者が、遠田宏先生に尋ねました。「ビニールハウスの気温のほうが、外気の温度より、低くなるのは、どうしてでしょう？」。先生は、いっしょうけんめい、考えているようでした。でた結論は、放射冷却のためではないか、というもの。

私はこのたび、遠田先生に電話をかけ、そのときのことを、思い出してもらいました。日中は、もちろん、ビニールハウスのなかの温度が高まります。夜間、とくに晴天の夜は、ビニール温室のなかの、空気中の温度も、地温も、遠赤外線のかたちで、放射されます。それによって、温度が下がるんですね。ハウスの外も、当然、放射冷却がありますけど、それは空気の攪乱によって、それなりに補われます。ところが、ハウスは、かぎられた空間ですので、ストレートに、温度が失われる。

そのために、温室用のガラスとか、専用のビニールだと、遠赤外線の透過率を、抑えたものがあるそう。それによって、保温をはかるわけです。私の、安物の、ビニール温室には、つかわれていないでしょう。

5月6日は夕方から曇りで、そのうち雨になりました。放射冷却は、あまり問題にならないでしょう。また、はかってみることにしました。

5月6日	外気の温度	温室内
19時30分	20℃	20℃
20時45分	19℃	19.5℃
22時00分	18.5℃	18℃

5月7日

00時00分	17℃	17℃
05時00分	16℃	16℃
06時30分	15℃	16℃
08時00分	16℃	17℃

夜間は、外気と、ビニール温室のなかとで、温度に差はありません。晴天の夜間、ビニールハウス内の温度が低くなるのは、放射冷却が原因だと考える、根拠になりそうですね。

それにしても、あの「ビニール温室」、私が期待したような、保温効果は、少なくともこの時期、まったくありません。それどころか、時間帯によっては、外気よりずっと温度が低くなり、むしろ害になる、可能性があります。霜の害が深刻になるのは、晴天で放射冷却が激しく、風のない日です。遠赤外線透過率の高いビニールハウスだと、霜にとって、「理想的」な環境を、自分で用意するようなもの。

ビニールハウス、世界中に普及していますから、こんなことは、とっくにわかっていることでしょう。でも、私と同じように、いわば常識として、ハウスの保温効果を信じている人も、おられるでしょうから、これを書いてみました。ぜひ、いろいろと教えてください。

#### NO. 533 トウヒ（雲杉） 2010. 05. 21

私たちの協力プロジェクト「白登苗圃」で、トウヒを育てています。マツ科トウヒ属で、中国語では松科雲杉属。山西省には、青杆、白杆の2種があるそう。白登苗圃には、その両方がまじっています。2種類あるのは、私にもわかりませんが、どちらがどちらかは、なんどきいても、覚えられません。

なかなか、樹形がいいんですね。公園などの緑化樹種としてつかわれます。日本でも、クリスマスツリーにつかう、あの木のなかまです。あれをモミという人もいますが、たいていはドイツトウヒで、それとおなじなかま。日本のトウヒ属としては、トウヒ、エゾマツ、アカエゾマツなどが代表的なものよう。

小さいあいだは、とてもよく育ちます。白登苗圃のものは、2005年春に植えました。小さい苗を、外部から購入し、移植したのです。ちょうど成長期を迎えたのでしょうか、1年に50cm以上も伸びているものがあります。針葉樹のばあい、樹形が三角形で、先端がとがっているほど、順調で、育ちがいいよう。

ところが、5mを超すくらいに育ってくると、だんだん樹形がくずれ、弱ったり、枯れたりするものがでてきます。日本の専門家によると、暑さに負けるようです。日中は光合成をし、栄

養をつくりますが、夜間は呼吸作用で、栄養を消費します。温度が高いと、呼吸による消費が多く、やがて、生産を、消費が上回る。そうすると、弱ってしまうというのです。

大同の周辺にも、野生のトウヒがあります。大同から西南に 100km あまりの芦芽山 (2784m) に、2~3 度、いったことがあります。あそこには、直径 50cm 以上のりっぱなトウヒが、たくさん生えています。スラーッとまっすぐで、ほんとにすばらしい！たいていは、1,700m 以上のところ。

もっと近いところでは、大同県、陽高県、渾源県、広霊県 4 つの県の境界近くに、樺林背林場があり、そこにトウヒがあります。といっても、大きなものではありません。ここの森林再生は最近のことで、まだ若い林です。私たちが通いだしたのは、10 年ほどまえのことですが、いくたびに、ようすが変わっていて、驚かされます。海拔はやはり 1,700m から上で、主体になっているのは、シラカンバです。この一帯の、この海拔のパイオニアは、シラカンバなんですね。

それにちょっとだけ、カラマツがまじります。これも大きなものではありません。そして、トウヒがまじってきている。大きなものでも、3~4m くらい。たいていは、1m 未満です。その姿がおもしろいんですね。上には伸びないで、せいっぱい、横に枝を張っています。ほかの木が、うえにかぶさっていますから、ちょっとでも多く、光線をとるために、そういう姿をしているわけですね。遠田先生によると、アンブレラタイプというんだそう。傘のようなかたちです。1m 未満のものでも、樹齢は、10 年以上だったりするのです。

なにかの事情で、上の木がなくなり、ギャップができると、チャンス逃さず、トウヒは伸びはじめます。それからの成長は速いんですね。シラカンバや、カラマツは、ほかの木の陰では、育つことができません。トウヒは、その環境に耐えることができます。ということは、何十年かたったら、ここはトウヒの純林、ということです。

ボランティアツアー参加者のまえで、そんなことを説明しながら、「下積みに耐えるものだけが、最後に残ることができるわけです。人生の、教訓話でした」といって、私は、話をしめくります。

## NO. 534 白い花の季節 2010. 05. 31

5 月 24 日、上海経由で大同に着きました。私が最初に大同にきたのは 1992 年 1 月のことで、今回は 19 年めです。毎年、4~5 回に分けて、90~120 日は大同に滞在しています。たいていの季節は、体験しているんですけども、空白がありました。それが、いまの季節。5 月の後半から、6 月にかけては、きたことがありません。この時期、会員総会の準備や、報告書の作成な

ど、日本にあって、忙しいのです。

今回は、2つの用事が、大同で重なったので、無理をしてやってきました。最初に、JICAの草の根技術協力事業1つが、この6月で終了するので、その終了時調査。もう1つは、三洋電機労働組合の役員たちがこられるので、その案内役。

自然を相手のしごとですから、通年を知らないといけません。そのことを、今回、痛感しました。たくさんの発見があったのです。どこにいても驚かされたのが、白い花です。5月26日には、南天門自然植物園にいきました。唐河溪谷沿いの道、天走線が大渋滞でした。大同市の天鎮と河北省の走馬駅を結ぶので、天走線です。ふつうなら、40分ほどのところが、4時間もかかりました。ここ1か月も、ほぼ毎晩、渋滞しているそう。片側1車線の細い道で、迂回路はありません。事故や故障車があると、すぐに渋滞になります。それが夜間だと、トラックなどの運転手が、その場で眠ってしまいます。すると、1晩、まったく動かなくなる。夜だけでなく、午前中までつづくわけですね。この日は、緑色地球ネットワーク大同事務所の、魏生学副所長と、たまたま植物園の電気関係の修理にむかう電工とが、先に走って、渋滞のたびに、それをさばいて前進しました。彼らがいなかったら、とてもたどりつけなかったでしょう。

植物園について、まずびっくりしたのは、あそこの、日向斜面です。全体が、ポーッと白くなっています。それが花であるのは、遠目にもわかります。遠くからでもみえるのは、花が大きいのか、密集しているのか、どちらかでしょう。正体は、あの灌木トネリコ、中国名で小葉白蟻です。夏にきたとき、たくさんの実をつけているのをみえていますので、花も多いのは想像できましたが、これほどとは思いませんでした。今回の花の写真、つぎの私のブログに掲載しています。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

日陰斜面の喬木は、まさに新緑の色です。そして、灌木のところは、ここも白い花です。この一帯の、代表的な灌木は、バラ科シモツケ属のもので、2種あります。ここは、そのうちの1種、三裂綉線菊です。葉の先端が3つに分かれているので、そう呼ぶのでしょうか。純白の花で、とても美しい。

もう1つは、ウツギです。日本で、園芸種になっている、バイカウツギによく似ています。これらが、ぎっしり生えていますから、いたるところが、白くみえます。李向東が、以前、山腹の斜面を指して、「ここの斜面が白くなって、ほんとにきれいです」といったのを、思い出しました。

この地方に、常緑の広葉樹はなく、冬には落葉します。ただ1つの例外が、ツツジの1種。冬になると、葉が茶色になりますが、落葉はしません。春になると、また緑に戻ります。半常緑というようですね。この季節、枝の先に新しい葉が広がりはじめ、その下には、古い葉がつ

いています。つぼみが大きく膨らんでいますが、まだ咲いてはいません。このツツジも、小さな白い花が、密集して咲きます。

花の色と、咲く時期とは、関連があるようです。いまの時期は、白い花。この地方で、最初に咲くのは、山のモモ（山桃）です。濃いピンクの花で、とてもきれい。ことしは春が遅く、1か月前の4月25日に八分咲きでしたが、翌日の吹雪で、しおれてしまいました。つぎに咲くのが、山のアンズやアンズで、これは、モモよりは、ちょっと薄いピンク。同じ時期、栽培種の、オヒョウモモ（楡葉梅）が、濃いピンクの花を満開します。そして、山では、桜桃や山桜桃がそれにつづきます。これも、鮮やかなピンク。

それが、いまの白い花に席をゆずり、つぎに、黄色い花がやってくるようです。マメ科ムレスズメ属の灌木が、たくさん植えられています。それが黄色い花を、咲かせはじめています。黄刺梅も、あざやかな黄色の花。バラの一種で、キバナハマナスという和名をみた記憶がありますが、定かではありません。いや、黄色い花は、これより前にも、レンギョウや、迎春花がありますね。

足もとに目を移すと、たくさんの草花が咲いています。全体としては、黄色と、白が多い。なかには、すぐにでも園芸種になりそうなものも。本来なら、もっと早いはずですが、小さなアイリスが咲いています。濃い紫の花弁に、白い筋がはいっています。

植物園で、いちばんうれしかったのは、アツモリソウの花です。まだ咲いてはいませんでしたが、ツボミを膨らませていました。ラン科で、大きな紅い花を咲かせます。以前は、十以上も花を咲かせ、種をつけていたのですが、何年かまえに、消えてしまいました。ところがことし、以前の場所から少し離れたところに、1つだけですけど、ツボミを膨らませたのです。周囲には、若い苗も育っています。ふえてくれると、うれしいですね。

## NO. 535 采涼山プロジェクトのマツ 2010. 06. 15

大同—張家口の道路の北側、カササギの森の入口にあるのが、采涼山プロジェクトです。ボランティアツアーに参加する人たちは、かならずカササギの森にいきますので、この采涼山プロジェクトをみることになります。植えているのは、モンゴリマツ（樟子松）と、アブラマツ（油松）。1999年から2004年まで、6年間をかけて、地元の聚楽郷と協力して、230haを植えてきました。それがよく育ってきました。最初のころに植えたものは、3mを超えています。

マツは1年に1節ずつ、成長します。大同では、だいたい4月末から、新しい幹や枝が伸びはじめ、6月末くらいで、その年の成長が止まります。1年に、どれだけ伸びたか、わかりやすいのです。5月末に、采涼山の現場を訪れたときは、ことしのぶんの、ちょうど半分くらい、伸

びたところでしょうか。新しく伸びたところは、まだ軟らかく、くしゃくしゃにやしてましたよ。

武春珍所長を、モノサシがわりにして、その写真を撮りました。小柄な彼女を横にたたせると、マツは大きくみえます。そのとき、しみじみと彼女がいましたよ。「最初の3~4年は、ほんとに伸びてくれないで、だいじょうぶかどうか、心配でたまりませんでした。でも、そのあとは、よく伸びました。最近の成長は、とてもいいです。樹木は、偉大です。……でも、それを植えたのは、私たち！」

彼女にとって、このプロジェクトは、特別の意味をもちます。第1年は、1998年の夏に整地をし、1999年春に植えました。彼女が、緑色地球ネットワーク大同事務所にやってきたのは、1998年の春でした。彼女が最初にとりくんだのが、このプロジェクトだったのです。

もともと緑化の門外漢ですから、不安でたまりません。大同市林業局の技術者に、なんども現場をみてもらいました。その見立ては、かんばしいものではありません。水土流失が長くつづいて、土壌は薄くて、やせているし、しかも、マツの苦手な南向きの日向斜面（陽坡）。水条件も、いたってよくない。そのうえ、周囲の農村は貧しくて、そのころの1人あたり平均年収は、800円を切る。そんな村で、プロジェクトを支えられるだろうか？

ワーキングツアーに参加した人は、彼女のそういう紹介をきいたはずです。かならずとっていいほど、その話をしますから。それにつづけて、「ところが、高見は、困難に挑戦するのがすきな人間で、あえて、ここを選んだのです」と。ああ、それは、ちがうんですね。たしかに、私はこの地方の実情に通じるまえは、そういうこともありました。それで、ずいぶんと痛いめにもあったのです。でも、彼女が大同事務所にきたころには、私はずいぶんと、おとなしくなっていたのです。

ここがむずかしいことは、私にもわかっていました。いちばん気になったのは、ここが陽坡であること。大同では、北向きの日陰斜面（陰坡）は、木が育ちやすく、陽坡は、草さえ育ちにくいのです。このことは、これまでになんども話してきました。でも、大同の山は、たいてい、北斜面は切り立っていて、南斜面がなだらかなのです。北斜面は面積としては小さく、その緑化は基本的に終わっています。これからは、南斜面に挑むしかないので。

そのうえ、やっかいなことが、ありました。村の人が総出で、整地作業をしているところをみたのですが、そこには、崩れかけた整地の跡が、残っているんですね。そして、木は、1本も残っていない。何年前のことかわかりませんが、決定的に失敗しているんですね。そういうところは、ほんとにやりにくいのです。作業にあたる農民にも、負けグセが付き、自信がありませんから。

それらの問題を、克服してくれた功労者は、その翌年、聚楽郷のトップに就任した、張春書

記です。彼は、デスクワークは好きではなく、外で働くのが大好きでした。いつも先頭に立って、木を植え、あとの管理に力をいれてくれました。「植樹3分、管理7分」というスローガンは、植えることより、事後の管理が重要だというのですが、張春さんは、「植樹1分、管理9分」といって、管理の重要性を、さらに強調していました。

外でのしごとが多いので、彼はまっ黒に日焼けしていました。黒さの一部は、酒焼けでもあります。いつも豪快に乾杯します。飲んでいるスキに、乗用車を盗まれたこともあります。中国滞在中は、私も日焼け・酒焼けでまっ黒になりますが、張春さんには、遠く及びません。

采涼山プロジェクトの隣接地で、カササギの森の建設をはじめたのは、2001年4月です。ちょうどそのころ、彼に人事異動の話がきました。県の副局長のポストです。デスクワークのきらいな彼は、乗り気ではありません。彼がいなくなると、私たちも困ります。私たちは市の幹部に頼み込んで、彼を留任させてもらいました。彼が県のポストについたのは、何年かあとのことでした。

プロジェクトが成功する条件として、私はよく3つの条件をあげました。自然条件、社会的関係、そして人的要素です。では、いちばん大事なものはなにかといえば、最後の人的要素。とくに現場の幹部の重要性です。成功したプロジェクトは、例外なく、その最高責任者が、陣頭指揮をとっているところです。

采涼山のプロジェクトは、成功モデルとみなされるようになり、大同で、緑化に関する全国や全省の会議が開催されるときには、視察・見学の対象になります。毎年、たくさんの人が見学にきてくれます。うれしいことです。

では、これで安心かということ、そうではありません。ことしの4月、プロジェクトの入口で火事があり、せっかく育ったマツが焼かれてしまいました。そう大きな面積ではありませんが、10年近くもかけて大きくなったものを、こうやって失うのは、ほんとに惜しいことです。消防車はありませんし、あったところで、水はありません。よく、あそこでくい止めたものだと思います。そういうところを目にすると、どこまでいっても、安心はできないのです。

## NO. 536 入院するの記 2010. 06. 30

ジマンじゃありませんが、私は、心も体もつよくはありません。とくに呼吸器系がよわく、しょっちゅう風邪をひきます。なんどか肺炎になりました。2005年9月、高熱がつづいたため、近くの病院にいくと、肺炎と診断され、即時の入院を求められました。ところがその週、あちこちで講演を約束していたため、日に2回、点滴に通うことにして、入院をかんべんしてもらいました。

入院は、学生時代に、1度あります。そのときも肺炎。それからもう1度、25歳のころで、虫垂炎の手術。病弱なわりに、入院はこの2回だったのです。多いか、少ないか？高校時代に、ダンプカーにはねられ、10mも飛ばされて、意識を失いましたが、近くの診療所で、応急手当を受けただけで、自宅に帰りました。いまだと、ちょっと考えられません。

中年期を迎えたころから、年に1度の健康診断を、欠かしていません。弱いわりに、数値に異常はなかったのです。医者からは、「理想的ですね」といわれました。「ですから、毎年、きげんよく通っています。異常がでてきたら、やめますからね」といって、笑っていました。ところが、60歳が近づいて、問題がでてきたのです。肝臓でしょ！という声がきこえてきます。

大同では白酒（バイチュウ）の乾杯をくりかえし、さらに、ウイスキーの消費もかなりのもの。「アルコール漬けになってるから、土葬だったら、いつまでも腐らないし、火葬だったら、マッチ一本だなあ」なんてね。ところが、 $\gamma$ -GTPは、ことしの5月でも、41。基準値は、0~80だそうですから、余裕です。一時期、脂肪肝と診断されたんですけど、2006年からのダイエットで、消えてしまいました。

肝臓ではなく、高血圧になったのです。若いころは、ずっと低めだったのに、60歳近くなって、突然、あがりました。薬にたよるまえに、いろいろ試しましたが、やはりだめ。酒をやめるといいんでしょうけど、その選択肢は最初からはずしています。友人の干場さんの言にしたがって、「飲むために飲む」。降圧剤に頼ることにしました。いまの季節、自宅ではかると、130-85の前後なのに、医療機関ではかると、なぜか、10mmほど低くなります。こちらもなんとかセーフ。

今回、敵は、背後からやってきました。大腸が、ひっかかり、要精密検査。あれって、イヤですよ。無視したいところですが、私の周囲でも、その関係の病気がふえています。再検査のために、近くの病院にいくと、「バリウムにしますか、カメラにしますか？」「どちらもイヤです」（小声で）「そのためにこられたんですから、どちらかにしてもらわないと……」。そりゃ、そうですね。

インフォームド・コンセントですね。「ポリープが発見されたら、その場で切除しますが、そのばあい、一日の入院が必要です……。大腸の曲がり角を、カメラが通過するさいに、圧迫感や痛みが、あることがあります……。まれにですが、腸壁を穿孔するばあいがあり、そのばあいは、緊急手術が必要になります……。人のことばに影響を受けやすい私は、おびえてしまいます。でも、緊急手術にいたるのは、3000件に1件くらいとのこと。2000件に1件ならあぶないけど、3000件に1件ならだいじょうぶだろう。へんなかたちで、自分をなぐさめます。

前夜に下剤を飲み、6月23日の当日朝からは、経口腸管洗浄剤2リットルを、ほぼ3時間か

けて、飲みました。そして、午後2時まえ、病院に着き、検査台にあがりました。かっこいいものじゃないですね。気持ちのいいものでもない。圧迫感がありますが、痛みはそれほどでもなかった。「順調にすすんでいます」という解説が頼み。そのうちに、「腸管が緊張して、最後の曲がり角を通過できないので、緊張をやわらげるための注射をしますね」とのこと。私の緊張が、腸管まで影響したのかしらん。注射の効果は、即座に現れるようです。「うへのほうはきれいです。これからは、ていねいにみながら、戻ります」。私もちょっと余裕がでてきて、横目でモニターをみました。あれは、最初から、みせてもらえるといいですね。

「小さなポリープがありますので、切除します」とのこと。小さなハサミのようなものが、モニターに写って、それが動くと、パッと血がでました。最終的に、2つのポリープが切除されたそう。大きなほうを1つ、みせてもらいました。5ミリほどの小さなもの。細胞の検査があり、その結果がわかるのは7月2日。

検査が終わっても、変わりはありません。しかし、翌朝まで入院して、経過観察の必要があるそう。看護師さんに、病室に案内されました。「おなかがペコペコなので、なにか食べてきてもいいですか?」「手術をしたばかりですから、外出はだめです。ごくかんたんなものですが、こちらで準備します」ということで、すかさず、リストバンドをされてしまいました。できたのは、食パン2枚、小袋入りのイチゴジャム、紙パックの牛乳、スティックチーズ、そしてバナナ1本。バナナは、その夜も、翌朝も、ついていました。

病室は4人部屋。カーテンで仕切られており、1人分のスペースは、以前の入院時よりずっと広い。ほかの人の話し声はきこえますが、顔はみえません。つれあいが、「必要なものがあつたら、もっていくよ」と連絡してくれましたが、「酒がほしい」ともいえません。その晩は、アルコールつけなし。読書灯で文庫本を読みながら、消灯までに眠りにつきました。

目を覚ますと、窓側が明るいですね。となりのベッドの人が、ガサゴソやっている。夜があげたかな、と思って、時計をみると、まだ1時ですよ。それから1時間以上も、ガサゴソがつづきます。ちょっと注意しようかな、と思ったのですが、そういうとき、私はエスカレートしがちなので、なんとか自分を抑えました。そのうち、ガサゴソが、イビキに変わったんですけど、こちらは眠れない。

というわけで、入院といっても、たった1晩。ポリープが、かりに悪性であったとしても、切除してしまえば、ガン化の可能性は低いそう。よかった、よかったと、思うことにいたします。

まずは、この夏の黄土高原ワーキングツアーのご案内。「黄土高原がもっとも黄土高原らしいのは、春ですよ！」とあって、私は、春のツアー参加を、おすすめします。春のツアーに参加した人には、「夏の黄土高原は、またかくべつですよ。雨に恵まれた年は、高山植物がほんとにきれいです。それから、自分たちが植えた木が、どのように育っているか、ぜひ、みてください」とあって、夏のツアーを誘います。一昨年は北京オリンピック、昨年は新型インフルエンザで、中止せざるをえませんでした。夏のツアーは、じつに3年ぶりです。といっても、今回は8月21日の出発。日本では残暑まっさかりですが、大同は、立秋（8月8日）をすぎれば、もう秋。とても涼しいですし、高山植物を楽しめる時期。

期間 2010年8月21日（土）～8月27日（金）

訪問地 中国山西省大同市（靈丘県、広靈県、大同県など）

旅行代金 165,000円（関西空港発着） 成田発着は+16,000円

利用航空会社 日本航空（JAL） 成田発着は中国国際航空（CA）

申込み締切 7月16日

<http://homepage3.nifty.com/gentree/event.html>

8月のツアーでも、最初に訪れますが、南天門自然植物園に、李向東たちが、かなり年数のたった樹木を運び込んでから5年にもなるでしょうか。県政府が建て替わるとき、敷地内の植木をもらってきました。大きなものを、乱暴に移したので、最初の2～3年は調子がわるく、枯れていく枝もあったのですが、やっと元気になってきました。

それがなんの木か、わからなかったのです。一昨年の夏、桜井尚武さんが現地に来たとき、ひと目みて、「キハダだよ」と、教えてくれました。なまえは、以前から、私も知っていました。ミカン科の樹木で、樹皮が、胃腸薬になります。とても苦い。陀羅尼助、百草などの民間薬として、長く親しまれてきました。中国では、黄檗、黄柏などといいます。樹木が1種類でもふえ、しかもそれが役に立つなら、なおさらうれしい。

昨年10月、秋田県八峰町の、干場憲三さんにお世話になりました。町村合併のまえは、ハタハタで有名な、八森町。干場革治さんのおにいさんで、大同にきてもらったこともあります。キノコ採りに、誘ってもらったのです。時期より早い9月には、夫婦で40キロ以上もナラタケが採れたそうなのに、私たちが訪れたときは、みごとに空振り。野生のものは、コガネタケが採れただけ。そのほかに、干場さんが栽培している、クリタケ、ヒラタケなどを採らせてもらい、缶詰に加工して、あとで送ってもらいました。干場さんが採られた、ナラタケのおまけつきで。

干場さんは、自分でも木を育てていますが、木を集めるのがすきなのですね。20年もかけ、あちこちを回って、気にいった木を集め、それで家を建てた。特定郵便局の局長としての、給料も、退職金も、それに注ぎ込んだのでしょう。

家を建て、テーブル等に加工した残りの木を、みせてくれたんですよ。そのとき私が、よほど物欲しそうな顔をしていたのでしょうね。「あげましょうか」と干場さん。「えっ、いいんですか！」いちばんうえに積んであったのを指して、「これだったら出しやすいから、これでいいですか？」いいも、わるいも、ありません。厚さが10センチもあり、キハダの木だといいます。1週間もたたないうちに、その板が送られてきました。

私は、テーブルにしたかったのです。若いころから、一か所に落ち着いて暮らすことは、ないと思っていました。家具なんかも、安くて、軽く、2つに分解できるもの、そういうものばかりです。でも、干場さんのとこの、りっぱなテーブルをみて、ああ、うらやましいな、と思ったのです。そして、自分で、加工してみたかった。ザーッとカンナをかけ、そのあとはサンドペーパーで仕上げ、塗装も自分でし、簡単なものでいいから、脚をつけたかった。ひまひまに、時間をかけて、やりたかったのです。

それが甘かった。届いたものをみると、幅は広いところで86cm、長さ210cm、そして厚さ10cm。キハダの材は軽いといっても、1人では、動かせません。加工する場も、仮におく場所もありませんよ。さて、どうするか。

「キハダのこんな板をもらいました」と、私がジマンすると、「それはすごい！キハダがそんなに大きくなるんですか！でも、原木をもらうのはいいんだけど、あとの加工がたいへんです。ものすごく、高くつきますよ！」と、脅されることしきり。

でも、私には、ジョーカーがありました。若いころ、ずっといっしょに活動し、緑の地球ネットワークの初期の事務局員でもあった林靖介さんが、その後、木工の道を志し、りっぱに自立しているんですよ。いろんなところで教えていますし、とくに椅子づくりでは、たくさんの賞をもらい、しょっちゅう個展を開いているくらい。彼の工房に、板を運び込みました。

ところで、その板には、中央部分に、ウロができていました。腐ったり、虫がくったりしていたのです。私は、そこに板をはめこんで（象嵌というそう）ほしかったんですけど、林さんは、「これを見せましょう。すごくおしゃれになりますよ」というんですね。ガラスをはめこんで、ウロをみせる。エーッ！最初、私は抵抗があったんですけど、考えているうちに、とても、すてきなことに思えてきました。このウロがなかったら、ただの板だけど、このウロがあるおかげで、この樹木が生きてきた歴史や年輪がきわ立つ、と思えてきたのです。

そのテーブルが、半年あまりたって、できあがってきました。いいですねえ、ほんとにすてきです。あとまで残るものが、たった1つ、できたのです。困るのは、このテーブルのまゑに座ると、その時間が長くなり、ショウチュウや、ウィスキーの量が、すぎてしまうこと。

この話には、ちゃんと落ちがつかます。6月に学生寮の同窓会にでると、1つ先輩の井原正登

さんが、きておられました。大手コンピュータ会社にいた人なんですけど、定年退職後、おつれあいの実家の家業を、継がれたそう。それが、「御嶽山・日野百草」という、民間薬をつくる会社。原料を尋ねると、なんと、キハダ。「中国の友人に飲んでもらって、感想をきいてよ」といって、段ボール箱いっぱい、サンプルが届きました。ちょっとだけ、くすねさせてもらって、飲みすぎたときは、その世話になりましょう。

あ、そうそう。前号で、入院しました、なんて書いたものですから、たくさん人から、ご心配のメールをいただきました。ありがとうございます。7月2日に検査結果がでて、悪いものはなかったそう。安心しました。

## NO. 538 土のなかの“戦略” 2010. 07. 23

7月最初の日曜日、宝塚市内の山を歩いていると、つれあいが、「えっ、なにこれ〜？」とすっとんきょうな声をあげました。ひと目みて、私は、「ああ、ツチアケビだよ。そんなすがたかたちだけ、ラン科なんだ」とスラスラ。実物をみるのは、私もはじめてですが、図鑑をながめて覚えたのが、自然にでてきたよう。自宅に帰って、たしかめると、たしかにそのとおり。

でも、こういうのって、困るんですよ。私のあたまは、そうとうにムラツケがあるようです。とくに、人の顔となまえを覚えられない。こういうことだけ、妙につよい。たいていは、あまり役にたたないことです。意識しないで、それを口にだしたり、書いたりします。すると、知り合いから、「自分のことを、覚えていないはずはないのに、無視しやがった！」なんてことになる。機会あるたびに、「半年あわなかったら、40年つれそった、つれあいの顔も忘れてしまいます」といって、弁解に努めているんですけど、ほんとに、困ったことです。

ツチアケビって、おもしろいですねえ。私のもう一本のブログに、写真を載せていますので、それをみてください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/e/872822670d15010be7a0bc06b8ff2a87>

ごらんのように、地面から、いきなり花茎がたちあがります。葉もみあたりませんし、葉緑素もありません。でも、花をよくみると、たしかにラン。図鑑には、ソフトクリームのパニラのランと、近縁だと書かれています。

葉緑素がなくて、どうやって生きているのでしょうか？図鑑には、ナラタケに寄生する、と書かれていました。となると、小川眞顧問の世界です。昨日、武田薬品の京都薬用植物園をいっしょに見学したので、その帰り道、しつこくききました。ナラタケは、主に枯れた広葉樹の株や根に菌糸束を伸ばし、それを分解して、栄養にしているそう。木材腐朽菌で、人気のあるキノコです。ときには、生きた果樹や、作物にもとりついて、病気にしたり、枯らしたりすることもあるよう。強力なんですね。

そのナラタケが、このツチアケビに、菌糸束を延ばします。菌糸束は、黒い根のようにみえるそう。そして、ツチアケビの細胞のなかに、菌糸を差し入れる。あわや、ツチアケビ！ところが、ツチアケビは、ナラタケに分解されるのではなく、逆に、ナラタケの菌糸から、栄養をとっちゃいます。ナラタケが、ほかの植物を分解してえた栄養（糖）を、自分のなかにはいつてきた菌糸をつうじて、いただいちゃうのです。しかも、ナラタケの菌糸束を、誘導する物質をだしているようだ、というのですから……。

私は、以前から、ケンカってというのは、なにかの目的を達成するためにおこなうもので、「いや～、負けました、負けました。あなたはすごい！」とあって、頭をかきながら、目的だけは、ちゃんと達成している、そういうケンカが、究極のあり方なんだ、というふうに考えてきました。それが、戦略というものではないかとも、考えました。そして、戦略というものは、口にだしたり、書いたりしたとたんに、意味を失ってしまう。以前から、というより、大同でこの活動をはじめてから、そう考えはじめたのです。

そういうことからいうと、このツチアケビって、すごいですね。おなじラン科植物の、オニノヤガラも、同様に、ナラタケに寄生するそう。オニノヤガラは、大同のカササギの森の奥で、みたことがあります。まさに、土のなかの、大戦略家！

昨年の政権交代の前後から、政治主導が叫ばれました。ひらたくいえば、選挙で選ばれた政治家が、霞が関のうえに立つ、ということなんでしょう。それを、議員さんたちが、自分で口にする。いわば、勝とう、勝とう、とするケンカです。これじゃあ、しごととはできないんじゃないかな、と私は思いました。いや、いま急に、私の頭に浮かんでイメージは、霞が関が、ツチアケビじゃないか、ということです。やめましょう。こういうことを考えると、私のあたまは、グニャグニャになります。

ツチアケビは、秋になると、実をつけます。長さが10cmもあって、形も色も、アケビに似ているそう。なまへの由来です。前中久行さんは、ウイナーソーセージのようだといいています。私たちがみたものが、秋に実をつけていると、うれしいんですけど。このツチアケビ、強壯、利尿の薬草でもあり、土木通、土通草と呼ばれるそう。「あけび」と入力して、変換すると、木通、通草とでできます。

## NO. 539 電話での会話 2010. 07. 31

暑いですねえ。大阪の弁天町駅から、私たちの事務所まで、歩いて10分。クスノキ、ヤマモモ、サザンカ、ナンキンハゼなどが歩道に植えられ、グリーンベルトになっています。それはいいんですけど、ここが朝からセミの鳴き声の洪水。セミといえば、以前はアブラゼミ、ニイ

ニイゼミだったんですけど、いまは、クマゼミ。けたたましくて、いっそう暑く感じます。

きのう、7月30日のことです。私が席をたっているとき、大同の武春珍さんから、「相談がある」といって、電話がかかってきたそう。瞬間、ヒヤッとしました。このところ、彼女からの「相談」で、いいことのあったためしがない。おりかえし、こちらから、電話をしました。国際電話をかけられるカードの寄附を、たくさんいただいて、こういうときに、助かります。本題は、かんたんなことで、ホッとしました。気楽になって、きいたんですよ。

私「どお？大同も暑い？」。武「暑いですよ～、死んじゃいそう。きのうは37度で、きょうは39度です。大阪はどれくらい？」。私「34度くらいかなあ。雨は降らないの？」。武「えっ、大阪より、大同が暑いんですか。雨はずっと降りません、カラカラです。地表の温度は、60度を超えていますよ。このところ、夜も眠れないんです」

私「えっ、どうしたの？ 恋わずらい？」。武「水がでないんです。うちは4階でしょ。みんなが水をつかうと、水圧が下がって、上の階にはあがってきません。よその家が寝静まって、水を使わなくなってから、やっと水がでます。夜中の3時くらいまで、待たないといけません。それが3晩もつづいて、もうくたくた」。

そういえば、そういう話を、以前もききました。あんまり眠いので、水道の蛇口を、ゆるめっぱなしにして、眠ってしまったら、そのうちに水がでて、下の階まで、水浸しにして、叱られた、とも話していました。朝日新聞の鈴木暁彦さんが、大同に取材にきたとき、そのようすをみたいといっって、彼女の家に行ったんだけど、なんと、そのときだけ、水がでたのです。あれからあと、断水の話聞きなかつたんだけど、やっぱり、あるんですね。

武「北京、天津、石家荘、そして陝西、山西……。中国の北方の都市は、どこも猛暑です。こんなに暑い夏は、私もはじめてですよ。みんなは、この100年で、はじめてだ、といっています」。

なにかとすると、この100年、ですね。そういえば、このあいだ、北京の友人から電話があったとき、42.9度だといっていました。そんな高温のなかに、長時間いると、どうなるんでしょう。以前、中国では、三大火炉といっって、長江沿いの、武漢、南京、重慶の暑さが、有名でした。もう20年もまえ、夏に南京に行く計画を立てたら、北京の通訳さんが、だれがいくか、くじで決めたといっていました。だれも、いきたくなかつたのです。

それが、最近、北のほうに移っているよう。何年かまえ、河北省の石家荘で、40度以上の日が、1週間以上も、つづきました。西安も、暑かった。それが、ついに、大同までやってきたのでしょうか。大同は、北京とおなじ、北緯40度ですけど、標高が1000m、あがっているんで、ずっと、涼しかったんですけどね。

武「あなたは、聡明ですよ。いつもは7月に、協力ツアーがきているのに、ことしは、8月下旬に変えたでしょ。それが大正解！いまごろ大同にきていても、なにもできないですよ。苗を植えても、暑さで枯れてしまうし。外にだって、できません 病人がでたりしたら、たいへんですからね」

武「この春もそうだったでしょ。いつもの年は、3月25日ごろに、みなさんのツアーがくるのに、ことしは4月に遅らせました。そしたら、3月末が寒くて寒くて、外での作業ができなかった。ちょうど暖かくなってきたところに、みなさんがやってきました」。そうやって、武春珍さんは、「あなたは、聡明だ」を、くりかえします。

先を見通すことができ、そうしたのなら、たしかに賢いんですけど、そうではなかった。でも、運というのは、あるのでしょうかね。7月になって、新しい支援の話が、急にもちあがって、このところ、提案書の作成に、かかりきりでした。いつものスケジュールなら、7月後半は、ずっと大同で、とうてい、対処はできなかったでしょう。

きょうの午後は、大阪の事務所で、夏のツアーの、参加者への、説明会です。二十四節気は、中国北方の季節変動をもとに、できているのでしょうか。8月8日の立秋をすぎると、大同の気温は、ストーンと下がります。いくら暑いといっても、8月21日出発ともなれば、ツアーの人たちは、猛暑にあわないで、すむでしょう。でも、参加者には、変わりものが多いですからね。40度を超す猛暑を体験したい人が、いないともかぎらない。

## NO. 540 北京の水源をめぐる (1) 2010. 08. 20

8月15日夜、大同に到着し、翌日は近辺のプロジェクトをみました。そして、17日からは、河北省定州市に足を伸ばして、苗圃を見学することにしました。ここはいくつもの郷が苗木づくりに特化し、巨大な基地になっています。

定州市は、大同からみると、東南の方角ですが、まずは西南の朔州市応県に行き、そのあと、忻州市繁峙県、保定市阜平县、同・曲陽県、同・定州市の順で、東へ東へと、すすみます。忻州市までは山西省ですが、保定市からは河北省。距離はそれほどでもないのですが、山脈を抜ける山道なので、行程が複雑で、時間がかかります。なお、定州市は、県級の市といい、市とはいっても、そのうえの保定市の管轄下にあります。この小旅行が、期せずして、北京の水源めぐりになったのです。対応する写真は、下記のブログをごらんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

応県インターチェンジで高速をおり、しばらくいくと、右手にダムがありました。薛家営ダ

ムの表示があります。中規模の、重力式ダム。石を積み上げて、河をせき止めているわけですね。平地とっていいところですから、こうするしかないのでしょう。この地方の、中小のダムは、ほとんど干上がっています。でも、このダムには、水がありました。

最初は、そう思ったんですけど、そうではありません。私たちが立ったのは、放水口のうえで、水際は、ここから 100m 近く、離れています。ということは、ダムの底にたまっている水は、つかうことのできない水、ということです。下手から、放水口をのぞくと、そこは乾いていました。1971 年に着工し、73 年からつかいだした、ということです。

つぎに、くるまを止めたのは、桑干河をわたる橋の手前。上流に向かって土手を歩き、橋をふりかえって、写真を撮りました。河底の全面に、トウモロコシ、ヒマワリなどが、植えられ、一般の畑と、変わりがありません。いや、河底で、土が肥え、水にも恵まれていますから、むしろ育ちがいい、とっていいでしょう。そして、トウモロコシの先に、橋があります。水の流れる余地がありません。付近の農民は、河に水がくることを、期待もしなければ、恐れてもいないのです。

誤算だったのは、トウモロコシの奥に、スイカが植えられていたこと。突然あらわれた私を、怪しんだのでしょうかね。若い男が近づいてきました。その場を私が離れても、ずっと追いかけてきます。逃げた、と思われるのもしゃくなので、ゆっくりと、ズボンの前をあげ、たちしょんべんをしました。なんとも、こどもじみてる！

この緑化協力がスタートした翌年の 1993 年、協力の一環として、この反対側の河岸に、ポプラを植えました。その当時、この応県も、雁北地区の一員で、協力の範囲だったのです。そのとき植えたポプラの根元が、大水で洗われる、ということもあったのですよ。その写真が残っています。ですから、かなり短時間で、流れが失われたのです。

この桑干河は、これから大同市の中央部を抜けて、河北省にはいり、洋河、壺流河と合流して、永定河と名を変えます。その永定河をせき止めているのが、官庁ダムですから、ここは北京のだいじな水源、のはずなのです。そのことについては、回を改めます。

応県木塔を右にみて、くるまはすすみます。木塔のことを、書きたい気持ちもありますが、いまは、先を急ぎましょう。やがて、くるまは、山に分け入ります。とって、つい最近までは、岩山だったところで、近年に植林されたものも、まだ小さいのです。

右手に、万里の長城がみえます。ここは恒山山脈で、平型関、雁門関などの関所があり、歴史的に、戦闘が繰り返され、「兵家必争之地」でした。日中戦争も、例外ではありません。

その峠からみる、南斜面が絶景なのです。「耕して天に至る」といいますが、まさにそのとお

り。目の届くかぎり、段々畑がつづく光景は、日本の棚田とは、スケールにおいて、格段のちがひがあります。期待をもって、私はカメラを準備したのですが、あいにくと、ガスでけぶっていて、たいした写真は撮れませんでした。

五台山に登る起点となっているのが、砂河です。山西省忻州市繁峙県の県城。これまでなら、いきなりそこまでくるまを走らせ、昼食をとるところですが、今回はちょっと手前で、くるまを止めました。滹沱河をみたかったのです。ややこしい字ですが、こたがと呼ぶのでしょうか。この河は、ここからしばらく西に向かい、それから南に下って、五台山を大きく回り込み、河北省に流れます。

河北省側では、この河に、2つの大きなダムができています。崗南ダムと、黄壁庄ダム。どちらも、太行山のふもとにあり、石家荘市に属します。この2つのダムは、南水北調の最終段、石家荘～北京の完成により、北京市に、水を供給することになりました。そのことから、ぜひとも、滹沱河をみておきたかったのです。といっても、ここはまだ、滹沱河の成長過程。ほんとに小さな流れにすぎません。しかも、河川敷には、ゴミなどが捨てられ、かなり不衛生です。上流にむかって、カメラをかまえると、河の背景に、建設中の中高層住宅が、たくさんありました。これから、太行山を抜けるあいだに、滹沱河は水を集めるのでしょうか？

先ほどは、「ややこしい字」などといいましたが、私は「滹沱」の字を、京都の妙心寺で、みたことがあります。今日の行政区分では、石家荘市正定県の、滹沱河の北側に、臨濟寺という寺があり、そこが臨濟宗の故郷なのだそう。それをしるのことでしょね。(つづく)

## NO. 541 北京の水源をめぐる (2) 2010. 08. 26

滹沱河にこだわったわけを、書いておきましょう。この河を下流でせき止めている崗南ダムを、私は2003年にみています。中国共産党が、延安から中央を移し、国共内戦の最終局面の指揮をとった西柏坡は、この崗南ダムの、水面下にあります。共産党中央のあったところに、ダムをつくったんですね。いまある旧跡は、移転したものだそう。胡錦濤さんが、中国共産党書記、国家主席に就任して、最初に訪れた外地が、西柏坡でした。その後、崗南ダムは、南水北調の緊急工事によって、北京の水源になりました。中国の近現代史にとって、重要なところです。ところが、基礎的な知識に欠ける私は、せっかく崗南ダムにいきながら、ただ横目でみただけで、1枚の写真も残していません。

8月17日のことです。砂河鎮で昼食をとったところまでは、順調だったのです。国道108号線を東にすすみ、山西省と河北省の境界近くの神堂堡で、省道382号に道を変え、阜平をめざします。私がウツラウツラしているうちに、くるまが止まっていました。前方で工事があり、夜の8時まで、大型トラックをすべて止めているそう。その車列が、私たちの進行車線をふさ

いでいるのです。どこまでつづくかわからないくらい、長い。路側に余裕のあるところは、トラックが2列3列にならんでいます。運転手の郭宝青は、やってくるくるまを避けては、対向車線を前にすすみます。

やがて、対向車線もつかえて、動けなくなりました。最初は、私も、余裕があったのです。くるまが停まるのを、これ幸いと、景色や草花を楽しんでいました。国道108号線に沿って、大沙河が流れています。ここは源流に近く、谷川の水といったふうで、水量は、たいしたことはありません。しかし、水はきれい。なぜ、大沙河というのか、なまえの由来がわかりません。くるまをおりて、写真を撮りました。なんとという幸運でしょう！大沙河を撮る、アングルのなかに、万里の長城と狼煙台がはいます。おそらく、明代のレンガ張りのもので、風化のほとんどない、たいへんに美しいものです。でも、撮った写真をみると、狼煙台は小さくて、よくみえません。

魏生学副所長が、活躍ははじめました。渋滞がつづくあいだに、上り下り双方のくるまが、対向車線に乗り出し、角突き合わせます。それぞれが、たとえ50cmでも、まえに出ようとするからです。あちこちではじまると、釣り糸がもつれたようなもので、まったく動けなくなります。魏生学は、それを解きほぐして、スペースをつくり、私たちのくるまを、前にすすめるのです。本職の警官より、うまい！

でも、途中であきらめてしまいました。前方をふさぐ壁はあまりにも厚く、手ごわい。トラックの運転手の話では、もう2晩も、この渋滞のなかにいるそう。このあと幾晩かかるかも、わからない。それでも、私たちのように、あせってはいません。なかには、トレーラーの陰で、陽光を避け、トランプをしている、運転手グループもあります。

イライラしてもしかたがないので、私も腹をくくることにしました。たまたま神堂堡の村の横で、くるまが動けなくなったので、この村の写真を撮りました。なんどもこの村を通りすぎていますが、じっくりみるのは、はじめて。村のすぐ横を、河が流れています。念のために、年配の女性に、河のなまえを尋ねました。答えは、「ダーホウ（大河）です」というもの。村のなかでは、そういうふうに呼んでいるんでしょうね。あとで、地図で確認すると、やはり大沙河でした。

10kmあまりの渋滞をぬけるのに、4時間もかけたでしょうか。渋滞を抜けだしたときは、暗くなっていました。小郭は、山道を、飛ばしに飛ばします。ほかの運転手なら、私は不安で、しかたがないでしょう。10年のつきあいを通じて、小郭の運転には、安心しきっています。阜平の県城に着いたときは、9時まえでした。ここから定州までは、100km弱。ムリをしないで、阜平に宿をとることにしました。

私がそう考えたのには、もうひとつ理由があります。王快ダムを、明るいうちに、みたかつ

たのです。きょうも、あしたも、私たちがくるまをすすめる 382 号線にそって、大沙河が流れています。その河をせき止めて、水をためているのが、王快ダム。南水北調の、石家荘～北京区間の完成によって、北京に水を送るようになりました。せつかく、このルートをとおりながら、王快ダムを、見逃すわけにはいきません。「崗南ダム」の轍を踏むわけにはいかないのです。  
(次回をお楽しみに)

## NO. 542 北京の水源をめぐる (3) 2010. 08. 30

泥縄ではありますが、阜平県城の小さな書店で、河北省の地図を買いました。大同の書店でもさがしましたが、なかったのです。王快ダムは、きょうの私たちの進行ルートの、すぐそばにあります。とにかく、ダム湖のそばにある村なら、どこでもいい。湖面のみえるところに、いって見たかったのです。この地図でみると、村の所在は書かれていますが、そこに至る道の表示はありません。

実際にくるまで走ると、その方角への道が、それらしい場所にでてきますが、どれもみな小さい。そして、その先にあるのは、山、山、山。これまで私がみた、中国のダムは、平地のようなところに、水をためていますが、このダムは、深い山のなかの谷を、ダムでふさいで水をためています。ですから、道をまちがえたら、山にはばまれて、ダム湖にはたどりつけないでしょう。

同行者たちは、そんなところにはかないで、ダムの堰堤に、直接いけばいい、といます。まあ、それでもいいか。そこへの道は、地図にもでています。何回か、くるまを止めて、道をたしかめると、みな気軽に、道を教えてくれました。この一帯では、よく知られているのでしょう。ずっと、舗装道路がつづき、最後の分かれ道に、「水庫賓館」(ダムホテル)の案内板がでていたので、そちらの道を選びました。

みえてきました！巨大な、重力式のダムです。内部にはコンクリートも使われているのでしょうけど、表面はきれいな石積み。堰堤の長さは、1,200m 弱、高さは目見当で、40～50m。あいにくと、ガスが濃くて、堰堤の反対側も、ダム湖の全体のようなすも、まったく見えません。堰堤のうえには、観光客もけっこうきています。

ダムの内側の石段をたどって、水際までおりました。きれいな水です。小さな魚が、泳いでいるのが、よくみえます。水量は、どうなっているのでしょうか？なだらかな石積みの途中に、草が生えています。それも多年草。水平に、帯状にならんでおり、そこから下にはありません。遠くない過去に、このラインまで水があったこと、それからうえには、ここしばらくは水がたまっていないことを、推定できます。草の生えているラインから、いまの水面までは、深さで 8m の差があります。はじめてきた私たちには、それ以上のことはいいにくい。

ダムのうへまで、もどってくると、先ほどまで、私たちがいた水際に、1隻の、手こぎボートが近寄っています。巡視のためのものかと思ったのですが、観光客を乗せる、遊覧船とか。ザンネン、まだ下にいたら、乗せてもらっていたのに。いいえ、私たちの目的地まで、先を急がないといけません。

くるまに揺られて、私はまたウツラウツラしていました。助手席に座っている、前中久行さんの声！「水路ですよ」。瞬時に、眠気がふっとび、くるまを止めて、飛び出しました。南水北調の中線、北京に水を送るための水路です。すぐにわかりました。以前に、ネット上の写真で、おなじものをみたことがあります。この水路の写真は、私のもう一本のブログでごらんください。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316>

水路は、全体がフェンスで囲まれています。青地に白文字の「公告」が掲示されていました。以下はその全文。「南水北調は国家の重点プロジェクトであり、沿線に水を供給する任務をおっている。国家の財産と人民大衆の生活と安全を守るため、関係のない人間および車両の立ち入りを、禁じる。家長は自分のこどもを監督しなければならず、智障人員（ママ）は、親族がよく監督すべきである。勝手になかに入り、事故が発生したならば、その結果は自分で負わなければならない！とくに公告する。 2010年5月25日」

フェンスの内側に、小さな△形のテントが張られ、その横で、幼さの残る少年が、こちらを見張っていました。彼のまん前で、くるまが急停車し、カメラをもった人間が、飛び出してきたので、緊張したことでしょう。

水路本体の上部の幅は、50～60m といったところでしょうか。これも目見当。全体の風景が、日本よりはるかに大きいので、ちゃんと測定しないで、数字にすると、ためらいがあります。水路の壁はなだらかな斜面で、流水面の幅はその半分くらい。水の深さはわかりません。水路の勾配はゆるやかで、水の流れもゆったりしており、流れの方向が、すぐにはわからないくらい。

その晩、到着した宿で、ネットで検索すると、関連する記事が、たくさんでてきました。王快ダムから、北京への送水は、ことしは7月7日にはじまったそう。それからの1か月で、約3千万 m<sup>3</sup> を送り、10月上旬までつづけて、1億 m<sup>3</sup> を予定しているそう。王快ダムからの送水は、昨年からはじまり、昨年は2.16億 m<sup>3</sup> でした。私たちがみたのは、王快ダムから北京への送水なのでしょう。

時間的な順序は逆になりますが、8月15日、北京から大同にくる途中、河北省懐来県で高速道路をおり、永定河をみてきました。官庁ダムにそそぐ直前の場所。くるまを停めた道路の西

側（上流側）にも、東側（下流側）にも、複数の鉄橋がかかっています。その鉄橋の長さは、1.5km を超えているのに、水のあるところは、幅 10m ほどしかありません。しかも、あちこちで、底が顔をだしています。その他の部分は、トウモロコシやヒマワリが栽培されています。2002 年ごろにも、この場所にいきましたが、そのときとくらべ、水量はあきらかに減少しています。

## NO. 543 炭肥の効果（1） 2010. 10. 07

JICA の草の根技術協力事業を請け負い、ことしの 3 月末から、「環境保全と農村生活向上のための循環型農林業の追求」というプロジェクトをスタートさせました。柱になるのが、木炭の利用です。小川眞顧問の指導のもと、春から、さまざまな実験にとりくみましたが、この 9 月、予期した以上の効果が、でてきたのです。

じつは、木炭の利用は、以前にも経験があります。現地に通いつづけた、カメラマンの橋本紘二さんが、大同県で、木炭の山がみつかったと、私にいいました。「あれは、土壌改良材として最高だよ！」。それをきいて、私は、「えっ、ほんとに木炭？ 石炭じゃないの？」。樹木がないところに、木炭が大量にあるとは信じられませんでした。でも、農業と農村をテーマに撮影しつづけてきた橋本さんが、まちがえるはずがありません。いっしょに現場にでかけたのです。

大同県周土庄鎮にある、シリコン精製工場でした。のちに、白登苗圃や実験果樹園「かけはしの森」を建設し、あたらしく環境林センターの代替地がきた、あの鎮です。工場の片隅に、炭焼き窯がならんでいました。材料は、あの伸び悩みのポプラ、小老樹です。大同県には、県の面積の 4 分の 1 以上も、小老樹の林があったのです。窯のちかくに、粉炭が山をなしています。

工場のなかの炭ですから、なにか混じっていないか、心配です。たしかめたところ、木炭をつかうのは最終行程で、還元剤の役割。その粉炭は、樹皮の部分が焼けたもので、まったくつかわれていないそう。安全面でも、心配ありません。「ジャマなだけだから、もっていったらいいよ」とのこと。乾燥地のポプラですから、コルク層が発達し、皮が厚いんですね。無用の粉炭もふえる。私たちにとっては、宝の山です。

環境林センターまで、トラックに山積みにして運びました。粉炭は軽いので、いくらでも積みめます。シートでもかければいいのに、裸のままですから、黒煙をあげるようにして、トラックは帰ってきます。なんども、なんども運びました。最初は、ただで運んでいたんですけど、回数が重なると、先方も「価値あるものじゃないか？」と、思いはじめます。しばらくは、環境林センターでとれた野菜などを、届けていました。つぎには、お金を請求されるようになりました。でも、わずかなもの。

土壌改良材としての効果は、抜群だったのです。黄土は、粒径の小さなシルトで、0.02～0.002mmしかありません。粒子がそろっていて、それより大きな砂も、小さな粘土も含まれません。そのうえ、腐植が少ないので、団粒構造になりにくい。雨に打たれ、それが乾くと、かたく締まって、通気性、通水性がよくありません。そんな土に、粉炭を加えると、苗や作物の生育が、目にみえて、よくなります。マメ科のものは、とくに効果が大きかった。

そのシリコン工場は、その後、閉鎖されてしまいました。自分で炭を焼こうにも、材料が手にはいりません。羊のシャブシャブ用の木炭を、売ってはいますが、1kgが4元ですので、そうはつかえません。

小川眞顧問の講演を何回かきき、木炭の利用を、本格的に考えたい、と思うようになりました。それなりに緑化がすすんで、少しなら、材料も手に入ります。今後は、枝打ち材、間伐材などが、ふえるでしょう。樹木医さんのグループが、昨年春に大同を訪れたとき、炭焼きを計画しました。材料は、環境林センターの、道路わきのヤナギ。高く伸びて、高圧線に支障があるので、数年おきに、枝を切ります。パワーショベルで穴を掘って、伏せ焼きをしましたが、1回は焼きすぎて灰になり、もう1回は途中で火が消え、炭になりませんでした。経験のない現地スタッフに、炭焼きはむずかしいのです。

そのとき、小川さんから、無煙炭化器のことをきき、昨年の夏に、直径1mのものを、大同まで持ち込みました。これがなかなかの優れもの。80kgのヤナギの枝を焼いて、27.2kgの炭になりました。34%の成炭率ですから、りっぱなものです。1回焼くのに、1時間半ほど。これがいいですね。ことしの春、イオン労働組合とサントリー労働組合の合同ツアーにも、焼いてもらいました。

農家肥というのは、ヒトと家畜の糞尿を、土とまぜたものです。以前の日本では、液状の人糞尿を、肥えたごで運びました。大同の農村は、乾燥していますので、人糞尿や家畜の糞尿に、土をまぜ、固体の状態で運びます。冬のあいだに、畑のあちこちに配って、積んでおき、それをばらまいてから、春耕をおこないます。

この農家肥と、直径1cm以下に砕いた粉炭を、まぜあわせ、2週間ほど、積んでおきました。体積で、農家肥1、粉炭2の割合。すると、そのかんに発酵がすすみ、なかに、白いカビのようなものができました。放線菌のようです。農家肥の臭いは、完全に消えました。これを、炭肥と呼ぶことにいたします。小川さんによると、事前のこの作業がだいじだそう。炭と肥料をべつべつに与えても、効果は少ないようです。

ことしの4月、白登苗圃の一角に、実験区をつくり、そこで3種類の作物の、栽培実験にとりくみました。トウモロコシ、アワ、ダイズです。今回は、その結果の報告です。

## NO. 544 炭肥の効果 (2) 2010. 10. 15

8月15日の夜、大同に着き、翌日さっそく白登苗圃にいきました。あそこで、さまざまな実験をはじめましたので、その経過がどうなっているか、早くみたかったのです。炭肥の実験も、もちろん重要な1つ。できることなら、ちがいがはっきりしているところを写真とビデオで、撮影したいと、思っていました。

4月末に実験を開始したとき、つぎのように6区画を設定しました。数字は、1平米あたりの投入量です。1) 炭肥 0.5kg、2) 炭肥 1.0kg、3) 炭肥 1.5kg、4) 炭だけ 1.0kg、5) 農家肥だけ 0.5kg、6) 対照区 (なにもいれない)

炭肥というのは、木炭2、農家肥1の割合で混合したものです。前号で、体積比で、と書きましたが、数日前に問い合わせたところ、実際は、重量比でした。この点で、問題が発生しますが、あとで述べます。農家肥というのは、ヒトや家畜の糞尿と土とを混ぜたもの。くわしくは前号をごらんください。そして、そこに、トウモロコシ、アワ、ダイズの種を蒔きました。

早くみたいと思う反面、恐れる気持ちも、つよかったのです。ことしは、雨期の7~8月に雨がなく、記録的な早魃です。そのうえ、35度以上の猛暑がつづき、39度の日もあったそう。北緯40度、海拔1,000mを超える大同では、ありえないこと。枯れてしまっていたら、どうしようもありません。でも、だいじょうぶでした。ちゃんと水をやってくれていました。

炭肥をいれたところと、なにもいれなかった対照区では、差があります。これが隣りあっていれば、私は意図した写真を撮れたでしょう。でも、この2つは、実験区の両端にあって、離れています。それに、無肥料の対照区とくらべても、意味はないでしょう。

こまったのは、同一の実験区画のなかでも、作物の伸びが、ばらばらなことです。この実験のために、理想的とはいえない場所だったのです。ほかに場所が、なかったわけではありません。責任者の馬占山さんが、敷地内を案内しました。彼がみせてくれたなかに、もっといい場所もあったのです。ここがいいと私がいうと、「ここは、新しくマツの育苗をする予定だった」といって、未練たらたら。それを何回か、くりかえしました。

けっきょく、つかったのは、果樹園の外縁にあって、春先、農家肥を運ぶための、農用車の通路になるところ。まさにウナギの寝床で、細長い。春先は通路になりますから、樹木の苗にはつかえません。春に蒔いて、秋に収穫する、穀物を植えていたところ。整地もちゃんとなく、凹凸があります。雨が降ったとき、灌水をしたとき、凹んでいるところが、作物のできがよくなるのは、あたりまえ。前作の残した肥料なども、ばらばらでしょう。

私は、同一区画のなかでも、育ちが不均等なことに目を奪われ、ここから、どうやって、データをとるのか、不安でした。9月初めに、小川眞さんをはじめ、専門家がやってきました。あざやかな手並みです。それぞれの区画のなかの、平均的な場所を選びます。とくにいい場所をはずします。とくにわるい場所もはずします。そして、そのなかから、トウモロコシ10株、アワ20株、ダイズ20株を掘り起こしました。恣意的に、つごうのいいものを、選んだわけではありません。このときに、根の先端まで、掘りあげるとはできませんでした。土が固いのです。

このときのみなさんの動きに、私はびっくりしました。伊藤武さん、栗栖敏浩さんは、小川さんとずっとチームだったので、息があうのは、当然でしょう。はじめてこられた樹木医、松保護士のみなさんの動きにまったくムダがなく、ためらいがないのです。日ごろからの、植物とのつきあい方の深さを感じました。地元のスタッフも、びっくりしていましたよ。

抜き取って、まとめる段階で、そのちがいははっきりわかりました。背丈も、重さも、大きくちがいます。立っているときは、これほどちがうとは、思いませんでした。それを白登苗圃の管理棟の、中庭まで持ち帰り、それぞれのグループから、これまた平均的なものを、数本ずつ選びました。大きさの順にならべて、なかほどのものを取り出したのです。そして、作物の種類ごとに、写真を撮って、比較しました。その写真を、私のもう一本のブログに、掲載しています。ごらんになって、みなさん、びっくりされると思います。

<http://blog.goo.ne.jp/takamik316/e/d9547213b9f41c2a32fa0fad39979544>

これはダイズですが、前後にトウモロコシ、アワの写真があります。

全体としていえるのは、炭肥の効果がたいへん高いことです。1平米あたり、0.5kgで、相当な効果があります。それくらいの量を、現場で撒いても、はいったか、はいらないか、わからないくらい。そのとき私が思ったのは、えっ、たったこれだけ？

0.5kgの区画と、1.0kgの区画では、作物の見た目の印象は、あまり変わりません。数値については、機会を改めて、報告します。1.5kgになると、過剰なようで、はっきりと逆効果。木炭だけ1kgをいれたところは、極端によくありません。

ここで、私は、小川眞さんに、謝らないといけません。そして、前回の報告を、訂正いたします。私が、現地の技術者に、木炭と農家肥を混合し、2週間ほど、積んでおくように、頼んだときは、【体積比】で、炭を2、農家肥を1のつもりだったのです。ところが、実際は、体積比ではなく、【重量比】になっていました。木炭のほうが、農家肥より、ずっと比重が軽い。ということは、木炭の割合がずっと多くなった、ということです。

その比率が、体積比でなく、重量比であることを知れば、小川さんは、施用量を、現場で調整してくれたでしょう。そうすれば、さらにきめ細かいデータを、えられたと思います。私の

ポカのために、それが失われ、そのかわりに、炭もいれすぎはよくないよ、ということが、はっきりしました。

もうひとついえるのは、作物によっても、炭肥への反応がちがうことです。今回は、具体的なデータをあげて、そのことをみたいと思います。

#### NO. 545 炭肥の効果 (3) 2010. 11. 02

炭肥施用の効果について、今回は具体的なデータをあげて……と書きながら、あいだがあいてしまいました。すみません。トウモロコシ、ダイズ、アワのそれぞれについてかなりの項目を測定してあるのですが、テキストデータで、それを表すのが、むずかしいので、最低限の項目にしぼります。炭肥などは1平方mあたりの施用量です。

まずは、トウモロコシ10本の平均の数値です。

	単位 g	茎葉重量	根重量	穂重量
1) 炭肥	0.5kg	437	130	532
2) 炭肥	1.0kg	468	160	501
3) 炭肥	1.5kg	283	45	278
4) 炭だけ	1.0kg	220	29	204
5) 農家肥	0.5kg	270	42	318
6) 無処理		211	30	221

炭肥を0.5~1.0kgのもので、ひじょうに成績がいいことをわかってもらえると思います。炭肥は、木炭と農家肥(堆肥)をまぜたもので、割合は、2対1(重量比)です。ですので、炭肥0.5kgのなかに、農家肥は0.17kg。農家肥は、ヒトと家畜の糞尿に、土をまぜたものです。そのなかの、糞尿の部分は、もっと少ないのです。私は、「えっ、たった、これだけ!」と思いました。

つぎに、ダイズ20本の平均をみてみましょう。

	単位 g	茎葉重量	根重量	さや重量
1) 炭肥	0.5kg	65	7.0	43
2) 炭肥	1.0kg	60	6.5	43
3) 炭肥	1.5kg	14	3.0	10
4) 炭だけ	1.0kg	6	1.4	5
5) 農家肥	0.5kg	13	2.9	9
6) 無処理		8	1.7	5

炭肥の効果が、いちばん顕著にでたのが、このダイズ。以前、環境林センターで、粉炭を試したときも、エンジュ、ニセアカシアなど、マメ科の植物に、はっきりと効果がでました。マメ科の植物と、木炭の相性は、とてもいいようです。とはいっても、炭だけを単独で 1.0kg を与えたものや、炭肥を 1.5kg 与えたものは、ガクッと落ち込んでいます。炭肥 1.5kg のなかの、木炭は 1.0kg。木炭も多すぎると、逆効果のようです。それは、トウモロコシも、同じです。

最後に、アワ 20 本の平均をみてみましょう。

	単位 g	茎葉重量	根重量	穂重量
1) 炭肥	0.5kg	43	7.9	22
2) 炭肥	1.0kg	38	6.2	25
3) 炭肥	1.5kg	34	5.0	19
4) 炭だけ	1.0kg	22	2.5	12
5) 農家肥	0.5kg	50	7.0	30
6) 無処理		25	4.8	15

炭肥にたいして、反応がよくなかったのが、このアワです。農家肥だけを 0.5kg 与えたものが、いちばん成績がいい。作物の種類によっても、炭肥の効果は大きくちがいます。

日本でも、炭を土壤にまぜると、大きな効果があります。西伊豆町宇久須の藤原國雄さんが、無煙炭化器で焼いた木炭を、土にまぜたところ、キャベツなどのできが、まったくちがってきたそう。『現代農業』（農文協）なども、木炭の効果についての特集を、よく組んでいます。雨の多い日本では、土が酸性に傾くので、アルカリ性の木炭を加えれば、土の中和に役立つ。それが木炭施用の効果だろう、とよくいわれます。

黄土高原の土は、たいていアルカリ性です。この実験をおこなった、白登苗圃では、pH8.4。アルカリ性の土でも、炭肥の効果が、たしかめられました。

では、その効果はどこからきているのでしょうか。小川眞さんの考えでは、これらの作物には、アーバスキュラー菌根菌が共生するのだが、木炭によって、その繁殖と共生が助けられる、というものです。アーバスキュラー菌根菌は、カビのなかまで、これまでは、VA 菌根菌と呼ばれていたものです。作物の根に、これが共生することで、菌糸が根の延長のように働き、水やミネラルの吸収を助ける、と考えられます。黄土高原は、水不足、やせた土など、作物や植物にとっては、限界に近い環境なので、菌根菌の助けのあるなしが、決定的なちがいをもたらすのでしょう。

マツの育苗にも、菌根菌を活用していますが、こちらは外生菌と呼ばれる、キノコのなかまです。具体的には、マツと共生する、アマタケ、ヌメリイグチ、チチアワタケなどを、つかってきました。これらを人工的に接種すると、日本では考えられないくらい、劇的な効果があり

ました。それと、よく似た理由なのでしょう。

炭を単独で1平方mあたり1.0kgを与えたり、炭肥を1.5kg与えたところで、生育が抑制され、逆効果になるのは、なぜなのか？アルカリ性の土に、炭を加えることで、pHがさらに上昇したため、という可能性もあります。これらの区画のpHは、8.9でした。その差は、大きいのか、小さいのか？

これらの問題をクリアするためには、木炭の割合を低くすべきでしょう。木炭の材料ができつつあるとはいえ、やはり木炭は、とても貴重な存在ですから、少量の木炭で効果があるのは、ありがたいことです。作物の種類などを考えながら、より効果的で、安全な、使用法をさぐっていくことになります。

#### NO. 546 南天門自然植物園のナラ（1） 2010. 11. 18

あちこちで、南天門自然植物園の成果を、報告しているんですけど、そのなかで、「最初から成算があったんですか？」と、よく質問をうけます。どう答えたらいいのでしょうか？

あそこのスタートは1999年4月ですが、そのころは、みごとに、はげ山でした。北向きの日陰斜面に、わずかに灌木のブッシュがあるくらい。バラ科シモツケ属と、カバノキ科の小さな実のハシバミで、中国名は虎榛子。それも、小さく、刈り込まれていました。放牧のヒツジやヤギに、かじられつづけていたのです。

いま古い写真をだしてみると、上のほうには、ナラの木が写っています。冬になって、葉は茶色く枯れていますが、枝にくっついたまま、落ちないので、ナラだとわかります。高さは、せいぜいで2~3m。これから伸びる可能性があるのか、このままいじけて、伸びないのか。その判断は、私にはできませんでした。

そして、南向きの日向斜面には、植物はほとんどみられません。木や草がないために、土が流され、岩石がむきだしになっています。土がなくては、植物は育ちません。悪循環です。

そのはげ山に、「植物園」と名づけました。私には、ちょっと気恥ずかしい気持ちがありました。それで、「霊丘〇〇植物園」とし、〇〇のところに、「自然」の2文字をいれたのです。発案者の立花吉茂先生は、「たいていのところは、柵で囲って、300年もすれば、自然に植物園になる」と、いつも話しておられましたから、立花先生には、成算があったと思います。といっても、それは日本のこと。こうも話しておられました。「そうはいつでも、300年は長すぎるので、人間が手を貸すことで、期間を短縮するのです」と。地元スタッフの意見で、愛称を「南天門自然植物園」としました。

放牧と柴刈りを禁止し、5年もたつころには、大きな変化がでてきました。もともとは、キンポウゲ科をはじめとする毒のある植物と、トゲのある植物ばかりが、めだっていましたが、マメ科や、イネ科の植物が、急にふえたのです。放牧の影響の大きさが、よくわかります。

そして、草の丈も、ずっと大きくなりました。以前は、せいぜいで腰の高さだったものが、胸の高さ、肩の高さまで、伸びてきました。ちょっとゆだんをすると、道がふさがってしまいますから、ヒツジやヤギを教育して、道の草だけ食べさせることはできないか、などと、ジョーダンをいっていました。

いちばん迫力があるのは、海拔1,100mあたりからうへの、ナラを中心とする、落葉広葉樹の林でしょう。ことしの夏のワーキングツアー参加者のなかからは、「日本の山と変わらないじゃないですか」と、驚きの声があがったほど。樹高12~13m、胸高直径20cm以上に、育っているところもありますが、そこは傾斜が急すぎて、私たちは近寄ることができません。ナラのほかに、シナノキ科、カバノキ科などの落葉広葉樹がまじっています。

これらの木は、育つにつれて、落とす枯れ葉や、枯れ枝の量がふえます。それが土を肥やします。自分で土をつくりながら、大きくなっていくわけですね。あるところから、良性の循環がはじまり、育ちが加速されます。

地元の人には、このナラを、「リョウトウナラ（遼東櫟）」と呼んでいました。私たちも、そう思っていたのですが、そのなかに「モンゴリナラ（蒙櫟）」と呼ばれるものが、まじっていることがわかりました。一昨年のことです。そして、この夏、日本の専門家が、いろいろ調査してくれたのです。

リョウトウナラらしきものと、モンゴリナラらしきものと、2つのタイプがあります。モンゴリナラタイプは、最初から、迷うことなく、よく伸びます。見た目の印象も、スラッとしていて、葉も、こちらのタイプがまるっこい感じで、大きく、葉脈の数もおおいです。

それにたいして、リョウトウナラのタイプは、伸びようか、伸びまいか、グズグズと、迷っている感じ。私には、そういう見た目の印象が、いちばんちがいます。葉が細長くて、ちいさく、葉脈の数も7対以下と少ない。それから、種子のかたち、殻斗の大きさと深さなども、異なっています。リョウトウナラタイプの、おもしろいところは、樹高1m前後の小さい木でも、たくさんの実をつけることです。モンゴリナラタイプは、実の数がすくない。この2つのタイプの、それぞれの典型では、あきらかに、ちがいがあります。

では、その両タイプを、どこで線引きするかとなると、はっきりした特徴がみつからないそう。典型的な両極のあいだを、どの特徴をとりあげても、切れ目なく、連続的に変化している

のだそうです。モンゴリナラとリュウトウナラ、という2つの種ではなく、モンゴリナラという単一の種のなかに、異なる2つのタイプがある、というところでしょうか。最近の、中国の研究者の意見も、そこらに落ち着きつつあるようです。(つづく)

## NO. 547 南天門自然植物園のナラ (2) 2010. 11. 25

中国山西省大同市の農村で緑化協力を開始したのは、1992年1月でしたから、まもなく20年目にはいります。そのころにくらべると、大同付近の緑は、ずっと濃くなっています。ここは北京の水源、風砂の吹き出し口ですから、たくさんの国家プロジェクトが集中しており、その効果がではじめたのも、原因のひとつ。

さらに、農村の変化は、そう大きくないのですが、経済的な発展によって、緑が回復してきた面もあると思います。日本の山が、緑に覆われてきたのは、農村へのプロパンガスの普及など、化石燃料の使用が大きいのです。それまで、山の木を燃やしていたのに、それがなくなりました。それと同じことが、中国でも、進行しています。

それから、放牧も、減少してきました。完全になくなったとはいえませんが、少なくなったのは、事実です。政府による規制もありますし、経済発展にともなって、穀物などを食べさせたおいしい肉が求められるようになった、という変化も、あると思うのです。

それに反する事象がまったくない、というわけではありませんよ。たとえば、21世紀にはいつから、原油高に引っ張られ、石炭価格が急騰しました。農村では石炭を買えませんので、山にはいる人がふえる、ということもあります。伸び悩みのポプラ=小老樹が、いつのまにか伐られてなくなる、といったことも、目にしています。それから、それまで300頭ほどだったヤギの放牧を、1,000頭以上にふやした村もあったのです。でも、大きな流れとしては、柴刈りも放牧も、まちがいなく減っています。

そのために、自然に再生する森林がふえてきました。そのプロセスは、前回の、南天門自然植物園の森林再生と、同じだろうと思います。そういう変化は、同じ太行山のなかでも、河北省がわで大きいよう。山脈の東側、つまり河北省がわのほうは、降水量が多く、樹木が育ちやすいのです。さらに、山西省にくらべ、河北省のほうは、経済的な離陸が早かった、という事情もあります。「あそこから先が河北省で、そちらがずっと豊かなんだ」という話を、よく聞いたものです。

どこにいても、そのような自然林を、かなり注意して、みてきました。大同市のなかでは、南部の靈丘県に多いのですが、北部にも、ないわけではありません。たとえば、大同県・陽高県・渾源県・広靈県の4県の県境付近に、樺林背林場があります。だいたい海拔1,600m以上の

ところで、再生の主体は、シラカンバです。ヤマナラシやカラマツ、そしてトウヒがまじっています。

それから、実験林場・カササギの森の中央部に、谷がありますが、あの谷を、ずっとさかのぼっていくと、再生中の森林があります。以前は村があったのに、なにかの原因でなくなったようで、崩れてしまった、土づくりの住居の残骸があります。そこで樹木が育っているんですね。海拔 1,600m以上のところで、ここも中心はシラカンバ。シラカンバは、先駆樹種で、やせ地につよく、遠くへも、種を飛ばすんですね。

南郊区の七峰山は、なかなか興味深いところです。ここからの眺めが、すごい！目の届くかぎり、段々畑なんですね。かなり急な山の斜面や、黄土の丘陵が、どこまでも耕され、段々畑になっています。講演などのさいに、私はその光景をスライドでみてもらいますが、みなさん、声を飲み込みますよ。これほどすごい光景を、ほかでみたことがありません。

その山頂を、地図で確かめると、1,714mです。そこにザイフリボクのなかまなどが、けっこう生え、赤い実をつけています。そして、山頂からちょっと下った、日陰斜面には、シラカンバが、再生中です。人の手で、カラマツも植えられていますけど、それが近年、枯れているよう。原因は、ちょっとわかりません。

そこからかなり下ったところに、ナラが生えています。1,100~1,500mあたりでしょうか。数はそう多くなく、背丈も小さいのですが、これが育つであろうことは、いまでは私にもわかります。伐られたりしなければ、という条件が付きますけど。ということで、垂直分布からいえば、ナラのうえに、シラカンバ、カラマツがあり、さらにうえに、トウヒがくるよう。

ほかにいくつも、同じような例があるんですけど、これ以上あげても、退屈でしょうから、やめにします。まとめると、あちこちで再生中の、自然林の主役は、シラカンバです。きょうは大同の例だけをあげましたが、河北省も同様。その海拔は、1,600m以上です。

最後の例の七峰山では、それより低いところに、ナラが発生しています。樺林背林場でも、ナラは、あるにはありますが、その数は圧倒的に少なく、育ちもよくない。

いま、中国政府によって、大面積の緑化がすすめられており、その中心になっているのは、マツです。造林面積からいえば、海拔 1,200~1,500mあたりが、圧倒的でしょう。そのあたりの荒れ山で育つのは、いまはマツしかありません。ナラを直接植えても、なかなか育ってくれません。でも、将来、この主人公となるのは、まちがいなくナラでしょう。その意味で、ナラを主体に森林が再生している、南天門自然植物園は、とても貴重なのです。

## NO. 548 山火事がこわい！ 2010. 12. 14

12月9日の夜から、大同にきています。この時期はひどく寒く、外での活動はできませんし、山も畑も冬枯れですので、することもさしてありません。そういう時期に、過ぎた一年を反省し、これからのことを考えることに意味があります。

南天門自然植物園のことが話題になったとき、大同事務所の武春珍所長からでたことばは、森林が再生しつつあることへの喜びよりも、山火事への心配でした。火をだしてしまうと、責任者のクビが飛ぶというのです。自分のことではなく、もっと上の人のことでしょう。こういう立場は、つらいですね。

あそこのスタートは、1999年4月です。なんども書いているように、そのころははげ山でした。火事の心配なんて、どこにもなかったのです。数年前から、樹木が急に伸びはじめました。草も茂ってきました。人の背丈を超えてきた、と武春珍はいいます。12月12日、現場にいきましたが、たしかにそのとおり。それがみな枯れ、乾ききっています。この地方の冬は、雪も雨も、ほんとに少ないのです。

草が育ち、木が育ち、それが土になって、森林を育てます。そういうことが、いっせいに起こるようにならないと、森林の再生や、自然の回復はすすまないと思うのです。その過程にリスクが潜んでいるのも事実。

樹木や森林とのつきあいが、これまでは、ほんとに少なかったのです。霊丘への道で、おそろしい光景をみました。道のそばに、モンゴリマツが植えられ、2m近くに育っていました。その下の草が、燃やされて、黒く焦げ、灰になっています。枯れ草に火をかけ、野焼きをすると、そのあといい草が生えます。草の芽生えも、すくなくとも1週間は早いようです。放牧をするうえでは、つごうのいいこと。ですから、野焼きは、ずっとつづいてきた作業だったはず。問題は、マツが育って、それがなされたことです。おそらく、あれらのマツは、無事にはすまないでしょう。救いは、それほど面積ではなかったことです。

南天門自然植物園の近くでも、何年かまえ、畑のあぜが、野焼きされました。李向東が、すっとんでいったのです。「ふつうなら、打ちのめすところだけど、相手は老人だったから、そうもできなかつた」と、あのおとなしい男が、怒りにふるえていました。

植物園ではちょうど、防火や、放牧の禁止を訴える大きなポスターをつくり、掲示の準備をしていました。写真入りの、きれいなものです。パソコンでつくと、それを出力してくれるところが、霊丘の町にもあるんですね。

ついでにいいますと、そのなかの1枚の写真に、みごとな紅葉が写っています。まっ赤です。

管理棟のまえの、カエデが、そのように紅葉するのだそう。その季節、ここにくることはありませんので、私は、みたことはありません。

12月13日の午後、実験林場・カササギの森にいきました。いっしょにきている前中久行顧問の提案で、野生のナシのなかまの、種子を取りにいったのです。緑化に生かせる樹木を、1種類でもふやしたいし、実のなるものは、とくに貴重です。小鳥を呼び寄せることができれば、小鳥はこの種子をほかにも蒔いてくれますし、ほかで取ってきた種子を、ここに蒔いてくれます。

ついでに、カササギの森の奥に植えたシラカンバをみたいと思いました。いまのところ、比較的良好に育っている広葉樹は、このシラカンバです。運転手の小郭にそう伝えると、「だめです、いけません」と答えました。多少の無理をいっても、いつも彼は最善をつくしてくれます。いやな顔ひとつしたことはありません。こんなことは、めずらしい。

管理棟の横を通過して、北のほうにのぼる道に、大きな溝を掘り、土を盛りあげてありました。わざわざ、パワーショベルを運んできて、それをやったのです。しかたがないので、歩いていてみると、また、同じようにしてありました。念のいったことです。車と人とを、はいらせないためです。山火事を防ぐには、それがいちばん。多少の不便は、しのばないとはいけません。

こんなこともあります。大同には、生育不良のポプラがたくさんあります。1950年代、60年代あたりに植えられたもので、小老樹と呼ばれています。その小老樹が、あるところで、伐られたのです。管理がむずかしくなったので、山火事が発生したら、きつい処罰が考えられる。だから、伐ってしまえ、というわけ。山火事をおそれて、木を伐る。なんという本末転倒。山火事はこわいのですが、それをもっとこわくしているのは、人がつくった制度です。

## NO. 549 寒かったあ！ 2010. 12. 27

12月9日から大同にいき、17日に帰国しました。着いたときは、それほどの寒さではなく、北京まで迎えにきてくれた郭保青が「大同もおだやかです。雪も降りません」といっていました。そのあと、だんだん寒くなってきたんですね。

12月12日のことですが、南天門自然植物園にいこうと、霊丘の県城で、くるまに乗り込んだら、車中にあったミネラルウォーターのペットボトルが、パンパンに膨らんでいます。完全に凍っているんですね。やはりくるまに載っていた、前夜の飲み残しの白酒（バイヂュウ）が白濁しています。アルコール度数は35度。これくらいの気温では、アルコールは凍らないけど、水は凍って、このように濁って見えるのでしょうか。飲んでみたかったですけど、まさか朝からやるわけにはいかないので、あきらめました。

国道 108 号線を離れ、植物園にむかう細道は、南庄村の下で、小さな流れを越します。上寨河といって、むかしはかなりの水量があったようですが、いまではせいぜい幅が 2m くらい。いつも、水のなかにはいって、渡るんですよ。ところが、今回は、ここが凍っていて、危なそう。回り道をして、浅いところで渡りました。

前は書き忘れましたが、南天門自然植物園の入口に、門扉ができていました。木と有刺鉄線をくみあわせた、手作りのものです。これも山火事をおそれてのことなんですね。はいろいろと思えば、どこからでもはいれますので、実質的な意味は薄いのですが、心理的な意味はあるでしょう。とにかく、できることはやってみよう、ということです。

しばらく管理棟で相談したあと、現場をみることにしました。ここに、植物の展示区画を、つくりたいのです。いま、ここのスタッフが、敷地内の植物の標本づくりに励んでいます。これまでに、400 葉をつくった、といます。重複もあるでしょうけど、それにしてもかなりのものです。薬草の種を集めるよう頼んだら、この秋に 60 種を集めていました。大部分が敷地内で集めたものだそう。それらの植物を、管理棟から遠くないところに集めて、見学者に便利を提供しようということです。双方にとって、気に入った場所がすぐにみつかりました。こういうことは、現場で話をすると、解決が早い。

管理棟のすこし上に、直径 5~6m の池があります。この敷地内には、2 か所の湧き水があり、それが流れてきて、ここにたまります。この池が凍っています。片足で、トントンとつついてみたんですけど、かなり厚そう。そしたら、李向東が、1m あまりの太い棒で、力いっぱい、氷をたたきました。はじきかえされるだけ。だいじょうぶでしょう。おそろおそろ氷のうえに乗ってみました。まん中ちかくまでいって、川島和義さんに写真を撮ってもらいました。いくつになっても、バカなことをしてみたい。

霊丘から大同に帰る途中、北岳恒山の入口でくるまを止めました。日中の陽の高い時間だったんですけど、マイナス 12℃。14 日午後、カササギの森を訪れましたが、ここでもマイナス 12℃。

きわめつけは、15 日の午後、南郊区の七峰山 (1,714m) を訪れたときのことで。山頂になにかのアンテナと、その関連施設があり、そこまで、くるまで登ることができます。植物の種類が、けっこう豊富なため、機会をみつけては、でかけることにしています。そして、ここからの風景がすごい。目のとどくかぎり、段々畑が連なっています。

いちばんうえまであがって、くるまを降りようと思いました。ドアをあけ、片足をふみだしたとたんに、うしろのほうから、突風がきました。あわてて、頭を右手でおさえて、かろうじてセーフ！帽子は、一瞬に飛んで行きましたけど、頭は、飛ばさないですみました。

外にはでたものの、低温と強風でどうにもなりません。腕時計についている温度計は、マイナス 12℃を示していましたが、そのあとは、表示が乱れて、役に立たず。まともに歩くこともできません。くるまに逃げ込んで、ドアを閉めようとしたところ、後方からの風にあおられて、私の力ではドアを閉めることができません。ドアから手が引き離され、バーンといっばいに開きました。その拍子に、ドアの付け根のボルトが曲がり、立て付けが、悪くなった。もういちど外にでて、からだ全体をドアにあずけて、やっと閉め、くるまを方向転換してもらって、乗り込みました。

ちょっと下までおりて、写真を撮ろうとしました。S社のデジタル一眼、軽くて、便利なんですけど、液晶の表示がかすんで、よく見えません。液晶がよくないのか、バッテリーの能力低下が原因か、よくわかりませんが、この環境では、満足に働かないよう。適当な方角にむけて、シャッターを切りつづけ、あとでみると、写ってはいました。

思いつき厚手の、ダウンジャケットを着込み、毛糸の厚いズボン下を着込んでいるんですけど、それでも寒い。気温よりも、風がこたえます。小郭の見立てでは、「8級ないし9級の風」ということ。ビューフォート風力階級とって、8級は、秒速 17.2~20.7m。9級は、秒速 20.8~24.4m。仮に、風速を 20m、気温をマイナス 15℃ということにして、リンケの式で、体感温度を計算すると、マイナス 33℃ほどになります。寒いはずです。

ことしもあと数日を残すだけになりました。大同のプロジェクトも、つぎつぎに問題が発生して、それに追いかけられた一年でした。来年は、すこし落ち着いてくれるといいんですけど。みなさま、いい年をお迎えください。

## NO. 550 ゆめ 2010. 01. 14

このところ、ちょっと遠ざかっていますけど、くりかえしみる夢があります。軟弱な話でもうしわけないんですけど、あまり愉快でない夢。崖っふちのうえを、私が歩いているんですね。ほぼ垂直に切り立った崖で、黄土高原の浸食谷が、夢にまででているよう。そして、足を踏みはずしてしまいます。崖のふちに、けんめいにしがみつくんですけど、力つきて、落ちてしまいます。谷底に激突、という寸前に、からだがフワッと浮き上がります。

その体験から、私は空中遊泳ができるようになりました。全身の力をぬくと、フワッと浮き上がります。ゆっくり息をはきながら、さらに力をぬくと、ちょっとだけまた浮上する。そして、行きたいところをイメージすると、スーッとそちらに滑り出す。浮き上がるといっても、せいぜい数メートル。滑るといっても、歩く速度よりおそいのです。実用的ではありませんけど、引力にさからっているのが、自分でもふしぎです。もちろん、夢のなかでのことですよ。

そういう夢をくりかえし、くりかえし、みるのです。

大同での緑化協力事業をはじめたのが、1992年1月でした。ですので、20年目にはいりました。1992年4月、最初の緑化協力団の団長だった石原忠一さんが、太原でも、大同でも、北京でも、あいさつのたびに、「この協力事業は、少なくとも20年はつづけます」と話されました。それくらい継続しないと、成果も、問題点もみえてこない、といわれるのです。そのとおりで、私は感心してききました。でも、20年ですからねえ。現実のこととは、とても思えなかった。なにせ、組織もなければ、お金の見通しも、まったくありません。「明日つぶれても、ふしぎではないのに…」と、内心では思っていました。

その20年が、手のとどくところに、きてしまったのです。平坦な道ではありませんでした。もうここまでか、と思ったことが、いくたびあったかしれません。たとえば、1994年から95年にかけて、ほんとにつらかった。緑化というのは、わりの悪いしごとで、悪い結果はすぐでるのに、いい結果がでるには、時間がかかります。いっしょに活動をはじめた人が、見切りをつけて、いなくなります。ほんとにピンチでした。立花吉茂先生が、代表をひきうけてくださった夜、私は、泣きながら、自宅に帰りました。

会の新たな体制を整えようと、第2回会員総会を準備して、動き出したとたん、1月17日の、あの大地震です。さいわい、会員に犠牲者はなかったんですけど、専従の3人は、いずれも震度7のまっただなか。救援活動に走り回りました。それがよかったんですね。会員のきずなが、つよまりました。

そして、新たな協力者があらわれました。当時の全ジャスコ労働組合の書記長が、わざわざ大阪の事務所を訪ねてきて、協力を約束してくださったのもそのとき。いよいよのときは、どこかから、助けがでてくる。そう考えた最初のケースが、そのときだったのです。崖から転落し、谷底に激突する直前に浮遊する、という私の夢は、どうも、そういうことの反映のようにも、思えてきます。

黄土高原の自然環境は、日本とはまるでちがいます。制度もちがいます。人の、ものの見方・考え方も、異なります。私はもともと、人は努力すれば、報いられる、と考えていました。ところが、あそこでは、そうはいかないんですね。努力しないことには、どんな成果もありません。でも、努力しても、成果があるとはかぎらない。張り切って、春に植えても、大旱魃がやってきたら、全滅することが、ないとはいえない。

あそこの農民は、ほんとにつよいのです。2001年は、たいへんな旱魃で、地元では、「百年に一度の大旱魃」と、呼んでいました。でも、それほどの悲惨さが感じられないんですね。農民の表情のアップを、ビデオで撮影しながら、「ああ、これでは使えないな…」と、がっかりしました。「何か月もまったく雨がふらない」と、その深刻さを語りながら、その表情が、笑顔のよ

うにみえてしまうのです。

農村の現場を歩くなかで、私が最初におぼえた中国語は「没法子！」(メイファーズ)でした。雨がふらないために、トウモロコシに実がはいらない。5月になって、気温が零下7度にもなり、着いたばかりのアンズの実が落ちてしまう。そういうときに、「メイファーズ！」と、つぶやくのです。「どうしようもない！」というわけ。ところが、この「没法子！」には、「なんとかなるさ！」という意味も、ふくまれているのです。そのことを知識として知ったのは、ずっとあとのことでしたけど、直感的には、早くから気づいていました。そういう気持ちでなかったら、ここでは生きていけません。

努力は必要なんですけど、力みすぎてもだめです。希望をもつべきだけど、つよすぎると、うまくいかなかったときの、失望が大きくなります。希望や期待と欲は、重なるところがあります。からだの力を抜き、欲を薄くすることで、浮かび上がることもあるのじゃないか。そんな意識が、あの夢にはいりこんでいるのかもしれない。

「ここまでつづくなんて、奇跡のようなものだ」と、私は思いつづけてきました。ときには、ことばになって、でていうよう。すると、去年の9月、日本の専門家が大同を発つ夜、歓送会の席で、武春珍所長があいさつしました。「自分たちは奇跡をつくってきたと、高見は話している」というのです。意味あい、だいぶちがうと思います。

20年目にはいっても、むずかしい問題の連続です。それも、中国との関係で、日本の国が苦勞している問題と、規模がちがいますが、ことの性格としては、相似形をなしているように思えます。ということは、容易には解決できない。

そのいっぽうで、植えた木は、ちゃんと育ってきました。成果が目には見えはじめた、とっていいでしょう。明るいとこに目をむけ、もうすこし、がんばってみましょう。今年もよろしく願いいたします。

1153